

腐り目、実力至上主義  
の学校に入るってよ

トラファルガー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

比企谷八幡は総武中学を卒業して将来が約束された東京高度育成高等学校に入学する。

しかし所属したクラスは彼が望む平穏が一切ないクラスであり……

# 目次

警戒	101
料理	91
攻略法	81
王	73
Dクラス	64
Sシステム	53
カフェ	41
水泳	33
邂逅	25
買い物	16
オリエンテーション	8
入学	1

騒動	110
図書館	120
執政	130
テスト前	138
中間試験	147
赤点	156
取引	167
友達	175
外出	183
ハプニング	192
寝不足	203
調査	215
暗躍	224

契約書作成	349
ルール確認	340
上陸	331
船上	322
支給ポイント	312
決着	301
張り込み	292
泥仕合	283
目撃者	273
証拠	264
審議当日	255
噂	244
気分転換	233

説明	468
鉢合わせ	459
スパ	449
番外編 報告書	444
詳細	432
最終日	423
奇襲	414
亀裂	405
裏切り	397
潜伏	388
始動	379
誘い	368
バカンス	358

チキンレース	587	優待者	477
パフエ後にプリクラ	577	グループディスカッション	486
平和	567	公開	495
方針	554	一斉攻撃	503
試験終了	544	二回目のグループディスカッション	514
抱擁	536	今後の方針	527

保健室	712	雑談からのおちよくり合い	597
感情的	702	プール	607
キス	693	予定	617
下準備	685	交渉	627
話し合い	676	お泊まり会（前編）	636
新学期	664	お泊まり会（後編）	644
リベンジマッチ	654		

処罰	723
事故	732
温もり	740
プチ修羅場	751
停学明け	760
足並み	769
体育祭開催	778
棒倒し	786
アクシデント	794
二人三脚	803
女子騎馬戦	810
男子騎馬戦	817
女王と予測不能の考え	825

200メートル走	834
昼休み	840
昼食	847
対峙	856
借り物競争	863
借り物競走②	872
男女混合二人三脚	880
リレー	889
閉会式後にて	898
事後（色々な意味で）	909
中間試験	921
説明	931
火花	938

交渉	指令	絶対強者	考察	審判	逆恨み、怒り、殺意	方針（色々な意味で）	殺意×2	屋上	義妹パラダイス	進路と愚痴	ペーパーシャッフル	憧れ、理解、トラウマ

1057104910401031102110121004 996 984 974 965 956 948

賭け	攻め	歓喜と憤怒	打ち上げ	早朝	状況と膝	お守り	番外編	勢	ブラブラ	麻婆豆腐	休息	先輩

11801168115911511140 1132112111131097108410741065

2学期終了時点の各クラスの情

格差	_____
期限	_____
クリスマス	_____
初夜①	_____
初夜②	_____
明け方	_____
大晦日①	_____
大晦日②	_____
大晦日③	_____
出発	_____
ルール説明	_____
到着	_____
グループ決め①	_____

1302129312811272126212531245123612261217120811991190

グループ決め②	_____
グループ決め③	_____
結成後	_____
早朝	_____
清掃と座禅	_____
朝食の時間	_____
初日の実習	_____
実習後	_____
母性	_____
問題児	_____
疲れ	_____
母性	_____
スピーチ	_____

1420141214031395138613781370136113521342133413251312

本番前日	打ち合わせ	ダブル	持久走	不平不満	3つの営み	ハーレム願望	将来	反応①	進展	戦術	3人目について	憂鬱

1532152515171509149914891480147114631453144514371429

不満	みーちゃん	セフレ	発散	結成	傲慢	2月	帰還後(後編)	帰還後(前編)	グループ結果発表	個人成績結果発表	怪物	最終日

1662165016401631162216131605159415831569155815491541

追加試験	_____
期末試験	_____
欲望	_____
試験後	_____
グループデイスカッション⑦	_____
グループデイスカッション⑥	_____
グループデイスカッション⑤	_____
グループデイスカッション④	_____
グループデイスカッション③	_____
グループデイスカッション②	_____
グループデイスカッション①	_____
お題	_____
落下	_____

1772176317541745173617281721171317051696168716791672

狂宴	_____
無能	_____
退出	_____
亀裂	_____
Dクラスの結果	_____
試験日	_____
前日	_____
価値観の違い	_____
語り合い	_____
改善	_____
賞賛票	_____
謀略	_____
噴火	_____

1894188518751866185218421833182618171807179817881780

学年末特別試験	_____
ミーティング	_____
司令塔	_____
事前準備	_____
目撃	_____
拘束	_____
伝達	_____
性奴隷（前編）	_____
性奴隷（後編）	_____
本命	_____
試験当日	_____
開幕	_____
チエス	_____

2013200519971987197619681959194919391931192319121903

ボクシング	_____	2024
決着	_____	2032
決着後	_____	2041
試験後の各クラス（Bクラス、Cクラス）	_____	2049
試験後の各クラス（Aクラス、Dクラス）	_____	2056



# 入学

「ここか……これはいよいよ3年間は自由だ……」

俺、比企谷八幡はある学校の校門の前に立ち、喜びの声を上げる。しかしそれも仕方ないだろう。

俺が入学したのは東京都高度育成高等学校。

60万平米を超える程の敷地を大都会の真ん中に形成している異質な進学校だ。

国が主導する高等学校であり、進学率と就職率がほぼ100%という非常に優秀な学校だ。

しかし俺がこの学校を選んだ理由はそこじゃない。

何故なら在学中学校に通う生徒は敷地内にある寮での学校生活を義務付けていると共に、特例を除き外部との連絡、接触を一切禁止しているからだ。

つまり俺は完全な自由を手に入れたのだ。もしも総武高校に進学していたら俺はまた面倒な事に巻き込まれ……

「あなたのやりかた、嫌いだわ……」

「人の気持ち、もっと考えてよ……」

ちつ、忌々しい事を思い出した。アイツらの所為で俺の中学生生活は最悪になったしな。

しかしもう俺は3年間アイツらとは会わずに「ヒツキー……」フラグが立つちまったよ。

ため息を吐きながら前を見ると校門の近くには雪ノ下と由比ヶ浜がいた。ああ……3年間の自由が一瞬で消えちまったよ。

「ヒツキーも同じ学校だったんだね……」

「……だから何だ？もう俺はお前らとは他人だ。お前らの所為で最悪の中学生生活を味わったんだから」

「それは貴方の逆恨みじゃない。嘘告白なんて勝手な行動を取った自業自得でしょう」

その言葉に雪ノ下が反論する。

「確かに勝手な行動を取ったのは否定しない……が、何もやってない奴に否定される筋合いはない。しかも元々無理だとわかっている依頼にもかかわらず引き受けた由比ヶ浜がそもそもの原因だろうが」

確かに1人で突っ走った俺にも責任があるのは否定しない。しかし少し考えれば無理とわかる依頼をノリノリで受けた由比ヶ浜が1番の害悪だろう。あの時に雪ノ下が

由比ヶ浜の頼みを奉仕部の理念に反すると言つてればこんな事にはならなかつた筈だ。「で、でも戸部っちと姫菜がくつついたら良い空気に「自分のグループの恋愛事情くらい直ぐにわかるだろうが。あの2人が結ばれると本気で思つたのか？」そ、それは……」俺の問いに由比ヶ浜は口を閉じる。グループのメンバーじゃない俺ですら結ばれるのは無理だと思つたのだ。同じグループのメンバーである由比ヶ浜が判断出来ないなんてあり得ない。

つまりコイツは少し考えれば無理だとわかる依頼をノリノリで受けたことになる。

「そこで黙るのかよ……やっぱりお前つて本当の馬鹿だな。あの時にお前の犬を助けなけりや良かったよ。そうすりや俺はお前と縁が出来なかつたし」

あれこそが俺の人生で一番のミスだ。加えて中学時代でも色々動いたが、もう他人の為に尽くす必要なんてない。今後は常に自分を最優先にして、自分にダメージが行くような行為をする場合、明確メリットがある時しか動かないようにする。

「っ！」

「比企谷くん！貴方、言つて良い事と悪い事があることすらわからないの?!」

由比ヶ浜は両手で顔を覆つて蹲ると雪ノ下がキレるが……

「お前がそれを言うか？理由もなく人のことをヒキガエル呼ばわりしたり、目が腐つてるとか言つたりしているお前が言うのか？」

少なくともコイツの罵倒は言つて悪い事だろう。

「つ……それは事実を言つただけに過ぎないわ」

「事実なら何を言つてもいいと？ じゃあ言つてやるよ……お前つて陽乃さんより優れてるところ……一つも無くね？」

實際雪ノ下が姉の陽乃さんより優れてるところなんて全くないだろう。髪 of 長さと態度のデカさくらいだろう。

「つー」

その言葉に雪ノ下はこつちを睨み、手を振るつてこようとしてくる。

「両者そこまで！」

すると俺達の間で薄ピンク色の髪 of 美少女が割つて入つてくる。

「何かしら？ 部外者が口を挟まないで」

「部外者？ 同じ新入生として校門前で騒いでるのを見過ごすわけにはいかないよ。これ以上続けるなら警備員さんと呼ぶことになるけど、いいのかな？」

美少女は淡々と正論を言つてくる。それに対して雪ノ下は美少女を思いつきり睨むが、そのまま由比ヶ浜の元に向かう。

「由比ヶ浜さんを泣かせた貴方は絶対に許さないわ」

「知るか。事実を言つたら勝手に泣いたただけだろうが」

そう言うとき雪ノ下は由比ヶ浜を連れて去って行く。同時に美少女が俺の方向を見てピシッと指を突きつけてくる。

「君達に何があったかは知らないけど、入学初日に校門の前で揉めてたら皆の迷惑になつてるよ?」

言われて周りを見ると、確かに校門の近くには人が集まって動けずにいた。

「以後気をつける。悪かった」

これについては完全にこっちが悪いので特に不満なく謝罪をする。

「なら良し。次からは気をつけなよ」

美少女はそう言つて校門をくぐる。それを見送つた俺はため息を吐きながら携帯を取り出し電話をかける。校門をくぐつたら外部とは3年間連絡が取れないから今の内だ。

『ひゃつはろー。どうしたの比企谷君? 入学前におねーさんの声を聞きたくなつたのかな?』

電話の相手は雪ノ下陽乃さん。俺の知る限り最も強い人間だ。出会つた当初は余り関わりたくなかつたが、時間が経つにつれて学校を忌避するようなり、その頃から何だかんだ関わりを持つようになったのだ。

「どうしたも何も何故アイツが俺と同じ学校に進学したんですか?」

でなきゃこの学校を希望なんてしない。

『えっ……ごめん。それ知らなかったんだけど』

電話越しで陽乃さんが驚く声が聞こえてくる。どうやら本当に知らないようだ。

『お母さんからは総武高に行くって聞いたんだけど……うーん、多分雪乃ちゃんはお父さんにこっそり頼んだのかもね。お母さんは雪乃ちゃんを道具と見てるけど、お父さんは雪乃ちゃんを溺愛してるし』

そーいや雪ノ下の父親は一人暮らしを許すほど溺愛してるんだっけか。

『ともあれ比企谷君は嫌かもしれないけど頑張ってるね』

「そうしますよ……」

正直言つて今すぐ辞めたいが、入学初日に中退なんてしたら人生詰むから頑張るしかない。

『卒業したら話を聞かせてよ。学校の概要とか雪乃ちゃんの失敗談とか』

「雪ノ下が失敗するのは前提なんですネ」

『そりやそうでしょ。例のクリスマススイベントの所為で私も大変だったんだよ?』

そーいや他所の学校と合同クリスマススイベントをして失敗したんだったな。アレで総武の評判は落ちたし、雪ノ下がこの学校を志望したのも逃げる為か?

「まあ話はわかりました。次は卒業してから会いましょう」

『頑張つてね、バイバーイ』

その言葉を最後に通話を切つて、俺は校門をくぐる。以後、3年間は外部との連絡は出来なくなる。

そして案内板に従つて歩いていけると掲示板にたくさんの人が集まっている。多分アレに生徒のクラスが記されているのだろう。

(陽乃さんはああ言つてたけど、アイツらとは違うクラスがいいなあ……)

天に祈りながら俺は掲示板に向かつて自分の所属クラスを調べる。

(Aクラスは違う。Bクラスも違う。Cクラスは……あつた)

俺の名前はCクラスにあつた。そして雪ノ下と由比ヶ浜はDクラスの所に名前があつた。とりあえず同じクラスつて最悪の事態は回避出来たし良しとしよう。

内心嬉しく思いながらもCクラスに向かう。平和な学園生活を送れるように強く願ひながら。

しかしその願いが1ヶ月後に跡形もなくぶつ壊されるのを俺はまだ知らなかった。

## オリエンテーション

Cクラスの教室に入ると既に教室の大半の席が埋まっていた。黒板を見ると座席表が貼られているので確認すると俺は廊下側1番前だった。少なくとも名前順ではないな。

(しかしこのクラス、明らかに不良な生徒が多いな)

見るからに柄の悪い生徒が多い。特徴的なのは黒人の巨漢と男子にしては髪が長いヤツだ。特に後者はクラスでも一際ヤバいオーラを放っている。座席表を見ると龍園翔と書かれているが、コイツとは関わらない方がいいな。

俺は自分の席に座って本を読み始める。HRまでまだ時間があるからな。

しかし……

「えつと……なんか用事か？」

隣に座る銀髪美女が俺をジッと見ているので思わず質問してしまう。チラ見なら無視するがガン見されると気になってしまう。

「あつ、すみません。それはエラーリー・クイーンの『Yの悲劇』ですか？」

「そうだが？」

「いえ。海外小説を読む人は中学の時は余り見なかったの。お好きなんですか？」  
「まあな」

「そうなんですか！私も大好きで……」

俺が肯定するとその女子はテンションを上げて色々話してくる。これには俺も予想外。文学少女といったら眼鏡をかけた少女ってイメージだが、銀髪美女が文学少女とはな……

呆気にとられていると彼女はハツとしたような表情になって謝ってくる。

「あ、勢いづいてすみません。私は椎名ひよりと言います。貴方のお名前は？」

「……比企谷八幡だ」

「そうですか。これからお隣同士よろしくお願いします」

「……ああ」

そう言いながらも余り乗り気じゃない。元々他人と関わりたくないタイプだし。

すると始業のチャイムが鳴り、同時にドアが開いてスーツ姿の男性が入ってくる。この人が担任か。

「新入生諸君、入学おめでとう。君達Cクラスの担任の坂上数馬で、担当科目は数学だ。この学校では3年間クラス替えがないので長い付き合いになるだろう。今から1時間後に入学式があるが、この学校の特別なルールを説明しておきたい。入学前のパンフ

レットである程度の内容を知っていると思うが改めてプリントを配るので後ろに回してくれ」

言いながら坂上先生は俺や椎名など1番前の生徒に資料を渡すので後ろに回す。

「次は学生証カードを配らせてもらう。このカードはこれからの生活で1番重要なものになる。簡単に言うくとクレジットカードのようなものだ。敷地内にあるものは全て学生証カードの中にあるポイントで購入が可能だ。カラオケなどの娯楽の為に代金を払うのもポイントでやり取りする」

紙幣を持たせないことで金銭トラブルを未然に防ぐといった事も対応しているのだろう。

パンフレットを見ると使い方は非常に簡単に機械に認証してもらうだけ。提示したり、タッチしたりするだけで良いらしい。無くさないように注意しないとな。

「それから今から言うことが重要だ。ポイントは毎月1日に自動的に振り込まれることになっている。君達全員にはあらかじめ10万ポイントが支給されているはずだ。そしてこのポイントは1ポイント＝1円の価値がある」

坂上先生の言葉に教室内が一気にざわつき始める。まあ仕方ないことだろう。何せいきなり10万ポイント……つまり10万円のお小遣いを貰ったのだからな。普通の高校生なら驚かないはずがない。

しかし俺は嫌な予感しかしない。坂上先生は毎月1日にポイントが振り込まれると言ったが、毎月1日に10万振り込まれるとは言っていない。

ハッキリ言つて毎月10万をノーリスクで貰えるなんてあり得ないからな。

「ポイントの支給額に驚いたかね？この学校は実力で生徒を測る。これは入学を果たした君達に対するご褒美のようなものさ。ただし、卒業後にはポイントは全て回収することになっているのでずっと貯めようとは思わない方がよい。それとそのポイントは譲渡も可能だ。ただし強奪はよしてくれ。この学校はイジメなどに厳しいからな。これである程度の説明は終わった。何か質問はあるかな？」

坂上先生がそう言うので俺は手を挙げる。正直言つて目立つのは嫌だが、この学校についての情報が少ないので少しでも情報を手に入れておきたい。

何せ俺達はこれから3年間も親の力を借りず、自立して生きていかないといけないからな。

「2人か。ではまず龍園君から聞こう」

2人と言われてチラツと周りを見ると龍園つて男も手を挙げていた。マズイな、まさかクラスで1番やばそうな奴も挙手しているとは。

「学校は俺達にご褒美として10万ポイントをくれたが、毎月の支給額は幾らなんだ？」

その言葉に坂上先生の目が細まる。やはり裏があるな。

「さつきも言ったようにこの学校は実力で君達を評価する。つまりはそういう事だ」

つまり生徒の言動や成績次第……煩い生徒は支給額が少なくなり、定期考査で好成绩を挙げた生徒に対する支給額は増えるって感じか。

「なるほどな」

「では次に比企谷君の質問に答えよう」

坂上先生はそう言っているが龍園と同じ質問……いや。

「この学園にはバイトってのはあるんですか？」

ポイントについて詳しくわからない以上、もしあるならやる事も視野に入れておく。

その言葉に坂上先生はまたピクリと僅かに反応する。

「この学校には沢山の店があるが、店ではバイトの募集はしていないな」

回りくどい返し方だ。坂上先生の言い方だと店以外ではバイトがあると言っているようにも聞こえてくる。やはりこの学校には秘密が多そうだ。

しかし坂上先生がそう答えた以上追求はできない。俺はありがとうございますと言つて質問を切り上げる。

「質問はもうないようなので私はもう行く。が、さつきも言ったように今から1時間後に入学式があるからそれを忘れないように。それまでは自由にしてくれ」

坂上先生はそう言つて教室から出て行く。それを見送つた俺は本を読みのを再開し

ようとするが、その前に尿意を感じたので教室から出てトイレに向かう。

そして用をたし始めるとトイレのドアが開いたのでチラツと横を見ると……

「よう。ちよつと話に付き合えよ」

龍園翔が笑いながら俺の横に立つ。質問したのは失敗だったな。

内心後悔している中、龍園は俺が返答する前に質問をしてくる。

「単刀直入に言うが、Sシステムについてどう思う？」

「……情報が少な過ぎるから憶測だぞ。さつき実力で生徒を評価するって言ったが、それは普通の授業態度やテストの成績、部活の貢献によって変わり、個人個人でポイントが違うと思う」

「根拠は？」

「仮に全校生徒が毎月10万も貰えるなら、学校は年に5億円以上払う事になるが、うまい話があるわけないし、教室には大量の監視カメラがあった。アレは俺達個人個人を査定する為のものだろうからな」

「なるほどな。ポイントの話をした際に全く浮かれてなかっただけの事あって、面白い考察をするな」

龍園は笑いながらそう言っているが、その口振りからして俺達クラスメイトを観察していたようだ。初日からクラスメイト全員を観察するなんて未恐ろしいな。

そのことから察するに……

「お前、この学校で派閥でも作んのか？」

龍園は今後デカい勢力を作る腹だと思う。理由としては俺の考察が当たっているならこの学校は馬鹿には厳しく、強者にとっては良い環境になる。

そして龍園は間違いなく強者の雰囲気醸し出しているし、これからの動き次第では部下を手に入れる事も不可能ではないだろう。

「それは考えてるな。この学校は中々面白そうだ」

そう答える時点でコイツは強者の分類に入るな。

「そうかい。まあ頑張れ」

用をたし終えた俺は手を洗い、トイレを出ようとするが龍園が呼び止める。

「まあ待て。俺がお前に話しかけたのはお前の考えを聞く為だけじゃねえ。単刀直入に言うが俺の下につけ。お前は中々使えそうだ」

「断る。俺はのんびり過ごせればそれで良い」

別に派閥を作ったりなんて考えてない。ポイントについて安定した供給ラインを手に入れて卒業まで平和に過ごすのが俺のモットーだ。

「そうかよ。ま、入学初日だから焦らねえさ」

龍園は思った以上に簡単に引き下がった。

「……意外だな。てつきり力づくで勧誘すると思った」

見た目的に逆らう者は容赦しないイメージだったが、どうやら違うようだ。

「お前は無理矢理従わせるよりも、餌を与えた方が活躍するタイプだろうからな。まあSシステムの概要がハッキリしたら改めて声をかけるからな」

龍園はそう言つて俺より先にトイレから出る……前に俺に紙を渡してくる。

「俺の連絡先だ。もしもお前が俺に有益な情報を提供するなら、それに応じてポイントを支払つてやるよ」

で  
今度こそ龍園はトイレから出るがアイツからは平穏な匂いが一切しないな……マジ

……とりあえず登録はしとこう。しないと面倒な気がするし。

## 買い物

龍園からコンタクトを取られた俺はそのまま教室に戻り、椎名から本についての話を聞いて、そのまま入学式に参加した。

まあ入学式は普通の学校と大差なく偉い人の話を聞いて無難に終了した。

そして昼前に敷地内について説明を受けた後、初日という事もあつて即解散となった。

そんな中、クラスの大半はグループを作つてカフェやショッピングモールに向かつていく。

俺はというと、誰とも組まず図書館に向かう。入学前から図書館が有名であるのはパ  
ンフレットで知つていたからな。

そして昇降口で靴を履き替えて図書館に向かうが、入学初日だからか閉館していた。  
(ちつ、夕方まで時間を潰そうと思つたが仕方ないか)

こうなつたらショッピングモールで服や飯を購入するしかないだろう。後は娯楽として本を買いたい。

ポイントに関する詳細は全くわからないので無駄遣いする気はないが、多少は遊びに

使いたい。

とりあえず5月までに6万は残すと決めた俺は図書館を出てショッピングモールがある方向に向かおうとすると椎名がこちらに歩いてきた。向こうも俺に気付いたのか会釈をしてくる。

「お前も図書館に用があつたのか？だとしたら今日は閉まつてるから諦めろ」

そう言うとき椎名は残念そうな表情になる。

「残念です……比企谷君は寮に？」

「いや、服や飯、後は本でも見に行くつもりだ」

「本を買いに行くのですか。私も一緒に行きます」

しまった。本の虫の椎名に火がついてしまったようだ。テンションが上がりながら俺にそう言うってくる。

しかも「一緒に行きませんか」ではなく「一緒に行きます」ときた。

前者なら適当な理由を付けて断られるが、後者の場合勝手に付いていく事になる。

コミュ障の俺からしたら面倒極まりないが、椎名は見た目からして凄く美少女だ。今後クラスで人気者になる可能性があり、邪険にするのは得策じゃない。

「実は今日買いたい本があつたので……」

一方の椎名は楽しそうに本の話をしているが俺と一緒に歩くことが決定事項のよう

だ。

そんな椎名に対して俺は相槌をうつことしか出来なかった。

30分後……

「ありがとうございます」

ショッピングモールの本屋にて、店員さんから礼の言葉を受けながら本屋を出ると先に会計を済ませた椎名が楽しそうに本の入った袋を抱きしめている。

結局俺は椎名と本屋に行き、お互いに数冊の本を購入した。しかし本当に学生証で簡単に買えるとは思わなかった。簡単に買えるし、財布もとい学生証の紐が緩まないように気をつけよう。

「比企谷君も会計が終わりましたか。何の本を買ったのですか？」  
「ん」

袋を椎名に渡すと椎名は覗き込み二冊の本を取り出してくる。

「この二冊なんです、私も読んだことがないので比企谷君が読み終わったら貸してくれませんか？」

「そのくらいなら」

「ありがとうございます」

椎名はにっこり笑ってお礼を言ってくる。その笑顔はとても魅力的で思わずドキツとしてしまう。

「ど、どういたしまして。ちなみにお前は何の本を買ったんだ？」

「こちらですね。もし読みたい本があるなら貸しますよ」

言われて袋を見ると内一冊は俺が読みたい本だった。

「じゃあコイツを今度貸してくれない」「舐めてんじゃねえよ！ああ?!」……か？」

するといきなり背後から怒鳴り声が聞こえてきたので振り向く。すると赤髪の男子が3人の男子と対峙している。赤髪の男子の足元にはカップラーメンの汁や麺が散乱しているが、喧嘩か？

「二年の俺たちに随分な口のききようだなあオイ。生意気な一年が入ったもんだ」

「いい度胸じゃねえか！クソが！」

どうやら二年生が一年生を煽っているが赤髪の方は沸点低過ぎだろ？入学初日に喧嘩とかアホだろ？

「おー怖い怖い。お前クラスはなんだ？当ててやるよ——Dクラスだよな？」

「だったら何だってんだ！」

瞬間、上級生3人は笑い出す。何だ？Dクラスってだけで笑う？Dクラスって雪ノ下と由比ヶ浜がいるクラスだよな。

「聞いたかお前ら？ Dクラスだってよ！」

「あ？どういう意味だよ?!」

赤髪が凄むが、上級生は嘲笑を浮かべたままだ。

「何でもねえよ。可哀想な『不良品』に、今日はここを譲ってやるよ」

「逃げんのかオラ！」

「吠えてろ吠えてろ。どうせお前ら地獄を見るんだから」

上級生はそう言ってから去っていくが……

「どういう意味でしょうね」

椎名も不思議そうにそう言ってくる。上級生は赤髪をDクラスと見抜き、赤髪がそれを認めると嘲笑を浮かべ『不良品』とか地獄を見るとか言っている。

「……もしかしたらクラスによって特色があるのかもな。ほら、塾とかだと成績順でクラスを分けてるし」

「なるほど……確かに彼の言動は目に余りますね」

椎名が頷く先では赤髪がラーメンを片付けないどころからコンビニのゴミ箱を蹴っ飛ばして去って行く。あの赤髪の言動は高校生としては失格だろう。寧ろ小学生とし

でも失格だ。

「そうなるとAクラスが1番上でBクラス、Cクラス、Dクラスと続いている可能性があるかも知れないですね」

「だったら俺と椎名は下から2番目、平均より下である事を意味するな」

ま、俺は別に気にしないけど。

「そうなりますね。しかし私の仮説が正しいなら、クラス分けは単なる成績順ではないと思います」

「断言するのかわ？」

「自慢ではありませんが私は中学時代、テストで300人いる中で10位より下にはなった事ありませんから」

なるほど。実際さっきの赤髪は馬鹿そうだし、由比ヶ浜は救いようないほど成績が悪いが、雪ノ下は総武中学時代常にトップクラスの成績だった。偏差値が結構高い総武中 ведь。

椎名の話と雪ノ下の成績を考えると、単純な入試成績でクラスを決めたとは思えない。

「そうか。まあ今更どうこう喚いても意味ないか。既にクラス分けは決まって3年間はクラスが変わらないんだし」

実際学校が決めた事に俺達生徒がギャーギャー喚いても何も変わらないだろう。寧ろ喚いたら学園側が「我々の判断にケチをつけるのか？」って睨む可能性もあるし。

……まあ仮にDクラスが不良品の集まりなら雪ノ下は絶対に学校に文句を言うだろうな。アイツ自分が優秀と信じて一切疑ってないし。

「そうですね。それに私は成績順でも好きな本が読めるなら特に気にしないです。それでは次の買い物に行きましようか」

コイツはコイツでマイペースだな。ある意味尊敬するわ。

内心苦笑しながらも2人でコンビニに入る。そして食品やシャンプーなどを購入している、ある一角に無料商品が売られていた。

「無料……ポイントを使い過ぎた人への救済措置、もしくは……貰えるポイントが少ない人への救済措置ですかね」

「その言い方だと椎名も気付いたのか？」

「はい。毎月10万ポイントは多過ぎますし、龍園君の質問から察するに成績や授業態度によって貰えるポイントが違うのだと思います。加えて先程の上級生のDクラスの生徒に向けられた言葉から察するに、貰えるポイントについては各クラスごとで統一されている可能性もあります」

まあ可能性としては充分にありえるな。1年生は1クラス40人で4クラスあるた

め160人。2年生3年生も同じだろうから東京都高度育成高等学校の全校生徒は大体480人。

そして仮に毎月10万円分のポイントが振り込まれるのだとしたら、月4800万円。年間で5億を超える。

国が運営しているとはいえそこまでの大金を払うなんてあり得ない。

多分というか十中八九椎名の考えは合ってるだろう。

そうなるも今の俺達に出来る事は1つしかない。

「節約した方がいいな」

俺は無料商品の中から石鹸とタオルと歯磨きを取る。

「そうですね。念には念を入れましょう」

椎名も同じように生活に必要な物を取る。お一人様1月に3点までなのが悔しい。

どうせなら10点くらい購入出来たら良いのに。

「とりあえず7万、最低でも5万は残しとくか」

「そうですね。本を沢山出来ないのは残念ですが……あ、もし比企谷君が良ければお互いにシェアしませんか？」

なるほどな。俺と椎名がそれぞれ別な本を10冊ずつ買ってシェアすれば10冊分のポイントで実質20冊購入した事になるな。

「……まあ、それくらいなら」

「ありがとうございます」

だからその笑顔は止める。ぼつちに向けるような笑みじゃないだろうに。

魅力的な椎名の笑みに俺は目を逸らすことしか出来なかった。

その後俺は椎名と服や食料を購入したがその際には必ず無料商品を許される数だけ購入して寮に戻った。

その際に椎名から連絡先を交換するように頼まれ、押し切られる形で連絡先を交換した。

まさか入学初日に連絡先が2人分手に入るとは……

## 邂逅

学校生活2日目。授業初日であるからか大半の授業は勉強方針等の説明、要するにオリエンテーションで終わった。

先生たちの多くが予想以上にフレンドリーで親しみやすかったことには驚いた。

しかし腑に落ちない点がある。一部の生徒は退屈だからか隣の生徒と話したり、携帯をいじっていたりしていたが、教師陣は誰一人として不真面目な人間を注意しなかったのだ。

いくら義務教育でないからって注意の1つもしないなんてありえない。もしかして「自分勝手な行動を取りたいならご自由だ。後でどうなっても知らんけど」ってスタンすなのか？

だとしたらかなり厄介だ。人間ってのは注意されないと止まらない人間だからな。

そう思いながらも授業を受けているとチャイムが鳴り、先生が退室する。それは昼休みになった事を意味するので俺は鞆から弁当を取り出して食べ始める。スープには無料の食材提供があったので遠慮なく利用した。無料であるから形が歪だったり、普通の商品よりも小さかったりするがさしあたり支障はない。

隣を見れば椎名も弁当箱を取り出していた。他の連中を見ると大半が食堂に行き、残りは教室で惣菜・パンを出している。

「比企谷君。午前中の授業はどう思いましたか？」

弁当を食べ始めると椎名がそんな質問をしてくる。どう思いましたか？ってのは先生の態度についてだろう。

「全く注意してないのは不自然だったな」

「はい。いくら義務教育ではないとはいえ、全員が全く注意しないのは有り得ないですよ。だよな。神経質な先生が一人くらい居てもおかしくないし。」

そう思った時だった。

『本日午後5時より第一体育館にて、部活動の説明会を致します。部活動に興味のある生徒は第一体育館に集合して下さい。繰り返しです。本日——』

可愛らしい女性の声と共にアナウンスが流れる。部活ねえ、そういやこの学校はそれなり部活は有名だったな。

「椎名はどっかに入るのか？」

「中学の時は茶道部に入っていましたので、あるなら入部するかもしれません。比企谷君は？」

「生憎、部活については中学時代にいい思い出がないから入るつもりはないな」  
奉仕部なんて胡散臭い部活の所為でな。あの部活がなければ平和な学校生活を送れたと確信したくらいだ。

そういやあの2人は高校でも奉仕部をやるのか？だとしたら大変なことになりそう  
だ。何せ由比ヶ浜は頭が悪いし、雪ノ下は自分の考えが全てだと思っっているし、依頼が  
来たら全て失敗する可能性が高い。

まあ何にせよ部活についてはパスする。

「そうですか……変な事を聞きましたか？」

椎名が不安そうな表情で聞いてくるが、俺の事情を知らない椎名が部活について質問  
をするのは至極当然なので、特に気にしてない。

俺は椎名に一言大丈夫と言って弁当を食べるのを再開した。その際に椎名の雑談に  
付き合ったが、思った以上に楽しいと思った事に驚いてしまった。

3時間後……

午後の授業も終わり大半の生徒が体育館に行き、一部の生徒がそのまま帰宅する。

俺は帰宅を選択する。スーパーやコンビニに行き無料食材を購入する為だ。食材に  
関して月に何品までじゃなく、1日に何品までって感じだから毎日購入するつもりだ。

そしてコンビニに入り、無料食材を探すとある存在が目につく。

(あの女、行動が怪しいな)

飲み物コーナーにいる1人の女子だが、移動しながらもさり気なく監視カメラの位置  
を確認しているようにも見える。他の人は特に不審に思っていないようだが、人間観察を  
得意とする俺からしたら怪しい。

まさかとは思うがコイツ万引きするつもりか？

そう思いながらも携帯を取り出して動画を撮る準備をする。この学校について俺の  
予想が正しいなら他クラスとぶつかる可能性がある。

そして万引きは停学もしくは退学になるだろうが、そうなった場合において貰えるポ  
イントが少なくなるかもしれないので、証拠の動画を手に入れておきたい。場合によつ  
ては交渉のカードになるので龍園に売るのも悪くない。

すると肩をチョンチョン叩かれるので振り向くと……

「あちらの方、神室真澄さんといいます、万引きに成功すると思えますか？」

杖を持った銀髪の女子が楽しそうに話しかけていた。コイツも彼女の行動を怪しん  
でいるようだ。

飲み物コーナーにいる女子は神室というらしいが、あのさりげない仕草から怪しい、万引きをするって思うなんてこの少女も観察力が高いようだ。

「どうですか？」

「……わからん。もしかしたら今日はあくまで今後に備えて情報収集をしているだけで、今日はしないかもしれないな」

「なるほど。下見は大事ですから」

少女はそう言いながらも神室という女子から目を離さない。そんな中、彼女は再度周りを確認してコーラを手に取り鞆に入れようと……したが、途中で2人の男女が飲み物コーナーにやってきた為に中断した。

そして興が削がれたからか、そのまま盗む事も買う事もなく店から出て行った。

「おやおや。予想外の邪魔が入ってしまいました」

「楽しそうに笑いながら言うな。悪趣味にも程があるぞ」

「携帯で証拠を手に入れようとする貴方に言われたくないですね。何の為に動画に収めようとしたんですか？脅迫していやらしい事を強いるのですか？」

「違えよ」

よくエロ同人誌ではあるネタだが、現実だとリスクが大きいからやるつもりはない。

「では来月のポイントに備えてですか？」

「どうやらコイツも来月のポイントが10万ではないと見抜いてるようだ。」

「ここでとぼけるのは無理だ。俺の本能がコイツを欺くのは無理と言ってるし。」

「正確にはアイツが所属するクラスとの交渉カードにするつもりだった」

「なるほど。もしも彼女が万引きに成功していたら、貴方に動画を撮られてこちらには痛手になっていましたね」

「彼女は安心したように息を吐く。俺が交渉カードと言っただけで納得するって事はコイツもSシステムについて俺と似たような考えを抱いているようだ。」

「そういえば自己紹介をしてませんでしたね。私はAクラス所属の坂柳有栖と申しませぬ。このように杖を持って歩いていますのは先天性疾患を持っていますので。趣味はカフェでコーヒーなどを飲むこととチェスですな」

「先天性疾患って事はマトモに運動が出来ないのだろうか、彼女からは強者のオーラを感じる。龍園といい、何故強者に目を付けられる……」

「……Cクラス所属の比企谷八幡」

「適当な名前で誤魔化したいが、それをしたら後が怖そうだから正直に話す。」

「よろしく願います。早速ですが比企谷君。私は貴方とお友達になりたいので連絡先を交換しませんか？」

「断る」

こんな明らかな強者と繋がりを持つなんて絶対に嫌だ。そもそもコイツにとつての友達って、絶対に普通の人間にとつての友達とは絶対に違うだろうし。

すると坂柳は悲しそうな表情を浮かべる。

「そう、ですか……私は比企谷君と友達になりたいのですが……比企谷君が私を嫌うなら仕方ない、ですわね……うう」

そう言つて俯き、同時に店にいる客や店員が俺を睨んでくる。全員無言だが、「女の子を泣かせんじやねえよ」と全員の顔がそう言つていた。

コイツ……絶対悲しんでないだろう、なんて策略家だよ。

「わ、わかつたよ。連絡先は交換するから」

「……お願いします」

坂柳は俯いたまま携帯を突き出してくるのでやむなく連絡先をする。

交換し終わると坂柳は店を出て入り口で待機する。明らかに俺を待つてやがる。

俺はため息を吐きながら無料食材をカゴに入れて、未だ睨んでいる店員さん相手に会計を済ませ店を出る。

「買い物は終わったようですね。ではこれからよろしくお願いしますね」

坂柳はケロリとしてそう言ってくる。やつぱ嘘泣きじやねえか。マジで殴りたい。店の中にいた連中は簡単に騙されやがって……

「俺なんかと話しても面白くないと思うがな」

「それは私が決める事です。少なくともクラスメイトよりも私の退屈を紛らわせてくれるでしょう」

「クラスメイトは面白くないのか？」

「一部の生徒はともかく、大半はつまらないですね」

だからって俺に目を付けんなや。はあ……龍園といい、厄介そうな奴に目を付けられたな。

俺はため息を吐くことしか出来なかつた。

その後、色々と情報を交換したいと言われカフェに行ってお茶を飲んだ。（最初は断つたがまた泣き真似をしようとしたのでやむなくだが）

まあ、中々興味深い情報もあつたので良しとしよう。必要以上には関わりたくないけど。

# 水泳

入学して1週間が経過した。

新しい学校生活はどうかという概ね満足している。中学時代は罵倒と蔑視と嘲笑ばかり受けていたから普通に過ごせるだけで凄い幸せだ。

雪ノ下と由比ヶ浜がこの学校にいるのは残念であるが、接触してこないので問題ない。

クラスについても不満はない。強いて言うならクラスの中でも喧嘩の強そうな石崎とクラスで1番ガタイが良い山田アルベルトがクラスで最も怖い龍園の下に付いた事が怖いくらいだ。入学して直ぐに部下を持つ時点で相当ヤバいだろう。

閑話休題……

そんな中、俺達Cクラスの生徒はプールサイドにいる。この学校は1学期の最初から水泳をやる。正直珍しいが不満はない。

今のところプールサイドには男しかいないが、これは女子が着替えに時間がかかってるからだろう。

(しかしアルベルトの体格凄過ぎだろ)

Cクラスの男子はガタイが良い奴が結構いるが、黒人ハーフのアルベルトはガチでムキムキだ。仮に俺がアルベルトを殴ったらこっちの拳が痛む可能性が高い。

そして龍園が真面目に授業に参加しているのはどうにもシニールに見えてしまう。まあ口に出したら面倒だからしないけど。

すると女子更衣室の方から女子がぞろぞろ出てくる。その際に男子達は露骨には見えないが興味津々な態度を見せていた？

しかし気持ちはわからなくてもない。クラスの女子のレベルってかなり高いからな。

そんな中で俺の目につく女子は椎名と伊吹滯って女子だ。

前者の椎名は入学初日からの知り合いだが、水着になると胸が大きく予想以上のスタイルで、普段は着痩せするタイプだと思ってしまう。

一方の伊吹は俺以上のぼっちで誰とも連んでいない一匹狼のような女子だ。胸はそこまで大きくないが、手足がスラつとしていて美術品のようだ。まあ本人は凄くつまらなさそうな表情だけど。

「おーし、全員集合しろー」

すると体育の先生から集合がかかるので俺達は集まる

「見学者が随分多いみたいだが……まあいい」

言われて見学席を見ると女子が10人くらいいるが、絶対にズル休みだろうな。いくらなんでも多すぎる。

「早速だが、実力をチェックしたいので、準備体操してから泳いでもらおうぞ」

「あ、あの、俺あんまり泳げないんですけど……」

すると男子の1人が手を挙げてそう口にする。

「安心しろ。俺が担当するからには、夏までには泳げるようにしてやる」

「別に泳げるようにならなくても良いですよ。海なんて行けないですから」

「そうはいかん。今は苦手でも夏までには克服させる泳げるようになれば、必ず役に立つ。必ずだ」

随分と必ずという言葉を強調するな。しかも役に立つって言葉についても謎だ。夏休みに水泳合宿でもやるのか？

疑問に思いながらも俺はプールに入り泳ぎだす。総武中学にはプールがあったので、特に問題はなかった。

「比企谷君はちゃんと泳げてましたね」

プールから上がると椎名が話しかけてくる。椎名は形は出来ていたが凄く遅かった。多分クラスでワースト3には絶対に入る。

「中学では泳げたからな。基礎は出来てる」

「私の所の中学ではありませんでしたね」

なら数年ぶりって事になる。それなら泳げなくても仕方ないか。

「とりあえず、ほとんどの者は問題なく泳げるようだな。よし、じゃあ競争をするぞ。男女別50m自由形だ。女子は5人2組、男子は最初に全員泳いだ後、タイムの速かったもの上位5人で決勝を行う」

「きよ、競争?!」

泳ぎが苦手な生徒が悲鳴をあげるが先生は御構い無しだ。

「最もタイムが良かった者には、先生から特別に5000ポイント支給しよう。その代わり、男女ともに最下位のやつは、放課後に補習を受けてもらうからな」

1位に5000ポイント支給か。随分と太っ腹だな。坂上先生はこの学校は実力で生徒を測ると言っていたがマジなようだ。

出来る奴にはボーナスを、出来ない奴にはペナルティがあるのは社会では当たり前前の事だ。

加えて社会に出たらペナルティは補習ではなく、減給やクビが待っている。今の内に社会に対する予行練習をしろって事だろう。

ともあれ先生の命令は絶対なのでどうこう言うつもりはない。1位は無理だが最下

位はないだろうから気長にやるか。

俺達男子はスタートの構えを取り、女子は1番コースの近くにて見学している。

全員がスタートの構えを取ると先生が笛を鳴らすので一齐に飛び込む。

そして前に向かって泳ぎ始めるが右隣で泳ぐ龍園と左隣で泳ぐ水泳部の片山が俺よりも遙かに早い。うん、やっぱり1位は無理だな。

その後も適度に泳いだ俺はゴールする。結果は37秒で20人中11位だった。真ん中に近いので全く問題ない。

そして男子の決勝は案の定水泳部所属の男子2人がぶっち切りだった。

男子の部が終わると次は女子の番だ。男子が1番コースの端に移動すると女子がスタートの準備に入るが、俺達男子から一番近くで泳ぐ椎名は無表情だった。どんだけ運動が嫌いなんだアイツは？

椎名の無表情に若干引いていると笛が鳴り女子が一齐に飛び込んで泳ぎ始める。

しかし運動部に入っている面々は一際早く、椎名は20メートルも泳がない内に殆どピリが確定してしまっている。

その時だった。椎名の動きが一層鈍くなり、沈み始める。それから直ぐに上半身を水から出してもがくが苦しそうな表情だ。もしかして足を攣ったのか？

そう判断した俺だが気がつければプールに飛び込んでいて、そのままもがく椎名に近寄ってし、溺れないように椎名の腰に手を当てていた。

(え? いつの間にこんな事を? 身体が勝手に動いていたのか?)

自分でも予想外の行動をした事に驚く。しかし既にプールに飛び込んでしまった以上、椎名を助けることを優先するか。

「大丈夫か? 苦しくないか?」

「は、はい。足を攣ってしまいました……」

俺が質問をすると椎名は溺れないように俺に抱きつきながら頷く。その際に水越しとはいえ椎名の柔らかい身体の感触が伝わってドキドキしてしまう。

しかし今は非常時なので顔には出さないように注意しながらもそのまま椎名をしつかり支えながら、ゆっくりとプールから上がる。その際に女子から黄色い声を浴びるが、それを無視する。

椎名を抱えたままプールから上がるのはキツイが我慢だ。

「先生、椎名は足を攣ったようなので、休ませてあげてください」

先生から了承を得たのでその場で椎名を床につかせて足を伸ばすようにする。

「攣った時の対処法はわかるか?」

「い、いえ」

「つま先を自分の方に引き寄せろ。厳しいなら手伝うぞ」

「お願いしても良いですか？」

「はいよ」

俺は頷いて椎名のつま先を掴み、ゆっくりと椎名の方に引き寄せせる。その際に椎名は若干顔が強張るがこればかりは我慢して貰わないとな。

「それにしても意外でした。比企谷君が私を助けてくれるなんて思いませんでした」

「俺もだよ。俺も自分がお前を助けると思ってたなかつた」

「？助けるつもりがないのに助けたんですか？」

「まあ、な……気付いたらプールに入ってた」

何故か椎名が溺れたのを見たら身体が勝手に動いたんだよなあ。マジで理由がわからん。俺はそういうキャラじゃないのに。

「不思議なこともあるのですね。まあ何にせよ助けてくれてありがとうございます」

椎名は痛みがあるからか若干響めているが笑顔を浮かべて俺に礼を言ってくる。

その笑顔に俺は何も言えなくなってしまう。中学時代に戸塚という知り合いがいて、アイツは俺の悪評を知って尚、変わらず接してくれて偶に見せる笑顔が俺をドキドキさせていたが、椎名の笑顔は戸塚のそれと似たような魅力を感じる。椎名の笑顔を見ているとドキドキしてしまう。

まさか椎名は東京都高度育成高等学校において戸塚と同じ癒し粹なのか？

だとしたらマズイ。戸塚の場合、何度か手を出しそうになったが男だからギリギリ手を出さずに済んだが椎名は女だ。下手したら手を出してしまうかもしれない。

念の為、精神修養をしておこう。俺は椎名の足の攣りの回復を促しながらそう考えるのだった。

その後は特に問題なく授業が終わったが、見学していた女子が椎名を抱き抱えている俺の写真を撮って、それをクラス全体に広げてしまいショックを受けてしまった。

## カフエ

入学してから3週間、あと数日で5月を迎えるが、6時間目の授業の時だった。

担任の坂上先生の授業だが、プリントを持って入ってきた。坂上先生はプリントを使わない先生なので珍しいと思いつながら前を向く。

「いきなりで済まないが、月末だから小テストを行うことになった。後ろに回してくれ」「げっ、抜き打ちっすか」

クラスメイトの1人が嫌そうに声をあげる。まあいきなりテストをやれと言われたら誰だって嫌だろう。

「安心したまえ。これはあくまで今後の参考資料にするだけだ。成績表には何ら影響はない」

成績表にはね……随分と含みのある言い方だ。

そう思いながらもプリントを後ろを回し中を見る。1科目4問で、英語と数学と理科と社会と国語の5科目、計20問ある。そこで配点は各5点配当の100点満点のテストだ。

名前を書いて解き始めるが……クソ簡単過ぎる。受験の時に出た問題よりもレベル

が低く、得意でない数学についてもスラスラ解けた。

こんな簡単なテストで何の参考になるんだと思っていたが、最後の3問で鉛筆が止まる。

最後の3問だけクソ難しいのだ。ハッキリ言って高校1年がやる問題じゃない。特に数学の問題なんて何を言っているかサッパリわからん。

結果的に俺は最後の3問を解くのを放棄するのだった。

キーンコーンカーンコーン

「そこまで。後ろから回してくれ。それと今日のHRは話す事がないので回し終わったら解散して構わない」

坂上先生がそう言うのと直ぐに後ろからプリントが渡ってくるので坂上先生に渡し、鞆を持って立ち上がる。

「比企谷君。最後の3問は出来ましたか？」

同時に椎名も立ち上がり俺に話しかけてくる。入学してからは席が隣って事や趣味

が合う事もあり、毎日話すようになった。

逆にそれ以外のクラスメイトとは殆ど話さない。偶に龍園が話しかけてくるが君子危うきに近寄らずだから最低限の会話しかしない。

「いや全く。アレは高1に出す問題じゃねえよ」

「ええ。他は余りにも簡単でしたし、学校の意図がわかりません」

全くだ。てつきり中3で習った問題や入学してから習った問題ばかりと思つたが、半分からいの中1で習うような問題だったし学校の意図は全く読めない。

「まあ今後何かに使うんだろうから、調べて出来るようにしといた方が良いかもな」

もしかしたら今後同じ問題とぶつかるかもしれないし。何にせよ放置するつもりはない。

「そうですね。備えあれば憂いなしですから……あ、私は部活があるので失礼します」

「ああ、またな」

「はい。また明日」

椎名は笑顔を浮かべてから階段を上っていく。やっぱ椎名の笑顔は癒し枠だな、うん。

そう思いながら廊下を歩き昇降口に繋がる階段に向かうと……

「あら比企谷君、ご機嫌よう」

「げっ、坂柳」

坂柳がニツコリと笑って話しかけてくる。その後ろには以前見た万引き少女――神室がいる。見るからに面倒臭そうな表情を浮かべているが、察するに万引きしたのを坂柳に見られたようだ。

「げっ、なんて酷いですね。悲しくて泣いてしまいそうです」

嘘吐け。お前悲しいなんて気持ちを全く抱いてないだろうが。

「悪かったよ。じゃあな」

「待ってください。比企谷君が時間に余裕があるなら一緒にカフェでお茶でもしませんか？」

「嫌だ」

絶対に疲れるのは容易に想像出来……って、そこで震えだすな！

「……わかりました。比企谷君と一緒に行きかけたのに……うう」

坂柳はわざと悲しそうな表情を浮かべて俯きだす。幸い周りには神室以外いないがこの状態が続けば面倒なことになるな。

「わかったよ。行くから泣き真似はやめろ」

「そうですか。比企谷君ならそう言ってくれると思ってきました。行きましようか」

案の定坂柳はケロリとしてそう言ってくる。身体が弱くないならぶん殴っていたか

もしれない。

「……アンタも苦労してんだ」

すると神室がそんな事を言ってくるが……

「いや、万引きをしたって弱みを握られてるであろうお前に比べたら遥かにマシだな」

「は?!ちよつと坂柳、コイツに話したの?」

瞬間、神室は驚いてから坂柳に非難の眼差しを向けるが坂柳はケロつとしてい

「いえ。部活説明会があつた日に真澄さんが万引きしようとしているのを一緒に見たんです」

「あ、そう……」

神室はそう言つたため息を吐く。コイツからは苦労人の匂いがするな。

「そういえば真澄さんは知りませんでしたね。こちらはCクラスに所属する私のおもちゃこう……こほんつ、お友達の比企谷八幡君です」

「待てコラ。テメエ今おもちや候補つて言おうとしたよな。このロリガキ」

「誰がロリガキですか。撤回してください」

坂柳は心外とばかりに俺に文句を言ってくるがお前は普通にロリだからな?

しかし撤回しないと面倒だし撤回するか。

「悪かったよ。撤回するよ」

「そうしてください。それではカフェに行きましようか。比企谷君はポイントを残して  
いますか？」

「7万5千ちよいあるから問題ない」

「そうですか。昨日今日、残りポイントが無いという声を各場所で聞きましたが、比企谷君は節約家のようですね」

「ウチのクラスでも1万切ったとか、残り5千って声を聞いたが、俺が節約家なんじゃない、金遣いが荒い奴がいるだけだ」

入学してから3週間近くだが、3週間で10万近く使うとか馬鹿だろ？1週間に3万も使っていたら卒業してからも贅沢を止められないだろうに。

「そうですね。まあポイントが残ってるなら安心です。行きましようか」

坂柳がそう言っ歩きだす。正直言っ逃げたいが逃げたら絶対に面倒だしたため息を吐いて、坂柳に合わせて歩き出した。

20分後……

「ところで比企谷君。今日なんです小テストを受けましたか？」

カフェに着いて、紅茶を注文すると坂柳が話しかけてくる。

「最後の3問が難しい小テストなら受けたな」

「そうですか。私と真澄さんのクラスだけかと思いましたが全クラス共通なのかもしれないですね」

「ちなみにお前らは出来たのか？」

「私は1問解いたけど自信はない」

「全部解きました。多分合っていると思いますが、少々時間がかかりましたね」

「マジか。見た目は子供で頭脳は大人ってまんまコナ……つて！杖で叩くな杖で！」

この野郎、よりによって小指を叩きやがって……泣くぞ俺。

「私は子供じゃないですから子供扱いしないでください」

「いや私達未成年だから子供じゃん」

「何か言いましたか真澄さん」

「別に」

神室は素つ気なくそう返す。しかし坂柳って腹黒いかと思ったがムキになるんだな。そこがまた可愛らしい。まあからかい過ぎたら杖で叩かれるだろうから自重するが。

「こほんつ、話を戻します。今回の小テストについてどう思うか比企谷君の考えを聞かせてください」

「情報量が少な過ぎるから憶測だぞ？お前らのクラスは知らないが、ウチの担任は成績

には影響しないと言っていた。つまり成績は影響しないが、今後の学園生活において影響する可能性が高い」

そもそも成績に影響するなら習っていない範囲の問題を出す訳ない。

「続きをどうぞ」

「多分最後の問題が今後行われる試験や学校のイベントにおいて重要な布石になる可能性があるから、今の内に出来るようにしておくべき……つてのが俺の考えだな」

まあ何に使うかはわからないけどな。

「なるほど。ご意見ありがとうございます。つきまして比企谷君にはお願いがあります」

「一応聞くだけ聞こう」

「はい。各クラスについては差があるのは比企谷君も薄々気づいていますよね」

「少なくともDクラスが問題なクラスである事は確信してる」

以前コンビニの前でDクラスの生徒と上級生が揉めていたが、その際に上級生はDクラスの生徒とわかったら物凄く馬鹿にしていた。その事からクラス間に差があると考えている。

「そして5月以降、クラス間で揉める可能性はあるでしょう」

「まあ下位のクラスが下克上を狙う可能性はあるな」

最上位のクラスを狙って戦争が起こる可能性はある。クラスの間には差があるバカ〇スもAクラス以外の生徒がAクラスに戦争を仕掛けてたからな。

「そこでお願ひがあります。もしも争いが起こった場合なんですが、私の味方になってくれませんか？」

「……随分と大胆な頼みだな。つまりCクラスをAクラスに売れど？」

「違います。Aクラスではなく私個人に協力して欲しいのです。そして裏切る必要はありません」

「なら俺に何を求める？」

「まずAクラスについては話しましょう。近いうちにAクラスに2つの派閥が出来て対立するでしょう」

坂柳は断言する。2つの派閥と言ってるが片方は坂柳がリーダーを務める派閥だろう。ぶつちやけコイツよりも優秀な人間がそう多くいるとは思えない。

そこで坂柳はDSで好戦的な性格である事を考えると……

「つまりお前は保守派の派閥を叩き潰してクラスを支配する為に俺を味方につけると？」

もう片方のリーダーが保守派で、坂柳の考え方とは合わない人間なんだろう。

「素晴らしい慧眼です。私は誰かの下につくのは嫌ですから」

だろうな。コイツが誰かの下につく姿は全く想像出来ない。

「しかし同じクラスである以上、露骨に潰すのは難しいです」

そりやそうだ。気に入らないクラスメイトを潰した結果、他クラスに下克上されたらクラス内における坂柳の評価は下がるだろう。

「だから部外者である俺を利用して潰そうと考えてんだな」

しかし他クラスの間である俺が坂柳と対立するであろう派閥を叩いたら坂柳の評価はそこまで変わらないのは明白だ。

「ええ。比企谷君はそれなり、少なくとも私のクラスメイトの大半よりも頭の回転が良いですから。もちろん味方になって活躍するなら報酬を用意します」

坂柳はそう言っている。この学園は謎が多いのでポイントを始めあらゆる武器を用意しておくに越した事はないだろう。

しかし……

「まだ学校について詳しくわからない以上、誘いには乗れないな」

今の学校には謎が多過ぎる。そんな不明瞭な状態で承諾するなんて無理だ。まして坂柳を完全に信用したわけではないからな。

「まあそうでしょうね。では5月の内に返事をお願いします」

「わかった。でも腑に落ちない点がある。わざわざ俺の力を借りなくてもお前なら上手

くクラスを統一出来るんじゃないか？」

「まあ可能ですね。にもかかわらず私が比企谷君に頼むのはその方が面白いと判断したからです。どんな事をしようかと私が面白くなければ意味がありませんから」

唯我独尊過ぎだろ。それこそ雪ノ下以上に。

しかし全くイラつかない。それは坂柳が有能である事を本能が理解している事もあ  
るが、それ以上に罵倒をしないからだろう。

「そうかい。とりあえずお前の話は頭に入れておく。ちなみに報酬って何を考えてんだ  
？」

「そうですね……ポイントは当然として、情報や真澄さんですね」

「待てコラ。最後の報酬は問題だからな？」

当然のように神室を突き出すな。神室は眉をひそめるだけだが、普通に問題だからな  
？

「冗談です」

嘘吐け。目が冗談と言っていないぞ？

坂柳の言葉に俺はそう思ってしまう。同時に坂柳には一生勝てないんだなとも思っ  
てしまう。

そんな感じ俺は若干精神的に疲れながらも紅茶を飲んで、神室と一緒に時間の許す限り坂柳に振り回されるのだった。

数日後……

遂に5月1日を迎えた。

## Sシステム

5月1日、朝起きて直ぐに学生証端末を取り出してポイントを確認すると、123985ポイントと表示されていた。昨日までは7万4千ちよつとあったので、その事から察するに支給されたポイントは49000だと思う。

すると端末に着信が来たので画面を見ると坂柳からだった。

「もしもし?」

『おはようございます比企谷君。いきなりですがポイントは幾ら振り込まれていましたか?』

「4万9千。そっちは?」

『9万4千ポイント入ってましたね』

マジか? 殆ど減ってねえじゃねえか。やっぱりAクラスが優秀でBクラス、Cクラス、Dクラスの順で格付けされているのだろう。

「そうか。そっちはともかくウチのクラスは荒れそうだな」

『Cクラスはまだマシでしょう。私は今寮のエントランスに居ますが、ポイントが振り込まれてないと喚いているDクラスの男子がいました』

つまりDクラスは0ポイント支給されたって事か。そりゃ喚くな。

「まあ詳しい事情は学校でわかるだろ。悪いが俺まだ飯も着替えも済ませてないから切るぞ」

『わかりました。では後ほど』

通話を切って俺は。パパッと着替えて、冷蔵庫にある無料食品を使って調理を始める。

さて、教室はどうなってるやら……頼むから騒いでるなよ。

30分後……

学校についての俺はCクラスの教室に向かう。と、そこで聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「やっぱり由比ヶ浜さんも振り込まれてないのね」

「うん。あたし後2000ポイントしかないのに……」

チラッと横を見ると雪ノ下と由比ヶ浜がそんな話をしているが、由比ヶ浜は入学してから今日までの3週間ちよいで10万近く使ったようだが金遣い荒過ぎだろ？馬鹿か？ここで無駄遣いを覚えたら社会に出て大変なのに

まあ関わったら面倒だから口にはせず廊下を歩くとDクラスからは騒ぎ声が聞こえてくる。まあ0ポイントらしいからな。

そしてCクラスに入るとDクラスに比べたらマシだが多少騒いでいる。

まあ何で10万ポイント振り込まれてないのかではなく、ポイントが予想よりも少ないって声だ。つまり皆、ポイントが減る事は可能性として考えていたが、ポイントの減り具合に驚いている感じだ。

「おはようございます比企谷君。大方予想通りポイントが減りましたね」

「ああ。ま、ある程度ポイントが貰えて何よりだ」

5万ポイント飛んだのは大きいけど、それでも月に5万近く貰える。

実際俺が入学してから今日まで使ったポイントは2万5千程度だし、その事を考えたら1ヶ月5万は小遣いとして文句ないだろう。

「そうですね。しかしDクラスの生徒は大丈夫なんでしょうか？朝からポイントが振り込まれていない、ジュースを買えないなどの声を聞きました」

「計画も立てずにポイントを浪費した馬鹿の自業自得だ」

普通ある程度は貯金するだろうに。備えあれば憂いなしって言葉を知らないのか？

「ところで椎名。5万とはいえポイントが入ったし今日は本屋に行かないか？」

椎名とはお互いに違う本を買って、お互いにシェアする約束をしている。それにより

俺達は本5冊分のポイントで10冊の本を読む事が出来る。

俺の言葉に椎名は嬉しそうに頷く。普段は無表情に近い椎名だが、本の話になると凄く可愛い笑顔を見せてくる。

「はいっ。お互いに5冊ずつ、計10冊買うのはどうでしょうか？」

「そうしようか」

椎名の提案に頷くとチャイムが鳴り坂上先生が入ってくる。しかしいつもより若干険しい表情だ。

「諸君おはよう。朝のHRを始める。しかしその前に質問を受け付けようか。質問がある生徒は手を挙げてくれ」

あらかじめ来るだろうと予測していなければ出来ない言葉だ。その事から判断するにポイントについての説明はこの場で行うのだろう。

対する生徒らは沈黙している。ポイントについて事情を把握しているから質問しないのか坂上先生の冷たい声に気圧されているのかわからない。

「ふむ。どうして10万ポイント振り込まれてないのか、という質問が来ると思ったんだが……今年のCクラスは優秀な生徒が多いようだ」

事前に龍園が質問してなかったら今質問している奴がいたかもな。

「では改めてポイントについて説明する前にまずはこれを見て欲しい」

坂上先生はペンを出すとホワイトボードに何かを書き始める。暫くすると各クラスとc p という単位で表されたポイントが書かれていた。

Aクラス 940 c p

Bクラス 650 c p

Cクラス 490 c p

Dクラス 0 c p

Cクラスは490……c pの意味はわからないが、c pの100倍ポイントが貰えるんだらう。

「まずはc p……クラスポイントというものを説明しよう。この学校はリアルタイムで生徒の実力を測り、数値化する。要するにポイントはこのクラスの実力と想ってくれて構わない」

やはりクラス全体の評価が実力か。

「入学当初、各クラスにはあらかじめ1000クラスポイントが支給されている。そして君達の生活態度を査定、評価して、問題行動をとっている所を確認したら1000クラスポイントから減点するという減点方式の採点を行っていた。のだよ。そして1

クラスポイントにつき1000プライベートポイントが支給される。君達のクラスポイントは490だから49000プライベートポイントが支給されているということになる」

「おい、先生。ポイントが減った詳細を教えてくださいよ。何やったら何ポイント引かれるみたいによ」

するとクラスのリーダー格の龍園が机に足を乗せながら質問する。今は授業ではないから問題ないと判断したのか？

「残念ながらそれはできない。人事考課、詳しい査定内容を教えないという方針にしている。まあ私個人からヒントを言っておこう。なぜ減ったのかというと一部の生徒が当たり前の事を当たり前に出来ていなかったからだ」

「はっ、なるほどな。ようするに西野が携帯をいじっていたり、小宮と近藤が授業中に駄弁ったように、ふざけた生活態度をとった奴らのせいでポイントが下がったわけか」

龍園はケラケラ笑いながら名指しをする。名指しされた生徒はバツの悪そうな表情を浮かべている。

そして坂上先生の話と龍園の会話から皆ポイントが減った理由を察しただろう。授業を真面目に受けるといふ当たり前の事を当たり前に出来なかったからポイントが減ったのだろう。

「学校側は君達の生活を基本的に否定するつもりはない。遅刻や私語、授業のサボリのツケは後で回ってくるだけの事。特に今年のDクラスは遅刻欠席を100近く、授業中の私語や携帯いじりを400回近くやらかして、歴代最低の記録を叩き出した」

坂上先生は遠回しに肯定するが、Dクラスの連中はどんだけやらかしたんだ？ウチのクラスもそれなりに私語をしていたが400回は無いし、遅刻欠席は精々5、6回だぞ。「だがよ先生、俺や比企谷や椎名あたりは真面目に授業を受けてポイントを減らすような行動をしてないのに、この仕打ちはあんまりじゃねえか？」

すると龍園はそんな事を言う。これは恐らく今後の布石の為だろう。

「確かに一切ポイントの減点対象となつてない生徒はそれなりにいるが、この学校では連帯責任だ」

「なるほどな。真面目に授業を受けていた生徒からすれば良い迷惑だな」

龍園は笑い、不真面目な態度を取つていた生徒に向けて罵倒する。それによりクラスにいる何人かは悔しそうな表情を浮かべるが、反論は出来ない。何故なら龍園が言っている事は紛れもない事実であり、言っている龍園本人も授業は真面目に受けていたからな。

そしてこれは龍園がCクラスの頂点に立つ為の布石だ。今の発言で悔しそうな表情を浮かべた生徒はポイントを減らした要因で今後クラス内での立場が低くなる

だろう。中には不良っぽい奴もいるし、必然的に龍園が上に立つ可能性が上がる。

というか十中八九龍園がボスになるだろう。クラス内でも強いであろう石崎やアルベルトは既に龍園の下についてるし。

「話を進めようか。既に気付いている生徒もいると思うが、この学校のクラス分けは大手の塾でよくあるように優秀な生徒から順にAクラスに分けられている。そして君達はCクラス、つまり学校側からは平均よりやや下の評価をされたクラスというわけだ」

その言葉に一部の生徒が不満を露わにするが、俺からしたらDクラスに配置されなかったと若干驚いている。俺は客観的に問題児であろうから多分Dクラスに近いCクラスの生徒だと思う。まあCクラスで良かった。幾ら節約してもポイントが一切支給されないってのは嫌だからな。

「そう怒らないでくれ。今はCクラスであるが、これから努力すればBクラスにもAクラスにも上がれる可能性がある。クラスポイントはクラスのランクにも反映していて、もし君達のクラスポイントが651ポイント以上なら君達はBクラスに昇格して、今のBクラスはCクラスに降格する」

やはり下克上制度はあったか。色々と面倒そうな学校だな。

しかし気になる点がある。

「先生、質問良いですか？」

「今度は比企谷君か。何かね？」

「BクラスやAクラスに上がった場合のメリットはなんかあるんですか？例えば昇格ボーナスとしてプライベートポイントが大量に支給されるみたいな」

「それは今から君達には伝えなければならぬ事だがこの学校は進学率、就職率100%を誇るが、それは卒業する時にAクラスに在学している生徒のみだ」

今度はクラス中がざわめき出す。まあクラスメイトの大半は進学率や就職率を選んでこの学校に来ただろうに、今の発言は根本的に否定したものだ。

「なるほど。つまり大半の生徒が進学希望した理由を叶える為にはAクラスに上がって事です」

「その通りだ。以上でこの学校の仕組みについての説明は終わりだが、次にこれを見てもらおうか」

坂上先生は鞆から白い紙を取り出し広げ、ホワイトボードに貼る。

そこに載っていたのは先日行った小テストの結果だった。名前と点数が書かれていることから全員の結果がハッキリと見れるようになっており、1番高い生徒を左上に書きそこから順々と下がりながら全員の成績が表示されている。

1位が椎名の95点で2位が金田の90点。つまりこの2人は最後の難しい問題を解けた事を意味する。

そして俺を含め15人近くが85点だった。これは最後の3問以外解けた生徒だろう。

それで60点台も結構いて、ビリは石崎の35点だった。平均点は70前半くらいだろう。

「平均点は72.3点だ。赤点は平均点を2で割った点数で小数点以下は四捨五入するから今回の赤点ラインは36点だから石崎君は赤点だ。まあ今回は成績表に影響しないテストだからペナルティはないが、次回以降中間や期末では赤点を取らないように頑張りたいまえ」

「赤点を取るとどうなんだ？クラスポイントが減るのか？」

「今後中間試験や期末試験で1科目でも赤点を取ったものは即退学となる。これについては君達も深く理解して欲しい」

龍園の問いに坂上先生がそう答える。同時に教室が一層騒つく。騒ついているのは赤点の石崎を筆頭に50点以下の生徒だった。

確かに赤点1つで退学するのは少々厳しいだろう。俺も数学はしっかりと勉強しとこう。受験に備えて死ぬ気で勉強したとはいえ得意ってわけじゃないし。

「これについて脅しじゃない。嘘だと思えば上級生に退学になった人がいるかを聞いてみるといい。質問がないなら今日のHRを終わりにする。出来ることなら1学期

早々退学者が出ないように頑張つて欲しい。君達が赤点を取らずに済む方法はあると確信している。では解散してくれ」

言うことを言うと坂上先生は教室を出て行くが、クラスの騒ぎは大きくなる。

その後、1限の先生が来ると静かになるが、殆どの生徒は落ち着いていないまま授業を受けるのだった。

## Dクラス

学校の仕組みについて発表された昼休みの事だった。

「よう比企谷。一緒に昼飯を食わないか？」

教科書を机にしまっていると龍園が話しかけてきた。それによりクラス全体から注目が集まる。

「……目的は？」

「ただの雑談だ。奢ってやるから食堂に行こうぜ」

嘘だな。ただの雑談ならわざわざ俺に話しかける理由はない。

「自分の弁当がある」

「じゃあ明日奢ってやるよ」

どうやら断るって選択肢はなさそうだ。仕方ないし、従うか。

「はいはい。じゃあ行くが、手下は連れてくのか？」

「安心しろ。お前が望んでなさそうだから連れてかないでやるよ」

それはありがたい。龍園とは偶に話すが龍園の手下の石崎やアルベルトとは殆ど話してないからな。

「なら良い。混む前に行くぞ」

言いながら俺は龍園と一緒に教室を出て廊下を歩く。しかし食堂に向かう途中でDクラスの横を通ろうとしたら、同じタイミングで教室のドアが開き、雪ノ下や由比ヶ浜が出てきて、由比ヶ浜が龍園とぶつかる。

「邪魔だ。不良品がぶつかってんじゃねえよ」

「っ……………」

龍園の容赦ない言葉に由比ヶ浜が俯く。すりと雪ノ下が由比ヶ浜の前に立つ。しかしその際に俺の存在に気付いたのか睨みつけてくる。

「……………貴方がDクラスに居ないなんて一体どんなズルをしたのかしらズル谷君?」

「あ? おい比企谷、この不良品の知り合いか?」

「ソイツとお前がぶつかった女は同中だ」

「なるほどな。しっかしコイツはDクラスで納得だな」

雪ノ下を指差すと雪ノ下は俺ではなく龍園を睨む。

「どういう意味かしら? 私がDクラスにいるのは手違いであるとか思えないわ」

「くはっ! マジかコイツ! 比企谷、お前の知り合い面白いな! 漫才やれば成功するだろ!」

雪ノ下の言葉に龍園は大爆笑する。まあそんな風にハッキリ言ったらなあ。

「その気持ち悪い笑いをやめなさい。不愉快だわ」

「だったら面白い事を言うなよ。じゃあ聞くけどよ、比企谷がズルをしたって言ったが具体的にどんなズルをしたんだよ？国が力を入れてる学校相手にどんなズルが出来るんだよ？」

全く以って同感だ。俺が大企業の跡取り息子や国会議員の息子なら賄賂って手段があるかもしれないが、一般家庭の長男の俺が国が力を入れてる学校を欺くなんて無理だ。

「それに仮にズルが上手くいったとしても、それなら比企谷はCクラスじゃなくてAクラスに行くだろうが。そんな簡単なこともわかんないのかよ？だからお前はDクラスなんだよ」

「っー」

龍園の正論に雪ノ下は睨みつける。正論を言われたら睨みつけるのは相変わらずだな。

「龍園。煽るのは良いが、食堂が混むから煽り過ぎるな。それと雪ノ下、俺や学校の選定に不満を抱いてる暇があるなら由比ヶ浜の勉強を見てやったらどうだ？どうせ小テストも0点なんだろう？」

中学時代の由比ヶ浜は成績も悪く、思考力も常識もない馬鹿だったし、小テストも0

点である可能性はある。

「はあ?! 0点じゃないし! ヒツキーマジキモい!」

俺の言葉に由比ヶ浜はキレる。まあ幾ら由比ヶ浜が馬鹿でも0点はないだろうな。

「そうかい。でも赤点だろ? 違うなら点数を教えてくださいよ」

「な、何で教えなきゃいけないし! キモい! マジキモい!」

「コイツ絶対赤点だろ?」

「赤点だな。中学時代、コイツ30点以上の点数を取ってない」

龍園の問いに頷く。実際由比ヶ浜はテストのたびに毎回補修を受けていて、奉仕部室で雪ノ下から勉強を教わっていたし。

「ま、退学になったら人生が詰むだろうから精々頑張れ」

この学校は国が力を入れている学校だ。その学校を退学になる、ということとは国から見捨てられたと世間は判断するだろう。そうなったら比喻表現抜きで人生が詰む可能性が高い。

「そんな事ないわ。由比ヶ浜さんは絶対に退学させないし、Aクラスに上がってみせるわ」

「あつそ。しかし腑に落ちない事があるんだが、何故将来が決まっているのにAクラスを目指すんだ?」

「……どういう意味かしら？」

すると雪ノ下は怪訝そうな表情を浮かべるが陽乃さんから聞いてないのか？

「以前陽乃さんが「お母さんは、雪乃ちゃんは家の仕事をやらないのに一人暮らしをする穀潰しだから将来は大企業の跡取り息子と結婚させて役に立たせる、って考えてる」って言ってたぞ」

「っ！そんな話聞いてないわ。出鱈目言わないでちょうだい」

「どうやら本当に聞かされてないようだ。」

「そうだし！幾ら何でも親が勝手に結婚を決めるなんて間違ってるし！ヒツキーマジキモい！」

「そしてお前はキモいしか言えないのか？」

「少なくとも俺は陽乃さんからそう聞いた。それを信じるのはお前らの自由だ……って、そろそろ行くぞ」

「ああ。すっかり本当にDクラスって屑が揃ってんだな。中間で何人消えるか楽しみにしてるぜ」

「んだとテメエ！」

龍園が雪ノ下と由比ヶ浜をdisると2人の背後から、以前上級生と揉めていた赤髪の男子が激昂する。

「おいおい。Dクラスつてのは屑だけじゃなくゴリラも受け入れてんのかよ？末期だな  
オイ」

「ああ?!」

龍園の挑発に赤髪は更にキレて龍園の胸倉を掴む。対する龍園は待つてましたとばかりに薄く笑う。コイツ、わざと殴られてペナルティについて調べる腹か。

しかし……

「両者そこまで!」

手を叩く音が聞こえてきたかと思えば、入学式の時に俺と雪ノ下の諍いを止めた女子が立っていた。

「廊下での暴力沙汰は見過ごせないなあ。監視カメラがあるとはいえこれ以上続けるなら先生を呼ぶことになるよ?」

「一之瀬、お前は勘違いしている。俺は善良な被害者だ」

嘘吐け。お前が善良なら人類の9割9分9厘以上の人間が仏や菩薩だからな。

「そう?私からしたら龍園君が挑発しているように見えるけど?君もここで殴ったら停学になるかもしれないよ?」

「ちっ……」

一之瀬とやらの言葉に赤髪は舌打ちをしながら龍園の胸倉から手を離す。対する龍

園は胸元をパンパンと叩いてから赤髪に話しかける。

「お前は良いおもちゃになりそうだな。また今度お前で遊んでやるよ」

「あぁっ?!」

赤髪は怒鳴るが龍園はそれを無視してスタコラ歩き出す。あの野郎、自分から誘っておきながら先に行くとは良い度胸だな。

俺はため息を吐きながら一之瀬に小さく頭を下げて龍園の後を追いかける。

「赤髪をおもちや呼びしていたが何を企んでんだ?つか一之瀬って女は知り合いか?」

「赤髪についてはDクラスでもトップクラスの馬鹿だろうから遊び方は色々あるから悩みどころだな。で、一之瀬はBの女で少し前に石崎達を使ってBクラスにちよつかいをかけた時に知り合っただけだ」

言いながらも食堂に着いたので一旦龍園と別れて席を確保する。そして弁当を食べ始めると龍園がラーメンを持ってこっちにやってくる。

「で?話ってなんだ?」

まあ大体予想がつくけどな。

「ああ。今日学校の仕組みがハッキリしたがその特性上、今後は他クラスと競い合う」

「そうだな。それでCクラスでリーダーをやるならお前だな」

「当然そのつもりだ。放課後にはそれを宣言する」

ま、リーダーを決めるなら早い内が良いだろう。明確なリーダーがいないと今後クラスがバラバラになる可能性が高いし。

「とはいえそれに不満を抱く奴はいるだろうな」

「そりやそうだ。石崎やアルベルトを始め、何人が傘下を手に入れてるのは知ってるが、いきなりリーダー宣言しても納得はしないだろう」

特にCクラスは我が強い生徒が多いし、龍園の配下でない生徒の大半が不満を抱くだろう。

「ああ。だが実績の1つや2つを出せば反対派の大半は黙るだろうな」

それは否定しない。もしも龍園が実績を上げたなら反対派の連中も気に入らないが従った方が利口と判断して、不満を出さず余程のことがない限り龍園に従うようにするだろう。

「で？実績を出す為に以前誘ったようにお前の下につけと？」

「そうだ。といっても石崎やアルベルトとは違って下僕ではなく部下として雇ってやる」

「雇うって事はポイントをくれんのか？」

「他にも坂柳と関わることにしてもお咎め無しにしてやる」

……コイツ。俺が坂柳と関わってる事も知ってるなんて……まさかとは思うが俺に

監視を付けていたな。

「俺は別に無理に坂柳と関わるつもりはないからお前が反対するなら関わらないぞ」

「俺としてはそれでも良いが、お前からしたらそれはやめといた方がいいんじゃないか？坂柳がお前をどんな意味合いで気に入っているかはわからないが、アイツの性格からして、お前が関わるのを拒否したら面倒なことになると思うぜ」

そ、それは否定出来ない。俺は坂柳におもちゃの意味で気に入られている確信がある。そして奴の性格的に俺が避けたら首根っこを掴んできそうさ。

そう考えると龍園に協力して坂柳と関わる権利を貰うことが1番マシな選択だろう。「……わかったよ。協力してやる」

俺はため息を吐きながらそう返すことしか出来なかった。なんか俺の平穩はどこに行っただらうか？

はあ……

## 王

「で？実績を上げると言ったが、最初は何をやるんだ？何でもBクラスにはちよっかかけたが、次はDクラスにちよっかいをかけるのか？」

龍園に協力する事を決めた俺は開き直って龍園に質問をする。

「もちろんDクラスにちよっかいをかけるつもりだが、今すぐじゃない。今やるべき事は中間試験についてだ」

「なるほどな。確かに小テストで赤点を取った石崎を始め、馬鹿が予想以上に多いからな」

あの小テストで50点以下をとった奴が何人もいたが、そいつらは中間試験において赤点候補だろう。

「ただ退学するだけならどうでも良いが、退学した場合に発生するであろうペナルティが厄介だ」

だらうな。遅刻や私語でマイナスポイントがつくんだし、退学者が出たら相当デカいマイナスが付くだろう。

「入学して早々それは避けたいな」

「ああ。坂上は石崎を始め、一部の生徒が馬鹿みたいな点数を取ったにもかかわらず、赤点を取らずに済む方法があると確信していると言っていた。おそらく攻略の鍵はそこにある」

まああの言い方は独特だな。これまでの坂上先生の言い回しからして攻略法はあるはずだ。

「ちなみに比企谷。お前は既に攻略法を考えてるか？」

「……一応あるが、実行出来ない可能性があるし、実行出来ても大赤字を食らう可能性が高いから、絶対正しい攻略法じゃないぞ」

「それでも良いから言ってみろ」

「そこまで言うなら……」

「簡単な話だ。赤点候補の生徒はプライベートルールを払って坂上先生から「カンニングをする権利」を買うって作戦だな」

「くはっ！そうきたか！まさか学校のルールをぶっ壊すって考えを出すとはな」

龍園はケラケラ笑うがそんなおかしいか？坂上先生は敷地内にあるものは全て学生証カードの中にあるポイントで購入が可能と言っていたし、敷地内でカンニングをする権利をかうって事も可能かもしれない。

「まあルールをぶっ壊すのは学校も認めない可能性が高いし、仮に認めても相当高いだ

ろう」

少なくとも1人につき数十万単位だろう。もしも数万で買えるなら退学者は1人も出ないのは絶対だ。

「だろうな。が、今の比企谷の考えを聞いて点数をかうって考えも出た。コイツもそれなりに値段が張るだろうがカンニングよりは安いだろう」

「そうかもな。とりあえず坂上先生には聞いとけ」

幾ら俺達が考えを生み出しても、先生が売るのを拒否したら何の意味もないからな。「そのつもりだ。話を戻すがもし正しい攻略法を発見し、俺に提示したら5万やる」

随分と太っ腹と考えたが、それでもないな。もしも俺が正しい攻略法を発見して龍園に提示し、龍園がクラスに教えたなら龍園はクラスメイトから信用を得る事が出来る。信用するのは王にとって重要だ。無くしたら今後の活動に支障が出る可能性もあるしな。

「……わかった。一応こっちでも考えておく」

ポイントは学校生活において重要だ。貯めておけば強力な武器になるだろうし。「決まりだな。期待しておくぞ?」

「過度な期待はすんな」

そう返して弁当を食べるのを再開した。

3時間後……

「さていきなりだが今後の話をするが……今後Cクラスは俺が王となつて指揮をする」  
午後の授業が終わると、龍園が教卓に座つてそんな宣言をする。まさかあそこまで堂々と口にするとはな。

龍園の発言に一部からは不愉快そうなオーラが出るが、龍園の背後には石崎とアルベルトがいるから堂々と反対する奴はいない。

「お前らもわかつてるだろうがこの学校は異質だ。教師どもはハツキリと説明しないし、普通の学校ではあり得ない事ばかり。そんな中でAクラスの座を手に入れるにはクラスを纏める存在は絶対だ。そして纏め役に必要なのは常識にとられない思考力、敵を潰す事に一切の躊躇いを持たない精神力、何らかの形であれ敵を潰す為に必要な暴力など色々あるが、Cクラスにおいて一番持つてるのは俺だ」

言葉からは物凄く自信を感じる。

「まあ俺の意見に不満がある奴が多いみたいだから、まずは王を決めようぜ。俺はいつでも不満を持つ連中の相手をしてやるからかかってこい。どんな形でも構わないからよ」

言いながら龍園は笑う。そこには恐れの色はなく、自身がCクラスの王になる確信を抱いているのがわかる。寧ろ歓迎しているようにも見える。

その事から察するに反対派を潰す事も娯楽と考えているのだろう。わかつてはいたが本当にイかれてるな。

「中には俺が王になる事に不満がない奴はいるだろうが、そいつらは帰って良いぜ。ただし俺が王になったら働けよ」

その言葉に対して真っ先に立ち上がったのは椎名で、次に俺だった。俺は別に龍園がクラスの王になろうと不満はない。この1ヶ月クラスメイトを見たが、上に上がれる可能性を上げるなら龍園を王にするのが1番だ。

椎名と一緒に教室を出てドアを閉めようとする中、教室を見ると俺達のように席を立ったのは数人だけだった。

「比企谷君は争いに参加しないんですね」

「それよりも本を買う方が優先順位が高い」

「そうですね。それに龍園君がリーダーになるのは確実です。龍園君は他の人よりもリードしています」

椎名の言う通りだ。龍園は入学初日からSシステムについて疑いを持って坂上先生に質問したり、真面目に授業を受けたり、石崎やアルベルトを配下にして、終いには真つ先に自分が王になると表明した。

この時点で他の生徒よりも数歩どころか数十歩リードしているし、恐らく1週間もしないで龍園がクラスの王になるだろう。

「ところで比企谷君。今朝坂上先生がAクラスにならないと学校から進学や就職の恩恵を貰えないと言った時に特に表情を変えてませんでした。不満とかないんですか？」

よく見てたな。椎名の言うように俺は高い進学率や就職率に対してそこまで興味はない。恩恵を受けれたら良いとは思いますが、受けられないからってがっかりはしない。

「俺は元々外部と接触出来ない環境を理由に志望したからな。高い進学率と就職率は二の次だ。というかお前こそ高い進学率と就職率に興味はなさそうだったじゃねえか」

「そうですね。私もあればいいとは思いますが、絶対に欲しいとまでは思っていないです。争い事も好きではないのでAクラスに上がれなくても不満はありません」

まあ普段の生活態度からして椎名って闘争心が薄いからな。向上心がないわけではないと思うが、少なくともクラスメイトの中では少ない方であるのは間違いない。

「じゃあ龍園の指示にも従わないって事か？」

「もちろんクラスが団結しないといけない局面に遭遇したら協力はします。ですがそれ以外では積極的に動く事は考えてないですね。私としては……」

「私としては？」

俺が尋ねると椎名は笑顔を浮かべて……

「クラス間の争いをするよりも、比企谷君と一緒に本を読むのが一番楽しいですから」

とんでも爆弾を投下してきた。

この野郎……そ、そんな事を良い笑顔でハッキリと言うな。顔が熱くなって仕方ないんだが……！

「そ、そうかい……」

「比企谷君はどうですか？私と過ごして嫌じゃないですか？」

ハッキリと聞くな馬鹿！椎名の顔を見る限り含むところはないので純粋な気持ちで聞いているようだが、その純粋さが今の状況では憎らしい。

「ま、まあ嫌じゃないな」

俺は顔に溜まった熱に苦しみ、椎名から若干目を逸らしながらそう答える。

「良かったです。これからもよろしくお願いします」

当の椎名の声は弾んでいるが、椎名つてある意味龍園や坂柳よりも強いかもしれない。この天然っぷりは俺の心臓がもたないぞ。

しかし……

「ああ……よろしく」

誰よりも魅力的な笑顔を浮かべている椎名を見ると自然と拒否する選択肢が無くなっているのだった。

結局俺は恥ずかしい気持ちを抱きながら椎名と一緒にシヨツピングモールで本を買って充実した1日を過ごすのだった。

## 攻略法

「これでコイツを代入すれば……合ってるか？」

「……はい。正解ですよ。これで数学が赤点になる事はないでしょう」

「なら良かった……」

5月になってから1週間、俺は図書館で椎名に理系科目を教わっている。幾ら授業をちやんと聞いていても万が一の事もあるし用心してしっかりと勉強しておく。

加えて帰りのHRにて坂上先生からテスト範囲の変更を言われたからな。気をつけないといけない。

「それにしても赤点1つ取るだけで即座に退学とは厳しいですよね」

椎名はそう言っているがそれに関しちや同感だ。普通は補習だの追試だの救済措置があるからな。

「国が力を入れてる学校だからな。赤点を取る奴は恥晒しと考えてんだろ。しかし赤点回避する為の攻略法は全くわからんな」

以前龍園と話した点数やカンニングをする権利に対する売買については現実的ではない。カンニングをする権利については校則を破棄するのは無理であるため売買を認

められず、点数については1点につき5万ポイントと言われた。

もちろん1点が10000ポイントぐらいだったら退学者が出なくなるし、高いのは予想していたが1点につき5万は現実的でない。

「?比企谷君の立場なら赤点は回避出来るのでは?」

椎名は不思議そうに言ってくる。確かに俺はそこまで赤点について不安視はしていない。

「攻略法を教えたならポイントをやるって龍園に言われたんだよ」

昨日龍園はクラスの王となった。その際にクラスメイトの中には顔に傷がある奴もいたが、龍園に叩き潰されたのだろう。

しかしまだまだ反対している奴は多く、龍園は実績を出して黙らせるつもりでいる。俺に攻略法について話したのも実績を出せる可能性を少しでも高める腹だろう。

俺としてもポイントは貯めておきたいし、可能なら攻略法を見つけない。

「そうですか。坂上先生は赤点を回避出来る方法があると確信していると言っていましたね、これまでにヒントを与えていたかもしれないですね」

「まあこれまでもヒントつばい発言はたくさん聞いたからな」

プールの授業では泳ぐことが必ず役立つとか言っていたが、アレも夏に起こる何かに対するヒントだろう。

「ヒントって言っても、あのクソ難しい問題が含まれてた小テストくらいだろ？」

難問については一応調べて解けるようにはしたが、あの問題はテストに出ないだろう。出るなら坂上先生は赤点を回避出来る確信があるなんて言わないし。

「しかしあの小テストには何の意味があつたのでしょうか？あの問題は高校3年でやる問題です」

「だよな。成績表には影響はないって言ってたが、何に影響があるって話だ。大方毎年やってるんだろが、難問を解けた生徒をチェックしてるのか？」

もしくはクラスポイントに関係してんのか？例えば難問を解けた生徒がいたらクラスポイントが増えるみたいに。ポイントの増減に関する詳細は教えて貰えないからわからんが。

そう話すと椎名はなにかを思いついたような表情になる。

「どうした？」

「すみません。今比企谷君、大方毎年やってるんだろが……って言いましたよね？」

「言ったが？」

「もしかしたら同じ問題が出ていたかもしれないですよね」

「まあ大半の生徒が解けないし、同じか似たような問題の可能性はあるな」

「それなんですけどもしかしたら同じ問題であり、その場合過去問があれば解けますよね」

？」

過去問……ああ、そういうことか。

「確かに過去問があればあの問題は解けた。そんで多分、あの小テストは中間試験に関するヒントかもしれないな」

「はい。中間試験についても過去問があれば……もしかしたら毎年同じ問題かもしれないですね」

それなら坂上先生の言った赤点を回避出来るやり方があると確信しているって言葉も納得がいく。

あの言い方だと絶対に助かる確実な方法がある事を示していた。それなら馬鹿な石崎でも確実に赤点を回避出来るし可能性はある。

「そうと決まりや早速Dクラスの先輩に小テストと中間試験の過去問を売って貰うか」

「確かにDクラスの先輩なら売ってくれる可能性はありますね。ですが今は放課後ですよっ。」

「別に教室に行く必要はない。スーパーの無料コーナーに行く。あそこにはそれなりの生徒が来てるが、大半がDクラスの上級生だろう」

Cクラス以上の生徒は安定した量のポイントを貰ってるから自炊している割合は低いだろう。あそこを利用するのは節約家かポイントのない生徒だし。

「なるほど……確かにウチのクラスの生徒も自炊をしているのは私と比企谷君くらいですし、可能性は高いですね。勉強もキリがいいですから行きましようか」

「ああ」

言いながら俺達は勉強道具を片付けて、図書館を出る。そしてショッピングモールにあるスーパーに向かう。

「あ、それと椎名。上級生と交渉する時は俺達はDクラスの生徒と名乗るぞ」

「?何故ですか?」

「簡単な話だ。Cクラスの生徒と言ったらポイントを高く要求されるだろうからな。逆にポイントを支給されてないらDクラスの生徒と偽れば安くしてくれるかもしれない」

向こうもDクラスならポイントに飢えてるだろうし、安いポイントでも売ってくれる可能性があるからな。

「なるほど……中々悪いですね」

「節約家と言え」

言いながら俺はスーパーに向かう。そして無料コーナーに向かうと女生徒が無料コーナーにあるジャガイモを持っていた。見覚えがないし十中八九上級生だろう。

「失礼、もし間違えでなければ2年生か3年生ですか?」

「え……あ、うん。3年生だけど?」

「Dクラスの比企谷と椎名です。多分先輩もDクラスですよね？」

「……だとしたら何？」

不愉快そうな表情になるが、気にしない。そもそも俺は中学時代に罵倒や嘲笑を受けまくっていたから気にならない。

「お願いがあつてきました。2年前の1学期の中間試験と小テストの問題と解答用紙を売ってくれませんか？」

俺がそう言うのと先輩は目を見開いてから俺の手を引つ張り、スーパーの隅に連行する。

「ちよつと君、こんな場所であんな話をしないでくれる？」

まあ堂々と話す話じゃないな。これについては反省しよう。

「以後気をつけます。それで売ってくれませんか？」

「何で私に頼んだの？」

「Dクラスの生徒ならポイントに不足してると思ったからです。実際先輩は月の初めなのに無料コーナーにある食品を買ってますから、Dクラスの生徒と判断しました」

「……幾ら払えるの？」

そう言った時点で売ってくれるつもりのようなのだ。予定としては2万以内で済ませたい。

「1万でどうですか？」

「3万」

「3万は無理です。手持ちがありません」

「幾ら持つてるの？」

「2万ちよつとです」

まあ本当は12万ちよつとだけだな。

「じゃあ2万。これ以上は譲歩できない」

仕方ない。元々2万以下を目標としていたし、良しとするか。

「わかりました。では先輩の番号を教えてください」

言うなり先輩が携帯を操作して番号が表示された画面突き出してくる。それを確認した俺は番号を打ち込み、メッセージ欄に俺のアドレスを載せて先輩の携帯に送金する。

「送金しました。確認をお願いします」

「……うん。2万ポイント振り込まれてる。約束通り中間試験と小テストの問題をメッセージにある君のアドレスに送るね」

「今日の11時半になるまでに添付画像をお願いします。もしも送らなかった場合は学校に報告しますので」

「わかってるよ。そんなことになったら私も危ないからね」

「ではよろしく願います」

そう言って俺は椎名を連れてスーパーを後にする。

「それを龍園君に渡すのですか？」

「そのつもりだ。それで龍園から「俺がどうした？」って本人が来たか」

いきなり話しかけられたので振り向けば龍園かいた。しかも珍しく配下を連れずに。

「実はさつきだな……」

言いながら俺はさつきまでの出来事を話すと龍園は納得したように頷く。

「なるほど、過去問か。俺は学校側に干渉する方法を模索していたが、そっちの方が手っ取り早いしそれが正しい攻略法だろうな」

「多分な。とりあえず画像が来たらお前にメールで送るが、届いたら椎名に5万振り込め」

5万は惜しいが椎名のおかげで攻略法に辿り着いたのだから椎名が受け取るべきだ。

「待ってください。2人で考え、比企谷君が交渉したので比企谷君が4万で私が1万でお願いします」

「いやいや。お前が過去問が攻略法かもしれないって言ったんだからお前の手柄だ」

「うだうだ煩えな。互いに半分ずつくれてやるから俺の前で揉めんな」

龍園が呆れ顔を浮かべながらそう言ってくる。クラスの王がそう言った以上従うしかないな。

「わかりました」

「後龍園、中間試験と小テストの問題に2万かかった、俺に払え」

「ちやつかりしてやがる。2つの問題が俺の端末に送られたら、椎名に2万5千、比企谷には過去問の代金も合わせて4万5千。これで良いな？」

「ああ。しかし問題についてだが、直ぐにクラスに公表するのか？早過ぎると一部の馬鹿が勉強しなくなる可能性もあるぞ」

早く公表すれば平均点は上がるだろうが、一部の馬鹿の気が緩み、やる気が下がり今後の勉強に支障が出るかもしれない。

「だろうな。とりあえず馬鹿じゃない奴には早く渡して口止めをさせる。石崎を始めとした一部の馬鹿共についてはテスト3日前まで勉強させて、その時に渡す事にする」

ま、それが理想だな。問題があるとすれば馬鹿じゃない奴から情報が漏れる可能性があるあるくらいだが、そこについては龍園が何とかするだろう。

「ともあれ良くやった。今後実績を上げたら報酬をくれてやるから、精々俺に尽くせ」  
龍園はそう言つて俺と椎名の肩を叩いてから去つて行く。同時に椎名が話しかけてくる。

「とりあえず問題が解決出来て良かったですね」

「ああ。少なくとも赤点は出ないだろ……つと、腹が減ったしそろそろ帰ろうぜ」  
俺がそう言うと……

「あ、でしたら折角ですし、一緒にご飯を作りませんか？」  
………はい？

## 料理

「……どうぞ、入ってください」

「はい。お邪魔します」

自分の部屋のドアを開けると椎名が部屋の中に入る。しかしコイツ、一応男子の部屋にもかかわらず一切躊躇いが無いな。

俺はため息を吐きながら部屋に入り鍵をかけて靴を脱ぐ。夕食と一緒に作ろうと誘われた俺だが、最初は断わろうとした。

しかしその後には理系科目を教えると言われ、教わっている身としては断れなかったのだ。

「意外と物は置いてないですね」

「趣味が読書以外ないからな」

「チェスボードと本がありますが、それは？」

「Aクラスの坂柳に勧められて、やり始めた」

以前椎名が茶道部の方に顔を出している時に図書館で坂柳と会って、チェスをしてボコボコにされて、坂柳にこれから強くなり私を楽しませろと言われてチェスボードと本

をプレゼントされた。

最初は面倒だと思ったが、わざわざプレゼントした物を無下にするのもアレだからと時間の合間に色々勉強している。

「ま、今は料理だ。折角和牛ステーキ肉を奮発したし、早く食いたい」

無料コーナーには僅かな挽肉や鶏そぼろ肉しかなかったからな。今日は龍園からポイントが支給される事もあり、つい買ってしまった

そ、ここで携帯が鳴るので取り出すと、スーパーで交渉した先輩から小テストと中間試験の問題用紙と回答用紙の写真が送られてきた。

「椎名。テストのコピーが来たから俺は精査する。先に飯を作っていてくれ」

「わかりました」

椎名から了承を得たので、俺は机の上の中から自分の小テストを取り出し、1問1問確認すると……

（全問一字一句同じか……となるとやっぱりこれが正しい攻略法だな）

俺はその写真を保存してそのまま龍園の携帯にメールで送る。送信完了が告げたのを確認すると携帯をポケットにしまい、キッチンに向かう。そこでは椎名が米を洗っているので俺は野菜を取り出して細かく切る。

「どうでしたか？」

「二字一句同じだった。間違はなく正しい攻略法だな」

言いながらも野菜を切り終えてステーキ肉をフライパンに乗せて焼き始める。ステーキなんて入学して以来一度も食ってないから楽しみだ。ポイントがすごく溜まったら、高級レストランで美味しいステーキを食いたいものだ。

「比企谷君、手慣れてますね」

「中学の頃からやってきたからな」

元々妹がやっていたが、修学旅行以降仲違いして俺の家事をやらなくなり、必然的に自分がやる事になったからな。おかげで洗濯や食事などの家事は問題なくこなせる。

そういうやアイツ、俺の事をごみいちちゃんとか言ってみ下していた癖に、総武中の受験に失敗してからは覇気が無くなったな。

んで俺が日本トップクラスのこの学校に合格したら両親が今までの態度とは打って変わり俺をメチャクチャ褒めるようになり、それ以降アイツは学校にも行かずに引き籠もるようになったが、今も引き籠もってるのか？

ま、どうでもいいな。俺がどう考えようが3年は関わる事はないし、その時にアイツが引き籠もつてようが俺には関係ない。

俺は意識を切り替えて肉を焼く。肉の良い匂いが部屋を充満する。今まで節約してからか食欲を刺激する。

今回は奮発してステーキ肉を買ったが、明日からはまた節約の日々だ。ポイントに余裕があるとはいえ、一度贅沢を覚えてしまうと浪費癖がついてしまい地獄を見るだろう。

現にDクラスの生徒が食堂や自販機でブックサ文句を言いながら無料の山菜定食やミネラルウォーターを買っているのをよく見かける。その事から察するにDクラスの生徒の大半はポイントを碌に残してないのは明白だ。

俺からしたら馬鹿極まりない。Sシステムについて見抜けなくとも、普通は予想外のことが起こっても良いように2、3万は取っておくはずだ。

加えて100回近い遅刻欠席に400回近くの私語や携帯弄り……他人を見下す事は好きじゃないが、Dクラスについては不良品呼ばわりされても否定するのは難しい。

ともあれこの学校には謎が多く、今後何が起こるかはわからないので、今月はもうステーキなどの高い物は食わず無料コーナーにある食品で頑張っていこう。高い食いはポイントが50万を超えてからだ。

と、ここで香ばしい匂いがしたので、バターを使って旨味を高める。隣では椎名が味噌汁を作っているが、女子が味噌汁を作るって家庭力があつて良いなあ。これでエプロンを着けてくれたならパーフェクトとしか言いようがない。

そんなアホな事を考えながらも調理しているとポケットにある携帯が鳴り出す。見

れば隣にいる椎名のポケットからも音が聴こえてくる。

このタイミングと2人同時に鳴っている事からして十中八九龍園からのポイント送金だろう。しかし今は調理中だから後にしよう。

「もう直ぐ焼ける。そつちは？」

「まだかかりそうですね。さっきのメールはポイントですよね？」

「同時に来たからな。しかし中間試験ってクラスポイントが貰えるイベントなのか？」

「……難しいですね。定期考査は学校において重要なのは否定しませんが、この学校は異質ですから」

そうなんだよな。この学校はこれまで培った常識が通じない事が多いんだよな。監視カメラを使ってリアルタイムで生徒を査定したり、赤点を取ったら即退学だったり、普通の学校じゃ有り得ない。

すると……

「ただ……大丈夫とは思いますが比企谷君は退学にならないでくださいね。大切なお友達が居なくなるのは寂しいですから」

つ……！だからコイツは恥ずかしい事を平然と言うなよ……こつちとしては恥ずかしくて仕方ない。

……まあ椎名の言葉には含むものではなく、優しさしかないから嫌じゃないんだけどさ。今まで罵倒ばかり受けていた俺からしたら余りにも新鮮過ぎて慣れてないだけだ。

「……当然だ。俺だって退学になるのは御免だ」

そう言ってから俺は意識を椎名からキツチンに向ける。正直言ってこれ以上椎名に意識を向けたらマジで頭がおかしくなりそうだからな。

その後俺は調理に集中した為、調理中は椎名に話しかけられなかったが、完成して一緒に食べる際は向かい合って話しかけられて凄く恥ずかしい思いをしたのと言うまでもない。

3時間後……

「では私はこれで失礼します」

「ああ。付き合ってくれてありがとな」

「はい。それではまた明日」

夕飯を食べ、俺に理系科目の勉強を見てくれた椎名は夜10時になった所で俺に挨拶をして部屋から出て行く。椎名が見えなくなるまで見送った俺は大きく伸びをしてドアを閉める。

そして息を吐いてベッドに倒れこむ。頭に浮かぶのは椎名の事だけだ。入学してから椎名は持ち前の天然っぷりと本好きを思い切り発揮して俺にガンガン迫ってくるようになった。当初、俺は他人と関わるのを苦手により遠回しに拒否してもだ。

それが続いていく内にいつのまにか椎名と一緒に過ごす事が当然のようになってきている。

——ークラス間の争いをするよりも、比企谷君と一緒に本を読むのが一番楽しいです  
から——

——ただ……大丈夫とは思いますが比企谷君は退学にならないでくださいね。大切なお友達が居なくなるのは寂しいですから——

っ！ダメだ。思い出すだけで顔が熱くなるし夜風を浴びに行こう。

俺は首を横に振ってベッドから降りて、そのまま部屋を出てエレベーターに乗って一階に降りる。

そして自販機に向かおうとすると、寮の隅にて一人の男が裏手の方をこっそり眺めていた。何だアイツは？ ストーカー？ それとも男女の中を覗き見する出歯亀か？

疑問を抱いていると男は物凄いスピードで裏手に入っていく。何事かと思つて、さっきまで男がいた場所から路地裏を除くと……

(おいおいマジかよ?)

そこでは生徒会長の堀北学がさつき覗き見していた男と戦っていた。

(とりあえず記録しとくか。場合によっては交渉カードになるし)

俺は気配を殺し、携帯を録画モードにして撮影する中、会長は裏拳を放つと男は半身を仰け反り回避する。が、会長は直ぐに急所を狙った蹴りを放つ。素人の俺でもアレはヤバイと思う。

凄まじい勢いの蹴りを男は手ではたき落とす。すると会長は手を伸ばして男の服を

掴もうとするが、男もそれも手ではねのけた。

どっちも怪物だ。俺が戦ったら3秒で気絶する自信がある。

「いい動きだな。立て続けに避けられるとは思わなかった。何か習っていたのか？」

「ピアノと書道なら。小学校の時、全国音楽コンクールで優勝したこともあるぞ」

絶対嘘だ。もしそうなら俺も今から習うわ。

「お前もDクラスか？中々ユニークな男だな。鈴音、お前に友達がいるとは驚いたぞ」

会長がそう言つて男から目を逸らした先には女生徒がいた。彼女は怯えているように見えるが何があつたんだ？

「彼は……友達なんかじゃありません。ただのクラスメイトです」

彼女がそう返すと……

「相変わらず、孤高と孤独を履き違えてるようだな。ところで……そこで動画を撮っているのもお前の知り合いか？」

ば、  
バレてる……

## 警戒

「相変わらず、孤高と孤独を履き違えてるようだな。ところで……そこで動画を撮っているのもお前の知り合いか？」

「ば、バレてる……」

俺は咄嗟に物陰に隠れようと考えたが、それも一瞬で却下した。堀北会長の運動能力なら一瞬で捕まるだろうし。

そう判断した俺は無抵抗を示すべく両手を上げて3人の前に現れる。

「1年Cクラス比企谷八幡か。動画を撮ったのは俺からポイントを巻き上げて、今日の取引で使ったポイントを補填する為か？」

すると会長が目を細めてそんな事を言ってくるが……

「……おかしいですね。何で会長がそれを知ってるんですか？」

俺は3年Dクラスの先輩に取引を持ちかけた筈だ。3年Aクラスの会長が知っているとは完全に予想外だ。もしかして生徒会長は生徒間のポイントのやり取りを把握出来る権限を持っているのか？

「取引現場の近くにいたからな。ああいう事は隅でやった方がいい」

「どうやら会長もスーパーで買い物をしていて偶然俺の話聞いていたようだ。女先輩も言ったように今後は気を付けて取引しよう。」

「あの先輩にも言われましたが以後気をつけます」

「それで？ 幾らポイントを要求するつもりだ？」

「いや。会長を敵に回すのはヤバそうなんで遠慮します。携帯渡すんで消して構いませんよ」

「言いながら携帯を投げ渡す。さっきの攻防を見て交渉カードにする馬鹿はいないだろう。」

すると会長は物凄いスピードで携帯を操作して俺に返してくる。

「ただ一つ聞きたいんですけど、答えてくれませんか？」

「何だ？」

「簡単な話です。次の中間試験においてクラスポイントは最大でどのくらい貰えるんですか？」

「そこを知りたい。数値次第では過去問を公開するタイミングをずらす必要性があるからな。」

「なるほどな。見つけた攻略法を公開するタイミングを見計らうつもりか。答えを言う」と最大で100ポイントだ。基準についてはクラスごとの平均点や高順位の生徒の数

など様々だ」

「そうですがご助言ありがとうございます」

「この程度助言の内に入らない。しかしCクラスには龍園以外にも面白い奴がいるとはな」

ええ……アイツと同列扱いって凄いい嫌なんだけど。それじゃ俺が問題児みたいじゃねえか。

「上のクラスに上がりたかったら死に物狂いで足掻け。それしか方法はない」

会長はそう言って去って行く。同時に汗がドツと出てくる。夜風に当たるつもりがとんでもない事になっちゃったな。

ため息を吐きながら自販機に向かおうとする時だった。

「待って」

後ろから声をかけられたので振り向くと女生徒が俺を見ていた。

「?何か用か?」

「さっき攻略法とか言っていたけど、赤点を絶対に回避出来る方法があるの?」

なるほど。俺から情報を得たいようだが、馬鹿正直過ぎる。これでは龍園や坂柳を出し抜くのは無理だろう。

「ある……が、それを教えるつもりはない。他クラスにポイントを稼ぐ方法を教えるほ

「どお人好しじゃない」

それにCクラスの大將は退学した場合に生まれるであろうペナルティを知りたがっているから教えない。

つか龍園の性格的にSシステムについて更なる理解を得たら他クラスの生徒を嵌めて、停学や退学によるペナルティを知ろうとするだろう。

「ま、無理に全員を赤点回避させるより、小テストで赤点を取るような馬鹿を切り捨てるのも悪くないんじゃないか？」

「というかそうしてくれ。こちらとしてもデータが手に入るし。」

「……それも選択肢の一つとして考えてるわ。多分クラスポイントが減る可能性はあるけど私達に失うポイントはないから」

クラスポイントに関しては0以下にはならないし、悪くない戦術だ。

まあ見えないマイナスはあるかもしれないが。例えば「退学者を出したクラスがAクラスに上がる為にはクラスポイント以外にも条件が追加される」みたいな感じの見えないマイナス要素があってもおかしくない。この学校は普通の学校じゃないし。

「それも悪くないかもな。あ、それと失うポイントがないって事はお前Dクラスだろ？ 由比ヶ浜結衣って奴がいると思うが、アイツはどうなんだ？ 同中だから気になってな」

退学になり得るか気になっている。

「由比ヶ浜さん？彼女の小テストで5点とDクラスの中でも退学者筆頭候補よ」

「おいおい、あんな簡単な簡単なテストで5点って……予想より遥かに馬鹿だな。この学校に合格したから浮かれて知識を失ったのか？」

「情報ありがとよ。ま、お前らがどんな行動を取るかは知らないが、俺達に迫ってきたら相手をする」

最後にそう言って俺は2人に背を向け、自販機で無料ミネラルウォーターを5本買って寮の中に戻る。

そしてエレベーターに乗って自分の部屋に戻り、ミネラルウォーターを冷蔵庫に入れてベッドに寝転がる。

（しかし中間試験で最大で100クラスポイント貰えるのは中々デカイな）

もちろん100ポイント貰えるとは思えないが、70〜80貰えたら十分だ。それだけで1ヶ月に買える本の数も増えるし。

そう判断した俺は龍園に先程の一件についてメールをして目を閉じる。堀北会長に見つかったからか精神的に疲れ果てたし。

（それにしても会長とやり合っていた男、名前は知れなかったが警戒が必要だな）

奴は会長と話してる時も淡々としていたし相当な修羅場をくぐっている可能性が高い。多分Dクラスだと思うが油断はしない方がいいだろう。

俺はDクラスに馬鹿が多いとは思ってはいるが、馬鹿しかいないとは思ってない。この学校は成績や運動能力のみではなく、素行などもクラス分けをする際の判断材料になっていると思う。実際龍園がCクラスにいるのは些か疑問だ。アイツならAでも通用すると思うし。

まあそれを考えても仕方ないし、寝よう。

今はどうこう出来ないし、テストに備えて勉強するだけだ。可能ならまた明日椎名に勉強を教わって……

……ークラス間の争いをするよりも、比企谷君と一緒に本を読むのが一番楽しいですから……

……ただ……大丈夫とは思いますが比企谷君は退学にならないでくださいね。大切なお友達が居なくなるのは寂しいですから……

しまった……余計な事を思い出して眠れる気がしない……

翌日……

「ふああ……眠い」

俺は欠伸をしながら部屋を出てエレベーターのボタンを押す。昨日は結局椎名の爆弾発言を思い出してしまい、全く眠れなかった。あの天然核爆弾はある意味学年最強だろう。

するとエレベーターのドアが開いたので中に入ろうとすると……

「おや、おはようございます比企谷君」

天敵の一人である坂柳が神室を連れながら挨拶をしてきた。よりによって朝からコイツと遭遇するとは……

「よう神室。おはよ……って杖で叩くな！」

面倒だからスルーしようとしたら杖で脛を叩かれる。このロリガキ、幾ら痛くないからって叩くなよ。

「挨拶をされたら挨拶を返すのですよ？」

「悪かったな。おはよう」

「はい。おはようございます。早速ですが中間試験の勉強は順調ですか？」  
「ぼちぼちだ」

「なら良かったです。私としてもお気に入りのおもちゃ……お友達が退学になるのは嫌ですから」

「もうここまで来たらハッキリとおもちやつて言つて良いからな？つかおもちゃで遊ぶつて時点で幼女だな」

「私は幼女ではありませんっ」

すると坂柳は珍しくムキになつて杖でツンツン足を突いてくる。その仕草が小さくまた可愛らしい」

「小さいと言わないでください、馬鹿……」

どうやら口にしていたようで、坂柳はそっぽを向いて私怒ってますオーラをだす。少しからかい過ぎたようだな。

「悪かった、よく考えたら身体的特徴でからかうのは駄目だな」

俺も腐った目によつて色々な奴にdisられてきたが、そいつらと同じ事をしたのだ。今後は自省しよう。

「あ、いえ。こちらもからかい過ぎました」

俺が謝ると坂柳も拍子抜けしたようにそう返してくる。同時にエレベーターが開く

ので外に出ると……

「ヒッキー何してるし?!女の子を脅して連れ歩くなんてマジキモい!」

隣のエレベーターから退学者筆頭候補の由比ヶ浜が出てきて鉢合わせしてしまった。  
今日は厄日か?

## 騒動

「はあ……」

俺はため息を吐くことしか出来なかった。朝からコイツと出会うなんてマジで厄日かもしれない。

「何ため息吐いてるし！ヒツキーマジキモい！」

すると由比ヶ浜がそんな事を言ってくるがため息を吐くだけでキモい呼ばわりされるとは思わなかったわ。

「……クラスメイト？」

すると神室が質問をしてくる。ただし明らかに嫌そうな表情で、坂柳はゴミを見る目で由比ヶ浜を見ていた。

「同じ中学だった。んでDクラス」

「なるほど。品がない事から予想はしていましたが、やはりDクラスですか」  
「煩いし！子供は黙ってるし！」

あ、坂柳の額に青筋が浮かんだ。まあ今のは怒るだろうな。

「比企谷君。友人は選んだ方がいいですよ？」

「友達じゃねえの。不本意ながら生まれた縁で知り合つたんだよ。それに多分コイツは次の中間で退学を食らうだろうし、直ぐに縁が切れるわ」

「はあ?!赤点なんか取らないし!」

「いやいや。小テストで5点しか取れない奴が言つても説得力ないからな?」

「え?あのテストで5点つてまずくない?」

俺の返答に神室も由比ヶ浜に対してバカを見る目を向ける。坂柳に至つては冷笑を浮かべている。

「な、なんでヒツキーが知つてんだし?!キモい!マジキモい!キモ過ぎだから!」

「あん?Dクラスの女から聞いた」

昨日会長の近くにいた女にな。つか昨日のアレはマジで何だつたんだか。

「それにしても彼女、本当に品がないですね。比企谷君、彼女と何が「煩いし!人の事を悪く言つちやいけないって事もわかんないの?!子供は口出しするなし!」……決めました。もし彼女が中間試験を突破したら、学校のルールに代わつて私が潰します」

坂柳の額に青筋が更に浮かび、神室は同情に満ちた眼差しを俺に向けるがそんな目で見えるな。

そこまで考えているとエレベーターの音が鳴り、ドアが開く。するとそこからは雪ノ下が出てくる。畜生、よりによって雪ノ下まで来やがったよ。

「あーゆきのん！聞いてよあの子供があたしに酷い事を言うんだし！」

内心ため息を吐いていると由比ヶ浜は戯言を吐いて、それを聞いた雪ノ下はこちらを睨んでくるが、即座に坂柳を見る。

「坂柳さんね？」

「貴女は……どちら様ですか？比企谷君はご存知ですか？」

「雪ノ下雪乃。由比ヶ浜と同様に同じ中学出身」

「雪ノ下……ああ。貴女が陽乃さんの妹ですか」

「？お前陽乃さんを知ってるの？」

「ええ。何度かパーティーであつた事がありますが中々油断出来ない人です」

「だよー。あの人と相對した人間は一瞬でも油断した瞬間に負けるだろう。」

「それで？陽乃さんの妹さんが私に何の用ですか？」

「……ふん。入学早々女王様気取りとは良い身分ね」

「雪ノ下はそう言う。対する坂柳は小さく笑う。」

「そんなつもりはありませんよ。その口振りからしてAクラスを狙っているのですか？」

「当然よ。私がいるべき場所はDクラスなんかじゃないわ。近い未来に貴女をAクラスから引き摺り下ろす」

「そうですか。陽乃さんの妹ですから期待してますよ」

「……姉さんの妹として見るのをやめてくれないかしら？不愉快だわ」

雪ノ下は苛立たしげにそう言うってくる。そういやコイツ、陽乃さんと比べられるのが大嫌いだったな。

「それは無理ですね。私は貴女と会ったのは今日が初めてですから」

まあそうだな。情報が少ない状態だと持つてる情報から判断するしかないし。

「はあ?!ゆきのんが止めろって言ったんだから止めるし!人の嫌がる事はしちやいけな  
いって知らないの?!そんな事もわかんないなんて小学生以下じゃん!」

すると由比ヶ浜がそう言うってくる。同時に坂柳の額に更に青筋が浮かぶ。

「あんたも比企谷の事をキモい呼ばわりしてんじゃん。人の嫌がることをしといて文句を言うんだ?」

すると神室が呆れた表情を浮かべながらそう言うが、あの馬鹿には効かないと思うぞ。

「ヒツキーがキモいのは当たり前のことだから良いんだし!」

ほらな。予想はしていたから特に腹が立たないけど、自分の発言がブーメランになっていることに気付いてない事に呆れてしまう。

「……もう疲れました。2人とも行きましようか」

坂柳は呆れたような表情を浮かべてそんな提案をしてくる。これには普段坂柳を嫌っている神室も反対しないでいる。

「待つし！ゆきのんに謝るし！」

言いながら由比ヶ浜は坂柳に詰め寄ろうとする。同時に坂柳が怪我をする可能性を危惧した俺は……

「神室、走る準備をしろ。坂柳、済まん！」

「えっ……きゃあっ！」

坂柳に謝ってから即座に抱き抱えて走り出す。その際に坂柳は可愛らしい声を出す。が、それを無視して神室と走り出す。

「何やってるしヒツキー！キモい！マジでキモいから！というか待つし！その子供はゆきのんに謝らないといけないし！」

背後からそんな声が聞こえながらも坂柳が怪我をしないように気をつけながら走り、やがて振り切る。由比ヶ浜の運動神経が雑魚で良かったな。

「つと、悪かったな坂柳」

言いながら俺は坂柳をゆつくりと下ろす。いくら馬鹿どもから逃げる為とはいえ、いきなりお姫様抱っこをしたのはやり過ぎたかもしれない。

「……いえ。彼女とは関わりたくなかったので、こちらとしては気にしてないです」

坂柳は珍しく恥ずかしそうにそっぽを向くが普段とのギャップがあつてドキドキする。

「怪我はないか？一応お前に気を遣つて走つたが、気分は悪くないか？」

「大丈夫ですよ。しかし比企谷君、彼女とは何があつたんですか？」

「それは私も気になる。あそこまでキモいキモい言ってくるなんて相当凄い喧嘩をしたの？」

坂柳と神室がそんな質問をしてくる。

「詳しい事は言いたくないがとある一件で仲違いしたんだよ。ただ、仲違いする前からアイツはキモいキモい言つてたからなあ」

「1日に最低でも5回は言われていたからな。俺からしたらアイツのキモい呼ばわりは口癖だと思つている。」

「そうですね……しかし彼女、本当に高校生なんですか？」

「俺に言われても知らん」

少なくとも精神年齢は幼稚園児だろうな。

「ところで坂柳、彼女については潰すの？」

「当然です。あそこまで苛々したのは初めてですから」

坂柳は口元は笑つてはいるが目は絶対零度だった。まあ坂柳の立場からしたらブチ

切れても仕方ないか。

「比企谷君も止めませんね？」

「止めねーよ。既にアイツらとは決別してる」

アイツらが退学になるうが俺からしたらどうでも良い話だ。それより我が身が大事だからな。

「なら良かったです。それと……さつきはありがとうございます」

坂柳はそう言うのと珍しく含みのない笑顔を浮かべてそう言ってくる。普段は腹黒い笑みを浮かべている坂柳だが、そんな可愛らしい笑みを浮かべられるなら常日頃から浮かべて欲しい。

俺は純粋にそう思うことしか出来なかった。

15分後……

「あ、比企谷君。おはようございます」

「おはよう椎名」

Cクラスに着いた俺は椎名に挨拶をして自分の席に座る。そして授業の準備をしていると、扉が開き龍園が入ってきてクラスの空気が若干重くなる。

しかし龍園は全く気にする素振りを見せずに俺に話しかけてくる。

「よう比企谷。目立つの嫌いな癖に随分とやらかしたな」

龍園はニヤニヤ笑っていてこっちの神経を逆なでしてくるが……

「何の話だ？」

正直言つて心当たりがない。もしかして由比ヶ浜との一件……いや、あの時寮のエントランスには人が殆ど居なかったから違うだろう。

すると龍園は携帯を突き出してきて……

「これだよ、これ。Aクラスリーダーの坂柳をお姫様抱っこするなんて目立つに決まってるんだろ」

真っ赤になっている坂柳をお姫様抱っこしている俺の写真を見せてきた。

その写真は瞬く間に学校中に広がったのは言うまでもなかった。

### Aクラス

「おはようございます」

坂柳有栖が挨拶をしながら教室に入る。普段なら坂柳派の人間は挨拶をして、葛城派の人間は睨みつけるが……

『ぎやあああああつ！』

今回に限っては坂柳派葛城派関係なく女子が黄色い声を出していて、これには有栖も驚いた。

「どうしたのですか？私がかしましたか？」

有栖は近くの女子に話しかける。

「えっと……坂柳さんってCクラスの比企谷君と付き合ってるの？」

言いながら携帯を突き出してくる。そこには……

「なっ……」

八幡にお姫様抱っこされている有栖の写真が表示されていた。しかも真つ赤になつて。

（まさか撮られていたとは……予想以上に恥ずかしいですね。この様子だと相当広まっているようなので火消しは無理でしょう）

有栖は黄色い声に辟易しながらもそう考え始めるのだった。その間も女子からはキラした目で見られ続けながら。

## 図書館

ヒソヒソ……

「目立ってますね」

「言うな。はあ……」

昼休みに図書館に向かってしていると周りからヒソヒソと噂される。椎名の言葉に俺はため息を吐いてしまう。

こうなった原因はわかっている。1週間前に坂柳をお姫様抱っこして運んだ俺だが、その噂は全く消えないままの状態。椎名と歩いているからだろう。

俺は以前、椎名に迷惑をかけたくないから距離を置こうと提案したら椎名は「私は噂なんて気にしないです」と拒否した。椎名がそう言ってくれたのは本当に嬉しいが余計に目立ってしまったているのは事実。

何度目かわからないため息を吐きながら図書館に入る。昼休みと放課後に椎名と図書館に向かうのは日課となっていて、放課後はテスト勉強をして昼休みには読書をしている。

図書館では昼休みにも勉強している奴も結構いるが、俺からしたら休み時間にまで勉

強はしたくない。つか椎名の教えに加えて過去問もあるから全く問題ない。

そう思いながら席に座ると近くではクラスメイトの山脇と佐藤が座って勉強をしている。龍園はまだ過去問を公表してないからか集中して勉強をしているのがわかる。

俺はそんな光景から目を逸らして手に持つ本を見て読み始める。こうやって静かな場所でも本を読むのは最高の時間だ。

暫くの間、本を読んでいると……

「何だと?!」

余りにデカイ声が聞こえてきたので顔を本から上げると、龍園がおもちゃにしようとしているDクラスの赤髪がクラスメイトの山脇と向かい合っていた。見れば会長とやりあっていた男もいるが、何をやってんだ?

「本当のことを言っただけで怒んなよ。もし校内で暴力行為なんて起こしたら、どれだけポイント査定に響くだろうな。いや、お前らには失くすポイントが無いんだっけ? って事は退学になるのかもなあ?」

「上等だ、かかって来いよ!」

山脇の言葉に赤髪はキレルが、アイツはいつの時代のヤンキーだよ?

呆れていると向かい側に座る椎名が立ち上がって騒動の方に向かう。多分注意をするんだろうが、椎名の場合だとクラスポイント云々ではなく静かに本を読みたいからだ

ろうな。

とはいえ無視するわけにはいかないので俺も立ち上がる。あの赤髪の短気っぷりから椎名が危険な目に遭う可能性もあるからな。

「すみませんが、図書館で騒ぐのは迷惑ですから静かにしてください」

「んだテメエは？部外者が口出しするんじゃないよ」

赤髪は椎名に凄むが椎名は気にしない。

「そう言うのでしたら外で騒いでください。図書館では静かにするのがルールですよ」

「つか山脇、ここで騒いでクラスポイントが下がる要因となったら龍園に怒られるぞ？」

俺の言葉に山脇が顔を青ざめる。Cクラスの生徒の大半からは龍園の存在は恐怖の対象だから仕方ないだろう。しかし騒動を収めるにはこれが一番だろう。

「わ、悪い比企谷。そっちの不良品どもがギャーギャー煩くてよ」

「んだとこらあつー！」

赤髪がキレる。山脇の奴、咄嗟だから知らんが更に挑発してんじゃないやねえよ。

「いい加減にしなさい。ここで騒ぎを起したらどうなるかわからないわ。それからCクラスって時点で自慢できるようなクラスではないわ」

すると以前話した鈴音(苗字は知らない)って女子が赤髪を止めて、山脇を睨む。まあ確かにCクラスは自慢できないだろうな。

「CとAクラスなんて誤差みたいなもんだ。お前らDだけは別次元だけどなあ」  
いやいや。Aクラスのクラスポイントは940でCクラスは490、450ある差を誤差呼びわりは無理あるだろ。つかそれならCクラスとDクラスの差も誤差になるぞ。  
「えつと、山脇くん。450あるAクラスとの差を誤差なら490あるDクラスとの差も誤差じゃないですか？」

椎名の言葉に山脇が凍りつく。流石椎名、この天然っぷりに勝てる奴はいないだろう。

「はっ！何だよ偉そうな事言っついてテメエらも大したことないじゃねえか！」

赤髪は俺達を笑うが0ポイントのコイツが偉そうに言えることじゃないだろうに。コイツの知能定数は由比ヶ浜レベルだな。

赤髪の言葉に山脇はキれる。

「1ポイントもない奴らが偉そうに言える立場じゃねえだろうが。そんな事を言つてられるのも次の中間でせいつらの中から赤点保有者が出て退学するまでだぜ」

「残念だけど、彼らの中から退学者は出ないわ」

「由比ヶ浜については？」

「……彼女は雪ノ下さんの管轄だから知らないわ」

俺がそう尋ねると鈴音はそっぽを向く。彼女からしても由比ヶ浜は馬鹿のようだ。

「そもそもだ。俺たちは赤点を取らないために勉強してるんじゃないやなくて、より良い点数を取るために勉強してんだよ。お前らと一緒にするな。大体、お前らフランシス・ベークンだ、とか言ってるが、正気か？」

あ？フランシス・ベークンだと？

「比企谷君。それってテスト範囲外でしたよね？」

「俺の記憶が正しければな」

元々テスト範囲だったが、テスト範囲が変わってからは違ったはずだ。

「はっ！テスト範囲すら知らないのかよ。やっぱ不良品だな」

「いい加減にしろよコラ」

赤髪は山脇の胸倉を掴み上げる。おいおい、椎名に注意されたのに殴るのかよ？

「お、おいおい。暴力振るう気か？マイナス食らうぞ？」

「減るポイントなんて持ってねーんだよ！」

赤髪はそう言っ腕を引く。もういいや、ここで山脇を殴らせた方が良くないな。

しかし……

「はい、ストップストップ！もし、どうしても暴力沙汰を起こしたいなら、外でやってもらえる？」

以前も騒動を止めた一之瀬が割って入る。正論で注意されるのは二度目だからか赤

髪も舌打ちをしながら手を放す。そんな赤髪を見た一之瀬は今度は山脇に向かつて話し出す。

「君たちも、挑発が過ぎるんじゃないかな？これ以上続けるなら、学校側にこのことを報告しなきゃいけないけど、それでもいいのかな？」

「引いてください山脇君。これ以上騒ぐと龍園君の耳にも入りますよ」

「わ、わかったよ」

一之瀬と椎名の言葉に山脇も挑発をやめて佐藤と一緒に片付けに入り、そのまま図書館から出て行く。全くコイツらはDクラスを見下すのは構わないが、見下すなら俺がない場所でやれや。

「君達もここで勉強を続けるなら大人しくやりなよ？」

「俺と椎名は騒いでないがな」

図書館で騒ぐ連中と同じ扱いをされるとは納得出来ん。

「そう。まあ何にせよテストが近いんだし、問題を起こさないようにね」

そう言つて一之瀬は去つて行く。確かCクラスの連中はBクラスにちよつかいをかけていたんだっけか？だとしたら一之瀬の言つてる事も納得がいく。龍園の奴、どんだけ暴れたんだ？

「やれやれ……椎名。読書の続きと行こうぜ」

「そうですね」

「あ！ちよつと待って！」

するとDクラスの生徒が集まる席にいた元気そうな女子が話しかける。

「何か用か？」

「えつと……さつき言つてたテスト範囲外について聞いて良いかな？」

「フランスス・パソコンについてか？アレは普通にテスト範囲外だろうが」

「ちよつと待って。大航海時代はテスト範囲じゃないの？」

「この女は何を言ってるんだ？」

「んなわけないだろ。大航海時代はテスト範囲外になつたつて発表されたじゃねえか。

だよな椎名」

「そうですね。全科目テスト範囲が変わつて、クラスから不満が出ていましたし」

「そんな話聞いてねえぞ！」

椎名の言葉に赤髪は叫ぶが、図書館で騒ぐんじゃねーよ。つかテスト範囲が変わつて

話を聞いてないだど？

「？担任の先生から聞いてないのかよ？」

「聞いてないわ。変わった場所を教えてくださいませんかしら？」

「良いですよ」

鈴音はそう言ってテスト範囲に書かれたプリントを見せてみると、椎名は特に思う事なく、ボールペンでプリントに書き込みをする。

「これで合つてると思いますよ」

「マジかよ?!全然やってない場所じゃん!」

男子の1人が騒ぐが、それはコイツらが勉強してない場所って事だろう。テスト範囲においてまだやってない箇所もあるし。

何故Dクラス担任がテスト範囲が変わったことを教えなかったのかは知らないが、このままだと本当に退学者が出るだろう。

「ま、あと1週間あるし頑張れ」

言いながら席に戻ろうとすると制服を掴まれる。

「待って。前に言っていた中間試験の攻略法を教えてくださいませんかしら?」

「はあ?そんなのがあるのかよ?!」

「本人とにいさ……生徒会長が話してるのを聞いたわ」

「悪いが前も言ったように断らせて貰う。クラスポイントがかかった重要な試験で他クラスに情報を「ぐだぐだ言っていないで教えやがれ!」ぐっ……!」

「比企谷君!」

すると赤髪が俺の胸倉を掴み上げて本棚にぶつけてくる。コイツただけ短気なん

だよ？つか苦しい。

「須藤君、良い加減にしなさい。向こうが訴えるなら停学か退学にされるかもしれないわ」

すると鈴音が須藤とやらの腕を掴んで俺を解放してくれる。

「けどよ！コイツが教えないのが悪いんじゃないか」

「どこがだよ？他クラスなら普通だろうが。」

「Cクラスの彼の立場からしたら悪くないわ……私が頼んだ事で迷惑をかけたわね」

「お前は悪くないから気にすんな。ただ鈴音、そいつの短気っぷりは早めに改善しないとDクラスの毒になるぞ」

「これ比喻表現抜きでそう思う。連帯責任になるこの学校ではクラスに1人問題児がいるだけで、大きく足を引っ張るし。」

「ああ?!」

「忠告は受け取っておくわ。それと名前前で呼ばないで」

「いや、俺お前の苗字知らないし。あの時にはお前の名前しか聞いてなかった」

「堀北鈴音よ」

「そうか。なら堀北よ。今回は学校には言わないが、次からは学校に報告させて貰うからな」

「感謝するわ。見えないマイナス評価を受けたら溜まったものじゃないから」

「だろうな……行くぞ椎名」

「あ……はい」

椎名の名前を呼んで2人で図書館を後にする。昼休み終了までまだあるが本を読む気が失せてしまった。

とりあえず教室に戻るか。

## 執政

「比企谷君、怪我はありませんか？」

図書館を出ると椎名が心配そうに話しかけている。他人事なのに凄く心配そうに話しかけられると申し訳なく思ってしまう。

「大丈夫だ。特に怪我はしてない」

「なら良かったです。でも学校に報告しなくて良いんですか？」

「ああ。色々面倒だし」

椎名にそう言うが本当の理由は別にある。須藤は龍園のおもちや候補で色々と企んでいる。そこで俺が先生に報告したら龍園の企みの邪魔になるかもしれないからな。

「まあ比企谷君が言うなら止めませんが、痛いなら保健室に連れて行きますからね？」

「大丈夫だって。そんな心配すんな」

「無理です。私にとつて比企谷君は一番の友達だから心配です」

つ……だからコイツはそんなことをハッキリ言うなよ。本当にドキドキしてしまうわ。

「……ありがとな」

そう言うことしか言えない。コミュ障が痛手となってるな。  
「どういたしまして」

しかし椎名は俺を氣遣っているのか簡潔に返してくる。こういつた淡々としたやり取りは俺も氣が楽だからありがたい。

そんな風に妙に幸せな気分になりながらも廊下を歩いていると、2つのクリアファイルを持った龍園が楽しそうな表情を浮かべて俺に近寄ってくる。

「おい比企谷。なんかトラブルに巻き込まれたんだろ？話せよ」

「何でわかった？」

「胸元だよ。いつもぴっちり制服を着てる癖に今はしわしわだぞ」

目敏いなコイツ。ま、そうでなきゃ上を指摘するのは無理だろうけど。

「図書館で須藤って奴に胸倉を掴まれたんだよ」

「あのゴリラか。で？学校にはチクるのか？」

「いや。やめておく。お前としてもその方がいいだろ？」

「違いねえな」

やっぱり何か企んでたのかよ。頼むから俺を巻き込むなよ？

「で？そのクリアファイルは何だ？中にプリントがあるが坂上先生にプリントを運ぶように頼まれたのか？」

まあコイツの性格的に頼まれても断るだろうけど。

「お前から貰った攻略法だ」

ああ……テスト1週間前に攻略法を発表するのか。ま、妥当なところだな。

そう思いながら教室に入ると空気が若干重くなるが龍園の所為だな。

当の本人は全く気にした素振りを見せる事なく、教卓に乗って辺りを見渡す。

「全員いるみたいだな。早速だが王の俺から駒のお前らに渡す物がある。比企谷と椎名以外全員席に着け」

龍園がそう言うのと俺と椎名以外全員が席に着く。不満そうな表情を浮かべているのは龍園を気に入ってない連中だろうが、しかし何故俺と椎名は立たせたんだ？

疑問を抱いていると龍園は俺に赤いクリアファイルを、椎名に青いクリアファイルを渡してくる。

「配れ」

あ、そういう事ね。俺は納得しながら赤いクリアファイルからプリントを取り出して1番前の席にいる生徒に渡す。椎名も同じように青いクリアファイルからプリントを取り出して同じように渡す。

全員にプリントが行き渡った所で、龍園が口を開ける。

「全員に行き渡ったな？コイツは今の2年と3年が1年の時に受けた最初の中間試験の

問題用紙と解答用紙、更に最初に受けた小テストの問題用紙と解答用紙だ。今日の昼休みに上級生から買ってコピーした」

なるほど。どうやら龍園は俺が3年生から買った問題用紙と解答用紙を受け取ってから、2年生から同じものを買ったようだ。

「え？でも龍園さん。これ、中間試験も小テストも丸つきり同じじゃないですか？」

「そう。毎回同じなんだよ。坂上は赤点を回避する手段があると確信していると言っていた。簡単な小テストで赤点を取った石崎がいるにも関わらずに、だ。そこで俺は確信した。絶対に助かる確実な方法があるってな」

龍園の言葉に騒めきが生じる。その際に敵意は薄れているが、明確な実績が出たからだろう。

「この学校は完全な実力主義だ。恐らく今後俺達は普通の学校にはない様々な特別な試験を受けるだろうが、それは単純な成績だけじゃ勝ち抜けない」

龍園の言葉に皆の空気が重くなる。皆、薄々感じていた事をハッキリと言われたからだろう。

「が、それがなんだって話だ。俺は必ず勝つ、どんな事があってもだ。その為なら手段は選ばない。俺はクラス全員を必ずAクラスへと導いてやる」

自信に満ちた言葉に敵意が殆ど無くなっている。明確な実績を見せながらこの発言

はクラスの面々を前向きにする材料となる。

「だからお前らに積極的に力を貸せ。実績を出した奴は誰だろうと優遇してやる。以上だ」

その言葉によりクラスの士気は更に上がる。さて、ここで俺も一枚噛んでやるか。

「龍園、上級生から過去問を買ったのはわかったが、相当高かっただろ？いくら払えば良い？」

俺がそう言うと龍園は一瞬だけニヤリと笑うが首を横に振る。

「高かったのは否定しないが払う必要はない。これはお前らの成績が上がる為の俺からの投資だ。何せこの中間試験、成績次第では100近いクラスポイントが手に入るから、お前らには高得点を取って貰わないといけない」

龍園は俺の意図を察したようでそう返事をする。

「そんな！高かったのなら俺達も出します！幾ら高くても俺達全員で払えば安いはずです！」

すると石崎が机を叩いてそう言うってくる。それに対してクラスメイトは多少驚きはしたが、反対の色はなかった。

「龍園氏、幾らだったのですか？」

「合計15万だな。最初は高いと思ったが椎名の協力もあって買えた」

龍園の参謀である金田がそう尋ねると龍園は呆気なく返事をする。と騒めきが生じる。まあいきなり15万なんて数字が出たらそうなるわな。

「だったら1人あたり4千ポイントくらいですね！おいお前ら！龍園さんに4千ポイント払えよ！」

石崎はそう叫ぶと龍園の配下の連中は携帯の操作を始め、それを皮切りに龍園と椎名を除いた面々が携帯を操作する。俺は携帯を操作するフリだ。

多少不満の色はあるが、4千ポイントで攻略法が手に入るなら安いと考えているように文句を言う奴はいなかった。

俺と龍園と椎名を除いた37人が龍園に4千ポイント払ったら、龍園の懐には14万8千ポイントはいる事になる。

そして龍園は以前俺と椎名に過去問に対する報酬と過去問の代金、計7万ポイントを払った。

更に2年生から幾らで買ったのか知らないが、多分俺が買った時と同じように2万くらいだろう。

仮に龍園が2万ポイントで2年から過去問を買ったとしたら……

14万8千ー7万ー2万で、5万8千ポイントだけ龍園の利益となる。これはかなりデカイだろう。

龍園は6万近くの利益を得た。

俺と椎名は龍園からの報酬として2人で5万の利益を得た。

他のクラスメイトは僅か4千ポイントで高得点を取る秘訣を得た

それによりCクラスは中間試験で多量のクラスポイントが手に入る可能性を得た

……うん、全員得をしてるな。少なくとも損はしてない。まあこうなるように仕向けたのは俺だけだ。

仮に龍園がポイントを貰わなくても問題ない。今回は石崎が騒いだから龍園はポイントという形の利益を得たが、貰わなかった場合だと「自分の懐を気にせずクラスの為に動いた」と好感度という形の利益を得ただろう。

好感度つてのは馬鹿にできない。嫌々働く部下よりも従順な部下の方が価値があるしな。

まあどちらにしる龍園の力が増したのは言うまでもない。龍園の性格は完全な屑だが優秀である事には変わりなく、Aクラスに上がるには必須の存在だ。その龍園にクラスからの高い忠誠心が加わればCクラスは伸びる。

そうすりゃクラスポイントも増えるだろうし、今後もしり気なく龍園を支援すれば目立つ事なく過ごせるし俺としても頑張っていこう。金田が龍園の参謀として堂々と発

言するなら、俺は龍園のビジネスパートナーとして暗躍していくのが理想だ。

そして椎名と一緒に本を……って、いつのまにか椎名と一緒に過ごす事が俺の中で当たり前のようになっている。そして俺自身、それを嫌どころか嬉しく思っている事に驚いた。

チラツと椎名を見ると本人は座って本を読んでいるが、そんな椎名を見るだけで胸が温かくなる。

やっぱり椎名は俺にとっての癒し粹だ。中学時代において癒し粹だった戸塚の時のように「俺の天使だ」とか「毎朝味噌汁を作ってくれ」とか椎名に言わないように気をつけたいとな。

俺は昼休みが終わるまで椎名を見ながらそう考えるのだった。

## テスト前

「ではHRを終了する。明日は中間試験だが遅刻をしないように」

坂上先生はそう言つて教室から出て行く。同時にクラスメイトは立ち上がり教室を後にする。既に全員過去問を暗記している状態だから不安の色はなかった。

「比企谷君、帰りましょう」

「ああ」

椎名がそう言うので俺は了承して立ち上がり教室を後にする。同時にDクラスの教室から叫び声が聞こえてきたので覗いてみると殆どの人がプリントを持って喜びを露わにした。あの反応からして……

「どうやらDクラスも過去問を手に入れたようですね」

椎名の言うように赤点対策として過去問を手に入れたようだ。喜びようが半端ないのは赤点候補だな。現に赤髪と由比ヶ浜がはしゃいでるし。

「AクラスとBクラスは学力が高いですから中間試験で赤点を取る人は出ないですね」

椎名はそう言うが……

「いや、一部の馬鹿は全て覚えられない可能性があるからまだわからない」

「流石にそれはないですよ」

いや…… 由比ヶ浜なんてマトモに暗記が出来るとは思えない。特に英語なんて難しい単語もそれなりにあるし。

「どうだろうな。つかDクラスに限って言えば、過去問よりもっと楽な赤点回避方法がある」

「?どんな回避方法ですか?」

「簡単な話だ。クラス全体で協力して全員が全ての科目で5点だけ取れば良い」

赤点の基準はクラスごとに違い平均点を2で割った数字だ。つまり全員で5点取れば平均点は5点、赤点は2・5点を四捨五入して3点となる。いくら由比ヶ浜でも3点は取れるだろう……取れるよな。

まあこの作戦にもデメリットはある。それは全員が協力する保証がない事と、平均点は低いから貰えるクラスポイントが物凄く低くなる事だろう。

ま、結局完璧な作戦はないって事だ。

「確かにそんなやり方もありますね。ですが、そのやり方は上に行く事を放棄、この学校の教育方針に反していますので、ある意味他クラスに負けを認めているようなものですよね?」

椎名の言うことは間違っていない。この学校は完全実力主義で、クラス同士がAクラス

の座を賭けてぶつかり、切磋琢磨していき社会に出て問題ない生徒を生み出す事を目的としている。

そんな学校で赤点回避のみに意識を向けるならば、それは暗に他クラスに負けたようなものであるからな。

「まあな。俺の案はあくまで赤点を回避する為だけ、要するに其の場凌ぎだからな。ま、今はDクラスより俺達のクラスだ。頑張ろうぜ」

「はいっ」

俺の言葉に椎名が可愛らしい笑顔を見せてくる。やっぱり癒されるなあ……

その後、俺と椎名は図書館で最後の仕上げの勉強をして、2人で飯を食べて解散したが、テスト前なのに凄く和やかな時間で幸せだったのは言うまでもない。

その夜……

「うくん……むにやむにや……」

午前1時、退学候補筆頭の由比ヶ浜結衣は机の上に突っ伏しながら幸せそうな表情で眠り、無意識のうちに唾液で過去問を汚すのだった。

翌朝……

「よしっ……行くか」

学校の支度を済ませた俺は部屋を出てエレベーターを待つ。そしてドアが開くので中に入ると、先客として龍園が乗っていた。

「よう比企谷。自信はあるか」

「ぼちぼちだ。そっちは？」

「過去問と内容が違っても赤点はねえよ」

だよな。しっかりと授業を聞いてりゃ赤点はないよな。

エレベーターを降りて寮のエントランスに出た俺達はそのまま寮を出る。と、その時だった。寮の横にある自販機の方から坂柳と神室がやって来る。手には紅茶がある。

「坂柳か」

龍園はいつもより低い声で坂柳に話しかける。一方の坂柳はニツコリと笑顔を浮かべる。

「貴方は確かCクラスの大將の龍園君でしたか？」

「入学早々女王様気取りとは良い身分だな」

「そんなつもりはありませんよ？」

「どうだかな。まずはDクラスとBクラスを潰す。その後はA、お前を潰す」

「少なくとも葛城君や一之瀬さんよりは楽しめるでしょうね」

「あんな雑魚どもと比べてんじゃねえよ」

最早一触発の空気がピリピリと流れる。龍園は以前雪ノ下が坂柳に言ったような事を言っているが、雪ノ下と違つて雑魚臭がしない。これは龍園と雪ノ下の差を如実に表しているな。

「それは失礼しました。そこにいる貴方の部下の比企谷君共々楽しみにしてますよ」

「比企谷は部下じゃねえ。どっちかって言うどビジネスパートナーだな」

「なるほど。まあ比企谷君の性格上、部下にするより適度な距離を置いた方がベストでしょう」

「お前からしたら王子様だよな？お姫様抱っこされて可愛らしい反応をしゃがって、口マンチストかよ？」

おいっ！俺の黒歴史を嬉々として話すな！思い出すだけで恥ずかしいからな！

「煩いですよ龍園君。それ以上その話をしないでください」

坂柳はさつきまでの冷笑を消して不機嫌そうになる。

「断る。写真を見たが、比企谷の胸の中で縮こまりながらも比企谷の首にギュツと抱きついてたがお前つて意外と甘えん」黙れ龍園。それ以上話を続けるなら、今後Cクラスの情報を他クラスにばら撒くぞ」おっと、少しからかい過ぎたか？」

俺が龍園を脅すと龍園はヘラヘラ笑いながらもからかうのを止める。具体的に解説してんじゃねえよ。坂柳だけじゃなくて俺にも大ダメージだからな？」

「こほんつ、私をからかうのはともかく中間試験は大丈夫なのですか？」  
「既に対策は出来てる。テメエも過去問を用意したんだろ？」

龍園は当然のようにそう言うが、俺も坂柳なら過去問を用意してると思う。

「ええ。まあ渡したのは私の友達だけですから、クラス平均はCクラスよりも下になるでしょう」

つまり仲の悪い葛城派には過去問を渡さず、差を見せつけようって腹か。地味だが中々容赦ないな。

「それはそうと比企谷君。折角ですから賭けをしませんか？」

「賭け？合計点数が上かについてか？」

「いえ。由比ヶ浜さんがいくつ赤点を取るかについてです」

そう来たか……赤点を取るかどうかではなく、いくつ赤点を取るかについて賭けるって事は坂柳は由比ヶ浜が退学すると思っっているのだろう。

「由比ヶ浜って比企谷と同中で頭と股が緩そうなビッチだよな?」

「ど直球だなオイ」

俺もビッチと呼んだ事はあるが、コイツの呼び方は俺以上だった。

「言い方は下品ですが龍園君の言う通りです。折角ですから龍園君も参加しませんか?」

「幾らだ?」

「そうですね。軽い遊びですから3万程度でどうですか?」

他人の退学について遊び呼ばわりする時点で坂柳はぶっ飛んでるな。

「乗った。じゃあ今から携帯のメモ帳を使って由比ヶ浜の赤点の数を打ち込め」

「わかりました。あ、真澄さんも参加してくださいね」

「……はいはい」

神室はため息を吐きながらも携帯を取り出す。それを確認した俺は神室同様のため息を吐きながら携帯を取り出す。ぶつちやけ3万も賭けたくないが、参加しないと面倒そうだからな。

しかし赤点の数か……科目は数学、英語、国語、理科、社会の5科目だが国語に選択問題が、数学には途中式を書かなくて良い問題がそれなりにあったので暗記は楽だし、由比ヶ浜でも多分大丈夫だ。理科も化学式が多かったので大丈夫だろう。

問題は英語と社会だが、この2つは十中八九赤点だろう。

英語は基礎が出来てないと答えを見てもチンプンカンプンだろう。それで中学の時赤点だらけだった由比ヶ浜には基礎がない。

社会についても難しい漢字が結構ある。茶柱先生の採点の仕方はわからないが、普通の教師なら漢字ミスをしたら三角をつける。由比ヶ浜に漢字をマトモに書けると思えないし、それ以前に覚える気力が無さそうだし。

結果的に俺の予想では由比ヶ浜は2つ赤点を取ると思う。俺は携帯のメモ帳に2と打ち込む。他の3人も打ち込んだようなので互いに携帯を見せると……

「真澄さんが4、龍園君が3、私と比企谷君が2ですね」

俺と坂柳が同じだった。しかし全員0を打ち込まないとは……まあ仕方ないかもな。

内心呆れながら携帯をしまおうと寮の入り口から由比ヶ浜が出てくるが、顔を真つ青にしていた。あの反応……まさかとは思うが寝落ちしたか？

あ、龍園が嗜虐的な笑みを浮かべて、坂柳が冷笑を浮かべている。

「ご機嫌よう由比ヶ浜結衣さん。テスト当日ですが元気がないですね」

散々子供扱いされたからか坂柳は冷笑を浮かべたまま話しかける。対する由比ヶ浜は坂柳のオーラに気圧されたのかビビりながら口を開ける。

「だ、大丈夫だし！過去問見たから大丈夫に決まってるじゃん！」

「でしたら何故顔を真っ青に震えているのですか？」

「べ、別に関係無いじゃん！」

「いえ。明らかに体調が悪そうだったので、心配で聞いてみただけです」

由比ヶ浜は怒るがその程度で坂柳は止まらない。心にも無い嘘を吐いている。

「素直に認めろよ。どうせ寝落ちして勉強してないんだろ？」

龍園の言葉に由比ヶ浜は言葉に詰まる。あの反応からしてビンゴだな。

「そ、そんな事ないし！テストなんて余裕だし！」

そうは言っているがガタガタと震えている。それを見た龍園は楽しそうに笑う。

「なるほど。なら俺はお前の点数を愉しみにしてるからな？」

「馬鹿にすんなし！あたしはちゃんと勉強したから大丈夫っ！」

由比ヶ浜はそのまま早足で学校に向かうが、坂柳と龍園は楽しそうに笑っている。由

比ヶ浜が赤点を取ったら絶対にdisりまくるつもりだな。

そんな2人を見て俺と神室は何度目かわからないため息を吐くのがあった。

## 中間試験

「欠席者はいないようだね。良かった、もし欠席者がいるのならペナルティが発生していたよ」

朝のHRにて坂上先生は試験のスケジュールをホワイトボードに書きながらそう言ってくる。中間試験は5科目だが、今日一日でやる。中学時代は数日かけてやっていたので結構新鮮だ。

教壇に立って生徒たちを1人1人見ていく。

「高校生になって初めてのテスト、それも赤点を取ったら即座に退学と普通の学校からしたら理不尽極まりないテストを君達は今から受ける。当然緊張はするだろう。しかし私は君達が赤点を取らない事を信じているよ」

そこからは強い信頼を感じる。坂上先生って見た目は悪そうだが意外と生徒思いなんだよな？

「そんな君達に朗報がある。中間、期末試験を乗りきる事が出来『うおおおおおおおおおおおおつ！』な、何だっ?!」

突如、背後から圧倒的な叫び声が聴こえて坂上先生の言葉を遮る。声のした方向にはDクラスがあるが、何をやってんた？アレか？赤点を回避しようぜって鼓舞してんのか？

「ごほん！話を戻すが中間、期末試験を乗り越えたならば君たちには夏休みにバカンスが待っている。その楽しみのためにも今回の試験全力で望んでくれ。私からは以上だ」坂上先生は早口で言い切り、朝のHRを終了させる。まさかとは思うがさっきの叫び声はバカンスに反応したDクラス男子の叫び声とかないよな？

しかしバカンスか……これ絶対に裏があるだろ。バカンスという名前の特別試験みたいな感じで。この学校には裏がありまくりだから全く信用出来ない。

そこまで考えていると1限目の監督の先生がやってくるので意識を切り替える。先生はカンニングはダメみたいなお決まりの注意をしてプリントを配り始め、全員に配り終わると始めの合図をする。

俺はプリントを確認すると、本当に過去問と同じ問題が並んでいる。流し読みしたが、違いが見つけれない。

まあ過去問抜きでも赤点はないだろうがな。注意するとしたら解答欄のズレくらいだろうな。

そう思いながらも俺はゆっくりと、それでありながら確実に問題を解いていくのだつた。

「……では試験はこれで終了する。結果発表は3日後の朝にする」

5時間目の英語が終わり、坂上先生がそう言うと言うと全員がバラバラな動きを見せる。その際に絶望感はなかったので赤点はないだろう。

「比企谷君」

すると椎名が俺に話しかけてくる。

「何だ？」

「試験も終わりましたし、本を買いに行きませんか？ 龍園君から貰った臨時収入もありますし」

「そういや過去問を渡した際の報酬があつたな。ま、入学最初の障害が終わつたし、リフレッシュするのも悪くないな。」

「わかつた。行こうか」

「はいっ」

椎名が元気良く頷いたので俺達は2人で教室を出て廊下を歩く。と、そこで進行方向から坂柳が沢山の生徒を連れて歩いてくる。向こうも俺に気付いたようで小さく微笑みながら手を振る。

「朝ぶりですね。比企谷君、中間試験はどうでしたか？」

「全く問題ない。そっちは打ち上げか？」

「はい。比企谷君は彼女とデートですか？」

坂柳はからかうように笑いながらそう言ってくる。それに対して俺は否定の言葉を言おうとするが、その前に椎名が割って入る。

「？比企谷君の彼女は貴女なのでは？」

「？違いますよ」

「そうなんですか？登校中に堂々と比企谷君に抱き抱えられていたので彼女かと思いましたが」

椎名の発言に廊下の空気が凍りつく。そういや椎名には坂柳をお姫様抱っこした理由について話してなかったな。

「ち、違う。アレはトラブルから逃げる為だったんだよ。ほら、坂柳って身体が弱いから」

「なるほど。比企谷君は坂柳さんを抱えてあげたのですか。そうでしたか、勘違いして

すみませんでした」

「あ、はい。誤解が解けたなら何よりです」

椎名がペコリと頭を下げると坂柳は若干戸惑いながらも椎名の謝罪を受け入れる。

「あ、申し遅れました。Cクラス所属の椎名ひよりです。比企谷君の友達をやってます」  
「ご丁寧ありがとうございます。Aクラス所属の坂柳有栖です。比企谷君をお世話してます」

「おいコラ。俺はお前の世話にはなっていないからな？」

何度か勉強を見て貰ってはいいたが、それだけだ。坂柳の言い方だと俺に関してあらゆる方向から面倒を見ていると周りの人間は思うだろう。

つか寧ろお前が神室の世話になつてるだろうが。神室は基本的に坂柳の荷物持ちをしているし、雨の時は傘を2つ持つて片方に坂柳を入れてるし。

「そんな……酷いです。夜に何度も比企谷君の部屋でお世話をしたのに……」

坂柳の言葉に周りにいる人間が騒めくがちよつと待てや！世話して貰ったのは勉強に關してだけだ。坂柳の奴……夜に俺の部屋なんて言ったら完全に「あ、私も何度か経験がありますね」椎名あつ！勉強を！言葉に勉強を入れる！この天然野郎が！

『ええっ！』

案の定Aクラス所属の坂柳の部下からは騒めきが生まれる。予想外の援護射撃に坂

柳も呆然としている。

最早収集不可能だ……これ以上ここにしているとマジでヤバそうだ。

「全部勘違いだからな！行くぞ椎名。お前らは打ち上げ楽しんでろ」

俺は早速でこの場を後にする。明日から学校に行くのが怖くなってしまったのは言うまでもないだろう。

尚、俺に追いついた椎名に「さっきの経験ってお前が俺に勉強を教えて世話をしたって意味だよな？」と聞いたら普通に頷いて軽くイラツとなってしまった。

3日後……

俺が椎名と坂柳と肉体関係を持っているという不本意極まりない噂が流れながらも結果発表日を迎える。

教室では石崎を始めとした赤点候補組からはソワソワとした雰囲気を感じ取れる。

すると坂上先生が丸めた白い紙を持って教室に入ってくる。

「それでは結果発表を行う」

坂上先生は持ってきた白い紙を全て広げてホワイトボードに貼り付ける。そこには小テスト同様、クラス全員の各教科ごとの成績と合計点が書かれていた。

1番下を見ると全科目で石崎が最下位だったが、全て60点台だった。赤点の基準はクラスの平均を2で割った数字未満だから最高でも49点だ。その事からCクラスに赤点を取った生徒は1人もいない事を意味する。

それにより赤点候補組は安堵のため息を漏らす。彼らも入学して直ぐに退学は嫌だろくな。

「各教科の平均点は全て80点以上。おめでとう。これは4クラスの中で1番の結果だ。好成绩で感心している。みなよく頑張ってくれた」

そりゃ過去問を使ったからな。過去問使って赤点とか馬鹿きわまりない。

「この調子で期末テストも頑張ってくれ。今日のHRはここまで」

坂上先生はそう言って教室を出ていく。それを見ながら自分の結果を見ると全部90点以上だった。椎名は全部満点だが、過去問がなくても満点を取れそうだな。

そう考えながらも俺は立ち上がりトイレに行こうとすると、廊下を出たあたりで龍園が話しかけてくる。

「よう比企谷。早速だが賭けの答え合わせをしようぜ」

賭け……ああ、由比ヶ浜の赤点の数についてか。すっかり忘れてたな。

俺が了解の返事をしようとするとAクラスの教室から坂柳と神室が出てきてこっち

に向かつてくる。

「お待たせしました。それでは答え合わせをしにDクラスへ行きますようか」

「ああ。Dの連中は喚いてるだろうな」

龍園は嘲りを表情に乗せながら笑う。どうやら龍園の中では由比ヶ浜が赤点を取ることが決まっているようだ。坂柳も冷笑を浮かべていて、神室は呆れているが嗜める素ぶりは一切見せていない。今更だが、ここにいる4人は頭のネジが数本抜けているのだろう。

そんな事を考えながら4人でDクラスへ向かうと……

『~~~~~!』

Dクラスの方から叫び声と泣き声が混ざった声が聞こえてきた。声からして由比ヶ浜だろうがDクラスのドアが閉まっているにも関わらず聞こえてくる声は大きいので相当な声で鳴いているな。

「どうやら赤点を取ったみたいだな」

「ええ。ですが問題は数です。私と比企谷君が2個と予想して、龍園君が3個で真澄さんが4個でしたね」

「ああ」

Dクラスの教室に着いたのでドアを開けると……

「やだよお！辞めたくないよお！うううううつ！」

雪ノ下に支えられながら大泣きしている由比ヶ浜がいた。俺達がドアを開けた事で注目が集まるが、それを無視してホワイトボードに貼られている成績表を見ると、社会と英語の成績が書かれた場所において由比ヶ浜の名前が赤い線の下に記されているのだった。

## 赤点

テスト結果発表日のDクラスの教室の雰囲気にはただならぬものがあつた。赤点が出るか出ないか皆が緊張しているからだ。

「先生、今日は中間テストの結果発表日と聞いています。いつですか？」

「お前はそこまで気を張る必要はないだろう、平田」

「教えてください。いつですか」

「喜べ、たつた今発表する。放課後じゃ、色々手続きが間に合わない事もあるからな」

手続きという言葉に、教室内の雰囲気が強張る。

「……どういう意味ですか」

「慌てるな。今点数を発表する」

Dクラス担任の茶柱はそう言つて大きな白い紙を五枚、ホワイトボードに張り出した。

英、国、数、理、社。それぞれの教科の一人一人の点数が表示されている。

「正直に言つて感心した。お前らがここまでの高得点を取るなんてな。満点が10人以上いる科目もあるぞ」

各教科、一番上には100点の文字がずらりと並ぶ。その光景に、生徒たちは歓喜の声をあげる。

しかし生徒らにとって最も重要なのは寝落ちした須藤と由比ヶ浜についてだけだった。

全員が成績表を見ると……

「つしやー！」

須藤の点数は英語を除き60点前後、英語は39点で……

「やったよゆきのん！」

由比ヶ浜の点数は数学と理科と国語は40点後半で、英語は38点、社会は34点だった。前回の小テストの際にこれが本番なら30点未満が退学と言われたので2人ともクリアしたと喜びを露わにした。

以前の小テストの際には書かれていた赤点ラインを示す赤い線は引かれていなく、須藤は思わず立ち上がって喜び、池、山内もそれに続いた。由比ヶ浜は雪ノ下に抱きつき、雪ノ下は優しい表情で由比ヶ浜の頭を撫でる。

「見ただろ先生！俺たちもやるときはやるってことつすよ！」

「ああ、お前らが健闘したことは認める。ただし……」

言うなり茶柱は赤ペンを取り出し、英語と社会の成績が書かれた枠の中にある由比ヶ

浜の名前の上に線を引いた。

「由比ヶ浜、お前は赤点だ」

茶柱の無慈悲な言葉が教室に響く。瞬間、さっきまでのお祭り騒ぎは一切無くなつた。

「は？なんで?!」

由比ヶ浜は喜びから一転、怒りを露わにする。

「お前は赤点を取った。今日で退学だ」

「嘘つくなし！赤点は31点だつて言つてたじゃん！」

怒りのあまり敬語を使わなくなる由比ヶ浜だが、茶柱は冷静だ。

「それは小テストの話だ。赤点の基準はテストごとに変わる。その算出方法を教えてやろう」

すると、茶柱先生は黒板に何やら書き始める。

78. 8 ÷ 2 || 39. 4

74. 6 ÷ 2 || 37. 3

「赤点ラインは平均点を2で割つた値だ。小数点以下は四捨五入する。今回のDクラスの英語の平均点は78. 8で社会の平均点が74. 6。よつて英語は39点未満で、社会は37点未満で赤点となる。須藤の英語については39点だからギリギリセーフと

いう事になるが、由比ヶ浜は英語は1点、社会で3点足りない」

茶柱の冷徹な言葉が教室に響く。大丈夫だと思っていた須藤は赤点ギリギリであった事実を知り冷や汗を流しながら、安堵の息を吐いていた。

そんな中、由比ヶ浜は現実を認識出来ずにいた。

「なんで赤点の基準を教えなかつたし！そうすれば……」

「そういえばちゃんと勉強していたとでも言うのか？おかしな話だ。赤点の基準がわからなくても自分が赤点と言われたら真面目に勉強するのが普通だ」

「そ、それは……納得いかないし！」

「お前が納得しようがしまいが退学は決定した。放課後退学届を提出してもらうことになるが、その際には保護者も同伴する必要があるから、私から連絡しておく」

淡々と由比ヶ浜に報告する茶柱の言葉が、事実として教室内に浸透していく。

「せ、先生、待ってください。本当に由比ヶ浜さんは退学なんですか？救済措置はないんでしょうか？」

「ない。これはルールだ」

「では、由比ヶ浜さんの解答用紙を見せてください」

「構わんが、採点ミスはないからな」

抗議が出ることを予め予想してか、茶柱は由比ヶ浜の解答用紙だけを持ってきていた

ようだ。平田に解答用紙を渡す。

平田がそれを確認するが少ししてから暗い表情を見せながら、言う。

「採点ミスは……ない」

「納得できたか？ 由比ヶ浜の赤点は絶対だ」

茶柱は由比ヶ浜に改めて事実を突きつける。

「ま、待つて……あたし、次のテストで頑張るから……」

「赤点を取った以上、次はない」

「待つてください茶柱先生」

由比ヶ浜の懇願を茶柱は一蹴すると、雪ノ下が手を挙げる。

「今度は雪ノ下か。何だ？」

「今回の中間試験において茶柱先生はテスト範囲の変更について私達に報告を怠っていました。それにより由比ヶ浜さんが赤点を取ったとなると先生にも責任の一端はあると思います」

「だから由比ヶ浜の退学を撤回しろと？ しかし他の生徒はテスト範囲が変わっても高得点を取っている。それにテスト範囲が変わったと言っても授業で習ってない範囲は一切出していない。それを考えると由比ヶ浜の勉強不足、自業自得が赤点の原因だ」

「っ……」

その言葉に雪ノ下は黙り込む。茶柱の言っている事は紛れもなく正論だからだ。事実雪ノ下も朝由比ヶ浜から寝落ちしたと聞いた時は絶句してしまつたくらいだ。

「残りの生徒はよくやった。次の期末のテストでも赤点を取らないように精進してくれ。由比ヶ浜は放課後職員室に来て」

「待つて！今高校を辞めたらあたし……！」

由比ヶ浜は涙をポロポロ流しながら茶柱に話しかける。しかし茶柱は表情を全く変えない。

「赤点を取つたお前が悪い。辞めた後は私の知る事じゃない」

「やだよお！辞めたくないよお！うううううっ！」

由比ヶ浜は大声で泣き始め、それを雪ノ下が支える。その光景を見たクラスメイトはどうしたら良いのかと苦々しい表情で浮かべる。

と、その時だった。

ガラガラガラ……

扉が開く音が聞こえてきて、皆が一斉に音のした方向を見る。

そこには杖をついた小柄な女子と気怠そうにする長身の女子、明らかにガラの悪い男子と目が腐つた男子の4人がいるのだった。

教室に入ると注目される。しかし坂柳は特に気にする素振りを見せずにホワイトボードに貼られている成績表を見て薄く笑う。

「赤点は2つ……どうやら私と比企谷君の勝ちみたいですね」

「アテが外れたか」

「じゃあ負けた私と龍園はあんたと比企谷に払うね」

言いながら龍園と神室は携帯をいじりだす。と、ここで茶柱先生が話しかけてくる。

「AクラスとCクラスのお前達が何をしにきた？」

「そこで惨めに泣いてる馬鹿が何個赤点取ったか賭けをしたんだよ」

龍園が特に表情を変えずにそう言う。Dクラスの生徒が騒めきだす。中でも雪ノ下は龍園を睨みつけるが、龍園は全く気にする素振りを見せない。

「しかしよお……Dクラスは過去問を手に入れたのは知ってたが、それで赤点取るなんてどんだけ馬鹿なんだよ？不良品の中でも格が違い過ぎだろ」

「つ……酷いよお……」

「酷いのはお前の思考回路だ。退学してもまともな職に就けないだろうし、頑張つて身体を売れよ」

「……っ！」

龍園の煽りに雪ノ下はキレて龍園の頬に平手打ちを叩き込む。対する龍園は避ける素振りを見せずに平手打ちを受ける。

「貴方、最低ね……！私は貴方を絶対に許さないわ！」

「許さなくて結構。つか茶柱よお、これは立派な暴力だろ？」

「ふざけんじゃねえよ！いきなり現れたかと思えば由比ヶ浜を馬鹿にしやがって！」

龍園はヘラヘラ笑いながら茶柱先生に全く敬意を払わずに、そう言う須藤がブチ切れる。しかし龍園は相手にしない。

「はっ、もう退学する奴を庇うなんて見た目に反して優しいな」

「煽り過ぎですよ龍園君。彼らは由比ヶ浜さんは退学するのは決定したのですから気がでないですよ」

「そのビツチの赤点の数を賭けたお前が言うな。ついでに言うなら退学を回避する道はまだあるぜ」

その言葉にDクラスからは騒めきが生まれ、茶柱は眉をひそめる。

「本気で言ってるのか？」

「少なくともビツチの赤点を無くす方法はあるな」

「その方法は何?!教えなさい！」

龍園の言葉に雪ノ下は龍園に詰め寄るが龍園は鼻で笑う。

「何で俺がピンタしたお前の言う事を聞かないといけないんだ。教えなさいじゃなくて教えてください、だろ？」

まあそうだな。雪ノ下が龍園にキレるのは仕方ないが、物を頼む態度じゃないな。

「とはいえ俺は広い心を持つてるし……そうだな。10万ポイントを俺にくれてお前が土下座するなら教えてやるよ。ついでにお前のピンタもチャラにしてやる」

「つーふざけないで！誰が貴方なんかに！」

土下座するように言われた雪ノ下は激昂する。しかし龍園は動じない。

「だったらお前のお友達も退学だな。ま、俺としてはどつちでもいいけどな」

まあ龍園からしたらどつちでもいいだろう。由比ヶ浜が退学したら退学した場合のペナルティを知れるし、由比ヶ浜の退学が回避されたらDクラスは大量のプライベートポイントを失い尚且つ由比ヶ浜という足枷を付けたままの状態だからな。

「ちなみに坂柳、お前はどうか考えんだ？」

俺は坂柳に耳打ちをする。由比ヶ浜に散々馬鹿にされた坂柳からしたら龍園が救済案を教える事に反対かもしれない。

「どちらでも構いません。正直に言うとな私がこの手で彼女を退学させたい気持ちもあるので」

なるほどな。まあ坂柳の立場からしたら由比ヶ浜を自分の手で退学させたい気持ちもあるだろう。

「待って。ポイントはともかく、土下座は取り下げた方がいいな。雪ノ下さんが可哀想だよ」

すると以前図書館で会った女子が頼んでくるが、龍園は全く気にしない。

「ならそのビッチは退学だな。ま、お前らとしてもゴミが消えるからいいんじゃないか？ 後3分待ってやるからお前らで決めな」

龍園は敢えて制限時間を言ってDクラスの判断力を鈍らせる。その際に坂柳は小さく笑っているが生粋のDSだな。

「……本当に由比ヶ浜さんの退学を回避出来るのかしら？ ポイントを貰うための詐欺を考えているのではないのかしら？」

内心呆れている中、堀北がそう言うってくる。まあ彼女の発言も当然だ。

「そんな訳ないだろ。教師やカメラに見られてるんだぞ。ここで俺が詐欺なんてしたら俺も退学を食らうからな」

まあそうだろうな。もしも詐欺したら龍園もタダじゃ済まないのは確かだ。

そこまで考えていると雪ノ下は龍園から目を逸らし……

「比企谷君。由比ヶ浜さんが退学を回避する道を教えなさい。拒否権はないわ  
あろうことか俺にそんな命令をしてきたので……」

「30万で良いぞ」  
そう返した。

## 取引

「比企谷君。由比ヶ浜さんが退学を回避する道を教えなさい。拒否権はないわ」

あろうことか俺にそんな命令をしてきたので……

「30万で良いぞ」

そう返す。すると雪ノ下は怒りを露わにする。

「ふざけないで！このままだと由比ヶ浜さんは退学するのよ！」

「知らねえよ。そもそも話、何で由比ヶ浜が退学するのかわからないのか？誰かに勧められたならまだしも、勉強しなかったアイツの自業自得だろうが。つかそんなに由比ヶ浜を守りたいならクラスメイトと協力してポイントをかき集めて龍園に土下座すれば良い話だろうが」

「そうですね。所詮は由比ヶ浜さんの自業自得です。どの選択をするかは自由ですが、自分のプライドを捨てずに由比ヶ浜さんを見捨てるのが1番だと思えますよ。由比ヶ浜さんはいても足を引っ張るだけでしょ」

坂柳がこの状況を見て楽しそうに笑いながらそう口にする。そんな中、龍園の責めは止まらない。

「後1分だな」

その言葉に雪ノ下は焦り俺の胸倉を引つ張る。

「今すぐに教えなさい! でないと容赦しないわ!」

なるほどな。力づくで聞き出す腹か。焦りのあまり暴力に走ろうとするか。

「どうぞ自由にな。まあそうなたらお前も退学だろうな」

俺は監視カメラを指差しながらそう口にする。雪ノ下は悔しそうに手を離す。

「つかそんなに土下座が嫌なら見捨てたら良いじゃねえか。お前にとつては由比ヶ浜より自分のプライドの方が大事なんだろう?」

龍園があたりまくる。それはもう楽しそうに。

「ふざけないで! 由比ヶ浜さんは大切な友達よ!」

雪ノ下の叫び声に龍園が嘲笑を浮かべる。その際に携帯を取り出しているのは雪ノ下が土下座した場合に写真を撮る為だろう。

「だつたら土下座しろよ。後30秒な」

「つ……………」

龍園の言葉に雪ノ下は顔を真っ赤にする。そしてチラツと横にいて泣いている由比ヶ浜を見たかと思えば、再度龍園を睨みつけ、床に座り頭を地面につける。要するに土下座をした。

「くはっ！コイツは傑作だな！」

龍園は笑いながら写真を撮る。その際に雪ノ下は土下座しながらもプルプル震える。プライドの高い雪ノ下からしたら今の状況は我慢出来ないものがあるだろうな。

「じゃあ後は10万……って言いたいが、頭を踏ませてくれんならタダにしてやるよ」

コイツ、やっぱり鬼畜だな。Dクラスの大半はドン引きしてるし。

「待て龍園。それ以上は度が過ぎるぞ」

「教師は引っ込んでな。で？頭を踏ませるのか？それとも「待つてくれないかな？」……あ？」

するとイケメンが話しかけてくる。

「10万ポイントは用意する。だからこれ以上雪ノ下さんを傷付けるのはやめて欲しい。皆、少しずつで良いからポイントを出してくれないかな？」

「……平田君。私の端末に6万ポイントあるから使って」

イケメンがそう言うのと土下座している雪ノ下がそう言う。どうやらかなり貯めているみたいだな。

「じゃあ僕が4万ポイント払うよ。龍園君は番号を教えて」

「くくっ、交渉成立だな」

龍園はそう言って番号を平田という男子に渡す。同時に平田が自分と雪ノ下の携帯

を操作する。すると龍園の携帯が鳴りだし、龍園は小さく頷く。

「じゃあ約束通り教えてやるよ。それはな、教師に頼んで点数を売って貰うんだよ」

龍園の言葉にDクラスの間騒めきが起こり、茶柱先生は目を細める。

「点数を売るとは前代未聞だな」

「この学校ではあらゆる物をポイントで買えるって入学初日に言われたからな。以前坂上に聞いたら坂上は1点5万ポイントで売ってやると答えたぞ」

「なるほどな。他の先生が認めたなら問題ないだろう」

「で？Dクラス担任は何点で売るんだ？」

「そうだな……坂上先生と同じ5万ポイントにしよう。由比ヶ浜は4点足りないから2

0万ポイント必要になるな」

「待ってください茶柱先生。それは高過ぎだと思えます」

「それでもないだろう。1点あたり10000ポイント程度なら誰でも赤点を回避出来て、勉強する意欲が無くなるだろう。教師としてそれは看過できない」

まあそうだろうな。仮にも国が運営する学校の生徒が勉強する意欲を無くしたらアウトだ。寧ろポイントを高くすれば赤点を回避しようとする意欲が更に増すし、教師が点数を安売りするのは無理だろう。よって茶柱先生の提示した値段は妥当だ。

「つまりお前らは20万ポイント払って過去問を使ったのに赤点を取ったゴミを助ける

か、ゴミを捨てるかのどっちを選んだよ」

龍園がどっちを選ぶか楽しそうに提示する。正直言つてこれはエグい。

何故ならここで由比ヶ浜を助けたらクラスポイントが無いDクラスの生徒が所有するプライベートポイントはかなり失うだろう。しかも助けた由比ヶ浜が今後クラスにとつて役に立つ可能性は低いし、下手したら次の中間で再度赤点を取る可能性もあるし、助けるメリットが無い。

そもその話、ポイントを出す事を嫌がる生徒もそれなりにいるだろう。

逆に由比ヶ浜を見捨てた場合、ペナルティが発生する可能性はあるが戦力については殆どダウンしないしプライベートポイントも減らないので見捨てたいと思う生徒もいるだろう。

Dクラスはクラスポイントが0なので由比ヶ浜を助けるなら必然的にポイントを持つている人間に負担がかかるし。

そう思っているとHR終了のチャイムが鳴る。続きは気になるが後数分以内に教室に戻らないとペナルティが発生する。

「ちつ……良いところで邪魔が入ったか」

「そうですね。まあ私としては臨時収入が入ったので良かったです」

「言つてろ。戻るぞ比企谷」

「へいへい。1時間目は数学だよな」

サボりたいがサボるとペナルティが発生するから仕方なく出る。

「ああ。じゃあ俺達はもう行く。10万ポイントはありがたく頂いた。お前らが大金払ってゴミを助けるか、捨てるか楽しみにしてるぜ」

龍園はそう言つてDクラスの生徒を嘲笑いながら出て行くので俺達もそれに続く。

「普通に考えたら見捨てるでしょうね」

「普通に考えたらね。でも坂柳は不本意そうね」

「そうですね。私が直接手を下したい気持ちはありません」

「さつきから気になってたんだが、何で坂柳はあのゴミを潰したがつてんだ？」

「子供扱いされまくったりヒステリーみたいに喚かれたんだよ」

俺が答えると龍園は鼻で笑う。

「喚かれたのはともかく、子供扱いは普通だろ？お前貧乳でチビだし」

「ふふつ、不良の雰囲気醸し出しているお利口さんが言ってくれますね」

龍園の挑発に坂柳の額に青筋が浮かばせながらそう言ってくる。まあ確かに龍園が真面目に授業を受けているのつてシニールに見えるんだよなあ。そう考えると龍園つてお利口さんだよな」

「黙つてろ比企谷。次に同じ事を言ったらぶつ飛ばすぞ」

「どうやら口に出していたようだ。以後気を付けよう。」

「へいへい。ところで由比ヶ浜についてはどうなると思う？」

「そうですね……恐らくDクラスの生徒の中に彼女を助ける事に反対する生徒はそれなりにいるでしょうから、助かる可能性は余りないでしょうね」

まあそうだろうな。由比ヶ浜を助けるのには20万ポイント必要だ。しかしDクラスはクラスポイントを持ってないので入学式以降ポイントが増えてないので20万ポイントはかなりの大金だ。

ポイントを何万も残している生徒もいるとは思いますが、そいつらは由比ヶ浜を見捨てたかと思ってる可能性が高い。

全員で割り勘すれば一人当たり5千ポイント程度で済むが、Dクラスの生徒の中にはポイントを使い果たした奴も多いだろうし、それはつまり何万も残している生徒の負担が大きくなる事を意味する。

ポイントを何万も残している生徒からしたら「何万も払ってまで由比ヶ浜を助ける必要性はない」と考え、ポイントの支払いを拒否する可能性が高い。雪ノ下あたりはそいつらに騒ぐかもしれないが、ポイント持ちは雪ノ下と徹底抗戦するだろう。

よって坂柳の言う事は紛れもなく正論だ。少なくとも俺がDクラスの生徒なら絶対にポイントを出さない。

実際由比ヶ浜は成績も悪く、知識量も少ない。運動神経も悪く、頭の回転も悪い。加えて過去問……答えがあるにもかかわらず赤点を2科目も取ったのだ。残してもメリットが全く見当たらない。

感情論を使えば退学を免れる可能性があるが、感情論を抜きにしたら絶対に退学になるだろう。

「ま、どうなろうが坂柳に目を付けられた以上、卒業するのは無理だろうな」  
「もちろんそのつもりです」

坂柳は即答する。坂柳の目には剣呑な光が宿っているが、さてさて、由比ヶ浜の命運はどうなるやら……いつ退学になるんだろうな。

俺はそんな事を考えながら龍園とCクラスの教室に入るのであった。

## 友達

「皆、由比ヶ浜さんの退学を回避するためにポイントを少しずつ出してこれないかな？」  
Dクラスの教室にて、平田洋介は周りに呼び掛ける。しかし周りの反応は薄かった。理由としては先程龍園が言ったように20万ポイント払ってまで由比ヶ浜を助けようとする気になれないからだ。

「お願い皆。由比ヶ浜さんを助けてあげて」

雪ノ下も頼み込む。と、ここで反対の声が上がる。

「俺は反対だ。由比ヶ浜さんはここで退学になるべきだ」

真つ先に反対の声を上げたのはクラス首位だった幸村だ。それに対して雪ノ下は幸村を睨みつける。

「……どういう意味かしら？」

「言葉通りだ。彼女の為に20万ポイントは勿体ない。大体少しづつポイントを出してくれと平田が言っていたが、ポイントを全く所有してない奴がかなりいる以上、必然的にポイントを持っている人間の負担が大きくなる」

「……幸村君は沢山ポイントを持っているからそう言えるのね？」

「そうだ。全員が均等に5千ポイント払うならともかく、俺は由比ヶ浜さんの為に何万も払う気は無い」

その言葉に平田は苦々しい表情で黙るが雪ノ下は止まらない。

「でも由比ヶ浜さんが退学になったらペナルティが発生するかもしれないわ。それを避ける為にもここは助けるべきだわ」

「確かにペナルティは怖い。だが、今由比ヶ浜さんを助けても、今後また退学の危機に瀕するかもしれない。で、その時にまた大量のポイントを払って助けるのか？ 大体今回の件は由比ヶ浜さんの自業自得だろう？ 赤点になったら退学とわかってるのに、寝落ちして過去問を暗記しない人を大金を払ってまで助けたいとは思えない」

「っ……」

幸村の言葉に雪ノ下は黙る。事実、こうなっている原因は由比ヶ浜の勉強不足、退学に対する危機感の無さだから雪ノ下は反論出来ない。

雪ノ下が論破された事により、クラスには由比ヶ浜を見捨てようという空気が流れている。

しかし……

「待って。折角出来た友達を失うのは嫌だよ。私は由比ヶ浜さんを絶対に助ける」

クラスの人気者の櫛田桔梗はそう言うってから未だに泣きじやくる由比ヶ浜の元に向

かう。

「大丈夫だよ由比ヶ浜さん。必ず助けるから」

「ぐすつ……ひつぐつ……ありがとう」

「クラスメイトだから当然だよ。とりあえず休み時間ごとに他のクラスの人にポイントを貸してもらえるか聞いてみる。もしも由比ヶ浜さんを助けたいって気持ちがあつて、他のクラスの人と交流がある人がいるなら協力して欲しいな」

クラスの人気者である櫛田の言葉が教室に響く。それにより由比ヶ浜を見捨てるべきであると考えが充満した教室が、多少マシになる。

もちろん由比ヶ浜を見捨てるべきって考えている人もそれなりにいるので未だに空気が重い。

「それと由比ヶ浜さんを助けたいって少しでも考えている人がいるなら所有ポイントを教えて欲しい。Dクラスにおいて幾らポイントがあるか確かめないといけないからね」

平田の言葉により由比ヶ浜を助けたいと考えている生徒が平田の元に向かう。その数20人だった。

残りの半分の間は由比ヶ浜を助けたくない、もしくは単純にポイントを殆ど持っていない連中であつた。

昼休み……

「ありがとう。クラスポイントが貯まったら返すね」

昼食を食べて椎名と一緒に図書館に向かっているとDクラスの生徒がBクラスの生徒からポイントを借りている光景を目にする。どうやらDクラスは由比ヶ浜を救済する方向で行くようだ。

「そういえばDクラスからは赤点が出たのですよね？」

「ああ。だから点数をポイントで買うべく、ポイントを借りてるんだろ。ちなみに椎名ならどうする？」

「……難しい質問ですね。クラスメイトが減るのは寂しいですが、過去問を持っていて赤点を取る生徒を残すのはリスクが大きいですから。その人が部活で活躍が期待されているなら……助けますかね」

どうやら椎名は公私混同をしないようだ。そして言っていることも間違っていない。俺も部活で活躍してクラスポイントの増加に貢献出来る生徒なら助けられると思う。

しかし由比ヶ浜なら助けられないだろう。由比ヶ浜は成績も運動神経も悪く、Dクラスに

貢献出来るような人間じゃないだろうし。由比ヶ浜を助けるのはミスだろう。

しかしそれをどうこう言うつもりはない。決めるのはDクラスであつてCクラスの俺には関係ない話だからな。

そう思いながらも図書館に行つていつものように席に座つて本を読む。そして暫く読んでいると椎名が話しかけてくる。

「比企谷君。今度の週末は予定がありますか？」

「週末？ 特にないが本を買いに行く付き添いか？」

俺が椎名と出かける場所なんて図書館と本屋とスーパーとコンビニくらいだ。

「それもありませんが敷地内の隅にある自然公園に行きませんか？ 図書館で読むのもいいですが、自然に囲まれながら読むのは気持ちいいですから」

へえ、普通の公園もあるんだ。それは初耳だ。

しかし自然公園で読書か……それってデート……じゃないよな。そこを勘違いしちゃいけない。椎名は純粋な気持ちで読書をしたいただけだしな。

「わかつたよ。じゃあ日曜日に行こうぜ」

「はいっ。楽しみにしてますね」

椎名はそう言つてニッコリと笑う。その笑顔はとても魅力的で、かつての戸塚に匹敵する笑みだった。

その笑みによりかつての癒し枠である戸塚の事を思い出してしまい……

「椎名。俺に味噌汁をまいに……何でもない」

危なく自爆しそうになってしまった……とか半分自爆したな。

（マズい。注意しなきゃいけないと思っただけだが、失念しちゃった）

「？比企谷君は味噌汁を飲みたいのですか？でしたら作りますよ」

椎名は不思議そうな表情をしながらそう言ってくる。どうやら毎日の部分については聞き取れなかったようだ。危ない危ない……

「ぜ、是非頼む」

俺は誤魔化すようにそう返す。ここで改めて毎日味噌汁を作ってくれなんて言えないからな。

「はいっ。任せてくださいっ」

守りたい、この笑顔。

椎名の笑顔にドキドキしていると、椎名は本をめぐりながら俺に話しかけてくる。

「ところで比企谷君。お願いがあるのですが、そろそろお互いに名前前で呼び合いませんか？」

「ふあっ!?!」

思わず変な声を出してしまう。今、椎名は互いに名前前で呼び合うって言ったのか？

「い、いきなりどうした？」

「いえ。本を読んでいたら「もう友達なんだから名前で呼べよ」と書いてあったので、既に友達になつて私達も名前でも呼び合うべきと思つたのです。どうですか？」

そんな事を言ってくる。そんな椎名に対して俺は恥ずかしい気持ちと嬉しい気持ちで一杯となる。彼女からは嘘が全く感じないので本心だろう。

一時期人間不振になりかけた俺だが、彼女なら信用できる……というか信用したい気持ちがある。

よつて……

「わ、わかつたよ……ひ、ひより」

頑張つて名前と呼んでみる。もしも拒絶されたら自殺するぞマジで。

内心ビクビクしながらも彼女の返事を待つと……

「ありがとうございます。これから仲良くしましょうね、八幡君」

お礼を言われる。それによつて胸の内が幸せになる。こんなに幸せになるのは久しぶりだ。

と、ここで予鈴が鳴るので俺達は教室へ戻るべく立ち上がり、図書館を出る。

「八幡君。幸せそうな表情を浮かべてますが、何かあつたんですか？」

「お前こそ、いつもは割と無表情なのに幸せそうじゃねえか。何かあつたのか？」

「八幡君と更に仲良くなれた気がして嬉しいですから」

ひよりはそんな事を言ってくる。どうやら考えている事は同じみたいだな。

「……俺も同じ気持ちだ。改めてよろしくな」

「はいっ」

ひよりが頷くのを見ながら俺達は教室へ戻る。この学校は色々謎も多く危険が多い学校で、先が思いやられる。

しかし何も悪い事じゃない。

現に俺は戸塚に続いて人生において2人目の友人が出来たのだから。俺としては卒業するまでひよりとの関係は維持していたいものだ。

あ、ちなみに由比ヶ浜は退学を回避出来たらしい。教室に入る直前にDクラスから歓声が届いてきたので覗いたら、メチャクチャ喜んでる由比ヶ浜がいたし。

まあ坂柳に目を付けられた以上、卒業するのは無理だろうけどな。

## 外出

中間試験が終わってから最初の休日、俺はショッピングモールの中心にある噴水前で携帯をいじっている。ふと携帯を操作してポイントを確認すると203295と表示されている。以前龍園から貰った報酬や賭けによる勝利、6月分の支給などがあり、俺のポイントはかなり潤っている。

6月分の支給については中間試験の結果が反映されてないから4万9千ポイントだったが、7月にはもつと貰えるだろうから楽しみで仕方ない。とりあえず30万を超えたらパソコンを買いたい。

「お待たせしました八幡君」

そんな事を考えていると横から声をかけられたので振り向くと待ち合わせをしている女子がやってきた。

「ようひより。今日はよろしくな」

「はいっ。よろしくお願います」

ひよりが頷くので俺達は目的地の本屋に向かって歩き出す。中間試験以降最初の休

日だからかショツピングモールには生徒が多い。知った顔もチラホラ見えるので、余計な邪推をされないように気をつけなさいといけない。

そうこうしている間にも本屋に着くので俺達は小説コーナーに向かうと新刊が出ている。テスト前は本屋に行けなかったのでもれも欲しい。

早速一番近くにある小説を取ろうとしたら……

「あ……」

ひよりも同じ本を取ろうとしたのか、俺とひよりの手が重なる。それにより俺の手には紙の感触ではなく、柔らかな感触がやってくる。

「わ、悪い……」

「気にしないでください」

俺は恥ずかしい気持ちで一杯だが、ひよりは全く気にしてないようなのでホツとしてしまう。

安堵の息を吐きながら違う本を取り、パラパラ捲る。勿論立ち読みするなら冒頭の部分だけだ。

お互いに違う本を無言で読むが特に気まずい空気にはならない。俺達は積極的に話をするタイプじゃないし、寧ろこうしている時間が静かで嫌いでない。

暫くの間、無言で読むがこの本は冒頭から中々面白いので購入することにした。本を

閉じて次の本を取ろうとしたらひよりも同じタイミングで本を閉じて次の本を探している。

普段は無表情なひよりだが、本が関係すると凛々しくなるんだよなあ……  
そんなひよりに見惚れながらも俺も次の本を読み始めた。

15分後……

結局俺達は10冊くらい買う事を決めてレジに並んだ。休日だけあってレジもそれなりに混んでいた。

と、ここで新刊コーナーから愚痴が聞こえてきた。

「あーあ、今日新刊発売日なのに欲しい漫画全部買えないなー」

「これも全部由比ヶ浜さんのせいだよ。彼女が赤点なんか取ったから私達も払う羽目になったし。私、あの時助けるのに賛成したけど、それだってクラスの皆から冷たい女って思われたくなかったからだし」

「あ、それ私も。でなきや由比ヶ浜さんなんか助けないって。平田君や櫛田さんは優し過ぎるよね。Cクラスのリーダーが言ったように見捨てておけば足手纏いが1人減ったのに」

「しかも雪ノ下さん、ポイントがあるのに払わなかった幸村君とかに文句言ってたけど、

幸村君別に悪くないよね？」

「4月から真面目に授業を受けてた幸村君からしたら由比ヶ浜さんは邪魔だからでしょ。後さ、雪ノ下さんって退学した場合のペナルティがどうこう言ってたけどさ、もし赤点取ったのが須藤君だったら見捨てていたよね？」

「私もそう思う。普段は上から目線なのに由比ヶ浜さんだけには甘いよね。真面目な話、今後也由比ヶ浜さんは足を引っ張るだろうし、ポイントの確保したいならペナルティを無視しても由比ヶ浜さんを切り捨てた方がいいでしょ」

Dクラスの女子と見える2人組が漫画コーナーの前で愚痴を吐きまくっていた。

女子怖え……見えない場所だからってポロクソに言い過ぎだろ。これ雪ノ下に聞かれたら絶対に面倒な事に「ふざけないで！」……なるな。早く会計したい。

チラ見すれば雪ノ下が肩を怒らせながら2人組に詰め寄っていて、本屋の入り口付近にはファクション誌を持った由比ヶ浜が泣きそうな表情を浮かべて3人を見ている。余りにもインパクトが強いからか俺の存在には気付いてないようだ。

「さつきから聞いていれば……私の友人を馬鹿にしないで。不愉快だわ」

雪ノ下の怒りの声に2人はビビるが、それも一瞬で直ぐに反撃する。

「事実を言っただけじゃん。彼女の1人の所為でクラスの皆に迷惑がかかったんだよ」

「そうそう。しかも他のクラスからもポイント借りて20万用意したけどさ、由比ヶ浜さんにその分の働きの出来るとは思えないんだけど。ポイントをドブに捨てたんだから愚痴りたくもなるよ」

「っ……………」

2人の言葉に由比ヶ浜は涙を流して走り去っていく。それを見た雪ノ下は2人に殺意を向けた眼差しを向ける。

「……………覚えておきなさい。いつか貴女達に地獄を見せるわ」

そう言つて雪ノ下は由比ヶ浜を追いかけなるべく本屋から出て行く。その為、本屋の空気が重くなる。

と、ここで俺とひよりの番になつたのでパパッと会計を済ませて本屋を出る。

「Dクラスの空気は相当悪いようですね」

「ま、クラスポイントが0の状態で大量のプライベートポイントが飛んだからな。しかもプライベートポイントについても由比ヶ浜がちゃんと勉強していたら失う事はなかったんだし」

本屋で揉めるなどとは思つたが2人が言っている事については理解が出来る。今のDクラスの雰囲気は最悪だろうが、この雰囲気をなんとかするには由比ヶ浜自身が自分自身の有用性をDクラスに認めて貰う必要がある。最低でも20万…………いや、龍園に渡し

た情報料も含めて30万ポイント以上の有用性をな。

「ま、俺達はCクラスだから関与する必要はない。それよりお前が言った公園に案内してくれ」

Cクラスである俺からしたらDクラスの結束力が弱い事はあるがたいからな。

「あ、はい。わかりました」

ひよりが頷いて先導するのでそれに続く。ショッピングモールを出て真っ直ぐ歩き続ける。

暫く歩くと敷地の四隅に到着する。そこには芝生が広がっていてベンチやブランコがあり、謂わば憩いの場みたいな感じの場所だった。正直言つてこの学校にこんな場所があるとは思わなかった。

と、ここでひよりは持つてきた鞆のファスナーを開けたかと思えば、シートを取り出して芝の上に敷き、その上に座る。

「八幡君も座ってください。お茶やお菓子も用意しましたよ」

言いながらひよりは更に鞆から魔法瓶やバスケットを取り出す。芝の上にシートを敷いてバスケットや魔法瓶を出すことからピクニックに行っているような気分になるな。

「わざわざ用意したのか？言ってくれりや俺も準備したのに」

俺は特に何も用意してないので申し訳ない気分になってしまふ。

「私から誘ったので気にしないでください」

笑顔でそう言われたら何も言えないな。俺は小さく礼をしてからシートに座り、先程購入した本を取り出すと椎名は俺の隣に座って同じように本を取り出す。

風が吹いて潮風の匂いを感じる。いつもひよりとは図書館で読書をするが緑に囲まれ、海が間近にある状態で本を読むのは悪くない。

暫くの間、互いに無言で本を読む時間が続くとクウウ、可愛らしい音が鳴るので本から顔を上げると、ひよりが恥ずかしそうに俺を見ていた。

「……すみません」

「別に謝る事じゃない。てか読書をして1時間経ってるし」

互いに一言も話さないまま1時間が経過しているが特に気まずい空気は存在しなかった。

「そうみたいです。あ、八幡君も食べてください」

ひよりはバスケットからサンドイッチを取り出してくる。といつてもハムやツナでは入ってなく、ブルーベリーやイチゴジャムなどお菓子に近いサンドイッチだった。

「頂きます」

挨拶をしてサンドイッチを口にする。同時に程よい甘みが口の中で広がってくる。

「美味しいな」

「そう言つて貰えて嬉しいです……八幡君」

ひよりは途端に神妙な表情になるので俺も気を引き締める。

「どうした？」

「今回の中間試験はあくまでテストとの戦いでしたが、今後は学校の特色からして他所のクラスとぶつかるでしょう」

「だらうな」

今回の中間試験でクラスポイントが貰えるのは知っているが、いずれは他クラスとポイントがかかった戦いをするだろう。でないとAクラスに上がるのは無理だろう。

「ですから今後は色々と警戒することも増え、精神的に疲れるでしょう。ですから……八幡君さえ良ければ月に一度くらい、ここで一息つきませんか？」

ひよりはそんな風に質問をしてくるが、俺の中で既に返答は決まっている。

「ああ。月の最初の日曜日支給されたポイントで本を買つてここで読もう」

これからは色々と面倒事が増えるんだ。早いうちに心を休める日を確保するのは間違いない。

そう返しながらサンドイッチを食べ終わると不意に眠くなり欠伸をしてしまう。昨日の夜は緊張していて寝れなかったからな。

「眠いのですか？でしたら少し休んでください」

ひよりはそう言ったかと思えば俺を優しく引つ張り、気がつけば俺の頭はひよりの膝の上に乗っていた。

予想外の展開に驚きながら頭を起こそうとするが、その前にひよりか俺の頭を優しく撫でてくる。その撫で方はとても気持ちが良いくて、睡魔の力が増してくる。

ダメだ……これは逆らえない。

「……すまんひより。少しだけ寝て良いか？」

「もちろんです。ゆっくり休んでください」

ひよりの言葉に俺はゆっくりと目を閉じて、眠りにつくまでひよりの撫で撫でを堪能するのだった。また来月もこうやって一緒に過ごしたいと思いつながら。

## ハプニング

「いよいよ6月も最後ですね。明日、クラスポイントがどれだけ増えていると思いますか？」

「わからんが、クラス間の差はそこまで変わらないだろう」

6月最後の日の放課後の図書館、向かいに座る坂柳がそんな事を聞いてくるので、俺は質問に答える。

今日は坂柳の2人で放課後を過ごしているが、これは珍しいことだ。坂柳と過ごす事は珍しいわけではないが、その際は大抵ひよりや神室がいるし。しかし今日は2人とも部活なので坂柳と2人で理科の課題をやりながら雑談をしている。

「そうでしょうね。ポイントが動くとしたら夏、水泳が関係するであろう特別試験ですかね」

水泳？……ああ、そういうや体育の先生が夏までに泳げるようにしてやるって張り切っていたが、やっぱり水泳が関係あるよな。

「もしそうならお前は参加できつ……あ！馬鹿した！」

そこまで話しながら俺は缶コーヒーを飲もうとしたが、余所見をしてみまい手から

すつぽ抜けて理科の課題プリントを坂柳の物も含めて汚してしまった。

「済まん坂柳。巻き込んだしまった」

「そんなに進んでないですから気にしないでください。とはいえ既に6時を回ってますので切り上げて新しいプリントを貰いに行きましょう」

坂柳はそう言つて立ち上がる。今日は神室がいないので俺が荷物を持つ。

「わざわざありがとうございます」

「気にするな。というかプリントについてもお前の分も俺が取りに行くからお前は先に寮に帰って良いぞ」

坂柳は足が遅いので、多分坂柳が寮に帰る前に合流出来るだろう。

「いえ。もう少し比企谷君とお話をしたいので一緒に行きます」

まあ迷惑をかけた以上文句を言うつもりはないので、俺は頷き坂柳と同じ歩幅で歩き始め図書館を出る。

図書館を出た俺と坂柳は特別棟に向かう。特別棟は家庭科室や視聴覚室、理科室など頻繁に利用しない施設が揃っている校舎だ。授業が終わると人の気配がなくなり不気味だが理科の先生は特別棟に部屋を構えているので行くしかない。

「ところで比企谷君。龍園君についてですが、Dクラスを叩くという話を龍園君から聞いてますか？」

特別棟に入り階段を上ると坂柳がそんな話をしてくる。

「Dクラスを叩くつてのは何度か聞いたな。ただ具体的な話は聞いてない」

「そうですか。では比企谷君。龍園君にDクラスを叩く時は私も力を貸すと伝えてくれませんか？」

「ん？龍園は停学や退学によるペナルティをDクラスを使って調べるつもりではあるが、お前も知りたいのか？」

つかDクラスを叩く為に龍園と坂柳が組むとか悪夢だろ？Dクラスの連中どころかBクラスも潰せる可能性がある。

「それもありませんが、由比ヶ浜さんを追い詰めていきたいと思います」

由比ヶ浜だど？確かに由比ヶ浜は坂柳をdisりまくって坂柳に敵認定されたが……

「由比ヶ浜を挑発して暴力を振るわせるのか？」

「まさか。それでは面白くありません。暴力を誘発させるなら違う生徒にします。例えばDクラス1の不良と言われている須藤君とかですな」

まあ須藤の短気っぷりなら余裕で暴力を誘発出来るだろう。

「それはわかるが須藤を停学や退学に追い込んで由比ヶ浜には影響無くね？」

「直接的には無いでしょう。しかしもしも須藤君を停学や退学に追い込んでクラスポイ

ントが減ったら、Dクラスからは由比ヶ浜さんを恨む生徒が出るでしょう」

なるほどな。確かに由比ヶ浜は明確な攻略法がある中間試験で赤点を取って退学になりかけた。クラスメイトや他クラスからの協力を得て退学は免れたが由比ヶ浜に良い感情を抱いてないDクラスの生徒はそれなりにいる。

仮にもし須藤が停学になってクラスポイントを失ったら、Dクラスの大半は須藤に敵意を向けるだろう。しかし人間ってのは醜い生き物だから一部の生徒は絶対に「ああ、あの時由比ヶ浜を助けなければ蓄えがあつたのに」と思ったり愚痴ったりするだろう。

そうなった場合、悪意は蔓延して少しずつ鎮静している由比ヶ浜に対する敵意が活性化する可能性が高い。

坂柳のやり方は一気に叩き潰すやり方ではなく、真綿で首を絞めるやり方だ。速攻で由比ヶ浜を潰すのではなく、ヘイトを集めてから潰すのか……由比ヶ浜の奴、とんでもない相手を怒らせたな。ま、同情はしないが。

そう思いながらも俺達は4階に上がって理科準備室に入って、そこにいた先生から事情を話し新しいプリントを用意して貰った。

そして外に出て廊下を歩いていると怒号と物音が聞こえてくるので、思わず坂柳と顔を見合わせる。

「もしかして騒動か？」

「あり得ない話ではないですね。特別棟には監視カメラがありませんから」

「そういやそうだったな。すっかり忘れてた。」

「見に行きましようか。誰が揉めるかは知りませんが、場合によっては今後の役に立つでしょう」

坂柳は好戦的な笑みを浮かべながら携帯を取り出して歩き出す。やっぱりコイツは生粋のドSだな。

呆れながらも俺達はひっそりと階段を降りると……

「おや、噂をすれば何とやら。須藤君でしたか」

坂柳の言うように3階ではDクラスの須藤がウチのクラスの石崎と小宮と近藤の3人を相手にしていた。

しかし須藤は3人を相手に容赦なく殴りまくっていた。床に倒れる近藤の顔面に拳を叩き込み、近藤を助けようとした小宮の顔面に肘打ちをぶちかまし、最後に石崎の鳩尾に蹴りを入れていた。

数分すると石崎達は床に倒れ伏し、須藤は何かを話しているが距離がそこそこあるの  
で聞き取れない。

そしてそのまま須藤は階段を下り去って行く。一方の石崎達というと、石崎が体をよ

ろめかせながら携帯を操作し始める。

「中々面白い光景が撮れました。さて比企谷君は今回の件についてどう考えますか？」  
「龍園の策だな。アイツらはこの後学校に「須藤に特別棟に呼び出され暴力を受けた」って訴えるだろうな」

元々龍園はDクラス、そして須藤をおもちゃにするとか言っていたし。

「そうでしょうね。そしてそうなった場合、十中八九須藤君が罰を受けるでしょう」  
「だろうな。監視カメラがない以上、大怪我をした石崎達が圧倒的に有利だし。」

そこまで考えていると石崎達はボロボロな体に鞭打って階段を下りる。

それが見えなくなると坂柳が話しかけてくる。

「比企谷君。今から龍園君に会わせて貰えませんか？」

「わかった。じゃあ龍園の部屋に連れてく」

言いながら俺達はゆっくりと階段を下り、特別棟を後にする。

「で？お前はどうすんだ？龍園を脅迫するのか？協力するのか？」

「協力というより依頼ですね。今回の件に協力する見返りを求めます」

「なるほどな。まあ何にせよお前が動く前に問題が起こって良かったな」

「全くです。こつちとしては下手に動く葛城君が煩いので、Cクラスが動いてくれたおかげで大分楽になるでしょう」

坂柳は安心したように笑いながらそう言ってくる。葛城とは会った事はないが、クラ  
ス間同士で対立するなよ。

そう思いながらもゆっくりと歩き、寮に辿り着いたので俺と坂柳はエレベーターに  
乗って、龍園の部屋がある階に行く。

そして龍園の部屋の前に着いた俺はインターフォンを押す。するとドアが開き、龍園  
が出てきて眉をひそめる。

「坂柳がいるとはな。俺に何の用だ？」

「特別棟」

「なるほどな。入れよ」

「邪魔するぞ」

「お邪魔します」

その一言だけで龍園は納得したようになって、部屋に入るように促す。その反応から  
龍園が仕組んだのは丸分かりだ。

「で？わざわざ俺の所に来るって事は取引でもしたいのか？」

「ええ。今回の件についてですが、私と私の派閥は全面的に協力します。見返りとして  
は須藤君が処罰を受けた際にその詳細を限なく教える事。そして夏に起こるであろう  
特別な試験で葛城派を叩く際に可能なら協力してください」

「前者については構わない。後者についてだが……どんな試験であっても、どんな結果になっても良いんだな？」

「ええ。葛城派を潰せるならBクラスに落ちても構いません」

龍園の鋭い眼差しと坂柳の鋭い眼差しがぶつかり合う。気のせいか空気が震えてるような……

互いに睨み合う中、龍園が息を吐く。

「……良いだろう。契約成立だ」

「ありがとうございます。ではこちらはCクラスの証人になる事、Dクラスの動向を探る事を約束します」

「比企谷。お前はDクラスを引つ掻き回せ」

「3万」

そう言うのと龍園は携帯を操作し始める。

「払ったぞ」

言われて確認すると確かに3万増えていた。

「まいどあり。で？引つ掻き回すやり方は？」

「お前に任せる」

「了解。わかっているとかがお前は動くなよ？」

既にCクラスのボスが龍園である事は有名だ。龍園が動くと思われたらAクラスの葛城派やBクラスが警戒するだろう。龍園がそんなヘマをするとは思えないが念には念だ。

「そのつもりだ。石崎達にはお前らの名前は出さないが動かないように言っておく」

それが賢明だ。石崎達が動いたら偽装工作や証拠隠滅をしていると疑われるからな。

「ではよろしく願います。こちら明日から動きまます」

「俺も色々考えとく」

そう言つて俺と坂柳は龍園の部屋を後にする。

「さて、入学して初めて遊ぶのですから楽しまないと損ですね」

そう言っているあたり坂柳の冷酷さがよくわかる。子供扱いしたら拗ねて普通に可愛いのに」

「煩いですよ比企谷君。私は子供じゃありません」

坂柳は杖で俺の足を突いてくる。どうやら口にしていたようだが、その仕草も可愛いだけだからな。

「はいはい。悪かったから暴力は止めような」

「なっ！子供扱いしないでくださいっ！」

軽い冗談のつもりで坂柳の頭をわしゃわしゃすると坂柳は真っ赤になって怒り出し、

杖で脛を叩いてくる。つて痛いわ！

と、その時だった。突如地震が起こった。まあ震度3か4なので避難する必要はない。

しかし身体が弱く、杖を地面につけていない坂柳にとっては大変みたいで……

「きゃっ」

そのまま俺の方に倒れてくる。その際、脛にダメージを受けていた俺は受け止めきれず……

「っつ」

そのまま背中から床に倒れる。幸い床はそこそこ柔らかいので痛みはない。

しかし、予想外の事が起こった。

「っ……………っ！」

その際に坂柳の顔が俺の股の間——正確に言うとな俺の急所部分に埋められたのだ。ズボン越しとはいえ何っー状況だよ！

予想外の光景に顔が爆発的に熱くなる。多分第三者からしたら茹で蛸のように真っ赤なのだろう。

そんな中、坂柳は顔を上げる。同時に俺の顔とさつき自分の顔を埋めていた場所を見比べて、彼女の顔も茹で蛸のように真っ赤になる。

「……すみません。私が身体が弱い所為で……」

「……いや、元々俺がからかったのが悪いからな？マジで済まん」

「べ、別に怒ってないです。それより……お互いに忘れましょう」

「……だな」

俺が頷くと坂柳は壁を使ってゆっくりと起き上がるので杖を差し出す。そうすると坂柳は礼を言ってくるがマトモに顔は見なかった。

俺達はそのままエレベーターに乗って、気まずい空気全開のまま別れるのだった。

当然夜になりベットに入るが、当時のことを思い出してしまい一睡も出来なかった。

「うう……比企谷君の馬鹿……比企谷君の所為で啜える夢を見たじゃないですか……  
！」

## 寝不足

「ふあああああ……眠い」

俺は大欠伸をしながらCクラスの教室に向かう。昨日は坂柳とのある一件の所為で一睡も出来ず、今はクソ眠くて仕方ない。

教室に入ると騒めきが聞こえてくる。大半が携帯を見ているが何があったんだ？と、ここで隣の席のひよりが話しかけてくる。

「おはようございませう八幡君。眠そうですが、眠れなかったんですか？」

「ん……まあな。というかクラスが騒々しいがなんかあったの？」

「八幡君、携帯を見てないんですか？ポイントが振り込まれてないんですよ。それも他所のクラスも」

ひよりにそう返される。そういや今日は7月1日だったな。言われて端末を見ると確かにポイントが昨日から変動してない。他所のクラスもって事はウチのクラスポイントが0になった訳ではないので、多分学校側にトラブルがあったからだろう。

そしてトラブルと言ったら昨日の一件以外思いつかない。恐らくトラブルが解消し

たら振り込まれるだろう。

と、ここで坂上先生は教室に入ってくる。

「諸君おはよう。朝のHRを始める」

「先生。ポイントが振り込まれてません。他のクラスも振り込まれてないみたいなんです。4クラスともクラスポイントが0になったんですか？」

生徒の1人が恐ろしい事を言ってくる。4クラスが0ポイントとかマジで笑えないぞ。

「実はトラブルがあつてポイントの支給が遅れているんだ。1年全クラスのポイント配布に遅れが出ているのでクラスポイントが0になった事はないから安心してくれ。とりあえず今月のクラスポイントを発表する」

言いながら坂上先生はホワイトボードに文字や数字を書き始める。

Aクラス 1004cp

Bクラス 745cp

Cクラス 586cp

Dクラス 80cp

先月のCクラスは490cpだったのでつまり96cpも上がっていたのだ。

Aクラスについては入学時のポイントよりも上回っているし、どのクラスも確実にポイントを増やしてきている。

「この1ヶ月よく頑張った。先月より96c pも増やしたが、伸びについては4クラスの中で1番だからね。ポイントについてはトラブルが解消次第支給される」

「えー、なんかお詫びとかないんですか?」

ある男子がそう言っているがないだろう。例のトラブルを引き起こした奴はウチのクラスにいるだろうし。

昼休み……

「済まんひより。今日は寝たいから図書館はパスする」

昼食を済ませた俺はひよりにそう口にする。昨日の一件の所為で一睡も出来なかったので昼休みは爆睡したい。授業中に寝たらクラスポイントが下がるので舌を噛んで何とかやり過ごしたが、ついに限界を迎えた。

「わかりました。もしよろしければ膝枕をしますよ」

ひよりはそう言ってくる。確かにひよりの柔らかな膝枕は最高だが……

「悪いが遠慮しとく。今日はガチで寝たいから枕だけじゃなく布団も欲しい」

「あ、そうなんですか。わかりました。もしも5時間目までに帰ってこなかったら放課後ノートを貸しますよ」

「サンキュー。んじやまた後で」

ひよりに礼を言ってから教室を出て保健室に向かう。これでベッドがありませんとかだったら、龍園からアルベルトを借りてベッドを譲って貰おう。

そんな事を考えながら保健室の前に着いたのでドアを開けようとする、同じタイミングでBクラス担任の星之宮先生が出てくる。

「あれ？保健室利用者？」

「1年Cクラス比企谷八幡です。実は寝不足なんでベッドを借りたいんですが」

言うなり星之宮先生は俺の顔を覗き込んで頷く。

「あく、君も眠そうだね。じゃあ真ん中のベッドを使って。私は今から職員室に行かないといけないんだけど、寝る前に机の上にある紙に記入事項を書いといて」

「わかりました」

星之宮先生に一礼してから保健室に入る。そしてクラスと名前、保健室に来た理由を書こうとするが……

（1年Aクラス坂柳有栖、寝不足って……まさかアイツも寝てんのか？）

俺が書こうとした欄の1つ上には坂柳の名前が書いてあった。寝てない理由は十中

八九俺と同じだろう。

そう思いながらも名前を書いて真ん中のベッドに近寄ると……

「すう……すう……すう……」

隣のベッドにて寝息を立てている坂柳が目に入る。どうやらぐっすり眠っているようだ。これなら気まずい雰囲気にならないで済む。

俺は靴を脱いでベッドに入り布団を掛ける。隣に坂柳はいるが、クソ強い睡魔には勝てず、直ぐに瞼を閉じてしまった。

「んっ……」

ふとした瞬間、目を覚ます。そして窓を見ると夕焼けが目に入る。同時に俺は午後0の授業を全て休んだ事を理解する。

やつちまった……これクラスポイントが下がる要因に……いや、授業中に寝たんじゃなくて先生から許可を得たから大丈夫か？

「しかし今は何時だ？」

「4時ですね」

「マジか……後でひよりにノート借りる……か？」

横から声が聞こえてきたので振り向くと……

「よく眠れましたか、比企谷君」

隣のベッドに坂柳がいた。そういや隣で俺より先に寝ていたな。

(しかし……思ったより恥ずかしくないな)

俺は暫くの間、マトモに話せないと思っていたがよく寝たからか、坂柳と向き合っても余り恥ずかしい気持ちが生まれない。

「……ぼちぼちだ。お前も起きたばかりか？」

「はい。お昼休みに寝始めたのですが、比企谷君もですか？」

「まあな。3時間ちよいだけだが体調はすこぶる良いな」

昨日一睡も出来なかったし当然といえば当然だ。

「私もです。比企谷君……改めて昨日の事を謝ります。不愉快な気分にはさせてしまいごめんなさい」

坂柳はペコリと頭を下げてる。対する俺も坂柳と向かい合って頭を下げる。

「いや、元々俺がお前をからかったのが原因だ。改めて謝罪する」

少なくとも坂柳によって不愉快な気分にはなっていない。

「私は怒ってません。比企谷君が怒ってないならこの話は終わりにしませんか？」  
「お前が怒ってないならこちらとしても願ってもない」

「なら良かったです。こんなつまらない件で仲違いするのは面白くないですから」  
まあ仲違いしたら物凄い間抜けかもな。

「だな。とりあえず目が覚めたし、星之宮先生に報告へ行かないか？」

保健室にはいないがクラスポイントが関係しているかもしれないので報告はするべきだろう。

「そうですね。多分職員室にいますから行きましょう」

言いながら坂柳は杖を利用してゆつくりとベッドから降りる。たったそれだけの事なのに30秒近く時間をかけている。ここまで身体が弱いとは予想外だが、日常生活は辛そうだ。

とはいえ同情はしない。健康体の俺が無闇に気遣っても坂柳からしたら「テメエ、馬鹿にしてんのか?!」と思われるかもしれないし。

俺もベッドから降りて靴を履いて坂柳の足に合わせてゆつくりと歩く。

そして職員室の前に着いたのでノックをしようとした時だった。

ガララ……ドントッ！

「ぎゃあっ！」

突如ドアが開いたかと思えば生徒が勢いよく出てきて坂柳を突き飛ばす。

俺が慌てて坂柳を抱きとめながら見上げると、昨日暴れた須藤はいた。職員室にいた事、物凄く苛々している事から察するに昨日の一件について問い詰められたのだろう。

「邪魔だ。ぼけつと突つ立ってんじゃねえよ」

須藤は舌打ちをしながらそう言つて肩を怒らせながら去つて行く。そんな須藤の態度に思うことはあるが坂柳が優先だ。

「大丈夫か坂柳？」

そう尋ねるも坂柳は苦しそうなので俺は坂柳を抱き抱えて職員室近くにあるラウンジの椅子に座らせる。

「星之宮先生には俺が報告するからちよつと休め」

坂柳が返事をする前に職員室に入る。

「失礼します。星之宮先生はいますか？」

「あ、比企谷君。目が覚めたから報告に来たの？」

「はい。それと坂柳も起きて外に居ます」

「オツケー、じゃあ記録しとくね」

星之宮先生はそう言つて職員室から出て行く。そして入れ替わるように坂上先生が話しかけてくる。

「おや比企谷君。体調はもう大丈夫かね？」

「ええ。ご迷惑をおかけしました。ちなみに聞きたいことがあるんですけど、さつき須藤が飛び出したのって例のトラブルですか？」

「詳しい事は明日話すが、ポイントの支給が遅れている理由はまさにそれだ。まあＣクラスのポイントについては影響がないと思うから、来週の水曜日の朝には支払われるだろう」

その言葉からして坂上先生は勝ちを確信しているようだ。まあ俺も確信している。今朝石崎達の怪我の様子を見たか余りにも痛々しい。監視カメラがない場所で3対1でボロ負けしたのは多少不自然かもしれないが、暴力を振るった須藤に重い罰が与えられるのは明白だ。

「わかりました。ではまた明日」

そう一礼してから職員室を出る。同時にラウンジの椅子に座っている坂柳の下に向かうがやはり辛そうだ。

「大丈夫か坂柳？」

「ちよつと苦しいですね……」

「そうか……あの野郎、随分とふざけてやがるな」

自分から坂柳を突き飛ばしておきながら邪魔呼ばわりするとは……正直須藤を嵌め

る事について多少思う事はあったが、さっきの時点でそれは無くなった。遠慮なく潰す。

……いや、今は坂柳を優先だ。

「とりあえず帰るか。歩くのが辛いなら運ぶぞ？」

「お願いしても良いですか？」

「もちろんだ。乗れよ」

言いながら坂柳に背中を見せる。坂柳の体重が軽いのは知っているので「あの……」  
大丈夫とは思うが、ここで坂柳が話しかけてくる。

「どうした？」

「可能なら抱き抱えて運んでくれませんか？以前された時、凄く安心したので……」

以前……ああ、由比ヶ浜から逃げる時か。

「まあ別に構わない」

恥ずかしい気持ちが無いわけじゃないが、坂柳が安心するというなら拒否するつもりはない。

「わかったよ。ほれ」

「あつ……」

俺が抱き抱えると坂柳は小さく吐息を漏らしてから、俺の腕の中で借りてきた猫のよ

うに縮こまり、ギョツてしてくる。

普段ならドキツとするかもしれないが、今の状況ではドキドキするのは不謹慎だから特に恥ずかしい気持ちで沸く事なく、歩き始める。

校舎を出るとそれなりに注目を集めるが今更だ。

「そういや坂柳。さつき坂上先生が来週の水曜日の朝にはポイントが振り込まれるって言うってたし、火曜日の放課後あたりに処罰が決まるみたいだ」

「そうですか……ではそれまでにDクラスがどう動くかをしっかりと把握しないといけないですね」

どうやら坂柳の中では由比ヶ浜だけでなく須藤も敵として認定されたようだ。まあ須藤の態度はクソだったし、同情しないけど。

そう思いながら俺は坂柳を抱き抱えたまま、寮に戻り坂柳の部屋がある階に到着する。

そして坂柳の案内の元、坂柳の部屋の前に着いたのでゆっくりと下ろして杖を渡す。「わざわざありがとうございます。この恩は必ず返します」

「気にすんな。それよりもしもヤバくなったら直ぐに連絡しろ」

「わかりました。ではこちらをどうぞ」

言いながら坂柳は懐から何かを出すが……

「待てコラ。カードキーを渡すなよ。俺は男だぞ」

それは部屋のカードキーだった。懐から出した事から坂柳の部屋のそれに違いない。俺も普段はポケットに入れて、予備を部屋の机の中と懐に入れていたが、まさかカードキーを渡してくるとは思わなかった。

「問題ありません。比企谷君はいやらしいことをすると思えないですし、今後作戦会議をする時に電話やメールに記録を残すと危険な際は直接話す必要がありますから」

いや、だからって躊躇いなく自分の部屋の鍵を渡すか普通？

「では私は失礼します。今日は色々とお世話になりました」

坂柳はそう言つて俺が声をかける前に部屋に入る。廊下には坂柳の部屋のカードキーを持った俺のみ。

「いや、マジでどうすんだ？」

手にあるカードキーを持ちながらそう呟くことしか出来なかった。

## 調査

7月2日の朝のHRだった。

「今日は君達に報告がある。先日石崎君と小宮君と近藤君がDクラスの須藤君との間でトラブルが発生した」

「坂上先生の一言によりクラスが騒めく。しかし坂上先生はそれを無視して、Dクラスの須藤と喧嘩をしたこと、場合によっては須藤が停学になる事などを淡々と告げる。

「先生、結論が出てないのは何故でしょうか？」

「石崎君達は須藤君に呼び出されて一方的に殴られたと訴えた。それに伴い昨日の放課後に須藤君に事情を聞いたところ、彼は石崎君達に呼び出されて喧嘩を売られたと言った。意見が食い違い真実がわからない為、結論が保留となっている。それと目撃者がいるなら挙手して貰いたい」

坂上先生がそう言ったので俺は手を挙げる。これは昨日の夜に龍園から指示を受けたからだ。審議が行われた場合に備えて戦う準備をしろってな。

それに伴い、Cクラスの生徒は一斉に俺を見てくる。当事者の石崎と小宮と近藤は驚きの表情を浮かべ、龍園は楽しそうに笑っている。

「比企谷君は見たようだが、それは本当かね？」

「はい。最初から見たわけではないのでどっちが喧嘩を売ったのかはわかりませんが、須藤が石崎達をボコして去って行くのは見ました」

「わかった。最終的な判断は来週の火曜日到下されるが、その際に行われる話し合いに参加してもらう事になるが大丈夫かね？」

「了解しました。時間や場所については？」

「それは月曜日か火曜日のHRで伝える。それではHRを終了する」

坂上先生はそう言つて教室から出て行くと、隣に座るひよりが話しかけてくる。

「なんだか大変なことになりましたね」

「まあな。軽い悪口のぶつかり合いならスルーしていたが、須藤の暴力はやり過ぎだ」

ハッキリ言つて須藤の暴力は石崎達が嵌める為の罠があったとわかっているもやり過ぎだ。仮に石崎達が嵌めた事を見抜かれても須藤には重い処罰が与えられるだろう。

「お、おい比企谷。お前は本当に見たのか？」

ひよりに返事をする则当事者の一人である近藤が話しかけてくる。

「まあ一部だがな。一応証言はするが、余りアテにするな。俺がCクラスの生徒である以上、嘘の目撃者と疑われる可能性が高い」

「そ、そうだよな……」

近藤は俺の言葉に頷く。実際俺が見たと証言しても証拠を用意しなかったら信憑性は低いだろう。先生達はDクラスを貶める為の策と疑う可能性は充分にある。

しかし近藤がそんなに心配する必要はない。何せ目撃者は俺以外にもいるからな。それも他クラスで証拠の動画を持っている最強のカードだ。

しかしそれは言わないでおく。坂柳と通じていることがバレたら面倒だからな。

そう思いながら俺は1時間目の授業をするのだった。

『……そんなわけでDクラスの生徒は目撃者探しをしてる。Bクラスに声をかけてたけど効果について無いみたい』

放課後、俺は自室で調べ物をしながら坂柳の配下の神室からDクラスの動向についての報告を受けている。

坂柳は目撃者としての役割があるので余り動いてないが、それについては不満はない。動きまくったらCクラスと坂柳派が組んでいる事を疑われるからな。

「わざわざ報告ありがとな。とりあえず進展があつたら連絡をくれ。報酬が欲しいなら

龍園に頼んで用意して貰う」

『じゃあ自由』

「……諦めろ」

神室の要望を一蹴する。こればかりは万引きした神室に非があるので俺にはどうすることも出来ない。

『冗談。あんたにそれを希望しても無理だから。じゃあまた進展あつたら連絡する』

そう言われてから通話が切れるので携帯を閉じてパソコンに意識を戻す。調べる事は須藤の素性についてだ。須藤の性格的に中学時代も暴力事件などを起こしている可能性が高いからそこを調べる。

幸い入学早々にバスケット部でレギュラー候補となつているし、中学時代も相当なバスケット選手として名を馳せていたので所属していた中学については簡単に特定出来た。

よつて俺はその学校や中学バスケット、学校周辺に関する掲示板や2ちゃんなどを調べる事にした。可能なら学校裏サイトも探すつもりだ。

状況的にCクラスが勝つ可能性が高いが絶対ではない。だから俺や坂柳あたりが可能な限り絶対に近づけないといけない。

これが普通の生徒なら俺もここまでしないが、須藤については俺自身が気に入らない存在だし、容赦はしない。

全力で叩き潰す。

1時間後……

「とりあえずこの辺りにしとくか。しかしネットって情報が多いな……」

俺は携帯とパソコンの電源を切ってから、手元にあるメモ帳を見る。

そこにはネットに載っていた須藤の情報を書き記しているが、大半どころか全て須藤の悪評だった。

3日に一度は生徒と揉める、他校の生徒をボコしてバスケ名門校の推薦の取り消しを受ける、教師を殴り飛ばす、後輩から金を巻き上げている、先輩からは殴り屋として重宝されているなど、中学時代の須藤は碌でもない人間だったようだ。

勿論デマもあるだろう。中にはイケメンを半殺しにしてイケメンの彼女をレイプしたとか、激怒して人を殺したなんてのもあったが、これは絶対嘘だ。真実ならこの学校に入学出来ないし。

しかししよっちゆう生徒と揉めていた事と暴力事件を起こして推薦取り消しについてマジだろう。あらゆる掲示板などを見たがこの2つについてはどの掲示板にも載っていたし、学校での言動を考えても信憑性が高い。

情報収集についてはこれでよし。次は情報の信憑性を高める為に動かないとな。

そう判断した俺は学校のHPの掲示板に移動して須藤に関する情報提供を呼びかける。須藤の素性のみならず、これまで学校で須藤が起こした問題についても求める。

しかしこれだけでは足りないもので有力な情報を提供した生徒にはポイントを払うとも書いた。こうすりゃ生徒も興味を持つだろう。

Dクラスの連中は他クラスに聞き込みをしようだが、他クラスの生徒からしたらメリツトがないのだから報酬抜きだとマトモに取り合わないのは容易に想像出来る。俺としては早い内に情報についても差をつけておきたい。

「掲示板への書き込みもよし。んで次は龍園に必要な経費の用意を頼んで、現場検証に行きますか」

俺は椅子から立ち上がり、部屋を出る。時刻は既に7時、部活が終わってる時間だから誰も特別棟には居ないだろうし、情報収集するなら今だ。

そう思いながら俺は龍園に報告と必要経費の準備のメールを送りながらエレベーターに乗る。そして寮を出たところで「ポイントが必要なら俺が出すから出し惜しみするな」と何とも頼もしいメールが来た。

そのまま学校に入ろうとした時だった。

「こんな時間に学校に入るとは忘れ物か？比企谷」

正面からそんな声が聞こえてきたので顔を上げると堀北会長がいた。同時に俺は息を呑んでしまう。ただ話しかけられたただけなのに緊張してしまう。

「いえ。例の事件の現場の見学に」

「馬鹿正直に答えるのだな」

「別に悪い事はしないですし」

というか嘘を吐いても見抜かれそうだし

「そういうええお前も目撃者の一人だったな」

「詳しいっすね。話し合いつて会長も出るんですか？」

「今回のようなケースの場合、基本的にクラスの担任と当事者、そして生徒会との間で審議が行われる。まあ今回はお前と坂柳も参加するがな」

どうやら坂柳も目撃者として名乗りを上げたようだ。これで今の所順調だ。

「裁判のように弁護士とかはアリなんですか？」

「当事者、お前達Cクラスなら石崎、小宮、近藤の許可があれば2人まで許されている」  
なら俺と龍園が弁護人に……いや、俺はともかく、龍園は既に危険人物として有名だから弁護士にしたら心証が悪くなりそうだな。

「そうですか。返答ありがとうございます」

「構わん。それよりもだ、お前は今回の審議はどうなると思う？」

「こちらを見定めるように聞いてくるが……」

「それは審議の内容ですか？それとも結果ですか？」

「両方だ」

「内容については泥仕合になるでしょうね。結果についてはどつちが嘘を吐いてたかはわかりませんが、須藤の暴力は過剰でしたから罰は避けられないでしょう」

これについては殆ど確実だ。石崎達は嘘を認めないだろうし、須藤は感情的だから泥仕合になるのは明白だ。そして須藤に対する罰は怪我をさせた時点で有罪は確実だ。

「だろうな。ちなみに比企谷。お前がDクラスの立場ならどう戦う？」

「完全無罪を勝ち取るなら馬鹿正直に審議では戦いません。どうにかして脅迫ネタを掴んで訴えを取り下げないように脅しますね。もしくは素直に負けを受け入れて、須藤に今後戒める為に罰を与えることを許容します」

問題を問題にしないのが一番だからな。

「ふっ……生徒会長を前にしてそんな大胆な発言をするとは思わなかったぞ」

会長は薄く笑うがひよりが浮かべる魅力的な笑みではなく、龍園や坂柳が浮かべる怖い笑みだった。

「この学校は完全な実力主義です。相手に訴えを取り下げさせるのも実力として問題ない筈です。ま、脅迫ネタを掴むのが難しいですけど」

事件が起こったばかりである以上、石崎達も警戒するだろうし。

「では俺はこれで失礼します。当日はよろしくお願います」

小さく一礼してから特別棟に向かう。パッと調べますか。

そう思いながら特別棟に入る。

そして調べた結果、事件現場の3階にて石崎達の血痕が残っていたので写真を撮っておく。

(しかし何故特別棟には監視カメラがないんだろうか?)

アレか? 悪い事を企む時に使えって学校側の配慮……いや、しかしそれならわざわざ

天井付近にコンセントを設置する事はない筈だ。

そう思いながらも俺は3階の写真を撮りまくるのだった。

## 暗躍

「それで比企谷。進捗はどうだ？」

7月3日の夜、俺の部屋にて龍園がそう尋ねてくるので俺は机の中からメモ帳を、鞆の中からコピー用紙を取り出して龍園に渡す。

「メモ帳に書いてあるのが俺がネットで調べた須藤の情報、コピー用紙に書かれているのが校内掲示板で得た須藤の情報だ」

俺が龍園に渡したのは須藤に関する情報だ。前者については中学時代の須藤のネタが多く、後者については入学してから須藤が起こしたトラブルネタが多い。

「仕事が早いな。とりあえず暴力事件で推薦取り消しになったのは事実だな。このカードについては審議で使う」

龍園はそう言っている。須藤が中学時代に暴力事件を起こし推薦取り消しになったのは俺が作った掲示板にも書いてあったので事実だろう。

「他の情報については？」

「コピー用紙に書いてある情報については信憑性が高いからCクラスの連中に読ませてDクラスを挑発する。この場合、下手な嘘より事実を広めた方がいい」

龍園は早速攻撃的な作戦を口にする。本来なら無駄とわかってても諫めるかもしれないか、相手が須藤の時点でその気はない。

と、ここで俺の携帯が鳴り出す。画面を見ると神室からだった。

「出て良いか？」

「ああ」

龍園から許可を得たので電話に出る。

「もしもし？」

『比企谷？進展があった』

進展だと？俺はてつきり、Dクラスは碌に準備も出来ない状態で参加すると思っただがな。

「何だ？新しい目撃者をDクラスが見つけたのか？」

『そうじゃないわ。BクラスがDクラスに協力することになった』

あ？BクラスがDクラスに協力だと？

「確かな情報か？」

『さつき特別棟から一之瀬がDクラスの生徒と話しながら一緒に出てきたし、可能性は高い』

一之瀬……確かに奴は目の前のトラブルを止めようとする性格だし、今回の件を見過

ごせないと動いた可能性もある。

とりあえずBクラスとDクラスは同盟を組んだと考えておこう。

「もしかして俺達がお前らと組んでるのもバレた？」

『絶対とは言い切れないけどバレてはないと思う。事件以降、私達は直接会ってないし、私も電話するときは自室でしてるし』

「わかった。じゃあまた進展があつたら頼む」

そう言つてから通話を切つて龍園に話しかける。

「神室から報告、BクラスがDクラスに協力した可能性有りとのことだ」

「なるほどな。CクラスがBクラスに迫るのを危惧したからか、はたまた俺の仕業と一之瀬が勘付いたかのどっちかだな」

「で？Bクラスについても仕掛けるのか？」

「Bクラスについては放置が良い。出来るとしても精々目撃者の搜索くらいだろ」

「わかった。じゃあ話を戻すがDクラスに挑発するのは賛成しない。審議前の挑発は妨害行為と疑われるぞ？」

「安心しろ。挑発つて言つても悪口じゃなくて、須藤に対して自首しろつて懇願するだけだ」

いやそれある意味悪口よりもタチの悪い挑発だろ……ま、大将は龍園だからこれ以上

反対するつもりはないが。

「好きにしろ。それと有力情報を提供した奴に対するポイントは1人あたり5千で大丈夫か？」

「情報提供者は11人……ま、そのくらいが妥当か。後でアドレスを俺の所に送れ」

「了解した。俺は引き続き情報収集に勤しむ」

さて、DクラスはBクラスと組んだようだが……まあ龍園みたいなエグい手段は使わないから大丈夫だろう。

「それで今後目撃者について探すんだけど、学校のHPを使った方がいいかな」

同時刻、Bクラス代表の一之瀬帆波は今後の打ち合わせに関する事案としてDクラス主力の堀北鈴音にそう告げると、堀北は訝しげな表情となる。

「HP？」

「うん。学校のHPには掲示板があるの。既にCクラスは情報収集をしているから、情報の差があるだろうから少しでも差を埋めた方がいいよ」

一之瀬はそう言って自分の携帯を操作して八幡が作ったページを見せる。そこには

須藤に関する情報を求めている旨が記されていた。しかも生徒をやる気にさせる為か有力情報提供者にはポイントを渡す事も記されている。

「今回の件、十中八九Cクラスが仕掛けた罠だと思うけど、向こうは既に沢山の情報を持つてるから嘘を押し切られる可能性があるから気をつけた方がいいよ」

「言われるまでもないわ。それと一之瀬さん、Cクラスの龍園君について詳しい情報を知ってるかしら？」

予想外の名前が堀北の口から出て一之瀬が目を丸くする。

「もう龍園君と接触したの？」

「直接接触したわけじゃないけど……」

堀北はそう前置きして中間試験結果発表日の一件を話す。それを聞いた一之瀬は陰しくなる。

「退学者が出かけたのは知ってたけど、土下座を強要してきたんだ……結論から言うと龍園君はCクラスのボスだね。自分の利益の為なら他を陥れる事を迷わないし、クラスメイトを駒としか見てない危険な人物。以前BクラスもCクラスと揉めたんだけど、その時に裏で糸を引いてた事もあるくらい。多分今回も一枚噛んでいると思う」

「そう……もう一つ聞きたいのだけど、比企谷八幡という男の情報は持つているかしら？」

堀北は過去に何度か会ったCクラス男子について質問すると一之瀬はキョトンとしてから口を開ける。

「比企谷君？比企谷君については謎が多いんだよねー。特に動いてる訳じゃないけど、Aクラスリーダーの坂柳さんと仲が良いし、龍園君にその事を咎められてないから只者じゃないと思う」

「そう……わかったわ」

堀北は一之瀬の言葉に頷きながら、中間試験結果発表日に見た2人の男子を思い出すのだった。

翌日……

「だからさ。頼むから自首してくれないかな？須藤君が嘘を吐いている所為で皆に迷惑がかかっているんだよ？」

「ふざけんじゃねえよ！嵌めたのは小宮達なんだよ！」

朝、教室に向かおうとするとDクラスの教室前でCクラスの生徒数人が須藤に自首を

するように頼んでいて、須藤がキレている。どうやら龍園の奴、早速作戦を開始したようだ。

「悪いけど信じられないな。須藤君って入学初日に上級生と揉めて、コンビニのゴミ箱を蹴り飛ばしてたし」

「あ、私もそれ見た。それと食堂で無理矢理割り込んで、注意した生徒に逆ギレしたよね？」

「それと図書館でウチのクラスの比企谷の胸倉を掴んでた事もあるし、信じろって方が無理だよ」

Cクラスの生徒は容赦なく須藤を責める。対する須藤は苛立ちを露わにしながらも手を出さない。何せ彼等が言っている事は全て事実であるし、審議前に殴ったら退学する危険性があると考えているから殴れないのだろう。

「小宮達に呼ばれたって言うのも、小宮達を嵌める為の嘘なんだよね？正直に認めてよ」「くそがつー！」

須藤は怒りながら教室に入る。どうやら手を出させるのは失敗に終わったようだな。

しかし廊下を歩く他の学生からしたら、須藤にとつて都合が悪くなったから逃げたと考えるだろう。それによりDクラスは益々見下されるようになっていくのは明白だ。龍園の奴、本当に容赦ないな。

そう思いながらCクラスに入って自分の机に座るとひよりが話しかけてくる。

「八幡君。少し聞きたい事があるんですが、大丈夫ですか？」

「どうした？」

「えっと、八幡君も証人として来週の話し合いに参加するのですよね？」

「加えて龍園から弁護士人として出るように頼まれている」

「その件なんですけど、日曜日も忙しいのですか？」

「？いや、割と余裕はあるな」

既に話し合いで武器として使うカードも、向こうが証人などを用意した対策も殆ど完成している。加えて坂柳もいるから作戦は殆ど完成しているので、休日返上して対策を考える程じゃない。

「でしたら以前約束したように公園に行きませんか？ポイントは支給されてないので新しい本は買うか決めてませんが……」

ああ、月に一度敷地内の隅にある公園に行くって約束していたな。ひよりもちゃんと覚えていてくれて嬉しいな。

「お前が望むなら行くこうぜ。審議もクラスポイントが関係するから大切だが……」

ひよりと過ごす時間ももつと大切だ。

それはまだ言えない。恥ずかしい気持ちもあるが、正直言ってこれ以上彼女に歩み寄

るのが怖いからな。

「だが？」

「何でもない。単に疲れを癒したいって思っただけだ」

そう返事をして1時間目の授業の準備を始める。これも嘘ではないから問題ない筈だ。

それから俺はいつものようにクラスポイントが減らないように真面目に授業を受けて、放課後になって情報収集と作戦の見直しをするのだった。

## 気分転換

「……よし、完成だな。後はレタスの水を切れば……」

日曜日の早朝、俺は土曜の夜のうちに仕込んでおいた食材を調理して弁当箱に詰め  
る。弁当箱にはおにぎりや唐揚げ、レタスやスパゲティなど定番料理が入っている。

今日はひよりと公園で過ごす日で、前回はひよりが弁当を作ったので今回は俺が作っ  
ている。専業主夫志望だから基本的な料理なら問題なくこなせる。

しかし俺が他人、それも女子の為に飯を作るとは、入学前には考えられなかった。

「……ただいま、貴方……」

「……おかえりひより。風呂と飯、どっちにする?……」

「……八幡君で……」

「……やれやれ。甘えん坊だ……」

(つてー何を考えてんだ俺は?!痛々しいわ!)

俺は自分の痛々しい妄想にツッコミを入れてしまう。マジで俺の頭は何を考えてん

だよ。アホ過ぎる……

頭を振って妄想を吹き飛ばした俺は弁当箱に具を詰め込み、魔法瓶に紅茶を入れて蓋をする。これで完成だが、ひよりの口に合ってくれると嬉しい。

弁当を作り終えた俺はキッチンを出てテーブルの上にある原稿をチェックする。審議の時に石崎達が話すべき内容だ。向こうがしてくる質問を予想してそれに合わせた答えを用意してある。

用意したのは龍園だがこれを改善して、更に俺が用意したカードを使うタイミングをチェックしないとイケない。まあやり過ぎると、準備が良過ぎると疑われる可能性もあるので坂柳との連携も大切だ。

それと今日出掛ける時には色々と買いたい物があるからチェックもしないとな。デジカメとボイスレコーダー、可能ならペン型カメラも買っておきたい。まあペン型カメラはないと思うけど。

今回の件ではわかったが、今後は特別な試験以外にも審議などでぶつかる可能性が高い。その時に重要なものは証拠だ。よって証拠を集める為に必要な物は買い揃えておきたいからな。

(今月分のポイントは支給されてないが20万近くあるし問題ないな)

俺は最低でも10万は懐に残しておく方針をとっているが、それでも使えるポイント

は9万近くあるし買えるだろう。買えないならポイントが支給されてから買えば良いだけだ。

そんな事を考えながら原稿をチエックする。原稿そのものは問題ないが、問題は質疑応答する石崎達にある。俺は感情的にならない自信はあるが、石崎達は割と感情的だからな。そこを突かれる可能性もあるし、事前に龍園に紹介してもらおうか。

俺は審議の予定を考えながらも、ひよりと過ごす時間を心待ちにした。

2時間後……

「おはようございます八幡君」

寮のエントランスで待機しているとエレベーターからひよりが降りてきて笑顔で挨拶をしてくる。相変わらずひよりの笑顔はオアシスだな。

「おはようひより。それじゃあ行くかうか」

「はいっ」

ひよりが満足そうに頷いたのを確認した俺はエントランスを出てショッピングモールの方へ向かう。

「話し合いまで後2日ですが大丈夫ですか？」

「知らん。結局のところ、俺は思った事を話すだけだ。重要なのは石崎達と須藤のどちらかが嘘を吐いている事だ」

「そうですね。両者共に自分の言っている事は事実と言うでしょう。そうになると怪我の具合から判断しないといけないですね」

「まあな。そして怪我の具合で判断した場合、証拠を持っているこちらの勝ちは絶対だ」  
つまりDクラスは石崎達が嘘を吐いているって事を証明しないと勝ち目は一切ないって事になる。その為には最初から事件を見ていた目撃者が必要だが、そんな奴はいないだろう。俺と坂柳ですら途中からしか見てないし。

「そうですね。まあ何にせよ、今回の事件を最後に揉め事は終わりになって欲しいですね」

ひよりはそう言っているが、ウチのクラスのリーダーがアレだからな。平穏な学校生活を送るのは殆ど不可能に近いだろう。

「それは厳しいだろうな……つと、済まんひより。シヨツピングモールで買い物しても良いか？」

「本ですか？」

「いや、デジカメとボイスレコーダー、後あつたらペン型カメラを買いたい」

「なるほど……私も買った方がいいですかね？」

「お前は他クラスから狙われないだろ。俺は既に龍園と割と強い繋がりを持つてるから用心として買うんだよ」

少なくともAクラスの坂柳と坂柳派の人間は俺の立場を知ってるだろうし、Bクラスの一之瀬あたりも薄々勘付いているだろう。他クラスの攻め方は知らないが備えあれば憂いなしだ。

「そうですね。とりあえず電気屋に行きましようか」

ひよりから了承を得たので俺達は電気屋に入る。そして中を見渡すと……

（おいおい。ボイスレコーダーはともかく、ペン型カメラや監視カメラも売ってんのかよ？）

監視カメラというかネットワークカメラだけど。計測や記録、つまり勉強の為に売られているようだが、使い手によっては悪さに使える代物だ。コイツは完全に予想外だな。

（一応龍園には報告しとくか。場合によっては役立つかもしれないし）

そう思いながら俺は龍園にメールをしてから本来の目的であるボイスレコーダーとペン型カメラを取ってデジカメラが売ってある場所に向かう。カメラについては予算オーバーだから今日は買わないでおく。

そしてレジでポイントを払って店を後にしようとしたが……

「あっ……」

ある事に気付き、俺は反射的にひよりを抱き寄せながら柱の影に隠れる。何故なら雪ノ下と由比ヶ浜がシヨツピングモールを歩いていたらからだ。

以前坂柳と登校してただけで、由比ヶ浜は脅し云々言って喚いたのだ。休日にシヨツピングモールでひよりと歩いているのを見られたら絶対に面倒な事になるし。

物陰に隠れる中、2人の会話を耳にする。

「ゆきのん、今日は無料食品に肉が多くて良かったね」

「ええ。それにしても須藤君は本当に足手纏いね。退学になった方がDクラスの為になるわ」

「暴力を振るうなんてマジでキモいし」

「全くね。それにしてもなぜ彼程度の存在が入学出来たのかしら?」

「だよねー。ヒツキーも入学出来るし、ゆきのんがDクラス行きなんて試験官って頭悪過ぎだし」

「そうね。本当にこの学校は国主導の学校なのか不思議に思うわ。でも私が生徒会長になって学校を良い方向に変えてみせるわ」

「待つて。確かにゆきのんなら出来ると思うけど、落とされたじゃん。どうするの?」

「落ち着いて由比ヶ浜さん。私が落ちたのは実力不足じゃなくて堀北会長が私を恐れていたからに決まってるわ。だから会長が引退したらもう一度希望して生徒会入りすれば良いだけの話よ」

「ゆきのん流石！アタシも生徒会に入って頑張るね！」

そんな会話が聞こえてきて、ため息を吐いてしまう。コイツらが生徒会？3日もしないで解散請求が求められるだろう。

とうか堀北会長が誰かを恐れるとかあり得ないだろう。スペックなら陽乃さんクラスだろうし。相変わらず雪ノ下は自分が全て正しいと思っているようだが、実力不足にも程があるだろう？

そんな事を考えているとチョンチョンと肩を叩かれたので下を見ると……

「えつと……いきなりどうしんだですか？」

少しだけ頬を染めているひよりが俺の腕の中にいた。しまった、雪ノ下達に見られないうち、柱の影に隠れた際にひよりを抱き寄せてしまったようだ。

「す、済まん。余り関わりたくない奴がいたら隠れたんだ。いきなり抱き寄せて悪かった」

下手したらセクハラで訴えられてもおかしくない事をやっちゃったよ。マジで反省しないと。

「いえ。驚きはしましたが、別に怒ってはないですよ?」

ひよりからは怒りの色は見えない。その事から本当に怒ってないのだろう。

「それよりも面白い物が終わったのならそろそろ行きましようか」

俺はそんなひよりの言葉に頷き、2人で公園に向かうのだった。

そして公園に着くとレジャーシートを広げて、靴を脱いでシートの上に座る。学校は海に囲まれていて、公園は学校の四隅にあるからか相変わらず潮の香りが強い。

潮の香りを感じながらも図書館で過ごす時のように無言で本を読み始める。

暫くの間、本を読んでいると風が吹き、何か顔顔をくすぐってくる。予想外の感触に顔を上げると、その正体は俺の隣で本を読んでいるひよりの髪である事に気付く。

当のひよりは夢中になって本を読んでいる。その姿は美術品のように美しく、気がつけば手にある本ではなくひよりを見ていた。

同時に俺はひよりから目を逸らして本を読もうとしたが、同じタイミングでひよりの腹から可愛らしい音が鳴るので顔を上げると目が合う。

「……聞こえました?」

若干恥ずかしそうに聞いてくるので無言で頷く。同時に俺の腹からも音が鳴る。

「……飯にするか」

俺はひよりの返事を聞かずに弁当箱を取り出してレジャーシートの上に広げる。

「わあ……美味しそうなお弁当ですね」

「美味いかはわからないから食べてみてくれ」

「はい……あつ、美味しいですよ」

ひよりは唐揚げを食べながら笑顔を見せてくる。

「なら良かった。ありがとな」

自分の作った飯が美味いって言われるのは存外悪くないな。

嬉しく思いながら食事を済ませると……

「ふああ……」

俺とひよりは同時に小さく欠伸をしてしまう。

「眠いのか？」

「実は今日を楽しみにしていたので余り眠れなかったんです。八幡君もですか？」

「まあな」

朝早くに弁当を作る為に起きたので結構眠い。

「でしたら今日は2人で寝ませんか？」

するとひよりはいつもの表情でそんな事を言ってくるが……

「言ってる意味わかってんのか？」

他の男子が聞いたなら理性を吹っ飛ばしてるかもしれないぞ。

「?変な事を言いましたか?」

この天然め……自分が言ったことの恐ろしさを理解してないようだ。

「それに以前八幡君が寝た時は気持ち良さそうでしたから……ふあ……やつぱり少し眠いので寝ませんか?」

「……わかったよ」

俺は止む無く了承する。ひよりが眠そうだから一蹴出来ないし。つか俺もマジで眠い。弁当を作る事も原因の一つだが、ひよりと過ごす時間を楽しみにしてマトモに寝れなかったし。

「では空を見ながら寝ましょう」

ひよりはそう言って広いレジャーシートに寝転がるので俺も寝転がる。レジャーシートが広くて良かった。

ひより同様に空を眺めると雲がゆっくりと動いている。あ、雲のように自由気ままに生きてえな……

そう思いながら雲を眺めていると眠気がやってくるので特に逆らうことなく、ゆつくりと目を閉じるのだった。良い夢を見れたな良、い……な……

次に目が覚めたのは太陽が傾き夕焼けが綺麗な頃であったが、その際にひよりに抱きついていて、即座に謝り倒した。

## 噂

審議前日の月曜日、学校の支度をしながら携帯を使って自分が立ち上げた掲示板の募集を確認した時だった。

「俺以外にも暴力事件の情報収集を呼び掛ける奴が出たか……」

掲示板には俺と同じように暴力事件について情報提供を呼びかけているコーナーがあった。これは間違いなくBクラスの仕業だな。

何故なら有力な情報提供者にはポイントを支払うって書かれているが、Dクラスに払えるとは思えない。0ポイント生活に加えて由比ヶ浜を退学から助ける際に龍園に10万、学校に20万のポイントを払ってDクラスはクソ貧乏だろうし。

(放っておいても問題ないがポイントは欲しいし……)

俺はフリーアドレスを利用して入学してから須藤が起こしたトラブルの1つを書いて掲示板に書かれたアドレスに送りつける。事実だからポイントを貰えるだろう。

「さて……学校に行きますか」

俺は鞆を持って部屋を後にする。そしてエレベーターを使って一階に降りて寮を出る。

今日も良い天気で気分が上がる。昨日も良い天気だったが、ひよりと昼寝して……これ以上考えるのはよそう。

俺は頭を振って昨日の事から逃げるように学校に向かい、下駄箱で上履きに履き替え  
ている。

と、ここでBクラスリーダーの一之瀬と参謀の神崎、更には堀北会長と激戦を繰り広げた男の3人が階段近くにいるのを目にする。

何を話してるのか気になるがここで立ち止まるのは不自然だし、通り過ぎるしかない。

ため息を吐きながら廊下を歩き、3人に不自然に思われない程度の速さでゆつくりと近づく。

「訴えた1人の石崎くん、中学では相当なワルだったんだって。喧嘩も相当強いらしいよ」

「もしかしたらわざと須藤にやられたのかもしれないな。須藤だけが無傷なのは不自然だ」

「神崎君の言う通りだね。それでもう一件は……」須藤も石崎も態度は悪いが、入学初日から上級生3人と揉め事を起こした須藤が喧嘩をふっかけた可能性が高い」だって」

「それは事実だな。コンビニ前で揉めてるのを見た」

そんな会話が耳に入る。どうやら俺の情報はしつかり届いたようだ。

しかし石崎が元ワルである事を知られたか。別に知られても戦局はそこまで変化しないが、知られない方が事は進みやすかったんだがな。

ため息を吐きながらもCクラスの教室に入ると、いつものようにひよりが話しかけてくる。

「おはようございませす八幡君」

「おはよう……昨日は悪かったな」

俺はそう返す。昨日俺はひよりと公園に行った。そこで昼飯を食ってから眠くなったので2人で寝たのだが、目が覚めた時に俺はひよりを抱きしめていたのだ。

その際にひよりに謝って、気にしてないと言って貰ったが申し訳ない気持ちは残っている。再度謝る。

「昨日も言いましたが私は怒ってないですから気にしないでください。八幡君に抱きしめられた際には温かくて気持ちよかったですから」

そう言つて貰えるとありがたいが……

「おい聞いたか？今比企谷に抱きしめられたって言ったよな？」

「マジかよ？先週なんてAクラスの坂柳をお姫様抱っこして下校したのにかよ……」

「まさかの二股？リアルで見るのは初めてだわ」

「畜生……ぼっちの癖に……！」

TPOを考えて言つて欲しい。クラスの連中が物凄い眼差しで見てるし。先週須藤に傷つけられた坂柳をお姫様抱っこした事もあつて噂は止まらない。このままだと明日にはCクラスのみならず、AクラスとBクラスとDクラスにも広まっている可能性が高い。女子の噂話ほど恐ろしい拡散方法はないからな。

当のひよりは特に気にしてないようにぼわぼわした表情を浮かべている。畜生、可愛過ぎて文句を言えない。

そんな事を考えていると坂上先生が教室に入ってきてHRが始まる。その際は静かになったが、クラスの大半が興味深そうな目を俺に向けてくるのが腹立たしかったのは言うまでもない。

尚、須藤の情報の報酬として5千ポイントの臨時収入が入った時は存外嬉しかった。

数時間後……

「比企谷、ちよつと付き合えよ」

昼休み、昼食を食べようとしたら龍園が話しかけてくる。背後には石崎、小宮、近藤の3人がいるから審議についての話だろう。

「わかった……済まんひより。ちよつと行つてくる」

「わかりました」

ひよりから了承を得ると龍園達が廊下に出るのでそれに続く。

「で？ だいたい予想はつくが話つてなんだ？ どこに行くんだ？」

「職員室だ。明日の審議についてお前には証人だけじゃなくて弁護士としても出て欲しいから坂上に許可を取りに行く」

「そういう堀北会長は当事者、Cクラスなら石崎、小宮、近藤の許可があれば2人まで許されていると言っていたな。」

「で？ 俺とお前が弁護士になるのか？」

「いや、俺は出ない」

「えっ?! 龍園さん出ないんですか?!」

「馬鹿か石崎。俺が出たら生徒会から疑われるだろうが」

否定は出来ない。龍園は既に悪名高いからな。出ただけでDクラスや生徒会の目が  
敵しくなるだろう。

一方の俺は生徒会長と交流があるが、特に悪い事はしてないので悪い印象を持たれな  
いだらう。

そこまで話していると龍園は教室に入るように職員室に入る。というか失礼しますく  
らい言えや。

そして坂上先生も元に行く。

「坂上、明日の審議だが、比企谷を目撃者としてのみならず弁護士として出せるか？」

「小宮君達が了承すれば2人までは可能だ。龍園と比企谷君の2人で良いのかね？」

「俺は出ねえ。比企谷だけで充分だ」

「わかった。生徒会には報告しておく。比企谷君は明日の放課後、私や小宮君達と生徒

会室に来てもらうよ」

「了解しました」

「邪魔したな」

話が済むと龍園は敬語を使わずに教室を出る。俺は失礼しますと一礼してから出る。

「さて石崎、小宮、近藤」

「「は、はいっ！」「」

「今回についてはお前らは比企谷の命令には従え。不満を抱こうが逆らうな」

「あ、あの龍園さん。比企谷に従って大丈夫なんですか？」

石崎が質問するが当然だろう。俺が暗躍しているのを知ってるのは龍園と協力者の坂柳、諜報活動をしている神室くらいだから、それ以外の人間からしたら俺を疑うのは当然だ。

「あ？俺の判断に文句があるのか？」

「い、いえっ！ありません！」

石崎は即座に前言撤回する。相変わらず龍園は暴君をやってるんだな……

「最初からそう言え。比企谷にはアルベルトを貸すからコイツらが馬鹿やらかしたら制裁を与えてやれ」

「いらねえよ。そもそも俺が審議中にコイツらにやって貰いたい事は……と……くらいだ」

俺の言葉に龍園は笑い、石崎達はポカンとした表情になる。

「？そんな簡単な事だけで良いのか？」

「相手が須藤に限定したらそれだけでも十分な武器になる。後は俺が須藤を仕留めるから何の問題もない。須藤を潰す策もDクラスに負けを認めさせる策も既に考えている」

Dクラスの弁護士に坂柳クラスの人間がいるならともかく、それ以外の人間なら完封

出来る自信がある。

「それと比企谷。明日はボイスレコーダーを備えとけ。審議の内容について今後の参考にする為にしっかりと把握しておきたい」

「それは構わないが、事前にボディチェックとかされて没収されたら諦めるよ」

「そこで諦めないほど馬鹿じゃねえよ」

まあ多分大丈夫だろうけど。審議内容を記録するのは別におかしい事じゃないし。

「なら良い。話が終わりなら俺は失礼する」

そう言っただけ俺は4人に背を向けて教室に戻り、椅子に座ってひよりと弁当を食べるのだった。

その夜……

「って感じた。こっちの作戦については問題ない。証人の方は坂柳に任せるぞ」

『お任せください。いざという時に備えてこちらも色々と考えていますから』

「Aクラスには本当に助けられるな」

俺は自室で坂柳と電話を使って最後の打ち合わせをする。事実、坂柳が証人となる事でこちらの信憑性はグッと上がるだろうし、神室の諜報活動はこちらの作戦を練るのに役立つ。

『気にしないでください。こちらとしても停学などのペナルティについて知りたかったですから』

「そう言ってくれるとこちらも助かる」

『世の中持ちつ持たれつですから。あ、それと万が一Dクラスが完全無罪を勝ち取ったとしても安心してください。そうなったら私が『須藤君に職員室前で突き飛ばされて悪意ある言葉を吐かれた』と須藤君を学校に訴えますから』

あー、なるほどね。確かにあの時の須藤の態度は問題だった。普通なら良くて嚴重注意、悪くて停学だろう。

しかも坂柳は障害者であり、須藤はその前の日に起こった暴力事件の当事者だ。その事を考えると須藤を停学させる事は不可能じゃない。加えて須藤が坂柳を突き飛ばしたのは監視カメラがある職員室前だし。

とどのつまり、須藤は詰んでるって訳か。

「そうか。まあ何にせよ明日はよろしくな」

「はい。ところで比企谷君」

「どうした？」

俺が尋ねると……

『比企谷君が私と椎名さん相手に二股をしているという噂がAクラスに流れているのですが……アレはどういう意味ですか？』

……あ

その後、俺はしどろもどろになりながらも事情を説明したが、物凄く説明するのが大

変だったのは言うまでもないだろう。

## 審議当日

いよいよ審議当日の火曜日となった。

その日は審議当日だから一年全体の空気が重く、廊下を歩く際も緊張感に包まれていた。

それは時間が経つにつれて増していき、最後の授業が終わる頃には最高潮となっていた。

放課後を告げるチャイムが鳴ると同時に俺は立ち上がり、ひよりに話しかける。

「ちよつくら行ってくる。多分1時間くらいで終わると思うわ」

「わかりました。図書室で待っていますので頑張ってください」

「ああ。またな」

そう言ってから教室を出て廊下で待っていると石崎達3人が出てくる。

「なあ比企谷。本当に俺達はお前が言った事をやるだけでいいんだよね？」

小宮がそんな風に質問をしてくる。

「この審議はCクラスが圧倒的有利だが、絶対はこの世に存在しない。だが絶対に限りなく近付くのは可能だ。お前らは用意した回答と俺が言った事をこなせば問題ない」

何せ相手は小学生より短気であろう須藤だ。ぶっちゃけ負ける気はしない。

「ちなみに比企谷の中だと須藤にどれくらいの罰を与える予定だ？」

「さあな。向こうが用意したカード次第だ」

俺個人としては退学処分にしてやりたいが、そう都合よく事が進むとは思えないからな。

言いながら俺達は職員室に向かうと職員室前の廊下で坂柳と坂上先生が待っていた。

「来たようだね。では生徒会室に行こうか」

「あの、先生。何故ここにAクラスの坂柳が？」

「坂柳は俺と同じ目撃者だ。俺達は2人で事件を見てたんだよ」

その言葉に3人は驚くが、坂柳はこっちの味方だから安心しろ。まあ壁に耳ありだからハッキリとは口に出さないが。

「宜しく願います。では坂上先生、案内をお願いします」

坂柳がそう言うのと坂上先生を先頭に歩き出す。と、同時に坂柳が話しかけてくる。

「いよいよですね。私、審議がどのようなものなのか楽しみですよ」

「審議を楽しみと言うのはお前くらいだろうな。ま、今後の参考にしとけ」

「もちろんです。あ、比企谷君さえ宜しければ週末2人で祝勝会をしませんか？比企谷君の部屋で」

「俺の部屋かよ？」

「私の部屋だと、比企谷君は夜8時までしか過ごせませんから」

寮は下層が男子エリアで上層が女子エリアとなっているが、「男子は夜8時以降、女子エリアに入る事を禁ずる」って校則がある。よって男女が夜遅くまで一緒に過ごすには男子エリアを拠点としないといけない。

「悪いがパスさせ「断るなら比企谷君の部屋の前にずっといます」……了解した」

「ありがとうございます。楽しみにしてますね」

俺は無力だ……

ため息を吐きながらも俺達は生徒会室に向かう。坂上先生が扉をノックした後、中へと足を踏み入れる。

「失礼します」

「失礼します」

一言そう言つて中に入る。生徒会室の中には長机が置かれていてグルリと長方形を作っていた。1番奥には堀北会長と書記の橘先輩がいた。

「坂上先生とCクラスの生徒はこちらに座ってください。目撃者の坂柳さんは私達の向かい側に座ってください」

そう言われたので俺は1番手前にある椅子を引いて坂柳が座りやすいようにする。

坂柳は椅子に座るのも一苦労だからな。

「ありがとうございます」

「気にするな」

そう返しながら俺は坂上先生と石崎に挟まれる形で椅子に座る。向かい側にも椅子はあるが、そつちにはDクラスの生徒が座るのだろう。

暫くの間、待機していると審議開始まで10分を切ったタイミングでドアがノックされて開く。そしてDクラス担任の茶柱先生が入ってきて、その後ろから3人の生徒が入ってくる。

1人は当事者の須藤で、残り2人は堀北、そして堀北会長と凄い戦闘をした男だった。どうやら2人が弁護士……ん？

そこまで考えていると坂柳の目が一瞬だけ鋭くなっているのが見えたが、何かあったのか？

目を擦って再度確認すると、いつもの表情になっていた。見間違いか？

「遅れました」

「時間にはまだ余裕があります。お気になさらず」

「C組のクラス担任、坂上先生だ。手前にいるのが目撃者の1人であるAクラスの坂柳。それから彼がこの学校の生徒会長だ。彼の横に立っている彼女は書記だな」

茶柱先生は須藤達に紹介をしながら席に座る。俺の真ん前には堀北が座るが……動揺しながら堀北会長をチラチラ見ている。

一方須藤は机の上に肘をつけて苛立ちを露わにしているが、態度悪過ぎだろ？  
呆れる中、審議が始まる。

「それではこれより、先日起こった『暴力事件』についての審議を執り行いたいと思いません。進行は生徒会書記、橘が務めさせて頂きます」

「よろしくお願いします」

言いながら小さく頭を下げて橘先輩に一礼する。同じタイミングで坂柳も一礼する。

「「よろしくお願いします」」

石崎達も一拍おいて一礼する。それに対して橘先輩は軽く目を見開くが直ぐに同じように一礼してくる。

「随分と礼儀正しいのだな」

「先輩が名乗ったら礼をするのは当然でしょう。寧ろ先輩主導の審議が始まるのに机に肘をついている事が問題では？」

「んだとテメエ?!」

薄い笑みを浮かべてくる茶柱先生にそう返すと須藤がブチ切れ、机を叩きながら立ち

上がる。

「須藤君着席してください」

即座に橘先輩が注意すると須藤は舌打ちをしながら着席する。しかし肘は机の上についているので、会長を含め全員が須藤に対して冷たい目を向けている。

石崎達にアドバイスした事は2つあるが、1つは「礼儀正しくする」ことだ。

礼儀正しい態度を取る人間と悪い態度を取る人間を比べたら必然的に後者の意見は弱くなる。

勿論堀北会長は公平な判断をするだろうが、今の須藤の態度は須藤が暴力的な人間である事を示したので、こちらの意見は僅かながらに信憑性が上がるだろう。

橘先輩は審議を執り行うと言ったが、審議つてのは開始の言葉が出る前から始まっているんだよ。

ちなみに坂柳にはアドバイスしてないので、坂柳は元々礼儀正しいって事になるな。

「それにしてもこの程度の揉め事に生徒会長が足を運ぶとはな。いつもなら橘だけのはずだが?」

「日々多忙故、橘に任せてしまう機会が多いですが、原則私は立ち会う事を理想としてますよ」

「あくまでも偶然、ということか」

会話の内容はよくわからんが、要するに堀北が兄を苦手としているのだろう。明らかに動揺してるし。

ま、こちらとしてはありがたい話だけど。

そう思う中、橘先輩が事件の概要を説明するが今更な事だから流し聞きする。

「——以上のような経緯を踏まえ、双方の主張を客観的に聞き、どちらが正しいのかを見極めさせて頂きます」

ようやく開戦だな。

「小宮さんと近藤くんの二人は、同じバスケットボール部の須藤くん呼び出され、放課後、特別棟に出向いた。そこで喧嘩を売られ、一方的に殴られたと主張しています。須藤くん、これは真実ですか？」

「そいつらの言ってることは嘘だ。俺が特別棟に呼び出されたんだよ」  
「では須藤君。事実を教えてくださいますか？」

「俺はあの日、部活の練習を終えた後、小宮と近藤に呼び出されたから出向いてやったんだよ。そしたら石崎が待ってて、3人でバスケ部を辞めろって脅してきやがったんだよ。そこでそれを断ったら殴りかかってきたから、やられる前にやっただけだ」

コイツは馬鹿か？自分で自分の首を絞めてやがるよ。先輩の質問に対して肘をつい

たまままで敬語も使わないどころか口も悪い。既に須藤に対する心証は最悪と言つていいだろう。

「須藤君はこう言っていますが大宮君と近藤君に反論はありますか？」

橘先輩は小宮と近藤に目を向ける。対する小宮は首を横に振る。

「はい。須藤君の言っている事は丸つきり嘘です。僕達が「ふざけんなよ小宮。嘘吐いてんじやねえよ！」……すみません須藤君。全て話させてください」

「つざけんな！」

小宮の言葉に須藤が怒鳴ると小宮は黙る。これも俺が教えたアドバイス、「相手が話しているときは絶対に口を挟まない。また自分が話しているときに口を挟まれたら穏やかに注意する」だ。

須藤の性格上、こつちが嘘をついたらキレて口を挟むのは明白だ。だから口を挟ませまくり、須藤の心証をとにかく悪くさせる。上手くいきや途中退場させることも不可能ではないだろう。

「少し落ち着いてください須藤君。今は小宮君に話を聞いています」

「ふざけんな。嘘を吐いて黙ってろってか？」

橘先輩の注意に対して須藤は食つてかかるが、コイツはマジで審議に勝ちたいと思つてるのか？

須藤の余りの態度に呆れ果てている時だった。

「いい加減にしろ須藤。これ以上橘の警告を無視するなら、ここで審議を終了して本来お前に与える予定の処分を下す事も考えないといけない」

堀北会長が威厳ある態度でそう言ってくる。

「おいおい……こっちは勝つ為に色々作戦を練ってきたが、マトモに審議をする前にこっちが勝つちまうんじゃないか？」

## 証拠

「いい加減にしろ須藤。これ以上橘の警告を無視するならば、ここで審議を終了して本来お前に与える予定の処分を下す事も考えないといけない」

須藤のあんまりな言動に対し、遂に橘先輩に代わって堀北会長が威厳ある態度でそう言ってくる。

おいおい……こっちは勝つ為に色々作戦を練ってきたが、マトモに審議をする前にこっちが勝つちまうんじゃないか？

これには坂柳も呆れ果てている。コイツがそんな表情をするのは予想外だが気持ちよくわかる。

ま、俺としてはその方がありがたいけど。

「ちっ！」

須藤は舌打ちをしながら席に座る。後1回か2回キレたらチエツクメイトだな。

「では小宮君。改めて説明をお願いします」

「はい。実際は僕達が須藤君に呼び出されて特別棟に行きました。そこで喧嘩を売られたので悪口を言ったら、真っ赤になって殴りかかってきました。咄嗟に反撃しようとし

ましたが、須藤君の力は強くなす術なく負傷してしまいました」

「双方共に呼び出されたと主張しており食い違っています。しかし共通することもあります。彼らの間に揉め事があつたんですね？」

「揉め事というか……須藤くんが絡んで見下してくるんです」

「見下す？」

「はい。彼は一年の中では群を抜いてバスケが上手い。もちろん僕達も必死になつて練習して追い付こうとしています。けどそんな僕たちを、須藤くんはバカにしてくるんです。そういう意味では揉めていたかもしれません」

まあ須藤ならあり得るだろう。ただし龍園みたいに悪意剥き出しではなく、ナチュラルに見下すつて感じだと思ふが。

「小宮の発言は全部嘘だ。こつちが練習してるときに邪魔してくんだよ」

「身に覚えがないです。僕達は須藤君に呼ばれて殴られました。これは事実です」  
「嘘ついてんじやねえよ。お前らが先に仕掛けてきたんだ。正当防衛だつつの」

当然両者の意見は一致することはなく、相手が悪いとしか主張しない。

「両方の言い分がこれでは、今ある証拠……目撃者である比企谷君と坂柳さんの意見などで判断していかざるを得ません」

橘先輩がそう言うのと俺と坂柳以外の人間が一斉にこつちを見てくる。

「坂柳、俺から先に言つて大丈夫か？」

「ええ」

坂柳から了承を得たので立ち上がる。

「事件当日の話です。俺と坂柳は図書館にいたのですが、その際に理科の課題に飲み物を溢して汚してしまいました。そこで俺達は特別棟4階にある理科準備室で新しいプリントを貰いに行きましたが、プリントを貰つて理科準備室を出たら下の階から怒号が聞こえてきたので、上から見てみると須藤が小宮達3人をボコボコにしていました」

「証拠の動画もあるので確認をお願いします」

「なっー」

須藤が叫ぶ中、坂柳はUSBを取り出すので俺が受け取り、堀北会長に渡す。

同時に堀北会長はUSBをパソコンに接続して、操作を始める。同時に橘先輩がスクリーンを設置する。

暫くすると動画が始まるが……

「これはこれは……」

スクリーンには須藤が3人を相手に容赦なく殴りまくっている映像が流れる。あの時見たように須藤は床に倒れる近藤の顔面に拳を叩き込み、近藤を助けようとした小宮の顔面に肘打ちをぶちかまし、最後に石崎の鳩尾に蹴りを入れている。

(改めて見るとヤバ過ぎだろ？ 仮に石崎達の嘘が見抜かれても過剰防衛で勝てる気がする)

そう思う中、スクリーンには暴行の動画が流れ、石崎達は床に倒れ伏し、階段を下り去って行った所で動画は終了した。この後石崎達は携帯を操作していたが、そこを録画してないのはファインプレーだな。

周りを見れば石崎達は勝ちを確信した笑みを浮かべ、須藤は真っ青になっている。

しかし、Dクラス側の弁護人の堀北は何をやっているんだ？ 弁護人が動画を見ないで俯いてるって……

「以上になります。私と比企谷君は途中からして見てないので、どちらが先に仕掛けてきたのはわかりませんが、須藤君の暴力行為は明らかに過剰過ぎます。これについて会長はどう思われますか？」

堀北は堀北会長に質問をする。どうやらトドメを刺す気だな。

「堀柳と同意見だ。先に仕掛けたのはどちらかわからないが、須藤の暴力は過剰過ぎる」  
「ま、待てよ！ そいつらがグルに決まってるだろうが！ 図書館にいたとか言っておきながら実際は特別棟4階で待機して、都合の良い箇所だけ録画したんだろうが！」

須藤はあろうことか俺と堀柳がグルだと喚くが……

「でしたら会長。事件当日の図書館2階の監視カメラを確認してください。俺達は午後

の授業が終わってから飲み物を溢すまで図書館にいましたから」

実際俺と坂柳は石崎達とグルになって須藤を嵌めてない。正確に言うとな須藤達のトランプルを見てからグルになったんだ。

よつてこの動画に関しては偶然から得た産物だ。

「後で確認しておく。しかしさつきも言ったが須藤の暴力が過剰である事、小宮達が一方的に殴られたのは明らかだ。よつてそれを基準に答えを出すしかないだろう」

「そんなの納得いかねえ！あいつらが雑魚だっただけだろ！」

馬鹿だコイツ。自分で自分の首を絞めてるよ。坂柳も一瞬だけ須藤に嘲笑を浮かべたし。

「力の差がある相手に対して正当防衛を主張するののか？」

「なつ………んなの、向こうは3人だぞ3人つ。危ないに決まってるだろうが！」

「だが、実際に怪我をしたのはCクラスの生徒だけだ」

「会長、発言「ひやつ?!」………は？」

俺はトドメを刺すべく手を挙げようとしたら、以前会長とやりあっていた男が堀北の脇腹を掴んでいた。え？何やってんのアイツ？

「ちよつ………やつ、綾小路君、んつ………！」

俺が呆然とする中、綾小路は堀北の腰に手を当てたまま指を動かす。マジで何をやつ

てんだ？

呆然としていると綾小路は堀北の腰から手を離す。対する堀北は半泣きになりながら綾小路を睨む。

「お前が戦わないならこのまま敗北だ」

「っ……」

その言葉に堀北はハツとした表情になって辺りを見回す。が、やがて会長の方を見る。

「……失礼しました。私からも質問、宜しいでしょうか」

「許可する。だが次からはもつと早く答えるように」

堀北は会長に黙礼してから立ち上がる。

「どちらが呼び出したのかはわかりませんが、どうして石崎くんがこの事件に関わっていたのでしょうか。小宮さんと近藤くん二人だけならまだしもバスケット部に所属してない石崎くんが居るのは不自然だと思えます」

そうなんだよなあ。石崎がいたのはこちらのウィークポイントだろう。

「それは……用心のためです。須藤くんが暴力的である事は有名ですから」

「つまり須藤くんに暴力が振るわれる可能性がある想定していたのでしょうか？」

「そうです」

「なるほど。それで中学時代、喧嘩が強かった石崎くんを用心棒として連れて行っただすね」

「自分の身を守る為ですよ。しかし石崎くんを連れてきたのは頼りになる友達だからで喧嘩が強いというのは知りませんでした」

「多少ではありませんが、私には武術の心得がありません。だからこそ分かるのですが、複数の敵と対峙した場合の戦いは乗数的に厳しく難しくなります。喧嘩慣れしている石崎くんを含めたあなたたちが一方的に傷を負ったのは腑に落ちません」

「……それは僕たちに、戦う意志がなかったからですよ」

「喧嘩が起こる要因は自分と相手のエネルギーがぶつかり合い、その間合いを超えた時に発展すると見ています。相手に戦う意思がない場合、3人がそこまで怪我をする確率は非常に低いはずですよ」

堀北はルール、根拠に基づいた客観的な意見をぶつけ、小宮達は実際の証拠をぶつけて議論している。

この状況が続いてもこつちが有利には変わりないが、新しい一手を打つか。

「発言良いですか？」

「許可する」

「先程堀北は怪我をする確率は非常に低いと言いましたが、それは一般的な話で須藤については例外と断言します」

須藤が怒りを露わにしながら睨むが無視をする。

「先程の動画では3対1にもかかわらず、石崎達を圧倒して容赦ない暴力を振るっていましたが、須藤はこの学校に入る前から複数相手に暴力を振るって問題を起こしていた筈です」

後半部分については曖昧にして喋る。仕込みは完了。後は……

「はあっ?! 適当な嘘言ってるじゃねえよ!」

須藤は真っ赤になって反論するが、若干の焦りが見える。もう奴は俺の罠に嵌ったよ  
うなものだ。

「須藤、嘘と言ったが複数相手に対して暴力を振るってないんだな?」

「当たり前だ!」

須藤は俺の質問にそう返すが……

「そうなのか？俺が調べたところ、バスケの名門校からスポーツ推薦を貰ったが、他校の生徒複数と喧嘩をして取り消しを食らったらしいが？」

審議中に俺を相手に嘘を吐いた事を後悔すると良い。

## 目撃者

『つー！』

俺の発言に生徒会室に緊張が走る。まさか知られているとは思わなかったようで、須藤は今更ながら冷や汗を流し始める。

しかし俺は容赦しない。

「その反応からしてビンゴのようだな。しかし須藤、それはつまり暴力事件を起こしてないって嘘を吐いたって事だよな？」

俺の質問に須藤は無言となる。しかしこれは予想通りだ。

最初に俺は須藤に対して、この学校に入る以前から暴力事件を起こしたんだろと尋ねたら、須藤は嘘を吐くなどキレた。

次に須藤に暴力を振るってないんだなどと答えたら、須藤は当たり前と答えた。

そこで最後に俺は具体的な例を出して、須藤は冷や汗を流して黙り込む。

これにより須藤は審議中にも嘘を吐いた事を証明出来たが、今回起こった暴力事件は嘘が一番の問題となっているので、須藤の嘘はDクラスからしたら致命的だろう。現に堀北は物凄い眼差しで須藤を睨んでるし。

そんな中、坂上先生はこれをチャンスと捉えたのか薄く笑いながら口を開ける。

「これは問題でしょう。CクラスかDクラスのどちらかが嘘を吐いているかわからない状況の中、こちらの問いかけに嘘を吐くのは如何なものか……須藤君、何故嘘を吐いたのですか？」

須藤は返答出来ないが答えは決まっている。自分にとって都合が悪いからだろう。過去に暴力事件を起こしたなんて知られたら不利になると考えたからであるのは容易に想像できる。

大方この学校に入る前の事だからだから嘘吐いても大丈夫と思ったようだが、須藤について徹底的に調べ上げた俺には通用しない。

「とりあえず話を戻しましょうか。動画や須藤の証言や経歴から察するに須藤は複数を同時に相手にしても怪我をせずに勝てると思います。加えて都合の悪い事に対して嘘を吐く事から、今回の件についても嘘の証言をしている可能性があります。これについて会長はどのように思われますか？」

「比企谷の主張を認める」

よし、会長のお墨付きだ。これはつまり会長は今後Dクラス、特に須藤の意見を疑うだろう。

更にこつちが有利になったな。もう後2、3手で詰みか、

「会長。発言の許可をお願いします」

「許可する」

と、ここで堀北が手を挙げて会長に発言の許可を貰う。

「確かに須藤くんが彼らを殴り付けたのは事実ですし、嘘を吐いたのは問題行為です。しかし、今回の件において先に喧嘩を売ったのはCクラス側です。一部始終を目撃した生徒も居ます」

「目撃者？会長。俺と坂柳以外に目撃者として名乗り出た生徒がいるんですか？」  
もしも居るならば、生徒会室において最初から審議に参加していた筈だ。

「いや。私を知る限り比企谷と坂柳だけだ」

「後から名乗り出てくれました」

堀北がそう答える。後から、ねえ……何とも胡散臭い話だ。

「では、その生徒を入室させて下さい。」

すると生徒会室のドアが開き、眼鏡をかけた女子が入ってくる、緊張しているのは誰の目から見ても明らかで彼女の視線はあちらこちら見回している。

橘先輩が彼女に話しかける。

「所属クラス及び、名前を聞かせて下さい」

「……1年D組、佐倉愛里です」

「Dクラスの生徒でしたか」

坂上先生は眼鏡のレンズを拭きながら失笑した。

「何か問題でも？」

「いえいえ、全然ありませんよ」

「では証言をお願いします」

「は、はい……。わ、私は……」

しかし佐倉はそれ以上話せずに、顔を俯かせる。顔色は青くなっている。30秒経過しても話す様子はない。

……これ以上は時間の無駄だな

「彼女は証言をしないようですし、下がらせるべきでは？」

俺は彼女を下げるべきと告げる。嘘を話すならまだしも、全く喋らないのは論外だろう。

「確かにこれ以上は時間の無駄のようだな。下がって良いぞ佐倉」

意外にも俺の意見に賛成したのはDクラス担任の茶柱先生だった。賛成意見を貰えるとは思っていたが、てつきり会長から貰えると思っていた。

そんな茶柱先生の言葉に会長も止める気配を見せない。それに伴いDクラスの敗戦

の色が充満していく。

と、その時だった。

「私は確かに見ました……！最初にCクラスの生徒が須藤君に殴りかかったんです。間違ひありませんっ！」

予想外の展開が起こった。さっきまで俯いていた佐倉が顔を上げてハッキリした声で告げる。どうやら絶体絶命のピンチで覚醒したようだな。

しかし俺としては覚醒した人間を放置するわけにはいかない。

よって俺が手を挙げようとする坂上先生が同じタイミングで手を挙げる。

「坂上先生からどうぞ」

「いや。比企谷君からどうぞ」

「ありがとうございます。会長、発言の許可をお願いします」

「許可する」

「ありがとうございます。佐倉といったか？何故目撃者として名乗りを上げるのが遅い？正直俺はDクラスがマイナス評価を受けるのを恐れて偽物の目撃者を用意した、と思ってる」

言い方は悪いかも知れないが俺の言葉は間違っていないだろう。本当に目撃者なら事件が発覚した初日に申し出るべきで、後から名乗り出られても怪しすぎる。

まして佐倉はDクラスの生徒だ。そんな彼女が都合良き同じクラスの生徒が人気がない特別棟において一部始終を目撃した、なんて言っても信じられない。余りにも出来過ぎだ。

「それは……その、巻き込まれなかったから、です……」

佐倉はしどろもどろになりながらもそう返す。なるほどな。まあ巻き込まれたくない気持ちはわかる。俺だって今回の事件において石崎達がクラスメイトじゃなかったら名乗り上げてなかったかもしれないし。

「話はわかったが、お前の場合Dクラスの生徒、それも遅れて名乗り出た以上、言葉だけでは証拠になり得ない。もしもお前が須藤の無実を証明したいなら動画なり音声なりを提示しろ」

これについても間違っちゃいないだろう。言葉だけでは証拠にならない。まあ複数目の目撃者がいれば話は別だが、俺と坂柳は途中からしか見てない。

「証拠なら……あります！」

同時に佐倉は机の上に何かを置く。アレは写真か？

疑問に思う中、橘先輩が手に取って会長に渡す。暫く写真を見た会長は机の上に並べて俺達にも見えるようにする。そこには今の佐倉とは似ても似つかない佐倉がいた。

てかこれ、アイドルの掣じやね？まあ今は関係ないけど。

「あの日、自分を撮る為に人のいない場所を探してみました。その時に撮った証拠として日付を入ってます」

確かに日付は事件当日の夕方だった。

「これは何で撮影したものかね？」

「デジタルカメラですけど……」

「デジタルカメラは簡単に日付の変更が出来たはずでは？」

「しかし坂上先生。この写真は違うと思いますか？」

会長がある一枚の写真を見せてくる。そこには須藤が石崎を殴った写真があった。

これには坂上先生や石崎達も息を呑む。俺と坂柳も特別棟にいた時間だが、まさか俺達以外にも目撃者がいるとはな。

「これで……私がそこにいたことを信じて貰えたと思います」

「ありがとう佐倉さん」

堀北が礼を言うが、仕方ないだろう。普通なら圧倒的に不利だった状況から脱する事が出来るのだから。

しかし……

「会長。一つお願いがあります」

あくまで普通ならだ。佐倉に恨みはないが再度状況をこちらにとって有利にさせて貰う。

「何だ比企谷？」

「先程坂柳が渡した動画をもう一度見せていただけますか？」

「橘」

会長がそう言うのと橘先輩は動画の再生準備に入る。証拠の確認は重要だから反対されないとは思っていたが、再度再生する事が決まった時点でこちらが有利となる。

そう思う中、再度動画が再生される。その際に佐倉も見る事になるが、俺としては佐倉にこの動画を見せたいのだ。

数分して須藤の暴行動画が終了するので俺は佐倉を見る。

「佐倉に質問をするが、今の動画に見覚えはあるか？」

「……はい」

よし、言質はとった。締めに入るか。

「ではもう一つ質問するが、YESかNOで答えてくれ。今の動画を見て須藤はやり過ぎと思ったか？」

「つ……………」

俺の質問に佐倉は目を見開き、堀北は俺の作戦を理解したようで焦りの表情を浮かべるがもう遅い。

佐倉の写真により佐倉が現場にいたのは認められた。しかしあの写真だけではどこから仕掛けたものかはわからないし、佐倉が最初から現場にいた確証にもならない。

加えて最初から目撃者として名乗らなかつた事や所属がDクラスって事もあり、証拠能力としては極めて弱い。

そして坂柳が提示した動画も途中からしか撮ってないので、佐倉の証拠よりは遥かにマシンだが絶対的な証拠にはならない。

そうなると審議は証拠能力の低い証拠と当事者達の怪我の状態、審議参加者の意見によって左右される。

証拠能力の低い証拠は佐倉の写真と坂柳の動画。しかしこの2つは須藤が暴力を振るつてる部分しかないのでこちらが有利。

当事者達の怪我の状態については言うまでもなくこちらが有利。

審議参加者の意見についてだが須藤の意見は嘘を吐いたから殆ど無価値で堀北の意

見は正論だが力が弱い。

そこで俺はトドメを刺すべく目撃者である佐倉に須藤の暴力は過激かどうか意見を尋ねたのだ。

YESと答えたら須藤を過剰防衛と判断できるし、NOと答えたら会長を含め全員が嘘と言うだろう。実際会長もさつき過激と認めたし。

仮に第3の選択——「黙秘権を使ったら「過激とは思いますが、YESと言ったら須藤の罪が重くなるから黙り込んだ」と誰もが考えるだろう。

つまりこの質問を佐倉にする事が俺の策で、佐倉がどう答えようとDクラスにダメージを与えられることを意味する。

要するにだ、佐倉はDクラスを助けに来たようだが、Cクラスの助けになったって訳だ。

目撃者がいるって聞いた時は若干焦ったが、寧ろこちらが有利になったからこちらとしてはいがたい。

さて、そろそろ答えを聞かないとな。

## 泥仕合

「では佐倉。そろそろ答えてくれ。須藤の暴力は過激だと思うか？ 思わないか？」

「っ………そ、れは………」

俺の質問に佐倉は真っ青になってプルプルと震える。佐倉本人もわかっているのだろう。YESと答えたら須藤は過剰防衛と判断され、須藤を守る為にNOと答えても全員が嘘と言われるって事を。だから何も言えない。

しかし言えないって事は都合が悪いからだんまりしていると第三者は思うだろう。

「ふむ……彼女が質問に答えない。明らかに過剰にもかかわらずだ。これはつまり都合の悪い事実から逃げている事を意味する。須藤君の嘘といい、Dクラスは狡い手を好むみたいですね」

坂上先生は俺の考えを察したようで悪い笑みを浮かべながらそう口にする。それにより佐倉は更に震えだす。これ以上責めるのはアレだし、そろそろやめてやるか。

「会長、本人は返答する気がないですが、聞きたい事があります」

「何だ？」

「この状態で処分を下すならどのような処分になるのですか？」

「先週須藤に通達したが、Cクラスが喧嘩を仕掛けたことを証明出来ないならば夏休みまで停学、及びDクラスのクラスポイントも差し引かれる。そして証明が完了してない以上、今言った処分となるだろう」

その言葉に須藤は歯軋りするが、自分で自分の首を絞めた張本人がそんな顔をするなよ？

「そうですか。ではその処分について意見を宜しいですか？」

「許可する」

「ありがとうございます。須藤についてですが、彼は非常に問題があります。中学時代にも暴力事件を起こしたにもかかわらず、高校生になっても気に入らない事があれば直ぐに恫喝や暴力に走り、今回の件について自分は正しいと思ひ込んでいる、挙句に先輩に対する態度も最悪ですし、審議中に都合が悪くなったら嘘を吐く……人として完全に終わっています」

「ダメエー！」

須藤がブチ切れるがシカトする。

「そんな問題しかない須藤に対する処分ですが、彼を停学にしたりクラスポイントを減らしても反省しないのは明白ですし、Dクラスの生徒が可哀想です。よって須藤に対する罰に停学やクラスポイントの没収は意味が無いでしょうから反対します」

俺の言葉に一瞬だけ沈黙するが……

「比企谷君?!何を言っているのかね?!」

坂上先生が焦ったようにそう言ってくる。石崎達も俺に対して焦りと怒りを宿した眼差しを向けてくる。

一方Dクラス側の須藤と佐倉はポカンとした表情を浮かべ、堀北と茶柱先生は訝しげな表情を浮かべ、綾小路は無表情でこちらを見ってくる。

会長と坂柳については興味深そうに俺を見る。

「では須藤を無実にするか?」

「いえ。須藤が暴力を振るった事についてお咎め無しにするのは今後の為になりません。ですから……」

須藤に対してバスケットボール部から永久退場する罰を与える事を提案します」

俺はそう告げる。それにより生徒会室に沈黙が生まれる。

しかしそれも一瞬で……

「ふざけんじゃねえよ！何で俺がバスケット部を辞めなくちやいけないんだよ！」

須藤はこれまで以上に真つ赤になって机を叩く。轟音が生徒会室に響き佐倉はビビりだす。

「簡単な話だ。お前の性格上、停学を受けたりクラスポイントが減らされても反省する可能性は極めて低い。だから一番大切なものを奪えば今後は反省して暴力を振るわなくなると思つて提案しただけだ」

ついでに言うとしたクラスポイントを奪うよりそちの方がいいと思つたからだ。

この学校では部活で活躍した生徒にプライベートポイントが与えられるが、更に活躍すればクラスポイントにも影響が出る。

事前に須藤を調べたが、須藤は中学時代から高校級と評価されていた実力者だし、間違ひなくクラスポイントに貢献出来るだろう。

ここで須藤を停学にさせればレギュラーには遠ざかるが暫くすれば再度レギュラーの話が来るだろう。そうなつたらクラスポイントを稼げる可能性が出るので、早めに可能性を0にした方がいい。

そしてバスケットを失つた須藤の価値は大きく下がりDクラスに足手纏いが1人増える事を意味する。

「調子乗つてんじゃねえぞ！」

「Dクラスの茶柱先生に聞きます。自分の提案はどう思いますか？」

発言力のない須藤をスルーして茶柱先生に話しかける。

「決定権は私にはないが、1ヶ月以上の停学とクラスポイントの減少がないならDクラスからしたら破格の条件だから断る理由はないな」

茶柱先生はそう返す。クラスポイントが残っていればクラスも分裂しないで済むと考えたからだろう。

対する須藤は歯軋りをするが、そもそもの発端はお前の短気だからな？

そう思った時だった。

「堀北。比企谷の意見を受け入れるべきじゃないか？」

すると最初に堀北の脇腹を刺激して以降、何もしてない綾小路が口を開ける。

「須藤の無実を裏付ける証拠はない。これが教室やコンビニで起こった事件なら、大勢の生徒が見ていると確実な証拠があったかもしれないが、人もいない設備もない特別棟じゃどうしようもないってことだ」

……なんだ？随分と回りくどい言い方だな。

「話し合いをして分かっただろ。どれだけ訴えてもCクラスは嘘だと認めないし、須藤も嘘とは認めない。平行線だ、話し合いなんて最初からしなければ良かったくらいだ。そう思わないか？」

(つー)

綾小路の言葉に俺の本能が危険と警告してくる。マズい、俺の予想が正しければ、綾小路は遠回しな言い方で逆転の一手を堀北に伝えている。

堀北が気付くかわからないが、気付く前に審議を終わらせるべきだ。

「会長。向こうも賛成のようですし、そろそろジャッジをお願いします」

「比企谷。気の所為か焦ってないか？」

「この野郎……さつきまで無言だった癖に、このタイミングで暴れやがって……！ハッキリ言つてコイツは危険だ。」

「焦つてはないが、大勢が決まったから早く終わつて欲しいとは思っているな」

実際に答えは出たようなものだ。

「発言、宜しいですか？」

と、ここで堀北が発言の許可を求める。マズい、綾小路の言葉の意図に気付いたか？  
会長が許可を出す中、堀北は口を開ける。

「今回の事件について須藤君には大きな問題があると思います。比企谷君が言った須藤君の評価については思わず納得したくらいです」

「テメエ！」

「あなたのその態度が全ての元凶であることを理解しなさい」

これについてはごもつともだな。須藤の態度は問題があり過ぎる。

「彼は反省すべきです。ですが、それは今回の事件に対してではなく、過去の自分を見つめ直すという意味での反省です。今話し合われている事件に関しては……須藤君に何ら非はないと思っています。何故ならこの事件は偶然起きてしまった出来事ではなく、Cクラス側が仕組んだ意図的な事件と確信しているからです。このまま泣き寝入りするつもりはありません」

「つまり……どういうことだ？」

堀北会長が妹を見ると、妹は息を吸ってから……

「改めてお答えします。私達は須藤君の完全無罪を主張します。よって1日たりとも停学処分は受け入れられません」

ハッキリとそう告げる。

「はは……何を言うかと思えば意図的な事件？これはおかしな事を」

坂上先生は堀北を嘲笑うが俺は嫌な予感をヒシヒシと感じる。綾小路の言葉の真意を理解出来たなら、堀北は審議の延長を求めてくる筈だ。

それだけは断固阻止する。審議の延長をさせなければこっちの負けはあり得ないからな。

「佐倉さんの証言通り須藤君は被害者です。どうぞ間違いない判断を」  
させるか。ここでごつちが証拠の提示を求めれば、出せないんだしな。  
そう思いながら反論を口にしようとした時だった。

「僕達は被害者です生徒会長！」

その前に小宮が叫び出す。ヤバい、このままだと……

「会長、発言許可を「ふざけんなよ！被害者は俺だ！」ちっ……」

発言許可を貰おうとするがその前に須藤が叫び出して俺の声をかき消す。

そしてそれを皮切りに石崎達と須藤が責任の擦り付け合いを始める。最悪だ……俺  
としては望まない展開だ。

「そこまでだ。これ以上この話し合いを続けても時間の無駄だ」

遂に堀北会長が止めに入る。こちらとしては良くない展開だ。

「今日の話し合いでわかったことは互いの言い分は真逆。どちらかか嘘をついていると  
いう事だ」

嘘を吐いてるのは石崎達だけだな。俺と坂柳は嘘をついてない。

「Cクラスに聞く。今日の話に嘘偽りない、そう言い切れるのだろうか？」

「もちろんです」

「ならばDクラスはどうだ？」

「俺は嘘なんてついてねえ。全部本当のことだ」

「おや？先程比企谷君の質問に対して嘘をつきましたよね？」

「ここで坂柳が爆弾を投下する。それに伴い空気が重くなる。しかし会長は特に動じる事なく口を開ける。

「改めて聞くが須藤、本当に嘘をついてないと言い切れるな？」

「ああ」

「では明日の4時にもう一度再審の場を設ける。それまでに相手の明確な嘘、あるいは自分達の申し出がない場合、出揃っている証拠で判断を下す。もちろん場合によつては退学という措置も視野に入れる必要がある、以上だ」

結論を下して堀北会長は審議を閉めた。やれやれ……今日の内にケリを付けたかったがな。

とりあえず龍園に報告しとくか。

## 張り込み

「……つてわけで最後の最後で石崎達が須藤と泥仕合を始めた所為で審議は明日に延長されたつて訳だ」

「ちつ、泥仕合にならなきゃこつちの勝ちだったのに。明日の審議が終わったらアルベルトに制裁させねえとな」

夕方6時、俺は坂柳と一緒に龍園を俺の部屋に招き入れて今日の審議について説明する。対する龍園は途中までは笑っていたが、最後の部分を聴くと不機嫌そうに舌打ちをする。

「まあそれは審議が終わつてからの話です。恐らくDクラス側はこちらに対して訴えを取り下げるように仕掛けてくるでしょう。審議で戦った場合、須藤君の完全無罪は勝ち取れないですから」

「だろうな。間違つてない。石崎達が須藤を罠に嵌めたとはいえ、須藤は手を出しているんで罰を受ける。そしてそれはDクラスからしたら敗北を意味するしな。」

「しかし龍園君にお願いがあるのですが良いですか？」

「何だよ？」

「それはですね……………」

言いながら坂柳は龍園にお願いを口にする。対する龍園は呆れた表情を浮かべる。

「俺がそれをするメリツトは？ないなら当然却下だ」

「もちろんあります。それは……………です」

「それは本当か？」

「本当です。ねえ比企谷君？」

「事実だ」

「くはっ！良いぜ、なら俺はお前のお願いを聞いてやるよ」

「ありがとうございます」

龍園は悪どい表情を浮かべ、坂柳も冷笑で応じる。やっぱりコイツらを敵にしたくはないな。

「とはいえそれだけじゃ面白くないな……………おい比企谷。お前にやって欲しいことがある」

「……………何だよ？」

「……………をしろ」

「は？俺がかよ？断るに決まって「3千」……………わかったよ」

ポイントには換えられないし、頑張ろう。

「1人では大変でしょうから真澄さんも貸しましょう」

「鬼か」

神室が不憫過ぎる。万引きしたアイツの自業自得とはいえ、坂柳のパシリは大変そうだな。

ともあれ坂柳の性格上、神室は逆らえないだろう。マジでドンマイ。

翌日……

「暑い……」

俺と神室は汗を流しながら事故現場の特別棟3階にて待機している。しかも朝6時から授業をサボってだ。

特別棟は蒸し暑く汗がダラダラと流れ、既に制服はびしょ濡れだ。

何故俺がこんな事をしているとDクラスの連中が一発逆転の策を打ってくる場合、撮影する為だ。

須藤に罰を与えないのを目標としているが、須藤が石崎達を殴った以上審議で完全無罪を勝ち取るのとは不可能だ。

そうなるとうこうが勝つには石崎達に訴えを取り下げる以外の道はない。そしてその方法は偽物の監視カメラを現場に設置して脅すってやり方だ。

監視カメラを設置して石崎達を呼び出して「このまま審議を続けたら先に仕掛けたお前らは退学をくらうぞ」って脅したら、石崎達は従うだろう。監視カメラが本物かどうか判断するのは普通無理だし、向こうが審議直前に呼び出したら焦って判断力は鈍るだろう。

そして石崎達が訴えを取り消したら誰にもダメージが行かず、暴力を振るった須藤も無罪放免となるだろう。

よって俺と神室は龍園と坂柳の指示により特別棟3階にて張り込みをしているのだが、朝から授業をサボっての張り込みはキツイ。

張り込みを始めて数時間。龍園からは「連中は授業をサボって設置するかもしれない。決定的瞬間を証拠にしたいから授業をサボって張り込み」と言われて引き受けたが、暑過ぎて死にそうだ。

しかし俺はポイントという報酬があるからまだマジだ。一緒に張り込みをしている神室は完全にとぼっちりで、報酬もないし。

だから俺は放課後、龍園から貰った報酬で神室にスイーツでも奢るつもりだ。流石に不憫過ぎるからな。

そこまで考えている時だった。

キーンコーンコーンコーン

昼休みを告げるチャイムが鳴り出す。連中がカメラを仕掛ける可能性が高いのは朝と昼休み。朝には誰も来なかったのでそろそろ来るかもしれない。

「念の為そろそろ撮影の準備をした方がいいかもな……それとそろそろ水分補給をしとけ」

言いながら俺は神室は牛乳を渡す。張り込みに備えてあんばんと牛乳はしつかり用意している。

「そうする。でもさ、本当に監視カメラを仕掛けられるの？監視カメラを調達するなんて無理なんじゃない？」

「知らないのか？電気屋では監視カメラそつくりのネットワークカメラが売られてんだぞ。それを設置すれば大抵の相手は欺ける」

値段は高いが、Bクラスと協力している以上、向こうも貸すだろうし。

「なるほど……つと、来たみたい」

言われて耳を澄ますと下から足音が聞こえてくるので俺達は監視カメラを設置でき

る場所から死角となる物陰に隠れて、携帯を取り出して録画モードにする。

しばらくするとBクラスの一之瀬と神崎が脚立と鞆を持ってコンセント付近にやってくる。

「じゃあ神崎君、お願いね」

「ああ」

一之瀬が脚立を支えると神崎は鞆から例のカメラを取り出して脚立に乗って、カメラを設置する。

「設置した。もう一つは廊下に仕掛ければいいんだな？」

「うん、そうそう」

マズい、一つかと思ったが2つ用意していたようだ。しかも廊下に来られたら俺達がいるのがバレてしまう。

そこまで考えていると神室が掃除用ロッカーを指差す。逃げ道はあそこしかないようだ。

そう判断した俺達は神崎が脚立から降りる隙にロッカーに入りドアを閉める。

と、ここで問題が起こった。

(ちよつと……お尻触らないでくれない?)

予想よりもロッカーは狭く、2人だとギリギリのスペースであり、ロッカーに入って

ドアを閉めると自由がきかず、俺の右手が神室の尻にフィットしてしまつたのだ。手には柔らかくもハリのある感触が伝わってくる。

(悪い……でも今動いたら2人にバレて社会的に死ぬから勘弁してくれ)

人が殆ど来ない特別棟のロッカーから出てくるのがバレたら、そういう事をしていると思われてしまう。

(……そうね。なら仕方ないけど、揉まないでね?)

(揉まねえよ)

触れているのは事故だが、揉んだら完全にアウトだし。

そう思う中、ロッカーの外から足音が聞こえてきて、やがて脚立を展開する音が聞こえてくる。

その音を聞きながら俺は一刻も早く設置を済ませろと本気で願つた。恐らくそれは神室も同意見だろう。

何故ならこのロッカーは狭く、俺が神室の尻に触れているのみならず、狙つてないはいえ神室は俺に胸を当てて、脚を絡めてきているのだ。加えて汗をダラダラ流しているので凄くエロいのだ。

この状況が続けばどうにかなつちまいそうだ。よつて俺は外から聞こえる音が早く消える事を強く願ひ続ける。

「設置完了だ。後は綾小路が放課後にCクラスの3人を呼び出せば作戦は成功だな。そういうえば坂柳と比企谷については呼ばないのか？」

「堀北さんの話だと、2人は嘘を吐いている可能性は低いって言ってたよ」

「当たり前だ。俺も坂柳も「途中から見た」とは言ったが、「須藤から仕掛けた」と断言はしていないからな。」

「つまり坂柳と比企谷は偶然事件と鉢合わせして、その後に龍園と組んでCクラスが有利になるように動いたということになるな」

「多分ね。まあ何にせよ坂柳さんなら監視カメラのフェイクに気付きそうだから呼ばない方がいいよ」

「そんな会話が聞こえてくるが、早く去ってくれ……」

「そう強く願っているとやがて人の気配が遠ざかっていき、完全に消えた事を認識するとロッカーのドアを開けて、外に出る。」

「はあ、はあ……さつき悪かったな……」

「……別に。私の方こそロッカーの中に入るって提案をして悪かったわ……」

互いに息絶え絶えになりながら謝罪をする。ロッカーの中は特別棟以上に蒸し暑く、床には俺達の汗が大量の落ちてている。

「ダメだ……暑い」

限界なのでブレザーを脱いでワイシャツになる。この学校はブレザーの着用が義務づけられているが、流石に我慢の限界だ。

「私も限界……」

言いながら神室もブレザーを脱いでワイシャツ姿になるが、その際にワイシャツが透けて紫色のブラジャーが目に入るので慌てて目を逸らす。バレたらマジでヤバイからな。

「とりあえず任務は完了したし、出ようぜ。これ以上ここにいたらマジで脱水症状になりそうだ」

「そうね。ちなみに比企谷、アンタ今回の件で何ポイント龍園から貰うの」

「3000。審議が終わったら何か奢ってやるよ」

神室の場合、坂柳の命令だからな。俺一人で充分にもかかわらずタダ働きをさせられたんだし、奢るくらい文句はない。

「じゃあ今からアイス奢って」

「あいよ」

言いながら俺達はよろよろと特別棟を後にして学校のカフェテリアでアイスを食べた。

そして食べ終えてから龍園に任務完了の旨を記したメールを送るのだった。

## 決着

任務を遂行した俺は午後からの授業には参加した。その際に隣の席のひよりに事情を聞かれた際は「朝は体調が悪かったが12時くらいに目が覚めた時は問題なかったから、登校した」と誤魔化した。

午後の授業については審議直前だからか重い空気のまま進み、遂に放課後となった。「さて……おいお前ら。さっさと行くぞ」

帰りのHRが終わり坂上先生が教室から出て行ってから俺は石崎達に話しかけるが……

「あ、悪い比企谷。先に行つててくれないか？」

石崎達は妙に嬉しそうにそんな事を言ってくる。

「何か用事があるのか？」

「実はよ、俺達さつき櫛田ちゃんから呼び出しのメールを貰ったんだよ。だから会わないと、な？」

どうやら一之瀬が言っていたように石崎達だけを呼び出したようだ。しかし石崎達も馬鹿だろ。このタイミングでDクラスの生徒からの呼び出しなんて罠に決まってる

だろうに。

ともあれ俺に止めるつもりはないし……

「わかった。ただし5分前には生徒会室に來い。遅刻したら心証が悪くなるからな？」

「わかつてるって。じゃあまた後でな」

石崎達はそう言つて教室から出て行く。それを見送つた俺も一息吐いて教室を出て生徒会室に向かう。

そして到着してからノックをして中に入ると審議が20分前だから橘先輩しかいなかった。

「失礼します。今日もよろしくお願ひします」

「はい。よろしくお願ひします。お一人ですか？」

「石崎達は後から來ます。そちらこそ会長はいないんですか？」

「会長は他の仕事があつて職員室にいますよ」

「おおい。審議20分前にも他の仕事があんのかよ？」

「生徒会長つてやつぱり忙しいんですね。となると権力とかも半端ないんですか？」

「とりあえず橘先輩から学校の情報を聞き出そう。もしかしたら今後の役に立つかもしれない。」

「いえ。生徒会そのものには力はありません。その役職に就いた人次第ですね」

マジか。つまり歴代の会長はそれぞれ手にした権力も違うって訳か。この学校は本当に実力主義だな。

「なるほど……やっぱ堀北会長は歴代会長の中でもぶつちぎりなんですか？」  
「当然です！」

橘先輩は薄い胸を張って誇らしげに言ってくる。あ、この人会長のファンだな。

そんな事を考えているとドアが開くので、そつちに目を向けると堀北と須藤が入ってくる。しかし綾小路の姿は見えないが不参加か？

まあどうでもいいか。いてもいようが結果は決まっているし。

そう思っていると次に会長が入ってきて、少しして坂上先生と茶柱先生が入ってくる。

「おや比企谷君だけかね。石崎君達は？」

「遅れてくると言っていました。まあ4時までに来るでしょう」

坂上先生に返事をするとう坂上先生は俺の隣に座る。向かい側では茶柱先生も堀北に綾小路の存在について尋ねていた。どうやら綾小路は来ないようだな。

暫く待機する中、遂に石崎達が出来て来るが、汗がダクダクだった。まあ呼び出された場所が場所だからな。

「ではこれより昨日に引き続き審議の方を執り行いたいと思います。着席してください」

「い」

橘先輩はそう言うが3人は動く気配はない。

全員が訝しげに見る中、小宮が口を開ける。

「……坂上先生。この話し合い、無かったことにしていただけませんか？」

「どうやらDクラスの作戦が成功したようだな。しかし演技をさせて貰うか。」

「それはつまり、和解した、もしくは和解したいということか？」

しかしその前に会長が鋭い視線を浴びせる。

「今回の件、僕たちはどちらが悪いという話じゃないことに気付いたんです。だから訴えを取り下げたいんです」

「訴えを取り下げる、か」

茶柱先生は薄い笑みを浮かべる。

「何がおかしいんですか茶柱先生」

「いや、失礼。てつきり私は今回、どちらかが潰れるまで言い合いをすると読んでいましたので。それが訴えを取り下げるとは……」

「どういう事だ石崎。訳を説明しろ」

事情は知っているが知らないフリをして質問をする。その方が面白そう、というか龍

園からの指示だし、

「悪い比企谷。お前には助けてもらったけど、もう訴えを取り下げらるって決めたんだ」

小さく頭を下げるも。意志は固いようで強く訴えてくる。それを聞いた坂上先生は須藤に怒りの目を向ける。

「何をしたんですか？ 訴えを取り下げなければ暴力を振るうと脅しましたか？」

「は？ 俺は何もしてねえよ」

「坂上先生……僕たちはもう何があろうと訴えを取り下げます。考えは変えません」

それを聞いた坂上先生は頭を両手で抱える。

「訴えを取り下げると言うなら受理しよう。話し合いの最中に於いて、審議を取り消すケースは極稀にですが起こり得ますから。ただし規定に則り、諸経費として、プライベートポイントを納めて貰うが異論はないか？」

初耳だとばかりに顔を見合わせるが、三人は頷いた。何があっても彼らは意志を変えないだろう。

「待てよ。勝手に訴えて、勝手に取り下げるなんてわけわかんない」

「黙って」

須藤が不満をぶちまけそうになったが、その前に堀北が止めに入る。正しい判断だ。

ここで須藤がキレたらDクラスに大ダメージだからな。

「では話し合いは終わりだ。これで審議を終わりにさせて貰おう」

会長はそう言つて締めくくる。随分と呆気ない幕切れだ。ならばこれ以上ここにいる理由はない。

「失礼します」

最後に一礼して一足先に生徒会室を出る。そして早足で距離をとつて、周りに誰もいない事を確認してから携帯を取り出して坂柳に電話をかける。

『もしもし。時間帯からして審議は終わりましたか？』

「ああ。予想通り石崎達が訴えを取り消した」

『それは何よりです。では私も動きますね』

「ああ」

そう言つてから通話を切る。そしてそのまま龍園に電話をかける。

「俺だ龍園。石崎達が訴えを取り消した事を坂柳に伝えた」

『わかった。じゃあ次だ。一之瀬に例の動画を見せる嫌がらせをしろ』

「悪趣味だなオイ。つか一之瀬がどこにいるわからない」

『別に今日じゃなくていい。明日の朝、寮のエントランスで待ち伏せするのも手だ。それに俺がお前よりも先に一之瀬を見かけたら俺がやる』

「へいへい。まあ何にせよ審議についてのミッションはコンプリートしたし、切るぞ」

『ご苦労だったな。また頼みたいことがあったら連絡する』

通話が終わったので携帯をポケットにしまう。とりあえずひと段落したし、ひよりに会いに……ダメだ。今日は茶道部があるんだったな。

仕方ない。ショッピングモールに遊びに行くか。

方針を決めた俺はそのまま昇降口に向かう。と、ここで坂柳が職員室に入って行くのが目に入った。どうやら早めに作戦を実行するようだ。

そんな坂柳を見ながら靴に履き替えて昇降口を出る。一緒に居るところを見られたら下らない邪推をされそうだし。

俺はそのまま学校を出てショッピングモールに向かう。ショッピングモールは7月上旬だから人は結構いる。

ショッピングモールに着いた俺は最初にコンビニに向かう。細かいものが不足していたので補充しておきたいし。

しかしその時だった。コンビニがある方向からは監視カメラを設置した一之瀬と神崎が出てくる。

向こうもこちらに気付いたので、龍園からの指示をこなすべく話しかける。

「よう。石崎達は訴えを取り下げたぜ。Dクラスと同盟を組んでるBクラスからしたら良かったな」

「そうだね。不思議なこともあるんだね」

「全くだ。まさか偽の監視カメラを用意して脅すとは中々面白い手を使ったな」

その言葉に2人は一瞬だけ眉をひそめるが、一之瀬はいつもの笑顔で返事をする。

「いやいや。変な事を言わないでよ。この学校で監視カメラなんて用意出来ないよ」

ま、しらばつくれるよな。しかし……

「ほほう。じゃあこれは何だ？」

言いながら俺は携帯を操作して例の動画を再生待機状態にしてから携帯を一之瀬に投げ渡す。

対する一之瀬と神崎は訝しげに動画を再生するが、動画が始まると驚愕の表情を浮かべる。

「須藤に一切の罰を与えないためには、Cクラス側が訴えを取り下げの必要があるからな」

「……初めからわかっていた訳か。だが何故この動画を石崎達に見せなかった？石崎達に見せれば向こうは訴えを取り下げず、須藤を処罰を与えることも出来たはずだ」

「さあな？何でだろうな？ま、強いて言うなら……龍園からそんな指示を受けてないからだな」

「龍園君から指示を受けてなくてもCクラス側の利益になる事を放置したの？」

「まあな。俺は龍園の部下じゃなくて取引相手だ。龍園から審議で弁護をしろって依頼は受けたが、それ以外の依頼は受けてない。石崎達を守れって依頼を受けたら石崎達に動画を見せてお前らの罠について説明したな」

「その言い方だと龍園に対する忠誠心は全くないみたいだな」

神崎はそう言うてくる。龍園に対する忠誠心だど？

「あるわけないだろ。俺がアイツに協力するのは報酬が魅力だからだよ」

アイツの人間性は完全な屑だ。少なくとも敬意は払ってない。

「じゃあもしも龍園君が報酬を用意出来なくなったら？」

「良い言葉を教えてやる。金の切れ目が縁の切れ目だ」

そう返事をするると一之瀬に手にある俺の携帯が鳴り出す。同時に一之瀬が携帯を返してくる。

「坂柳さんから電話が来たよ」

「そうか……もしもし？」

『あ、比企谷君。須藤君を訴えましたが直ぐに通りましたよ』

「そうか。つかその際に先生達に「何でもつと早く訴えなかつた？」って言われたか？」

『言われましたが、審議と被らせるのは問題と思つたからと返しました。結果、先生は須藤君を放送で呼び出して事情聴取をするらしいです』

「そうか。ま、何にせよ明日どうなるかだな」

『ええ。吉報が届く事を祈りましょう』

その言葉を最後に通話が終わったのでポケットに携帯をしまう。同時に神崎が話しかけてくる。

「今の電話は何だ？訴えるとか言っていたが？」

ま、普通気になるわな。しかしそれを教えるつもりはない。

「他人の電話の内容を聞くのはマナー違反じゃないか？まあ安心しろ、何があろうとBクラスには実害がないからな」

そう言つて俺は2人の横を通り過ぎてコンビニに向かうのだった。

とりあえずミツシヨンは完全にコンプリート出来たし、次に龍園から依頼が来るとしたら夏休みにあると思われる特別な試験を受ける時だろう。

その時までゆっくりと羽を伸ばしておかないとな。

ピンポンパンポン

『1年Dクラス須藤健君、至急職員室に来てください。繰り返します、1年Dクラス須藤

健君、至急職員室に来てください』

「あ？何で呼ばれなきやいけねーんだ。訴えは取り下げられた筈じゃねえねか？」  
「審議に関する報告があるんじゃないか？まあ無視するのはアレだし行ってこい」  
「うっす……ったく、何なんだよ？」

## 支給ポイント

石崎達が訴えを取り下げた日の翌日、俺は目を覚ますなり携帯を操作してポイントを確認する。

（ちゃんと58600ポイント振り込まれてるな。良かった良かった）

事件が解決したしポイントが振り込まれるのは当然だな。とりあえず今日はひよりと本を買いに行くか。

俺はそのままパジャマを脱いで制服に着替えて朝食を食べて部屋を出る。

そしてエレベーターを待っているとドアが開くので中に入ると、昨日審議をした堀北がいた。

「ねえ比企谷君。聞いて良いかしら？」

「？何だ？」

「今朝、ポイントは振り込まれた？」

「振り込まれたがそれがどうかしたか？」

「何故か私の端末にはポイントが振り込まれてないのよ。事件の後始末が終わってないから学年全体に振り込まれてないと思ったけど違うようね」

ほほう。Dクラスは今月も0ポイント生活のようだな。

「もしかして須藤以外にもやらかした生徒がいるんじゃないか？」

「考えたくない事実ね……」

堀北はため息を吐くがやらかしたのは須藤だろう。

「ちなみにだがよ、昨日お前らはどうやって石崎達に訴えを取り下げさせたんだ？アイツら全く事情を教えてくれないんだよ」

まあ実際は全て知ってるけどな。

「さあ？私も予想外だったから知らないわ」

見事のポーカーフェイスだ。これを見抜ける奴はそう居ないだろう。

「そうか」

そう返事をした所でエレベーターのドアが開いて寮のエントランスに着くので、俺は堀北と別れて自販機に行き無料のミネラルウォーターを購入する。ああ、MAXコーヒーが売られてないのが辛い……

ため息を吐きながら学校に向かおうとすると、最悪な事に由比ヶ浜と鉢合わせしてしまう。

面倒だから無視して学校に行こうとした時だった。

「待つしー！ヒッキーDクラスに何をしたしー！」

由比ヶ浜が喚くが、何を言ってるんだ？

「何の話だよ？」

「とぼけんなし！昨日Cクラスが訴えるのをやめたのにポイントが入ってないし！ヒツキーが何かしたに決まってんじゃない！」

ウゼエ……やったのは俺じゃなくて坂柳だ。

無視したいのは山々だがこのまま喚き続けると面倒だし、嘘で誤魔化すか。

「生憎だが俺の端末にもポイントが入ってない」

「え？」

「だから俺の端末にも振り込まれてないって言ったんだよ。大方事件の後始末が完全に終わってないからだろ」

もちろん嘘だが、俺もポイントが振り込まれてないと言ったら、馬鹿な由比ヶ浜は信じるだろう。

「もう良いか。こっちは忙しいんだよ」

「あつ……待つし！まだ話は終わってないし！」

「何だよ……早く済ませろ」

「ゆきのんに謝るし！何でゆきのんに土下座しろって命令した奴を止めないし！ゆきのん可哀想じゃん！」

あー、その話ね。でもなあ……

「論点をすり替えるな。アレはそもそもお前が赤点を取らなかつたら起こらなかつた問題だ。1番悪いのはお前が赤点を取った事だからな」

少なくとも1番悪いのは由比ヶ浜だ。過去問があるにもかかわらず赤点を取つたんだから。由比ヶ浜が赤点を取らなければ雪ノ下は土下座しないで済んだのは間違いない。

「それは……で、でも！あの時にヒッキーが止めてれば……！」

「生憎だが俺じや龍園を止めるのは無理だ。つか俺に文句を言つてる暇があるなら暗記の1つでもやったらどうだ？Dクラスの疫病神」

実際由比ヶ浜の所為でDクラスは30万ポイント、それも他クラスから借りて用意したポイントを失つた。由比ヶ浜は須藤と並んでDクラスの疫病神だろう。

「っ！直ぐに謝れば許してあげようと思つたけど、もう許さないし！」  
「だつたらどうすんだ？」

「決まつてるし！ヒッキーを退学させて後悔させてやるし！」

「はっ、やれるもんならやってみろ」

俺は自分を優秀な奴とは思つてないが、少なくとも由比ヶ浜に退学させられるほど雑魚とは思つてない。

「泣いて謝っても絶対に許さないから！」

由比ヶ浜はそう言つて走り去つていくが……

「お前に何か出来るとは思えないな……」

「そうですね。それに比企谷君を潰せる人はそう居ないでしょう」

そんな声が聞こえてきたので振り向くと坂柳が寮から出てくる。

「おはようございます比企谷君。早速面倒な目に遭つていますね」

「言うな。それより朗報だ。Dクラスはポイントが振り込まれてない」

それを聞いた坂柳は薄っすら笑みを浮かべる。

「それは何よりです。それと比企谷君。こちらは約束通り手を貸したので夏休みはよろしくお願いしますね」

坂柳はそう言ってくるが、それは多分夏休みに行われるであろう特別な試験でAクラスの葛城派を叩けることだろう。

「わかつてる。でも試験の内容次第ではマトモに動けないからな？」

「それはわかつてます。邪魔出来るなら邪魔をしてください」

「はいよ。そういうやお前、以前由比ヶ浜を潰すとか言つてたがいつ頃潰す予定なんだ？」

「そうですね……今後退学がかかった特別な試験があつたらDクラスに攻撃を仕掛けてみたいと思います。彼女の実力はDクラスでも低いでしょうから」

ま、そうだよな。今回の暴力事件で向こうも警戒してるし、今仕掛けるのは困難か、  
「ま、いざとなったら協力する。んじやそろそろ行こうぜ」

俺はともかく坂柳は登校するのに多大な時間を要するし、これ以上話していると遅刻  
してしまうだろう。

「そうですね。もし遅刻しそうになったら是非抱えてくださいね」

「よし、行くぞ」

俺は坂柳に行くように促す。既に第三者の目がある場所で坂柳を何度かお姫様抱っ  
こしたが、だからといって更にやるのは恥ずかしい。最近になって漸く噂が消えかかっ  
ているのだ、再燃させる訳にはいかない。

そして俺は坂柳の歩幅に合わせてゆっくりと登校した。遅刻ギリギリではあったが、  
遅刻してないのでノープロブレムだろう。

「席に着け。HRを始める」

Dクラスの教室にて、担任の茶柱が教室に入る。

「先生、昨日の審議はCクラス側が訴えを取り下げたのに何でポイントが振り込まれて

ないんですか？それに須藤君がいないんですか？」

と、同時に櫛田桔梗が質問をする。しかしそれも当然だ。ポイントは振り込まれておらず、須藤は学校に来てないのだから。昨日Cクラス側が訴えを取り下げたのはDクラスに知れ渡っているので不思議でしかなかった。

戸惑いの空気がDクラスに流れる中、茶柱は口を開ける。

「確かに昨日の審議においては須藤に罰は下されていい。しかし審議が終わった直後、Aクラスの坂柳が学校側に須藤に突き飛ばされて暴言を吐かれたと訴え出た。調査の結果、須藤に1週間の停学の罰が下されて、それに伴いクラスポイントも差し引かれた」

『はあああああつ!?!』

茶柱の言葉にDクラスからは驚愕の声が響いた。まさか審議を乗り越えたと思った矢先に須藤が停学を食らうなど、誰も予期してなかったからだ。

そんな中、堀北が手を挙げる。

「茶柱先生。確か坂柳さんは目撃者としてCクラスに有利になる動画を用意してました。その事から考えて須藤君に貶める為の罠である可能性はあるのですか？」

審議に参加した堀北からしたら、Dクラスを不利にする動画を提示した坂柳が須藤に突き飛ばされて暴言を吐かれたのは余りにも出来過ぎと考えている。

普通なら堀北の考えは正しいが……

「その可能性は低い。事件現場は職員室前、つまり監視カメラがある場所だ。私も記録映像を確認をしたが明らかに須藤に非があった」

茶柱に監視カメラがある場所と言われた堀北は黙り込む。Cクラスとの暴力事件は監視カメラがない事を利用して退けたが、監視カメラがある場所による愚行については対処の仕様がないう事を理解したからだ。

「で、でもさーぶつかって暴言吐くのは悪いけど、停学は重過ぎじゃね?!」  
池がそう叫ぶと茶柱は頷く。

「池の言う通りだ。普通なら嚴重注意で終わっていた。しかし坂柳が杖無しではマトモに歩けない事、須藤がCクラスと問題を起こした事、須藤の審議中の言動に問題がある事から停学処分が下された」

その言葉によってDクラスに須藤に対する悪意が蔓延する。

「あーあ、須藤の所為で今月も0ポイント生活かよ……」

「人の迷惑を考えられないのかしら?」

「だよなーゆきのん。本当に最低だよなー」

由比ヶ浜が同意するとクラスの大半が一斉に由比ヶ浜を見る。それにより由比ヶ浜は戸惑う。

「え？な、何？」

「あのさ、由比ヶ浜さんが須藤君を悪く言えるの？中間試験で皆からプライベートポイントを貰って退学を免れた由比ヶ浜さんが」

「だよ。正直由比ヶ浜さんは悪く言える立場じゃないよね」

「もう須藤と由比ヶ浜は2人揃って退学すればいいのに」

その言葉に対して由比ヶ浜は怯えて、雪ノ下が庇う。

「それ以上由比ヶ浜さんを悪く言うのはやめなさい」

「事実を言っただけじゃん」

「そこまでにしろ。HR中だ」

茶柱がそう口になると静かにはなるが悪意は蔓延したままだ。

「とりあえずポイントが振り込まれてない理由はこれで理解したようなのでHRを終了する。期末まで後2週間なのでしっかり勉強するように」

茶柱はそう言って教室から出て行く。それにより由比ヶ浜に悪意が向けられたのと言うまでもなく、由比ヶ浜はこの場に居らず悪意を向けられない須藤を恨むのだった。

クラスポイント

D	C	B	A
ク	ク	ク	ク
ラ	ラ	ラ	ラ
ス	ス	ス	ス
0	5	7	1
c	8	4	0
p	6	5	0
	c	c	4
	p	p	c
			p

## 船上

期末テストも終わり、8月となった。

現在俺達1年生は以前から聞いていたバカンスに行くべく豪華客船に乗っている。

予定では最初の1週間は無人島に建てられたペンションで夏を満喫して、その後の1週間は客船内での宿泊という流れだが……

「俺の予感じゃ特別な試験が2つあると思う」

「私もそう思います。そして私が参加するとしたら無人島での試験は無理でしょうね」

この旅行は絶対に裏があるに決まっている。俺と坂柳の意見は同じだった。

現在俺達は船のデッキにあるプールにいる。一応俺も坂柳も水着を着ているが、坂柳は泳げないのでそれに付き合う形で足だけプールに突っ込んでいる。とはいえ足は冷たく、風も気持ちいいので悪くない。

「しかし意外だな。てつきりお前は今回の旅行に参加しないかと思ったぞ」

俺は隣にいる坂柳にそう告げる。坂柳は白いワンピースタイプの水着は着て儂い雰囲気醸し出して、美術品のようだ。

そんな坂柳は身体が弱いので旅行そのものに参加しないと思っていた。

「ええ。真嶋先生からは参加を渋られましたが、面白くなりそうな予感がしましたので」  
「そうか。けど無理するなよ」

「ありがとうございます。ところで比企谷君にお願いがあるのですが良いですか？」  
「何だよ？」

「少しだけプールの中を歩きたいのですが、エスコートしてくれませんか？」

なるほど。いくら水の中でも坂柳が一人で歩くのは厳しいかもしれないし、補助は必要だ。

「はいはい、杖になってやるよ」

正直恥ずかしい気持ちはないわけじゃないが、坂柳の体の弱さを考えると無碍には出来ん。

俺が手を差し出すと坂柳は俺の手を握り、ゆっくりと身体をプールに浸からせるので、俺もそれに続いてプールに入る。

「意外と気持ちいいですね。私、お風呂以外で身体を水に浸けた事がないので新鮮に感じます」

そりやそうだろうな。

「気持ち良いなら何よりだ。しかしお前も大変だな」

「慣れてしまえばそうでもないですよ。ただ面白そうな事に参加出来ないと不満に思う

事はありますが」

だろ。うな。というかコイツが人並みの肉体を持っていたらあらゆる場所で暴れ回り誰にも止められないだろう。

「そうか。ま、旅行中に困ったことがあるなら手を貸す」

「ええ。以前約束したように特別な試験では動いてくださいね」

坂柳の言っていることは、以前起こった暴力事件の時に協力した際の報酬の話だろう。あの時坂柳は坂柳派がCクラスをバツクアップするのと引き換えに葛城派を叩くと要求した。

「もちろん全力は尽くすが……改めて確認するがAクラスがBクラスにクラスポイントを抜かされてもいいんだな？」

「ええ。寧ろそうしてください。そうすれば葛城君の指示は無価値になるでしょう」

自分の所属するクラスが落ちようと気にしないあたり、坂柳も龍園と同様にリミッターが外れているのだろうな。

そう思いながらも坂柳の手を引いてゆつくりとプールの中を歩いていると、ボールが坂柳のいる方に飛んでくるので、左手で坂柳を俺の後ろに抱き寄せながら、右手でボールを叩く。それによってボールは一回水の上でバウンドして俺の右手に収まる。

「ごめん。怪我してない？」

すると離れた場所からポニーテールの女子生徒がこっちに謝ってくる。女子の近くに一之瀬がいるからBクラスの生徒だろう。

「問題ない。ただ、他にも泳いでる奴もいるからあんまり強くボールを投げんな」  
「わかった。ごめんね」

再度謝罪を受け取ったのでボールを投げ返す。坂柳に当たらなくて本当に「あの……」良かった？……た？

「もう大丈夫ですから……えっと……」

すると俺は坂柳を抱き寄せている事を改めて認識する。坂柳は少しだけ恥ずかしそうに頬を染めて見上げてくる。同時に坂柳の柔らかな身体の感触が伝わってくる。

「わ、悪い……」

「……いえ。助けられたので怒ってはいませんが、比企谷君って意外と大胆なんですね」  
「そんなつもりはねえよ。それより上がらないか？」

坂柳にそう提案するのは周りからは凄い視線が集まっているからだ。

不幸中の幸いなのは口煩い由比ヶ浜がこの場にいない事だろう。アイツがいたら「こんな場所でセクハラするなんてヒッキーマジキモい！」って喚きそうだし。

「そうですね。上がりましょうか」

坂柳が了承したので俺は坂柳の手を引っ張ってプールの端まで連れて行き、先にプー

ルから上がり坂柳の杖を回収する。

そして坂柳の手を引つ張ってゆつくりプールから引き上げる。

「どうもありがとうございます」

「気にすんな。それにしても無人島到着まで後1時間ちよいか」

無人島に着くのは昼の1時近くで、今は12時前とそれなりに時間がある。

「でしたらご飯を食べましょう。今日から試験があるかもしれないですし」

「いや、1人で食べ」「一緒に食べないなら泣きます」……了解した」

坂柳が泣いたら後ろ指を指されてしまうのは明白だし、従うのが賢明だ。

俺はため息を吐きながら更衣室に向かうのだった。

その後着替え終わった俺は坂柳と合流してレストランに向かう。

「このレストランは魚料理が有名なんですよ」

坂柳はそう説明するが庶民の俺からしたら高級レストランより適当なカフェの方が合っている気がする。

まあ偶には高級な飯も良いかもしれない。そう判断してレストランに向かうと……

「何でヒツキーがここにいるし！ここはヒツキーみたいな人が来る店じゃないし！」

入口近くで由比ヶ浜と鉢合わせこつちを指差してくる。

「……すみません比企谷君。私がこの店を選んだ所為で不愉快な気分にならせてしまいましたね」

坂柳が物凄く申し訳なさそうに謝ってくる。コイツがここまで申し訳なさそうな表情になるとは、坂柳自身も由比ヶ浜を面倒な存在と思っているのだろう。

「まあこういう事もあるさ。場所変えてデツキのカフェに行かないか？」

「そうしましょうか」

言いながら俺達はレストランに背を向けて立ち去ろうとする……が、ここで待ったをかけられる。

「待つし！謝罪もしないでどこに行くし！」

「どこって違う飯屋に決まってんだろうが。つか謝罪して何だよ？」

「決まってるじゃん！ゆきのんが土下座するのを止めなかった事！もうすぐゆきのんが来るから謝るし！後そつちのチビはあたし達のクラスポイントを奪ったんだから謝つ

てあたし達にポイントを渡してよ！」

そういうやDクラスは未だにクラスポイントが0だったな。須藤が馬鹿した所為で。

一方チビ呼ばわりされた坂柳の額に青筋が浮かぶ。まあ気持ちはわからんでもない。チクつたのは坂柳だが、そもその原因は須藤の言動だからな。

「謝る必要も渡す必要もありませんね。それに由比ヶ浜さん。レストランの入口で騒ぐと周りの迷惑になりますし、その格好はこの店に相応しくありませんよ」

同感だな。由比ヶ浜の服は派手な服でドレスコードについて問題があるだろう。現にレストランの中にいる生徒は全員冷たい目を向けている。

「う、煩い！子供は素直に言うことを聞けし！」

「もうマジで面倒だな……坂柳、逃げるぞ」

以前のように坂柳を抱き抱える。対する坂柳は落ちないようにしっかりと俺に抱きつくので、早足でレストランを離れる。

「あ、ちよつと待つし！」

由比ヶ浜は喚くがそのまま早足で階段を上って逃げ切る。そして数階上ったところで坂柳を下ろす。

「助かりました」

「気にすんな。しっかし凄く疲れた」

「全くです。中学からあんな風だったんですか？」

「まあな」

雪ノ下を崇拜していて、俺が雪ノ下の意見とかに難色を示すと直ぐに喚くし、人の話は聞かずに直ぐにキモいキモい言ってくる。修学旅行以降はそれが顕著になったが、ハッキリ言つてイラつてくる。

「とりあえず美味しいものを食つて気分転換するか」

「そうですね」

互いに頷き合つてからデッキに向かい、目につけたカフェでサンドイッチとコーヒーを注文して腹を膨らませる。

これから何があるかはわからないが頼むから平和に過ごしたい。

そう強く思いながら昼食を済ませて、暫くの間坂柳と雑談をしていると……

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まり下さい。まもなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』

そんなアナウンスが流れる。  
やれやれ、嫌な予感しかないなあ……

## 上陸

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まり下さい。まもなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』  
そんなアナウンスが流れる。

やれやれ、嫌な予感しかしないなあ……

「どう見る?」

「十中八九、存在するであろう試験に関する事だと思えます。すみませんがデッキまで運んでくれませんか?」

「はいはい」

言いながら俺は席から立ち上がり、坂柳をお姫様抱っこする。既に何度も人前で作っから慣れちまったよ。

そしてそのままデッキの展望台に向かうと前方に島が見える。大きさは島として見れば狭いが、俺達が過ごす分には広すぎる。

そんな中、船は栈橋をスルーして島の周りを回り始めるが……

「妙ですね……スピードが速過ぎます」

坂柳の言う通りだ。意義ある景色と言っておきながら旋回速度が速い。少なくとも景色を楽しむ配慮はない。

「だろうな……というか坂柳。お前はいつまで抱っこされてんだよ？」

「すみません。船が速いのでこのままでも願います」

いや船は速さを維持してはいるが速度は上がってないからな？ 展望台に着いたんだから降りろや。周りからの視線が痛いわ。

そう思うが坂柳はギュツと抱きついているので、仕方なく抱きながら景色を見る。

「洞窟、開けた道、廃墟。色々な物があるがよ……ペンションが無いじゃねえか」

思わずそう呟いてしまう。予定では今日から一週間ペンションで過ごすらしいが件のペンションが見当たらない。要するに……

「どうやら真つ赤な嘘で、実際は無人島生活をする可能性が高いですね」

つかそれ以外に考えられない。ただの旅行ではないとは思っていたが、まさかのサバイバル生活かよ……

ため息を吐いていると船は島の周りを一周して棧橋に向かい、やがて停止する。

『これより、当学校が所有する孤島に上陸致します。生徒の皆様は三十分後、全員ジャージに着替え、所定の鞆と荷物をしっかりと確認した後、携帯を忘れず持ちデツキに集合して下さい。またしばらく御手洗に行けない可能性がありますので、きちんと済ませて

おいて下さい』

そんなアナウンスが流れる。同時に俺の腕の中にいる坂柳からメロデイが流れるので、一旦坂柳をおろす。

「学校からメールが来てますね……上陸禁止のようです」

「つて事はある程度体力を使う必要があるようだな」

「ええ。比企谷君とはここでお別れですが土産話を期待してますから」

そう言う坂柳の目には嗜虐の色が混じっている。これは葛城派を叩けっ期待しているのだろう。

「へいへい。悪いが俺は準備しないとイケないから先に行くぞ」

坂柳に会釈してから俺は船内にある自分が割り当てられた部屋に行き、中に入ると同じ部屋で寝泊まりする龍園とアルベルトと石崎は既に着替えをしていた。

「来たか。十中八九試験があると思うがお前には暴れて貰うからな」

「それに見合った報酬を出せよ」

俺が龍園に協力するのは報酬が魅力的だからだ。無かつたら適当に流すだろう。

「お前はそれで良い」

龍園はそう言ってくる。俺は龍園に対して忠誠心は全くないが、龍園はポイントで俺から信用を買っている。俺と龍園の関係はポイントによって成り立っているのだ。

そして着替えた俺達は集合場所に移動すると既に大半の生徒が集まっていて、全員が集合場所に集まるとＡクラス担任の真嶋先生が拡声器を持って話しかける。

「ではこれより、Ａクラスの生徒から順番に降りて貰う。それから島に携帯端末の持ち込みは禁止だ。担任の先生に各自提出し、下船するように」

おいおい……携帯の持ち込みすら禁止って……相当面倒な予感しかないな。

ため息を吐きながら待機していると遂にＣクラスの番になったので船から降り始める。

その際に先生からボディチェックを受けたが警戒し過ぎだ。マジでどんな試験をやるんだか……

島に上陸した俺達は砂浜で点呼をするか暑くて仕方ない。

内心イライラする中、真嶋先生が口を開ける。

「今日、この場所に無事につけたことを、まずは嬉しく思う。しかし、1人の生徒は上陸できなかったことは非常に残念でならない」

それは坂柳だな。これについては仕方ないが。

すると作業着を着た大人が特設テントを設置し始める。中にはパソコンもあるが……

「ではこれより、本年度最初の特別試験を開始する」

うん。だいたい予想通りだな。

「と、特別試験？」

真嶋先生の言葉に戸惑いの感情が周囲から生まれていくが、戸惑ってない奴は馬鹿ではないだろう。

「期間はこれより一週間。8月7日の正午に終了となる。君達にはこれから1週間、この無人島で集団生活して貰う。また、これは実在する企業でも実践されている現実的、且つ実践的なものであることをはじめに告げておく」

「無人島で生活って……この島で、寝泊まりするってことですか？」

「その通りだ。その間君たちは寝泊まりする場所はもちろん、食料や飲料水に至るまで、全て自分たちで確保することが必要になる。試験実施中、正当な理由がない限り乗船は許されない。試験開始時点で、各クラスにテント2つ、懐中電灯2つ、マツチを一箱支給する。また、歯ブラシに関しては各生徒に1セットずつ、日焼け止め、女子生徒のみ生理用品は無制限で支給する。各クラスの担任に願ひ出るように。以上だ」

おいおい……予想以上にハードだな。

「は、はあ?!マジの無人島サバイバルなんて聞いたことないし!漫画の世界じゃないんだから!第一テント2つで全員寝られるわけないじゃん!マジあり得ないし!」

内心ため息を吐いていると由比ヶ浜が大きな声で喚くが、真嶋先生はその声に呆れたように返答した。

「君はあり得ないと言ったが、それは君が歩んできた人生が浅はかなものであったことにすぎない。はじめに説明しただろう。これは実際に企業研修でも取り行われているものだ」と

「そ、そんなの特別に決まってるし！」

由比ヶ浜は尚喚くが、他クラスから侮蔑の視線で見られてるぞ。現に俺の隣にいる龍園なんて嘲笑を浮かべてるし。

「由比ヶ浜、これ以上みつともないマネはするな。真嶋先生が言ったのはほんの一部。これは、誰もが知る有名企業でも取り入れられていることだ」

茶柱先生は由比ヶ浜の言葉を一蹴すると由比ヶ浜は頬を膨らませて黙り込む。

「しかし先生、今は夏休みですし、この行事の名目は旅行のはずです。企業研修なら、こんな騙し討ちのような真似はしらないと思えますが」

そうだな。ペンションが云々と説明を受けていたが、ペンションなんてないし、明らかに問題だ。ついでに言うならばテントなどの物資も明らかに不足しているし。40人で使うには足りない。

「なるほど、確かに不満が出るのも納得できる。だが特別試験と言っても深く考えなくていい。この1週間、君らは何をしようと自由だ。海で泳いだり、バーベキューをしたり。キャンプファイヤーで友と語り合うのもいいだろう。この試験のテーマは『自由だ』」

「んっ？え、試験なのに自由？ちよつと頭こんがらがってきた……」

生徒らは混乱し始める。

「この無人島における特別試験では、まず、試験専用のポイントを全クラスに300ポイント支給する。これを上手く使うことで、君らはこの試験を乗り切ることが可能だ。今からマニュアルを配布するが、マニュアルにはポイントで購入できるすべてのもののリストが載っている。食料や水のみならず、バーベキュー用の機材や無数の遊び道具なども取り揃えている」

「つまりその300ポイントで欲しいものがなんでも買えるってことですか？」

「そうだ」

「で、でも試験っていうくらいだから、何か難しいのがあるんじゃない？」

「いや。2学期以降への悪影響は何もない。それは保障しよう」

真嶋先生は悪影響がないと言うが……

(良い影響があるって事だろう)

でなきや試験にする必要はないし。例えばポイントを一定以上残したらクラスポイントやプライベートポイントが支給されるとかな。

そんな中、真嶋先生が一度区切ってから……

「この特別試験終了時には、各クラスに残ったポイントをそのままクラスポイントに加算し、夏休み明け以降に反映する」

そう告げる。真嶋先生の言葉が風と共にビーチを吹き抜けて砂埃が舞い上がるが、やっぱり重要な試験じゃねえか。

同時に生徒全員に衝撃が走る。

この試験は学力のみならず、忍耐力や環境への適応力なども問われる試験で、AとDクラスの間にあるハンディキャップを感じさせない仕組みだ。

「今からマニュアルを配布する。紛失の際は再発行も可能だが、ポイントを消費するので確実に保管しておくように。また、試験中に体調不良などでリタイアした生徒がいるクラスは30ポイントのペナルティを受ける。よって、Aクラスは270ポイントからのスタートとなる」

身体が弱い生徒でもペナルティがあるのかよ？

呆れる中、真嶋先生の話は終わり、残りは各クラス担任から説明を受けるよう指示さ

れる流れなのでクラスごとに分かれて集まり始めるが……

(絶対面倒な予感しかしねえ……)

隣にいる龍園が獰猛な笑みを浮かべている事から、色々と働かされる予感しかない……憂鬱だ。

## ルール確認

真嶋先生が大まかな説明をすませると解散宣言がされて、坂上先生が俺達の所にやって来る。

「今から君達全員に腕時計を配布する。試験中、この腕時計を許可なく外すことは認められていない。外したらペナルティが発生する。これには時刻の確認だけではなく、GPS機能、体温、脈拍など、様々な機能が搭載されている。非常事態に備えて、学校側にそれを伝える手段も用意されている。緊急時には迷わずそのボタンを押すように」俺らに腕時計が配布される。GPSが付いて、非常ボタンもあるなんて危険な事もあるって事か？

「つけたまま海に入ってもいいんすか？」

「完全防水だから安心したまえ。万一故障した場合、直ちに担当者が代用品を持つてくることになっている」

やっぱり準備に抜かりはないか。

「先生、ポイントを使わない限り、私達は全て自分たちで何とかしなければならぬということですか？」

「そうだ。解決方法を考えるのもこの試験で我々教員の関知するところではない。それでマニュアルの最後に目を通してくれ。特別試験において重要な事が書かれている」

坂上先生の指示に従ってマニュアルの最後を見ると……

著しく体調を崩したり、大怪我をしたりして続行不可能と判断された場合はマイナス30ポイントとなり、その者はリタイアとなる

環境を汚染する行為を発見したら、マイナス20ポイント

午前と午後8時の2回ある点呼に遅れた場合、1人につきマイナス5ポイント

他クラスへの暴力、略奪行為、器物破損を行なった場合、そのクラスは即失格、対象者のプライベートポイントを全て没収

4つのペナルティがある。要するに体調管理に気をつけて、遅刻と野糞と暴力略奪器物破損をしないようにすれば良いんだな。

しかし体調管理が重要ならある程度ポイントを使う必要があるだろう。ひよりみたいに身体が強くない生徒に0ポイント生活は厳し過ぎる。

「坂上、300ポイント全てを使い切ってからリタイアする生徒などが出たら、ポイントのマイナスはどうなるんだ？」

龍園が質問をするが敬語を使えや。

「その場合はリタイア者が増えるだけだ。ポイントがマイナスになることはない」  
「なるほどな……」

龍園は小さく頷く。どうやら色々企んでいるのだろう。

ともあれ俺も質問をしとくか。

「坂上先生。点呼はどこでするんですか？今作業員が作ってるテント付近ですか？」  
「クラスの担任は、自分のクラスのベースキャンプのそばに拠点を構えることになっている。ベースキャンプが決まったら私に報告をしてくれ。点呼はそこで行われる。また、一度決めたベースキャンプは正当な理由なく場所を変更できないから注意するように」

ベースキャンプの場所もしっかり考えないといけない。今いる砂浜のように日光が強い場所は論外だ。

「先生、トイレはないんですか？」

すると女子の1人が質問をする。そういやトイレがないな。

「トイレについては今から説明する。トイレは男女共用、クラスに1つ支給されるこれを使うように」

そう言つて坂上先生が示したのは、段ボールだった。おい……まさかアレか？災害時に使うアレだよな？

「そ、そんな段ボール使うんですか!？」

女子が喚く中、坂上先生はスムーズにトイレを組み立てて、使い方の説明を始めるが女子は拒絶するような表情を浮かべている。俺も正直使いたくない。

そう思う中、坂上先生は話を続ける。

「それとこれより追加ルールを説明する。まもなく君達にはこの島を自由に移動する時間が与えられるが、島の各所にはスポットという場所が設けられている。そこには占有権が存在し、占有したクラスにのみそのスポットの使用権が与えられる」

「他クラスが占有している場所に侵入したらペナルティが発生するんですか?」

「それは最後に説明する。話を戻すと占有権の効力は8時間のみで、時間ごとに権利がリセットされる。つまり、その度に他クラスにも占有のチャンスがあるということだ。そして、一度占有することにより1ポイントのボーナスポイントが与えられる。ただしこのポイントは試験中に使用できないので注意しろ。試験終了時にそのボーナスポイントは加算される」

つまり一箇所のスポットを1日占有すれば3ポイント手に入ることになる。1週間で21ポイント、これはかなりデカいな。

マニュアルによればスポットの近くには専用装置があるらしい。

更に詳しく読んでみると……

- ・ スポットを占有するためには専用のキーカードが必要である。
- ・ 1度の占有につき1ポイントを得る。占有したスポットは自由に使用できる
- ・ 他クラスが占有しているスポットを許可なく使用した場合、50ポイントのペナルティを受ける。

・ キーカードの使用権はリーダーのみにある

・ 正当な理由なくリーダーを変更することはできない。

大まかなルールはこんな感じだ。

更に最終日の点呼では各クラスのリーダーを言い当てる権利が与えられ、他クラスのリーダーを1人当てるごとに50ポイントを得ることができる。

反対に、他クラスに言い当てられた場合や外してしまった場合は50ポイントずつ失いそれまでのボーナスポイントも剥奪される、学校側の性格が見え隠れするルールだ。

「リーダーは必ず1人決めてもらう。無理にスポット占有に走らなければ、見破られることもないだろう。リーダーが決まったら私に報告するように。その際にリーダーの名前が記されたキーカードを渡す。また、今日の点呼までに決まらなければこちらで勝手に決めることになる。以上だ」

リーダーの名前が刻印されるといふことは、盗み見られてもダメということか。

坂上先生はそう言って去って行く。その際に騒めきが生じるが……

「全員黙れ。早速だが方針を発表するぞ」

龍園がそう言うのと一瞬で静まる。流石恐怖でクラスは支配しただけある。

「リーダーを誰にするかは後で決めるがぶつちやけどうでも良い。結論を言うとな俺達Cクラスは試験を放棄して夏のバカンスを思い切り楽しむぞ」

その言葉にクラスメイトからは再度騒めきが生じるが、今度は龍園も止めに入らない。

「あの龍園さん、試験を放棄するって……」

龍園の側近の石崎が恐る恐る質問をする。

「言葉通りだ。おそらく普通に試験を受けたら最終日の時点でポイントは100から200くらいだろう」

まあそうだな。マニュアルを見たが、1週間リタイヤなしで過ごすならある程度のポイントの消費は必要だし。

「俺からしたら真つ平御免だ。たかが100や200のポイントの為に1週間、暑さや虫、飢えなどに耐えるなんて馬鹿げた話だ」

その言葉に騒めきが大きくなるが龍園はそれを無視して説明を続ける。

「それならいつそポイントを全て遊びに使って、使い切ったら全員仮病でリタイヤする。そうすりゃ試験中、俺達は豪華客船で夏休みを満喫できる」

随分とぶっ飛んだ発想だな。まあこの試験の主旨は自由だから龍園の案も正解の一つだ。

そしてマイナス要素がない試験なら俺としても悪くない。

Dクラスは未だにクラスポイントが0だから抜かされる事はないだろう。

Bクラスは一之瀬の性格上、リーダー当てには挑戦しないだろうからポイントはそこまで増えないから、多少差が大きくなる程度でそこまで支障はない。

Aクラスについては坂柳がいないのでリーダーは保守派の葛城となる。坂柳なら積極的にリーダー当てには挑戦するだろうが、葛城なら一之瀬同様堅実に試験をこなすだろう。

結論を言うとクラスごとの序列は変わらないだろうし、龍園の考えも悪くはない。

「話は終わりだ。俺達もベースキャンプを探すが、場所は砂浜がある場所にするぞ」

言いながら龍園は歩き出す。普通に試験をこなすなら日差しが強い砂浜を選ぶのは悪手だが、龍園は本気でバカンスを楽しむようだ

一部のクラスメイトは龍園の提案に戸惑いながらもそれに続くがそんな中、俺は龍園に話しかける。

「龍園、ちよつと話がある」

「わかった……石崎、俺はちよつと比企谷と話をするから、他の連中連れてベースキャンプを探しに行け」

「は、はいっ！」

石崎は頷いてアルベルトと一緒にクラスメイトを率いて歩き出す。辺りを見ればAクラスとBクラスも行動を始めていて、Dクラスは大声で揉めている。その事からDクラスのリーダーは雑魚、もしくはリーダーがいなくてもいいのかもしれない。

そんなDクラスを尻目に俺と龍園は森に入る。

「お前の事だ。バカンスをするのは事実だろうがそれだけじゃないだろ？」

「くくつ、やっぱりクラスで俺の企みを理解出来るのはお前くらいか」

「そりや俺もお前も性格が屑だからな」

屑同士考えがわかるのだろう。

「結論を言おうと正解だ。バカンスをするのは本当だが、2、3日遊び倒したら俺は無人島に残つて追加ルールでポイントを稼ぎに行く」

そ、そうきたか……確かに数日遊んでベースキャンプから撤収すれば、他のクラスの連中はCクラスの事を頭から除外するし、暗躍がやりやすいな。

「とはいえ坂柳との約束もあるからAクラスの葛城に取引を持ちかける」

葛城に取引を持ちかける言つたが、その前に坂柳との約束つて言つてる時点で裏切

る気満々のようだ。まあ俺としても葛城派を叩けつて頼まれてるし反対はしない。そう思っていると……

「そこでだ比企谷。俺は他クラスを引つ掻き回し、尚且つ葛城から大量のプライベートポイントを奪いに行くんだが、お前も島に残って俺の手伝いをしろ。報酬として儲けの半分くれてやる」

龍園がそんな提案をするのだった。

## 契約書作成

「どこでどうですか？」

石崎が見つけたスポットは綺麗な砂浜だった。周囲には岩場などもあり、中々遊びが楽しめそうだ。

試験に使うには日光が強過ぎて最悪のスポットだが、バカンスを楽しむ場合には良いスポットだ。

「中々良い砂浜だな。ここをベースキャンプにするぞ」

「はい。それでリーダーについてはやっぱり龍園さんですか？」

「それは後で決める。お前らはテントの設置をしろ」

「は、はいっ！」

石崎はそう言つて走り去っていく。それにより龍園は手元にある紙に文字を書くのを再開して、やがて書き終える。

「とりあえず契約内容だが、精査を任せる」

言われて龍園からAクラスの葛城取引を持ちかける際に用意した契約書を受け取る。

## 契約内容

①CクラスはAクラスに対し、2000ポイント相当の物資を購入して譲渡する。尚、購入する物資はAクラスが決める。

②CクラスはBクラスとDクラスのリーダーを探り、得た情報を全てAクラスに伝える。

③Cクラスが①と②を達成した後、Aクラスの生徒全員が龍園翔に毎月2万ポイントポイントポイントを譲渡する。本契約は本校の卒業まで継続する。

④下記に署名した者は、本契約内容に同意したものとす。

って感じの内容の契約だった。中々大胆な作戦だ。成功したら龍園は坂柳を除いたAクラスの生徒39人から毎月2万、計78万ものポイントポイントが貰えるのだからな。

しかしこの契約書には欠点がある。それは少々攻撃的過ぎる事だ。

「ちよつと契約内容を変えるぞ」

言いながら俺は内容を訂正して、龍園に見せる。

## 契約内容

① Aクラスの生徒全員が龍園翔に毎月1万プライベートポイントを譲渡する。本契約は本校の卒業まで継続する。

② CクラスはAクラスに対し、200ポイント相当の物資を購入して譲渡する。尚、購入する物資はAクラスが決める。

③ CクラスはBクラスとDクラスのリーダーを探り、得た情報を全てAクラスに伝える。

④ Cクラスが②と③を達成した場合、Aクラスの生徒全員が龍園翔に毎月2万プライベートポイントを譲渡する。本契約は本校の卒業まで継続する。

⑤ 下記に署名した者は、本契約内容に同意したものとする。

「こんな感じでどうだ？」

「なるほどな。リーダー情報が手に入らなくても最低39万ポイントが手に入るわけか」

俺は確実性を重視するからな。リーダー情報手に入らなくてプライベートポイントが貰えないとかマジで泣くわ。

そして葛城はこの契約を受けるだろう。葛城派は葛城が生徒会に落ちた事で勢いが弱まっているし、この試験で坂柳派を抑え込みたいだろうし。

加えてこの契約についてだが、葛城もリーダー当てるの難しさを理解してるだろうから④が達成されるとは思ってないだろう。よって①と②だけを重視する事になるが、その場合向こうが得だ。

こつちが200ポイント分の物資を用意したら、Aクラスは本来持つてる270ポイントを1ポイントも消費しなくても1週間過ごせるだろう。それを考えるとAクラスが得するのは明白だ。

まあそれはあくまで俺達Cクラスが契約外の場所で裏切らなかつたら話だけだな。俺と龍園は坂柳との約束もあるので容赦なく裏切るつもりだ。

閑話休題……

ともあれ、向こうからしたら良い取引だし多分上手いくだろう。

「俺は現実性を重視するんだよ。ついでに言うなら契約書をもう一回見てみな。性格が屑なお前なら俺が張った罠に気付くぞ?」

「あん?……ああ、なるほどな。やっぱりお前も屑だな」

まあ否定はしない。少なくともお利口さんじゃないのは確かだし。

「ただ他クラスのリーダー情報はどうやって手に入れるんだ。俺達は目で見ただけでど

うにかなるが、葛城は多分キーカードを要求してくるぞ?」

リーダーを見抜くのはまだしも、キーカードを盗むのはリスクがデカい。バレたら即失格だし。

「当然わかってる。だからCクラスの中から……そうだな、金田と伊吹に怪我をさせてからスパイとして送り込む」

う、うわあ……コイツ息をするように怪我をさせるって言いやがった。俺も屑って自覚はあるが、龍園はそれ以上だな。

「止めろと言っても止めないだろうから何も言わないが、俺は殴らないからな」

流石に手を出す事に関しては抵抗が生まれてしまうから、やりたくないのが本音だ。

「そのくらいは俺がやる。んでリーダーについてだがお前なら誰にする?」

「誰にするも何も普通に考えて島に残る俺かお前か金田か伊吹だろ」

そんでキーカードを地面に埋めれば他クラスにはバレない……待てよ。

「良い考えが浮かんだ……するのはどうだ?」

「なるほどな。そいつは使えるし採用する。ミスっても俺達にダメージはないからな」

リーダーはお前がやれ」

「了解した」

俺がリーダーか。ま、龍園の作戦を実行するなら島に残る連中は派手に動けないし、

そこまで重要ではないだろう。

「とりあえず俺は契約書を葛城に見せてくるからお前は坂上の所に行ってリーダー申請をしろ。それと申請前に他の連中に向けて、俺が戻るまでポイントを使わないように厳命しとけ」

龍園はそう言うってから森の中に入っていくので、俺はクラスメイトが集まっている場所に向かうとスポットの機械があり、その近くで皆がマニュアルを見ていた。

「あ、比企谷。龍園さんは？」

「野暮用で席を外してる。それと龍園からの伝言だ。「俺が居ない間にポイントを消費して買い物したら二学期以降、買い物をした奴を虫けら以下の扱いにする」だ、そう  
だ」

石崎からの質問にそう返すとマニュアルを見ていた面々が震え上がる。これで勝手にポイントを使う馬鹿は現れないだろう。

「リーダーについては誰が？」

「龍園は俺にやれって命令してきた。だからちよつと報告に行ってくるが、1人で行く  
と逆の意味で目立つから何人か付いてきてくれ」

単独行動は危険だ。まして俺がリーダーをやるのだから。

「私が行きます」

そう言うとはひよりが真つ先に手を挙げる。その際に一部の女子がニヤニヤ笑いを浮かべて苛立つが我慢する。

我慢しながら志願者を待っていると言田とアルベルトも同伴してくれる。アルベルトがいるなら襲撃は受けないだろう。

「そんな訳だからちよつと行つてくるが、石崎はクラスメイトを抑えとけよ」  
「わかった」

石崎か頷いたのを確認すると俺達は皆に背を向けてスタート地点に戻るが途中である存在を発見する。

「おいおい……Dクラスはまだ方針すら決めてないのかよ？」

スタート地点の砂浜に近づくと騒ぎ声が聞こえてきたので俺達は手頃な岩陰に隠れる。岩の向こう側ではDクラスが揉めているようだが……

「どうやらトイレについて揉めているようですね」

ひよりの言う通り、耳を澄ませばトイレについて揉めているのがわかる。男子はポイントが勿体ないから支給された段ボールトイレで済ませると言つて、女子はポイントを消費して仮設トイレを購入したいと反論している。

「馬鹿だろアイツら……」

「比企谷氏の言う通りですな。節約は大切ですが、多少は妥協しないと反乱が起きますね」

金田の言う通りだ。もしも男子が段ボールトイレで我慢しろと女子に強制しまくったら、女子が「だつたらリタイヤしてやるよ！」って反乱を起こす可能性もある。

そうなったらボーナスポイントは0になる可能性があるのです、Dクラス男子は多少女子の方に寄るべきだ。ま、Dクラスがどうなろうと知った事じゃないけど。

そう思いながら岩陰から様子を見てみると、Dクラスの連中はとりあえず日光を遮る森の中で話し合いをしようという事になり、森に入っていく。

しかし判断が遅過ぎる。既にDクラス以外のクラスは移動してる。ウチのクラスに至ってはAクラスと偽りの同盟を結びに行ってるし。

ともあれ誰も居なくなつたので俺達は先生がいるテントに向かうと坂上先生がこっちにやって来る。

「坂上先生。リーダーが決まりました」

「わかった」

坂上先生はそう言って懐からカードを取り出してくる。定期券に似たような造りだ。

「それでリーダーは誰にしたんだね？」

「俺です」

坂上先生は頷くと俺にカードを渡してテントに戻る。すると暫くしてピロンと音が鳴り、表に「ヒキガヤハチマン」と表示される。

それを確認した俺達は長居は無用なのでこの場を後にして、ベースキャンプに行くべく砂浜に戻る。

するとそこには龍園も戻っていた。

「来たか。これでやるべき事は終わったし……バカンスを楽しむぞ」

龍園はそう言ってマニユアルをクラスメイトに渡す。対するクラスメイトらは開き直って試験の事を忘れたのか楽しそうに買える物のリストを見ている。

そんな中、龍園は俺に近寄り……

「葛城は契約を結んだ。お前には3日目から働いて貰うし、今のうちに遊んどけ」

小さく耳打ちをするのだった。

ま、その方が合理的だし、2日目の夜まで思い切り羽目を外しますか。

そう判断した俺は皆同様にマニユアルをチェックするのだった。

## バカンス

夏の日差しはとても暑く、日の当たる場所にいれば直ぐに日焼けをしてしまうだろう。よって外にいるときは日陰に行くのを好む。

ましてや今は無人島で1週間のサバイバル試験だ。必要のない限り日陰に行くのが基本だ。

普通ならな。

「おつ、蟹がいるぞ」

「本当ですね。それにしても岩場には沢山の生き物がいますね」

現在俺は水着を着て、同じく水着姿のひよりと一緒に日光の下でベースキャンピングから少し離れた岩場を散歩している。ひよりは水色のビキニを着ている。涼しげな色の水着はひよりの清楚さとマッチして良く似合っている。昼に見た白いワンピース水着を着た坂柳と良い勝負だ。

そんなひよりに見惚れながらも散歩を続けていると少し離れた場所ではボールで遊んでいる女子や水上スキーを楽しんでいる男子が目に入る。

龍園が試験を放棄して遊び倒すと提案してからクラスメイトは海で思い切り楽しん

でいるのだ。

実際龍園は試験を放棄しないで、俺とスパイとなった金田と伊吹の4人で試験に挑むことになっている。

そして金田と伊吹は既に龍園に怪我をさせられてBクラスとDクラスに向かっている。

俺はクラスメイトの大半がリタイヤする2日目の夜まで思い切り羽目を外すつもりだ。3日目からはマジのサバイバルだからな。

そんなことを考えながらも岩場を散歩していると行き止まりにぶつかった。ここまでは歩けたが、ここから先は巨大な岩が道を塞いでいて先に進めない。

引き返そうと考えたが、少し暑くなってきたし海に入って引き返すか。

「ひより、暑いし海に入って引き返さないか？」

「良いですよ」

ひよりが頷いたので俺は岩場から海に入る。同時に身体がひんやりとして気持ちが良い。

少ししてからひよりも海に入るが、運動音痴だからか慌ててバチャバチャと水を跳ね上げている。

「落ち着け」

「あつ……」

昼前に坂柳にやったようにひよりの手を握るとひよりはゆっくりと落ち着きを取り戻す。

「す、すみません。予想よりも冷たくて焦ってしまい、みつともない所を見せてしまいました」

「気にするな。普段クールなお前が焦ってるのは可愛かったぞ？」

「もう……馬鹿」

俺をdisりながらもひよりは微笑んでいるので俺は頭につけたゴーグルを目にはめる。同時にひよりもゴーグルを装着するので、手を繋いだまま2人で海に顔をつける。

すると魚が泳いでいるのが鮮明に見える。しかも都会の海と違ってゴミなども全く見えず、海そのものも美しい。

暫くの間、海の中を見てみると少し息苦しくなったので顔を上げる。

「ふはっ……凄く綺麗ですね」

「ああ。見たことない魚も沢山いたし、非常に興味深い」

「はい……あの、八幡君」

「何だよっ？」

「八幡君はこれから色々大変だと思えますが……無茶はしないでくださいね？」

俺がやろうとしていることを知っているひよりは不安そうな表情を浮かべて俺を見ている。

「ま、何とか頑張る」

そう返しながら俺達はゆっくりと泳ぐ。と、ここで急に大きな波が現れて……

「うおっ！」

「きやあっ！」

そのまま俺達を押しつけて岩場に押し寄せる。このままだと2人まとめて岩場にぶつかってしまうので、俺はその前にひよりの後ろに回り……

「ぐえっ……！！」

そのまま岩場とひよりにサンドイッチされる。それにより背中には痛みが発生するが、ひよりが無事なら安い買い物だ。

「大丈夫かひより？」

「あ、はい……でも八幡君は……」

「ちよつと痛いのが気にするな」

「……ごめんなさい。私なんかを助けて」

「だから気にすんなって言っただろ。女子は肌が命なんだから大事にしろ」

「……ありがとうございます」

言いながら俺はひよりの手を引っ張ってベースキャンプの方へ向かう。対するひよりは礼を言つてから俺の手をギュツときつきよりも強く握ってくる。

そしてそのまま砂浜に戻り、海から上がる。砂浜ではビーチバレーをする男女がいて活気があるが、俺はあんまりア充グループと関わるのは苦手だから離れた場所でのんびり過ごす。

「ひより、俺は少し疲れたから砂浜で寝るが、お前はどうすんだ？」

なんだかんだベースキャンプの搜索をしたり、船から降りてからも色々あつて結構疲れたのは事実だからな。明日の夜からはガチのサバイバルとなるからそれまでに万全の状態にしておきたい。

「そうですね……私も騒がしいのは好きじゃないですからご一緒してもいいですか？」

「ああ。じゃあちよつとマットを2つ持ってくる」

言いながら俺はパラソルの下にいる龍園のところに向かう。

「龍園、今からひよりと昼寝するからマット2つ寄越せ」

「あん？ マットはデカイの1つしかないから、それで我慢しろ」

「1つしかないのかよ。じゃあひよりに使わせるか……って、おい。無線機を堂々と出すな。幾らCクラスのベースキャンプ地だからって他クラスに見られたら警戒される

ぞ」

言いながら俺はテーブルの上にある無線機を指差す。これは金田や伊吹、葛城と連絡を取るためのものだが、堂々と出すのは悪手だ。俺も無線機を渡されているが、ちゃんとテントの中にある自分の鞆に入れている。

「相変わらず警戒心剥き出しだな。まあ従っておく」

龍園は苦笑しながらも自分の鞆に通信機をしまう。これなら疑われるようなことはないだろう。

「で？龍園。俺は結局何をやればいいんだ？」

島に残れとは言われたが具体的な意見はまだ聞いてないので今のうちに聞いておきたい。

「金田と伊吹はBとDのリーダー探して、俺は2人の補佐と葛城との連絡。お前にやって貰いたいのはAのリーダー探し、そしてBとDのリーダーが判明してからはソイツらがリタイヤするかの監視だ」

あー、なるほど。リーダーを見抜いても向こうがリタイヤしたらこっちにダメージが来るからな。

「了解した」

俺は小さく頷いてからデカイマットを持ってひよりの元に向かう。

「待たせたなひより。マットは1つしかないからお前が使ってくれ」

「?大きいですから一緒に使いませんか?」

ひよりは不思議そうに言ってくるが、男子からしたらその言葉は麻薬だぞ。

「……お前本気で言ってるのか?」

「何か変な事を言いましたか?」

この天然……男の理性をゴリゴリ削るの上手すぎだろ。いくら一緒に寝た事があるとはいえ、今は水着だぞ。

そう思っていると……

「ほら、日差しを浴びてゆったりしましょう」

ひよりはマットを砂の上に敷いたかと思えば、そのまま俺の手を引っ張ってマットの上に乗れて行く。

(仕方ない、ひよりには勝てないし)

そう判断した俺はひよりに対する抵抗を放棄してそのままマットに倒れ込み、ひよりと手を繋いだまま空を見上げる。

無人島だからか空気は上手く潮風も悪くない。今までずっと都会の空気を吸っていたからだろう。

「八幡君」

「どうした？」

「正直に言うとな本がない無人島は退屈だと思いましたが……ですが、こうして八幡君と岩場を散歩したり、海で泳いだり、砂浜で寝たりする事は凄く充実して、幸せです」

「……いきなりどうした？」

そんな風に言われた俺は恥ずかしさを誤魔化すようにひよりから目を逸らして質問を返す。

「いえ、こうして八幡君と過ごしていた時間を振り返ったらそう思っただけです。八幡君さえ良ければこれからも……卒業してからも仲良くしてください」

「……ああ。こっちこそ宜しく」

ひよりは高校に入って最初の友達だし、こちらとしても仲良くしたい。大学に入って友達が出来ないって事もあるからな。

ひよりの笑顔に見とれながらもそう返事をしてからギュツと手を握る。こうしているだけで凄く幸せになつてく、るな……

そこまで考えていると眠気がやって来たので特に逆らうことなく、ゆつくりと目を閉ざした。

3時間後……

「さて、そろそろバーベキューをするか。石崎、全員集めろ」

「は、はいっ」

夕焼けが砂浜を照らす中、龍園がそう命じると石崎は龍園の言葉に従ってクラスメイ  
トを集め始める。

2、3分くらいすると大半の生徒が集まるが……

「比企谷と椎名がいません」

「あん……って、アイツらまだ寝てんのかよ」

石崎の言葉に龍園は訝しげな表情になるも、直ぐに離れた場所にいる2人を見つけ呆  
れ顔になる。

「起こしてこい。点呼も近いし、ベースキャンプにいるのに欠席とかアホ過ぎるからな」  
龍園の指示に石崎が頷き2人に近付くが……

「ふふっ……八幡、君……」

「んんっ……ひより……」

抱き合いながら寝ている2人を見て絶句してしまった。しかも2人とも水着を着た状態で、終いには2人とも幸せそうにしていたのだ。

それに対して石崎は起こすのを躊躇ってしまふ。しかし龍園からの命令を遂行しないといけないという思いとせめぎ合ってしまう。

(ちくしょう……このバカップルがあ！)

石崎は内心で怒鳴る事しか出来なかった。

その後2人はふとした拍子で目覚め、クラスメイトに生温かい目で見られるのであった。

## 誘い

「美味えー！この肉絶対にいい肉だろ！」

「ちよつと！その海老は私が狙つてたのに〜」

夜8時前、俺達Cクラスはバーベキューを楽しんでいる。とはいえ俺は騒ぐタイプではないし、龍園のように王様タイプでないので少し離れて食事をしている。

とはいえ不満はない。しっかり食べてるし、騒ぐのは好きじゃないし……

「八幡君、口元が汚れてますから拭きますね」

「おう。サンキューな」

隣には俺と同じように騒ぐタイプでなく、1番の友達のひよりがいるからな。

「いえ。それにしても私、バーベキューをするのは初めてですが美味しいですね」

「俺もバーベキューは初めてだな」

小学校や中学校の時に野外でカレーを作った事はあるけど。といつても碌な思い出はないけど。そういうや、中学の時に千葉村で知り合った鶴見留美は元気だろうか。俺が人間関係をぶつ壊して以降は会ってないし。

そんな事を考えながらも肉を食べる。つかあの時に俺が動かなかつたらどうなつて

いたんだがな……

「八幡君？」

「どうした？」

「何か難しそうな表情をしていましたよ？」

「どうやら表情に出ていたようだ。」

「いや悪い。ちよつと昔の事を思い出していただけだ」

嘘はついてない。ちよつとした事ではないと思うけど。

「そうですか。無理には聞きませんが、もしも辛いなら空を見てはどうでしょうか？」

ひよりがそう言うので空を見上げると星が凄く美しい。これも都会ではないが故に見れるのだろう。

そして星の中心にある月は一際目立っている。しかも満月であり、星が引き立て役と見えるほどに輝いている。

思わず見惚れていると……

「八幡君」

「どうした？」

「……月が綺麗ですね」

ひよりはそんな事を言ってくる。同時に俺の顔に熱がたまってくる。もちろんひよ

りは空に浮かぶ月が美しいと言いたいのだろう。

しかし文学少女のひよりがその言葉を使うと、文学的な意味で言っているんじゃないかな？、と思ってしまう。

これはどう答えたら正しいんだ……

頭の中に選択肢が現れる

① ああ、そうだな

② ひよりの方が綺麗だよ

③ 死んでも良い

選択肢①だな。それ以外の選択肢はない。②と③を選んだらドン引きされるのがオチだ。

そう判断した俺は息を吸って方針を決める。選択肢「肉美味えな。2日目も楽しみみだぜ！」2日……②？

「ひよりの方が綺麗だよ」

いざ口を開こうとしたら石崎の声が耳に入り、反射的にか選択肢②を選んでしまった。

(しまった……石崎の野郎、2日目なんて言ってるじゃねえよ馬鹿野郎！)

思わず石崎に八つ当たりをしながらひよりの見る。ヤバい、高校唯一の友人にドン引

きされたらマジでシヨックだわ。

内心ヒヤヒヤしながらひよりのを見るとひよりは目をパチクリするも、やがて頬を染める。

「八幡君の馬鹿……ありがとうございます」

馬鹿と言われてから礼を言われる。由比ヶ浜のようにキモいキモいつて言われるとは思ってなかったが、礼を言われるとも思ってた。

「……怒ってないのか？」

「? 何故私が怒っていると？」

「いや。俺なんか綺麗って言われたし」

「恥ずかしいとは思いましたが怒ってはないですよ。寧ろ嬉しかったです……」

ひよりはそう言っただけの手をギュツと握ってくる。

「そ、そうか……」

そんなひよりに対して俺はそう返事をする事しか出来ず、ひよりの手を握り返しながら肉を食べるが、ひよりの言動の所為か肉の味を碌に堪能する事が出来なかった。

「八幡君……」

「何だよ?」

若干警戒しながらひよりの呼びかけに返事をする。この天然ならとんでもない爆弾

を投下してきそうだしな。

すると……

「八幡君はかつこいいですよ……」

俺の警戒を容易く粉碎してきた。もうマジでコイツには勝てる気がしねえ……

そう思いながらも俺はひよりと手を繋いだまま無心で夕飯を済ませ、1日目が終わるのであった。

### 無人島生活2日目

「比企谷。遊びに行く前にDクラスのベースキャンプに行つてこい」

朝から遊び全開の雰囲気の中、俺も海に行こうとしたら龍園に呼び止められる。

「何しにだよ？てか俺は多分Dクラスから敵視されてるぞ」

少なくとも雪ノ下と由比ヶ浜と須藤は殺意を抱いてるだろう。クラスポイントが0

だから暴力行為はしてこないと思うが絶対に面倒なことになる筈だ。

「だからお前にすんだよ。どうせアイツらはケチケチした生活をしてんだし、「夏休みを満喫したいならウチのベースキャンプに來い」って伝えてこい。來た奴にはバーベキューでもご馳走してやるつもりだ」

なるほどな。贅沢を覚えさせてDクラスの財布の紐を緩めるつもりか。人間つてのは一度贅沢をすると我慢するのが難しいからな。

「わかったよ。ただ念の為に護衛を超越せ」

須藤あたりは平気で暴力を振るってきそうだし、向こうに対する抑止力が欲しい。

「アルベルト」

「OK, Boss」

龍園の命令にアルベルトが頷いてから俺に会釈をする。アルベルトなら須藤よりも強いだろうし頼りになるな。

「んじや行ってくる」

「後これを持って、これ見よがしに飲め」

龍園はそう言ってコーラの缶を渡してくる。悪趣味だなあと思いつつも命令に従ってアルベルトを連れて森の中を進む。情報によればDクラスは川をスポットにしているらしい。川の場合は島の中心あたりなのはわかってるので問題ない。

暫くすると騒ぎ声が聞こえてくるので前に進むと、案の定Dクラスのベースキャンプがあった。

と、同時に川の近くにいた由比ヶ浜が叫び出す。

「何でヒツキーがここにいるし！ここらDクラスのベースキャンプだからCクラスは帰れし！」

由比ヶ浜がそう叫ぶとDクラスの生徒は一斉にこつちを見る。同時にスパイとして潜り込んでいる伊吹は俺を一瞥すると木の陰に隠れる。

「いやいや。スポットの範囲には入ってないからお前らのベースキャンプには入ってないぞ！」

境界ギリギリにはいるが中には入ってないから何の問題もない。

加えて他クラスが使用しているスポットを許可なく使用したらペナルティが発生するってルールはあるが、他クラスのスポット領域に入るだけではペナルティは発生しないだろう。

もしも入るだけでペナルティが発生するならばスポットの占有は完全な早い者勝ちとなり、逆転の目がないし。

「う、煩いし！居たら邪魔だしさっさと帰れし！」

「嫌だと言ったら？」

「はあ?!マジキモ過ぎだから!」

由比ヶ浜がそう言って詰め寄ろうとすると、アルベルトが俺の前に立ち拳を鳴らす。暴力行為は禁止ではあるが、由比ヶ浜はビビりながら後ずさる。まあ気持ちはわかるがな。

「嫌だと言ったらという質問の返答がキモいか……相変わらず馬鹿みたいだな。アルベルト」

そう言うってから俺は龍園から貰ったコーラを飲み始めるとアルベルトも同じようにコーラを飲み始める。その際にDクラスの大半から睨まれるが気にしない。

「ぶはっ!さて、そろそろ本題に入るか。ウチの大将からの伝言だ。夏休みを満喫したいならベースキャンプに來いってさ」

「行くわけないじゃん!ヒツキーマジキモい!」

「お前1人に言ったわけじゃない。あくまでDクラスの皆に言ったんだ。じゃそういう事だから」

最後にそう言うってから背を向けてCクラスのベースキャンプに戻る。これが龍園直属の部下なら10分くらい嫌味を言ったりするが、俺は早くベースキャンプに戻りたい。アルベルトも龍園直属の部下であるが、龍園の命令がないと比較的大人しいし俺に続いてくる。

さて、ちゃっっちゃと帰って遊びまくるか。今日の夜からはそんな余裕も無くなるし。

「随分と余裕のある生活を送ってるみたいだな、Cクラスの連中は」

八幡とアルベルトがコーラを飲む中、綾小路清隆に昨日Dクラスのベースキャンプに招き入れた伊吹澹が話しかける。

「お前、龍園って知ってる?」

「Cクラスのボスだろ。Dクラスから退学者が出かけた時にDクラスに乗り込んで暴れたのは覚えてる」

「……何それ?」

訝しげに話しかける伊吹に対して、綾小路は中間試験での一件を口にする。

「Dクラスが退学者が出かけたのは知ってたけど、それにアイツが暴れたのは知らなかった」

「須藤の件もアイツが絡んでるのか?」

「直接聞いたわけじゃないけど、絶対絡んでる。アイツのやる事はメチャクチャだから」

伊吹はイライラしたように頬を撫でる。それを見た綾小路は伊吹の頬を殴ったのも龍園と確信した。

「あの2人も龍園の部下なのか？」

そう尋ねる綾小路だが、実際に興味を向けているのは八幡のみ。何度か会った事はあ  
るが、綾小路の中ではDクラスの中でも優秀な堀北や平田より数段上だと思っ  
ている。

「アルベルト……黒人の方は龍園の忠臣。もう一人の方は比企谷っというんだけ……  
傭兵というかビジネスパートナー？」

「Cクラスは独裁体制と聞いたが？」

「それは事実。けど比企谷だけは別。龍園は比企谷以外のクラスメイトには命令を  
するけど、比企谷にだけは依頼をしている。加えて比企谷はAクラスのリーダーの坂柳と仲  
良くしてるけど、龍園は一切咎めてない。龍園が独裁者なら比企谷は正体不明」

伊吹の声を聞きながらも綾小路はDクラスのベースキャンプから去って行く八幡の  
背中を眺める。

問題だらけのDクラスをAクラスまで導けと脅された綾小路からしたら八幡の存在  
は大層厄介に見えた。

個人でぶつかつたら負ける気はしないが、クラス同士でぶつかつたら現時点では勝つ  
る気が全くしないのは仕方ない事だろうと思いつながら、綾小路はため息を吐くのだった。

た。

## 始動

「伝達はしてきたぞ。暑いから水寄越せ」

Cクラスのベースキャンプに戻った俺は空になったコーラの缶をビニールに入れて龍園にそう伝える。

「ご苦労だったな。石崎、水持ってこい」

「は、はい！」

石崎は頷いてクーラーボックスから水の入ったボトルを取り出して俺に渡すので一気飲みする。

「ぶはっ！んじゃ俺は遊ぶからな？」

今日の夜から地獄が始まるのだ。今くらい羽目を外してやる。

そう返すと、水上スキーに空気が出来たのでそちらに向かう。昨日は乗れなかったがアレ一回だけ乗ってみたかったんだよな。

俺は水着に着替えるべく男子のテントに入りパパッと着替えてテントを出る。と、同じタイムミングでひよりも出てくる。水着を着ているのでひよりも海に行こうとしたのだろうか。

「お帰りなさい八幡君。今日も散歩しませんか？」

「それは構わないがその前に水上スキーに乗っていいか？」

「もちろんです……あ、私も一緒に乗って良いですか？」

ひよりはそんな風に頼んでくるが、断る理由もないので頷く。

「ありがとうございます。では行きましょうか」

そう言つて歩き出すひよりに続くが、俺は了承したことを即座に後悔した。

何故なら……

「んっ……」

(や、ヤバイ……む、胸がモロに……)

俺は操縦桿を握るとひよりは俺の後ろに回り、そのまま抱きついてくるがひよりの胸が俺の背中当たっているのだ。それがまた柔らかくてヤバイ。

とはいえ態度に出したらドン引きされそうだから我慢する。唯一の友達を失うのは惜しいからな。え？坂柳とは友達じゃないかって？坂柳は俺の事をおもちやとしか見てないだろう。

そう思いながらも水上スキーを走らせるが背中に抱きついてるひよりの存在により楽しいって思いより恥ずかしい思いが上回ったのは言うまでもないだろう。

まあ折角の水上スキーだから楽しむとしよう。俺は操縦桿を握ってまま、Ｕターンしたりジグザグに動いたりする。

「きゃあつー！」

すると背後からひよりの声が聞こえてくる。しかし背中には抱きつかれた感触があるので落水はしてないだろう。多分水が跳ねて身体に当たったのだと思う。

しかし俺からしたらエロく聞こえてしまう。ひよりにその気がなくともこちらの理性はゴリゴリと削られる。

これ以上はマズイと判断した俺は水上スキーの進行方向を砂浜に向けて走らせて、砂浜に水上スキーを着ける。

同時にひよりの手が離れたので水上スキーから降りて砂浜に上陸する。

ひよりも水上スキーが止まったのを確認して俺から手を離し、水上スキーから降りようとしたが、足元が濡れているからか滑ってこっちに倒れこむ。

それを見た俺はひよりの前に移動してそのまま受け止める。対するひよりは反射的な行動か俺の背中に手を回してくる。

「あつ……ごめんなさい」

「気にすんな。怪我はないか？」

「私、いつも八幡君に迷惑をかけてますね」

ひよりは自嘲するが……

「この程度の事を迷惑とは思わない」

実際俺はひよりに対して思うことはない。ぶっちゃけ奉仕部にいた頃に迷惑をかけられまくったからか、耐性がついているのかもしれない。

それにひよりは迷惑をかけたと謝ってくるし、不満を抱くことは無い。

「それに……一応友達だから気にすんな。もしかしたら今後俺の方が迷惑をかけるかもしれないし、そんなときに寛大な処置をしてくれ」

「はい……ありがとうございます」

ひよりはそう言つて笑顔を見せてくる。それだけで胸がポカポカしてくる。

しかしそれもひよりと抱き合っている事に気づくまでであり、気付くと慌てて距離を取る。

「わ、悪い。そんなつもりはなかった」

「謝らないでください。元々私が転びかけたのが悪いですし……」

「ですし？」

「その……八幡君に抱きしめられると、何故か幸せな気分になるんです……」

つ………だからそんな事をハッキリと言うな……！確かに俺もひよりを抱きしめると恥ずかしさのみならず幸せな気持ちも生まれてくるけど。

しかしどう返事をしたら良いのか分からん。このまま抱き合った方がいいのか？いやいや、それは恥ずかしいし……

どうしたものかと悩んでいると、視界の隅に映るパラソルの下でジャージを着た2人がいるのに気付く。

（あそこは確か龍園の特等席だったな。クラスメイトは全員水着を着てるし、他クラスの偵察か？）

疑問に思いながら俺はひよりの身体の柔らかさから現実逃避する形でパラソルを見ると、やがて2人は去って行く。去って行く方向からしてDクラスの人間だろう。

そう思っていると2人は見えなくなり、必然的に俺に抱きついていくひよりに意識を戻してしまう。

「あの……ひより？そろそろ離してくれないか？」

「あつ……ごめんなさい」

ひよりはそう言つて俺から離れる。その際ひよりは恥ずかしそうに、それでありながら妙に嬉しそうな表情を浮かべているのがまた可愛らしくドキドキしてしまう。

中学時代に戸塚と抱き合った事はある。戸塚の場合、男だから一応精神的に余裕があった。（それでも結構ギリギリだった時もあるが）

しかしひよりは女子だから精神的余裕が殆どない。加えてひより自身が、俺と抱き合

う事に嫌悪してないどころか幸せって言ってるし。

この状態が続けば遠くない未来にはひよりに「結婚してくれ」って言っちゃまいそうだし、気をつけないと。以前にも味噌汁を作ってくれて言いかけたし。

やっぱひよりの存在ってある意味龍園よりも恐ろしい、そう思う俺は間違いないだろう。

数時間後……

「じゃあ八幡君。そろそろ私もリタイヤしますね……」

夕方、俺は砂浜でひよりと向かい合っている。

遊びまくったCクラスの生徒らは体調不良と偽ってリタイヤした。島に残っているCクラスの生徒は俺と龍園とひよりの、BクラスとDクラスのベースキャンプに潜り込んだ金田と伊吹だけだ。

何故ひよりが残っているかというと最後に俺と話したいと言ってきたからだ。

「ああ。次に会うのは多分5日後だな」

「無茶はしないでくださいね？少しでも気分が悪くなったらリタイヤしてくださいね？」

「意外と心配性だな」

「一番大切な友達を心配するのは当たり前です」

からかうように心配性と言うと、ひよりは少しだけ怒ったようにそう言ってくる。

「わ、悪い」

「全くです。前から思っていました。八幡君は自己評価が低過ぎます」

そう言われてもな。今まで嫌われまくりの人生だったし、自己評価を高くするのは中々難しい。

「……一応改善するよう努力する」

「約束ですよ？」

言いながらひよりは小指を立てて俺に突き出す。指切りを意味するとわかったのでやむなく指を出して絡めて頷く。

「では私はリタイヤします。無人島試験が終わったら、一緒に船の中で過ごしましょうね」

そう言うってからひよりは抱きついてくるのでこちらも優しく抱き返す。

「わかった。試験最終日にまた会おう」

「はいっ」

ひよりは頷いてからとても可愛らしい笑みを浮かべ、そのまま先生がいるテントの方へ行く。

そしてテントで何かを話したかと思えば、そのまま棧橋に向かって船に乗る。

ひよりが見えなくなるまで見送った俺は足元にある鞆を肩にかけてから船に背を向けて、龍園の元に向かう。

「待たせたな龍園」

「いや。どうせこれからは暇になるんだから気にするな」

まあそうだな。幾ら無人島に潜伏して色々動く予定とはいえ、動き過ぎるとバレてしまうので、一切動かない時間もあるだろう。

「改めて確認するぞ。お前はAクラスのリーダーの特定と他クラスがリタイヤする事の確認をやれ。まあ後者についてはこつちが他クラスのリーダー情報を手に入れるまでは余り意識を向けなくて良い」

「わかつてる。それよりも仕事をこなしたら報酬を寄越せよ」

「当然だ。お前に報酬を渡さないと躊躇いなく裏切るだろ？」

否定はしない。金の切れ目が縁の切れ目だからな。

「否定はしない。んじゃ俺は洞窟の方に向かうから」

Aクラスのベースキャンプは洞窟で、占有しているスポットも洞窟の近くであり、離れた場所のスポットを占有してないのは既に知っている。

よってAクラスのリーダーを見抜くには必然的に洞窟の方に拠点を構えないといけない。

「ああ。俺は森に潜伏する。定時には報告しろ。それと例の作戦については4日目の夕方にやるから。その時はCクラスがベースキャンプに使ってた砂浜近くの岩場に集合だ」

「了解」

最後にそう言って俺と龍園は別れ、洞窟の方へ早足で向かう。

さあて、俺達は今から試験を頑張りますか。

## 潜伏

## 試験3日目

「ああ。暇だ……」

俺はスポットがない洞窟の中でそう呟く。しかし時間の速さは変わらない。

俺は今Aクラスのベースキャンプの近くにある洞窟を拠点としている。普通ならAクラスのベースキャンプの近くに拠点を構えるのは危険と考えるだろう。

しかしこの洞窟は海に面していて歩くのは難しい場所であり、加えてスポットではないので、Aクラスの連中は初日に見つけただろうが、利用価値が無いと思ってるだろう。現に俺は2日目の夕方から潜伏しているが、3日目の昼まで人が近づく心配を一切感じてないし。

とはいえメチャクチャ暇なのだ。俺の仕事はAクラスのリーダーの特定だが、Aクラスのリリーダーがスポットの更新をするまで仕事がない。

しかも暇潰しの娯楽は一切ない。一応Cクラスのベースキャンプには遊び道具があるが、水上スキーなんて使ったら俺の存在がバレるし使えない。

「ああ……マジで暇だ。つても後4日我慢すれば最低20万だし我慢だ」

既に何十回も口にした言葉を改めて口にする。龍園が葛城と交わした契約により、龍園は最低でも卒業までAクラスから毎月39万ポイント貰える。

そして龍園は利益の半分をやると言ったので後4日我慢すれば毎月20万近くのポイントが卒業まで龍園から貰えるのだ。

ならば我慢するしかない……が、マジで暇過ぎる。Aクラスのスポート更新まで後1時間近くあるし。

そう思いながらもため息を吐くが、吐いた所で時間は早まらないし……はあ。

しかし時間は必ず進むのは事実であり、やがて動かないといけない。

暇潰しに瞑想という末期な事をしていてと遂に1番近いスポートの更新まで10分を切ったので俺は服を全部脱いで、初日に用意した水着を着てそのまま海に入る。

バタ足などをしないで波を立てないように注意しながらスポートがある方向にひっそり移動する。道を使うよりは海を使った方がバレないと思ったからだ。

そしてスポートのある洞窟の近くにある岩陰に身を潜めるが、こうやって何かをするって充実感を感じるなあ……

暫く感動していると足音が聞こえてくるのでこっそり覗き見るとAクラスの生徒数

人がこっちにやってくる。そして1人を除いて洞窟の外で自分達が来た道を見張っている。

やっていることは正しい。このスポットに行くには基本的に彼らが使った箇所以外の道はないのだから。その道を見張れば余程のことがない限りリーダーの存在は知られないだろう。

しかし今回は余程のことだ。まさか連中も海の中から見張っているとは思ってないようで、俺がいる岩陰の方には視線を向けてすらいない。

安心しながら洞窟の中を見ると、緑髪の男がキーカードを取り出してスポットにタッチする。

「戸塚く、スポット占有終わったか？」

「ああ、次行くぞ」

そう言つてAクラスの連中はこの場を後にする。Aクラスのリーダーが判明した。3日目でこれはラッキーだろう。

しかし一つ問題がある。

(下の名前がわからん……)

多分リーダーを指名する際はフルネームで答えないとダメだろう。実際キーカードにはフルネームが刻まれてるし。

しかし俺は戸塚の名前を知らない。これはかなりヤバい問題だ。

(龍園なら知ってるか? とりあえず定例報告の時に伝えとくが、もしも知らなかった場合はどうにかして神室と接触して聞き出すしかないな)

まあそのどうにかが難しいんだかな。神室は坂柳の部下だから葛城派は警戒してるだろうし、俺がBクラスとDクラスに知られたら伊吹と金田がスパイと疑われるだろうし面倒な事になる。

(とりあえず寒いから洞窟に戻るか)

いつまでも海にいたら身体が冷える。風邪ひいてリタイヤとかマジで笑えない。

俺はAクラスの連中が完全に居なくなるのを確認してから、それでもなお波を立てずに泳ぎ洞窟に戻り、タオルで身体を拭いてからジャージに着替える。

そしてそのまま寝袋の中に入ってゆっくりと目を閉じる。この寝袋は龍園が事前に入ってくれたものだ。大方俺が地べたで寝るのが嫌になってリタイヤされたら堪らないと判断したのだろうがこちらとしてはありがたい。

やる事がないと寝るしかないんだよなあ。はあ、豪華客船が恋しい……

数時間後……

『で？進捗はどうだ？』

夜になって報告の時間となったので龍園から通信が入る。よって俺は無線機を持つて口を開ける。

「Aクラスのリーダーだが、一応判明した」

『仕事が早いな。誰だ？』

「済まんが苗字しか知らないが、戸塚って男だ」

『アイツか。フルネームは戸塚弥彦、葛城の側近という名前の腰巾着だ』

どうやら龍園は名前をしっているようだ。

「なら良かった。で？俺もお前と合流するか？」

『いや、それはまだいい。とりあえずAクラスのリーダー情報が絶対かを調べる。お前は明日もスポットを見張れ。俺は俺で坂柳派に接触する』

「了解した。じゃあ4日目は引き続きAクラスのリーダー情報を探り、夕方に例の作戦に移るぞ」

『ああ』

「なら良い。ちなみに金田と伊吹の調子はわかるか？」

『金田はBのリーダーを知った……が、ガードが固く写真の撮影やキーカードの強奪は  
敵しいらしい。伊吹については警戒心が強いから中々見抜けずにいるようだ』

まあそうだろうな。仮に見抜けてもキーカードを手にするのは至難の技だ。

「どうするんだ？まさかとは思うが夜襲でもするのか？」

『まだ3日目だ。様子を見る。とりあえずまた明日この時間に連絡する』

そう言われると通信が切れるので無線機を地面に置いて再度寝袋に入る。とりあえ  
ず今はゆつくり休まないといけない。というか休み以外やる事が一切ないのが本音だ。

ああ……船にいる坂柳とひよりが羨ましいなあ。

同時刻……

「さて……今頃比企谷君は野宿をしてるのでしょうが大丈夫ですかね」

「わかりませんが、リタイヤはしてないので何とかやっているんだと思います」

椎名ひよりと坂柳有栖は船にあるカフェで夜風に当たりながら紅茶を飲んでいた。

洞窟で寝ている八幡からしたら天国と言って良い環境だろう。

「ちなみに坂柳さんはこの試験はどういう形で終わると思いますか？」

「そうですね……最下位はAクラスだと思えます。1位については……現場の空気を理

解出来てないので判断が難しいですね」

有栖は例の契約をひよりから聞かされている。そしてその契約はAクラスの生徒全員が対象であるので、有栖は自分の配下が龍園と八幡の支援をするという確信があった。

それも有栖は自分以外の生徒が下船する前に「特別な試験があつたら葛城派に嫌がらせをしろ」と自分の配下に命じていたからである。

仮にキーカードの情報を龍園と八幡が葛城に渡せなくても、坂柳の配下がAクラスのリーダー情報を他クラスに売ればそれだけでAクラスは大ダメージとなる。

そして1位については予想が出来ない。ひよりからスポットやキーカードなどの基本的な情報は聞いてはいるが、Cクラスはバカンスを楽しんでいて、島の捜索をしてないので島の情報については聞けてない。

流石の有栖も情報が不足している状態では1位が何処かは判断しにくい。とはいえ各クラスの戦略についてはある程度予想はしている。

しかし……

「ちなみに椎名さんはCクラス以外はどんな戦略を取っていると思いますか？」

有栖はひよりに質問をする。理由としてはCクラスの生徒に関する情報を得るためだ。特にひよりは八幡同様に龍園に支配されてない生徒であるので興味はある。

「そうですね……Aクラスについては洞窟をスポットにしているらしいですけど葛城君の性格は慎重ですし、入り口に暗幕を展開して中に物資が見えないようにしてCクラスと組んでいることを隠すでしょうね」

「まあ葛城君ならそんな面白くない戦略を取るでしょうね」

「葛城君の事はお嫌いなんですか？」

「誰かの下につくのは御免ですから。そういった意味だと比企谷君を雇っている龍園君が羨ましいですよ」

これについて本気でそう思っている。葛城も優秀ではあるが、自分と相反するやり方を説き敵対しているのが駒としての価値は低い。

一方の八幡は自分に利益があるなら駒になる事、クライアントの方針に不満を持たないのは明白だ。

加えて優秀でもあるので有栖からしたら是非ともポイントで雇いたいと思っている。今はまだしも今後、2000万ポイントを用意して引き抜く事も視野に入れていくくらいだ。

「まあ龍園君も八幡君を重宝してますね。次にBクラスは必要最低限のポイントを消費して節約生活、リーダー当てには挑戦しないでしょう。Dクラスについては……バラバラになってるかもしれないですね」

ひよりは船から無人島を見ながらそう呟くと有栖も同じように無人島を見る。

無人島は真つ暗でありながらも不気味な雰囲気醸し出していた。

(さてさて、どうなるやら……面白くなる事を祈ってますよ)

有栖は無人島を見ながら冷笑を浮かべるのだった。

## 裏切り

## 試験4日目

(来た来た。待ちくたびれたぜ)

海に入ってスポットがある洞窟の近くに潜伏していた俺だが、漸くAクラスの生徒がこつちにやって来た。しかし今回は2人しかない。

1人は昨日スポットを更新したと思われる戸塚弥彦だ。んでもう1人はAクラスのトップの1人の葛城だ。人数が少ないのは坂柳派が信用出来ないから多数で動きたくないからか？

そう考えると昨日の面子も葛城派の人間で、今日は別の仕事があるのかもしれない。そう思っていると葛城は洞窟に入る直前に、ポケットからキーカードを取り出す。そして洞窟に入るとそれを戸塚に渡し、戸塚がスポットの更新をする。

(なるほどね。ああやってれば2人を尾行してる奴がいても、葛城がリーダーだと誤認出来るだろう)

単純ながら良い手だ。ただ俺は昨日の時点でリーダーを把握していた上、俺は道を

使つて尾行をしておらず海に入つて待ち伏せしているのだからな。

そう思っている人と2人は去つて行く。これでAクラスのリーダーは間違いなく戸塚であることがわかつた。今のところ順調だ。

これで伊吹と金田がBクラスとDクラスのリーダーを見つけられたら最大で150ポイントが入る。Aクラスに200ポイント渡して150ポイント稼げたなら最高の結果だろう。

とはいえ油断は禁物。もしかしたら向こうもリーダーリタイヤ作戦を取ってくるかもしれないし、伊吹と金田が見抜いたリーダーが実はリーダーじゃないって可能性もあるし、そもそもリーダーを見抜けないって可能性もある。

まあ何にせよ、無人島試験が終われば最低でも毎月20万近くのポイントが卒業まで龍園から支給されるので問題ない。つまり卒業までに600万近くのポイントが約束されているのだから、ある意味勝ち組になれる。

しかし可能なら作戦を成功したい。ともすればAクラスは更にポイントを龍園に払い、必然的に俺に対する小遣いも増えるからな。

そう思いながらもゆつくり泳いで洞窟に戻り、夕方まで眠るのだった。

翌日……

「んじや例の作戦を実行するが、その前に今日までの状況整理だ」

夕方、俺と龍園はCクラスがベースキャンプとして使っていた砂浜の近くにある岩場にいた。ここは他クラスのベースキャンプとは離れているし、Aクラス以外の生徒はCクラスは全員リタイヤしたと思っっているから、人の気配は一切しない。

「といつても俺はAクラスしか知らないぞ」

一応深夜に偵察は行っているが拠点の近くにあるAクラスだけだ。

「BクラスとDクラスについては俺が偵察してるから問題ない」

龍園がそう言うってくるので説明を始める。

「Aクラスは洞窟の入り口に暗幕を展開してるが、入口付近にシャワー一つと簡易トイレを2つ展開して堅実な守備プレイだな。それでリーダーを戸塚にして洞窟付近のスポットを更新しまくってる。坂柳からしたら退屈なやり方だろうな」

「だろうな。あの女ならリーダー情報を求めて動き回るに決まってる」

龍園はそう言っつて自分の言葉を疑ってないが、これについては俺も同意見だ。坂柳が守りに入るなんて想像すら出来ない。

「まあスポットを何回更新しようがリーダーを当てたらボーナスポイントは無くなるんだしあからさまに妨害はしない方が良いだろ」

「ああ。で、Bクラスはスポットについて一切狙わないで食料の搜索しかしておらず、搜索の際にスポットを発見しても放置して欲しい」

「Aクラス以上の堅実な手か。もうBクラスのキーカードを狙うのはやめないか？葛城との契約はBクラスかDクラスのどちらかのキーカードを手に入れたら達成なんだし無理に奪うのは危険過ぎる」

もしも奪ったのがバレたらCクラスは失格となるからな。いくら攻撃的な龍園でもガードが固過ぎるBクラスを攻めないだろう。

「俺もそれは考えた。とりあえず金田に写真を撮りにいくのはやめさせ、あくまでリーダーの確認だけするように命じた」

「リーダーはわかってるならそれで良いだろ。俺達が当てたら50ポイント入るんだし」

「そうだな。で、次にDクラスだが、簡単に言うとはBクラスの下位互換だ。節約を重視しているがBクラスより要領が悪いらしい。伊吹によれば女子は男子に内緒でフロアマットや枕、扇風機など20ポイント近く消費して欲しい。更に自由人で有名な高円寺がリタイヤした事もあって50ポイント近く無駄に消費している」

うわあ……：クラスポイントが0なのに無駄遣いとかしてんのかよ。しかも男子に内緒ってカスだな？

「まあ馬鹿どもは放っておいて次の作戦に移るぞ。その為に……」

言いながら俺は両手を広げて受け入れる構えとなる。それを見た龍園は小さく頷いてから拳を振り上げて……

「がはっ!」

そのまま俺の顔を殴りつけてきた。

20分後……

「少し良いか?」

「ん……っ!なんだその傷?!誰だよお前?!」

Aクラスのベースキャンプの入口付近にて、俺が見張りをしているAクラスのリーダーの戸塚弥彦に話しかけると、彼は目を見開いて叫ぶ。

しかしそれも仕方ないだろう。俺の顔には殴られた痕が複数あるのだから。

「Cクラスの比企谷だ。葛城に話があつてきた」

「Cクラスだと?!ちよつと待ってろ」

戸塚はそう言つて暗幕を展開してある洞窟に入っていく。反応からして取引について知っているな。

暫くすると戸塚は葛城を連れてやってきた。葛城は俺の顔を見て一瞬だけ眉をひそめる。

「葛城だな。無駄話は好きじゃないし、長居は危険だから手っ取り早く本題に入るがCクラスのリーダー情報を提供しにきた」

「……何だと？ 島に残っている以上、俺が龍園と組んでいるのを知っている筈だ」

「ああ。俺は俺でBクラスとDクラスのリーダー情報を調べるが、その上でCクラスのリーダー情報を提供しに来た。あの野郎、予想以上に唯我独尊野郎でもう我慢出来ねえんだよ」

言いながら俺はわざと唾を地面に吐き捨てる。

「まずCクラスに何があった？」

「簡単に言うと次の試験について揉めたんだよ」

「次の試験？ 随分先の話で揉めてんのかよ？」

戸塚はそう言っているが……

「いや、次の試験は無人島試験が終わって、直ぐにあるだろう。この学校が1週間も舟の上で俺達を遊ばせるとは思えない。何せ半分騙し討ちをして無人島試験をやらせてくるんだからな」

これについてはマジでそう思う。1週間無人島生活を送ったら、1週間遊び放題？ 絶

対にあり得ないな。

「だろうな。それで？」

葛城も俺と同意見のようでも続きを促す。

「その際に俺は「無人島の作戦は博打要素が強いし、次の試験では堅実に行こう」って提案したんだが、龍園は「更に攻めるべき」って反対した。それで俺が食い下がったら……」

「殴られた、と？」

頬を指差しながら葛城の問いに頷く。

「はっ、暴力でクラスを支配しようとしたら裏切りを受けるって間抜けだな」

俺の話聞いた戸塚は龍園の事を嘲笑う。一方の葛城は険しい表情で俺に話しかける。

「それで？お前は俺に何を求めるのだ？プライベートポイントか？」

「別に何も？今回は龍園に対する仕返しだからお前らがCクラスのリーダーを指名すれば、それが報酬となる。強いて言うなら龍園に質問された時にしらを切ってくれ」

「……良いだろう。ただしお前の言葉だけでは信用出来ない」

葛城の言葉に対して俺はポケットからキーカードを取り出して葛城に投げつける。

「ほらよ、これで文句はないか？」

「……本物だな。情報感謝する」

「気にすんな。それと葛城、次回からは龍園と組むのはやめとけ。今回の試験では龍園は裏切るつもりはないが、それはあくまでお前から信用を得る為の策だ。ポイントが大量に入るライン……今回の契約が成立して以降は裏切る気満々だから」

「そのつもりだ。今回は必要だったから手を組んだが、奴は危険過ぎる」

葛城はそう言いながら俺にキーカードを返すので受け取る。

「それがわかってりゃ良い。じゃあ俺は帰る。長居は危険だからな」

そう言っただ俺は葛城と戸塚に会釈をしてAクラスのベースキャンプを後にするのだった。

口元に笑みを浮かべ、笑いを堪えながら。

## 亀裂

Aクラスのベースキャンプから離れた俺は自分の拠点である洞窟に戻る。そして手元にある無線機を操作して龍園に繋げる。

『比企谷か。どうだった？』

「最初は警戒されていたが、キーカードを見せたら警戒心が消えたし多分成功だな」

龍園の問いかけにそう返事をする。

俺達の作戦はAクラスのリーダーを見抜くことだけではなく、Cクラスのキーカードを見せてからキーカードに名前が記されている俺が最終日にリタイヤする事もある。

リーダー指名に失敗した場合、マイナス50ポイントとかなりデカイマイナスだ。よってリーダー当てに挑戦するならキーカードそのものかキーカードの写真を確認するのは絶対だ。

そこで俺は敢えて龍園に殴られて『龍園のやり方方には我慢出来ない。龍園を失脚させる為に情報をやる』とばかりに、自分の名前が記されたキーカードを葛城に見せた。現物を見た以上、葛城もCクラスのリーダーを指名するだろう。

しかし俺達は葛城を裏切るつもりだ。リーダーを指名するのは最終日の点呼、つまり

最終日の朝8時だが俺は7時55分で体調不良でリタイヤしてリーダーを龍園に変える。リーダーについては正当な理由がないと変更は出来ないが体調不良は正当な理由だ。

葛城はリーダーを俺と誤認して俺の名前を指名するだろうが、実際のリーダーは龍園なのでこれでマイナス50ポイント。

更にAクラスのリーダーは戸塚とわかってるので俺達は戸塚を指名する。リーダー当てに成功したらリーダーを当てられたクラスはマイナス50ポイントに加えて、スポットのボーナスポイントが無効となる。

つまりこの時点でAクラスはマイナス100ポイントに加えてスポットのボーナスポイントの無効が殆ど確定している。

無人島生活初日、俺達は学校から300ポイント貰ったが、Aクラスは坂柳の欠席により270ポイントのスタートだ。

しかし龍園から200ポイント分の物資を貰ったから、多分1ポイントも使っておらず最終日まで変わらないだろう。

このまま最終日を迎えた場合、Aクラスのポイントは……

270ー50（Cクラスにリーダーを指名される）ー50（Cクラスのリーダー当て

に失敗) 1170

………つて所だろう。スポットボーナスはリーダーを指名された時点で無効となる。

まあこれはあくまで今の状況が続けばだ。龍園がBとDのキーカード、もしくはキーカードの写真をAクラスに提出すればポイントは増えるだろう。

残念な点があるとしたら葛城に渡したキーカードを俺に返した事だろう。葛城が預かれば、俺が学校側に「葛城にキーカードを強奪された」つて訴えてAクラスを失格に出来たのに。

無人島生活である以上、向こうはボイスレコーダーなどを持ってないだろうから十中八九潰せたと思う。

まあこれについては仕方ないと割り切ろう。

「ともあれ葛城にはキーカードを見せし、次の作戦に備えて俺は夜まで寝る」

次の俺の仕事は学校側のテントの近くで他クラスのリーダーがリタイヤを確認することだ。

仮に戸塚がリタイヤしたのを発見したら龍園に報告して、最終日のリーダー当ての際に指名しないようにする。

そしてリーダーがリタイヤする場合、それが他クラスにバレないように夜中にリタイヤする筈だ。よつて俺は今日から最終日まで昼は寝て夜は起きる、昼夜逆転の生活をす

る。

『ああ。ゆっくり休め』

龍園からそう言われたので俺は寝袋に入りゆっくりと眠りにつく。早く試験が終わってひよりや坂柳と遊びたいと強く願いながら。

翌日……

「うあく。暇だ、暇過ぎる」

俺は思わずぼやいてしまう。5日目の早朝、まだ日が昇ってない中、俺は無人島にある自然の高台に位置どり、船の栈橋や教師のテント周辺を見張っている。

現在俺がやっているのはリタイヤする生徒の見張りをしている。もしも他クラスのリーダーがリタイヤした事に気付かなかつたら、こちらに大ダメージが来るし、リタイヤする生徒の確認は重要だ。

他クラスのリーダーがリタイヤしたらどのクラスかは調べて龍園に報告するのが俺の仕事だが、メチャクチャ暇だ。

洞窟を拠点にした時はAクラスのリーダーを探るべく多少は動いたが、今回は完全に

張り込み、それも来るかわからない生徒の張り込みだからマジで退屈なのだ。

加えて棧橋には豪華客船が見えてリタイヤしたい気持ちが湧いてくるのだ。今頃坂柳やCクラスの生徒はふかふかのベッドで熟睡してゐるだろう。

(いかん、想像しただけでイラッてきた)

いくらポイントの為に自分の意思で無人島で残ったとはいえ、豪華客船にいる連中が妬ましく思ってしまうのは仕方ないだろう。

何せ俺は2日目の夜からは洞窟で野宿して島にある野菜や果物で飢えを凌いでいるのに対し、船にいる連中はふかふかのベッドで寝て、朝昼晩には分厚いステーキや新鮮な魚料理などのご馳走を食べている……妬ましく思うのは当然だかもしれない。

(我慢だ。あと2日我慢すれば、俺もご馳走やベッドを堪能出来て、更に毎月最低20万ポイントが約束されるんだから)

そう思いながら頬を叩いて視線を棧橋とテントに向ける。とりあえず朝8時まで見張りをしたら夕方まで眠ってまた朝8時まで見張りで問題ないだろう。

そう思いながら退屈な気持ちを抑えながら見張りをしていること数時間……

『~~~~つ!』

『~~~~つ!』

日が昇つて少しした頃に少し離れた場所から騒ぎ声が聞こえてくる。あの方向は確かDクラスのベースキャンピングがある方向だな。

そう判断した俺は双眼鏡を靴から取り出してDクラスのベースキャンピングの方向を見ると、ハッキリとは見えないが男子と女子が向かい合っているように見える。

(何をやってんだ?もしかして昨日報告にあつた女子によるポイントの勝手な使用が男子にバレたのか?)

だとしたら好都合だ。元々Dクラスはクラスポイントが0だ。本来ならどのクラスよりも熱心に試験に挑まないといけませんが、そのDクラスが仲間割れするなんて愚の骨頂だ。

このボーナス試験でポイントを確保出来なかつたらDクラスはAクラスの座を賭けた争いから脱落するだろう。マイナス要素がない試験は何度もある筈ないし、稼げる所で稼げないなら先には絶望しかない。

ま、それならそれでありがたい。俺はDクラスには馬鹿が多いとは思っているが、全員が馬鹿とは思ってない。一部の生徒については油断出来ない奴がいるのは認めている。

しかしこの学校ではクラス単位、つまり団体戦だ。いくら強い駒が揃っていても、ポーンズ試験で足を引つ張るような馬鹿が沢山いれば上に上がるのは無理だろう。

俺としては救いようなない馬鹿がDクラスに潜む優秀な生徒の足を引つ張って、上に上がるチャンスをガンガン潰して欲しい。そうすりゃAクラスとBクラスに集中出来るしな。

そう思いながらも俺は8時まで見張りをして、夕方まで寝るのだった。

### 試験6日目

いよいよ明日の正午には無人島生活は終わる。よって俺は最終日の点呼直前にリタイヤするまで一睡もしないで見張りをしようと思う。

何故なら5日目の夜から6日目の朝にかけて雨が降っていたからだ。今は降ってないがどんよりとした雲が空に広がっていて、雨が降りそうだ。

雨の中で寝るのは無理だし、雨に乗じて他クラスのリーダーがリタイヤする可能性は充分にあるので、今から俺は寝るつもりはない。

そう判断しながらも俺は高台にて見張りを続ける。尚、風邪をひかないよう念には念を入れて学校側から無料で支給されたビニール袋を繋ぎ合わせて巨大なマンツのようにして身体に纏わせている。

(しかし龍園は大丈夫か?)

無線で連絡は取り合っているが、アイツは風邪をひいてないよな。もしも俺がリタイヤする際に風邪をひいていたとか勘弁してくれよ……

内心ため息を吐きながらも俺は双眼鏡を使って砂浜にある学校のテントを見張るが、昨日から一人も来てない。これはリタイヤ作戦を考えてないのか、最終日ギリギリにリタイヤするか判断がつかない。

まあアイツが風邪をひくとは思えないけど。というか伊吹は上手くやってんのか？ 金田はBのリーダーの特定に成功したらしいが。

そんな事を考えながら何気なくDクラスのベースキャンプの方に双眼鏡を向けると

……

「ぶっー」

予想外の光景が目に入り吹き出してしまふ。

何と堀北が川で下着姿になっていたのだ。大方汚れたから身を清める為だと思いが

……

(エロ過ぎだろ……)

見てはダメと頭ではわかっているが、堀北のエロさと今日まで暇を持て余していた事が相まって双眼鏡の位置は固定されたままだ。

(これって覗きに……ならないな)

女子更衣室や女子トイレでこれをやったら犯罪かもしれないが、堀北は川、自然の中で水浴びをしているのだし。

(バレたらど変態の扱い……ん?)

と、ここで更に予想外の光景が目に入る。双眼鏡のレンズの隅にて伊吹が身を屈めて何かを漁っている。状況から察するに堀北の服を漁っているのかもしれない。

まさかキーカードがある、とか?

だとしたら一気に試験が動くかもしれない。場合によっては俺も助けに行つた方がいいかもな。

そう判断した俺は双眼鏡を下ろして、動く準備を始める。

ここで上手くいけば、龍園からデカイ報酬があるから頑張らないとな。

## 奇襲

「龍園、今大丈夫か？」

『何だ比企谷？誰カリタイヤしたのか？』

「違う。さつきDクラスのベースキャンプ近くの川で堀北が身体を洗ってたんだが、その際に伊吹が服を漁ってるのが見えた」

『なるほど。つまりリーダーは鈴音の可能性があるな。それはわかったが何故連絡した？』

「念には念って奴だ。情報の共有は大事だし、暇過ぎるから少しでも仕事をしたいんだよ」

『まあそうだろうな。それと坂柳派と接触したが、やっぱりAクラスのリーダーは戸塚だ』

「どうやら坂柳は本気でこの試験で葛城派を潰すようだ。ま、俺からしたらどうでもいい。俺は遊べるポイントを確保して、最終的にAクラスに上がる事を最優先としている。生徒の大半がどうなろうと知った事じゃない。」

「良かったな。とりあえず後1日耐えねえと」

『報酬はちゃんと払うから安心しろ』

それで良い。払わないなら俺は今後Cクラスを裏切り続けるつもりだ。

「楽しみにしてる」

そう言ってから通信を切って、もう一度川の方を見ると既に伊吹は居なくなっていて、身体を洗っていた堀北は下着姿のまま、自分のジャージを触っている。

(あの反応からしてキーカードが無くなって焦ってるのか?)

可能性は高いが腑に落ちない点がある。確か龍園は金田と伊吹にデジカメを渡していたはずだ。

堀北の動きからして伊吹がキーカードを盗んだと思うが、わざわざキーカードを盗む必要性は感じない。写真さえ手に入ればこっちの勝ちだ。寧ろ盗んだのがバレたらこっちが危険だ。

伊吹は馬鹿じゃないしキーカードを盗む危険性を理解している筈だ。なのに何故だ?  
?

内心不審に思いながらも俺は本来の見張りをしながらDクラスのベースキャンプを調査する。そして10分くらいした所でDクラスのベースキャンプで動きがあった。

何と火が上がったのだ。夜に焚き木を起こすならまだしも今は昼だから、火事が起こった可能性がある。

(まさか伊吹の奴、放火したのか?)

Dクラスの連中は今火を使う必要がないだろうし、ここは無人数だから電気などによる発火もあり得ないので伊吹がやったのが1番可能性が高い。

だとしたら伊吹が捕まったらこれまでの苦労が水の泡となる。既に毎月20万ポイントは約束されているがそれだけは避けたいといけない。

そう判断した俺は即座に立ち上がり雨が激しく降り始める中、移動を開始する。持ち場を離れるのはアレだが、伊吹が原因でクラスそのものを失格から守る方が遥かに重要だ。

高台を離れてDクラスのベースキャンプの方に向かう。と言ってもDクラスのベースキャンプから100メートル以内には近寄らない。100メートル以内に入ったら俺の存在がバレるかもしれないからな。

雨が降る中、気配を殺して進むと鈍い音がベースキャンプがある方向とは別の方向から聞こえてくる。まさかとは思うが戦闘音か?

嫌な予感を感じながらも音のする方に向かうと、案の定堀北と伊吹がやり合っている。堀北は伊吹の胸倉を掴んで地面に叩きつけようとするが、伊吹はその前に後ろに下がってから掌底を堀北に放つ。

が、堀北は何かの武道をやっているようで伊吹の掌底を受け流して即座に反撃する。

暫くの間、攻防が続くと伊吹がニヤリと笑う。

「ここまで頑張ったご褒美に教えてやるよ。カードを盗んだのは私だ」

言いながら伊吹はキーカードを見せつける。盗んだって事はやっぱりデジカメを紛失したのだろう。

「……………ここに来てあつさり認めるのね」

「認めても認めなくても関係ないところまで来たからな」

伊吹の言葉は間違つてない。ここで伊吹が堀北を倒した場合、堀北が学校に訴えても言い逃れが出来る。仮に両成敗となつたとしても損をするのはDクラスだ。Dクラスはクラスポイントを持つてないし。

となると伊吹が堀北に負けて拘束されるのだけは絶対に避けたい事だ。キーカードには伊吹の指紋がついているから、堀北が伊吹を倒したらこつちが負けとなる。

(仕方ない。俺も参戦するか。伊吹が捕まるのだけは避けたいといけないからな)

そう判断した俺は近くにある泥を手取る。流石に女相手に殴る蹴るはしたくないからな。

そしてそのまま2人に近づき、近くの木の陰に隠れながら堀北に狙いを定める。幸い雨が強い上に堀北は伊吹に集中しているのでこつちには気付いてない。

そして堀北が伊吹に詰め寄ろうとして、伊吹も拳を構え突撃した瞬間、俺は堀北の顔

面に泥を投げる。

すると堀北は咄嗟に手を挙げて泥を防ぐ。その反射神経は見事だが……

「ぐっ……………」

伊吹からしたら隙だらけであり、伊吹の拳が堀北の鳩尾に叩き込まれ堀北はそのまま地面に倒れこむ。起き上がる気配はしないので気絶したのだろう。

「……………そこにいるのは誰？」

案の定伊吹は不信感たつぷりの声で俺がいる方向に話しかけてくるので両手を挙げて木の陰から出る。

「……………比企谷。龍園と一緒に島に残っているとは思ってたけど、何でここに？」

「Dクラスのベースキャンプから火が出たから様子を見に来た。そしたら堀北とやり合ってたし、デジカメを紛失したのか？」

「そう。だからキーカードを盗んだ。ついでに言うとう火事を起こしたのは私じゃないから」

？ そうなのか？ 確かにこの状況で嘘を吐くとは思えないが……

「わかった。じゃあ後始末は俺がやっとく。お前は先にリタイヤしろ」

伊吹を疑ってるわけではないが、俺自身がやった方が信じられるからな。

「……………わかった。任せる」

伊吹は俺を訝しげな表情で見ながらも俺にキーカードを渡して棧橋の方へ向かう。

それを見送った俺は念の為、ポケットから自分のデジカメを使ってキーカードを撮影する。そしてキーカードについてある指紋をしつかり拭き取ってから近くにある木の下に埋めて、無線機を使って葛城を呼び出す。

「俺だ葛城。Dクラスのキーカード情報が手に入ったから会いたい」

『……わかった。では島の中央にある古びた小屋に10分後に集合だ』

「了解」

通信を切って、今度は龍園を呼び出す。

「俺だ龍園。Dクラスのキーカード情報が手に入った」

『あ？何でお前が情報を持ってんだよ』

龍園にそう言われたのでこれまでの経緯を説明すると、無線機から龍園が息を吐く。

『なるほどな。まあ伊吹よりお前に任せる方がいいか。で？集合場所は？』

「10分後に島の中央にある古小屋だつてよ」

『わかった』

龍園はそう言うのと通信を切るの、俺は堀北を一瞥してから去って行く。恨むなら伊吹を恨んでくれ。

そのまま古小屋に向かうとドアが開いていたので中に入ると既に葛城と龍園はいた。「ほらよ。証拠の写真だ」

言いながら俺は葛城にデジカメを渡すと、葛城はデジカメを操作するが暫くすると頷く。

「本物のようだな」

「当たり前だ。無人島で合成写真なんて無理だからな？」

そう返すと葛城は息を吐きながらデジカメを返す。

「良いだろう。契約は完全に成立だ」

よし、これで俺の懐は更に温かくなるな。ありがたいありがたい。

「Bのリーダーも聞いとくか？こっちはガードが固くて証拠はないが」

「確実な証拠がないなら結構だ。長居はリスクを生むから俺はもう行く」

そう言つて葛城は一足先に小屋を出て行き、残されたのは俺と龍園となる。その際に龍園は邪悪な笑みを浮かべていたが、俺も似たような表情をしているのだろう。何せ契約が完全に成立したつて事は俺も大量のポイントを手に入れるのだから。

「じゃあ龍園。また明日」

「ああ。また明日」

龍園は邪悪な笑みを浮かべたまま挨拶を返す。それを見送つた俺は雨を浴びながら

獣道を歩く。昨日までシャワーを浴びてないから自然のシャワーを浴びるのは悪くない。

そう思いながら歩いていると、あることに気付いた。

「堀北がいない、だど？」

先程堀北が倒れた場所に堀北がいないのだ。場所を間違えたかと思つたが、キーカードを埋めた木に近寄つて土を掘り返すとキーカードはあつた。

つまり堀北が目覚めた、もしくは誰かが堀北を発見して……！

そこまで考えた俺は早足で棧橋がある方向に向かう。もしかしたら誰かがリタイヤさせているかもしれない。

早足で進むと……棧橋付近ではスタッツらしき人達が担架を使っている。双眼鏡で確認すると案の定堀北が担架に乗せられていた。

それを認識した俺は即座に双眼鏡を持ったまま辺りを見回す。多分堀北を運んだ奴が新しいリーダーだろうから。

しかし残念なことに発見する事は出来なかつた。一応人影が見えたが特定は出来なかつた。

残念……ま、堀北がリタイヤしたことがわかつたし、良しとしよう。

そう判断した俺は無線機を使って龍園にその旨を伝えながら見張りを始める。

あと1日。あと1日我慢すれば天国が俺を待っているんだから……

## 最終日

試験最終日……

「龍園、最後に確認をすろぞ」

7時50分。点呼10分前にて俺は船の棧橋近くの森に身を潜めながら無線機で龍園と連絡をしている。

「Aのリーダーが戸塚弥彦でBのリーダーは白波千尋、Dについては不明で良いんだな？」

『ああ。そんでAクラスはお前がリーダーって知ってるから後8分したらリタイヤしろ』

「ああ。金田が夜中にリタイヤしたのを確認したし、それ以外の人はリタイヤしてない。よってウチのクラスは最大で100ポイントって所だな」

『ま、0だろうと葛城との契約は上手くいったし大した問題じゃない』

「だな。じゃあそろそろ切るが健闘を祈る」

そう言ってから通信を切って辺りを見回す。しかし辺りから物音が聞こえてこない。のでリタイヤする人間はいないのだろう。

と、ここで7時58分、点呼とリーダー当ての時間まで2分を切ったので俺は森から出て、早足で教員用のテントに向かい坂上先生に話しかける。

「坂上先生。体調不良でリタイヤします」

「わかった。リタイヤのペナルティは30ポイントだが、構わないかね？」

「はい」

言いながらキーカードを渡す。リーダーは最低1人は必要なので必然的に龍園がリーダーとなる。

「んじゃ失礼します」

一礼してから俺は豪華客船に乗船する。とりあえず部屋のシャワーを使って汚れを落とそう。

俺は人気がない廊下を歩き、やがて自分の部屋に着いたので中に入る。すると部屋ではパジャマ姿の石崎とアルベルトがいて、俺を見て目を見開く。

「比企谷?! 何でここに……?」

「それよりシャワー使うから」

そう言つて俺はシャワールームに行き、パパッと服を脱いでシャワーを浴びる。

「あー……気持ちいい……」

5日ぶりのシャワーは最高の一言だ。何というか身の汚れがどんどん落ちていくの

がわかる。

俺はそのままシャンプーとボディソープをふんだんに使つてとにかく身体を洗いまくる。身体を洗い終えたら飯を食いに行こう。無人島生活においては初日と2日目以外の食事はガチで質素だったからな。

30分後……

「ふう……生き返った」

身体を徹底的に洗い終えて、髭を剃った俺は風呂場から出て制服に着替える。そして汚れたジャージを洗濯機に入れて回す。

そして脱衣所から出ると石崎が話しかけてくる。

「何でお前がいるんだよ？ 龍園さんはどうしたんだよ？」

「作戦の1つだ。俺は体調不良つてことにしてリタイヤ。今のリーダーは龍園がやってる」

「作戦つて……龍園さんは何を考えてるんだ？」

「今俺が教えても良いが、試験の結果はまだ出てないから後にしとけ」

言いながら俺はそのまま部屋を出てレストランに向かう。腹がペコペコだし、分厚い

ステーキを食べに「おや、比企谷君ではないですか?」……懐かしい声だ。

後ろを振り向くと杖をついている女子……坂柳有栖が微笑みを浮かべて俺を見ていた。

「久しぶりだな」

「はい。1週間ぶりですね。無人島生活はどうでしたか?」

「もう二度とやりたくない」

初日と2日目は天国だったが、以降は地獄だった。来年もあるなら俺はバカンスを楽しむ側に行くと思う。

「そうでしょうね。ちなみにAクラスに攻撃を仕掛けましたか?」

「約束だからな。Aクラスはウチから200ポイント分の物資を貰ったから、最終日の点呼の時には270ポイントがそのまま残ってるだろうな」

「でしょうね。試験の概要は知ってますが150ポイントあれば1週間過ごすのは不可能ではないです。加えてスポットのボーナスも加えた場合、Aクラスは普通なら500ポイント以上となるでしょう。普通ならですが」

坂柳は意味深な笑みを浮かべてそう言ってくるので俺も頷く。

「普通ならな。ま、続きは試験の結果を見てからだな。それより俺は腹が減ったし飯を食いに行くんだが、お前は?」

「私も朝食を食べに行くところでしたので一緒にいきます」

坂柳が頷いたので俺は坂柳の歩幅に合わせてレストランに向かい、到着するなりステーキを注文する。一方の坂柳はサンドイッチと紅茶を頼む。

「朝からステーキを頼むなんて余程お腹が空いていたんですね」

「ああ。船に戻ったら肉を食うと決めてた」

暫くするとステーキが運ばれてきたので口に入れると肉汁が口の中で広がり、バクバクと食い始める。もう我慢する必要がない以上、遠慮する気は全然なかった。

「さて、もうすぐ結果発表ですが楽しみですね」

坂柳は楽しそうに笑っているがAクラスの勝利については望んでないのは丸分かりだ。

「そうだな。船に降りて確認しに行くのか？」

「いえ。私は専用の部屋を与えられていますが、そこにあるテレビで見れますから一緒に見ましょう」

普通に言っているが男子を簡単に自分の部屋に誘うなよ？アレか？俺の事を玩具として見ているから大丈夫だと思ってるのか？」

そこまで考えていると坂柳が不満そうな表情になって俺を見ている。

「比企谷君は酷いです」

「い、いきなりどうした？」

「私が比企谷君をおもちゃとして見ているなんて……」

「どうやら口に出していたようだ。しかし以前玩具扱いされていた以上、俺がそう考えても仕方ないだろう。」

「そう思っていると坂柳が口を開ける。」

「確かに知り合った当初は良いおもちゃになると思っていました」

「思ってたのかよ。予想はしていたがハッキリ言われるのは予想外だわ。」

「しかし時間が経つにつれてそのような気持ちは無くなり友達と思うようになりました。大体おもちゃと思ってる人に対して抱っこされたりはしません」

「ま、まあそうだな。確かに坂柳が俺を玩具として見てるなら肌を晒したり、俺に抱っこされたりせずパシリ扱いしているはずだ。」

「あー、済まない。考えが甘かった」

「いえ。元はと言えば先におもちゃなんて言った私が悪いですから比企谷君は謝る必要はないです。ですが今の私は比企谷君を友達と想っている事は覚えていてください」

「坂柳はそう言ってくる。その返事にどう返したらいいのか悩んでいると坂柳は口を開ける。」

「話を戻しましょう。試験の結果については私の部屋で一緒に見ましょう……もちろん

八幡君が嫌なら無理強いはしませんが……」

坂柳は不安そうな表情になりながら上目遣いで見てくる。普段の坂柳の性格からして演技であるのは丸わかりだが……

「わかったよ。飯食ったら案内してくれ」

逆らえん。演技とわかっていても罪悪感が湧いてくる。というか坂柳の奴、いつのまに俺の事を名前呼びしてるし。

俺が了承すると坂柳は途端に笑顔になる。

「はいっ。宜しくお願いします」

畜生、騙されたとわかってても可愛過ぎて文句が言えないな。

2時間後……

「いよいよ試験結果の発表ですね」

「だな」

朝食を済ませた俺は有栖によって、有栖の部屋に案内されて現在はソファアールに座ってテレビを見て結果を待っている。(尚、有栖を名前呼びしてるのは有栖がそう呼べと何度もお願いしたからだ)

「しかし葛城君は龍園君に詰め寄ってますが何をしたんでしようね」

有栖がコロコロと笑う。モニターを見ると生徒の様子が映っていて、葛城が龍園に詰め寄っているのも見える。撮影カメラが葛城達から離れているので音声は聞こえないが十中八九俺がりタイヤした件だろう。

『それではこれより、特別試験の結果を発表したいと思う』

モニターから真嶋先生の言葉が聞こえ、モニターに映る生徒に一気に緊張感が走る。

『なお結果に関する質問は一切受け付けていない。自分たちで結果を受け止め、分析し次の試験へと活かしてもらいたい』

そうは言っているが中には分析できないこともあるだろう。

緊張が走る中、遂に結果が発表される。

『ではこれより特別試験の結果を発表する。最下位は——Aクラスの70ポイント』

真嶋先生の言葉により、Aクラスを中心に騒めきが起こる。

「あらあら……」

有栖は楽しそうに笑うがこれは予想外だ。俺はAクラスは120ポイントで3位と思っていたんだが……どうやらBかDがリーダーを当てたのだろう。

『3位はCクラスの100ポイント』

これAとBのリーダーを指名したからだろう。もしも俺が昨日堀北がリタイヤしているのを発見しなかったら50ポイントになっていたはずだ。

『2位はBクラスの140ポイント』

2位がBつて事はAのリーダーを当てたのはDだろうな。そして予想以上に少ないのは龍園がリーダーを当てたからだろう。

『そして1位はDクラスの175ポイント。以上をもって結果発表を終了する』

真嶋先生の言葉によって試験が終わる中、モニターを見ればDクラスの生徒ははしゃいでいて、龍園はニヤニヤ笑いながら船に戻っていて、Bクラスの生徒は皆で話し合っていて、Aクラスの生徒は葛城に詰め寄っていた。

「ふふつ、これで葛城派は大きく勢力を落とすでしょう。ご協力ありがとうございます」「いやいや。こつちこそAクラスとは良い契約を結べたし、礼を言うのは俺だ」

有栖が微笑みながら礼を言ってくるので俺も返事をする。何せ契約が完全に成立した時点で俺は勝ち組になったようなものだからな。

モニターにて今もなおクラスメイトに詰め寄られている葛城を見て、俺は笑みを我慢するのは無理だったのは言うまでもなかった。

## 詳細

「さて……では私は葛城君に事情を尋ねに行くので失礼してもよろしいでしょうか？」

結果発表が終わり、暫くすると有栖がそんな事を言ってくるが、事情を尋ねるんじゃないかと、真綿で首を絞めに行くの間違いじゃないのか？

とはいえこれはAクラスの問題だから俺がどうこう言う権利はないし、気にしないでおく。

「そうだな。俺も龍園と合流したいしな」

「では一旦別れましょうか」

「わかった。じゃあまたな」

俺は了承してから有栖に一礼して部屋を後にする。時間的に考えて龍園は今頃部屋でシャワーを浴びているだろうし、ゆっくり歩けば良いタイミングだろう。

エレベーターに乗るべくボタンを押す。すると暫くしてドアが開き……

「あ……」

エレベーターに乗っていたひよりと鉢合わせする。何という偶然だろうか。

「お久しぶりです八幡君。試験、お疲れ様でした」

ひよりは俺を見るや否やにつこりと笑ってくる。それだけで胸が熱くなり幸せな気分になる。

「ああ。久しぶりだな」

「その様子だと風邪は引いてないみたいですね。良かったです」

ひよりはそう言つてギユツとしてくるのでポンポンと背中を叩く。無人島にはこんな温もりもなかったからな。

「ありがとな。ところでお前は何をしてたんだ？」

「先程の試験結果について聞こうと八幡君と龍園君の部屋に行こうとしてたんです」

「そうか。俺も部屋に行くつもりだったから一緒に行こうな」

「……はい」

ひよりは頷くと俺から離れ、そのまま手を繋いでエレベーターに引つ張るのでそれに逆らわずにエレベーターに乗り、目的の階層に向かう。

そして自分の部屋に入ると、ソファーには石崎とアルベルトに加えて伊吹もいて、ドアを閉めたタイミングで脱衣所から龍園が出てくる。

「よう比企谷。今回の試験は成功だ。お前の手腕がデカかったし次もよろしくな」

「それは報酬次第だな」

報酬をくれるなら余程ヤバい事じゃない限りなんでもやるつもりだ。

言いながら俺達はソファーに座ると伊吹が口を開ける。

「じゃあ説明して。ウチのクラスが1000ポイントなのはわかるけど、何でAクラスが最下位でDクラスが1位なの？」

「くくつ、伊吹。お前Cクラスが1000ポイントを取った理由を本当にわかってんのか？」

伊吹の問いかけに龍園は笑いながらそう返す。

「BとDのリーダーを指名したからでしょ？」

「違うな。俺が指名したのはAとBだ。Dのリーダーは指名してない。」

「はあ？何ですよ？もしかして比企谷が報告を怠ったの？」

伊吹がそう言っただけを見てくる。まあ伊吹の立場からしたら俺を疑うのは当然だ。

「それについては今から説明する。まずこれを見る」

言うなり龍園は1枚の紙を近くにいる石崎に渡す。

「えっ?!こんな契約をしてたんですか?!」

「ああ。俺にとつて本命はこの契約だ。読み終わったら次に回せ」

龍園がそう言うのと石崎はアルベルトに回し、そこから伊吹、ひよりと続くが、俺から契約を聞いたひより以外は驚きを露わにしている。

「全員読んだな。じゃあまずはAクラスから教えるぞ。契約書にあるように俺はAクラスに200ポイント分の物資を支給した。そんだけの物資があれば本来Aクラスに与えられたポイントを使わなくても1週間やり過ごせる」

「……そうね。無人島には水や食料が十分にあつたし、150ポイントあれば1週間過ごすのは不可能じゃないわ」

Dクラスに滞在していた伊吹は小さく頷く。

「ああ。だからAクラスは今日の点呼直前には間違いなく270ポイントを丸々残していただろうな」

「じゃあ何で200ポイントも減ってるんですか?」

「簡単な話だ。Aクラスは攻撃を2回して失敗して、2回攻撃を受けたからだ」

龍園はそう答える。やはりそうだろうな。

「Aクラスが攻撃したのはCとDだ。で、両方とも失敗した」

「え?!ウチとAクラスは同盟を結んでいるんじゃないですか?!」

「それにDクラスに対する攻撃が失敗ってどういう事?」

石崎と伊吹が説明を促すと龍園は笑いながら口を開ける。

「石崎の質問だが契約書を見ろ。『AクラスはCクラスを、CクラスはAクラスを攻撃してはいけない』なんて書いてないから問題ない」

「いや……でも暗黙の了解が「俺がそんな事を気にすると思うのか？」「思いませぬ」  
だろうな。龍園が暗黙の了解なんて気にするわけない。

「それで伊吹の質問のDクラスに対する攻撃が失敗については当事者の比企谷が説明する」

「俺か……まあ良い。伊吹がリタイヤした後、俺は龍園と葛城と会ってキーカードの写真を見せ、それによって契約を完全に成立させたが、帰り道で堀北がいない事を確認した。それにより俺は堀北がリーダーを交代する作戦を使うと判断した」

「……どういう事？リーダーは変更出来ないんじゃないの？」

「違うな。リーダーの変更は正当な理由がないと出来ないだけだ。体調不良は正当な理由だ」

「そうですね。私や石崎君達は体調不良と言って2日目にリタイヤしましたね」

俺の言葉にひよりが納得したように頷く。

「俺は船の近くにて堀北が担架に乗せられているのを発見して、リーダーが変わったのを理解した。そこで次のリーダーを突き止めようとしたが暗闇だったから次のリーダーが誰かはわからなかった」

俺の言葉に伊吹は納得したように頷く。

「だから龍園はDクラスを攻撃しなかったのね」

「そう。俺は龍園にDクラスに攻撃するかと警告して、逆に葛城にはDクラスのリーダーが変わった事を教えなかった。これがAクラスがDクラスに対する攻撃を失敗した理由だ」

「なるほど……もしかしてAクラスがCクラスに攻撃して失敗したのも似た理由ですか？」

やはりひよりは頭の回転が早いな。

「そうだ。試験4日目に俺は比企谷を殴ってAクラスに接触させた。理由は伊吹と金田と同じで他クラスから信用を得る為にな」

「俺は葛城に対して龍園と仲違いしたと言って、俺の名前が記されたキーカードを葛城に見せた。そこで試験最終日の点呼直前にリタイヤしてリーダーを龍園に変えた。それがAクラスはCクラスに向けた攻撃は失敗した理由だ」

Aクラスは2回攻撃して両方とも失敗したのでマイナス100ポイントとなる。

「次にAクラスを攻撃したクラスだが、ウチとポイントから察するにDクラスだろう。Dクラスについてはわからんが、Cクラスについては比企谷がリーダーを見抜き、更に俺が坂柳派と接触してリーダーを教えて貰ったから名前を書いた」

Dクラスがどうやって見抜いたかは知らないが、Aクラスのポイントを見る限り確実な証拠があった可能性が高い。坂柳派の人間がAクラスのリーダーを教えた可能性も

あるけどな。

「いやいや。いくら坂柳派が葛城派を嫌っていても、普通リーダーをバラしますか?」

「坂柳は普通じゃないからな。俺は試験前に坂柳からAクラスをボコセと頼まれた」

「何?つまりアンタは無人島試験の前から坂柳と組んでたの?」

「須藤の件の時からな。あの時に坂柳はCクラスを援護するから、機会があつたら葛城派を叩いて頼んできた」

「それで今回俺と龍園は葛城派を集中して叩いたのだ。坂柳と組んだ結果、須藤を停学にさせることに成功して、葛城派にも大ダメージを与えた。Cクラスからしても坂柳からしてもwin-winとなったのだ。」

「とりあえずこれでAクラスが70ポイントしか手に入らなかった理由がわかっただろ」

「その上Aクラスは毎月アンタに2万ポイントを払うんだから悲惨ね」

伊吹はそう言っているが違う点がある。

「2万じゃねえ。3万だ」

「え?2万じゃないんですか?」

「よく見てみる」

石崎の疑問に対して龍園は契約書をテーブルの上に置く。

## 契約内容

① Aクラスの生徒全員が龍園翔に毎月1万プライベートポイントを譲渡する。本契約は本校の卒業まで継続する。

② CクラスはAクラスに対し、200ポイント相当の物資を購入して譲渡する。尚、購入する物資はAクラスが決める。

③ CクラスはBクラスとDクラスのリーダーを探り、得た情報を全てAクラスに伝える。

④ Cクラスが②と③を達成した場合、Aクラスの生徒全員が龍園翔に毎月2万プライベートポイントを譲渡する。本契約は本校の卒業まで継続する。

⑤ 下記に署名した者は、本契約内容に同意したものとす。

「良いか。リーダーの情報を教えなかつたら①だけだが、リーダーの情報を教えたから④も追加されるが、④には①で払うポイントが2万になるなんて書いてないだろ？」

「あっー！」

伊吹と石崎はハツとした表情になり、アルベルトは「Oh」と小さく呟く。

龍園の言う通りだ。契約書には①で払うポイントが2万になるなんて一言も書いておらず、①と④は繋がってない。

よってAクラスが龍園に払うのは1万+2万で3万だ。そこで有栖を除いた39人が署名したので……

「つまりAクラスは龍園君に卒業まで毎月117万ポイント払うという事ですな」  
ひよりは感心したように頷く。

「そして俺は事前に龍園と試験で得る利益の半分を貰う約束をしたので、俺は龍園から卒業まで毎月58万5千ポイント貰えることになる」

そこで卒業まで今月を含めて32ヶ月あるので……

58万5千×32＝1872万ポイント手に入る事になるのだ。

しかもこれからも龍園から仕事を受けてポイントを稼げば個人でAクラスへ上がる為の2000万は余裕で手に入る。

クラスでAクラスに上がれなくても勝ち組になれる可能性は充分ある。

「つまり試験の結果を纏めると……

Aクラスは200ポイント分の物資を貰っておきながら70ポイントしか稼げなかった挙句毎月117万ポイントを俺に渡す結果となり……

Bクラスは堅実に頑張ったがスパイによって余り稼げない結果となり……

俺達Cクラスは俺と比企谷は1週間頑張つて卒業まで毎月60万ポイント近くAクラスから貰え、俺と比企谷以外の連中は1週間夏休みを満喫しただけで100クラスポイントを得て……

Dクラスは団結力は低かったがリタイヤ作戦をした挙句にAクラスのリーダーを当てる1位となった……つて感じだな」

龍園が試験の結果について纏め上げる。それに対して伊吹は不満そうな表情になる。「話はわかったけど、私と金田は只働きつて訳？」

まあそうだろうな。俺と龍園は毎月60万のポイントが約束されて、金田と伊吹以外の生徒は2日間バカンスをした後に豪華客船で遊びまくった。

一方金田と伊吹は初日に龍園に殴られてからずっとスパイ活動をしていたのだ。不満を抱くのは当然だ。

その言葉に龍園は息を吐くと携帯を取り出して操作する。「お前と金田の携帯に20万ずつ送金した。20万じゃ足りないか？」

ポイントの値からして、既にAクラスから今月分ポイントが振り込まれているようだ。

「ふんっ……」

伊吹は鼻を鳴らすが文句を言う気はないらしい。

「ま、無人島試験についてはこんなもんだ。そんでこれから直ぐに次の試験があるだろう。正直言つてこの学校が1週間も遊ばせるとは思えない」

だろうな。この辺りは各クラスのリーダー格も同じ意見だ。

「そろそろ俺も本格的にゲームに参加するか。比企谷も動いて貰うぜ」

龍園はそう言つて再度携帯を操作すると俺の携帯に通知が来るので確認すると58万5千ポイントが振り込まれていた。

「へいへい。適当に頑張りますよ。つか俺は眠いから寝る」

徹夜をして眠くて仕方ないからな。今日はゆつくり休もう。

そう思っていると……

「あ、じゃあ久しぶりに一緒に寝ませんか?」

ひよりの爆弾発言によりずっこけてしまった。お前は人前で堂々と言うな馬鹿。

その後龍園はニヤニヤ笑いを浮かべ、伊吹と石崎とアルベルトは俺を気遣いながらも部屋を出て行き、結果的にひよりと一緒に寝てしまった。

最初は恥ずかしかったが、試験の疲れが想像以上であったのですぐに眠ってしまったのであった。

## 番外編 報告書

高度育成高等学校の現状

1年Aクラス

クラスポイント（無人島試験終了時点）

1074ポイント

総評

入学して直ぐにSポイントの存在を認知して授業態度を改めた結果、5月1日の時点のクラスポイントは940と歴代最高の数値を叩き出した。

普段の授業態度も模範的で、中間試験と期末試験でも高い平均点を記録している。

問題点があるとすればクラスの中心人物である坂柳有栖と葛城康平が対立している点である。現状他クラスとのクラスポイントの差は充分にあるが、早急な改善を望む。

1年Bクラス

クラスポイント（無人島試験終了時点）

## 885ポイント

## 総評

一之瀬帆波を中心として皆が団結して定期考査や特別試験に挑んでいて、生徒間で大きな問題が生じてない。Bクラスの団結力は歴代の高度育成高等学校のクラスでも類を見ない程である。

Bクラスの皆が一之瀬帆波を信頼していて、この関係は崩れないだろうから、今後Bクラスは人間関係による失態はないと思われる。

## 1年Cクラス

クラスポイント（無人島試験終了時点）

## 686ポイント

## 総評

団結しているBクラスとは対称的に龍園翔による独裁体制が敷かれていてCクラスの生徒の大半は龍園翔に従っている。

当の龍園翔は無人島試験でCクラスの生徒の大半をリタイヤさせるなど他クラスの生徒とは一線を画するやり方を好む。

博打的な色は強いが、龍園翔の作戦の欠点は比企谷八幡によってフォローされているので結果を残している。

また他クラスとの揉め事が多いので注意が必要である。

## 1年Dクラス

クラスポイント（無人島試験終了時点）

175ポイント

### 総評

4月における授業態度は最悪の一言で5月1日の時点のクラスポイントは歴代最低の0ポイントであった。

その後も中間試験で高い成績を出したが、由比ヶ浜結衣の赤点問題や須藤健の停学などの問題もあり、無人島試験開始の時点でのクラスポイントは0でDクラスの生徒が所有するプライベートポイントも僅かである。

しかし無人島試験では見事1位となったので、これを機に各人が成長することを望む。

また今のDクラスには他クラスにいる絶対的リーダーがいらない事、団結力が大きく

欠けている事など問題が多々あるので、社会人になってから慌てないよう早急な改善が必要とされている。

おまけ

八幡の対人関係

(比企谷八幡↓椎名ひより) 友達

(比企谷八幡↓坂柳有栖) 友達

(比企谷八幡↓龍園翔) 金づる

(比企谷八幡↓神室真澄) 苦勞人仲間

(比企谷八幡↓雪ノ下雪乃) 忌避

(比企谷八幡↓由比ヶ浜結衣) 忌避

(比企谷八幡↓綾小路清隆) 警戒

(比企谷八幡↑椎名ひより) 大切

(比企谷八幡↑坂柳有栖) お気に入り

(比企谷八幡↑龍園翔) ビジネスパートナー

(比企谷八幡↑神室真澄) 苦勞人仲間

(比企谷八幡↑雪ノ下雪乃) 敵意、格下

(比企谷八幡↑由比ヶ浜結衣) 敵意、格下

(比企谷八幡↑葛城康平) 警戒

(比企谷八幡↑一之瀬帆波) 警戒

(比企谷八幡↑神崎隆二) 警戒

(比企谷八幡↑堀北鈴音) 警戒

(比企谷八幡↑須藤健) 敵意

(比企谷八幡↑綾小路清隆) 障害

## スパ

無人島での特別試験が終わってから3日、生徒らは無人島生活で溜まったストレスを発散するべく様々な施設を利用して楽しく過ごしている。

かくいう俺も無人島ではマトモな飯を食べられなかった反動かつい食べ過ぎてしまって体重が2キロも太ってしまった。旅行が終わったらダイエットしよう。

俺は水着片手に船内を歩く。俺は今から船内にあるスパ施設に行く予定だ。そこで海を見ながらジャグジーを楽しみたい。デッキのプールも悪くないが、あそこは人が多いからな。

そう思いながらスパ施設がある階層に向かうべくエレベーターに乗ると……

「あ」

エレベーターには有栖が乗っていた。しかも手には水着がある。つまり……

「お前もスパに行くのか？」

「ええ。気分転換に」

そう言う有栖の表情には珍しく苛立ちがあった。コイツがこんな表情を浮かべるなんて珍しいな。

「お前に何があったんだ？誰かからセクハラをされたのか？」

「セクハラより悪いです。さつきDクラスの雪ノ下さんと由比ヶ浜さんと鉢合わせしたのですが、Dクラスが無人島試験で1位だった事を高らかに自慢してきたのです」

なるほどな。由比ヶ浜に散々喧嘩を売られた有栖からしたら苛々するだろうな。つか、参加してない有栖に自慢してもなあ……

「あー……どんまい」

「しかもこちらが陽乃さんの出涸らしと返したら由比ヶ浜さんは犬のように吠えますし……疲れました」

あー、由比ヶ浜の性格的にありえるな。つか由比ヶ浜って出涸らしの意味を知ってたんだ。ぶっちゃけ驚いた。

そう思っているとエレベーターは目的の階層に着いたので、俺達はエレベーターを出てスパ施設に到着する。

「ではまた後で」

「ああ」

そう言ってから俺は男子更衣室に行き、パパッと全裸になってから水着に着替えて、更衣室を後にする。すると施設には巨大な温泉やサウナ、岩盤浴やジャグジーがある。

暫くの間、入り口付近で待機していると女子更衣室の出口から以前着た白いワンピース

スタイルの水着を着た有栖が出てくる。

「お待たせしました。最初はどこに行きますか？」

「ジャグジーでどうだ？ 1番海の景色を見れるし」

「そうですね」

俺の意見に有栖は頷き、ゆつくりと歩き出すのでそれに続く。そしてジャグジーの前に着くと俺は一足先に入って有栖に向けて手を差し伸べる。

すると有栖は近くに杖を置いてから俺の手を掴んでゆつくりとジャグジーに入る。

ジャグジーからは大量の泡が吹き出していて気持ちいい。

「あー、気持ちいい。このまま平和に1週間が終わればなあ……」

「残念ながらそれはないでしょう。この学校が私達を1週間も遊ばせるとは思えませ  
ん」

「だな。無人島試験が終わってから3日経過してるし、今日の夕方あたりに試験の説明  
があるかもな」

「私もそう思います。ですから最後の気分転換としてデッキのプールに行こうとしたん  
ですが……」

そこで有栖は口を閉ざすが、由比ヶ浜と雪ノ下の所為で苛々したのだろう。

「とりあえずここで気分転換しとけ。この施設は夜には人気があるが、昼過ぎには人が

来ないし」

現に今の時間帯には俺と有栖しかいないが、一昨日の夜に来たら人が何十人もいたからな。

「そうですね……では気分転換をしましょう」

そう言う和有栖はそのまま俺の方を向いて、あろうことか俺の膝の上に座ってくる。

「ちよつ?!あ、有栖?!」

「ふふつ……気分転換に付き合ってくださいね」

こ、コイツ……気分転換に俺をからかうつもりかよ?!

戦慄する中、有栖は右手を俺の背中に手を回し、左手で俺の胸を撫でてる。手つきは優しいが凄くくすぐったい。

「あ、有栖……頼むからやめてくれ」

恥ずかしい気持ちがあるのもそうだが……

「そんな恥ずかしがらなくても良いじゃないですか……可愛いですよ?」

有栖はそう言うってくるが、可愛いと呼ばれても嬉しくないからな。

すると……

「ふう……」

「っあー!」

有栖が俺の耳に息を吹きかけてくる。それによって思わず変な声を出してしまう。同時に快感が溢れでてしまい……

「あつ……」

思わず生理現象が生じてしまう。しかしメチャクチャ可愛い女子に抱きつかれたり、擦られたり、耳に息を吹きかけたりしたら仕方ないだろう。

当然俺の膝の上に座っている有栖もそれを理解したようで……

「……っ」

顔を少しずつつ赤くしていく。予想外の事だったのか俺の上で固まってしまっている。しかしそれも一瞬で身体の弱い有栖はよろめき、そのまま後ろに倒れそうになる。

それを見た俺は反射的に有栖の背中に手を回し、有栖の後頭部がお湯にぶつかる直前に抱き寄せる。

「あつ……」

「大丈夫か？お湯を飲んでないか？」

「……大丈夫です。ありがとうございます」

「なら良かった」

身体の弱い有栖が噎せたりしたら大変かもしれないからな。

そこまで考えていると俺は有栖と抱き合っている事を認識する。さつきまでは有栖

に抱きつかれてはいたが、俺は抱き返してなかった、

つまり初めて有栖と抱き合っている事を意味する。

「……椎名さんの言った通りですね」

「ん？ひよりかどうかしたか？」

「前に椎名さんが言っていたんです。八幡君に抱きしめられると胸が熱くなり、気分が良くなるよ」

アイツ、そんな事を言っていたのか。というかひよりの言った通りって事は……

「お前なあ……そういう事は口にしないでくれよ」

つまり有栖も俺に抱きしめられて気分が良くなっているのだろう。面と向かって言われると結構恥ずかしいな。

「以後気をつけます。それより……もう少し強く抱きしめてくれませんか？」

そんな風をお願いしてくる有栖の目はひよりと同じ目をしている。

「……わかったよ」

よって俺に拒否する選択肢などなく、今よりも強く抱きしめる。

「あ……」

有栖は吐息を漏らすと、俺の背中に回している手の力を少しだけ強めてくる。同時に有栖の温もりが伝わってきて俺を包み込んでくる。

(ひよりから感じる温もりとはまた別だな。ただ、気持ちいいことには変わらない……)  
幸せな気分になりながらお互いに抱き合っている時だった。

『生徒のみなさんにご連絡いたします。先ほど全ての生徒宛に学校から連絡事項を記載したメールを送信いたしました。各自携帯を確認し、その指示に従ってください。また、メールが届いていない場合には、近くの教員に申し出てください。非常に重要な内容となっておりますので、確認漏れがないようにご注意ください。繰り返しします——』

いきなり船内にアナウンスが流れ出す。それもかなり重要な事を言っていたな。

俺に抱きついている有栖もハツとした表情に変わる。

「不思議なアナウンスですが、全ての生徒にメールをしたなら確認しないといけないうすね」

だろうな。アナウンスでは確認漏れがないようにと言っていたし。

「やれやれ……もう少しジャグジーを堪能したかったが仕方がない。上がるか。降りれるか?」

「八幡君さえ良ければ女子更衣室の出口まで運んでくれませんか?」

つまりお姫様抱っこしろってか? まあ別にいいけどさ……

「はこよ」

了承した俺は右手を有栖の背中に回したまま、左手を有栖の脚に移してそのまま抱き抱える。

「んっ……」

すると有栖は胸の中でギュツと縮こまるが、普段の態度とはギャップがあつて可愛らしい。

俺はそのまま有栖を抱えたままジャグジーを出て、立てかけた杖を有栖を抱えたまま掴み、女子更衣室の出口まで運ぶ。

「どうもありがとうございます。メールを見終わったら連絡します」

「ああ」

そう返事をして俺は男子更衣室に入り、自分のズボンのポケットから携帯を取り出して確認をする。

『間もなく特別試験を開始いたします。各自指定された部屋に、指定された時間に集合してください。10分以上遅刻した者にはペナルティを科す場合があります。本日20時40分までに203号室に集合してください。所要時間は20分ほどですので、お手洗いなどを済ませ、携帯をマナーモードか電源をオフにしてお越し下さい』

妙なメールだ。集合時間は中途半端な時間だし、集合場所も客室と試験を行う場所に

しては不適切な場所だし、所要時間も短過ぎる。

疑問に思っているとは有栖からも電話がかかってくる。

「メール見たか？」

『はい。20時40分に201号室に集合と書いてありました』

「俺は同じ時間に203号室だな。とはいえ客室に40人が入らないし、生徒全員に一齐に説明するんじゃないかって……」

『少しの生徒に何度も説明するのでしょうか』

「だな。とはいえ俺の集合時間まではまだあるし、もう一度ジャグジーに入るわ」

『あら？八幡君より先に説明を受ける生徒がいるかもしれないですが、作戦会議はしないのですか？』

「この学校の説明については裏がありまくりだから、他人を介して聞くよりも最初に自分の耳で聞きたい。お前も同じ意見だろ？」

「この学校は遠回しな説明が多いから。他人から聞くよりも、直接先生に聞いた方が合理的だ。というか少しゆったりしたい。」

『そうですね。1番信じられるのは自分の耳ですから。クラスメイトと話すのは全員が聞き終わってからのの方が良いでしょう。ですから私も同伴して良いですか？』

「好きにしろ」

そう返事をして俺はポケット男子更衣室を出てスパ施設に戻り、合流した有栖と抱き合いながら施設を満喫するのだった。

## 鉢合わせ

メールが来てから数時間、俺は夕飯を済ませてから集合場所に行くべく、エレベーターを待っているけどドアが開く。

「あ？比企谷じゃねえか。もしかしてお前も20時40分集合か？」

エレベーターには龍園がいた。

「そうだ。お前もか？」

「ああ」

龍園が頷きながらエレベーターの閉ボタンを押すとエレベーターは動き出す。

「それにしてもどんな試験だか今から楽しみだぜ」

龍園はそう言っているが……

「お前も試験についてクラスメイトから聞いてないんだな？」

「こういうのは自分の耳が1番信用出来るからな。まあ他クラスとグループを組むってのは耳に入ったな」

その辺りは俺も知っている。飯を食ってる時もレストランでグループを組むだの優待者云々って聞こえたし。試験の内容は聞いてないが他クラスとグループを組んで優

待者をどうこうする試験だろう。

「それは俺も聞いた。多分同じ時間に説明を聞く生徒同士が組むんだろうが、その場合に有栖がいるぞ」

それを聞いた龍園は楽しそうに笑う。

「それは面白そうだな。ま、まだ坂柳に挑むのは早いかな」

それについては同感だ。今有栖に挑んでもCクラスは負けるだろう。龍園が有栖に劣っているとは思わないが、駒の質は向こうの方が遥かに高いのは間違いない。

一方の有栖も葛城派を完全に屈服させた訳ではないので、余り派手な事はしないだろうし、争うとしても小競り合いレベルの規模の争いで終わる可能性が高い。

そう思っていると目的の階層の2つ上の階層でエレベーターが止まりドアが開く。

「おや?もしかして八幡君と龍園君も20時40分集合ですか?」

そう言うってくるのは数時間前に俺と一緒にスパ施設で過ごした有栖だった。

「ああ。その通りさ。ま、宜しくな」

「ええ。私はまだ試験の内容は知りませんが、場合によっては宜しく願います」

「葛城を屈服させるって意味なら構わないぜ。正直あの雑魚を倒しても面白くないからな」

「その辺りはご自由に。それにしても私も八幡君のような人材が欲しいです。八幡君と

葛城君を交換出来たらどんなに嬉しいやら……」

「俺が大損じゃねえか。言つとくが俺は比企谷の実力は認めてるが、信用はしてないし側近とは思ってないぞ」

「もちろんわかってます。私も八幡君がAクラスにいるなら側近にするよりビジネスパートナーにしますよ」

ま、そうだろうな。俺は自分の利益になる事を最優先にするんで誰かに対する忠誠心は持ち合わせてない。そんな人間は側近にするよりオブザーバー的な立場にするべきだ。

そんな事を考えていると目的の階層に着いてドアが開くのでエレベーターを後にする。俺は有栖の歩幅に合わせるが、龍園はそれを気にせず先に行く。

「八幡君、他のグループとの話し合いもあるかもしれないので置いていかれる訳にもいきません。ですから抱っこしてください」

おいおい……言ってる事は間違っちゃいないが堂々と頼むか？幾ら俺が有栖をお姫様抱っこしてる写真や動画が流出しているとはいえ、人前に出ると？

「いやいや、流石にそれは「断るなら泣きます」……了解した」

俺に拒否する選択肢はなく、有栖の背中と足に手を当ててそのまま抱えて龍園のあとを追う。

同時に龍園もこちらに気付き楽しそうに笑う。

「おいおい、随分と仲が良いじゃねえか」

「ええ。八幡君の腕の中は気持ちいいですよ。龍園君もどうですか？」

「やめろ」

龍園は嫌そうに拒否するが俺だつて嫌だわ。つか龍園を抱える力なんてねえよ。

内心毒つきながらも廊下を歩いていると前方にて人が集まっているのを発見する。

Aクラスの葛城、Bクラスの神崎、Dクラスの堀北、平田、櫛田、雪ノ下。雪ノ下以外は各クラスのリーダー格だな。

それを認識すると俺は有栖を地面に下ろす。この距離なら遅れをとる事はないだろうからな。

「クク。随分と雑魚が群れてるじゃねえか。俺も見学させてくれよ」

龍園がそう言うのと前方にいる全員が一斉にこつちに険しい表情を向けてくる。

「……龍園に比企谷、それに坂柳。なるほどな。やはり無人島試験ではお前達は組んでいたのか」

葛城は険しい表情を浮かべながら話しかけてくる。対して俺の腕の中にある有栖はニツコリ笑う。

「ええ。旅行が決まった時からAクラスを負かすように龍園君と八幡君に頼みました。

Cクラスは私に対して須藤君を停学にさせたという借りがあったので」

その言葉に対して神崎や堀北も険しい表情になる。

「つまり坂柳もあの暴力事件は最初から関与していたのか?」

神崎はそう尋ねるが、有栖は首を横に振る。

「いえ。事件を目撃したのは偶然です。しかし動画が手に入ったので、停学になったらどんなペナルティが発生するのか知りたくなったのでCクラスに協力しただけです」

「……やはりお前のやり方は人を不幸にする」

葛城はそう言っているが……

「何言ってるんだ? 誰のやり方だろうがな、最終的にはAクラス以外の生徒120人は学校の恩恵を受けられず不幸になるからな?」

Aクラスにならないなら不幸になる。葛城はAクラスが勝つ為に動いたが、それはつまりBとDクラスの生徒を不幸にしようとするって事だ。

「八幡君の言う通りですね。結局どのクラスが勝ち上がるかと、不幸になる人は絶対にいます。その際に生じる不幸の大きさはさして重要な問題ではありません」

「俺はモラルの話をしている。誰かを意図的に貶めるやり方など絶対に間違っている」

「でしたら私を倒してそれを証明してください。この世において正義は勝者にあるのですから」

「ま、無人島試験で俺と比企谷の罠にまんまと嵌まったお前じゃ無理だろうがな」

一触即発の空気が有栖と葛城の間に龍園がヘラヘラ笑いを浮かべながら入る。

「きっかけ、中々面白い組み合わせだな。お前と鈴音で美女と野獣って見世物を出せば人気が出そうだな」

龍園は堀北と葛城を見比べながらそう口にする。その際に有栖はクスリと笑う。

「なるほど。この組は学力が高い生徒が集められていると思っていたが、お前と比企谷を見る限りそうではないかもしれないな」

ま、否定はしない。

「学力だ？くだらねーな。そんなものには何の価値もない」

「それこそ残念な発言だ。学業の出来不出来は将来を左右する最も大切な要素だ。日本が学歴社会であることを知らないのか？」

「まあ間違っちゃいないな。しかし葛城、学力がある＝頭が良いって式は成り立たないな。事実、成績優秀のお前は龍園と組むって言う頭の悪い行動を取ったしな」

俺からしたら馬鹿極まりない。俺は自分のクラスだからまだしも、競い合いをする他クラスの人間が龍園と組むなんて馬鹿としか思えない。

「そうですね。マトモな思考回路を持っているなら龍園君と組むなんてあり得ませんね」

「くくつ、随分と言ってくれるな。ま、否定はしないが」

俺と有栖の罵倒とも言える言葉に葛城は険しさを増し、龍園は楽しそうに笑っている。

「……俺はお前達の非道さを許すつもりはない」

「あ？非道さ？身に覚えがねーなあ。具体的に教えてくれよ」

「お前の場合、身に覚えがあり過ぎてわかんないだけじゃねえのか？」

寧ろそっちの方が納得するわ。

「いやいや。本当に覚えがねえな」

「あつそ。ま、俺も身に覚えがないな。俺は体調不良でリタイヤしたただけだし」

「……まあいい。今回同じグループになったとしたら、ゆっくり話す時間もあるだろう」

そうは言うが葛城については脅威に感じない。寧ろ隣で微笑んでいる有栖の方が脅威に感じる。

「ではそろそろ各々の部屋に行きましょうか。それと八幡君。説明が終わったらデツキで星を見に行きませんか？」

有栖の言葉に葛城達の警戒心が増すが、有栖の目を見る限り企みの色はないので、試験云々は関係ないだろう。

「別に構わない。それよりそろそろ行く」

言いながら俺と龍園は指定された部屋に向かおうとするが、途中で雪ノ下が睨みながら口を開ける。

「見てなさい。今回の試験で貴方達を負かしてみせるわ」

「お前（テメエ）じゃ無理だ」

雪ノ下の言葉に俺と龍園は同時に返す。単純なペーパーテストなら勝てないが、この学校においては負ける気はしない。何故なら雪ノ下は傲慢だし、お利口さんだからな。

そう思っていると雪ノ下は睨んでくるがそれを無視して指定された部屋に入っていた。

「見てなさい。今回の試験で貴方達を負かしてみせるわ」

「お前（テメエ）じゃ無理だ」

雪ノ下の言葉に八幡と龍園はそう返し、指定された部屋に入ると一連の流れを見ていた有栖は小さく吹き出す。

すると部屋のドアを睨みつけていた雪ノ下は有栖を睨む。

「何がおかしいのかしら？」

「別に何でもありませんよ。さて、私達もそろそろ行つた方がいいでしょう」

有栖はそう言つてから杖をついてAクラスが指定された部屋に入る。

それを皮切りに廊下にいる生徒らも動き出すが先程の一件により空気は酷く重かつた。

## 説明

指定された部屋に入ると……

「おや、八幡君に龍園君もですか」

部屋にいたのはひよりとDクラス担任の茶柱先生だった。ひよりは同じグループで、茶柱先生は試験の説明担当だろう。

「早く席につけ」

茶柱先生にそう言われたので俺と龍園も席につく。同時に茶柱先生はプリントを片手に口を開ける。

「Cクラスの椎名、比企谷、龍園の3人だな。ではこれより特別試験の説明を行う。今回の試験では、一年生全員を干支になぞらえたグループに分けて行う。そして試験の目的はシンキング能力を問うものとなっている」

シンキング……考える力だよな。

「社会人に求められるものだが基本的には大きく三つに分けられる。アクション、シンキング、チームワークだ。この前の無人島生活では、チームワークに比重が置かれていたが、今回は思考力が必須となる試験だ。ここまでで質問はあるか？」

茶柱先生はそう言うが、今のところはないな。

全員が質問しないと茶柱先生は再度口を開ける。

「ここに居る3人は同じグループとなる。そして今この瞬間、別の部屋でもお前達と同じグループとなる生徒たちに同じ説明がされている」

やはりか。雪ノ下が同じグループとかマジで勘弁だな。まあ煩い由比ヶ浜がないだけ良しとするか。

「つまり各クラスから3人から5人ずつ、計13人から15人程度のグループが12個出来るという事ですか？」

「そうだ。そしてお前達の配属されるグループは『辰』。ここにそのメンバーリストがある。これは退室時に返却させるので必要性を感じるのであればこの場で覚えておくように」

渡されたハガキサイズの紙。そこにはグループ名と合計14人の名前が記載されていた。

Aクラス：葛城康平 坂柳有栖 丸井智也

Bクラス：安藤紗代 烏丸塔矢 神崎隆二 津辺仁美

Cクラス：椎名ひより 比企谷八幡 龍園翔

Dクラス：榊田桔梗 平田洋介 堀北鈴音 雪ノ下雪乃

ふむ……各クラスの主力が最低1人いるな。しかし一之瀬が居ないのか？ Bクラスのリーダーがいけないのは違和感を感じる。

「最初に言っておく。今回の試験では、大前提としてAクラスからDクラスまでの関係性を一度無視しろ。そうすることが試験をクリアするための近道だ」

その言葉に龍園の目が細まる。多分今のアドバイスは重要だと思う。

「今からお前達はCクラスとしてでなく、竜グループとして行動をすることになる。そして試験の結果の合否はグループ毎に設定されている」

竜ねえ……ドラゴングループかあ。

「特別試験の各グループにおける結果は4通りのみ。例外は存在せず必ず4つのどれかの結果になるように作られている。分かりやすく理解してもらうために結果を記したプリントも用意してある。ただし、このプリントに関しても、持ち出しや撮影は禁止されているからこの場でしっかりと確認するように」

3人分用意された紙は少しくしゃくしゃになっていたが、前のグループが読んだからだろう。

書かれてある基本ルールは以下の通りだった。

『夏季グループ別特別試験説明』

本試験では各グループに割り当てられた『優待者』を基点とした課題となる。定められた方法で学校に解答することで、4つの結果のうち1つを必ず得ることになる。

○試験開始当日午前8時に全員にメールを送信し、「優待者」に選ばれた者にはその事実を伝える。

○試験の日程は明日から4日後の午後九時まで行う（1日の完全自由日を挟む）。

○1日に2度、グループごとに所定の時間と部屋に集まり1時間の話し合いを行うこと。

○話し合いの内容はグループの自主性に全てを委ねる。

○試験終了後、午後9時半〜午後10時の間のみ、優待者が誰であったかの答えを受け付ける。なお、解答は1人1回までとする。

○解答は自分の携帯電話を使って所定のアドレスに送信すること。

○『優待者』はメールにて解答する権利はない。

○自身が属するグループ以外の解答は無効とする

○試験結果の詳細は最終日の午後11時に全生徒にメールにて伝える。

これが基本ルールで、その次には結果が書いてある。

○結果1：グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全員の解答が正解していた場合、グループ全員にプライベートポイントを支給する。優待者は100万プライベートポイント、優待者以外の者は50万プライベートポイントが支給される。

○結果2：優待者及び所属するクラスメイトを除く全員の答えで、一人でも未解答や不正解があつた場合、優待者には50万プライベートポイントを支給する。

結果1と2を見る限り優待者がメチャクチャ有利だな。とはいえ余りに優待者が得すぎるので裏があるはずだ。

「ここまでわからない点はあるか？問題ないなら裏をめぐれ」

茶柱先生にそう言われたので裏をめぐると結果3と4が記されていた。

○結果3：優待者以外の者が試験終了を待たずして答えを学校に告げ正解した場合、答えた生徒の所属するクラスのクラスのクラスポイントに50ポイントを得ると同時に、正解者には50万プライベートポイントが支給される。

また優待者を見抜かれたクラスはマイナス50クラスポイントのペナルティを受け、グループの試験は終了となる。なお優待者と同じクラスメイトが正解した場合、解答を無効とし試験は続行される。

○結果4：優待者以外の者が試験終了を待たずして答えを学校に告げ不正解だった場合、答えを間違えた生徒の所属するクラスは-50クラスポイントのペナルティを受け、優待者は50万ポイントが支給されると同時に、優待者の所属クラスは50クラスポイントを得る。答えを間違えた時点でグループの試験は終了となる。

なお優待者と同じクラスメイトが不正解した場合、解答を無効とし試験は続行される。

つまり優待者がわかればグループで協力しないで裏切っても良いって訳か。優待者がどのクラスにいるかはわからないが龍園と有栖は裏切りを考えているだろう。

「今回学校側は匿名性についても考慮している。試験終了時には各グループの結果とクラス単位でのポイント増減のみ発表する。つまり優待者や解答者の名前は公表しない。またお前達が望めばポイントを振り込んだ仮IDを一時的に発行することや分割して

受け取ることも可能だ。本人さえ黙っていれば試験後に発覚する恐れはない。もちろん隠す必要がなければ堂堂々とポイントを受け取っても構わん」

まあ公開したらカツアゲとかが起こる可能性があるからな。妥当な判断だ。

「3つ目、4つ目の結果は他の2つとは異なるものだ。よって裏面に記載した。これにて今回の試験の説明は完了する。質問はあるか?」

「優待者つてのはどうやって決めてんだ? ランダムなのか?」

「優待者は学校側が公平性を期して、厳正に調整している。それと禁止事項についてもよく目を通しておくように」

言われて確認すると、他人の携帯を盗んだり、他人の携帯を使ってメールしたりなど色々あるが、破ったら退学なのは重過ぎる。これならルールを破る奴は居ないだろう。

「お前達は明日から、午後1時、午後8時に指示された部屋に向かえ。当日は部屋の前にそれぞれグループ名の書かれたプレートがかけられている。また初顔合わせの際には室内で必ず自己紹介を行うように。室内に入ってから試験時間内の退室は基本的に認められていないのでトイレ等は事前に済ませていくように。万が一我慢できなかったり体調不良の場合にはすぐに担任に連絡し申し出るように」

茶柱先生はそう言って話を締めくくる。リストの名前は全部覚えたとし、ここにいる理由はもうない。

俺が立ち上がると2人も立ち上がり部屋を出る。すると同じタイミングで離れた場所にある部屋のドアが開き、有栖達Aクラスの生徒が出てくる。

向こうも俺達に気付いて話しかけてくる。

「そちらも終わりましたか。それと龍園君。今から八幡君と星を見る約束をしました  
が、龍園君もどうですか？」

その言葉に龍園は笑みを浮かべる。

「良いぜ。見に行こうか」

「待て坂柳。龍園と何を話すつもりだ」

龍園によって痛い目を見た葛城は険しい表情で有栖に話しかけるが、当の本人は涼しい表情だ。

「話すのではなく、星を見に行くだけですよ」

「この状況でそんな嘘が通じるとでも？」

「嘘ではありません。それに嘘だろうと葛城君には関係無いです。葛城君も龍園君と試験中にお話しましたよね？」

まあ怪しいと思っても葛城に有栖の行動を制限する権利はない。有栖がどう動こうと有栖の自由だからな。

「面倒だしほつといて行こうぜ。お前は精々無い知恵を絞り出してろ」

龍園はそう言つて一足先に歩き出す。

「八幡君、行きましようか」

「はいよ。ひよりも来るか?」

「いえ。3人で話す事もあるでしょうから。ですから明日以降に付き合つてくれませんか?」

「わかつた。じゃあまたな」

そう言つてから俺と有栖は龍園に続き廊下を歩いてからエレベーターに乗る。

そして目的の階層に到着したのでエレベーターを出て、真っ直ぐ歩きデツキに出る。

同時に満点の星空が広がつていて凄く美しい。東京じゃ絶対に見れないだろう。

「で?俺を誘つた理由は?まさか星を見る為だけに誘つたわけじゃないだろう?」

「やれやれ……無粋ですね。まあ良いでしょう」

有栖はため息を吐いてから龍園と向き合い……

「試験についてですが……」

## 優待者

「じゃあ話は終わったし俺はもう行く」

「ええ。こちらのお願いを聞いてくれて感謝します」

龍園は有栖と言葉を交わしてデツキから去る。よつて必然的に有栖と2人きりになる。

「しかし中々良い作戦だな。こうすれば作戦が失敗してもCクラスにもダメージが与えられるし」

「万が一もありまずし、龍園君が私より先に優待者の法則を見抜いた際の保険です。向こうも私が先に優待者の法則を見抜くことを危惧したから受けたのでしよう」

「なるほどな。で？他のグループについては？」

「一之瀬さんを始め、一部の生徒の作戦は気になるので直ぐに仕掛けはしません。しかし正規の解答時間が来る前に裏切るつもりです」

ま、それが妥当だろうな。とはいえ葛城派とBクラスは裏切らないだろうし、Dクラスは大半が雑魚だから安易に裏切りはしないだろうから問題ない。

「明日からは同じグループとしてよろしくお願いしますね」

「ああ。といつてもマトモに話す事は少ないだろうな」

葛城がどんな作戦で来るかは容易に想像出来るが、グループ内で話すのは余りないと思う。

「否定は出来ません。まあ詳しくは明日になってからです。それよりも本来の目的である星を見てのんびりしましょう」

そう言つて有栖は近くのベンチに座つたかと思えば手招きしてくる。こつちに來いつて事だろう。

そう判断した俺は特に逆らわずに有栖が座つている場所から少し離れて座る。が、同時に有栖はススッと距離を詰めてきて俺の手を握ってくる。それにより有栖の温もりが伝わつてきて心地よい。

反射的に握り返すと有栖はクスリと笑つて、握る力を強める。

「八幡君の手、柔らかくて温かいです」

「そりやどうも……しかしこうやつて平穩な時間を卒業まで過ごしたいもんだ」

「それは無理でしょうね。この学校は生徒に絶え間なく試験を与えるでしょうから。ところで八幡君は何故この学校を希望したんですか？」

「諸々理由はあるな。高い就職率や進学率の恩恵に預かりたい、3年間外部とのこと接触を断つルールを利用して家族や雪ノ下達と離れたかったかな。ま、後者については

失敗だ。まさか2人もこの学校に入学するとは予想外だった」

不幸中の幸いなのは葉山が入学しなかった事だろう。奴もいたら更に面倒な事になるだろうし、自主退学も視野に入れていたと思う。

「そうなんですか。本当に彼女達とは何があつたんですか？」

有栖は質問してくるか俺としては余り話したくな……っ！

そこまで考えていると嫌な予感がしたので、俺は口を閉じて指を口元付近で立て、有栖に静かにするように促す。

当の有栖は不思議そうに見ているが……

「ゆきのん星が綺麗だよっ！」

聞き覚えのある声が聞こえると納得したように頷き、そのまま気配を殺す。俺も同じように気配を殺す。真つ暗だから向こうが近づかない限り気付かれないだろう。

「そうね。まるで私達の勝利を一足先に祝福してくれているようだよ」

「だよね。ゆきのんは誰よりも優秀だからヒツキーやチビやヤンキーなんかコテンパンに出来るよ」

由比ヶ浜の言葉に有栖の額に青筋が浮かぶ。有栖って子供扱いされたら怒るんだよなあ。

「当然よ。それに堀北さんにも格の違いを教えてあげないといけないわ」

「だよねー。Dクラスで1番優秀なのはゆきのんなのに出しゃばりまくって……本当あり得ないし！」

どうやら雪ノ下と由比ヶ浜は堀北が実績を出す事が気に入らないようだ。昔から変わらないな。雪ノ下は依頼を受けてる時も自分が優秀だから何でも出来ると思い込んでいたし。

ま、雪ノ下がどう動こうが関係ない。雪ノ下にしろ堀北にしろ2人とも俺と同じグループだから容赦なく叩き潰せばいいだけだ。

「まあゆきのん。明日から頑張ろうね」

「ええ。そして私が屑3人にDクラスにいる理由は手違いである事を証明してみせるわ」

屑3人とは俺と龍園と有栖だろうな。有栖の頭には更に青筋が浮かぶ。冷静沈着な有栖に対してハッキリと怒らせるなんて、ある意味凄いな。

「ゆきのんなら出来るよ。ゆきのんがDクラスなら他の人は入学なんて出来ないに決まってるし！」

「ありがとう由比ヶ浜さん。由比ヶ浜さんも明日から頑張つて」

「うん！プライベートポイントを手に入れたいからね。須藤君の所為でクラスポイントが入らなくて遊べないし」

いやいや、先ずは借金を返せよ。聞いた話じやDクラスは由比ヶ浜を救う為に凄く貧乏状態らしいし。

「全くね。本当にあの屑3人は余計な事をしてくれたわね」

「本当だし！ちよつと突き飛ばされたくらいでチクるなんてマジあり得ない！」

いやいや。俺はあの件の目撃者だが、障害者である有栖に対してアレはないと思う。ぶつかって謝るならまだしも邪魔扱いしたからな。

まあ審議が終わった直後に訴えたのはDクラスに対する嫌がらせだけだ。

そう思う間にも2人は話を続けるが、大半が俺と龍園と有栖の悪口ばかりだった。もしくは雪ノ下が自分を優秀と言つて由比ヶ浜がそれを褒める感じだ。

暫くすると2人はデツキから去つて行く。それを確認すると有栖は満面の笑みを浮かべているに気付く。

但し額には大量の青筋が浮かんでいて、口元を引攣らせていた。相当キレてやがるな……

「決めました。今回の試験についてですがDクラスを潰します」

「お、おう……龍園には俺が報告しておく」

「お願いします。それとストレスを発散したいので抱きしめてください。八幡君に抱きしめられると安心するのはスパでの一件でわかりましたから」

言いながら有栖は俺の返事を聞く前に抱きついてくる。有栖の性格的に俺が抱き返すまで離れないだろう。

ため息を吐きながら俺は有栖をそつと抱きしめる。すると有栖は小さく吐息を漏らしながらも抱きしめる力を強めてくる。

「あつ……凄く、温かいです。ストレスが無くなっていくのがわかります……」

「どんだけ俺の身体は凄いなんだよ？正直言って信じられないんだが？」

そう思いながらも俺は有栖を抱きしめる。有栖の身体はひよりの身体よりもほっそりしているので壊れないよう丁寧に扱う感じで抱きしめる。

「八幡君、もう少し強くお願いします……」

「ああ……」

こうして俺は有栖の気が済むまで抱きしめてやるのであった。

翌日……

「そろそろ時間か……」

8時少し前、俺は船のデッキにして携帯を片手にメールが来るのを待っている。デッキには他の生徒もいるが全員が携帯を持って、尚且つ第三者に見られないように距離を置いている。

そして……

p i p i p i ……

デッキのあらゆる箇所から着信音が鳴り出す。俺もメールをチェックする。

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。グループの一人として自覚を持って行動し試験に挑んでください。本日午後1時より試験を開始いたします。本試験は本日より3日間行われます。竜グループの方は2階竜部屋に集合して下さい』  
どうやら俺は優待者じゃないようだ。

俺は即座に龍園とひよりに優待者ではない事をメールすると、送信し終わったタイミングで2人からメールが来る。それによれば2人とも優待者ではないらしい。

となると俺達竜グループにいるCクラスの間は優待者を外す以外にデメリットはないってことになる。まあ龍園の性格上、裏切りに行くだろうから優待者を見抜く必要があるが、中々面倒だろう。

(とりあえず様子見だな。龍園も最初の話し合いが終わるまでは様子を見るって言って

いた)

そしてそれは有栖もだろう。有栖も攻撃的ではあるが、実際に話し合いに参加して他クラスを伺うくらいの用心はあるし。

とはいえ様子見をしながらも優待者の法則を考える必要はある。メールには厳正なる調整と書いてあるが、普通厳正なる審査の結果と書くだろう。こんな回りくどい言い方を学校がしてきた以上、絶対に裏がある。

とはいえ今は出来ることもないし、1回目話し合いが終わったら龍園と話した方がいいかもな。

そう判断した俺は自室に戻る。とりあえず試験開始まで眠って英気を養って「あ、八幡君」おこうとしたらひよりと鉢合わせする。

「ひよりか。1時から一緒に頑張ろうな」

「はいっ。八幡君はどちらへ？」

「部屋に戻って寝て英気を養っておく」

「あ、じゃあ私も同伴して良いですか？」

それはつまり一緒に寝るって意味だよな？一緒に寝るのに慣れてるから今更どうこう言わないが少々大胆過ぎじゃね？

「……石崎達が居なかったらな」

そう返事をしてから船内に戻るがその5分後、俺は自分のベッドの上でひよりと抱き合っているのであった。

## グループディスカッション

12時58分。

1時から始まる試験が開始される2分前だが……

「はあ、はあ……済まんひより」

「いえ。私も気持ち良く思い、時間を忘れてました」

俺はひよりと船内の廊下を走っている。

何故こうしているのかというと、学校から優待者に関するメールが来た後に英気を養うべく、ひよりと一緒に寝たのだが目覚ましのセッティングを忘れ、目が覚めた時には試験開始5分前だったのだ。

ひよりは俺よりも早く起きていたらしいが、俺はひよりを強く抱きしめた上に起きる気配が全く無かったらしい。マジで申し訳ない事をしてしまった。

そう思っていると視界に俺達竜グループが使う部屋が見えてきたので、足を早める。

そしてひよりが一拍遅れて到着したのでドアを開けて中に入ると……

『ではこれより一回目のグループディスカッションを開始します』

ドアを閉めるタイミングでアナウンスが流れる。ギリギリセーフだな。

「ギリギリでしたね。お2人が遅刻するなんて何かあったのですか？」

有栖は不思議そうに聞いてくる。部屋にいる大半の生徒も訝しげな表情を浮かべている。例外は敵意を剥き出しにする雪ノ下とニヤニヤ笑いを浮かべている龍園だ。

前者はともかく、後者は遅刻の理由を理解しているだろう。つか起こせや。

「何って……ナニだろ？」

「黙れ龍園。殺すぞ」

「くくつ、怖えよ」

龍園は笑っているか一歩間違えればセクハラだからな？まあひよりを始めこの部屋にいる全員はわかってないようだが。

「……よくわからないけど、これで全員揃ったし先ずは自己紹介をしない？」

Dクラスの平田が戸惑いながらもそんな提案をしてくる。

「平田に賛成だな。この部屋に音声を拾うマイクがセットイングされてる可能性もある。自己紹介をしなかったらペナルティがあるかもしれないし自己紹介はしておいた方がいいと思う」

Bクラスの神崎は平田に賛成する。まあ自己紹介くらいはやっても不利にならないだろう。

これについて全員同じ考えのようで、全員で自己紹介をする。まあ名前だけしか言わ

ない寂しい自己紹介だが。

「では学校からの言いつけも聞きましたし、話し合いを始めましょうか。八幡君はこの試験についてどう思いますか？」

「……何故俺に聞く？」

「私がこのグループで危険と見ているのは龍園君と八幡君です。しかし龍園君の場合、話したい時に話す人間ですから」

その言葉に不穏な気配を感じたので、気配のした方向を見れば雪ノ下が有栖を睨んでいた。大方有栖に遠回しに「お前は眼中にない」発言されて気に入らないのだろう。

ともあれ無視しよう。

「そうだな……普通に考えたら結果1、全員で協力して優待者を当てるのが理想的だが、現実的じゃないな」

「まあそうですね。Dクラスの4人も裏切る可能性がありますね」

「だな。何せ由比ヶ浜や須藤みたいなゴミ屑がいて貧乏だしな」

有栖と龍園はそう言っているが、俺からしたらお前らの方が裏切るのは明白だ。

「その口を閉じなさい。由比ヶ浜さんの侮辱は万死に値するわ」

龍園の煽りに雪ノ下がキレるが龍園は鼻で笑う。

「俺は事実を言っただけだ。なあ鈴音、本気で上に上がりたいなら由比ヶ浜は切り捨て

「の方がいいと思うぜ？」

「気安く名前で呼ばないで。でも今のままだと切り捨てるまでもなく、由比ヶ浜さんが退学になる可能性は充分にあるわね」

堀北は淡々と返事をする。堀北は庇ってる様子はないし、本気でそう思っているのだろう。

「そんな事絶対にさせないわ」

「だったら由比ヶ浜さんを甘やかさないで。実際期末試験でも由比ヶ浜さんは全教科赤点ストレスな上、下から二番目の須藤君より全教科10点も劣っているのは問題よ」

馬鹿過ぎだろ由比ヶ浜。あんなもん授業をちゃんと聞いてれば50点は取れるだろうに。

しかし……

「大体由比ヶ浜さんには「おーい堀北。話が脱線してるからその辺にしろ」……こぼんつ。ごめんなさい、話を戻して頂戴」

由比ヶ浜への説教はグループワークが終わってからにして欲しい。AクラスとBクラスのは大半は戸惑ってるし。

「ああ。話を戻すが、結果1は実質不可能だから結果2〜4になるだろう」

「それについてだが発言しても良いか？」

「好きにしろ」

俺は有栖に勧められたから進行役をやっているが、誰かの発言許可について反対するつもりはない。

「俺は余計な話し合いをせず試験を終えることが最善だと思っている」

葛城が堂々と言う。それだけで奴の狙いがわかった。その際に大半の人間がポカンとした表情を浮かべる。

例外なのは有栖と龍園と堀北だ。有栖はつまらなそうにため息を吐き、龍園は嘲笑を浮かべ、堀北は鋭い目で葛城を見る。

俺を含めた4人は葛城の発案した作戦の意図、そしてその作戦における欠点を見抜いているな。

「どういう事かな？つまり優待者に勝ち逃げをさせるって事かな？」

平田はそう質問をする。

「この試験で絶対に避けたい結果は、裏切り者を生み出すことだ。裏切り者が正解しようとして失敗しようと、どちらにせよ敗北だ。だがそれ以外の答えの場合はどうなる？」

葛城は雪ノ下に質問をする。

「……マイナス要素がないわね」

「そうだ。結果1と2にはデメリットがない。クラスポイントが詰まることも開くこと

もない。そのうえ大量のプライベートポイントが手に入る。しかしさつき比企谷が言ったように結果1は現実的ではない」

ま、それについては否定しない。結果1を出すのはある意味優待者を見抜くより難しいだろう。何せこのグループにいるメンバーの中には裏切る奴が最低3人はいるからな。

「下手に話し合い、周囲の面々を優待者と疑い、過ちを犯す方がよほど危険だと思わないか？」

そうは言っているが……

「はっ。そんな風に言っているが単純にAクラスと他のクラスとの差が縮まる事にキッてるだけだろうが」

葛城の提案を龍園は鼻で笑う。しかし言っていることは間違いではない。葛城の作戦は全クラスがプライベートポイントを得する事は出来るが、クラスポイントが増えるわけではない。

プライベートポイントも重要ではあるが、1番重要なのはクラスポイントだ。

そのクラスポイントを増やしやしい特別試験を放棄するようなやり方はBくDクラスの人からしたら受け入れられないだろう。

卒業までに、特別試験が何回あるかわからないが、こんな作戦を続けたら最終的なクラスの位置も変わらない。

「そうね。チャンスを手振るわけにはいかないわ」

「堀北に賛成だ。Aクラスに勝ち逃げをさせるつもりはない」

堀北や神崎も賛成する。多分他のグループでも反対してる奴はいるだろう。

「なるほど、先に言っておくが俺は話し合いに応じるつもりはないし、他のグループにも話し合いに応じないように命じている」

葛城はそう言って連れの丸井と一緒に壁際に向かう。

「はっ、前回の試験で惨敗してビビっちゃったのか？」

「そう捉えてもらって構わない」

「その癖偉そうに命じてんのかよ？坂柳はどう考えてんだ？」

龍園はAクラスのリーダーの片割れの有栖に質問をする。

「葛城君がどんな行動をとろうが葛城君の自由です。しかし葛城君。行動には責任が伴う事をお忘れなく」

有栖からしたら勝とうが負けようが損はしない。勝てばクラスポイントが手に入って自分を支持する人間が増え、負けても作戦を立てた葛城が責任を負うからな。

「何でも良いが葛城。仮にこの試験で大敗して責任を取る事になっても退学だけは止めろ。お前が消えたら俺の資金源が無くなるからな」

例の契約書は葛城が責任者としてサインしているが、葛城が退学したら無効となるだろう。

「資金源？何の話をしている？」

神崎は訝しげな表情を浮かべている。と、ここで堀北が口を開ける。

「無人島試験でのAクラスとCクラスが結んだ契約の話ね。一体どんな契約を結んだの？」

「おや、堀北さんはどうやって契約を知ったのですか？」

有栖も興味を持ったようで堀北に話しかける。

「怪しいと思ったのはAクラスのベースキャンプに偵察に行った時に入り口付近にある2つのトイレを見たときね。BクラスもCクラスもDクラスも1つしか買ってないのに対して、保守派の葛城君が2つもトイレをかうなんて不自然と思ったのよ」

「洞窟の外にトイレを2つ設置したのですか？」

有栖は葛城に対して呆れた目で見ることが俺も同意見だ。大方薄暗い洞窟の中にトイレを設置するのが嫌だったのだろうが、詰めが甘過ぎる。

「確信を得たのは6日目。比企谷君が葛城君と連絡しているのを聞いたのよ」

「そういや俺は堀北が気絶したかと思って、その場で葛城と連絡を取っていたな。」

「正解だ。結論を言うとCクラスはAクラスに物資とクラスリーダーの情報を与えて、Aクラスは俺と龍園にプライベートポイントを与えた。ま、Aクラスはリーダー指名の際に誤字があったようで失敗して大幅にペナルティを食らっていたがな」

その言うのと葛城はギロリと睨んでくるがスルーする。偶然って怖いよなあ。

「そうなる」と金田もスパイだったという訳か。頬を腫らしていたのも嘘を信じやすくする為だな？」

「殴ったのは龍園だがな。というかさつきから話が脱線し過ぎだろ」

本来の話し合いについては碌にやってないぞ。

「そうですね。あ、私は話し合いに参加するので」

有栖は守りに入るなんて大嫌いだからな。

「じゃあ有栖を除いたAクラス抜きで話し合いをするが、この試験で重要なのは優待者でない人間をより多く把握することだ。それを踏まえて言わせて貰うが……」

一息……

「俺は優待者じゃないからな」

## 公開

「戯言を吐かないで」

俺が自分が優待者じゃないと言うと、間髪いれずに口を開けるのは雪ノ下だ。

「貴方のような屑の事だからグループを揺らがすつもりでしょう？」

「酷い言われようだな比企谷」

雪ノ下の言葉に龍園は楽しそうに笑うが、特に怒りは抱かない。

「ま、屑なのは否定しないな。とはいえ優待者じゃないのは事実だし信じて貰うように動くしかないな」

「信じて貰うように動く？屑を信じるなんて無理に決まってるじゃない」

雪ノ下は好き勝手言ってくる。別に悪口を言われても気にしないが、話の最中に一々割って入られたら面倒だし、黙らせるか。

「人が話してる最中に話するのはマナー違反だってわかんないのか？陽乃さんの出廻らし」

「なっ！ふざけないで！」

「事実を言っただけで喚くなよ。有栖だってそう思うだろう？」

「そうですね。陽乃さんと比べると全てが劣ってますね」

「っ！」

有栖の援護射撃に雪ノ下は射殺するような眼差しで睨む。

「おいおい。お前らが言うハルノってどんな奴なんだ？」

龍園がそんな風に聞いてくる。陽乃さんがどんな奴かだと？

「そうだな……」

「一言で言うなら運動神経抜群の有栖だな」

俺の中で陽乃さんのイメージはそんな感じだ。頭の良さにおいて有栖と陽乃さんはそこまで差はないと思うが、陽乃さんは運動神経も抜群だから総合力については有栖よりも数段上だろう。

「くはっ！そんな優秀な奴の妹がコレかよ?! 完全にアウトだしじゃねえか！」

龍園は楽しそうにケラケラ笑いながら雪ノ下を指差す。対する雪ノ下は龍園を睨むが、相変わらず睨む事しか出来ないようだ。

ともあれ黙ったのでよしとしよう。

「話を戻すが、優待者でない事をお前らには信じて貰う」

「……………どうやってっ？」

堀北が訝しげに尋ねる中、俺は携帯を取り出して操作してから堀北に投げ渡す。

対する堀北は携帯を受け取ると目を見開く。

「どうだ？優待者ではないだろ？嘘だと思うなら違うメールも見てもいいぞ。納得したらBのリーダー格の神崎に渡せ」

「……本当に優待者じゃないわね」

堀北は驚きながらも俺の指示に従って神崎に渡す。

言葉だけでは信じられないのは当然だが実際にメールを見せれば信じる……否、信じるを得ないだろう。

この試験、優待者でない人間からしたら裏切つて失敗する以外マイナス要素はないし優待者でない俺が見せても問題ない。

それに疑われている状態だと相手を探るのは難しいが、優待者でないとわかれば多少はマシになるだろう。

「では私もお見せしましょう。どうぞ確認してください」  
「俺のも見せてやるよ」

有栖と龍園も同じように携帯をDのリーダー格の堀北に渡す。それに対して堀北は訝しげな表情で質問をする。

「それで？貴方達が見せたからこちらも見せると？」

「いえ。あくまで自分が優待者でない事を証明するために見せただけで、そちら側に強

要しません。それ以前にそのような行為はルールの琴線に触れる可能性があります」

まあそうだな。脅したりして他クラスの携帯を見るのは御法度だ。

「ともあれこれで優待者は後1人ですね。これから少しずつ数を減らして優待者を炙り出していきましょう」

有栖が薄い笑みを浮かべながらそう言うのと部屋にはプレッシャーが生まれる。

そんな中、俺は部屋にいるメンバーの顔をさり気なく伺う。優待者は有栖の発したプレッシャーの中にいるが、もしかしたら僅かながらに挙動不審になるかもしれないからな。

そう思いながら他のメンバーを観察すると何人かが挙動不審となっているが、それらは優待者、もしくは裏切り者になる気満々な奴である可能性が高い。もちろん絶対ではないので全員に対して警戒をするがな。

俺は息を吐きながら観察を続けるが、誰が優待者か当てるのは結構難しいと思うのであった。

1時間後……

『1回目のグループディスカッションを終了します』

話し合いをしているとそんなアナウンスが流れ出す。同時に終始無言だった葛城は真っ先に部屋から出て行く。

「んじゃ出るか。またな」

言いながら俺も部屋を出る。とりあえずスパで休むか。話し合いの時に雪ノ下が偶に罵倒して苛々したし。

そう判断した俺は善は急げとばかりに早足で水着を借りてスパ施設に入る。ブルーブデイスカッションが終わったばかりだから誰もいないだろうし、ゆっくり出来るはずだ。

そしてそのままパパッと着替えて脱衣所を出て温泉に入る。ああ……やっぱ温泉は最高だな……

海を眺めながら暫く入っているとガラガラと音が聞こえてくる。どうやら俺と同じ事を考えている奴がいたようだ。

チラッと後ろを見ると……

「……比企谷」

そこにいたのは伊吹だった。競泳水着を着ているが俺を見ると目を細める。目には警戒の色があるが、俺なんかやつたか？

疑問符を浮かべていると伊吹も温泉に入る。といっても俺とは数メートル離れてる

が。

「ねえ」

「……何だよ？」

「龍園は何を考えてるの？」

「……いきなりどうした？」

「ついさつき龍園の奴が4時になったらアンタや龍園が泊まる部屋に來いってメールを送ってきたの。それも私だけじゃなくて同じグループの真鍋達にも」

つまり一斉メールか。そんでは來てなかつたが……

「多分アレだな。クラスメイトを集めて携帯のメールを確認するんだと思う。それで優待者が誰でどのグループに所属してるのかを突き止めて、優待者の法則を見抜く腹だろ」

俺にメールが來てないのは俺は既に龍園に携帯を見せたからであり、多分ひよりもメールを送ってないだろう。

「……なるほどね。禁則事項に接触しそうだけど、アイツならどうにでもなるね」

伊吹の言う通りだ。他クラスの生徒を脅したりして携帯を見るのは反則だが、同じクラスなら問題ない。誰も訴えさせないようにすればいいだけの話だ。そしてそれは龍園の十八番だ。

「で？行くのか？」

「……面倒だけどね」

伊吹は龍園を嫌ってはいるが龍園を王と認めているし、本人も優秀なのでCクラスではそれなりに地位がある。

「ま、頑張れ。そういやお前って何処のグループなんだ？」

「兎。一之瀬がいた」

へえ。一之瀬は兎グループみたいだが、やはり腑に落ちないな。竜グループにはどのクラスからも最低一人はリーダー格が出ていたが、Bのトップの一之瀬はいなかったし。

「ちなみにAクラスは全員だんまりか？」

「葛城が提案した案を実行してる」

おいおい。無人島試験で葛城にダメージを与えたつもりなんだが、まだ影響力が残ってるみたいだな。

ま、その影響力も今回の試験で殆ど失うだろうけど。

「こつちも質問して良い？」

「答えられる事なら」

「じゃあ聞くけど、比企谷は今回の試験で龍園に雇われたの？」

「意外だな。お前がそんな質問をすると思わなかった」

「言っとくけどCクラスの大半はアンタの事を不気味に思ってるからね」

だろうな。俺は基本的にひよりと龍園、龍園の側近以外からは避けられてるし。

とりあえず質問には答えるか。

「結論を言おうと今回は雇われてない。龍園と同じグループじゃなかったら仕事が来たかもしれないがな」

「……そで」

伊吹はそう言うため息を吐いてから俺から意識を逸らす。

実際のところ、俺が動くようなことはないだろう。動くとしたら俺ではなく龍園と有栖だ。

何せアイツらの行動次第で試験は今日の深夜に終了する可能性があるからな。

上手く決まればあらゆる方向に攻撃が出来て龍園と有栖からしたら大儲けであり、最終決戦のフィールドを作り上げるキツカケになる。

俺としても最終決戦はより良いフィールドで行いたいので、反対はしてない。

ついでに言うとか戦を遂行した後に見てみたいものもあるからな。

そう思いながら俺は肩まで浸かって身体がポカポカになるまでリラックスをするのであった。

## 一斉攻撃

夕方4時過ぎ、スパ施設を後にした俺がカフェで一杯やっている時だった。

P i P i P i ……

ポケットにある端末が鳴り出すので、ポケットから取り出して確認すると龍園からメールが来ていた。

それによればCクラスの優待者の名前と所属グループが判明して、優待者の法則を調べたいから来てくれと書かれていた。どうやら本当に全員の携帯を見たようだ。

俺は了解と返事を送ってからカップにある紅茶を流し込んでカフェを後にする。そしてそのまま自分の部屋に戻ると、龍園がひよりと一緒にテーブルを囲んでいた。

テーブルには3枚の紙が散らばっているが、その紙にはCクラスの優待者が所属するグループのメンバーの名前が書かれているに違いない。

「比企谷も来たか。早速だがお前も協力しろ。俺より先に優待者の法則を見抜いたら5万やる」

そう言われながらも俺は一番近くにあるリストを見てみる。

## 虎グループ

A クラス 赤山深夜 志村義人 真山涼子

B クラス 大筒木カグヤ 高畑哲二 羽柴京子 横山深夏

C クラス 香山雄二(優) 徳川洋二 湊加奈 山田アルベルト

D クラス 篠原さつき 松下千秋 三宅明人

## 蛇グループ

A クラス 赤坂智也 江原海斗 戸倉綾女 氷川夕子

B クラス 神谷弘毅 坂上龍弥 米倉悟

C クラス 石崎大地 九鬼正治(優) 富岡マサル 米谷翔子

D クラス 小野寺かや乃 長谷部波瑠加 王美雨

## 羊グループ

A クラス 青山絵里 佐藤恵美 吉岡拓

B クラス 乾雅彦 越前織 三輪佳恵

C クラス 金田悟 須山夏実(優) 時田剛健 松平賢二

D クラス 井の頭心 うちはミツミ 夏山仁 松原留姫

こんな感じで優待者のマークがついてある。これから法則を発見しないといけない。

無人島試験でも公平さは保たれていたから優待者の法則についても全クラス共通だろう。でなきや裏切り制度を試験に持ち込むわけないからな。

(さて、どうやって法則を発見するかだな)

俺も龍園達と同じように紙に目を通す。優待者の3人はクラスでもそこまで目立っていない人間で成績も悪くはないが優秀でもない。

その事から優待者は成績などで決めているわけではない。もし成績で決めるなら竜グループの優待者は有栖であるが、有栖の携帯は確認済みだ。

学校は優待者について厳正な調整で決めたとメールを送り、茶柱先生は試験をクリアするための近道としてAクラスからDクラスまでの関係性を一度無視しろと言った。

しかし関係性を無視しろと言っても、そう簡単に割り切るのは無理だ。何せ無人島ではCクラスが各クラスを引つ掻き回したから。

それは当然教師もわかっているはずだ。にもかかわらず関係性を無視しろと言うって事は関係性を無視して協力するって意味ではないだろう。

(リストは……クラスごとで名前順。この中にカギとかがあるのか?)

その時だった。

「あ、わかりました」

ひよりがそう呟く。同時に顔を上げると龍園がひよりに話しかける。

「わかったのか?」

「はい。茶柱先生は関係性を無視するように言っていました。アレは協力するという意味ではなく、リストに書かれたクラスを無視するという意味です」

言いながらひよりは虎グループの紙を持ってテーブルの中心に置く。

虎グループ

Aクラス 赤山深夜 志村義人 真山涼子

Bクラス 大筒木カグヤ 高畑哲二 羽柴京子 横山深夏

Cクラス 香山雄二(優) 徳川洋二 湊加奈 山田アルベルト

Dクラス 篠原さつき 松下千秋 三宅明人

「これについて、クラスが書かれた部分を消すと……」

ひよりはクラスに関する部分を消しゴムで消す。

すると……

虎グループ

赤山深夜 志村義人 真山涼子

大筒木カグヤ 高畑哲二 羽柴京子 横山深夏

香山雄二(優) 徳川洋二 湊加奈 山田アルベルト

篠原さつき 松下千秋 三宅明人

こうなった。同時に俺はひよりの言いたい事を理解した。  
これを名前順にすると……

赤山深夜、大筒木カグヤ、香山雄二、篠原さつき、志村義人、高畑哲二、徳川洋二、羽柴京子、松下千秋、真山涼子、三宅明人、湊加奈、山田アルベルト、横山実夏の順になる。

そこで虎は干支で3番目だから優待者は名前順で3番目の香山雄二となる。

同じように蛇グループと羊グループも調べてみると見事にマッチした。どうやらひよりが見抜いた優待者の法則は合っているだろう。

「良くやったひより。約束通り報酬は渡す」

言いながら龍園は携帯を操作するが、ひよりにポイントを送金しているのだろう。

「どうもありがとうございます」

「気にすんな。ただ俺としてはお前も比企谷みたいに俺の為に動いて欲しいがな」

「Cクラスの一員として最低限は協力します」

ひよりはそう返す。俺はポイントが欲しいから龍園に協力しているが、ひよりは俺ほど欲がないし、積極的でないので予想通りの返事だ。

「……まあ良い。とりあえず例の約束は果たせそうだし、今夜12時に動くぞ」

「了解。さて、どうなるんだか……」

俺は今後の事を想像するが、とりあえず試験最終日に有栖が由比ヶ浜を潰すのは間違いないと思うのだった。

それから数時間後、2回目のグループディスカッションが行われたが、特に実りのない話をして終了した。

数時間後……

「よし、そろそろ時間だ」

もうすぐ深夜0時になるあたりで龍園が部屋を出るので俺もそれに続く。そしてエレベーターに乗って下層へ向かう。当然例の作戦を実行するためだ。

その時だった。いきなり俺と龍園のポケットから音が流れ出す。咄嗟に携帯を取り出すと……

『猿グループの試験が終了致しました。猿グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

そんなメールが来ていた。猿グループは確かBクラスの生徒が優待者だったな。

「どのクラスだ？」

「DかAの葛城派だな。猿グループはBクラスの生徒が優待者だったからBは違う。C

クラスについては俺が指示してないし、坂柳派なら猿グループのみならず一斉にメールが来るはずだ」

まあそうだろうな。ともあれ猿グループの試験が終わった時点で俺達にはどうしようもないし放置しよう。

そう思っていると目的の階層に到着してドアが開く。と、同時にクラスメイト8人がいる。

「全員いるな。じゃあ行くぞ」

龍園がそう言って真っ直ぐ進むので俺達もそれに続き、あるドアの前で立ち止まる。

ドアには竜と書かれているが、現在俺達は竜グループがグループデイスカッションをする部屋の前にいる。

中に入ると有栖が椅子に座っていてその背後にはAクラスの生徒8人がいた。つまりこの部屋には俺を含め19人いるって事になる。

「お待たせしました。それでは予定通り優待者を攻撃しましょう」

AクラスとCクラスの生徒が向かい合う中、有栖がそう言う。

今回俺達が集まった理由は有栖が言ったようにCクラスと坂柳派が優待者を攻撃する為である。

何故同盟を結んで優待者を攻撃するのかという保険の為である。幾ら優待者の法

則を発見してもそれが正しいとは限らない。仮に優待者の法則を間違えた事を気付かずに裏切りまくって、大量のクラスポイントを失ったら大惨事だ。

しかし有栖らAクラスと組めば、成功した場合に得るポイントは減る代わりに失敗した場合に失うポイントも減るので最悪の事態は避けれる。

「その前に確認しておきたいのですが、猿グループの試験を終了させたのは貴方方ではないですよね？」

「信じてもらえるかはわからないがな」

「あくまで確認をしただけで疑ってはいませんよ。まあ猿グループはおいておきましよう。優待者の法則はわかっていますか？」

「クラスの部分を取っ払ってからグループメンバー全員を名前順にして、干支の順番と照らし合わせるんだろ」

「安心しました。どうやら私と同じ考えみたいです。では攻撃を始めたいと思います。が龍園君にお願いがあります」

「何だ？」

「はい。兎グループについてですが、攻撃するのは後日にしませんか？」

兎グループ……一之瀬がいるグループだな。有栖は多分一之瀬の動向を調べたいの  
だろう。

そして龍園は了承するだろう。他クラスのリーダーの情報は重要だしな。

「良いぜ。ちなみに竜グループも叩くか？」

「そうですね……明日のグループデイスカッションが終わってから叩きましょう。葛城君達の反応を見たいですから」

やっぱりコイツ、生粋のDSだな。

「わかった。そうなるって兎グループと猿グループを除き9グループあるが、どう攻撃する？」

まあそうなるな。優待者1人当てたら50クラスポイントだし、どっちが攻撃するかは重要だ。猿グループから裏切りが出なかつたら6グループずつ攻撃出来たんだがなあ……

「兎グループはこちらが攻撃します。竜グループについては明日のグループデイスカッションの最中にコイントスやサイコロで決めるのはどうでしょうか？」

「ま、妥当だな。じゃあどのグループを攻撃するか決めるぞ」

まあ大体予想はつく。互いに5グループずつ攻撃する以上……

CクラスはAクラスの優待者3人とBクラスの優待者1人とDクラスの優待者1人を叩き……

AクラスはCクラスの優待者3人とBクラスの優待者1人とDクラスの優待者1人

を叩く流れになるだろう。

「とりあえず虎、蛇、羊、犬グループはAクラスが攻撃します。Cクラスは鼠、牛、馬、鳥、猪グループを攻撃してください」

有栖は自分達が攻撃するグループの中にCクラスが優待者となっているグループを入れていたので優待者の法則を理解しているようだが、当然か。

有栖の提案に龍園は頷く。

「良いぜ。じゃあ攻撃を開始するぞ」

同時に龍園の背後から5人の生徒が前に出て、有栖の背後から4人の生徒が出る。

そして一斉に携帯を操作して……

『鼠グループの試験が終了致しました。鼠グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『牛グループの試験が終了致しました。牛グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『虎グループの試験が終了致しました。虎グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『蛇グループの試験が終了致しました。蛇グループの方は以後試験へ参加する必要はあ

りません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『馬グループの試験が終了しました。馬グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『羊グループの試験が終了しました。羊グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『鳥グループの試験が終了しました。鳥グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『犬グループの試験が終了しました。犬グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

『猪グループの試験が終了しました。猪グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

一気に9グループの試験が終了するのだった。

残り、2グループ

## 二回目のグループディスカッション

試験2日目の朝、俺は朝飯を食うべく船内を歩くが、どこもかしこも騒動に包まれていた。

まあ当然といえば当然だろう。12あるグループの内、10グループが試験を終わらせたのだから。しかも9グループについては殆ど同時だし。

試験結果が発表されたらもつと騒ぎになるだろう。龍園と有栖は他クラスの反応が楽しみだと笑っていた。大方龍園は堀北を、有栖は由比ヶ浜をこき下ろすつもりだろう。当の龍園は部屋で惰眠を貪っている。

俺はそのままエレベーターに乗って最上階に上り、そのままデツキに出てカフェに向かう。

そしてモーニングとしてサンドイッチとコーヒーを飲みながら辺りを見回すと相変わらず海しか見えない。島とか見えれば景色を見る意義もあるんだがなあ。

そこまで考えているとポケットにある携帯が鳴り出す。まさかとは思いが、誰かが早まって裏切ったのか？

ポケットから携帯を取り出して確認すると、メールは学校からではなく有栖からだっ

た。

内容を見ようとしたタイミングでもう一度携帯が鳴る。今度こそ学校からのメールと思いきや、ひよりからだった。

内心焦りながらも2人からのメールを確認すると、有栖からは……

『おはようございます。朝食を済ませたら一緒にプールに行きませんか?』

というメールが来て、ひよりからは……

『おはようございます。朝食を済ませたら一緒に過ごしませんか?』

殆ど同じ内容のメールだった。え?マジでどうしよう?タイミングからして2人もグルなのか?しかし返事をすれば良いんだ?

悩んだ結果、俺は……

「あつ……冷たくて気持ちいいですね」

「そうですね。では八幡君はエスコートをお願いします」

「へんへん」

俺は息を吐きながら有栖の手を取ると、ひよりは反対の手を握ってくる。ひよりを見ると微笑みを浮かべ俺をドキッとさせてくる。

結局、俺は2人とプールで過ごす選択をした。どっちかを切り捨てるのは残念だから無理だった。

そして俺は今、白いワンピース水着を着た有栖と薄水色のビキニを着たひよりに挟まれながらゆつくりとプールの中を歩いて2人をエスコートしている。

しかし周りの男子からの視線がマジで痛い、仕方ないだろう。ひよりも有栖もベクトルは違うが銀髪美女で、ルックスも1年女子の中では10本の指に入るのは絶対だ。

そんな2人が水着を着た状態で俺と手を繋いでいるのだ。男子陣が俺を睨むのは仕方ないのかもしれない。

まあ睨まれる程度なら気にしない。中学時代は睨まれ、嘲られ、陰口を叩かれていたからな。それにこの学校は暴力やイジメに厳しい迂闊に手を出す馬鹿はいないだろう。

そう思いながらも水の中を歩くが、ひよりと有栖の手の温もりだけはハッキリと伝わって胸が熱くなる。この温もりは高校に入ってから知ったが、とても気持ちが良い手放したくない温もりだ。

「そういえば坂柳さんに聞きたいことがあるんですが、良いですか？」

と、ここでひよりが小声で俺と有栖に話しかけてくる。小声って事は余り第三者に聞かせたくない事なのだろう。

「何ですか？」

一方の有栖も小声で話しかける。

「昨日、坂柳さんは龍園君と一斉攻撃しましたが、二学期以降はどう動くのですか？」

「それは龍園君から聞くように頼まれたんですか？」

「いえ。単なる好奇心です。龍園君から指示は受けてないです」

まあ受けてるなら馬鹿正直に質問なんてしないよな。

「そうですね。クラス単位で言うならCクラス以外はそこまで楽しめそうにないのでBクラスとDクラスを叩きますね」

前者はまだしも後者については由比ヶ浜がいるからだろうな。多分有栖は由比ヶ浜をとことん攻める腹のようだ。

「今までCクラスとは同盟を結んでいましたが、BクラスとDクラスを立て直せないくらい叩いたら同盟を破棄する流れですか？」

「そうなるでしょう。とりあえずCクラスがDクラスを叩くなら惜しみなく援助します」

「ただけ由比ヶ浜を叩きたいんだよ……まあ気持ちはよくわかるけどさ。」

そう思いながらも俺は2人の手を引いていると、プールサイドにてニヤニヤ笑う龍園が目に入る。プールから出た後に揶揄うのかと思いきや……

「石崎、アルベルト。飛び込め」

そんな指示を出す。野郎、身体の弱い有栖の近くで水飛沫を飛ばすのは洒落にならないだろうが。ひよりも運動神経が最悪だから万が一のこともあるかもしれない。

そう思う中、石崎とアルベルトが膝を曲げて飛び込み体勢に入るので……

「きゃっ……」

「あっ」

俺は反射的に有栖を抱き寄せて、ひよりの近くに動かし石崎達に背を向け、2人を守るような体勢となる。これなら俺が水を浴びるだけで済む。

そう思っている……

パシヤリ！

シャッター音が聞こえてくるので見てみれば、龍園は携帯をこちらに向けていて、石崎とアルベルトは膝を曲げているだけで飛び込む気配を見せない。

同時に俺は理解した。飛び込みによる攻撃はフェイクで本命は2人を守ろうとする俺の写真を撮ることだろう。

現に俺は2人を抱き寄せている。第三者からしたら中々ネタになる写真に見えるだろう。

(あの野郎……やってくれたな)

俺はニヤニヤ笑いを浮かべながら去って行く龍園に毒づいてしまう。いつかぶつ飛ばしてやる。

そこまで考えていると俺は有栖とひよりが俺の腕の中のことを認識する。

「わ、悪い……」

同時に2人の身体の柔らかさも伝わってきて、俺は顔を熱くしながら2人から離れる。

「いえ。私は気にしてないですから謝らないで大丈夫です」

「……そうですね。驚きはしましたが、私達を守ろうとしてくれたんですから寧ろ嬉しいです」

ひよりはニツコリ笑いながら、有栖は若干恥ずかしそうにそう言うってくる。とりあえず2人から拒絶されないで本当に良かった。

「なら良かった……しかし、少々目立ち過ぎたな」

見ればデッキにいる人の大半が俺達を見ている。そこで男子は殺意を、女子は興味を向けていて居心地は良くない。

「そうですね。騒がしいのは好きじゃないですから出ましようか」

言いながら有栖は自身の腕を俺の腕に絡めてくる。それにより歓声上がる。

「……何故腕を絡める」

「レディをエスコートするのは紳士の務めですよ?」

有栖はニツコリ笑いながらそう言うてくる。言っても振りほどけないだろうし、諦め  
「椎名さんもどうですか? 八幡君にエスコートされましょう」待てコラ。

内心有栖にツッコミを入れているとひよりが話しかけてくる。

「八幡君。私も良いですか?」

「……ああ」

期待の混じった目で見てくるひよりのお願いに対して拒否する選択はなく、俺は銀髪  
美女2人と腕を絡め合いながらプールから上がるのだった。

数時間後……

「よう比企谷。これからの話し合いも頑張「黙れ、死ぬ」くくつ、悪かったよ」

12時55分、俺は試験に参加するべく竜グループの部屋に向かうとその途中で龍園

と会った。会うなり龍園は笑いながら挨拶をしてくるが、俺はプールの件について不満がある。

おかげでもう学年中で二股と思われるし……

「はあ」

ため息を吐きながらも竜グループの部屋に到着するので中に入ると既に全員揃っていた。

『グループデイスカッションを開始します』

ドアを閉めると同時にアナウンスが流れる。すると最初に口を開けたのは葛城だった。

「比企谷に龍園。昨日の大量の裏切りはお前達の仕業か？」

やはりその質問が来たか。

「覚えがないな。普通に考えて有栖じゃないのか？」

まあ覚えがないのは嘘だけど。実際は龍園と有栖が協力して裏切ったんだ。

「私も違います。案外葛城君かもしれないですよ。無人島試験の汚名返上をする為に攻めている可能性はあります」

有栖はしれっとした表情で葛城に押し付ける。

「俺はリスクの大きい事はしない」

「そうですか。ならDクラスですか？クラスポイントを稼ぐべく攻めに出ることも不思議ではないですから」

「ありえるな。しかもプライベートポイントもどつかのビッチの所為で枯渇してるからな」

龍園の言葉に雪ノ下がギロリと睨むが龍園は我関せずだ。

「というか龍園。別に裏切る事はルール違反じゃないし、終わったグループに対する干渉は無理だから放っておこうぜ」

「ま、そうだな。それよりもこのグループの優待者を見抜かないとな」

龍園はしれっと嘘を吐くが、既にこのグループの優待者も把握している。Dクラスの榎田桔梗だ。

既に俺と龍園と有栖とひよりはDクラスを殺すギロチンの紐を持っていて、後は手を離すだけで優待者を仕留められる。

「といつても葛城君は黙っているでしょうから話を進ませるのは難しいでしょう」

だろうな。1人が明確な意思で拒絶していると話を進めるのはやり辛いし。

結果的にグループ内には沈黙が生じる時間が流れる。BクラスとDクラスは話すが、それが広がるようなことにならない。

「やれやれ……沈黙が生まれてしまいましたね。龍園君、暇ですからコインで遊びませ

んか?」

要するに有栖がこの状況に飽きたので締めに入るようだ。

「ふざけるのも良い加減にしなさい。試験中にコイントスなんて馬鹿にしているのかしら。」

食つてかかるのは雪ノ下だが、有栖は意に介すことはない。

「別に問題はないはずです。試験の説明では部屋を出ない限り生徒の自主性に任せると言われました」

「ルールが認めても常識を知らないのかしら? 貴女本当にAクラス?」

「それを言うなら常識どころかマナーも知らず、学力もない由比ヶ浜さんは本当に高校生なんですか?」

「ぷっ……」

俺は思わず吹き出してしまう。確かに由比ヶ浜の頭や精神は高校生としては論外だろう。

それにより雪ノ下は睨みつけるが、睨むことしか出来ない雪ノ下は怖くない。

「まあ私の行動に不満があるなら止めても構いません。しかし力づくなら即座に学校に訴えます」

言いながら有栖はコインを取り出して龍園に見せる。

「さて龍園君。花がある面を表、星がある面を裏としたらどっちにしますか？」  
「裏で」

龍園がそう言うのと有栖はコインを上投げる。コインはクルクルと回りながら上へ上るが、やがて重力に従って落下する。

そして有栖が腕を使つてキャッチするかと思えば、スルーしたのでコインは地面にぶつかつて跳ねる。同時に俺はイカサマと疑われないようにと有栖が配慮したのだと理解する。

結果、コインは星が書かれた面を見せてくる。つまり裏である。

「あら。残念ながら私の負けですね。おめでとうございます」

「良かったな龍園」

「おめでとうございます」

有栖が珍しく残念そうに呟き、俺とひよりが拍手するが当然だろう。当たればこちらが50クラスポイントを得て、外したらAクラスが50クラスポイントを得るのだから。

「ふんっ。コイントスの勝利程度で喜ぶなんて器が知れてるわね。貴方達がDクラスに居ないのも何かズルをしたに決まってるわ」

事情を知らない雪ノ下は嘲笑を浮かべている。他の連中はというと葛城や神崎や堀

北は俺達やコインを見比べて警戒丸出した。

その言葉により有栖の頭に青筋が浮かぶ。有栖って普段から雪ノ下と由比ヶ浜に喧嘩を売られているからか、2人に限定して沸点が低いんだよなあ。

同時に有栖は俺にアイコンタクトをしてくる。トドメを刺せ、と。

それを確認した俺は龍園に裏切って良いかとアイコンタクトをすると龍園は頷く。どうやら裏切って良いみたいだな。

「はあ……今回含めて後4回もグループデイスカッションをするって事はそれだけ長く雪ノ下の戯言を聞かないといけないのか。面倒だなあ」

正直雪ノ下の言動にはイラっとくるので挑発をする。

「私は間違った事は言っていないわ。貴方達がDクラスにいないなんてあり得ないし、試験をマトモに考えないで遊んでるのは事実じゃない」

「はっ。嘘つきを見つける簡単なクイズをマトモに取り組む必要はないな」

言いながら俺は携帯を取り出して学校に対して榎田桔梗と書いたメールを送る。

その直後、部屋にいる全員のポケットから音楽が流れ出す。

「あなた、まさか……!」

堀北が驚きながらポケットから携帯を取り出し、他の面々も携帯を取り出す。

『竜グループの試験が終了致しました。竜グループの方は以後試験へ参加する必要はあ

りません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい」

俺の携帯にもこんなメールがやってくる。これで残りは兎グループのみだ。

「おや、八幡君が裏切ったようですね」

「ふんっ。貴方みたいな屑が指名しても外れるに決まってるわ」

「何とでも言え。ともあれ終わったし、部屋を出ようぜ」

俺がそう言って退出を促すと優待者の法則を知っているメンバーは立ち上がる。

「待って。参考までに誰の名前を打ったのか教えてくれないかしら？」

堀北がそんな質問をしてくる。答えようか悩んだが、残りの兎グループの優待者はDクラスの生徒だから裏切るのは無理と判断して答えることにした。

俺は堀北に近寄り、彼女の耳に顔を寄せて……

「榎田桔梗」

堀北以外には聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「っ……………」

俺の言葉に堀北は目を見開いて驚きを露わにする。どうやらビンゴのようだ。

その反応を見て嬉しく思いながら俺は部屋を後にするのだった。

## 今後の方針

「これで残りは兎グループのみですが……早く結果発表の時間になってほしいです」

竜グループの部屋を後にして部屋に戻ろうとする中有栖は薄い笑みを浮かべながらそう呟くが、彼女は2日後にある結果発表を待ち望んでいるようだ。そして本格的にDクラス、というより雪ノ下と由比ヶ浜を叩きに行くのだろう。

しかし俺はどうこう言うつもりはない。雪ノ下にしろ由比ヶ浜にしろ、有栖に対する暴言は酷過ぎるからな。

「で？甚振るだけ甚振って退学がかかった試験になったら潰す腹か？」

「そのつもりです。雪ノ下さんは成績が優秀ですから難しいかもしれませんが、由比ヶ浜さんから簡単に消せるでしょう」

龍園の問いに有栖が小さく頷く。というか由比ヶ浜が退学したら雪ノ下はどんな理由でも俺に突つかかってきそうだな。

ため息を吐きながらも俺達はエレベーターに乗って宿泊する階層に向かう。

そして女子が寝泊まりする階層に到着すると有栖とひよりがエレベーターから降りて、エレベーターでは必然的に龍園と2人きりになる。

「さて、比企谷。今回の試験はウチとAクラスの勝ちが決まったが、今後お前はとうするべきと考える？」

「一応考えは2つある。Aクラスと正式に同盟を結んでBクラスとDクラスに宣言するべきだな」

俺は即答する。それがウチのクラスにとって最善だ。

「今回の試験……優待者の法則がわかれば大量のポイントが約束されるから、独り占めする為に他クラスと協力するのは極めて難しい」

「が、坂柳のDクラス、正確にはお前と同中の2人に対する恨みの強さが協力を漕ぎ着けた。その事から長期にわたる同盟を結ぶのは可能だな」

「ああ。だから今はこの関係を維持してDクラスを徹底的に叩く。それで浮上が出来ないくらい叩き潰したらAクラスと協力して一之瀬を叩く」

「で、Bクラスも浮上が出来ないくらいダメージを受けたらAクラスと同盟を破棄して一騎打ちにする、と？」

龍園の問いに頷く。もちろん他にも理由がある。今のCクラスはどう足掻いてもAクラスには勝てない。

龍園が有栖よりも弱いとは思ってないが、兵の質が違い過ぎる。大将の質が互角なら勝敗を決めるのは兵力だ。

だからAクラスと同盟を結んでから同盟を破棄するまでの時間をCクラスの兵の質を上げる事に使いたい。

「同盟については俺も戦術の1つに入れている。坂柳は由比ヶ浜と雪ノ下を恨んでるし、俺もDクラスをオモチャにしたいからな。で？もう1つは？」

龍園は改めてそう尋ねるが言ったら龍園は絶対に笑うだろう。コイツは面白いことを望むからな。

そう思いながらも俺は口を開ける。

「もう1つは……2千万ポイントを用意して有栖をウチのクラスに引き入れる」

瞬間、龍園の顔はポカんとする。しかしそれも一瞬で……

「ははっ！なるほどなるほど！ソイツは傑作だな！」

案の定楽しそうに笑う。

実際のところ、龍園と有栖が同じクラスに入ったら最強のDSクラスが誕生して、ウチのクラスの勝ちは殆ど確定するだろう。

龍園と葛城を比べると、総合力ならまだしも大将の質は葛城が遥かに劣っている。

仮に有栖がこの学校に通ってなかったら、十中八九Aクラスはウチのクラスに負けるだろう。葛城の戦術は龍園のそれとは相性が最悪で、兵の質で埋めれるとは思えない。

そんなCクラスに有栖を引き入れたらウチのクラスはAクラスの地位は確定だろう。

もちろん有栖がわざわざ下位のクラスに行く事を望むかはわからないが、有栖はAクラスの地位よりも刺激的な日々を望んでいるのは知ってるし、「面白そうですね」と乗ってくるかもしれない。

「発想は面白いな。だが上手くいくのか？俺も坂柳も誰かの下につくの望まないし、下手したら坂柳派と葛城派の争いよりも激しい争いが起こるぞ？」

「争えばな。だから争わなきゃ良いだけだ」

「あん？」

「有栖を引き入れたら、お前と有栖は不干渉でお互いにやりたいようにやる。んで他クラスに嫌がらせをする時だけ、今回の試験のように2人で協力して、「相手をどれだけ苦しめるか」を話し合って実行すれば良い話だ」

有栖は龍園と性格が似てるし、葛城以上にぶつかり合う可能性はあるのは否定しない。  
い。

ならば両者と関係が深い俺が、2人の緩衝材となる。日々の日常では2人が相互不干

渉の状態になるようにして、特別試験などが始まったら2人が協力出来るように動けば良い。

難しいかもしれないが成功すれば大量のポイントが入ってAクラスで卒業する事も不可能じゃない。

そしてこれと同じ戦術を有栖が使う事は出来ない。

俺と龍園は無入島試験で葛城を嵌めて、Aクラスは大ダメージを受けて、大半が俺と龍園と葛城を憎んでるだろう。

結果的に坂柳派が強くなったが、坂柳派リーダーの有栖が龍園をAクラスに引き入れた場合、生徒の不満が爆発して葛城派が巻き返す可能性が高く暴動が起こる可能性が高い。

逆に有栖がウチのクラスに来て場合、警戒はあるだろうが暴動はないだろう。

「なるほどな……面白い話だが、上手く実行出来るかわからないし、とりあえず保留だ」  
まあそうだろうな。言うは易し行うは難しだ。

「どの道今はAクラスと争うつもりはないし、橋渡しを頼むぞ」

「了解した。同盟の件は試験最終日まで話を済ませて、結んだら試験結果が発表された直後にBとDに宣言する感じか？」

「そんな流れで問題ない。残るグループは兎グループだけ、それも裏切るのはAクラス

だから俺達の仕事は終わりだ。ゆっくり休め。まあもしひよりと一夜を過ごしたのなら、俺と石崎とアルベルトは違う部屋で寝てやるよ」

「アホか。一夜を明かしたら一線を越えちまいそうだからな？」

ただでさえひよりと昼寝をすると、ドキドキを通り越してムラムラするのだ。夜一緒に寝たら理性を吹っ飛ばす自信がある。

「それはそれで面白そうだがな……あ、お前らの体液の臭いが充満したら堪らないから、やるなら帰ってから自室でやれ」

「お前マジでぶっ殺すぞ」

そんな生々しい話をすんじやねえよ。おかげで次にひよりと一緒に寝る事になったらマジで理性を吹っ飛ばしそうだし。

「悪い悪い」

俺の文句に龍園はヘラヘラ笑いながら謝罪する。殴りたい、あの笑顔。

内心ため息を吐きながらも俺はエレベーターから降りる。そして自室に行き、以前借りた水着を持ってビニールに入れる。

「何だ？ プールに行くのか？」

「スパ温泉の方だ。この時間帯は人が殆ど居ないから休むには最適だ」

自室でも休めるが、今はなんとなく1人になりたいし、ベッドを見るとひよりの事を考えてしまいそうだからな。

そのまま部屋を出てスパ施設に向かう。前は有栖や伊吹もいたが、今回もいそうな気がする。

そう思いながら男子更衣室に入り、パパツと水着に着替えて温泉に繋がっている扉を開ける。

そして扉を閉めると同時に隣のドアが開き……

「比企谷？奇遇ね」

そこから出て来たのは有栖の側近且つパシリである神室だった。

「神室か。一応聞いたくが偶然か？」

Cクラスでそれなりに地位が高い俺とAクラスリーダーの側近の神室が同じタイミングで温泉に入るのほは些か出来過ぎかもしれないし、もしかしたら有栖が俺に関する事で神室に命令しているのかもしれない。

「偶然。最近の坂柳はアンタに夢中になってるから自由時間が増えるの。だからリラックスとしてスパ施設に行ったらアンタがいたの」

そーいや最近是有栖と過ごす時間が多いな。まあ一緒に過ごす相手が少ないってのもあるけど。

(しかし神室のスタイル、抜群だな)

神室は紫色のシンプルなビキニを着ているが、出るところは出ていて、引き締まっているところは引き締まっていて、手足もスラっとして理想的なスタイルだ。

ひよりや有栖は小柄故に可愛らしさがあるが、神室は綺麗さがある。

とはいえガン見したら神室に悪いし目を逸らす。

「そうか。それと神室。俺達Cクラスは有栖がリーダーとなつたらAクラスと同盟を組みたいから、温泉から出たら有栖に伝えてくれないか？」

「わかった。坂柳も同盟を考えてるみたいだしね」

そんな風に会話をしながらも俺はジャグジーに入る。既に何度も足を運んでいるが、ジャグジーに入りながら外を見るのは疲れが癒されるんだよなあ。

対する神室も同じ考えのようで俺に続く形でジャグジーに入ろうとするが……途中で足を滑らせてこつちに倒れる。

だから俺は急いで身体を起こして神室を受け止める。同時に重みを感じ神室の手が俺の背中に回される。

「大丈夫か？足を攣ったりしてないか？」

「ん……大丈夫。アンタこそ怪我してない？」

「俺は大丈夫だ。それよりも大丈夫なら離れてくれないか？」

咄嗟のことだから仕方ないが、現在俺は神室と抱き合った状態となっている。

ひよりや有栖とはよく抱き合っているから多少は慣れたが、神室とは特別棟で1回だけしか抱き合っていないので妙にドキドキしてしまう。

これを有栖に見られたら、からかわれるのはめいはいは「おや、中々面白い光景ですね」  
……oh

後ろを振り向けばワンピース水着を着た有栖がクスクスと笑っていた。

## 抱擁

「まさか私や椎名さんだけでなく、真澄さんも抱きしめるとは思いませんでしたよ」

有栖は杖をつきながらゆつくりとこちらに歩いてくる。同時に神室はため息を吐きながら俺から離れて口を開ける。

「意図的に抱き合つた訳じゃないから。私が転びそうになつたところを助けて貰つただけだから」

「まあそうでしょうね。からかつてすみませんでした」

そう言うつてから有栖もジャグジーに入る。今更だが見た目が幼い有栖とジャグジーに入つてゐるつて犯罪臭がするな……

「ところで八幡君にお願ひがあります。私を抱きしめてください」

「いきなりだな。なんかあつたのか？」

「はい。八幡君や龍園君と別れた後に部屋に戻ろうとしましたが、途中で由比ヶ浜さんに会つてしまい……まあ後は察してください」

「オーケー、察した」

大体予想はついた。大方由比ヶ浜が昨日の一斉裏切りについてギャーギャー騒いで、

その際にまた有栖をガキ呼ばわりしたのだろう。

そこでストレス発散をするべく温泉に向かったら俺達と鉢合わせしたわけだ。

「ですから抱きしめてストレスを発散させてください」

「いや神室がいるんですけど？」

神室はどうでも良さそうに俺達を眺めている。興味がなさそうだが、だからといって

ここで抱き合うのは結構恥ずかしい。

「私は気にしませんよ？」

「俺が気にするんだよ」

「わかりました。では恥じらいを持たないで済むよう、もう一度真澄さんを抱きしめて

ください」

いやそつちに行くのかよ。普通神室を立ち退かせる選択肢を選ぶんじゃない？

「別に私が出て行けば良いだけじゃないの？」

「それでは面白くありませんから」

うん、絶対にコイツはそう言うと思った。有栖は堅実な勝利には興味がなく、ただ面

白い事を優先するからな。

対する神室はため息を吐いてから俺に近寄る。どうやら俺に抱きしめられる選択を

したようだ。

「本気か？」

「逃げたら後で絶対に面倒な事になるから」

ですよねー。

「ふふっ。私の事をよく理解してますね」

「あんたを詳しく知ってる人なら誰でも理解出来る。それより……」

神室はその言葉を最後に俺の正面に立つ。それを見た俺は息を吐いてからそつと神室を抱きしめる。

「……あ」

すると神室はクールな表情に似つかわしくない吐息を漏らす。そんな神室を抱きしめるとドキドキしてしまう。

「どうですか真澄さん。気持ちいいですか？」

「別に……まあ何となく落ち着くわ」

神室はそう口にするが、俺の抱擁ってそんなに良いのか？ 実際ひよりや有栖は抱きしめられる事を望んでいるから良いのかもしれないが未だに半信半疑だ。

「では真澄さんも八幡君の背中に手を回して、八幡君の肩に顎を乗せてください」

と、ここで有栖はとんでもない事を言ってくる。抱きつくだけでドキドキしているのに抱き合えと言ってきたのだ。

これはマズインじゃね？、と思っただが……

「はっはっ」

神室はため息を吐いてから俺の背中に手を回し、俺の肩に顎を乗せてさつきよりも密着体勢となる。

ヤバイ……物凄くドキドキしてしまう。有栖の奴、恥ずかしがっている俺を見たいのは容易に想像できるがドS過ぎだろ？

「んっ……」

思わず腕に力を込めると、神室は身を振り、結果密着度が上がる。

理性の壁にヒビが入っているのを自覚しながらも暫く抱き合っていると……

「そろそろ離れて良いですよ」

遂に有栖がそう言ったので神室の背中に回していた手を下ろすと、神室も同じ仕事をして俺から離れる。当の本人は気恥ずかしそうにチラチラとこっちを見ていて、ドキドキが止まらない。

「真澄さんも満足したようですよ、次は私を抱きしめてください」

そう言つて有栖は俺に近寄ってくるので、俺は有栖を引いてそのまま抱きしめる。

「あっ……もう少し強くお願いします」

腕の中にスッポリ収まった有栖は吐息を漏らしながらそう願うので少しだけ抱きし

める力を上げる。

「あんっ……凄く気持ちいいです。さつきまで溜まっていたストレスが無くなっていくのがわかります……」

有栖はそう言っただけ抱きしめる力を強めて、自分の頬を俺の頬に当ててスリスリしてくる。

その際に神室がゴミを見る眼差しで見ているが、側から見たら俺はロリコン扱いされても仕方ないので甘んじて受け入れる。

「それにしても八幡君は凄いですね」

「何がだよ？」

「メンタルの強さですよ。私は由比ヶ浜さんや雪ノ下さんと1分関わっただけでストレスが溜まって仕方がないのに、中学時代にずっとあの2人と関わっていた八幡君は凄くと思います」

「あ、それは同意。あの2人と何年も関わってられる比企谷のメンタルは坂柳や龍園より遥かに強いんじゃない？」

「否定はしない。つか今は大分マシだからな。中学時代にはあの2人に加えて、更に3人がギャーギャー騒いでたんだよ」

小町と独神と葉虫の3人がな。つまり今は当時の4割程度だから大分マシになって

いる。

「それは大変ですね。しかし八幡君は何をやったのですか？噂では文化祭で実行委員長に暴言を吐いたり、修学旅行で告白の邪魔をしたと言われてますが、事実なんですか？」

「事実だな。まあ全部あの2人の尻拭いでやっただけだ」

そう前置きして文化祭と修学旅行で会った事を全て説明する。もちろん私情は一切挟んでない。

全てを聞いた有栖と神室は意外そうに俺を見てくる。

「意外ですね。八幡くんが受ける必要のない依頼を受けるなんて」

「というかアンタもそんな無茶苦茶依頼を何度も引き受けるって馬鹿じゃないの？」

「そうだな。それに関しちや否定は出来ない」

中学時代の俺は本当に馬鹿だった。何でどうでも良い奴等の為に身を粉にして働いていたのだろうか？

「しかし1番の愚か者は間違いなく由比ヶ浜さんでしょう。文化祭では雪ノ下さんが受けた依頼に八幡君を巻き込み、修学旅行では率先して依頼を受けたのに何もしなかったにもかかわらず、尻拭いをした八幡君を悪く言うのですから」

だよな。確かに俺にも悪い点はあるが、由比ヶ浜に比べたら遥かにマシだろう。

またそれを差し引いてもアイツは俺を常日頃からキモいキモい言うし、有栖の事をd

i s r しな。

「不愉快になる話をして悪かったな」

「私が頼んだのですから気にしないでください……とはいえ、こちらとしても再度苛立ちが生まれてきました。ですから八幡君にお願いがあります」

「何だ？」

「今から私は八幡君に背を向けて膝の上に乗りますから、後ろからあすなろ抱きをしてください」

待てコラ。どうしてそうなった？

そう突っ込もうとするが有栖の方が一步早かった。俺の背中に回した手を下ろし、そのまま回れ右をして俺に背を向けてくる。

「ではお願いします」

どうやら引く気は無いようだし、こっちが折れるしかないようだ。

そう判断した俺はそのまま有栖の背中にくつつき、そつと首に手を回す。

「っあ……温かいです」

背後から俺に抱きしめられた有栖は小さく動き、俺をくすぐってくるが、俺も有栖の温もりを心地良く思っている。

「やっぱり八幡君の抱きしめ方はクセになりますね……気持ちいいです」

「そりやどうも。ところで有栖。後で話があるんだが、良いか？」

「Cクラスとの同盟の話ですか？」

「話が早いな」

「私も温泉から出たら話をしようと思いましたが。私としては同盟に賛成です」

「わかった。じゃあ今度改めて話し合いの場を作ろうな」

「はい……ですが、今は私を抱きしめる事だけに集中してください」

「はいはい」

そう言うってから俺は有栖を抱きしめる力を強めてお互いの温もりを感じ合うのだった。

その後、神室にロリコン呼ばわりされたが、それについては客観的に見たら否定出来ないの甘んじて受け入れるのであった。

## 試験終了

試験最終日。

無人島の時とは違い、船の中は娯楽だらけだから進む時間は早い。

まして兎グループ以外のグループは試験を終了しているからな。

そんな中、俺はカラオケボックスにいた。隣には龍園がいて向かい側には有栖と神室が座っている。

壁にある時計を見れば時刻は8時丁度。つまり兎グループは今から最後のグループデイスカッションをするのだ。

「いよいよ最後の話し合いだが、いつ裏切らせるんだ？」

龍園が向かい側に座る有栖に話しかける。兎グループを叩くのはAクラスと決めている。

「一之瀬さんが作戦を提示したら即座に裏切るように指示しています。ずっとトランプをしているようですが、なんらかの作戦を考えているでしょうから」

「ま、負けは決まっているがな。それより例の件については？」

龍園がそう言って有栖を見ると有栖は頷く。

「はい。私達AクラスはCクラスと長期的な同盟を結びます」

そう言う事でAクラスとの同盟が成立する。

「決まりだな。期間はBクラスとDクラスが再起不能レベルになるまでで、Dクラスについては再起不能になっても手を休めずに攻撃するんで良いんだな？」

「はい。龍園君達がDクラスを叩くというなら惜しみなく支援します」

「はっ。お前よっほど由比ヶ浜が嫌いなんだな」

「ええ。大嫌いです」

だろうな。散々チビチビ言われガキ扱いされているんだ。これで有栖が由比ヶ浜を嫌ってないならDMとしか思えない。

そこまで考えていると携帯が鳴る音が聞こえてくる。同時に有栖はポケットから携帯を取り出す。

「おや、兎グループにいる森重くんからですね」

言うなり有栖はテーブルに携帯を置きスピーカーモードにして電話に出る。どうやら会話の内容を聞かせてくれるようだ。

「もしもし。どうしましたか森重君？」

『Bクラスが携帯を見せ合う作戦を提示しましたが、裏切ってもいいですよね？』

まあそんな作戦を提示したら裏切るしかないな。

その際に電話の向こう側から騒ぎ声が聞こえてくるが有栖はそれを無視する。

「お願ひします。優待者はわかっていますね」

確か兎グループの優待者はDクラスの軽井沢だったな。

『大丈夫です。では失礼します』

通話が切れる。それから直ぐに部屋にいる全員の携帯が鳴る。見るまでもなく、兎グループの試験の終了に関するメールだろう。

「これで全ての試験が終了しました。今回はご協力ありがとうございました」

「俺としてもメリットがあつたから問題ない。それと坂柳、同盟についてはいつ発表するんだよ?」

普通同盟は秘密裏に結ぶのが得策だ。堂々と発表したら向こうも警戒するだろうか。

しかしそれはあくまで普通ならの話であり、今回は普通じゃないから龍園はそんな提案をする。

「試験結果が発表される際ですね。それまでに掲示板にメッセージを残します。そうですね……船のデッキ中央にて1年生全員で結果を見る……という感じで大丈夫ですか?」

「問題ないな。その際にBとDの悔しそうなツラ見て、その後に重大発表でお前の大嫌

いな由比ヶ浜にプレゼントをする流れだな？」

「ええ。最高のプレゼントをあげる予定です」

有栖の顔には愉悦の色がある。由比ヶ浜は怒らせてはいけない人間を本気で怒らせてしまったようだ。南無

内心由比ヶ浜に合掌しながら俺は今後の予定を話す龍園と有栖を眺めるのだった。

数時間後……

「いよいよだが……俺の立ち位置変えてくれないか？」

俺は龍園にそう呟く。

現在は試験の結果発表5分前で、俺達Cクラス全員は掲示板に書かれたメッセージに従ってデッキ中央に向かっている。

それだけなら問題ないが俺の立ち位置は龍園の真後ろ、そこで俺の後ろには石崎やアルベルト、伊吹や金田にひよりなどCクラスの主力が並んでいる。

これだと俺が他クラスから龍園の右腕と思われて目立ってしまう。

「諦めろ。大体お前は他クラスの雑兵ならともかく、主力からは脅威と見られてるんだから今更だ」

「へいへい」

ため息を吐きながらもデッキ中央に向かう。そこには既に他クラスの生徒が揃っていた。

「Cクラスも来ましたか。招待に応じていただきありがとうございます」

有栖はあたかも打ち合わせをしてないかのように振る舞う。

「Aクラスのリーダー様からの招待だからな。随分と自信があるようだ」

「どうでしょうね。ただこの集合が良い時間になる事を祈っています」

そう言つて有栖は意味深な笑みをBクラスとDクラスの方に向ける。それに伴う形でBクラスとDクラスの生徒は身構える。

「結局坂柳さん達は何をしたのかな？最後の話し合いで森重君が裏切りの許可に関する電話をしたってことは、やっぱり初日の深夜の一斉メールは坂柳さんの仕業なの？」

兎グループに所属する一之瀬は落ち着いた表情で有栖に尋ねる。実際はAクラスとCクラスが合同で裏切つたが、そう判断してもおかしくない。

「ふふっ……結果を見れば自ずとわかりますよ」

有栖は優しい微笑みを浮かべる。

同時に遂に午後11時を迎え、俺達の携帯に一齐にメールが着信されるので見てみる。

そこには……

- 鼠——裏切り者の正解により結果3とする
- 牛——裏切り者の正解により結果3とする
- 虎——裏切り者の正解により結果3とする
- 兎——裏切り者の正解により結果3とする
- 竜——裏切り者の正解により結果3とする
- 蛇——裏切り者の正解により結果3とする
- 馬——裏切り者の正解により結果3とする
- 羊——裏切り者の正解により結果3とする
- 猿——裏切り者の正解により結果3とする
- 鳥——裏切り者の正解により結果3とする
- 犬——裏切り者の正解により結果3とする
- 猪——裏切り者の正解により結果3とする

以上の結果から本試験におけるクラス及びプライベートポイントの増減は以下とす

る。

c1、prという単位がポイントの後ろについてあるが、これはそれぞれクラスポイントとプライベートポイントの略称である。

Aクラス……プラス100c1 プラス250万pr

Bクラス……マイナス150c1 変動無し

Cクラス……プラス150c1 プラス300万pr

Dクラス……マイナス100c1 プラス50万pr

結果が出てBクラスとDクラス、Aクラスの葛城派らしき生徒からは騒めきが生じる。

これを見れば馬鹿でもAクラスとCクラスが足並みを揃えて協力し合ったのがわかるからな。

この試験は優待者の法則を見抜けたら独り勝ち出来るにもかかわらず、協力し合ったのが信じられないのだろう。

ともあれクラスポイントは大きく動いた。

無人島試験が終わった時点の各クラスのポイントは……

Aクラス 1074ポイント

Bクラス 884ポイント

Cクラス 686ポイント

Dクラス 175ポイント

だが、今回の優待者当て試験により……

Aクラス 1174ポイント

Bクラス 734ポイント

Cクラス 836ポイント

Dクラス 75ポイント

となる。それにより俺達CクラスはBクラスに上がり、一之瀬のクラスはCクラスに落ちる。

「それにしても猿グループの裏切り者はDクラスの生徒ですか。これは油断が出来ませぬね」

結果を見た有栖はそう言う。猿グループの裏切り者が誰かは知らないが、誰よりも早く裏切ったのだから警戒するのは必然だ。

「……結果を見るにAクラスとCクラスは手を結んだようね。でもどうして手を組んだのかしら？どっちが法則を見抜いたのかは知らないけど、独り勝ちする事も出来たはず

よ

堀北がそう口にする。まあ普通に考えたらな。

「確かに独り勝ちは出来たかもしれないが、単純にBクラスとDクラスに嫌がらせをしたかっただけだ」

堀北の問いに龍園が即答する。まあ有栖は違う理由だがな。

と、ここでギャーギャー叫ぶ奴がいた。

「ぶぎけんなし！アンタ達の所為でポイントが減ったじゃん！マジキモい！」

由比ヶ浜だった。怒りを露わにしてガキみたいにギャーギャー騒ぐ。

同時に有栖は冷笑を浮かべる。

「ふふっ。全ての元凶がよく騒ぎますね」

「はあ?!わけわかんないこと言うなしチビ！」

由比ヶ浜の罵倒に有栖の額に青筋が浮かぶ。しかし有栖は声を荒げることなく、口を開ける。

「ならば改めて宣言しましょう。私達Aクラスは由比ヶ浜さんを攻める為にCクラスと

「長期的な同盟を結びました」

## 方針

「ならば改めて宣言しましょう。私達Aクラスは由比ヶ浜さんを攻める為にCクラスと長期的な同盟を結びました」

有栖の宣言に対してデツキには沈黙が生まれるが、それも一瞬ですぐに騒めきに変わる。

そんな中、当事者である由比ヶ浜は真っ赤になって叫び出す。

「どういう意味だし?! 私別に悪い事なんかしてないじゃん!」

その言葉に有栖の額に青筋が更に浮かび、龍園は高笑いする。

「くははっ! マジで言ってるのかよ! お前の頭はどんだけおめでたいんだよ?! 最高だ

……ゴホッゴホッ!」

龍園は笑い過ぎて噎せてしまっている。まあ気持ちはわからんでもない。

「ほう……散々私を子供扱いしたり、八幡くんを罵倒しておきながら悪くないと?」

「ヒツキーがキモいのは事実じゃん! アンタだつて須藤君に突き飛ばされただけで学校にチクるなんてガキなの?!」

その言葉に対して有栖の額には更に青筋が浮かび、龍園は笑い転げ、それ以外の生徒

の大半は信じられないような眼差しで由比ヶ浜を見る。

「ええ。私は子供ですから学校に報告しましたし、子供ですから貴女に馬鹿にされた仕返しをする為にCクラスと同盟を結びました」

「そういうことだ。しかしDクラスの大半は不憫だなあ。由比ヶ浜の言動の所為でこれからずっと俺のC……いや、Bクラスと坂柳のAクラスから攻撃を受け続けるんだからよ」

「ちよつ……由比ヶ浜はともかく俺達は無関係だろ！」

Dクラスの生徒はとぼつちりを受けたくないとばかりに叫び出す。然しその程度の意見で有栖や龍園が止まるわけがない？

「残念ですが由比ヶ浜さんを叩くとなればDクラスそのものを叩くのが一番効率的ですから諦めてください」

「恨むんだつたらAクラスのリーダーと俺が持つ最強の駒をd i s r i まくった由比ヶ浜を恨むんだな」

瞬間……

「ふざけんなよ由比ヶ浜！」

「あんたの所為で今後が地獄じゃない！」

「中間試験の時といい、疫病神だな！」

「今すぐ退学しろ！」

Dクラスの生徒の大半は由比ヶ浜を怒鳴る。中学時代は人気者であった由比ヶ浜からしたら悪意に晒されるのは耐えられないだろう。

それに対して雪ノ下や平田が由比ヶ浜を庇うように立つが多勢に無勢だ。

「それとB……つと、Cに落ちたんだったな。Cクラスについても由比ヶ浜がいるDクラスと同盟を結んでるし、徹底的に叩いてやるよ」

龍園の言葉に元BクラスのCクラスの生徒の大半も、Dクラスに怒鳴られている由比ヶ浜を睨む。あからさまに怒鳴ってはないが敵意は充分にある。

「ふふっ。一学期を楽しみにしてください。では私達はこれで失礼します。呼び出しに応じていただきありがとうございます」

有栖はそう言ってから一礼してから、配下を引き連れてゆったりとした足取りでデッキを後にする。

「俺達も行くぞ。今後について話を……じゃあな、雑魚ども。二学期を楽しみにしてな」

龍園は一之瀬率いるCクラスの連中にそう言ってから歩き出すので、それに続く。

その際に顔を覆って蹲っている由比ヶ浜が印象的だった。

「責任取れよ疫病神！」

「アンタの所為でクラスポイントが減ったんじゃない！」

「お前なんかの為にポイントを払うんじゃないぞ！」

坂柳のグループと龍園のグループが去つてからもDクラスの生徒の大半は由比ヶ浜を罵倒する。

「落ち着いて！これ以上揉めても何も変わらないよ！」

「由比ヶ浜さんを悪く言わないで！」

「流石にこれ以上は言い過ぎだから落ち着いて」

平田と雪ノ下に加え、一之瀬も止めに入るが罵倒は止まらない。

元々由比ヶ浜は中間試験での一件でクラスで嫌われていたが、人気者の平田や櫛田が何とか場を収めていた。

しかし今回Aクラスと元Cクラスが同盟を結んだ理由が、由比ヶ浜という事もあり怒りが爆発したのだ。

由比ヶ浜が罵倒される光景を綾小路清隆は離れた場所からいつもの無表情で眺めている。

そんな綾小路の近くにDクラス担任茶柱がやってくる。

「激しい騒ぎ声が聞こえてきたから来てみたが、何があつた？」

「Aクラスと元Cクラスが同盟を結びました。理由は由比ヶ浜と由比ヶ浜が所属するDクラスを叩く為にですね」

「……何？」

Aクラスに未練がある茶柱は目を細める。そんな茶柱に対して綾小路は口を開ける。

「茶柱先生。例の件ですが俺を解放してください。それが無理ならせめて由比ヶ浜が退学するまで結果を出せなくても文句を言わないでください」

今回の試験で今後に備えて軽井沢恵という駒を手に入れた綾小路は茶柱に頼み込む。

「お前でも無理か？」

「無理ですね。由比ヶ浜が在籍している限りDクラスは今後浮上する事はありません」

茶柱の質問に綾小路は断言する。

茶柱からDクラスをAクラスまで上げるように脅かされている綾小路だが、由比ヶ浜がDクラスにいる状態ではCクラスにすら上がれないと確信している。

今回の優待者当て試験において、クラスを越えた協力関係を築くのは不可能に近い。

優待者の法則を見抜いたら独り勝ちが確定する試験で他クラスと組むには揺るぎない信頼が必要だが、坂柳のクラスと龍園のクラスは由比ヶ浜に対する恨みを使つて揺る

ぎない信頼を手に入れた。

優待者当て試験で協力し合えるなら、今後の特別試験も同じように足並みを揃えてDクラスを叩くことは朝飯前であるのは明白。

生徒一人一人のポテンシャルやクラスの統率力などにおいて、Dクラスを遥かに上回っている2クラスを同時に相手取るのは不可能。

実際綾小路は今後について色々策を講じているが、クラス内にある亀裂や2クラスの結束力により、策は全て押し潰されると確信していた。

同盟を結んだ理由は由比ヶ浜を叩く為であるので由比ヶ浜が退学したら同盟は破棄される、もしくは結束力が弱まる。

最低でも由比ヶ浜が退学しない限りDクラスに勝ち目は一切なく、仮に由比ヶ浜が退学しても退学した際に生まれるであろうペナルティにより勝ち目は紙のように薄い……というのが綾小路の考えだ。

少なくとも由比ヶ浜がいる状況で結果を出せと言われても無理としか言いようがない。

「そうだな……わかった。少なくとも由比ヶ浜が退学するまでは急かさなことを約束しよう」

茶柱は騒ぎを見ながら綾小路の頼みを受ける。茶柱から見ても由比ヶ浜の足の引つ

張り具合は桁違いであり、仕方ないと割り切ってしまったている。

(とりあえず最悪の事態は回避出来たが……本当に詰んでるな)

普段負ける事を想像しない綾小路でも今の状況は最悪であった。このままだと今後ずっとポイントも貰えないのは目に見えている。

(いつそAクラスとBクラスにこっちの情報売って早急に由比ヶ浜を退学させるか)

綾小路は坂柳と龍園の顔を浮かべながら、如何に早く由比ヶ浜を退学させるかを考えるのであった。

「さてお前ら。Aクラスと同盟を結んだが、今後の予定を話しておく」

船にあるカラオケボックス、そこに俺達は龍園の命令により集まっている。

「先ず優待者を当てることよって入るプライベートポイントは300万だが、これについては200万を貯金して残り100万をクラス全員で均等に分ける」

まあ貯金は大事だからな。

「裏切り者が望めば学校はポイントを振り込んだ仮IDを作ってくれ。だから比企谷、お前は後で仮IDを作るように学校に申請しろ。比企谷以外の裏切り者はポイント

が振り込まれた全額比企谷に送金しろ」

「わかった。それで仮IDに300万貯まったら、内100万を40等分してクラスメイトに渡せば良いんだな？」

つまり今回の試験で入るプライベートポイントは2万5千ということになる。

しかし俺は特に不満はない。俺1人で優待者の法則を見抜けない可能性が高いからな。

「ああ。それとだ、二学期からは税收制度を導入するつもりだ」

その言葉にカラオケボックスに騒めきが生じる。

「それはつまり今後に備えての貯金ということですか？」

クラスの参謀である金田が眼鏡をクイッと上げて質問する。

「ああ。クラスポイントも伸びたから、Aクラスと一騎打ちになった場合の備えをしておきたい」

なるほどな。まあ確かにこの状況が続けばAクラスと一騎打ちをする事は可能だが、勝てる可能性は低い。

だから様々な備えをするのは当然だが、プライベートポイントを貯めておくのは重要だろう。

「そうなる毎月3万くらいですか？」

「そうだな。毎月3万なら生活に支障はないだろうな」

金田の質問に龍園が頷く。つまり毎月120万ポイントを貯めていくのだな。

今回の試験でウチのクラスポイントは836ポイントとなった。つまり毎月8万3千6百のプライベートポイントが支給される。

そこから3万、税として徴収すると各人が使えるプライベートポイントは5万3千6百となる。

そしてこれは5月の時点で支給されたプライベートポイントよりも多いので、日常生活において不便になるようなことはないだろう。

「ポイントを預かるのは比企谷にする。お前らは来月からポイントが振り込まれたら、比企谷が後で発行する仮IDに振り込め」

「比企谷が私的にポイントを使う可能性は？」

一部の連中がそんな意見を口にする、龍園は目を鋭くする。

「あ？俺の判断に文句あるのか？」

同時に龍園の隣にいるアルベルトが拳を鳴らし、反対者を黙らせる。

強引なやり方ではあるが、龍園が俺を選んだのには理由がある。

何故なら俺は無人数試験でAクラス、というか葛城を嵌めた功績により龍園から報酬として毎月60万近くのプライベートポイントが支給されるのだ。

それほどの大金を持つ奴が私的にポイントを使わないと龍園は判断したに違いない。まあ龍園もAクラスから毎月60万近くのプライベートポイントが約束されているが、龍園は優待者当て試験で裏切り者になっていないため仮IDを支給されないから、俺に白羽の矢が立ったのだろう。

要するに今後俺の仮IDはクラスの銀行的役割を担うことになるようだ。

「つて訳だから比企谷はポイントの管理をしろ」

「へいへい……ま、不満が出るのは当然だし、ポイントを確認しなくなったら俺に携帯を見せるように促せば良いだけだ」

実際俺はクラスの皆で集めたポイントに手を出すつもりはない。そんな事したら学校から罰を下される可能性があるからな。

「決まりだな。今日はもう解散とするが、Bクラスに上がったからって馬鹿やらかしてクラスポイントを減らすんじゃねえぞ?」

龍園がドスの効いた声でそう命じるが、須藤を嵌めて学校全体を巻き込んだお前が言うのか?

龍園の言葉に内心呆れながらも俺はカラオケボックスを出る。そして部屋に戻ろうとする……

「八幡君。もし時間があるなら一緒に星を見に行きませんか?」

ひよりがそんな提案をしてくる。

「別に構わないが」

俺は返事に迷ったが誘いに乗ることにした。もしかしたら今後における話をするのかもしれないからな。

「ありがたいごいします。では行きましょう」

ひよりがそう言つて歩き出すので俺もひよりに続きデッキに出る。すると満点の星空が美しく光り、俺達を迎える。

既にDクラスの生徒も撤収していて、辺りは静かである。

「綺麗ですね」

「そうだな。こんな静かなひと時が一番好きだ」

他の連中は試験が終わつて休んでるのだろうが、誰もいない場所で星を見るのも悪くない。

「私もです。八幡君は2週間大変でしたね」

「そうだな。優待者当て試験はともかく、無人島試験はガチで辛かった」

何せ最初の2日以降はガチのサバイバルだったからな。幾ら報酬が莫大でも、2度とやりたくない。

「お疲れ様でした。私は無人島試験では2日目の夕方にリタイアしましたが、それまで

過ぎた時間は凄く楽しかったです」

ひよりはそう言つて微笑みを浮かべる。その笑顔は魅力的でドキつとする。

「ですから八幡君が良ければ、卒業してから2人で海に行きませんか？また八幡君と岩場を散歩したり、水上スキーに乗ったり、砂浜で一緒に寝たいです」

ドキドキする中、ひよりはそんな誘いをしてくる。女子からの誘いは勘弁して欲しい。

しかし……

「あ、八幡君が私と過ぎるのが嫌なら、無理強いはしません……」

ひよりは途中で不安に満ちた表情に変わる。そんな表情を見ると断るに断れない。

ひよりは雪ノ下と由比ヶ浜とまた同じ学校と知つて絶望した俺に対して、楽しい時間を作つてくれた恩人だ。

女子からの誘いは苦手だが、そんな恩人を悲しませる程腐つてはない。

「……わかつた。卒業したら海に行こうな」

するとひよりはこれまでで1番の笑みを浮かべて……

「はいっ」

小さく頷き、俺の手を握ってくる。

(ま、ひよりの不安な表情を消してこんな綺麗な笑みを見れたなら良しとするか)  
俺はひよりの手を握りながら空を見上げる。その際、気の所為かもしれないが、さっきよりも星が輝いているように見える。

まるで何かを祝福するように

こうして俺の前半が最悪だった2週間の旅行は最後にひよりが見せた笑顔によって、プラス評価の状態で幕を下ろすのであった。

## 平和

8月の最初から2週間かけて行われた旅行が終わって、1週間以上経過した。

後1週間もすれば夏休みも終わり、また学校が始まり面倒な戦いが始まるのだ。

そんな中、俺は自分の部屋でのんびりとネットサーフィンをしている。友達が少ない俺は必然的に自分の部屋で過ごすのが大半となっている。外に出たのなんて飲食物を買う時と新刊を買いに行っただくらいだ。

(まあ2学期が始まったら面倒事の嵐だろうし、問題ないだろう)

1学期は5月の最初以外は特にデカいイベントはなく、夏休みに大規模な特別試験をやった以上、2学期からは特別試験がそれなりに行われるだろう。

だから英気を養っておくのも戦術として間違っではない。

そう思いながらもネットサーフィンをしていると、美味そうなラーメン特集が掲載されていたのでクリックしてアクセスする。

見れば見るだけで食欲を刺激するラーメンの画像が大量に出てくる。

(よし、夕飯はラーメンにしよう)

時計を見ると時刻は夕方5時半。今からケヤキモールに行けば6時くらいにラーメ

ンを食べれるだろう。

そう判断した俺は、パソコンの電源を切って外へ行く準備をしてから、外に出る。

部屋から出て、エレベーターで一階に降りて寮の外に出ると綺麗な夕焼けが目に入る。

そのままケヤキモールの方に向かうと、進行方向から買い物袋を持った女子数人が歩いてくるが、全員表情が暗い。

「あーあ。偶には外食がしたいなあ」

「だよな。スーパ一の無料食品はもうやだよ」

「一応来月には7500ポイント入るけど、夏休み中は0ポイントだしねー」

「本当最悪。由比ヶ浜さんの所為で2クラスから宣戦布告を受けるなんてさ。停学してポイントを0にした須藤くんより邪魔だよな」

「やっぱり中間試験の時に見捨てるべきだったよ。私あの時に1万ポイント払ったけど、心底後悔してる」

「無人島試験までは調子良かったのに……由比ヶ浜さんの所為でもうAクラスは無理でしょ」

そんな愚痴が聞こえてくる。会話の内容からして由比ヶ浜のクラスメイトだろう。要するにとぼっちり組である。

しかしDクラスの生徒がAクラスを諦めても仕方ないだろう。

5月の時点でのクラスポイントは……

有栖のAクラス 940

一之瀬のBクラス 650

ウチのCクラス 490

由比ヶ浜と雪ノ下がいるDクラス 0

と、4位と3位の差は490だった。

しかし夏休みの旅行が終わった時点のクラスポイントは……

有栖のAクラス 1174

ウチのBクラス 836

一之瀬のクラス 734

由比ヶ浜と雪ノ下のクラス 75

と、4位と3位の差は659と圧倒的だ。加えてAクラスとBクラスが足並みをそろえてDクラスを叩きに向かっているのだ。Dクラスの大半は諦めていてもおかしくないだろう。

とはいえ同情はしない。何故なら俺達は別にルール違反をしてる訳じゃないからな。

同盟を結んじやいけないなんてルールはない。寧ろ四つ巴からタイマンに変えようとするのは戦略として正しい筈だ。

女子達の由比ヶ浜に対する愚痴を聞きながらもそのまますれ違い、そのままケヤキモールに行く。ケヤキモールは夏休みだけあって、賑わっている。中にはジャージを着ている集団もいて、そいつらは部活後の夕食を楽しもうとしているのだろう。

そして目的のラーメン屋に向かうが……

(うげつ、混んでるじゃねえか)

いつもならそこまで混んでないがラーメン屋の前には行列が出来ていた。よく見ればウチのクラスの矢島、Dクラスの須藤や平田、Cクラスの柴田が上級生という。

矢島が陸上部で須藤がバスケット部、平田と柴田はサッカー部だったが、どうやら運動部は今日ラーメンを所望しているようだ。

俺は回れ右をする。以前須藤を潰しにかかったし、見つかったら面倒な事になるのは明白。ラーメンはまた明日食べよう。

そのままスーパーに向かって歩いてみると、スーパーから見覚えある女子が出てくる。

「あ、ここにちは八幡君。八幡君も買い物物ですか？」

スーパーから出てきたのはひよりだった。両手に買い物袋を持っているし、夏休み最

後の日までの食材を買い込んだな。

「ああ。ラーメン食いに来たんだが、混んでたからスーパーで適当に買おうとな」

「そうですか……あ、八幡君さえ良ければ夕食を一緒に食べませんか？ 麺も買いましたので」

予想外の誘いが来たな。確かにひよりの飯は美味いが……

と、ここで視線を感じるので顔を上げるとひよりがジーンと俺を見ている。何というか……見てると遠慮してはいけない気がしてくる。

結果……

「……じゃあ頼む」

ひよりの眼差しにより誘いを受けてしまう。

「ありがとうございます。私も八幡君と食事をしたかったです」

ひよりは笑顔で両手を叩く。その仕草がまた可愛いな。

「じゃあ行くか。半分持つ」

言いながらひよりが持つ買い物袋を半分持つて歩き出すと、ひよりもそれに続く。

「今日は何してたんだ？」

「図書館にずっと居ました。八幡君は？」

「部屋に籠ってたな」

「そうでしたか。宜しかったら明日以降、一緒に図書館に行きませんか？」  
「別に構わない」

ぶつちやけ暇を持て余してるし、1学期の頃からひよりとは図書館で過ごしてたからな。

そんな会話をしながらも1年の寮に到着する。そしてエレベーターに乗るとひよりがエレベーターのボタンを押す。押しボタンは8階、俺の部屋は4階にあるのでひよりの部屋で飯を食べるようだ。

エレベーターのドアが開く。女子が住むエリアには基本的には行かないので妙に新鮮に感じるな。

廊下を歩き、ひよりが立ち止まるので俺も立ち止まる。そしてひよりがカードキーをかざすとドアが開く。

「入ってください」

「邪魔をする」

一言断つてから部屋に入り靴を脱ぐ。そしてひよりの後に続くと、本が大量に置かれた部屋を目の当たりにする。

俺もそれなりに本を持つてるがひよりはそれ以上だ。俺は本以外にゲームや飯などにポイントを注ぎ込んでいるが、ひよりは本の方に注ぎ込んでいるのだろう。

「では座って待っていてください」  
「手伝うぞ?」

飯を作つて貰うのだから手伝うのは当然のことである。

「大丈夫ですから、テレビか本を見ててください」

まあ部屋の主がそう言うなら座らせて貰うか。

俺は座つてキツチンに立つひよりを見る。と、ひよりは制服の上からエプロンを着て調理場に立つ。薄ピンク色のエプロンはとても可愛らしく、見ていて絵になる。

気が付けば俺はテレビや本を見ないでひよ目を目で追っていた。何をやってんだ俺は?まるで変態じゃねえか。

内心恥ずかしく思つた俺はひよりから目を逸らし、顔を俯かせて飯が出来るのを待つことにした。

暫くするとこつちに近づいてくる足音が聞こえるので顔を上げると、丼を持ったひよりがこつちにやつて来る。丼にはラーメンが入っていた。

「お待たせしました。八幡君の口に合うかわかりませんが、どうぞ」

そう言つてラーメンをテーブルの上に置いて俺の向かい側に座ると両手を合わせるので、俺も同じように両手を合わせて……

「いただきます」

挨拶をして食べ始める。ひよりが作ったラーメンはあつさり醤油ラーメンで、今日俺が食べる予定であったのは濃厚魚介ラーメンとは対極に位置するタイプのラーメンだが……

「美味しいな」

箸が止まらない。

「ありがとうございます。八幡君にそう言つて貰えると嬉しいです」

ひよりは微笑みながら礼を言ってくる。クラスの大半は不良っぽい生徒であるが、ひよりは清涼剤だな。

そう思いながらラーメンを食べているとひよりが口を開ける。

「そういうえば八幡君。二学期から八幡君はどうするのですか？」

具体的な内容は言つてないが十中八九クラスの争いに関する事だろう。

そしてクラスでも比較的特殊な立場である俺の動きも変わるの間違いない。元々俺は龍園と有栖の橋渡しをしていたが、同盟を結んだし橋渡しをする必要も無くなつた。

なら動かないって選択もあるが、俺はクラスで高い地位にいて、今後の学校生活に備えてその地位を手放すのは勿体ないので動くつもりだ。

「そうだな……スカウトとかを考えてる」

「スカウト、ですか？」

「ああ。優秀な人材を引き入れるのも戦略の1つだからな」

例えば以前龍園にも言ったが、有栖が最有力候補だ。有栖が居ないAクラスは脅威じゃないし、有栖も刺激的な日々を望んでるから交渉の余地はある。

他にもDクラスにいる高円寺六助。文武両道であり、情報によれば優待者当て試験にて猿グループの裏切り者らしい。誰の手を借りずに優待者を見抜いたなら奴の洞察力は桁違いであることを意味する。

自由人として有名ではあるが、奴が気紛れの行動で、優待者当て試験の時のようにDクラスが益が出るのは避けたいし、引き入れるのも悪くないと思っている。まあクラスに協力するかわからないから微妙だがな。

後は綾小路清隆。特に有名ってわけではないが、審議の時にはこっちの作戦の本質を見抜いて居たし、堀北会長とインファイトを繰り広げた男だ。引き入れる価値は充分にある。

「そうですか。私にも出来ることがあればお手伝いしますね」

「別に無理しなくてもいいぞ」

俺は自分自身のメリットのためにやるんで、ひよりが無理する必要はない。

すると……

「無理なんてしません。私はクラスのために頑張る八幡君を隣で支えたいです」  
微笑みを浮かべながらそう言ってくる。同時に俺の顔が熱くなり、心臓の音が響き出す。

(ダメだ。ひよりの笑顔には勝てる気がしないな)

その後俺はラーメンを食べ終えてひよりの部屋を後にしたが、寝るまでひよりの笑顔が頭から離れることはなかった。

## パフエ後にプリクラ

夏休みもあと少しで終わる。毎年思うが夏休みはもう2ヶ月くらいあっても良いと思う。

そんな事を考えながらも俺はケヤキモールを歩いている。暑いから冷たいパフエを食べたいのだ。

そして目的の店にて着いたので、中に入る。

「いらつしやいませ。2名で宜しいでしょうか」

ウエイトレスが俺を迎えるが2名だと？

疑問に思っていると……

「はい。2名でお願いします」

背後からそんな声が聞こえてきたので振り向くと、白く涼しげなワンピースを着ている有栖がいて、俺と目が合いクスリと笑う。

「お席に案内します」

そんな俺を他所にウエイトレスが歩き出すので俺もそれに続く。

案内された席に座ると向かい側に有栖が座る。

「お久しぶりですね」

「そうだな。今日は神室はいないのか？」

「昨日付き合ってもらいましたから」

「なるほどな……あ、すみません。このストロベリーパフェお願いします」

話しているとウエイトレスが近くに来たので注文をする。

「では私はバナナパフェをお願いします」

有栖が同じように注目するとウエイトレスは一礼して去っていく。

「で？わざわざ俺と店に入ったって事は何か重要な話でもあるのか？」

Aクラスのリーダーの有栖がBクラスで高い地位にいる俺に話しかけるとしたら、クラス闘争に関する話である可能性が高い。

「いえ、デザートを食べようと店を探していたら、八幡君がカフェに向かおうとしているのを偶然見つけたので付いてきただけです」

……どうやら違ったようだ。まあまだ次の試験が発表されたわけじゃないし、様子見ってところだろう。

「夏休みは楽しんでますか？」

「ぼちぼちだ。面倒な連中とも会わずに済むからな」

言うまでもなく由比ヶ浜と雪ノ下だ。学校があるときは教室が隣だったから偶然鉢

合わせして騒がれることもあつたが、夏休みだからか一度も会つてない。

「そうですか。まあ由比ヶ浜さんは引きこもっているかもしれないですから」

だろうな。舟の上でクラスメイトに責められまくつたし、部屋から出るのを怖がつていてもおかしくないだろう。

「お前としても良かっただろ？」

「否定はしません。彼女の話を知っていると頭が痛くなります」

まあ有栖は散々チビやガキつて言われているからな。不愉快でしかないだろう。

そう思っているとウエイトレスがパフェを2つ持つてやつてくる。

「お待たせしました。ストロベリーパフェとバナナパフェになります」

テーブルにパフェが置かれる。見るからに冷たそうであり、甘そうだ。

「頂きます」

そう言つてからパフェを口に入れると、ストロベリーの甘みが口に広がる。やつぱり甘い物は最高だな。

「八幡君。そちらのストロベリーパフェも一口貰つても良いですか？」

「別にいいぞ」

「ありがとうございます……んっ」

と、有栖は小さい口を開けて俺を見てくるが、これはアレか？あーんをしてるのか？

有栖は口を開けたまま俺を見てくる。有栖の性格上、譲る気は無さそうだ。

どうしたものかと悩んでいると周りから騒めき声が聞こえてくる。

「ねえ、アレ見て……」

「女の子が待ってるのに……」

「男なら女を待たせるのはダメでしょ」

そんな声が聞こえてくる。どうやら俺は彼女を焦らす男と思われている……つ、有栖の奴、今一瞬ニヤリと笑ったが確信犯かよ?!

周りからの視線に耐え切れなくなった俺はスプーンにパフェをよそつて有栖の口に運ぶ。すると有栖はパフェを口に入れて満面の笑みを浮かべる。

「美味しいです。ありがとうございます」

畜生、ムカつくが可愛くて文句が言えん。

すると有栖はスプーンで自分のパフェをよそつたかと思えば……

「はい八幡君。あーん、です」

満面の笑みを浮かべたまま俺にスプーンを突きつけてくる。ちよつ、待て。食べさせるのも恥ずかしかったが、食べさせられるのも更に恥ずかしいんですけど。

「いや、流石にそれは「あーん」……いただきます」

結局逆らえずに口を開けるとバナナパフェが口に入るので咀嚼するとストロベリー

とはまた違った甘みが広がってくる。

次に来るときはバナナパフェを「ところで八幡君」……嫌な予感がする。

内心警戒をしながら有栖を見ると……

「してしまいましたね……間接キス」

「ぐはっ！」

俺の警戒は意味をなさなかった。

10分後……

「ありがとうございましたー」

ウエイトレスから挨拶を受けながら店を出る。隣を歩く有栖はそれはもう楽しそうに笑っていた。

「八幡君はこれからどうするんですか？」

「聞いてどうする？ 付いて行く気か？」

「はい。また可愛らしい八幡君を見たいですから」

本当にコイツは良い性格をしてるな。まあ理不尽に罵倒したりしないからそこまでムカつかないけど。

そう思いながら前方から騒ぎ声が聞こえてくるので、有栖から目を逸らして前を向く。

そこでは雪ノ下が女子2人組と向かい合って口論をしていた。2人組の方は中間試験の直後に本屋で愚痴っていた女子だ。

その事から察するに2人組が由比ヶ浜の悪口を言って、通りすがりの雪ノ下がそれを聞いてキレたのだろう。

見つかつたら絶対に面倒な事になるのは明白だ。

「よし有栖。ゲーセンに入るぞ」

「わかりました」

俺の提案に有栖は即答して頷き、直ぐ近くにあるゲーセンに入る。中に入ると騒がし

い音が耳に入る。

「これがゲームセンターですか。カラオケボックスとはまた違った雰囲気がありますね」

有栖はそう言うが、有栖は歌う為にカラオケに行っているのではないだろう。

この学校においてカラオケボックスで歌を歌うのはクラスにおける下っ端ぐらいで各クラスの主力は密会の為に利用していると思う。カラオケボックスは監視カメラがない数少ない場所だから、秘密の作戦を立てる際に便利だ。

龍園も悪巧みする時はカラオケボックスを利用するし、有栖も同じ用途で利用しているのは明白だ。

「早速ですが八幡君。私、プリクラに興味があるので付き合ってください」

プリクラか……中学時代に戸塚と撮ったことがあった。どうせなら戸塚もこの学校に入学してくれたらよかったのに。

とはいえ今は有栖だ。「付き合ってくださいませんか？」ではなく「付き合ってください」と言つた以上、俺が断つたらあの手この手で付き合わせようとしてくるのは明白。

ならば無駄な抵抗はしない。

「へいへい。さっさと行くぞ」

「ありがとうございます。では行きましょう」

言われてプリクラの筐体に入る。同時に有栖は学生証端末をかざしてポイントを支払う。

「操作は私があつても良いですか？」

「別に構わないが出来るのか？」

「いえ。初めてですが、だからこそ興味を持ちました」

言いながら有栖は操作する。好奇心旺盛だな。

暫く操作していると……

『彼氏さんが後ろから彼女を抱きしめて〜』

そんな指示が流れる……つて！待てやコラ！これ絶対カップルモードだろ?!

次いで有栖を見ると笑っている。コイツ、俺をからかうつもりだな。

「では八幡君、抱きしめてください」

「いやいや。流石にそれは「しないなら泣きます」……了解した」

俺は逆らうのをやめて、後ろからゆつくりと有栖を抱きしめる。幸い有栖を抱きしめるのは慣れてるからそこまで恥ずかしくない。

そして撮影が完了するので有栖から離れる。次は落書きか。

「八幡君。2回目は八幡君が自由にしているので、最初の落書きは私がしても良いですか？」

「好きにしろ」

落書きなんてやった事ないし、有栖がやったのを見ておきたい。というか2回目もやるのね。

暫く有栖が落書きをしているのを眺めていると有栖がモニターから離れる。これではプリントアウトされるのを待つだけだ。

そう思いながら外の受取口に行き、写真を手取るが……

(こ、コイツ本当に良い性格をしてやがる)

写真には有栖を後ろから抱きしめている俺が写っているが落書きが酷い。写真下部には花畑が、俺と有栖の身体はハートマークに囲まれている。

これだけならまだしも、俺の近くに有栖を指した矢印があり、矢印の周囲には大量のハートがあり、矢印の中には大好きって言葉が書かれていた。

これだけ見ると俺が有栖にベタ惚れしているように第三者は考えるだろう。見てるだけで恥ずかしい。

「ふふっ……後で真澄さんや龍園君に自慢を「や・め・ろー!」冗談です」

龍園に見せてみる、卒業までずっとネタにされるに決まってるわ。

つかやられっぱなしは嫌だし反撃するか。幸い有栖はもう一回プリクラをやるようだし、そこでチキらせる。

「では2回目といきましょう。次は八幡君が操作してください」

言いながら有栖は筐体の中に入るので俺も入り、モニターを見る。それによればどうやら筐体そのものがカップル専用らしい。

俺はコースなどを見てみると指示についてレベルが決められている。

レベルは1から5までであり、本来なら間違はなくレベル1を選択しているだろう。

しかし今回は有栖に一泡吹かせたいのでレベル5を選択する。

すると……

『彼女が彼氏の唇にちゅーをして〜』

ふあっ?!

## チキンレース

「なっ?!」

「予想外の要求に有栖は珍しく目を見開いて俺を見る。ここまで驚く有栖を見たのは初めてだが、中々新鮮だ。」

「しかし俺も目を見開いているだろう。何せ指示の内容は「有栖が俺の唇にキスをする」だし。」

「八幡君……貴方、レベル5を選択しましたね?」

「……まあな。ちなみにお前は?」

「私はレベル3ですが……どうやら八幡君は私に一泡吹かせたいようですね」

「頬を染めながら睨みつけてくる。もうここまで来たら俺も反撃しよう。いくら有栖が強くてキスとなればチキるだろうし。」

「ああ、一泡吹かせたかったな。それよりも早くキスしてくれよ……あ、嫌なら無理強いほしくないから安心しろ。そんな時はチキンだっと思うだけで文句やペナルティはないぞ」  
その言葉に有栖は口元を痙攣らせる。

「……随分と強気ですね。良いでしょう、唇を突き出してください。それと身長差があ

るので少し膝を曲げてください」

「はっ？マジで言ってるのか？」

俺はチキると思っていたが有栖は全然そんな素振りを見せない。

「ええ……あ、八幡君が緊張するなら無理強いはしませんよ。その時は八幡君をへたれと思うだけですから」

俺と同じ事を言っつきやがった。譲る気は無さそうだな。

「いや。全く問題ないな」

そう言いながら俺は膝を曲げて、有栖がキスを出来るような体勢となる。

「では……」

言うなり有栖は真っ赤になりながらも顔を近づけてくる。それにより有栖の瑞々しい唇が目に入ってしまう。

有栖の顔はゆっくりと近付いてきて、それに比例するかのようになくなっていく。どうやら恥ずかしい気持ちはあるが、負けず嫌いの性格が顔を動かしているのだろう。

そしてキスをする直前で俺が避けると考えている可能性が高い。

そうなるとチキンレース……有栖がチキってキスを止めるか、俺がチキって顔を逸らすかのどちらかだ。流石にお互いチキらずにキス……ってのはないだろう。

有栖から目を逸らさずに見つめ続ける。人形のように美しい有栖の顔が徐々に近づ

いて来る。唇同士の距離は20センチ。

(まだチキらないか。有栖の性格上、ギリギリまで頑張るはず。距離的に2、3センチあたりだな)

そう思っていると間にも有栖は止まらない。唇同士の距離は10センチ。

(早くチキレよ。もう真っ赤なんだし無理すんなや)

有栖の顔は最早茹で蛸のように真っ赤になっている。多分俺も真っ赤になっていると思うが今回は引く気は無い。唇同士の距離は5センチ。

もう有栖の口から出る吐息が俺の唇に当たって理性を刺激する。

そうこうしている間にも唇同士の距離は近付く。

3センチ……

2センチ……

1センチ……

(っ！もう無理だ！)

俺は咄嗟に唇を横にズラす。

しかし有栖も限界だったようで唇をズラし……

ちゅっ　　ちゅっ

お互いの唇が、お互いの唇から限りなく近い頬にぶつかり合う。少しでも横に動かしたらマウスとウマウスになってしまいうくらい近い頬にキスをし合っている。

それを認識した俺はマウスとウマウスにならないように気をつけながら距離を取り有栖を見ると、有栖は真つ赤になりながらも俺を見上げている。

「……引き分けですね」

「……だな」

お互い静かに語り合う。しかし仕方ないだろう。唇同士ではないとはいえキス、唇に限りなく近い頬にしたのだからぶつちやけ恥ずかしい。

「と、とりあえず落書きをするか」

「わかりました。受取口にいますから」

有栖が離れると俺は落書きに移るが手を止めてしまう。何故ならモニターには俺と有栖が写っているが、唇同士のキスをしているように見えているのだ。第三者が見たら絶対に唇同士と判断するのは間違いない。

俺は落書きする気が萎えたので、おまかせボタンを押す。ぶつちやけカップルモードの筐体での落書きとか無理過ぎる。

そのまま有栖がいる場所に向かうと同じタイミングでプリントアウトされるので手に取ってみると……

「は、八幡君……貴方、随分と大胆ですね」

俺と有栖ハートや天使に囲まれながらキスをして、一番上に「私達、結婚します」と書かれている写真があつたのだ。

「ま、待て有栖。お任せモードにしたんであり、俺が落書きしたわけじゃないからな」俺は真つ赤になつてゐる有栖に慌てて言い訳をする。ハッキリ言つてこんな落書きをするのは無理だからな。

「そ、そうでしたか。しかしもうプリクラはやめましょう」

同感だ。もう俺は二度とプリクラをする気はない。恥ずかしくて死にそうだ。

「というか写真はどうする?」

2種類の写真が出来たが、第三者から見たら俺と有栖がイチャイチャしているように見えるだろう。

「第三者には見せたくないですが、捨てるのは勿体ないので部屋の机にしまっておきます」

「それが懸命だな……なんか色々疲れたから帰るわ」

「……そうですね」

俺達はプリクラだけやってゲーセンを後にする。元々雪ノ下に見つかからないようにゲーセンに入ったただけだしな。

そして外に出ると既に雪ノ下はおらず、その事実にあ堵しながら俺達は寮へと向かう。

その際に気がつく和有栖を見ていて、有栖と目が合うとお互いにそっぽを向いてしまふ。さっきのチキンレースの結果は思った以上に頭に残っているようだ。まだ有栖の唇の感触が残っているし。

そう思いながら歩いていると寮まで500メートルくらいのところで雨が降り始める。

初めはポツポツとしか降ってなかったが、少しずつに強くなる。夏だから急な雨があってもおかしくない。

俺だけなら走って寮に行けるが、今は有栖がいるので置いてきぼりにするつもりはない。

そう判断した俺は寮までの道の途中にある四阿を発見する。あそこで雨宿りをするのがベストだな。

「有栖、あそこまで運ぶが大丈夫か？」

「あ、はい。私のためにわざわざすみません」

有栖は謝るが、身体の弱い事は仕方ないし文句はない。

「気にするな」

そう言ってから俺は有栖を抱き抱えて、そのまま早足で四阿に入り、有栖をベンチに座らせる。

「ありがとうございます。しかし急な雨には参ってしまいます」

「同感だな。シヨツピングモールにいるときに雨が降つてればまだしも……」

シヨツピングモールでは突然の雨に備えて傘の貸し出しが行われている。

しかし寮とシヨツピングモールの中間地点あたりにいる時に雨が降り出してしまったので、傘を借りれない。今からシヨツピングモールに戻つて傘を借りたらず濡れになつてしまう。

まあ雨が降り始めて直ぐに四阿に入ったので服はそこまで濡れてない。これなら有栖も風邪を引かないだろう……っ！

そう思いながら有栖を見ていると有栖の服が透けている事に気づいてしまう。白いワンピースの下から水色が見えたので慌てて目を逸らそうとすると、有栖は頬を染めて俺を見てくる。

「やっぱり八幡君は変態さんなんですね」

「待て。やっぱり何だよ？」

「そうでしょう？船の上でスバに行った時、私のような体型に興奮しましたし」

否定は出来ん。あの時に有栖と密着したら生理的反應をってしまったし。

「……済まん」

「別に怒ってないですよ。確かに八幡君は変態さんですが、同時に凄く優しい人だと思ってますから」

「んなわけないだろ。俺は気に入らない相手に容赦しないし優しくはないだろう」

「それは誰でもです。誰彼構わずに優しくする人間なんてこの世には居ません。少なくとも私は八幡君から優しさを感じました」

まあそうかもな。一之瀬や櫛田あたりは誰彼構わずに優しいように見えるが本当がどうか怪しい。俺の見立てじゃあの2人はAクラスにいてもおかしくないのにAクラスにいない。となると中学時代に問題を起こしたり、裏の顔があるのだと思う。う。

「そりやどうも。しっかし凄いい雨だな」

雨はどんどん強くなっている。道を歩いている生徒はいるが大半はレンタルの傘を持っている。俺達は運が悪いとしか言いようがない。

「そうですね。予報では夕方から雨と出てますし、一時的なものではないでしょう」

「そうか。つかお前は神室に傘を持ってきて貰えばいいんじゃないやね？」

「それでもいいですが……」

「良いですが？」

「ゲームセンターで生まれた恥ずかしい気持ちも大分収まりましたし、ここで2人で雨が止むのを話でもしながら待ちませんか？」

そんな提案をしてくる。確かに突如の雨により恥ずかしい気持ちは大分無くなったのは事実だ。

「別に構わないが、俺に話術はないぞ？」

「大丈夫です。聞きたい事に答えてくれるならそれだけで充分ですよ」

まあそれくらいなら俺にも出来るな。

「わかったよ。じゃあ待つか」

「はい。では……」

言いながら有栖はベンチをポンポンと叩く。何をしているのかと想っていると……

「隣に座ってください」

そんな誘いをかけてくる。俺は今までの経験上、断つても最終的に隣に座る事になる

のは容易に想像出来るので、特に逆らう事なく有栖の横に座った。

雨はまだ当分止みそうにない。

## 雑談からのおちよくり合い

四阿にあるベンチに腰を下ろしてから1時間。雨はまだ止まず道路には巨大な水たまりが幾つも生まれて、道を歩く生徒は傘を差したり雨合羽を着ている。

そんな光景を見ながら俺と有栖はのんびりと雑談をしている。話す内容はこの学校に入学してからの出来事のみならず、入学前の出来事についても話している。

今は俺が奉仕部であった出来事を話している。これについては有栖が気になったからだ。

「そんでよ、あの独神が妹を利用して、俺を連れ出すまで、俺はボランティアのボすら聞かされなかつたんだぜ」

「八幡君の妹もそうですが、八幡君の知り合いって馬鹿が多過ぎませんか?」

「否定はしない。あの時はマジでふざけんなって思ったな。もしも戸塚が参加しなかつたら帰っていたのは間違いない」

「八幡君、戸塚さんの話になると元気になりますますが男の子なんですよね?」

「ああ。つてもアイツを見てると性別なんてどうでもよくなるんだよ」

俺がどんな境遇にいても変わらずに接してくれた戸塚だが、この学校を希望した際に

誘えば良かった。

「それでボランティア先ではどんな問題があったのですか？」

「もう問題があるとはわかるとはな」

「当然でしょう。船で聞いた文化祭や修学旅行、先程までの奉仕部の活動の話から察するに八幡君は不幸の星の下にいるようですから」

だろうな。中学時代の俺は間違いなく不幸な人間だったと思う。

「簡単に言うとい人の女子がハブられていて、その問題に取り組んだ」

「……それ、ボランティアの範疇を超えてませんか？」

ですよねー。あの時はやらなきゃいけない雰囲気にもまれていたが、ボランティアの範疇を超えてたよな。普通中学生にやらせる仕事じゃねえよ。しかも引率の独神は監視しないで寝たし。

「まあな。それがまた面倒だよ、場を作って話し合うだの、代わりに文句を言うだの碌でもない案しか出なかつたんだよ」

まあ俺の案も碌でもないが、雪ノ下と葉山は自分の考えが正しいと思っっているが世間知らずにも程がある。

「総武中はそれなりに名門校と聞きましたが、生徒の民度が低すぎませんか……まあそれはそれとして八幡君はどんな案を出したのですか？」

「肝試しの時に小学生を脅して人間関係をバラバラにしたな」

「なるほど……中々面白い案ですね」

有栖は楽しそうに笑っているが、たったこれだけでわかるとはやはり天才だろう。

「ちなみにお前ならどうアドバイスをする？」

「簡単です。無視についてはどうしようもないですが、虐めに変わった場合に備えてポ

イスレコーダーと小型カメラを与え、ネットにアップするやり方を教えます」

コイツはコイツでえげつないな。まあそうでなきや有栖じゃないけど。

「それにしても八幡君の不幸ぶりは異常ですね。お祓いをしてもらった方がいいのでは

？」

「お祓いなら中3の時にやって貰った。ま、この学校に雪ノ下と由比ヶ浜が入学した時点で意味がなかったけど……あ、そういう聞きかかった事があるんだが、良いか？」

「はい。何でしょうか？」

「確かお前の親父がこの学校の理事長だよな？」

「そうですよ。もしかして身贖いでAクラスに配属されたと思ってますか？」

「いや。仮にも政府から恩恵を受けてる学校の理事長が身贖ひしたら問題だろ」

有栖の親父がどんな人間かは知らないが、普通に考えて身贖ひをするとは思えない。

「俺が気になってるのは入学する生徒についてだ。日本の将来を担う人間を生み出す為

に様々な人間を受け入れる点については理解出来るが、一部に関しては入学基準に満たないだろう?」

俺や龍園のように中学時代に問題を起こした生徒、由比ヶ浜や須藤のように高校生にしては頭が悪過ぎる生徒などが日本屈指の高校に入れるとは普通思わない。

正直言つてこの学校の合格基準は前から気になっている。

「お答えできません」

有栖の返答はシンプルだった。

「それは教えられないって事か?それともわからないって事か?」

「半分半分です。この学校の合格基準について一部を知っているのは事実ですが、父からは口止めをされています」

そりゃ答えられないか。しかし娘の有栖ですら一部しか知らないとは……もしかしたらこの学校は俺達が知らないだけで、とんでもない事を考えているのかもな。

「そうか。なら聞かないでおく」

「ありがとうございませ……それにしても全然雨が止む気配はないですね」

有栖の言うように雨は全然止まず、寧ろドンドン激しくなっている。四阿の下にいるから濡れはしないが、道には生徒の気配は感じない。

「だな。もしかして夜まで待つのか?」

「そうかもしれないですね……まあ一人で過ごすわけじゃないのが不幸中の幸いですね」

そう言いながら有栖は俺の手を握ってくる。しかも指を絡めてきやがった。

「っ！いきなりどうした？」

「ふふっ……可愛らしい反応ですね」

どうやらまたからかわれたようだ。ぶっちゃけ結構イラつときたしやり返すか。

「そうか？俺にキスをしようとしたお前の方が可愛かったぞ？」

実際あの時に見せた有栖の恥じらいはガチで可愛かった。

しかし有栖にとっては黒歴史みたいで頬を染めてジト目で見上げてくる。

「う、煩いです。八幡君の馬鹿……」

「悪かったよ。ちよつとからかい過ぎた」

「なら良いです。ただし余りその話で私をからかうなら、プリクラで撮った写真を広めますからね？」

「待てコラ」

そんな事したら卒業まで龍園に弄られるのは絶対だから、絶対に止めないといけない。

つか……

「広めたらお前にもダメーが来るんじゃないやね？」

「私の場合、クラス内で既に八幡君と交際していると噂されているのでそこまで気にしないです」

「あつそ……とりあえずからかわないでおく」

俺はそこまで達観してないからな、出来れば広めないで欲しい。

そう思いながら俺は有栖の手の柔らかさにドキドキしながらも雨が止むのを待つのだった。

1時間後……

「漸く止みましたね。では帰りましょうか」

辺りが薄暗くなってから雨が止んだので、有栖はそう言っ立ち上がるので俺もそれに続いて立ち上がる。

そして四阿を出て寮に向けて歩き出す。ケヤキモールの方を見れば、生徒が歩いてるのを確認出来る。多分雨が止むのを待っていたのだろう。さっきまでの雨は傘を使っても結構濡れるくらいの強さだったし。

そして寮に着いた俺達はそのままエレベーターに乗り込み、お互いの部屋がある階の

ボタンを押す。

ドアが閉まるとエレベーターはゆっくりと上がって、やがて俺の部屋がある階に着いた。

「じゃあまたな」

「はい……あ、八幡君。髪にゴミが付いてますよ」

エレベーターから降りて閉のボタンを押そうとしたら有栖にそう言われたので、俺は頭を手で払う。

「取れたか？」

「取れてないですね。しやがんで下さい」

「ああ」

俺は有栖に言われた通り少しだけしやがみ、有栖の手が届くようにする。

すると有栖は手を伸ばしながらも顔を近づけて……

ちゅっ

そつと俺の頬にキスをしてくる。

それを理解すると同時に俺の顔に熱が生まれる。

「んなっ！」

「ふふっ……可愛らしい反応ですね」

「お、おまつ、いきなり何を……!」

「プリクラで私を恥ずかしい思いをさせたお礼です……ではまた」

俺が慌てている間に有栖はエレベーターに戻り、そのままドアが閉まる。

あの野郎、最後の最後に爆弾を落としやがって……この借りはいつか絶対に返してやる。

「ふふっ……」

一人でエレベーターに乗る坂柳有栖は笑みを浮かべていた。最後の最後に八幡を慌てさせた事を嬉しく思うが故に。

「やっぱり八幡君の反応は面白いですね。次はどんな風にからかってみましょうか……」

次に会う事を考えているとエレベーターが止まったので有栖は降りる……と、同じタイミングで有栖の友人（手下）である神室真澄が廊下を歩いていた。

「ご機嫌よう真澄さん。何処かにお出掛けですか?」

「飲み物を買いに自販機に行くだけ。そういうアンタはご機嫌だけど、なんか良いこと

あつたの？」

「はい。実はさつきまで八幡君と遊んでいたのですが、別れ際に八幡君の頬にキスをしたら面白いくらい慌てたんですよ」

その言葉に真澄はポカンとした表情になる。まさかそこまでの関係になっているとは完全に予想外であつたのだ。

「あ、そ。ま、ほどほどにしなさいよ」

「それは無理ですね。八幡君と過ごすといつ苛めたくしまいたくなるので」

有栖はそう言うつてから真澄の横を通り過ぎて、自分の部屋に入る。そしてそのままベッドに上がつて、今日撮つたプリクラを眺める。

「覚悟してくださいね。私を辱めた分、これからずっと恥ずかしい思いをさせてあげますから……」

有栖はニツコリと笑つてプリクラを大事そうに持ちながら眺めるのであつた。

同時刻……

「比企谷が恥ずかしがるのを見るためにキスをする……アンタは好きな子を苛めたくない小学生なの？」

真澄は有栖に対する呆れと八幡に対する同情を抱きながら有栖の部屋を見てため息を吐いていた。

## プール

「ああ……怠い」

俺はメチャクチャテンションが低い状態だ。

テンションが低い理由は3つある。1つは夏休み最終日であるからだ。

いよいよ明日から学校が始まり、また他クラスとぶつかり合う事と思うと怠くて仕方ない。まあAクラスと同盟を結んだから相対するクラスは2クラスで済むけどな。

2つ目、夏休み後半についてはひよりと有栖に振り回されまくったからだ。

ひよりは俺の部屋で一緒に読書をする、休憩の際に持ち前の天然っぷりを発揮して一緒に昼寝をしようと普通に提案して、気がつけばベッドの上で抱き合っているなんてザラだ。

一方の有栖は確信犯である。夏休み中はひより同様に俺の部屋に遊びに来たが、俺の膝の上に乗ったり、俺に抱きついて頬にキスやスリスリをしてくるなど、とにかく俺を辱めてくるのだ。

3つ目の理由として昨日寝る直前に突如エアコンが故障してしまった事にある。おかげで部屋は蒸し暑く昨日の夜はガチで地獄だったのは言うまでもない。

エアコンについては昨日の夜に壊れたので今日の朝、電気屋が開く時間に連絡をした。修理は明日以降となった。

よつて俺は熱い夜を明かして新学期を迎えないといけないが、ハッキリ言つて苦痛ではない。

そんな事がありながらも俺は更衣室で服を脱いでいる。余りの暑さにより部屋にいるのが嫌になって、俺は一人でプールに行つてゐる。

他の連中は夏休み最終日だから友達と思ひ切り遊び倒すようだが、俺はただ水に浸かりたいだけだから、一人でも問題ない。

そう思ひながらパパッと水着に着替えて、更衣室を後にする。

そしてプールに着くと沢山の生徒がいた。しかも隅には上級生が運営している売店もあり、ちよつとした祭りのようにも見える。

まあ俺としては流れるプールにてノンビリと流れる事が出来るなら文句ない。

そのままプールサイドをノンビリと歩き、流れるプールに入ろうとしたら、とある男子が更衣室から出てくるのが目に入る。

(綾小路……まさかこんなところで会えるとはな)

堀北会長と凄まじい格闘戦をして、審議では堀北を上手く動かした男……特に有名ではないが俺の勘が強いと言つてゐる。

やり合うような真似はしない。俺は別に喧嘩が強いってわけじゃないからな。

とはいえ折角会ったのだから、少し探ってみるか。

「よう」

そう言つて話しかけると綾小路は無表情のまま俺を見てくるが、コイツロボットかよ？感情の色が見えない。

「確か比企谷だったよな？」

「ああ。比企谷八幡だ。今一人か？」

「いや、もうすぐ堀北達が来る」

なるほどな。そうなると長引くと面倒だし、早めに済ませるか。

「そうか。じゃあ単刀直入に言うが、もし俺が2000万用意したらウチのクラスに来ないか？」

その言葉に綾小路は目を細める。

「どういった意図でそんな提案をしたのか知らないが、俺にそんな価値はない」

「お前に価値があるかどうかは、お前自身ではなく第三者が決める事だ。どの道俺としては戦力になりそうな奴をウチのクラスに引き入れたいからな」

Dクラスにはカスが多いのは事実だが、全員がカスとは思ってない。内何人かは優秀なヤツもいるだろうし、チエックするのは当然だ。

「悪いが遠慮しておく。仮に俺を引き入れたら俺は間違いなく有名人となるが、目立つのは嫌いなんぞな」

なるほどな。まあ一理ある。仮に2000万払って引き入れた場合、スカウトを受けただ生徒は間違いなく目立つし、警戒対象となるだろう。

ならば……

「……わかった。ならスパイにならないか？今後Dクラスの情報を売ったらポイントをやるからさ」

これなら乗ってくるかもしれない。今のDクラスのクラスポイントは75だから、来月振り込まれるプライベートポイントは僅か7500だ。

1プライベートポイントは1円と同等だからDクラスの小遣いは月に7500円。無料の食事や道具があるから生活は出来るが、必要最低限の生活だし、色々な欲求が生まれるのは当然だ。

その言葉に綾小路は眉を寄せ、なにかを考える素振りを見せたかと思えば俺を見てくる。

「……条件次第ならその話を受けても良い」

「何だ？ポイントを大量に欲しいのか？」

「いや。ポイントについてはそこまで求めてない。由比ヶ浜についてだ」

まあそうだろうな。Dクラスの綾小路が出す条件となったらプライベートポイントか由比ヶ浜のどちらかが関係しているに決まっている。

そこまで考えていると女子更衣室から見覚えのある女子数人が出てくる。Dクラスからは堀北に櫛田、以前暴力事件の審議の時に俺達の味方になった佐倉がいる。

また俺達にBクラスの座を奪われた一之瀬もいる。その後ろにいる女子2人は一之瀬のクラスメイトだろう。

向こうも俺達に気付いたのか訝しげな表情を浮かべながらこつちに近付いてくる。

「続きは後だ。俺の部屋は503号室だから夜7時に来てくれ」

小声でそう言う綾小路が頷く。それを確認すると同時に女子達がこつちに着くが会話の内容は聞かれてないだろう。

「わざわざ呼び止めて悪かったな綾小路。じゃあ俺はもう行く」

そう言って切り上げようとするが、進路上に女子達がやって来る。

「何だ？逆ナンなら他の男にやれ」

「そんなわけないでしょう。綾小路君となにを話したのかしら？」

堀北が尋ねてくるが、疑いの色が強い。

「別に俺が何を話そうとお前には関係ないと思うが？それに他クラスの人間と話すのがタブーだというなら、まずお前の隣にいる櫛田に文句を言え」

実際のところ他クラスと話しちゃいけないなんてルールはないし、仮に話しちゃいけないなら、他クラスに大量の友人を持つ櫛田もルール違反ということになる。

「そうね。普通なら気に留めないけど、話す相手が何を企んでるか不気味な貴方なら話は別よ」

「失礼な。俺は別に企んでないぞ。企みは龍園の仕事だ」

俺は進んで何かをするつもりはない。報酬が魅力的ならば、龍園の企みについてバツクアツプするだけだ。

「つか聞きたいんだつたら綾小路に聞けばいいだろう……ま、プライベートな会話にしゃやりでるのは人としてどうかと思うがな」

言いながら俺はこの場から離れようとするが、ある事を忘れてた。

「あ、そうだ忘れてた。一之瀬に提案がある」

「提案？何かかな？」

一之瀬は意外そうな表情で俺を見てくるので俺は口を開ける。

「単刀直入に言うが、ウチのクラスに来ないか？」

その言葉に騒めきが生まれる。当の一之瀬本人はキョトンとした表情に変わる。

「どういう意味かな？」

「言葉通りだ。有栖のクラスとタイマンになった場合に備えて戦力の補充は大切だから

な」

一之瀬はリーダーとしての資質は龍園や有栖に劣っているが、参謀としての力は群を抜いている。龍園が暴れて一之瀬がサポートに徹する体制なら、ウチのクラスはかなり伸びるだろう。

まあ十中八九断られるだろうがな。

「それは無理な相談だね。私は私のクラスで戦いたいからね」

だろうな。少し揺さぶってみるか。

「仮にお前のクラスが0ポイント生活になってもか？」

「うん」

即答……まあダメ元だから特に気にしない。

「そうか。変な質問をして悪かった」

最後にそう言って俺はこの場を離れる。そろそろ流れるプールに入りたいからな。

「それで綾小路君。何を話していたか教えてくれないかしら？」

質問ではあるが強い圧力をぶつけてくる堀北に対して綾小路はため息を吐く。

「話していたというより質問を受けていたのが正確だ。Dクラスに優秀な奴はいるのか、いるなら誰だつて質問をされたな」

綾小路は真顔で嘘を吐く。それに対して他の面々は特に疑う様子を見せない。

「そう……さっきの一之瀬さんへの誘いといい、優秀な人間を引き入れようとしているみたいね」

「でも引き入れるのには2000万ポイントもかかるし、難しいんじゃないかな？」

「無人島でAクラスと結んだ契約の正確な内容がわからないから何とも言えないね」

堀北達が会話する中、綾小路は去って行く八幡の背中を眺める。

(このタイミングで比企谷から接触をされたのは僥倖だな)

元々綾小路は自身の平穩の為にクラスを裏切る気であった。Aクラス又はBクラスに「今後行われる特別試験においてDクラスの情報を全部渡すから、由比ヶ浜を暫くは退学させないでくれ」と売り込む事を考えていた。

綾小路からしたら平穩な学園生活を送る事が最優先であり、茶柱に脅されている状況を好ましく思っていない。

しかし由比ヶ浜の足手纏いっぷりが尋常じゃないので、由比ヶ浜が在学している間は、茶柱に結果を求められる心配もない。

だから綾小路は、由比ヶ浜には出来るだけ長く、最低でも2年の中頃までは在学して欲しいと思っている。

2年の中頃まで由比ヶ浜が在学していたらDクラスは間違いなく逆転不可能レベルまで落ちぶれていると綾小路は確信している。

そしてそんな状態なら茶柱も脅すのをやめてくれる可能性は高い。

(そうなれば卒業まで平穏な生活は約束される。だから堀北。オレは今後Dクラスを裏切る)

未だに八幡の考えについて考察している堀北達を見ながら綾小路は内心にてそう呟く。

綾小路からしたらAクラスは微塵も興味ないのでDクラスがどれだけ落ちぶれようが気にしない。

寧ろ裏切る方が魅力的だ。ポイントを貰えたり、由比ヶ浜を長く在学させ尚且つDクラスを叩けば茶柱からの干渉も無くなり平穏な生活を送れるのだから。

罪悪感は一切ない。堀北についても櫛田についても、佐倉についても仲間だと思つた事は一度もなく、綾小路からしたら道具でしかない。

それは比企谷や龍園や坂柳についても同じであり、便利な道具としか思つてない。

(恨むなら由比ヶ浜を恨め)

綾小路は内心にて最後にそう告げてから堀北達から目を逸らし、ほんやりとプールを眺めるのであった。

## 予定

「あー……気持ちが良い〜」

綾小路と別れた後に俺は流れるプールに入って流れに身を任せる。ただこーやって流れているだけで疲れが取れていくのがハッキリとわかる。

まあ中学時代の夏休みに比べたら全然マシだがな。特に中2の時なんて家でゴロゴロしたい俺を千葉村とか花火大会に引き摺り出す連中がいたし。

そんな事を考えていると、ビーチパラソルの下に龍園がいるのが目に入る。加えて石崎やアルベルトなどの付き人もいる。

向こうも俺に気付き、ビーチパラソルから出るので俺もプールから上がる。

「よう比企谷。てつきり部屋に籠つてると思つたぜ」

「エアコンがぶつ壊れたからプールに涼みに来たんだよ。後今日の夜、お前の部屋に泊めてくれ」

「あん？ひよるか坂柳に頼めば良いだろうが」

「出来るか！」

恋人でない女子に泊めてくれなんて頼めるわけがないだろうが！確かにひよりとは

抱き合いながら一緒に寝たし、有栖とも抱き合ったりキスをされたりしているが、同じ部屋で一夜を過ごすのは無理があるだろう。

すると龍園はいやらしく笑い出す。なんか物凄く嫌な予感がする。

「なるほどなあ……よしわかった。石崎、俺の携帯を持ってこい」

「は、はいっ！」

石崎はそう言つてビーチパラソルの近くに置いてある鞆の中に手を入れる。あの野郎、まさか……！

俺は慌てて石崎から龍園の携帯をぶん取ろうとするが……

「アルベルト」

「OK、Boss」

その前にアルベルトが俺を拘束してくる。

「離せアルベルト！」

「Sorry」

アルベルトは謝るも離す気配を見せない。アルベルトの力は桁違いで、俺なんかじゃ振り解けない。

そうこうしている間に携帯は龍園の手に渡り、龍園は嬉々としながら電話をする。

「おうひよりか……ああ。お前に話があるんだよ」

「待てコラー！マジでやめんむっ！」

アルベルトが俺の口を塞いでくる。この野郎、龍園のフォローが上手いな。

「ああ。比企谷がよ、今日お前の部屋に泊まりたいらしいんだよ……何で俺が電話したって？比企谷が言うのが恥ずかしいらしくて俺に頼んできたんだよ」

この野郎……マジで何て事を言いやがる。これまでのひよりの行動を見れば多分OKを出してくるだろう。実際ひよりのベッドで昼寝をしたこともあるし。

つかひよりの部屋に泊まるのがバレたらヤバい。寮のルールとして夜8時以降、男子が女子のエリアに入るのは禁止である。

クラスメイトとAクラスの女子なら見逃してくれるだろうが、CクラスとDクラスの女子が俺を目撃したら問答無用で学校に訴えるのは明白だ。

ペナルティは退学ではないと思うが、重い可能性があるし出来れば避け「ペナルティ？気にすんな。俺としてもクラスのリーダーとしてペナルティの内容を知りたいからな」……野郎、本当に良い性格をしてやがるな。

「わかった……ああ、伝えとく。じゃあな」

そう言ってから龍園は電話を切る。同時にアルベルトが拘束を解き、満面の笑みを浮かべてくる。

「オーケーだとき。8時前にひよりの部屋に行けよ」

マジか！ひよりの奴、オーケーしたのかよ?!いくら一緒に寝た経験があるとはいえ、泊まりを了承するとは予想外だわ！

現在俺の中では3つの気持ちが生まれている。

1つ目に男と同じ部屋で一夜を過ごす事に対して抵抗を持たないひよりの純真さに対して心配する気持ち

2つ目にひよりにそこまで信用されて嬉しい気持ち

3つ目に……

「死ね龍園」

龍園に対する怒りだ。俺は即座に龍園の腹に拳を振るおうとする。普段暴力を振るわない俺でも今回はイラつときた。

しかし龍園は笑いながら後ろに跳んで簡単に回避する。やっぱ喧嘩慣れしてる奴に拳を叩き込むのは無理か。

「良いじゃねえか。女と泊まれて良い思いが出来るんだからよ」

良かねーよ。緊張でマトモに思考することすら出来ねーよ。

「……もういい。こうなったらひよりに気が変わったと連絡するだけだ」  
「おいおい。ひよりは楽しみにしてんだぞ？」

すると龍園はニヤニヤ笑いながら携帯を突きつけながら操作する。

『もしもし?』

『おうひよりか……』

『龍園君?』

『ああ。お前に話があるんだよ』

『何でしようか?』

『ああ。比企谷がよ、今日お前の部屋に泊まりたいらしいんだよ』

『八幡君がですか?しかし……』

『……何で俺が電話したって?比企谷が言うのが恥ずかしいらしくて俺に頼んできたんだよ』

『そうなんですか?ですが私の部屋に八幡君が泊まるとペナルティが発生するのは?』

『ペナルティ?気にすんな。俺としてもクラスのリーダーとしてペナルティの内容を知りたいからな』

『そうですか……わかりました。では8時前に来るように八幡君に伝えてください』  
『わかった』

『あ、もう一つ。八幡君に楽しみに待ってますともお願いします』

『……ああ、伝えとく。じゃあな』

どうやら龍園は通話を録音していたようだ。ニヤニヤ笑いを強める。

「そんなわけでひよりはお前を楽しみに待ってるらしいぞ。楽しみに待っているひよりを裏切るのか？いつもひよりと読書を楽しんでいるお前が？」

は、半端なくウゼエ……まあそれはさておき、ひよりが楽しみに待っているならドタキャンをし難い。しかも通話相手が俺でないって事は、ひよりは本気で楽しみにしている事になる。

「ペナルティを食らっても文句を言うなよ？」

「もちろんだ。クラスの奴らが反発しても直ぐに黙らせてやる」

「……はあ。なら良い」

俺は結局龍園のイタズラに抵抗するのをやめて、ひよりの部屋に泊まる選択をする。これ以上抵抗しても疲れるだけだ。

「くくつ、土産話に期待するぜ」

「黙れ。つか精神的に疲れて腹減ったから飯奢れや」

「石崎。適当に買つてこい」

「は、はいっ！」

言うなり石崎は全力ダツシユで店の方に向かうので、俺は適当な席に座つて息を吐く。

向かい側には龍園が座り、アルベルトは龍園の側に立つたままだ。

「つたく、夏休み最後なんだから精神を疲弊させんな」

「悪かった悪かった。ま、次のイベントは当分先だから問題ない」

「あん？なんか知つてんのか？」

龍園は確信したような口振りでそう言ってくる。

「概要は知らないが、二学期最初のイベントは10月にある体育祭らしい」

体育祭ねえ……普通の学校なら練習したり、入場門の製作などがあるが、この学校の体育祭は絶対ただの体育祭じゃないだろう。多分他クラスと腹の探り合いをするかもしれない。

なににせよ明日から直ぐに忙しくなるって事はないだろう。

「それとお前に頼みがある」

「テメエ、さつきまで散々俺をからかつておきながら頼み事をするとは良い度胸だな

……まあ良い。で？」

「単刀直入に言うとならDクラスの生徒の1人をスパイにする事が出来た」

「どうやら龍園は龍園でスパイを作っていたようだ。」

「奇遇だな。俺も今スパイを作ろうとしてるな」

「お前もか。ソイツの性別は？」

「男」

「なら別人か。丁度良い。スパイが2人いりや情報がより正確になるな」

「だろうな。人数が多けりゃ良いわけではないが、1人だけだと情報が正確か判断出来ないし。」

「で？頼みつてのは何だ？」

「そう難しい話じゃねえよ。スパイによりDクラスの情報が手に入っても、同盟相手の坂柳が信用するか微妙だから上手く橋渡しをしろってだけだ」

「なんだ、そんな事なら問題ない。これまでも龍園と有栖の橋渡しをしてきたし、今までより綿密に打ち合わせをすれば良いだけだ。」

「そのくらいなら構わないが、体育祭で闇討ちとかをするなよ？」

「コイツの性格上、闇討ちをしてもおかしくないがバレたらペナルティがヤバいだろう。」

「闇討ちは考えてない。寧ろ大々的に叩くことを考えてる。具体的にはな……」

そう前置きして龍園は戦術を俺に話すが、中々にエゲツない戦法だ。

「なるほどな。じゃあそれを確実に成功させるならDクラスの情報、更にはAクラスの協力が必要だな」

「ああ。特別試験は夏休みからで1学期には無かったが、今後はかなりあるだろうし働いて貰うぜ」

「構わないが報酬はちゃんと用意しろよ。お前は俺の王じゃなくて雇い主だからな」

利用価値があるから龍園に協力しているが、利用価値が無くなったら有栖に鞍替えする事も考えている。

「そのつもりだ……しかし石崎の野郎、遅えな」

言われてみれば石崎が戻ってくるのが遅い。もしかして店が想像以上に混雑してるのか？

そう思っていると石崎が走ってくるのが見え、やがて息を切らしてやって来る。

「遅え」

「す、すみません。店は混んでなかったんですが、途中で須藤達Dクラスの奴らに絡まれて……」

なるほどな。あの単細胞に絡まれたら仕方ないな。龍園もそれにより怒りを消す。

「なるほどな。そんなデカイ態度も2学期からは出来ないようにしてやるか」

龍園は悪どい笑みを浮かべながらそう呟き、石崎が持ってきたたこ焼きを食べ始める。

大方龍園は須藤を再度オモチャにするようだ。まあアイツは直ぐに熱くなりやすいから龍園からしたら最高のオモチャだろう。

そう思いながら俺も石崎が持ってきた焼きそばを手にとって食べ始めるが、精神的に疲れた俺には普段食べる焼きそばよりも美味しく感じるのであった。

## 交渉

「つあゝ、疲れた」

夕方6時。俺は自分の部屋に帰るや否やそのまま冷蔵庫にあるお茶を飲む。元々疲れを取るためにプールに行ったのに更に疲れてしまった。

理由は簡単、飯を食った後は龍園らと行動を共にしたのだが、途中でCとDの連中と鉢合わせしたからだ。

その際に龍園は堀北や一之瀬にセクハラに近い挑発をして、それにより須藤がキレ龍園が更に煽ったりしたからだ。

煽る事そのものを咎めるつもりはない。それも戦術の一つだからな。

ただ俺がいる時にはやめて欲しい。俺は喧嘩が強い訳じゃないし、八つ当たりを食らうのは嫌だしな。

ともあれお茶を飲んだら動かないといけない。7時に綾小路が来るし、8時前にはひよりの部屋に移動しないといけないからな。

俺はお茶を飲むとそのまま風呂場に行き、浴槽を洗ってからお湯を沸かす。ひよりの部屋に泊まるのは承諾したが、ひよりの部屋の風呂を使うのはマズイからな。

予定としては6時半までに風呂から上がって、7時までには晩飯を済ませて、7時に綾小路と話して、綾小路が帰ったらひよりの部屋に行く流れだ。

そう思いながらも俺は水着を洗濯機に入れ、パパッと服を脱いで風呂に入る。身体を洗っている間に風呂は沸くだろうしな。

しかし龍園の奴、マジでぶっ飛んだ誘い方をしやがって……俺が泊まりたいなんてどんなプレイボーイだよ？

身体を洗うと同じタイミングで風呂が沸くのでそのまま入る。それによつて疲れが取れてくる。

このままずっとこうしているのも悪くないが、綾小路との話し合いやひよりの泊まり会が……

『おやすみなさい……八幡君』

……や、ヤバい。頭の中で紫色の薄いネグリジエを着て俺に抱きつきながらお休みの挨拶をしてくるひよりが浮かんでしまった。

抱きつきながらお休みの挨拶するのは百歩譲つてわかるが、ネグリジエ、それもエロ系は無いだろ！

俺は首を振りながら煩惱を振り払うべく、湯船から上がる。そして身体を拭いて着替えるもネグリジエを着たひよりが頭から離れる事はなかった。

ピンポーン

風呂から上がって20分ちよい、漸く煩惱が弱くなつた頃に丁度同じタイミングでインターフォンが鳴る。

モニターでカメラを確認すると案の定、綾小路だったので玄関に向かってドアを開ける。

「わざわざ呼び出して悪かったな。とりあえず入ってくれ」

言いながら廊下を見回すが誰もいないので問題ない。

「邪魔をするぞ」

そう言つて綾小路は中に入るの俺は先導して、クッションを出してから冷蔵庫にあるお茶を取り出しコップに注いでそれを渡す。

綾小路がそれを飲んだのを確認した俺は口を開ける。

「んじゃ単刀直入に聞くが、ウチのクラスに情報を渡す条件を話してくれ」

由比ヶ浜に関する事は知つてるが、詳しく聞く前に邪魔者が現れたから昼には聞けな

かったんだよな。

「ああ。そっちが同盟を結んだ理由は由比ヶ浜を叩く為だが、暫く……2年の中頃まで由比ヶ浜を退学させないで欲しい」

これは予想外の頼みだな。由比ヶ浜がいる限りウチと有栖のクラスは足並みを揃えられるし、Dクラスの生徒からしたら一刻も早く由比ヶ浜が退学して欲しいはず。

にもかかわらず由比ヶ浜を直ぐに退学させないで欲しい……その事から察するに綾小路はAクラスについて微塵も興味を持ってない事を意味する。

(しかし何故だ?)

由比ヶ浜が苦しむ姿を長く見たいって理由ではないだろう。そんな理由なら態度や目に表れるが、綾小路の目には感情が乗ってないし。

まあ無茶な要求じゃないし俺としてはOKしても良いが……

「話はわかった……が、それを決めるのはあくまで龍園と有栖だから2人の返事次第だ」俺はリーダーじゃないし、俺の一存で決めていい話でもない。

「ああ。2人には「由比ヶ浜が苦しむ姿を見たい」と言えば納得するだろうな。龍園は知らないが坂柳は間違いなく由比ヶ浜を恨んでいるし交渉の余地はある」

だろうな。有栖は由比ヶ浜に散々ガキ呼ばわりされてるし、鬨りたいと考えているだろう。

「わかった。とりあえず2人には話をしておくが、2人が了承した場合に備えて連絡先を交換したいが……」

「念には念を入れて適当なメールアドレスを作っておく」

俺の言葉を綾小路が引き継ぐ。他人に携帯を見せるつもりはなからうが、細心の注意を払っておくのは当然だ。

俺達は適当なメールアドレスを作り、そのまま連絡先を交換する。

「今後は極力接点を持たないようにするのが良いな?」

「ああ。BクラスのN.O. 2と話してるのを見られたら間違ひなく面倒な事になる。もしもの時は事前に連絡して深夜に会わせてもらう」

ま、それが妥当だな。深夜に非常階段で話せば第三者に聞かれる事はないだろう。

「それと報酬についてだが、特別試験に関するDクラスの情報なら前金で3万、その情報が合っていて特別試験で有利を取れたら試験後に7万で良いか?」

「随分と羽振りがいいか」

「情報は立派な武器だからな」

それに高くはないだろう。もしも優待者当て試験のような試験が今後あれば、何百万のプライベートポイントを稼げる事も容易くなるかもしれないし。

「わかった。それで構わない」

「決まりだな。しかしお前、幾ら勝ち目が薄いから躊躇いなくクラスを売るなんて中々やるな」

「オレは外部との接触が制限されている事を理由に入学したからな」

なるほどな。俺も同じ理由だし、中学時代に色々あったのだろう。まあ俺の場合は雪ノ下と由比ヶ浜も同じ学校に入学して最悪だけど、

そこまで考えていると綾小路は立ち上がる。

「話をついたしオレは帰る」

「わかった……つと、バレたら面倒だから俺が先に行く」

そう言うってから俺も立ち上がり、玄関に向かう。そしてドアを開けて廊下を見るが人はいない。

同時に綾小路にアイコンタクトを送ると綾小路は頷き、俺の横を通って、非常階段の方へ向かう。

綾小路が見えなくなったのを確認した俺はドアを閉めて、ポケットから携帯を取り出して有栖に電話をかける。

『もしもし。どうしましたか八幡君』

「実は有栖に頼みがあるんだが、良いか？」

『はい。何でしょう』

「実はDクラスにいる生徒の1人をスパイに仕立て上げる事に成功したんだよ」

『そうでしたか。そうなるとDクラスの情報をAクラスにもくれるのですか？』

「渡しても良いんだが、そのスパイから『由比ヶ浜が苦しむ所を見たいから、すぐに退学させないで鬩つてくれ』って頼まれたんだよ」

まあ実際綾小路がそう思っているとは思わないが。アイツの目を見る限り全く興味なさそうだし。

『なるほど。まあ良いでしょう。私としても真綿で首を絞めるのも嫌いじゃないですから』

有栖はDSだから、やつぱり乗ってきたか。

「悪いな。じゃあまた明日から宜しく頼む」

『ええ。何でも二学期からは体育祭があるようなのでルールが判明次第、足並みをそろえていきましよう。失礼します』

有栖はそう言つて通話を切る。それを確認した俺は携帯をポケットにしまい、リビングに戻り明日の準備をする。今日はひよりの部屋に泊まるので、明日はひよりの部屋で朝を迎える。

もしかしたら寝不足になる可能性があるので支度は今日のうちに済ませておきたい。準備を済ませた俺は部屋を出てエレベーターではなく、非常階段を利用してひよりの

部屋に向かう。万が一見られたりしたら絶対に面倒な事になるからな。

そう思いながらも階段を上り続けていると、上の方から微かに足音が聞こえてくる。まさか俺以外に非常階段を使う奴がいるとはな。

と、ここで俺は掃除具が入っているロッカーが目に入ったので中に入ってドアを閉める。誰が降りてくるかはわからないが、1年生寮である以上知った顔の可能性が高い。

息を殺して待機していると足音が大きくなり、それに連れて声も聞こえてくる。

「大丈夫よ由比ヶ浜さん。明日もしも由比ヶ浜さんを悪く言う人が出てきたら、学校に苛めについて報告すると脅すわ。苛めはクラスポイントに悪影響である以上、収まるはずよ」

「ありがとう……迷惑かけてごめんねゆきのん」

「貴女は私の親友だから当然よ。だから由比ヶ浜さんは早く立ち直って、あの屑3人を潰すのに協力して」

「もちろんだよ！あたしは何にも悪いことをしてないのに……絶対に許さないし！」

お前らかよ……

2人が通り過ぎるまで息を殺す。多分エレベーターを使ってクラスメイトと会った時に備えた雪ノ下の配慮だろう。

(しかし龍園や有栖を潰せると思うなんておめでたい頭をしてるな)

龍園や有栖がお前らが勝てる程度の実力ならDクラスはとつくの昔にAクラスに上がってるわ。

内心呆れながらも2人が離れるのを待ち、話し声が聞こえなくなったタイミングでロッカーから出て、再度階段を上る。

そしてひよりの部屋がある階層に着いたので、廊下に繋がるドアを開けて人がいない事を確認してから廊下に出る。

音を立てないように注意しながらも遂にひよりの部屋の前に到着したのでインターフォンを押す。

すると部屋からパタパタと足音が聞こえてきて……

「お待ちしましたよ、八幡君」

ひよりが満面の笑みを浮かべて俺を迎えてくれた。

## お泊まり会（前編）

「さあ、入ってください」

「お邪魔する」

ひよりが入るように促すので、会釈してから玄関をくぐり、靴を脱ぎリビングに入る。ひよりの部屋には何度か入ったが、泊まる事は初めてだからかいつもよりも緊張してしまう。

「それにしても八幡君がお泊まりをしたいと考えているとは思いませんでした」

ひよりはそう言うってくるが、俺は元々ひよりの部屋に泊まるつもりはなかった。エアコンがぶつ壊れているので龍園の部屋に泊めて貰おうと思ったが、龍園が俺をからかう為、ひよりに「比企谷がひよりの部屋に泊まりたがっている」と言ったのでひよりの部屋に来ているのだ。

しかしその事を言うつもりはない。何故なら……

「私、お泊まり会は初めてですから楽しみです」

満面の笑みを浮かべるひよりを見てみると、水を差す気が失せてしまうからだ。過程はどうであれ、楽しそうにしているひよりの笑顔を壊すのは気がひける。

しかしどうしても気になる点については質問させて貰う。

「けどひより。男の俺が泊まって嫌じゃないのか？」

そう尋ねるとひよりは不思議そうに首を傾げる。

「そうですね……普通お泊まり会といえは男子同士、女子同士であり、異性同士といふのは忌避感を抱きますよね」

ひよりの言葉に頷く。いくら仲が良くても同じ部屋で夜を過ごすのは女子からしたら忌避するものである可能性は高い。

「実際私も八幡君以外の男子の希望でしたら遠慮してました。しかし八幡君が来た時は嬉しく思いましたが、何故でしょう？」

ひよりは不思議そうに首を傾げるが、それって……

「あ、もしかして八幡君って実は女子なんですか？」

「違えよ！」

そう来るとは思わなかったわ！というか俺の見た目で女だったらソイツはある意味ヤバいと思うぞ。

「冗談です。ただ八幡君とお泊まり会をしたいというのは本当です」

ひよりはそう言ってくるが、ハッキリと言われるとこっちとしては恥ずかしい。

「……そりゃどうも。それにしても明日から二学期だな」

「はい……ですが、噂では二学期が始まって直ぐに体育祭があるみたいで憂鬱です」

ひよりは嫌そうにため息を吐く。確かにひよりの運動神経はクラスでもビリと言っても過言じゃないほど悪い。

「それは俺もだな」

俺も運動能力が高くない。ひよりほどではないが、クラスに貢献出来るかと聞かれたら首を横に振る。

「ま、避けては通れない道だし、一緒に頑張ろうぜ」

「そうですね……あ、もしも二人三脚のような競技があつたら一緒に走りませんか？嫌な運動も仲の良い八幡君とやれば余り嫌な思いをしなくて済むかもしれないです」

「それは龍園の采配次第だな」

まあ可能性はあるだろう。俺もひよりも運動神経は良くないし、相性が良ければ組める可能性はある。

「そうですね。体育祭の競技がわかったら龍園君に頼んでみます」

ひよりはそんな風に言ってくるが、そこまでして組みたいのだと理解するとむず痒いな……

「それと八幡君。明日ポイントが支給されるのでまた新刊を買いに行きませんか？」

ひよりは体育祭の話題から本の話題に変えてくる。俺とひよりは基本的にポイント

が支給された日には必ず本屋に行くから、恒例行事のように誘ってくる。

「別に構わない。あ、それ以外にも電気屋によつても良いか？ マツサージチエアを買いたくてな」

「もちろん大丈夫ですよ」

マツサージチエアは数十万するのもあるが、無人島試験での活躍によりAクラスは龍園に毎月117万のプライベートポイントを払い、龍園は俺に毎月58万5千ポイントの小遣いを払うことになっている。

ひよりが頷くとピロンと軽快なメロデイが流れる。風呂が沸いた事を告げるメロデイだ。

「すみません。お風呂を沸かしていました。八幡君は入りましたか？」

「当たり前だ。ひよりの部屋の風呂に入ったら絶対にひよりの裸を想像してしまう自信がある。」

「ああ。自分の部屋で入って来たし、俺に気を遣わないで入ってくれ」

「すみません。私がお風呂に入っている間、退屈でしたら棚にあるものを見ていてください」

そう言うってからひよりはクローゼットの方に向かい、引き出しから寝巻きや下着を取り出すので慌てて目を逸らす。コイツ、いくらなんでも警戒心無すぎだろ?!

つーか紫って……ひよりって結構過激な下着を好むんだな。

さつきチラツと見えたひよりの下着により顔が熱くなるのを自覚する。

当の本人は全く気にしないで、風呂場に向かって行ってしまふ。俺は顔に溜まった熱を発散するべく、息を吐きながら本棚を見る。

よく見ると読んだことがない本があるので気を紛らわすべく手に取る。

そして本棚から引き抜こうとしたら、手に取った本の隣にあつた手帳も一緒に本棚から出て床に落ちる。

だから俺は元の場所に戻そうとしたが手を止めてしまふ。手帳は落ちた際に中が見えるように開いていた。

それだけなら手を止めないが、中身が予想外だったのだ。

6月19日 今日八幡君の部屋にて八幡君と一緒に読書をしました。八幡君と読書するのは日課ですが、日が経つにつれて八幡君の存在がどんどん大きくなっているのがわかります。

願うならお互いに退学する事なく卒業まで、そして卒業してからも八幡君と読書をしてたいです。

そんな事が書かれていた。表紙を見れば diary と記されていた。やはりこれはひよりの日記だろう。

しかし内容が俺に関する事、それもかなり好意的な内容だ。顔に溜まった熱が更に増加してしまう。

普段からひよりと仲良くしているが中学時代の事もあり、俺は心の何処かで「ひよりは打算があつて付き合っているのかもしれない」と思うことがあつた。

が、こんな内容が書かれた日記を見れば、いくら俺でもそれが間違いである事は理解できる。自分の部屋というプライベート空間で書かれた内容だからな。

それを理解すると恥ずかしさと一緒に嬉しさも生まれてくる。こんな風に思われるなんて生まれて初めてだからな。

(しかしいつまでも他人の日記を見るのはマナー違反だから、棚に戻しておこう)  
そう思いながら俺は日記を元の場所に戻そうとした時だった。

ピロン♪

「っー」

風呂場に繋がるコントロールパネルから音が聞こえて、思わずひよりの日記を落とすてしまう。コントロールパネルを見れば風呂場から呼び出しがあつた。

「どうした?」

『あ、すみません。ボディースープが空になったので持ってきて貰えないでしょうか？』  
「何処にある？」

『冷蔵庫の近くにあるビニール袋の中にあります』

「わかった。風呂場の入り口に持っていく」

俺は通話を切ってから冷蔵庫の近くに向かい、洗剤やスポンジが入ったビニール袋から詰め替え用のボディースープを取り出して脱衣所に向かう。

そして洗濯カゴを見ないようにして風呂場のドアの前に置く。

「ドアの前に置いとくぞ」

『ありがとうございます』

礼を言われた俺は脱衣所を出てドアを閉めると、ガラガラって音が聞こえる。つまり裸のひよりがボディースープを……って！何を考えてんだ俺は?!

俺はまた顔が熱くなるのを自覚しながらもリビングに戻る。そしてさっき落としたひよりの日記を元の場所に戻そうとするが、再度動きを止めてしまう。

日記は落とした際に違うページになっていて、思わず見てしまったが……

8月30日 ここ最近八幡君の事ばかり考えていて、ふわふわした気持ちになってい

ます。八幡君と話したいと思ったり、八幡君と会いたいと思ったり、八幡君に抱きしめられたい、と思つています。

恋愛小説を読むと、女子は好きな男子の事を考えるとドキドキしたり、幸せに思つたり、ふわふわした気持ちになる……といった表現があります。

高校に上がるまで異性と深い関わった事がないからわかりませんが、八幡君と恋人になつた事を想像すると幸せな気分になりますし、八幡君に恋をしているのかもしれない。

八幡君が私にどんな気持ちを抱いているかわかりませんが、私と同じ気持ちだと嬉しいです。

さつき見たものより遥かに凄い内容が書かれているのだった。

## お泊まり会（後編）

俺はかつてないほどドキドキしてしまっている。顔が暑過ぎて倒れてしまいそうだ。その原因は俺の手元にあるひよりの日記だ。

8月30日　ここ最近八幡君の事ばかり考えていて、ふわふわした気持ちになつていきます。八幡君と話したいと思ったり、八幡君と会いたいと思ったり、八幡君に抱きしめられたい、と思つています。

恋愛小説を読むと、女子は好きな男子の事を考えるとドキドキしたり、幸せに思ったり、ふわふわした気持ちになる……といった表現があります。

高校に上がるまで異性と深い関わった事がないからわかりませんが、八幡君と恋人になつた事を想像すると幸せな気分になりますし、八幡君に恋をしているのかもしれない。ん。

八幡君が私にどんな気持ちを抱いているかわかりませんが、私と同じ気持ちだと嬉しいです。

何度見ても書いてある事は変わらず、見直す度に恥ずかしくなってくる。

俺に対して恋しているかもしれないなんて書いてあるのを見たら誰だっけそうなるだろう。

しかもひよりは見た目も性格も良い女子だ。見た目は良いが性格はブスな奴は中学時代に飽きるほどみたが、ひよりみたいな女子は滅多にいない。

(マジでどうしよう。ぶっちゃけひよりの顔をマトモに見れる気がしないんだが)

ひよりを見たら絶対に挙動不審になる自信がある。それで日記を見た事を見られただら悶死する可能性もあるだろう。

そこまで考えているとガラガラって音が聞こえてくるので、俺は慌てて日記を元の場所に戻す。今の音は風呂場のドアが開いた音だから、後3分もしないでひよりが戻ってくるだろう。

俺は日記を戻してから深呼吸をして顔に溜まった熱を少しずつ出していく。そうでもしないと熱で気絶してしまいそうだからな。

「お待たせしました」

暫く深呼吸をしていると足音が聞こえてきて、水色のパジャマを着たひよりが戻ってくる。涼しげな格好は清楚なひよりに似合っている。

ひよりの寝間着姿に見惚れているとひよりは不思議そうに俺に近寄ってくる。

「ど、どうした？」

さつきひよりの日記を見たせいか挙動不審になってしまふ。

「八幡君の顔が赤いですから気になりました」

お前の日記の所為でな。勝手に見た事については俺が悪いが、あんな内容を見て平常心を保つのは無理だ。

「大丈夫だ。夏だから熱が出たのかもな」

そう言うときひよりは不思議そうな表情のまま、俺に近寄り……

ピトツ

そのまま自分の額を俺の額に重ねてくる。

（っーい、いきなり何をっ?!）

予想外の行動に加えて、間近にあるひよりの可愛らしい顔により、俺の顔はこれまでの比にならない程、熱が生まれる。

「どんどん熱くなってますね。エアコンの温度が高いからでしょうか？」

違います。ひよりの日記と言動が原因です。

まあ馬鹿正直に言うつもりはないので、小さく頷くとひよりはエアコンのリモコンを操作して温度を下げる。

「2度下げました。もしも体調が悪いなら薬の準備をしますから言ってください」

ひよりは俺に対して気遣いをしてくるが、この気遣いに打算がないのはわかったので、凄く嬉しく思う。

「大丈夫だ。ありがとな」

「どういたしまして。それと本棚にある本で気に入った作品はありましたか？」

「それなんだが本人が了承したとはいえ、女子の棚に触るのは気が引けて見てないんだ」「私は気にしないのに律儀ですね。ではこの本を勧めますよ」

ひよりはクスリと笑ってから、俺がまだ読んだ事のない本を紹介してくれるので、本の概要についてしっかり聞くのだった。

それからお互いに本について話し合うが、やがて11時を回った辺りでひよりがあくびをしてから俺を見てくる。

「すみません。眠くなってきたのでそろそろ眠りませんか？」

「別に構わない」

俺は基本日が変わってから寝るが、11時くらいに寝る事もあるし。

「ありがとうございませす。では寝ましようか」

ひよりは礼を言ってからベッドに入り、掛け布団を開いたまま俺を見てくる。

これはつまり一緒に寝るってことだろう。確かに俺はこれまでひよりと俺のベッドで寝た事があるし、ひよりの言動におかしな事はない。

しかしひよりの日記を見たからか、今の俺は恥ずかしさ故に忌避感がある。

（まあ頭の良いひよりなら、俺がここでいつもと違う態度を見せた結果、俺が日記を見たと察する可能性があるな）

結果、俺はひよりの誘いを拒否しない選択をして、そのままひよりのベッドに上がる。それと同時にひよりは俺の背中に手を回して抱きついてくる。ひよりには何度も抱きつかれたが、今までよりも遥かに恥ずかしい。

「ふふっ。やっぱり八幡君の温もりは気持ちいいです」

ひよりはそう言って俺の胸元でスリスリをしてくる。ヤバい、メチャクチャ可愛い。こんな可愛い女子に想われているのかもしれないなんて……

もう心臓が破裂するんじゃないかと思っていると、ひよりはスリスリをやめて俺を見上げてくる。

「ところで八幡君。前から思っていました、私と過ごすのは楽しいですか？」

「いきなりどうした？」

「私は楽しいです。ここ最近はいつも八幡君の事ばかり考えていて、ふわふわした気持ちになって幸せなんです」

日記に書いてあつた事に近い事を言ってくるひよりにドキドキする中、ひよりの話は止まらない。

「ですがこの気持ちは私だけで、八幡君は違いかもしれないと思つてしまうのです。八幡君はどうですか？」

ひよりは不安そうな眼差しで恐る恐る見上げてくる。俺の勘違いかもしれないが、ひよりの瞳は「私なんかと過ごして楽しいですか？」と言つているように感じた。

そんなひよりを見てみると胸が痛くなる。

「もし、もしも八幡君が嫌々私に付き合つているなら無理強いは「それ以上は言うな」あつ……」

俺は自己評価の低いひよりをこれ以上見ていられず、咄嗟にひよりを抱きしめていた。対するひよりは驚きながら俺を見てくる。

「俺もお前と同じ気持ちだ。お前と過ごす時間は穏やかで楽しいと思つてる。嫌々付き合つた事はないし、嫌なら関わらない」

俺はそう言つて抱きしめる力を強める。抱きしめるなら柄じゃないが、ひよりの不安そうな表情が無くなるなら何でもする。

ひよりを抱きしめると同時に確信する。

(……ああ、もう認めるしかない。俺、ひよりの事が好きだ)

俺は今まで恋愛をした事がないから、恋愛的な意味なのか親愛的な意味なのかはわからない。

しかしひよりが悲しそうな表情をすると嫌な気分になるし、ひよりの笑顔を見ると幸せな気分になる事から察するに、俺にとつてひよりは大切な存在で、これからもずっと一緒にいたいというのは間違いない。

そこまで考えているとひよりを強い力で抱きしめている事を理解する。今までひよりを抱きしめた事は何回もあるが、今までに比べたらかなり強いのは間違いない。

だから俺はひよりに回した手を緩めようとするが、ひよりが強く抱きしめてくる。

「緩めないでください」

「いや、でもな「もつと……」もつと?」

「もつと八幡君の温もりを強く感じたいです……だから緩めないでください……」

ひよりは上目遣いで俺におねだりをしてくる。そんなひよりを見ていると拒否する事はできず、俺は抱きしめる力を強める。

「あつ……八幡君……八幡君の温もりが伝わって幸せです……」

ひよりは更に抱きしめる力を強める。普段非力なひよりからは想像出来ない力だ。

しかし痛みは感じない。ひよりの言ったように俺もひよりの温もりが伝わってきて幸せの方が痛みより上回っているからだ。

「ひより……」

「八幡君……八幡君……」

ひよりは俺を強く抱きしめたまま、何度も俺の名前を呼んで甘えてくる。

そんな甘えん坊全開のひよりに俺は抵抗をする事なく、眠りにつくまで抱きしめ続けるのだった。

翌朝……

「ふあく……」

目を覚ましたひよりは伸びをする。同時に自分と向き合いながら眠っている八幡の存在に気づき、幸せな気分になる。

「おはようございませう八幡君。朝食を作りますからゆつくり寝てください」

ひよりは微笑みを浮かべながらベッドから降りて、キッチンに向かおうとするが、本棚の前で動きを止める。

「そういえば昨日の分の日記はまだでしたね」

ひよりは本棚から日記を取り出して勉強机と向かい合って日記を書き始めた。

8月31日。今日は夏休み最後の日で、八幡君が私の部屋に泊まりに来てくれました。

その際私は八幡君に私と過ごすのは楽しいかと質問しました。私が八幡君と過ごす事に楽しさを感じていても、八幡君が私と過ごす事に楽しみを感じているか不安だったからです。

それに対して八幡君は私に同じ気持ちであると伝え抱きしめてくれました。そんな八幡君に対して私はかつて感じた事のない幸せに包まれ、眠りにつくまで八幡君に甘えてしまいました。

それによって私は自分の気持ちをハッキリと理解しました。

私、椎名ひよりは比企谷八幡君に恋をしています。八幡君を気に入っているであろう

坂柳さんには渡しません。

## リベンジマツチ

「ん、んんっ……」

良い匂いがしたので目が覚める。窓を見れば朝日が部屋を照らしている。

匂いがする方向を見れば……

「あ、おはようございませう八幡君。朝食はもうすぐ出来ますよ」

エプロンを着たひよりが笑顔で挨拶をしてくれる。そんなひよりに見惚れながらも俺は昨夜ひよりの部屋に泊まった事を思い出した。

同時に顔が熱くなる。俺は昨日、友人としてか異性としてかはわからないが、ひよりの事が好きである事を強く自覚したのだ。そんな彼女が朝から迎えてくれるとなれば恥ずかしい。

ともあれ挨拶をされた以上、こちらでも挨拶を返さないといけない。

「おはようひより。わざわざありがとな」

「私は自炊をしますから気にしないでください」

ひよりはそう言つて皿に料理を盛り付けるので、俺は皿や食器をテーブルの上に運ぶ。

全ての料理を運び終わると、ひよりはエプロンを脱いで俺と向かい合う。

「では……頂きます」

「頂きます」

挨拶をして食べ始めるが凄く美味しい。ひよりの作る飯は何度も食ったが全く飽きる気はしない。

「どうですか？お口に合いますか？」

「凄く美味しい。ひよりは将来良い嫁になるだろうな」

見た目も性格も良く、料理の腕もあるし、ひよりの夫になる男はそれだけで人生の勝ち組になるだろう。

そう思っているとひよりは頬を染めて俺をチラチラ見てくる。そんなひよりらしくらぬ行動に戸惑ってしまう。

「どうかしたか？」

「い、いえ。何でもありません」

ひよりはテンパリながらも何でもないと返してくる。何でもないって事はないだろうが、本人がそう言うならばこれ以上聞くのは無粋だな。

そう判断した俺は食事を再開するのだった。

(良いお嫁さん……八幡君のお嫁さんに……)

10分後……

「じゃあひより。また学校で」

「はい。また学校で」

飯を食った俺はひよりと挨拶を交わしてひよりの部屋を出て、非常階段を使って階層を下る。

そして自分の部屋にある階層に到着したのでドアを開けると……

「あ」

何と廊下に有栖がいて鉢合わせしまった。予想外の邂逅に驚く中、有栖は楽しそうに笑いながら近寄ってくる。

「おはようございませう八幡君。非常階段を使うとは珍しいですね。もしかして椎名さんの部屋に泊まっていましたか？」

え？何でわかったの？もしかしてひよりの部屋に出入りする所を見られたのか？

疑問に思っていると有栖はクスリと笑う。

「ふふっ。冗談で言いましたが、真実みたいですな」

ハツタリかよ?! 畜生、的確だったら黙つちまったが、シラを切るのが正解だったようだ。

「頼む。黙つといってくれ」

夜8時以降、男子が女子エリアに行くのは校則違反だ。龍園は怒らないと言ったが、第三者に知られたくないからな。

「良いですよ。ただし条件として私ともお泊まり会をしてください」

「待て。校則違反をした俺が言うのもアレだが、だからって校則違反を勧めるな」

それで罰を受けるのは俺だからリスクがデカ過ぎる。

「問題ありません。男子が20時以降に女子エリアに行くのは校則違反ですが、その逆は校則違反ではないので私が八幡君の部屋に泊まります」

な、なるほど……確かに女子が夜8時以降に男子エリアに行つてはいけなんな校則はないな。つかそれを理解できりゃ、ひよりを俺の部屋に呼ぶべきだったな。

話を戻すが、有栖の性格的に断るのは無理だろう。

「わかつたよ。好きな日を指名しろ」

「ありがとうございます。楽しみにしてますね」

有栖はそれはもう良い笑顔でお礼を言ってくる。コイツには一生勝てる気がしないな。

「というかお前は何か用事があったのか？」

「はい。八幡君と一緒に学校に行きたくなったので迎えに来ちゃいました」

「物好きな奴だな。まあとりあえず上げれ」

「お邪魔します」

言いながら俺は自分の部屋のドアを開けて有栖を迎え入れると、有栖は丁寧な礼をして部屋に入る。

「朝のHRまで時間があるし、茶でも飲むか？」

「では紅茶をお願いします」

有栖を座らせてからキッチンに立ち、お湯を沸かし始める。

「それにしても今日から2学期ですが、楽しい事があると良いですね」

「そうだな。ま、お前の場合、体育祭に参加出来ないから最初は楽しめないかもな」

「それでもありません。Dクラスを潰す戦略を練る際に楽しめれば大丈夫です」

ま、有栖ならそう考えるな。それで龍園も色々悪巧みをするだろうし、Dクラスは阿鼻叫喚と化しそうだ。

つと、龍園で思い出したが、自分の仮IDに税金として3万入れないとな。

そう思いながら俺は携帯を取り出して、仮じゃない方のIDを確認すると、昨日より60万以上増えている。これは毎月学校から支給されるポイントに加え、無人島試験の件で龍園から毎月58万5千ポイントを貰う契約を結んだからだ。

そして俺はその中から3万ポイントを自分の仮IDに移す。仮IDを見れば296万ポイント入っている。

税収制度は優待者当て試験が終わってから始めて、優待者当て試験で稼いだポイントの中から200万を俺の仮IDに入れ、毎月1人当たり3万振り込む事が決まっている。

そこで296万入ってるって事は32人が今月分の税金を納めた事を意味する……あ、今ちょうど299万になった。

そこまで考えているとお湯が沸いたので有栖の為に紅茶を淹れて、俺は日本茶を淹れ、テーブルに持って行く。

「どうもありがとうございます」

有栖は礼を言ってからチビチビ飲むが、普段クールな有栖がそんな風に飲むと子供っぽく見えて癒されるな。

「何か失礼な事を考えましたか？」

「いや、全く」

「……まあ良いでしょう。ですが失礼な事を考え続けた場合、お仕置きをしますからね？」

「お仕置きって何だよ？」

「そうですね……食堂で八幡君の唇にキスを……」

「止めろ。絶対止めろ」

そんな事をされたら俺は悶死してしまうだろう。

「冗談です」

「タチの悪い冗談は止めろ……つかキスをするとか言ったが、あの時にチキったお前には無理だろ？」

「ご冗談を。八幡君が怖気付いたのでしょう？」

「まさか」

有栖は心外とばかり言ってくるが、有栖のほうが早くビビったと俺は考えている。

そこまで考えていると有栖は口を開ける。

「でしたら証拠を示しましょう」

言うなり有栖は俺に近寄り……

ちゅっ

頬にキスをしてくる。それを理解すると俺の顔が熱くなってくる。

「つーい、いきなり何を……!」

対する有栖は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ふふっ。頬にキスをされただけで慌て過ぎですね。それだけの慌てようならば、私にキスをされそうになったら逃げるでしようね」

そういう事か。やってくれたなオイ。

「やはりあの時は八幡君が怖気づいたみたいですね」

有栖がドヤ顔を浮かべてくる。ぶっちゃけイラツとした。

（いつもいつも有栖にはマウントを取られっぱなしなのは納得いかない……偶には反撃するか）

そう判断した俺はドヤ顔を浮かべる有栖に近寄り、いつもやるように有栖をギュッと抱きしめる。何十回も抱きしめたから恥ずかしい気持ちはない。

そしてそのまま有栖が俺にやったように有栖の頬にキスを落とす。どうにも有栖が相手だと負けっぱなしは嫌だ。

「は、八幡君っ?!」

有栖は真つ赤になってテンパリだす。

「随分テンパってるな」

そう言う和有栖はハツとした表情になってから、睨みつけてくる。ブルーメランが返つ

てきた怒りはデカイようだ。

「……言ってくれますね。でしたらもう一度勝負をしましょうか？」

勝負とはプリクラの一件についてだろう。

俺としてはそれでも構わないが……

「そうしたいのは山々だが、遊んでるうちに朝のHRまで15分を切ってるからまた今度な」

時計を見ればかなり進んでいた。これ以上遊んでいたら遅刻……いや、有栖は足が不自由だから遅刻するだろう。

「あつ、そうですね」

「まあ遊びに関わった詫びとして学校まで運んでやるから安心しろ」

「お心遣いありがとうございます。お言葉に甘えます」

言いながら俺は日本茶を飲み干して、火の元を確認してから鞆を肩にかけてから有栖をお姫様抱っこして部屋を出た。

そしてそのまま学校までお姫様抱っこを続けたが、遅刻ギリギリであつたことから、他の生徒に見られずに済んだのは不幸中の幸いと言えるだろう。

## 新学期

「んじゃここ降ろすぞ」

朝のHRが始まる3分前、俺は誰も居ない階段の踊り場にて有栖を降ろす。ここからなら有栖も遅刻しないで自分の教室に行けるだろうし。

「わざわざありがとうございます……んっ」

「ちよっ！」

すると有栖は再度俺の頬にキスをしてくる。同時にまた顔に熱が生まれる。

「ふふっ、やっぱり照れてる八幡君は可愛いです「お返したコラ……んっ」ひやあつ！」

お返しに有栖の頬にキスをする。有栖はさっきのように慌てだす。最早俺の中でコイツに対するキスは愛情表現ではなく、マウントを取るための武器となっているので恥ずかしいと思わない。

「じゃあまたな」

俺はジト目で見てくる有栖に会釈をしてから自分の教室に向かう。そして教室に入ると殆どの生徒が揃っていた。

「よう比企谷。お前にしちやギリギリだな。ひよりは既にいるから泊まりに関する事が

理由じゃないが、何かあったか？」

最初に話しかけてきたのはドアの近くにいた龍園だった。

「単純に忘れ物だ。校門をくぐる直前に筆箱を忘れてるのに気付いた」

「ご愁傷様だな。まあそれはいい。それより税金は入ってるか？」

「部屋を出る直前に299万入ってたし大丈夫だろ……ああ、問題ない」

仮IDを表示して龍園に見せる。そこにはちゃんと320万のプライベートポイントがある事が表示されている。龍園含み全員が納税したようだ。

「それと比企谷。放課後坂柳と取り引きをする予定だからお前も来い」

「体育祭に関してか？」

「同盟についてだ。まあ体育祭のルール次第ではそれも取り引きするがな」

そこまで話しているとチャイムが鳴ったので、俺達は席に座る。

そしてチャイムが鳴り終わると同時に坂上先生が入ってくる。手元にはプリントや丸まった巨大紙があるが、体育祭に関する内容だろう。

「おはよう諸君。今日から君達はBクラスだが、この調子でAクラスを目指して欲しい」  
坂上先生はそう言うてから丸まった巨大紙を広げて黒板に貼る。そこは9月最初時点のクラスポイントだった。

Aクラス 1164ポイント  
Bクラス 816ポイント  
Cクラス 721ポイント  
Dクラス 51ポイント

そう表示されている。優待者当て試験が終わった時点では……

Aクラス 1174ポイント

Bクラス 836ポイント

Cクラス 734ポイント

Dクラス 75ポイント

で、あり全クラスポイントが減っているが、これは夏休みにおいて素行などが原因だろう。

そして減点部分についてだが、Aクラスが10、俺達Bクラスが20、Cクラスが13、Dクラスが24ポイントである。要するにウチのクラスとDクラスはかなり素行が悪いつてことになる。

まあ大した問題じゃない。Cクラスとはまだ100近く差があるからな。

「さて、クラスポイントの発表も終わったから連絡事項に移らせてもらおう。今日から二学期が始まったわけだが、今日から1ヶ月間、体育祭に向けて体育の授業が増えることになるので新たな時間割を配布する。付け加えて体育祭の資料も配布するので、確認しておくように」

坂上先生はそう言って時間割と体育祭の資料を配り始める。

資料を受け取った俺は資料を読み始める。

それによれば今回の体育祭は全生徒を2つの組みに分けて勝負することになっていて、俺達Bクラスは白組でCクラスと組み、赤組に所属するAD連合と戦うようだ。

厄介なことになったか。同盟を結んでいるウチとAクラスが敵同士とはな。しかもそうなると一緒に戦うCクラスは俺達に疑いを持ってもおかしくない。

(まあ決まったものは仕方ない。その辺りは龍園に任せよう)

そう思いながらプリントを読み進める。

・ 全員参加競技の点数配分

1位15点、2位12点、3位10点、4位8点、5位以降は1点ずつ下がっていく。

団体戦の場合、勝利した組に500点が与えられる。

・ 推薦参加競技の点数配分

1位50点、2位30点、3位15点、4位10点、5位以降は2点ずつ下がっていき、最終競技のリレーでは3倍の点数が与えられる。

・赤組対白組の結果について

全学年の点数を総合して負けた組のクラスは等しく1000クラスポイント引かれる。

・学年別順位が与える影響

1位のクラスには、500クラスポイントが与えられる。

2位のクラスのクラスポイントは変動しない。

3位のクラスは、クラスポイントが50引かれる。

4位のクラスは、クラスポイントが100引かれる。

1ページ目に書かれていることは大体こんな感じだ。とりあえずマイナス要素があまりまくる。

仮にウチのクラスが4クラスの中で1位を取っても、白組が負けたらマイナス50ポイントになる。

逆4クラスの中でビリになり、尚且つ白組が負けたらマイナス2000ポイントと悲惨な事になる。

まあウチのクラスには運動神経が良い奴はそこそこ揃ってるからビリはないだろう。

ため息を吐きながらも次のページをめくる。

・個人競技の報酬

各競技で上位を獲得した生徒には、以下の報酬が与えられる。

1位を獲得した生徒には5000プライベートポイント、又は筆記試験における3点分の点数が与えられる。

2位を獲得した生徒には3000プライベートポイント、又は筆記試験における2点分の点数が与えられる。

3位を獲得した生徒には1000プライベートポイント、又は筆記試験における1点分の点数が与えられる。

(筆記試験における点数は次回中間テスト時のみ使用可能とし、他人への譲渡は不可能である)

各競技で最下位を獲得した生徒は、1000プライベートポイントのマイナスを受ける。

(所持ポイントが1000ポイント未満である場合、筆記試験における点数を1点減点する)

・成績優秀者の報酬について

全生徒の中で最も高い得点を獲得した最優秀生徒には、10万プライベートポイントが与えられる。

学年別で、最も高い得点を獲得した優秀生徒上位3名には、それぞれ1万プライベートポイントが与えられる。

(最優秀生徒に選ばれて10万ポイントの贈与を受けた者には、学年別の報酬は与えられない)

・反則事項について

各競技のルールを遵守すること。違反者は失格同様の扱いを受け、悪質な者については退場処分や、それまでの獲得点数を剥奪する場合もある。

報酬に点数があるのは予想外だ。要するに石崎みたいに運動能力はあるが馬鹿からしたらチャンスだ。

一方ひ弱な金田みたいに学力はあるが運動能力が低い生徒は次回の中間で順位を落とすだろう。

ただ不安なのが最後の一文だ。

・体育祭終了後、全競技で獲得した点数を学年別で集計し、下位10名にはペナルティ

を課す。ペナルティの内容は学年ごとで異なる場合があるため、各自担任に確認すること

下位10人に入らないとは思いますが、かなり重い罰だろうな。

「坂上、下位10人に与えられるペナルティはなんだ？」

龍園も気になったのか質問をする。

「1年生に課されるペナルティは、筆記試験における10点の減点だ。どのような形で減点されるかについての質問はここでは受け付けない。試験時に下位10名とともに通告する決まりになっている」

「まじかよ!?!」

クラスから騒めきが聴こえてくるが、実際かなり重いペナルティだ。

まあ俺はそんなペナルティを受けることはないだろう。同時に上位に入ることもないだろうがな。

そう思いながらも資料を読み進めると、競技に関する説明がある。

全員参加競技

・100m走

・60mハードル走

・男子棒倒し

・女子玉入れ

・男女別綱引き

・障害物競走

・二人三脚

・騎馬戦

・200m走

推薦参加競技

・借り物競走

・四方綱引き

・男女混合二人三脚

・3学年合同1200mリレー

全員参加競技は、文字通り全員に参加が義務付けられる競技。つまり少なくとも9競技には強制的に出場と中々ハードだ。

「それから非常に重要なことを話すが、今回の体育祭では競技に参加する順番を全て自分たちで決め、この参加表に記入して担任の私に提出する」

参加する順番も俺達が決めるのか。中学時代は出席番号順だったから中々新鮮だ。

「どの競技の何組目に誰が参加するかまで、全て君達自身で決めてもらう。提出期限は

体育祭の1週間前から前日の午後5時までで、それ以降は如何なる理由があつても変更は受け付けない。また、提出期限を過ぎた場合はランダムで組まれるので注意するように」

坂上先生が話を終えると龍園はニヤリと笑う。大方Dクラスの参加表を手に入れて本番でボロカスにするつもりだろう。

まあ俺としても綾小路から情報を貰う気満々だがな。

「質問してもよろしいでしょうか。当日、欠席者が出た場合はどうなるのでしょうか。団体競技の場合、競技そのものが成立しない場合があると思いますが」

金田がそんな質問をする。まあ確かに騎馬戦とかで欠席が出たら問題だな。

「全員参加競技では必要最低限の人数が確保できない場合、失格だ。例えば二人三脚の場合なら一組少ない状態で臨むことになるし、騎馬戦なら騎馬が1つ欠けた状態で参加する。ただし推薦参加競技の場合は救済措置がある。1人につき10万ポイントを支払うことで代役を立てることを認めている」

こういう時に俺の仮IDに入っているポイントを使うんだらうな。

「他に質問がないならここで打ち切る。次の時間は第一体育館に移動し、他学年との顔合わせとなるが、それまでの時間はお前達の好きに使うといい」

坂上先生がそう言って話を打ち切ると、龍園が教卓に座って俺達を見据える。

「全員聞け。前回の船上試験では坂柳と協力したが、今回も同じように協力してDクラスを徹底的に叩く」

「でも龍園さん。その為にはDクラスの参加表を手に入れないといけませんよ」

「石崎、テメエに言われなくてもわかつてる。が、安心しろ。既に参加表を手に入る算段はついている」

龍園の言葉に教室から騒めきが聴こえてくる。まあ説明を受けて直ぐに参加表を知れるなんて言われたらそうなるわな。

「参加表を手に入れたらそれに合わせて調整する。Dクラスの早い奴には雑魚を、遅い奴には普通の奴を、普通の奴には早い奴をぶつけてDクラスを最下位に落とす」

Dクラスの参加表をAクラスと共有すれば、Dクラスは2位以上になる事はないからな。

「まあ細かい作戦については情報が集まり次第説明する。それと比企谷」と、ここで龍園に呼ばれる。

「何だよ」

「今後一之瀬は話し合いを持ちかけるだろうがお前が応対しろ。俺が話し合いに参加したら疑いを持たれる」

まあ龍園が話し合いに参加したら誰だって警戒するな。俺も警戒される可能性はあ

るが龍園よりはマシだろう。

「了解した」

そう返事をする。

さてさて、本番ではない結果を残せるとは思えないが、それまでの準備は色々大変そうだし頑張らないとな。

そう思いながら俺は色々な作戦を頭の中で思い浮かべるのであった。

## 話し合い

体育祭に関する説明を受けた俺達は顔合わせの為に体育館に向かう。

そして赤組白組に別れて待機するが強い視線を感じる。

それは近くで待機している一之瀬らCクラスの連中からだ。一之瀬のクラスは元々Bクラスだが、入学当初からウチのクラスの喧嘩を売られ、挙句夏休みには俺達にBクラスの座を奪われてCクラスに落ちたからな。敵視されてもおかしくない。

一方の龍園は敵意を浴びても平然として、舌を出しながら一之瀬に中指を立てる。それにより一之瀬の周囲にいる女子が詰め寄ろうとするが一之瀬が止める。

というか龍園の奴、同じ白組にケンカを売るなや。

内心呆れていると体育館が徐々に静かになってきたので前を見ると、上級生とみられる生徒数名が壇上に立っていた。

そして完全に静まると大柄な男子が2人前が出る。

「俺は3年Aクラスの藤巻だ。今回、赤組の総指揮を執ることとなった」

「白組の指揮を執る石倉だ」

へえ、赤組の指揮は堀北会長が執るかと思ったが違うようだ。

「1年生に1つアドバイスをしておく。一部の連中は余計な世話だと思っ  
ていないが、この体育祭は非常に重要なことだということを肝に銘じてお  
け。この経験は必ず次に活かされる。これからの試験は一見遊びのよう  
に思えるものもあるかもしれないが、それら全てが、例外なくこの学  
校での生き残りをかけた重要な戦いとなる」

随分と曖昧なアドバイスだな。先生もそうだが、この学校に  
いる人って遠回しに言い過ぎだろ。とりあえず今後は退学する可能性のある試験が  
出て来るし、注意しろつてことだろう。

「今はまだ自覚がないかもしれない。だが、やる以上は勝ちに行く。  
それだけは肝に命じておけ」

ま、その気持ちは持つておかないといけないものだよな。

「全学年合同のリレーを除き、競技は学年別だ。残りの時間は学  
年に別れた方針についての話し合いを好きにやってくれ」

そう言つて、壇上にいる先輩方は集団へと引つ込んでいった。  
指示通り、学年ごとに分かれた集団が形成される。

同時に一之瀬が自分のクラスメイトを連れてこつちにやつて  
来る。対する龍園は面倒臭そうに一之瀬に話しかける。

「話は比企谷としろ」

「龍園君はしないのかな？」

「こっちは善意で言っただけ？ ルールを平気で破る俺が話し合いに応じてもお前らが信じるとは思えない。ならば企谷を代理にした方が合理的だろ」

まあ間違っちゃいないな。龍園が話し合いに参加しても絶対に向こうは警戒心剥き出しで、マトモに話し合いにはならないだろう。

俺も警戒されているだろうが、龍園に比べたら遥かにマシである。

「なるほどー。時間の無駄を省くためなんだねー？」

「そういうことだ。感謝するんだな」

龍園は笑っているが傲慢なことじゃないからな？

「じゃあ企谷、後は任せた。行くぞお前ら」

龍園はそう言っただけで俺以外のメンバーを連れて去って行く。そんな行動にCクラスが唖然とする中、俺は口を開ける。

「さて、そんな話し合いをするが構わないか？」

「それは良いけど、1人で良いの？」

「問題ない。今回Cクラスとの話し合いについては龍園に一任されてる。それにお前らのクラスだって話し合いに参加するのは精々主力の3、4人くらいで、下っ端36と37人は話を聞くだけだろ？」

特にCクラスの下つ端は一之瀬のイエスマンだからな。ぶっちゃけ一之瀬がいるなら話し合いは成立する。

「まあそうだね。それと私のクラスメイトを下つ端って呼ぶのはやめてくれないかな？」

「そりゃ悪かったな。んじゃ本題に入るが同じ組になったからって協力については最小限で良いな？」

いくら同じ組でも学年ごとで順位を付けてクラスポイントが変動する以上、足並みを揃えるのは難しい。

それは一之瀬も理解しているようで頷く。

「そうだね。協力するとしたら団体競技の練習かな？」

「ああ。今週はクラスごとで練習して、来週から月、水、金の放課後に合同練習でどうだ？」

「賛成かな。それと週に一度作戦会議をしたいんだけど大丈夫？」

「問題ない。とりあえず今話せるのはこれくらいだ。そっちから質問はあるか？」

「うーん……聞いて良いかわからないけど……龍園君は何か企んでるのかな？」

まあ普通気になるよな。それに対する答えは決まってる。

「アイツはいつも何か企んでるから何とも言えないな」

寧ろ企みをしてなかったら、保健室に連れて行くわ。

「あはは……」

「さて、試験とは無関係の質問に答えたし、こっちも質問させて貰うぞ」

「何かな？」

「単刀直入に聞くがお前の前に「クラスメイト1人の退学を条件に500のクラスポイント」と「退学無しでクラスポイントの変動無し」の2つの選択肢があったらどっちを選ぶ？」

この質問にCクラス陣営からは騒めきが生じるが一之瀬は毅然とした表情で口を開ける。

「当然後者だよ。クラスメイトを失ったら二度と返ってこないからね？」

「なるほどな」

嘘を言っている様子はない。一之瀬は本気で後者を選ぶようだ。

(底が知れた。やっぱり一之瀬はリーダーとして龍園や有栖より遥かに下だな)

クラスのリーダーが勝ちを放棄するなんて論外だ。退学者が出た場合に生まれるクラスポイントの損失は知らないが精々100くらいだろう。

少なくとも200以上ではないのは確実だ。何故なら2年生は15人近く退学者が出ていて、CクラスとDクラスからは5、6人出ているがクラスポイントは僅かにある

らしいし。もし仮に200ポイント以上ならDクラスやCクラスのポイントは0になつてゐるだろう。

つまり俺が言つた「クラスメイト1人の退学を条件に500のクラスポイント」を行つたら、結果的に300〜400の利益を得る事になる。

それを放棄するなんてリーダーとしてあるまじき行為だ。これが龍園や有栖なら躊躇いなく実行して雑魚を切り捨てるだろう。

実行したらクラスポイントが入るだけでなく、「雑魚は切り捨てられる」って見せしめになる。そうなればクラスの連中は必死になつて努力するのは明白。

実力主義であるこの学校では一之瀬の方針は不利だろう。加えてCクラスの生徒の大半は一之瀬に対して憧れのような眼差しを向けているが、勝ちを放棄しているリーダーに憧れを抱いている時点で怖さはない。

まあ一之瀬の側近の神崎は苦々しい表情で一之瀬を見てゐるから油断はしない。一之瀬の方針を不安視している奴がいるのといないのでは大きな違いがあるからな。

「つまらない質問をして悪かつた。とりあえず今日出来る話し合ひは終わつたし失礼する」

そう言つてから俺は龍園達の後を追うようにして体育館を出るのだった。

放課後……

「さて、体育祭についてですがDクラスを徹底的に叩くのは当然、という流れで宜しいでしょうか？」

カラオケルームにて有栖の綺麗な声が響く。俺の隣には龍園がいて、有栖の隣には神室がいる。

「ああ。それに関してだが取引がしたい」

「何でしょうか？」

「俺と比企谷は既にDクラスの生徒を2人引き入れた。よって体育祭においてはDクラスに参加表をお前らに渡すし、今後もDクラスの情報を共有したい」

「おや、よく引き入れられましたね。私も何人か声をかけましたが、切り捨てられると思っているのか拒否されてしまったので驚きました」

「まあそうだろう。マトモな人間なら龍園や有栖に声をかけられても、利用されまくった挙句にポイされると考える。」

「比企谷が手に入れたスパイは知らんが、俺が手に入れたスパイは自分から売り込みに

来た。鈴音を退学させることを条件に」

へえ、龍園の協力者も中々クセが強そうだな。

「それより本題だ。こっちはDクラスに関する情報を全て渡す。だからそっちはウチのクラスの馬鹿共の学力の向上を求める」

なるほどな。確かにウチのクラスの学力は低い。今後学力が重視される特別試験があつたら、ウチのクラスは3位より上に行けないだろうし、学力向上は重要だ。

「なるほど……まあ良いでしょう。こちらとしても情報があればより綿密な作戦を立てられますから」

有栖は承諾する。どうやら有栖は余程Dクラス……というか由比ヶ浜をを叩きたいようだ。ぶっちゃけ由比ヶ浜以外のDクラスの生徒はとぼちりだし、雪ノ下以外には同情してしまう。

「ではDクラスの参加表が入ったら連絡をお願いします。それに合わせてこちらも参加表を作りましょう」

「加えてお前が嫌ってるビッチについては可能な限り捌きたいだろうし、そこは調整しないとな」

そんな感じで龍園と有栖は作戦を練っているが、これはもうDクラスに浮上の目は一切ないだろうな。

そう思いながらも俺も一緒に作戦を練るのであった。

## 下準備

9月2日から俺達Bクラスは体育祭に向けて動き出した。

最初にやるのは体力測定だ。運動神経が良い悪いは何となくわかるが、実力は正確に知っておく必要がある。

「んじゃ先ずは握力から測るから出席番号順に並んで測ってくれ」

龍園に纏め役を押し付けられた俺は測定係となり、測定器を出席番号1番の石崎に渡す。

同時に石崎は強く握りしめてから、限界を感じると俺に渡してくる。

「記録、62.5だな。次は宇崎」

俺は出席番号2番の宇崎に渡すと、宇崎も測定器を握ってから、俺に渡してくるのでノートに記録する。

そんな感じで進めていくと、いよいよ大本命のアルベルトの番となった。

フィジカルなら1年最強であろうアルベルトに皆の注目が集まる中、アルベルトは測定器を握り、そのまま俺に渡してくる。

「100オーバー……マジか」

「おおっー」

まさかの限界値にクラスからは歓声が上がる。予想はしていたが凄過ぎだろ……俺は驚きながらも記録をノートに書いて、次の奴に回す。

それから記録を続け最後の龍園が64。2の記録を出してから、俺も測定する。

結果は48・2……実に平凡な結果だった。ちなみに1位は言うまでもなくアルベルトで、ビリはひよりの24。1だった。ひよりは若干嫌そうな表情をしていたが、誰にでも苦手なものはあるし仕方ない。

「推薦競技の四方綱引きについてだが、参加者は4人。力が重要である以上握力のトップ4に出てもらおう。男子はアルベルト、石崎、龍園、小宮の4人で、女子は西野、木下、矢島、園部の4人だが異論はないか？」

「お前の好きにしろ。表向きの仕事はお前に一任する」

龍園がそう言うってくる。ならばその通りにさせて貰おう。  
(つか龍園の奴、何故俺に纏め役をさせてんだ?)

龍園が指示を出す以上、何らかの意味はあるのだろうが、龍園の意図が読めない。まあ王の命令に逆らうつもりはないがな。

そう結論づけた俺は意識を切り替える。

「じゃあ四方綱引きの参加者は今言ったようにする。次に最後の1200メートルリ

レーの代表6人を決めたいし、今から200メートル走をするぞ」  
言いながら俺はストップウォッチを片手にコースに移動するのだった。

それから20分して全員の計測が終わり、体育祭最後のリレーの代表6人は龍園、石崎、小宮、伊吹、木下、矢島の6人となった。

尚、俺の結果については19位と中堅の中の中堅であった。来年以降に備えて少し運動をした方がいいかもしれないな。

放課後……

「ところで八幡君。今回の体育祭ではどのように動くのですか？」

「今のところは派手に動かないな。他クラスの情報もないし」

授業が終わって、俺は自室にてひよりとのおんぴりと雑談をしている。俺としては授業が終わってから1人で過ごす予定だったが、ひよりが一緒に過ごしたいと言ってきたのだ。

最初はどう返事をしたらいいか悩んでいたが、ひよりが上目遣いで「お願いします……」とおねだりをしてきて、気が付けばひよりを連れて自室にいたので。

それで雑談をするが、やはり話題は体育祭に関してだ。

「そうですか……私としては早く終わって欲しいです」

まあ運動能力がクラスで一番低いひよりからしたら、体育の授業が増えるのは嫌だろう。しかしひよりって極端だな。学力はクラス1で運動能力はビリだし。

「まあお前の場合、ペナルティを食らいまくっても中間で赤点はないだろう」

「そこは大丈夫です。それと八幡君」

「何だ？」

「推薦競技にある男女混合二人三脚、もしも相性が良かったら一緒に出ませんか？」

「相性次第だな」

二人三脚で重要なのは相手との相性だ。早い2人が組んでも相性が悪かったらダメだし、逆に遅い2人が組んでも相性が良ければ金星を挙げることも可能だ。

今日の体育では体力測定だけやったが、明日からは二人三脚の練習もする。その時に

ひよりと組んで相性が良かったら、出場するかもしれない。

「そうですね。ただ私としては八幡君と思い出を作りたいです……」

するとひよりはモジモジしながら俺を見てそんな事を言ってくる。そんなひよりはとても愛おしく見えてドキドキしてしまう。

(思い出作りか……そんな風に言うのは卑怯だろ)

俺の中でかけがえのない存在になりつつあるひよりの言葉には破壊力がある。

「そうだな……俺もお前と楽しい思い出を作りたいな」

「っ……………」

照れながらもそう返すとひよりは真っ赤になってから俯く。しかし偶にチラチラと俺を見てきて、それが可愛らしい。

「……………八幡君」

「ど、どうした?」

「そんな風に思われて嬉しいです……でも、でももつと嬉しくなりたいです。だから……図々しいかもしれませんが、甘えてもいいですか?」

「っ……………好きにしろ」

大切な人からそんな風に頼まれて断ることが出来ない。俺は恥ずかしがりながらもひよりのお願いを了承すると、ひよりは小さな手を俺の手に重ね、優しく握ってくる。

「八幡君の手、温かくて気持ちがいいですね……」

「ひよりの手は柔らかくて、握っていると安心する」

ひよりの手を握るだけで幸せになるなんて、コイツの手には魔法が宿っているのか？ そんな事を考えながらひよりの手を握っていると、隣に座っているひよりは更に近づいて、俺の肩に頭を乗せてくる。

それに伴い俺の頬にひよりの髪が触れてくすぐつたい。ふわふわしたひよりの髪がエアコンの風に触れて、俺の頬はサラッと当たる。

チラッと横を見れば、俺を見上げているひよりと目が合う。同時にひよりは小さく微笑みを浮かべてくる。

学校では余り笑みを見せないひよりだが、俺の前だとしよつちゆう見せてくる。こんなひよりの笑みを殆ど独占出来る俺は幸せなのかもしれないな。

そう思っている……

「あっ……」

ひよりの喘ぎ声が聞こえ、同時に俺はひよりの手を握っていた自分の手が頭に移動して、撫でていることに気付いた。

「わ、悪い」

慌てて謝ると、ひよりは首を横に振る。

「いえ、気持ちよかったのもっと撫でてください」

そう言つて俺の肩にスリスリしてくる。そんなひよりのおねだりに俺は断れずゆつくり、貴重品を扱うように丁寧に撫でる。

「んっ……八幡君」

ひよりの髪の毛サラサラつぷりに気持ち良さを感じていると、ひよりは目を細めたかと思えば、そのまま俺の膝の上に移動して抱きついてくる。

「……やっぱり、こころするのが一番幸せです」

そう言つてひよりは抱きしめる力を強めてくる。何度も受けたひよりの抱擁。

しかしひよりの日記を見てから、ひよりの愛情などを意識してしまい、頭の中がボウツとしてしまう。

ひよりを好きだと自覚して数日。未だに恋愛的な意味、もしくは友好的な意味でひよりが好きなのかはわからないが、どちらにせよ好きな人から愛情を感じると、麻薬のよりに溺れてしまう。

俺はブーツとしながらもひよりを抱き返すと、ひよりと見つめ合う。ひよりの目から愛情を感じ、続いてひよりの艶めいた唇を見てしまう。両想いである可能性がある以上、唇も見てしまうのは生物としての本能が働いているからなのかもしれない。

そう思っている時だった。お互いに見つめ合っていると、ひよりは今以上に頬を染め

たかと思えば……

「……………」

やがて目を閉じて、艶のある美しい唇を僅か、ほんの僅かであるが前……俺の方に突き出してきた。

俺に対する感情が記されたひよりの日記

俺の部屋にて俺の膝の上に乗って俺と抱き合っているひより  
目を瞑って唇を突き出してくるひより

以上の3つの事から……

(も、もしかしてひより、キスを求めているのか?)

俺はそんな考えを抱いてしまった。

## キス

(お、俺はどうしたらいいんだ?)

俺、比企谷八幡はかつてないほど困惑している。目の前には俺に抱きついて、目を瞑りながら唇を突き出しているひよりがいる。

俺に対する感情が記されたひよりの日記

俺の部屋にて俺の膝の上に乗って俺と抱き合っているひより

目を瞑って唇を突き出してくるひより

以上の3つの事から、ひよりは俺にキスを求めている可能性がある……と俺は考えてしまっている。

(マジでどうすれば良いんだ?)

選択肢は3つある。

①キスをする

②とりあえず話しかけてみる

## ③スルーする

難しいな。①のキスをするについでたが、ひよりが俺にキスを求めているってのはあくまで俺の考えであり、ひよりが望んでいるかはわからない。つか仮に望んでいても即座にキスをするのは……

②については一見手堅い選択肢かもしれないが、仮にひよりが本当にキスを望んでいるなら、話しかけるより行動して欲しいと思っっているかもしれない。

③はない。2人きりの状況でひよりをシカトなんてしたら、人間関係が悪影響が出る可能性がある。雪ノ下や由比ヶ浜の場合、関係が悪化しても気にしないが、ひよりの関係が悪化するの嫌だ。

となると①か②だが……

どうしたものかと悩んでいると、ひよりは抱きしめる力を強めて更に唇を突き出してくる。

同時に俺の中で何かが吹っ切れた。これはもうOKと考えても良いんじゃないやね？

そこまで考えた俺はひよりの背中に回していた右手を離して、ひよりの前髪を横にズラして、自分の顔をひよりの顔に近付ける。

それによりひよりは目を開けるが、唇は突き出したままだ。ここで拒否する仕事をしないって事は……もう、良いのかもしれないな。

そう思うと、俺の顔が俺の意思に反してゆっくりとひよりの方へ向かっている。その際に何故か俺の顔の動きは止まる気がしない。

少しずつ距離が縮まるにつれて、ひよりは再度目を閉じて俺の背中に回した両手を俺の首の後ろまで動かす。

俺はそのままひよりの唇に近寄る。距離にして後5センチ。もう俺の中では止まるという選択肢はなかった。

5センチ……

4センチ……

3センチ……

2センチ……

1センチ……

0セ『pipipipi……』

「っ！」

お互いの唇が重なる直前、電子音が鳴り響き俺達は驚きのあまり、抱擁を解いて距離を取ってしまった。

電子音が出た方向を見れば、部屋に備え付けられた電話が鳴っていた。基本的に携帯でやり取りするため、備え付けの電話が使われる事は殆どない。

使われるとしたら学校の先生や寮の管理人だろうから無視するのは不可能だ。

俺は呆然としながらも鳴り続ける電話を取る。

「はいもしもし、比企谷です」

『比企谷……あ、ごめんなさい。部屋の番号を間違えたみたい』

まさかの間違い電話かよ?! なんかもう遣る瀬無いな……

「そうでしたか……では失礼します」

そう言つて電話を切り、ひよりを見るとひよりはなんとも言えない表情をしている。多分俺も似たような表情をしているのだろう。

「……………」

お互いに無言で見つめ合う。改めてさつき続きの続きを……みたいな話を出す事はお互いになかった。

暫くの間、無言が続くとひよりの腹からクウゥつと可愛らしい音が鳴り、同じタイミングで俺の腹も鳴る。

「……飯、食つてくか?」

「……お願ひします」

その後、俺達は夕飯を食ったがキス未遂の件もあり、お互いに言葉少なく、チラチラ

見合いながら食事を済ませた。あそこまで気まずい食事は生まれて初めてだと断言出来るだろう。

「では失礼します。夕食、ありがとうございます」

「ああ」

飯を済ませた俺達は気まずい空気のまま、挨拶をする。あそこで寮の管理人が間違い電話をしなければここまで気まずくはならなかったのに……

そう思っていると、別れの挨拶をしたのにひよりは動く気配を見せずに俯いている事に気付く。

どうかしたのかと思っているとひよりは顔を上げて、真っ赤になった顔を俺に近付け

……  
「んっ……」

そのまま唇を俺の唇に重ねてきた。

予想外の展開に目を見開いて驚く中、ひよりは直ぐに離れて俺を見てくる。

「すみません……さっきの続きをしたくて……お休みなさい」

そう言ってからひよりは早速で俺の部屋から出て行った。ひよりが見えなくなると、俺はようやく事態を把握して、物凄く恥ずかしくなってしまう。

(や、ヤバい。唇同士のカスは初めてだが、メチャクチャ恥ずかしい……！)

顔が熱くて熱くて仕方ない。ひよりに抱きつかれたり、有栖と頬にキスをし合ったりした際に恥ずかしいと思つた事はあるが、今回はマジでレベルが違い過ぎる。

俺は部屋のドアの鍵をかけてからリビングに向かい、そのまま水道水を頭にぶっかける。こうでもしないとどうにかなつてしまえそうさ。

というか明日からひよりと話せる自信がないんだが……

「キス、しちゃいました……」

風呂場にて、ひよりは唇を撫でながらそう呟く。ひよりは自分の部屋に入ってから何度も唇を撫でて、風呂吕に入って身体を洗いながらも唇を撫でている。

ひよりの唇には未だに八幡の唇の感触が残っていて、ひよりは現在幸せの絶頂にいる。

自分からしたとはいえ。自分の好きな人と唇を重ねたのだ。ひよりからしたら幸せ以外の何者でもない。

「キス……小説では甘いと書いてありましたが、本当みたいですね。甘く、熱く、幸せを感じます」

ひよりはそう言いながら右手人差し指で再度唇を撫でる。それと同時に八幡の唇の感触を思い出し、無意識のうちに左手で自分の乳房を揉みしだく。

「んっ……」

ひよりは吐息を漏らすと、左手が自分の乳房を揉みしだいていることを理解した。

しかし左手を止めるつもりはなかった。理由はわからないが、湧き上がってくる快感に抗うつもりはひよりの頭の中には存在しなかった。

そんな中、ひよりは八幡とのキスを思い出し顔に熱を生み出す。

「今日は私からでしたが……いつか八幡君からもキスをされたいですね」

思い出すのは八幡の部屋での一件。あの時は管理人の邪魔が入ったが、あの時に電話が来なかったら八幡からキスをされていた可能性が高いのでひよりからしたら残念で仕方なかった。

あの時に自分の髪をかきあげた八幡の手、髪をかき上げられて目を開けた際に見えた八幡の顔、自分に迫ってくる八幡の気配

それらを思い出すだけでひよりは自分の中で昂りを感じ、抑えることが出来なかった。

昂りは徐々に増していき、ひよりは左手を乳房に添えたまま、右手を唇から自身の聖域に移動させ……

「んんっ……!」

その日の晩、ひよりの部屋の風呂場からは嬌声とシャワーの音ではない水音が響き渡った。

「ヤバい……全然眠れない」

夜12時……俺はベッドに入るが、ひよりからのキスが頭から離れず、顔が熱くて熱くて全然眠れない。

ひよりの奴、別れ際にとんでもない爆弾を落とすとは……ま、まあ寮の管理人から電話が無かったらキスをしていただろうし、どのみち眠れる事はなかっただろうけど。

しかし明日からひよりの顔を見れるか心配だ。見たらテンパって不審者と思われるってしまうかもしれないし。

(いや、なんとかして寝ないといけない。授業中に寝たりしたらクラスポイントに悪影響だ)

俺は元々龍園の配下についておらず、あくまでビジネスパートナー的な存在であったが、夏休みにあった2つの特別試験で動き回った事により、クラスメイトからは龍園の次に高い地位にいると思われる。

高い地位にいる人間が問題行為をしたりしたら、クラス内で不協和音が生じる可能性があるし、授業中に寝るわけにはいかない。

だから俺は無理に寝ようとするが……

『八幡君……もつと、キスしてください……』

何故か下着姿でキスを求めてくるひよりを妄想してしまい、眠れる気がしない。というかひよりでこんな妄想をするなんて……マジで寝れる気がしないな。

結局、俺は深夜1時まで眠る事が出来なかったのであった。

## 感情的

「ふあゝ、眠い」

朝、俺は欠伸をしながら学校に向かう。昨夜はひよりのキスが原因で寝不足だ。まあひよりに文句を言うつもりはない。元々俺からキスしようとしたのであり、どのみち寝不足だろう。

そして学校に到着して下駄箱で上履きを履いて階段を上っていると、騒ぎ声が聞こえてきたので二階に向かうと、有栖が雪ノ下と由比ヶ浜の2人と向かい合っていた。有栖の頭には青筋が浮かんでいることからまた由比ヶ浜にチビ呼ばわりされたのだろう。

内心有栖に同情していると向こうも俺に気付き、由比ヶ浜が喚き出す。

「何ジロジロ見てるし！ヒツキーマジキモい！」

「いやらしい目付きね。視姦で訴えられてもおかしくないわね」

ヤバイ。余りのウザさにさつきまで存在した眠気が全て苛立ちに変化した。

俺は2人を無視して有栖に話しかける。

「おはよう有栖」

同時に有栖も2人から目を逸らして俺に微笑みを浮かべてくる。

「おはようございませす八幡君。いきなりですが放課後、ケヤキモールにあるアロママツサージに行きませんか？ 苛立ちが消えやすい場所として人気なんですよ」

ほう、そんな施設があるのか？ だとしたら行ってみるのも悪くないな。苛立ちがメチャクチャ溜まつてるし。

「わかった。じゃあ放課後に「ヒツキー無視すんなし！」煩いな……てか有栖。俺がくる前に何があつたんだ？」

十中八九……というか絶対2人が突つかかかってきたのだろうが、具体的なことはわからない。

「大したことではありません。由比ヶ浜さんがDクラスで虐められているのは私のせいで雪ノ下さんが文句を言ってきたのです」

「は？ ただの逆恨みじゃねえか」

「ふざけないで！ 貴方達の所為で由比ヶ浜さんがどれだけ苦しんでいるかわからないの?!」

雪ノ下が喚くが……

「何言つてんだ？ 確かに俺達は由比ヶ浜を理由に同盟を結んだが、由比ヶ浜が虐められている根本的な理由は由比ヶ浜にあるからな」

「そうですね。由比ヶ浜さんがクラスメイトから嫌われた1番の理由は1学期の中間試

験で、過去問があるにもかかわらず赤点を取ったことでしょう」

有栖の言う通りだな。あの時に由比ヶ浜は赤点を取ったが、Dクラスはあそこで由比ヶ浜を切り捨てるのが最善であった。

クラスポイントに影響は出るだろうが、見捨てていれば他クラスに対してプライベートルポイントを借りずに済んだしな。

というか過去問あつて赤点とか今更だから馬鹿過ぎだろ？

「う、煩いし！あたしが赤点だったのはアンタが試験当日の朝に馬鹿にして集中出来なかったからだし！」

そういう有栖は試験当日の朝、寝落ちしたと思われる由比ヶ浜を煽っていたな。

まあ完全に逆恨みだろうけど。

「ほう……仮に私が悪いなら、どうして欲しいのですか？」

「決まってるじゃん！他のクラスへの借金をアンタが返済して、あたしに謝るし！」  
ビキツ

余りに理不尽な欲求に有栖の額に青筋が増える。しかも冷笑が消えて、顔には怒りの色がハッキリと出る。ここまでキレた有栖は初めて見るな。

……これ以上、有栖をここに居させたら色々面倒なことになりそうだな。

「有栖。行こうぜ」

「そうですね。馬鹿と関わると疲れます」

有栖はそう言って俺の手を握ってくるので、俺は引率する形で去ろうとする。

「待つし！そうやって逃げるなんて卑怯じゃん！というかヒツキーは女子の手を握るなんてマジキモい！このロリコン！」

「アホか。有栖は同じ年だからロリコンじゃねえよ」

絵面だけ見ればロリコンかもしれないけど。

「う、煩いし！大体こんなチビがAクラスについてゆきのんがDクラスなんて間違ってるし！」

「同感ね。父親がこの学校の理事長だからコネを使つたと思えないわ」

まあ確かに理事長の娘と言われたらコネと疑うのは仕方ないだろう。

しかし……

「雪ノ下がDクラスってのは妥当だろ」

「同感ですね。コミュニケーション能力や人間性などは問題があり過ぎます。学力は高いようですがそれだけですし、それも陽乃さんに比べたら劣っています」

判断基準はわからないが、この学校は成績だけで判断されてないのは間違いない。成績だけで決まるならウチのクラスには入学すら出来ない生徒もいるからな。

「ふざけないで！卑怯者やコネしかない障害者が私より上のクラスにいるなんて「黙れ」

ぐっ！あああああつ！」

「ゆきのん！」

雪ノ下の有栖に対する侮辱に我慢出来なかった俺は、思わず雪ノ下の腹を殴っていた。有栖に対する侮辱でここまで怒るとは自分でも思わなかった。

「雪ノ下。俺をいくらdisっても構わないが、有栖を侮辱してんじやねえよ」

「ごほつ……事実を言っただけじゃない……！貴方こそ私にこんな事をしてタダで済むと思ってるのかしら？停学は確実よ」

雪ノ下は腹に手を当て、苦しそうにしながら俺を睨みつけてくる。

「だからどうした？テメエの戯言を聞かされるよりずっとマシだ。今から自首してやるよ」

殴っちゃまったものは仕方がない。だから今から職員室に出頭するつもりだ。自分から行けば罰が軽くなるかもしれないし。

そう思いながら階段を降りようとした時だった。

「八幡君！」

有栖の珍しく必死な声が聞こえてきたので振り向くと……

「ふざけんなし！」

同じタイミングで由比ヶ浜が俺の顔面を殴ってきた。そこまで痛くはないが予想以

上に衝撃があり、俺は階段から足を踏み外してしまい、そのまま踊り場に叩きつけられる。

「ぐっ……！」

その際に左腕が床に強打して激痛が走る。折れてはいないがヒビが入ったかもしれない。

（つか由比ヶ浜の奴、本物の馬鹿だろ？）

俺は痛みに苦しみながらも由比ヶ浜に呆れてしまう。ここで俺を階段から落とさなかつたら俺だけ罰を受けて、Bクラスのクラスポイントが減っていただろう。

しかし由比ヶ浜が俺に危害を加えた以上、Dクラスも何らかの罰を与えられるのは明白。雪ノ下がやり返したならまだしも手を出したのは無関係の由比ヶ浜だし。

「八幡君、大丈夫ですか？」

そう思っていると有栖が心配そうにこっちを見てくる。こんな時ではあるが初めて見る心配そうな有栖に見惚れてしまう。

「大丈夫……っ」

そう言うのが結構痛い。利き腕じゃなかったのが幸いだが、こりや暫く体育は無理だな。

「痛そうにしてるのではないですが……階段から落とすなんてふざけてるんですか！」

有栖は怒りを露わに由比ヶ浜に怒鳴る。怒りを露わにする有栖も初めて見るな。

「ふざけてんのはヒツキーじゃん！ゆきのんを殴ったから自業自得だし！」

「雪ノ下さんがやり返すならまだしも無関係の貴女が殴る資格なんてありません！」

「関係あるよ！ゆきのんは友達だからあたしが殴っただけで、私は何も悪くない！」

由比ヶ浜はそう言うが間違いなく重い罰が下されるだろうな。

「話になりませんね……八幡君、無視して行きましょう」

有栖はそう言うのと由比ヶ浜が喚く。

「待つし！ヒツキーはゆきのんを殴ったんだから、ゆきのんに謝ってポイントを払うし  
！」

「だったらテメエも俺に謝ってポイント払えや」

「はあ？あたしは悪くないし謝る必要もポイントを払う必要なんかないからね?!」

コイツ完全にジャイアンじゃねえか……いや、劇場版のジャイアンは基本的にカッコいいしジャイアン以下だな。

内心呆れ果てている時だった。

「何を騒いでいる?」

鋭い声が聞こえてきたので見てみると階段から堀北会長が橘書記を連れてやって来ていた。

丁度いいタイミングと思った俺は事情を説明しようとするが、その前に由比ヶ浜が口を開ける。

「ヒツキーがゆきのんのお腹を殴ったから、ヒツキーの顔を殴って階段から落としたんです！会長！ヒツキーに罰を与えてください！」

その言葉に堀北会長は目を鋭くし、橘書記は呆然とする。

「確認するが、比企谷が雪ノ下を殴り、由比ヶ浜が比企谷を殴って階段から落としたんだな？」

「そうです！」

「で、比企谷に罰を与えろと言ったが、その場合自分に罰はないと思ってるのか？」

「当たり前です！あたしは天罰を下しただけです！悪くないです！それにヒツキーなら別に殴っても問題はないです！」

「貴方！」

由比ヶ浜の理不尽な言葉に有栖が怒りを露わにするが、堀北会長が手で制する。

「事情はわかった。事件現場がここなら監視カメラに全て映っている。今から先生方と確認をするが良いな？」

「良いですよ！」

由比ヶ浜は自信たっぷりに頷くが、自分に罰がないと本気で思っているようだ。

ともあれ俺としても殴つたのは事実だから堀北会長の問いに頷く。それは有栖も雪ノ下も同じみたいで頷く。

「では放課後に職員室に来るように。橘は比企谷を保健室に連れて行き、手当てをしてやれ。確か保険医は職員会議に出ていたはずだ」

「会長。八幡君は私が連れて行きます」

橘書記が頷く前に有栖が割つて入る。堀北会長は有栖を見ると任せると言つて橘書記を連れて去っていく。

「では八幡君。行きましようか」

「ああ……腕の借りは絶対に返してやるよ」

俺はこれまで由比ヶ浜を積極的に潰そうと考えておらず有栖に一任するつもりだった。俺はここまでされておいて泣き寝入りするつもりはない、積極的にDクラスを叩くつもりだ。

が、ここまでされておいて泣き寝入りするつもりはない、積極的にDクラスを叩くつもりだ。

「やれるもんならやってみろし！ヒッキーは停学を食らつてクラスメイトから嫌われちゃえ！」

嫌われるかもしれないが、悪意を向けられるかどうかは龍園の采配次第だな。

まあ何にせよ放課後に全てが決まるしその時を待とう。

そう思いながら俺は有栖からの引率を受けて保健室に連れられるのだった。

## 保健室

「……はい。一応応急処置はしましたがあくまで応急処置。放課後、処分が通達されたらケヤキモールにある病院に行きましょう」

保健室にて、先生が職員会議でいない為に代わって治療してくれた有栖がそう言うてくる。

痛みはまだあるが、さっきに比べたら多少マシになっている。

「わざわざ悪いな」

「いえ。それにしても八幡君が感情的になるなんて思いませんでした」

まあそこは否定しない。あの時の俺は珍しく感情的になっていただろう。俺に対する罵倒は昔から受けていたので特に気にしないが、有栖に対する罵倒を聞いた時には珍しく苛立ちが生まれてしまった。

「それも……私の為に怒ってくれるなんて……」

「べ、別にお前の為じゃねえよ」

「嘘ですね。あの時、八幡君は「雪ノ下。俺をいくらdisっても構わないが、有栖を侮辱してんじゃねえよ」と言っていましたから」

ぐっ……一字一句キツチリ覚えてやがる。改めて言われると結構恥ずかしいな。こりや今後もあるにこのネタでからかわれるなあと思つた時だった。

「……ありがとうございます」

有栖はそう言つてから俺の顔を自身の胸元に寄せてギュツと抱きしめてくる。えっ？いきなりどうした？

「八幡君が怒ってくれた時、凄く嬉しく思いました」

そう言つて有栖は抱きしめたまま撫で撫でをしてくる。有栖の胸と手から感じる温もりはとて心地良く、不思議と腕の痛みも和らいでくる。

しかし……

「……そりやどうも。でも恥ずかしいからやめてくれ」

流石に子供扱いされるのは恥ずかしい。万が一第三者に見られたら恥ずかしくて死んでしまいそうだからな。

「嫌です」

が、有栖は俺の頼みを一蹴して撫で撫でしてくる。離す気がないとわかつた俺は抵抗を止める。恥ずかしいのは否定しないが、嫌ではない。寧ろひよりとはまた違う心地良さがあつて溺れてしまいそうだ。

「ふふっ……八幡君可愛いです」



半は唾然として龍園を見ている。

しかし……

「待て龍園。別に俺は有栖の事を好きって訳じゃ……」

「そうか？半年近くお前を見てきたが、お前は心の暴力を使うのを好み、身体の暴力を嫌ってるタイプだ。そんなお前が身体の暴力に走るって事は坂柳の事が好きだからだろ？なあひより？」

「そうですね……坂柳さんが羨ましいです」

ひよりはジト目で俺を見てくる。ひよりが俺を好いているのはひよりの日記やキスの件で知っているが、ひよりからしたら朝の一件は面白くないかもしれない。

というか気になる点がある。

「つか龍園。俺に対する罰は？」

「あ？話を聞く限りじやDクラスにデカいダメージがあるだろうし、お前の功績はデカいから特に咎めるつもりはねえよ」

意外だ。俺はアルベルトにぶっ飛ばされる覚悟をしていたのだが、随分とあつけらかなとしてるな。

まあそれならそれでありがたい。ならば今後、より一層クラスに貢献しないとな。

そんな事を考えていると朝のHRを告げるチャイムが鳴るので自分の席に着く。同

時に坂上先生が入ってきて朝のHRを始めるも、俺は座る直前にジト目で見てくるひよりの事が頭から離れられなかった。

数時間後……

「ではHRを終了する。それと比企谷君は3時半に職員室に来るように」

1日の授業も終わり、帰りのHRにて坂上先生はそう告げると教室から出て行く。3時半まで20分くらいあるし、行く前に自販機で飲み物でも飲むか。

そう思いながら帰りの支度をしていると龍園が近寄ってくる。

「結果がわかったら連絡しろ。停学になったら、お前に任せた仕事についての調整もあるからな」

そう言ってから龍園は教室から出て行く。まあ俺はCクラスとの橋渡し役もあるからな。本当に申し訳ないな。

俺はそのまま教室を出て職員室から近い自販機に行き、お茶を買う。マツ缶はショツピングモールでしか売られておらず、今から行ったら3時半に職員室に間に合わない。

ゴクゴクと飲んでいるとひよりが自販機の方にやって来るのが目に入るが、妙に悲し

そうだ。

「八幡君。ちよつと良いですか？」

「どうかしたか？」

「こんな質問をしたら不愉快に思うかもしれないですが……えつと……その……」

ひよりは言葉を躊躇っている。なんだかんだハッキリとモノを言うひよりにしては珍しいな。

「大丈夫だから思い切つて言ってみろ」

「はい……その、八幡君は坂柳さんの事が……好きなんですか？」

そんな質問か。別にその程度で不愉快になるなんて事はない。雪ノ下と由比ヶ浜の罵倒に比べたら全然大した事じゃない。

(しかしどう答えるか……いや、正直に話そう)

ひよりが俺に向ける感情は理解してるし、ひよりは俺の中で大切な存在となつてい  
る。そんなひよりに嘘を吐くのは嫌だからな。

「……恋愛的な意味ならわからん。ただアイツの事は大切な存在と思つてる」

ひよりと過ごす時間は穏やかな時間で、俺に安らぎを与えてくれる。

一方有栖と過ごす時間はお互いにマウントを取り合う時間で、俺に刺激を与えてくれる。

しかしベクトルは違えど、2人と過ごす時間は俺の中でかけがえのない存在となっている。

加えて朝の一件であそこまで感情的になってし、俺の中で有栖ら大切な存在だろう。

「そうですか……あの、八幡君にとって、私は大切ですか？」

「ああ」

俺は即答する。ひよりとは入学してから1番の付き合いだが、ひよりと過ごす時間は良い思い出だ。

「……嬉しいです。私も、私も八幡君の事を大切に思っています」

ひよりはそう言ってからギュッと抱きついてくる。そんなひよりを見た俺は優しくひよりの頭を撫で撫でする。

暫くの間、こうしていると3時25分となった。そろそろ職員室に行く時間だ。

「済まんひより。時間だからもう行く」

「わかりました。あ、最後に目を瞑ってくれませんか？」

ひよりは俺から離れてそう言ってくるので、俺は言われた通りに目を瞑る。

何をするのかと思っていたら、やがて近づいてくる気配がして……

ちゅっ

唇に何かが触れる。目を開けるとひよりは昨日のように俺にキスをしていた。

予想外の展開に呆然としてみるとひよりは俺から離れて恥ずかしそうに口を開ける。

「ごめんなさい。昨日八幡君にキスをしてから、八幡君にキスをしたくなってしまうて

……」

そう言つてひよりは去つて行くが、職員室に行く前に爆弾を落とさないでくれよ……

俺は顔に熱が溜まるのを自覚しながらもお茶を全て飲み、ゴミ箱に捨ててから校舎に

戻る。

「失礼します」

そして職員室に入ると、職員室の隅にて有栖、雪ノ下、由比ヶ浜、堀北会長に坂上先

生に茶柱先生がいた。どうやら俺が最後のようだ。

雪ノ下は俺を睨み、由比ヶ浜は俺に勝ち誇つた笑みを浮かべてくる。雪ノ下はともか

く、由比ヶ浜は自分は無罪と思つていようだ。本当に頭がめでたいな。

「揃つたか。では朝の件について説明する」

堀北会長がそう言うのと空気が引き締まる。

「監視カメラの映像を私と各学年の学年主任が確認をして、各々の処分について話し

合つた。まずは雪ノ下」

「……はい」

「お前は坂柳と口論をしただけだから特に処罰を与えるつもりはない。ただし発言内容については問題がある為、今後同じような発言が確認された場合は処罰を与えるので忘れないように」

「……わかりました」

雪ノ下の罰については妥当だろう。実際雪ノ下は暴力を振るってないし。

「次に比企谷。坂柳を侮辱した雪ノ下の発言に問題があるのは事実だが、映像を見る限り些かやり過ぎであると判断が下された。よって1週間の停学とする。尚、クラスポイントについてはBクラスから50ポイントだけDクラスに移譲される」

まあ大体予想通りだ。確か2学期開始時点のクラスポイントは……

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 816ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 51ポイント

であり、俺の停学により……

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 766ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 101ポイント

となる。Cクラスと差が縮まったし、体育祭次第ではまたCクラスに落ちるかもしれないな。

まあ現在ドヤ顔で俺を見ている由比ヶ浜についての処分でどうなるかわからんがな。そう思っている……

「最後に由比ヶ浜。坂柳が比企谷を呼ばなかったら、後ろから比企谷を階段から突き落としていた。これは極めて悪質である為、2週間の停学とする。クラスポイントについてはDクラスから100ポイントだけBクラスに移譲する」

まさかのBクラスのクラスポイントが事件前より増える展開となりました。

	現在のクラスポイント
A	クラス 1164ポイント
B	クラス 866ポイント
C	クラス 721ポイント
D	クラス 1ポイント

## 処罰

「どういふことだし！」

処分を告げられると由比ヶ浜は真つ赤になりながら堀北会長に突つかかる。お前は先輩に対する敬意を表せ。

「言つた通りだ。お前の行動は悪質過ぎるから今回の処分にした」

「納得いかないし！ヒツキーが怪我しても誰も心配しないから別にいいじゃん！」

その言葉に堀北会長は目を細め、有栖が反論する。

「私は心配しますので良くないですね」

「チビは黙つてて！」

ビキィ

由比ヶ浜の言葉に有栖の額に青筋が浮かぶ。対する堀北会長は冷たい目を向ける。

「心配するしないの問題じゃない。他人を階段から突き落とそうとするのは悪質な行為だ。そんな事もわからないのか？」

「ヒツキーがゆきのんを殴つたのが悪いんじゃない！」

「だとしてもお前が仕返しをしていい理由にはならない」

同感だな。仮に雪ノ下が俺を階段から突き落としたり、仕返して事でクラスポイントの動きは相殺される可能性があるが、無関係の由比ヶ浜が殴ったらクラスポイントにおいてDクラスが不利になった。

何にせよ……

「これは決定事項だ。これ以上ゴネるなら更に罰を与える事も考えないといけない」  
既に決まった以上、一般生徒の俺達が文句を言うつもりはない。

「わかりました。では失礼します」

「失礼します」

俺と有栖は頭を下げて職員室を出ようとする。実際俺は今回の判断について思うところは無い。

その際に背後から由比ヶ浜の喚き声で雪ノ下からの殺意を感じるが、無視をする。

「ふう……」

「お疲れ様です。それにしても由比ヶ浜さんは本当に頭が悪いですね。話を聞いていると疲れます」

だろうな。中学時代から感情的にしか考えられない馬鹿だったからな。

「まあ俺としては今回の結果に満足だがな。何せクラスポイントが増えたし」

「そうですね。それにしてもDクラスの大半の生徒には同情しますよ」

同感だな。Aクラスと組んで潰すとは決めたが、由比ヶ浜の所為でDクラスのクラスポイントは何も根こそぎ無くなってるし。

2学期が始まった時点でのクラスポイントは……

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 816ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 51ポイント

であつたが、今回の件で……

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 866ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 1ポイント

となつた。ちなみに由比ヶ浜が俺を殴らなかつたら……

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 766ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 101ポイント

と、Dクラスのクラスポイントは増えていたんだがな。翌日、Dクラスでは間違いく暴動が生まれるだろう。

何にせよ今回の件で俺達Bクラスは由比ヶ浜のおかげでCクラスとの差を広げられたし、最高の結果だろう。

「まあ終わった事ですし、八幡君は今から病院に行きましょう」

「だな……つと、龍園に報告しないとな」

言いながら俺は携帯を取り出して龍園に電話をかける。すると直ぐに龍園と繋がる。

『結果はどうだった？』

「雪ノ下は注意だけ。俺に対する罰は1週間の停学と50クラスポイントをDクラスへ支払いだが、由比ヶ浜に対する罰は2週間の停学と100クラスポイントをウチに支払いだ」

『つまりウチは50クラスポイント増えたって事か！くはははははっ！マジかよっ！停学を食らっておきながらクラスポイントを増やすってお前最高だな！』

電話からは龍園の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。DSの龍園からしたら最高の肴だろう。

『あー、笑った笑った。ここまで笑ったのは久しぶりだな』

「そうかい。話を戻すが、俺は明日から停学だ。その間Cクラスとの話し合いは任せた

ぞ」

『ああ。お前は1週間休め。じゃあな』

通話が切れたので携帯をポケットにしまう。

「龍園君は楽しそうでしたね」

「笑い声は煩かったが、お前も龍園と同じ気持ちだろ？」

「はい」

有栖はいい笑顔で頷く。やっぱりコイツもドSだな。

「何にせよ早い所病院に行きましょう。今は痛くないですか？」

「大丈夫だ。ありがとな」

「いえ。八幡君が私を大切に思ってくれているように、私も八幡君を大切に思っていますから」

「つ……だ、だからそれは言うなよ」

あの時は感情的になってしまったが、思い出すだけで恥ずかしくなる。有栖を大切に思っているのは否定しないが、ハッキリ言われるのは勘弁して欲しい。

そんな俺の頼みに対して有栖は……

「ふふっ……嫌です」

うん、絶対にそう言うと思ったよ。

予想通りの展開に俺はため息を吐くが、有栖の可愛らしい笑みを見ると文句を言う気を失せてしまう。

俺は再度ため息を吐きながらシヨツピングモールにある病院に向かうのだった。

その後病院に行き診察した結果、3日は安静にしろと言われたが後遺症は残らないと言われたので安心した。

翌日……

「突然ではあるが報告がある。昨日由比ヶ浜と雪ノ下がAクラスの坂柳とBクラスの比企谷と騒動があり、由比ヶ浜と比企谷が停学になった」

『はあああつ!?!』

Dクラス、朝のHRにてDクラス担任の茶柱がそう言うところから騒めきが生まれる。

「先生。具体的に何があったのですか？」

Dクラスのみならず、学年でも人気者の榎田桔梗が手を挙げて質問をする。

「昨日、4人が口喧嘩をして比企谷が衝動的に雪ノ下を殴り、その後由比ヶ浜が比企谷を後ろから殴り階段から突き落とした。結果、比企谷は1週間の停学とDクラスに50のクラスポイントの支払いの罰を受け、由比ヶ浜は2週間の停学とBクラスに対して100のクラスポイントの支払いの罰を受けた」

「はあ?!つまりウチのクラスポイントが50もBクラスに流れたってことすか?!」  
「そういうことになるな」

山内の質問に茶柱が頷き、張り紙を黒板に貼る。

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 869ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 1ポイント

そこに書いてあるのは処分後のクラスポイントであった。

しかし内容が酷過ぎてクラスの大半は絶句している。

入学当初は全クラス1000ポイントであった。そして5月の時点では……

Aクラス（坂柳クラス）940ポイント

Bクラス（一之瀬クラス） 650ポイント

Cクラス（龍園クラス） 490ポイント

Dクラス（平田クラス） 0ポイント

この時点でDクラスは他クラスに比べて遥かに劣っていた。

その後、筆記試験や特別試験で各クラスは様々な戦略を立てるが、差は歴然。

坂柳有栖が率いるクラスは1学期に坂柳派と葛城派に別れるも、無人島試験で葛城派の力を削ぎ、船上試験では龍園翔のクラスと手を結び、5月の時より224ポイント増やしている。

一之瀬帆波が率いるクラスは特別試験の結果はイマイチであるが、入学して直ぐにクラスが纏まり、5月の時より71ポイント増やしている。

そして龍園翔が率いるクラスは1学期は暴力による龍園の独裁体制となるが、無人島試験と船上試験では八幡の好アシストやAクラスとの同盟のおかげで、5月の時より379もクラスポイントを増やし、葛城を嵌めた事により月117万と大量のプライベートルポイントによる資金源も確保している。

そんな中、Dクラスは問題児集団であり、稼いだクラスポイントも須藤と由比ヶ浜の停学により失い、由比ヶ浜を理由に坂柳と龍園が同盟を結ぶなど絶体絶命となっている。クラスポイントも無人島試験で増やしたものの、今ではたった1ポイントしかない。

い。

『ふぎけんなよ由比ヶ浜の奴！アイツが殴らなかつたら停学を食らつたのは比企谷だけなのに！』

『本当足手纏いよね！』

『死ねよあのカス！』

その事実にはDクラスのあちらこちらから怒号が生まれる。クラスの面々の大半の眼差しには怒りと諦めが宿っている。

担任も含め、Dクラスの生徒はAクラスに上がるのは無理だと思うようになり始めている。今後クラスポイントを稼いでも、由比ヶ浜の愚行やA B連合による攻撃で直ぐにポイントを失うだろうと思うようになっていく。

平田や櫛田、雪ノ下が止めようとするが余りの暴言の激しさに全く止まらないまま、朝のHRが終了するのであった。

## 事故

## 停学3日目

俺は自室の勉強机に向かい勉強をしている。停学した以上学校から課題は出るし、学校に行けないから授業を受けることも出来ない。

普通の学校ならラツキーと思うかもしれないが、この学校は赤点を取ったら即退学であるので勉強を疎かにするわけにはいかない。

よって俺は停学を食らってからは飯を食う時以外は外出しないで勉強をしているのだ。

とはいえそこまで辛い点はない。今日の朝には腕の痛みは引いたし、俺がない時のノートはひよりがわかりやすく作ってくれているので、停学が明けても遅れはないだろう。

その点についてはひよりにマジで感謝しているが、ノートを渡す度に俺にキスをしてくるのは勘弁して欲しい。ひよりは俺にキスをするのと幸せな気分になると言っているが、俺からしたら毎日悶死してしまいそうだ。

そう思いながらも勉強をしていると携帯が鳴るので、取り出すと綾小路からメールが

来ていた。

内容を見てみると……

『今日、ウチのクラスで体力測定があったから記録データを送る。参加表は後日に』

データファイルが添付されたメールだった。開いてみると停学中の由比ヶ浜を除いたDクラスの生徒39人の記録があった。

これは重要な情報だ。これと今後作るDクラスの参加表をAクラスと利用すれば、Dクラスに大打撃を与えられるだろう。

俺は綾小路に感謝のメールと報酬のポイントを送りつけ、このデータを龍園と有栖の携帯に送信する。

すると有栖からはすぐに返信が来た。

『情報感謝します。それと今日ですが、八幡君の腕も完治してるでしょうから、約束のお泊まり会を開きませんか?』

そういうや以前そんな約束をしたな。出来れば遠慮したいが、したら後で絶対に面倒な事になるだろうし……

俺はため息を吐いてから有栖に了承の返事をメールして携帯を閉じる。有栖のことだから俺に抱きついたり頬にキスをしてマウントを取ってくるだろうから、こっちも反撃しないとな。

30分後……

ピンポーン

勉強もひと段落したので夕食を作ろうってタイミングでインターフォンが鳴ったのでモニターを見れば荷物を持った有栖がいた。

それを確認した俺は玄関に行き、ドアを開ける。

「来たか。荷物は持つ」

「ではお言葉に甘えて」

俺は有栖から荷物を受け取りリビングに案内する。

「飯は和食で大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。ところで停学中は退屈ですか？」

「否定はしない。出された課題とかは問題なくこなせてるが、先生に質問出来ないのと遊びに行けないのが辛い」

「放課後なら遊びに行つて良いのでは？ 由比ヶ浜さんはさつきショッピングモールで遊んでましたよ？」

「心にもない事を言うな。一応罰を受けてる身だからな」

いくらクラスポイントが増えたとはいえ、俺は学校から罰を与えられた人間だ。必要な物の買い出しとかならまだしも、謹慎中に遊びに行くなんてダメに決まっている。

つか遊んでるのを監視カメラで見られるだろうし、そうなったら教師からの心証が悪くなるわ。

「もちろん冗談ですよ。まあ由比ヶ浜さんがショッピングモールにいるのを見た時は驚きましたよ」

だろうな。アイツは停学の意味を知らないのか？それとも自分には一切の非がないと思ってるのか？

「まああの馬鹿がどういう行動を取ろうがどうでも良い。とりあえずクラスポイントが増えたんだし、Dクラスには体育祭でお礼をしないとな」

「そうですね。先程の情報はありがたく使わせて貰います」

参加表を手に入れたら、運動記録データと照らし合わせ、俺達AB連合も参加表を作る。

そうすりゃDクラスはAクラスとBクラスを上回ることは出来ず、3位より上にはなれない。

そして体育祭は学年別でクラスポイントが動き、1位のクラスはプラス50ポイン

ト、2位は0ポイント、3位はマイナス50ポイント、4位はマイナス100ポイントだ。

つまりDクラスの参加表が手に入ればDクラスのポイントがマイナスになるのは確定してことだ。

何にせよDクラスは今後浮上しないだろう。由比ヶ浜が足を引つ張りまくるだろうし、仮に由比ヶ浜が退学しても、それまでのダメージが深刻で再起するのは不可能だと思ふ。

そんな事を考えながらも俺はキッチンに入り有栖と雑談をしながら調理をする。

料理は40分くらいで完成し、テーブルに運ぶ。料理は米に野菜炒めに生姜焼きに味噌汁とシンプル極まらない料理だ。毎日自炊する以上、そこまで凝った料理は作らない。

「待たせたな」

「いえ。ご馳走になります」

そう言うってから俺達は互いに向かい合って食事をするが、有栖はゆっくりながらもていねいな所作で飯を食べる。

そして食べ終えて、食後の紅茶を淹れようとしたら有栖が話しかけてくる。

「あ、八幡君の頬にご飯粒がついてますから取りますね」

言うなり有栖は俺に近寄り、あろう事か舌を使って俺の頬を舐めてくる。

「んなっ！」

驚きながら有栖を見ると、有栖はご飯粒がついた舌を口内にしまつてから、クスクスと笑う。

「ふふつ、随分と可愛らしい反応ですね」

コイツ、ちよつとした事でマウントを取りに来るとは……やつぱり油断は禁物だ。

とはいえ有栖相手にやられっぱなしは趣味じゃないし、やり返すでしょう。

「わざわざありがとな。お礼にキスしてやるから目を閉じろ」

言いながら俺は有栖に近寄り、左手を有栖の背中に回し逃げられないようにしてから、右手で有栖の顎を掴む。

「えっ……じよ、冗談はやめてくださいっ」

すると勝ち誇つた笑みを浮かべていた有栖は笑みを消し、頬を染めながらテンパリだす。

「目を閉じろ」

そんな有栖に対して有無を言わさない口調でそう言う……

「は、はい……」

やがて有栖は真っ赤になって頷きながらゆっくりと目を閉じて唇を突き出す仕草を見せる。

まあ実際にキスをするつもりない。唇を近付ける気配で有栖を弄び、キスをする直前に狙いを有栖の唇から有栖の耳に変えて、息を吹きかけるだけだ。有栖の弱点が耳であるのはしつかり把握してるからな。

有栖の唇に自身の唇を近付けると、有栖も気配を察したようで、更に顔を赤くする。さてさて、緊張している状態で耳に息を吹きかけられた有栖の反応はどんなものだろうか。

最近是有栖にマウントを取られまくってるし、ここらで有栖に対する主導権を握らないとな。

そう思いながらも有栖との距離を詰めにかかる。

5センチ……

4センチ……

3センチ……

2センチ……

1センチ……

そして0になる直前に俺は顔を有栖の唇から耳に移そうとした時だった。

ゴトゴトゴト……

突如、そこそこ強い地震が現れた。震度は4から5くらいだろう。

「なっ!」

同時にフィジカルが弱い有栖は地震に耐えられず、こちらに倒れかかり……

ちゅっ

有栖の唇と有栖の耳に移動しようとした俺の唇が重なってしまったのだ。

これには有栖も予想外のように目を見開きながら倒れかかってくる。

一方の俺も相当動揺しているようで、有栖を支えることが出来ずにキスをしたまま背中から床に倒れてしまった。

それにより背中に痛みが生まれるが、今現在もキスをしているからか、そこまで痛いとは思わなかった。

現在、有栖は俺の上に乗りながらキスをしているが、まさか有栖ともキスをするとは思わなかった。

そんな中、俺は今後有栖とマウン트의取り合いをするのはやめようと半ば現実逃避しながら決意するのであった。

## 温もり

「……………」

「……………」

部屋には無言しかない。しかしこれだけなら珍しくない。停学中は基本的に一人で部屋に籠っていたからな。

しかし今は隣に有栖がいて……

「っ！」

お互いにチラチラ見合つて、目が合うとお互いに真つ赤になつて目を逸らす。さつきから30分以上この調子である。

先程俺達は唇同士のキスをした。頬にしたことは何回もあるが、有栖と唇同士のキスは初めてだから物凄く恥ずかしい。

キスした直後はひよりに何回もキスされてるし、大丈夫じゃね？……つて思っていたが、そんな事は全然無かった。

有栖の唇はひよりの唇とはまた違った魅力があつて、キスをした瞬間にはひよりのキスに匹敵するくらい心地よさを感じた。

まああくまで俺がそうであり、有栖がどう思っているかはわからないがな。

「その……悪かったな。元々俺はキスをする直前に、攻撃対象を唇から耳に変えて息を吹きかけるつもりだったんだが、こんなことになっちまって」

そう思いながらも口を開ける。いつまでもこうしてるわけにはいかないからな。

「い、いえ。元はと言えば私が地震によって揺れてしまったのが悪いですから」

「そんな事ない。ファーストキスを奪った俺を咎めても文句は言わん」

そう言うのと有栖は突然モジモジし始める。そんな有栖は新鮮なので思わず二度見してしまう。

「それなんです……八幡君とキスをした時、八幡君の唇から私の唇に温もりが伝わってきて、その温もりが全身に広がって心地良かったです。だから……」

有栖はモジモジしながらも俺を上目遣いで見上げて……

「だから……その、八幡君とキスした事は嫌ではなく……寧ろ、幸せでしたから気に病まないでください」

そんな事を言ってくるが、そんな事を言われたらマジで恥ずかしくて死にそうだ。つかひよりも似たような事を言っていたが、コイツらは俺を悶え死にさせたいのか？

「わ、わかった……ありがとな」

「い、いえ」

しかし幾ら何でも直ぐに切り替えるのは無理なので思わず上ずってしまうのは仕方ないだろう。

結局、いつも通りの態度になる事が出来たのはそれから1時間後であった。

数時間後……

「んじゃ俺はそろそろ眠るが、俺はソファーを使うからお前はベッドを使ってくれや」  
何とか気まずい時間を乗り越えた俺達は勉強をしたり、各自で風呂に入ったたりして、  
そうこうしている内に23時半になったので有栖にそう口にする。

対して有栖は首を横に振る。

「嫌です。八幡君と一緒に寝たいです」

即答かよ……確かに一緒に寝た経験はあるが、一夜を過ごすのは初めてだから緊張するし、断るしか「断ったら、明日Bクラスの教室で堂々と龍園君に相談します」貴様なんて恐ろしい事を提案しやがる?!んなことしたら停学明け以降、ずっと龍園に笑われるだろうが!

「……わかったよ。入りな」

溜息を吐きながらベッドに入ると、有栖はゆったりとした足取りでこっちに來て杖を

ベッドに立てかけてからベッドに入ってくる。

「ではお邪魔します」

そう言つて俺に張り付いてきて、胸に顔を埋めてくる。こんな風に甘えてくる有栖を見ると、さっきのキスの事もあってドキドキしてしまう。

「……八幡君の温もり、凄く気持ちいいです」

「そうか？」

ひよりも似たような事を言っていたが、俺の温もりつてそんなに気持ちいいのか？

「はい。八幡君の温もりを感じている間は幸せです」

信じられないのは事実だが、これまでに何度も抱きしめられているし信じるしかないな。

まあ俺も有栖の温もりを感じていると心地よいと思うからな。

そう思いながら俺はゆっくりと目を閉じて、襲ってくる睡魔相手に抵抗しないで眠りに身を委ねるのであった。

「すう……んんっ……」

「おや、八幡君は寝てしまいましたか」

八幡の口から聴こえてくる寢息に有栖はクスリと笑みを浮かべてから八幡の顔を見る。月明かりに照らされる八幡の寢顔は有栖にとって幻想的だった。

そしてそつと唇を撫でる。

「この唇を相手に……キス、したんですよね」

有栖は先程八幡としたキスを思い出す。今でもハッキリと覚えているし、あの時の感触は一生忘れない確信があつた。

ファーストキスではあつたが、嫌という気持ちは全くなく、寧ろまたしたいという気持ちすらあつた。

そこまで考えていると……

「んんっ……あ、有栖……」

八幡は寢言を言いながら有栖を抱きしめる力を強め、顔を有栖の顔に近づけてくる。

それによりお互いの唇の距離は僅か3センチ。どっちかが少し動いただけで簡単に重なる距離だ。

その距離を前にして有栖は……

「……んんっ」

そつと顔を前に動かして唇を重ねる。もう一度あの時に感じた温もりを感じたいが故に。

それにより唇から八幡の温もりを伝わってきて全身に広がり幸せな気分になる。

「不思議な人、ですね……」

言いながら有栖は八幡をギュッと抱きしめる。今まで自分に従った人間は山程いたが、些細な事でお互いにマウンツを取り合う人は八幡が初めてだ。

そしてそんな風に過ごす日常は有栖にとって楽しい時間でもあり、これからもこんな風に過ごしたいと思っている。

そこまで考えいる時だった。寝ている八幡も有栖の背中に手をまわして、そのまま有栖の唇にキスをする。

「んんっ………恥ずかしいですね」

寝ている状態とはいえ、八幡からキスをされた有栖は全身に熱が溜まるのを自覚する。

有栖はそう言いながらも頬を緩ませまくりながらも、八幡を抱きしめる力を強めてゆつくりと目を閉じるのであった。

「んっ……んんっ」

朝の日差しにより目を開けると窓からは太陽の光が部屋を照らしていた。今日も良い天気で、気分は良い。

そこまで考えているとベッドに有栖が居ないことに気付く。もしかしてもう帰ったのか？

疑問符を浮かべながらも俺もベッドから起きて、洗顔をするべく洗面所に向かい、スライドドアをずらすと……

「あ」

そこにいたのは半裸の有栖だった。

当初有栖はポカンとしていたが、徐々に真っ赤になっていく。俺はといえども目を逸らし洗面所から出ないといけなのだが……

(め、目が離せない……)

有栖の姿がエロ過ぎて目が離せなかった。

ショーツは真っ白で中央にリボンが付いたシンプルなデザインだが、ガーターベルトとストッキングが美しさとエロさを生み出している。

更に有栖の右手にブラジャーを持っているが故に、上半身には何も付けられておらず、胸が露わとなっている。

今まで有栖の綺麗な水着姿は見たことあるが、何も付けてない有栖の胸は白くて美術品のように美しい。高校生にしては小さいが、確かな膨らみが見て取れる有栖の胸を見て見惚れない男はいないだろう。いるならソイツは間違いなくホモで、女の中でも見惚れる奴はいると思う。

すると……

「あ、あの八幡君。そんなキラキラした眼差しで見ないでください」

モジモジしながらそんな事を言ってくる。同時に正気を取り戻した俺は即座に後ろを向き、脱衣所のドアを閉める。

(何をやってんだ俺は……?)

つい見入ってしまったが、犯罪行為……なのかいや、自分の脱衣所に入っただけだから犯罪行為ではないな。

が、法律的にセーフでも倫理的にアウトであるのは間違いない。後で有栖にしばかれそうだ。

暫くすると脱衣所のドアが開き、制服に着替えた有栖が真っ赤になりながら上目遣いで見てくる。

「昨日は唇を奪い、今日は裸を見る……八幡君は私を悶死させたいみたいですね?」

「……濟まん」

「私が出す条件を呑まないなら許しません」

「条件？」

絶対にヤバい内容だと思うが聞いてみる。すると有栖は真っ赤な表情のまま、深呼吸をして……

「私のものになってください。高校を卒業したら同じ大学に入学して、仕事に就くことになっても私と同じ仕事をしてください」

そんな提案をしてくる。ぶっ飛んだ内容とは予想していたが、内容のレベルが予想よりも遥かに上回っていた。

「い、いや……流石にそれは「拒否は認めません。八幡君はいやらしいので、他の人に被害が出ないよう……わ、私が側で八幡君をずっと監視しないとイケないですから」お、おう……」

そこまで言うかと言いたいが、これまでの行動が行動だからなあ……

しかしマジでどうしようか？有栖が自分の意見を曲げるとは思えないし「ピンポン」っと、客か。とりあえず応対をして、一旦逃げるか。

「今出る」

「あ、ちよつと待つてくださいい！」

有栖の制止を無視して玄関に向かい、ドアを開けると……

「おはようございます八幡君」

ひよりが満面の笑みを浮かべて立っていた。あれ？そーういや俺、ひよりとともキスをしたな。なんか嫌な予感がしてきた。

「時間に余裕があるので八幡君に会いに来たの、です、が……え？」

そこまで考えているとひよりはポカンとした表情になる。

しかしそれも一瞬でジト目になる。同時に背後から気配が近付いてくるのを察して

……

「どうして坂柳さん（椎名さん）が朝から八幡君の部屋にいるのですか？（来ているのですか？）」「

2人がジト目で俺を見ながら詰め寄ってくる。  
面倒なことになってきたな……

## プチ修羅場

沈黙が痛いという言葉があるが、普段の俺はそう思わない。静かな事に耐えられない人間もいるが、俺は静かな時間が好きだし、この学校に入るまでボツチだったから基本的に沈黙が痛いと考えたことはなかった。

昨日までは。

「……………」

「……………」

「……………」

部屋には沈黙が生まれて、息苦しく感じている。目の前にはジト目を向けながらプレッシャーを放つひよりと満面の笑みを浮かべながらもプレッシャーを放つ有栖がいた。

2人とも無言ではあるがプレッシャーが強くてビビってしまっている。

何故こうなったかという、さつきひよりが俺の部屋に来たのだが、その際に有栖を目撃して不機嫌となったのだ。一方の有栖もひよりを目撃した瞬間、明らかに不機嫌となった。

そして2人は俺に対して事情を聞いて来たのだ。んで俺は逆らえずにひよりとお泊まり会をした際にひよりとキスをした事を始め、有栖が俺の泊まりに来て事故とはいえキスをしたり艶姿を見た事を全て話した。

そして2人とも物凄く不機嫌になって無言となったのだ。まるで俺は判決を待つ犯罪者のようだ。

「なるほど……とりあえず八幡君の手が速いというのは間違いありませんね」

「ぐっ……」

漸く沈黙が終わったが、有栖の鋭い言葉が胸に刺さる。まあ確かに2人の女子とキスをしているし、そう言われても仕方ないな。

「まあ私達はあくまで八幡君の友人なだけですから、八幡君をどうこうするつもりはありません。ですが1つだけ聞かないと気が済まない事があるので聞いても良いですか？」

ひよりがそんな事を言ってくる。口調からして相当重要な事かもしれないな。

「何だよ？」

「私のキスと坂柳さんのキス、どっちの方が好きですか？」

「ぶっ！」

予想以上にぶっ飛んだ質問に噴き出してしまふ。何っ！恐ろしい質問をしやがるん

だよ？

「それは私も気になりますね。教えてください」

すると有栖もひよりに便乗してくる。待つてくれ、そんな質問をしないでくれ。

どうしたものかと悩んでいると有栖の方からアラームが鳴り出す。

「おや、そろそろ学校に行く時間ですし、朝はここまでにしましょう」

どうやら神は俺を見捨てていないようだ。

「そうですね。では八幡君。放課後に坂柳さんと一緒にこの部屋に来ますから、その時

までに答えを用意してください」

ちゅっ

ひよりはいつものように俺にキスをしてから立ち上がる。

「おやおや……随分と大胆ですね」

そう口にする有栖からのプレッシャーは増大した。ハッキリ言つてメチャクチャ怖

い。

冷や汗をダラダラ流していると有栖も俺に近づき、そのままキスをしてくる。

「んっ……楽しみになりますから」

神は俺を見捨てていたようだ。単に時間が僅かに伸びただけだ。

そう思っている間に2人は部屋から出て行く。それを呆然と眺める俺は、やがて再起

動して携帯を取り出して龍園に『暇だから放課後部屋に遊びに行かせてくれ』とメールを送るが、『わかった。ひよりと坂柳への連絡は任せろ』と返事が来たので龍園の部屋に行くのはやめた。

龍園の事だから、俺のメールだけでひよりと有栖が関わっていると察したのだろう。無駄に凄い洞察力だが、今だけは腹立たしいな。

内心溜息を吐きながらも俺はどつちのキスが良いか真剣に考えるのだった。

数時間後……

ピンポン

部屋のインターフォンが鳴る。昨日までは時間が経つのがメチャクチャ遅いと思っていたが、今日に限ってはあつという間と思えるくらい早かった。

カメラ映像を確認すると案の定、ひよりと有栖が映っていたので、玄関に行きドアを開ける。

「お邪魔します」

「失礼します」

2人はそう言って部屋に上がるのでリビングに案内する。2人はクッションの上に乗ると即座に詰め寄ってくる。

「では答えを聞かせてください」

「私と坂柳さん、どっちのキスの方が好きですか？」

「どっだけ答えを聞きたがってたんだよ……」

2人は俺を強い目で見てくるが、残念ながら2人が満足する答えは持っていない。

「済まん。今日一日考えたが、ひよりのキスにしろ有栖のキスにしろ、それぞれ違った魅力があつて、優劣をつけられなかった」

「そう言つて俺は頭を下げる。ひよりのキスには甘さが含まれていて、キスを受けると蕩ける気分になる。」

一方、有栖からのキスには強さが含まれていて、キスを受けると気分が昂ぶるのだ。

しかし両者からのキスについて共通点がある。それはどちらのキスからも優しさが含まれていて幸せな気分にもなる。

結果として俺の中で優劣をつけられなかったのだ。

まあこれはあくまで俺の意見だからひよりと有栖が納得するかはわからない。

すると……

「そうですね。なら仕方ないですね」

ひよりがそんな事を言ってくるので顔を上げると、2人とも特に不満そうな表情は浮かべてない。

「え？怒ってないのか？」

「残念に思う気持ちはありますが、真剣に考えた結果なら文句はありませんよ」

「それに八幡君は魅力的だと思っっているようですから」

ぐつ……有栖の笑顔が腹立たしいな。やっぱり俺は有栖に勝てないのかもしれないな。

「まあ今はそれで良いですが、いつか八幡君を私のものにしますので、八幡君はしっかり覚えていてくださいね？」

そんな事を言ってくるが、有栖は本当に俺を手に入れようとしてくるだろう。

「いえ。私も八幡君と一緒に過ごしたいですから、坂柳さんには八幡君を渡しません」  
「望むところですよ」

するとひよりが決意の籠った眼差しで有栖と向き合い、有栖は笑顔で迎える。2人の会話を聞いていると俺を取り合っているように聞こえるが、俺にそんな価値があるとは思えないんだがな……

「まあ今揉めても仕方ないから、この話は一度終わりにしましょう」

「椎名さんの言う通りですね。ところで八幡君にお願ひがあります。さつき椎名さんとここに来るまでに話したのですが、今日もまた泊めてくれませんか？」

「私も八幡君とまたお泊まり会をしたいです」

そんな風に言ってくる。確かに俺の部屋に2人が泊まるのは校則違反ではないが……

「流石に2人同時は「嫌、なんですか……?」ぐっ……嫌ってわけじゃないが「仕方ないですね。どうしたら泊めてもらえるか龍園君に相談してみるところでしょうか」……ぜひ泊まってくれ」

断ろうとするが、ひよりの上目遣いに揺らいでしまい、有栖の爆弾発言に屈してしまった。

「ありがとうございます」

2人の笑顔に俺は何も言えなくなってしまった。

やはり俺は2人に頭が上がらないなあ……

数時間後……

「ではそろそろ寝ましようか」

「そうですね。私達は学校がありますから」

2人を泊める事を了承してから、一緒に飯を食ったり、読書をしたり、勉強したり、風呂に入ったりしている内に日が変わったので有栖達はそんな事を言ってくる。

それについては異論はないが……

「お前ら、離れてくれないか？」

ベッドに行こうとしたら2人が俺の腕に抱きついて離れる気配を見せない。2人の柔らかな身体の感触が伝わってきてドキドキする。

「嫌です」

そして速攻で拒否られる。予想はしていたが即答か……

内心苦笑をしながら俺はベッドに入り、2人に挟まれながら電気を消してから仰向けになる。

すると左側に抱きついていひよりは俺の左足に足を絡め、有栖は俺の右足に絡めてくる。密着してくる2人は俺の理性を削りたいようだ。

「ではお休みなさい八幡君……んっ」

ひよりはそう言つてキスをしてきて、同時に首筋がくすぐったくなる。

「うわあっ！」

「ふふっ、可愛らしい声ですね。お休みなさい」

有栖の奴、自分の舌を俺の首筋に這わせてきたか……やってくれるな。

やり返そうか悩んだが、やり返したら有栖もやり返してくるだろうから辞めることにした。それにマウンツの取り合いをした結果、有栖とキスをしたからな。

(まさか女子2人と眠る事になるとはな……ま、今日だけだし頑張るか)

そう思いながら俺は2人の身体の感触にドキドキしながらも何とか眠りにつくのだった。

翌日、2人は俺にキスをしてから学校に行ったが、放課後になってまた泊めてくれとおねだりをしてきて、なし崩しに再度泊める事になった。

それは俺が停学が明けるまでずっと続くのであった。

## 停学明け

「いよいよ今日から復帰ですね。まあ勉強は部屋でしてますし、大丈夫でしょう」

「そうですね。私としては教室に八幡君が居ないのは寂しかったです」

朝、自室にて朝食を食べていると右隣に座っている有栖がそう言って、左隣に座っているひよりが頷く。

2人の言うように俺は昨日で謹慎期間を終え、今日から学校に行く。学校から出された課題は全て終わってるし、クラスポイントも結果的に増えたから学校に行っても悪い事にはならないだろう。

それについては問題ないが……

(もうひよりと有栖って俺と同棲してね?)

有栖と初めてキスをした次の日から、ひよりと有栖は毎日俺の部屋に泊まるようになる。しかも昨日、この部屋に自分の制服や教科書などを置いて良いかと頼んできたし同棲する気満々だ。

最初は断ろうとしたが、2人の上目遣いに負けてしまい了承してしまった。俺、2人に頭が上がらないなあ……

しかし悪いことばかりじゃない。家事の半分はひよりがやってくれているし、有栖はその間に俺に勉強を教えてくれるが、前者は負担が減ってありがたいし、後者については教え方が上手いので理系科目の理解が深まっている。

ただ行ってきますのキスやおやすみのキスをしたりするのは恥ずかしいから勘弁して欲しい。

そう思いながらも朝食を済ませて学校に行く準備をすると、ひよりと有栖は俺の腕に抱きついてくる。2人のささやかな胸が腕に当たり、ドキドキしてしまう。

しかし、ここで離せと言っても却下されるのは目に見えているし、特に何も言わずに部屋を出る。

寮を出て久しぶりに通る通学路を歩いていると、辺りから視線が集まる。まあ停学を食らった人間が美少女2人に抱きつかれながら歩いていたら嫌でも目立つよな。

「しかし目立ちまくりだがお前らは嫌じゃないのか？」  
「いえ。全く嫌じゃないです」

「椎名さんと同じです。それに私達は同盟を結んでますから問題ありません」

まあそうだな。Aクラスリーダーの有栖とAクラスと同盟を結んでいるBクラスにてそれなりの地位にいる俺が一緒に歩いていてもおかしくはない。

例外があるとすれば由比ヶ浜に見られたらギャーギャー騒がれるだろうが、アイツは

停学中だから問題ない。

つか由比ヶ浜は停学中の課題をやってるのか？俺もやったが、アレ結構難しかったし。

まあどうでも良いか。

そう思っている間にも学校に着いたので昇降口で上履きに履き替える。

「じゃあ俺は職員室に行かないといけないし、またな」

「はい。また後で」

「教室で待っていますね」

2人は腕から離れるので俺は職員室に向かい、中に入る。

「失礼します。坂上先生はいますか？」

「おはよう比企谷君。課題の提出かね」

「こちらです」

「確かに受け取った。今日から復学だが、今後は暴力を振るわないように。結果的に得をしたとはいえ、停学は本来避けるべきだ」

まあそうだな。今回の件も由比ヶ浜がぶっち切りの馬鹿だから良かったが、マトモな人間なら俺に暴力を振るわないで、雪ノ下を殴った俺を学校に訴えていただろうからな。

「以後気をつけます」

坂上に一礼をして職員室を後にする。とりあえず教室に向かうが、悪感情を向けられることはないだろう。

そう思いながら歩き、自分の教室に入る。すると皆が一斉に見てくるが、予想通り悪感情は感じられないので安心した。

「よう比企谷。お務めご苦労だったな」

そう言ってくるのはBクラスのリーダーの龍園で、満足そうな笑みを浮かべて俺に近寄ってきて携帯を取り出す。

「お前のおかげでCクラスと差を付けて、Aクラスと差を縮められたぜ。だからクラスの皆からポイントを集めて慰労金を用意したから取っとけ」

言うなり龍園が携帯をいじると俺のポケットから電子音が聞こえてきたので、携帯を取り出す。

そしてポイント残高を確認すると、プライベートポイントが朝見た時より25万増えてきた。

俺が稼いだ50クラスポイント、これはつまり俺が所属するBクラスの生徒が月の初めに貰えるプライベートポイントが5000増える事を意味する。

クラスの人数は40人。つまり50クラスポイント稼ぐと、月の初めにBクラス全体

に20万振り込まれる事を意味する。

それはわかるが……

「20万じゃないのか？」

振り込まれたのは25万。貰える分にはありがたいが、20万でも不満はない。

「お前はクラスでも身分があるから、見舞金も付けたただけだ」

「ヤクザかよ……まあ貰つとくけど」

貰えるならありがたく貰うとしよう。

「それとお前が停学中に、Aクラスの成績の良い奴がウチのクラスの馬鹿どもに勉強を教える事が始まったから、お前も時間がある時に教える側で参加しろ。金田やひよりにも話をしてる」

そういうや龍園はウチのクラスの学力を上げる為に有栖と取引を交わしていたな。俺も文系科目については学年トップクラスだから呼ばれるのは必然。

面倒ではあるが仕方ない。1学期に龍園を王と認めた以上、やらないって選択肢はないのだから。

俺は息を吐いて席について朝のHRが始まるのを待つのだった。

数時間後……

「遅れてすまない」

授業が終わって、俺はとある教室に入る。中を見れば既に生徒が複数いた。

「時間前だから問題ないよ〜」

そう返すのはCクラスリーダーの一之瀬帆波。今日は体育祭の団体競技についての話し合いがある。

既に練習の記録は龍園から貰って、停学中に見たので問題はないが……

「それなら問題ないが、話し合いは一之瀬一人で参加してくれないか？警戒心剥き出しの人間が多いと気が休まらない」

見れば一之瀬以外の大半は警戒心を露わにしている。

「ごめん。比企谷君がクラスポイントを稼いで差を付けられちゃったから気が立ってるから……そんな訳だから部屋から出て貰えないかな？」

まあそうだろうな。ウチのクラス、というか龍園は入学して直ぐに一之瀬のクラスに攻撃を仕掛け、一之瀬のクラスをBからCクラスへ落とした。

加えて俺がクラスポイントを稼いだとなれば気が立っていてもおかしくない話だ。

「ダメだよ帆波ちゃん！龍園君の右腕なんかと二人きり危険過ぎるよ！」

「こちら千尋ちゃん。失礼だよ」

「でも……」

一之瀬はそう言うがオカンかよ。

「別に気にしてない。無人島試験で自分のクラスに50ポイントの損害を与えたソイツからしたら、俺達を警戒するのは当然だ」

「っ……!」

俺がそう言うのと無人島試験にてリーダーをして、龍園に指名された白波千尋は真っ青になる。

と、ここで一之瀬が白波をギユツと抱きしめる。

「千尋ちゃんは悪くないよ。金田君を迎え入れる選択をした私の責任だから」

まあ間違っちゃいないな。少なくとも俺がクラスを率いるなら殴られた痣があつても門前払いをする。

そうこうしていると一之瀬が俺を見てくる。

「千尋ちゃんがごめんね。でも今は体育祭の話し合いだからこれ以上は勘弁して欲しいかな?」

「……ああ。こちらとしても悪かったな」

少しイラツとしたとはいえ、少々攻めすぎたな。

「じゃあ本題に入るが、体育祭の団体競技についてだ。練習しやすい騎馬戦や玉入れは金田が主導で練習をしてる事は動画で見た。それを踏まえて、俺が考えた作戦だが……」

そう前置きして俺は団体競技における作戦を説明するが、全て説明するとCクラスの大半は引いたり苦笑いをしている。

「うーん……基本的には文句はないけど、綱引きについては賛成しかねるね。卑怯って言われるよ?」

卑怯?何を言ってるんだか。

「別にルールは破ってないからな?さつき坂上先生に聞いたら禁止事項じゃないって言われた」

「モラルの話だよ」

「卑怯ってのは敗者の戯言だ。俺は龍園と違ってルールを破る事はしないが、ルールの範囲内ならなんでもやる主義だ」

倫理的にアウトだろうが、法律的に問題ないなら俺は気にしない。

すると口を挟む男がいた。CクラスのNo. 2の神崎だ。

「一之瀬。比企谷の提示する作戦に乗るべきだ」

「ちよっ?!本気で言ってるの神崎君?!」

すると一之瀬の後ろにいるポニーテールの女子が慌て出す。

「ああ。ここで俺達が反対しようが、龍園の性格から考えて実行するはず。ならば怪我人を出さないようにBクラスに合わせるべきだ」

だろうな。というか龍園も十中八九俺と同じ作戦を考えているだろう。そしてマトモな人間なら龍園は周りの反対なんて気にしないと理解出来る筈だ。

よって神崎の意見はモラルを無視すれば、Cクラスにとって最善の考えである。

「まあどんな選択をするかは自由だ。それにこの作戦は実力がA D連合と互角の時のみの作戦だから、出来ない事もあり得る」

「……そうだね。ならそうならない事を祈るよ」

お人好しめ。普通の学校ならまだしも、一之瀬のような人間はこの学校で勝ち抜くには不向きだろう。

まあライバルの一角がそうならありがたいと思っておこう。

そう思いながらも俺は作戦や合同練習について更に細かく詰めるべく案を巡らしていくのだった。

## 足並み

「んっ……はあっ……八幡君、もっと撫でてください」

そう言つて俺の膝の上に乗っている有栖。甘えん坊となつた有栖のおねだりに俺は抵抗する気もなく撫でる。以前は抵抗したが、おねだりに抗う事は出来なかつた。

「つかお前、いつもより甘えん坊だな」

「今日は椎名さんは茶道部でない為、八幡君を独り占め出来るからですよ……」

そう言つて有栖は俺の胸元にスリスリしてくる。停学騒動が終わつて時間は経過し、今は体育祭まで1週間を切っている。

そんな中、ひよりと有栖は毎晩俺の部屋に泊まつていて半……どころか殆ど同棲している状態となっている。

それについては今更だからどうこう言わないが、時折火花を散らし合うのでそれだけは勘弁して欲しいものだ。

閑話休題……

とにかく俺は今、同棲相手の1人である有栖に思い切り甘えられている状態である。まあ泊まり込むようになってから大分慣れてきたがな。

しかし……

「八幡君、キスして良いですか？」

キスだけは慣れない。自分からしたことはないが、有栖とひよりは俺によくしてくる。

対する俺は拒否するつもりはない。どうせ拒否してもおねだりをされた了承するからな。

と、返事をしようとしたらポケットにある携帯が鳴るので有栖に断りを入れて携帯を確認すると……

『Dクラスの参加表が完成したから送る。クラスではダミーを用意するという発想が出てない。変更があつたら逐次報告する』

綾小路からこんなメールが送られてくる。添付ファイルを見れば全ての競技の参加表の写真がある。

「有栖。スパイからDクラスの参加表が来たから一旦中止にして龍園の部屋に行かないか？」

「参加表が来たなら仕方ないですね。では行きましょうか」

有栖は頷くと俺の膝の上から降りて杖をつけて立ち上がる。それを確認した俺は有栖の足に合わせて部屋を出て、エレベーターを利用して龍園の部屋に向かう。

そしてインターフォンを押そうとすると同じタイミングでドアが開き、龍園が出てくる。

「ん？お前らが来るって事は比企谷の携帯にも参加表が来たのか？」

「その様子じやお前は俺か有栖の部屋に行くつもりだったか？」

「ああ。が、お前らが来たなら俺の部屋で話すぞ」

龍園がドアを開けっ放しにするので、中に入る。龍園の部屋は何度か入ったが、小道具もあつて小洒落ている。

「まずは情報の確認だ。お前が貰った参加表を見せてもらおうぞ」

そう言われるので携帯を取り出して龍園に渡す。龍園は自分の携帯と俺の携帯を見比べて、やがて自分の携帯を操作する。それにより有栖のポケットから電子音が聞こえてくるので、有栖にも参加表を送ったのだろう。

有栖も携帯を取り出して確認する。

「情報感謝します。それでは以前八幡君が用意したDクラスの身体能力データと照らし合わせて参加表を作っていきましよう」

「既に準備は出来てる。Dクラスの参加表は今送られてきたばかりだが、今からプリントする」

龍園は鞆からプリントを数枚取り出し、パソコンを起動する。プリントを見ればDク

ラスの身体能力データがプリントされた紙やウチのクラスの参加表もある。やはり俺の部屋に行く気満々だったようだ。

暫くすると龍園の部屋のプリントから音が聞こえてきて、紙が出てくる。

「じゃあ早速参加表を調べろぞ」

言いながらDクラスの参加表を3人で見る。競技については各クラス2人ずつ出して、計8人で順位を決める。

最初の種目である100メートル走を確認すると、Dクラスの第1走者はDクラス最速の須藤とDクラス男子最弱の外村って男だ。

他の組も見てみると早い奴と遅い奴が一緒に走っている。その事から察するに……

「Dクラスは能力重視の組み合わせにしているみたいですね」

「予想通りだな。実際にDクラスの中堅メンバーは同じ中堅メンバーと組ませてるし、中堅同士が組んでいるところに早い奴をぶち込むぞ」

「中堅で固まっているのは龍園の案に賛成だな。んで須藤や平田みたいに圧倒的に早い奴がいるところに雑魚を入れれば良いな」

そんな風話をしながら有栖と龍園はDクラスの中堅メンバーが走るレースに早い生徒の名前を記入している。

すると有栖が口を開ける。

「あ、それと由比ヶ浜さんの件についてお願いがあります。彼女は頭も身体能力も悪いので、この戦略で行くとペナルティにより次の中間試験で退学になるかもしれないです」

だろうな。由比ヶ浜の身体能力はDクラスでもワースト3に入るほど低い。

俺達の戦略を使用したら由比ヶ浜は下位10人に入って、ペナルティとして次の中間試験で10点引かれるだろう。そうなったら由比ヶ浜は殆ど確実に退学になる。

しかし由比ヶ浜を徹底的に黜りたい有栖としてはそれは避けたいのだろう。

「ですから前半……そうですね、100メートル走、ハードル競争、障害物競走で由比ヶ浜さんと一緒に走らせるのは、私達のクラスで運動神経が悪い女子4人してくれないでしょうか?」

なるほどな。由比ヶ浜と走らせる女子7人の内、4人を雑魚にすれば由比ヶ浜がペナルティを受ける確率は大きく下がり、もしかしたら入賞するかもしれない。

「良いぜ。あのビッチと走らせる奴は雑魚にしといてやる」

有栖の頼みに龍園は了承する。俺達の同盟は由比ヶ浜が退学したら破綻する可能性が高い。まだAクラスとの差は結構あるし、龍園としても由比ヶ浜が早く退学するのは避けたいのだろうな。

「ご協力感謝します。では次に私達のクラスの中堅についてですが……」

それから俺達は参加表の作成を続けるが、龍園と有栖が足並みを揃える事に恐怖を感じてしまう。怪物2人が手を組んでDクラスを叩くのだから、Dクラスに未来はない。そんな事を考えながら俺はDクラスの大半に同情して、龍園と有栖が足並みを揃えられる要因となった由比ヶ浜に呆れるのであった。

1時間後……

「では失礼しますが、変わった事があつたら情報共有をしていきましょう」

「だな。んじやまた明日」

「ああ」

俺と有栖のクラスの参加表も完成したので、龍園の部屋を出てエレベーターに乗り、俺の部屋に戻る。

「とりあえずこれでDクラスが最下位は間違いないでしょう」

有栖の言う通り、Dクラスが最下位なのは間違いない。AクラスとBクラスはDクラスの参加表を参考にして参加表を作った。情報を持ってないであろうCクラスは運動神経が良い生徒が多く、マトモに戦ってもDクラスに勝つのは明白だ。

俺の予想では1位がCクラス、2位がウチのクラスで、3位がAクラスで4位がDクラスとなっている。

そして1位の組は50ポイント入り、2位は0ポイント、3位はマイナス50ポイントで、4位はマイナス100ポイントとなる。

んで総合で判断すると勝つのはAD連合の赤組だろう。2年3年のAクラスは文字通り桁違いだし。

そして勝った組にはポイントは貰えないが、負けた組はマイナス100ポイントとなる。

つまり俺の予想だと体育祭によって動くポイントは……

Aクラス      マイナス50ポイント

Bクラス      マイナス100ポイント

Cクラス      マイナス50ポイント

Dクラス      マイナス100ポイント

って感じになると思う。

これが俺の予想だが、こうなると俺達BクラスはAクラスとの差が生まれ、Cクラスとの差が縮まるので良くない結果となる。

まあ龍園も予想しているだろうし、なんか作戦を考えているのは間違いない。俺達B

クラスはそれに従えば良いだけの話だ。

そう思っていると制服を引っ張られるので横を向くと有栖が制服を引っ張っている。

「八幡君。さっきの続きですがキス、しても良いですか？」

「そういやさっきはキスをするって話をしていた時に綾小路から情報が来たんだつな。」

「……好きにしろ」

拒否しても最終的にはキスをする運命だ。

俺が了承すると有栖は目を瞑るので俺は身を屈め……

ちゅっ

唇と唇が触れ合う。何度も触れ合った唇だが美しく思える唇だ。

「ふふっ……やっぱり八幡君とするキスは気持ちが良いですね」

「そう言って寄り添ってくる有栖を見ると愛おしさが湧いてくる。この愛おしさはひよりに対して湧いてくるが、最終的にはどちらかを……」

「そう考えると憂鬱になってしまふ。2人は特に何も言っていないけど、いずれ俺は選ばないといけない。」

その時にどちらも納得する方法はあるのだろうか？  
俺は有栖からの甘えを受けながらそう考えるのであった。

## 体育祭開催

いよいよ迎えた体育祭当日。運動神経が余り良くない俺からしたら嫌な1日なので早く終わって欲しいのが本音だ。

まあ少しだけ良いこともある。それは……

「はい。こちらが八幡君でそっちがひよりさんです」

何と有栖がわざわざ弁当を作ってくれたのだ。基本的にひよりが家事をやって有栖が俺に勉強を教えているが、今日はひよりも忙しいからと言って昨日のうちから仕込みをしていた。

「ありがとうございます」

「わざわざ悪いな」

「お2人は競技に出ますから。私は出ませんが頑張ってくださいね」

有栖はそう言っているが外で応援したら面倒なことになるだろう。何せ有栖はAクラスのリリーダーだし。

とはいえ部屋の中だし、問題ないだろう。

問題があるとしたら体育祭本番だ。龍園の奴、参加表を作った翌日から一部の生徒に

何らかの命令を下していたのだ。

何を命令したのか聞いたら「お前は一之瀬と作戦会議をしてるし、そこからボロが出る可能性があるから今は教えられない」と返されたが、十中八九Cクラスを潰す作戦だろう。

何をやるかはわからないが、参加表が漏れてるDクラスではなくCクラスを狙うのが不気味である。

まあ俺は特に命令を受けてないので、そっちの仕事はしないで済むだろうな。

俺はそう結論づけて、2人と一緒に学校に行く準備を始める。適当に頑張りますか。

学校に着くと、直ぐに体操着に着替えてグラウンドに集まり開会式が始まる。しかし入場行進や開会宣言は簡潔に終わり。早速競技が始まる。

初めは100メートル走だ。

全員参加の個人種目は、全て1年生から始まる。最初に1年男子で始まって3年女子。100メートル走が終わったら途中休憩を挟んで1年女子から3年男子の順番で次のハードル走をやる仕組みだ。

競技に参加するため、俺達1年男子がぞろぞろとグラウンドへ出ていく。100メー

トル走は各クラスから2名ずつ出して8コースを使って行う。

俺は4組目だが、Dクラスの生徒を見れば綾小路が事前にくれた情報通りだ。加えて開幕スタートの1組目に須藤もいるし、この時点でDクラスの敗北は決定したようなものだ。

1組目がスタートすると須藤は圧倒的なスピードで1位を取り、ウチのクラスの野村と鈴木はビリとブービーだった。まあ予定通りだから問題ない。

その調子で進むといよいよ俺の番だ。俺と走る7人は各クラスの主力じゃないし上位入賞するかもしれない。

そう思う中、スタートするが案の定早い生徒はおらず俺は8人中1位をキープしてゴールする。幸先は悪くないし、この調子で行きたいものだ。

そう思いながら待機席でのんびりと男子の競争を見ているが、やはりCクラスは安定した結果を出している。特別試験ならまだしも体育祭や定期試験ではCクラスの安定力は厄介だ。

そして次は女子の番だが、Dクラスの遅い女子はビリが多く、早い女子は圧倒的な1位となり、中堅クラスは上位3人に入れずにいて予定通り……ん？

そこまで考えていると予想外の展開となった。Dクラスの女子でもトップクラスの速さを誇る堀北と走る選手にウチのクラスの女子でトップクラスの速さの伊吹が一緒

にいた。

「どういう事だ？伊吹は確かDクラスの中堅クラスの生徒を潰す役目だった筈だ。」

「龍園、何で伊吹が堀北と一緒になんだ？」

「アイツ、鈴音と戦いたいつて参加表を提出する直前にゴネたからな」

「いや拒否しろよ」

私情を作戦に挟むなんて龍園らしくないな。

「安心しろ。条件として伊吹が負けたら、今後二度と逆らうなつて念書を書かせた」

なるほどな。伊吹は龍園に反抗的な人間だから悪くない契約だな。

そう思っているとスタートするが、堀北と伊吹が他の6人より遥かに良いスタートを切った。

伊吹の方が僅かにリードしているが、堀北が気になっていからか差が縮まり、50メートルくらい進んだところで並び、やがて抜かされる。

すると伊吹も僅かにスピードを上げて堀北との差を縮め返していき、2人が並んだように見えたところでゴールする。

その後、伊吹は地面を蹴った事から負けたのだろう。一方の龍園は楽しそうに笑っているが、絶対後で伊吹を煽るのは容易に想像できる。

そして次のレースだが、Dクラスから出る2人の内、片方は由比ヶ浜で、それに伴い

Dクラスの男子は舌打ちをしている。その態度だけで由比ヶ浜の嫌われっぷりがよくわかる。

スタートするとAクラスの女子2人とウチのクラスの女子2人が遅いスピードで走り、由比ヶ浜はその4人の前を走っている。

しかも途中でCクラスの女子の1人が転び、結果として由比ヶ浜は3位でゴール。本人は喜んでいますが、こちらとしては予想の範囲内だ。というかそうなるように仕向けたんだから、4位以上でないで困る。

そのまま1年の100メートル走はDクラスが大敗である事が明らかになま終わって、白組が有利……なんて事もなく、2年3年のAクラスがぶつち切りであった為、全学年の100メートル走終了時点で赤組がリードしていた。

次に行われるのはハードル走だ。距離は100メートルで、ハードルを倒したら0.5秒、ハードルに接触したら0.3秒のペナルティがある。

俺と競う7人を見るが、最悪なことにCクラスからはサッカー部の柴田が出ている。100メートル走でもぶつち切りの速さだったので、1位を取るのは無理だろう。

そう思いながらレースを見るが、Dクラスが下位に沈んでいるパターンが多いので綾

小路がくれた参加表は正確である事を意味する。当の本人は無表情でハードルを飛び越えて3位を獲得している。

そんなこんなで俺の番になるが、柴田が圧倒的なスピードでハードルを飛び越え、俺を含めた7人はハードルを倒したり触れたりしながらゴールをする。

結果、俺は4番目にゴールしたが、3番目の生徒の方がペナルティがあつて3位となつた。1位と3位なので上出来だろう。

「ちっ、どいつもこいつも……やる気ねえのかよ」

待機地点に行くと、須藤が不機嫌丸出しで舌打ちをしている。多分Dクラスの成績が悪いからだろうが、参加表が漏れた時点でDクラスに勝ち目はない。

つか須藤はキレているがDクラスの生徒からしたら、停学を食らつた奴に言われたくないだろうな。

由比ヶ浜がぶっち切りだから目立つてはないかもしれないが、須藤は須藤で停学を食らつてクラスポイントを減らしてるとし、Dクラスのお荷物であることは間違いない。

そう思っているとはひよりの番となつたが、体育祭におけるひよりは捨て駒的扱いだから良い気分にはならない。まあ身体能力はクラス最下位だから仕方ないっちゃ仕方ないがな。

とはいえ勝負はまだわからない。ひよりが捨て駒的な立場であることには違いない

が、それはつまりもう1人のBクラスの女子とAクラスの女子2人も同じ立場であるから、もしかしたらペナルティを受けない可能性もある。

そしてスタートするとCD女子4人は全員早いようでも横並びで進み、AB女子4人は大きく遅れ、ハードルを倒しまくりながら進む。

しかしここで番狂わせが生じる。何とCクラスの女子がハードルを飛び越えた際に転倒したのだが、横並びになっている女子3人を巻き込んでしまったのだ。

それにより遅れているAB女子4人はCD女子4人を抜いてゴール。結果としてひよりは1位でゴールしたが、立派な番狂わせだろう。

するとひよりは俺に気付いたのかこっちに近付いてくる。

「八幡君。運が味方について1位でした」

「見た。でも仮に番狂わせが無くてペナルティは無かったし、頑張ったと思う」

仮にCD女子が転倒しなくても、5位には入れてペナルティは無かっただろう。練習でいつもビリだったことを考えれば頑張ったと思う。

「ありがとうございます。八幡君も格好良かったですよ……」

ひよりはモジモジしながらそう言ってくる。大切な人にそう言われるのは嬉しく思うが……

(人前で話すのは勘弁してくれ……)

周りにいる一年生はニヤニヤ笑いを浮かべたり、嫉妬の睨みを向けてきている。

しかし一番怖いのは少し離れた場所で見学している有栖だが、満面の笑みを浮かべながらプレッシャーを噴き出し、こつちを見ている。

ハッキリ言つてメチャクチャ怖いです。

俺は冷や汗をダラダラ流しながら、後でやつて来るであろう有栖との接し方を考えるのであった。

## 棒倒し

3つ目の種目は棒倒し。シンプルながら危険な競技で男子専門の競技だ。試合のルールは二本先取だ。

「行くぞ。無様な姿を見せた奴は後で制裁な」

龍園の言葉にクラスメイト震えるも、やる気を見せる。BC連合の戦術はウチのクラスがオフエンスでBクラスがディフェンスだ。

対するAD連合は有栖と綾小路からの情報によれば、オフエンスとディフェンスをクラス毎に交互に、最初はDクラスがオフエンス担当らしい。

正直言つてやりたくないが、我慢するしかない。

そうこうしていると試合開始の合図が鳴り、両陣営のオフエンスが走り出す。Dクラスの中でも須藤は真つ先に棒に向かうが、1人で突っ走っても封殺されるのがオチだ。

ちなみに攻撃陣同士がぶつかり合うのはルール違反だ。

「殺されたい奴からかかってこいやあー」

背後から須藤の物騒な声が聞こえる中、俺達も赤組の棒に近付く。

同時に……

「アルベルト」

「OK、Boss」

アルベルトは言うなり近くにいた俺の手を掴み、そのまま棒にぶん投げる。この人間ミサイル作戦にAクラスの男子が呆然とする中、俺は棒にしがみつく。

痛みに耐えながらも棒の上に登って揺らし始める。

「比企谷を引き摺りおろせ！」

「畳み掛けな」

葛城と龍園の指示が同時に放たれて、Aクラスの男子も棒に登ってきて、ウチのクラスはアルベルトを中心に攻め始める。

そして1人が俺の足を掴み、引き摺り下ろそうとするので、わざと下を向き……

「やべっ……吐きそう……うおえっ」

辛そうな表情を浮かべながら吐く真似をする。

「っ！」

しかし足を掴んだ男子は本当に吐くかと思っただけで、慌てて手を離してくれる。

男子は直ぐにハッターとわかったようだが、その前に更に登って距離を取る。

同時にアルベルトが棒に辿り着いてAクラス男子にタックルをする。学年1の巨体のアルベルトのタックルは男子どころか棒すらも纏めて倒す。

俺は倒れる棒にしがみついたまま、地面に落ちるが激突する直前にアルベルトに助けられる。

「Good job」

アルベルトはそう言ってくるが、ミサイルになった事を言ってくるのだろう。

「そつちもな」

言いながら元の陣地に戻る中、須藤が怒鳴る。

「何やってんだお前ら！死ぬ気でいけよ！」

「んなこと言われてもよ……あいつら強いぜ？擦りむいちまったよ」

「かすり傷だろ！噛み付くなり膝蹴り入れるなりして抵抗しろよ、使えねーな！」

偉そうに言っているが、由比ヶ浜の次に役立たずのお前は文句を言える立場じゃ無かろうに。

そう思いながらも俺達は元の場所に戻り、待機する。

そして再度開始の合図が鳴り、俺達は一斉に走り出す。対するAD連合は情報通りAクラスが攻めてDクラスが守りに入っている。

今回は人間ミサイル作戦は使わないと思う。初回だから通用したが、2回目は撃ち落とされる可能性が高いからな。まあチャンスがあるなら使うがな。

よって今回は奇策ではなく、ラフプレーで戦うつもりだ。

アルベルトを中心に体格が良い連中を前方において突撃を仕掛けると、Dクラスから悲鳴が生まれる。

「起き上がれ。足を掴んで引きずり倒せ！」

須藤が叫ぶ中、クラスメイトらは須藤に近寄りラフプレーをしかける。

「ぐっ！誰だ殴りやがったのは?!」

須藤は怒鳴るが、棒を支える役目のために反撃する事が出来ずにいる。

そして棒を守りながらも膝をついた瞬間、我らがリーダーである龍園が須藤に近寄り、その背中を踏みつける。

「がつ!?て、めえー！」

須藤が文句を言おうとしたら、龍園は再度踏みつけて黙らせる。それにより棒が一際大きく揺れるので、俺はトドメを刺しに行く。龍園から好プレーを見せたらポイントをやると事前に言われたからな。

よって俺はDクラスの防衛を全壊させようとしているアルベルトの背中を蹴って、棒に飛びかかる。

しかし途中で飛距離が足りないことに気付き、棒の手前にいる須藤と龍園に向かってしまふ。

龍園はそれに気付き回避するが、龍園に踏まれてそれどころじゃない須藤は俺に気付

かず……そのまま俺のフライングボディプレスをモロに受けた。

「があああああつ!？」

それにより須藤は俯けになりながら地面に叩きつけられて、一拍おいて棒も倒れる。結果として白組が勝った。それを理解した俺は須藤の上から退くと龍園は楽しそうに話しかけてくる。

「今のは良かったし、次からも頼むぜ」

「いや、狙ってやった訳じゃないんだが……」

本来は棒を倒す予定だったのだが、須藤にフライングボディプレスをしちまったからな。

「はあ、はあつ……てめえらふぎけんじゃねえよ!反則だろうが……!」

「なんだ、そんなところにしたのか。気づかなかったぜ」

そう言つて悪びれる様子もなくヘラヘラ笑いながら龍園は去つていくので、俺もそれに続く。

審判からは特に文句を言われないが、龍園の件は砂煙で見えず、おれの件は故意ではないと判断したのだろう。1試合目でも人間ミサイルをやっていたし。

次は女子の玉入れだが、これについては棒倒しと違って土煙が出ない為、ラフプレーは不可能でガチンコ対決となる。

俺達がグラウンドが出ると一年女子がグラウンドに入り、赤組白組に別れて待機する。

暫くすると先生方が籠を用意して玉を辺り一面にばらまく。

そして直ぐに開始の合図が鳴って、女子達は一斉に玉を投げ始める。遠目にしか見えない為、どっちが勝っているかまいち判断がしにくい。

「そーいや、龍園よ。Dクラスに対しては負けはないが、Cクラスについては作戦を立ててないのか？」

「一応立てた。が、Cクラスの参加表は入手出来なかったから、組み合わせ次第では実行しないつもりだ」

やはり作戦を立てていたか。しかし実行しない可能性もあるって事は博打色がかないり強いのは間違いない。

「なるほどな。で？俺はなんかやったほうが良いか？」

「ああ。作戦についてはまだ言えないが、俺がCクラスを責めるのを見たら、兎に角俺の行動に反対しろ」

どういう事だ？援護射撃じゃなくて龍園の行動に反対するって……

（何を企んでるんだコイツは？まあ龍園を王と認めた以上、やらないって選択肢はないがな）

「わかった。兎に角お前の行動に反対すれば良いんだな?」

「寧ろ俺の味方をしたら怪しまれるからな」

なるほどな。作戦については理解出来ないが、怪しまれたら成功しにくい作戦なのだろう。

「了解した。けど、やらない可能性もあるんだよな?」

「ああ。実行するのはあくまで運が良い時だ」

そう言うと同時にグラウンドにホイッスルの音が響き渡るが、龍園と話をしていたから玉入れを見てなかった。

俺はグラウンドに視線を戻してみると、教員が籠に入った玉の数を確認している。

「合計54個で赤組の勝利です」

その言葉に赤組からは歓声上がるが、棒倒しではこちらが勝っているのでまだ焦る必要はない。団体競技はまだまだあるからな。

そう思いながらも2年3年の玉入れも終わり、次は綱引きだ。

「さて、行くぞお前ら」

龍園がそう口にするのとクラスの男子は立ち上がりグラウンドに向かう。その際に向かい側にいる須藤が怒りを露わにしながら見てくるが、龍園は鼻で笑う。

それにより須藤は更に怒りを高めるが、コイツの場合、暴力を振るって失格になるか

もな。

そう思いながらも俺達は綱に近寄るのだった。

## アクシデント

綱引きのルールはシンプル。綱を引きあつて、2本先取の勝負だ。

A D連合は身長が小さい奴を前に、大きい奴を後ろに配置している。

対するB C連合も同じ陣形だ。今回体育祭の指揮については俺が担当しているから  
現実性を重視したが、龍園なら間違いなくクラスの生徒を固めていただろう。

そう思いながらも綱を持つて待機して、開始の合図を待つとピストル音が聞こえてき  
たので、皆が一斉に綱を引き始める。

「オーエス！オーエス！」

綱引きで馴染みの声が響く中、グラウンドに響き渡る。最初は拮抗したが、直ぐに  
こつちが有利となる。今回はちゃんと足並みを揃えているからそうなればフィジカル  
がある生徒が多いこつちが有利だ。

暫くすると笛が鳴ったので手を離す。初戦を制したのはB C連合だ。

「まずは一勝だな。んじゃ次はアレをやるぞ。Cクラスの連中も宜しくな」

俺がそう言うのと、Bクラスの連中は一斉に頷き、Cクラスの生徒も一部は嫌そうだが  
反対はしない。

そして2戦目が始まる。

「オーエス！オーエス！引けえ！」

A D連合の最後列にいる須藤の声が聞こえてくる。ここで負けるわけにはいかなかったからか、さつきよりも力を感じる。

「粘れよお前ら！この綱引きは絶対に勝つぞ！」

須藤の掛け声にA D連合は更に力を込める。結果、こちらが僅かに不利となる。

そう判断した俺は息を吸って……

「お前ら、行くぞ……！」

そう叫ぶ。それを聞いたB C連合は全員が一斉に手を離す。するとA D連合の男子は手応えが軽くなった為、その反動で一斉に倒れる。

「ぐっ！痛え！」

一際大きな声で苦しむ須藤。まあそれも仕方ない。Bクラスの生徒から無数の攻撃を浮く、龍園に背中を踏まれ、事故とはいえ俺にフライングボディプレスをされて、終いにはA D連合の男子が前から飛んできたのだから、身体能力が高い須藤でもダメージはデカいだろう。

「何やってんだよ、ふざけてんのか！」

「別にルール違反はしてないし、真面目だ。わかったら静かにしろよ停学野郎」

「デメエー！」

俺の挑発に須藤は俺に詰め寄ろうとするが、その前に葛城や平田が止めに入る。惜しい、殴ってくれりや失格に出来たのに。

そう思いながらも元の場所に戻り最終戦の準備をする。さつき俺達は綱から手を離したが、向こう、少なくともはやって来ないだろう。

何せDクラスのクラスポイントは僅か1しかないのです、勝ちを放棄する選択肢を選ばないだろう。

それから直ぐに最終戦が始まったが、向こうは俺達がやった戦術を使わずに呆気なく負けた。まあ須藤はボロボロになっていて、他の連中も2戦目で怪我した奴がいるだろうから当然だ。

「クソがつー！あいつらぶざげやがつてー！」

須藤は喚くが、別にルール違反はしていないからどうこう言われる筋合いはないな。

何にせよ元々大したことないDクラスのチームワークは崩壊寸前だし、Aクラス男子も今の綱引きで何人か怪我をしている事から当初の予定通りとなっている。

そのことに安堵しながら俺達は自陣に戻るのであった。

それから女子や上級生の綱引きを見学するが、この時点で赤組の勝ちも殆ど決まった。1年だけなら俺達白組が勝つてゐるが、2年3年の赤組が強過ぎる。

もう100クラスポイント引かれるのは確定だ。1位を取ってもマイナス50ポイントつてマジでムカツク。

となると俺達にとっての希望は龍園の考へている策のみだ。Cクラスに仕掛けるらしいが、どんな作戦なのだろうか？

そう思いながらも続いで競技の準備をする。

競技は障害物競争で、用意されている障害物は、平均台、網潜り、頭陀袋。難易度は高くないが、どれもスピードダウンを余儀なくされるものだ。

んで俺が配属された6組目で、厄介なのはCクラスNo. 2の神崎だ。これまでの競技を見ると神崎にはまず勝てないし、2位を狙つて行くつもりだ。

そして俺の番になり、スタートするが案の定神崎は早く、俺達が平均台を渡つた時点で網潜りに挑戦している。

俺の順位は3位、とはいえ2位から5位までは横並びなのでどうなるかはわからない。

網に到着した俺は梃子摺りながらも4位で網を抜けて頭陀袋に向かう。

と、ここで2位と3位の2人が足に頭陀袋を付けた事によりバランスを崩し、2人まとめて転ぶ。

そんなチャンス逃すつもりは毛頭なく、俺は2人を抜き、そのまま頭陀袋を脱いで2位でゴールする。

うん、今のところ順調だな。これなら次の中間は相当伸びるだろう。

そう思いながらゴール地点にて待機して、他のレースを見続けるが、やはりCクラスが一番成績が良いな。

そして最後のレースとなるが……

「はああつ!? 健のヤツ、また野村と鈴木に森重に田中じゃん！ズルっ！」

Dクラスの生徒がそう喚く。ソイツの言うように最後のレースに参加する8人の中でウチのクラスの野村と鈴木、Aクラスの森重と田中は学年でも桁違いに足が遅い生徒だ。不満を持つのは当然だろう。

1位を取るのにはDクラス最速の須藤かCクラス最速の柴田のどちらかだろう。

そこまで考えていると肩を叩かれたので横を見れば隣に座っている神崎が小声で話しかけてくる。

「(やはりお前達とAクラスはDクラスの参加表を手に入れたのか?)」

質問ではあるが、神崎の口調からして確信を抱いているだろうな。

「よくわかったな」

「Bクラスだけならまだしも、Aクラスも協力しているなら誰でも怪しむ」

「(ま、そうかもな。俺としてはお前がリーダーなら参加表を渡しても良かったが、リーダーは一之瀬で、どのくらいお人好しかわからない以上教えるのはリスクが高いと判断した)」

一之瀬のお人好しレベルはわからないが、万が一俺達が参加表の情報を渡し、一之瀬がそれをDクラスに教えたら作戦が台無しだからな。

「なるほどな。まあ外部からしたら不安に思うかもしれないが、一之瀬はそこまでお人好しじゃない」

「(一応頭の隅に置いておく……つと、須藤の勝ちか)」

グラウンドを見れば須藤が僅かに柴田を上回り1位を取っている。どっちが勝つかはわからないかギリギリの勝負だったな。まあ俺としてはDクラスの須藤が負けて欲しかったが。

そう思いながらも俺達はグラウンドから退場して、入れ替わる形で女子が入場する。そしてBクラス本陣から見学する中、龍園は何かを観察している雰囲気を出している。

疑問に思いながらも障害物競走を眺めていると……

「ほっ……ほっ……ほっ……」

龍園が水筒片手に噎せていた。気管支に飲み物が入ろうとしたのか……と、思ったが、龍園は獰猛な笑みを浮かべているので違うだろう。

多分これは合図だな。

疑問に思いながらもグラウンドを見ると、ウチとAクラスはそこそ速い4人がいるのでDクラスの生徒は中堅レベルだろう。Cクラスの生徒については知らないが、Dクラスから学年でも屈指の人気者である榎田もいる。

そう思っている間にもスタートすると、Aクラスとウチのクラスの4人が一足早く出て、榎田とCクラスのポニーテール女子がワンテンポ遅れる。残りのCクラスとDクラスの女子2人は更にワンテンポ遅れる。

最初の平均台についてだが、榎田のポニーテール女子のバランス感覚が良いのか差を詰めて、次の網潜りでは遅れている2人を除いた6人は全員巨乳であるからか潜るのが遅く、網潜りが終わった時には6人が並走している。

そして頭陀袋を足につけてピョンピョン跳ね、最後の直線コースに入ろうとする。

その時だった。ウチのクラスの山峰が頭陀袋を脱ぐのに手間取り、ワンテンポ遅れてしまい、6位になってしまう。

山峰は焦りながらも走り、櫛田を抜いて5位になる。幸い1位から4位は割と固まっているのでまだ逆転可能だ。

そして4位のポニーテール女子との距離を詰めようとするが……

(何だありゃ?)

突然ポニーテール女子がチラチラと後ろを向き始めたのだ。明らかに挙動不審である為、男子からも戸惑いの色を感じる。

そして……

「うおっ！結構凄い事になったぞー！」

追いついた山峰とポニーテール女子が絡み合うように転倒する。

「網倉ー！」

Cクラスの男子が叫ぶ中、櫛田と7位と8位の2人が転倒した2人を抜き、ポニーテール女子……網倉はゆっくりと起き上がり、何とかゴールする。

一方の山峰は相当痛いのか蹲ったまま起き上がる気配を見せず、続行不可能と判断された。

周りが騒めく中、龍園を見れば口元をニヤつかせている。

大方ワザとだと思いが、推薦競技に出る山峰を潰してまで何をやらかすんだか……

## 二人三脚

「で？今度は何を企んでんだ？」

障害物競走が終わり、二人三脚の準備をする俺はパートナーの龍園に質問をする。

障害物競走でウチのクラスの山峰とCクラスの網倉つて女子は激突して、山峰はリタイアとなつてしまった。

山峰はウチのクラスの女子でも運動能力が高く、推薦競技にも出るので大きな戦力を失つたのは間違いない。

一方Cクラスの網倉は平均より少し上程度の存在で、足を動かすのは難しそうだがリタイアはしてない。どう考えてもこつちが不利だ。

「色々だ。詳しい内容は昼休みにわかるが、さつきも言つたように俺がCクラスと揉めていたら兎に角俺を否定しろ」

「それはわかつてるから安心しろ。さて……」

そう返しながら俺と龍園は整列して順番を待つ。先に走る生徒を見れば平田綾小路ペアや須藤池ペアあたりはウチとAクラスの雑魚を蹴散らしている。

そして遂に俺達の番になり、スタートすると俺と龍園のペアは一步前に出て、同盟を

組んでいるAクラスは僅かに遅れながらも付いてきている。

一方Cクラスはハズレペアのようでかなり遅れていて、Dクラスのペアについては参加表通り中堅レベルであり、Aクラスより僅かに遅れている。

俺は龍園より若干足は遅いが、練習の際には思った以上に相性が良かったので本番でも組んでいる。

結果、他のペアに差をつけて1位でゴールした。現在龍園は全種目1位をキープしている。1年生だけでみれば全種目1位をキープしてるのは須藤だけなので順調だろう。

それから男子の二人三脚は続き、女子の番になるが女子最初のペアにはCクラスのリーダーの一人瀬と先ほど怪我をした網倉のペアがいた。

男子が見守る中、スタートするが案の定Cクラスペアが遅い。本来なら上位に入るペアだろうが網倉の足が鈍く、クラスメイト第1の一人瀬が気遣っているが故にCクラスペアは他の3組と差をつけられ、ピリでゴールする。

それによりCクラス男子からは残念そうな声が聞こえてくる。やはりあのペアは期待されていたようだ。

「くくっ、無様だな」

そしてここでニヤニヤ笑う龍園はゲスだろう。

しかし俺は龍園を咎めるつもりはない。龍園の性格は屑だが實力はあるし、一之瀬とはベクトルは違うが人を惹きつける力を持っている。

一方の雪ノ下とか由比ヶ浜は實力がないのに傲慢で有栖を見下してるし。

そう思う間にも競技は続き、次の番となるがDクラスのペアは由比ヶ浜と雪ノ下だった。由比ヶ浜については組む相手が居なかつたら雪ノ下が組んだのだろう。

そしてスタートするとAクラスとウチのクラスのペアが転んでしまい、もつれ込んでしまう。二人三脚は一度転ぶと差がついてしまうので実質CクラスとDクラスの一騎打ちとなった。

暫く勝負を見ているが僅かにリードしていたCクラスのペアが石に躓いたのか転んでしまい雪ノ下と由比ヶ浜のペアが抜き去り、1位でゴールした。

しかしDクラスの陣営からは喜びの声は上がらず2人、正確には由比ヶ浜を睨みつけていた。

それも当然だ。1学期に由比ヶ浜は過去問があるのに赤点を取った事で退学になりかけ、救済される為にクラスメイトのプライベートポイントは大きく減り、他クラスからの借金をした。

しかし由比ヶ浜はその後にクラスに貢献をしないどころか、ウチのクラスと有栖のクラスが同盟を結ぶ要因となったり、俺を階段から突き落としてクラスポイントを1にな

るまで減らすなど、最早Dクラスの疫病神だ。

そんな疫病神が少し活躍しただけでクラスメイトの態度は変わらないだろう。

(つかさっきの転倒についてもウチとAクラスのペアは由比ヶ浜を勝たせる為にわざとだろうな)

理由としては転倒してからの動きだ。同じように転倒したCクラスのペアは足が鈍くなっているが、ウチとAクラスのペアの動きは全然鈍ってない。

アレは多分龍園と有栖が由比ヶ浜にペナルティを与えないようにする為、わざと転んでも怪我しないように練習させたのだろう。

そこまでして由比ヶ浜を勝たせるのには理由がある。

この体育祭は種目ごとに順位を決め、それに応じて報酬やペナルティがある。上位に入ることが出来れば、次回の中間試験の点数を増やすことも可能だ。

中間試験や期末試験で赤点を取れば即退学で、馬鹿な由比ヶ浜は退学になる可能性が高い。しかし由比ヶ浜に散々罵倒された有栖としては由比ヶ浜を長く黽りたいと思っている。

よって中間試験で赤点を取って退学なんて事は認められず、由比ヶ浜に各種目で上位を取らせて中間試験で赤点を取る可能性を低めているのだ。

龍園もDクラスを簡単に潰せると思ったのか由比ヶ浜の無様っぷりを見たいからか

わからないが有栖に積極的に協力している。

人間は明確な敵を前にすると団結するようだ。

そう思う間にも競技は進み、漸く1年生の部の二人三脚が終了した。

各クラス40人いるので20レースやったが、やはり団結力を武器とするCクラスペアが多く1位を獲得している。

その数は7で、ウチとAクラスが5レースで、Dクラスは3レースだ。これでDクラスの最下位は殆ど確実、少なくとも2位以上にはならないし体育祭が終わった時のDクラスのクラスポイントは0になるだろう。

とはいえどのクラスのクラスポイントは下がるだろう。理由としては簡単な話で4クラスの中で1位になっても所属する組が負けたらポイントが減るからだ。

1年において現在1位であろう一之瀬らCクラスだが、このまま1位をキープすれば50クラスポイントが入るだろう。

しかしCクラスが所属するのは白組であり、白組は現在2年と3年の所為で大差で負けている。赤組に勝つのは不可能だ。

そして所属する組が負けたら100のクラスポイントを失う。

つまりこの状態が続けば1年で1番点数が高いCクラスもマイナス50ポイントとなるのだ。

そして俺達Bクラスは現在2位だが、これをキープしたままなら1年生における争いではポイントが入らず、白組は負けるのでマイナス100ポイントとなるのだ。

ハッキリ言つてこの体育祭はハイリスクノーリターンのクソイベントでしかない。

(しかし龍園の奴、何を企んでるんだか)

こんなメリットが少な過ぎる体育祭なのにニヤニヤ笑いを浮かべるし。さっきの事故で慰謝料を請求するのが濃厚だが、それについてはとある理由で悪手である。

さつき龍園は自分がCクラスを責めたら咎めろと言つたが、言うまでもなく咎めるつもりだ。

今のCクラスと問題を起こすのはリスクが大きいし。

そう思っている間にも上級生の二人三脚は進んで、やがて全て終了する。

赤組と白組の得点を見るが、既に逆転不可能というレベルで赤組が勝っている。クラスポイントのマイナスは避けられないな。

『ただいまより10分間の休憩とします』

そんなアナウンスが流れたので生徒らは立ち上がり、自販機やトイレに向かう。

俺も飲み物を買おうと自販機に向かおうとしたら……

「八幡君。一緒に飲み物を買に行きませんか?」

体操着姿のひよりがそんな提案をしてくる。断つた悲しそうな顔になって謝るのは

これまでの経験上わかっているので断るつもりはない。

「良いぞ、行こうか」

「はいっ」

言うなりひよりは腕に抱きついて歩き始めるが、登校の時ならまだしも自販機に行くだけで抱きつくのは勘弁なんだけど。

周りからは視線が集まるし、龍園はニヤニヤ笑いを浮かべるし、赤組陣営にいる有栖なんか満面の笑み（ドス黒いオーラ付き）を浮かべてるし！

「どうしましたか八幡君？」

一方のひよりは天然故に注目が集まっている事を理解してないし……

「いや、何でもない」

俺はため息を吐いてから半ば逃げるようにこの場を後にして、ひよりと自販機に向かった。

## 女子騎馬戦

「ふう……やはり冷たい飲み物は美味しいですね」

自販機前にてひよりは汗を流しながら喉をコクコクと鳴らす。運動能力の高くないひよりからしたら体育祭はかなりキツいだろう。

「次は騎馬戦だったな。お前は騎手だから疲労は少ないだろうが無理はするなよ」

「はいっ、八幡君も騎手でしたよね？」

「ああ。んで龍園の補佐だ」

騎馬戦ではDクラスに嫌がらせをするのが龍園の命令だ。ターゲットにするのは雪ノ下と由比ヶ浜と須藤だ。

騎馬戦については勝つても中間試験の点数が増えないので、由比ヶ浜を潰しても大丈夫と有栖が判断したからだろう。

「お前ら女子は大変かもしれないがヤバいと判断したら直ぐに退けよ」

「わかっています。八幡君も龍園君の補佐は大変だと思いますが、無理しないでください」

ひよりは俺を気遣っているが、龍園を補佐する時点で無理をしないといけないんだよ

なあ。何せ無人島試験では3日目から最終日までキャンプ道具抜きのカチのサバイバル生活をさせられたし。

まあそのお陰で卒業まで毎月60万近くのプライベートポイントが約束されたけど。それについてはありがたいが、今後も無茶なオーダーをするなら報酬を用意して欲しいのが本音だ。

そこまで話しながら俺はお茶を飲み干して、空のペットボトルをゴミ箱に入れる。

「さて、そろそろ行くか。俺はともかく、ひよりは直ぐに騎馬戦だしな」

「そうですね」

ひよりは頷いて俺の手を握ってくるので、歩いていると女子トイレの方から神室がやって来る。一応そこそこ仲が良いし挨拶くらいしとくか。

「お疲れ」

「お疲れ様です神室さん」

「……ああ、比企谷に椎名ね。お疲れ」

俺達に気付いた神室は気怠げに会釈をするが、直ぐにジト目になる。

「あんた達さ、自販機行くだけで手を繋ぐのやめてくれない？坂柳が凄く機嫌が悪くなって私に八つ当たりすんだけど」

神室が嫌そうにため息を吐く。本当にとぼちりだなあ。まあ万引きしたコイツの

自業自得な面もあるけど。

「申し訳ないですが無理ですね。八幡君の手は温かくて気持ちいいですから」

そう言ってくれるのは嬉しいが面と向かって言うのはやめてくれ。幾ら何回もキスされているとはいえ、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「あつそ……はあ」

神室は哀愁を漂わせながら去って行く。なんか凄く悪いことをしたみたいだ。

「では行きましょうか」

ひよりはそう言つて歩くのを再開するが、体育祭が終わった後の有栖が怖いな……

騎馬戦は4人1組で騎馬を作り、騎手がつけているハチマキを取ることでポイントを狙う。1クラスから4騎ずつ出る決まりとなっており、両組から8騎ずつということになる。ちなみに残りのメンバーは補欠だ。

騎馬はそれぞれポイントを所持していて、敵のハチマキを奪えば、1本ごとにそのポイントが手に入る。加えて最後まで生き残っても同様にポイントが入るルールだ。

尚、4つのうち1つの騎馬は大将騎と役割づけされている。通常の3つの騎馬の所持ポイントは50だが、大将騎は100が配分されるので大将騎の扱いは難しい。

ちなみにウチの大将騎は伊吹の騎馬だ。一時期は運動能力の低いひよりの騎馬にす

るといふ考えもあつたが、騎馬戦については勝ち負けを重視してないので伊吹の騎馬と  
なつた。

そうこうしている間に各クラスの女子による騎馬が4騎ずつグラウンドに現れる。

作戦については聞いているが雪ノ下と由比ヶ浜は兎も角、2人と一緒の騎馬の3人  
は同情してしまう。どうかアイツらを補欠にしとけや。

そう思っているとスタートを告げるピストル音がグラウンドに鳴り響く。

同時に俺達Bクラスの女子騎馬は一斉に雪ノ下の騎馬に詰め寄る。最早Aクラスは  
眼中にない。

「おい龍園。一応聞いとくが、雪ノ下は合気道の達人である情報を共有してるよな？」

雪ノ下は体力はないが、格闘技の能力は高い。情報を共有してない状態だと分が悪  
い。

「当たり前だ。そもそも狙いは騎馬の由比ヶ浜だ。坂柳から頼まれたからな」

龍園の返事を聞く。そうする間にもBクラスの女子騎馬は雪ノ下の騎馬を囲む。

一方雪ノ下以外の3騎馬はフォローに入る……なんてことなく、3騎馬で一之瀬達C  
クラスの4騎馬と向かい合う。

そしてAクラスの4騎馬も雪ノ下の騎馬を無視して、一之瀬達Cクラスの4騎馬と向  
かい合う。

結果戦場は「Bクラスの4騎馬VS雪ノ下の騎馬」と「Aクラスの4騎馬&Dクラスの3騎馬VSCクラスの4騎馬」と2つ生まれた。

一之瀬達Cクラスは勝ち目がないと判断したのは4騎馬で固めて、守りの体勢に入る。AD連合の7騎馬は攻めにかかるが、守りに徹しているためか中々崩せずいた。

一方……

「くははっ！見ろよ比企谷！無様過ぎだろ！」

龍園は笑いながら雪ノ下の騎馬を指差す。見れば4人が雪ノ下を囲んでいるが、騎手は身体を後ろに傾かせ雪ノ下との距離を取り、1番前の騎馬4人が雪ノ下の騎馬の中で1番前にいる由比ヶ浜に体当たりをしている。

しかもタチの悪いことに相手をぶっ飛ばす威力ではなく、小さい威力で沢山の体当たりをしている、ここからでも由比ヶ浜の苦しそうな表情が見える。しかも体当たりにより騎馬が揺れて雪ノ下はマトモに身体を動かさずにいる。

（多分有栖は楽しそうに笑ってるだろうな）

そう思っている間にも時間は進み、遂に終了時間まで10秒を切った瞬間だった。

4騎の騎馬は一斉に先程以上の体当たりをぶちかます。結果、由比ヶ浜は転んでしまい、雪ノ下は落馬してしまふ。

同時に試合終了の笛が鳴る。赤組の騎馬は6騎残り、白組は5騎なので女子部門は向こうの勝ちだ。

しかし気にすることは無い。騎馬戦の目的は相手に対する嫌がらせだからな。

「~~~~~っ！~~~~~っ！」

と、ここで由比ヶ浜の叫び声が聞こえてくる。離れているので聞き取りにくいが出中八九、4対1なんて卑怯云々って内容だろう。

しかしウチのクラスの女子は全員スルーして退場する。一方の由比ヶ浜は地団駄を踏んで醜態を晒しているが、真嶋先生がやって来て注意をしたのか、ズンズンと退場していく。

そうなると次はいよいよ俺達男子の番だ。

「行くぞお前ら」

龍園の言葉に皆が立ち上がり、各騎馬同士で集まる。

龍園の騎馬はアルベルトに石崎と近藤とフィジカルに特化した3人でかり、俺の騎馬の小宮と山崎と出水は全員運動部所属なので雑魚じゃない。

「比企谷」

「何だ？」

「予定通り須藤を叩くが、状況に適時対応しろ」

「わかってる」

言いながら俺達は入場して、それぞれで騎馬を作る。正面にいる須藤は騎馬のようの上には平田がいる。向こうはこっちを睨んでいるが多分フィジカルを活かしたパワーファイトをしてくるだろう。

全ての騎馬が準備を済ませ緊張感が高まる中……

パアーンツ！

スタートを告げるピストル音が鳴り響いた。

## 男子騎馬戦

試合開始と同時に須藤は平田を乗せながら突撃を仕掛ける。こちらも距離を赤組の騎馬との距離を詰めにかかる。

須藤の狙いはCクラスの騎馬のようで、距離を詰めた瞬間……

「おらあつー！」

突進をしてCクラスの騎馬を崩す。高円寺とアルベルトに次ぐフィジカルの須藤の突進に耐えられる騎馬はそう無いだろう。

これで白組の騎馬は7騎だ。しかし慌てるほどじゃない。点数を手に入れるのに必要なのは騎馬を倒すことじゃなく、ハチマキを奪うことだ。騎馬を倒した場合、ハチマキを奪えなくなるから得点に差は生まれぬ。

そうこうしているとAクラスの騎馬が俺達の方にやって来るが、俺は焦らずに相手の胸を優しく叩く。

「うわー、やべー」

胸を叩かれた男は棒読みで喋りながらブラブラ揺れるので、そのままハチマキを奪う。

「やられた〜」

騎手はのんびりと騎馬から落ちる。これで騎馬の数は同じだ。

「よし次行くぞ」

「あ、ああ……これって八百長だよな？」

「ああ。事前に坂柳派は手を抜くように約束してくれた」

俺の騎馬で1番前に陣取る小宮がそう言うので頷く。これは須藤を叩く際に騎馬の数が多くと面倒だと有栖が判断して、龍園に手を抜く事を教えていた。

有栖からしたら須藤も由比ヶ浜同様に敵だからな。まあ激しくどつかれたから仕方ないけど。

「けど、これって赤組の上級生に文句とか言われないのか？」

「言われねえだろう。既に赤組と白組の間には逆転不可能なくらい差があるし、2年生なんか学年全体で八百長やってるし」

さつきから上級生の競技も見したが、2年生の白組は露骨に手を抜いていて赤組に大差をつけられている1番の原因だ。

手を抜いている理由としては2年生における立場があるからだろう。2年Aクラスのリーダー、南雲雅は学年全体を支配していると聞いたことがあるからな。

何にせよ八百長をしちゃいけないルールなんてないし、そもそもDクラスの参加表が

AクラスとBクラスに漏れてる時点で正々堂々なんて言葉は存在しないし。

そう思いながらも俺は坂柳派の騎馬の方に行くべく小宮達に指示を出す。

そして再度八百長をやりハチマキを奪ってから周りを見回すと既に殆どの騎馬が失格になっている。

Cクラスの連中は連携してDクラスの騎馬を倒しているが、須藤の突進により全滅。

Dクラスの騎馬は須藤がいる騎馬以外は龍園の騎馬とCクラスの騎馬により全滅。

Aクラスの騎馬も今俺が倒した事で全滅。

Bクラスの騎馬も葛城派の騎馬に負けて2騎失い、俺と龍園の騎馬だけだ。

結果的に2対1とあつてこつちが有利だが、龍園の性格上普通に攻めるなんてのは有り得ない。

ともあれ須藤達に近づかないようにしながら龍園の方に近寄る。

「勝負アリだなゴリラ。2対1だから当然か」

龍園の言っている事は事実だ。龍園の騎馬のアルベルトを崩すのは無理だろうし、仮に崩せてもその瞬間に俺の騎馬が横から潰せば問題ないからな。

「はっ！タイムマンじゃ何にも出来ないから2人がかりつてか？卑怯者らしいぜ」

「いや、タイムマンでも潰せるぜ」

「だったらタイムマンで来いよ。それともビビってんのか？」

須藤は安い挑発をする。普通なら乗らないが龍園なら楽しみたいから乗るだろう。  
もしくは……

「良いぜ。だったら比企谷の騎馬にタイムマンで勝ったら相手してやるよ」

そう来たか。となるとプランDかプランFだな。

「何だ、やっぱビビってんじやねえか」

「見極めてやってんだよ。比企谷の騎馬に勝てないようじゃ俺の騎馬には勝てないからな。ま、お前みたいな単細胞じゃ比企谷の騎馬にも負けるだろうな」

龍園の執拗な挑発に須藤の額に青筋が浮かぶ。

「んだと……！」

「ダメだ須藤君。挑発に乗ったら相手の思う壺だよ」

平田が止めに入る。しかし即座に龍園は笑いながら口を開ける。

「事実を言っただけで挑発じゃねえよ。比企谷相手に無様に停学を食らったカスだな」

まあ実際停学にさせたのは有栖だな。

「上等だ！その腐り目をサクツと潰してから、ぶっ潰してやるよ！」

須藤は怒声を吐きながら龍園ではなく俺を見る

「全身体勢を低くして守りの体勢に入れ。須藤の突進が厄介だ」

「了解！」

3人は腰を低くした構えを取る。向こうもフラストレーション抜群のようだが……

「あ、堀北が暑いからか、服をパタパタしてエロいな」

「何っ?!」

俺の呟きに須藤はDクラスの女子がいる場所を見るが、堀北は特にパタパタしていない。須藤が堀北に気があるのは知っているが……

「嘘に決まってるんだろ。というかあれだけ息巻いてた癖に煩惱強いな」

敢えて挑発をする。すると須藤は羞恥と怒りで顔を真っ赤にする。

「デメエ……いぶつ潰す！」

須藤は騎馬全体を引つ張るように突撃をして、防御体勢の小宮とぶつかる。

それに伴い騎馬全体が揺れて俺もバランスを崩しかけるが、ギリギリ耐えながら平田の伸ばす手を叩くように捌く。身体能力なら平田の方が上だろうが、バランスが悪いフィールドで戦っているので本来のポテンシャルを發揮出来ていないので、対処は可能だ。

しかし問題は騎馬の方にある。幾らこつちが防御体勢とはいえ、須藤のパワーに押されていのは事実だ。一応粘ってはいるが後少しで崩れるだろう。

「ちっ……！」

「おらああああつー！」

須藤の力は勢いを増し、俺達の騎馬がよろめく。マズい、そろそろ限界が近づいている。後少し耐えないと……

そう思いながら龍園を見ると、突っ張りのジエスチャーをしている。って事はプランFか。

そうなると……

「比企谷がピンチだ！やれアルベルト！」

横からそんな声が聞こえてきて、須藤は声のした方向を向く。その方向からは龍園の騎馬がやってくる。

「全員一歩後ろに！」

俺が指示を出すと騎馬は横を向いている須藤の隙を突いて一歩後ろに距離をとる。

須藤は慌ててこつちを見るがもう遅い。

ドゴツツツツツツ

アルベルトが須藤に突進をぶちかます。

「ぐあああつー！」

フィジカルなら学年最強クラスのアルベルトの突進を食らった須藤は大きくぶつ飛ばされて、地面に叩きつけられる。

それに伴い、平田は地面に落下してしまい、赤組の騎馬は全滅となる。

競技終了の笛が鳴り、白組から歓声上がるのを聴きながら騎馬から降りる。

プランFについてはとにかく守りに徹して、龍園が口約束を破って須藤に大ダメージを与えることで、結果的に大成功だ。

ちなみにプランDについては須藤が突進してきた際に俺が須藤達の方に倒れ、落下しながら須藤の顔面に肘打ちを叩き込むプランだ。

「大丈夫か比企谷？怪我はないか？」

龍園は白々しい言葉を吐き、石崎達はプルプルと笑いを堪える。

一方の須藤はよろよろと身体を起こし、苦しそうに睨んでいる。

「おいコラ龍園！どういうつもりだ?！」

「どういうつもり?クラスメイトが困ってるから助けただけだ」

龍園の言葉に石崎達は我慢に限界が来たのか呼吸困難になりかけ、俺も笑ってしまい

そうだ。

「ふざけんな！ タイマンって約束だろうが！」

そんな須藤に龍園は鼻で笑う。

「くはっ！ 寧ろあんな口約束を信じたのかよ?! どんだけおめでたいんだよ！」

まあ龍園の言葉は間違っていない。口約束なんてのは破られるのがオチだ。

「デメエ！」

「別に破ったからってペナルティはないし、破るに決まってるだろカス……行くぞお前ら」

龍園がそう言って歩き出すので俺達も退場ゲートに向かう。その際に須藤は追いかけてようとするが、よろめいてしまう。やはりアルベルトの一撃は相当のようだ。

しかしアルベルトや龍園は処罰されないだろう。別にルール違反はしてないし、須藤も白組の騎馬に突進をしたから、こっちが処罰を受けるなら須藤も受けるのは明白だ。

なんにせよ今ので須藤は負傷したし、午後からの推薦競技も貰ったな。

## 女王と予測不能の考え

「ふふつ、龍園君達は良い仕事をしてくれましたね」

坂柳有栖は薄い笑みを浮かべて、グラウンドを見る。グラウンドでは悠々と退場する龍園達Bクラス男子と、よろめいている須藤が悔しそうにしていた。

有栖が学年で一番嫌っている生徒は由比ヶ浜だが、須藤も充分嫌っている。何せ突き飛ばして苦しい思いをさせられたのだから。停学処分にさせたが満足はしてない。目指すのは退学処分だ。

「楽しそうだけど、漸く比企谷と椎名が仲良くした事で悪かった機嫌がマシになったみたいね」

そんな有栖を見て神室真澄は溜息を吐きながらそう呟く。

「うるさいですよ真澄さん。八幡君は私のもので椎名さんのものじゃありません」

有栖はジト目でそう返す。有栖にとつて八幡は誰にも渡すつもりはない。散々自分に恥ずかしい思いをさせたのだから責任を取って貰わないと困るし、八幡はいやらしいので自分がずっと監視しておかないといけない。

「はいはい……（もう自分のものって言うてるし、独占欲強過ぎでしょ）」

真澄は内心にてそう呟く。有栖が独占欲が強いのは前からわかっていたが、八幡の事になると一段と強くなっているように思えてしまう。

「さて、次の200メートル走が終われば昼休みですし、八幡君との昼食が楽しみです」  
有栖は楽しそうに笑いながらグラウンドを後にする八幡を見ていた。

しかしその30秒後、八幡がひよりと楽しそうに話しているのを見て、額に青筋を浮かばせるのだった。

「ねえ清隆。このままじゃマズいんじゃない?」

Dクラス陣営にて軽井沢恵は物陰に移動してから綾小路清隆に話しかける。クラスの女王の軽井沢とクラスの日陰者の綾小路が話しているのを第三者が見たら怪しむだろうが、軽井沢は夏休みに船上にて、とある一件から綾小路に寄生するようになった。

「何がだ。というか……呼び捨て?」

「洋介君って呼ぶようになったし一応ね……って、それはどうでもいいの。話を戻すけど、成績も全然良くないからマズいんじゃないの?」

「当然だな。オレが参加表をBクラスに渡したんだから」  
「なるほどね……え？」

綾小路の爆弾発言に軽井沢はポカンとしてしまう。綾小路を見ればいつも通りの無表情だ。

「ごめん清隆。もう一回言ってくれない？」

「だからBクラスに参加表を渡した。そしてBクラスは同盟相手のAクラスに情報を渡したんだろうな」

実際これまでを振り返ると須藤や小野寺のように運動能力の高い生徒が出る時、AクラスとBクラスの生徒は毎回運動能力が低い生徒だった。

「アンタ、何を考えてんの？このままじゃDクラスは浮上出来ないんじゃない？」

「浮上？そんなものは由比ヶ浜がDクラスで入学した時点で絶対に無理だ。お前も薄々わかっているだろう？」

「まあ、ね……」

軽井沢は頷く。実際由比ヶ浜のおかげでDクラスはクラスポイントもプライベートポイントも困窮していて、クラスメイトの大半は山菜定食や無料の食材を殆ど毎日利用している。

しかも由比ヶ浜が原因でAクラスとBクラスは同盟を結んでいるので、優待者当て試

験では足並みをそろえてきたのは脅威の一言だ。

しかも今後似たようなことがあるだろうし、軽井沢を含めDクラスの大半はAクラスを諦め、原因である由比ヶ浜に対して憎しみの感情を抱いている。

「由比ヶ浜さんを速攻で退学させるのはダメなの？ そうすればAクラスとBクラスは同盟を解除するかもしれないし、クラスの事を考えるなら早いうちに退学させるべきじゃないの？」

「まあ戦術としては間違っではない」

軽井沢の言っている事は一理あるので綾小路も頷く。少なくとも由比ヶ浜が退学すればDクラスのもちベーションは上がるし、同盟に綻びが生じる可能性もあるし、何より由比ヶ浜のとぼちちりを食らわない可能性も増えるので選択肢としては間違っではない。

しかし……

「けど無理だろう。競技を見る限り、由比ヶ浜と競うAクラスとBクラスの生徒は毎回弱い生徒で由比ヶ浜を上位にさせている。つまり由比ヶ浜は次回の中間試験の成績にかなり追加点が加算されるだろう」

「由比ヶ浜さんをもっと苦しめる為に……どんだけやらかしてんのよ……」

由比ヶ浜の嫌われように軽井沢はため息を吐く。思い出すのは先週の一件、由比ヶ浜

の停学明け初日のことだ。

クラスポイントが1ポイントになった事でクラスメイトの大半は由比ヶ浜を責めたが、肝心の由比ヶ浜は「悪いのヒツキーであたしは悪くない！」とか「生徒会長の判断が間違ってるだけであたしも被害者！」と反省の色を全く見せないで喚いた。

それに対して軽井沢の友人も由比ヶ浜に詰め寄ろうとしたが、そうしたら「これ以上あたしに文句を言うなら、虐められてるって学校に言うから！」と脅しにかかり、ヘイトを更に稼いだのは軽井沢の記憶の中では新しい。

「で？清隆はポイント欲しさにクラスを売ったの？」

軽井沢がそう尋ねる。実際綾小路は参加表を八幡に渡した際に前金として3万ポイント貰い、情報があつていたので体育祭後に追加で7万ポイント貰う予定である。

よつて軽井沢の疑問は間違つてないが……

「ポイントを貰ったのは事実だが、1番の理由は軽井沢の為だ」

「あたしの為？もしかして少しポイントをくれるの？あたしも殆どないからありがたいけど」

軽井沢もポイントを数百ポイントしか持つておらず、無料の商品や料理を利用してゐるが不満が溜まっている。しかもクラスポイントは1しかなく、体育祭でポイントが0になるのは明白なので、綾小路がポイントを持つてゐるなら欲しいのが本音だ。

「ポイントをあげるのは構わないが、軽井沢の為というのはポイントじゃない」

「じゃあ何？」

「先ず最初に教えるがオレと繋がってるのは比企谷だ」

「え？比企谷ってBクラスNo. 2の？」

予想外の大物の名前に軽井沢は目を見開く。比企谷八幡の名前は有名である。龍園の独裁体制のBクラスにおいて唯一龍園に支配されてない男として名を馳せている。

また軽井沢は由比ヶ浜や雪ノ下と同じクラスであるので、2人が「嘘告白した屑」と言っているのをよく聞いている。

2人が八幡を嫌っている事について真相は知らないが、正直どうでもいいと軽井沢は考えている。

軽井沢からしたら八幡の経歴などどうでも良く、寧ろ八幡にちよつかいをかけてDクラスに迷惑をかけるなど思っている。

「その比企谷だな。比企谷はBクラスにおいて龍園の次に発言力があるし、比企谷とコネクションを確立出来れば真鍋達を完全に封殺出来る」

真鍋ら一部のBクラスの女子は軽井沢に暴力を振るい、その証拠を綾小路が手に入れた。綾小路はそれをネタに真鍋達を抑え込んだが、それも絶対ではない。

「既に参加表を渡したからある程度の信用はあるだろうから、もう少し待っててくれ」

「なるほどね。あたしの為つてのはそういう意味ね」

「船でも言ったがオレはお前を守ると約束したからな。約束通りお前の事は絶対に守るつもりだ」

「ふん」

軽井沢は興味なさそうにしながら髪をいじるが、満更でもなさそうに綾小路を見る。脅しから生まれた関係だが、軽井沢は不快な気持ちは抱いてなかった。

一方の綾小路は……

(大分信用を得たかもな)

軽井沢の振る舞いを見て内心にてそう呟く。今の発言は軽井沢の自分に対する忠誠心高めめる為に言ったのだ。

正直言つて綾小路からしたらポイントや軽井沢の為つてのは副次的なものだ。

1番の目的は由比ヶ浜を出来るだけ長く在籍させる事である。夏休み前に担任教師にDクラスをAクラスまで上げると脅された綾小路だが、船にいる時に由比ヶ浜の足手纏いっぷりから、由比ヶ浜が在籍中においては結果を求められない事が認められた。

綾小路からしたらA級の特権などどうでも良く、穏やかな学校生活が1番の欲求なので由比ヶ浜を長く在籍させる事が重要だ。

綾小路の理想としては2年の中頃まで由比ヶ浜を残してもらい、由比ヶ浜が退学した

ら茶柱に「由比ヶ浜の所為で再起不能なレベルになったから解放してくれ」と頼むつもりだ。

そしてそれは上手くいく可能性があるとなると綾小路は思っている。何故なら由比ヶ浜のポテンシャルの低さや精神の幼さ、成長をしない愚かさなどは生徒のみならず教師の間でも有名なのだから。

「~~~~っ!」

「~~~~っ!」

そこまで考えていると怒声が微かに聞こえてきたので綾小路と軽井沢は物陰から顔を出すと……

「ふざけんなし!リーダーとか言ってる癖に何も出来てないじゃん!」

「煩えよ疫病神!てめえなんか中間試験で退学になつとけば良かったんだよ!」

「はあ?停学食らつたあんたこそ疫病神じゃん!本つ当キモい!」

Dクラスで停学を食らつた由比ヶ浜と須藤が醜い争いを繰り広げていた。

「ねえ清隆」

「なんだ?」

「もし今後もクラスを売る場合、あたしも協力するから」

軽井沢もクラスを売る事にした。入学して半年もしないでこれでは先行きはない。

寧ろ2人のとぼっちりを食らわれないように他クラスに価値があることを示した方が先があると思つてしまふ軽井沢だった。

## 200メートル走

「醜いな」

龍園の呟きに否定する声は上がらなかつた。視線の先では由比ヶ浜と須藤が揉めていて、雪ノ下が由比ヶ浜の横に立ち由比ヶ浜を援護しているように見える。

離れているので詳しい内容はわからないが十中八九足の引つ張り合いだろう。

「しかも須藤は負傷してるし、もしかしたら学年総合1位も龍園が取るかもな」

龍園はこれまでの種目で全て1位を獲得しているし、団体種目でも活躍していた。

一方の須藤は個人種目では1位を獲得してるが、団体種目では龍園にボコされて全然活躍できてないし、アルベルトのタツクルにより負傷したので今後の種目に支障が出るだろうから学年総合1位は無理だろう。

寧ろ懸念があるとすればCクラスの柴田の方だ。障害物競走では須藤に負けたが、それ以外の種目では1位を獲得してるし単純な運動能力なら龍園よりも上だからな。

と、ここで200メートル走の番になったので俺達は立ち上がり入場ゲートに向かう。

そして順番に走っていく中、須藤の番となる。当然AクラスとBクラスの生徒は運動

能力が低い生徒で、Cクラスの生徒は平均的な生徒2人だった。

そしてスタートするが、須藤の動きはかなり鈍くなっている。やはりアルベルトの突進による負傷は相当だったようだ。

とはいえウチとAクラスの生徒は運動能力が低過ぎるので、須藤が勝っているがCクラスの2人には先を行かれ、結果的に須藤は3位でゴールする。

入賞だから報酬はあるが須藤からしたら屈辱だったようで、地面を踏みつけている。その姿は実に醜い。

そう思いながらもどんどんレースは行われ、遂に俺の番が来たがDクラス2人は雑魚でAクラスともう1人のBクラスは俺と同格だ。まあDクラスを潰す為の戦略だから仕方ない。

問題はCクラスで、学年総合1位を獲得する可能性を持つ柴田がいる。柴田がいる以上、1位は無理だし2位を狙うとしよう。

スタートの準備をして、待機しているとピストル音が鳴り響くので走り始める。

しかし次の瞬間、右から衝撃が走り横に倒れて僅かに左前にいた柴田にぶつかり、柴田もクラスメイトを巻き込んで倒れてしまう。

右を見れば全員倒れていた。その事から1番内側のDクラスの生徒が転んで巻き込んだのだろう。

幸いAクラスの2人は巻き込まれずに済んで先を走っている。あの2人が1位と2位を獲得するだろう。

一方俺はというとクラスメイトの山脇が俺の足の上に乗っていて身体を起こせない。そして俺は柴田の足の上に乗ってしまっている。

そうこうしていると1番内側のDクラスの生徒が起き上がって走りだし、続いて2番目に内側だったDクラスの生徒が起き上がって走り出す。

そして直ぐに山脇が俺の足の上から退いて走り出す。どうやら山脇や2番目に内側だった生徒は足の上に人が乗っていて動けなかったようだ。

山脇が退いたので俺も柴田の足の上から身体を退かして走り出す。前を見れば巻き込まれなかったAクラスの2人は150メートル近く走っていて、1番早く復帰したDクラスの生徒は100メートル近く走っている。

(少し痛いが……ま、これはこれで良しとしよう)

イレギュラーな事態にはなったが、学年総合1位候補の柴田は上位3人に入るの無理で、龍園が学年総合1位になる可能性が上がったからな。

俺は総合1位になるのは無理だが、柴田が3位以内に入らないなら多少の怪我は大したマイナスにはならない。

そう思いながら俺はゴール直前で柴田に抜かされて7位だが、他の種目で上位を取っ

ているので大した問題じゃない。

俺は待機スペースに座り、次のレースを見るが龍園が一際目立つ速さで走り、やがて1位を獲得する。

同時にBクラスからは歓声が上がリ、Cクラスからは落胆の声が上がる。

何故なら龍園は午前の9種目全てで1位を取り、柴田は7種目で1位で1種目で2位、今の200メートル走で6位だ。

学年総合1位の報酬は1万プライベートポイントと端金だが、俺としては龍園に獲得して欲しい。そうすれば龍園を嫌っているCクラスとDクラスに精神的なダメージを与えられるし、Bクラスの士気は上がるからな。

そう思う間にも競技は進み、女子の番になる。

しかしこれについても大体予想通りだ。Dクラスの女子は大半がAクラスとウチに負け、由比ヶ浜は案の定3位と上位でゴールして有頂天になっている。

一方の雪ノ下は体力に限界が来たのか7位でゴール。アイツ、他人が逃げると罵倒するくせに体力から逃げてるなんて笑えるな。

そしてひよりの番になる。ひよりは苦しそうにしながらも遅い連中と差を付けて4位でゴール。本来ならAクラスとBクラスで5位から8位まで埋まる予定だったが、今回はCクラスの網倉が負傷していることが原因でピリになった。

(そーういや網倉と接触した山峰は大丈夫なのか?)

障害物競走以降見てないが相当ヤバイ怪我をしたのか?これが龍園の策の一端なら色々面倒な予感がする。

嫌な予感を感じながらも200メートル走は終了する。今のところウチとCクラスは殆ど互角でAクラスは少し差があり、Dクラスについては逆転不可能なレベルだ。

これでDクラスはまた0ポイント生活となるが、由比ヶ浜と同じクラスつてだけでとばつちりを食らう事については若干同情する。まあ同情するだけでどうこうするつもりはないけどな。

というか綾小路が渡した参加表は正しいし後でポイントを7万あげないといけない。(いや、ポイントをあげるのはリスクが高いかもしれないな)

Dクラスは極貧生活を送っているが、その中で綾小路がポイントを使っているのをDクラスの生徒が見たら問い詰めるのは明白。

そこから裏切りを見抜かれたら厄介だ。綾小路が責められるだけならともかく、綾小路を利用して情報の攪乱をしてきたら厄介だ。

よって綾小路が欲しいものを俺が買って夜中に綾小路の部屋に送る方がいいかもしれない。面倒だが、万が一を考えたらそれがいいだろう。

(とりあえず後で連絡を入れておくか)

俺は今後の方針について決めながら上級生の200メートル走を見る。

それから20分くらいして、上級生の200メートル走も終わりいよいよ昼休みを迎えることとなった。

昼休みは午後の推薦種目に備えて英気を養う大切な時間である。

俺も借り物競走と男女混合二人三脚に参加するのでしたっかりと休む必要がある。その為にも有栖が作ってくれた弁当を食べて休んでおかないといけない。

俺はひよりの元に向かって歩き出すが、この時の俺は知らなかった。

昼休みの憩いの時間が由比ヶ浜と龍園により潰されるということを。

## 昼休み

昼休みになったので俺はひよりの元に向かう。ひよりも俺に気付いて微笑みを浮かべながら近寄ってくる。

「お疲れ様です八幡君。昼食はどこで食べますか？」

「そうだな……ん？メールだ」

ポケットから電子音が聞こえてきたので携帯を取り出して見てみると有栖から「昼食ですが、特別棟裏にある中庭で一緒に食べましょう。お待ちしています」と書かれていたので、ひよりに見せると小さく頷く。

「どうやら昼食はそこで食べるようですね。行きましょうか」

ひよりが俺の腕に抱きついて歩き始めるので俺もそれに続く。もうひよりが腕に抱きつくことについては何も言わない。言っても上目遣いされたら拒否出来ないし、ひよりの日記を見てからはひよりのおねだりに拒否出来なくなっている。

特別棟の方に向かうと、ワゴン車がいて生徒に弁当を配布している。何でも今日一日限定で外部の業者が無料で配給するらしく、多くの生徒が集まっている。特にDクラスなんかは由比ヶ浜の所為でポイントを殆ど持ってないので顕著だ。

と、ここで弁当を受け取った面子の中で由比ヶ浜がいて、こつちに気付いて近寄ってくる。休み時間なのに疲れる気配しかないな……

「ヒツキー！何してんだし！」

やっぱり来やがったよ。頭が痛くなってきたよ。

「何してるも何も昼飯を食べに行くだけだ」

「そういう意味じゃなくて！何であたしに謝らないで呑気に女子と過ごしてるの?!本っ当キモい！」

ヤバい、マジでぶん殴りたい。

「何について謝れってんだよ？」

「はあ?!そんなこともわかんないの?!ゆきのんを殴ったことやあたし達のクラスポイントをズルして奪ったことに決まってんじゃない！」

「雪ノ下さんの件については兎も角、クラスポイントについては貴女が八幡君を階段から落とした事が原因では？」

と、ここでひよりが怒りを滲ませながらそう返す。同感だな。雪ノ下の鳩尾に拳を叩き込んだ件についてはやり過ぎと自覚はあるが、クラスポイントについては由比ヶ浜が一番悪いだろう。

「部外者は黙っててよ！ヒツキーを階段から落としたのはヒツキーがゆきのんを殴った

からあたしは悪くない！それなのに学校はあたしを一番の悪者にするし、ヒツキーがなにかズルしたんでしょ！」

もう退学覚悟で半殺しにして良いか？

そこまで考えている時だった。

「ちよつといい加減にしてくれない？」

金髪ギャル……確か軽井沢恵だったか？……が呆れ顔をしながら俺の前に立ち、由比ヶ浜と向き合う。

「2人の関係はどうでもいいけどさ、由比ヶ浜さんが喚くとクラスの皆に迷惑がかかるから比企谷君に関わらないで欲しいんだけど」

軽井沢はそう言うってくるが、ギャルの見た目に反してマトモな感性を持っているように安心した。

「けいけいは関係ないじゃん！人の気持ちを考えられないヒツキーにはあたし達に謝らせないといけないんだから引つ込んでよ！」

「だったらまず退学回避の為にプライベートポイントを出したあたし達に謝ってよ。後けいけいって呼ぶのやめて？嫌がつてるあたしの気持ちも考えて」

軽井沢の呆れた声に由比ヶ浜は言葉を詰まらせてしまう。ごもつともな意見に黙らせることが出来たかと思えば……

「も、もう終わったことじゃん！大体あの時だって、テスト前にヒツキーやあのチビに集中力を奪われたから赤点を取っただけで悪いのはヒツキーやチビだよ！」

うわコイツ。助けて貰っておきながらそんなセリフを吐くとかマジで終わってんな。周りにいる人間も信じられないって表情を浮かべてるし。

「はあく、もう頭が痛くなってきた。比企谷君って中学から大変だったんだね」

軽井沢が同情の眼差しで俺を見てくる。大抵由比ヶ浜と話した人間は俺に同情の眼差しを向けてくるんだよなあ。

「残念だな」

「とりあえず由比ヶ浜さんはあたしが止めとくから、行った方がいいよ。由比ヶ浜さんは絶対に引かないだろうから」

「恩に着る」

「失礼します」

俺とひよりは軽井沢に頭を下げて歩き出す。それに対して由比ヶ浜は詰め寄ろうとするが軽井沢が止めに入る。

「ちよつと邪魔しないでよ！ヒツキーとの話の邪魔すんなし！」

「だったら由比ヶ浜さんはクラスの邪魔しないでくれない？」

そんなやりとりを背後から聴きながら俺達は距離を取る。同時に頭の痛みがマシに

なってくる。マジでありがとうございます。見た目からしてビッチかと思ったが、予想よりも優しいことに驚いたわ。

「疲れた……」

「お疲れ様です。八幡君は大変ですね」

「雪ノ下がない分マシだ」

多分体力が限界に来て、どこかで休んでいるのだろうが、それが幸いした。

「それにしても八幡君は中学時代に彼女と何があっただんですか？」

「そういや有栖には話していたが、ひよりには話してなかったな。」

「実はだな……」

そう前置きして俺は歩きながら全て話す。内容が内容だから余り話したくはないが、話さないと由比ヶ浜が変なことを吹き込む可能性があるからな。

やむなく話すと、ひよりは途中までは頷きながら聞いていたが、嘘告白について話すと悲しそうな眼差しで見えてきて、すごく罪悪感が湧いてくるが、何とか話す。

「つて、感じだな」

「……そうですか。私はその場に居なかつたし、もう終わった事だからどうこう言いません。けど赤の他人の恋愛事情に踏み込み過ぎるのはもうやめてくださいね。誰の為にもなりません」

「ああ」

ごもつともだ。アドバイス程度ならまだしも、振られないように動くつてのは逸脱した行為だ。それでありながら動いた俺には反省点がある。

しかし反省点があるのは認めるが、雪ノ下と由比ヶ浜の態度については納得出来ない。やり方を否定するだけなら兎も角、謝れ謝れ喚くのは気に入らない。何故お前らに謝る必要があるんだって話だ。

「それに……これは完全に私情を挟んでいるので不快に思うかもしれませんが、……告白は私以外にはしないで欲しいです」

ひよりは真っ赤になってそう言ってくる。ひよりの日記を見たり、何回も唇同士のキスをしている事からひよりに好意を持たれている事はわかつてはいたが、ハッキリ言われると結構来るものがある。

「わ、わかった。嘘告白はもうしない……」

「……約束ですよ」

ひよりは艶のある眼差しで俺を見てくる。そんなひよりを見るとY e s 以外の選択肢は無かった。

そしてひよりの唇をつい魅入ってしまう。既に何度も重ねた唇だが、見慣れる気がしない。

暫くすりとひよりが恥ずかしそうな仕草を見せる。

「は、八幡君……そ、そんなに唇が気になりますか？でしたら……良いですよ」

ひよりは目を瞑って唇を突き出してくる。不味い、ひよりにキスされたことはあるが俺からキスしたことはない。しかけたことは何回かあるけど。

けどひよりが良いと言うなら良いんじゃないや「おやおや随分とお熱いですね」こ、この声は……

どうしたものかと悩んでいる時に穏やかな声が聞こえてきたので横を見ると……

「来るのが遅いので迎えに来たのですが、どういうことでしょうか？」

有栖がニツコリと笑っていた。ただし額に青筋を浮かばせながら。

俺は即座に有栖に対する言い訳を考え始めるのだった。

## 昼食

「……なるほど。由比ヶ浜さんに絡まれるとは八幡君も災難でしたね」

特別棟裏にある中庭にて、俺はひよりと一緒に有栖が用意したシートに座って、遅くなった理由を説明すると有栖は納得したように頷く。有栖も由比ヶ浜にイラついているようでさつきまでの怒りは見えなくなった。

「加えて中学時代の話をすれば遅れても仕方ないですが、椎名さんは少々攻め過ぎでは？八幡君は私のもですよ」

そう言いながら有栖は俺の右腕に抱きつくが、俺はお前のものじゃないからな？

「違います。八幡君は私のもので、私は八幡君のもんです」

ひよりは対抗するように俺の左腕に抱きつく。2人が抱きつくことにより温もりが伝わってくるが、ひよりの方が柔らかく感じる。まあ口にしたら有栖がブチ切れそうだから言わないけど。

「と、とりあえず飯を食おうぜ。腹が減って仕方ないしご馳走になるぞ」

「……まあ良いでしょう。どうぞ召し上がってください」

有栖が不満そうに言いながらも了承するので、俺は有栖が用意した弁当箱を開ける。

中には鮭の切り身にマッシュポテト、筑前煮にローストビーフなど和洋折衷な料理が並んでいた。

「美味そうだな」

「そう言ってくれて嬉しいです……私の想いを込めましたので」

最後の一言だけを耳元で囁く有栖だが、今のは破壊力が半端ない。普段の姿とはギャップ差があり可愛過ぎる。

「そ、そうか……頂きます」

「頂きます」

俺に続いて、2人も挨拶をして食べ始めるが、先程の有栖の爆弾発言により恥ずかしくて味が余り認識できない。

しかしそれでも旨味を感じるので平常時なら相当美味いだろうな。

そう思いながらも俺は夢中で食べ続けるが、終盤になると羞恥心が無くなってきたからか一層旨味を感じて最高の食事となった。

「ご馳走さまでした」

「美味しかったですか？」

「最高だった。可能なら毎日食いたい」

俺も自炊をしているが、有栖の弁当と比べたら内容はかなり劣っていると思う。

「八幡君が望むなら毎日……それこそ卒業してから、仕事に就いてからも作りますよ」  
有栖は珍しくモジモジしながらそんな事を言ってくるが、それはつまり「八幡君」ひより？

いきなり呼ばれたので見てみるとひよりはジト目で俺を見ている。

「私も八幡君にお弁当を作りますから食べてください」

「あ、ああ……」

予想以上に強い口調に気圧されてしまう。ひよりってあんなに強い口調になれるんだな……というか有栖のジト目が痛い。俺にどうしろと？

「あ、ご飯粒が付いてますよ」

ちゅっ

言うや否やひよりは顔を近づけてきて、唇の端についているご飯粒を唇で取ってきたので、思わず振り向く。そこには舌を出してご飯粒を見せつけているひよりがいて、そのまま舌を口の中に入れる。

「ふふっ……」

蠱惑的に笑うひよりは凄くエロく、ぶつちやけムラつとしかけるが、背後からプレッシャーを感じて煩惱が無くなる。

「八幡君。少しよろしいでしょうか？」

「は、はい」

ひよりから目を逸らし有栖を見ると、額に青筋を浮かばせながら笑う有栖がいた。ハッキリ言つてメチャクチャ怖い。

「改めて聞きますが、お弁当はまた食べたいですか？」

「え？あ、ああ。また食べたい」

予想外の質問だが正直に答える。

「それは結構。では契約は成立したので、報酬を要求します……」

有栖はそう言つて恥ずかしそうにしながらも目を瞑り、唇を突き出してくる。

これはつまり報酬としてキスを寄越せつてことだろう。しかも契約は成立したと言つてる。

契約内容を聞いてないから無効だ、という選択肢もないわけじゃないが、有栖の性格上それは認めないだろう。

すると今度はひよりが俺の服を引つ張つてくる。

「八幡君、さっきは坂柳さんが介入しましたが、あの時の続きを……」

ひよりも同じように目を瞑つて唇を突き出してくる。同時に冷や汗が流れることを自覚する。

キスすること自体はそこまで問題じゃない。恥ずかしいが既に何度も経験してるか

らな。

問題は順番だ。多分後にキスをした方は「何故自分が後なのか」と聞いてくる可能性が高い。正直言つてそれが一番厄介だ。

しかし拒否したらしたで更に面倒な事になるだろう。有栖あたりは第三者がいる所でねだつてくるかもしれない。目的のためなら手段を選ばない一面もあるからな。

俺は悩んでしまうが、2人はお構いなく顔を近づけてくる。早くしないと面倒な事になるのは明白だ。

「……よしっ」

覚悟を決めた俺はひよりの方に身体を向けてそのままキスをする。

「ふふっ、八幡君からは初めてですね……」

ひよりは幸せそうに微笑む。そんな風に笑われるとこっちも幸せな気分になる。

しかしそんな幸せは逆サイドからのプレッシャーにより一瞬で吹き飛んでしまう。

逆サイドを見れば不機嫌全開の有栖がいた。

「幸せそうで何よりですが、何故椎名さんからなんですか？」

「いや、元々ひよりとやろうとした際に有栖がやってきたし、先にやろうとしたひよりからと思っただけだ」

「……そうですか。まあ他意はなさそうなので良しとしましょう。それよりも私にもお

願います」

言いながら再度目を瞑り唇を突き出してくる。ここで拒否したら絶対面倒な事になるのは明白なので、俺は有栖に近寄り触れるだけのキスをする。

「んっ……身体が温かくなります……」

有栖は幸せ全開な表情で微笑みを浮かべている。普段は冷たい表情が多いのでギャップを感じるな。

「そりゃ良かった。それにしても結構疲れたが、推薦種目がキツイな」

9種目は強制参加であるし、棒倒しでは人間ミサイルになったし、騎馬戦では須藤の突進を受けたし、200メートル走では巻き添えを食らって転倒するなど中々ハードであった。

「仕方ありませんよ。まあ八幡君は昼休み終盤に面倒事に巻き込まれますので30分くらい横になって休んでください」

有栖は意味深な言葉を言ってくる。どうやら龍園と何らかの悪巧みをしているのだろうか。

「じゃあお言葉に甘えて」

「何にせよ疲れてるのは事実だし休ませて貰うか。言いながらシートに寝転がる。すると有栖が俺の正面に抱きつき、一拍おいてひより

が俺の背中に抱きつく。

「お前ら、恥ずかしいから離れてくれないか？」

「嫌です」

2人は即答して抱きしめる力を強める。自室で2人と寝るのは慣れてるが、屋外で寝るのは初めてだ。

「どうかマジでどうしよう。2人は間違いなく俺に好意を持っているだろう。しかしどちらか片方しか選べない。」

これが龍園なら2人まとめて自分の女にするだろうが、俺にはそんな甲斐性はないからな。

（ま、今はどうこう考えても意味ないし、休むとしよう）

焦って変な答えを出すより、じっくりと考えるのが最善だからな。

そう思いながら俺は横向きの身体を、仰向けにして両手を2人の枕にする。

両サイドを見ると2人は優しく微笑んでくれて由比ヶ浜との一件で溜まったストレスが解消しているのが理解出来る。

「そうやって暫くの間、2人に挟まれながら休んでいるとポケットの携帯が鳴り出す。どうやら休憩の時間は終わりのようだ。」

携帯を取り出してみると龍園から「今すぐ保健室に来い。ただし俺がいることを知

らないフリをして、怪我をしたからって理由で来い」と書かれていた。

「すまんがちよつと行つてくる」

「はい。気をつけてください」

「頑張ってくださいね」

2人から激励を受けた俺は身体を起こし、靴を履いて保健室がある校舎に向かう。が、途中でわざと転んで、足から血を流し保健室に行く言い訳を作る。

足に痛みを感じながらも保健室に着いたのでドアを開ける。

「失礼します」

するとそこにいたのは龍園、龍園の向かい側に一之瀬と網倉がいて3人の奥にあるベッドに山峰が寝ていた。

物凄く面倒な予感がしてきた。

「失礼しました」

「おいおい。酷い怪我をしてんだし帰んなよ。その傷もCクラスの連中にやられたのか？」

「だから！私がやったように言うのはやめてよね！」

「落ち着いて麻子ちゃん。私は信じてるから」

龍園の笑いに網倉が怒りを露わにしながら叫ぶ。この時点で何があったわかった。

「ついさつき石段に躓いて転んだんだよ。んで保健室に来たんだが、Cクラスの連中にやられたつてのはどういう意味だ？」

とりあえず今から保健室を出るまでは言われたように龍園に反抗的な態度を取るよ  
うに心掛けるように考えていると……

「それがよ、さっきの山峰と網倉の接触なんだがよ、網倉が狙ってやったことなんだよ」  
龍園が薄い笑みを浮かべながらそう告げる。

大体予想通りだな、うん。

## 対峙

「それがよ、さっきの山峰と網倉の接触なんだがよ、網倉が狙ってやったことなんだよ」  
龍園はそう言ってくる。やはり山峰の大怪我の責任を網倉に押し付けるつもりなのだろう。

「適当な事を言わないでよ！」

「煩えぞ。自分の非を棚上げすんな」

網倉の叫びを龍園が一蹴するが、お前が言うなよと思つた俺は間違いないだろう。

「済まんが詳しく聞かせてくれ」

「お前もレースを見たと思うが、網倉は走ってる途中にチラチラ見てただろ？」

「ああ。怪しかった動きだったし覚えてる」

「あれは山峰を負傷させる為にタイミングを見計らつていて、山峰によれば倒れた瞬間に「絶対にBクラスに戻るから」って網倉に言われたらしい」

「私はそんな事言つてない！山峰さんが私を何回も呼んだから振り向いたのに嘘はやめてよ！」

龍園と網倉の意見は正反対だが、あのレースを見るとどっちの言い分も理に適つてい

る。

しかし離れている場所から見ている俺達には実際の話はわからない。まさに悪魔の証明だ。

しかしこうなると網倉が不利だ。山峰は網倉より運動能力があるはずだが負傷している。

日本は弱者救済の強い国でこの学校もそうだろう。意図的な事故という可能性が少しでもあるなら審議に入れるし、怪我をして推薦競技に出れない山峰が僅かに有利になるだろう。

「そんな感じで俺としてはCクラスに落とし前をつけて貰いたいんだが、網倉は自分の非を認めないんだよ」

龍園はため息を吐きながら両手を横に振る。その仕草は無関係の俺からしてもウザいので当事者の網倉からしたら相当だろうな。

「そんで俺としては生徒会に訴えようか悩んだが、手打ち料として100万ポイントを提案したタイミングでお前が来たんだよ。で？払うのか？」

案の定網倉は龍園に詰め寄ろうとするが、一之瀬がそれを手で制して龍園と向かい合う。

「麻子ちゃんはそういうことを絶対にしない。だから手打ち料を払うつもりはないよ」

「自分のクラスメイトだから庇うよな。けどこつちとしては推薦種目に出場する山峰を怪我させられておきながら、はいそうですかって訳にはいかないんだよ。要するに不幸な事故だから諦めろってことだよな？」

「残念だけどそうかな。私は今回の件はBクラスが起こした意図的な事故だと思うからBクラスの要求は呑まない」

流石しよつちゆう龍園と揉めてるだけあり、一之瀬は引く様子はない。

「あくまでも非を認めないか。だったら出るところに出て審判を下して貰おうぜ」

審判となると生徒会か。

「待て龍園。それは反対だ。一之瀬は生徒会に所属しているが、相手の土俵で戦うのは悪手だ」

龍園からは「俺の意見に反対しろ」って命令を受けたが、その命令が無くても生徒会に持ち込むのはリスクが大き過ぎる。

「いやいや。確かに私は生徒会に所属してるけど、堀北会長達はそういった問題に私情は挟まないよ」

「絶対とは言い切れないだろ。普段一緒に仕事をしている一之瀬がいるクラスの問題を審査する時、無意識のうちに一之瀬がいるクラスに味方する可能性もある」

俺も龍園と無関係の人間なら、龍園の畏と疑っている自信がある。

「加えて以前俺達は訴えを起こして取り下げた経験もあるし、普段からトラブルを起こしてるウチのクラスが不利だから反対だ」

正直言つて生徒会に問題を持ち込んだら勝ち筋が見えない。

「なるほどな。確かにお前の言うことは一理あるが、訴えはする。泣き寝入りなんてしたら、Cクラスは今後つけ上がるだろうからな」

「つ……！さつきから聞いてれば私が悪いみたい……！良いよ！審議で戦うから訴えたかつたら訴えなよ！」

龍園の悪意に網倉は審議で戦う事を宣言する。

「麻子ちゃん落ち着いて。挑発に乗っちゃダメ」

「大丈夫だよ！私は絶対にしてないって自信があるし、寧ろ審議で勝つてBクラスを叩くチャンスだよ！」

一之瀬の注意に網倉は強気で反論する。瞬間、龍園の目が一瞬だけかかったと言ったような気がする。

そこまで話していると保健室のドアが開いたので横を見れば、生徒会書記の橘先輩がいた。

「失礼します。ちようど今審議という言葉が聞こえましたが、問題でもありましたか？」

「ああ。ちようど良かった。実はだな……」

龍園は橘先輩に説明するが、お前は敬語を使えや。

事情を聞いた橘先輩は頷く。

「お話はわかりました。一先ずは訴えを申請しておきます。詳しい話は体育祭が終わるまでに決めますので、体育祭が終わり次第担任の先生の指示に従ってください」

「ああ」

「わかりました」

龍園と一之瀬が頷くと橘先輩は何処かにメールをしてから保健室を後にする。

「さて、もうすぐ昼休みも終わりだし俺はもう行くが、お前らの卑劣な行いは裁かれる事を楽しみにするぜ」

「随分自信があるんだね」

「当然だろ。悪いのは網倉なんだから」

悪いのは龍園なのに、当たり前のように自分が悪くないと言う時点で相当な悪だろ。まあそれをどうこう言うつもりはない。

既に賽は投げられたからな。まあ龍園の自信からして勝つ算段があるのだろう信じよう。

龍園の理不尽な言葉に網倉は龍園に詰め寄ろうとするが、一之瀬が止めて、網倉を連

れながら出て行く。Cクラスの連中は1学期も龍園と揉めたようだが、一之瀬は大変そうだな。

そう思いながら周りを見回すが、保険医が見当たらない。多分打ち合わせか救護テナトにいるのかもしれないので治療は諦めることにした。

「で？勝算はあるのか？」

保健室を後にしながらそう尋ねる。あそこまで自信があるなら勝算もあるのだろうか正直不安だ。

「ああ、ある」

「証人を利用するという選択肢なら榎田がいる時点で悪手だぞ」

証人と呼ばれるなら網倉と山峰が走っている時に近くで走っていた生徒だ。

そしてその生徒は4人いる。Aクラスの生徒が2人、ウチとDクラスが1人ずつだ。しかし証人となればウチのクラスから証人を出すのは無理なので実質3人だ。

Aクラスの2人と口裏を合わせて、「網倉が絶対にBクラスに戻るから」と言っていた」と証言しても、榎田が否定すれば勝ち目は殆どなくなる。ただでさえウチとAクラスは同盟を結んでいて、発言力は高くないのだから。

しかも榎田は人気者だから発言力が高いし。まあ本当の性格は知らないが。もし普

段の櫛田が素ならDクラスにいるなんてあり得ないし。

まあそれはともかく、それでも尚勝ち目があると言うって事は、生徒会に賄賂でもしたか？堀北会長あたりは受け取らないだろうが、南雲副会長あたりは受け取りそうだし。

「安心しろ。向こうが審議に応じた時点で勝ちも確定した。寧ろCクラスの立場を弱らせるチャンスでもある」

……まあ本人がそう言うなら信じてみよう。

どうせしくじっても俺に罰が来ることはないだろうからな。それなら何の問題はない。

俺は龍園に頷きながらグラウンドに向かう。推薦競技も頑張らないといけないからな……

## 借り物競争

昼休み終了のチャイムが鳴り体育祭後半戦が始まる。ここからは推薦種目であり、俺は借り物競争と男女二人三脚に出る。

最初は借り物競争で俺が参加する競技なので入場ゲートに向かうと、運動神経の悪そうな奴が多いが、学年総合下位10人に入ってペナルティを受けないようにする為だろう。

この競技に関しては運の要素が強いし運動能力が低くても勝ち目はあるからな。全員が並ぶと審判をやってる2年Dクラス担任の山崎先生が口を開ける。

「借り物競争では高い難易度のもも設定されている。その場合は引き直しを希望する事も可能だが、引き直すまで30秒の待機を要求する。希望する者はクジを引く地点にいる審判に申し出る事。3名がゴールした時点で競技は終了とする」

やはり推薦種目だけあって簡単ではいかなそうだ。余程難しいお題じゃない事を祈る。

「よう、あの筋肉バカはどうした？リーダーの癖にサボリか？」

龍園が隣に並ぶ綾小路に煽るが、ソイツはウチのスパイだぞ？

「ああ。平田を殴ってからやつてられるかってボイコットして、クラス全員が放置してる」

まあ察に逃げられたらそれまでだからな。

「はっ！つまりテメエのクラスは崩壊したって訳か！救いようがないクラスだな！」

「何を言っている？須藤以前に由比ヶ浜がいる時点でウチのクラスに救いようがあるわけないだろ」

「ああ……そうだな。その辺りはテメエらにマジで同情するぜ」

煽っていた龍園だが、最後だけは真剣な表情で言ってくる。俺達の中で由比ヶ浜はDクラス最強の疫病神って評価だからな。

そう思いながらも俺達は入場してスタート地点に集まる。最初の4人には我らが大将の龍園と俺の協力者の綾小路がいる。さてさて、どうなるやら……

パアンツ！

ピストン音が鳴り、4人がグラウンド中央にあるテーブル上の4つの箱に手を入れて紙を取り出す。

全員が紙を開くと最初に動いたのは綾小路だ。自分のDクラスの方に向かう。次に動いたのは龍園で教員用のテントに向かう。

そして綾小路が由比ヶ浜を連れて、龍園が星之宮先生を連れてゴールに向かうが、位置的に龍園の方が早く到着する。

そして龍園はゴールにいる真嶋先生に話しかけるとマイクを渡される。どうやら場合によっては発表があるようだ。

龍園はマイクを持ち……

「1年Bクラス龍園翔。「賞味期限が近いもの」で星之宮千恵を選択した。理由としては普段から酔ってる姿が多く見えて、良い歳して言動がぶりっ子だからだ」

ドツツツツツツツツツツツツ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツツツツツ!

そう宣言する。瞬間、観客席からは爆笑が生まれ、星之宮先生からはドス黒いオーラが噴き上がる。流石龍園だ。堂々とそんな事を言うなんて……

と、ここで綾小路が手を挙げる。何かかと思えば龍園からマイクを受け取り……

「意義ありだ。龍園、星之宮先生は賞味期限が近いものじゃない。賞味期限が切れてい



ろう。オーラが揺らめいていて地面が揺れているように感じる。とりあえず真嶋先生の命日は今日だな、うん。

そんな中、綾小路は全く気にしないで真つ白な真嶋先生に紙を渡してからマイクを受け取り……

「1年Dクラス綾小路清隆、「頭が残念な人」というお題に対して由比ヶ浜結衣を連れてきた」

堂々と発言すると、瞬間的に由比ヶ浜がキレる。

「はあ!? 何でアタシが残念なんだし! マジでキモい!」

由比ヶ浜の言葉に1年生は「何を言ってるんだコイツは?」って眼差しを由比ヶ浜に向ける。

「なんでも何も同級生を階段から落として停学を食らっても全く反省しないで自分が正しいと思ってる奴は残念だと思うが?」

「だってアレはヒツキーがゆきのんを殴つたのが悪いし、アタシは悪くない! ヒツキーが怪我したのも自業自得じゃん!」

うわ、コイツ本気で言ってるよ。これは間違いなく審査は通るだろう。少なくともこの学校でアイツ以上に頭が残念な奴はいないだろう。

「……良いだろう。お題はクリアとする。綾小路は2位だ」

「ぶざけんなし！何でクリアになるんだし！あのチビガキの担任は頭もガキなの?!」  
あ、救護テントにいる有栖の額に青筋が浮かんでるのが離れてるのにハッキリわかった。

由比ヶ浜はギャーギャー騒ぐ中、真嶋先生は無視して馬鹿笑いする龍園と綾小路を退場ゲートに行くように促す。実に大人の対応だ？

まあ星之宮先生が耳打ちした瞬間に、足がガタガタ震えだしたけど。

そう思う中、Cクラスの男子がツインテール女子ってお題に対して、自身のクラスメイトの姫野ユキつて女子を連れて3位となった。よってAクラスの男子がビリとなる。

そして次は俺の番だ。同じ組で注意なのは一之瀬の側近の神崎くらいだ。まあ運が重要だからわからないが。

パアンツ！

ピストン音が鳴るので走り出す。やはり速いのは神崎で一番にテーブルに着いては箱から紙を取り出す。

しかし直ぐに凍りついたかと思えば……

「チェンジで」

「では三十秒間、箱に手を入れないように」

どうやらハズレを引いたようだ。俺がテーブルに近寄ると神崎の近くに「巨乳」と書

かかれている紙があつた。完全にセクハラじゃねえか。

呆れながらも俺も紙を箱から取り出すとそこには「天鎖斬月」と書かれていた。うん、無理だな。

「チェンジで」

俺が紙を投げ捨てて待機すると、AクラスとDクラスの男子も引くが2人もチェンジをする。チラッとテーブルを見れば「女子の脱ぎ立ての体操着」「ニワトコの杖」と絶対に無理な内容を書かれている。とりあえずクジを考えたバカはいずれぶつ飛ばす。

そう思いながら待っていると一番早くチェンジをした神崎が箱に手を入れるが、すぐにチェンジする。見てみると「ドラえもん一巻の初版」と書かれている。嫌がらせとしか思えない。

そして俺も再度紙を取り出すと「他クラスの友人(女子のみ)」と書かれていた。何で簡単なものと難しいもののレベルが違い過ぎるんだ……

そう思いながら周りを見るとゴール付近にある救護テントから有栖が出てAクラステントに向かうのを確認出来た。

ラッキーと思ひながら俺は走って有栖の元に向かう。

「有栖、借り物として来てくれないか？」

俺は紙を見せながら頼み込む。対する有栖はハツとした表情を浮かべて頷く。

「わかりました。ただ、私は碌に歩けないので運んでください」

そのくらいはお安い御用だ。

俺はそのまま有栖を背負ってゴールに到着して、有栖を下ろして紙をポケットから取り出す。その際に有栖が若干不機嫌そうにしているが気のせいだろう。

「ではお題と答えをマイクで発表しろ。坂柳も正解ならそれをマイクで伝えるように」

真嶋先生がマイクを渡すので俺は受け取りスイッチを入れる。

「1年Bクラス比企谷八幡。他クラスの友人というお題に対して1年Aクラスの坂柳有栖を選んだ」

そう言つてマイクを有栖に渡すと有栖はマイクを受け取つてから頷く。

「1年Aクラス坂柳有栖です。比企谷八幡君のお題は正解である事を告げます。最も……」

有栖はそう前置きしたかと思えば俺の方を向いて……

「私個人としては、お友達で終わるつもりはありません……」

ちゅっ

全生徒が見ている前で堂々と宣言してから俺の唇にキスをしてくるのだった。

## 借り物競走②

俺は今、自分でも信じられない状況に直面している。いつ、どこで、誰が、何をして  
いる状況かというと……

いつ 体育祭当日

どこで グラウンド

誰が 有栖

何を 俺にキスをしている。

……つて感じた。

(つて！予想外過ぎるわ！)

俺は予想外の展開に驚きながら再起動して有栖から離れる。

「ぶはっ！あ、有栖！お前はいきなり何をしやがる！」

そして有栖を見ると凄く悲しそうに見てくる。

「……嫌、でしたか？ごめんなさい」

ヤバい、罪悪感が半端ない。

「でも……さつきのは嘘ではありませんから」

さつきの……友達では終わらせないってヤツだろう。ヤバい、思い出したら恥ずかしくて顔が熱くなってきた。

そこまですると周りの時間も動きだして……

おおおおおおおおおおおつ！

周りから大歓声上がる。

『凄えーあの類のお題で行動を示す奴、初めて見たぞ！』

『青春ね！甘々な青春ね！』

『AクラスのリーダーとBクラスのNo. 2ってそんな関係だったのかよ?!』

外界と遮断された世界による行動だ。当然、下手したら卒業までネタにされてもおかしくないな。

「真嶋先生。合格で良いですね？」

「あ、ああ。合格だ」

今日、星之宮先生によってお亡くなりになる真嶋先生は戸惑いながら頷く。それにより俺は1位を獲得するが、同時に平穏な時間が失われたのを自覚する。

と、そう思っていると……

「何してんだし！あたしを嵌めて苦しい思いをさせた癖に自分だけ楽しむなんてヒツキーマジキモイ！あんなガキ相手に！ロリコン！変態！」

先程まで綾小路に頭が残念な奴呼ばわりされたことで綾小路に突っかかっていた由比ヶ浜がキレるが、何を言ってるんだ？

俺が雪ノ下を殴っただけならDクラスに利益が入ったのに、自分で自分の首を絞めただけだろうが。後、有栖は見た目は中学生か小学校高学年だが、立派な同年齢でガキ呼ばわりされる筋合いはない。

そんな由比ヶ浜に対して先程まで騒いでいた生徒は白けた眼差しで、教員らは馬鹿を見る目で由比ヶ浜を見て、これ以上身内の恥を晒したくないのかDクラスの軽井沢が由比ヶ浜の口を塞いで、櫛田が由比ヶ浜の背中を押す。どんな時でもクラスに迷惑をかける奴だな。

「八幡君。馬鹿は放っておいて待機位置に行ってください。正直白けました」

そんな中、有栖は青筋を浮かべながらそう言ってくる。実際ゴールしたのにグダグダしては教師や他の生徒に迷惑だからな。

「じゃあまた後で」

そう言って終わった生徒の待機場所に向かうと龍園が苦笑いを浮かべて迎えてくれる。

「よう比企谷。色々な意味で災難だったな」

「意外だな。てつきり大爆笑して迎えてくると思った」

「最初は爆笑したんながな。由比ヶ浜の喚きに萎えちまった」

やるな由比ヶ浜。龍園を萎えさせるなんてそう簡単に出来ることじゃないぞ。

「俺としては良かったがな。しかし龍園はかなりギリギリだったな」

「まあな。異議が入った時は無効化されると焦ったぜ」

龍園はチラッと綾小路を見るが、つまり龍園は綾小路の意見に納得した事になる。当の綾小路本人は星之宮先生の殺意を涼しく受け流しているけどな。

「だな。俺が真嶋先生ならお前のお題を無効にしていたからな」

まあどっちを選ぼうが真嶋先生の運命に大した差はないだろうけどな。

そう思いながら俺も座って待機して、後続の競争を見るが大半の生徒がチェンジをしている。やはり相当難しい内容のようだ

「ちなみに比企谷。お前のグループではどんなお題が出たんだ？俺の所は「賞味期限が近いもの」「頭が残念な人」「金髪巨乳」「ひとつなぎの大財宝」だったな」

無理ゲーなのが一つあるな……今からラフテルに行けっか？

「俺の時はな、「巨乳」「天鎖斬月」「女子の脱ぎ立ての体操着」「ニワトコの杖」「ドラえもん一巻の初版」「女子限定で他クラスの友人」だったら」

「クソだらけじゃねえか」

龍園が毒づく中、石崎がやってくる。

「龍園さん！借り物として来てください！」

石崎は龍園の返事を聞く前に立ち上がらせて引っ張っていく。そして真っ先にゴールして……

「1年Bクラス石崎大地！「体操着姿に違和感を感じる人」で龍園翔さんを連れてきた！」

「ぶふおっ！」

マイクを使った宣言に噴き出してしまふ。確かに龍園に体操着はクソ似合わないだろう。見事なチョイスだ。周りの生徒も笑っている。

まああの龍園は額に青筋を浮かばせているが、審議が終わったら石崎はしばかれるだろう。

そして審査が通ってる石崎の一着が確定した瞬間、龍園は石崎の鳩尾に膝をぶち込んでこっちに返ってくる。当の石崎は膝を地面につけて悶絶しているが、アレは痛いな……

「おい比企谷。笑ってんじゃねえぞ、殺すぞ」

龍園が苛立ちを露わにしながらそう言っているが、アレは笑っても仕方ないだろう。

マジで笑えた。

それからも借り物競走は変なお題が続き、1年生最後となる。女子の組み合わせだが神室、一之瀬、ひより、堀北と各クラスの主力がいるな。運動能力だけ見れば、ひよりがぶつち切りで弱いのが借り物競走のお題は半端なく難しいので勝ち目はある。

事実、前の競争ではウチのクラスでひよりと同じくらい足が遅い藪が簡単なお題を引いて、学年屈指の身体能力を持つDクラスの女子の小野寺に勝ったからな。

パンツ

ピストル音が鳴り、4人が一斉に走り出す。最初にテーブルについたのは神室だが、紙を引くなり嫌そうな表情になってチェンジをする。

続いて堀北が紙を引くとDクラスのテントに向かい、一之瀬は苦笑いをしながらチェンジをする。

そしてひよりが遅れて紙を引くと、こっちに向かってくる。進行方向からして俺達に用があるのか？

「八幡君。「借り物競走を済ませた男子のクラスメイト」を引きましたので来てください」

随分と簡単なお題だな。どうやらひよりは当たりのようだ。

「わかった。行くぞ」

言いながら俺達は立ち上がりゴールに向かう。同時に堀北もDクラスのみとめ役の平田を連れていくが、運動神経抜群の堀北と平田の方が先に着くだろう。

俺達は全力で走ったが案の定、堀北と平田が先に到着する。それから数秒遅れて、俺とひよりが到着する。グラウンドを見れば神室がDクラス担任の茶柱先生を連れてきている。一之瀬は再度チェンジをしてるが負け確定だな。

「1年Dクラス堀北鈴音。「サッカー部所属の生徒」で平田洋介を連れてきたわ」

どうやら堀北も簡単なお題だったようだ。あっさりとクリアして一着が確定する。しかしひよりが2位なら上出来だろう。

「八幡君、ごめんなさい」

そう思っているとひよりが謝ってくるが、何に對して謝っているんだ？

疑問に思う中、ひよりは真嶋先生からマイクを受け取り……

「1年Bクラス椎名ひより。「好きな異性」でクラスメイトの比企谷八幡君を選びました。坂柳さんには負けません……!」

そう言つて俺の唇にキスをしてくる。有栖とは別ベクトルの柔らかさが伝わってくる。

というかたつた数分の間に全校生徒の前で2人の女子からキスをされるつて……あの意味、堀北会長や南雲副会長より名を挙げた気がする……悪い意味だけだな。

『おおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!』

『キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

俺は大歓声を響く中、現実逃避気味に内心ため息を吐くのだった。

恥ずかしくないのかつて? もう一周回つて落ち着いたわ。

## 男女混合二人三脚

「ふふふふふつ……私の所有物に手を出すとは良い度胸ですな椎名さん」

グラウンドの中央にて八幡にキスをするひよりを見た有栖は低い声を出しながら、額に青筋を浮かばせ、目元をピクピクさせて、唇を噛み締め、杖を握り締めていた。

自分のお気に入りの存在に堂々と手を出す宣言をして、あろうことかキスをしたひよりに有栖は嫉妬を剥き出しにする。

「……良いでしょう。八幡君が誰のものであるかハッキリとさせようじゃありませんか」

有栖の低い声にAクラスの生徒は震え上がり、神室真澄は愚痴に付き合わされることを確信してため息を吐くのだった。

「ようバカップル。随分と幸せそうだな」

龍園がそれはそれは楽しそうに笑いながら迎えてくる。他の生徒もジロジロ俺を見  
てくる。

ひよりのお題が承認されて2着となったので俺はキスをやめてゴール組の所に戻る  
が、その際にひよりが艶のある眼差しで見ながら手を握ってきたのだ。

結果として手を繋ぎながら待機場所に向かつて今に至る。最初はやんわりと拒否し  
ようとしたが、ひよりが物凄く悲しそうな表情になって罪悪感が湧いてきたので拒否し  
ないで手を繋ぎながら歩いている。

そして待機場所に着いたら案の定、龍園がからかってきた。からかってくるのは予想  
していたが、予想以上に恥ずかしい。

しかも……

「はい。こうやって手を繋ぐと幸せです……」

隣でひよりは幸せオーラを全開にぼわぼわしている。クソ可愛いが、一目につく場所  
ではやめて欲しいのが本音だ。

「ならずつとそうしてな（坂柳がどんだけキレるか楽しみだな）」

何か龍園の奴、最後だけ小声だったが、絶対に碌な内容じゃないだろうな。

そう思う中、ひよりは俺の手を離すことなく待機地点に座るのでやむなくひよりの隣に座る。

そして2年生の借り物競争を見ていると急に寒気を感じたので、寒気のした方向を見ると……

（あ、有栖……）

有栖がAクラステントにて満面の笑みを浮かべながらもドス黒いオーラを出して俺の手を見ている。余りのオーラに彼女のクラスメイトは有栖から距離を取っている。

すると……

「ふふっ……」

有栖のオーラを感じたひよりは俺の腕に抱きついて、柔らかな感触を伝えながら有栖に微笑みを浮かべる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツツツツツツツツツ!

それにより有栖のオーラが増す。先程、龍園と綾小路によつてブチ切れた星之宮先生のオーラと同等のものだ。俺、体育祭が終わったら真嶋先生と三途の川を渡るかもしれない。1人じゃ心細いけど、2人なら多少緊張が解けるかもしれないな。

内心冷や汗をダラダラ流しながら競技を見ていると3年の借り物競争も終わり、俺達は退場するが立ち上がりつてもひよりは俺の腕に抱きついたままで、有栖はドス黒いオーラを撒き散らしている。

「くくくつ、随分と大胆になったじゃねえか」

グラウンドから退場すると龍園はそれはそれは楽しそうに笑いながら話しかけてくる。マジでぶつ飛ばしたい。

「坂柳が大胆に攻めましたから遅れを取れません」

その言葉に俺は有栖からキスをされた事を思い出して恥ずかしくなってしまう。2人からキスをされた事はあるが、今までは寮の自室だったが今回は全校生徒の前だからな。今後全校生徒は俺を有栖とひよりが取り合っていると思うのだろう。

そう思うと精神的な疲れが増してくるな。平穏な学園生活はもう送れないし……俺はため息を吐きながらBクラスのテントに戻るのだった。

10分後……

『そこまで！1年生女子の部はBクラスの勝利です』

四方綱引きにてBクラスの勝利が告げられてウチのクラスからは歓声上がる。

推薦種目である四方綱引きの1年生の部は男女共にウチのクラスが勝った。男子の方では怪力無双のアルベルトがいるし、アルベルトと戦えそうな高円寺はサボった上に須藤が居ないからな。

女子については障害物競走でCクラスの網倉とのトラブルで怪我をした山峰を抜きにして戦ったが、ウチのクラスの女子は選手以外にも腕力の高い女子が多かったので勝ちを得れた。

結果としてウチのクラスは1年生の中ではかなり稼げた。白組として判断したら負けは確定で100ポイント引かれるだろうが、このまま順調なら学年1位を取れて被害は最小限になるだろう。

そして四方綱引きは3年生からやったので、1年生は最後にやった為……

『続いて男女混合二人三脚です。参加者は入場ゲートに向かってください』

そんなアナウンスが流れる。

「では八幡君。行きましようか」

ひよりは俺の腕に抱きついてくる。俺はひよりとペアを組んで参加するが、ひよりは嬉しそうだ。

「おいおい。競技中はイチヤイチャするなよ」

龍園が嫌そうな表情を浮かべている伊吹と一緒にいる。元々龍園は山峰と組む予定だったが、伊吹を代理にしたようだ。

「しねえよ」

そう返しながら入場ゲートに向かうと1年生は大分集まっている。メンバーを見れば中々面白い組み合わせがチラホラ見える。で、俺が並んだ列には……

神室と橋本のAクラス側近コンビ

一之瀬と柴田のCクラスリーダーと学年最優秀選手候補のコンビ

俺の協力者たる綾小路と綾小路の手駒の軽井沢の暗躍コンビ

って感じた。これは上位入りは難しいな。

というか参加表を見た時から思ったが綾小路と軽井沢をコンビにした理由わからん。軽井沢が綾小路の協力者である事は綾小路から聞いているが、もしかして体育祭でペ

アを組んだ事をキツカケにして、今後誰かに見られても怪しまれないようにする為か？

そう思いながら俺は綾小路に裏で組んでいるとは思われないように話しかける。

「よう。お前綾小路だったよな？ さっきの賞味期限切れ発言は笑わせて貰ったぜ。お前からしたら1位を逃して残念だったな」

その言葉に一部の生徒が噴き出すがアレはマジで笑えた。何せ龍園が賞味期限が近いものとして星之宮先生を選んだかと思ったら、堂々と賞味期限切れだと異議を唱えた

からな。

「全くだ。アレが通つたのは今でも納得出来ない」

「綾小路君。それ以上は言わない方がいいよ。星之宮先生が凄いで見ているよ」

一之瀬が指差した方向にはボロ雑巾みたいな真嶋先生の胸倉を掴み、鬼の形相の星之瀬先生がいる。手に赤い色が見えたような気がするが、突つ込まない。

そして前にいる龍園が笑いながら中指を突き立てると更に醜い表情になり、真嶋先生の胸倉を掴む腕がガタガタと揺れる。一番の被害者は真嶋先生だな。

「ま、終わっちゃまったものは仕方ない。にしても軽井沢とは予想外のペアだな。軽井沢は平田と組むと思った」

「足の速さが違い過ぎるからよ。き……こほんつ。色々な人と試したら綾小路君とは足の速さも近くて息が合ったから」

そんな風に言ってくるが、今何か言おうとして言い直さなかつたか？

気になった人が多いので後で綾小路に聞いてみるか。

そう思いながら俺達はグラウンドに入り待機位置に移動する。最初は1年生からであり、龍園と伊吹もスタート位置に立つ。

パアンツ

ピストル音が鳴り、一斉に走り出す。

龍園と伊吹は中々の速さで進み、2位となる。即席のペアにしては良い結果だろう。問題は俺達だ。一生懸命に練習したとはいえ、向こうも同じだから厳しい戦いになるのは間違いない。

一度深呼吸をしてからひよりと足を結び、スタート位置にて構えを見せる。

パンツ

ピストル音が鳴り一斉に走り出す。

「1、2、1、2、1、2……」

焦らずに一歩進む。足に痛みは走らずに済むがポテンシャルの低さによつて遅れている。

橋本&神室ペアと一之瀬&柴田ペアが1位争いをして、俺&ひよりペアと綾小路&軽井沢ペアが3メートルくらい遅れて3位争いをしている。

そして俺達が半分くらい進んだ時だった。突如、そこそこ大きな地震が起こり、俺達は揺れてバランスを崩してしまふ。

幸い転ばずには済んだが、前の2ペアはバランスを崩した際にぶつかつて転んで絡み合っている。今が最大のチャンスだ。

「行くぞひより」

「はー！」

「あたし達も抜くわよきよか……綾小路君！」

横から軽井沢の声が聞こえてくるが今綾小路を名前呼びしかけてたな。お前らつてそんな関係か？

疑問に思いながらも着実に進み、起きるのに四苦八苦している4人を抜き去り、綾小路ペアと並びながら進み……

「やった！勝ちましたよ八幡君！」

最後の最後にギリギリで抜いて1位となる。これは大金星だろうな。

「そうだな。運が良くてラッキーだった」

「はい。ですが、八幡君と1位を取れて良かったです……んっ……」

ちゅっ……

ひよりは俺にキスをしてくる。

『キヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツツツツツツツ！

それに伴い、ゴール付近からは歓声が上がリ、有栖から再度ドス黒いオーラが噴き荒れる。

(どうにも今回の体育祭は肉体的よりも精神的に疲れるな……)

俺は嬉しそうに微笑むひよりを見ながらそう思うのだった。

## リレー

いよいよ最後の種目のリレーを迎える。この種目は全学年合同で、各クラス6人ずつ選出して、1人あたり200メートル走る。まあ俺は不参加で応援のみだけだ。

もう赤組と白組の対決は負けが決まってるので最低でも100クラスポイントは引かれる。それは仕方ないが学年ごとの順位はわからない。

学年ごとの順位によってクラスポイントの変化もある。1位は50ポイント、2位は0ポイント、3位はマイナス50ポイントで4位がマイナス100

ポイントだ。

で、現在1年生の部で1位争いをしてるのは白組のウチとCクラスだ。ウチが1位なら体育祭後にマイナス50ポイント引かれるが、2位ならマイナス100ポイントも引かれてしまうから是非とも1位を取りたい。

(つかアレだけ頑張ってもポイントを引かれるのはムカつくな)

そう思う中、選手が入場する。各クラスから6人なので1学年24人、3学年で72人参加だ。

72人の内、36人が俺達Bクラスのテントに近づいて、残りが教員テントの近くに配置される。

(しかしDクラスは終わったな)

須藤は戻ってきてないし、正式な選手でもある三宅もグラウンドにいないし、正式な選手が2人もいない事になる。堀北や平田、小野寺や前園も悪くないが須藤に比べたら数段劣ってるし。

そうこうしていると第一走者が並ぶ。ウチからは陸上部の矢島。最初に主導権を握るべく俺が選んだ。アンカーは同じ陸上部の木下になっている。

パアーンツ

ピストル音が鳴り、12人が一斉にスタートする。矢島は上級生の男子相手にも負けずに戦い、最終的には2位で第二走者の小宮にバトンを渡す。

小宮はバスケット部で鍛えているからかなり速いが、背後から圧倒的な速さで迫る2人の生徒がいて、最終的に片方に抜かされて3位で第三走者の龍園にバトンを渡す。

龍園も悪くないが運動部って訳でもなく、少しずつ2位との差が出てきて更に1人に抜かされて4位となる。

と、ここで奇跡が起こった。龍園の後ろの後ろにいる6位の人は7位以下と団子状態だったのだが、コーナーを曲がる際に転んでしまい後続を巻き込んでしまったのだ。

6位以下が全員転ぶ中、龍園は4位をキープしながら第四走者の伊吹にバトンを渡すがチャンスだ。

・推薦参加競技の点数配分について

全学年合同リレーの点数配分だが、1位には150点、2位に90点、3位に45点、4位に30点、5位に24点、6位に18点、7位に12点、8位に6点、9位以下は0点だ。

で、一番のライバルである1年Cクラスは巻き込み事故で転んだので6位以下は殆ど確実だから場合によっては点差を拡げて学年1位になるチャンスだ。

伊吹もそれを理解したようで僅かにだが速くなったように見えて、そのまま1人を抜いて3位になり、第五走者は石崎にバトンを渡す。視界の隅ではグ6位以下の第四走者が走り始めたばかりだから5位以上は絶対だな。

石崎はウチの代表6人で1番遅いが、幸いにも石崎と競っている第五走者はそこまで大差がなく、石崎は2位との差を詰めている。しかし4位の選手が石崎との距離を少しずつ詰めている。これは結構ギリギリか……

そして2年Aクラスが真っ先にアンカーにバトンを渡し、アンカーの南雲副会長が猛スピードでゴールに向かう。かなりの速さで下手したらビリを抜かせるんじゃない？

……つてくらい速い。

そして石崎はといえばギリギリで2位に浮上するが、4位の生徒が3位に落ちた生徒と並んでいて、差は1メートルもない状況でアンカーとなる。

アンカーの木下は確実に2位を取るべく全力で走っているが、競っている2人もアンカーとしてかなりの速さを持っていて、抜かされてはいないが差を広げられていない。何かのキツカケ次第では抜かされてるだろう。

ここで5位の人もアンカーになるが、1位の南雲副会長とは100メートル以上、2位3位4位とは40メートルくらい離れているので抜かれないのは明白だ。

皆の応援が響く中、ピリが第五走者となり、数秒後に南雲副会長がゴールをして歓声上がる。2年Aクラスはぶっち切りだな。

しかし1位は読めたのでどうでも良い。問題は2位だ。

俺達Bクラスが息を呑みながら見守る中、グラウンドでは木下が全力で走っていて差をキープしている。差を広げてもなく、縮められる事もないってのは中々珍しいな。

と、ここでゴールまで2メートルを切った時だった。木下は歩幅を広げて思い切りジャンプして頭から突っ込みながら無理やりゴールの線を越えた。何っ！執念だよ？

予想外の行動に呆然とするが係員の先生は倒れている木下の様子を見ながら、間髪いれずにやってきた2人に「3」と「4」と書かれている旗を渡す。どうやら木下は2位

と判断されたようだ。

結果は2位で90点入る。3位は45点、4位が30点とかなり差があるので、ありがたい。

木下は起き上がり、顔を泥だらけにして足から血を流しながらもこちらにサムズアップしてきたので、ウチのクラスは大盛り上がりだ。最後の執念が勝ちに繋がったのだから当然だろう。

そうこうしている間にも次々とゴールをするが、堀北会長がアンカーの3年Aクラスは巻き込み事故に巻き込まれる中、いち早く抜け出たので6位でゴールする。

で、肝心の1年Cクラスはアンカーの柴田が奮戦してギリギリ8位に入って6点入った。0点なら良かったのに……

何にせよこれで全種目は終わり、後は閉会式のみだ。俺達はクラスごとにグラウンドの中央に並ぶと、1年の学年主任の真嶋先生がボロカスになったまま壇上に上がる。

星之宮先生を見ればウチのクラスの最前列にいる龍園に殺意を剥き出しにしているし、今回の体育祭で1番肉体にダメージがあったのは真嶋先生かウチのクラスの山峰だろう。つか種目に参加していない教師が1番ダメージを受けているって……

「では最初に結果を発表する。まず全体の結果だが……赤組の勝利」

その言葉に赤組は喜び白組からはがっかりした声上がる。白組に所属しているク

ラスは問答無用で100もクラスポイントを引かれるから当然だけどな。

「続いて学年ごとの結果を発表する。後ろの電光掲示板を見るように」

真嶋先生が自身の後ろにある掲示板を指差すと文字が表記されるので1年生の部を見てみると……

1位 1年Cクラス

2位 1年Bクラス

3位 1年Aクラス

4位 1年Dクラス

ギリギリだがCクラスに負けてしまった。大差ではなくギリギリなのが余計に悔しい。

体育祭開始時点のクラスポイントは……

Aクラス 1164ポイント

Bクラス 866ポイント

Cクラス 721ポイント

Dクラス 1ポイント

って感じだったが今回の体育祭の結果により……

## Aクラス

赤組の勝利 0ポイント

学年3位 マイナス50ポイント

1164 | 50 || 1114

## Bクラス

白組の敗北 マイナス100ポイント

学年2位 0ポイント

866 | 100 || 766

## Cクラス

白組の敗北 マイナス100ポイント

学年1位 50ポイント

721 | 50 || 671

## Dクラス

赤組の勝利 0ポイント

学年4位 マイナス1000ポイント

1-1000=マイナス99ポイント（但しクラスポイントにマイナス制度がないので  
実質0ポイント）

となった。アレだけ頑張ったのに全クラスマイナスで、Aクラスとは差が開き、Cクラスとの差は縮まったので俺達からしたら悪い結果だろう。

それから学年最優秀生徒が発表されているが興味ないので適当に聞き流していると、閉会式は終了した。

後は山峰と網倉の接触事故に関する審議だな。

「龍園。例の審議については俺が弁護人として出るか？」

「いや、弁護人は金田にやらせる。既に審議についての策は練っているが、お前の出番は一之瀬達の前で俺の意見に反対することで終わりだ。後は任せとけ」

そんな風に言ってくる。内容から察するに一之瀬に「比企谷八幡は龍園翔の部下であるが、やり方全てに賛成しているわけではない」と思わせるのはわかる。今後の試験で不意をつくためだろう。

しかしどうやってCクラスを叩くんのだ？立場的に一之瀬は審議に出ないだろうが勝

ち目があるのか？

疑問に思っていると龍園は肩を叩いてくる。

「それよりもお前にはやるべき事があるだろ？ほら」

そして指を差した先を見れば……

「お疲れ様でした八幡君。この後、私に付き合っただけで貰いたいのですが宜しいですね？」  
満面の笑みを浮かべた有栖が退場ゲートに立っていた。

体育祭は終われど、俺の勝負はここからのようだ。

## 閉会式後にて

体育祭が終わり制服に着替えた俺は寮に戻るが、緊張感を持ったまま部屋に入る。何故なら俺の戦いはこれからだからだ。

そして部屋に入りベッドに向かい、身体全体を玄関の方に向けると蠱惑的な笑みを浮かべる有栖と頑張りますとばかりに握り拳を作るひよりがいて、そのまま2人が俺をベッドに倒してくる。

「ふふっ……体育祭で頑張った八幡君にはタツプリご褒美をあげますから」

「わ、私も坂柳さんより良いご褒美をあげますっ」

ちゅっ

言うなり、ひよりは俺の右に位置どり俺の腕に抱きつくや否や、そのままキスをしてくる。

「んっ……んむっ……んんっ」

ひよりは絶対に離さないとばかりに激しいキスをしてくる。これを体育祭の時にやられたら間違いなく引き籠もってしまっただろうっ！

と、ここでいきなり別の快感が襲ってきたので意識を左に向けると……

「ふふっ。今日は八幡君に教育を施してあげましょう。八幡君は私のものであるという事を……ちゅっ」

有栖が俺の首筋にキスをしながら、左手で俺の乳首を弄り回し、右手を使つて俺の息子をズボン越しに優しい手つきで撫でてくる。

(ヤバイ……この快感には耐えられない……!)

口と首筋に感じるキスの柔らかさ、そして乳首と股間を攻めてくる快樂は圧倒的であつという間に果ててしまふそうだ。

と、ここで有栖は両手を離してくれるが、がっかり感が生まれている事を自覚して驚いてしまう。

「ふふっ。物足りなそうですね。私のものになると誓うなら続きを、それももつと凄い快樂を与えてあげますよ?」

言いながら有栖は蠱惑的な笑みを浮かべながら制服のリボンを解いて、ワイシャツのボタンを上から2つ外す。それにより真っ白で綺麗な鎖骨が見えて息を呑んでしまう。

「ダメです……!坂柳さんには渡しません!」

そう言いながらひよりは俺の顔を自身の胸に引き寄せてギュッと抱きしめてくる。ひよりの温もりと心臓の鼓動が伝わってきて、益々雄としての昂りを感じる。

「良い度胸ですね……でしたらここで白黒付けて差し上げます。どつちが八幡君を骨抜きに出来るか勝負です。幸いにも私達は八幡君の好みの体つきですから」

「そうですね。八幡君がエッチなサイトで購入している動画は銀髪貧乳ものが多いです」

おい待て。何故俺が買ったエロ動画の趣味嗜好を知っているんだ？というか2人……銀髪貧乳の2人にハッキリと言われると恥ずかしいんだが。

「い、いや。待て待て。少しは落ち着け。流石にこういうのは段取りを踏んでだな」おや。八幡君の本能は望んでいるようですよ」っあ……！

有栖は嗜虐的な笑みを浮かべながらズボンの上から息子を握ってくる。さっきの攻めにより昂っているようだ。

「我慢は良くないですよ。八幡君が望むこと、一杯してあげますから。八幡君がどういうシチュエーションが好きなのかは勉強しましたから」

ひよりは艶のある眼差しを向けながら俺のワイシャツを脱がしてシャツを捲り上げる。

そして2人もワイシャツのボタンを外してからワイシャツを投げ捨てる。

水色のブラジャーをつけたひよりと純白のブラジャーをつけた有栖は2人でバチリと火花を散らしてから俺を見てきて……

「さあ、骨抜きにしてあげますよ……」

「八幡君も我慢しないでくださいね……」

そのまま俺に覆い被さってくる。身体能力なら俺の方が遥かに高いが、2人のエロさに気圧されたからか、もしくは俺の本能が2人を求めているからか特に抵抗出来ずに美少女2人への抵抗を放棄するのだった。

同時刻……

「では網倉と山峰の2人の近くを走った元土肥に西川に武川に櫛田に聞くが、2人から

声は聞こえたか？」

生徒会室にて副会長の南雲雅が部屋の中央にいる4人に話しかける。

障害物競争による接触事故についてBクラスが訴訟した為、体育祭が終わってから審議をしている。

南雲から見て右側の席には当事者の山峰と弁護士金の金田が、左側の席には当事者の網倉と弁護人の白波と小橋が座っている。

両陣営のリーダーとサブリーダーはいない。Cクラスリーダーの一之瀬は生徒会に所属しているので不参加でサブリーダーの神崎は参加しようとしたが接触事故の審議が原因で生じたBクラスとCクラスの揉め事の仲裁に入っているので、網倉と仲の良い審議に白波と小橋が参加したのだ。

一方、Bクラスリーダーの龍園は自身の素行は不利になると不参加を表し、サブリーダーの八幡は自室のベッドの上で下着姿のひよりと有栖に服を脱がされて情事に耽っているので不参加である。

そして競技中に網倉と山峰の近くを走っていた4人が呼ばれて今に至る。残り2人は網倉と山峰から15メートル以上離れていた為、参考にはならないと呼ばれていない。

先程まで当事者2人と弁護士が口論したが、山峰と金田の表情はいつも通りで、網倉

と白波と小橋の表情は怒りと焦りに満ちている。

山峰と金田は特に奇抜な事はしていない。以前八幡が石崎達に教えた「礼儀正しい態度を取る」と「相手が話しているときは絶対に口を挟まない。また自分が話しているときに口を挟まれたら穏やかに注意する」を忠実に実行しているだけだ。

南雲が審議を始めると宣言したら、金田と山峰と証人4人は立ち上がって南雲に頭を下げながら挨拶をした。対して3人は慌てて立ち上がって同じように挨拶をしたが、その時点で審議に対する心構えが見て取れて心象に差が出始めた。

更に審議が始まると金田は冷静に網倉に非があると話したが、当事者の網倉のみならず友達思いの白波と小橋は怒りながら金田の話を遮った。

金田は穏やかに注意したが、金田が網倉を攻める邪魔をした事に対する注意である。白波達の怒りは更に増して金田を責めた。

しかし金田の発言を遮った事で南雲から「言いたい事は金田が話してからにしろ。今後も改善しないのが続くならペナルティを課す」と注意を受けて不完全燃焼となつてゐる。

更に網倉が「山峰に背後から話しかけられた」と怒り混じりに言つても、山峰は「身に覚えがないです」とか「責任転嫁をしないでください」と冷静に礼儀正しく返して、却って網倉達の怒りを増幅させて怒鳴ってしまった。元々は八幡が相手の怒りを増幅

させるために教えた策であったので効果は靚面だ。

それに対して南雲は再度注意するが、フラストレーションが溜まりまくっていた白波が「友達を悪く言われて黙ってられません！口出ししないでください！」ってであろうことか審判役である南雲に言ってしまったのだ。

網倉と小橋が慌てて白波を止めて謝罪するが、南雲からは「次に同じようなことがあれば、Cクラスにペナルティを与えるように学校に申請する」と宣言して、今に至るのだ。

Cクラスからはしたら最悪の状況だ。審判役の南雲からの心象は最悪で、Bクラスの論陣を破れずにいる上、今から証人4人の発言タイムだが4人中3人が敵対しているAクラスとBクラスの生徒である。

しかし文句は言えない。腹は立つ事はあっても、生徒会から態度が最悪と思われるのは完全に自業自得なのだから。

そんな中、南雲に聞かれた証人4人の内、Bクラスの武川が一步前に出て口を開ける。「はい。私は山峰さんの声は聞いていませんし、微妙ですが網倉さんの声が聞こえました」

武川の言葉に網倉達は怒りを更に増すが、ペナルティの存在から踏み留まる。

「Aクラス西川ですが、私も網倉さんが話しているのは聞きました」

「Aクラス元土肥です。私も西川さんに同じです」

更なる発言に網倉は「この嘘つき！」と叫びたいが踏み留まる。今は証人の発言時間である。割って入ったらペナルティが与えられるのでギリギリで耐える。ただし机の上で握り拳を作つて震わせているが。

そして最後に櫛田の番になり、網倉達Cクラスの生徒が期待を抱く。櫛田なら正しい意見、山峰が何度も呼びかけて網倉は何も言っていない……と発現してくれる事を。

そんな中、櫛田が口を開ける。

「その……2人の間にいましたが、2人とも何も言つてなかった……と思います」

おずおずと話す櫛田。しかし網倉が我慢出来ずに口を開ける。

「嘘言わないでよ……2人の間に居たなら山峰さんの声が聞こえた筈でしょ！」

網倉は喋つてないと言つたが、山峰も喋つてない……中立の言葉を言つた櫛田に網倉の我慢の限界が迎えてしまった。これまでストレスが溜まつていた網倉からすれば中立の言葉にもストレスを感じてしまう。自分が無罪であると思つている以上、中立も敵対と同じである。

と、ここで櫛田が涙を流して両手で顔を隠す。

「ごめんね……でも本当に聞いてなかったの……走ることに集中してたからかもしれないけど、2人の言葉を聞いてないの……！」

泣きながら膝を崩す櫛田を隣にいた西川が支えて、西川は網倉を睨む。それに伴い、元土肥や武川や山峰や金田も網倉を睨み、南雲も蔑んだ眼差しを向ける。

「証人が話してゐる途中に懲りずに割り込む……気に入らないことがあつたら責める……帆船波は生徒会役員としては優秀だが、クラスリーダーとしての指導力に未熟さがあるようだな」

その言葉に網倉達の顔が真っ青になる。冷静に考えると明らかにペナルティ案件でしかない。しかも櫛田の意見は中立であるが、敵対意見に反対しないで中立意見に文句を言うなんて明らかに悪手ではない。

「さて、長引かせるのも面倒だし判決を下すぞ」

その言葉にCクラス3人は絶望感丸出しとなる。

「まず今回の接触事故についてだ。証人の話から網倉が怪しいが、絶対的な証拠はないのでクラスポイントの移譲は無しとする。山峰が参加予定だった推薦種目は3つでBクラスは代理として30万ポイント払っているが、Cクラスは来週末までにBクラスに30万ポイント支払うように」

しかし南雲の判決に安堵の気持ちが生まれる。クラスポイントが減る覚悟をしていたが思ったよりも遥かに軽いペナルティだ。クラス全員で割り勘すれば7500ポイントで済む。

網倉からすれば冤罪の賠償をするのは嫌だが、ここで文句を言ったら罰が重くなりそうなので我慢する。

そして……

「ただしお前達Cクラスの言動については目が余るから、今回の記録を学校に提出して別のペナルティを与えるように申請する。友達思いなのは良いが、審議のマナーくらいは守れ。以上だ」

強い口調でそう締め括ると3人は再び絶望に満ちた表情になる。

「「「ありがとうございます」」」

「ありがとうございます」

そんな中、金田と山峰と武川と西川と元土肥は頭を下げて礼を述べる。櫛田も涙声ながらも礼の言葉を告げる。

「「あ、ありがとうございます……」」

Cクラス3人は判決の重さ、自分達に非があるとされた悔しさから反応が遅れてし

まい、慌てて頭を下げる。しかし審議開始と同じように遅れてしまい、敗訴したから嫌々頭を下げている為、心象も悪くなる。

そんな3人を山峰達は冷たい眼差しで見ながら生徒会室を後にするのだった。

しかしこの時の網倉達は知らなかった。

とある厄災が自分達をペナルティから助けてくれるという未来があるというを。

## 事後（色々な意味で）

ギユルルルル

ベッドに寝転がりながら天井を見ていると腹が鳴る。顔を動かして壁にかけてある時計を見ると6時半だ。

「体育祭が終わったのは4時前後だし、随分と時間が経ったな」

「そうですね。今日は外食にしましょうか」

「折角ですからお寿司を食べたいです」

言いながら俺は左右の腕に抱きつくひよりと有栖を見ると2人は頷く。これだけなら昨日までと変わらない。二学期が始まってから2人とは殆ど同棲しているからな。

今回は昨日までとは大きな違いがある。それは……

「ただ……もう少し八幡君の温もりを直に堪能したいですね……」

「……帰ったらまた甘えても良いですか？」

俺含めて全員が身に何も纏ってない事だ。俺達の服や下着はベッドの上や床に散らばっていて、部屋には雄と雌の臭いがする。

結局俺は有栖とひよりに攻められて快楽に取り込まれてしまったが、その際に自身の欲求に昂りが生まれて、反撃とばかりに2人の服を脱がしてから思い切り攻めて喘がせまくった。

ゴムを持つてなかったから一線は越えてないが、一線を越えるギリギリまで求めあったのでゴムが有ったら間違ひなく越えていただろう。

（しかし俺の中にも獣がいるとはな）

俺は割とこういったことには積極的ではないと思っていたのだが、後半は俺の方が2人を攻めていた。どうやら俺の中にはまだまだ知らない存在がありそうだな。

「……好きにしろ。とりあえず飯を食いに行くなら服の洗濯とシャワーと換気をしてからな」

俺は上目遣いでおねだりしてくるひよりに頷いてから2人から離れ、2人をベッドから降ろしてから3人分の衣類とベッドのシーツを持って洗濯機に入れて洗う。

（とりあえず飯食ったらベッドシーツを3枚ほど買うか）

基本的にひよりと有栖は殆ど毎日寝泊まりをしているが、一度タガが外れたら、今後も情事に耽る可能性が高い。実際ひよりはさつき帰ったら甘えても良いか聞いてきたからな。それを踏まえるとベッドシーツを数枚買っておいた方が合理的だ。

俺はそのまま脱衣所にある棚からタオルを3枚取り出して洗濯機の近くに置くと、同

じタイミングで一糸纏わぬ姿のひよりと有栖がやってくる。

「窓を開けて換気はしています。ではシャワーを浴びましょう」

「そういえば八幡君とお風呂に入るのは初めてですね」

「そういやそうだな。2人が寝泊まりする際に毎回一緒に風呂に入らないかと誘ってきたが、毎回断っていた。」

しかし今は互いに身体を求め合ったからか、忌避感を抱く事はなかった。

俺は風呂場のドアを開けて中に入りシャワーからお湯を出す。

そしていざ臭いや体液を流そうとすると、ひよりと有栖が左右から俺の胸周りに抱きついて身体を絡めてくる。

「3人一緒に洗い流した方が早いですよ?」

「構いませんね?八幡君の本能は良いと言っていますよ?」

有栖がそう言つて俺の下半身を見てくるが、逃げれるのは無理だな。

そう思いながら俺はシャワーを使って3人いっぺんに身体を洗い流し始めるが、シャワーの熱い水を浴びても2人から伝わってくる柔らかな感触と温かな温もりはハッキリと伝わってくる。この感触と温もりは先程何回も堪能したが、手放したくない気持ちで湧いてくる。

今後俺達の間係がどうなるかわからないが、叶うなら今と変わらない生活を送りたい

ものだ。

俺はシャワーで身体を流しながら、俺に抱きついたまま離れない2人に初めて芽生えた気持ち……愛しさを抱くのだった。

2時間後……

「ん？何か騒がしいな」

ケヤキモールにて俺は横から騒ぎ声が聞こえてくるので目線を横にズラす。

シャワーを浴びてから夕食に寿司を食って、家具屋でベッドシーツを3つ買って、コンビニで飲み物とかお菓子を買って（ひよりと有栖が避妊具を買おうとしたが慌てて止めた）、帰路につこうとしたタイミングで騒ぎ声が聞こえてきて今に至る。

「面白そうな気配を感じますね。行きましようか」

有栖は楽しそうに笑いながらそう言ってくるが、お前は本当に火のある所が好きだな。

「ヤバそうになつたら直ぐに退くからな」

そう言つてから騒ぎ声がある方向に向かうと……

「麻子ちゃん！ダメだよ落ち着いて！」

「離してよ帆波ちゃん！どうしても許せない！」

一之瀬が網倉の腕を掴んで、網倉が涙混じりに怒りを宿した絶叫を上げながら龍園を睨んでいた。

龍園の背後には山峰と金田と武川が、一之瀬の後ろには白波と小橋がいる。もしかして審議が終わつたばかりか？

と、ここで龍園が俺達に気付き、満面の笑みを浮かべながら手を挙げてくる。

「おう比企谷。仲良くしてるのは良いが、馬鹿が理不尽な逆恨みをしてきて困つてるからちよつと助けてくれや」

「ふざけないで！悪いのはそつちじゃん！適当なことを言わないでよ！」

龍園の言葉に網倉が激昂するが、一之瀬のみならず小橋が止めに入る。

「逆恨みつて審議関係か？何か問題が起こつたのか？」

「まあな。接触事故についてだが、絶対的な証拠がないからクラスポイントの変動は無しで、山峰の欠場によつて生まれた代理費用……30万ポイントの支払いをCクラスがウチにすることになった」

「まあそれくらいなら妥当でしょう。しかしこの状況、網倉さんが怒っているのは他にも理由がありますよね？」

有栖がそう聞いてくるが俺も同意見だ。確かに網倉からしたら冤罪をふっかけられた挙句30万の支払いってのは納得いかないだろうが、ペナルティとしては軽い。クラスの皆でポイントを出し合えば1人あたり7500ポイントで済むからな。

しかしそれだけで暴力に走ろうとするとは思えない。

「まあな。金田によればコイツら、審議中にウチのクラスや証人が発言した時にも割って入って叫んだり、あろうことか副会長が注意したら逆ギレして怒鳴ってペナルティを食らったんだよ」

「なるほどな。須藤の時みたいに審判者に当たったが、今回は当たり過ぎたって感じか」  
「その通りです。審議とは審判者……この場合は副会長に許可を得てから話す必要があります。相手が話している時は黙って聞き、反論は副会長から許可を得てから話すのが審議のマナーです。最低限のマナーすら守れないでペナルティを受けたからといって八つ当たりはやめてほしいですな」

金田は眼鏡をクイッと上げて網倉に蔑んだ眼差しを向けると網倉のみならず白波も前に出るが、龍園が獰猛な笑みを浮かべながらポキパキと拳を鳴らすとビビる。

「龍園君。ここで暴力を振るったら学校に問題提起をするからね？」

「軽くビビらせただけで実際は振るわねえよ。俺達はCクラスと違って卑怯者じゃないからな」

いや、お前にだけは卑怯者って言われたくないだろうな。これには一之瀬ですら表情を歪ませていて、有栖は楽しそうに笑っている。

「龍園、お前は必要以上に挑発するな。場合によつては凶行に走る奴が出るかもしれないだろ。俺の怪我を忘れたか？」

「そーいや比企谷は由比ヶ浜から階段から落とされかけたんだつたな。確かにお前が言えれば信憑性はあるし、やめとくか。Cクラスに由比ヶ浜みたいなクソい奴がいらないとは限らないしな」

「ふざけないで！ウチのクラスの由比ヶ浜さんみたいな精神障害者はいない！」

白波がブチ切れるが、お前も大概クソい事を言ってるな。

そう思っていると……

「ふざけんなし！誰が精神障害者だし！」

真横から聞きたくない声が聞こえてきたので見れば由比ヶ浜が怒りを宿しながら白波に詰め寄ってくる。

「人を馬鹿にするなんて最低な事じゃん！心の暴力を知らないなんてガキなの?！」

いや、お前が言うか？

「っ！貴女がそれを言いますか?! 体育祭ではギャーギャー騒いだり、碌な理由もなく人を階段から突き落とそうとしたり、キモいキモいとしよっちゅう口にする貴女が!」

「はあ?! キモい人にキモいつて言うのは当たり前じゃん! 体育祭だつてこーじんが頭が残念つて言ったのが悪いし、ヒツキーはゆきのんを殴ったから階段から落とそうとしたのは正しくて、あたしは悪くない! 生徒会長が馬鹿だから停学になっただけだし!」

うわ、コイツとうとう生徒会長を馬鹿呼ばわりしやがったし。どんだけ責任転嫁してんだよ。つーかこーじんつて綾小路かよ? 相変わらずネーミングセンスはないな。

これには龍園や有栖や一之瀬ですら啞然とした表情を浮かべ、さつきまでウチのクラスと敵対していた白波達も俺に同情の眼差しを向けてくる。

「龍園君。貴方が余計なことを言った事がキツカケで面倒な存在が来たじゃないですか」

「あー……悪かったよ、次からは気をつける」

有栖のジト目に龍園はバツの悪そうな表情を浮かべながら有栖に頭を下げる。

あの唯我独尊の龍園が同じくらい唯我独尊の有栖にだ。そのくらい由比ヶ浜の存在は厄介のようだ。

そう思っていると……

「それなのに精神障害者なんて言うなし!」

パアンツ　パアンツ

「きやあつ！」

「千尋ちゃん！」

由比ヶ浜が白波に往復ビンタをして地面に倒れかかる。しかし更に追撃しようとするので割つて入り、右手で由比ヶ浜の手を掴む。

「余計な事をすんなしヒツキー！」

「テメエこそふざけた事をすんじゃねえよ。事実言われたからつて逆ギレするな」

言いながら俺は他の面々に帰るように目線で促す。馬鹿が掻き乱した以上、これ以上揉め事を起こらないで欲しいのが本音だ。

「そこまでにしろ。これ以上の暴力行為を止めさせて貰う」

と、ここで堀北会長が書記の橘先輩を連れてやってくる。

「邪魔すんなし！そもそもアンタがあたしを停学にしたのがそもその原因じゃん！」

「違うな。お前が比企谷を階段から突き落とそうとしたのが原因だ」

「ゆきのんを傷つけたからだし！そもそもヒツキーって中学時代にしよつちゆう虐められてたから今更じゃん！」

いや、そういう問題じゃないだろう。

「そうか。なら聞くぞ。Dクラスの生徒に虐められているお前を俺が傷つけても、今更

だから悪くないと受け入れるのか？」

「はあ！女子を階段から傷付けようとするなんて何考えてるの！？死ぬば！」

『……………』

余りにも身勝手な発言に死ぬ発言に堀北会長ですら絶句させる。馬鹿につける薬はないって諺があるが本当のようだ。

「…………もう良い。お前達は解散しろ。後は俺が対処する」

堀北会長が俺達に帰るように促すと俺達は丁寧な一礼をする。マジでありがとうございませう。

龍園ですら一礼しているし、本気で感謝の気持ちを抱いているのだろう。

俺は碌に歩けない有栖を抱き抱えて早足で寮に向かう。龍園は金田と山峰と武川を連れてレストラン街に、一之瀬と白波と網倉と小橋はスパーの方へ去る。背後からはギャーギャー騒ぎ声が聞こえてくるが気にしない。

「…………疲れました」

「八幡君は中学時代からあんな風に絡まれていたのですか？」

「まあな」

元々ウザい絡みをしてきたが、修学旅行以降は拍車がかかっていたのはハッキリ覚えている。

「苦勞してますね。とりあえずストレスが溜まったので、帰ったら思い切り甘え合いましよう」

「そうですね。避妊具は買えなかったので本番は出来ませんが、思い切り愛してください」

「……ああ」

俺も精神的に疲勞したので快樂に溺れたいからな。つか何で体育祭で運動した時よりも疲れるんだよ……

そう思いながら俺達はため息を吐きながら寮に戻るのだった。

その後、部屋に戻った俺達は早速新しいベッドシートをベッドに被せてから3人で甘え合ったが、明日が休日である事を良いことに翌朝まで甘え合ってしまった、買ったばかりのベッドシートの1枚を洗濯する羽目になってしまった。

また接触事故における審議においてCクラスのマナー違反のペナルティについては、Cクラスのクラスポイントを50だけBクラスに渡す事になった。

それだけならCクラスは大敗だが、由比ヶ浜の白波に対する往復ビンタが原因で由比ヶ浜は1週間の停学になり、Dクラスは50のクラスポイントの借金をして、Cクラスに50ポイント渡す事になった。

Aクラス 1114ポイント

Bクラス 766+50=816ポイント

Cクラス 671+50+50=871ポイント

Dクラス 0ポイント（実質マイナス50ポイント）

うん、とりあえずDクラスはドンマイ

## 中間試験

体育祭が終わると少しずつ寒くなり、ブレザーの着用が必須になる中、中間テストも終えた。まだ結果は返ってきてないが馬鹿はかなり緊張している。まあ赤点を取ったら退学だからな。

そう思いながらも俺はベッドから身体を起こすと両腕に重みが伝わってくる。左右を見れば……

「おはようございます、八幡君」

ちゅっ　ちゅっ

ひよりと有栖が一糸纏わぬ姿で左右の頬にキスをしてくる。

体育祭が終わってから色々な事があつたが、一番変わった事と言えばひよりと有栖が本格的に俺の部屋に住んでいる事だろう。体育祭前は週に4、5日泊まっていたが、今では毎日泊まっている。

で、2人は競うように俺に甘えてきて、毎日理性の崩壊と戦っている。

おはようのキスやおやすみのキス、一緒にお風呂や裸で就寝、好き好き言ってくるな

んか当たり前、有栖が夕食担当の時は必ず精力がつく料理だし、ひよりが朝食を作る時は裸エプロンで作るし、俺のダウンロードしたエロ動画を見て何処が好きなのか聞いてきたりと、様々な手段で誘惑をしてくるのだ。

一応一線は越えてないが何度も越えそうになってビクビクしてしまった事もあるくらいだ。

「そういや今日は朝から生徒会役員の交代式だっけ？」

「そうですよ。八幡君は生徒会役員に入る予定ですか？」

「ねえよ。柄じゃない」

俺は人の上に立って支配するより、人の下を位置取って転ばせる方が似合っているからな。

「有栖は？」

「そうですね。会長の座には興味がありますね」

「だろうな。有栖の性格的に誰かの下につくなんて考えられないし。」

「それより八幡君。おはようのキスをください」

「私にもしてください……」

2人は目を瞑って唇を突き出してくるが、これが悩みの種である。キスをする事は慣れているが、どっちを先にするか毎回悩んでしまう。ひよりを先にしたら有栖が、有栖

を先にしたらひよりが拗ねてしまうからな。

かといってどっちか一人をずっと先にする訳にはいかない。以前有栖に毎朝先にキスをしたら、ひよりが涙目で私を先にしてくれっておねだりしてきたし。

(さて、どうするべきか?)

俺はどっちを先にするか頭を悩ませる。以前俺達と同棲している事を知っている数少ない人間の一人である龍園に相談したら「死ぬ」って言われて膝蹴りを鳩尾にぶちこまれたからなあ……

俺は悩んだ末に有栖に先にしたが、案の定ひよりが拗ねてしまった。

宥めた結果、朝食を食べる際に裸エプロン姿のひよりを膝の上に乗せる事になって、今度は有栖が不機嫌になってしまった。放課後にどうやって有栖の機嫌を直すか考えないといけない。

その事を龍園同様に俺達と同棲している事を知っている綾小路と軽井沢に電話で相談したら、軽井沢に「知るかあああつ！」と一蹴された。解せぬ。

綾小路は「たい焼きでも奢ったらどうだ？」なんて言ってきたが、アイツの考えは全くわからん。

ちなみに有栖に相談した結果、放課後にデーパーキス15分で許してやると言われて了承したら機嫌が直りました。

2時間後……

「……しかし近々大革命を起こすと約束します。実力のある生徒はとことん上に。反対に、実力のない生徒はとことん下に。この学校を真の実力主義の学校に変えていきたいと思えますので、どうぞよろしくお願いします」

体育館にて、新しく生徒会長になった南雲先輩の挨拶に体育館はしんと静まりかえる。

生徒会長の交代式を見ていたが、南雲先輩は正式会長になった直後にこれまでの体制をぶっ壊すと宣言したから当然つちや当然だけど。

で、生徒会役員制度についても任期を在学中無期限、卒業まで継続出来るようにして総選挙の制度や規定人数の制限を撤廃し常に受け入れ体制にして、同時に任期中に不適

格と判断された人材については除名する規約も作るってぶっ飛んだ制度だ。

そう思った直後、2年生がいる場所と1年Dクラスがいる場所から拍手喝采が巻き起こる。逆に3年生の方にはあまり元気がない。上級生同士でも、色々としがらみがあるのだろう。

しかし1年Dクラスからの拍手は半端ないが当然だろう。Dクラスの中には学年でも優秀な生徒もいるが、由比ヶ浜や須藤のようなお荷物のお所為ですつと最底辺で燻っているからな。Dクラスで自分に自信がある生徒からしたら南雲先輩が掲げる体制は希望だろう。

特に由比ヶ浜マジで嫌われてるからな。白波に往復ビンタをした事で停学を食らってDクラスに借金を背負わせた事がDクラスを爆発させた。

更には白波に暴力を振るった事でCクラスとも決裂したのだ。一之瀬は俺達と同盟を結んだわけではないが、CクラスはDクラスを敵視してるので、実質的にDクラスは四面楚歌ならぬ三面楚歌状態だ。

しかも由比ヶ浜の奴、停学が明けてからクラスメイトに責められたら、学校側に虐められたから虐めた奴を退学にしろって訴えたのだ。当然棄却されたが、それがまた由比ヶ浜をギャーギャー騒がせる要因になったからな。マジでDクラスには同情する。

実際今の体育祭が終わって11月1日に発表されたクラスポイントは……

Aクラス 1103ポイント

Bクラス 794ポイント

Cクラス 659ポイント

Dクラス 0ポイント(実質マイナス50ポイント)

と、3位との差は700ポイントとなっている。5月の時点で3位だった俺達との差は490ポイントである事から如何にポロポロになっているのかがよくわかる。

そして南雲先輩の案が通ればAクラスにいる雑魚も他人事じゃないだろうし、中々カオスな展開になるかもしれない。

まあ俺はどちらでもないだろう。雑魚ではないと思うが恩恵を受けれる程強者って訳じゃないのだからな。

そう思いながら俺は体育館を後にして自分の教室に戻る。

そして座って待機していると坂上先生が巨大な紙を持って入ってきて、それに伴い馬鹿に緊張が走る。

「それでは中間試験の成績発表をします。わかっていると思いますが平均点の半分以下の点数は赤点で、退学処分とします」

坂上先生の言葉に空気が重くなる中、紙が黒板に貼られていく。最初は成績最下位の

名前と点数が表示されるが……

「良しっ！これなら大丈夫だ！」

最下位は石崎だが、点数は全科目45点だった。これまでの平均が大体65点くらいなので赤点はまずないだろう。それからどんどん成績下位の生徒の名前が見えてきて、やがて全員の成績が発表される。

俺の成績は500点中430点で3位だった。国語と社会が満点で英語が95点だったが、数学が70点で理科が65点だった。この学校に入るために理系も死ぬ気で勉強したが、元々に合わない科目なのでこんなものだろう。

で、1位はひよりで2位は金田だ。この2人は毎回安定して全科目好成绩を残しているから羨ましい。

「おめでとうございませす。赤点はありません」

1番上には平均点が書かれているがどの科目も65点前後であり、赤点は33点になるが40点以下の成績を出した生徒は0だ。

坂上先生の言葉に安堵の空気が生まれるが、坂上先生の表情は真剣なままだ。また何かあるのか？

「しかし気を緩めないように。来週、期末テストへ向けて8科目の問題が出される小テ

ストを実施します」

「げ、中間終わったばっかりなのに!？」

勉強が不得意な石崎が嫌そうな表情になるが、お前は少しは勉強する習慣を身につける。

「まず小テストは全100問の100点満点ですが、その全てが中学生レベルの問題、基礎の習得状況を確認する試験であり、ペナルティはないです」

そんな風に言っているがこの学校では意味のないイベントは無いし、何かしら裏があるのだろう。

「しかしこれが期末テストに大きく影響を及ぼします」

やっばりな。

「影響?もつと分かりやすく言え」

相変わらず龍園はタメ口で命令するが、坂上先生は慣れたのか表情を変えない。

「まず前提として、その小テストの結果に基づいて、クラス内の誰かと2人1組のペアを組んで、期末テストではそのペアと一蓮托生となって挑んでもらう」

ペアと組んで試験に臨むのだと?

「つまり片方が赤点だったらもう片方も退学って事すか?」

俺が気になったので質問すると坂上先生は頷く。

「ええ。試験科目はこれまでとは違って8科目各100点満点、問題数は各科目50で合計400問であり、赤点は2種類ある。1つは全科目に最低ボーダーの60点が設けられています。60点未満なら退学ですが、あくまでペアの合計点から判断します。つまり比企谷君と石崎君がペアとしたら、石崎君が0点でも比企谷君が60点を取ればセーフです」

あ、それなら楽勝だな。これまでにどの科目でも60点以下はないし、馬鹿がペアでも3、40点は取ってくれるだろうし。

「そしてもう一つの赤点基準はペアの総合点においても存在して、具体的な点数はまだ決まっていないがペアの総合点が700点前後がボーダーラインだ」

つまり全科目60点ギリギリではダメって事だな。総合点の赤点ラインを700点としたら、1科目においてペアの2人で87・5点取らないといけないようだ。

「ボーダーを破ったペアは退学だ。この試験は毎年行われているが毎年1、2組が退学となる。嘘だと思ふなら上級生に聞いてみると良いでしょう」

これは脅しても何でもなく事実だろう。つかこの学校退学好きだな。

「ペアの決め方はどうやって決めるんですか？」

「決め方は小テストの後に」

つまり小テスト前に決め方を見抜かないとダメって事か。まあ大体予想は出来るけ

ど。

「それからもう一つ。君達には別の側面から課題に挑んでもらう」

「え?! まだあるんですか?!」

「真鍋が嫌そうな声を出すが、改めて口にするって事は絶対に面倒だろうな。」

内心警戒しながら坂上先生を見ると……

「今回の期末テストは君達生徒が作成して、他のクラスに出題するものとなっている」  
ほら、やっぱり面倒じゃねえか。由比ヶ浜の次くらいに面倒くさい存在だな、オイ。

## 説明

「今回の期末テストは君達生徒が作成して、他のクラスに出題するものとなっている」

坂上先生の言葉に教室に騒めきが生まれるが、俺も驚いた。まさか他クラスの期末試験を教師ではなく生徒が作るなんて予想外過ぎるわ。

「坂上。その様子じゃ全クラスが問題を作るみたいだが、俺達の作った問題はどのクラスが解くんのだ？」

「君達の作った問題は3つのクラスの1つのクラスに割り当てるといふものだ。そして問題が割り当てられたクラスと、自分達のクラスの総合点を比べ、勝ったクラスが負けたクラスから50ポイントを得る」

マジか。そうなると普段のテストより難しくなるだろうし、ちょっと厄介だな。しかもテストは8科目あり、各50問だから合計400問作らないといけない事になるし、面倒だなオイ。

要するに相手を作ったテストにおいて、学校が用意する赤点ラインである各教科60点以上をペアで維持しつつ、ペアで総合点を700点以上にして、更にクラス全体の総合点で対戦相手のクラスの総合点と競い合うのか。

「そして直接対決、BクラスがCクラスに問題をぶつけ、CクラスがBクラスに問題をぶつけるような直接対決になった場合、クラスポイントは一度に100動く。また可能性は極端に低いが総合点が同じだった場合、ポイントの変動はない」

それを考えるとCクラスとDクラスはウチを攻撃するだろう。Cクラスは元々Bクラスだけあつて学力はウチより高いし、Dクラスは学力的にAクラスとCクラスには勝てないし。

「テストについては完成したら私に提出して貰う。そこで習っていない範囲の問題が有れば受理は不可で君達に返却する。それを繰り返して君達はテストを完成させてもらおう。また完成しなかった場合、我々が作成した問題を攻撃クラスに渡すが、難易度は低いものだ」

まあそうだな。大学の問題とかガンガン入れられたら退学者が続出するだろうし、問題が完成出来なかったクラスには当然の扱いだ。

中々ハードなスケジュールだろう。期末テストまで1ヶ月ちよいだが問題の作成と赤点をとりそうな馬鹿共学力向上を同時にこなす必要があるが、問題の作成は馬鹿じや

無理だから学力優秀な生徒がやらないとダメだ。

しかし学力優秀な生徒を問題作成に割き過ぎたら、馬鹿共の成績向上が疎かになる。  
(ここはAクラスとの同盟を活かす時だな)

ウチのクラスは学力が高くないし、馬鹿正直に勉強するだけじゃ勝てないからな。

「問題の作成には教師や上級生に相談したり、図書館の参考書を参考にしたり、視聴覚室のパソコンを使うなど好きにすると良い。またクラスの指名については小テスト前日に私が君達から希望を聞いて上に報告をする。指名クラスが被った場合、我々がクジを引いて決める……これで説明は終わりだ。後は君達で考えることだ」

坂上先生はそう言って教室から出て行く。同時に騒めきが生まれるが、龍園が前に出て教卓に座ると静まり返る。

「さて、今回の試験だが……比企谷」

「何だ？」

「今回の試験についてはお前に全権を預けるから好きにやれ。暴力を使えない試験ではお前の方が使えるからな。クラス合同貯金のポイントもクラスメイトも好きに使い」

いきなり俺に丸投げしたな。

「それは命令か？お願いか？」

「命令だ」

なら俺は従うしかない。クラスの王は龍園だからな。

「了解した。好きにやらせて貰う」

言いながら俺は前に出て龍園の横に立つ。その際にひよりが小さく微笑みながら手を振ってくるのが可愛らしい。

「んじや早速だが指名クラスについて話すぞ。Dクラスは学力的に、CクラスはBクラスに返り咲く為にウチに攻撃を仕掛けてくるだろう。これはわかるな?」

俺が確認すると全員が頷く。

「結構。で、今回俺としては一之瀬率いるCクラスと直接対決を望んでいる」

その言葉に騒めきが生じる。龍園は楽しそうに笑っていて、ひよりは俺と目が合うとクスリと笑ってくる。やっぱり可愛いな。

「いやいや。Cクラスには勝てないでしょ。今回の中間は知らないけど、1学期の期末じゃ平均点が10点近く離れたって噂だけだ」

「正確には8・9点だが、まあ結構離れているのは事実だ。よって今回の試験だけを考えたら学力が低いDクラスと戦うのがベストで、同盟を組んでるAクラスと手抜き合戦して引き分けを狙うのも悪くない」

伊吹の質問に頷く。実際Cクラスは格上である。

しかし……

「けどな、格下ばかりに挑んでAクラスに上がれるのか？」

俺は一段だけ声を低くして話しかけるとクラスに静まる。

「Aクラスと組んだ以上、Bクラスで卒業は出来るだろう。Dクラスは由比ヶ浜という最高の厄病神がいるし、Cクラスについて龍園と有栖が嬉々として一之瀬をおもちやにするだろうからな」

「まあな。アイツの芯を折って肉奴隷にするのも悪くねえな」

龍園はケラケラと笑うがコイツなら本気でやりそうだな。

「悪趣味だな」

「そりゃ銀髪貧乳を好むお前からしたら巨乳を好むのは悪趣味かもな」

「黙れ龍園」

龍園の言葉にクラスの大半がひよりを見るが、当のひよりは蠱惑的な表情で俺を見つくる。こりや帰ったらエロい事をさせられるかもな。

「こほんっ……話を戻すがBクラスで卒業は出来るだろうがAクラスでの卒業は難しい。理由はシンプル、兵隊の質がこつちより上だからだ。この学校は普通の学校ほど学力の価値は高くないが、無価値って訳じゃない。その学力を疎かにしてAクラスに勝てるほど甘くない」

Aクラスとウチを比較すると身体能力はウチが僅かに上だが、学力は向こうが数段上

だ。將軍である龍園と有栖にそこまで差がない以上、兵の質が重要である。

「それに2年生や3年生は退学者を10名以上出しているが、これは2年生になってからの試験がハードになる事を意味する」

「つまり比企谷氏は今回の試験ではクラスポイントを得ることよりも「2年生以降の試験に備えて各々のスキルアップ」と「学力下位の生徒に勉強する習慣を身につけてもらう」ことを優先するという訳ですね」

金田がわかりやすい説明をしてくれるので頷く。

「そうだ。その為には格上に挑戦するべく、本気で勉強に取り組むのが1番だ。そうすれば赤点の確率は下がるし、勉強する習慣や効率的な勉強法を会得できれば、今後の定期考査や学力重視の特別試験で焦らずに対処出来る」

今回負けても次回に繋げられるなら利益はあるし、まだ1年生なので巻き返しは余裕だ。重要なのは一回一回の勝負に拘るのではなく、最後にAクラスに上がる事だ。

「以上が俺がCクラスに挑む理由だ。反論があるなら聞くぞ」

そう言つて周りを見回すが反論はないようだ。

「結構。じゃあ早速だが大まかな説明をするぞ」

前置きをしてから作戦を説明する。クラスメイトに対する対応は説明だけで良いが、この後はAクラスと上級生に対する交渉をしないとイケないからなあ。忙しくなりそ

うだ。

目標としてはCクラスと直接対決して勝つ事だが、やれる事は全部やっておく必要がある。小細工抜き of 学力勝負で一之瀬のクラスを倒せればクラスの士気が大きく上がり、成長に繋がるからな。

そう思いながら俺は説明を済ませてから昼休みに有栖と話す機会を設けるべく携帯を操作してメールをするのだった。

## 火花

「お待ちせしました」

昼休み、校舎裏のベンチにひよりと座っていると有栖がやってきて微笑みを浮かべてくる。

「気にすんな。とりあえず先ずは座ってくれ」

「はい。失礼します」

有栖は俺の左隣に座る。右隣にはひよりがいるが、第三者（特に男）に見られたら面倒な事になるだろう。

「では昼ごはんを食べる前に……んっ」

有栖はそのまま俺にキスをしてから弁当箱を開ける。数分前のひよりもそうだが、昼休みの度にキスをするのは恥ずかしいから控えて欲しい。幾ら自室で何百としてようが第三者がいてもおかしくない場所だとなあ……まあ体育祭では全校生徒の前でキスをされたけど。

そう思いながら俺も弁当箱を開けてひより特製の弁当を口にしますが、変わらぬ美味さ

で安心するな。

「それで八幡君。今回の試験についてお話があるそうですね」

「ああ。今回Cクラスと戦いたいんだが、AクラスはDか？」

「そのつもりです。予定としては全ての科目において50点分は小学生レベルの問題にして、残りの50点分は中堅以上でないと解けない意地悪問題を作るつもりです」

それ完全に由比ヶ浜を残す為だろう。有栖からしたら由比ヶ浜に生き地獄を長く与えたいので、わざと退学者を出さないように仕込むようだ。

「八幡君はCクラスと言いましたが、格上に挑む事で2年生以降に備えてますね」

「まあな。タイマンになったら今のBクラスじゃAクラスに確実に負けるからな」

「ふふっ。いざとなったら私を引き抜けば良いじゃないですか。私を八幡君の……お嫁さんにしてくれるなら龍園君の下につくのも吝かではありませんよ」

有栖は恥ずかしそうに俺を上目遣いでそう言うってくるが破壊力が半端なくて変な気分になってくるな。

「ダメです。八幡君のお嫁さんは私になります。坂柳さんはセックスフレンドまでです」

ひよりがムツとした表情で俺の右腕に抱きつくくと、有栖が額に青筋を浮かべて左腕に抱きつく。

「戯言を。愛人までなのは椎名さんでは？」

バチバチと火花を散らす2人。やめて、仲良くして！

内心ヒヤヒヤしながら2人の火花が無くなるのを待つ。余計な口を出したら面倒な事になるからな。

「こほんっ。話が逸れましたが、Bクラスの方針に分かりました。Cクラスに挑むならそれは構いません。しかしわざわざ呼び出すことは何かしらお願いがあるのですね？」

「ああ。同盟を組んだ際に条件としてこっちの勉強指導つてのはあつたが、今回も頼みたい。それと問題作成の話だが、お前がAクラスの問題を作ると思うが、前金20万、後金50万でウチのクラスのも全問作成出来るか」

今回の厄介事は問題作成だ。問題作成が出来る生徒は限られていて、そっちに意識を向け過ぎたら学力向上が疎かになる可能性がある。よつてAクラスに代理作成を頼みたいのが本音だ。

ただその場合、タダつてのは理不尽過ぎる要求だからポイントによる取引を持ちかけた。

「合計70万ですか……80万ですね」

10万上乘せか……まあ仕方ないか。元々100万までは出す予定だったし

「前金20万、後金60万で良いか？」

「結構です。200万は今頂き、600万は問題作成後に八幡君達がチェックして問題が無かったら支払ってください」

「わかった」

俺は携帯を取り出して優待者試験で作った仮IDを見る。そこには5600000 Pptと表示されている。優待者試験で稼いだ200万とクラスメイトから徴収している3ヶ月分のポイントがあるが、そこから20万だけ有栖に送る。

「確認しました。問題400問の作成は任せてください。勉強会は今日の放課後からですか？」

「明日からですね。今日はクラスで下位の生徒の弱点と得意分野の正確な調査をする予定です」

「それと協力者の増加だな。中には力を持て余している人もいるからな」

「……ああ、そういう事ですか。しかし八幡君は龍園君のように過激な手段は取りませんね」

「別にルールギリギリの作戦でも良いが、今回は露骨な妨害抜きで挑むつもりだ。仮にCクラスと直接対決になって小細工抜きで勝てたら大きな利益が手に入るからな」

卑怯な手を使って負かしても向こうは「Bクラスが勝てたのは卑怯な手を使ったからで真つ向勝負なら負けない」と判断するだろう。

しかしこつちが真つ向勝負で勝てば「Bクラスは王道を使おうが邪道を使おうが自分達よりも上」と思い知らせられるからな。

予定としては今回王道のやり方で勝って、次回に邪道のやり方で勝ってポイントを筆取り取りたい。

「勝つ為にも全力で八幡君をサポートしますね。八幡君にとって一番になりたいですから……」

ひよりは恥ずかしそうに頭を俺の肩に預けてスリスリしてくる。可愛過ぎるなオイ。「どの口が言っているのやら。近いうちに格の差を教えてあげましょう」

有栖は張り合うように蠱惑的な表情浮かべながら俺の膝をさすってくる。エロ過ぎるなオイ。

結局俺は昼休みが終わるまで有栖に弄ばれて、ひよりに甘えられるのだった。

「ではHRを終了する」

帰りのHRが終了して坂上先生が教室から出て行くので、俺は黒板の前に立つ。

「帰る前に良いか？今日は勉強会は開かないから解散して構わない。ただ今日中に今後の方針から決めるから、成績下位の奴は明日以降は可能な限り勉強会の参加に依じてくれ。部活に所属してる生徒も休む事に寛容な部活なら休んでくれるとありがたい。それとひよりと金田はちよつと残つてくれ」

そう言うのと大半が頷いてから教室を後にする。

「それで比企谷氏。重要なのは下位層の生徒の成績向上についてですか？」

金田が質問するが今回勝つ為にはクラスの下位層のレベルを上げないといけない。

実際上位だけ見ればどのクラスにも大差はない。不良品と呼ばれるDクラスにも学力が高い生徒がかなりいるし。

しかし何故クラス間に差があるのかというウチとDクラスには馬鹿が多いからな。

実際ウチのクラスの最下層人数は45〜50点であるが、AクラスとCクラスの最下層人数は55点〜60点とかなり差がある。

もちろんウチの中堅も頑張らないといけないが、下層の生徒の学力をどれだけ上げられるかが勝負のカギだ。

「ああ。まずは職員室に行つて試験の答案を貰いに行き、弱点調査だ」

基本的に試験の答案用紙は返却されずに結果だけの発表だが、おそらく職員室に行けば回収出来るだろう。もしくはポイントを払うかだ。

俺達は職員室に向かうと、丁度坂上先生が職員室に入ろうとするので話しかける。

「坂上先生。ちよつと良いですか？」

「おや、早速試験に関する質問かね？」

「そんなところです。けど場所を変えてもらえませんか？職員室には茶柱先生や真嶋先生や賞味……星之宮先生がいますから他クラスに漏れる可能性がありますので」

危ねえ。思わず賞味期限切れって言いそうになつちまつた。

「わかりました。それと比企谷君。星之宮先生の事はちゃんと星之宮と呼びなさい。真嶋先生は口を滑らせて何回か血祭りになっていきます」

真嶋先生……強く生きてください。

そう思いながら俺達は生徒指導室に案内される。噂じやAクラスになれば教師としての評価も上がるらしいので、教師によつては生徒に肩入れする可能性も高い。特にどつかの賞味期限が過ぎてる先生とかは。

「では聞きましょうか」

「はい。ではウチのクラスの生徒の答案用紙、1年Cクラスと3年Dクラスのテスト結果が書かれた紙を入手は可能ですか？」

俺が欲しいのはこの3つだ。欲を言えばCクラスの生徒の答案用紙も欲しいが、流石にそれはポイントを出しても無理だろう。

「3年Dクラス……なるほど。3年Dクラスの成績優秀者を教育者として雇うのですね」

「ええ。彼らはもうAクラス行きを諦めているでしょうし、貧困生活を送っていますから」

3年は後半年もしないで卒業だが、AクラスとDクラスの間には10000ポイント近く差があるし、Dクラスの生徒は勝負を諦めて学生生活を満喫したいと考えていてもおかしくない。そこで俺は成績優秀者を教師役として雇いたいのだ。その為に成績結果の書かれた紙が欲しい。

「結論から言いますと可能です。ただし、自クラス的答案用紙はタダですが、他クラスの成績結果の書かれた紙についてはポイントが発生します。また他クラスの生徒の答案用紙はポイントを積んでも買えません」

「やっぱりそうですか。で？成績結果の紙は幾らですか？」

「1クラス10000ポイントです」

「んじゃ20000払います」

言いながら携帯を渡すと坂上先生がすぐに操作して返してくる。

「確かに受け取りました。では直ぐに受け取りたいですか？」

「はい。ただ第三者に見られたくないので、坂上先生が職員室で準備してこつちに持ってきてくれませんか？」

教師を顎で使うのは申し訳ないが念には念だ。

俺の頼みに坂上先生は不満そうな表情どころか笑みを浮かべている。

「用心深いのは結構です。少し待っていてください」

そう言うってから部屋から出て行くので俺は2人を見てくる。

「さて、坂上先生が資料を持ってきたら、お前らは図書館の専用ブースで自クラスの馬鹿共とCクラスの下位の情報から分析を頼む。俺は3年Dクラスに交渉をする」

「わかりました。僕と椎名氏は今後の対策についてはしっかり考えておきます」

「頑張りますね」

「ああ。頼りにしてる」

「それと比企谷氏。今回は妨害などはいますか？」

「しない。今回は基本的に小細工抜きの本真の勝負だ」

俺としては2年に上がる前に王道でも邪道でも戦えるクラスにしたいし、ここらで王道勝負をしたいからな。

そう返してから雑談していると坂上先生が戻ってきたので、俺達は速攻で資料を読み

始め、各々で動き始めるのだった。

## 交渉

「……では契約完了ですね。では前金を払いますから確認してください」

俺は携帯を操作して3年Dクラスの生徒にポイントを送付する。

「確かに2万入ってる。明日から力になろう」

「はい。よろしくお願いします。では……」

俺は一礼してから廊下を後にする。これでノルマの4人との交渉が成功した。Dクラスの中でも学力優秀な4人は俺の交渉に好意的に受けてくれた。

まあクラスポイントが80しかない状態で前金2万、後金4万、ウチの馬鹿共の成績の伸び次第では最大で4万のボーナスを与える契約を交わしたからな。全員やる気を出していた。

そして全員指導力もあるだろう。Dクラスって事は赤点をとりそうなクラスメイトに勉強を教えた経験があるだろうし。

そう思いながら俺は図書館に向かうと既にブースではひよりと金田が答案用紙とノートの2つと睨めっこをしている。

「おや比企谷氏。交渉はどうでしたか？」

「4人戦力を得た。明日から協力してくれる。そっちはどうだ？」

「成績下位の生徒の弱点や改善点は把握できましたが、問題はペアの件です。比企谷氏もペアの決め方は薄々予想できるでしょう？」

「当たり前だ。小テストの順位次第だろう。1位がビリと、2位がブービーと……感じだな」

それ以外考えられない。坂上先生は毎年1、2ペアが退学になると言っていたが、馬鹿同士が組んだらもって多いはずだからな。

そして退学になるってペアは馬鹿と秀才ペアではなく……

「問題があるとすれば中堅どころですね」

ひよりの言うように危ないのは中堅どころだ。中堅同士は安定って考えは甘い。

例えばウチのクラスだと小宮の全科目の平均点は中堅どころであるが、理系科目が80点台である反面、文系科目は50点台のガチガチの理系タイプだ。

そんな小宮が同じ理系タイプの西野と組んだら、文系科目で赤点を取る可能性がある。何故なら期末テストは中間試験よりも難しくからだ。

何せ生徒作成だから、教師が作るようなある程度救済措置用の問題があるテストに比

べて粗があるだろうが、簡単な問題は取り入れないからな。

「中堅どころについては得意科目は各自に任せて、苦手科目についてはその科目を得意とする生徒に任せるべきだな」

「はい。後勉強会のスケジュールの作成ですが、2部制にして1部を文系科目を、2部を理系科目を重視するようにしますか？それとも部活動を配慮したスケジュールにしますか？もしくは中堅と下層を分担する形もありますが」

金田の質問は俺も悩んでるところだ。正直どれも利点と欠点があるからなあ。

「わかった。そこは明日クラスメイトに説明する前までに俺が考えとく。とりあえずクラスメイトの苦手分野と克服の為の勉強内容を考えるぞ」

「はい」

2人から了承を得たので俺達はブースを借りれる6時まで明日以降に必要な準備を次々に片付けるのだった。

「ただいま」

「おや、お帰りなさい2人とも」

資料作成に一段ついた俺達は自室にもどる。そこには有栖が備え付けのパソコンと向かい合っているが、俺達の方を見ると笑顔を向けてくるが普段よりも翳りがある。何かあったのだろうか？

「疲れたのか？無理しないで休め」

「そうですね……椎名さん。申し訳ありませんが、今夜だけ八幡君と過ごさせてくれませんか？」

これは珍しい。ひよりも有栖も2人きりで過ごしたいと言って誘惑する事はあるが、今夜は席を外せって言った事はないし。

「何があつたのですか？」

これにはひよりも不満そうな表情ではなく不思議そうな表情になりながら質問する。

「はい。実は私は元々視聴覚室でテストの作成をしていたのですが、途中でDクラスの成績優秀者、堀北さんや平田君、雪ノ下さんが来たのです」

「もう良い。大方雪ノ下が突つかかかってきたんだろ？」

それ以上言わなくても猿でもわかるわ。

「いえ。雪ノ下さんは睨んできましたが、絡んではきませんでした。そしてお互いに話

すことなく問題作成に取り組んでましたが、1時間くらいしたら由比ヶ浜さんがやって来て……もうわかりますね？」

結局由比ヶ浜かよ。アイツは停学の意味がわかってないのか？停学するのは自分を見つめ直して反省する時間なのに、全く反省してねえじゃねえか。

「そういう事なら仕方ないですね。では私は明日まで私の部屋で過ごしましょう。ただし八幡君と初夜を迎える事はやめてください」

ひよりは簡単に頷きそう言ってくるが初夜なんて言うな。確かに俺は殆ど毎晩2人と本番以外のエロいことをしているが、本番はしてないからハッキリ言われると恥ずかしい。

「わかりました。心遣い感謝します」

「いいえ。ゆっくり休んでください。では八幡君。また明日……んっ」

ひよりは俺にキスをしてから部屋を出て行く。そして2人きりになると有栖が話しかけてくる。

「では八幡君。私を膝の上に乗せて後ろから抱きしめてください」

そう言ってくるので俺は有栖を持ち上げてからベッドに腰掛けてから、膝の上に乗せて後ろから優しく抱きしめる。由比ヶ浜によって精神が疲弊した有栖のおねだりは聞いてあげるつもりだ。

「んっ……温かいです。少しずつ気分が良くなっていくのがわかります」

「この程度で良くなるなら何よりだ」

「はい。それと八幡君も私の身体を好きに触って良いですからね……八幡君の本能は昂っているようですから」

やはり膝の上に乗っているならわかるよな。まあ毎晩一緒に風呂に入ったり裸になつて一緒に寝ているから今更か。

そう思いながら俺は右手で有栖の足を撫でて、左手で小ぶりな胸を揉む。

「んっ……あっ……手つきがいやらしい変態さんですね」

「避妊具を使う気満々のお前が言うな。つかお前も胸が小さいのに感じ過ぎだろ？」

「う、煩いです！大体普通の男子は一之瀬さんのように無駄に大きい駄肉に夢中になると思いますか」

有栖は真っ赤になつて怒る。有栖は身長などの発育の事を言われると子供のように怒るが、普段とのギャップがあつて可愛いんなよな。まあ言い過ぎには注意するが。つか駄肉って……

「生憎俺は手に収まらないデカ乳はそこまで興味ない。手にちようどフィットする大きさが一番の好みだ」

嫌いって訳じゃないがそこまで拘るほどじゃない。

「そうですね。八幡君は普段は冷静なのに夜になると獣のように揉んだり舐めたり吸ったりしますからね」

「ほっとけ。お前らこそ俺が手を出すと散々求めてくる淫乱じゃねえか」

「……放つておいて……んあつ！」

話してる途中で有栖の服の中に手を入れて乳首を摘むとビクンと跳ねて喘ぐ。やっぱり敏感だな。

「八幡君は意地悪です……」

有栖は拗ねた眼差しを向けてくるので頭を撫で撫ですると眼差しが弱くなり、やがて猫のように目を閉じて身を委ねてくる。普段はドSだが、こんな風に甘えてくるのは実に可愛らしいな。

「悪かったな。俺に甘えて疲れが取れるなら甘えまくれ」

「そうします。それにしても由比ヶ浜さんは何故愚かなのでしょうか？彼女を真人間に出来たらノーベル賞を受賞出来るかもしれないですね」

有栖は冗談のつもりなのだろうが、奴の馬鹿を改善出来たらマジでノーベル賞ものだろう。

「かもな。とりあえず明日からテストの作成は自室でやれ」

「もちろんです。正直先程のやり取りを毎日やったらノイローゼになります。それと夕

食は用意出来てますから食べませんか……デザートに私を添えますから」

有栖は最後に蠱惑的な笑みを浮かべながらそう言ってから立ち上がりキッチンに向かうが、俺は暫くの間動く事が出来ないのだった。

その後、俺は夕食後に裸エプロン姿の有栖をデザートと見立てて思い切り甘え倒したのは言うまでもないだろう。

というか途中で龍園から電話がかかってきたが、かかってこなかったら俺は有栖に対して甘えから捕食に移行していただろうし、マジで龍園に感謝です。

まあ有栖は龍園にキレていたけどな。

## 指令

「さて、全員集まったようだし始めるか」

ペーパーシャッフルの試験の開催が告げられた翌日の朝、俺はクラスメイト全員の前に立ち口を開ける。

まだHR前だが、昨夜のうちにクラスメイト達にHR20分前に教室に集まるように指示したおかげだ。

「早速だが昨日俺、ひより、金田がやった事から説明するぞ。先ずは問題の作成については有栖に80万ポイントで任せたから気にしなくて良い。後指導者については3年生でAクラス行きを諦めているDクラスの学力優秀な生徒を4人雇ったからしっかり勉強するように」

「80万?!更に先輩を雇うって払い過ぎじゃねえの?!特にAクラスは同盟相手だろ!」

石崎が大声で叫び、他の連中も騒めきを生むが気にしない。

「同盟相手だからこそだ。ただでさえこっちの馬鹿共の成績向上に力を貸して貰うのに、安金を払っていたら信用にヒビが入って裏切りに遭う可能性もある。というか今回

の試験は龍園に全権を任されてるから大人しく受け入れろ。龍園も良いな？」

「ああ。俺ならDクラスを狙って嫌がらせをするが、相手がCクラスで勝ちに行くならそのくらいのポイントは払う事に不満はねえよ」

俺の強い口調と龍園の同意によって静まる。龍園から全権を任されている以上、今回のリーダーは俺だからな。

「さて。次にペア決めの方則だが毎年退学するのは少数である以上、小テストの結果によつて左右されるだろう」

俺はチョークを持って「1位は40位と、2位は39位と」って書く。

「こんな感じでペアは決まるだろうが……小テストの難易度次第では順位の変動があるだろうから、確実性を高める」

「確実性？」

「つまり馬鹿は確実に成績優秀者と組めるようにするって訳だ。石崎、真鍋、諸藤、山脇、藪、山下、川口、谷口、風間、石山……今呼ばれた10人は小テストを1問も解かずに0点を取れ。で、俺を入れて……ひより、金田、北川、西野、近藤、大河内、黒崎、山本、西島の10人は全員80点以上取れ。小テストは中学生の復習らしいから取れるだろう」

重要なのは極力学力に差がある生徒同士を組ませることだからな。

「残った20人についても同じだ。基本的に20人の内、上位10人は50点前後を、下位10人は10点前後を目標にして貰う」

俺の言う事を聞いてくれれば馬鹿同士が組むって最悪の展開は避けれる。

「ただ中堅といつても色々な種類があるから文系特化タイプと理系特化タイプの生徒を上手く噛み合わせたいから詳しい話は後日話す」

「あ、そっか。俺は理系は得意だけど文系は苦手だからな」

「私も文系は得意だけど理系は50点台だからなあ」

そんな声が聞こえてくるが、まだ話終わってないので手を広げて静める。

「次に勉強会についてだが、4時から6時半までの1部と7時半から10時までの2部の2部制にする。前者は部活に所属してない生徒を重視して、後者は部活組を重視する。両方出るとは言わないが下位20人はどっちか片方は基本的に出るように。今回の試験で勝つ為には成績下位のBクラス生徒が、他のクラスの成績下位の生徒に詰められるかが重要だからな」

クラス上位や中堅どころの成績保有者にも頑張って貰うが、1番伸び代があるのは下位の連中だからな。

「後、もう一つ質問するぞ。お前らは普段授業中にわからないところがあったら、聞く気が失せてしまってテスト直前になるまで放置しているか？YESなら手を挙げろ」

俺がそう尋ねると石崎が真つ先に挙手。素直に認めるのは評価するが、そこまで潔いなら改善しろ。

そう思っていると石崎に影響されたのかゾロゾロと手を挙げる。数にして12か。そいつらは勉強する習慣をつけてないが、今回の試験で改善して貰いたい。

「じゃあ今挙手した連中は授業中にわからないところがあつたら、無理に理解しようとしてしないでマーカーなどで教科書やノートにチェックを付けて、その日の勉強会で出来るようにしろ。わからないところを理解出来るなら教える側も楽だからな」

出来れば授業中に理解してくれたらありがたいが、それには地力をつける必要があるし、授業は一人一人の為に時間は割けないから仕方ない。

実際勉強会で「どこがわからない？」と聞いた際に正確に答えられるだけで充分ありがたいからな。沢山なんて曖昧な表現で言われるとイラつくし。

そう思いながら説明を続けると予鈴が鳴るので、ここらで締めるか。

「じゃあ話は終わりだ。勉強会は今日からやるので来るように……あ、最後に一つ」  
俺は一度区切つて全員を見回す。

「勉強つてのは人によつて向き不向きがあるし成長速度も違うから、試験結果が悪くても一生懸命やったなら咎めるつもりはない。今回の試験で俺が求めているのは成績下位層に勉強する習慣を身につけて貰う事だからな」

今回はあくまで2年生以降に対する備えを考えているからな。負けてポイントを取れても大したダメージじゃないし、試験の勝利に対して絶対的な拘りはない。

ただ……

「ただな。実力がないのに「他の奴が頑張るから」って、碌に努力しない奴がいたら、次回以降の特別試験で鉄砲玉的な役割にするように龍園に進言するからそのつもりでいろ。弱い事は罪じゃないが、弱いままで強くなるうとしない事は罪であり、罪には罰がある事を認識しろ。それで良いか、龍園？」

俺は中学時代の文化祭で2年生の時に実行委員になったが、馬鹿な委員長長の戯言により大量のサボりが生まれたが、あの時も「皆が休んでるから」ってやるべき仕事を放棄した馬鹿が多かったからな。ああいう類の人間は役に立たないし、鉄砲玉がお似合いだ。

俺の問いかけに龍園ら笑いながら頷く。

「任せろ。お前がピックアップした雑魚は次回以降の特別試験で「弱いのに努力しない雑魚」から「クラスの為に特攻して殉職した生徒」に変えてやるよ」

龍園の嗜虐的な笑みによって先程俺の質問に挙手していた連中は真っ青になる。俺は龍園と違って暴力は振るわないが、サボる連中には徹底的な証拠を用意してから反論や言い訳を出来ないようにしてから正当な罰を与えるつもりだ。

理不尽な罰を与えたら反感を買うが、対象者以外が納得出来る状況なら反感を買うのは罰を下す側ではなく下される側だからな。

そう思いながら俺は壇上を降りて朝のHRが始まるのを待つのだった。

数時間後……

キーンコーンコーンコーン

昼休みを告げるチャイムが鳴るので俺は片付けをするとひよりが弁当箱を持って笑顔に向けてくるので立ち上がって一緒に教室を出る。

「おや、丁度良いタイミングですね。行きましょうか」

そんな声が聞こえてくるので振り向くと有栖がいて俺の横に並んだので、有栖の足に合わせて歩く。

そしてDクラスの前を歩いている時だった。

「あーあ。また今日も山菜定食かあ」

「スペシャル定食が恋しいね」

「もうあたし達は食べれないよね」

軽井沢が友達2人とそんな風に愚痴を吐きながら歩いている。確か右隣が佐藤麻耶で左隣が松下千秋だったな。両方可愛い女子ランキングで上位にいるから覚えている。しかしこれはチャンスだ。

「なら軽井沢よ。俺がスペシャル定食を食べる金を出してやろうか」

「えっ……比企谷君？何でいきなりそんな提案を？」

軽井沢と佐藤と松下のみならず有栖とひよりも意外そうな表情で俺を見てくる。

「良く考えたらお前には借りがあつたからな」

「借り？なんかあつたっけ？」

「アレだよ。体育祭で由比ヶ浜に詰め寄られてた俺を助けてくれただろ？あの借りだよ」

由比ヶ浜からの絡みから解放してくれたのにお返しをしないのは筋を通してないだろう。

「そういえばそんな事もありましたね」

「八幡君。そんな大きな借りがあるのに一月以上放置するのは酷いですよ。スペシャル定食一回は明らかに釣り合っていないですから、今年度一杯は軽井沢さんに毎日昼食を奢るべきです」

有栖がそう言うのと軽井沢は慌て出す。

「いやいや坂柳さん！そこまでしなくて良いから！」

「そうですか？私ならそのくらい喜んでしますが」

まあ有栖は由比ヶ浜のことが大っ嫌いだからな。そのくらいしてもおかしくない。

……待てよ。

「そうだな……じゃあこうしよう。ちよつと携帯のポイント画面を見せろ」

「へ？まあ良いけど今年度分とかは絶対にやめてよ。私一人だけ良い思いとかしたくないし」

言いながら携帯を出してIDを見せてくるので自分の携帯から軽井沢の端末に13万5千ポイントを送る。

「今13万5千ポイントを送ったから、罪悪感があるならそっちの友達2人と仲良く分けると良い。1人あたり4万5千ポイントになるが、それなら一食500ポイントと仮定した場合、1ヶ月はマトモな飯を食えるぞ」

「そういう問題？！てかそんな大金恐れ多いから！」

軽井沢はテンパリだして、返そうとするが頭にチョップをして黙らせる。

「返金は認めない。いらなかつたら捨てて……は無理だからゲーセンで浪費しろ。以上」

言いながら俺は軽井沢にそう言って話を切り上げる。軽井沢は綾小路の駒で俺の情

報提供者の1人だが、こうやって第三者が多い中で接点を作っておけば、今後軽井沢と会っているのを第三者に見られた際に「世間話をしていた」って言い訳を使えるからな。それにDクラスの大半の生徒に比企谷八幡という存在に対して良い印象を持たせておくのは戦術としては悪くないからな。場合によっては須藤や由比ヶ浜を潰す際には使えるだろう。

ポイントについても問題はない。無人島試験で龍園に従って貢献したおかげで毎月60万近くのポイントが入っているし、優待者試験の儲けもあって、クラスの貯金とは別に300万近く持つてるからな。

そう思っていると……

「おいおい。そんなに余裕があるなら俺にも恵んでくれよ〜」

1人の男子がヘラヘラした態度で話しかけてくる。

何だコイツ？ 由比ヶ浜とは別ベクトルで面倒そうだな。

## 絶対強者

「おい軽井沢。誰だコイツ?」

俺はいきなりポイントを寄越せと言ってきた男に不快感を抱きながら軽井沢に質問する。

軽井沢が嫌そうな表情になる。

「ウチのクラスの山内って言うんだけど……ウチのクラスの4馬鹿の1人」

ああ。コイツが山内か。キモい男子ランキングでぶつちぎりで1位だから名前だけは知っている。顔は知らなかったがDクラスの4馬鹿の須藤、池、山内、由比ヶ浜は有名だからな。悪い意味でだけど。

「はあ?!誰が馬鹿だよ?!」

「いや山内君。今回中間試験ビリだったじゃん。由比ヶ浜さんより低い時点で恥だよ」

マジか。由比ヶ浜より成績が悪いつて死ぬほど恥ずかし……待てよ。今回の中間試験は体育祭の結果次第で増減するんだったな。

由比ヶ浜については長い間懸る為になわざとウチと有栖のクラスの雑魚をぶつけて相

当な点を稼いだし、それを考えるとDクラスの馬鹿がビリを取ってもおかしくないかもな。

「アレは偶々だったって！今までの俺は全然本気じゃないんだからな！」

「じゃあ本気出してよ。ウチのクラスは由比ヶ浜さんと須藤君の所為で悲惨なんだから」

そりやそうだ。由比ヶ浜は2回停学になった挙句に全クラスに敵視される要因を作ったからな。須藤についても1回停学になった挙句、体育祭をボイコットしたしDクラスの足手纏い2トップは間違いなく由比ヶ浜と須藤だろう。

「い、いや。俺が動くのは本当にヤバイ時じゃないと」

「いや、普通にヤバイ時だから。前から思ったけど、実力がないのに嘘で実力者ぶるのはやめてくれない？」

「だよね。ただでさえ貧困と由比ヶ浜さんと須藤君の所為で辛いのに、誇張した自慢もあつたら余計に疲れるよ」

「しかも初対面の人にポイントを寄越せて……そんなんだから女子に嫌われるんじゃないの？」

軽井沢の文句に佐藤と松下が便乗するが、Dクラスの大半には心底同情するわ。同時にCクラスに入学出来て良かったと思う。

「べ、別に良いだろう。人つてのは助け合うのが大切なんだしよく。それにいつも0ポイントで辛いんだよ。だったら軽井沢が恵んでくれよ。5万で良いからさ」

「どんだけ厚かましいんだコイツは？俺があげたポイントだから軽井沢に使い方は任せるが、こんな奴にあげるなんて馬鹿のすることだろう。有栖は蔑んだ眼差しを向けて、ひよりは無表情になっている。」

「嫌よ。どうせ比企谷君は返金を拒否するだろうし、松下さんと佐藤と三等分するから」  
「まあ成り行きで手に入れたポイントとはいえ、こんな凶々しい奴には渡したくないよな。」

「何だよそれ！自分達だけ良い思いをするなんて最低だぞ！」

「そうだそうだ！俺達にもポイントをくれよ！」

「というか元はといえば俺はその腐り目とチビに嵌められたんだよ！その分返してやるよ！」

と、ここで小柄な男子と須藤がキレてくる。小柄な男子は4馬鹿の池だろう。しかしもう無料定食を食べに行ったのか由比ヶ浜と雪ノ下がないのは幸いだ。アイツらがいたらこの倍は面倒だからな。

そう思っている時だった。

「最低？夏休みにプールの女子更衣室を盗撮しようとしたあんた達にだけには言われたくないんだけど」

と、ここで軽井沢がとんでもない爆弾を落としてきた。今女子更衣室の盗撮って言わなかったか？

この爆弾にDクラスの教室には騒然とした空気となる。軽井沢本人はハツとした表情になるが思わず言っちゃまったように見える。

「な、何で知ってんだよ……あ、いやーな、何の話だよ?！」

山内は慌ててシラを切るが完全に自白をしてんじゃねえか。

そう思っていると軽井沢は深呼吸をしてから表情を変える。まるで「やっちゃったものは仕方ないし切り替えよう」って感じに見えるな。

「惚けないでくれない？ダクトを利用してカメラ付きのラジコンでやってでしょ？全部わかってるから」

軽井沢の糾弾に周りの騒めきが大きくなる。

「どういう事よ！やって良いこととダメなことと区別もつかないなんて小学生以下よ！」

「この変態ども！何で生きてんのよ！クラスのゴミトリオ！」

まあ当然の反応だな。女子からしたら恐怖の対象でしかないからな。

そう思っていると……

「待ってって！俺達だけじゃなくて綾小路もいたからな！ラジコンだつて博士が用意したものだし！」

まさか犯人が他にもいるとはな。つか綾小路も犯人の一人なのか?!これは予想外だ。そして今ので完全に自白しやがったかよ。

「ま、待て！拙者は山内殿に「ラジコンから見える景色を見たい」と頼まれたからであつて、盗撮に参加していないので御座る！」

博士と呼ばれた男子はテンパリながら返事をするが、コイツは判断がつかないからグレーだな。つか口調が材木座に似てるな……

「外村君は知らないけど綾小路君は違うから。あたしにカメラの存在を教えてくださいました女子の恩人だから。綾小路があたしに言わなかつたらメモリーを取れなかつたし」

「はあ?!ふざけんよ！」

「テメエ綾小路。チクってんじゃねえよ！」

池と須藤は綾小路にキレるが、コイツらはガンガン自白してんなあ。そりや由比ヶ浜と並んで馬鹿扱いされる訳だ。

「言い訳してんじやないわよ！この性犯罪者共！」

「そうだそうだ！せめて普通の学校生活を送らせてくれよ！」

「この厄病神トリオ！今すぐ学校やめなさいよ！」

物凄い罵声がDクラスに響き渡るが、須藤が自分の机を蹴って壁に叩きつけると辺りが静まる。

「煩えよ！黙って聞いてりや調子に乗ってんじやねえよ！軽井沢も人前で言ってるんじやねえよ！腐れビッチが！」

須藤が怒りを露わにして軽井沢の方に詰め寄ろうとするが、まさか逆恨みで殴るのかよ?! 由比ヶ浜レベルの短気だな。

須藤の愚行に唾然とする中、佐藤と松下が止めようとするが、須藤が怒りを露わにしなから間に入った2人に拳を振るおうとする。

しかも拳の軌道から顔面狙いっぽいので慌てて割って止めようとする。

「邪魔すんじやねえよ！」

「ぐっ！」

「『八幡（比企谷）君！』」

しかし……フィジカルの差があつて頬に激痛を感じながら簡単に押し負けて背後にいる2人にぶつかつてしまう。ギリギリ倒れはしなかつたが、かなり痛い。

「いい加減にしなさいよ！これで比企谷君が訴えたらまた停学だからね！」

「煩えよ！そもそもテメエが人前で喋つたのが悪いんだろうが！実際は撮れてなかつたんだしゴチャゴチャ言つてんじゃねえよ！」

体育祭の鬱憤が爆発したのか、理不尽な怒りが軽井沢に向けられ、軽井沢の顔面に拳が振るわれる。

対する軽井沢は目を瞑るが右の拳が当たる直前に綾小路が割つて入り須藤の拳を受け止めている。

「綾小路い……テメエ！」

「止めろ須藤。女子の顔を殴ろうとするな」

「知らねえよ！そもそも裏切り者が意見してんじゃねえ！」

「ダメだ須藤君！」

ドゴツ！

少し離れている場所にいる平田が止めに入るが遅く、空いてる左の拳が綾小路の顔面に命中する。これはヤバくねえか？

そう思っていると……

「今のが、全力か？」

綾小路のいつも通りの声が聞こえてくる。鼻からは血を流しているが、表情に変化はなくいつも通りの無表情だ。アレを食らって無表情ってヤバ過ぎだろ？

これに須藤もポカんとするが、直ぐに裏切りを思い出して歯軋りをする。

「っ！俺は本気を出してねえよ！」

ドゴツッ！ドゴツッ！ドゴツッ！

その言葉と共に須藤は綾小路の顔を何度も殴るが、綾小路の顔から血が飛び散るが綾小路の表情は全く変わらない。この前綾小路に貸したブリーチのウルキオラみたいが無表情だな。

そして須藤が驚愕の表情をうかべながらあ9発目のパンチを叩き込んだ時だった。

「さて、そろそろ正当防衛が成立出来るな。最後の警告だ。軽井沢に手を出すな。俺は軽井沢を守るが、拒否して攻撃するならば次はオレも反撃する」

血だらけになりながら表情も声も変わらない綾小路がそう告げる。まあ顔面パンチを9発を食らったのだから殺さない限り正当防衛が成立するだろう。というか綾小路の耐久力はわかったが、筋力はどれくらいなんだ。

「っ！やれるもんならやってみやがれ！裏切り者があー！」

ドゴツッツツツツツッ！

須藤の怒声と共に右ストレートが綾小路の左に叩き込まれ、一際大きな音が鳴る。「攻撃したな。反撃させて貰うぞ」

しかし綾小路は全くダメージがないように拳を振り上げて須藤に肩に振り下ろす。  
グシヤリ

須藤の左肩から潰れるような音が鳴り……

「があああああああつ！」

須藤は左肩を押さえながら絶叫しながら地面をのたうち回る。今の一撃……肩甲骨を砕いたのか？何つーパワーをしてるんだよ？

予想外の展開にこの場にいる大半はのたうち回る須藤を無表情で眺める綾小路に呆然とした表情を浮かべているが……子供のように楽しそうに笑っている有栖の表情が印象的だった。

## 考察

「……って訳でトラブルに巻き込まれて一応被害者だから、生徒会のほうに行かないといけないから勉強会については遅れて参加する。詳しい話は金田に任せるからよろしくな」

「わかりました。任せてください」

放課後、帰りのHRが終わってから昼休みの件についてクラスメイトに説明をすると金田が頷く。

綾小路が須藤を一撃で戦闘不能にした後、元生徒会の橘先輩が通りかかったので事情を話したが、放課後に改めて生徒会に説明するように言われたのだ。

「ククツ、それにしても綾小路ってのは相当やるみたいだな。体育祭で面白い奴とは思っていたが、想像以上だな」

龍園は楽しそうに笑っている。そういや龍園は借り物競走で綾小路とぶつかった際にお題である賞味期限が近いものとして星之宮先生を連れて行き、綾小路は星之宮先生は賞味期限切れって言ったんだっただな。アレはマジで笑えた。まあ星之宮先生にボロ

カスにされた真嶋先生には同情するが。

「しかしこれでDクラスは盗撮で3人退学ですし、逆転の目はないですよ!」

石崎は笑いながら龍園に言うが……

「いや。多分ならないと思う。少なくとも俺が理事長なら退学にはしない」

「それは未遂だから? 私なら未遂でも退学にするけど。少なくとも須藤は綾小路の顔を10回殴るって明らかにヤバいし退学でしょ?」

伊吹がそう言うってくるが……

「明らかにヤバいからこそだ。お前らに聞くが、連中が退学したとして、学外で問題を起こさないと思うか?」

その言葉に全員が黙るが、賭けても良い。奴等は絶対に問題を起こす。

「なるほど……つまり比企谷氏は「3人が退学処分を受けたら何をしでかすか分からないくて、高度育成高等学校にダメージが入る」のを不安に思っているのですね?」

金田がそう質問すると一部の連中はハツとした表情になるが、理解出来てない奴もいるので補足しておくか。

「ああ。この学校は政府が力を入れている学校で、Sシステムについても秘密にしているが、今連中を学校から追い出せば情報が漏れる可能性が高い。更に盗撮事件で退学になったなんて広まったらこの学校や政府にもダメージが入るだろうし、アイツらの扱い

は難しいんだよ」

俺達は入学する前にこの学校の真相を知らなかったが、それは卒業生や退学者に口止めをしたからだろう。破ったら政府からペナルティを与えるって脅しと共に。

政府からの罰となれば黙るのは当然だが、Dクラスの4馬鹿レベルなら後先考えずにバラす可能性がある。そうなればペナルティが与えられるが、情報が広まってしまいうのを防げない。ネット社会だからな。

よってあんな奴等を解き放つのが危険過ぎるから退学処分を下し難い……つてのが俺の考えだ。

「で、綾小路に対する暴力についてだが綾小路が一方的にやられていたら退学じゃなくて少年院送りだったかもしれないが、最後に綾小路がデカイ反撃をしたからなあ……」

まさか一撃で肩甲骨を粉碎するとは予想外過ぎるわ。

「じゃあ綾小路の方はどうなる？」

「退学にはならないだろうが停学はあるかもな」

石崎の質問にそう返す。須藤の顔面パンチ10発はやり過ぎだが、綾小路はピンピンしていて午後保健室に行かずに授業を受けたらしいからな。アイツの耐久力は異常過ぎるわ。

それを考えると過剰防衛と判断されるかもしれない。判決を下すのは難しい問題だ。

「何か納得がいかないんだけど。退学になってもおかしくないのに退学に出来ないなんて」

そう思う気持ちは仕方ないだろう。女子からしたら不快な事件なのに学校の特殊さ故に退学にならないなんて歯痒く思っても仕方ない。

そこまで考えているとドアからノック音が聞こえてくるので横を見ると佐藤が入ってくる。手にはクリアファイルがある。

「あ、比企谷君。ちよつとだけ時間を取れるかな?」

「何だ? 昼休みの件についてか?」

「うん。あの時は本当にありがとう」

「その礼は何度もされたからもうしなくて良い」

須藤が暴れた際に佐藤と松下を庇ったが、須藤が綾小路に潰され、橘先輩から放課後に生徒会に来るように言われてから、佐藤と松下から何度も謝罪と礼を受けた。

その際に俺は2人から謝罪と礼を受け取ったが、佐藤の方は未だに罪悪感を持っているようで別れ際にも悶々とした表情を浮かべていて、今も引き摺っているようだ。

「で? 礼を言うにも俺に用があるのか?」

「比企谷君……というかBクラスの女子に用があるの。夏休みにプールに行った女子にお願いがあるんだけど、盗撮カメラから私達の裸を守ってくれた綾小路君に対する罰が

ないよう署名を集めてるから協力してくれない？」

なるほどな。被害者たる女子からの署名が沢山集まれば生徒会や学校も無視出来ないだろう。

「良いんじゃない？いつ盗撮したか知らないけど、私もプールに行ったし」

「私も撮られてたかもしれないし協力するわ」

そんな声が聞こえてくるので俺は佐藤からプリントを受け取る。見ればDクラスの生徒とCクラスの女子の署名が20人ちよつとだけある。

「じゃあ夏休みにプールに行った女子は署名をしろ」

その言葉に13人の女子が一列に並んで署名を始める。1クラスについて12、3人あたりだろう。つまり1学年で約50人で3学年で約150人になるが、それだけあれば効力を発揮すると思う。

そして全員が署名すると佐藤は一礼して出ていく。

「話を戻すが俺とひよりは生徒会室の方に顔を出さないといけないから勉強会には遅れて参加する。部活未所属組はなるべく出るように。それと上級生から4人から教わるのは石崎、真鍋、山下、山脇の4人だが、必ず図書館のブースで教わるように。他所のクラス……特にCクラスに真似をされたら面倒だ」

重要なのはこちらのカードを如何にバレずに使えるかだ。他クラスには極力知られ

ないようにしないといけない。

「以上で話は終わりだ……つと、まだあつたな。今回は龍園お得意のいちやもんとか執拗な絡みは一切使うな。真つ向勝負を心掛ける」

最後にそう締めくくつてからひよりと一緒に教室を出るとAクラスの教室から佐藤が出て行き、階段を上つていき少し遅れて有栖が杖をついてやってくる。

「お疲れ様です八幡君。怪我は大丈夫ですか？」

「問題ない。痛みは引いてる。それよか署名はしたのか？」

「もちろんです。盗撮から女子生徒を守つたのみならず、盗撮犯に裁きの一撃を下した綾小路君の力になるのはAクラスリーダーとして、女子として当然ですから、夏休みにプールに行つた人には全員署名をさせました」

有栖は力強く頷くが、やはり女子からしたら綾小路の無罪を求めるよな。

「もし痛かつたら言つてくださいね？ ナース服でご奉仕しますから」

ひよりが艶のある表情でそんな風に言ってくるが、ナース服のひよりか……良いな、うん。

「私も八幡君が着て欲しいなら着ますよ？」

「有栖の場合、ナース服より胸元にひらがなで名前が書かれたスク水を着て欲しい」お断りです！「痛えっ！悪かつたから杖で叩くな」

冗談を言ったら真つ赤になった有栖が杖で脛を叩いてくる。ちよつとからかいすぎたな。

そう思っていると有栖がジト目で見てくるが……

「……パーパーシャツフルで八幡君が数学か物理か化学で90点以上取れたら着てあげます」

恥ずかしそうにそう言ってくるがマジで?!こりやちよつと本気で頑張ってみるか。よく考えたら下位の連中が頑張るのだから指揮官の俺が頑張らないでどうするって話だ。

「わかった。絶対に取る」

「八幡君。私は坂柳さんと違って点数なんか関係なく、八幡君が望む格好をしますし、八幡君がエツちな事をしたいなら付き合いますよ……」

ひよりが蠱惑的な表情で坂柳さんと違って、って部分を強調しながら言つて勝ち誇つた笑みを有さんに見せる。ひよりには何が似合うだろうか?可愛いから何でも似合うけどな。

「む〜!わかりました!八幡君はスクール水着姿の私を見たいなら見せますよ!」

有栖は真つ赤になってひよりを睨みながらそう叫ぶが……

「有栖……廊下でそんなことを叫ばないでくれ……」

廊下にいる連中が俺を変態を見る眼差しで見えてきて、ヒソヒソ話をしてるし。明日から俺の二つ名はロリコンになりそうだ。

「~~~~~っ!」

有栖も自爆した事に気付いたのか真っ赤になって俯くが、俺も恥ずかしくて死にそう  
だ。

俺達が恥ずかしがりながらも歩き、生徒会室に到着したのでノックをしてから入る。  
中には南雲先輩しかいない。

「失礼します」

「来たか。早速で悪いが何があったんだ?」

「それは構いませんが監視カメラを見れば一発では思いますが」

「まあな。けど当事者の心情についても聞きたくてな。昼休みに池と山内は青春が  
云々って救いような言い訳をしたからな」

何が青春だよ?小学生ならまだしも高校生じゃ通らない言い訳だからな。

そう思いながら俺達は事情を説明する。

「……って感じですね。やっぱりバカ3人については学校の特異性から退学は無理です  
よね?」

「ああ。あそこまで馬鹿だと退学した後はこの学校にもダメージが来る可能性が高いっ

て意見が教師からも言われてな。3人に対する罰はまだ決まってるが、こんな内容を学校は希望してる」

南雲先輩は一枚のプリントを俺達に渡してくるが、中々えげつない内容が書かれてる。自由を完全に奪った内容だ。

「これ、アイツらに見せたら荒れませんか?」

あの3人どころか普通の生徒なら絶対に荒れるだろう。

「そのくらいしないと馬鹿は変わらないから、文句は言わせない」

「ちなみに生徒会長。由比ヶ浜さんにも同じ罰を与えられませんか?」

有栖からしたら由比ヶ浜にも同じ罰を与えたいようだ。まあ由比ヶ浜にも与えるべきではある。

「今までの愚行に対して罰を与えているから無理だ。ただ次に問題を起こしたらこの罰を与えるって話が出てる」

「つても、由比ヶ浜は罰を受けても変わらないと思いますかね」

奴は本物の馬鹿だからな。

「そこは否定出来ないな。何にせよ話は終わりだから帰って構わない……あ、それと坂柳に比企谷」

「何ですか?」

南雲先輩に呼び止められるが……

「お前らが来る1分くらい前にチャットが来たんだが、今後は廊下で堂々とスク水の話はしないでくれるとありがたい。生徒会長として風紀の乱れは、な？」

「失礼します！」

「失礼します」

俺と有栖は逃げるように、ひよりは丁寧に一礼してから「生徒矯正プログラム」とタイトルのレポート用紙を机に置いてから生徒会室を後にするのだった。

## 審判

「ようロリコン。話は終わったか？」

「黙れ龍園」

図書室に行くなり、龍園はそれはそれは楽しそうに笑いながら話しかけてくる。どうやら俺と有栖の廊下でのやりとりは既に広まっているようで。女子は俺をゴミを見るような眼差しで見ている。

有栖はテスト作成のために自室にいて良かった。一緒にいたら噂に信憑性が増して、有栖が龍園にキレて勉強会どころじゃなかったなろうし。

「ククツ……そんなにキレル事あねえだろ。体育祭で堂々と坂柳にキスをされた時点でロリコン疑惑はあつたんだしよ」

そこを言われると否定出来ない。というかよく考えたら二股扱いされてるし今更だな。

「……もういい。ロリコンでも何でも良いから勉強会に入るぞ。文系科目をやってる奴等は何処だ？そっちは俺がやるからひよりは理系の方をやれ」

「わかりました。お任せください」

「ああ。龍園は理系みたいだが、お前も成績向上を心掛けるよ?」

龍園は素行の悪さから意外に思われるが平均より若干上と中々の学力を持っているが、今回の試験で上位レベル……1年生160人中、上位50人以内に入って貰わないと困る。

「へいへい。わかっているから言わなくて良い」

龍園は面倒そうな口調になりながらも了承するので俺は文系科目をやっている方に向かう。

「あ、待て比企谷。最後に聞くが結局馬鹿共に対する罰は何か聞いたか?」

龍園にそう言われて俺は先程見えた一枚のプリントを思い出すが……

「そうだな……少なくとも連中からしたら普通の学園生活の終焉を迎える事になるだろうな」

俺はプリントに書かれた内容を思い出してそう返す。明日は相当荒れそうだな。そして龍園は馬鹿笑いをして呼吸困難を生じるだろう。

そう思いながら俺は龍園に背を向けて再度歩き出すが、貧乳女子は全員俺以外の指導者の方に向かったので若干ショックを受けて、そこそこ巨乳の神室から呆れた眼差しを受けながら指導を始めるのだった。

翌日……

学校に来るなり生徒会に来るように呼ばれたので廊下を歩くと、階段の辺りで綾小路と軽井沢と鉢合わせする。軽井沢は楽しそうに綾小路と話していて、綾小路は顔に手当ての痕跡を残していないまま軽井沢の話を聞いている。

「よう。お前らも呼び出しか？」

「あたしは付き添い。坂柳さんと椎名さんは？」

「今回呼ばれた俺だけだ」

多分処分の発表だろうが、その場合は目撃者である2人は不要で、被害者の俺1人で充分だろう。

「というか綾小路は怪我は大丈夫なのか？」

「問題ない。全部当たる直前に威力を多方向に拡散するように顔を動かしたからな。痛みはあるが、威力が一点集中してないから骨に異常はない」

マジか。武道家は敵の拳の威力を受け流すことを出来るのは知っているが、あの状況でも出来るのかよ。つくづくふぎけた奴だな。

そう思いながら俺達は合流して生徒会室に向かうが、綾小路と軽井沢の距離が近いが面倒な事になるかもな。軽井沢と平田って偽カップルらしいからいざれ別れそうだな。

「着いたか」

「あたしは待つてるからじゃあ頑張つてね」

「頑張る必要はないだろ？」

「いや、須藤君とか絶対に突つかかってくるでしょ」

「あり得るな……」

軽井沢の言葉に頷きながら生徒会室に入ると既に他の面々もいる。南雲先輩のみならず副会長の桐山先輩、堀北元会長や橘元書記もいる。

そして被疑者もいる。カメラを用意したっていう外村は真っ青になっていて、池と山内は須藤を一撃で沈めた綾小路に対して恐怖の眼差しを向けていて……

「綾小路いつー！」

左腕に包帯やギプスが装備した須藤が憤怒の表情が浮かべて叫ぶ。

「何か用か？」

「何か用かだあ?!俺の肩を壊しやがって!後遺症が残るかもしれないって言われたんだ

よー！ふざけんじゃねえよー！」

そう言いながら詰めようとするが……

「それ以上踏み込むなら右腕も壊すが良いか？」

「っ！」

綾小路が冷徹な眼差しを須藤に向けながらそう質問すると、須藤は足を止めてガタガタと震えだす。流石に生徒会役員がいる前で暴力を振るうとは思えないが、今の綾小路の表情を見るとやりかねない。

「そこまでにしろ綾小路。実行したら過剰防衛として判断して処罰を与えるぞ」

堀北先輩の言葉に綾小路は肩をすくめてから須藤から距離を取る。あの態度から実際は攻撃するつもりはなかったのだろう。

「では南雲。今の生徒会長はお前だから処罰はお前が伝えろ」

「ええ。じゃあまずは比企谷と須藤の問題についてだ。須藤は佐藤と松下の2人を殴ろうとした結果、比企谷が庇って殴られた。カメラの記録を見る限りやろうと思えば寸止めは出来ただろうし、女子の顔を躊躇いなく殴ろうとした須藤に非がある。よってDクラスは更にマイナス50ポイントだけクラスポイントを引き、その分をBクラスに加算する」

由比ヶ浜の時と似たパターンか。

「はあ！勝手に割り込んだコイツの自業自得だろ！」

「ただけ理不尽な反論だよ？クレマーよりタチが悪いな。」

「そんな訳があるか。寸止め出来たと判断した以上、情状酌量の余地はない」

須藤の理不尽な反論を南雲先輩が一蹴する。須藤は怒りの表情を南雲先輩に向けて歩きですが、綾小路が拳をポキパキ鳴らすと綾小路に忌々しそうな眼差しを向けて足を止める。ハッキリ言つてメチャクチャ怖い。

綾小路が須藤を黙らせると南雲先輩が口を開ける。

「次に外村秀雄。綾小路によれば須藤達が録画の確認をしようとした時に居なかつた事から、盗撮の為にラジコンを渡していないと判断して今回は無罪とする。ただし次回以降は怪しいと思つたら罰する可能性があるから注意するように」

「しよ、承知」

外村は心底安心した表情で頷く。まあこれを学校から発表からすれば白い目で見られないだろう。少なくともその三馬鹿よりは遥かにマシだ。

「次に綾小路清隆。お前の場合、常人なら致命傷になり得る須藤の拳を顔面に10発受けてから須藤の肩甲骨を砕いた事で過剰防衛という意見も出たが、女子の裸を守つた事、女子生徒146名による減刑要請書を考へて今回は嚴重注意と反省文3枚のみとする。次回以降は嚴罰対象だから注意しろ」

南雲先輩の警告に綾小路は一礼するが、まあ実質無罪だろう。というかここで綾小路を罰したら、発足したばかりの南雲生徒会は女子生徒を敵に回すから当然か。

「何でだよ?!俺にこんな怪我をさせておいてそんな軽いのかよ!当分部活にも出れなくなっただぞぞ!」

須藤が喚くが、盗撮を責められたからバラした軽井沢に殴りかかった奴が何で偉そうなんだよ。

「安心しろ。治つても部活には出れないからな。須藤、池、山内に対する罰だが、停学処分にしても反省しないだろうからお前達にはこの教育プログラムを受けて貰う」

南雲先輩はプリントを3枚取り出して3人に渡すと……

「ふざけんじゃねえよ!こんな罰、やってられるか!」

「そうだそうだ!俺達に自由を奪うのか?!」

「生徒会長なら何でもやって良いと思ってるじゃねえよ!」

三馬鹿は物凄い勢いで反発する。まあ当然だろう。俺も昨日見たが「生徒矯正プログラム」は学生からしたらかなり理不尽に感じるだろう。

内容についてだが……

①プライベートポイント制の廃止。

これはプログラムを受ける生徒からプライベートポイントの概念を無くすのだ。今後特別試験で活躍したり、クラスポイントがプラスになっても須藤達は貰えない。当然買い物も出来ない。

## ②懲罰室での生活

昔、この学校はルームシェアするタイプの家だったが、違反行為をした際にはベッドとテーブルとトイレ以外何もない懲罰室で生活をさせられたらしいが、須藤達は卒業までその部屋で住む。風呂については部活棟にあるシャワーを週に3回、15分までと刑務所のような感じだ。

## ③買い物申請

欲しいものがあつたら申請書に欲しいものと理由を書いて教師に提出。却下されたら買えない。歯磨きやタオルや衣類など生活に必要なもの以外は基本的に却下するらしい。

## ④部活の永久追放

和を乱す事から今後は部活の参加を一切禁止となる。まあこれは須藤のみが対象だけだ。

## ⑤私物、現在の携帯端末の没収

生活態度を改める為にゲームや漫画などの私物は全て没収して、卒業時か退学時に返

却するつもりだ。更に携帯についてもネットが使えず、電話とメール以外使えないものの使用が強制される。

⑥ ケヤキモールの出入り禁止

例えば友人の奢りでも遊ぶ事を認めないので、遊ぶ場所が多いケヤキモールに出入りする事を禁止となった。食事についても学校側が朝昼晩の食事を用意するのでスーパーに行く必要もない。

⑦ 奉仕活動と精神修養の義務化

毎日朝晩に写経を30分ずつ行い、土日は学校の清掃活動を1日4時間やる事を義務化。真人間になる為に道徳的な行動を期待する為だ。

他にもまだまだあって、まるで刑務所のルールだ。当然3人は納得してないのでごねるが……

「最後を見る。坂柳理事長の印鑑があるが、政府が力を注いでいる学校のトップが承認した事を意味する。逆らうなら政府から非国民と扱われてもおかしくない」

有り得るな。会った事ないが理事長って有栖の父親だし娘以上のサディストかもしれないし。

「南雲先輩。由比ヶ浜結衣にもこのプログラムに参加させるべきです」

「昨日比企谷や坂柳にも言ったが、既に今までの愚行に対して罰を与えているから無理だ。ただ次に問題を起こしたらこの罰を与えるって話は出てる」

綾小路が手を挙げて要求するが、南雲先輩は昨日俺達に言ったことを口にする。やはり皆が由比ヶ浜が大人しくなる事を望んでいるようだ。

「話は終わりだ。比企谷、綾小路、外村は教室に戻れ。須藤、池、山内は携帯を没収して新しい携帯を支給するから残れ」

「ふざけんな！何で俺達がこんな目に遭うんだよ！未遂だから無罪だろー！」

「そーだそーだ！元々比企谷が軽井沢にポイントを渡したのに、俺達に渡すのを拒否したのが悪いんだ！」

「肩を壊されたのにこの仕打ちなんて納得いかねーよ！絶対に「黙らないと3人の背骨を折るぞ」っ！綾小路いつ……！」

「ひいつー！」

綾小路の冷たい声に須藤達は封殺される。実際綾小路なら躊躇いなく背骨を折るだろうな。力を晒したからか堂々と脅しやがった……

「し、失礼しますぞー！」

綾小路にビビった外村は早足で出て行く。

「馬鹿は黙らせたので失礼します」

綾小路も一礼して生徒会室から出ていくので俺も一礼して出て行く。

「ねえ、今三馬鹿の騒ぎ声が聞こえてきてから外村君が物凄い速さで走り去ったけど何があつたの？」

「厳罰に喚いた三馬鹿に綾小路が背骨を折るつて脅した」

「もう力を晒したから今更だしな」

「怖過ぎでしょ。でも清隆はその力であたしを守ってくれるんでしょ？」

軽井沢は自慢げに綾小路に話しかけると綾小路は考える素振りをして頷く。

「そうだな……以前にも言ったが、この力を使って恵を守るつもりだ」

「たうわっ！へ、変な事を言ってるんじゃないわよ！」

軽井沢はいかなり素っ頓狂な声を出して走り去って行くが……

「たうわ？」

俺と綾小路は妙な奇声に首を傾げる事しか出来なかつたのだった。

クラスポイント

Aクラス 1103ポイント

Bクラス 794ポイント↓844ポイント

Cクラス 659ポイント

Dクラス 0ポイント(実質マイナス50ポイント)↓0ポイント(実質マイナス10

0ポイント)

## 逆恨み、怒り、殺意

「つて、訳でウチのクラスに50クラスポイントが入り、三馬鹿は刑務所のような生活を過すことになった」

「くははっ！ やっぱり須藤や由比ヶ浜は俺達のクラスにとって天使だな！」

朝のHRが終わってから俺は事の顛末を話すと龍園は高らかに笑う。クラスの空気も明るい。結果的に50のクラスポイントが入ったから当然だろう。

しかし須藤も由比ヶ浜も共に暴力を振るった事によってウチにクラスポイントを与えてくれてるが、暴力を好む龍園に暴力を使つて貢献するとは皮肉だな。

「何にせよ今回の事件により、ペーパーシャツフルで負けてもそこまで損しないし、勝てばさらにクラスポイントも増えるし気合を入れていくぞ」

その言葉に大半の生徒が頷き、同時にチャイムが鳴り1時間目の担当教師が入ってくる。しかし大半の生徒は普段より真剣な表情になっている。

ハッキリわかる。クラスの士気は静かにはあるが確実に上がっている。この士気を維持してまた本番に挑んで欲しい。そして仮に対戦相手がCクラスで、勝つ事が出来

れば金星を獲れて一皮剥ける事もある。まあ自信をつけて調子に乗る事もあるかもしれないが、そこは龍園に仕切つて貰うとしよう。

そう思いながら俺は教卓から自分の席に戻り教科書とノートを準備するのだった。

「ではHRを終了する」

須藤達が罰を与えられた放課後、Dクラス担任の茶柱は疲れた表情を浮かべながら教室から出て行く。

それに伴い須藤が検査の為、山内と池が重い空気から立ち上がり逃げないように歩き出す。

「あくあ。何であんな犯罪者共と同じクラスなんだろ」

「さっさと退学しろつての」

「もうAクラス卒業どころからクラスポイントが+になるのも絶対に無理だろ」

「俺、実家が寺だから卒業まで修行の一環にするのも悪くないかもな」

そんな風に悪意が飛び交っている。朝いきなり茶柱先生に更にクラスポイントを借金したと言われた際は怒号が飛びまくり、まさに世紀末だった。

休み時間になると罵詈雑言は当たり前前で、「あのペナルティは屑にはお似合い」って言った奴もいる。その際には須藤がブチ切れたが綾小路が須藤の名前を呼ぶと足を止めてしまっていた。最早須藤の中で綾小路の存在はトラウマになっている。

そんな綾小路はといえば……

「ねえ綾小路君。スーパーに食材を買いに行くから荷物持ちしてくれない？綾小路君も幾つか食材を買って良いからさ」

「わかった」

軽井沢が綾小路に誘いをかけている。しかし違和感を感じない。綾小路が軽井沢を須藤から守って10発も殴られたのは生徒の大半が見ていたのだから。

しかし……

「ねえ、けいけい。何でご飯を買えるポイントを持つてるの？狡くない？」

「そうね。稼ぐ手段があるなら教えなさい。クラスの為には当然の義務よ」

事件の時に食堂に向かっただけで見ていなかった由比ヶ浜と雪ノ下は軽井沢に問い詰める。

事件を見ていなかった2人は今朝、茶柱が事件の顛末を説明して際、事件を起こした

三馬鹿や須藤に殴られた八幡をボロクソにこき下ろしたが、クラスの大半は「ブーメラン乙」と冷めた眼差しで2人を見ていたのは言うまでもない。

そんな2人に絡まれた軽井沢は心底嫌な気分になりながら口を開ける。

「別に。知り合いが恵んでくれたから、昨日あたしを助けてくれた綾小路君に奢ってあげるだけ」

「じゃあ幾ら貰ったの？ちよつとくらいわけてよ！困った時はお互い様じゃん！」

「嫌。行く綾小路君」

「待ちなさい。話は終わってないわ。貴方のような人間性に問題がある人にポイントを渡すような人間は相当愚かな筈。利用出来るかもしれないから教えなさい」

雪ノ下が止めに入るが、クラスの大半は「いや、お前の友達の由比ヶ浜の方が遥かに愚かだからな」という考えを抱く。まあ口にしたら由比ヶ浜が騒いでストレスがマツハで加速するから口にはしないけど。

「雪ノ下さんってプライバシーって言葉は知らないの？そもそも人の知り合いを愚かって言わないでくれない？由比ヶ浜さんの方が愚かじゃん」

「はあ?!あたしの何処が愚かだし！」

由比ヶ浜が信じられないといった表情で叫ぶ。クラス全体から「全部だよ！」と無言の圧力が生まれる。

そんな由比ヶ浜に対して軽井沢は怒りを通り越して憐れみの眼差しを向ける。

「本気で言ってるの？赤点を取ったり、AクラスとBクラスが同盟を結ぶキツカケを作ったり、2回も停学になって他クラスにクラスポイントを支払ったの？」

「赤点はテスト前にヒツキーやチビが集中力を乱したからだし、同盟のこともチビがあたしを逆恨みをしたからだし、停学についてもヒツキーが何かズルしたからに決まってる！」

「そんな訳ないじゃん。というか停学の1回は白波さんを殴ったからで比企谷君関係無いし」

話によればあの場所にいたらしいが、軽井沢は八幡は全く無関係であると有栖から聞いている。

「何にせよポイントは比企谷君がくれたものだからあげるつもりはないから」

「はあ?!ヒツキーがあげたの?!あたしをこんな目に遭わせたヒツキーが!」

「……あ」

由比ヶ浜の怒鳴り声に口を滑らせた事を自覚する軽井沢だが、次に八幡に会う時は土下座する事を決意する。

「行くぞ軽井沢。これ以上ここにいてもストレスでしかない」

そんな中、綾小路は軽井沢の手を掴んで早足で歩き出す。ホワイトルームで特別な教

育を受けた綾小路はこの学校に入学するまで感情というものを全く理解出来てなかったが、由比ヶ浜つて存在が不快感という感情を教えてくれた。

いずれ感情を知りたいと思つたが、最初に理解した感情が不快感である事に若干シヨックを受けたくらいだ。

綾小路は恥ずかしそうにする軽井沢の手を引つ張つたまま去ろうとするが、雪ノ下が綾小路の前に立ち、手を伸ばして綾小路を合気道の要領で投げようとする。

「待ちなさい。話はまだ終わつてないわ。無視するなら力づくでも……痛いつ！やめなさい！」

しかし雪ノ下が投げる前に綾小路は雪ノ下の手首を掴み、少しずつ力を強める。その気になればリングも潰せる綾小路の腕力に雪ノ下は悶絶する。

「ゆきのんになにすんだし！」

由比ヶ浜が鞆を横薙ぎに奮つて殴りかかってくる。それに対して綾小路は焦らずに身を屈めると……

「ぐふっ！」

「ゆきのん！」

大きく振るわれた鞆は雪ノ下の顔面に直撃する。モロに食らつた雪ノ下はよろめいてそのまま地面に倒れ伏す。

「ゆきのん?! しっかりして! ゆきのん! どうしてくれんだし?! アンタが躲したからゆきのんに当たったじゃん!」

由比ヶ浜は綾小路に八つ当たりをするが綾小路はそれを無視して軽井沢を連れて教室から出て行く。

そんな綾小路達に由比ヶ浜はギャーギャー騒ぐ中、大半の生徒が冷たい眼差しを向けている。

(ほんつとうにウザいなあ。惨たらしく死ねよ)

中でも榎田桔梗は苦笑を浮かべながら内心では殺意を剥き出しにしている。榎田自身、何かしらで一番にならないと気が済まない性格である事から、誰にでも優しく振る舞う事で信用される点でクラスで一番になっている。

しかし最近になって後悔している。理由は簡単、由比ヶ浜の存在だ。雪ノ下や須藤、堀北や池や山内も榎田からしたら嫌悪対象だが由比ヶ浜に比べたら可愛い存在だ。

何故なら由比ヶ浜が馬鹿をやるたびにクラスメイトが由比ヶ浜に対する暴言を吐くが、ここで仲裁しないと信用を失う可能性もあるので、クラスの大半と同じ気持ちを抱きながらも仲裁しているのだ。

更に由比ヶ浜は自分が馬鹿にされると自分の味方になってくれる雪ノ下や平田や榎田に頼ってくるので、それがまた榎田のストレスを加速させる。

自分も理不尽な怒りを第三者に向ける事もあるが、由比ヶ浜の理不尽さに比べたら遙かにマシな自信がある。

そんな事もあり櫛田は由比ヶ浜を誰よりも憎んでいる。入学初日に堀北を退学させる決意をしたが、由比ヶ浜の退学と引き換えに堀北の退学を諦める……という契約があるなら喜んで由比ヶ浜の退学を選ぶ自信があるくらいだ。

(あゝあ。そろそろ髪を切らないと。身嗜みは大切だしね)

櫛田は未だにギャーギャー喚く由比ヶ浜を見て殺意を宿しつつ、ストレスによって増えてきた白髪存在を忌々しく思いながら、内心でため息を吐くのだった。

## 方針（色々な意味で）

「お勉強失礼します。少し宜しいですか？」

図書館にて俺が文系科目の指導をAクラスとBクラスの男女に教えていると声をかけられるので振り向けば有栖がクリアファイルを持っている。

「どうした？テスト作成について問題があったのか？」

「いえ。テスト作成は順調ですが、実際に解いてもらいたいのです。時間がある時に模擬テストを受けて頂けますか？」

なるほどな。俺達に解かせて難易度などに変更する必要があるから妥当だ。

「わかった。テストに制限時間を付けるならどれくらいだ？」

「20分、どんなに甘くしても30分ですね」

「よし……じゃあ石崎、伊吹、神室、ひよりはちよつと有栖の作った問題を解いてくれ」「別に良いけど何でその4人？」

「成績が違う複数人にやらせた方がデータを取りやすいからな」

伊吹の問いにそう返す。馬鹿の石崎、平均レベルの伊吹、平均以上の神室、優秀なひ

よりにやらせて今後の作成に役立てて欲しいものだ。

「ではコピーしてから始めてください。椎名さんが抜けた穴は私が埋めます」

有栖はそう言ってひよりが座っていた椅子に座って早速指導を始めるので、俺は石崎と伊吹と神室、ひよりを離れた席に座らせてからコピー機に向かうと……

「あ、比企谷君。もうちよつと待っていてくれるかな?」

そこにいたのは一之瀬で大量のコピーをしている。多分クラスメイトの為に対策プリントを作っているのだろう。

「別に構わない。そのプリントは俺達Bクラスからクラスポイントを篡奪する為の作戦アイテムか?」

「うん、まあそうだけど……その言い方はやめてくれないかな?」

一之瀬は苦笑しながらそう言ってくるが、パーパーシャツフルで俺達Bクラスを倒しに行くんだろ?……って、遠回しに言っているのがわかったのだろう。

「冗談だ。何にせよお前らはやっぱりウチを狙うつもりか?」

「あはは……まあね。ウチのクラスは実質ビリだし、早いうちにBクラスに戻りたいから、ね?」

一之瀬は遠回しにDクラスは眼中にないって言っているが、当然だろう。

現在のクラスポイントは……

Aクラス 1103ポイント

Bクラス 844ポイント

Cクラス 659ポイント

Dクラス 0ポイント（実質マイナス100ポイント）

って感じだが、もしもBクラスとCクラスが直接対決をしてCクラスが勝てば、ウチから100ポイントだけCクラスに移る。

そうなるとウチが744ポイントで、Cクラスが759ポイントとなりウチはCクラスに落ちるので一之瀬からしたら負けたくないだろう。

しかし……

（そんな焦る必要もないだろうに）

大半の生徒はクラスの昇降を気にし過ぎだろう。重要なのは最後にAクラスにいる事であり、1年生の内から上がったと喜んだり、下がったと落ち込む必要はないと思う。まあDクラスの連中は焦るを通り越して諦めているだろう。

「そうか。なら頑張つてクラスポイントを上げて、最終的にAクラスになって自分達以外の同学年約120人の希望をスタボロにして卒業してくれ」

「言い方！ その言い方、悪い事をしてるみたいだからやめて！」

一之瀬が慌てながらツツコミを入れてくるが、これを第三者が聞いたらAクラスに悪

い印象を持つだろうな。

「事実だろ？俺達は自分自身の欲望を叶える為に他クラス120人を蹴落とす為に学校に通ってるんだから」

「そうだけどさ！そこは160人の生徒が40の希望を賭けて戦ってるみたいない言いでよ！」

ものは言いようだな、うん。同じ意味なのに、言い方でこんなに印象が変わるなんてな。

「まあそれは冗談として、わざわざ俺達に挑まなくてDクラスから徹底的に搾取すりゃ良いだろ。あんな金づるは滅多に見れないぞ」

4月から5月までは色々な生徒が原因で0ポイントになったが、5月以降には由比ヶ浜と須藤の2人の愚行で300ポイントくらい引かれて、今じゃマイナス100ポイントだからな。あの2人を適当に挑発すればポイント何回余裕だろう。

「うーん。同盟は解消したけど、だからって執拗に追い詰めるのはどうかなくて……」

「優しいな。どうせなら無人島試験みたいに乱戦的な特別試験でDクラスに奇襲をして、全部Aクラスとウチの仕業にすれば良いのに」

「そんな火事場泥棒みたいな……」

火事場泥棒みたいというが、実際にルールを破らないなら火事場泥棒的な事をしても

問題はない。寧ろ俺は龍園みたいな略奪派じゃなくて火事場泥棒派だ。

「別にお前のやり方を強要するつもりはない。ただお前はリーダーだ。リーダーって、このクラスをAクラスに行かせることを最優先にする責務がある。場合によって手段を選ばなかったり、自分の方針を曲げてでも勝ちに行ったり、場合によっては弱者を切り捨てないといけないから、火事場泥棒的なやり方も考慮した方が良いんじゃないのか？」

リーダーにとって重要なのは部下を勝ちまで導く事だ。その為に泥水を啜ってでもチャンスを得ようとする奴がリーダーとして高い資質を持っている。

「そうかもね。けど私は……」

そこまで話すと一之瀬は苦悶に満ちた表情を浮かべながら口籠る。

「あーコピー終わったから行くね！待たせてゴメン！」

一之瀬は慌ててコピーを回収してからCクラスの生徒がいる場所に向かって早足で去って行く。多分弱者を切り捨てる云々について気にしてるのだろう。

そう思いながらも模擬テストをコピーして有栖の元に向かう。

「待たせた。配ったら始める。制限時間は25分で良いか？」

「それで構いませんよ。では頑張ってください」

俺が石崎達に配ると4人は解き始めるが、石崎は真っ先に憂鬱そうな表情に変わる。

そして一通り問題を見た伊吹と神室も嫌そうな表情を浮かべながら始める。いつも通りの表情で問題を解き始めるひよりは流石の一言だな。

「ところで八幡君。一之瀬さんとは何を話したのですか？」

有栖にそう聞かれたので先程のやり取りを話すと、楽しそうな笑みを浮かべる。

「一之瀬さんは弱者を絶対に見捨てないでしょう。しかし退学者が出たらどんな表情を浮かべるのか楽しみです」

「まあ泣くんじゃね？」

「そうですね。そうなった時にどんな言葉を一之瀬さんに話すか龍園君とはよく相談しているのですよ」

……ま、まあ暴君と女帝が手を組むとそうなるわな。龍園が高笑いをしながら下品な煽りをして、有栖が楽しそうに微笑みながら上品な煽りをするのが容易に想像出来るわ。

「しかしその話題について龍園君と話すと毎回揉めるんですよ」

「？何でだよ？」

2人ともドSだから一之瀬を虐める際に足並みを揃えてもおかしくない筈だが……

「もし一之瀬さんが壊れたら、私は一之瀬さんを鞭を好む雌犬にしたいのですが、龍園君は一之瀬さんを肉奴隷にしたがっているのですよ」

「……………」

そう来たか。どうやって一之瀬を壊すか揉めているのではなく、壊した後の処遇について揉めてるようだ。というか壊すのは決定事項だな……

可哀想とは思わなくはないが止めるつもりはない。というか止められるはずがない。龍園も有栖も天然高級サデイストだから凡人の俺が止めるなんて絶対に無理だ。

「……………まあ頑張れ」

俺はありきたりな言葉を口にしてから本来の目的である指導役に戻る。しかし一之瀬が有栖の雌犬……つまり俺の部屋でもSMプレイをやるつもりか？俺、SMプレイは趣味じゃないから勘弁して欲しいな……

そう思いながら指導を再開するのだった。そして20分ちよいしてから石崎達のテストを見てみれば、石崎が30点、伊吹が42点、神室が59点で、毎回テストで90点越えが当たり前のひよりでも82点だったので、かなりの難易度である事がわかった。やっぱり有栖に頼んで正解だったな。

そして1週間後……

「では小テストを始めるがその前に伝えておく。君達が攻撃対象にしたCクラスへの指名は被っていないので承認された。そしてこのBクラスに問題を出す事を希望したクラスはCクラスとDクラスだが、クジの結果でCクラスとなった」

坂上先生がそう告げ、Cクラスとの一騎打ちが決定されるのだった。

## 殺意×2

Cクラスとの対戦が決まってから小テストを行った翌日のHR、坂上先生がデカイ紙を持って入ってくる。

「おはよう諸君。早速だが昨日の小テストを基に決まったペアを発表する。尚、ペアについてはテストの差、最大点と最小点の差が広いペアから決まっていくが、君達は理解していたようで何よりだ」

言いながら坂上先生が紙を広げるが、俺のペアは石崎だし、他のペアについても計画通りのペアだな。

そして坂上先生は連絡事項だけ説明すると去って行くので、代わる形で俺が教卓に立つ。

「さて、ペアについては大方予想通りだが、ここからは勉強科目を絞っていく」

「理系が余り得意じゃない比企谷氏のペアの石崎氏が理系を重視する……ようにですか？」

金田が手を挙げて発言するので頷く。

「そうだ。他にも文系を得意とする中堅2人がペアを組んだら理系科目を重視する……って感じた。俺もだが、今回の試験で苦手科目に対する苦手意識を改善していくように。何度も言うが、今回の試験で一番重要なのは勝つ事じゃなくて、勉強する習慣を身につけさせる事だ」

言いながら息を吐いて一区切りする。

「おそらく学年末に行われる試験は学力、身体能力、知識などあらゆる面で俺達を試してくるだろう。その際に俺達は龍園のラフプレー、そこそこ高いBクラス全体の身体能力も必要だが、学力も役立つだろうから今のうちに学力とも向き合うように「ふざけんなし！自分の事しか考えないなんてガキじゃないの?!本当に高校生?!」煩えな……」

話していると隣の教室から聞き覚えのある、覚えたくない怒鳴り声が聞こえてくる。これにはクラスメイトもゲンナリした表情を浮かべるが、龍園やアルベルトのゲンナリした表情は新鮮であると思うのだった。

「とかどんな会話をしたか知らんが、由比ヶ浜はブーメランって言葉を知らないのか？」

「ではペアの発表は以上だ。本番まで勉強を欠かさないようにしろ」

「待ちたまえティーチャー。話がある」

Dクラスの教室にて担任の茶柱が教室を出ようとしたタイミングで高円寺六助が止めに入る。

これにはクラスメイトのみならず茶柱も意外に感じる。高円寺が誰かに話しかけるなんて珍しい光景だからだ。

「何だ高円寺」

「1学期の最初の体育の授業で東山ティーチャーは水泳でクラス一位を取れば5000ポイント支給すると言って、1位を獲得した私にポイントを渡したのだよ」

「ああ。お前が日本記録を出して職員室でも話題になったな。それがどうかしたか？」

「その事から察するに教師はプライベートポイントを融通出来るようだが、今回の期末試験で満点を取れたら各科目につき3万ポイント、全科目で満点を取れたら更に6万のボーナスポイントを頂きたい」

高円寺の発言にクラスメイトから騒めきが生まれるが高円寺は意に介さない。

「つまり全科目満点なら30万寄せときたか。今回の期末試験は、Aクラスが作成す

るとわかった上で言っているのか？」

「当然さ。普段の試験では面倒だから途中で切り上げているが、その気になれば全科目満点なんて余裕さ」

高円寺は髪を手入れしながら笑みを浮かべる。

「……良いだろう。満点を取れたらボーナスをやろう。ただし99点なら無しだぞ」

茶柱の言葉に成績優秀者達は慌て出す。いくら成績優秀とはいえ、満点は厳しいからだ。それなら条件を緩くして貰いたいのが本音だ。

「茶柱先生。そのボーナス制度をもうちょっと緩く出来ませんか？それでは厳し過ぎます」

クラスを第一に考える平田からしたら条件を緩くして多くのクラスメイトにポイントを持たせたいのが本音だ。

「最初に案を出したのは高円寺だ。高円寺が認めるなら構わない」

茶柱の言葉に高円寺に視線が集まるが、高円寺は机の上に足を組み態度を変えない。

「そうだねえ……儲けを出した生徒は全員儲けの半分を私に献上する契約を私と結ぶなら各かじやないねえ」

高円寺の提案に成績優秀者は不満そうな表情を浮かべる。しかし大半は由比ヶ浜という我儘女の愚行に巻き込まれた事で精神力が強くなっている事、これまでに碌にポイ

ントを貰ってない事から妥協しようと考えている。  
その時だった。

「ふざけんなし！自分の事しか考えないなんてガキじゃないの?!本当に高校生?!」

由比ヶ浜が納得いかないとはかりに机を叩く。これによってクラスの大半や茶柱は無表情に変わる。

普段から自信ある笑みを絶やささない高円寺ですら無表情に変わる。

「君には関係ないだろう？君の実力では高得点は取れないのだから」

「そんなのやってみないとわからないじゃん！」

由比ヶ浜の叫びにクラスメイトの大半が「お前じゃ無理だ」って眼差しを向ける。

「さて、学力に自信がある者達よ。先程私が提示した条件を呑むかい？呑むならティーチャーに条件を多少甘くする頼むが」

「はあ?!無視すんなし!」

高円寺は由比ヶ浜を無視する形で話を進めるが、由比ヶ浜は怒りながら立ち上がり、高円寺に詰め寄ろうとするが……

「黙りたまえ。それ以上喚くと二度と喋れない身体にしてあげよう。前から思っていたが、君の全てが不愉快だ」

高円寺が不快感を抱きながら殺意を剥き出しにする。放たれた殺意は由比ヶ浜に向けられ……

「びいっ……」

殺意をダイレクトに向けられた由比ヶ浜は腰を抜かしてしまい、スカートの下から金色の液体が床に広がる。

それによって由比ヶ浜の周囲の生徒は距離を取る。

「由比ヶ浜さん……よくも由比ヶ浜さんに恥をかかせたわね！」

由比ヶ浜の醜態に雪ノ下が怒りながら立ち上がろうとするが……

「痛いっ！手を離しなさい！」

雪ノ下の後ろの席の綾小路が雪ノ下の腕を掴み、万力の如く握りしめる。軋むような音が聞こえて、雪ノ下は怒りと痛みに顔を歪めながら綾小路を睨む。

「今回も馬鹿なのに喚いた由比ヶ浜の自業自得だ。大体恥をかかせたとお前は怒ったが、由比ヶ浜は既に生き恥……存在自体が恥だから今更だ！」

綾小路の言葉に一部の生徒は噴き出して震え出す。笑っていない生徒も同意見だからか力強く頷いている。

「ござけないで！貴方みたいな凡人が私に口を出す権利が！なら手を出す権利はあるな？須藤の二の舞にするぞ」っ……………！」

高円寺に続き綾小路も殺意を出して雪ノ下にぶつける。失禁はしないが雪ノ下も床に倒れ込む。

既に由比ヶ浜の存在により、初めて感情について理解した綾小路。しかし理解した感情が嫌悪の感情であるが故に、綾小路は嫌悪を感じたら容赦が無くなった。

池や山内みたいな雑魚が喚いたら容赦ない毒舌で封殺して、須藤や由比ヶ浜や雪ノ下みたいに口でも言ってもわからない馬鹿には暴力をチラつかせるようになった。

最初は綾小路の冷徹さにビビったクラスメイトだが、害悪5人が以前より大人しくなったことや、5人以外には普通の態度である事もあり、最近になって綾小路が動いた際には大半が「良いぞ綾小路」と思うようになった。

日頃平田は「暴力は良くない」と綾小路を咎めるが、大半の生徒は綾小路を庇うようになった。最近では櫛田も平田のように咎めなくなっている。

しかし今の綾小路からしたら嫌悪以外の感情も早く理解したいと思っている。感情の一部を理解した結果、馬鹿を黙らせる事にしか使っていないのだから当然であるが。

綾小路は雪ノ下の腕から手を離しながら「次は喜びや情欲などの感情を知りたい」つて、自分をキラキラとした眼差しで見えてくる軽井沢を見返しながら思うのだった。

そして馬鹿2人が黙った所で高円寺との交渉を重ね、「1科目ごとについて、80点以上なら5千ポイント、90点以上なら1万ポイント、95点以上なら2万ポイント、100点なら3万ポイント。8科目全てで満点なら30万ポイント。儲けた生徒は儲けの半分を高円寺に渡す」という条件になった。

## 屋上

キーンコーンコーンコーン

昼休みの開始を告げるチャイムが鳴ると日本史の茶柱先生は授業を切り上げて教室を出て行くので俺はひよりと一緒に教室を出て、有栖と合流してから屋上に行く。

そして近くにある芝生にシートを敷いてから……

「「頂きます」」

そう言うってから弁当を食べるが相変わらず2人が作った弁当は美味い。食べていて良い気分になる。

しかし恥ずかしい気持ちにもなる。以前2人に美味さの秘訣を聞いたら……

「「八幡君への愛情をたっぷり入れましたから……」」

と艶のある眼差しでそんな事を言ってきたのだ。そう言われた際にはそのまま2人の服を全部脱がして愛撫しまくったが、その翌日から2人の愛情弁当を食べる度に恥ずかしい気持ちになってしまうのだ。

そう思いながら食べていると……

「やっぱ高円寺君は只者じゃなかったよね」

「けど、その後は由比ヶ浜さんが煩すぎだよね」

「まあいつもの事だから慣れたけど」

軽井沢が佐藤と松下と一緒に屋上に上がってくる。向こうもこっちに気づいてやって来る。

「比企谷君。改めてポイントをくれてありがとう」

「漸く山菜定食地獄から解放されたよ」

「しかも無料食品に頼らなくても挽肉も買えるようになったし、今日なんか奮発してジュースを買っちゃったよ」

「[[……]]」

改めて聞くとDクラスって悲惨過ぎだろ……ジュースを買う際にも奮発って言うなんて。

「だから比企谷君には本当に感謝してるよ。お礼に今度スク水を着て見せてあげよっか？」

「結構だ！つかその噂まだ消えてねーのかよ！」

松下の提案に声を荒げてしまう。アレから大分経過したよな?!

「普通に消えてないよ。普段クールな坂柳さんが大声を出した事もあるしね」

「うう……」

軽井沢の返答に有栖は恥ずかしそうに俯く。アレは有栖からしたら黒歴史だから仕方ないだろう。

とりあえず話題を逸らすとしよう。

「それはデマだから言わないでくれ。それとちよつと聞きたいことがあるから一緒に食わないか？」

「聞きたい事？別に良いけど何を聞きたいの？」

「朝のHRで由比ヶ浜が騒いだ理由だな」

「こ、高円寺君の名前も先程出ていましたが、彼に由比ヶ浜さんが馬鹿をやったのですか？」

「あー、その話ね。じゃあ座って良い？」

軽井沢が質問したので俺達は座るように促すと3人は弁当箱を開ける。3人の弁当を見ればモヤシが多いが節約には必須なのだろう。

「じゃあ最初から話すけど、今日ペーパーシャッフルのペアが発表されたじゃん」

「ええ。由比ヶ浜さんのパートナーが高円寺君だったのでしたか？」

「違う違う。高円寺君のパートナーは沖谷君って男子で由比ヶ浜さんは雪ノ下さんとペアだよ」

「なるほど。屑同士のペアですか」

佐藤の言葉に有栖がボソリと毒を吐くが、ひよりでも止めに入らない。実際ひよりも由比ヶ浜に毒を吐かれたからな。

「結果的に良かったと思うよ。雪ノ下さん以外が由比ヶ浜さんと組んだら、2人のペアのモチベーションは下がるだろうし」

松下の言う通りだな。雪ノ下は学力が高いから組む相手は必然的に馬鹿だろうが、雪ノ下の性格的に由比ヶ浜以外の生徒には罵倒をするだろう。

由比ヶ浜のペアについても「コイツとペアかよ……」って絶対に嫌がるだろうし。

「話を戻すよ。ペアが決まってるから高円寺君は教師ならポイントの融通が出来るからって、茶柱先生に本番で満点を取れたら3万ポイント、8科目全てで満点なら30万ポイント寄越せて交渉をしたの」

なるほどな。教師ならポイントに対して融通が効くらしいし、そういった交渉をするのも戦術の1つだろう。

「ただ満点以外には無しって条件だから他の学力優秀者は緩くしてくれて高円寺君に交渉したら、高円寺君は儲けの半分をくれるならって条件を出したの」

「わかりました。そこで由比ヶ浜さんが怒ったのですね」

ひよりの言葉によって朝の事を思い出す。由比ヶ浜はあの時に「ふざけんなし！自分

の事しか考えないなんてガキじやないの?! 本当に高校生?!」って叫んだが、それが原因だな。

「当たり前。で、高円寺君は由比ヶ浜さんを無視する形で話を進めたら由比ヶ浜さんがキレて詰め寄ろうとしたんだけど、高円寺君が本物の殺意を出して由比ヶ浜さんを失禁させたの」

「ほう……」

軽井沢の言葉に有栖はそれはそれは楽しそうに笑う。しかし殺意だけで相手を失禁させるなんてどれだけヤバい殺意なんだよ。

「そして雪ノ下さんがキレただけで、今度は綾小路君が雪ノ下さんを殺意で黙らせて、無理矢理騒動を終わらせた感じ。最終的に高円寺君に半分ポイントを渡すのと引き換えに報酬条件が緩くなった感じ」

そんな条件を呑むって事は余程ポイントに飢えているのだろう。

「ま、多少緩くなっただけであたし達には関係ない話だけどね」

「私達も比企谷君から貰ったポイントが尽きる前にどうにかポイントを得る方法を考えてないかね」

軽井沢と佐藤が愚痴を吐くと有栖が手を挙げるが、絶対に容赦ない提案をするだろう。

「でしたら由比ヶ浜さんに缶コーヒーを頭からかけたら一回につき、1万ポイントを差し上げますよ」

流石ドS……実に容赦ないな。

「気持ちがありがたいけどパス。由比ヶ浜さんって悪口とか軽い暴力を振るわれたらすぐに学校に訴えるからね」

「最初の一回はまだしも、流石に何回もコーヒーをかけるのは学校から罰を与えられようだし」

2人は遠慮するが、言葉の内容的にペナルティが無かったら何度もかけるってことになる。アイツはどんだけ恨まれているんだ……

そして由比ヶ浜は暴言や暴力をしょっちゅう使ってるくせに、使われると被害者面って……面の皮分厚過ぎだろ？

しかし教師はポイントを融通出来るからそれを利用する……か。無人島試験の件で安定した収入を確立出来たから考えた事はなかったな……あ。

「なら教師の雑用を手伝う形でポイントを得るのはどうだ？確か教師は決められた区画の掃除、花の水やりがあったし、それを肩代わりするからポイントを要求する……みたいな感じで」

坂上先生が面倒臭そうに掃除や水やりをしているところを見た事があるからな。

「あ、その理論でしたら図書室の返却本の整理も出来るかもしれませんが。司書さんは大変と以前言っていましたから」

「他にも寮の庭掃除もありますね。管理人さんがやつてるのを見ましたよ。この学校は秘密主義の傾向があり自分で情報を得る必要がありますが、ポイント獲得手段も自分で探さないといけないのでしよう」

それを実行すれば収入が入るだろう。

「そういえば茶柱先生が前に花壇に水やりをしてたね」

「じゃあ後で学校側に頼まない」とい

「その前にちゃんと契約内容を考えないと。由比ヶ浜さんあたりは仕事を強奪してくるかもしれないし」

3人はポイント獲得手段を知れたから活発に意見を出す、松下の言うように契約内容についてはしっかりと考えるべきだ。由比ヶ浜以外のDクラスの生徒もポイント獲得手段を欲しがるだろうからな。

「いやー、本当に助かるよ。ウチなんか厄病神や盗撮犯がいるから逆転の芽がないからね」

軽井沢は笑いながら礼を言ってくるが、本当に不憫だな……

「というか坂柳さんって理事長の子供でしょ。何で由比ヶ浜さん達がこの学校に入れた

か知らないの?」

「それにクラス分けも変だよ。一之瀬さんや平田君や櫛田さんはAクラスでも通用すると思うし」

そんな質問が飛んでくる中、有栖は冷静に口を開ける。

「入学基準についてはある程度知っていますけど口止めされているので言えません。そして一之瀬さん達については裏の顔があり、中学生時代に問題を起こしたからでしょう。実際、この世に善人なんていませんから」

「そんな事ないよ! 少なくとも平田君と櫛田さんは善人だよ! だって入学してからずっと由比ヶ浜さんを庇ってるんだよ! そんなの善人……聖人じゃないと無理だよ」

「……む。確かにそうですね」

佐藤の反論に有栖は真面目な表情で頷く。確かに裏の顔がある屑なら由比ヶ浜を庇う筈はない。

待てよ……

「じゃあアレだ。平田や櫛田はマゾヒストで中学時代にSMプレイをやって学校にバレて評価を落としたんだろ」

「どんな発想よ?!」

軽井沢が真っ赤になって怒る。

「いやだって由比ヶ浜を庇うなんて聖人かマゾヒストだろ？ 聖人ならDクラスにいるわけないし、消去法でマゾヒストじゃねえの」

「むう……一理あるね」

松下も頷いてるし、やっぱりマゾヒストだろう。それ以外考えられない。

結局俺達は真剣に語り合った結果、「平田と櫛田はマゾヒストであったが、中学時代に問題を起こし、評価が落ちてDクラス行きになった」と考えに至った。

そして放課後に軽井沢達が学校に交渉した結果、軽井沢は茶柱先生がやる清掃と花壇に水やりを週6日で1日900ポイントで、松下が図書室の返却本整理を週に4日で1日1500ポイントで、佐藤が寮の周りの掃除を週に3日で1日2000ポイントで働く事になった。

そして翌日にそれを知ったDクラスの生徒の1人が広めて、クラスメイトが狡いと反論したが、「他の生徒がやっても報酬は契約者に入る」って内容を含んだ契約書を茶柱先生が見せたら、由比ヶ浜以外の生徒は悔しそうに黙った。

由比ヶ浜は納得いかずギャーギャー騒いだらしいが綾小路が殺意をぶつけて、2日連続の失禁を経験して、キレた雪ノ下を高円寺が殺意で黙らせたらしい。

## 義妹。パラダイス

「あー、疲れた……」

そう呟きながら俺は背中からベッドに倒れ込む。

「お疲れ様です八幡君」

「流石に一部と二部の両方は疲れますよね」

倒れ込むとひよりと有栖が心配そうに覗き込んでくる。ペアが決まってから2週間、本番まで後10日であるが俺の疲労はかなり溜まっている。

基本的に勉強会は授業が終わって直ぐに始めて夕食までの第一部、夕食後から遅くまでやる第二部に分けてやっている。

しかし俺は一部と二部の両方にて文系科目の指導を行なっている。

理由は簡単。今回の指揮官は俺だから、モチベーションが下がらないよう、誰よりも働く必要がある。少なくとも俺がサボったりしたら良い影響は間違いなく生まれないからな。

とはいえ結構疲労が溜まっているのは事実。学校の授業が終わってから、夕食を挟むと

はいえ、更に5時間指導をして、帰ったら理系科目の勉強をしないといけない。

よって15分くらい休んだらベッドの誘惑を振り切って勉強するつもりだ。

と、ここでひよりと有栖は内緒話をしたかと思えば、そのまま脱衣所に向かつてドアを閉める。何をするつもりだ？

そう思っていると携帯が鳴るので見てみれば「私達が肩を叩くまで目を閉じて待っていてください」ってメールがひよりに来た。

意味はわからないが特に拒否する理由もないので「了解」と返事をしてから目を閉じる。

そして暫くすると脱衣所のスライド式のドアが動く音が聞こえて、気配が近寄ってくる。

そして2人の気配が俺の近くで止まったかと思えば肩をチヨイチヨイチ叩いてくる。目を開けろって事か……

俺が目を開けると……

「今日もお疲れ様。お兄ちゃん♡」

ちゅっ　ちゅっ

いきなり予想外の呼び方をされたかと思えば両頬にキスをされる。

予想外の展開に2人を見直すか、更なるインパクトに襲われる。

何故なら……

「頑張ったお兄ちゃんの疲れが取れるように一生懸命頑張るからね」

「お兄ちゃんがして欲しい事、一杯してあげるからね……」

普段敬語を使う2人が可愛らしい口調で、それでありながら過激な格好で迫ってきているからだ。

ひよりは黒のマイクロビキニを着ているが、大事な所も半分くらいしか隠れてなくて物凄くエロい。

しかも普段清楚なひよりが過激な水着で甘えん坊な態度を取るのギャップ差どころか、情欲と背徳感が生まれて変な気分になってくる。

有栖は以前噂になったスク水を着ているが、有栖の白い肌のように白いスク水で、胸元には「いちねんえーくらす　さかやなぎありす」と平仮名で書かれているのだ。

加えてスク水に似合うような子供っぽい口調がいけない魅力を生み出していて俺の

理性をゴリゴリ削ってくる。

エロい格好をしたひよりと小学生みたいな格好をした有栖が、同じ年の俺にお兄ちゃん呼びして甘えまくる……ハッキリ言って第三者から見たら犯罪現場だ。俺が南雲先輩なら学校に退学処分にするように申請するレベルだ。

しかし……

「お兄ちゃん。身体、好きただけ触って良いよ……んっ……」

「いっぱいお兄ちゃんとおちゅつちゅつしたいよ……ちゅつ……」

妹に成り切っている2人のメロメロ攻撃には抗えない。人間が自然に逆らってはいけないのと同じ事だ。

俺はもう遠慮するつもりはなく、そのまま2人を抱き寄せて交互にキスをしながら2人の身体のあらゆる箇所を揉みしだく。

近親相姦？義妹だから問題ない。こんな可愛い義妹が甘えてくるのだから、手を出さないほうが失礼だろう。

実の妹がいるのにヤバくないか？知らん。そもそも俺はもう実妹を家族と思いたくない。事故で入院した際は見舞い品を勝手に食うわ、俺の予定を勝手に教えるわ、俺の意志を無視して勝手に予定に決めるわ、お義姉ちゃん候補と喚くわと、受験勉強という自身の大切な予定を蔑ろにして全ての学校、それこそ滑り止めの滑り止めの学校に落ち

る馬鹿とはもう関わりたくない。

そう思いながら俺は2人の身体により癒されていく。

「んっ……お兄ちゃん、いやらしい触り方だよ……。ひより、恥ずかしい……」

「お兄ちゃんは本当にエッチだね。ありす、お兄ちゃんが喜ぶように一生懸命頑張るか  
ら……」

言いながら2人は甘えてくるが……

（がはっ！な、何て破壊力だ……）

俺は自身の名前を一人称にする2人にノックアウトしかける。そこらの女が同じ事をしたならばりっ子とドン引きしたが、2人の場合は普段とのギャップにより魅力を感じる事が出来る。っーかこの2人は何処で習ったんだ？

……いや、そんな事はどうでも良い。重要なのは……

「じゃあお兄ちゃん。服を脱ごっか」

「エッチなご奉仕、一杯してあげるね……」

この時間を楽しむことにしよう。

結局俺は日が変わるまで2人からご奉仕を受けまくり、その日の勉強は出来なかったが精神的に全快したので明日は万全の状態で過ごせるので良しとしよう。

翌日……

「ふあゝ、おはよう。ひより、有栖」

「はい。おはようございます八幡君」

「いつもより元気が見えますが、良かったです」

起きて2人に挨拶をすると普段通りの口調で挨拶を返してくる。どうやら妹タイムは終わったようだ。

しかし……

「なあ。機会があったらまたその格好で癒やしてくれないか？」

俺はマイクロボキニと白スク水を指差しながら頼む。2人のメモメロ攻撃は今後も食らいたいからな。

「もちろん良いですよ」

「ちよつと恥ずかしいですが……八幡君が喜んでくれるなら構いません。何なら違う格

好でも良いですよ」

「マジで？じゃあベビー服とおしやぶりも「お・こ・と・わ・りです！」痛えっ！わ、悪かった！冗談だ！」

軽い冗談を言ったら杖で脛を叩かれた。ハッキリ言つてメチャクチャ痛いです。

「八幡君。あまり揶揄つてはいけませんよ」

ひよりからも注意をされる。これは反省しないとイケないな。

「悪かったな有栖」

「膝に乗せて後ろから抱き締めたら許してあげます」

なんだ、そんな事で許してくれるなんて優しいな。

「わかったよ。ほいっと」

俺はまだスク水を着ている有栖を膝の上に乗せて、背後から抱き締める。第三者が見たら警察案件だろう。

「んっ……八幡君に抱きしめられるの、好きです……」

そう思う中、有栖は腕の中でくすぐったそうに動くが、それがまた愛おしく思える。

「では私は背後から八幡君に甘えます……」

ひよりは負けじと俺の背後に回つて抱きついてくる。ひよりの柔らかな身体の感情が惜しげもなく押し付けられている為に更なる快感がやってくる。

朝からこんな風に甘えられたのだ。更にひよりの朝食を食べれば俺はポテンシャルを完全に発揮出来るだろう。

そう思いながら俺は暫くの間、有栖とひよりによるサンドイッチを楽しむのだった。

「よしお前ら。試験まで10日を切って疲れが溜まつてるかもしれないが、後10日頑張ってくれ。じゃあ始めるぞ」

八幡がそう言ってAクラスとBクラスの優等生と指導を始め、一部の生徒は上級生が確保したブースに入りマンツーマン指導だ。

「ちっ、面倒臭えな」

龍園は面倒そうな態度をとりながらも筆記用具を取り出す。

「でもアンタ、ちゃんと勉強してんじゃん。サボると思つてた」

隣に座る伊吹が龍園に話しかけると龍園はため息を吐く。

「今回は全権を比企谷に渡したからな。奴が真剣に取り組めと言った以上従う」

実際龍園は八幡のやり方を高く評価している。先を見据えて、Bクラスの弱点を改善しようとしている事は、今回勝てなくても次に繋がる。そして積み上げた重みに自分のラフプレーを加えれば、これまで以上の攻撃になり得る。

「しかし比企谷は大丈夫なんですかね？普通の授業だけじゃなくて一部と二部の両方で指導してみたいですけど、過労で倒れませんか？」

「なんだかんだ真面目だからな。自ら先陣となつて士気を上げる腹だろう……まあそれ以外にもモチベーションを上げているんだだろうがな」

石崎の呟きに龍園は呆れ顔を浮かべ八幡の首筋に付いてある大量のキスマークを見てため息を吐くのだった。

間違いなく情事によってモチベーションを上げているな……と確信を抱きながら。

## 進路と愚痴

「……そんな訳で、何とか問題作成は終わったらしいよ」

軽井沢が玉葱を焼きながらそう言ってくる。

「そりゃ良かった。しかし四馬鹿は勉強をしてんのか？」

雪ノ下は成績優秀だが、他の4人がやっているのは想像出来ないけど。

「由比ヶ浜さんは雪ノ下さんに、男3人は愚痴愚痴言いながらも勉強会に参加してるよ。まあ超嫌われてるけど」

佐藤が嘲笑を浮かべながら肉をひっくり返しつつそう口にする。まあその表情も仕方ないだろう。女子なら当然の反応だ。

「まあ盗撮犯ですから当然でしょう」

「しかし何故盗撮をするのでしょうか？いやらしい映像が見たいなら、パソコンでいやらしい動画を探せばいいのでは？」

ひよりは理解が出来ないと言ったように首を傾げる。

「身近な人のエッチな動画を見たいんじゃない？そこんとこ男の比企谷君はどう考えて

るのかな？」

「知らん。盗撮趣味のない俺に聞かないで当人らに聞け。というか飯が不味くなるから馬鹿共の話題は止めろ」

からかうような口調の松下に対してそう返しながら焼けた肉を口に作る。

現在、俺は軽井沢の部屋でひよりと有栖、軽井沢と佐藤と松下の5人と焼肉を食べている。本来は自宅でひよりの飯を食う予定だったが、軽井沢からバイトを紹介したお礼にご馳走すると誘いを受けたのでご馳走になっているのだ。

そして焼肉の最中に答えるのが難しい質問が来たので、適当にスルーしたのだ。

「……塩が少ないな」

「え？比企谷君塩派？タレでしょ」

「いや、塩派って訳じゃないが今日は塩の気分だ」

言いながら塩を振りかけて食べると程よりしょっぱさがあって中々だ。

「そういえば坂柳さん達AクラスはDクラスに向けた問題の作成は終わったの？」

「ええ。ですが安心してください。退学者は1人も出ないようなどの科目においても50点分は馬鹿でも取れるように小学生低学年レベルの問題にしています」

今回の試験の赤点は「各科目において、ペアで60点以下になる事」「総合点においてペアで700点以下になる事」だ。

そしてどの科目でも50点を取れるテストを受けた場合、各科目で100点、総合点で800点を取れる事を意味する。

「……それ、由比ヶ浜さんが退学処分にならないようにだよな？」

「もちろんです。彼女にはまだまだ学校生活を楽しんで貰いたいですから」

「私としてはさっさと退学して欲しいんだけど。席が近いけど煩いし、漏らすし」

松下が心底嫌そうな表情でため息を吐く。どうやら相当迷惑を被っているようだ。

「どうか由比ヶ浜さんって中学からあんな感じだったの？比企谷君はよく耐えられたね。メンタル面については坂柳さんや龍園君より上なんじゃない？」

「そうですね。精神力については確実に私より上でしよう」

軽井沢の言葉に有栖はハッキリ頷くが、嫌な褒め方だな……そんなんでメンタルを鍛えたくないわ。

「ですが最近是由比ヶ浜さんの喚き声は聞こえませんが、大人しいのですか？」

「そういう最近は大分少なくなっただけだ。」

「全然。だけど喚く前に綾小路君が殺意で黙らせる感じ。今日で6回目の失禁」

松下一層嫌そうな表情になるが、席が近いからそんな表情もするわ。そして

綾小路よ、6回も失禁するとかどんだけヤバイ殺気なんだよ？つか由比ヶ浜もいい加減学習しろよ。

「まあ由比ヶ浜さんが今回の試験で雪ノ下さんと一緒に退学しない可能性が高いのは残念だけど、テストが簡単なら安心だよ。私も良くはないし」

「けど佐藤。勉強を身につける習慣を身につけとけ。そうしないと仮にAクラスになっても地獄だぞ」

「え？ウチのクラスの方が地獄だよ」

まあそうだけど問題はそこじゃない。

「論点が違う。Aクラスで卒業した場合、好きな大学や企業に入れるだろうが入れるだけだ。例えばだが佐藤。お前がAクラスで卒業して、特権で東大に入れたとして、留年しないで卒業出来ると思うか？」

「あっ！Aクラスに上がっても保証されるのは入学と入社だけって事?!」

「そうだ。その後の事は大学や会社が対応するんだから、特権を使う際には自分の実力に合った場所に使わないといけない」

プロのスポーツとかもそうだ。実力のない奴がAクラスの特権で入っても特に活躍出来ずに契約を切られるのがオチだ。

「そもそもAクラスの特権は推薦で役立つでしょうが、実力者なら一般入試でも受かりますから」

「要はAクラス卒業の特権は自身の実力に合った大学や会社に確実に入る為に使うべき

で、分不相応な場所に入る為には使われない方がいいって事になりますね」

もちろんこの世には絶対はないから保険として手に入れておきたい気持ちはある。自分の実力に合った場所に不運で落ちた場合に特権を使う……みたいな感じだな。

「何か……この学校って詐欺じゃない？」

軽井沢がそう愚痴るのは仕方ない。入学する前まではAクラスの生徒のみしか卒業出来ないなんて一切聞いてなかったし、学校に入ってから情報を隠してばかりだし、詐欺と思われるでも否定は出来ないな。

「ま、大人の世界は騙し騙されの世界だし、今のうちに慣れろって事だろう」

言いながら若干焦げた肉を口にする。多少の焦げは味の変換点となつて中々良いな。「そうかもね。どうせウチのクラスは逆転出来ないし、バイトしながら大学受験に備える、普通の学校の学校生活を送る方が良いかも」

松下はそう言うってくる。確かに雪ノ下、山内、池とモチベーションを下げる明確な足手纏い3人に加え、由比ヶ浜と須藤という本当の厄病神2人を所有しているDクラスに逆転の芽はないだろう。少なくとも俺がDクラスの人間なら諦めてるわ。

しかしDクラスだけだから良いが、他のクラスも同じように特別試験に力を入れなくなったらこの学校の理念は無価値になるだろう。

「ちなみにクラスの情報を売りに出したらポイントで買ってくれる？」

「おや、松下さんはクラスを裏切るつもりですか？」

「場合によつてはね。どうせクラスに先はないし」

「私も売ろつかな」

「あたしもそうしよつかな」

松下のみならず佐藤も賛成して、裏切り者の軽井沢も賛成して裏切り者と匂わせないようにする。というか裏切りに躊躇いがないあたり、Dクラスは終わつてゐる……

「生憎だが既に協力者はいるんでな」

「Aクラスにはいませんが、もし良ければ情報を買いますよ？」

「え？裏切り者がいるのは予想してたけどAクラスはスパイを持つてないんだ？」

「どうも私に切り捨てられると思つてゐるようです。私はあの5人以外にはどうこうするつもりはありませんが……一応八幡君と龍園君の所有するスパイから情報を貰つていますが、私直属のスパイが欲しいですね」

「ふーん。じゃあ今後情報を渡したらお小遣いを頂戴」

「勿論です。特別試験以外の情報も歓迎しますよ」

「え？クラスメイトの特徴とかでも？」

「ええ。この子の苦手科目は英語……この子は昔足を怪我したから運動能力が低い……みたいな物でも構いません」

なるほどな。情報を大量に集めて、使えそうものをピックアップしていく感じだ。小さな情報でも使い所では強力な武器になり得るからな。

「しかし俺達と今以上に交流したら煩く言われないか？」

今回の焼肉についても3人から強く誘われたが、本来なら遠慮するべきだろう。

「特に言われないよ。5馬鹿に比べたら可愛いものだしね。裏切りがバレたら五月蠹いだろうけど、他クラスとの交流程度なら大丈夫だよ」

「それに私達以外にもバイト先を確保した人も、その人は比企谷君達に感謝してるしね」  
それは何よりだ。そう考えると5馬鹿以外からは特に文句を言われないだろう。

「つまり今は平和って感じですか？」

ひよりがそう言うのと3人は暗い顔をする。

「全然。さっきも言ったけど資金源を確保した生徒は増えたけど、由比ヶ浜さんと雪ノ下さんはバイトを却下されたことで煩いし、1学期の中間で由比ヶ浜さんを救済する際した借金も話題に出るようになってね」

軽井沢が目を腐らせて話してくる。そういや過去問があるのに赤字を取った由比ヶ浜を救済する為に一之瀬のクラスから借金したんだったな。

「ポイントを稼いだ生徒は「あんな屑を救済する為にした借金を返すなんて嫌だ」「由比ヶ浜と雪ノ下が身体を売れ」って言って、由比ヶ浜さんが「セクハラだしマジキモい

「学校に言うから！」とか「あたしはポイント無いんだし、ある人が返してよ！」って喚いたりしてね」

佐藤はメチャクチャ重いため息を吐く。

「終いには比企谷君と連んでる私達に「ヒツキーと連んでるんでしょ！今直ぐヒツキーからポイントを貰ってきて借金を返してよ！」って感じでね……うん」

松下が心底疲れた表情で哀愁を漂わせる。

本当に世紀末だなDクラスって……

「……今度美味しい飯屋に連れてってやるよ。勿論俺の奢りだ」

「……幾らポイントを稼ぐ方法を得ても、使えるポイントは少ないでしょう。服を買ってあげますよ」

「……良いマツサージ店を知っています。ポイントは出しますから行ってください」

「……ありがとう」

これほど覇気のないありがとうは初めて聞いたな。

それから俺達は重い空気のまま焼肉パーティーを再開して、パーティー終盤に空気が元に戻ったので、後味が悪くならず本当に良かった。

そんなことがありながらも、いよいよペーパーシャッフルを迎えるのだった。

## ペーパーシャツフル

「いよいよペーパーシャツフルを迎えた当日、俺はHRが始まる20分前に教卓の前にて周りを見回す。既に全員が座っている。俺が事前に早く集まるように指示を出したからだ。」

「さてお前ら。今日はいよいよ本番だが、全員大小差はあれどやる気があつて何よりだ」  
特に体調が悪そうな奴も居ないだろうし、万全だろうら、

「この1ヶ月、お前らは真剣に勉強に向き合っていたのは指導者の1人として理解出来た。前回の中間試験の時よりも間違いなく力を付けただろう」

俺の言葉に大半の生徒が力強く頷く。実際中間試験最下位の石崎が有栖の作った模擬テストをやった際、最初は30点くらいだったが、昨日やった時は46点と見違えた。有栖の模擬テストは中間より数段難しかったし、それを考えると伸びている。

「これまでウチのクラスは「暴力しか得意ではなく全く学が無い」って評価だった。しかし本当にそうだろうか？」

俺は一度区切ってから周りを見回すと皆が俺の言葉に耳を傾ける。

「本当に学が無いなら勉強会なんて碌に開かないだろうし、授業以外で模擬テストもやらないだろう。しかしお前らはそれをこなした。まだまだ足りない部分があるのは間違いないが、これまでの努力もまた間違いないく血肉となつている」

俺の命令を信じて全員が付いてきてくれたのは間違いない。

「もう直ぐテストが始まるから最後に言葉を送るが……お前達は強い、Cクラス相手にも勝ち目はある」

少なくとも一ヶ月前と違つて勝算が0ではない。

「これまでの努力の跡を思い出して血肉の全てを動員しろ。相手が格上だろうと及び腰になるな」

一息……

「Cクラス、殺りに行くぞ……!」

『おおおおおおおおおおおつ!』

最後に一段と大きな声をあげるとクラスの大半がそれ以上の雄叫びを上げて手を挙げる。叫んでない奴も手は挙げてやる気を醸し出している。

士気は充分に上がった。後はテストを受けるだけだ。

俺は最後に一札をしてから席に着くと坂上先生が教室に入ってくるが笑みを浮かべる。

「全員やる気があるようで何よりだ。Cクラスに勝つ事を祈っている……では期末テストを行う。1時間目は現代文だ。開始の合図まで用紙を表に返す事は禁止する」

坂上先生は生徒1人1人にテスト用紙を配っていく。

「試験時間は50分。体調不良や手洗いは極力控えるように。我慢できない場合は挙手してから申告するように。それ以外の退出は認めない」

「お決まりの注意を聞きながらテスト用紙の裏面に視線を落とすが、程なくしてチャイムが鳴る。

「始めっ」

坂上先生の言葉に俺達は一斉に捲る。問題を一通り読むと確かに普段の定期考査に比べて難しいが……

(解けない問題じゃないな)

普段定期考査で文系科目を得意とする俺からすれば大差ない。ペンを持って簡単な問題を解き始める。特に引っかけ問題がないから余裕だ。

カンニングを疑われぬ程度に周りを見回すが、見える範囲ではクラスメイトはペンを止める事なく動かしている。

(……っちは順調……Cクラスは有栖特製のいやらしいテストはどうだ?)

俺は前方、Cクラスの教室に面している黒板を見ながらそう思うのだった。

(うーん。中々いやらしいね……)

一之瀬帆波は苦々しい気持ちになりながらも問題と向き合っている。カンニングを疑われない程度に周りを見れば、クラスメイトのペースは落ちている。

一之瀬らCクラスはBクラスが作成した現代文の問題を解いているが、中々手こずっている。問題が理解出来ないわけではないが、答えの出し方が難しいのだ。

長文問題では全ての問題で「○○文字以上<sup>×</sup>文字未満で答えろ」と問われているが、文字数が絶妙であり、数あるキーワードを上手く取捨選択しないと指定文字に収まらないのだ。

明らかに意地悪問題であるが、質問そのものは文字数制限が無いならそこまで難しくない問題だから学校が通したのだと一之瀬は判断した。

(でも諦めるわけにはいかないよね……)

この試験では負けてはいけない。クラスポイントもそうだが、それ以上に士気に関わる。

Cクラスの生徒は1学期早々龍園らにちよつかいをかけられた事から、Bクラスに苦

手意識を持っていて、嫌っている人も少なくない。

そしてこれまで定期テストの結果や特別試験から「龍園のクラスはラフプレーを得意としているが、フェアプレーなら強くない」って評価されている。実際ペーパーシャツフルでBクラスとCクラスが戦う事が決まった際、Cクラスの大半はラフプレーを警戒して、学力については全然警戒してなかった。

しかしBクラスはラフプレーを一切しないで図書館でAクラスとの合同勉強会をするだけだった。それを見た一之瀬はBクラスは真つ向から自分のクラスを打ち破ろうとしていると確信した。

仮にここで負けたらCクラスの間「小細工有りでも小細工無しでも、Bクラスの方がCクラスより上である」って考えが蔓延する可能性はある。

戦いでは士気は重要である。しかもAクラスとBクラスは同盟を結んでいるので次回以降の特別試験で合同で襲ってくる可能性もあるが、士気が下がった状態で相手をしたら退学者が出る可能性も高い。

それだけは絶対に避けないといけない。全員でAクラス卒業を目標にしている一之瀬からしたら退学者が出るシチュエーションは避けたいのが本音だ。

よって今回の試験は絶対に負けるわけにはいかないのだ。

一之瀬は一呼吸してから少しでも点数を上げる為に問題と向き合うのだったが……

「つー」

ある問題で思考を停止してしまう。そこには……

次の文章にて、数字で表記された部分を漢字に直しなさい

スリルを味わう①（タメ）にビールを万引きするのと、高級な②（カンザシ）を欲しがっている妹の為に万引きするのは同レベルであり人間性に問題がある。

有栖が側近の神室と知り合った際の出来事に多少のアレンジを加え、ノリで提出した問題だが、一之瀬はガタガタと震え出してしまうのだった。

結果、一之瀬は担任の星之宮に心配そうに話しかけられるまでの3分間、真つ青になりながら震えることしか出来なかった。

今回の試験は成績下位層に勉強する習慣を身につけてもらうのが最優先で、Cクラスに勝つのは二の次である。

そう思っていたが……

（順調だな。もしかしたら勝てるかもしれない）

4時間目の英語の問題を解きながらそう思った。Cクラスが作った問題は難易度は

高いが有栖の作ったように厄介な問題はなく、解き方さえ知っていれば簡単に解ける問題だ。

よく言えば王道、悪く言えばテンプレなCクラスの問題をガンガン解いていく。3時間目の数学についても徹底的な対策をしたから問題なく解けたし、他の連中も時間ギリギリまで鉛筆を動かすなどやる気充分である。

(このまま上手くいけば勝って士気が上がるし、気合いを入れないとな)

そう思いながら俺は一呼吸してから少しでも点数を上げる為に問題と向き合うのだった。

それから30分後に今日のテストが終了して、皆が気を緩ませながらテストの感想を言い始めたので、俺は直ぐに明日に備えた勉強会を提案した。

その際に皆、ブーブー言いながらも勉強道具を準備したので、やる気充分のようでも心底嬉しく思った。

ちなみに図書館に行く途中で一之瀬が真っ青になっていたが、解答欄でズレを作ってしまったのだろうか？

# 憧れ、理解、トラウマ

キーンコーンコーンコーン

「そこまで。用紙を回収するので筆記用具を置くように。これ以上の回答はカンニングとみなす」

坂上先生の言葉に皆がペンを置きながら安堵の空気を生む。

しかしそれも当然だ。今の物理によって全てのテストが終了したのだから。

坂上先生が全てのテストを回収すると前が出る。

「以上で期末テストを終了する。結果は3日後に発表するが、今はリフレッシュすると良い。今日はもう帰って構わない」

「あ、じゃあ一言前に出て話して良いですか？」

「もちろんだ」

坂上先生から許可を得たので俺は前が出る。

「先ずはお疲れさん。これで期末試験が終わったし坂上先生の言ったように返ってくるまではゆっくり休め。そして……」

一息ついてからポケットから紙を取り出す。

「この1ヶ月、俺に付いてきてくれて感謝する。お礼と言っちゃ何だが、テスト結果が返ってきたら焼肉を奢りたいと思う。希望者はコイツに名前を書いてくれ」

『おっしやあああああつ！』

俺が1番廊下に近く1番前にいるアルベルトに紙を渡しながらそう言うと、男子を中心に喜びの声をあげる。女子も奢りだからか声をあげずとも喜びの感情を露わにする。

そして紙を回収すると全員参加する事が決まった。多少金がかかるがクラスの気分を良くした方が今後の為になるし仕方ない。後で龍園に経費として要求すれば良いだけだ。

「全員参加だな。詳しい時間帯が決まったら一斉にメールをするから……じゃあ解散して構わない」

既にHRは終わっている為、皆がゾロゾロと立ち上がって帰り始める。

「ひより。先に帰ってくれ。龍園と話がある」

「わかりました。先に寮に戻っています……帰ったら一杯エツチな事をしてあげますから」

ひよりが一礼してから最後に魅力的な提案を耳打ちしてから去っていく。実に楽しみだな。

「さて龍園。今回の俺の仕事は終わりだが、見た感じ全員真剣に取り組んでいたから鉄砲玉候補については保留だ」

やる気のない奴は次回以降の特別試験で捨て駒にする予定だが、皆のやる気に巻き込まれたのか全員真剣に取り組んでいた。

「ああ。そうなると鉄砲玉を使う際は実力のない奴になるな。テメエなら誰を使う？」

「真鍋グループの誰かだな。全員実力は下位だが、女子の中で態度がデカイし」

実力のある奴がデカイ態度を取るのならまだしも、実力のない奴がデカイ態度を取るのには百害あって一利なしだ。

「ま、今回はノルマは達成したし問題ないよな？」

今回はあくまでクラス全体に勉強する習慣や勉強のコツを身につけてもらう事だが、後半は皆、授業中や休み時間にも積極的に質問していたので成功だろう。

「ああ。予想以上の成長を感じたし、上出来だ」

龍園は携帯を操作すると俺の携帯が鳴るので確認すると30万ポイントが入金されていた。

「前金だ。Cクラスに勝つたらもう30万やる」

「意外だな。今回は無償で働けて命じたと思った」

実際今回は報酬の話をしなかったからな。

「なに、元々払う予定だったぜ。ただ報酬が無いと思わせたらテメエがどれだけ働くか気になってな」

そういう話か。

「……次からは試すような事はやめろ。一々考えるのは面倒だからな」

そう返しながら教室を出ると隣のＣクラスから一之瀬が暗い表情を浮かべ、クラスメイトに囲まれながら出てくる。昨日もそうだったが、何故あんなに暗い表情をしてんだ？

と、ここで連中も俺達に気付いて龍園を睨んでくる。

「帆波ちゃんに何をしたの?!正直に答えて!」

そして体育祭で龍園に嵌められた網倉が龍園に怒鳴るが、龍園は鼻で笑う。

「あん?今回の指揮官は比企谷で、比企谷からは小細工抜きで勝負するって言われたから今回はテメエらの妨害はしてねえよ」

「じゃあ何で帆波ちゃんが落ち込んでるの?!龍園君が何かしたんでしょ?!」

一之瀬が落ち込んでる。龍園が何かをした……って決めつけるのは理不尽だろう。いくら龍園の性格が悪くても「知らねえよ。生理でも止まったんじゃねえの?」……いや、コイツの発言を聞いてると理不尽じゃないように思えてしまう。うん、網倉は悪くないな。

ニヤニヤ笑いからの龍園の外道発言に取り巻き達が詰め寄ろうとするが、今回は龍園を庇うつもりはない。

「待つて皆！今回は本当に龍園君は関係ないよ！」

「でも帆波ちゃんが落ち込んでるんだし！」

「そうだよ！私達に気を遣う必要なんてないよ！」

一之瀬が止めに入るが皆が納得していない表情を浮かべずに龍園を睨んでいる。

「はっ！前から思ったが teme ちゃんのクラスつて一之瀬を崇拜してんな。その癖、当の本人が止めに入っても納得いかずに俺を悪と決めつける……憧れは理解から最も離れた感情つてのはマジみたいだな」

龍園は高笑いをしながら五番隊隊長の名言を口にする。しかし言うていることは強ち間違いないやないだろう。一之瀬の静止を全く無視して、気遣っていると決めつけているし。

「一之瀬よお。お前は誰にでも優しくするみたいだが、自分の考えを勝手に決めつけて意見を捻じ曲げるゴミどもに優しくする必要はないんじゃないやねえか？優しくしても仇で返されるのがオチだぜ？」

さつき一之瀬の意見を無視した白波と網倉を指差してそう告げる。当の2人は怒りと屈辱で顔を真っ赤にしている、呼ばれた一之瀬は前に出てくる。

「まずはごめんなさい。私が落ち込んだことで2人を巻き込んだじゃって」

そして頭を下げてくる。他の連中は納得いかない表情だが、ここで口を出したら龍園の言葉を認めてしまう事になるので黙っている。

「普通誠意を見せるなら土下座だろ？」

「黙れ龍園。余計な火種を持ち込むな」

龍園の発言によつてCクラスの連中が爆発する前に割つて入る。一之瀬を崇拜している連中の前で一之瀬に土下座を強要したら、碌でもない何かをやらかすだろう。俺からしたら理性を飛ばした馬鹿の行動は怖過ぎる。ソースは理性がない由比ヶ浜。

「しかし一之瀬。今回Bクラスの指揮を執つたのは俺だが、ラフプレーは一切仕掛けてないぞ。小細工抜きでCクラスを倒して言い訳をさせない事を目標にしていたからな」

「うん。それはわかってるよ。ちなみに問題を作つたのつて比企谷君？」

問題……ああ、テスト作成についてか。トラブルつて意味の問題なら龍園だけだな。

「いや。有栖と取引をしてアイツに作つて貰つた」

その言葉に一之瀬の取り巻きは騒めきを生むが別にルール違反はしていない。

「そつか……」

一之瀬は更に顔を暗くするが、有栖の作つた問題に不都合な点があったのか？

「一応言つとくが解答欄がズレたとかなら自業自得だからな」

「わかつてるよ……うん！大丈夫！迷惑をかけてごめん！もう行くね！」  
「あつ！」

「待って帆波ちゃん！」

一之瀬はいきなりテンションを上げてから再度俺達に頭を下げて、回れ右して去っていく。取り巻きも慌てて去っていく。去り際に龍園を睨むが、龍園は笑顔で中指を立てて相手を怒らせる。本当、挑発に関しては一級品だな。

しかし有栖の問題によってあそこまで動揺するって何があるのだろうか？後で調べてみるか。

そう思った時だった。

「~~~~~っ！」

「~~~~~っ！」

Dクラスの方から2種類の叫び声が聞こえてくる。ドアが閉まっているが間違いない。須藤と由比ヶ浜だろう。

「帰るぞ比企谷」

「だな」

面倒な予感をしたであろう龍園が促すと俺も頷いて早足で下駄箱に向かう。もしも鉢合わせしたら間違いなく面倒な事になるだろうからな。

それに帰ってひよりと有栖からエロい癒しを受けないといけないからな。

## 賭け

「以上で期末テストを終了する。結果は3日後に発表するので今日はもう帰って構わない」

Dクラスにて担任の茶柱がテスト用紙を持って教室から出て行くと弛緩した空気になる。2日連続のテストは誰しも疲れる。

同時にクラスメイト同士で話し合いが生まれる。

「ねえ。テスト終わったしカフェ行こうよ」

「えー？折角終わったんだし、夜に奮発してレストランに行こうよ」

「ラーメン食おうぜ！」

「馬鹿が。ステーキだろ」

「ピザに決まってるだろー！」

「まさかテスト後に外食出来るなんてな。前回の中間後なんか、先輩に頼み込んで缶コーヒー奢ってもらって満足だったのに……」

「本当に比企谷さまさまよー！」

そんな声が教室から聞こえてくる。軽井沢、松下、佐藤の3人がバイトを見つけ出してポイントの確保方法を得た後、Dクラスの生徒はこれまでずっと貧困生活を送っていた事から、信じられない程の食欲さで学校のあらゆる場所から働き口を見つけた。

榎田はカフェのウェイトレス、篠原はカフェの厨房のアシスタント、王は文化部部室棟の廊下の清掃、小野寺は運動部部室棟の廊下の清掃、三宅は服や靴や本など学外から搬入される物資の仕分け作業、幸村は物資の仕分けに関する事務作業、外村は電気屋の倉庫にある在庫に関するデータ打ち込み作業、長谷部は運動部御用達のクリーニング屋の手伝い……など色々な場所に頼み込んだ。

結果としてDクラスの生徒の中で働き口を見つけた生徒は毎月15000〜3000

00ポイントくらい稼ぐ事が出来て、以前より絶望感は薄れて、軽井沢達にバイトの存在を示唆した八幡に感謝の気持ちを抱いている。

しかし例外は常に存在する。池や山内、雪ノ下は会話を聞きながら舌打ちをして、楽しそうに話している連中を睨む。

池と山内は盗撮問題によりプライベートポイント使用権利が剥奪された上、私物は卒業か退学まで没収されたので娯楽がない状態である為、他の連中の会話の内容が羨ましくて仕方ないのだ。

雪ノ下についてはプライベートポイント使用権利はあるが、毎回バイトの申請を却下されているからだ。如何に自分がどれだけ優秀かを語っても全く相手にされていない。更に雪ノ下が自分よりも下と思っている人間が次々と働き口を見つけている事が更に不満に思っている。

実際に口にして論破しようとしたが、そのタイミングで綾小路が殺意を纏いながら割って入った為に不発に終わったが、その燻りは残っている。

しかし3人は態度に表しているだけだ。問題は……

「さつきからゴチャゴチャ煩えんだよ！教室に用がないならさつきと失せろ！」

矯正プログラムを受けていて、部活も辞めさせられ、腕に後遺症が残っている須藤。そして……

「どうか何でゆきのんが落ちて、他の人がバイト出来てんだし！絶対にズルしたんでしょ?!お詫びにあたしとゆきのんにポイントを渡してよ！」

毎回バイトを落とされた挙句、何度も綾小路と高円寺に失禁させられた由比ヶ浜が怒鳴る。

それに伴い、大半の生徒は嫌そうな表情になるが反論すると碌な事にならないのは学習しているので無視して帰る支度をする。

「じゃあ私達は何処に行く?」

「クレープを食べよ?」

「シュークリームに一票」

由比ヶ浜の近くの席の松下は由比ヶ浜の喚きを無視して軽井沢と佐藤に呼びかけると2人はリクエストをしながら松下に近寄る。

「無視すんなし!人が困ってるのに無視するなんて最低だと思わないの?!」

由比ヶ浜のギャーギャーと叫びに軽井沢達は耳を塞ぎながら、こんな馬鹿に中学時代に振り回された八幡に対して心からの尊敬を抱く。

本来なら無視するが余りの言いつぶりに軽井沢は反論する。

「人が困ってるのに無視するのは最低？ クラスポイントをマイナスにした由比ヶ浜さんはそれ以下だからね？」

「ふざけんなし！ アレは前の生徒会長が馬鹿だからであたしは悪くない！ クラスで一番のお荷物は何藤君だから！」

「はあ?! ふざけんじゃねえよ！ 赤点取る馬鹿が1番お荷物だろうが！」

須藤が詰め寄り怒鳴る。

「嫌い！ 盗撮犯が上から目線で物を言うな！」

「んだとーこらあつ！」

「何さ！ 暴力を振るったり悪口を言ったら学校に言うからね！」

教室のど真ん中で両者の醜い争いが繰り広げられるが、クラスメイトの大半からしたら「どっちも変わんねーよ」である。実際、5月以降に明確にクラスポイントにダメージを与えたのはこの2人だ。

近くで騒がれた軽井沢達は耳を塞ぎながら退出しようとするが2人に気付かれる。

「逃げんなし！ けいけい達はお詫びにポイント「ちっ……煩いな」ぴいつ……！」

「綾小路いつ……！」

喚く中、綾小路が舌打ちしながらそう呟くと教室に蔓延した苛立ちが消えて、恐怖と期待が変わる。

綾小路の眩きに、まだ殺意を出してないにも関わらず、由比ヶ浜は腰を抜かして須藤は齒軋りをする。

「良い加減にしろ由比ヶ浜。軽井沢達に文句を言ってるが完全に言いがかりだ。お前や雪ノ下がバイトに落ちたのは軽井沢達がズルしたのではなく、お前達が救いようのない無能だから、当然の結果だ。軽井沢達に八つ当たりするのはやめろ」

雪ノ下は筆記試験が良いが、自分よりも成績が低い生徒には見下した態度を取り、自分よりも成績が高い生徒には「カンニングの疑いがある」って口にするなど問題点が多いし、拳句にクラスのお荷物である由比ヶ浜を庇っているなど、明らかに問題児だ。

「待ってくれ綾小路君。暴力はもうやめてくれ。そんな事しても何にもならないじゃないか」

綾小路が2人に詰め寄ろうとしたが平田が割って入る。そんな平田にクラスメイトは「そんな屑を庇う必要はないだろ……」とばかりにため息を吐き、平田の偽彼女の軽井沢は冷めた眼差しを向けている。

「何もならない？ 迷惑しかかけない無能が殴られたら、クラスメイトがスカツとするじゃないか」

不快などの負の感情しか持っていない綾小路からしたらクラスの五馬鹿を殴ることに一切の躊躇いはない。

「聞き捨てならないわね。大した成績じゃない貴方程度の人間に無能呼ばわりされるなんてこれほどの屈辱はないわ」

「そ、そうだし！友達が少ない癖に偉そうにすんかし！」

綾小路の言葉に雪ノ下が不快感を露わにして、由比ヶ浜は腰を抜かしながらブーメラン発言をするが、綾小路は全く気にしない。

「事実だ。それに大した成績じゃないと言ったが、今回の試験は全力でやったからお前より上だ。お前が幾ら全科目満点でも引き分けにしかない」

今回綾小路は全ての試験問題を本気で解いた。退学を回避する為だけなら、由比ヶ浜が退学しないようにした50点分の簡単な問題を解くだけで良いのにだ。

これには2つの理由がある。既に須藤の肩を壊したり、由比ヶ浜を何回も失禁させて綾小路自身、クラスで目立つようになったから手を抜く必要はないと考えたからだ。

もう一つは雪ノ下のプライドをへし折る為だ。これまで多くのクラスメイトが雪ノ下に文句を言ったが、「私より成績が悪いのに口を出すな」と一蹴してきたので、圧倒的な成績を叩き出して雪ノ下の唯一の強みをへし折ろうと考えたからだ。

結果として綾小路は50点分の難しい問題を全て解き、全科目100点満点であると確信を抱いている。

綾小路の堂々とした宣言に雪ノ下は苛立ちの混じった眼差しで睨む。これまで由

比ヶ浜を何度も失禁させた綾小路は雪ノ下からしたら不倶戴天の敵のようなものだ。

「言ってくれるわね。だったら賭けをしましょう。全科目の合計点で競って、私より低かったら私と由比ヶ浜さんに土下座をしてから退学しなさい」

「わかった。ただしオレが勝ったら、雪ノ下は須藤達が受けてる卒業まで矯正プロジェクトに自主参加しろ」

「良いわよ。証人はここにいる全員で、監視カメラもあるから言い訳を許さないわよ」

雪ノ下は自信満々な態度で周りを見回すが、この状況下で言った言葉を撤回出来ないのは明白だ。

「当然だ。負けたら潔く退学する。そっちも負けたら潔く受け入れろ」

そう言うってから綾小路は教室から出て行く。

「ふんっ。あんな無能が私に勝つ？傲慢極まりないわ」

「だよねー。ゆきのんに挑むなんて本当に馬鹿だよねー」

雪ノ下と由比ヶ浜も帰り支度を始めるが、クラスメイトの大半は沈黙している。雪ノ下は性格は悪いが筆記試験の成績は学年でも10本の指から外れた事がない実力者。

そんな相手に退学を賭けの道具に使った学年平均レベルの綾小路の行動に正気さを失ったと思う人もいる。

そう考えるのは当然であるがこの時、クラスメイトは知らなかった。

綾小路清隆は生物として全ての分野で雪ノ下雪乃を上回っているという事を。

「さて、以前比企谷からの受けたアドバイスを試すか。夜に恵を呼んで、胸を揉ませてもらうように頼まないとな……」

## 攻め

テストを終えて自室に戻った俺は今天国にいる。

「んっ……はっ……どうかなお兄ちゃん、気持ち良い？」

「お兄ちゃんも興奮してるみたいだし、もっと気持ちよくしてあげる……んんっ」

風呂場にて義妹化したひよりと有栖は喘ぎながら耐水マットに寝ている俺に乗って全裸のまま、ローション塗れの身体を擦り付けてくる。ソープでお決まりのプレイだが実際に経験するとローションと2人の体の柔らかさ、2人の妹キャラが融合して圧倒的な破壊力を生み出す。これから毎日、風呂に入ったらやって欲しいものだ。

「お兄ちゃん。もう凄く大きくなってるよ。本当にエッチだね」

「いっぱい気持ちよくしてあげるからね……」

そう言うってから2人は俺の下半身の方に顔を近づけて……

「はむっ……」

「ちゅっ……」

「ぐおおお……！」

啞えられて、それを皮切りに乾涸びるまで吸い尽くされました。

30分後……

「はぁ……はぁ……」

俺は昂りと快感と疲労を感じながらベッドに横たわる。2人の攻撃は容赦がなく骨抜きになってしまった。何せ出している時も容赦なく攻めてきたのだ。やめろと言っても寧ろ激しく攻めてくるし、最早今日はマトモに動ける気配がしない。

2人は脱衣所にいるが、出てきたらまた攻めるのはちよつと勘弁して欲しいものだ。  
ピロンツ……

と、ここで脇に置かれた携帯に着信が鳴るので取ると軽井沢からの着信だった。

「もしもし……?」

『あ、もしもし比企谷君?ちよつと聞きたいんだけど、清隆つて学力についても力を隠してるの?』

いきなりそんな質問が来たが、そんな質問をする意図が読めないな。まあ答えるくらいは構わないが。

「ん?普段、手を抜いてることは知ってるが、どれくらい手を……抜いてるかはわからない」

『だから勝負に乗ったのか……:というか比企谷君、息が荒いけど体調不良?』

「いや。ついさつきまでひよりと有栖からロー○ヨンプレイと手○キと足○キと髪○キと脇○キと股とフ○ラとパイ○リをされまくって、限界まで搾り取られた」

『ぶっ!テスト終わった直後に何をしてんのよ?!:というか坂柳さんの胸で挟めるの?!』

軽井沢の怒声が聞こえてくるが、疲れていたから本音を吐いてしまったようだ。そして最後の言葉は有栖に絶対になうなよ。

「ひよりは普通に出来たな。有栖は寄せて上げてギリギリで弱々しく挟めたな。柔らか

さは大してないが一生懸命な姿がまた健気でなあ……」

『丁寧な語らないでくれる?!リアクションに困るわ!』

そりやそうだ。

「悪かったな。以後気をつける。で?何で綾小路の学力について聞いたんだ?勝負とは綾小路と誰の勝負だ?」

『き、切り替え早すぎね……ま、まあ良いわ。清隆、雪ノ下さんと勝負することになったの』

そう前置きして軽井沢はDクラスの出来事を話すが今回のペーパーシャッフルの総合点を競い、綾小路が負けたら雪ノ下と由比ヶ浜に土下座してから退学して、雪ノ下が負けたら盗撮三人衆と同じ矯正プログラムの参加という賭けを教室内で約束したらしい。監視カメラがあるので口約束と逃げられないだろう。

「提案したのが雪ノ下が綾小路が承諾……まあ勝算がないなら受けないだろ」

綾小路も馬鹿じゃない。学年で10本の指に入る雪ノ下からの勝負を受けるって事は自信があるのだろう。

「何にせよ賽は投げられたんだし綾小路が勝つ事を祈るだけだ。まあ綾小路が勝つても面倒な事になるだろうけど」

『あー、雪ノ下さんが「認めないわ!カンニングしたに決まってるわ!」って喚いて、由

比ヶ浜さんが「そうだし！ゆきのんが負けるわけないし、早くカンニングしたって認めよう！」って便乗する姿が想像出来たわ』

うん、俺も想像出来たわ。綾小路が勝ったら絶対にゴネるだろうな。

「そうなたら仕方ないだろ。つかお前もそろそろ平田と別れるよ。あの博愛主義者に価値はない」

何か未だに由比ヶ浜と雪ノ下が責められると間に入り、そのくせ雪ノ下達にはやんわりとしか注意しないと博愛を通り越して馬鹿としか思えない。

『そのつもり。さつきも清隆を止めに入ってたしね』

「そうしろそうしろ。というかお前は赤点はないよな？」

『ないない。坂柳さんからの問題、どの科目も半分は小学生レベルだし。まあ後半は20点取れたかわからないけど』

敵に塩を送ると思うかもしれないが、Dクラスには馬鹿が多いからそれでも勝つてしまっそうだ。

「まあDクラスで変わった事があつたら連絡を頼む」

『ほーい。じゃあ結果発表まで清隆が勝つと思つとくね。付き合ってくれてありがとう』

その言葉に通話が切れたので携帯を置く。同時に脱衣所のドアが開いて、黒のマイク

ロビキニ姿のひよりと白スク水姿の有栖がこっちにやって来る。

見るのは2度目だが以前と変わらずに圧倒的な魅力を醸し出している。

しかし……

「お前ら……今誘惑するのはちよつと勘弁してくれ」

さつきまで溜まっていた分を全て搾り取られてすつからかんだ。今攻められるのは勘弁して欲しい。

「ええ。精力が回復したら直ぐに攻めるだけです」

怖えよ。マジで乾涸びそうだな。

そう思う中、2人は俺のは左右に抱きついてスリスリと甘えてくる。本当に愛おしいな。

「ところで先程話し声が聞こえましたが誰かと電話をしていたのですか？」

「ん？ 軽井沢から電話があつてな……」

そう前置きしてから俺は軽井沢から聞いた話をする。有栖は楽しそうに笑う。

「それはそれは面白い事になりましたね。これで雪ノ下さんも矯正プログラムを受けることが決定しましたか」

有栖はそう言っているが、それはつまり綾小路が勝つ事を確信している事を意味する。この学校に入る前から知っているとは聞いていたが、綾小路は英才教育を受けてい

たのかもしれない。

「でも大丈夫ですか？その、雪ノ下さんの性格を考えると……」

ひよりは口籠るが、雪ノ下は絶対にゴネる……と思っているのだろう。有栖もうんうん頷いているし。

「まあそうなたら綾小路君のみならず、学校が動くでしょう。その時を楽しみに待ちましょう」

「由比ヶ浜が喚いて不快になる可能性が高いけどな……あ、それと有栖。後でお前がDクラスに向けて作った最終的なテストをやらせてくれないか？興味があつてな」

一之瀬が動揺していた事がテストにあるかもしれないし、調べておくに越したことはない。

「赤いUSBに入ってますから好きに使ってください。それよりも……私も疲れたので甘やかしてください……」

「私も……メチャクチャにしてください……」

そんな風に甘えてくる2人だが、そういう風呂場では散々攻められたし……

「ひゃあんっ！」

「は、八幡君?!」

今度はこつちがお返しする番だ。

俺はそのまま2人をベッドに押し倒して、これまでに過ごした日々の中で見つけた2人の弱点を攻めまくった。

その1時間後、俺は2人を風呂場に運んでから濡れまくったシーツを洗うべく、洗濯機の手操作をしていた。

「で？清隆は雪ノ下さんに勝てるの？」

「問題ない。今回は本気でやったから全科目は満点の確信があるし、それ以前に生物としての性能において雪ノ下はオレより遥かに格下だ」

「どのくらい差があるの?」

「そうだな……ブリーチで例えるならオレがバラガンで雪ノ下がデイ・ロイだな」

「差あり過ぎでしょ! マジで言ってるの?!」

「ああ。何にせよ恵は心配するな。それと恵に頼みがあるんだが」

「? 何よ?」

「お前の胸を揉ませてくれないか?」

「たうわっ! い、いきなり何を言ってるのよ?!」

「いや、由比ヶ浜の存在によってオレは不快な気持ちが強くなって、どうにかするべく比企谷に相談したら、女の胸を揉んでると昂りを感じるから最高の気分になるって返されたからな。好奇心を満たしたい」

「どんな助言してんのよあの馬鹿は?!」

「それで? 駄目か?」

「べ、別に駄目じゃないけど……優しくしてよね」

「わかった。じゃあ揉むぞ」

「ひやあんっ! どんだけいやらしい揉み方よ! アンタ絶対に他の女子の胸を揉んでるのよ?!」

「揉んでない。ただ比企谷から助言を受けた際、服を着た状態におけるベストな揉み方、

下着を着けてる状態におけるベストな揉み方、上半身裸の状態におけるベストな揉み方をレクチャーして貰った」

「本当に確な助言しないわね……んっ！清隆、あたし変な気分……んんっ！」

「なるほど……確かにこの柔らかさは雪ノ下によつて生まれた不快な気持ちを和らげているな。しかし由比ヶ浜の場合、雪ノ下以上に不快な気持ちになるし……もう少し強く

……」

「ああ……清隆、激し過ぎだからあ……！」

「激しいと言われた際は、比企谷によれば……」

「ああんっ！真面目に考えるな、馬鹿あ……んあっ！」

## 歓喜と憤怒

テストが終わって数日、いよいよ結果発表の日を迎えた。俺達Bクラスは静かに坂上先生が来るのを待っている。HR前にこんな静かなのは珍しいだろう。

そして暫くすると坂上先生が真剣な表情を浮かべ、デカイ紙を数枚持つて入ってくる。

「おはよう諸君。それでは早速だが結果を発表する」

「言いながら坂上先生は紙を広げる。そこにはベアの成績の合計点が書かれているが……」

「おめでとう。今回Bクラスからは退学者は出なかった」

坂上先生が褒めるとクラスに安堵の表情を浮かべる。一応中堅どころに不安があったが、赤点が出なかったのは良かった。

「次に個人個人の成績を発表する」

そして次にいつもの定期考査と同じように8科目ごとの点数が最下位から発表されていく。

「嘘でしょー！」

最下位の所には今まで全科目最下位だった石崎の名前はなく、真鍋や山下や諸藤のように真鍋グループの名前が出てくる。点数は全員30点台後半で、ペア試験じゃなかったら退学を食らってるレベルだ。

で、中間最下位だった石崎は何と下から10位と大躍進をしている。全科目40点以上でありこれは俺も予想外だった。

俺は毎度のように3位で800点中661点だった。2位が金田で679点、1位がひよりも720点と金田とは僅差だったが、ひよりとは大分離れている

「最後にクラスの平均点の発表をする。わかっているとは思うが平均点の高さでCクラスとの勝敗が決ま「こんなの認めないわ!ズルをしたに決まってるわ!」「そうだし!勝負は無しに決まってるじゃん!」……煩いですねえ。窓際の人は窓を、廊下側の人をドアを閉めてください」

坂上先生が頭を押さえながらそう命じると窓とドアが閉まるが、まだ微かに聞こえる。会話の内容から察するに例の綾小路と雪ノ下の勝負で雪ノ下が負けて、雪ノ下と由比ヶ浜がゴネ始めたのだろう。予想通りだな。

そして綾小路は勝ったようだが、予想よりも遥かに優れた人間のようだ。

「さて、邪魔が入りましたが改めて、各クラスの平均点を発表します」

坂上先生が最後の紙を取り出して、うんざりした空気から真剣な空気に戻る。全員が坂上先生に注目する中、坂上先生は最後の紙を黒板に広げる。

そこには……

Aクラス……78. 2点

Bクラス……72. 4点

Cクラス……71. 9点

Dクラス……76. 5点

と表示されている。つまり……

「おめでとう。君達はCクラスに勝利した。よってCクラスから100ポイントだけこのBクラスに移動する」

坂上先生が笑みを浮かばせながらそう告げると……



『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!』

隣の教室から大歓声が上がると、Cクラスの教室にはお通夜のような空気が流れている。

皆が信じられないとばかりの表情で黒板に貼られた髪を何度も見るが……

Aクラス……78・2点

Bクラス……72・4点

Cクラス……71・9点

Dクラス……76・5点

結果は変わらず、CクラスはBクラスに負けた事を示している。

何度も見ても変わらない事実にはクラス全体の空気は重い。0・5点差は僅差だが負けは負けである。

しかもただの負けではない。今回の試験より遥かに簡単だった中間試験ではBクラスの平均点はCクラスのそれより10点近く下だったのだが、これはBクラスは今回の

試験に対して自分達より遙かに向き合っていた事を意味する。

そして今回の試験でBクラスはCクラスの生徒に対して盤外戦術を使っていなかった。小細工抜きで真つ向から正々堂々と戦ってきたのだ。

Cクラスの生徒は「Bクラスは卑怯な手を使わないと弱い」って考える生徒もかなり居るので、卑怯な手を使ってないBクラスに負けたのは、精神的にかなりキツイ。

終いには今回のBクラスの指揮者はリーダーの龍園ではなく、サブリーダーの八幡である事だ。

敵クラスからはリーダーが出るまでもなく、こつちの土俵で負けたのだ。言い訳しても見苦しいと自分達でも理解出来るくらい惨めになっている。

普通なら一之瀬が悪い空気を払拭させるが、一之瀬自身もかなりのショックを受けている上、有栖の作つた問題によるダメージも回復出来ずにいるので動けなかった。

担任の星之宮としては何とかしたいが担任であるが故に口出しは制限されているので歯痒く思いながらクラス全体を見ることしか出来なかった。

それから一之瀬が動いたのは数分後であるが、Cクラスに治りにくい精神的ダメージが刻まれたの言うまでもないだろう。

「……退学者は無しだ。次に個人の成績を発表するが、綾小路と雪ノ下につけておく。今回の賭けについては学校が認めたので、総合点で負けた方はペナルティがある。尚、カメラの映像を我々教員が数回確認した結果、問題が無かったので、言い訳は認めない」  
「構いません」

「問題ありません」

Dクラスにて担任の茶柱がそう言うのと雪ノ下は自信満々に、綾小路はいつも通りの無表情で頷く。

総合点で競い、綾小路が負けたら雪ノ下と由比ヶ浜に土下座をしてから退学、雪ノ下が負けたら須藤達を受けている矯正プログラムを卒業するか退学するまで参加する賭けに皆が注目する。

「では発表する」

茶柱がデカイ紙を広げていく。最下位は全科目で小学生レベルの問題しか解けず

50点の由比ヶ浜、山内、須藤、池と馬鹿4人の名前が出てくる。

そしてどんどん発表されていくが……

9位 榎田桔梗 612点

8位 松下千秋 624点

7位 平田洋介 639点

6位 王美雨 659点

5位 幸村輝彦 712点

4位 堀北鈴音 724点

と普段成績上位の連中の名前が挙げられるが雪ノ下、綾小路、高円寺の名前は出てこない。これには騒めきが生まれる。

そんな中、茶柱は紙を捲ると……

3位 雪ノ下雪乃 731点

3位の所に雪ノ下の名前が現れる。

「なっ?!」

雪ノ下が絶句する中、他の面々は高円寺と綾小路、黒板に貼られた紙を順番に見ていき、茶柱は最後の1押しで紙を捲ると……

1位 綾小路清隆 800点

1位 高円寺六助 800点

2人の名前の左右には1位と800点と同じ文字が記されていた。

まさかの満点にクラス中が絶句する中、高円寺はいつも通り髪の手入れをして、綾小路は無言で軽井沢の胸を揉んだ時に確かに感じた心地良さを思い出していた。全科目満点を取る事を当然と思っている2人は喜びを出さない。

「以上が個人の結果だ。一定以上の点数を取った生徒については放課後までにポイントを支給するが、綾小路については全科目満点と元々高円寺が提示した条件をクリアしたので高円寺にポイントを支払う必要はない。高円寺も条件を呑んで貰うぞ」

「構わないさティーチャー。綾小路ボーイからのポイントを抜きでも充分な儲けさ」

高円寺は特に気にすることなくそう返す。実際高円寺は全科目満点だったので30万ポイントは確実に入るし、他の生徒も予想以上に高得点を獲得しているの、綾小路からのポイント抜きでもかなりの収入だ。

「そして雪ノ下。お前は綾小路に負けた以上、約束通り須藤達と同じ矯正プログラムを受けて貰う。まずは携帯を没収するから渡せ」

茶柱はそう言つて雪ノ下に近寄るが、クラスの大半は絶対にゴネると確信していた。

「……ないわ」

雪ノ下はプルプルと震えながらボソボソ呟く。そして直ぐに顔を上げて綾小路を睨みつけて口を開ける。

「こんなの認めないわ！ズルをしたに決まってるわ！」

予想通りの対応にクラスの大半が白い眼差しを向ける。

「そうだし！勝負は無しに決まってるじゃん！」

由比ヶ浜が便乗して綾小路に怒鳴る。軽井沢の胸の柔らかさから前向きな感情について知ろうとしている最中に馬鹿2人のゴネが聞こえて、現在不快感以外の感情を持っていない綾小路のストレスがマッハで加速する。

「……なら、もう一度勝負するか？オレとお前の周りに複数の教師を配置すれば、言い訳が出来ないだろう」

綾小路からしたらそれでも構わない。馬鹿を黙らせるならもう一度テストをやる事ぐらい余裕だ。

「っ……………」

綾小路の言葉に雪ノ下は睨みながら気圧される。綾小路の声に苛立ちがあるが、明らかに自分を完膚なきまでに叩き潰すつもりだ。

そう思っていると……

「ふんっ！そつちが出した条件なんだからズルするんでしょ?!」

イライライライラ

由比ヶ浜の言葉に綾小路の中の苛立ちが増す。

「なら監視カメラも準備するか？それならズルも糞もない」

苛立ちに限界が来るのを自覚する綾小路だが……

「嘘！どうせ先生達も味方につけてんでしょ?!先生達はあたしが虐められても対応しない馬鹿ばかりだし！今回のテストもゆきのんのテストの点を下げたんでしょ！」

由比ヶ浜が茶柱や監視カメラに向けて怒鳴る。

ブチイッ！

ここで綾小路の頭の中で切れる音が生まれる。この瞬間、綾小路は不快感に続き、憤怒の感情を得る。

綾小路は無表情ながら目に憤怒を宿しながら由比ヶ浜に詰め寄り……

「調子に乗るなよ塵が……殺すぞ」

これまで由比ヶ浜を失禁させた際に出した殺意に憤怒の感情を混ぜて、更に強大な殺



そして憤怒と不快感の感情を身につけた綾小路は次こそは興奮の感情を知るべく、夜に軽井沢を呼び、ストレスを発散出来るまで軽井沢の胸を揉む事を決意するのだった。

綾小路が興奮、情欲の感情を得るまで後……曰。

## 打ち上げ

「ねえ聞いた？」

「ああ。由比ヶ浜がついに脱糞したらしいぜ」

「しかも失禁もしたらしいわよ」

「マジか？ 救い用がないな」

「というか殺意だけで脱糞と失禁させるなんて綾小路やば過ぎだろ？」

「Dクラスの友人に聞いたら魔王に見えたらしいぜ」

「私の友達のカイドウに見えたって聞いたわ」

「どうか由比ヶ浜って学習出来なすぎだろ？ 毎回思うけど、Dクラスのクラスメイトが可哀想過ぎるわ」

「だよね。しかも罵倒女に盗撮トリオもいるし、マジで可哀想だよ」

放課後のケヤキモールにてそんな会話があらゆる場所から聞こえてくる。

閉鎖された空間であるが故に噂が広まるのも早く、「綾小路が期末テストで全科目で満点を取り、綾小路とテストの点数で賭けをして負けた雪ノ下は矯正プログラムの参加

を義務付けられた。しかしその結果に雪ノ下と由比ヶ浜が綾小路にゴネたら綾小路がブチ切れ、今まで以上の殺意を放った結果、由比ヶ浜が失禁と脱糞をした」って話は全学年で話題となっている。

「全く大変な事になっているなあ」

龍園は楽しそうに笑っているがDクラスからしたら不本意極まりないだろう。

「まあな……って、アレは噂の当人じゃねえか」

「女子3人に振り回されてるな」

龍園の言うように視線の先では綾小路が軽井沢、佐藤、松下の後ろにいて3人の荷物持ちをしながらこっちにやって来る。

「ようお前ら。随分と羽振りが良いな」

「綾小路君が全科目満点だったから30万手に入れたからね」

佐藤がそう言ってくるが……

「何だ？つまりテメエらは綾小路にたかつてると？中々の屑だな」

龍園が笑いながら笑みを浮かべながらそう言うが、松下が口を開ける。

「たかつてないよ。貰ったんだよ。綾小路君が由比ヶ浜さんに殺意を浴びせたのは漏らさせたのは知ってるでしょ。その時に由比ヶ浜さんは私の席の近くにいたから……ね？で、綾小路君が私に土下座してポイントを半分払うって謝罪したから10万で手を

打ったの」

大体わかった。要は由比ヶ浜が漏らした際に松下の机や私物、松下本人に被害がきたのだろう。

「で、それに加えてオレは荷物持ちをしている」

「……なるほどな。災難だったな」

龍園は笑みを消して同情の眼差しを松下に向けるが、俺も似たような眼差しを向けているのだろう。

「本当に災難だったよ。鞆と制服を買い直して、机も新しいものを欲しいって申請したりしたけど、面倒だったよ」

改めて聞くと本当に不憫だな。

「けど雪ノ下も矯正プログラム参加か。プライドの高い雪ノ下からしたら屈辱だろ」

何せ盗撮トリオと同じ扱いなのだから。

「どうせなら由比ヶ浜さんもプログラム参加にすれば良いのに」

軽井沢が心底嫌そうに呟くが、寧ろ由比ヶ浜が未だにプログラム参加じゃないのが意外だ。

「おいおい軽井沢。お前は馬鹿か？あの異常者が変わるわけないだろ」

龍園が笑いながらそう言うが否定は出来ない。実際由比ヶ浜が雪ノ下に毒されて、自

分が正義で自分の考えとは違う考えは悪……って思っているが絶対に矯正出来ないだろう。

「……確かにそうね。というか雪ノ下さんや盗撮トリオも無理でしょ」

「どうせなら人気投票をやつて最下位の生徒は退学にする特別試験をやれば良いのに」  
「どれだけ理不尽な試験なんだよ……」

佐藤の愚痴にそう返してしまう。この学校は退学者が多いが流石に強制退学がある試験は出さないだろう。

「そんな試験があるなら是非ともCクラスに積極的に関わらないとな」

「何だ？ 悩む一之瀬を煽りまくるのか？」

「おいおい。俺がそんな非道な事をするように見えるのか？」

「……見えるな（ね）（わね）……」

龍園の質問に俺、綾小路、軽井沢、佐藤、松下が一斉に即答する。寧ろ煽らない龍園は龍園じゃないだろう。

「心外だな。俺はそんな試験があつたら、誰を最下位にするか選べない一之瀬の為、誰が退学になるべきか親切に、わかりやすく説明してあげるだけだ」

いやそれ煽るよりタチが悪いじゃねえか。そこに有栖もいたら一之瀬潰れるんじゃない？

「つと、噂をすればだ」

龍園が指差した方向を見れば一之瀬らCクラスのメンバーが10人ほどいて、龍園は笑いながら近寄っていくが、絶対に煽りに行ったな。

そう思っている中、龍園が余り明るくない一之瀬に対して嬉々としながら話しかけて、周りのメンバーが怒りに満ちた表情になり、一部の男子は殴りかかろうとして神崎に止められている。

そして龍園は笑いながらこつちに向かってくる。

「待たせたな。もうすぐ集合時間だから行くぞ」

「何？打ち上げか何かするの？」

「Cクラスに勝ったし、クラスメイト全員に焼肉を奢る。ところで龍園。さつきCクラスに何て煽ったんだ？」

まあ「ラフプレーしか出来ない屑どもに負けた気分はどうだ？」みたいな事を思い切り悪意を込めて言っただろう。

「失礼な奴だな。俺は単純にお互いに正々堂々戦ったんだし、お互いの健闘を讃えるために俺達の打ち上げに来ないか誘っただけだ」

「それ煽りよりタチが悪いでしょ」

軽井沢がそう口にする。実際一之瀬達からしたら自分達の土俵で負け、負かした怨敵

に打ち上げに誘われたのだ。この上なく屈辱だろう。

「良いんだよ。一之瀬を肉奴隷にするには心を削らないといけないからな」

龍園は笑いながらそう言っているが女子の前で言う台詞じゃねえよ。空気が悪くなつたじゃねえか。

「そこまでにしろ龍園。もうすぐ予約の時間だ」

「へいへい。随分と紳士なこつた」

「お前はデリカシーを覚えろ……あ、最後に綾小路。お前、松下に迷惑をかけて詫びとして10万渡したみたいだが、その分は俺が出してやるよ」

言いながら俺は携帯を操作して綾小路に10万送金する。

「良いのか?」

「元々由比ヶ浜嫌いの有栖がお前に報酬をあげたがっていたからな。俺が払ってやるだけだ」

「ならありがたく受け取っておく。それで比企谷、後日で良いから予定を空けといてくれないか?」

綾小路からそんな風に言われるがわざわざどうしたのだろうか?

「……まあわかった。期末テストも終わったし、いつでも呼んでくれ」

そう言うってから俺は会釈をして焼肉屋に行く。

「しかし綾小路清隆か……当初は金魚の糞だと思ったが、あの様子じゃ鈴音を隠れ蓑にしていたのはアイツだな」

「まあ由比ヶ浜の存在によつてクラス間の争いを諦めたらしいがな」

「だろうな。俺や坂柳でもあのクラスは上に上げられねえよ。見所がある奴がいるのは否定しねえが、それ以上に屑のレベルが酷えからな」

「どうやら龍園でも匙を投げるようだ。まあ足手纏いが酷いからな。特に由比ヶ浜と須藤なんて小学生以下だし。」

「そう思いながらも予約した焼肉屋に行くと既に20人くらいは集まっている。集合15分前なのに律儀な奴らだ。」

「あ！お疲れ様です！2トップが一緒に来たって事はデカイ仕事をするんすか?!」  
「違う。ひよりは有栖と2人で出かけて、1人でブラフラしてたら龍園と偶然会つて一緒に行動しただけだ」

石崎の質問に首を横に振る。2人は何か女子だけで買い物が見たいと別行動を取つたからな。聞き出すのは野暮だろう。

「そう思っている続々とクラスメイトがやってきて、ひよりもやって来る。有栖が居ないのはAクラスの打ち上げに参加しているからだ。」

何にせよ……

「全員揃ったし入るぞ」

40人全員揃ったので店に入り案内される。貸切にしたので気兼ねなく出来る。

そして全員が座ると既に準備していたので飯や肉やスープが続々と運ばれて、直ぐに焼ける状態となる。

「じゃあ比企谷。音頭を取れ。今回のリーダーは teme だから」

龍園に促されて俺は立ち上がる。

「じゃあ肉が前にあるから一言。先ずはお疲れ様。今回の結果は皆の団結、つまりに C クラスの土俵で勝った。その事は誇るべき結果だ」

これについては事実だ。正直勝ったのは出来過ぎと思っただくらいだ。

「しかし今回勝ったからと浮かれ倒すな。今後も他クラスとの戦いや大学生活を想定して勉強に励め」

勉強するのはクラスポイントの為にするのではなく、将来の為にするものだ。勝って嬉しいと思うのは仕方ないが浮かれ倒すのは論外だ。

「とりあえず堅苦しい話は終わりだ。今は……他人の金による焼肉を思い切り楽しめ、以上だ」

『最後に台無しだよー!』

そう締めくくると大半からツツコミが入った。解せぬ。

そんな感じで打ち上げが始まった。

焼肉屋では大きな盛り上がりを見せている。長期の勉強による疲れが溜まった故の反動か、Ｃクラスを打ち破ったことに対する喜びかわからないが、物凄く盛り上がっているので催しは成功だろう。

しかし俺は他の皆ほど盛り上がれなかった。何故なら……

「はい八幡君。あーんです」

ひよりはニコニコしながら肉を摘んだ箸を突き出してくるので、俺は視線を向けられながら差し出された肉を食べる。そのタイミングで大量のニヤニヤ顔を向けられて居た堪れない。

最初は遠慮したのだが、「嫌、でしたか……ごめんなさい」って、物凄く悲しそうな表情で謝ってきたので拒否出来なかったのだ。

で、了承すると物凄く嬉しそうな表情になって俺に擦り寄ってきて、甲斐甲斐しく食事の世話をしてきたのだ。その甘やかしっぷりには圧倒的な母性を感じるが、人前でや

る行動じゃない。

結果、大半のクラスメイトにニヤニヤ笑いを向けられ、龍園に至っては写真を撮っていて、悶死してしまいそうだ。ひよりは恥ずかしくないようだが、羨ましい。

そんな風に考えていると携帯が鳴り出すので、見れば有栖から電話が来ていた。

「すまん。ちよつと電話に出るわ」

一言断つてから俺は一旦離れた場所にあるトイレに向かい、電話に出る。

「もしもし? どうした有栖?」

『いえ。八幡君が人前であーんされるとは予想外でしたので。今後は私も人前で甘える……キスなどをしてても良いのか確認をしたくて電話をしちやいました』

有栖の言葉に冷や汗が出てくるが、十中八九龍園が撮った写真を有栖に送ったのだから。あの野郎、マジでぶざけんな。

「い、いや……アレはひよりに押し切られてな」

『わかりました。それでは私も今後押し切って人前で八幡君に甘えますね』

「そ、それは……有栖、怒ってる?」

十中八九怒ってると思うが、思わず確認をしてしまう。

『怒ってないです。ただ八幡君は私のものである事の認識が甘いようだと思っただけです。そしてそろそろ八幡君と初夜を迎えるべきと考えただけです』

有栖の言葉に息を吞んでしまう。俺はこれまでにひよりと有栖の身体を触ったり揉んだり舐めたりしたが、一線は越えなかった。しかし今の有栖の発言から察するにそろそろ越えてしまう可能性もある。

今まで散々エロい事をしたから覚悟がないわけじゃないが、やはり恥ずかしい気持ちはある。

『まあ今はお互いに打ち上げ中ですからこれ以上は言いません。ですが近い将来に八幡君に処女を捧げ、尚且つ八幡君の童貞を卒業させますからそのつもりでいてください。では……』

その言葉と共に通話が切れる。マジか……なんだかんだ一線を越える事にチキッてはいたが、そろそろ覚悟を決めないといけないようだ、

そう思いながら俺は携帯をポケットに入れて店に戻ろうとした時だった。

「話は終わった。なら俺の話にも付き合ってくれよ」

背後からそんな声が聞こえてきたので振り向く。

「話？別に構わないが主催者の俺が長く席を外すのはアレだし余り時間は取れないぞ、時任」

そこにいたのは同じクラスの時任裕也。ウチのクラスでは学力も身体能力もそこそこあり、不良っぽい見た目とは裏腹に勉強会には毎日参加していた勤勉な奴だ。

「そんなに時間はかからない」

「わかった。で、何のようだ？」

しかし勉強会以外では特に接点の無かったコイツが俺に何の用事がわからない。

「単刀直入に言うが、お前は今の地位で満足してるのか？」

「は？ どういう事だ？」

「今回の特別試験、全権は比企谷が握っていたが、お前は見事に役目を果たしたと思う。Aクラスや上級生との交渉、自分の時間を削って指導者の仕事などして、Bクラスを勝ちに導いた。クラスで一番評価されるべきなのはお前だと俺は思う」

「そりやどうも。で？ 地位ってのは？」

「言葉通りだ。龍園の下について満足かって意味だよ。ハッキリ言えば龍園じゃなくしてお前がリーダーをやるべきだ」

……そういう事か。確かに龍園のやり方は暴力的で嫌っている生徒もそれなりにいる。それでも表立って文句を言わないのは実績を出していたからだ。

しかし俺が今回の試験で実績を出したことで、龍園より俺をリーダーにするべきって意見が生まれたようだ。時任はその代表あたりって所だろうな。

「結論から言うと俺はリーダーにならない。俺はリーダーに必要なものが龍園や有栖に比べて不足しているからな」

「リーダーに必要なもの？」

「そうだ。リーダーに必要なもの……勝ちに対する執念だと俺は思っている。龍園や有栖は1位にならないと気が済まないタイプだが、俺は自分に利益があるなら1位じゃなくて良いってタイプだからな」

今回俺達は勝った。しかし俺は勉強する習慣さえ身につければ負けても構わないと思つた。仮に龍園がリーダーなら「負けたら殺す」ってケツを叩いて負けたくない気持ちを露わにするだろう。

言い方は過激かもしれないが、それはまさに勝ちに対する執念であり、俺にはないものだ。

「リーダーってのは常に勝利に貪欲な奴がやるべきで、そうでない者はやるべきじゃない。その点、龍園や有栖は適性が高く、俺はリーダーに向いてないし、一之瀬や平田は論外だ」

俺はリーダーってタイプじゃないが、それでも一之瀬や平田よりはマシだろう。

一之瀬はクラスメイトを優先するタイプで、「皆で頑張れば勝てる」って思つてるのだから甘過ぎる。

大体皆つて誰だ？40人全員か？違うだろ。実力のある生徒が引つ張るのだから。

俺は皆で協力して頑張るって言葉が大嫌いだ。一部の生徒数人が功績をあげても皆

が頑張ったおかげになり、雑魚が足を引つ張つても全員の責任になるからな。功績は頑張った生徒のもので、責任は足を引つ張つた生徒のものであるべきだ。

平田は更に論外。揉め事を回避したいようだが、だからってクラスに迷惑をかけた連中に碌に注意せず、波風を立てないようにあなあで済ませているからな。

そんなんじや多数の生徒の不満を止める事は出来ないだろう。五馬鹿以外の生徒からしたら、「いつまで我慢しないといけないんだよ！」つていずれ怒りが爆発するだろう。そうなつたら是非見てみたい。

「……話はわかった。だが龍園のやり方で勝てると思つてるのか？」

「現状じゃ厳しいな。一之瀬率いるCクラスと厄病神に憑かれたDクラスは敵じゃないが、幾らこつちの兵力が増しても、兵力はまだ向こうが上だし、有栖を出し抜くのは難しい。反則破りの攻撃も見抜かれる可能性が高い」

今回伸びたとはいえ、今後の兵力の増強具合や他クラスの利用方法次第では差が広がる。

「だからこそ俺は龍園の下で価値を見せている。今後も価値を高めて龍園のストッパーになるつもりだ」

龍園に必要なのは強い駒ではなく、ストッパーだ。アイツの博打戦術はリスクを考慮して攻め時を選んでこそ真価を発揮するからな。

「……わかった。ひとまずはそれで納得してやる。ただ俺はお前がリーダーをやるべきだと思ふ考えは変わらない」

時任はそう言つてから店の中に戻る。

「やつぱりまだまだ課題はあるなあ」

まあ焦るつもりはない。俺達は入学して1年も経過してないからな。これから問題を一つ一つ解決していけばいい。問題点から目を逸らさないで向き合う事が勝利への鍵だからな。

そう思いながら俺も店に戻ると龍園がニヤニヤ笑いを浮かべて俺を見てくる。

「よう。誰からだつたんだ？」

「黙れ。わかつてんだろ」

そう返しながら俺は自分の席に戻るとひよりが距離を詰めてくつついてくる。

「何を話していたのかわかりませんがお疲れ様です。肉は八幡君の分を確保しておきました。それを食べますか？」

「……じゃあタンで」

「わかりました。はい八幡君、あーん」

ひよりは満面の笑みを浮かべながら箸を突き出してくる。

(もう良いや。よく考えたら体育祭で全生徒の前でキスをされたんだし受け入れよう)

俺は開き直って肉を食べる。開き直ったからか龍園達のニヤニヤ笑いに対する苛立ちが多少マシになったな。

結局、俺はお開きになるまでひよりから甘やかされて、食べ終わった直後は膝枕をされたのだった。

## 早朝

「ふあ〜」

ふとした拍子に目を覚ました俺は辺りを見るが、まだ真つ暗だ。時計を見ればまだ朝の4時である。12月の朝4時半だけあって真つ暗なのは当然だ。時計を見ればまだ朝

俺はそのまま身体を起こすが、昨夜もひよりと有栖と甘えあつた事で牡も牝の臭いが身体についている為、そのままシャツとパンツとジャージをクローゼットから取り出して、裸のまま風呂呂場に行きシャワーを浴びる。

いつもは2人と一緒に入るのだから新鮮に感じてしまうな。やっぱり2人に挟まれて擦られるのが1番だ。

そう思いながら俺は身体を洗ってから脱衣所でジャージを着て、そのまま部屋を出る。偶には1人で散歩するのも悪くないな。

エレベーターで一階に降りて寮を出るが未だに真つ暗だ。あと1時間半くらいしないと明るくならないだろう。

学校に繋がる歩道を歩くが誰もいない。普段は人が多い場所を独り占めするのは不

思議な気分だが、悪い気分じゃない。

「あと少しで今年も終わりだな……」

思い返せばこの学校に来るまではクソつまらない日々で、この学校に来てからは毎日が刺激的だ。可能なら由比ヶ浜と雪ノ下が入学しなかったら良かったのだが今更言っても仕方ない。

「しかし人生つてのは予想がつかないな……」

当初は目立たずに平和な日常を過ごす事を目標にしていたが、今じゃ暴君の右腕としてクラスのNo.2になって、学年1の人気者の女子を真つ向から叩き潰し、美少女2人と同棲して毎晩エロい事をしている……本当に予想出来ねえよ。

そんな事を考えながら暗い通学路を歩き、校門に立つか案の定閉まっていたので背を向けて元来た道を歩き出す。

そして1年生の寮に戻るには微かだが、東から陽の光が見えて来る。実に良い朝日だな。

俺は良い気分になりながら自販機でコーヒーを買おうと、自販機の置かれた中庭に向かうと……

「んっ……やあっ……清隆あ……」

「……良い声だ。やはりバレないのかつて羞恥心を持たせた方が、感度も良くなる……」

あ、済まん恵。バレた」

中庭では綾小路が軽井沢の私服の中に手を入れ、胸を揉んで喘がせていた。チラツと水色の下着が見えている。

途中で綾小路は俺に気づいたようで軽井沢に謝罪しながら手を軽井沢の服から出す。対する軽井沢も俺に気付कि、真つ赤になって金魚のように口をパクパクして……

「みぎやあああああつ！」

そのまま全力ダツシュして去っていく。物凄い速さだが火事場の馬鹿力ってヤツだろう。

「比企谷か……恵の胸に気を取られ過ぎたが、関係を知ってるお前で良かった」

「それは良いんだが何で外で揉んでるんだよ」

綾小路にストレス発散方法として女に甘える事、胸を揉むコツを教えたの俺で、綾小路が軽井沢に手を出したのは知っていたが、屋外でしていたのは予想外だ。2人の関係を知っている俺だから良かったもの……

「いや、恵の胸を揉む時に昂りを感じてストレスは消えていくが、恵が恥じらえば恥じらうほど効果が増していくからな。それなら早朝の屋外なら……って、試してみたところだ」

試してみたところだ……じゃねえだろ。恐れを知らねえなコイツ……

「しかし今後はやめておく。恵の胸は不思議と俺を強く昂らせてくれて周りへの配慮が疎かになるからな。勉強になった」

淡淡と言つてるのが不気味なんだが……

「そうしとけ。ちなみに室内ではどのくらい進んだ？」

綾小路から聞いた話じゃ初めて軽井沢に手を出したのはペーパーシャツフルが2日目が終わつた日で、1週間以上経過しているが、どのくらい進んだか気になる。

「昨夜遂に上着を脱いでくれて下着を纏つた胸を揉めた。比企谷によれば何も纏つてない胸が最高だつたんだよな？」

「ああ。布の感触が無くて、本人の熱がダイレクトに伝わってくるからな」

勿論服を着てる時や下着のみを纏っている時の揉み心地も悪くないが、個人的には裸になつた際のひよりと有栖の胸を揉むのが1番だ。

「なるほどな。とりあえず今年中にそこまで行きたいな」

「お前、無表情なのに中々エロいな」

「オレは昔からあらゆる感情が殆ど無かつた」

「そうなのか？」

「ああ。他の人が笑えることに笑えなかつたり、他の人が泣けるようなことに何の感情も湧かなかつた」

人によっては喜ばなかったり悲しめなかったりするが、綾小路の口振りから察するに、綾小路はあらゆる感情が欠如しているようだ。

「そんな中、由比ヶ浜の存在はオレに不快や憤怒の感情を生み出した」

マジか。最近になって綾小路が過激になったのも、由比ヶ浜が関係しているのは知っていたが、我慢の限界が来たのではなく負の感情が生まれたからってのは予想外だわ。

「そんな訳でオレは感情そのものに悪い印象を持つているが、ストレス発散の為に比企谷から聞いた「女を知る」ってアドバイスを試したら、効果を実感出来た。恵の身体を触れていると今までに感じた事がない熱を感じ、身体が震えるんだ」

「それは興奮するってことだ。話を聞いてる限り、まだ興奮の感情が芽生えた訳じゃないが、無意識のうちに理解しようとしてるんだろ」

感情が不足していると言っても生物としての本能はあるようだ。それなら幾らでも目覚めようはある。

「そうか……ちなみに比企谷は女子の胸を揉む以外に興奮する事はあるか？」

「そうだな……一緒に風呂に入って身体で身体を洗って貰ったり、湯船の中でひより達を膝に乗せて背後から抱き締める時は興奮と安らぎの相反する気持ちになって最高だぞ」

「身体で身体を洗って貰う？ どういう意味だ？」

「どうやら頭が良くてもそういうった知識はないようだ。」

「言葉通りだ。女が自分の身体にボディソープを纏わせて、男に抱きついて全身を使って擦り付けるって事だ。アレはかなり興奮するぞ」

「そんな洗い方があるのか。興奮する気持ちを理解して、一緒に風呂に入れるようになったら頼んでみるか」

そんな風に言っているが、俺の所為でエロの化身に目覚めたらヤバそうだな。

頭脳と身体能力も一級品で、殺意で人を失禁させて、暴力に躊躇いを持たず、エロ……色欲に興味を持つ……完全に魔王じゃねえか。

「参考になった。また聞きたいことが出来たら質問する」

「おう。ところで最近クラスじゃどうだ？」

綾小路はここ最近目立っている。須藤から顔面パンチを10発受けても平然として、一撃で須藤の肩を壊し、殺意で由比ヶ浜を失禁と脱糞させて、ペーパーシャツフルで全科目満点という前代未聞の実績を叩き出している。

現状、3クラスの生徒の大半の警戒対象となっている。まあ実際は俺の協力者だけだ。

「そうだな。5馬鹿は毎回睨んでくるのはいつも通りだが、堀北を始め、一部の連中が何故今まで手を抜いたのか煩く聞いてくるようになったな。……まあ由比ヶ浜がいるか

ら諦めていたって言ったら大半が納得したな」

「どうやら由比ヶ浜の存在はそれほどまでに厄介に思われているようだ。」

「そんな訳で今後は青春を知る事を優先に動くつもりだ。オレもバイトを始めたからな」

「お前がする必要はないだろ。ペーパーシャツフルでは全科目満点で30万ポイント稼  
ぎ、俺に情報を渡せばポイントが入るんだし」

「少なくとも無駄遣いしなければ半年はバイトしなくても普通の暮らしが出来るだろ  
う。」

「バイトもしてないで羽振りがずつと良いと怪しまれるからな」

「まあ一理あるな。で?どんなバイトをやってるんだ?」

「教師が授業で使う小テストの作成だな。俺はもう高校3年生の授業内容も理解出来る  
し、試しに問題を作成して志願したら採用されて、3学期から何人かの先生の代わりに  
作る」

「へえ、そんなバイトもあるのか。まあ1年生でそんなバイトを出来るのは綾小路や有  
栖、高円寺ぐらいだろう。」

「1回幾らだ?」

「1回3000ポイントで、今は5人と契約をした」

中々良い契約だな。誰と契約したかは知らないが真嶋先生や坂上先生あたりと契約したら儲かるだろう。あの2人は定期考査前になると対策用の小テストをガンガンやらせてくるし。

「話を戻すが懐には余裕があるし、バイト先も確保したし、今後はクラス対抗戦は適当にやり過ごして普通の学生生活を送るつもりだ。貢献しろろ言ってくる連中は適当にやり過ごして、しつこいようなら壊すだけだ」

いや、躊躇いなく壊すって言うなよ。怖いからな。

「なら、冬休みは何度か俺達に付き合えよ。娯楽を教えてやるよ」

クリスマスはひよりと有栖の2人と過ごすのは絶対だが、それ以外は特に予定が無いからな。

「楽しみにしてる……大分が日が昇ってきたな」

言われてみれば朝日が少しずつ高くなってきている。早起きする生徒は起きているだろう。

そう思いながら本来の目的である飲み物を買って綾小路と寮に戻るのだった。

ちなみにロビーには軽井沢がいて綾小路にビンタをしてから俺に口止めをしてきたが、俺も今度早朝にやってみたいと思ったのはここだけの話だ。

## 状況と膝

「何か軽井沢さんと平田くん別れたらしいよ」

「ま、そうでしょ。平田くんってお人好しを通り越してヤバいから」

「由比ヶ浜さんを庇うなんて正気とは思えないし」

そんな声が聞こえてくる。どうやら軽井沢は平田と偽カツプルを解消したようだ。まあ由比ヶ浜を庇う平田と偽カツプルをするのは悪手だし、綾小路からエロい事をされる際に平田の存在は邪魔になるだろうからな。

そう思いながら廊下を歩いていると一之瀬がクラスメイトに囲まれながら歩いているが元気が少ない。これは期末テストが終わってからだ。

(やつぱりアレが原因だよな)

俺は一之瀬が有栖の作った問題が関係あると踏んで、勉強の一環として有栖の作ったテストをやったが、現代文のテストで万引き関係のテーマの問題が目にとまった。

他の問題や他の科目を調べたが、犯罪行為に関する問題はないので万引きが関係していると思ひ、一之瀬について調べてみた。

一之瀬の抜群のルックスと中学時代に生徒会長をやっていた事から彼女の地元じゃそこそこ有名だったので苦勞しないで出身校を割り出し、その学校に関する掲示板や裏サイトを見つけた結果、一之瀬は中3の時に万引きをして引き籠もっていた事を知れた。

理由については書かれてなかったが、有栖の作った問題から察するに妹の為に万引きをしたのだろうと読めた。

そして偶然とはいえダイレクトに万引きの問題を出された事で、第三者に知られたと思っているのだろう。

ちなみに有栖や龍園は知らない。俺が教えてないからだ。教えたらあの2人は確実にそれをネタに一之瀬を煽るだろうからな。

それだけならまだしも、一之瀬を崇拜している連中が何をやらかすかわからないのが怖い。由比ヶ浜のように理性がない行動を取ってくる可能性が高いからな。

馬鹿つてのは時々信じられない行動を取るが、わざわざ馬鹿を生み出す可能性がある戦術を使うのは得策じゃない。

そんな事を考えながら教室に入るが、クラスの雰囲気は明るい。当然だ。今年最後の特別試験で勝って気持ちよく冬休みを迎えられるからな。

ペーパーシャッフル当日のクラスポイントは……

Aクラス 1096ポイント

Bクラス 827ポイント

Cクラス 650ポイント

Dクラス 0ポイント(実質マイナス100ポイント)

だったが、AクラスがDクラスに、俺達BクラスがCクラスに勝った事によって……

Aクラス 1096ポイント↓1196ポイント

Bクラス 827ポイント↓927ポイント

Cクラス 650ポイント↓550ポイント

Dクラス 0ポイント(実質マイナス100ポイント)

こんな感じになった。

ちなみにDクラスについてはマイナスの数値になっているが、特別試験における敗北では更なるマイナスにならず、Aクラスに対するポイントは学校側が与えるらしい。まあそうしないのと逆転も目が一切出ないからだろう。

ただし須藤や由比ヶ浜のように日常生活で問題を起こせば更にマイナスになるとの事だ。そして俺の勘だがまたマイナスになると思う。

しかしこうしてみるとウチは絶対好調だな。5月の時点のクラスポイントは……

Aクラス 940ポイント

Bクラス 650ポイント（現Cクラス）

Cクラス 490ポイント（現Bクラス）

Dクラス 0ポイント

こんな感じだった。今のポイントと比較するとAクラスは256ポイント増やして、ウチは437ポイント増やしてBクラスに昇格している。

逆に一之瀬のクラスはBクラスだった5月時点に比べて100ポイント下がってCクラスに落ちていて、Dクラスに至っては一部の馬鹿の所為でマイナスだし。

しかしまだまだ油断は出来ない。一之瀬のクラスはポイントを落とし過ぎたら一之瀬がメチャクチャ落ち込み、崇拜者達が理性を飛ばして何かをやらかしてきそうだし、Dクラスについてもイカれた連中が多いからな。

そんな事を思いながら教室に入り席に着くと……

「余所見してた癖に偉そうにすんなし！どっからどう見てもアンタが悪いから！」

隣の教室から由比ヶ浜の叫び声が聞こえてくる。また何かやったのか？

「はあ?!あたしが悪い訳ないじゃん!アンタの所為で携帯を落としたんだよ!」

どうやら由比ヶ浜は誰かとぶつかって携帯を落としてキレたのだと思う。詳しい内容はわからないから何とも言えないが、由比ヶ浜は全く悪くないと言い張っていて、由

比ヶ浜とぶつかつたと思われる生徒は由比ヶ浜に非があると云つたのだろう。

しかし真相がどうであれ、もう少し静かにして欲しいものだ。

「朝から煩いな……」

「猿でも学習するのに……」

「また綾小路君が脱糞させてくれないかしら……」

それはクラスメイトも同じような愚痴が聞こえてくる。しかし由比ヶ浜が静かになるとは思わないし、窓とドアを閉めるべきだな。

俺は窓を閉めようと立ちあがろうとした時だった。

「いい加減にしてよ由比ヶ浜さん！お互いに謝れば終わりなんだから！佐倉さんが謝つたんだし由比ヶ浜さんも謝れば終わる事だよ！」

榎田の叫び声が聞こえてきて、クラスメイトも顔を見合わせる。どうやら今まで由比ヶ浜を庇っていた榎田も限界が来たようだ。

「ふざけんなし！何で何にも悪くないあたしに怒るんだし?!この裏切り者！」

うわ、コイツ……今まで庇ってくれた榎田にもそんな態度かよ。人として終わってる

だろ。

すると……

「ふざけんな由比ヶ浜！」

「今まで庇ってくれた櫛田さんに何て言い草だよ！」

「何度も停学食らってポイントを減らしまくったアンタこそ裏切り者よ！」

「綾小路君！今直ぐこの馬鹿を黙らせて！」

Dクラスから怒りが爆発した気配を感じる。そりや半年以上庇った櫛田に対しても暴言を吐いたのだから当然だろう。つか綾小路からしたら面倒極まりないだろう。

こりやDクラスの朝のHRは世紀末になるだろうなと思いつながら俺は窓を閉めて、朝のHRが始まるまでイヤフォンを付けて音楽を聴くのだった。

「……という訳で余りに俺に頼む声が多いから黙らせようとしたんだが、そのタイミン  
グで茶柱先生が入ってきたんだよ」

「んっ……はあっ……ああっ……」

「タイミング神がかつてんな。で？由比ヶ浜はまた茶柱先生に泣きついたのか？」

「はあ……あんっ……八幡君……」

「ああ。皆から心無い暴言を吐かれた、これは立派なリンチだから悪口を吐いた奴を退学にしろってな」

「やあっ……清隆あっ……んあっ……」

「それを言ったら偶然ぶつかっただけの佐倉と当たり前の事を言っただけの櫛田に暴言を吐いた由比ヶ浜も退学になるだろ」

「ひゃあ……やんっ……んんっ」

「まあそれがわからないからこそ由比ヶ浜だろう。隣のクラスの比企谷達も大変だったか？」

「うんざりしてたな」

1年生寮の綾小路の部屋にて、綾小路は膝に軽井沢を乗せて彼女の胸を制服越しに揉みながら、同じように有栖を膝の上に乗せて制服越しに有栖の胸を揉んでいる俺に質問してくる。

何でこうなったかという朝の件について詳しく聞こうと有栖と一緒に（ひよりは茶道部に顔を出して不在）綾小路の部屋に行ったら、軽井沢もいた。

そこまでは良いが綾小路は俺達が来るタイミングで軽井沢の胸を揉むつもりだった

らしく「凄く恥じらっている恵を見たい」と言ってから、敢えて俺達の前で軽井沢を膝の上に乗せて揉み始めたのだ。

恥ずかしがっている軽井沢を見た有栖は心底楽しそうに見ていたのだが、綾小路が「話をするのは構わないが、折角だし比企谷も坂柳を膝に乗せたらどうだ？」と言った瞬間に物凄くテンパりだした。

そんな有栖を見て俺の中の嗜虐心が強くなり、綾小路同様に有栖を膝の上に乗せてから胸を揉み始めた。

結果として俺と綾小路の会話に有栖と軽井沢の喘ぎ声がBGMとなり、中々蠱惑的な雰囲気となっている。

しかし第三者に見られているからか、いつもより反応がエロいな。下着姿の有栖や裸の有栖は第三者に見せるつもりはないが、制服を着ている時にはこういうプレイもアリかもしれない。

「しかしいつもより恵の反応が刺激的だな。声にも色気が多い」

「だよな。しかも胸についてもいつもより敏感だし」

「清隆の、んっ……馬鹿あっ……やあんっ！」

「誰の、あっ……所為だと、んむっ……思っているの、です……八幡君の、おたんこなす……！」

女子2人が文句を言ってくるが、胸を揉まれているからか全然怖くない。

「ちなみに比企谷。比企谷って普段コスプレを坂柳と椎名にさせてるのか？」

「させてるっていうかしてくれてるな。お前も軽井沢にコスプレさせたいのか？」

「興味はある。お前が恵にコスプレさせるならどんなコスプレだ？」

軽井沢にコスプレさせるなら？そうだな……

「バニーガールだな」

「へ、変態……ひゃあつ！清隆！怒ってる最中にそこはんあつ！」

軽井沢は文句を言おうとしたが、綾小路の一揉みで呆気なく屈してしまう。

「バニーガール？ウサギのパジャマって事か？」

マジか？バニーガールも知らないのかよ？

俺は左手で有栖の胸を揉みながら、右手で携帯を操作してコスプレ専門通販のページを開き、綾小路に見せる。

「そんな感じの衣装だ。カジノでよく見れるらしい」

「胸元が大胆だな……恵、買ったらしてくれ」

「んっ……命令？」

「ああ。命令だ」

綾小路が躊躇いなく命令すると軽井沢は綾小路の膝の上で息を荒くしながら頷く。

「じゃあ、仕方ないわね……んっ、着てあげるわよ。けどこれは流石に……あつ、2人きりの時しか、着ないから……」

「もちろんだ。胸元を曝け出して吸う予定だし第三者には見せたくないからな」

「変態……清隆のエッチ……んあつ！」

軽井沢は怒るが、またしても呆気なく綾小路のテクに屈してしまっている。綾小路の奴、中々欲望に忠実になってきたな。

「坂柳にもバニーガールをさせるのか？」

「いや、コスプレさせるならチャイナドレスだな。有栖の足って肉つきが良いからな。挟まれるのは中々だ」

「んんっ……八幡君の馬鹿、変態……スケベ……あつ」

有栖が怒るので弱点を攻めて黙らせる。

「まあ冬休みに色々教えてやるよ。実はこの学校にはエロい店もあるからな。そこで衣装や道具を買える」

「わかった。その時を楽しみにしてる」

「それまでに軽井沢のスリーサイズを把握しとけよ」

「了解した……つと、手が疎かになったな」

「やあ……んっ！は、激し過ぎんあつ！」

「おっと、そうだな」

「ひゃあんっ！後でお仕置きします……んんっ！」

綾小路が領いたのを確認したので、俺達は膝の上に乗せているパートナーを攻めるのを再開してから雑談をするのだった。

その1時間後、自室に戻ると有栖が真っ赤になりながら杖で俺の金的をぶっ叩いてきたので悶絶してしまった。

## お守り

ペーパーシャツフルが終わってだいぶ経ち、今日で二学期も終わる。冬休みの宿題は無いし、最低限の勉強をする以外の時間は遊び倒す予定だ。

そしていつものように学校に行くべく、行く準備をして寮を出るが12月の寒い風が身体に障る。

「寒いな」

「ええ。学校が終わったらマフラーを買いに行きませんか？」

「もしくはネックウオーマーも良いですね」

俺の眩きに有栖とひよりがコクリと頷いてくる。これならどんどん冷えていくので買うのは悪くないだろう。

そんな風に会話をしながら学校に向かっていると2年生の寮の近くにお守りが落ちていた。

「落とし物か？」

「そうみたいです。場所から察するに2年生の誰かのものでしょうか」

「もしくは1年生が登校の際に落としたのかもな」

言いながら俺はお守りを拾って歩くのを再開する。

「学校に届けるのですか?」

「何となくそんな気分になった」

よく見れば縁結びのお守りだからな。何となく放置するのも気が引けたし。

そう返しながら学校に着き、上履きに履き替える。

「じゃあこれ届けてくるから先に行ってくれ」

言いながら俺は2人と別れ、落とし物を取り扱う事務所に向かう。

そして到着したので中に入る。

「失礼します。落とし物を届けに「あ!これです!これです!あのお守りですからもう大

丈夫です!」ん?」

事務所に入りながらお守りを見せると向日葵の髪飾りを付けたギャルっぽい女子が

声を上げてくる。上履きの色から2年生である事がわかった。

ひよつとして……

「これ、2年生寮の近くで拾いましたが、貴女のですか?」

「そうそう。前に落としちゃって。どうもありがとね比企谷君」

ギャルっぽい女子はペコリと頭を下げてくるが……

「俺を知ってるんですか？」

「いや、体育祭を見た人なら誰でも知ってるからね？」

「ぐっ……」

その言葉に詰まってしまふ。思い返せばあの時、有栖とひよりに全校生徒の前でキスをされたんだったな。

「あ、自己紹介をしてなかったね。2年Aクラスの朝比奈なずな。宜しくね」

2年Aクラス……入学当初はBクラスだったが、すぐにAクラスになって今じゃ元Aクラス相手に500ポイント近く引き離れたクラスだったな。

まあウチのクラスも入学して半年以内にCクラスからBクラスになって、今じゃ350ポイント以上差をつけているけどな。

「知ってると思いますが1年Bクラスの比企谷八幡です」

「宜しくね。いや、見つかって良かったよ。このお守り、もう売られてないからさ」

朝比奈先輩は大切そうにお守りをギョツと握るが、明らかに男遊び慣れしてそうな人がお守りを大切そうにするって中々珍しい光景だな。

「むっ……今、ギャルっぽい見た目なのにお守りを大切にするなんて変って思ったよね？」

朝比奈先輩が膨れっ面を浮かべながらそう言ってくる。

「すいません。思いました」

「正直で宜しい。けど見た目で人を判断するのは感心しないな」

朝比奈先輩は笑いながら頭をわしやわしやしてくるが、全くその通りだ。由比ヶ浜や雪ノ下は見た目は良いが中身は傲慢極まりないからな。

「以後気をつけます」

「なら良し。それにしても思ったより普通だね」

「目は腐ってますけど」

「いやいや。身体的特徴を悪く言ったり、悪く思ったりするのは人として間違ってるよ」  
おお……意外に誠実だな。雪ノ下なんて中学時代に会って10分以内に目が腐ってるからって散々こき下ろしていたからな。そりやDクラス行きになるわ。尤も俺がCクラスなのもよく分からんが。Dにいてもおかしくないし。

「ところでさ比企谷君って例のペーパーシャッフルで自分のクラスの指揮を執ったんだよね?」

「え? あ、はい。一応俺が執りました」

「その時に帆波に何かしたかな? や、勝負だから怒ってる訳じゃないんだけど、ただ今の帆波、負けただけにしては落ち込み過ぎてるし気になって」

帆波……ああ、一之瀬か。

「申し訳ないですがその件については無関係ですね。今回は一之瀬のクラスメイトを闘討したりしないので、真っ向勝負をしました」

関係があるのは有栖であって俺や龍園は不干涉だ。

「そっか。うん、教えてくれてありがとう」

「随分呆気なく終わらせませすね。一之瀬とは仲良さそうですし、問い詰めてくると思いました」

Cクラスの連中、特に普段から一之瀬と連んでいる白波、網倉、小橋あたりはしよつちゆう龍園（偶に俺）に問い詰めてくるからな。ちなみに俺は適当に流しているがその反面、龍園は煽りまくっている。頼むからCクラスの連中が由比ヶ浜化するのだけは勘弁だ。

閑話休題……

「帆波が心配なのは事実だけど、この学校じゃ騙す騙されるが日常茶飯事だからね。仮に帆波が嵌められていてもそれは帆波自身の問題で、慰めることはあっても解決は帆波自身がしないといけないよ」

流石に2年生ともなれば情に流される事はないようだ。優しそうな先輩だが、そのあたりは線引きしているのは驚いた。

「随分とドライですね」

「ドライにならないとこの学校じゃやっていけないからね」

「なら自分もそうするように心掛けますよ」

「今年の1年生は中々ユニークらしいから楽しみにしてるよ」

いや、ユニークって……意味は合ってるけど悪い意味のユニークですよ？

「そうですか。まあユニークな面々とは適当にやっていきますよ」

「いやいや。君もユニークだからね」

朝比奈先輩がそう言ってくるが、俺がユニークだど？

それはないだろう。俺は普通の生徒だろう。美少女2人に挟まれて堂々とキスをされたりスク水好きと思われたり、第三者には知られてないが毎晩ひよりと有栖を相手にペッティングをし合っているだけのどこにでも……居ないな、うん。完全にユニークじゃねえか。

「……そうかもしれないですね。んじゃ失礼します」

「あ、最後に連絡先を交換しない？ここで会えたのも何かの縁だし。このお守りも縁に関するお守りだしね」

……：……：……：そういえば上級生とのパイプは無かったし、ここらで作っておくのも悪くないな。

「……：……：わかりました」

言いながら携帯を出して連絡先を交換する。

「ありがとね。場合によっては愚痴に付き合っただね。じゃあまたね」

朝比奈先輩はそう言ってから手を振って去って行く。久しぶりに普通の人と会ったような気がする。知り合いの大半はどこかしら変な部分があるからな。

そう思いながら廊下を歩いていると真嶋先生が地下に繋がる階段から上がってくる。しかし手にはトレイや食器があるが、地下に食堂があるのか？

「おはようございませす真嶋先生。それって朝飯ですか？」

「比企谷か、おはよう。これは朝食だが俺達ではなく、Dクラスの須藤達……矯正プログラムを受けている生徒のものだ。片付けは教員が交代で担当している」

ああ……なるほどな。つまり懲罰室は地下にあるのか……って、つまりここにいたらアイツらと鉢合わせする可能性があるじゃねえか。

俺は早足で教室に向かい、席に座る。すると直ぐにHRの時間になって坂上先生が教室に入ってくる。

「おはよう。今日で二学期も終わりで明日から冬休みになる。しかしだからといってハメを外さずに節度ある生活を送るように」

坂上先生がお決まりの言葉を口にしているが、毎晩ひよりと有栖相手にペッティングをしている時点で節度もクソもないだろう。つーか下手したら冬休みに2人の処女を奪う

可能性もあるし。まあ口にはしないけど。

そんな事を考えている間にも話は進み、終業式でありがたくも面白くない話を適当に聞いて、2学期の終わりを迎えた。

さて、冬休みはどんな生活になるのだろうか。可能なら平和に過ごしたいものだ。

## 番外編 2学期終了時点の各クラスの情勢

現在の1年生のクラスポイント

Aクラス 1196ポイント

Bクラス 927ポイント

Cクラス 550ポイント

Dクラス 0ポイント(実質マイナス100ポイント)

クラスごとの情勢

○Aクラス

無人島試験の際に龍園と八幡によって大敗をして指揮をした葛城派は大きく失墜して、船上試験にで有栖が龍園と組みCクラスとDクラスに大勝を挙げて有栖の影響力が強くなった。

体育祭でクラスポイントを減らしたが全クラスが減少したので大勢に影響はなく、ペーパーシャツフルではBクラスの学力優秀者の協力もあり成績が向上して勝利を得た。

現在1番安定したクラスと言える。

### ○Bクラス

問題行動が多く見えるが各特別試験では実績を出している。龍園の大胆な作戦には穴もあるが、八幡が穴を補う事で結果を残している。

またペーパーシャツフルでは八幡の尽力により、成績が数段上のCクラス相手に金星を挙げた事でクラスの士気は極めて高くなっている、

勢いは4クラスで随一だが、暴力的且つ大胆な作戦を練る龍園ではなく清濁を両方駆使する八幡をリーダーにするべきという声も生まれていて、派閥争いが生まれる可能性がある。

## ○Cクラス

5月に入ってから一之瀬の手腕によってどのクラスより纏まったが、クラスの大半は一之瀬に強い尊敬を求めている、彼女の意見が正義であると思う生徒が日々増えている。

団結力はあるが特別試験の結果は無入島試験以外では順調とは言えず、学力重視のペーパーシヤツフルでは、学力が下回っているBクラス相手に小細工抜きで挑まれたのに負けてしまい、モチベーションの低下が深刻となっている。

3学期以降、どのような戦術を取るかは不明であるが、状況を変える強力な一手を必要とする可能性が高い。

## ○Dクラス

5月に0ポイントであった事、過去問があつたのに由比ヶ浜が赤点を取つた事、由比ヶ浜と須藤の愚行が問題視された事、その他諸々の理由によって浮上の芽が全く見えない。

それに伴い各々がアルバイトによってプライベートポイントを獲得したり、一部の問

題児の存在によりAクラス行きモチベーションが大きく下がっている。

希望があるとすれば高校1年生にしては超越した力を持つ綾小路と高円寺の存在だが、両名共にクラスの為に動く気力はない。

各クラスの生徒の現状

○Aクラス

坂柳有栖

Aクラスリーダーとして盤石な体制を構築していて順調である。

ただし当人はクラスは二の次で、八幡の童貞を卒業させる役目をひよりに渡さない方法を最優先に考えている。

神室真澄

入学当初から有栖の側近としてこき使われている。それ自体には不安はないが、八幡に対する惚気話については日々刺激的になって若干面倒に思っている

橋本正義

坂柳の側近として軽いフットワークを活かして様々な雑務をこなしている。

ただし場合によってはクラスを裏切ると有栖に予想されていて信用度は低い。

葛城康平

元クラスのリーダー候補だったが無人島試験の大敗により退いている。現状独走状態であるが龍園と組んでいる事を不安視している。

○Bクラス

龍園翔

Bクラスリーダーとして常に勝ちを模索している。当初は暴力と奸計を好み正々堂々を見下していたが、八幡の指揮によってCクラスを学力勝負で下した事で重要性のある程度見直して作戦に組み込むように考え始めている。

比企谷八幡

BクラスNo. 2としてリーダーを支える。龍園の作戦を認めているが、偶に自重しろと思つてゐる。その為に自分の価値と発言権を上げて、龍園の作戦の欠点を改善しながらサポートする事を目標としている。

また日常生活ではひよりと有栖とイチャイチャしながらも、童貞卒業の際に逆レイプみたいな形にならないか不安視している。

### 椎名ひより

運動能力は高くないが学力の面で八幡を支えようと比較的積極的に積極的になつた。またクリスマスに自身の処女を八幡に捧げたいが、有栖より先に捧げたいと思つてゐる。

### 〇Cクラス

#### 一之瀬帆波

普段は持ち前の明るさと優しさでクラスメイトを支えているが、ペーパーシャツフルにおいて小細工抜きで負けた事、有栖が作つた問題の中に自分の弱みと関係したものがあつた事により、有栖に知られてゐると落ち込み続けている。

## 神崎隆二

日頃から一之瀬を支えているがペーパーシャツフルの敗北によってクラスの士気が憂慮して一之瀬の早い復帰を望んでいる。

また一之瀬のクラスメイトを最優先にすると考える、一之瀬に頼りきりのクラスを改善する方法を模索している。

一之瀬のクラスメイトの大半

一之瀬が落ち込んでいるのはBクラスの所為であると考えて、龍園と八幡を敵視している。(敵意の9割が龍園に、1割が八幡に向けられている)

## ○Dクラス

## 綾小路清隆

由比ヶ浜の存在によって不快の感情と憤怒の感情を手に入れ、それに伴い力を出す事に躊躇いは無くなり、須藤の撃破や圧倒的な殺意や期末テスト全科目満点などによってDクラスでは畏怖の対象となっている。

感情は不要と思ったが、八幡のアドバイスや軽井沢の存在によって少しずつ安心や喜

びや色欲の感情が目覚めかけている。体育祭終了時点では軽井沢を駒としか見てなかったが、軽井沢相手に甘えたり甘えられてる内に少しずつ一人の女子として見るようになった。

ただし元々倫理観が無かった事に加えて、八幡の女性関係や八幡のアドバイスによりエロい事に興味を持ち、複数の女子と関係を持つて良いと間違つた価値観を持ち始めている。

### 軽井沢恵

綾小路の駒であるが、その事を悪く思つておらず須藤相手一步も引かずに守つた事をキツカケに恋心を強める。また綾小路が甘えてくるようになった事に嬉しく思いながら2人きりの時は思い切り甘やかして、綾小路に求められたら拒否しない。

ただし綾小路が八幡に毒され過ぎて複数の女子と関係を持つ事を危険視している。

### 堀北鈴音

一部のお荷物によつて最低の不良品と思われるのが我慢出来ず、Aクラス卒業を諦めていない。綾小路が圧倒的な力と成績を見せた際は、これまでに手を抜いていた事にキ

れて、中庭にて今後は真剣にクラスに貢献するように要請。

そんな要請に綾小路が「オレは青春（美味いものを食べたり、面白い漫画を読んだり、エロい事をする）を楽しむのに忙しい」と拒否したら1学期にやったようにコンパスを綾小路の腕に刺した。

しかし綾小路はノーリアクションだったので数回刺してから投げ飛ばそうとしたが「このくらい刺されたら正当防衛になるな」と言われてからコンパスを粉碎されて、血だらけになった手によって腹を殴られて嘔吐している最中に近くにあった中庭の噴水に投げ込まれた。

### 由比ヶ浜結衣

Dクラス1のお荷物だが自分が正義であると疑っておらず、自分や雪ノ下と違う考えの人間を悪と決めて見下している。

何度もクラスポイントを減らす要因となった事、赤点による退学を取り消して貰っても「困っている人がいたら助けるのは当たり前」と言っている事などからクラスメイトから敵意を向けられているが自分は悪くないと思っている。

綾小路の殺意によって失禁と脱糞をさせられて綾小路を憎み、八幡諸共退学させよう

と考えている。

### 雪ノ下雪乃

自分は優秀でAクラスこそ自分のいるべき場所と思っているが、由比ヶ浜を庇う事からクラスメイトからは忌避されている。

普段から由比ヶ浜に殺意を向けている事、パーパーシャツフルの際に負けた事から綾小路を憎み、八幡諸共退学させようと考えている。

### 櫛田桔梗

由比ヶ浜や雪ノ下によってストレスが加速して後頭部にある白髪が増えている事に悩んでいる。

最近由比ヶ浜の愚行に対して我慢の限界を迎えて、仮面を壊して由比ヶ浜に怒鳴ったがクラスメイトらが「アレは仕方ない」と励ましてくれている。

以降はクラスの五馬鹿に対しては当たりが強くなったが、5人の愚行が原因であると疑われない為に苦しさが大分無くなったので、「今後はちよい毒舌キャラも悪くないかもしれない」思い始めている。

須藤健

由比ヶ浜に次ぐ足手纏いで嫌われているが直ぐに暴力に走る事から忌避されている。軽井沢に盗撮の件をバラされて怒りの余り詰め寄ったが、軽井沢を守った綾小路に肩を壊され、後遺症が残された。

加えて部活を辞めさせられて、矯正プログラムによって自由を奪われた事により綾小路を憎んでいるが、勝ち目がないので睨んでいるだけだとなっている。

池寛治 山内春樹

元々クラスの女子から嫌われていたが、盗撮の件で更に嫌われるようになり毎日肩身の狭い毎日を送っている。

山内については「元はと言えば俺にポイントを渡さなかった比企谷が悪い」と思っていて、偶にそれを口にしてクラスメイトから罵詈雑言を浴びせられているが、反省の色はない。

## ブラブラ

冬休みになった翌日、俺はケヤキモールを歩いている。特に目的はないがブラブラ歩いている。偶にはこうやってのんびり過ごすのは悪くない。何せ普段は他クラスの動向について考えないといけないからな。

ちなみに有栖とひよりは軽井沢と女子会をやっている。女子って集まって駄弁るのを好きだからなあ。

そんな事を考えながら本屋に入りライトノベルコーナーに足を向ける。漫画は今月気になる作品が無かったからのでライトノベルに期待だ。

そして新刊が置かれているスペースに向かう。

「おっ。「実力が大切な学校にいらっしやい」の新刊出てんじゃん」

この作品って生徒の中で上位30人に好きな大学や会社に入れる権利を与えられるって学校が舞台でウチの学校に似ている。まあこの学校はクラス単位であるのに対して、この作品は個人単位の競争だけだ。

俺はこの作品も含めて数冊のラノベを買って、次にゲームセンターか靴屋に行こうか

悩みながら歩いていている時だった。映画館から綾小路から出てきて、向こうもこっちにやってくる。

「よう。映画を見たようだが楽しかったか？」

「拍子抜けしたな。途中でアクシデントがあつて中止になった」

何だそりや？機械の故障か？何にせよ災難だったな。

「そりや残念だ……あ、折角会つたし、例の大人の店に行くか？」

「頼む。恵のスリーサイズは聞いたからな」

「よし、行くか」

言いながら俺は綾小路を連れて方向転換して歩き出す。

「しかしそんな店があるんだな。ケヤキモールにはしよっちゅう足を運んでる訳じゃないが、全く知らなかった」

「そりや基本的に学校の職員やケヤキモールの人しか利用しないし、一応高校だから堂々とした場所に18禁関連の物が売られている店なんか出せねえよ」

俺も龍園に教えて貰うまで知らなかったしな。

俺達は綾小路は暫く歩き、服屋とお菓子屋の間にある倉庫の入口みたいなドアを開ける。そこには通路があり、左右には複数の扉がある。

「ここは倉庫じゃないのか？」

「倉庫だぞ。10ある扉の内、8はケヤキモールの店の在庫置き場で1つは清掃員の事務所、最後の1つが清掃道具置き場という大人の店だ」

清掃道具は清掃員の事務所の中にあるからな。

そして俺達は清掃道具置き場と書かれたドアを開けると少しの清掃道具が置いてある小部屋が見えるが、本命は更に奥にある扉だ。

俺は奥にあるドアを開けると小洒落た音楽が耳に入り、明るい光が目に入る。入って直ぐにグラビア雑誌やコスプレ衣装、アイドル系DVDがあり、奥には「18歳未満お断り」と書かれた暖簾があり、その奥には部屋がある。

綾小路はというとこんな場所に始めて来たようで興味深そうに辺りを見回している。

「とりあえず一通り見て良いか?」

「ああ。好きに回れ。ただ18歳未満お断りと書かれた暖簾の先に行きたい場合は暖簾の近くにいる店員に1000ポイント払え。レジの近くに店員のID番号がある」

18禁コーナーに入るには毎回1000ポイント払わないといけないが、払えば学生が入っても見て見ぬふりをしてくれる。

「わかった」

綾小路が領いたので俺はそのまま真っ直ぐに暖簾の前に立ち、店員に1000ポイント送金して、領いたのを確認してから即座に暖簾の先に行く。

そこには先程見えた雑誌やDVDより過激な表紙やパッケージが見え、大人の玩具や薬品などもある。

俺はそのまま媚薬ローションと精力剤などを持って再度全年齢対象のコーナーに戻り、チャイナドレスとチアガールのコスプレ衣装を持って店員に2万5千ポイントを払って買う。雑誌やDVDは買わない。パソコンで買って見たほうが安いし。

暫くすると綾小路がバニーガールの衣装とマイクロビキニを持ってきた。

「それを買うのか？」

「ああ。恵が着ているのを見てみたいと思つてな」

「良いじゃねえか。ストレス発散は大切だぜ」

学校でも悪名高い五馬鹿だが、全員綾小路をメチャクチャ嫌っている。

盗撮トリオは綾小路が軽井沢に密告した事により盗撮がバレ、雪ノ下はペーパーシャツフルで綾小路に負けて矯正プログラムに参加する事になり、由比ヶ浜は何度も綾小路の殺意に漏らしているからな。

俺も五馬鹿に嫌われていると思うが、綾小路よりマシだろう。

「そうだな。最近恵に抱きしめられたり、頭を撫でられると不思議と身体が軽くなつて心地よいんだが、こんな衣装を着て同じことをされなら更に気分が良くなりそうだ」

言いながらレジでコスプレ衣装を買って、どこにでもあるありふれた紙袋に入れられ

る。

「良くなるだろうな。何にせよお前には癒しが必要だろうし、今後は積極的にその心地良さを求めてみる。人間、安らぎや心地良さがあって真価を発揮出来るのだから」

勉強にしろスポーツにしろ、常に努力を続けるのは精神的に無理だ。重要なのは要所要所で癒しを得てで心にゆとりを得る事だ。

これまでのやり取りを見る限り綾小路は心を鉄にすることで努力を続けているようだがそれは人間じゃなくて機械だ。過去に何があったのかは知らないが、折角この学校で感情について知ったのだ。

負の感情とはいえ感情を得れたのだから、正の感情を難易度は違えど得る事は可能だろう。

「この学校に来るまでは考えもしなかったが、そうするつもりだ」

「そうしろそうしろ。ちなみにお前らって何処まで進んでんだ？」

前に聞いた時は下着姿にはなって胸を揉ませてくれたらしいが、もしかして更に段階が進んだのか？

「いや。以前に話した時とは大差ない。ただクリスマスマスに俺の部屋に泊まる事は決まっています、一緒に風呂に入っても良いと言ったな」

随分と進む予定のようだ。しかし表向き平田と別れたばかりだからリスクがデカい

のは確か。場合によってはフォローしてやるつもりだ。

「じゃあ一つアドバイスだ。一緒に風呂に入った際、湯船にも一緒に入ったらそつと後ろから優しく抱きしめてやれ。ひよりや有栖は背後から抱きしめられるのを好んでるし、軽井沢が相手でも効果がある可能性は高い」

「正面からじゃなくて背後からか？」

「ああ」

一緒に風呂に入ってくれる程の中なら抱きしめても関係に亀裂は入らないだろうしな。

そんな風に話しながら店を出て通路を歩き、出口からコッソリ出る。

「とりあえず持ち歩いている時にバレたら面倒だしコインロッカーに入れて、帰り際に取るぞ」

倉庫入口の近くには俺達みたいな客の為にコインロッカーを設置してくれているのでありがたく利用させて貰う。

俺達は荷物を入れ、そのままゲーセンで遊び、電気屋でゲームを買ったりした。

そんな風に遊んでいると腹が鳴る。時計を見れば12時を過ぎている。

「そろそろ飯にするか。綾小路は食いたいものはあるか？」

折角だし綾小路には美味しい飯を食べる快楽も知ってもらった方がいいな。

「中華料理が食べたいな。昨日テレビを見てたら麻婆豆腐が美味そうだった」

「麻婆豆腐か……麻婆豆腐専門店は……ん？」

そこまで考えているとケヤキモールのレストラン街と真逆の方向にて、微かにだが暖簾が風で揺れているのが見えた。場所も普通なら気付きにくい場所で、初めて見るな。

「ちよつと待ってくれ。何か初めて見る店があったし、見に行かないか？」

あんな場所に店があるなんて、もしかしてエロい店みたいに特殊な店か？

疑問に思いながら綾小路とそっちに向かうと、その暖簾は飯屋、それも綾小路が希望した中華料理の店だった。

「何でレストラン街から離れた場所にあるんだ？」

こんな人があまり来ない場所に店を開いても集客率は悪いだろうし。

「だがこういうのは隠れた名店なんじゃないか？」

「かもな。行ってみるか？」

俺の問いに綾小路は頷く。まあ折角だし行くのも悪くないだろう。

そう思いながら俺達は『紅洲宴歳館・泰山 高度育成高等学校支店』に入るのだった。

## 麻婆豆腐

店の中には木製の机と椅子が幾つも置かれている簡素な部屋だった。

客は銀髪の女子一人しかおらず、彼女はこつちに気づくと不敵な笑みを浮かべたかと思えば手招きしてくる。

俺と綾小路は顔を見合わせるが、やがて綾小路が歩き出すので俺もそれに続く。

「まあ座りたまえ。折角の有名人コンビと食事をするのも面白い」

「……比企谷に比べたら有名人とは思えないですが」

「謙遜だな。圧倒的な殺意を持ちパーパーシャツフルで満点を取った綾小路清隆、全生徒の前で銀髪の女子2人と甘い空気を作り出しスクール水着に並々ならぬ好奇心を持つ比企谷八幡。どちらも有名で上級生の私達の耳にも届いているぞ」

改めて聴くと俺が有名になった理由が酷過ぎるな……

「失礼。自己紹介が遅れたな。2年Bクラスの鬼龍院楓花だ」

そんな風に挨拶をしてくるので俺達も自己紹介をしてメニューを見る。そこにはラーメンや麻婆豆腐、フカヒレスープなど如何にも中華料理の品目が書かれているが

……

「ああ。メニューは見ても意味はないぞ。全ての料理が麻婆豆腐になるから」

「は？」

鬼龍院先輩に俺と綾小路はポカンとした表情を浮かべる。全ての料理が麻婆豆腐になるだと？

「どう意味ですか？ラーメンを頼んだら無視して麻婆豆腐が出てくるんですか？」

「頼んでみればわかる」

そう言われるが、どんな風に料理が出てくるか気になるな。

「……よし、決めた」

どうやら綾小路も決めたようだ。

「すいませーん。注文良いですか」

俺が呼びかけると厨房から店員がトレイを持ってくる。店員の肉体は明らかに飯屋で鍛えたものとは思えない程鍛えられていて、目は綾小路のように虚無の眼差しだ。胸にあるバツジには言峰と書かれているが手練れだな。

「麻婆定食お待ち。注文は？」

店員は麻婆定食を鬼龍院先輩の前に置いてから俺達に無表情のまま目を向けてくるが、俺と綾小路は鬼龍院先輩の前にある麻婆豆腐から目を離せなかった。

トレーの上にはご飯に麻婆豆腐、サラダに杏仁豆腐と如何にも普通の麻婆定食だが、麻婆豆腐の赤がインパクトが強過ぎる。今まで見てきた麻婆豆腐よりも赤く、香りも強い。

まあ本当に全てのメニューが麻婆豆腐になるならどれでも良いか。

「じゃあラーメンで」

「青椒肉絲定食で」

「了解した。しばし待て」

店員は店の奥に戻り、鬼龍院先輩は両手を合わせて「先に頂く」と言つて麻婆豆腐を口にする。

そして直ぐに夢中になつて汗を流しながらガツガツと上品と言ひ難い食べ方食べ、一気に半分食べると上着のボタンを外す。それに伴ひ谷間が見えるが、谷間にも汗がダクダクと流れていた。どんだけ辛いんだよ……

「あの、鬼龍院先輩。美味しいのですか？ものすごく辛そうなのですが」

綾小路も興味深そうに尋ねると鬼龍院先輩は頷く。

「凄く辛いのは事実だ。しかし辛さの先にある旨さを知れたら病みつきになつてしまふ。まあそこに到達出来る者は限られていて、この店の客は一度来店したら「もう2度と来ない」か「頻繁に来る」の両極端のどちらかになる」

極端過ぎる。飲食店の在り方としては絶対にアウトじゃねえか。普通は誰でも何度も足を運びたいと思える料理を作るべきなのに。

そう思いながら待っていると……

「お待ち。ラーメンと青椒肉絲定食だ」

店員がやってきて俺達の前にトレーを置くと……

「麻婆豆腐……」

綾小路が呆然とつく。綾小路の頼んだ青椒肉絲定食は鬼龍院先輩の頼んだ麻婆豆腐定食と同じで米と麻婆豆腐とサラダと杏仁豆腐だが、麻婆豆腐の上に肉とピーマンと生姜が少し乗っている。どうやら青椒肉絲は添え物のようだ。

しかし俺のラーメンに比べたらインパクトの強さはマシだ。俺の目の前には麻婆豆腐が入った丼があるが、麺が全く見えない。底にあるのか全くないのか知らないが、もうこれは麻婆豆腐だ。

「あの、麺はあるんですか？」

「底に申し訳程度にある」

店員は当然の口振りでそう言ってくる。あそこまで堂々と言われたら向こうが正しいのだと思ってしまうくらいだ。

そう思う中、店員は自分の仕事は問題なく終わったとばかりに厨房に戻っていき、俺

の意識はラーメンという名前の麻婆豆腐に向かう。食べるしかないようだが気絶はしないよな？

俺は覚悟を決め、レンゲを手に取り麻婆豆腐を口にするが……

(辛えっ！つか痛えっ！)

次の瞬間には口の中に辛味が広まり、更に痛みも出てくる。以前ケヤキモールにある四川料理店で食べた麻婆豆腐も辛かったが、この麻婆豆腐はそれよりも遥かに辛い。

しかし汗を流しながら痛みには耐えているとやがて口の中に確かな旨味を感じ始める。これが辛さと痛みの先にあるものか……

それを理解すると同時に俺の手にあるレンゲは井と俺の口を行ったり来たりして俺の口に麻婆豆腐を運ぶ。この旨味……もつと欲しい。

隣では基本的に無表情の綾小路が目を見開きながら同じようにレンゲを口に寄せて麻婆豆腐を食べている。しかも普段無表情なのに口元が緩んでいるし。やはりこの麻婆……不思議な魅力を感じるな……

12月なのに俺は暑さを感じて上着を脱ぎつつ食べ続け、遂に全ての麻婆豆腐を平らげて、そこにある申し訳程度のラーメンを口にするが……

「店員さん。麻婆豆腐半人前とライスを追加で」

「麻婆豆腐半人前追加で」

俺と綾小路はおかわりを注文する。米と合わせてこの旨味を味わいたい。俺も定食にすれば良かったな。

「うむ。君達も辛さの先を見れたようだな」

「はい。辛いけど美味かったです」

「新しい世界を知れましたよ」

綾小路は口元に笑みを浮かべながらそう返す。コイツの笑みは初めて見るが……何というか邪悪さがあるな。

「2年では私と南雲、3年では堀北学以外はギブアップしたが、今年の1年は中々有望そうだな」

鬼龍院先輩は満足そうに頷くが、食べる人がそれしか居ないのに良く営業出来るな……

「しかしお代わりはお勧めしない。この麻婆豆腐は1日分のカロリーが含まれているから食べ過ぎると太るぞ」

「ただだけハイカロリーなんだよ。本当にツツコミどころが多い店だな。」

「麻婆豆腐半人前2つ、ライスお待ち」

すると店員が麻婆豆腐とライスを持ってくるので一旦麻婆豆腐に意識を戻して一心不乱に食べてあつという間に完食する。

「実に見事な食べっぷりだな。卒業したら冬木市にある本店に行ってみると良い。更なる辛さと旨味を知る事が出来るだろう」

マジか。これ以上の辛さと旨味だと？この麻婆ですら想像以上なのに更に上があるのか。

「覚えておきます」

完食した俺達は立ち上がって礼をしてそれぞれで会計をする。

「3200ポイントだ」

高いかもしれないが特に不満に思わず支払う。この旨味は3200ポイントでは安いからな。

そして会計を済ませて外に出ると暖房の効いた部屋で汗を流しまくったからか、物凄く寒く感じる。

「さて、後輩諸君。君達は暇か？」

「まあ適当にブラブラする予定だから暇ですね」

「なら少し付き合ってくれ。私はこの店で食事をした後、基本的にリラックスをするのでな」

言いながら鬼龍院先輩は俺と綾小路の手を引つ張って歩き出す。どうやらこの人は相当なゴーイングマイウェイなようだ。これは逆らわずにするのが1番だろう。

そう思いながら俺と綾小路は鬼龍院先輩に引つ張られながら歩いていると……  
「っ！」

何だ？いきなり妙な寒気を感じたぞ！まさか雪ノ下や由比ヶ浜か？！

慌てて当たりを見回すと……

(りゅ、龍園……)

視線の先では龍園がそれはそれは楽しそうに笑いながら携帯のカメラをこちらに向けていて、やがて直ぐに走り去って行った。

同時に冷や汗がダラダラ流れてくる。アイツの性格的に考えて……

「くはっ！比企谷の奴、どんだけ銀髪の女が好きなんだよ！こりやひよりと坂柳に報告だな！」

龍園翔は高笑いしながらひよりと有栖に画像をメールするのだった。

八幡同様、鬼龍院に引っ張られている綾小路を好いている恵が2人の近くにいた事を知らずに。

## 休息

「でね、清隆つてばあたしが止めてつて言うのと更に激しく揉んでくるのよ。まあ止めてなんて形だけの抵抗だけどね。けど清隆の奴、クールな顔をしてるけど絶対におっぱい魔神になつてるから。比企谷君もおっぱい魔神でしょ？」

軽井沢恵の部屋にて、部屋の主である恵はポテトチップを食べながらそう口にする  
と、向かい側にいるひよりと有栖も頷く。

「ええ。八幡君は胸が好きですね。私の小さい胸も激しく攻めてきますから」

「私の場合、お尻を執拗に攻めてきますね」

「椎名さんはお尻が大きいからでしょ。あたしの場合、胸もお尻もそこそこだしね」

「そこそこあるだけいいじゃないですか。私も一之瀬さん程は無理でも、ひよりさんや恵さんくらいには成長したいです」

有栖は恨めしそうに自分の胸元を見るが、膨らみがひよりや恵に比べて小さい。

「そう？少なくともDクラスのあたしは有栖の胸くらいが良いけど。最初のプールの授業なんか池や山内は胸の大きさの賭けをしたり、堂々とおかずとか言ったり、山内なん

か佐倉さんって巨乳の女子に告白されたとか言ってるマジでキモかったし」

恵は嫌そうな表情で毒を吐く。あの時恵を含めて多数の女子は授業を見学したが、間違っていないと思う。

「すみません。最初と最後については不快に思いますが、おかずとは何ですか？」

有栖が不思議そうな表情で恵に質問して、ひよりも似たような表情も頷く。

「あゝ、おかずってのはね……」

恵が説明すると2人は嫌そうな表情に変わる。

「最低ですね。まあ盗撮犯らしいといえばらしいですが」

「全くです。寧ろ授業に参加した女子は凄いですよ」

「だよね。やつぱそっちのクラスの授業はマトモでしょ？」

「多少「あの子スタイルが良い」みたいな話は聞きましたが、年頃の男子なら仕方ないでしょう」

特にスタイル抜群の神室を綺麗と言ってる男子は結構いて、見学の有栖は聞いていたが神室のスタイルを妬む事はあっても、ヒソヒソ話のように小さい声で話していた男子を責めるつもりはなかった。

「私は最初の授業で足を攣って溺れかけた所を八幡君に助けられたので最高でした」

ひよりは幸せそうな表情を浮かべながら当時のことを思い出す。当時のひよりから

しても良い思い出だが、八幡に恋心を今はより良い思い出となっている。

そんな風に3人で色々な事を話している時だった。

ピロン ピロン

2つの電子音が同時になる。ひよりと有栖のポケットからだ。

「2人同時？比企谷君から？」

「いえ。龍園君からですが……へえ」

「むう……」

携帯を操作していた有栖は冷笑を浮かべ、ひよりは膨れっ面になる。

「え？どうしたの？」

「貴女も見たほうがいいでしょう。どうぞ」

有栖は携帯の画面を恵に見せる。そこには八幡と綾小路が銀髪の美少女に手を引つ

張られている画像が表示された。

それを見た恵の額に青筋が生まれる。

「へえ、今日は1人でのんびりと映画に行くって言ったのに、随分と綺麗な人というんだ」

3人から黒いオーラが上がり、やがて部屋に蔓延する。

そしてそのまま立ち上がって寮を後にする。3人は携帯を操作して友人から八幡達

の行き先に関する情報を集め始めるのだった。

鬼龍院先輩に案内された場所はスパ施設だった。

「ここですか？」

「そうだ。汗をかいた後にここでリラックスするのは心地良い」

「水着を持ってないのですが」

「大丈夫だ綾小路。ここは数百ポイントでレンタル出来る」

何回か言ったことはあるが確かに今みたいに熱を感じる時には良いかもしれない。

「決まりだな。ではまた後で会おう。ジャグジーに浸かりながら君達の学年について聞かせてくれ」

鬼龍院先輩はそう言いながら男子禁制エリアに向かうので俺達も女子禁制エリアに行き、受付で入場チケットを買い水着をレンタルする。

そして男子更衣室で着替えるが……

「お前のデカくね？」

綾小路の男性器がメチャクチャデカくて驚いた。

「デカいのか?」

「デケエよ」

何で素の状態で、昂ってる時の俺のよりデカいんだよ? つーかコイツが昂った時は誰も抱けないだろう。有栖みたいな女子が相手なら昇天する可能性もあると思う。

そう思いながらも俺は水着に着替えて脱衣所から出てプールなどがあるエリアに足を踏み入れる。温水プールにジャグジー、岩盤浴などリラックス出来るポイントが沢山あり、生徒もそれなりにいる。

「良い雰囲気だな。クラスの五馬鹿に絡まれた際はここで休むのも悪くないだろうな」  
遅れてやってきた綾小路は興味深そうに周りを眺めるが、心中察します。

まあ5人中4人が矯正プログラムを受けて、由比ヶ浜は櫛田に悪意をぶつけた事で学校全体を敵に回したからな。しかも教師も手を焼いてるし、3学期からはそこまで絡まれないだろう……多分。

そんな風に綾小路の境遇に同情していると女子更衣室がある方向から人の気配をがしたので振り向くと……

「やつほー比企谷君。そして初めまして綾小路君」

鬼龍院先輩のみならず朝比奈先輩もいて手を振ってくる。

「どちら様ですか？比企谷の知り合いですか？」

「2年の朝比奈なずな。比企谷君とは昨日落としたお守りを拾って縁が出来たばかりだね」

「そうですか。宜しく願います」

「宜しくね」

「つか鬼龍院先輩とは仲良いんですね」

朝比奈先輩は誰とも仲良くするイメージだが、鬼龍院先輩って誰とも連まらずに孤高に生きているイメージだ。

「偶に食事に行くくらいには仲が良いな」

「意外ですね。現Bクラスの鬼龍院先輩が現Aクラスの朝比奈先輩と仲がそこそ良いなんて」

綾小路の言う通りだ。鬼龍院先輩は2年Bクラスで、元々はAクラスだったが朝比奈先輩のクラスに落とされたし、鬼龍院先輩のクラスには現Aクラスを恨んでいる生徒がいてもおかしくない。

「私はAクラスの特権なぞに微塵も興味がない。その気になればどの大学にも受かる自信があるからな」

随分な自信だが本気でそう言っているのが直ぐにわかる。

しかし意見は正しいだろう。Aクラスに上がれなくても高校の勉強に力を入れてれば糧となり、卒業しても活かせるだろう。

「それよりもこの格好はどうだろうか？スタイルにはそれなりには自信があるのだが」  
鬼龍院先輩はそう言ってくるが……エロさを感じるとしか言いようがない。

鬼龍院先輩は黒ビキニを着ていて、スタイルの良さをセクシーな水着で際立たせている。

「エロさを感じますね」

直球過ぎるぞ綾小路……

「はははっ。そんな風にハッキリ言われるとは予想外だ」

鬼龍院先輩は楽しそうに笑うが器が大きいな。まあ綾小路は眼差しに下心を含めてないからな。

「じゃあ比企谷君。私の格好はどうかな？」

朝比奈先輩は揶揄うように笑って近寄ってくるので改めて見直す。

朝比奈先輩はピンク色のビキニを着ているが、鬼龍院先輩の水着に比べて可愛らしい水着だ。

朝比奈先輩もスタイルが良いが、全体的に整ったスタイルの鬼龍院先輩とは違って比較的胸が大きい。

そんなエロいボディに可愛らしい水着は中々のギャップがあつて破壊力抜群だ。

結論から言う朝比奈先輩本人が魅力的だからかもしれないが、とても可愛らしい」  
そこまで考えていると頭に軽い痛みが走るので意識を戻すと朝比奈先輩が若干恥ずかしそうに睨んでくる。

「もう・そうやってお世辞ばかり言うのは感心しないな」

そのまま俺の両頬を引つ張つてくる。大して痛くはないが喋れん。というかもしかして考えている事を口にしていたのか？

綾小路と鬼龍院先輩に目を向けると……

「全部口にしていたぞ比企谷」

「うむ。君の発言に照れる朝比奈は中々可愛かったぞ」

マジかいな。全部口にしていたのか。

まあ口にしていたら今更だし、説教は嫌だし逃げるか。

と、ここで朝比奈は頬から手を離して膨れっ面を見せてくる。

「聞いているのかな。お世辞って嬉しいけど過剰なお世辞は人によっては「いえ、お世辞ではなく本心です」あ……そ、そう。じゃあ仕方ないか……でも程々にね」

「はあ」

朝比奈先輩は途端に口調を弱くなる。テンションの高低差が大きいな。

「ふふふつ。随分と良いやりとりだ……つと、立ち話もなんだ。本来の目的のリラックスを取ろうじゃないか」

鬼龍院先輩は高い場所にあるジャグジーを指差す。ジャグジーの周りは窓ガラスがあるのだが、そこからは東京の街が見えるが中々の絶景なのだ。

「あ、そうだね！行こっか！」

朝比奈先輩は逃げるように早足でジャグジーがある方向に向かい、階段を上り始めるがあんなに走足だと足を滑らせて「きゃあつ！」言わんこつちやない！

嫌な予感が当たり朝比奈先輩は階段で足を滑らせて落下を始めるので俺は急いで走り、そのまま両手を広げて朝比奈先輩をキャッチする。思ったより軽くて良かった

「大丈夫ですか？怪我は無いですか？」

「比企谷君……うん大丈夫。迷惑かけてごめんね」

「お気になさらず。怪我して朝比奈先輩の綺麗な肌が傷付いたら事ですから」

ひよりや有栖が以前、女つてのは基本的に肌や髪を綺麗に見せたいって言っていたからな。怪我して肌に傷付いたら朝比奈先輩もショックだろうしな。

「……」

そう思っていると朝比奈先輩は俯いてしまう。もしかして強がっているだけでどつかに痛みがあるのかもしれない。

「朝比奈先輩？痛いなら係員呼ぶんで無理しないでください」

「へっ?!う、ううん！大丈夫だよ！怪我は無いからジャグジーに入ろうよ！」

言いながら朝比奈先輩が俺から降りて腕に抱きついてくる。

「えつとわざわざ抱きつかなくても」「ほ、ほら！また落ちないように支えて欲しいな！」

……はあ」

朝比奈先輩はそう言つて階段を上るが、腕を組んでる時に落ちたら参事に繋がるよう  
な……

そう思いながらも朝比奈先輩は俺から離れずに階段を上り続けるのだった。

「ふふっ。青春だと思わないか？」

「まあそうですね。可愛らしい女子と腕を組むのは羨ましいですね」

「意外だな綾小路。君はそのような事に興味はなさそうだがな」

「人並みにはありますよ（まあ少し前までは無かったけど、最近は比企谷のアドバイスや  
恵の身体の柔らかさを通して女に興味を持ったけど）」

「ほう。なら私が君の眼鏡に叶うならエスコートしてくれ。君という人間を知る為に接点を作るのも悪くない」

「そうですか。ではお手を（今後恵をエスコートする際に備えて勉強するのも悪くない）」

「うむ。よろしく頼む」

綾小路は鬼龍院の手を掴み、ゆつくりした足取りで階段を上る。綾小路は女性に対する接し方を恵を通して勉強しているがまだまだ知識不足だから、今回の機会はありがたい。

今後鬼龍院と会って女性に関する接し方を教えてもらったら、恵に鬼龍院を紹介して2人から教えて貰えるのも悪くない。

女の嫉妬の怖さを知らない綾小路は恵の逆鱗を踏みつけるような事を考えながら鬼龍院をエスコートする。

「マジか！上級生に手を出すなんて比企谷もDクラスの暴君もやるな……！こりや姫さんに報告だ」

4人から少し離れた場所でリラックスチェアでくつろいでいた1年Aクラスの橋本正義は携帯で操作して、八幡が朝比奈をお姫様抱っこをする場面から、綾小路が鬼龍院をエスコートする場面を通して、4人でジャグジーに入る場面まで動画に収めて、有栖に送るのだった。

## 先輩

「ダメですね。この辺りで目撃情報が途絶えています。恐らく施設の中にいると思いますすが……」

「ここから探すのは大変よ」

ケヤキモールの一角にて有栖達は周りを見ながら呟く。周りにはスパリゾート、スポーツジム、ボルダリング施設などがあるが、いちいち中に入っているのはキリがない。どうしたものかと思つた時だった。

ピロン

有栖のポケットから電子音が鳴るので、有栖は携帯を取り出して2人にも見えるようにして確認すると……

「ふふふふ……八幡君は随分と手が早いようですね」

「むう……八幡君の馬鹿」

「へえ、清隆って女子なら誰でも良いんだ」

橋本からの動画が添付されたメールが来ていて、動画を再生すると「八幡が可愛らし

いビキニを着た朝比奈をお姫様抱っこしてから下ろしたかと思えば、朝比奈が八幡の腕に抱きついてジャグジーに向かう場面と、綾小路がセクシーな水着を着た鬼龍院の手を取ってエスコートする場面」が再生される。

動画が終わった頃には3人の額に青筋が大量に浮かんでいる。八幡も綾小路も1人でのおんびり過ぎすと言っていたのに美少女とイチャイチャしていたのだから当然だが。

「行きましようかプールに」

「ええ」

「そうね」

有栖の提案に2人は小さく頷いてスパ施設に向かう。目的は1つ、鬼龍院と朝比奈の前で2人に甘えまくって八幡と綾小路にマーキングをする事だ。

表向き、平田と別れたばかりである恵だが躊躇うつもりない。動画を見る限り、綾小路がエスコートしている鬼龍院は自分よりも抜群なスタイルをもっている。興味は自分から鬼龍院に移る可能性もある。

よって恵はスパ施設で場合によっては張り合うつもりだ。そして今日まで綾小路に下着姿までしか見せてなかったが、今日からは生まれたばかりの姿を見せるつもりだ。どの道クリスマスには一緒に風呂に入る予定だったのだから遅かれ早かれだ。流石に処女を捧げるのは早いけど。

3人はそのままスパ施設に入るのであった。

同時刻……

「それにしても随分と鍛えているな。何か格闘技をやっていたのか？」

ジャグジーにて鬼龍院先輩が興味深そうに綾小路の身体をペタペタと触っている。軽井沢が見たらブチ切れそうだな。

「ピアノと書道ならやってみましたね。それに俺はそんな強くないですし」

「嘘こけ。須藤を一撃で沈めて、堀北先輩と余裕でやり合えたテメエが強くないなら全校生徒がカスだからな」

今でも綾小路と堀北先輩の戦闘は頭に焼き付いているが、アレの何処が強くないんだよ。

「なにそれ？堀北先輩って雅から勝負に誘われても毎回相手にしないのに。どういう状況でそうなったの？」

俺にくつつついているなずなが興味深そうに綾小路に質問する。（何故か名前、それも

タメ口で呼べと強く求めてきたのでそう呼んでいる)

「ちよつと色々ありまして」

綾小路ははぐらかすが俺も詳しくは知らないんだよなあ。ただ綾小路が堀北妹を助ける為つてのは知つてるけど。

「ふ〜ん。でもそれ雅にバレない方がよいよ。私は黙つとくけどバレたら絶対にちよつかいをかけられるから」

「朝比奈せんぱ「なすな」……なすなは南雲先輩を崇拜してないんだな。2年の中には崇拜してる人がかなりいるつて聞いたが」

「まあね。ウチのクラスにはかなりいるよ。けど私からしたら天狗になつてるからちよつとね……それに雅つてクラスの垣根を越えて実力のある生徒をAクラスに上げたがつてるけど、裏を返せば私達も下に落とされるかもしれないし」

なすなはため息を吐くが美少女のため息つて絵になるな。しかし南雲先輩の方針が実現すれば下位クラスの実力者はやる気を出さだろう。下位クラスの雑魚はやる気を無くすだろうけど。

「ですが俺のクラスで長所のある生徒は南雲会長に期待してますよ」

そりやそうだ。綾小路のDクラスは由比ヶ浜や須藤がメチャクチャ足を引つ張つているから浮上の機会がないからな。個人で活躍出来る自信がある生徒なら南雲先輩に

期待するのも当然だ。

「まあ綾小路のクラスからしたらそうだろう。何なら君も力を發揮してそのチャンスを得ようとしたらどうだ？」

鬼龍院先輩は試すように綾小路の頬を突いて蠱惑的な笑みを浮かべる。この光景を写真に収めて軽井沢に見せたらどんな反応をするか気になるな。

「余り興味ありませんね。既に資金源は確保出来ていますし青春に全てを捧げたいです」

綾小路はそう返す。既に五馬鹿によってストレスが爆発的に増加した綾小路からしたら、その反動で娯楽を求めてもおかしくない。

「ほう。君の言う青春とはどういうものだ？」

「美味しいものを食べて、面白い漫画を読んで、可愛い女子とエロい事をするとかですね」堂々と言うあたり綾小路の度胸は凄いな。しかも全くいやらしさを感じないあたり本気であることが容易に想像出来るな。

「あ、あはは……正直だね」

「はははっ！そんな風に堂々と言うとは思わなかったぞ。で、比企谷はどうなんだ？」

なずなは若干赤くなりながら苦笑するが、鬼龍院先輩は笑いながら綾小路の頭をわしゃわしゃしながら俺に聞いてくる。

「青春の内容ですか？基本的には綾小路と変わりませんが、後はAクラスの座を手に入れる事とかもですね」

何だかんだ試験と向き合って動くのには充実してるしな。

それにこの学校の試験は学力が高ければ勝てるって訳ではなく、必然的にシンキング……考える力を重視しているが、これは社会に出てから必須の力だろうし、努力する事に損はないだろう。

つまり自分自身の欲求を満たす為、自分自身のスキルアップの為でも特別試験は意義あるものと考えている。

「それもまた青春だな」

鬼龍院先輩が頷くとなすが俺の腕に抱きついてくる。

「……もしも八幡君がエッチな事をしたなら、ちよつとだけなら付き合うよ」

なずなの大きな胸は俺の腕によって形が変わり、俺の腕には柔らかな感触が伝わってくる。

むにゆつとした感触にドキドキしている時だった。

「あらあら。随分と楽しそうですね」

「鼻の下が伸びていますね」

「清隆つて上級生が好きなんだ」

冷たい声が3つ聞こえてきた。こ、この声は……

恐る恐る振り向くと冷笑を浮かべる有栖、膨れっ面を隠そうとしないひより、ジト目を綾小路に向ける軽井沢がいた。しかし3人とも黒いオーラを出している。中でも有栖のオーラは一段とドス黒くて怖い。

「恵か？こんなところで会うのは偶然か？」

「偶然じゃないわよく。匿名の情報提供者達から2人が歳上の女子2人と楽しくやってるって教えて貰ったから気になってね」

軽井沢は額に青筋を浮かばせながら綾小路に近寄るが匿名の情報提供者達？

1人は龍園だろう。そして女子2人と楽しくやっていると軽井沢が言っていたが、なすなと会ったのはここに來てからだ。

(そして女子2人って知ってるって事は……)

俺がジャグジーに浸かりながら階段下のプールを見回すと金髪の男子が男子更衣室に逃げるように入っていた。金髪の男子は数少ないし、ひより達に情報提供出来るとなれば有栖の側近の橋本以外考えられない。後で見つけ出して問い詰めよう。

「それにしても2人は随分と楽しそうですね」

有栖が冷笑を浮かべながらそう言ってくるが、どう返事をして良いのか「そうだな。歳上の女性に弄ばれるのは悪くないな。なあ比企谷？」綾小路いつ！そんな内容を俺に振るなあ！

「ふうううううん？清隆は歳上の女性に弄ばれたいんだ？」

「まあな。ところで恵は何で不機嫌なんだ？」

ビキイツ！

綾小路の発言に軽井沢の額にデカイ青筋が生まれるが、どんだけ鈍感なんだお前は？以前に、由比ヶ浜によって負の感情が目覚めたが、それ以前は感情が無い……とか言っていたが軽井沢の嫉妬を見抜けないって事はマジで感情が無かったのかもしれないな。「何だ？そんなに弄んで欲しいのか？可愛い後輩だな」

ビキ　ビキ

鬼龍院先輩はこの状況を楽しんでいて、綾小路に顎クイをしながら頭を撫でている。当の綾小路は満更でも無さそうだが、軽井沢の額には青筋が増えている。

「何鼻の下を伸ばしてんのよ！女誑し！」

軽井沢は綾小路の右側に入り、鬼龍院先輩から綾小路を引き離そうと抱きつく。

見ている分には面白いが……

「で？八幡君はどうなんですか？」

「先程いやらしい事を付き合つてあげると言われて嬉しかったんですか？」

俺は俺で対処するべき問題があるからどうかしないとな。2人は俺の腕に当たっているはずなの胸を見てくる。俺に押し付けられた胸はむにゆりと形を変えて、俺を昂らせてくる。

どうしたものかと悩んでいると……

「怒らないから正直に言つてください」

と、ここで有栖が聖母のような微笑みで聞いてくる。

「嬉しかった」

「帰ったらお仕置きです」

「……八幡君の馬鹿」

嘘つき、怒らないと言ったのに。

「う、嬉しかったなんて、エッチだなあ……そこまで激しい事はしないよ?」

「待てなずな。誤解を招くような発言は「なずな?」いや……あの……」

俺はもう逃げれないと判断して流れに身を任せる事にした。だってこっから大逆転なんて無理だろうしな、うん。

結局俺は3人に抱きつかれながら、綾小路が鬼龍院先輩に弄ばれながら軽井沢の胸を揉んでいる光景を眺めるだけの存在と化するのだった。もうコイツは自重しなくなつたが、由比ヶ浜や須藤の所為だろうな。

## 格差

「しかし嫉妬か……怒りや不快の感情もそうだが負の感情というのは強さを感じるな」  
脱衣所にて綾小路は身体を拭きながらそう呟く。綾小路は先程のジャグジーのやりとりを思い出したのだろうか。

あの時綾小路は鬼龍院先輩に弄ばれて、軽井沢が嫉妬の余り隠す事なく綾小路に抱きついて鬼龍院先輩を睨んでいたが、軽井沢何でそんなに怒っているのか本気で理解出来てなかったのだ、俺は今嫉妬の存在を教えたのだ。

しかし嫉妬の気持ち強いのは同感だ。さっきの俺も感じたからな。ひよりと有栖が俺に抱きついていいるなずなを見た際にはドス黒いオーラを出していたが、アレは間違いない嫉妬の感情だろう。

「かもな。ちなみに鬼龍院先輩に弄ばれたいのには本当か？」

「ああ。銀髪の鬼龍院先輩に弄ばれながら金髪の恵を弄びたい。お前こそ朝比奈先輩……歳上の女子に弄ばれたいと思わないのか？」

「なずなは弄ぶより甘やかすのが上手そうだからな」

「で？あの豊満な胸に顔を埋め、頭を撫で撫でされたいのか？」

「……お前、大分エロくなくてきたな」

昔は俺がエロい話を綾小路に教えていたが、今は綾小路も普通にエロトークを出来ているし。

「恵の為にも色々勉強したからな」

「……そうか。まあ甘やかされたい気持ちがない訳じゃない」

ひよりや有栖を甘やかすことはあっても甘やかされる事はそんなに多くないからな。

「なら朝比奈先輩も女の1人にしたらどうだ？2人も3人も変わらないだろ」

いや、躊躇いなく言うなよお前。普通に怖いわ。

綾小路の淡々とした物言いに若干……否、結構ビビリながらも服に着替えて脱衣所を出て、そのまま外に出て寒い空気を感じる。熱い場所から寒い場所に行くと寒く感じるが眠気覚ましには最適だ。

すると男子の綾小路が最初にやって来て、続いて鬼龍院先輩がやってくる。

「やはり男子は早いな」

「鬼龍院先輩も女子にしては早いんじゃないですか？」

実際ひよりや有栖と一緒に風呂から出ても、ひより達は俺が脱衣所から出て数分間は出ないからな。まあ女子は身だしなみを重視しているからだろうけど。

「ふふつ。可愛らしい後輩に会いたかったから急いだのかもしれないな、綾小路」

「そう言つて貰えると嬉しいです。是非弄んでください」

お前はちよつと自重しろ馬鹿。つかまた軽井沢が怒るぞ？

「正直だな。しかし君の友人は怒ると思うが？」

「怒る恵も可愛いんで」

本当に恐れを知らないな。その開きつぶりには脱帽だ。

「やれやれ。仕方ない後輩だな」

鬼龍院先輩は笑いながら綾小路の顎を掌で持ち上げて、綾小路は無表情ながら口元を僅かだが緩めている。つか俺としては手持ち無沙汰で微妙な気分だな。

そう思っている時だった。

「おいおい。どういう状況だ？」

背後から声が聞こえてきたので振り向くと南雲先輩が数人の男女を連れて歩いてい  
る。よく見りや一之瀬も居て全員生徒会の人間だ。

「何だ生徒会の面々か。見てわかるだろう。後輩を弄んでいるところだ」

言いながら綾小路の顎をくすぐっているがこの状況でも2人とも続けているのか？

「お前がそんな事をするとはな。強い後輩に興味を持ったのか？」

「まあそんな所だ。少なくとも桐山の指揮下にいるよりは楽しいな」

「ふざけるな。クラスに一切協力する気などない返事の癖に。可愛げのない女だ」

鬼龍院先輩の言葉に南雲先輩の背後にいる桐山副会長が怒りを宿した目を向ける。確か桐山先輩はAクラスリーダーだったが、南雲先輩に負けたんだっただけだ。

しかし負けた事を鬼龍院先輩の所為にしていような眼差しはどうかと思うな。如何に鬼龍院先輩が有能だとしても個の力、集団戦の戦局を変えるほどじゃないだろう。昨年度は堀北先輩が会長だった事から南雲先輩が希望する個人戦を重視した特別試験は無かっただろうし。

そして桐山先輩のクラスと南雲先輩のクラスの総合力に大差はなかったのだろう。1年生のクラスでも有栖のクラスの総合力と元Bクラスだった一之瀬のクラスの総合力にそこまで差はないし。

にも関わらず、現在500ポイントの近く差があるのは生徒1人1人の能力が原因ではなく、リーダーの質において桐山先輩が南雲先輩を圧倒的に下回っていたのだろう。その癖、鬼龍院先輩1人を責めるのは筋違いだと思ふな」

「おいおい比企谷。お前も中々大胆だな」

そこまで考えていると南雲先輩が話しかけてきたので振り向くと、楽しそうに笑う南雲先輩と真っ赤になって震えながら俺を睨む桐山先輩が目に入るが……

「綾小路。俺全部口にしてたか？」

「ああ。鬼龍院先輩が有能でも個の力って所から口に出ていたな」

「殆ど最初からじゃねえか」

生徒会副会長に喧嘩を売っちゃまったよ。まあ南雲先輩じゃないからそこまで怖くないけど

「別に気にする必要はないだろう。事実、桐山が南雲より数段劣っているのは紛れもない事実だからな」

「鬼龍院先輩の言う通りだな。鬼龍院先輩が可愛げがないと思える時点で桐山先輩の底は知れる」

「ほう。綾小路は私を可愛いと思うか。嬉しいな。よしよし」

「あ、もう少しゆっくり撫でてください」

鬼龍院先輩と綾小路は煽りながら頭を撫でる撫でられるを繰り返しているが、桐山先輩は拳を震わせていて、南雲先輩以外の生徒会役員は絶句しているぞ。

「お待たせー……あれ？雅や帆波に生徒会メンバー？」

「中々面白い状況ですね」

「生徒会もパリゾートに遊びに来たのでしょうか……」

「……………」

と、ここで他の4人もスパから出てくる。同時に軽井沢は鬼龍院先輩に頭を撫で撫で

されているのを見て不機嫌になる。

そして一之瀬は有栖を見てビクツと怯えるが、弱みについてバラされないか不安なのだろう。

「なずな？随分と妙な組み合わせだな。どんな事があってそのグループが出来たんだ？」

これには南雲先輩も意外そうに見てくる。

「んー。私は一人でスパに行つてたら、麻婆を食べた鬼龍院さんとはち……男2人がやってきて……えっと「由比ヶ浜さん被害者同盟の私達がスパ施設に遊びに来て、偶然会つた4人と合流しました」まあそんな感じ」

朝比奈先輩の言葉に有栖が補足を入れる。まあ嫉妬云々は話したくないだろうからな。

「ほう。麻婆と言つたらあの麻婆だろうが、お前らは完食したのか？」

「美味しかったです」

「新しい世界を知れました」

「やるな。今年の1年から完食者は出ないと思つてた」

南雲先輩が質問して俺と綾小路が即答すると、一之瀬以外の生徒会役員は戦慄した眼差しで見えてくるが、やはりトラウマになっているようだ。

「私も驚いたよ。で、話してるうちに意気投合して今からスイーツ食べに行くつもり？ 雅達も来る？」

「残念だが遅い昼食を食べたら直ぐに学校に戻らないといけないんだよ」

「生徒会ブラック過ぎませんか？」

「思わずそう呟いてしまう。冬休み初日から仕事なんて面倒極まりない。

「まあな。生徒会役員数の定員制度を排除したのはそれも理由だ。お前や綾小路も入るか？」

「柄じゃないんで遠慮します」

「その時間を青春に費やしたいので遠慮します」

俺は生徒会って柄じゃないのでパスをしたが、綾小路も生徒会より青春（って名前のエロ）を重視しているのだろう。

「なら仕方ないな。俺達はどう行く……あ、それと綾小路。堀北鈴音との件について俺の耳には入っているが問題にする気はない。ただ須藤の件といい、今後も繰り返すと正当防衛が認められ難くなるからな」

堀北鈴音との件？ 何かやったのか？

「忠告聞きました。気をつけます」

綾小路が一礼すると南雲先輩が会釈をして役員を連れて歩き出すが、桐山先輩の憤怒

の表情と一之瀬のビクビクした表情が印象的だった。

「では綾小路君。スイーツを食べながら何があったか聞かせてください。行きましよう」

有栖がそう言ったのを皮切りに俺達はカフェに向かうのだった。

カフェに着いてケーキとお茶が来てから、綾小路が口を開けるが、それによれば「堀北が綾小路に今後は本気を出してクラスに貢献しろと要請して却下したらコンパスで刺してきたので、須藤の時のように9回は無抵抗で刺され、10回目の刺しがきた瞬間にコンパスを破壊してから腹を殴って、そのまま噴水に投げ込んだ」との事だ。

それを聞いた俺は、正当防衛を成立させる為に何度も無抵抗で攻撃を受けた精神力にビビってしまった。当の本人は軽井沢と鬼龍院先輩に挟まれながらあーんされているけど。

まあ俺も直ぐに有栖とひよりとならずにあーんしたりされたりしてそれどころじゃなくなっただけだな。

結果的に解散するまでに火花が散るのが何回も見えてしまったのは言うまでもないだろう。

## 期限

「と……言う訳で明日、八幡君に処女を捧げる順番について譲れないのですが何か良いのですか？」

クリスマススイブの夜、ひよりと有栖は和食レストランの個室にて軽井沢と松下と佐藤に相談をしている。2人ともクリスマスの夜に八幡に抱かれるつもり満々であるが、八幡の初めてについては譲るつもりはない。

2人は今まで何度も話し合ったが譲るつもりはなく、平行線であったので第三者に相談しているのだ。

相談の内容に松下以外の2人は真っ赤になっているが思考停止にはなっていない。

「とういか坂柳さんはエッチ出来るの？比企谷君のアレの大きさは知らないけど、坂柳さんの膣内って小さいでしょ」

松下は尤もな疑問を口にする。八幡の息子の大きさがどうであれ、有栖の膣内が広いとは思えない。

「問題ありません。クリスマスに備えて道具を使ったり、医療機関で対策をしています」

折角のチャンスで「狭過ぎて出来ないからひよりに譲る」なんて真つ平ごめんだからな。

「ふーん。有栖、あたしにも今度やり方を教えて」

「綾小路君のつて大きいの？」

恵のお願いに佐藤が意外そうに聞いてくる。既に綾小路が恵とエロい事をしているのはここににいる皆が知っている。

「デカい。直接見たことはないけど下着越しで見る限り、勃つた時はこのくらいの太さ」  
恵が指で輪っかを作ると皆が絶句する。

「……お、大き過ぎませんか？」

ひよりは八幡の息子を何度も見たが、あそこまで大きくないので全く想像できないのが本音だ。

「私に挿入たら本当に昇天してしまいそうですね……」

小柄な有栖はそんな光景が容易に想像出来て若干の恐怖を抱く。

「かもね。とりあえず話を戻すけど、順番について比企谷君に任せる、もしくは今あたしがコイントスで決めよっか？」

「……まあ議論では絶対につかないですし、それが基本ですね。ただ前者は怖いですし、後者は完全に納得出来るかわからないです」

恵の言葉にひよりは不安そうに返す。もしも八幡が有栖を選んだら、絶望はしないまでもシヨックを受けるだろう。

口にはしてないが有栖も同意見だ。愛されているとは思うがひよりを優先されたら悔しい気持ちになる確信はある。

「ま、仮に優先されたとしてもそつから巻き返せば良いだけだよ。結局、最後に結婚した方が勝ちで愛人になった方が負けなんだから」

松下がそう返す。松下からすれば2人の争いにおいて処女喪失は中間地点でゴールは結婚である。

「そう、ですよね……」

「ま、まあ松下さんの案は一理あります。まあ八幡君の初めて、妻の座、どちらの私の物にしますか」

「いいえ。私が貰います」

ひよりと有栖が火花をバチバチと散らす。上手く同棲しているとはいえ、譲れないものは当然ある。

「2人とも頑張つてね。で、軽井沢さんはどうなの？ エッチはしないみたいだけど、どこまで行くつもり？」

「うーん……一緒に風呂には入るけど……キスはしたいわね。後、本番以外の行為は

やってみるつもり」

恵は明日に備えて性知識を蓄えているので頑張つて喜ばせるつもりでいた。

「あーあ。私も良い男が欲しいな」

「いつそ私は綾小路君のセフレに「絶対ダメ！ただでさえ鬼龍院先輩に甘やかされてデレデレしてるのに！」……じゃあ比企谷君の「絶対にダメです！ただでさえ朝比奈先輩に鼻の下を伸ばしているのですから！」「冗談だつて。怖いな」

佐藤の願望に松下の冗談で返そうとしたが、恵とひよりと有栖は必死になつて反対する。ただでさえ歳上の女子にデレデレしているのに、スタイル抜群で大人っぽい松下が迫つたら、八幡と綾小路は間違いなくデレデレすると確信していた。

「というかあの2人は遊びに行つたらしいけど、先輩2人に会つてるんじゃないの？」

「いえ。さつき連絡があり、2人は龍園君と鍋を食べているらしいです」

佐藤の呟きに有栖がそう返すが……

「暴君2人と策略家の3人による鍋つて……絶対シニールでしょ」

恵の言葉に皆が頷くのだった。

「……って訳だ龍園。中学時代にやりまくってたお前の知識を借りたい」

「死ね。その俺のイメージは直ぐに捨てろ」

ケヤキモールのもつ鍋店にて綾小路の頼みを龍園は一蹴する。元々綾小路と2人で食う予定だったが途中で龍園と会って、綾小路が龍園に相談があるから来てくれと頼み、3人で店に入ったのだ。

で、綾小路の相談が「恵とエロい事をしたいが、本番は今度にする予定で、それならどこまでやって良いのか」って内容だった。コイツ、ドンドン欲望に忠実になっているな。

「つたく、クリスマススイブなのに何でこんな下らない相談を受けなきゃいけないんだよ」

「一人ぼっちだったから良いだろ」

「テメエマジでぶっ飛ばすぞ」

綾小路の言葉に龍園の額に青筋が浮かぶ。

「何だ？ 予定があつたのか？ 星之宮先生をナンパするののか？」

「どんな予定だよ……」

「ふざけんなよ綾小路。俺があんな賞味期限切れをナンパする悪趣味野郎って言いたい

のか？」

「やっぱりお前も賞味期限切れと思っっているようだな。なら体育祭の借り物競走も無効だな」

そういうや借り物競走で龍園は「賞味期限が切れそうなもの」で星之宮先生を選んで、綾小路が星之宮先生は賞味期限切れと反論していた……あ、星之宮先生だ。

店の入口で額に青筋を浮かばせながらドス黒いオーラを出している。一緒にいる茶柱先生と真嶋先生は引いているし。

そんな中、龍園と綾小路の話は続く。

「ハッ！星之宮が賞味期限切れだなんて小学生でもわかるだろ。審判の真嶋だってあの時の面を見る限り綾小路が正しいと思っただんだろうが、悪いのは賞味期限切れにチキって公平な判断をしなかった真嶋だろ」

あ、星之宮先生の怒りの矛先が真嶋先生に向けられた。

「確かにな。しかし真嶋先生も酷いな。普通赤組の俺を鼻屑する筈なのに、龍園の不正解の回答を正解にするなんて」

綾小路は遠回しに星之宮先生を賞味期限切れと言っているが、星之宮先生に気づいてないのか？

「その点はこっちはラッキーだな。しかし何で星之宮と茶柱は同じ年なのに差があるん

だ？星之宮はとつくに腐つてるが茶柱は後2、3年は大丈夫だろ」

龍園の言葉に星之宮先生の不機嫌のオーラが更に増す。星之宮先生と茶柱先生が互いにライバル視しているとは噂で聞いているが、ライバルより劣っていると云われたら不機嫌になるだろう。

「茶柱先生は喫煙しても臭いに気を遣つてたり教師として毅然としてるからだろう。星之宮先生は酒臭さを隠そうとしないし、化粧も厚化粧だし、子供っぽい態度がキツすぎる」

お前らさつきから星之宮先生に容赦ないな。星之宮先生、顔が般若になつて真嶋先生の関節を極めていゝぞ。完全にとぼちちりだけど、

「お前らそろそろ食うのを再開しろ。冷めるぞ」

「つと、そうだったな。とりあえず話を戻すが俺は賞味期限切れの女をナンパする趣味はねえ。するとしたら綾小路の所の盗撮トリオくらいだろ」

まああの連中ならやつてもおかしくないだろうな。

そう思いながら俺達は鍋を食べるのを再開するが、星之宮先生のドス黒いオーラが漂つて、熱い鍋を食べるのに寒気を感じてしまう。

そんな中、龍園は笑みを浮かべて星之宮先生の方を見るが、やつぱり確信犯か。お前の所為で真嶋先生の顔が潰れたバレーボールみたいになつてゐるぞ。

そして星之宮先生は真嶋先生の顔面を掴みながら茶柱先生と個室に入ろうとするが、個室の扉を閉める直前に首を掻つ切るジェスチャーをしてきてメチャクチャ怖かったです。というか俺もターゲットになるのか？

「やれやれ。睨むくらいなら普段の行動を正せって話だ」  
やっぱり確信犯じゃねえか。

「だが大丈夫か？今後ちよっかいをかけてくるかもしれないぞ」

この学校において教師の評価はクラス次第で変わり、Aクラス担任だとボーナスも出るらしい。坂上先生もボーナスを欲しがってるし、星之宮もそうだろうから、今後教師の許される範囲で妨害をしてくる可能性もあるだろう。

「問題ない。その前にCの連中の一人を退学させれば、行き遅れが何をしても一之瀬は折れるからな」

「そうなるとBクラスの標的はCクラスか？」

「違うな綾小路。AクラスとBクラスの標的がCクラスだ」

「Dについては馬鹿が勝手にクラスを貶めてるからな。わざわざ動く必要性も無くなってきた」

由比ヶ浜とか須藤とかだな。

「で？お前はエロい青春を送るのか？」

「ああ」

龍園の問いに綾小路は即答する。まあクラスの昇格が絶望的だし当然だろう。しかしエロい青春といえは俺も明日、エロい青春を送るだろう。

ひよりと有栖の処女を奪うという18禁青春をな。

避妊の準備もしている。いよいよ俺も男になる日が迫ってきてるし覚悟を決めないとな。

俺は改めて決意をして、離れた個室から打撃音と真嶋先生の呻き声と茶柱先生の必死な声を聞きながら鍋をかつこむのだった。

## クリスマス

いよいよクリスマス。俺は目を覚ますと、相変わらず俺の左右で気持ち良さそうに糸纏わぬ姿で寝ているひよりと有栖を見て愛おしい気持ちになってくる。

今日はクリスマスデートをするが、夜には2人と初夜を迎える予定だ。以前に2人はクリスマスに抱くって話を何回もしてしたし、2人は俺を求めてくる可能性が高い。今まではチキって一線を越えてはしなかったが、いよいよ越える時が来たのかもしれない。2人も本気みたいだし、俺も望んでいる気持ちを持っているからな。

そう思いながら2人の頭を撫でているとくすぐったそうに身を振って俺を抱きしめる力を強めてくる。

叶うならこんな平和な日常がいつまでも続いて欲しいものだ。まあ無理だろうけどな。

俺は2人が目覚めるまで頭を撫でて、起きたら2人とおはようのキスをするのだっ

た。

数時間後……

「やはりクリスマス当日だとクリスマスの色を感じますね」

ケヤキモールにて俺はひよりと有栖とケヤキモールを歩きながら周りを見る。明確な目的は無いが適当にブラブラしている。デートつてのはそういうものだろう。

「けどさ。クリスマスが終わった瞬間に門松を置くのはどうよ？ 中学時代、クリスマスにデパートに行ったら倉庫っぽい場所の近くで門松の準備をしている店員と目が合っ  
て結構気まずかったぜ」

「確かにそうですね。アメリカとかではクリスマスを過ぎてもツリーを置いてますが、日本はせっかち過ぎますよ」

「イルミネーションも一ヶ月前から準備してもクリスマスが終われば呆気なく消えますしね」

全くだ。切り替えが早いのは大切だが日本は早過ぎるだろう……って、

「おいおい。綾小路の奴、やるなあ」

見れば綾小路がケヤキモールの女性もの専門の服屋から軽井沢と鬼龍院先輩に引つ

張られながら出てくる。多分軽井沢と2人でいたら鬼龍院先輩が現れて、鬼龍院先輩が服屋に誘ったら綾小路がノリノリで了承して軽井沢が怒りながらついてきたのだろう。

「彼も手が早いですね」

「完全に八幡君に影響されてますね」

「ほっとけ……まあアレだ。俺もお前らの甘える攻撃に逆らえなかったからな」

2人の甘えん坊っぷりは破壊力が半端ないからな。どちらかを拒否するなんて出来なかった。ヘタレ？何とでも言え。

何にせよ今日は話しかけるつもりはない。互いにデート中だから邪魔するのも野暮だしな。

そして綾小路達が離れていくのを見送ってから俺達は歩くのを再開すると……

「あ、八幡君。ちよつとあそこに付き合ってください」

有栖が指差した場所はランジェリーショップだった。しかも過激なタイプが売られている店だ。

「最近八幡君に沢山揉まれたからか少しですが大きくなつたので下着がキツくなりました」

「私も少しキツイですし行きましょう」

2人はそう言うって歩くが、クリスマスに女子2人に連れられてランジェリーショップ

に入るって中々ハードプレイだな。

そして下着を見ている2人に引つ張られながら奥に進んでいると……

「どう帆波？似合ってる、か……な？」

「朝比奈先輩。これ、変で、す……か？」

女子しかいないと判断したからか最奥の2つのドアが開き、紫色の下着を着たなずなと赤い下着を着た一之瀬が出てくる。

向こうは俺達に気づいて絶句して、俺も絶句してしまう。下着姿の2人は物凄くエロく、谷間がくつきりと出来て、ショーツの方の面積はかなり小さい。

と、ここで二人の方が再起動して一気に真っ赤になる。

「えっ……あっ……にやあああああっ!!」

「なっ!は、ははは八幡君がどうし……きやあっ!」

一之瀬は猫のような声を出して試着室に戻りドアを閉めるが、なずなは戻ろうとした際に段差に引っかかり転んでしまうが、その際になずなが着ているブラジャーの肩紐がドアノブに引っかかり、その拍子で外れて、なずなの大きな胸が露わになって綺麗な乳

首が見え、胸が揺れ「そこまでですー」あたりで視界が真っ暗になる。十中八九ひよりと有栖が手で俺の視界を遮ったのだろう。

数秒しか見れなかったが一生忘れない光景だろう。

10分後……

「本当にすみませんでした」

ケヤキモールの中央広場にて俺は2人に謝罪をする。事故とはいえ2人からしたら恥ずかしいサプライズだっただろう。

「……ううん。女子しかいないと思った私達に問題があるから」

一之瀬は小さく笑いながらそう返すが、笑顔が若干暗い。これは有栖に対して恐怖心があるからだろう。そして有栖はニコニコ笑いながら一之瀬を観察しているが、何かを企んでいるな。

「わ、私の方も見苦しいものを見せてごめんね」

「いや。なずなの裸は魅力的で見苦しくなんか「八幡君？」……ま、まあ次からはお互

いに気をつけようか」

左右から殺意を向けられて思わず息を吞んでしまう。ハッキリ言つてメチャクチャ怖いです。

「ふ、ふーん。魅力的かあ……」

なずなは恥ずかしそうに髪をいじるが、その仕草は中々可愛らしい。

「コホン……ところで一之瀬さん。先程から私から目を逸らしていますが、私がかしたか教えて頂けないでしょうか？」

「えっ?!えっ!」

ここで有栖が話題変更と共に一之瀬に切り込んでくる。これには一之瀬もテンパるが不意打ちが酷過ぎるな……

「もしかして何か不愉快な事をしてしまいましたか?でしたら改善するので教えてください」

そう言うが、聞き出したらそれを今後の戦略に利用するのだろう。で、龍園と共有して徹底的に叩く可能性がある。

しかし……

「そこまでだ有栖。火種を特別試験以外で持ち込むな」

一之瀬を叩きまくるのは勘弁して欲しい。一之瀬を虐め過ぎたら一之瀬のクラスメ

イトが由比ヶ浜のように後先考えずに暴れてくる可能性がある。

そうだったら障害持ち有栖は危険過ぎる。一之瀬を虐める事で一之瀬のクラスメイトから由比ヶ浜レベルでヤバい奴が出たら大怪我じゃ済まないだろう。

「そうですね。すみませんでした。少々踏み込み過ぎましたね」

「ううん！本当になんでもないよ！坂柳さんが謝る事なんかかないよ！」

一之瀬は大きな声を出すのが虚勢である事は直ぐにわかった。やっぱり例の万引きの件だろう。

そんな一之瀬に対して有栖は意味深に微笑むだけだが、一之瀬からしたら恐怖だろうな。

「と、ところで比企谷君っていつのまに朝比奈先輩と仲良くなったの？名前呼びしてるし」

「ん？お守りを拾ったら縁が出来て、スパに言ったらいきなりタメ口で名前呼びしてる言ってきた。そんな感じだよな、なずな？」

「そうだよ。そんな感じ。ところで八幡君達はクリスマスデート？」

「はい、そうです」

なずなの問いにひよりと有栖は即答して両腕に抱きつき、なずなに強い眼差しを向けるが、お前らってなずなに手厳しくないか？

「そうなんだ……あ、あのさ！大晦日なだけどき、八幡君が嫌じゃないなら私と年越しをしない？」

なずなが恥ずかしそうに言ってくる。恥ずかしそうになずなは見えていて可愛らしい。「構わないが大晦日はひよりや有栖は当然として、綾小路や軽井沢や鬼龍院先輩を誘ってゲームパーティーをするから、そのグループに入る形になるぞ」

元々は綾小路が一人の時に話したが、どっかから事情を聞いた軽井沢と鬼龍院先輩も参加を希望したのだ。

「良いよ。じゃあ頼んで良いかな？」

「まあ良いでしょう。一之瀬さんも来ますか？歓迎しますよ」

有栖がなずなから一之瀬に視線を移すと、一之瀬はバツが悪そうに首を横に振る。

「私はクラスの友達と過ごす予定だから無理かな」

「そうでしたか。残念です」

おそらくそこから情報収集をする予定だったのだろうから残念な気持ちに嘘はないだろう。意味合いは酷いけど。何にせよ中々騒がしい年越しになるだろうな。というかこの学校に入ってから騒がしい日常になっている。

そう思いながら息を吐く俺がこの時の俺は知らなかった。

今日のクリスマスを皮切りに、忘年会、バレンタインなど様々なイベントを通して、俺と綾小路の日常は騒がしさにエロさが加わる事を。

## 初夜①

「じゃあ八幡君。大晦日にまたね」

「ああ」

「なずなが挨拶をするので小さく頷く。なずなと一之瀬はこれから南雲先輩らと合流するのでここで別れる。」

「一之瀬さんも今回も災難でしたね。お詫びと言つてはなんです、奢りますので今度2人でお茶でも如何ですか?」

有栖は微笑みを一之瀬に向けるが目には嗜虐心が見えてかなり怖いんだがな。

「う、うん……機会があつたらね」

「あ、待つてよ帆波」

一之瀬は小さく頷くと早足で去つていき、なずなが慌てて一之瀬の後を追つていく。2人が見えなくなると有栖は頷く。

「さて、約束を取り付けましたしデート再開です。エスコートをよろしくお願いします」  
「楽しみましょうね」

2人は抱きつきながら上目遣いで誘ってくるので俺は逆らわずに2人に続いた。

数時間後……

「ふう……ふう……いよいよよか」

夜、俺はベッドの上で深呼吸をしながら脱衣所の閉ざされたドアを見る。

今日のデートは楽しかった。カフェで2人と食べさせ合いっこしたり、憩の広場では2人と抱き合ったり、プリクラで2人とカップル関連のお題に従ったりした。

他にもデート中には様々な出会いもあった。

カフェで軽井沢と鬼龍院先輩に挟まれて嬉しそうにする綾小路

椰揄うつもりで綾小路に口移しで紅茶を飲ませようする鬼龍院先輩、

綾小路が割とノリノリで自身の唇を鬼龍院先輩の唇に近づけようとした光景を見て

ブチ切れた軽井沢

ぬいぐるみ屋で可愛らしい笑顔を浮かべていたが俺達を見て焦り出した神室

例の18禁の店に繋がるドアから出てきたのを俺達に見られて焦る佐藤

佐藤同様に18禁の店に繋がるドアから出てきて苦笑いをする松下

ケヤキモールと寮の間の歩道を清掃していて、俺を見るなり大小差はあれど睨みつけてくる矯正プログラム対象の4人

俺と鉢合わせしたことでギャーギャー喚きまくるように、人一倍ならぬ人百倍煩い由比ヶ浜

など様々な出会いがあつた。まあ一部は碌でもない出会いだったけどな。

そんな事もありながらもデート中は大きな問題に直面することなく無事に終わったが、デートはこれから行うイベントの前座でしかない。

今から俺は男になるのだ。脱衣所から2人が出てきたら2人と一線を越えるだろう。以前から2人はクリスマスに処女を捧げると言っていたし、俺自身も覚悟を決めている。

しかし初めてのことだから凄く緊張している。相手は美少女、それも2人だから当然ではあるが。

そう思いながら深呼吸をしていると脱衣所のドアが開きエロいネグリジエを着たひよりと有栖がやってくる。2人は真つ赤になって恥ずかしそうな態度を見せてくるが、足を止める事なく歩き、ベッドの上が上がってくる。

「では八幡君……わかってると思いますが……」

「私達を……今日、抱いてください……」

2人は艶のある眼差しでおねだりをしてくる。そんな2人の懇願に俺は断る選択肢を出さない。

「ああ。2人を抱かせて貰う……んっ」

「んむっ……ちゅっ……んんっ」

「んんっ……んんっ……んんっ」

俺は2人の唇に交互にキスの雨を降らせると2人は目を瞑り、応えるように俺にキスの雨を降らせてくる。

2人とのキスで火照りを感じる中、俺は空いてる両手を2人のショーツの中に入れるが……

「ぶはっ！お前ら濡れ過ぎだろ？！どんだけ楽しみにしてたんだよ」

余りにも濡れていたの唇を離して、両手で2人の膺の表面を攻めまくる。

「ひゃあん！八幡くんっ！もっど、手つきをいやらしあんっ！」

「やつ！あつ！んんっ！もっど、激しくんあつ！」

2人は喘ぎながらも俺を求めてくるのでそのままショーツを脱がし、丁寧に整った陰毛を見ながら膺内に指を入れて、締め付けてくるのを自覚しながら攻めまくる。これま

でに何度も攻めたので2人の弱点は把握している。

「んっ！あっ！あっあっあっ！いやあっ！」

「好きっ！八幡君の攻め方、やつ！好きですう！」

案の定、2人は喘ぎながらビクンと跳ねて絶頂する事で、大量に愛液を撒き散らしてベッドを濡らしていく。見る限り量は有栖の方が上で、粘度はひよりの方が上だ。どっちの絶頂具合も最高だ。

既に俺の息子もガチガチだし、2人の濡れ具合から俺も参加して大丈夫だろう。

「じゃあ抱くが、順番については……」

「私からお願います……！八幡君の初めては私が欲しいです……！」

2人は息を荒げながらも同時に同じ要求をしてくる。正直言つて俺も同じくらい2人に魅力を感じているし……

「悪いが俺にとつてお前ら2人の価値は同じだからコイントスで決めさせて貰う。異論はないな」

俺が尋ねると2人は互いに顔を見合うが、やがて確かに頷く。

「……わかりました。従います」

「これなら、平等です」

「了解した。花が描いてある方が表、鳥が描かれているのが裏だ。表が出たらひよりの、裏

が出たら有栖だ」

最後に確認すると2人が頷くので俺はコインを取り出していざ投げようとした時だった。

p i p i p i

電子音が鳴り出して拍子抜けしてしまう。画面を見れば綾小路から電話だった。

「もしもし?」

『比企谷、今大丈夫か?』

「全然大丈夫じゃねえよ。今から童貞を卒業しようとしたのに」

「……」まで空気の読めない着信は初めてだぞ。

『それは済まなかった』

「で?何のようだ?」

『済まないが避妊具を持っているなら分けてくれないか?さつき恵と風呂に入ったら我慢出来なくなつて抱かせてくれて頼んだ恵は了承したが避妊具を用意して欲しいと言つてきて、もうケヤキモールに学生が入れる時間じゃないからな』

「マジか。俺はバレンタイン辺りで卒業すると思つていたのだがな」

『つい、な。で、バレンタインまでには鬼龍院先輩を抱きたい』

コイツ今から軽井沢を抱くの違う女を抱きたいとか言いやがったよ。どんだけメ

ンタルぶつ飛んでるんだよ。

「……まあ良い。めでたいし譲って良いが、次からは互いにやる前に、その事をメールで伝え合わないか？ 邪魔が入ったら気が散る」

本番中に電話が来たら絶対にキレていただろう。

『わかった。とりあえず今日は明日の朝までに互いに連絡は無しにしよう』

「ああ。じゃあ俺の部屋のドアの前に置いておくから、取ったらノックをしないで帰れ」  
そう言つて通話を切ると、有栖とひよりが意外そうに見てくる。

「どうやら恵さんも今夜処女を捨てるようですね。今度会ったら情報の共有はしましよ  
う」

「何にせよちよつとゴムを渡すから待つてくれ」

言いながら俺は避妊具を4つ準備してから黒いポーチに入れて、玄関を開けてドアの前に置いて部屋に戻る。

「さて、じゃあ仕切り直しするが、花が出たらひよりを最初に抱いて、鳥が出たら有栖を最初に抱く……異論はないな？」

2人が改めて頷くので俺はコインを上空に放つて、そのまま右掌で左手の甲を利用してキャッチする。

そして右手を退けると……そこには花のマークがあった。つまり……

「……嬉しいです。八幡君の初めての相手が私だなんて……」

ひよりは幸せそうに笑う。こんな幸せそうなひよりは初めて見る。

「……残念です。八幡君の初めては私が欲しかったのに……」

一方の有栖はシヨックを受けた表情を浮かべる。見てみると罪悪感が湧いてくるが、仮に有栖が初めてだから相手なら二人の表情は逆になっていただろう。

「じゃあひよりからだな。けど覚えておいてくれ。俺はお前らに順位を付けてない、同じくらい大切に思っている事を」

これについては嘘偽りない、紛れもない事実だ。

「……八幡君。ひよりさんがどんなに気持ちよくても、私の事も抱いてくださいね？」

「わかっている。元々二人を抱く覚悟は出来ているからな」

「……約束ですから」

有栖のお願いに小さく頷いた俺はひよりと向き合うとひよりは恥ずかしそうにしながらも頷くので俺は服を全て脱ぎ捨てて、ひよりに近寄ってそのまま自身の息子にゴムをつけてからをひよりの膣口に当ててゆっくりと入れ始める。

同時に俺の下半身にはゴム越して圧迫感が来て、ひよりはくすぐったそうに身を振る。

そしてどんどん奥に進めるとやがて壁にぶつかるが、これが処女膜だろう。

最後にひよりを見ると小さく頷くので俺は深呼吸をしてから、そのまま腰を突き出し  
……

「んっ………かはっ！」

そのまま処女膜を突き破り、ひよりの絶叫を耳にする。そんな風に苦悶な表情を浮かべるひよりを見た俺は優しく抱きしめるとひよりは応えるように抱きしめてきて、ひよりが落ち着くまでお互いの温もりを感じながら抱きしめ合うのだった。

## 初夜②

八幡がひよりの処女を奪った。しかしルールに抵触してはいない。

この学校で男と女が性交をする事は異端ではない。高度育成高等学校は外界から遮断された世界であり、男と女の関係が進むのは当然のことだ。

よって学校側も避妊具をコンピニに置いたり、医療機関に避妊薬を準備するなど様々な対策をしている。学生同士の妊娠など洒落にならないのだからな。

話を戻すが学校側はセックスについては推奨してはないがある程度容認している。しかし学校側も1日に3人の女子が処女を失うことは見抜く事は出来ないであろう。

「ぐっ……あがあっ！」

綾小路清隆の部屋にて軽井沢恵が獣のような呻き声をあげる。彼女は一糸纏わぬ姿で、膺には綾小路の巨大な一物が入っていて処女喪失の証の血が流れている。

「大丈夫か恵。キツ過ぎなら抜くぞ」

綾小路は若干心配そうな表情を浮かべながら恵を氣遣う。幾ら自分の息子に圧倒的な快感がやってきているとはいえ、恵に無理をさせるつもりはない。

「……ちよつとキツイけど大丈夫だから少し待って。清隆の熱が伝わってくるから……」

恵の表情から苦悶の色が少しずつ無くなつて艶のある表情に変わってくる。その妖艶さにより綾小路の息子は更に硬くなる。

「恵の膺内、ゴム越しでも気持ちいいのがわかる」

「良かった……あのね清隆。アンタがこの学校でどんな生活を送っていたかはわからなけれど、幸せや喜びみたいな正の感情を知らないなら……私の身体で気持ちよくなつて、幸せを知つて欲しいな……なんて」

恥ずかしそうに呟く恵に対して綾小路の中にある昂りが増す。ホワイトルームで知る事のない存在だ。

ホワイトルームで学ばなかった事については由比ヶ浜も教えたが、由比ヶ浜と違つて自身の気分が良くなるのがわかる。

「恵」

「何きよたんむっ！んっ！んあっ！」

綾小路は恵の唇にキスを落とし、舌をねじ込んでくる。それに対して恵は下半身と唇に伝わる快樂に身を委ねながらトロンとした表情でキスを返す。

「きよたかあ……激し過ぎ……んむう……」

恵の舌が綾小路の舌と絡み合い、部屋中にいやらしい音が奏でる。

「我慢出来なかつた。そろそろ動いて良いか？」

「うん……清隆の欲望、全部受け止めてあげるから、メチャクチャにして……」

「っ！」

瞬間、綾小路の中に情欲の感情が生まれ、今まで情欲の感情を持っていなかった事から加減を知らず、理性の壁が容易く壊れ……

「ああああああっ！きよたかあ！んんんんっ！」

そのまま腰を振り始めて、恵を叫ばせた。



くる。

そのように俺達は互いに求め合っているが、遂に限界がやって来る。

「っ！やばっ！射精るっ！」

「もうダメっ！イクっ！イっちやいますっ！」

どうやらひよりも同じタイミングのようだ。その事に嬉しく思いながら腰を振り

……

「っ！」

「ああああああんっ！」

俺がゴムに欲望を吐き出すと同時にひよりは一際大きな声で喘ぎ、絶頂する。

射精感に満足しながらひよりの膣から肉棒を抜いてゴムを取ると大量の精液が溜まっている。ここまでの量は初めてだな。

「お疲れひより。気持ち良かったぞ」

「私も……気持ち良かったです。大好きっ……ちゅっ」

ひよりは息を切らしながらも優しい微笑みを浮かべてキスをしてくるので俺も優しくキスを返す。それだけで幸せになる。

しかし俺はまだ休めない。何故なら次は有栖を抱くからな。

「じゃあ有栖。来いよ」

「はい……私の事も一杯愛してください……」

有栖は蠱惑的な表情を浮かべながら身に纏うもの全てを脱いで俺を見てくる。小柄な有栖は中学生、下手したら小学生にも見えるが、肌の美しさは圧倒的で、なにより脚は中々肉つきが良い。

ひよりとは別ベクトルの美しさを持つ有栖の身体を堪能できる俺は間違いなく幸せ者だろうな。

俺はそのままひよりから退いて有栖をベッドに押し倒す。

「じゃあ……するぞ?」

「は……」

有栖が小さく頷いたので、ひより相手に暴れまくったのに有栖の艶姿を見てギンギンになっている俺の肉棒をゆっくりと有栖の膣に入れていく。

「あつ……!」

有栖は目を見開いて大きな声を上げる。この日の為に膣を広げたりと対策をしたらしいが、それでもひよりの膣内より狭い。一応通れなくはないが有栖からしたらキツイかもしれないし、ヤバイと判断したら直ぐに退くつもりだ。

「ぐっ……ううっ……」

有栖が呻き声を上げながら耐える中、遂に処女膜の存在を感知する。

俺は有栖を見ると小さく頷くので、一気に突き入れる。

「あっ……があ……！」

その衝撃で有栖は獣のような呻き声を上げてビクンと跳ねる。大丈夫だよな？

結合部から破瓜の証拠の血が流れてる中、様子を見ると少しずつ落ち着きを取り戻す。

「大丈夫か？痛くないか？」

「痛いですが大丈夫です。八幡君に愛されているのだとわかるのですから……」

有栖は目尻に涙を浮かばせながらも微笑みを浮かべてくる。そんな有栖は年相応の可愛さを醸し出していてドキリとしてしまう。

そして有栖の呼吸が整つてくると有栖が俺を見てくる。

「もう大丈夫です。動いてください……」

そんな風にも上目遣いでおなだりしてくる有栖に逆らうつもりはなく、ゆっくりと腰を動かす。ひよりの時よりも気を遣う必要があるからな。

「はあっ！んんっ！」

有栖は敏感のようで普段は絶対に出さない大声を上げる。そしてそのまま俺の腰を足を巻き付けて自身は近くにある俺の顔にキスを何回もしている。

「八幡君っ！好きですっ！八幡君は私のものですっ！あんっ！ひよりさんにもんっ！朝

比奈先輩にもっ！他の誰にもんあっ！負けませんっ！ああんっ！セックスフレンドを何人か持つのはやあっ！まだしも、正妻の座は、渡しませんっ！」

言いながら有栖は俺の背中に手を回して来る。力は弱いが俺に対する独占欲を感じる。

そんな風に俺を求めてくる姿は愛らしい。俺も加減がわかったので、有栖が苦しましいギリギリの速度で攻める。

「俺もっ、お前が好きだっ。有栖っ、有栖っ……！」

「好きっ！もっとくださいっ！私を愛してくださいっ！」

「ああっ！」

ひよりに続いて有栖を抱いた俺は最早歯止めが効かずに腰を振りながら有栖と一緒に求め合う。

暫くすると射精感が一際強くなり……

「っ！もうダメだっ！射精るっ！」

「ダメッ！変な気分……ああああああんっ！」

お互いに限界を迎えて絶頂する。ひよりを相手にした際にも大量に出たのに、今回も負けず劣らずだ。

「よく頑張ったな有栖、偉かったな」

「八幡君もお疲れ様でした」

俺は息を荒くしながら有栖の膣内から肉棒を抜いてから横たえる有栖の頭を撫でると、有栖は嬉しそうに言う。

「ですが、まだ終わってないです。お掃除してあげます」

「あ、私もゴタゴタしてたら出来なかつたので、今からお掃除しますね」

有栖は身体を動かして俺の肉棒に顔を寄せ、ひよりも同じように俺のベッドに横たわり……

「大好きですっ、八幡君♡」  
ちゅっ

俺の肉棒の亀頭に2人同時にキスをしてきた。

瞬間、俺の肉棒はムクムク大きくなり、数分後には2人の攻めによつて呆気なく果てて、その後は精力が尽きるまで3Pをしたのは言うまでもないだろう。

## 明け方

「う、うーん」

俺は目を開けると朝日が部屋を照らしていて、部屋にイカ臭い臭いが蔓延してる。事を認識する。

「んっ……」

「んんっ……」

意識がクリアになる中、ひよりと有栖が裸で俺の左右で寝ているのが見える。

「そうだった……昨日遂に2人を抱いたのだった」

夢ではない。シーツには破瓜の証である血が付着して、シーツやベッドの脇には精液や愛液が広がっているし、何より俺の肉棒には2人の舌の感触や膣内の圧迫感をハッキリと覚えているからな。

「ああ……幸せだ」

昔は女とイチャつく男に対して爆発しろと思っただが、まさかイチャつく側に立つとは

思わなかった。

しかし後悔はしない。2人から求められるのは最高だったし、2人を求めて応えて貰った際には幸せしか無かったからな。

「んっ……おはようございませう八幡君」

ちゅっ……

するとひよりが目を覚まして、美しさと可愛さを兼ね備えた微笑みを浮かべながらキスをしてくれる。

「おはようひより。体調は大丈夫か？」

「ちよつと腰と股が痛いですが大丈夫です。八幡君に愛された証拠ですから」

ひよりはそのまま俺の腕に抱きついてスリスリしてくる。昨夜は結局2人相手に2回戦ずつ、計4回戦行つたが、身体を鍛えていない2人には負担が大きいのだろう。有栖なんか終わった直後に疲労困憊だったし。

「んんっ……おはようございませう八幡君」

ちゅっ

と、ここで有栖も起きてきてキスをしてくる。

「おはよう。体調は大丈夫か？」

「思った以上に気分が良いです。昨夜は幸せでしたが八幡君は幸せでしたか？」

「ああ。最高の夜だったな」

「それは何よりです。昨夜も言いましたが、ひよりさん以外にもセックスフレンドを何人作ろうが正妻は私ですのぞ」

「待つてくたさい。当然のように私をセックスフレンドと言わないでくたさい。正妻は私です」

2人は張り合うように向かい合つて火花を散らすが今のところ俺はどっちの方が好き……つて差を作つてないからな。

とうるか仮に結婚することになったら愛人持ちになるのか？結婚前から愛人がいる事前提とかやば過ぎだろ。

そんな風に思いながらも俺は火花を散らす2人を宥めるべく、そつとキスをするると2人は幸せそうな表情に変わつて、キスの雨を降らせてくる。

「雨は嫌いだがこんな雨なら大歓迎だな。」

数十分後……

「パスタにサラダ、カツ丼で良いか」

ケヤキモールのスーパーにて俺は惣菜や弁当を買って買い物籠に入れる。いつもならひひよりが朝食を作るが、今日は腰を痛めているので弁当を買う事にしたのだ。

で、比較的状态が良い俺が買い物に行き、2人は俺の部屋で休んでいる。

そしてスーパーを出て寮に戻ろうとした時だった。横のコンビニのドアが開き綾小路が出てくる。向こうも俺に気付きやってくる。

「比企谷。昨日はどうだった？」

簡易な一言だが、言いたいことは直ぐにわかった。

「最高だったな。そっちは？」

「同感だ。恵の全身を隅々まで知れた」

どうやら綾小路は軽井沢の全身を堪能したようだな。

「それは何より……で、それは朝飯みたいだが考えてる事は一緒か？」

「ああ。裸エプロン姿の恵を食べるのも悪くないが、腰が痛いから無理と言われてな」

コイツ、どんどん欲望に素直になってきたな。しかし裸エプロンのひよりと有栖を食べてみたいし、今度食べてみるか。

「とりあえず今日は1日中、恵の身体を触りながらのんびりテレビを見るつもりだ。比

企谷は？」

「似た感じだな。とりあえず部屋でゴロゴロするのは確定だな」

気持ち良かったのは否定しないが結構疲れたからな。今日はゆっくり休むつもりだ。

「それが一番だ。ちなみに比企谷。お前は坂柳にフェラチオをされたか？」

「ん？されたが」

「その時に口の中に全部入ったか？恵にして貰った際には恵の口に全部入らなかつたらな」

まあ綾小路の息子はクソデカいからな。軽井沢も口が小さいし全部口に収まらなくても仕方ないだろう。

「結構ギリギリだが入ったな。ギリギリだからこそ伝わる感触が格別だな。これについては有栖に分がある」

そんな風にエロトークをしながら寮に戻るべく道を歩いていると、騒ぎ声が聞こえてくるが、由比ヶ浜や雪ノ下の声が混じっているので間違いないと面倒ごとだな。

「由比ヶ浜に須藤、池や山内に雪ノ下……比企谷。林に隠れて行くぞ」

「了解」

俺達は道から外れて林に隠れながら寮に向かう。見つけたら絶対に疲れ果てる未来に直結するからな。

そしてどんだん声が大きくなる。

「ふざけんなし！犯罪者達がゆきのんを悪く言うなし！」

「同感ね。私は貴方達より遥かに優秀な存在よ」

「はっ！同じDクラスの時点で不良品じゃねえか！」

「由比ヶ浜と連んでるけど、類は友を呼ぶって言葉があるしな！」

「貧乳が偉そうに物を言ってるじゃねえよ！」

「はあ!?あたしが不良品みたいに言うなし！」

「犯罪者に偉そうに言われる筋合いはないわよ！」

物凄い罵倒合戦を繰り返しているが……

「俺からしたら5人全員不良品だと思うんだがな」

「ああ。あいつらのクラスメイトの俺からしたら5人全員塵だ。盗撮魔3人の内、須藤はすぐに暴力に走るし、池は女子の前でセクハラ発言の繰り返し、山内は教師にも平然と嘘を吐く。雪ノ下は自分と由比ヶ浜以外の存在を見下して、由比ヶ浜に至っては論外だからな」

綾小路は俺の呟きにそう返す。大方クリスマスMASの翌日から奉仕活動をしている事に不満を持っている4人がひよんな事から喧嘩をして、由比ヶ浜が雪ノ下に加勢をしたのだと思われる。

しかし綾小路からしても由比ヶ浜は論外なのか。まあ有栖や龍園も論外って思っ

いるからな。

そう思う間にも喧嘩はヒートアップしていく。

「クラスポイントを散々減らした屑野郎が調子に乗ってんじやねえよ！」

須藤、お前の発言はブーメランだからな。

「大体雪ノ下はここにいない必要はないと思ってるけど、強いからって偉そうにぶつてるクズの綾小路に賭けで負けた自業自得だろ！」

いや池よ、盗撮をしたお前の方が遥かに屑だからな。まあ軽井沢のみならず鬼龍院先輩にも手を出そうとする綾小路も屑ではあるけどな。

「アレはあの男がズルしたからよ！私の方が優秀に決まってるわ！」

いや雪ノ下、監視カメラがピツシリある中でカンニングとは絶対に無理だろう。そもそも結果発表前は散々綾小路をこき下ろしていただろうが。

「はっ！優秀なら奉仕活動なんかしないだろ！前から思ってたけどお前って自己評価高過ぎだろ！そんなんじや社会に出て苦労するぞ！」

山内だけには言われたくないだろうな。直ぐにたかったり、嘘を吐きまくる奴だし。「良い加減にしろし！3人ともゆきのんより劣ってるんだから大人しく土下座をしてから退学しろし！キモい！マジキモい！本っ当にキモい！」

うん、お前はちよつと黙ってくれ由比ヶ浜。お前についてはマジで避けたい相手だ

し。

その時だった。

「良い加減にしなさい！これ以上揉めるなら更なる厳罰、由比ヶ浜さんもプログラムに参加させますよ」

ここで我らがBクラス担任の坂上先生の怒鳴り声が聞こえてくる。坂上先生の怒鳴り声って初めて聞いたな。林の影から見してみると警備員数人を引き連れている坂上先生がいた。

これには5人も逆らえず、由比ヶ浜以外の4人は大人しく仕事を再開するのだった。由比ヶ浜はギヤーギヤー騒ぎながら消えていったが、精神的に疲れたな。坂上先生は頭に手を押さえながら4人を監視しているがマジでお疲れ様です。

「……なんか疲れたな」

「ああ。帰ったら恵とシックスナインをするか」

「お、おう」

俺は綾小路の呟きに若干引いてしまう。昨夜軽井沢を抱いたばかりなのに、やり過ぎだろう。

そう思いながらも俺達はこっそり隠れながら寮に向かうのだった。

そして部屋に戻ってから俺はひよりと有栖からWパイズリをして貰い、綾小路は恵と

シックスナインをし合ったようだ。

ちなみに夕方、職員室にいる先生方にDクラスの5馬鹿の対応を労う意味で生姜湯と和菓子を持って行ったら、一部の教師が泣いて喜んで1日遅れのクリスマスプレゼントとばかりにポイントをくれた。

5馬鹿の担任の茶柱先生に至っては胃に手を当てながら3万もくれたが、マジで頑張ってください、はい。

## 大晦日①

冬休みは特に試験や他クラスについて考えなくても良いからかりラックス出来て、ど  
んどん過ぎていき、もう大晦日を迎える。

「後数時間で新年か。後輩達は来年の抱負などはあるか？」

綾小路の部屋にて鬼龍院先輩が俺達にそんな風に聞いてくるが……

「馬鹿5人を避けながら青春を楽しむことです」

「馬鹿5人に絡まれないように注意しながら、あたしの清隆と仲良くする事です」

「馬鹿5人をあしらいながら平穏な学校生活を送りたいっすね」

「馬鹿5人の行動に巻き込まれないように気をつけながら八幡君の正妻ポジションに入  
ることです」

綾小路、軽井沢、俺、有栖が順番に答える。軽井沢は綾小路の右腕に抱きつきながら、  
猫がフシャー！……って威嚇するように鬼龍院先輩を睨んでいる。

しかし全員が馬鹿5人と言うがそれも仕方ないだろう。俺達は割と巻き添えを食ら  
うタイプだし。

「鬼龍院先輩は今年の抱負とかあるのですか？」

「そうだな……見た目はクールだが、中身が情熱的な後輩を可愛がる事に専念するのも悪くないな」

鬼龍院先輩は綾小路の顎を持ち上げて、耳に息を吹きかける。それにより綾小路の無表情な口元が緩み、軽井沢が般若のような表情になる。

「鬼龍院先輩。清隆はあたしのものでしょうか？」

「ふむ……清隆、私に可愛がられたいか？」

「はい。可愛がつてください」

ビシイッ！

鬼龍院先輩の清隆呼び、綾小路の即答了承により軽井沢の額に青筋が浮かぶ。鬼龍院先輩がおちよくり、軽井沢がブチ切れるのは見ている分には面白い。

しかし他人事ではないんだよなあ。俺は俺で先輩に甘やかされ「蕎麦出来たよ」噂をすればだな。

キツチンを見ればひよりとなずなが蕎麦を乗せたトレーを運んでくる。蕎麦の上には鴨肉が乗っていて中々美味そうだ。

「苦勞さん。わざわざ全員分作ってくれて助かった」

俺達は2人に労いの言葉をかける。年越し蕎麦の準備についてはひよりとなずなが

名乗り出てくれたが感謝しかない。

「気にしないでください。気にしちゃうならご褒美としてギュツと抱きしめてください」

ひよりは言いながら俺に抱きついてくる。恥ずかしくないのかって？体育祭で全生徒の前でキスをされたから今更だ。

「はいよ」

言いながら俺はひよりを抱き返すとひよりは満足そうに頷いてから席に座る。俺も座ろうとするが、視線を感じたので見れば、なずなが物欲しそうに見てくる。

「ねえ八幡君。私も頑張ったから同じご褒美が欲しいな」

そして俺にギュツと抱きついてくる。それに伴い、ひよりと有栖がジト目で見てくる。

「あの、なずな。同じご褒美って「くれないと離さないから」……はいよ」

俺は諦めて抱きしめ返すと2人のジト目が強くなり、綾小路がうんうん頷き、軽井沢が綾小路の前で余計な事をしてんじやねえよって目で睨み、鬼龍院先輩は楽しそうに笑っている。実にカオスだ……

「ありがとね。じゃあ頂きます」

「」「」「頂きます」」「」

なずなの挨拶を皮切りに俺達も挨拶をして食べ始める。ただし軽井沢は鬼龍院先輩に、ひよりと有栖はなずなにガンを付けている。やめて、仲良くして!

「それにしてももう今年も終わりだけど、冬休み明け直ぐに試験は怠いなあ」

なずなはそう言ってくるが……

「なずな。冬休み明けに試験があるのか?」

「あるよ。それも全学年合同でね」

「毎年冬休み明けには全学年合同でペナルティに退学が含まれる特別試験があるのだよ」

俺の質問に先輩2人が頷くが、新学期早々からいやらしいな。

「去年の試験の内容を聞いても良いですか?」

「聞いても意味ないよ。堀北先輩によれば毎回全然違う内容にするらしいよ。実際今回の試験って雅が考えたみたいけど、去年と全然違ったし」

なずながそう言ってくる。生徒会長ともなれば多少のルール作成も出来るようだ。

「朝比奈先輩は今年のルールを知ってるみたいですが、教えて貰えますか?」

「んー。流石にこれ以上はタダじゃ無理かな」

綾小路の質問になずなはそう返す。

「では幾らなら?」

「ん、あつ……じゃ、じゃあ今度八幡君が私と2人きりでスパ施設に行くなら教えてあげる……八幡君が好きそうなエッチな水着も着るよ」

言いながらなずなは頬を染め、俺に対して上目遣いで見てくる。

「……仕方ないな。交渉成立だ」

ペナルティに退学がある試験だ。事前に情報を持つといた方が良さだろう。一応クラスのNo. 2だし、身を粉にして働かないといけないからな。

「……」

ひよりと有栖の眼差しが強くなったような気がするが、それは今後考えよう。

「楽しみにしてるから。で、試験内容はね……」

なずなはそう前置きしてから説明を始める。大まかなルールは……

各学年ごとに小グループを6つ作る。小グループには責任者を1人作る

他学年と合流して巨大な大グループを6つ作る

そのグループで学校の用意した課題をこなし、平均点で順位をつける

最下位となった大グループの中で、学校の用意した平均点のボーダーを下回る小グループがあれば小グループの責任者は退学になる。

また退学者が出たグループに明らかに足手纏いがいたら、その者についても1名限定で道連れに出来る

「……私が知ってるのはこのくらい。報酬やグループ決めのルール、課題の内容は知らない」

思ったよりも多い情報だな。これは後日龍園に話して策を練るのも重要だろう。

しかしこの責任者と道連れについては妙に引つかかる。道連れについては手抜きをして責任者を追い込まない為だろうが、退学の際の救済に必要なポイント次第では危険なルールになり得るぞ。

「なるほどな。それなら南雲の狙いは橘を消す事か。2年を支配している南雲なら出来るし、そうすれば堀北兄にも構って貰えるからな」

綾小路がそう口にする。いきなりどうしたんだ？

「……なるほど。素晴らしい慧眼ですね綾小路君。見事です」

「凄まじい洞察力だな。何かご褒美をあげようじゃないか」

「じゃあ是非胸を揉ませてくだ「清隆あああああつ！」痛いな、恵」

ここで有栖と鬼龍院先輩がハツとした表情を浮かべてから綾小路を誉めて、綾小路が煩惱全開の要求をして、軽井沢が綾小路の顔面を殴る。

「えっ?! どういう事? 雅は3年生を支配してないよ?」

なずなが意外そうな表情で浮かべる。確かに2年生のグループについては自在に決

めれるだろうが、3年生に協力するには……待てよ。

「なあ、3年AクラスとBクラスってどのくらいクラスポイントが離れていたっけ？」

「確か290ぐらいでしたね。しかしそこに気付けば考えは合っていますよ」

有栖が俺に微笑みを向けてくる。どうやら俺の考えは当たりのようだ。その位のクラスポイントなら協力関係を気付けるだろう。

「あ、そういう事ですか。大胆な作戦ですね」

ひよりも思いついたようで、うんうん頷く。その仕草は可愛いな。

「ねえ、どんな作戦か教えてよ」

「清隆、説明しなさい。生徒会長の作戦と、アンタの胸好きな理由を」

なずなが興味深そうに、軽井沢が額に青筋を浮かばせながら聞いてくる。

「ん？それはだな……って感じだと思う。胸が好きなのは触った際に手に伝わる感触が気持ちからだ」

綾小路は2人に説明するが、胸好きの理由はいらんからな。

「それが本当ならエグくない？」

「あゝ、雅って堀北先輩に構って貰えてないし、気を引くためにあり得るかもね」

軽井沢はドン引きして、なずなは嫌そうな表情になる。まあ普通の感性を持つ2人なら当然の反応だな。2人には今の感性をキープして欲しいな。

「ふむ、食事中にしては重い空気になったな。どうだろう？食べ終わったら気分転換にゲームをしないか？」

「それは構いませんが何のゲームですか？」

ひよりが発案した鬼龍院先輩に質問すると、鬼龍院先輩は不敵に笑い。

「やはりイベントの王道と言えば王様ゲームだろう」

どうしよう。有栖や鬼龍院先輩や綾小路がヤバい指示を出してきてメチャクチャカオスになる未来しか見えないな。

## 大晦日②

「王様ゲーム？何ですかそれ？」

鬼龍院先輩の提案に綾小路は頭に疑問符を浮かべているが王様ゲームを知らないつて、あれだけ洞察力や学力があるのに……相変わらずミステリアスな奴だな。

「王様ゲームってのは人数分のクジを使うゲームだ。今回は俺、ひより、有栖、なずな、綾小路、軽井沢、鬼龍院先輩の7人だから7つのクジを作るが、王様クジと1から6までのクジを作る」

「そしてそのクジを参加者が一斉に引いて、王様が番号クジを引いた人に命令を出せる。例えば私が王様で比企谷が2番で綾小路が4番で、私が「4番が2番の肩を揉め」と言ったら、綾小路は比企谷の肩を揉む必要がある」

「なるほど……」

俺の説明に綾小路は納得したように頷くが、一瞬だけ口元に笑みを作った。間違いなくエロい命令を考えてるな。

「とはいえ過激過ぎる命令については制限を設けよう」

「制限？」

「ああ。理不尽な命令については4名の反対が出たらその命令は取り消して別の命令にする。どうだ？」

なるほどな。過半数の反対があれば無効化出来るなら悪くない考えだろう。

「俺はそれで構いません」

俺が賛成すると他の面々も頷いたので食後にやるゲームが決まった。運ゲーとはいえ、負けるわけにはいかない。恥ずかしい思いをするのは嫌だからな。

30分後……

「ではクジの作成も完了したし始めようか」

年越し蕎麦とデザートの杏仁豆腐を食べて、いよいよ王様ゲームの始まりだ。

鬼龍院先輩が7つのクジの入った箱を見せてくる。クジを見ればどれも同じ形状だしイカサマは無理だろう。

「では引きましようか」

有栖の呟きに俺達はクジを引き……

『王様だーれだ!?!』

一斉にクジを突きつけ合うが……

「あ、私ですわね」

最初はひよりだった。ひよりなら理不尽な命令はしないだろう。

「では……3番は1番の頭を1分撫でてください」

最初だから随分緩いが、1番は俺だが……

「オレが3番だ。1番は誰だ?」

……

綾小路の眩きに俺は無言で1番のクジを突きつける。

すると綾小路は無表情のまま俺の頭を撫でてくるが俺も似た表情を浮かべているのだらう。

見ればひよりと軽井沢となずなは目を逸らして震えていて、有栖と鬼龍院先輩は笑いを隠す事なく携帯を向けて写真を撮ってくる。

何とも虚しい命令だらうか。

そんな感じで1分頭を撫でられて、俺達はクジを箱に戻してかき混ぜる。

「じゃ、じゃあ次の罰ゲームをしようか!」

軽井沢が話題を変えるかのように強い口調でそう言うってくるので俺達はクジを引き

……

『王様だーれだ!?!』

再度確認するが俺は4番で王様じゃない。

「あ、私が王様だ」

つぎはなすが王様のようにだ。

「じゃあ……1番と5番が3分間抱き合って」

「1番はオレだな」

「おや、私は5番のようだ」

鬼龍院先輩が楽しそうに笑うと綾小路も口元に笑みを浮かばせる。

「反対!・絶対に反対!」

軽井沢が反対意見を出す。やはりセックスした相手が違う女子と抱き合うのは既視感があるのだろう。

しかし他のメンバーは反対してないので……

「反対は1名……残念だが命令の取り消しは不可能だな」

命令の取り消しには4名の反対が必要だが、軽井沢1人しか反対してない。

「命令なら仕方ないですね。鬼龍院先輩、失礼します」

言いながら綾小路は鬼龍院先輩を躊躇いなく抱きしめるが、口元が緩んでいるぞ。

「やれやれ。積極的な後輩だ」

鬼龍院先輩は笑いながら綾小路を抱き返す。般若顔になっている軽井沢が怖過ぎます。

そう思いながら2人の抱き合いを見てみると……

「やんつーん、こら清隆、いきなりお尻を触るのは卑怯だぞ……」

鬼龍院先輩が色っぽい表情と声を出して綾小路を叱る。恵からドス黒いオーラが増したよ。

「失礼しました。恵にやっている時の癖が出てしまいました」

いつもやってんのかよ。コイツ本当に欲望に忠実だな。

内心戦慄しながらも2人の抱擁を見ていると電子音が鳴る。

「終了よー！とつとと離れなさいー！」

軽井沢は綾小路を無理やり引き離してギロリと俺を見てくる。

「なんだよその目は？俺悪いことしてないぞ」

「ふくん。「複数の女子に囲まれるのは気持ちいい」って、常識外れの事を常識外れの清隆に教えたのにな？」

「……………」

軽井沢の睨みに目を逸らしてしまう。そういや以前にそんな事を言った気がするな。

「待つてくれ恵。確かに比企谷はアドバイスをしたが、最終的に結論を出したのはオレだ。それに恵も自分を捨てないなら構わないって了承した筈だ」

「したのは否定しないけど乗り気じゃないわよ、この女誑し！」

軽井沢は怒鳴るが、最終的には許してそうだな。

「私の夫がすいませんでした。八幡君のセックスフレンドのひよりさん共々謝罪します」

「待つてください。人をセックスフレンドと呼ばないでください。セックスフレンドは有栖さんです」

お前らはそんな所で張り合うな。

「ほほう。清隆もセックスフレンドが欲しいのか？なら私が立候補しようか？」

「え？じゃあ是非お願い「するなあああああつ！」痛いな、恵」

軽井沢の顔面。パンチが炸裂するが、須藤の顔面。パンチを10発くらって平然とする綾小路には効果がないようだ。

「煩い！そんなにエッチしたいなら今夜は翌朝まで付き合っただけあげるわよ！」

堂々と宣言する軽井沢。これは大胆だな。

軽井沢は自分の発言に気づいて真っ赤になっている。そんな中、綾小路は軽井沢に近寄りキスをする。

「んむっ……きよたかあ」

「そうか。じゃあ楽しみにしてるから」

「ひゃ、ひゃい」

一瞬で骨抜きになる軽井沢。よ、弱過ぎるな……

これには有栖や鬼龍院先輩はニヤニヤ笑いを浮かべ、ひよりは微笑みを浮かべる。な  
ずなはギャルの見た目に反して純情のようで真っ赤になってるし。

「じゃ、じゃあ次に行こっか」

なずなが照れながらもそう言うてくるので俺達はクジを戻してかき混ぜる。

そして一斉に引くが、手元が狂って床に落としてしまう。慌てて拾うが隣に座る有栖  
には見られたかもしれない。

俺の番号は6番だが、王様は誰だ？

『王様だーれだ!?!』

言いなながらクジを突きつけ合うが……

「ふふっ、私ですね」

有栖が勝ち誇った笑みを浮かべている。これは不味いかもしれないな……

「では命令です。6番の人は私の足に口づけして死別するまで一緒にいるという忠誠を  
誓ってください」

有栖はベッドに座りながら足を出しつつ俺をガン見しながらそう言うってくる。完全にバレてるな。

「……俺が6番だ」

言いながら俺はベッドに近寄り、身を屈めて……

「愛してるぞ有栖。死ぬまで側にいるからな」

ちゅっ

そのまま有栖の靴下にキスをする。その際に綾小路と鬼龍院先輩と軽井沢が携帯を向け、なずなが頬を膨らませて、ひよりがジト目で見てくるが気にしないでおく。というかそうしないとやっていられないからな。

「ふっ、そうですか。仕方ないですし、ずっと側に置いてあげますからね」

有栖はベッドから降りて俺にスリスリしてくる。ハッキリ言ってメチャクチャ可愛過ぎるわ。

「じゃあ次行くから2人ともクジを戻してね」

なずながそう言うって箱を突きつけてくるが、なんか怒ってないか？

疑問に思いながらもクジを箱に戻して、全員がクジを戻してから混ぜてわからないようにする。

そしてまた同じようにクジを引き……

『王様だーれだ!?!』

## 大晦日③

「さて、そろそろ最後のゲームと行こうか」

鬼龍院先輩が笑いながら箱を突きつけてくる。

既に20回ぐらい王様ゲームをやったが俺達は様々な命令に従った。

綾小路の命令でなすなと鬼龍院先輩が抱き合って百合百合したり、ひよりの命令で鬼龍院先輩が綾小路をあすなろ抱きしたり、軽井沢の命令で俺がなすなと綾小路のベッドで添い寝をしたり、俺の命令で軽井沢が全員を赤ちゃん言葉を使いながらパママ呼びしたり、鬼龍院先輩の命令でひよりと有栖が頬にキスし合ったり、綾小路の命令で軽井沢が由比ヶ浜に成り切ったりと中々過激な命令も含まれていた。

中でも軽井沢と有栖とひよりは結構な頻度で不機嫌になったが、王様の命令は絶対である。

そう思いながら俺達はクジを引き……

『王様だーれだ!』

クジを突きつける。俺は4番だ。無念だ……最後に王様になりたかった。

「私か」

最後に鬼龍院先輩か。変な命令でない事を祈る。

「では2番と4番が唇同士でキスをしたまえ」

出たな。最後の最後にお約束の命令だな。

「……俺が4番だ」

「えっ?!わ、私が2番だね」

まさか相手はなすなよ?!なすなは真っ赤になって俺を見てくる。

「反対です!」

ここでひよりと有栖が反対する。まあ予想の範囲内だ。

「おやおや。王様の命令は絶対だぞ?」

鬼龍院先輩は命令をしただけあって賛成だ。

「オレは賛成だ。比企谷にはハーレム王の在り方を見せて貰うって約束をしたからな。

オレはお前の夢の果てを見たいと思っっている」

「テメエ綾小路。嘘ついてんじやねえよ!」

この状況でもとんでもない嘘を吐くか?!というかこんな場面でワンピースのキーワードを汚すな!口元が緩んでいるし、感情的になっっているが碌でもない方向に成長してるな!(※ベクトルは違いますが、八幡や由比ヶ浜の所為です)

「……………」

綾小路の戯言にひよりと有栖と軽井沢がジト目で俺を見てくる。冤罪だから弁護士を呼んで欲しい。

「……………良いんじゃない？ハーレム王なら当たり前の事でしょ」

ここで軽井沢も賛成に回る。これについては完全に俺を困らせる為だ。綾小路に余計な事を吹き込んだと誤解しているのか、もしくは先程命令で赤ちゃん言葉を使わせたからか、どちらかの恨みだろう。

何にせよこれで賛成が3人で反対が2人。俺が反対に回っても、なずなが賛成したら意味がなくなる。

全員がなずなが注目する中、なずなは真っ赤になりながらも口を開けて……

「……………良いよ。恥ずかしいけど、八幡君なら嫌じゃないから……………」

え？まさかの賛成でしたよ。賛成が4人つて時点で命令に理不尽性はないと判断される。

「賛成が4人か。じゃあ早速命令に従って動いて貰おうか」

鬼龍院先輩がそう言うのと、なずなは真っ赤な表情を俺に向けながら俺の肩を掴んできて、目を閉じながら顔を寄せてくる。え？マジでするの？

予想外の展開に呆然とする中、なずなはそのまま俺の首に腕を絡めて……

ちゅっ……

そのままキスをしてくる。柔らかな感触が伝わってきて、顔が熱くなる。ひよりや有栖の唇は何度も堪能したから慣れているが、初めて感じる感触にドキドキしてしまう。

「んっ……ちゅっ……んんっ」

するとなずなはキスの雨を降らせてくる。逃げようとするが、抱き締める力を強めてガツチリ拘束してくる。もうこれは逆らえ「そこまでです！」ないと思ったタイミン  
グでひよりが俺の頭を、有栖がなずなの頭を掴み、引き離してくる。

「ちよっとく、鬼龍院先輩の命令の邪魔はダメでしょ」

「その割に先輩は幸せそうでしたか？」

口元を引き攣らせながら尋ねる有栖。

「……うん、ファーストキスだったけど、思ったよりも気持ちよくて、ね？」

モジモジするなずなにより、額に青筋を浮かばせる有栖とひよりだが、後が怖過ぎる。というかなずなつてキス未経験者だったの？ てつきり何人の男とキスをしていると思っていたが、貞操観念はしつかりしているようだ。

「……八幡君はどうだった？ 私とのキス、嫌じゃなかった？」

不安そうな表情＋上目遣いで尋ねてくる。嫌って言ったら物凄い落ち込んで、こっちの罪悪感が半端ないだろうな。

「……いい、嫌じゃなかったな」

「そつか。じゃあまた欲しくなったらしてあげるね？」

ビシィッ！

なぜなの発言にひよりと有栖の額に青筋が更に増えて空気が重くなる。どうしよう、年末会が終わって3人になったらガチで死ぬかもしれない。

どうするべきか？3人きりにならないように綾小路の部屋に泊めて貰う……ダメだ。綾小路は軽井沢とセックスらしいしからな。

鬼龍院先輩？ダメだ、綾小路が狙っている先輩の部屋に泊めて貰うわけにはいかない。こうなったらなまずの部屋に泊めて貰うしかないのか？」

「ふえっ?!いい、いきなり何を言ってるのかな?!あ、い、嫌って訳じゃないよ。けど心の準備が出来てないし、流れに身を任せちゃいそうだし……ま、まあ八幡君が良いなら身を任せちゃうけど……」

！  
そこまで考えているとなまずが物凄いテンパっている。まさか今の全部口に出てっ

突如背後から殺気を感じたので見てみると……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

ひよりと有栖はドス黒いオーラを撒き散らしている。賞味期限切れと呼ばれた星之

宮先生が出すオーラに匹敵するオーラで、息苦しくなる。

助けを求めるべく綾小路達3人を見れば……

「清隆に軽井沢。中々面白い修羅場だな」

「そうですね。何故か麻婆豆腐が食べたくなりましたし、泰山で買ったテイクアウト用麻婆豆腐を食べますか？ノンアルコールワインも一緒に」

「頂こう」

「2人とも悪い顔過ぎでしょ……」

ダメだ。全く頼りにならない。綾小路と鬼龍院先輩に至ってはテーブルに麻婆豆腐とノンアルコールワインを乗せているし。というか麻婆豆腐は後で俺にもわけてくれ。

そう思いながら俺はドス黒いオーラを撒き散らす2人に対する言い訳を考えるのだった。

数十分後……

「ふむ。では解散としようか」

食器などを片付けると鬼龍院先輩が解散を宣言する。

「2年の寮まで送ります」

「ありがとう清隆。比企谷も朝比奈を送ってくれ」

「いや、行き先は鬼龍院先輩と同じですし綾小路一人で充分ですよな?」

「私はもうちよつと八幡君と過ごしたいけどダメ、かな?」

「そんな悲しそうな声を出さないでくれ」

二人がまたドス黒いオーラを出すし、鬼龍院先輩もなずな関係の話は有栖とひよりの前でしないで欲しい。さつきも話し合った結果、今夜は搾り取るって言われたし。

「だったら全員で送りましょ。清隆もいやらしい事を考えてそうだし」

「そんなことはない。精々鬼龍院先輩からお休みのキスをして欲しいくらいで「考えてんじゃない!このドスケベ!」そこまで言うか?」

「言うわよ!この馬鹿!」

馬鹿というか欲望に忠実になつたつてのが正解だろうな。

「そうですね。全員で送りましょか」

ひよりがそう言うので全員で部屋を出てエレベーターで下に行き、寮を出る。もう夜だからかかなり寒い。長時間もいたら風邪をひいてしまうだろう。

寒さに耐えながら1分ちよつと歩くと2年生の寮に到着する。

「ここまでで大丈夫だ。では良い年を」

「はい。その前にお休みのキスをお願いします」

綾小路の奴、マジで要求しやがった……

「やれやれ。甘えん坊な後輩だな……んっ」

鬼龍院先輩は綾小路の額にそつとキスをして蠱惑的な笑みを浮かべながら寮に入っていく。それによって綾小路は口元を緩ませて軽井沢の顔が般若の顔に変わる。

「えつと……お、お休み八幡君」

ちゅっ

なずなが真つ赤になりながら鬼龍院先輩と同じように俺の額にキスをして寮に入っていく。同時にひよりと有栖も般若の顔に変わる。

そして女子3人は俺と綾小路の手を掴み……否、握りしめて歩き出す。

「清隆、今夜は寝かせないから」

「八幡君。今夜は全部搾り取りますから」

「覚悟してください」

俺達は連行されてエレベーターに乗り、綾小路の部屋がある階に着く。

「じゃあね有栖、ひより。お互いに女誑しの驥を頑張ろうね」

「ええ。よしお年を」

「また女子会で会いましょう」

「また来年ね。さあ行くわよ馬鹿清隆！」

軽井沢が綾小路を引っ張ると同時にドアが閉まり、俺の部屋がある階に向かう。

到着すると二人に引っ張られ、部屋に入るなりベッドの上で押し倒されてズボンがさがされ……

「さあ。たっぷりと可愛がつてあげますから……」

「覚悟してください……！」

「ちよつと待てお前ら！明らかに捕食者の眼差しだが、やり過ぎは勘弁してっ！あつ！

一気に攻めるな！あつ！があつ！あああああああああああああああつ！」

肉食獣と化した2人に容赦なく攻められまくった。

気がつけば朝を迎えていて、全て搾り取られたので下半身に力が走らず、碌に動けないまま初日の出を寮の窓から見るのだった。これほど最低な初日の出の観覧は世界初だろう。

もう搾り取られるのは勘弁と思ったが、3学期が始まる2日前に、なずなどの約束を果たす為、なずなど2人とスバ施設に行ったが、その際になずなからデーブキスをされて、その光景を龍園が写真に収めてひよりと有栖にチクリ、俺は再度限界まで絞られてしまったのだった。

## 出発

騒ぎとエロで溢れた冬休みも終わり3学期を迎えた。初日は直ぐに終わったが、その翌日には週末から学園外に出るので1週間分の身支度をしろと坂上先生に言われたり、学年最強と評される綾小路が平田と別れた軽井沢と交際し始めたって話題が上がってクラスを騒がせた。

そんな中、俺達は合宿を翌日に控えた状態で最後の荷物チェックをしている。

「まあ筆記用具と着替えがあれば大丈夫みたいだし、娯楽物は忘れても大丈夫だろう」「そうですね。しかしこの試験はプライベートポイントを武器に使えるのかによって、難易度も変わりそうです」

その辺りはなすなもわからないらしいが、どうなるのだろうか？まあDクラスが圧倒的に不利になる事は確実だけどな。

「詳しいルールはまだ分かりませんが今回も協力出来るところは協力しましょうね」「そのつもりだ。重要なのは退学者を出さない事だしな」

まあ出たら仕方ない。この世に絶対はないし、潔く退学して欲しい。一之瀬辺りなら

身を粉にしても助けようとするだろうが、俺は善人じゃないからな。

「さて、準備は終わったし自販機で飲み物を買ってくる。何か希望はあるか？」

「ではミルクティーで」

「緑茶でお願いします」

2人からのリクエストを聞いた俺は部屋を出て、エレベーターを降りて寮を出る。

そして自販機がある中庭に行こうとしたら前方から綾小路と軽井沢がやってくる。向こうも俺に気づいて軽井沢が真っ赤になっているが……

「ようおまえら。まさかとは思うが、外でやったのか？」

「いや、本番まではしてない。自販機の裏で恵の身体を攻めまくっただけだ」

「何人か生徒が自販機に来て、声を我慢するのが本当に大変だったんだから！」

恵は真っ赤になって綾小路に怒鳴るが怒りと羞恥が両立している。というか綾小路の奴、クリスマスに軽井沢を抱いてから一層過激になってるな。

綾小路の度胸に戦慄する中、当の本人は怒る軽井沢を抱き寄せてキスをする。すると軽井沢は怒りを消して蕩けた表情で綾小路の首に腕を絡めてキスを返す。

「ごめんな恵。可愛くてつい、な。部屋に戻ったら思い切り愛してやるから許してくれ」

「んっ……清隆の馬鹿。本当にエッチなんだから」

軽井沢はデレデレしながら甘えん坊っぷりを見せてくるが大爆発とかしないかな？

男女の甘いイチヤイチャって見てると苛つくし」

「バカツプルのアンタには言われたくないわよ！」

「比企谷には言われたくないな」

口に出していたようで2人からツツコミが来るが解せぬ。俺は青姦はまだしてないし、バカツプルじゃないだろう。

「悪かったな。何にせよ外では余りするなよ」

最後に軽い注意をしてから自販機に行き、ミルクティーと緑茶とコーヒーを買ってそのまま寮に戻ろうとした時だった。

「あ、八幡君」

歩道の方から声が聞こえてきたので見れば買い物袋を持ったなずながいた。

「よう。買い物袋を持つてるのは、明日以降の合宿に必要なもので不足したものがあつたのか？」

「まあね。八幡君は準備が終わったの？」

「ああ。で、寝る前に一杯飲もうと思つてな」

「そつか。あのね八幡君。試験の詳しい内容はわからないけど、お互いに退学にならないように頑張ろうね」

「当然だ」

国が力を入れる学校で退学処分なんて食らったら、「国から見放された人間」と思われ将来に悪影響な可能性があるからな。Aクラスで卒業より退学回避の重要だと思う。

「まあ八幡君なら大丈夫だろうけど約束だよ……んっ」

ちゅっ

と、ここでなずなは俺の唇にキスをしてくるが不意打ちは狡いだろう。

「じゃ、じゃあお休み八幡君。それとさ、八幡君が良いなら、今度八幡君とお泊まりしたいな……またね……ちゅっ」

最後に真っ赤になりながらも一回キスをしてから去っていくが、これバレたらヤバいだろうな。

内心ヒヤヒヤしながら俺は寮に戻るのだった。

その後、女の第六感というヤツに見抜かれて搾り取られました。

翌日……

「ふふっ、八幡君の手、温かいですね」

「お前の手は小さくて可愛いな、ひより」

「八幡君の好みに合って良かったです。んっ……」

バスの中にて、俺は隣に座るひよりから甘える攻撃を受けまくっている。

手繋ぎ、抱きつき、キスなど様々な攻撃に俺の攻撃力は下がりになりまくり0になつてしまっただろう。というか既に全生徒の前でキスをしているのを見られたとはいえ、自重しなくなつた。

綾小路といい、由比ヶ浜といい、あらゆる方向で自重しない人間って怖いな……

そんな感じでバスに乗ること2時間、前に座る坂上先生が立ち上がりマイクを持って口を開ける。

「皆、遊んでいる最中に申し訳ないが一旦静粛に。諸君らには何処に向かっているのかそろそろ説明したいと思う」

「まさかまた無人島とかですか?」

前に座る小宮が口を開けると坂上先生が首を横に振る。

「それはない。あれは特別試験の中でも規模の大きいものでそう何度も出来るものではない。だが、全員察しがついていると思うが君達には今から特別試験を行うことになっている。内容として無人島に比べれば、生活そのものは簡単だ」

「回りくどい言い方すんじゃないやねえよ。生活以外の部分で面倒なんだろ。そもそもウチのクラスは俺と比企谷以外はバカンスを楽しんだだけだし」

龍園が鼻で笑いながらそう返す。「そーいや俺と龍園以外は数日バカンスを楽しんで、豪華客船に戻ったんだったな。」

「確かにそうだな。ならば言い方を変えるが、生活面では日常生活とそこまでの差はない。今回は林間学校へ案内するが、恐らく1時間弱で着くだろう。説明が早く終わればそれだけ君達に与えられる『猶予』も大きくなる」

猶予、つまり試験について話し合う時間ということか。

坂上先生の言葉に全員が真剣な表情で聞く体勢を取る。その時間を多く残せるかがクラス間の差が出るだろうな。

同時刻……

「これからお前たちをある林間学校へ案内する。恐らく1時間弱で着くだろう。説明が早く終わればそれだけお前たちに与えられる『猶予』も大きくなる」

Dクラスのバスで担任の茶柱がBクラス担任の坂上と同じ事を口にする。

それにより一部の生徒は話を聞く体勢を取るが……

「はあ？何でそんな遅いんだし！もつと早く説明すれば良いじゃん！」

由比ヶ浜が納得いかないとばかりに叫ぶ。それを聞いた茶柱は頭痛を感じながら口を開ける。

「……学校からは到着予定時刻1時間前になつたら説明しろと言われたからだ。私はルールに従つただけだ」

「何だしそのルール?!あたしに対する虐めの訴えも無視するし、あたしやゆきのんをDクラスにして、ヒッキーをCクラスにしたり……本当にこの学校つて腐つてるじゃん！」

由比ヶ浜の発言にクラスメイトの大半は「お前と雪ノ下はDクラスに決まつてるだろうが」つて考えを抱く。

「ねえ由比ヶ浜さん。煩くてウザいから先生の話を遮らないでくれる？それに由比ヶ浜程度の頭じゃ早く説明しても理解出来ないでしょ？」

由比ヶ浜に苦言を呈したのは櫛田。少し前は誰にでも優しくかった櫛田だが、3学期になつて多少の毒舌キャラとなつた。最初は皆が驚いたが、「5馬鹿が所為だろうし仕方ない」と普通に受け入れるようになった。

それに伴い櫛田も我慢の頻度が減りストレスがかなり減つた為、櫛田としても悪くない気分だ。

「どういう意味だし?!」

「そのまんまの意味だからね。お願いだから静かにして」

櫛田の素気ない態度に由比ヶ浜はギリギリと歯軋りをしながら櫛田を睨みつけるが、クラスメイトの大半が櫛田を守るように由比ヶ浜を睨みつけると舌打ちをしながら櫛田に中指を立てて席に座る。

それによりバス内の怒りのボルテージが上がる中、茶柱は今年度になつてケヤキモール内のドラッグストアで売上が上がっている胃薬と頭痛薬を纏めて飲む。

Dクラスにいる5馬鹿により教師のストレスは例年より増え、1年生の担任は胃薬と頭痛薬の常備は当たり前で、5馬鹿の担任の茶柱に至つては学校の経費で週一でメンタルカウンセラーの世話になつていくくらいだ。

例年のDクラスが勤勉に思えるくらいとなつている茶柱の胃は限界で、腐れ縁の真嶋と星之宮からは「違う学校に移転したらどうだ？」とアドバイスを受けた。

「茶柱を嫌っている星之宮も今の茶柱の境遇には心底同情して過去の恨みが薄まっているくらいだ。」

Dクラスの現状を変えられるであろう高円寺と綾小路はといえば……

「ふふふつ、今日の私も美しい。5つも醜い存在が近くにあるとうと見劣りしない美しさ……罪深いな」

「んっ……ちゅっ……清隆あつ……もつと、もつと激しくう……」

「んっ……わかつたよ。激しくしよう……うむっ」

「んんっ！んあつ！んんっ！清隆っ！激しくして欲しいのはキスで、胸を攻めることじゃないからあ……やんっ！」

高円寺はいつものように自分に酔っていて、綾小路はバスに乗ってから2時間以上軽井沢とディープリキスをしながら彼女の服の上から胸を揉んでいた。

どこまでもゴーイングマイウェイな2人に茶柱はため息を吐く。

(もう全てを投げ出して、無人島で1人で自然の赴くまま静かに暮らしたい……)

半ばどころか9割9分9厘くらいAクラス行きを諦め、投げやりになりながらも茶柱は説明を始めるのだった。

## ルール説明

「今回の試験は学年別ではなく、学年全体で行う。まずは試験に関する資料を配布する」  
そう言つて下がり先生は20ページ近くある資料を配る。

「今回の試験は精神の成長をテーマとしている。普段関わらない人間との交流を通して、それらの対処や、人と円滑な関係を築けるかどうかを確認し、また学んでいくことが試験の目的の一つだ」

また部活をやつてる生徒ならまだしも、帰宅部の生徒とかは上級生と関わりがないし、この試験を通して交流するのだろうか。

坂上先生は精神の成長をテーマと言つたが、それ以外に上級生とのコネクションの設立、他クラスの情勢を知るチャンスでもある。今回は龍園が指揮をとるのだろうか？それとも俺に任せるのか？

そう思いながら坂上先生の話聞く。

「まず目的地に着いたら男女別に別れて、それぞれ6つのグループを作つて貰う」

そこはなすなから聞いているが男子と女子は1学年80人ずついるので、1年生においては13人から14人のグループが男女合わせて12出来るのか？グループの人数に制限はあるのか？

「そしてグループの人数には下限と上限があるので手元にある資料の5ページを見なさい」

坂上先生にそう言われて確認すると……

総数が60人以上70人未満なら、下限は8人で上限は13人

総数が70人以上80人未満なら、下限は9人で上限は14人

総数が80人以上なら、下限は10人で上限は15人

と書いてある。

つまり俺達1年の下限は10人で上限は15人ということになる。上級生は知らん。

「もうわかっていていると思うが男女別でそれぞれ6つのグループを作る必要がある以上、他クラスと混合する必要がある。グループ内には最低2クラス以上の生徒が必要とするルールもある」

「坂上先生。クラスの数を増やしたらメリットとかあるのですか？」

気になった事を質問する。4クラス合同の場合、纏めるのが難しくなる欠点があるが、学校の性格的に考えてリターンも有る筈だ。

「ある……が、報酬に関する話は後に回す。今は試験中にやる事を話すが、今回のグループは林間学校だけのものだが、一緒に授業を受ける事は当然として、炊事や洗濯、入浴や就寝まで共に行動するなど内容は濃い」

その言葉に騒めきが生じる。今回は他クラスの生徒と苦楽を共にして背中を任せるような試験だし、グループ次第ではかなり厄介だろう。

「特別試験の結果は、最終日に行われる『総合テスト』によつて決められる。資料7ページを開くように」

言われてページを捲る。そこには……

- ・ 道徳
- ・ 精神鍛錬
- ・ 規律
- ・ 主体性

と書かれているが、普段学校習うものとは違って100点満点を取るのが至難なものばかりだ。各項目に関して解説文はあるが余りアテにならない。

スケジュールによれば起きたら道場で座禅を組み、清掃をしてから朝食を取り午前の

授業、昼食を食べてから授業を受けて、夕食前に座禅をする。で、夕食や風呂を済ませて就寝する感じだ。まるで少年院の生活だな。

しかもグループは凄く重要だ。風邪や事故で離脱したら他のメンバーが穴埋めしないといけないみたいだし。

「それとグループについてだが、1年生が6つのグループを作り終えたら、2年と3年と合流する。よって最終的に1年から3年を合わせた約30人から45人で構成された6つのグループが出来上がることになる。わかりやすく言うと同学年で作るのグループは小グループ、全学年で作るグループは大グループだ」

「坂上、試験の結果はどうやって決まるんだ？」

龍園が坂上にそう質問する。

「試験の結果は大グループのメンバー全員の試験結果の平均点で決まる」

それは厄介だ。1年生の中で良いグループを作れても、他学年の雑魚グループと組んだら上位入りは厳しいからな。

「次に試験の結果がもたらすもの、報酬とペナルティを発表する。次のページを見てみなさい」

坂上先生に言われてページを捲る。それによれば……

1位〜3位

- 1位：プライベートポイント1万、クラスポイント3
  - 2位：プライベートポイント5000、クラスポイント1
  - 3位：プライベートポイント3000、
- 以上を、大グループのメンバー全員に支給する。
- 4位～6位
  - 4位：プライベートポイント5000
  - 5位：プライベートポイント1万、クラスポイント3
  - 6位：プライベートポイント2万、クラスポイント5
- 以上を、大グループのメンバー全員から没収する。  
って、書かれている。

「そして先程の比企谷君の質問だが、グループ内のクラス数や総人数によって報酬が増えるのでチェックしておくように」

言われて資料を確認すると、小グループを構成する生徒のクラス数が2クラスなら変化はないが、3クラスだと資料に載っている報酬の倍、4クラスだと3倍貰えて、小グループの人数でも倍率が変わり、10人を1倍としたら15人だと1.5倍となる。

つまり報酬を狙いに行けば纏まりが欠ける可能性があり、報酬が少ない代わりにリスクが下がるって2パターンがあるようだ。

「それと最下位になった大グループには退学というペナルティがある」

「はあっ?! つまり40人近くが退学って事かよ?!」

石崎が大声で焦るが、そんな世紀末な学校があつてたまるか。

「安心しなさい。退学となるかどうかの基準は学校が用意したボーダーラインを小グループの平均点が下回った場合に限る。つまり大グループで最下位を取っても、3つの小グループがボーダーラインを下回っていないなら退学者は出ないで済む」

要するに絶対に退学者が出る試験ではないのだ。それなら問題ない。

「またボーダーを下回った場合の退学者は小グループの責任者に退学して貰う。責任者については小グループ内で話し合つて決めてもらう」

「んなの誰が好き好んでするかよ」

「当然メリットもある。責任者と同じクラスの生徒は報酬が2倍になる」

なるほどな。それは確かにメリットだ。

俺達の学年では最大15人の小グループを作れるが、もしもBクラス12人で他クラスから1人ずつ集めた15人グループを作り、責任者をBクラスの生徒にして1位を獲得出来たらクラスポイントは……

3 (1位を取った際の報酬)

×

1 2 (Bクラスの生徒数)

×

3 (小グループに4クラスの生徒がいるボーナス)

×

1. 5 (小グループの人数ボーナス)

×

2 (責任者のボーナス)

で、3 2 4 ポイントも入る。まあこれは非現実にも程があるけどな。達成出来る確率は殆ど0だろう。

「責任者は小グループが出来てから話し合いで翌日の朝までに決めて貰う。決められなかったら全員退学になる。まあそんな間抜けなグループはないと思うが」

そりやそうだ。全員退学なら立候補が居なくても最終的にじゃんけんでもするわ。「一つかそのルールがあるなら由比ヶ浜達Dクラス屈指の馬鹿共は退学になるかもな」

石崎がそう言うが、有り得なくもない。俺がDクラスのリーダーなら馬鹿5人を省くように誘導する。そうすればAクラスからCクラスは拒否するのは明白だ。

で、アイツら以外でグループを組んで申請すれば5人は退学だ。5人が一気に退学すればDクラスのクラスポイントは尋常じゃないくらい下がるだろう。

しかしDクラスのクラスポイントは現状マイナスだし、Dクラスの真面目な連中も平和を求めてクラスポイントを犠牲にしてもおかしくない。

「その件については特別ルールがある。学校が作った矯正プログラムを受けている4人と何度も学校から罰を受けている由比ヶ浜さんの計5人をグループに入れた場合、そのグループは重いハンディキャップを背負う為、救済措置がある」

学校が救済措置を用意するって……学校も5人を厄病神扱いしてんのかよ。

「救済措置とは？」

「彼らが所属するグループは試験の際に試験官の査定が甘くなり、グループに所属するメンバーには特別ボーナスとして1人につき10万のプライベートポイントが与えられる。仮に男子グループで須藤君と池君と山内の3人と君達Bクラスの男子12人が組んで15人グループを作った場合、その12人は1人あたり30万プライベートポイント、合計360万ポイントが入手出来る」

坂上先生の言葉にバス内に騒めきが生まれる。確かにそれならメリットはデカいな。流石に3人を同じグループにするのは嫌だが、1人くらいなら悪くない。龍園も考える素振りを見せているし。

「まあ彼らを引き入れるのは君達の判断に任せる。それと責任者が退学することになった場合、小グループの中で「ボーダーを下回った要因」となった生徒がいた場合、学校

が認めたらその生徒も1名だけ道連れで退学に出来る。ただし真面目にやっつけても成績が振るわなかったなどの理由は学校が認めないと思うように」

その辺りはなすなから聞いているが、所詮は真面目にやれば良いだけだ。

「以上で説明を……つと、もう一つある。仮に退学者が出たら退学者の所属するクラスのクラスポイントは100引かれる。救済措置もあるが使う場合、更に300ポイントのクラスポイントが引かれ、2000万プライベートポイントを払う必要がある……まあまだ君達は2000万ポイントがないだろうから救済措置はないと思いたまえ」

救済措置って随分と重いな。全員ポイントをかき集めても1、200万くらい足りないだろう。まあ足りていても救済措置を使うつもりはないけど。ハッキリ言っただけに合わなすぎるし。

「以上で説明を終わりにする。後は到着まで君達の好きにしたまえ」

坂上先生がそう締めくくるとクラスメイトは俺と龍園に目を向けてくる。これまでの試験では俺と龍園が軸になっていたから当然といえば当然だろう。

そんな中、龍園が前に出て坂上先生からマイクを貰う。

「全員聞け。今回の試験は総指揮は俺が執る。で、その下に比企谷とひよりのつける。今回は男女別々になる可能性が高い女子はひよりに相談しろ」

まあ女子陣営にも指揮者を置くのは正しいだろう。で、選ばれるなら頭がキレるひよ

りだ。

「わかりました。頑張ります」

ひよりは異論はないようでも小さく頭を下げる。

「早速だが今回の方針を発表するが、今回は1位を獲りにいかない。正確に言えば獲れたらラッキー、無理には獲りに行かないだな」

龍園の言葉にクラスが騒めきが生まれるが、俺も龍園と同意見だ。

「え？獲りに行かないんですか？」

石崎があり得ないものを見る眼差しを龍園に向ける。

「確率が低過ぎる。仮に1位を獲る為のグループを作っても、それは他の3クラスも同じだ。1年生のみの争いなら勝ちに行くが、今回は上級生と組む際にイレギュラーが起ころ可能性が高いからな」

「まあそうだな。2年の南雲先輩が学年全体を支配してるし、自分が所属しているグループ以外の2年のグループに手を抜かずかもしれないし」

龍園の答えにフォローすると全員は納得したように頷くと、今度は小宮が手を挙げる。

「じゃあ俺達はどうするんですか？」

「今回は可能な限りバラバラのグループに所属して、他クラスと接触して情報収集を徹

底しろ。特に各クラスの粗を探したら今後の試験で役立つかもしれない」

「でも他クラスもウチのクラスを警戒してるから厳しくない？」

伊吹が正論を言うのと龍園は甘いとはかりにニヤリと笑う。

「それでもねえよ。由比ヶ浜達の愚行に対する愚痴を皮切りに話せば、共感から警戒心を緩められる」

『あー、確かに』

クラス全体で同じ考えを抱くのだった。

## 到着

「ふぎけないで！よりによって私と由比ヶ浜さんがお荷物……そっちの低脳3人と同じ扱いなんて納得できないわ！」

「そうだし！あたしとゆきのんが悪い立場なのは学校側のニンゲンが馬鹿だからだし！」

「はあ?!クラスで一番馬鹿な由比ヶ浜が偉そうにしてんじゃねえよ！」

「そうだそうだ！唯一赤点を取った馬鹿だしな！」

「アレだつてテスト前にヒツキーやチビやヤンキーが嫌がらせの言葉で邪魔したからだし！悪いのは3人であたしは悪くない！」

「見苦しい言い訳すんな！雪ノ下も貧乳の癖にイキがるなよ！」

「なんですつて?!貴方みたいな無価値なゴミが偉そうに出しゃばらないで！」

Dクラスのバスにて由比ヶ浜達Dクラス5馬鹿の見苦しい会話が響き、バス内に白けた空気が流れる。

茶柱が試験の説明をして、グループ編成の際に由比ヶ浜達5馬鹿が所属するグループ

には救済措置があると云ったのだが、案の定5人はキレた。

それを皮切りに醜い罵り合いをしているのだが、5人以外のDクラスの生徒からしたら全員同レベルと考えている。

「ねえ、いい加減に静かにしてくれない？学校が決めた事なんだからどうしようもないんだし、他のルールも聞きたいんだけど」

ここで榎田がうんざりした表情を浮かべながら5人に注意する。2学期に比べて荒い口調だが、クラスメイトらはストレスによって荒くなっていると気にしていない。

「煩い！学校が間違ってるのに黙ってられる訳ないじゃん！関係ない人は引っ込んでよ！人として恥ずかしくないの?!」

榎田の正論に由比ヶ浜は理不尽な逆ギレをする。これにはクラスメイトも怒りを露わにするが榎田は鼻で笑う。

「そう言う由比ヶ浜さんこそ野糞なんかして人として恥ずかしくないの?」

ここで榎田は由比ヶ浜にとって逆鱗を踏み抜く。由比ヶ浜にとってはアレは禁断の一言だ。

「っ！煩い！黙るし！」

由比ヶ浜は真っ赤になって水筒を振り上げながら榎田に近づくが……

「ひいっ！」

途中でシャーペンが由比ヶ浜の鼻すれすれの軌道で飛んで、由比ヶ浜はビビりながら足を止める。

クラスメイトは何事かと思いい後ろを向くと……

「さつきから煩いぞ塵が。恵の喘ぎ声を堪能しているんだから静かにしろ」

「んっ！清隆あっ！怒ってる時も乳首を攻めるのは止めっ！あんっ！んあっ！」

綾小路清隆が右手を由比ヶ浜に向け、左手を軽井沢恵の制服の中に入れて乳首を弄り、隣にいる恵は真っ赤になって喘いでいる。

どこまでも自己中な態度にクラスメイトは内心呆れながらも由比ヶ浜達を黙らせる事に期待する。尚、一部の男子は火照りながら喘ぐ恵を見て前屈みになってしまう。

「っ！いきなりシャーペンを投げるなんて何を考えてんだし！」

「悪いな。手が滑った。まあ不慮の事故だから許せ」

右手を向けながら由比ヶ浜の怒りを流す綾小路。誰が見ても故意にシャーペンを投げたのは丸分かりだ。

しかし……

「もー、綾小路君。バス内だから気をつけなよ」

「そうそう。手が滑る事は仕方ないけど、注意しなよ」

松下と佐藤はあたかも綾小路が手が滑ったと注意する。

「だよな。事故だよな」

「まあ良くあるでしょ」

「それに当たりそうになったのは由比ヶ浜だしな」

クラスメイトも松下達に同意する。それにより由比ヶ浜や雪ノ下の怒りのボルテージが増す。

「ふざけないで！由比ヶ浜さんに「黙れ、殺すぞ」っ！」

雪ノ下は怒鳴ろうとしたが、苛々が限界に達した綾小路の殺意をダイレクトに向けられて腰を抜かして震え出す。漏らしてはいないが結構ギリギリであった。

直接向けられていないクラスメイトもビビる中、綾小路は他の4馬鹿に殺意を向ける。

「お前らも教師の話の邪魔するな。次に邪魔したら不慮の事故によって肩を壊すぞ」

「「ひいひいっ！」」

「っ！クソッ！」

先程より若干弱い殺意を向けると由比ヶ浜と池と山内は悲鳴を上げながら腰を抜かし、須藤は怒りながらも肩を壊される恐怖を思い出しながら椅子に座る。

「さて、茶柱先生。馬鹿5人を黙らせたので続きをお願いします……恵、続きだ」  
「んっ……清隆あつ……んむっ……」

綾小路は茶柱を一瞥してから恵にキスをしながらシャーペンを投げた右手を恵の尻に回して撫で始める。

「えつと綾小路君。静かにさせたのは感謝するけど、バスの中でイチヤイチャするのは気になるから自重して欲しいな、なんて」

榊田が苦笑いしながら綾小路に頼み込む。クラスメイトが良く言ったと思う中、綾小路は無表情のまま榊田を見る。

「お前も加わるか？そうすれば気にならなくなるだろ？」  
「ええ?!」

恵とエロい事をしながら榊田にエロい事をしようぜ発言をする綾小路。これには榊田も驚き、クラスメイトも絶句する。

「ちよつと清隆！堂々と榊田を口説かないでくれる？」

「別に良いだろう？楓花さんもいずれ食べるつもりなんだ。2人も3人も変わらない」

「変わるわ馬鹿！というか鬼龍院先輩にも手を出すつもり?!アンタ絶対に比企谷君の影

響受け過ぎでしょ！」

綾小路の暴論に恵は怒りながら綾小路の頭を叩くが、綾小路の考えは変わらない。甘えん坊な恵は最高だが、大人っぽい鬼龍院に弄ばれたくて仕方ないのだ。

「そこまでにしろ。口喧嘩は説明が終わってからだ」

どこまでも自己中な綾小路に茶柱はため息を吐きながら説明を再開する。

しかし説明を再開してから10秒後に綾小路が恵に「ディープキスをし始めて胃痛を感じるのだった。」

「……以上が大まかな流れだ。変わった事があれば俺、比企谷、金田、ひより、坂柳に相談しろ。繰り返し返すが今回は他クラスに攻撃は仕掛けない」

龍園が試験の戦術について大まかに説明する。実際今回は派手に動くつもりはないので戦術も複雑じゃないので理解に苦しむ人はいない。

よつて後は到着まで待つだけなので隣に座るひよりと適度にキスやボディタッチをしながら過ごす。

そんな時間が30分くらい続くとバスは巨大な門をくぐり速度を落とす。窓からは巨大な木造校舎が見えるが、アレが合宿所のようなのだ。

「到着だ。読み上げた生徒から順に携帯を渡してバスから降りて、男子は校舎の方に、女子は体育館に向かって貰う。雨宮君」

「はい」

「伊吹さん」

「はい」

坂上先生の呼びにクラスメイトが動くがどうやら名前順のようだ。

「椎名さん」

暫くするとひよりの番となった。

「はい。では八幡君。後ほど」

ちゅっ……

ひよりはそつとキスをしてから俺から離れて坂上先生に携帯を渡す。とりあえず別れのキスでやる気が出てきたな。

「比企谷君」

「うっす」

俺も呼ばれたので高いテンションを維持しながら坂上先生に携帯を渡してバスから降りる。

バスの外はかなり寒いが、山岳地帯だからだろう。

辺りを見回すと俺達がいるのはグラウンドらしき場所であり、離れた場所には巨大な木造校舎が2つある。これなら500人どころか1000人は収容出来そうだな。

校舎の中に入るとどこか懐かしいような木材の香りがする。中は古いだろが、管理も行き届いて古臭いとは思わない。

エアコンではなくストーブが置かれているが、こういう設備は漫画でしか見た事がないので興味深い。

そんなことを考えながらも俺達が多目的施設のような広い場所に入る。

そしてどんどん男子が入ってきて数分すると200人近くが集まり、クラスごとに整列すると他学年の教師と思われる男性が壇上に上がり、マイクを持って声をかける。

「バスの中での説明で、全員が試験内容を理解したものとして進行する。これから小グループを作成する時間を設ける。各学年、話し合いのもと6つのグループを作成するよ。また大グループの作成時間は午後8時から設けてある。また、大小関わらず、グ

ループ作成に関して学校側は一切関与しないことを伝えておく。以上だ」  
その言葉を最後に男性は壇上から降りる。

さあ、いよいよ1週間近く行動を共にするメンバーの選択の時間だな。

## グループ決め①

「バスの中での説明で、全員が試験内容を理解したものととして進行する。これから小グループを作成する時間を設ける。各学年、話し合いのもと6つのグループを作成するよ。また大グループの作成時間は午後8時から設けてある。また、大小関わらず、グループ作成に関して学校側は一切関与しないことを伝えておく。以上だ」

教師がそう締めくくると俺は1年男子が並ぶ場所の最前列に立つ。

「さて、グループ決めについてだが、早速意見の1つを言わせて貰いたい」

既にBクラスの方針は決まっているのでリーダーの龍園が話すのが筋だが、龍園が話すとは他クラスは絶対に疑うのは明白だ。俺が相手でも疑う奴はいるだろうが、龍園よりは遥かにマシだ。一応2学期にはCクラス相手に小細工抜きで学力勝負をしたこともあるからな。

「はあ?!ふざけんじゃねえよ!何でお前の意見を聞かなきゃいけないんだよ二股野郎  
!」

「そうだそうだ！女子にモテるからって調子に乗って「黙れ塵、肩を壊すぞ」  
ひいひいひいひいっ!？」

山内が怒鳴り、池が追従しようとしたが綾小路が殺意を向けて黙らせる。直に向けた  
れた訳でないのに寒気を感じてしまう。

男子の大半は綾小路に尻込みするが、馬鹿どもを黙らせたのはありがたい。

「済まんな綾小路……さて、とりあえず意見は口にするが、感情論による反論はしないで  
くれ」

感情論は必要ない。状況によって役立つかもしれないが、基本的に感情論は自己中心  
的な意見になるから嫌われやすいし。

「じゃあ話すぞ。今回のグループ分け、基本的には6グループ全て、4クラス編成にした  
い」

俺の言葉にCクラスとDクラスからは騒めきが生じる。既にAクラスとは話がつい  
ていて、有栖から一任されている。

「4クラス編成という事は試験の上位ボーナスを狙うと？確かに全グループ4クラス編  
成にすればどのクラスもクラスポイントを増やせるが、Bクラスは差を広げたり縮めた  
りするつもりはないと？それに弱いグループが出来たら退学者が出るかもしれない」

Cクラス男子のリーダーの神崎が手を挙げて質問する。

「今回の試験は1位を取るのが難しいし、何より自分達に有利なグループを作ろうとしたら他クラスとの潰し合いになりかねない。それなら可能な限り平等にすれば良い。まあ下位クラスからしたらポイントを縮めるのが難しいデメリットがあるけどな。弱いグループについては弱さに応じてメンバーチエンジをすれば良い」

責任者次第ではボーナスが付随されるが、それ以外では差がつけにくい。

「まあそれが最善だろうな。Dクラスにとつても」

「どういう意味だ綾小路。普通は少しでもクラスポイントを縮めるべきじゃないのか？」

綾小路が頷くと眼鏡の男子が文句を言ってくるが、コイツは頭が硬そうだな。

「幸村、ここで俺達が拒否をしたらBクラスは同盟相手のAクラスと2クラスのグループを作るだろう。そうなったら足並みを揃えている2クラスが上位を占領して逆に引き離されるのがオチだ」

流石綾小路。俺の提案は最初からCクラスとDクラスに拒否権がない事を理解しているな。

綾小路の言うように拒否されたら同盟相手のAクラスと組んで上位を占領する。船上試験や体育祭、ペーパーシャツフルでも足並みを揃えたからな。

「……わかった。CクラスはBクラスの提案に乗る」

神崎がそう口にするが、これは最悪の展開……AクラスとBクラスが足並みを揃えて上位を狙い、Cクラスは疫病神3人を擁するDクラスと組む……つて展開を避けるためだろう。

「CがBに賛成した以上、決まりだな。残りのDクラスは雑魚らしく大人しく従え」

龍園が楽しそうにDクラスを煽り、Dクラスの連中は不満そうな表情を浮かべる。確かにAクラスとBクラスが同名を結びCクラスが賛成した以上、Dクラスに選択の余地はない。拒否したらDクラス以外の60人で10人グループを6つ作り、Dクラス全員を排斥することも可能だしな。

しかし感情的には納得してないようで不満そうな表情を隠さず、須藤は我慢出来ずに龍園に詰め寄ろうとするが、綾小路の回し蹴りが鳩尾に叩き込まれる。

「くくくくっ！綾小路いつ！」

「悪いな、足が滑った」

「ふざけんな！明らかにわざと」「次はお前の肩に足が滑るぞ」……くそがあつ！」

綾小路の言葉に以前肩を壊された須藤は悔しそうに叫ぶ。

「良い加減に学習しろ。お前らが救いようがないから俺達まで同レベルと思われる。他クラスに不良品と呼ばれるのはまだしも、お前らと同じ扱いをされるのはオレも我慢出来ない」

綾小路の容赦ない罵倒にDクラスの男子の大半はウンウン頷く。確かにDクラスの中にはポテンシャルが低い雑魚はいるだろうが、須藤達に比べたら人間性はマシだろう。それを考えると由比ヶ浜達と同じ扱いは失礼だ。

「良い加減にしてくれ綾小路君！そうやって暴力や脅しで押さえ込んでも何も解決しないじゃないか！」

平田が綾小路に悲痛そうに叫ぶが綾小路は微動だにしない。

「だつたらどうやって馬鹿5人の問題を解決する？お前の説得は一蹴、櫛田の擁護も当然と思つている奴らをどうやってマトモにする？お前がそうやって甘やかしてるのも馬鹿5人が増長してる原因だ。そんなだから櫛田も馬鹿5人を見限つたじゃないのか？」

「そ、それは……でも……」

「4月では沢山騒ぎ、試験は毎回赤点ギリギリ、女子に対するセクハラ、暴力行為、保身を考えて言い訳多数、沢山の嘘や誇張、盗撮未遂及び反省の色無し……もう入学して半年以上経つてるのに改善しない馬鹿共に強い態度を取る事がおかしいのか？」

綾小路の容赦ない罵倒が平田を襲う。対するDクラスの男子はウンウン頷いたり、馬鹿3人を思い切り睨みつけている。

誰一人須藤達を庇ってないので綾小路の言っている事は本当のようだ。これには他

クラスの男子も綾小路達に同情の眼差しを向けている。

「全く……オレは早く女子と合流して恵の胸を揉みながら、楓花さんに顎クイをされたんだ。下らない横槍を一々挟むな」

綾小路の言葉にDクラスの男子はげんなりした表情に変わる。どうやらバスの中では相当はつちやけていたようだ。

「動機は兎も角早く済ませたいのは同感だ。とりあえず全グループを4クラス編成とする前提でグループを組むぞ」

「しかしどうやって組むのだ？各クラスの主力が1箇所固まるような事は避けるべきだ」

俺の言葉にAクラスの葛城が質問する。

「お前の指摘は尤もだ。だから俺としては各クラスの主力を6人選出して、残った74人の男子を適当に6グループに分けてドラフトを行う事を提案する」

「なるほどな。その際に「各クラスから3人は絶対に選ぶ」とか「選ぶ順番はくじ引きやサイコロにする」とか「余りに大きな戦力差が出た場合、トレードをする」みたいなルールを追加して、グループを作るわけだな」

神崎の言うようにドラフトに細かなルールを付着するのが最善だろう。

「そんな感じだ。反対の者はあるか……いないな。じゃあとりあえず各クラスのリー

ダー格、前に出ろ」

俺の言葉に先ずは龍園が出て、Cクラスからは神崎が推薦される形で前に出て、Aクラスからは戸塚が半ば強引に葛木を推薦、橋本が坂柳派幹部として前に出て、Dクラスからは平田が出る。

「綾小路、お前は出ないのか？」

「興味ない。オレは指揮するより暴れる方が向いている」

言いながら綾小路は虚空を揉む仕草をするが、アレは女の胸を揉む練習だろうな。

「そうか。何にせよ6人揃ったし、残りの74人は一旦列を崩してから適当に一列に並べ」

俺がそう言うのと男子は訝しげな表情を浮かべながら並ぶ。見ればクラスも順番もメチャクチャだ。

「よし。じゃあ前から順にグループを作るが、先ずはAクラス所属は手を挙げる……上げたな。手を挙げた中で前にいる3人、こっちに来い」

Aクラス3人が前に出る。

「次にBクラスは手を挙げて、手を挙げた中で前にいる3人は来い」

そんな感じでBクラスからも3人出て、同じようにCクラスとDクラスも前から3人、こっちに来させる。

見た感じ出席番号もメチャクチャだ。ウチのクラスを見れば石崎、時任、アルベルトだし。

「で、俺達6人はこの12人から2人ずつ選ぶ感じでどうだ？」

俺は5人に話しかける。

「まあ内容としては文句はないが選ぶ順番はどうやって決めるのだ？」

「サイコロを使う。サイコロを2回振るが、1回目に出た目で大きさを1番目から6番目に引く順番を、2回目に出た目で7番目から12番目に引く順番を決める。反対意見はあるか？」

言いながら俺は懐からサイコロを2個取り出す。元々自由時間に遊ぶ為に持ち込んだヤツだ。

「反対意見というより追加意見を認めて欲しい。例えばこのグループ決めで俺が6番目と12番目に引いたとしたら、次のグループ決めの際にはある程度優遇する……みたいなルールを追加したい」

神崎がそう言ってくる。確かに場合によっては有利不利に差が出るな。

「じゃあ引く順番の合計が16以上の奴が居たら、ソイツは次のグループで1番目に引く権利を得る、複数居たら1番多い奴が最初で、2番目に多い奴が2番目に引く……つてのはどうだ？」

「わかった。それなら問題ない」

「決まりだな。じゃあさっさと決めるぞ。比企谷はさっさと振れ」  
「わかった。じゃあ大きい数字が強いとするぞ」

龍園にそう言われて俺はサイコロを振る。すると……

2	1
回目	回目
1	1

最低の数字が2回出た。

## グループ決め②

「くはははっ！両方1って！36分の1の確率なのに、お前持ってんなあ！」

俺が振ったサイコロを見て龍園は大笑いをする。他クラスに笑われるならまだしも、自クラスの龍園に笑われるのはムカつく。

しかし最初から最悪の目が出たな。他の連中も1を出すかもしれないが俺の順番が悪いのは明白だ。

(いや、他の連中も悪い目が出るかもしれない)

淡い希望を抱きながら他のメンバーを見ると……

葛城

1回目	5
2回目	3
橋本	
1回目	4
2回目	4
神崎	
1回目	4
2回目	5
平田	
1回目	2
2回目	4
龍園	
1回目	6
2回目	6

別ベクトルで持つてるな。淡い期待は打ち砕かれた。全員1より大きい数字だ。つか龍園は両方6って、俺とは

「ダブった場合はもうダブった者同士もう一回振れば良いか？」

俺が落ち込む中、橋本が質問する。確かに橋本の1回目と神崎の1回目、橋本の2回目と平田の2回目が被ってるな。

「それが最善だな。じゃあ振るぞ」

神崎と橋本が振るい、神崎が1で橋本が6だったので橋本の勝ちだ。

そして次は橋本と平田がサイコロを振るい、橋本が4で平田が3だったのでまたしても橋本の勝ちだ。

よって第1グループ12人から選ぶ順番は……

1 番目 龍園

2 番目 葛城

3 番目 橋本

4 番目 神崎

5 番目 平田

6 番目 俺

7 番目 龍園

8 番目 神崎

9 番目 橋本

10 番目 平田

11 番目 葛城

12 番目 俺

という感じだ。俺が悲惨すぎる……まあ最初のグループには厄病神トリオがいないし、まだマシだな。

「じゃあ俺からだな。アルベルトを指名する」

「Yes. Boss」

龍園は案の定アルベルトを選ぶ。まあ当然だ。アルベルトは龍園の忠臣でフィジカルは抜群、学力も平均以上と優秀だからな。

「じゃあ次は俺か……Cクラスの柴田で」

葛城が選んだのはCクラスの柴田。運動能力が高く、成績も平均以上、コミュ力が高いから他クラスでも価値は高い。

「じゃあ俺は……吉田で」

橋本は最初から有栖についていた吉田健太を指名する。

「俺は浜口だな」

神崎が選んだのは同じクラスの浜口。詳しくは知らないが成績が良いのは知っている

る。

「僕は、鷹宮君で」

平田はDクラスから鷹宮って男を指名する。まあわざわざ選んだ以上無能じゃないだろう。

次は俺だが……

「時任で」

石崎でもアリと思ったが、石崎は龍園と組ませた方がいいと判断した。

「わかった。宜しく頼む」

時任も俺をリーダーに据えようとしていたし不満はなさそうだ。

「じゃあ俺は石崎で」

「つしやあ！了解っすー！」

石崎はテンションを上げるがお前はもうちよつと静かにしろ。

「次は俺だが……Dクラスの三宅で」

ここで神崎はDクラスの生徒をチョイスする。これは今後厄病神トリオをグループに入れないように早いうちにDクラスの枠を埋める作戦か？

「俺は森重で」

橋本は吉田同様に最初から坂柳派だった森重を指名する。

「僕は……Aクラスの町田君で」

平田はAクラスの生徒を選ぶ。次は葛城だが……

「Cクラスの溝口で」

「じゃあ俺は自動的に本堂か……」

俺は自動的にDクラスの本堂になる。詳しい実力は知らんが余り期待しないのが吉だろう。

「次に第2グループだな。順番の合計で1・6以上は比企谷だな」

葛城の言うように選んだ順番の合計値は……

龍園が8、神崎と橋本が1・2、葛城が1・3、平田が1・5、俺が1・8だ。よって俺は次のグループで1番目を確保出来る。

「じゃあまた同じように、各クラス前から順に3人ずつ出してくれ」

神崎の言葉に同じように各クラス3人、計1・2人現れるが……

「良しっ！綾小路がいる！」

次のグループ12人には綾小路がいたのだ。もう選択肢は決まった。

「ま、そうだよな」

「俺も綾小路を取りたかったぜ」

龍園が頷き、橋本は悔しそうに唸る。

現状綾小路は1年生で最強候補だ。須藤の拳を10発受けて平然とする耐久力、一撃で須藤の肩を粉碎するパワー、有栖の作ったテストを全科目満点を取る頭脳……高校生離れしている綾小路を取らないわけがない。

しかし……

「ま、綾小路以外にも有望な奴はいるが……あの厄病神だけは死んでもごめんだなあ！」  
龍園は嫌味つたらしい笑みを浮かべながら山内を指差す。それに伴い、周りの男子は嘲笑を浮かべる。まあ盗撮犯に対する扱いはこんなもんだろう。

しかし山内を取りたくないのは同感だ。ボーナスが入るとはいえ、アイツの存在には生理的嫌悪を感じるし。

そんな風に思いながら俺は1回、他のメンバーは2回サイコロを順番に振る。  
結果……

1番目 俺（前回の不運によるボーナス）

2番目 龍園

3番目 平田

4番目 橋本

5番目 神崎

6番目 葛城

7番目 平田

8番目 神崎

9番目 葛城

10番目 俺

11番目 龍園

12番目 橋本

って結果になって橋本は目に見えて落ち込む。同情はするが助けはしない。

「俺は当然綾小路」

「ああ。宜しく頼む」

当然綾小路一択だ。

「俺か……Aの的場で」

龍園はAクラスの的場を指名。最初から坂柳派に所属していた奴だし龍園的にも悪くないチョイスだろう。

続いて平田がウチのクラスの金田を指名して、橋本達もそれに続き……

「じゃあ俺は……Bクラスの小宮で」

10番目の俺はウチのクラスの小宮を指名する。それに伴い龍園が嫌味つたらしい笑みを浮かべながら……

「Dクラスの東山で。次は橋本だな……あつ、選択肢が無かったな、悪い悪い」

そう告げると、橋本は嫌そうな顔をしながら自動的に山内を選択する。橋本のグループメンバーの空気も重くなる。

「ちっ、なんなんだよふざけやがって」

山内は苛立ちながら橋本のグループに向かうが、お前はそんな態度を取る資格はないからな。

「そう思いながら俺達は第3グループに属する12人を前に出しながらサイコロを振るのだった。」

20分後……

遂に1年生男子は6グループを結成した。

俺のグループはどうなったかと言うと……

Aクラス

鬼頭隼 鳥羽茂 清水直樹

Bクラス

俺 時任裕也 小宮叶吾

Cクラス

渡辺紀仁 別府良太 北山深夜

Dクラス

本堂遼太郎 綾小路清隆 池寛治 幸村輝彦

つて感じになった。厄病神杵が1人いるが、直ぐに暴力に走る須藤や生理的に受け付けない山内よりはマシなので割り切るしかない。

ちなみに最後の厄病神杵にいる須藤は龍園のグループになってキレていたが、アルベルトにぶん殴られて黙らされた。同情はしない。

そんな事を考えながら俺は真嶋先生にグループ結成を告げに向かった。

同時刻……

「はあ……」

ひよりと有栖はため息を吐いていた。2人は別のグループに所属しているが、憂鬱な気分だ。

⋮

何故なら2人が結成した女子グループは男子同様にドラフト形式で作られたのだが

## 第1グループ

Aクラス

坂柳有栖 山村美紀 西川亮子 安齋八重

Bクラス

西野武子 木下美乃梨 矢島麻里子

Cクラス

小橋夢 網倉麻子 津辺仁美

Dクラス

軽井沢恵 小野寺かや乃 雪ノ下雪乃

## 第2グループ

Aクラス

島崎いつけい 中島理子 六角百恵

Bクラス

椎名ひより 伊吹濤 山上桜

Cクラス

姫野ユキ 白波千尋 大宮京子

Dクラス

王美雨 松下千秋 佐藤麻耶 由比ヶ浜結衣

ハズレ枠の2人を引いてしまったのだ。しかも2人とも終始煩くてノイローゼになりかけている。

2人は早く八幡と合流して愚痴をこぼしたいと思うのだった。

## グループ決め③

「もう少し時間がかかると思っていたが、意外に早くまとまったな」

1年生がグループを作ると南雲会長がそう口にする。上級生の方も、既に小グループの結成を全て終わらせてるので、今この場には200人以上の男子が集まっている。

「お前たち1年に提案がある。これからすぐに大グループを作らないか？」

「それは今日の8時からではないんですか？」

「それは小グループ結成に時間がかかると踏んでいた学校側の配慮だ。しかし全学年がこうして早く作業を終えたし、このまま大グループ結成までしてしまった方が得だろうか？」

南雲会長がそうに言う。確かに教師の動きが慌ただしいし予想よりも早くグループが決まったようだ。

「構いませんよね？堀北先輩」

南雲会長が近くにいる堀北先輩に確認すると頷く。

「ああ。こちらとしてもその方が都合がいい」

「大グループの結成方法ですけど、ドラフト会議みたいで1年の代表者が俺たち上級生を指名していくってのはどうすか？」

またドラフトか……まあ妥当か。

「1年生の持つ情報量は少ない。公平性に欠けている」

「公平に決めるなんて無理ですよ。結局持つてる情報に差があるんですから……1年は不満か？」

そう言うってから南雲会長は俺達1年を見る。

「不満ではないですが、せめて所属クラスについて開示してくれませんか？」

南雲会長の質問に俺ががそう返す。実際クラスを知っていると知らないでは全然違うからな。

「まあそのくらいなら良いだろう。俺のグループは……」

南雲会長を皮切りに上級生達は所属するグループの構成を説明していくが……

(おかしい。南雲会長のグループは何故CクラスとDクラスの生徒ばかりを?)

南雲会長のグループの大半はCクラスとDクラスの生徒が大半だ。幾ら学年全体を支配しているといっても、自クラスの生徒で固めるのが基本だと思うが。

何にせよ南雲会長のグループは優先順位は余り高くないな。

そう思う中、3年生もグループ構成を説明し終える。

「さて説明も終わったし、1年から代表6人を出してくれ」

南雲会長がそう言うがまだ責任者については決めてないので俺が前に出る。周りを  
見れば先程ドラフトをした5人が出てくる。

「サイコロでさっきのルールでどうだ？」

俺が確認すると5人が頷くとサイコロを振る。

結果……

1 番目 葛城

2 番目 平田

3 番目 俺

4 番目 龍園

5 番目 橋本

6 番目 神崎

7 番目 俺

8 番目 神崎

9 番目 龍園

10番目 葛城

11番目 橋本

12番目 平田

となった。

「堀北先輩のグループでお願いします」

葛城は案の定堀北先輩のグループを選び、葛城のグループは喜びを露わにする。まあ当然の反応だな。

次に平田の番だが、平田は堀北先輩のグループの次にAクラスの生徒が多くいる3年のグループをチョイスする。知っている顔が1人もいないが、平田の視点から見れば当たりの分類なのだろう。

次は俺の番だが……

「南雲会長のグループで」

CクラスとDクラスの生徒が多いのは気になるが、会長がわざわざそんなグループを組むってことは何らかのリターンがあるだろう。

「じゃあ2年の殿川のグループで」

龍園が指名したのはAクラスとCクラスの混成グループだ。というか3年生のグループは1クラスの生徒が固まっている傾向だが、2年のグループはかなり混沌となっ

ているな。

そんな事を考えている間に俺の2回目の番が来たので、俺は3年Bクラスが中心の石倉先輩のグループを選ぶ。

そして他のメンバーも決めていき、平田が自動的に最後に残ったグループを選ぶ。これにより大グループは決まりだ。

と、ここで南雲会長が堀北先輩に話しかける。

「堀北先輩。偶然にも別々の大グループになったことですし、一つ勝負をしませんか」

南雲会長の言葉に堀北先輩は目を鋭くして、3年生の大半からは呆れを含んだため息が漏れる。

「南雲、これで何度目だ。いい加減にしろ」

そう口にするのは体育祭の時、紅組の総指揮を執っていた藤巻先輩って人だ。

「何か問題があるでしょうか？誰が誰に対して宣戦布告しようと、禁止されているわけでもないでしょう」

まあそうだな。

「これまで何度も堀北に挑んでいるが今回は1年も含んだ大規模な試験だ。お前個人のおモチャにするわけにはいかないし、何より基本的なモラルの問題だ。禁止されていなくてもやっていいことと悪いことがある」

「俺はそうは思いませんけどね。大体モラルなんて今の1年生からしたら無価値でしよう。そうだろ……比企谷、綾小路、龍園」

南雲会長はそう言つて俺達を見てくる。確かに俺は2人の女子を抱いた上、なずな先輩とディープキスをしたし、綾小路は軽井沢とイチヤイチャしながら鬼龍院先輩に甘やかされているし、龍園は他クラスに暴力に器物破損とやりたい放題だ。

「おいおい生徒会長さんよ。俺がモラルに問題がある言い方はやめてくれや」

龍園はヘラヘラ笑いながらそう口にするが、お前ほどモラルに問題がある生徒は居ないからな。

「オレとしては複数の女子とエロい事をするのが問題なら、モラルを捨てますね」

綾小路は逆に堂々とモラルを捨てる発言をする。コイツは本当にブレないな……

「俺がモラル的に問題があるかはさておき、今年の1年生に基本的な常識を求めるのは間違つてますよ」

由比ヶ浜達5馬鹿がいる以上、1年生は常識知らずと思われてもおかしくない。

俺達の言葉に2年生はウンウン頷き、藤巻先輩は苦虫を噛み潰したような表情になるが、事実なので反論していない。

そんな中、堀北先輩はため息を吐いてから前に出る。

「南雲、俺はこれまでお前の要望を断ってきたが、何故だかわかるか？」

「友人達は俺に負けるのが怖いと言いますが、それはないでしょうね。実際堀北先輩は恐れてなく、単純に無益な争いを好まないからツスよね？」

「お前の好む争いは他人を巻き込みすぎる」

「見解の相違ですね。何にせよ堀北先輩が3年である以上、数少ない機会は捨てたくないんで」

まあ堀北先輩はもう直ぐ卒業だからな。つか前から気になっていたんだが、進学先や就職先を推薦で手に入れたAクラスの生徒が、その後にBクラスに落ちたらどうなるのだろうか？

まあ3年になれば嫌でもわかるか。

「何をもって勝負をするつもりだ」

その発言に3年生は騒めきを生む。どうやら勝負をしないと思っていたようだ。

「どちらがより多くの退学者を出させるか……ってのはどうですか？」

「笑えない冗談だな」

「冗談じゃないんですけど……まあ真面目に提案するなら、どちらのグループが高い平均点を取れるか、ですかね」

また妥当だな。というかこの試験で大量の退学者を出させるのは至難だ。どんなに多くても5人は超えないだろう。

「それならば受けても構わない。ただし他の生徒を一切巻き込むな。あくまで俺とお前の個人的な戦いだ。呑めないなら勝負を受けるつもりはない」

「勝つために堀北先輩の駒を攻撃するようなやり方はなし、ということですね」

「こちらのグループに限らずだ。他の生徒を転ばすようなやり方は認めない」

そんな堀北先輩の言葉に対して南雲会長は意味深な笑みを浮かべる。

「……分かりました。勝負を望んでるのは俺だけのようですし、堀北先輩の条件は呑みません。それと結果によるペナルティもいらねえですよ？あくまでもお互いのプライドをかけた戦いということですから」

そんな風に言う南雲会長だが、絶対にとんでもない爆弾を投下しそうだ。

頼むから俺を巻き込まないでくださいよ。肉壁が池だけつてのは心許ないですから。

3分後……

「このグループの責任者だが……池にやって貰いたい」

「は?!ふざけんよ!嫌に決まってるだろ!」

「池なら良いだろ」

「だな」

「それ以外に使い所がないからな」

「肉壁以外何の役にも立たないだろ」

「池なら消えても罪悪感わかないし」

「っ!お前ら良い加減に「引き受ける、殺すぞ」ぴいつ!わ、わかった!やるから!やるから殺意を向けないでくれ!」

綾小路の機転によりウチのグループの責任者は池に決定しました。パチパチパチパチ

## 結成後

案内された部屋は木造の2段ベッドが大量に置かれた部屋で、それ以外は何もない部屋だ。まさに寝るだけの部屋だ。

「場所は好きな場所が良いだろ」

言いながら俺は1番近くの下の下のベッドにバッグを投げる。

「良いのか比企谷？普通奥の2段目が狙い目じゃないのか？」

時任は意外そうに話しかけてくるが……

「ひよりと有栖が居ない以上、どこでも良い」

重要なのはひよりと有栖がいるかどうかだ。

「オレも恵と楓花さんが居ないなら何処でも良い」

綾小路は俺の向かい側に鞆を投げるが……

「え？お前鬼龍院先輩とも寝たのか？」

「昨日誘ったらOKしてくれた。恵がブチ切れたけど、事故を装って楓花さんの尻を触ったけど柔らかかった」

そりやそうだ。今の綾小路は正式に軽井沢と付き合ってるのに違う女と寝ていたらキレるわ。グループメンバーも絶句しているし。というか事故を装って触るって……コイツ、本当に欲望に忠実になってるな。

「え？浮気してるって事かよ？」

「現状はな。けど早いうちに2人目の恋人にする」

「お、おう。そうか……」

小宮の問いに綾小路は淡々と答える。まさか堂々と二股宣言するとは思わなかったように面食らっている。

「意外そうに見ているが比企谷だって2年生の女子を3人目の恋人にしようとしてるぞ」

「してねーよ！人聞きの悪い事を言うな！」

「でも2日前に龍園からお前がスパ施設で朝比奈先輩とデーパーキスをしてる写真を送られたぞ」

あのロン毛マジでふざけんな！綾小路にも送ったのかよ?!ぶっ殺すぞ！

「マジか……でもこれ坂柳が知ったらヤバくね？」

「ヤバかったな」

有栖と同じクラスの清水が俺を見ながら聞いてくるが、実際有栖とひよりにはその日

の晩に搾り取られたからな。あの時の有栖とひよりのテクニクは半端なく、俺は虐められまくった惨めなマゾ豚だった。

「それより昼食を取りにいくぞ。食事時間は1時間しかないんだしさつさとベッドを決めろ」

合宿中、唯一女子と公に過ごせる時間だ。無駄にするつもりはない。

俺の言葉に他のメンバーも慌ただしくベッドを確保して食堂に向かう。

そして食堂が見えた時だった。

「おや清隆に比企谷。同じグループか？」

横から声が聞こえてきたので見れば鬼龍院先輩がいるが、ジャージ姿でもカッコいいな。

「そうです。ところで一緒にご飯を食べませんか？あーんで食べさせてください」

どんな要求だよ?!コイツには躊躇いや羞恥心がないのか?!（※躊躇いや羞恥心はまだ芽生えていません）

「やれやれ。甘えん坊な後輩だな……済まないが私は彼と食べるからまた後で」

鬼龍院先輩は笑いながら同じグループメンバーにそう口にする。同じグループメンバーはキヤーキヤー楽しそうにはしゃいで、周りの男子は嫉妬に満ちた眼差しを綾小路に向ける。

「という訳だからオレはここで。集合時間などは守るから」

綾小路はそのまま鬼龍院先輩と腕を組んで先に食堂に入る……そして入って直ぐ軽井沢が詰め寄っているが、綾小路はそのままキスして軽井沢を大人しくさせる。アイツ、高円寺や龍園より唯我独尊だな……

内心呆れながらも食堂に入ると、入口脇にて疲労困憊のひよりと有栖がいた。

「ど、どうしたお前ら？ グループ決めで厄病神2人の押し付け合いをして疲れたのか？」  
厄病神とは言うまでもなく雪ノ下と由比ヶ浜だ。

「ええ。しかし最終的にドラフト制でグループを決めた結果、私のグループには雪ノ下さんが、ひよりさんのグループには由比ヶ浜結衣が寄生してしまいました」

Oh……なんて災難だ。俺のグループのメンバーは同情に満ちた眼差しを向ける。

そんな2人に本堂が話しかける。

「だったら早いうちに胃薬を医務室から貰った方が良いいぜ。俺達Dクラスには必須だし、なあ幸村？」

「ああ。バイトでポイントを貰ったら真っ先に買ってるし、2学期終わりに松下が胃薬の無料支給制度案を生徒会に提出しようとしたが、その際に署名をしたな」

「わかりました」

本堂と幸村の言葉にひよりと有栖は強く頷く。半年以上も雪ノ下と由比ヶ浜と同じ

クラスで過ごした猛者からのアドバイスだから真摯に受け取るようだ。

つか胃薬の無料支給制度案の申請って……

「では八幡君を少々お借りします。グループについての情報共有をしないとイケないの  
で」

「そういう訳だ。お前らは自由に食っていてくれ。集合時間には間に合うから」

俺は2人と一緒に歩き出すと、途中で龍園と橋本と神室がこつちに向かつて歩いてくる。これによりAクラスとBクラスのリーダーと幹部が揃ったな。

「さて、じゃあ情報共有をしようか。とりあえず小グループを教えてくれ」

俺の言葉を皮切りに小グループの構成を話し合うが……

「ひよりについては今後指揮を取るのはやめさせた方が良くもな、下手したら過労で倒れるかもしれねえ」

龍園がそう口にする。ひよりのグループに由比ヶ浜がいるとわかったからだろう。

「いえ。松下さんと白波さんが積極的に抑えるとやる気でしたので、由比ヶ浜さんについて2人に任せてみます」

まあ松下は由比ヶ浜の脱糞の被害に遭って、白波は理不尽な理由で由比ヶ浜に暴力を振るわれたからな。やる気を出してもおかしくない。

「雪ノ下はどうなの？」

「偉そうな癖に責任者を拒む小物です。色々言っていましたでしたが全部無視します。実力行使に出たら学校に訴えるとDクラスの生徒も含め雪ノ下さん以外の全員と約束しました」

「どうやらDクラスの生徒も躊躇いを持ってないようだ。どれだけやらかしたのだろう。」

「八幡君と龍園君のグループに所属する愚か者2人は綾小路君と山田君が居るので大丈夫でしょう。橋本君のグループに所属した愚か者はどうですか？」

「山内か？普通にウザいな。やれ部屋が狭いだのやれベッドは2段目にするだの文句ばっかだし。けど見るからに雑魚だから普通に抑えられるな」

「だろうな。須藤は兎も角、池と山内は身体能力は低いからな。」

「そーいや責任者はどうしたんだ？俺のグループは念を入れて池に押し付けたけど」

「俺のグループは石崎に任せた。グループのメンバー的に上位を狙えそうだからな」

「俺のグループは比企谷同様に念入りに山内に押し付けた」

「私のグループは西野さんが立候補したので任せましたよ」

「どうやら有栖のグループでは西野が希望したようだが、有栖のグループも悪くないグループだからクラスポイントを狙うのだろう。」

「私の所は由比ヶ浜さんに押し付けようとはしましたが、叫びながら暴れて駄々をこねた

ので、私が引き受けようと思いました。しかしそこで由比ヶ浜さんは「クラスポイントを沢山手に入れるつもりなのか、卑怯者」と喚いて大変でした。ビンタで黙らせた松下さんには感謝です」

うわあ……グループ決めの時点でそれだけ喚いたのかよ。マジで不憫過ぎる……

「けどさ、由比ヶ浜は殴った事を更に騒いだんじゃないの？いつも文句や悪口を言われたら「虐められたっ！」って学校にチクってるし」

神室が尤もな事を口にする。実際軽井沢や松下、佐藤によれば由比ヶ浜はクラスに迷惑をかけてクラスメイトに責められると学校に「虐められた！虐めた奴を退学にしろ！」って訴えているらしい。で、学校が一蹴して由比ヶ浜が更に喚くのはお約束だ。

「騒ぎましたよ。ただ全員が見て見ぬふりをしましたので問題にはなっていません……まあ、更に騒いだので疲れましたけど」

ひよりからは哀愁が漂っている。まだ着いてから特に勉強も運動もしてないのに……不憫過ぎる……

俺はこれから始まる合宿において女子グループは男子グループより数倍過酷なものになる事を確信しながら昼食を食べるのだった。

明日から頑張ろう



## 早朝

「う、うん……」

ふと目を覚ますと辺りはまだ暗かった。壁にかけられた時計を見れば5時。起床時間まで1時間ある。

(余り眠くないし散歩にでも行くか)

寒さに身体を慣らしておく必要もあるからな。

(というか綾小路も居ないし、アイツも散歩か?)

疑問に思いながら俺はベッドから起き上がってジャージに着替えて部屋を出て廊下を歩き、校舎の外に出る。

すると寒風を直に浴びて意識がハッキリする。冬の早朝はやはり寒いな。この寒さも試験の障害になるかもしれない。

俺は寒さに震えながら歩き始める。すると直ぐにグラウンドが見えるが、メチャクチャ広い。山奥の学校だけあって広い土地をふんだんに利用したのだろう。多分試験まではあのグラウンドで走る練習をして、本番では広大な野山を走るのだと思う。

(しかしウチのグループは大丈夫か)

綾小路、時任、小宮、鬼頭あたりは身体能力が高いけど、他は平均、もしくはそれ以下だしな。しっかり対策を「あれ？ハチ君？」……ん？俺をハチ君呼びする人は……

背後から話しかけられたので振り向くと……

「あ、やっぱりハチ君だ。ハチ君も早く起きちゃったから散歩かな？」

背後にいたのはなずな先輩だ。数日前にスパ施設に行つてから俺をハチ君呼びするようになった先輩は楽しそうに笑いながらこつちに寄つてくる。

「おはようございますなずな先輩。その様子ではなずな先輩も散歩ですか？」

「お腹が痛くなっちゃって目が覚めちゃったんだよ」

「身体はお大事に。しかし俺達がこうやって会うのは大丈夫なんですかね？」

昨日坂上先生は女子と会えるのは昼休憩の時のみと言っていたし、ここでなずな先輩と会うのはペナルティの対象かもしれない。

「あ、それは大丈夫。ルールでは「起床してから就寝までの活動時間中、昼食時以外において異性とのやり取りは禁止」って書いてあるけど、つまり起床時間の午前6時から就寝時間の午後11時以外の時間は禁止されてないよ。夜に女子と1日の打ち合わせをする為に密会出来るようにルールを作ったって雅本人が言っていたから」

な、なるほど。それなら午後11時1分から翌朝の午前5時59分までは女子と話し

でもペナルティはないのか。ルールを作った生徒会長がそう言うなら、俺達がこうして話すのは大丈夫だろう。

「だからハチ君。30分くらい一緒に散歩しない？ 私はハチ君と一緒に居たいなく、なんて……」

恥ずかしそうに笑うなずな先輩。その笑顔は凄く可愛らしく、見ているこちらをドキリとさせ、誘いを断り難くしてくる。

あざとさは感じないので狙ってやってないようだが、天然でコレならある意味あざといよりタチが悪いな……

「わかりました。同伴します」

「うん！ ありがとうハチ君！」

なずな先輩は嬉しそうに頷く。見ているだけで癒されるな。

「あつ、それと……おはようハチ君」

ちゅっ

と、ここでなずな先輩はいきなり恥ずかしそうにキスをしてくる。それだけで俺の顔に熱が溜まり、恥ずかしい気持ちが生まれる。

エロいキスを得意とする有栖、甘いキスを得意とするひよりに対して、なずな先輩のキスは優しさに満ちている。みんな違ってみんな良い。

「い、いきなりごめんね。ハチ君にキスしたくなつてつい……」

そんな事を言いながら謝ってくるが、特に怒つてない。寧ろ俺が場合によつてはひより達に怒られそうだ。

「お氣になさらず。それよりも行きましようか」

「……うん」

なずな先輩は俺の手を握つてくるので握り返して歩き出す。まだ日差しは殆ど出ていないが、多少の灯りがあるので転ぶような事にはならないだろう。

「ハチ君の手、温かいな」

「なずな先輩の手は柔らかくて気持ち良いです」

女子の手はスベスベして握ると気持ち良いんだよな。

そんな風に考えながら校舎に沿つて朝食を作る炊事場がある方に向かうと……

「ん？アレって綾小路君と軽井沢さん？」

炊事場の方から綾小路と軽井沢が出てくる。軽井沢は遠くから見ても真つ赤で息を荒げている。

「んなつ！な、何で2人がここに?！」

軽井沢達も俺に気づいて、軽井沢は更に真つ赤になつて口をパクパクしている。コイツら……

「お前らまさか……やったのか？」

「ああ。青姦つてものをA Vを見てから一度やってみたくてな」

「マジか……」

綾小路は俺の質問に躊躇いなく頷く。なずな先輩は真つ赤になって口をパクパクしているが、合宿所でやるとか上級者過ぎるだろ。

「比企谷も朝比奈先輩を抱くのか？ だったら炊事場の奥にある黒い屋根の建物の奥がオススメだぞ。今の時間帯には風が直撃しないしな」

「待てやコラ！ マジなアドバイスはやめろ！」

「というかそこはあたし達が使った場所だから！ エッチするなら赤い屋根の方を使って  
！」

「しねーよー！」

というか綾小路の奴、自分が行為に耽った場所を勧めるなんて羞恥心無さ過ぎだろ！  
「どつちから誘ったのは……言うまでもないな」

綾小路以外あり得ない。

「オレだ。明日も抱く予定だが見にくるか？ 第三者に見られて恥じらう恵も「見せるなああああああああつ！」痛い」

ぶっ飛んだ発言をする綾小路の顎にアップパーをする軽井沢。綾小路の自業自得であ

るが全く痛くなさそうだ。須藤の時も思ったが、綾小路のフィジカルは強過ぎだろ？

「良い？絶つつつつつつつ対に来ないでね！」

「い、い、行かないよ！」

「行かねーよ。そんなマニアックな趣味はねえよ。つか綾小路は自分の裸や彼女の裸を第三者に見せても気にしないのか？」

「特に気にしないな」

「アンタは少しは気にしろ！」

再度軽井沢のアッパーが綾小路の顎にモロに直撃するが、綾小路は全く気にしていない。  
い。

「やれやれ。さつきはあんなにオレを求めてきたのに酷い扱いだ」

「うっさい！早く引き上げるわよ！2人もエッチするなら黒い屋根の建物は使わないでね！」

「必要ならこれを使うと良い」

綾小路は俺にゴムを数個渡してから軽井沢と一緒に去っていく。アイツマジでぶっ飛ばしたい。

「え、えーつと……ハチ君は私とエッチしたいの？」

なずな先輩は真っ赤になってそんな質問をしてくる。

「なずな先輩。綾小路の馬鹿なノリに無理に合わせて答え難い質問をしないでください」

そりや興味がないと言えば嘘になる。なずな先輩のキスも胸の柔らかさも知っている俺からしたら更に先を知りたい気持ちがないわけじゃない。

しかし馬鹿正直に変態扱いされるのは避けたいからな話を流す選択を取る。

しかし……

「……誤魔化さないで。したいの？したくないの？」

なずな先輩は恥ずかしそうに問い詰めてくる。え？これは答えないとダメ系か？

「……まあ、興味がないって言ったら嘘になります」

男だからな。

「そっか……ねえハチ君」

「なんすか？」

なずな先輩は恥ずかしそうにしながらも俺を見上げて……

「ハチ君が私とエッチしたいなら……いつかしてあげるから」

むにゅ

ちゅっ

爆弾投下をしてから抱きつく形で豊満な胸を押し付けて、先程と同じように唇にキスをしてきたのだった。

……

……

……

……

キーンコーンコーンコーン

6時のチャイムが鳴ると俺と綾小路以外のメンバーが呻きながら身体を起こす。全員が寒さに震えている。

「おはよう比企谷。今日から頑張……ん？」

俺の上のベッドに寝ていた時任はベッドから降りながら俺に挨拶をするが、ジーツと見てくる。

「どうした時任？」

「いや、顔が真っ赤だが、風邪とかじゃないよな？」

まだ薄暗いのによく見えたな。

「済まん。さっきまでエロい夢を見たからかもしれない。体調は悪くないから安心しろ。とりあえず洗顔しに行くぞ」

「あつ、お、おう、そうだな」

俺はベッドから降りて顔を見せないように注意しながら水飲み場に向かう。

エロい夢ではなくエロい事をしたなんて言えないからな。

俺は水飲み場に到着すると、俺以上にエロい事をした綾小路の横で顔を洗い始めるのだった。

ちなみに綾小路に「ゴムは使ったのか？」と聞かれて肘打ちをしてしまったが、俺は悪くないだろう。

## 清掃と座禅

起きてから指定された教室に向かうと2年生と3年生がいたので一礼して一列に並ぶ。

そして数分待っていると真嶋先生が入ってくる。

「1年Aクラス担任の真嶋だ。これより点呼を取るが、終わり次第指定された区画の掃除をして貰う。これは毎朝の日課で、雨が降った場合には校舎の清掃のみだが、清掃時間が短くなるわけではない。尚、今日からの授業では外部から指導員も来ているので、丁寧な接し方をするように」

そんな指示を受けた俺達は点呼を取られてから割り当てられた箇所へと向かう。

俺のグループの炊事場の近くだが、先程なずな先輩からされたキスや綾小路と軽井沢による情事を嫌でも想像してしまうのが悩みどころだ。

そう思いながらも落ち葉を箒で掃いていると……

『もー、なんで寒い時間帯にこんな場所掃除しないといけないんだし！ほんつとうキモいんだから！』

炊事場近くにあるゴミ捨て場の方から叫び声が聞こえてきたので横を見ると由比ヶ浜が箒で地面をバシバシ叩いているが、お前は備品を大切にしろや。近くで掃除している幸村と本堂がメチャクチャ嫌な表情を浮かべて、綾小路は不快そうに舌打ちをする。そんな由比ヶ浜に対してひより達は冷たい眼差しを向けながら無言で掃除をしている。無言でだ。由比ヶ浜以外は一言も喋ってない。どうやら由比ヶ浜に付き合うのは精神力と時間の無駄と判断したのだろう。

正しい判断だ、由比ヶ浜はこつちが幾ら正論を言つても自身に都合が悪かったら、それは間違っているとばかりに発言する女だからな。

『もうやってらんない！ちよつとみーちゃん、私の分もやって！』

由比ヶ浜はここで気弱そうな小柄なツインテール女子にそんな事を言うが理不尽過ぎるな。

『嫌です。そもそも1人でもサボったらペナルティがあるかもしれないんで由比ヶ浜さんがサボらないでください』

ツインテール女子は強くない口調であるがハッキリ拒否する。気弱そうだがハッキリと拒否するあたり由比ヶ浜の事を嫌っているのがよくわかる。

そんなツインテール女子に対して由比ヶ浜は遠目でわかるくらい真つ赤になって詰りめ寄ろうとするが…

『ぶふえっ！』

『あ、ごめんなさい由比ヶ浜さん』

途中で白波が足を引つ掛けて由比ヶ浜を転ばせる。大人しそうな白波が足の引つ掛け……体育祭直後に振るわれた暴力に対する仕返しか？

『はあ?!今の明らかにわざとじゃん!ふぎけんなぶふっ!』

『あ、ごめん由比ヶ浜さん。足が引つ掛かつちやったかな?』

由比ヶ浜が起きあがりながら怒鳴りつつ、白波に詰め寄ろうとするが、今度は松下が足を引つ掛けて由比ヶ浜を転ばせる。お前ら、息ピッタリだな……

『このっ!いい加減に『何をしているの由比ヶ浜さん!今は掃除中よ!』はあっ!』

ここで教員が割つて入ってくる……あ、松下と白波がこっそりハイタッチをしている。

『さつきから騒がしいから来てみれば、真剣に掃除をしなさい!』

『はあ?!あたしに注意する前にそっちの2人に注意してよ!馬鹿じゃないの?!あたしを転ばせたんだよ!退学にしてよ!』

教師の注意に由比ヶ浜はタメ口で反論するが教師を馬鹿呼びするとは礼儀知らずにも程があるし、転ばせただけで退学にしろってどんだけ理不尽な処罰だよ?

『松下さん、白波さん。由比ヶ浜さんを転ばせたの?』

『いえ。勝手に転んできました』

教師の質問に松下と白波は真顔で嘘を吐く。

『勝手に転んできました』

『松下さんも白波さんも足を引つ掛けるような事はしてません』

『王さんに自分の分の掃除を強要して、王さんに断われて詰め寄ろうとした際に転んだだけです』

『自業自得でしょ』

同じグループの女子も転ばせているのを見たはずなのに全員嘘を吐く。

『嘘つくなし！マジキモい！人を転ばせて嘘をついたり、見たのに知らんぷりなんて人として恥ずかしくないの?!ほんつとうにウザい！今直ぐ退学してポイントを慰謝料としてあたしに渡すし!』

由比ヶ浜は地団駄を踏み怒りを露わにしながらそんな要求をする。

『はいはい。わかったから掃除を続けなさい。由比ヶ浜さんは足元に気をつけなさい』

教師は面倒くさそうにそう口にするが、明らかに由比ヶ浜に対して雑な態度だ。

『はあ?!何であたしが悪いように言ってるんだし?!ふざけんなし賞味期限切れ!』

『何ですって?!教師に対して悪い口ね!賞味期限切れは星之宮先生よ!』

いやアンタも悪い口だな。今のを聞かれたら星之宮先生がブチ切れて真嶋先生がボ

ロカスになるぞ。

『こほんつ、とにかく由比ヶ浜さんは少しは真面目に過ごさなさい。今回の結果次第では貴女も矯正プログラムの参加になるから』

その言葉に由比ヶ浜はギャーギャー喚くが、もう今の時点でプログラムの参加は十中八九決まっただろう。初日から我儘を言つて、教師に対してタメ口だし。

「……Dクラスはアレが日常なのか？」

Aクラスの鬼頭が近くにいる綾小路に質問すると綾小路は頷く。

「ああ。由比ヶ浜と池と山内が些細な事で喚いて雪ノ下が他の生徒を見下して、須藤が直ぐにキレるのがDクラスの特徴だな」

「その度に綾小路が殺意をぶつけて黙らせてくれるからマジで助かるわ」

「綾小路が居なかつたら俺達はノイローゼになっていたな。櫛田ですら見捨てるくらいだからな」

「屑揃いじゃねえか。心底同情するぞ」

「つか櫛田ちゃんが見捨てるって相当だろ」

「っ！」

時任と小宮が池に蔑んだ眼差しを向けると、池は居心地悪そうに背を向けて掃除をするが、盗撮した人間の人權の価値は相当低いようだ。

まあ連中の決行した日にはウチのクラスの女子もかなり居たから当然だろう。

そう思いながらも俺は由比ヶ浜の叫び声を強制的にBGMにさせられながら掃除を済ませるのだった。

掃除が終わると道場のような畳一面の和室に案内される。掃除の後に座禅をやるが、ここでやるようだ。

案内された場所に畳の縁を踏まないように注意しながら所定の位置に立つ。

「今日から諸君らには毎日、朝と夕方にここで座禅を行ってもらおう」

そう言うのは見覚えのない男性。多分外部から招いた講師だろう。

「座禅とは初めてでござるなあ」

と、ここで以前盗撮トリオにラジコンを提供したDクラスの外村が近くでそう呟くが、男性は険しい表情で外村に近寄る。

「な、なんでござろうか？」

外村が尋ねると男性は全身からは圧を生み出して外村にぶつける。

「お前のその口調は生まれつきか？それとも事情があるのか？」

「そ、そういうわけではござらんが……」

「そうか。どんなつもりで使っているのかは知らないが、ここではそれも減点対象だ」

「な、なんですと？」

外村は目を見開いているが何故そこで信じられないって表情を浮かべるのだろうか？

「初対面の相手にそんなふざけた口調で話しかけられたら相手がどう思う？そこから説明しないといけないのか？」

「そりやそうだ。外村の口調は材木座のものとそっくりだが社会でそんな言葉遣いで話せばあらゆる相手から信用を失うだろう。」

「良いか？自分という存在を示すために相手のことを考えない態度や言葉を使うと人間は少くない」

ウチの学校にもいるな。龍園とか由比ヶ浜とき雪ノ下とか他にもまだまだいる。

「社会の中で個性を出すなどは言わない。しかし相手を思いやる気持ちは絶対に忘れてはならない。ここではそういったメンタルに影響を及ぼす授業を行う。その一つが座禪であり、言葉や動作を止めて集団に溶け込む。相手を配慮し、最後に考えるのだ。自

分はどんな人間か、何をすべきなのかをな」

男性は最後に外村に対して一瞥してから元の場所に戻る。言っている事は正論だがこの学校の生徒には無用な授業になる可能性もある。一部の生徒は唯我独尊だからな。そして男性は説明を始める。

この座禅堂では立っている時も歩いている時も握り拳を作り、反対の手で包み、鳩尾の高さまで持つて行かないといけない。これを叉手という姿勢というらしいが、これは絶対のようだ。

そして座禅とは瞑想の一つに過ぎず、頭を真っ白にして行うものではなく、目を閉じイメージをすることが重要らしい。

「胡座を組んだ後にそれぞれの足を太ももに置いてもらう。試験ではこの結跏趺坐も結果に影響するので、出来るようになっておくように」

言われて男性を真似てやってみるが……

(い、痛い……)

一応出来るがかなり痛い。周りを見れば苦悶そうな表情を浮かべているのが大半だ。

唯一の例外は綾小路と少し離れた場所で座禅を組んでいる高円寺のみだ。2人はいつも通りの無表情と勝ち誇った笑みを浮かべているが、こういった所作でも規格外のように羨ましいな。

出来ない生徒は片足だけ組む半跏趺坐をやっているが、本番では両足を組まないといけないので少しでも痛みを和らげるやり方を模索しないといけない。

俺は痛みに対して数十分前になずな先輩からされたキスを思い出して、何とか悶えずに朝の座禅を済ますことが出来たのだった。

## 朝食の時間

座禅を済ませると朝食の時間だ。昨日昼食と夕飯を食べた食堂ではなく、外にある食事スペースに案内される……そう、綾小路と軽井沢が夜の営みをした炊事場だ。

思わず綾小路を見れば無表情ながら僅かに口元を緩ましている。ヤベエ、殴りたい。「今日は学校側から提供するが、明日から晴れの場合は全てグループ内で作ってもらったことになるので、人数や分担方法は全体で話し合っただけで決めるように」

真嶋先生が注意しながらプリントを出してくる。中には朝食の作り方が書かれているが……

「これだけかよ……」

隣に座る小宮が嫌そうに呟く。運動部に所属する小宮からしたら物足りないのだから。

しかし文句を言うつもりはない。実際メニューを見てみると、一汁三菜を基本とした内容で、食べ盛りの高校生からしたら物足りない。実際普段俺が食べているひよりの朝食はこれに1、2品分多いし……待てよ。

「真嶋先生。「朝食のおかずを増やす権利」はプライベートポイントで買う事は出来ませんか?」

俺はある事に気づき真嶋先生に質問する。俺の発言に大グループのメンバーは一斉に見てくる。南雲会長なんか興味深そうに見てるし。

「結論を言えば明日以降は可能だ。おかず一品の値段は1回の朝食につき、2000ポイントだ」

「高えー!」

そんな声が上がってくる。朝食は明日から最終日まで7回あるので残りの朝食におかずを1品追加した場合は14000ポイントとかなり高いが……

「じゃあ残りの朝食ごとに1品追加してください。14000ポイントは試験後に払えば良いですか?」

「即決?!良いのか?」

「いいんだよ。今回の試験や実習は普段とは違う環境でやるが、重要なのは普段と同じコンディションを維持する事だ。その為には普段と同じくらいの飯を取るのも重要だ」

学校も最低限行動に支障が出ないくらいの量の朝食を出しているが、普段より量が少ないと万全の状態になれるかわからない。

「なるほどな……俺も残りの朝食ごとに1品追加で」

「俺もお願ひします!」

「俺も追加で!」

ここでAクラスの鬼頭も真嶋先生に要求して、上級生を含めて他のメンバーも追加の要求する。

結果的にウチのグループでは綾小路と幸村と池以外は追加の要求をした。ただしDクラスの本堂はポイントが少ないからと最終日を含めて3日分しか追加していない。

「お前らは追加しないのか?」

Cクラスの渡辺が綾小路達に質問すると……

「朝食分のポイントは合宿後に恵と楓花さんとのデートの資金にしたい」

「俺は普段からこのくらいの量だから追加したら普段通りじゃなくなる」

綾小路と幸村がそう返し、池は媚びるような眼差しを向けてくる。

「俺はプライベートポイントの使用が認められてないんだよ……な、なあ。助けると思つて奢つてくれよ」

「断る」

「嫌に決まつてんだろ」

「メリットがない」

「綾小路や比企谷がコンディションが良くないのは問題だが、お前は絶好調でも絶不調

でも雑魚だろ」

「つか赤点常習犯の盗撮野郎が絶好調でも綾小路の1割以下だろ？」

「盗撮した自身が悪い」

「……知るか」

「死ね」

俺が断ると他のメンバーも一齐に拒否するが、最後の綾小路に至っては悪意全開の悪口だし。

「何だよっ！そこまで言わなくていいだろっ！人として恥ずかしくないのか?！」

「盗撮を青春と言うお前にだけは言われたくない」

「屑じゃねえか」

池の叫びを綾小路が一蹴するが思わず同意してしまう。犯罪を青春って考える屑と他人に悪口を言う人、どっちの方が人として恥ずかしいなんて比べるまでもない。

「なんっ！何だよっ！お前らこそ二股かけて人として恥ずかしくないのかよ?！」

「全然。オレは複数の女子と恋仲になっても寧ろ誇りに思うな」

「お前と一緒にするな。確かに俺達の行動は倫理的には褒められたものじゃないが、犯罪的にアウトなお前に比べたら健全だ」

『誇りに思うな！健全でもない！』

綾小路と俺の言葉にグループのメンバーが一斉にツツコミを入れる。解せぬ。

「まあ誇り云々は兎も角、楓花と恋仲になる際はちゃんと恵から了承を得てからにする。当事者が了承すれば問題ない。少なくとも比企谷の言うように当事者が了承していない撮影をしたお前と一緒にするな。これ以上喚くな」

綾小路の声が少しずつ冷たくなっている。そろそろ殺意をぶつけそうだな。

「っ……ちくしょう……」

池は悔しそうにしながら黙り込む。

「なあ綾小路ってしよっちゅう殺意をばら撒いているのか？」

「殆ど毎日だな。由比ヶ浜は毎日喚くし」

「黙らせてくれるのはありがたいが、由比ヶ浜はいい加減に学習して欲しい。以前職員室の近くで茶柱先生がストレスで胃に穴が出来たって話も聞いたぞ」

幸村の言葉にAクラスからCクラスの男子全員が同情に満ちた眼差しを向ける。実際にDクラスの隣に位置する俺達の教室にも由比ヶ浜の喚き声が聞こえてくるが、Dクラスからはノイローゼの原因になりそうだな。

内心同情の気持ちに満ちながらも朝食を食べて食器を指定された場所に片付けようとする。と南雲会長と3年の石倉先輩がこっちにやってくる。

「明日からの朝食の用意だが各学年が2回ずつ、1回ごとに交代にしたいが大丈夫か？」

「了解しましたじゃあ明日は俺達1年がやります」

南雲会長の確認に俺がそう返す。6日ある内の2日ずつなら平等なので文句はない。「わかった。じゃあ次の日は2年、その次は3年……つて感じで行く。南雲もそれで良いか?」

「了解つす」

2人は頷いて片付けの準備に入るので俺達も続く。

「大グループ全員の朝食となれば……何時に起きれば良いんだ?」

本堂が質問するが40人近くの飯を作るとなれば……

「念の為に2時間前……4時くらいだな」

「マジか……俺、起きれるかわからねえよ」

「というか寒そうだな……」

「だよな。眠い中で作業とかミスしそうだし」

俺が4時くらいに起きるべきと言うとグループから不満が出てくるので、手を叩く。

「落ち着け。面倒に思う気持ちはわからんでもないでも愚痴つてもやるべき事は変わらない。重要なのはやるべき事を出来るようにする事だ」

試験の採点基準にも影響があるかもしれないし、何より朝食を作れずコンディションを発揮出来なかつたり、上級生から敵意を向けられるのは避けるべきだ。

「そこで提案だ。風呂は8時から9時の時間で、消灯時間は10時だ。しかし朝食を作る時間は8時半に風呂を出て9時に就寝しないか？」

そうすれば睡眠時間は7時間と充分だからな。

「……賛成だ」

「良いんじゃない？ どうせ遊ぶものなんかトランプとかぐらいで退屈だろうし」

「慣れない環境だし睡眠時間は重要だしな」

鬼頭が真つ先に頷き、それを皮切りに他の面々も賛成してくれる。これなら寒い以外の問題も解決出来るだろう。

そう思いながらも俺は片付けを済ませて、午前の実習が行われる場所に向かうのだった。

同時刻……

「……と、なると朝食を作る時間は4時頃からですね」

「えく?! そんな早く起きたくない! あたしは寝るから!」

女子が朝食を食べる場所にて、ひよりがそう呟くと由比ヶ浜は毎度のように喚き、同じグループのみならず上級生の女子も顔に不快の感情を宿す。

そんな中、ひよりは嫌そうにしながら口を開く。

「構いません。以前に八幡君から「由比ヶ浜の作る飯は最悪で、あらゆるものを食べる雑食の豚も嘔吐する」と聞いていますので休んでください」

「はあ?! 何言ってるしヒツキーは? マジキモい! 本当に「煩いから黙って」ぶっ!」  
ひよりの言葉に由比ヶ浜はキレるが、そんな中松下に転ばされる。

「あのさ由比ヶ浜さん。起きたくない貴女をひよりさんは氣遣ったのに、キレないでくれない? あと、普段から失禁してる由比ヶ浜さんの方がキモいし、由比ヶ浜さんの存在が吐き気を催すから起きないでくれる?」

松下の容赦ない罵倒が由比ヶ浜に放たれる。2学期に脱糞の被害を受けてから松下は由比ヶ浜に対して一切の容赦をしなくなった。

「行く。午前の授業に間に合わなかったら減点かもしれないし」

松下は由比ヶ浜に蔑んだ眼差しを向けてから食器を片付けに向かい、他のメンバーもそれに続くが、上級生も含めて誰一人由比ヶ浜を氣遣う言葉を口にしなかった。

「何で……何であたしがこんな目に遭わないといけないんだし……あたしは何も悪くな  
いのに……」

## 初日の実習

初日の実習が始まった。

まあ初日だけあってどの実習も合宿中の流れに関する説明が大半であったので初日から遅れている奴はいないだろう……由比ヶ浜あたりはわからんが。

そんな風に思いながら午後の授業の説明を聞きながら窓から外を見ると、女子グループがグラウンドを走っている。俺達は次の時間に持久走を行うが有雨だ。

グラウンドを見直すと走っているメンバーの中に軽井沢がいるので有栖のグループだろう。有栖は杖無しじゃ歩けないことから別の場所で違う実習をやっているのだろうが……

(雪ノ下、相変わらず体力が無いようだな)

11人の女子は割と固まっているが、雪ノ下だけは他の11人と違って半周以上離れているのだった。

実際は1. 5周以上離れているのだが……

「はあ……はあ……あと一周……」

「そう。あと一周だから頑張ろ」

Cクラスの小橋夢が疲れながらそう口にする。グループ内1の運動能力のDクラスの小野寺かや乃が檄を飛ばす。

「ごめんなさい。運動音痴のメンバーに気を遣わなかったら、ゴールしてる人もいるし」  
「良いから良いから。謝罪は終わってから。走ってる最中に話しても体力の無駄無駄」

軽井沢の謝罪にBクラスの木下美乃梨が笑いながら手を振る。陸上部所属の木下な

らとつくの昔にゴールしている実力であるが、彼女はチームワークを優先した。

「さ、行くよ皆！」

『うんっ！』

小野寺が元氣よくそう口にすると有栖と雪ノ下以外のグループメンバーは返事をし、足を早める。グループ一消極的な山村美紀も返事はしていないが、僅かに速度を速める。

小野寺や木下は持久走が始まってから運動能力が低い生徒に氣遣いをしていたのでグループメンバーからの信用は厚かった。

一方の雪ノ下は「何故私が悪く足の遅い人に合わせないといけないの？」と暴言を吐き、周りに一切氣遣いを見せずにマイペースで走った。

しかし体力が致命的に少なく、その事実から逃げ続けていた雪ノ下はペース配分を手く出来ず、徐々に速度を落とし、今では普通に歩くより遅くなっていた。

結果的に雪ノ下以外のグループは足の遅い人のペースに合わせながらも、速度を殆ど遅めることなく走り、ラスト一周の時点で雪ノ下相手に1.6〜1.7周ぐらい差をつけていた。施設の校庭は山奥だから広く、グラウンドは1周400メートルであるが、つまりグループメンバーは雪ノ下と600メートル以上差をつけている。

そしてラスト一周で解放される事もあり、メンバーの士氣は上がり少しであるがペー

スを上げる。

一方の雪ノ下は背後から他のグループメンバーが近づくのを見て屈辱の感情を抱きながらも歩くが、既に体力切れの雪ノ下は足を速める事は出来ず……

「くっ……！」

そのまま呆気なく抜かされてしまう。これで雪ノ下は2周差をつけられた事になる。雪ノ下が屈辱の気持ちを宿す中、他のメンバーは最後のラストランを行い……ゴールした。

「よしー！皆頑張ったー！」

体力が少ない軽井沢や小橋が倒れ込みそうになるが小野寺が2人を支えながら励ます。

「地面にお尻をつけたい気持ちはあるだろうけど、次の授業の教室に行つてからね。疲れてる際に座つたら立つのが大変だから」

木下が疲労困憊のメンバーに座らないように要請すると軽井沢が小野寺から離れて頷く。

「そうだね……よしーあとちよつと頑張るわよー！」

『よしー！』

軽井沢の言葉にグループメンバーは頷いて校舎に向かう。持久走が終わった者から

次の実習の教室に行く許可が降りるので軽井沢達は問題なく校舎に向かう。

後2周グラウンドを走らないといけない雪ノ下に対しては全員一瞥すらしない。

責任者の西野とAクラスリーダーの有栖が昨日の就寝前に「雪ノ下については罵倒されても反論しないで無視しろ」と命じた。そう命じた理由はグループ結成直後から雪ノ下は責任者の西野とAクラスリーダーの有栖をこき下ろしたからだ。

それに対して反論するグループメンバーは1人もいなかった。雪ノ下と同じDクラスの軽井沢との小野寺は言うに及ばず、他のクラスのメンバーも昨日雪ノ下から散々見下された発言をされた事、何より学年どころか学校1狂っている由比ヶ浜の友人である事から反対しなかった。

閑話休題……

軽井沢達は次の授業が行われる教室に向かうと、そこには有栖がいてノートをとっていた。

「皆さんお疲れ様でした」

「坂柳さんもお疲れ様。私達より筆記が多いから大変でしょ」

「いえ。私は勉強するのは嫌いじゃないですから」

有栖は杖が無いと歩けない障害持ちである為、運動関係の課題は全て免除されている

が、その代わりに筆記系の試験の配点や授業時間が多くなっている。

「それより皆さんは息を整えてください。授業は疲れている状態で聞いても辛いですから。わからないところがあつたら夕食後に教えますのでわからない箇所にマーキングをしておいてください」

『はい』

軽井沢達は一斉に頷いて席に座り授業の支度をする。そこには和やかな空気が生まれている。

またグループが結成されてから24時間と少ししか経過していないが、教室にいる2人のチームワークは最高と言つて良いものであつた。

教室にいる12人のチームワークは最高だつた。

キーンコンカンコン

授業終了のチャイムが鳴る。グラウンドにいる指導者はまだ1周残している雪ノ下

に近寄る。

「チャイムが鳴ったから次の教室に行くように。ただし他の皆が出来ている事から1週の遅れはグループ全体の減点とする」

「っ！」

指導者の言葉に雪ノ下は歯軋りをするが、指導者は雪ノ下に対して一瞥する事なく背を向けて、それがまた雪ノ下の屈辱感を増加させる。自分以外はお荷物だと思っていたが、明確な減点を食らったのは自身だからだ。

雪ノ下は苛立ちを宿しながらも校舎に向かうが溜まった疲れの所為で走ることが出来ずにゆったりとした足取りで向かい、指定された教室に向かう中だった。

「良いか？多少時間がかかってもペースを崩すな。そうなるとさつき不様を晒していた雪ノ下みたいになるぞ」

「俺は運動神経は高くないが、速度はキープするように頑張る。雪ノ下みたいになるのはゴメンだからな」

「安心しろ幸村。オレが運動能力が高くないメンバーのペースをマネジメントする。よって雪ノ下のように無様を晒すことはない」

そんな会話が聞こえてきたので見れば、怨敵である八幡と綾小路のグループが自分を

こき下ろしながら近くを歩いているのが見える。しかし彼らは雪ノ下自身を見てないので気づいていない可能性が高い。

それでもこき下ろすという事は第三者から見て自身は相当醜かったようで、雪ノ下の怒りが増す。

(ふざけないで……私や由比ヶ浜さんを卑怯な手で使つて貶めたゾンビに学校に賄賂を送つて満点を取つた屑の分際で……！)

雪ノ下は2人に殺意を向ける。八幡が入学当初から自分より上のクラスに居たのも気に食わないし、ペーパーシャツフルで綾小路が勝つたのは実力ではなく学校に賄賂を送つたからだと雪ノ下は本気で思っている。

(見てなさい……いつか絶対に私を怒らせた事を後悔させてみせるわ！)

雪ノ下は怒りを露わにしながらそう決意するのだった。

それから雪ノ下は次の授業で使う教室に向かうが到着する少し前にチャイムが鳴り、指導者からは遅刻による減点を告げられ、グループメンバーからはゴミを見るような眼差しを向けられ、より怒りを宿すのだった。

## 実習後

「痛え……やっぱり明日は片足だけで座禅をやるか」

飯前の座禅を済ませた俺は足の痛みを感じながら立ち上がりながら食堂に向かう。持久走の後の座禅はキツ過ぎるな……

「無理してするより良いだろう。ところで比企谷」

「何だよ？」

隣を歩く綾小路が無表情でなく真剣な表情で見ているので俺も意識を集中して綾小路を見ると……

「比企谷は坂柳や椎名相手に中出しをした事があるか？」

「ぶふおっ！」

予想外の質問に噴き出してしまふ。真剣な表情で何を言っただコイツは?!

「お前はいきなりどうした?！」

「いや。授業中に退屈な時に恵に中出しする場面をイメージしてたから」

「真面目に授業を受けろや」

「問題ない。半分適当に聞きながらでも満点を取れる」

綾小路は淡々と口にするが、有栖の作った超難問を全て正解した事を考えると強い説得力があるな。

「で？中出しの経験はあるのか？」

そこに戻るのか……

「ない。興味がないわけじゃないがまだ有栖の身体がセックスに慣れ切った訳じゃないしな。ひよりについても平等に扱うから当分はしないな」

するにしてもピルや安全日など万全を期してからだ。

「そうか。オレはこの合宿が終わったら恵に中出しする予定なんだ」

さ、最低な死亡フラグだ。「俺、〇〇が終わったら△△するんだ」ってのは漫画ではよくあるが、「俺、合宿が終わったら恵に中出しするんだ」なんて死亡フラグは初めて聞くわ。

「お前……随分と欲望に忠実だな。1学期はそういう事に全く興味なさそうだったのに」

今の綾小路は女の話をすると目の色が変わるし、俺の存在が影響したのかもしれないが変わり過ぎだ。

「否定はしない。入学直後のオレは感情を持たない虚無な存在だった」

そんな事を淡々と口にする。普通なら厨二病wwwwって笑えるが、コイツの場合は本当にそうだと思えてしまう。

「感情を持たないって……洗脳でも受けたか？それとも隔離された場所で感情を不要とする暗殺者になるべく育てられたか？」

「後者に近いな。嘘だと思うなら坂柳に聞いてみる。坂柳の父親、理事長と少し話したがアイツは幼少期のオレを見ているらしい」

え？軽い冗談で言ったがマジの話？確かに有栖に確認してみろと言ってきたり、以前に須藤の肩を躊躇いなく粉砕していたし信憑性はあるが……

「話を戻すがオレは感情が無くて1学期の頃は堀北の上から目線の物言いとかも特に気にしなかったが……由比ヶ浜の存在が浮上した」

ここで由比ヶ浜の存在が出るのかよ。

「由比ヶ浜の言動は感情のないオレの中に黒いモヤを生み出して、それが徐々に大きくなって2学期の中頃、モヤが塊となってオレ自身と一体化したように感じた。今思えばそれはモヤが不快という感情となってオレの中で定着したんだと思う」

い、嫌な展開だな。つか最初に生まれた感情が不快って……

「それによって俺は感情というものは不要って気持ちが強くなった」

そりやそうだ。最初にプラスの感情が手に入ったならまだしも、最初に手に入れた感情が不快なら感情そのものを疎んでもおかしくない。

「そんな中、比企谷が椎名や坂柳とイチャイチャしているのを見て、女から快楽を得られるのか……と考えて恵相手に色々してみたら、徐々に胸中にピンク色の光が生まれ、やがてそれが性欲という塊になってオレの中で一体化した」

なるほどな。つまり綾小路の中にある欲は性欲しかないようだ。普通の人間なら食欲とか物欲、睡眠欲など色々あるが、綾小路はまだ性欲しかないので性欲に忠実なのだろう。つまり他の欲を知れば性欲が弱くなる可能性はある。

「そして恵を抱いた事で益々強くなったのを自覚した。複数の女子と付き合う事は学校のルー尔的にセーフなのは比企谷達からわかっているし、俺は楓花さんも抱きたいし、他の可愛い女子も抱きたい」

俺も大概だが、コイツもいつか刺されそうだな……

「後、俺は悦楽、嗜虐を知りたい」

「いきなりだな。龍園みたいになりたいのか?」

「なりないんじゃない。知りたいんだ。龍園は敵対する相手に身体の暴力と精神の暴力を巧みに操り、快感を得るだろう?」

「まあそうだな」

「俺は須藤の肩を壊しても、馬鹿共に何回も殺意を向けて黙らせても楽しい気分にはならない。これは何故なのだろうか？」

「そりゃ怒りや不快の気持ちから暴力を振るってる、謂わば制裁に近いからだろう。嗜虐や悦楽を知りたいなら純粹な虐めを繰り返すつもりじゃないと無理だろう」

「純粹な虐め……堀北にやってみるか」

コイツ平然と屑な事を言っているな。どんだけ感情について知りたがっているんだよ……

「お前なあ……」

「良いんだよ。1学期は感情が無かったからまだしも、2学期になってからはAクラスに上がるために協力しろって口煩くてな。昨日も協力しろって煩かったし」

綾小路は淡々としているが、場合によっては堀北をボコして性奴隷にしそうだ。何せAVの影響から青姦するくらいだし。

そう思いながら俺達は食堂に向かっていると……

『嘘つくなし！絶対にあたしを攻撃する為にわざとぶつかったに決まってるじゃん！』

『だから決めつけるのはやめてくれないかな?!同じ大グループのメンバーを攻撃する理由なんかないから!』

前方から由比ヶ浜となずな先輩の叫び声が聞こえてくる。アイツはまた何かやらか

したのか？

そう思いながら俺は人混みを掻き分けながら前に出ると由比ヶ浜となずな先輩が睨み合っている。しかもなずな先輩は膝をついて痛そうにしている。

同じグループのひより達は居ない。多分実習後も由比ヶ浜と居たくないから別行動をしているのだろう。

「なずな先輩。大丈夫ですか？」

俺が話しかけるとなずな先輩は顔に喜色を作り、由比ヶ浜は俺を睨んでくる。

「あつーハチ君ーちよつとトラブルに巻き込まれ「ヒツキーは関係ないじゃん！この人が悪いんだから引つ込んでよ！マジキモい！」ちよつと！ハチ君を悪く言わないでよ！ハチ君はキモくない！ハチ君は優しいしカッコいいから！」

いつものようにギヤーギヤー喚く由比ヶ浜になずな先輩は怒るが、怒る所はそこですか？結構恥ずかしいんですけど。

「事実を言つて何が悪いんだし！ヒツキーはキモいから！ヒツキーもハチ君呼びされてデレデレすんなし！」

ウゼエ……脱糞野郎にキモいつて言われるのは凄い屈辱なんだけど。綾小路が近くにいるし脱糞させるように頼む……いや、食堂前だしダメだ。衛生的に酷過ぎる。

「で？なずな先輩は何があつたんですか？」

「あ、うん。曲がり角でぶつかって謝っただけど、怪我させるためにわざとぶつかったって言いがかりを「言い訳すんなし！わざとに決まってるんだから土下座して謝ってよ！」っ！」

由比ヶ浜は逆恨みとばかりに持つてる鞆をなずな先輩に振るおうとするので俺はなずな先輩の前に立って、由比ヶ浜の鞆に蹴りを放つ。すると鞆は由比ヶ浜の顔面に激突する。

「痛っ！暴力なんて最低！2人まとめて訴えてやる！」

由比ヶ浜はそう言って去っていくが、周りの皆の嫌そうな表情を見る限り口裏を合わせて俺を庇ってくれそうだ。

まああの馬鹿はどうでも良い。今はなずな先輩だ。

「なずな先輩。もしかして足を殴られましたか？」

「うん。鞆で思いつきり」

あの野郎、なずな先輩には怪我をさせられた云々言つといて自分は殴ったのかよ？

「救いようがないな……何にせよ医務室まで連れて行きます。乗ってください」

「え?!わ、悪いから良いよ」

俺が背中を向けると背後からそんな驚きの声が聞こえてくるが、ここまで来たら今更だ。

「その痛そうな表情で何を言ってるんすか？早く乗ってください」

「わかったよ……ハチ君って意外と強引だね」

なずな先輩はそう言いながら俺の背中に乗ってくるので、俺は綾小路に会釈をしてから医務室に向かうのだった。

……しっかし、抱えるのが恥ずかしいから背負ったのだが……大きいな。

## 母性

「失礼します……って、留守かよ。賞味期限切れ……じゃなくて星之宮先生は夕食か？」  
医務室に入ると誰も居ない。時間的に賞味期限……星之宮先生も夕食に行っている可能性が高い。

「ハチ君。幾ら事実だからって先生を賞味期限切れなんて言っちゃダメだよ」

俺の背中に乗っているなずな先輩は俺の頭をコツンと叩きながら注意してくるが、貴方も賞味期限切れと思ってるじゃないですか。

「すみません。何にせよ座ってください」

言いながらなずな先輩をベッドに下ろして、戸棚を開けて傷薬と包帯を取る。

そしてズボンを少しだけ捲ると、右膝より少し下の箇所が若干赤くなっていた。綺麗な肌だけに凄く目立つな。

「染みるかもしれないですが、ちょっと我慢してください」

言いながら傷薬を塗るとなずな先輩は顔を顰めるが声は上げず、大人しく治療を受け

る。

そして包帯を巻いて身体を立たすといつも通りの表情になっている。

「どうもありがとうハチ君」

「お気になさらず。それより災難でしたね」

「まあね。私、ひよりと同じ大グループなんだけど、由比ヶ浜さんって毎回あなの？ 今日の実習でも事あるごとに騒いでいたんだけど」

顔には疲労が見えている。相当苦労しているのがわかる。

大グループに所属しているなずな先輩でこれなのだ。小グループのひよりや松下はなずな先輩より遥かに苦労しているのは明白。時間があればしっかり労ってやらないといけない。

「まあそうですね。Dクラスからはノイローゼになりかけている生徒もいるらしいですから」

「大変だね。それとハチ君。何かお礼をしたいんだけど」

「お礼？ 別に気にしなくて良いですよね」

俺が勝手にやった事だし、由比ヶ浜の愚行から誰かを助けるのはこの学校の生徒として当たり前だからな。

「私が気にしちゃうから。で、さっきまで背負われながら考えたんだけど……」

なずな先輩はそう言うのと恥じらいながらベッド周りのカーテンを閉めたかと思えばジャージを脱いで体操着姿になり……

「んっ……しよっ」

いきなり体操着を捲り上げてピンク色のブラジャーが露わになる。

「な、なずな先輩?!いきなりどうしうむっ!」

俺が驚く中、なずな先輩は俺の胸ぐらを掴んで引つ張り、そのまま直ぐに両腕を後頭部に回し、胸元に俺の顔を寄せる。

同時に顔には柔らかな感触が伝わり、鼻に1日の実習によつて生まれた汗と女子特有の香りが刺激をぶつけてきて変な気分になってしまふ。

頭がクラクラする中、後頭部に柔らかな感触が伝わってくる。

「ハチ君、良い子良い子……好きなだけ甘えて、ね?」

後頭部に感じる感触……なずな先輩の手はゆっくりと動き、俺に良い子良い子と頭を撫でてくる。

胸の柔らかさと女子と汗が混ざり合った匂い、手から伝わる優しさが俺の力を抜いてくる。

そしてなずなさんが抱きしめる力を強めると感じる母性が強くなり、甘えたい感情が強くなる。

「んむっ、なずな先輩……どうしてこんな大胆な真似を？」

人が居ない医務室でカーテンで囲んでいるとはいえ、中々の上級プレイに思わず質問する。

「だってハチ君。私のおっぱい好きでしょ？スパ施設に行つた際にも胸に視線を感じたから」

ぐっ……否定はしない。確かになずな先輩の胸に目を引いてしまったのは否定しない。だってセクシーな水着によつて出来た谷間とか滅茶苦茶エロかったし。

「だからお礼によつて……嫌じゃないならハチ君が満足するまで甘えて良いからね……？」

そんな風に艶のある声でそんな事を言つて更に強くギョツとしてくる。更に増す母性になずな先輩をお母さんと呼びそうになつてしまふな」

「お母さん……そんなに母性を感じるのかな？」

どうやら口にしてしまったようだ。これは誤魔化せないな。

「え、ええ。結構感じましたね」

「そうなんだ……あつ！じゃあハチ君、1回だけ私の事をママって言つてくれない？」

「ぶほっ！い、いきなり何を言つてるんですか？」

ママなんて小学校に入るまでの言葉だろう。高1の俺が高2のなずな先輩に言うの

は犯罪臭を感じるぞ。

「そんな風に言われてからハチ君を見たら可愛く見えたから……ね？言ってくれないかな？」

なずな先輩は俺の顔を覗き込みながらそう言ってくる。目には懇願の色が見えて、更に右手で俺の後頭部を撫でながら、左手で俺の顔を胸により強く埋めてくる。

口元に触れるなずな先輩の胸の柔らかさが俺の理性の壁を攻撃して……

「お願い……ハチくん」

艶のある眼差しからのおねだり……これは逆らえない……

俺はなずなさんに押し負ける形で口を開け……

「ま、ママ……」

つい口にしてしまった。

1時間後……

「で、結局ママって言っちゃまったんだが、そしたらなずな先輩が可愛い可愛いって思い切り甘やかしてきて、「2人きりの時はママって呼ぶように」って強引に約束してきたんだよ」

大浴場の湯船の隅にて俺は隣で湯船に浸かっている綾小路に医務室での顛末を話す。第三者には聞かせられない内容だが、俺以上に色々なプレイを勉強している綾小路なら大丈夫と判断した。

「それは羨ましいな。俺も楓花さんと姉弟ごっこをしたがママ呼びはないからな」

綾小路はウンウン頷いているが、コイツはコイツで色々楽しんでるな。

「どんな事をするんだ？」

「お姉ちゃんって抱きついたら弟して扱ってくれて、頭を撫でたり膝枕をしたり、耳掃除をしてくれるな」

「軽井沢が見たらブチ切れそうだな」

「実際キレたな。まあ夜にローションプレイをしながら沢山ディープレキスしたら許して

貰えた」

「石鹸を利用した女体による洗いはやって貰ったが、ローションプレイはまだやった事がないが気持ち良いか？」

「最高だな。石鹸よりヌルヌルしてるし、途中から恵も夢中になって俺の身体に抱きついてスリスリしてきたしな」

なるほど……合宿が終わったらローションを買ってみよう。

「しかし他にママ呼びを受け入れてくる歳上の先輩は居ないのが残念だ。朝比奈先輩なんて母性を感じるし、思い切り甘えて母乳が出るまで乳首を吸ったらどうだ？」

「完全に変態じゃねえか」

「絶対にバレない場所、朝比奈先輩の部屋とかでやれば良い。オレならするぞ」

恐れを知らないなコイツは。というか母乳つて妊娠しないと出ないんじゃないのか。

「しかし歳上で母性のある女子は朝比奈先輩以外思い浮かばないな……」

「星之宮先生は？」

俺が冗談混じりにそう聞くと、綾小路は目を瞑って首を横に振る。

「オレは賞味期限が切れたゲテモノには興味はない」

同時刻……

バキィツ！

「どうした知恵?!いきなりペンを砕いて」

職員室にて書類作業をしていた星之宮が手に持つボールペンを砕いた事で隣に座っていた茶柱が驚きながら質問する。

「ごめん。ちよつと綾小路君をぶん殴りたくなっちゃった」

「綾小路?なぜそこで綾小路が出てくる?」

他クラスからしたら綾小路の存在は驚異かもしれないが、幾ら綾小路でも入浴時間にインパクトのある行動をとるとは思えない。

「わかんない。けど綾小路君を無性にぶん殴りたいの」

「……言っておくが殴ったりしたら厳罰モノだぞ」

今の時代、体罰だけでも問題なのに、教師が理由のない暴力を生徒に振るうなんて言語道断だ。

「うん、わかっている。だから後で真嶋君に付き合つて貰うよ」

星之宮の言葉に茶柱が真嶋に同情の感情を抱き、同じタイミングで真嶋が職員室に入ってくる。

「あ、真嶋君。ちよつと付き合つてくれないかな？」

「っ！なんだそのドス黒いオーラは?!」

「気にしないで。それよりちよつと付き合つてよ」

星之宮はビビっている真嶋を連れて職員室から出て行き、茶柱は十字を切つて真島の冥福を祈る。

数分後、離れた場所から打撃音と男の絶叫が聞こえてくるが、職員室にいる教師らは全員聞こえないフリをしながら書類作業を続けるのだった。

## 問題児

風呂から上がってジャージに着替えた俺は綾小路と一緒に脱衣所を出ると、雪ノ下を除いた有栖のグループが同じタイミングで女子風呂の脱衣所から出てくる。

「おや、八幡君と綾小路君もお風呂上がりですか？」

「ああ。お前らは随分と仲良さそうだな」

グループメンバーを見ればギスギスした空気はない。グループが結成されてから1日しか経ってないのに、ギスギスした空気がないのは見事だ。ウチのグループも大きな問題は生まれてないが、有栖のグループほど仲良くはない。

「ええ。私達には共通点がありますから」

共通点……間違いなく雪ノ下に対して苛立ちがある所だろう。それ以外考えられない。

「実際雪ノ下はどうなんだ？持久走の練習では足を引つ張つてたよな？」

「普通に足を引つ張つてるわね。1周遅れて減点、更には遅刻を減点されてたしね」

「その癖謝罪の1つもしなかったし」

「走る前なんか頭の悪い奴に気を遣う必要ないってマイペースで走ってあのザマだから笑えたわよ」

「ていうか頭の悪い奴に気を遣う必要がないなら、あの脱糞女に気を遣う必要もないし」  
「大体普段から他人に逃げる事を悪って言って色々な人を馬鹿にしてるけど、雪ノ下さんだって体力のない事実から逃げてるし、人として恥ずかしくないのかな」

俺の質問に軽井沢がそう答え、グループメンバーが一斉に雪ノ下をdisり始める。それだけでこのグループは雪ノ下に不満を抱いているのがわかる。

そして最後のDクラスの小野寺の発言に納得した。雪ノ下は中学時代から人に対して逃げる事を悪、苦手な物を克服するべきと公言していたが、アイツも体力のない自分から逃げて克服してないな。

そこまで考えていると横から敵意を感じたので見れば雪ノ下が怒りに満ちた眼差しで俺達を睨んでくる。それを見た有栖は薄い笑みを浮かべ、有栖のグループメンバーの大半は雪ノ下を睨み返している。

「雪ノ下。さつき坂柳達から聞いたが、周回遅れや遅刻による減点はちゃんと謝った方が良いんじゃないか？お前のそれは逃げだぞ」

ここで綾小路が淡々とした口調でそう口にする。「お前のそれは逃げだ」は雪ノ下が

中学時代によく使っていたが、綾小路の口振りから察するにDクラスでも使っているようだ。

しかし綾小路の発言、客観的に考えれば正論であるが、自分の非を認めない雪ノ下からしたらこの上ない挑発だろう。真つ赤な顔になつて震えている。

「そうですね。私は気にしてないですが、雪ノ下さんの減点に不満を抱えているメンバーがいるのは事実。一言謝罪をして貰えませんか？」

綾小路に続いて有栖がそれはそれは楽しそうに笑いながら雪ノ下に問いかける。

雪ノ下からしたら嫌っている綾小路と有栖から謝罪を促されるのは屈辱だろう。握り拳を振るつて今にも殴りかかりそうだ。

しかし言い方は兎も角、2人の言っていることは間違いじゃないし、雪ノ下が謝るのは筋だろう。皆で団結して遅れたならまだしも、自分のペースで走つた結果、周回遅れとなり、疲れから遅刻したのだから。

「おいおい。Aクラスの女王様は謝罪だけで許すのかよ。随分と優しいな。俺もテメエらの実習を授業中に見たが、普通は土下座モノだろ」

ここで更なる雪ノ下の怨敵の龍園が脱衣所から出てきて、有栖と同じように楽しそうに笑っている。

綾小路、龍園、有栖の3人を前に雪ノ下はなす術もなさそうだ。

「聞いた話じゃ、ペースを崩して鈍臭い女相手に周回遅れして迷惑をかけたんだろ？加えてウチのクラスの木下にも迷惑をかけたんだし土下座しろよ、周回遅れしてごめんなさいって。悪い事したら謝るのは小学生でもわかる常識「ゆきのんに何してんだしっ！」うわあ……面倒なのが来やがったよ」

由比ヶ浜がドタバタやって来て、龍園や有栖は明らかに嫌そうな表情になり、綾小路も顔を顰める。

「よつてたかつてゆきのんを責めるなんてマジキモい！ヒツキーもあたしにさつき暴力を振るっておきながら、教師は私だけ悪いって言うしどんなズルをしたんだし！」

「由比ヶ浜さんに暴力？この屑、タダで済むと思わない事ね」

由比ヶ浜の喚きに雪ノ下が龍園達の話から逃げるように俺を睨んでくるが……

「元々ソイツが違う人に暴力を振るったから守っただけだ」

「どうかしら？由比ヶ浜さんが理由もなく暴力を振るうなんてありえないし、その人が余程の屑としか思えないわ。その屑を教えなさい。然るべき場所に突き出して由比ヶ浜さんに謝罪を「おっと足が滑った」くくくくっ！」

由比ヶ浜を庇う為に吐いた暴言に我慢出来ず、俺は思わず雪ノ下の脛に蹴りを放つ。今日の実習で疲労困憊だった雪ノ下は悶絶しながら蹲る。

「ゆきのんに何すんだし！今のは明白な暴力だったし今度こそ訴えてやる！」

由比ヶ浜は喚くが、体育祭前の件と違って暴力に走つてないからこつちが不利だ。  
「何の騒ぎだ？」

と、ここで坂上先生、星之宮先生、茶柱先生の真嶋先生以外の1年生担任がやつてくる。星之宮先生の拳に血が付着しているのは見なかつたことにする。多分真嶋先生をしびき倒したのだろう。

そして星之宮先生は綾小路をギロリと睨んでいるが、俺がなずな先輩を医務室に連れて行つた際に何かあつたのか？

3人がこつちに近づくと、茶柱先生は由比ヶ浜と雪ノ下を見るや否や嫌そうな表情になり胸に手を当てながら倒れ込もうとするが、坂上先生が支える。

「大丈夫ですか、茶柱先生」

「……すみません坂上先生。胃が……」

「そうですね。星之宮先生、ここは私が受け持ちますから茶柱先生を医務室に」

「了解しました、さあ行くよサエちゃん」

「す、済まん……」

茶柱先生が星之宮先生に支えられて去つていく。マジで茶柱先生は大変そうだな。「で、また由比ヶ浜さんと雪ノ下さんですか……今度は何をやらかしたのですか？」

坂上先生は心底面倒くさそうに2人を見る。

「またって何だし！いつもいつもあたし達が悪いみたいに言うなし！」

お前こそ教師にタメ口を使うな。

「……今回はこの男に原因があります。私の脛を思い切り蹴りましたから」

雪ノ下は俺を指差しながらそう言ってくる。すると龍園は笑いながら口を開ける。

「随分な言いがかりだな。比企谷は足を滑らせた拍子にぶつかっただけじゃねえか。テメエは当たり屋かよ」

「つーふざけないで！何処を見れば足を滑らせた事になるのよ！」

「そうだし！今回は目撃者が沢山いるし観念して退学するし！」

2人がそう言っつて辺りを見回すと……

「いや、アレは明らかに足を滑らせていただろ」

「だよな。それで言いがかりをつけられるって比企谷が可哀想だろう」

「というかそれで退学って、それだったら由比ヶ浜さんと雪ノ下さんはとつくに退学よね」

「わかる。普通に退学して欲しいんだけど」

あらゆる方向から雪ノ下達の言いがかりという声が聞こえてくる。この場にはAクラスからDクラスの男女がいるが全員雪ノ下と由比ヶ浜を擁護する声を出していない。どうやら皆、俺が足を滑らせてくれたと判断してくれたようだ。

「ふむ。どうやら足を滑らせた際に言いがかりをつけられたようですな。雪ノ下さんはいい加減に難癖をつけるのを止めなさい」

「つーふざげないで！この無能共は嘘をついてるのよ！私は完全な被害者よ！」  
「そうだし！教師の癖に鼻頂すんなし！」

雪ノ下と由比ヶ浜の暴言に坂上先生が不快そうにため息を吐く。

「嘘を吐く？比企谷君が所属するBクラスの生徒やBクラスと同盟を組んでいるAクラスの生徒の証言ならまだしも、Bクラスと敵対しているCクラスとDクラスの生徒が比企谷君が有利になる証言をする筈がないでしょう。比企谷君が暴力を振るつたと証明出来ればBクラスのクラスポイントを減らせるかもしれないのに」

「つーそ、それは……」

坂上先生の尤もな指摘に雪ノ下は口籠る。まあ普通はそう考えるがCクラスとDクラスの生徒からしたら、「雪ノ下の無罪によるBクラスのクラスポイントの減少」と「雪ノ下の言いがかり」を天秤にかけた結果、後者を選んだのだ。

それを言うのは雪ノ下からしたら屈辱だろう。何せ自分の所属するDクラスの生徒から、クラスポイントより雪ノ下自身を貶める事を優先されたのだから。

「ふざげんなし！何で皆嘘を吐くの?!人として恥ずかしくないの?!」

日頃の行いだろ。

雪ノ下と由比ヶ浜以外でこの場にいる全員が思った事だ。

「もう良い！事実を嘘にするなんて最低！ゆきのんはあたしが守るから！皆はゆきのんを馬鹿にするけどゆきのんは何にも悪くない！行こゆきのん！こんな最低な人達といたら馬鹿が感染るよ！」

「……そうね。今に見てなさいこの屑共。いつか私の優秀さを示して、無能な生徒と教師を消してあげるわ。覚悟しなさい！」

「いや、持久走すらろくに出来ない奴がどうやって示すんだ？」

ドツツツツツツツ

綾小路がそう口にすると周りから笑いが起こり、馬鹿2人は綾小路を思い切り睨み脱衣所に入っていく。

誰がどう見ても逃げ出したと思える光景にこの場にいる全員は失笑を浮かべるのだった。

## 疲れ

「全くあの2人は……さあ皆さん。解散してください。教師として良くない発言ですが彼女らについて一々考えるのは時間の無駄ですよ」

坂上先生がそう口にして去っていく。教師としてはアウトな発言だと思うが、誰も坂上先生に対して不審な感情を抱かない。当然の事だ、雪ノ下と由比ヶ浜に構うのは本当の意味で時間の無駄だからな。

「……疲れたな。もう一回風呂に入るか」

龍園がため息を吐きながらそう口にして再度脱衣所に入っていく。どうやら相当精神的に疲弊したようだ。

「私達も入りたいですが、今入ると鉢合わせになるので諦めましょう」

有栖がそう口にすると有栖のグループメンバーは一斉に頷く。

「俺と綾小路は明日朝食作りがあるし、直ぐに帰って寝るか」

娯楽がない場所でストレスを発散させる場合は龍園のように風呂に入る、もしくは寝

るのが一番だ。

「そうするか。それじゃあ恵。また明日、よいしょ」

綾小路は言いながら軽井沢に近寄り軽井沢のジャージの中に右手をを入れ、胸の位置まで移動させて、摘むような動作をする。

「んあつ！清隆あ！こんな場所で堂々とんむつ！んんっ！んあつ……んむっ……んちゅ」

軽井沢は喘ぎながら文句を言おうとするが、綾小路のディープキスに呆気なく屈して舌を絡める。あのテクニク……どれだけの研鑽をしたのだろうか。

予想外の展開に周りにいる大半が絶句する中、綾小路は軽井沢から離れて部屋に戻ろうとするが足を止めて俺を見る。

「比企谷は坂柳にやっついていけないのか？」

「んんっ?!」

綾小路の爆弾発言に有栖は真っ赤になった。パクパクする。そんな有栖を見て虐めなくなった俺は有栖に近寄り、体操着越しであるが両手で彼女の胸を揉む。

「ひゃあんっ！八幡君の馬鹿！綾小路君の真似をしなくてもんむっ！んんっ！んあつ……んんっ……」

有栖も文句を言おうとするがディープキスをする直ぐに抵抗を止めて舌を絡めて

くる。

「美味しかったぜ……じゃあまたな」

「……馬鹿。帰ったら一杯お返しをしますから」

涙目＋赤面＋上目遣いで睨む有栖。物凄く可愛いです。

そんな有栖に手を振りながら廊下を歩いていると由比ヶ浜以外のひよりのグループと鉢合わせする。

「ようひより。お疲れさん」

「お疲れ様です八幡君。なずな先輩の件も疲れたでしょう？」

どうやら同じ大グループのなずな先輩と由比ヶ浜のトラブルについても耳に入ったようだ。まあ医務室内の親子プレイについてはバレてないようだ。

「ところで風呂場の入口に沢山人がいるけど、またあの2人が問題をやらかしたの？」

ひよりと同じグループの佐藤がそんな事を言ってくるが、トラブルⅡ雪ノ下と由比ヶ浜つて法則が生まれているようだ。

そう思いながら俺はさっきまでのやり取りを説明すると全員がウンザリした表情になる。

「……って訳だ。CクラスとDクラスの生徒も味方してくれたな」

「どうせなら由比ヶ浜さんの方も蹴って足を折ってくれたら良かったのに……」

白波がボソリと怖い事を言ってくる。お前つてそんなキャラだったか？結構怖いんですけど。

「だよね。そうすれば大人しく……ならないね」

「わかる。普通にギャーギャー騒ぐのが目に見えるよ」

「猿ですら学習するのに何で学習しないんだろ？」

「猿以下だからでしょ」

白波の言葉にグループメンバーが同調する。顔には疲労と怒りが宿っているがどんだけ振り回されたのだろうか？

「皆さんお静かに。あの2人に聞かれたら面倒な事になるので共用スペースでは言わないでください」

ひよりはグループメンバーに注意するが、悪口を言う場所を選べって注意はしても悪口そのものは注意していない。よく見ればひよりの表情にも疲労が満載だ。

「由比ヶ浜はそんなに大変だったのか？」

俺がそう質問するとグループメンバーは一斉に俺を見てくる。

「大変なんてもんじゃないよ！ノイローゼになりそうだよ！」

「朝の掃除もボイコットしようとするし、朝食作りのための早起きにも文句ばっかり！」

「持久走でも指定した周回に不満を持って先生に暴言！」

「私達が注意したら痲癩が爆発！」

「昼食や夕食にも不満！」

「筆記系授業では欠伸や昼寝！」

「座禅では痛い痛いって喚いて指導者が注意したら、こんなもの役に立たないゴミって逆ギレ！」

「もう本当にぶつ殺したいよ！」

「お、おう……」

一斉にぶつけられる由比ヶ浜に対する不満。先程ひよりから注意を受けたのに爆発と言つていくくらいの不満の連続……

「すみません八幡君。私達の前で彼女に対する質問は今後控えてください。私も疲れたので……」

「わ、わかった」

ひよりからのお願いに素直に頷く。

「宜しくお願いします。あ、八幡君。私達は今からお風呂に行くのですが、今の内にお休みのキスをください……」

ひよりがそんな風におねだりをしながら唇を突き出してくる。疲れ切ったひよりからのおねだりを無視するわけにはいかない。

「OK、任せろ……んっ」

「んっ……ちゅっ……んんっ……」

俺がキスをするのとひよりは目を瞑ってキスを返してきて周りからは歓声があがる。

暫くキスをした俺は唇を離す。

「じゃあひより、またな」

「はい。また明日」

ちゅっ

俺達は最後にキスをしてから別れる。俺は早足で自室に向かい、そのままベッドに入る。

「どうした比企谷？風呂に入ったのに疲れてないか？」

時任にそう聞かれる。いくら有栖とひより相手にキスをしたとはいえ、由比ヶ浜と雪ノ下によって生まれた疲れは取れてないようだ。

「由比ヶ浜、雪ノ下」

「あゝ、なるほど……」

時任も分かったようでウンザリした表情で頷く。分かってくれたようだ。

「じゃあ俺は先に寝る。9時になったら消灯してくれ」

「了解した。ゆっくり休んでくれ」

そう言われたので俺はゆっくりと目を閉ざしてやってくる睡魔に逆らうことなく意識を飛ばすのだった。

翌日……

「ふあ〜」

朝5時、まだ真つ暗な中、俺達は朝食作りに勤しんでいるが……眠い上に寒くて手元が狂いそうだ。

レシピを見ながら作っているが、今日の飯は米に味噌汁に鮭の切り身に小松菜のおひたし、更にポイントで追加したメンバーは卵が与えられている。

卵については人次第だ。俺は卵焼きにするし、卵かけご飯やスクランブルエッグ、目玉焼きにしようと考えているメンバーもいる。上級生の分も作っているが、何を作って欲しいかのリクエストは聞いている。

そんな風に1時間くらい飯を作っていると急に尿意が湧いてくる。

「済まん。ちよつと手洗いに行ってくる」

鮭を焼いたところで隣でほうれん草を切っている鬼頭に断りを入れて、炊事場から少し離れた場所にある手洗い場に向かう。

そして速攻で済ませてトイレから出ると、俺達が使っている炊事場とは別の炊事場がある方向から人影が見えるが……

「あれ？ハチ君？」

「なずな先輩も朝食当番ですか？」

やってきたのはなずな先輩だが、俺が呼びかけると不満そうな表情に変わる。

「なずな先輩？」

「ハチ君。2人きりの時はママだよ」

「それマジで言ってたんですか?!」

「もちろん」

昨日そんな約束をしたがマジな約束とは思わなかった。

「それよりハチ君。3分だけハチ君を甘やかしたいな……」

なずな先輩はそう言っただけ俺を手洗い場の裏にある林に連れていく。そしてそのままジャージを近くの木の枝にかけて、昨日同様に体操着を捲り上げ、青いブラジャーが見えると……

「さあハチ君。ママに思い切り甘えてね……」

そのまま俺の後頭部に腕を回して、顔面を胸に押し付ける。

そんな母性全開のなずな先輩に俺は眠気を吹き飛ばし……

「わかったよ……ま、ママ……」

誘惑に負けてしまい、なずな先輩の子供に成り切ってしまい、なずな先輩の胸に顔を強く埋め始めるのだった。

## 母性

「ふふっ、可愛いよハチ君。もっともつとママに甘えてね」

「……わかったよ、なずなせんば「ママー」……わかったよ、ママ」

なずな先輩……ママの良い子良い子攻撃に俺は逆らえず、ママの豊満な胸に顔を埋めてスリスリしてブラジャーと胸の感触と温もりを堪能する。

ママの母性は圧倒的で寒い身体を包み込むように温めてくる。

「んっ……ハチ君は甘えん坊だね。好きだけ甘えて……何なら吸っても良いよ」

ママはそう言つて俺から離してからブラジャーを捲り上げて薄ピンク色の可愛らしい乳首を見せてくる。ママの胸は初めて見るがデカイ胸に反して乳首は小さい。

そして吸つて良いって……子供から赤ちゃんに対する扱いに変えるつもりか？メチャクチャ恥ずかしいんだが……

「恥ずかしがる必要はないよハチ君。誰もいないから赤ちゃんみたいに甘えてね」

ママはそのまま再度俺を抱き寄せて俺の顔を胸に当ててくる。ブラジャーの感触はなくなり、胸の感触が先程より伝わってくる。

正直言つてもう限界であり、今すぐママの胸を吸いたい気持ちはあるが……

「そろそろ切り上げないか？ 一旦吸ったら止まらないと思う」

これは確信がある。炊事場を離れてまだ3分くらいだが、これ以上甘えてうら怪しまれるだろう。

「そっか。まあそうだし切り上げよっか」

ママも納得したようでブラジャーを胸に付けて体操着とジャージを元の格好に戻す。あの綺麗な胸が隠れたのは残念だが仕方ない。

「けどハチ君。私のおっぱいを吸いたくなったらいつでも言つてね。ママ、ハチ君が喜ぶように一杯吸わせて上げるから。じゃあね」

ちゅっ

そのまま俺の唇にキスをしてから一足先に去っていく。そんな彼女に恥ずかしい気持ちを抱きながら俺も炊事場に戻る。

「待たせて済まない」

そう前置きして調理を再開するがふとした瞬間に綾小路と目が合つて、綾小路は小さく、それでありながら強く頷いてくる。

(アイツ……もしかして気づいたか?)

気付かれないように警戒したから見られてはないだろうが、奴の直感がなずな先輩と

エロい事をしたと語ったのか？まあ確証がないなら問題ないだろう。

(それにしても……エロかったな)

そう思わずにはいられなかった。なぜ先輩の生乳を見るのは初めてだが凄く大きくて、時間があつたら吸つていたと思う。次の機会があつたらさっきの続きをしたいものだ。

俺はそんな煩惱を持ちながらも調理を進めるが、何とかミスをする事なく先輩方が起る時間帯に人数分の朝食を小グループ全員で作ることに成功するのだった。

同時刻……

(あーあ。時間制限があるのは惜しかったな。ハチ君、次にハチ君と2人きりになったら赤ちゃんのように私に甘えて思い切り胸を吸つて良いし、もっとエツちな事をして良からね)

なぜなは配膳の準備をしながら違う炊事場にいる八幡を想うのだった。そんな彼女の目には圧倒的な母性が宿っているのだった。

朝食を済ませると俺達の大グループはで大学にありそうな教室に案内されて席に座る。

チャイムが鳴ると同時に男性に教諭が部屋に入ってきて授業を始める。この授業は道徳についてだが……

「これからお前達には自己紹介をして貰うが、これも授業の一環である事を忘れないように。これから毎日スピーチをしてもらう。テーマは学年毎に違うが、判断基準は4つ。声量、姿勢、内容、伝え方だ」

この合宿で重要な課題の1つのスピーチを学ぶ時間だ。

社会に出てからは自分の意見をハッキリ、相手にわかりやすく伝えるのが重要だし、コミュニケーション力を高める事にも必須だ。

俺自身、コミュニケーションを取るのが苦手だが、何とか頑張っていきたい。

それから教員はスピーチのお題を説明をするが、1年生は入学してから何を学び、これから何を学ぶかをスピーチするように言われて、2年3年は進路や就職などより具体的な内容をスピーチするように言われる。

何を学び、これから何を学ぶか……相手を蹴落とす方法を学び、これからは他クラスの生徒を退学者を出せる方法を学ぶなんて言ったら内容は0点だろう。

そう思う中、1年の小グループからの発表で最初は綾小路からだ。前に出て口を開ける。

「1年Dクラス綾小路清隆。オレがこの学校に来てから学んだ事は女の味は格別である事、これから学びたい事は複数の女子と上手く恋愛をする方法です」

『ぶっー』

綾小路の堂々とした発言に教員を含めて大グループの過半数が噴き出す。まさか堂々と口にするとはな……

「そう考えた理由は元々感情が希薄だったオレですが、この学校に来て女子と関係を持つたら強い感情を持つようになり、その感情をもっと知りたいと思ったからです。またその際に自身が欲張りである事がわかり、他の女子とも関係を持ちたいと思うようになりました」

丁寧に話す綾小路だが、スピーチの内容は兎も角、構成はしつかりとしているのが腹

立たいい。

スピーチは最初にお題に対する答えを、次にそう答えた理由を、最後に結論を説明するのが定石であるが、今のところ綾小路は定石をしつかり守っている。

「その為にはまず最初に関係を持った女子の許しが必要ですが、中々認められない状況です。最初は誠意を込めて頼んでいましたが中々認められないので、いつそのこと快樂落ちさせて強引に了承を貰いに行く方法を選ぶべきか悩んでいます」

綾小路はジェスチャーも交えて説明している。内容は最悪だが、声量と姿勢と伝え方は完璧だ。この場合、点数を付けたら75点か？

「結論を言う」と現状、後腐れがないように複数の女子と恋愛をするのは難しいですが、諦めずにやり方を模索していきます。目標としては卒業までに4、5人の女子と恋愛関係を築きたいです……以上でスピーチを終了とします」

綾小路は一礼してスピーチを終わらせる。予想外の内容に拍手は起こらず、指導者は額に手を当てて綾小路に話しかける。

「……今のスピーチは本心か？」

「はい、本心です」

お前はマジモンの勇者かよ？度胸があり過ぎるわ。

「そうか。ならその考えは捨てるように。モラル的に問題がある」

「そうでしょうか？ 恋人がいるのに内緒で他の女子に迫るのは問題ですが、オレは堂々と、女子達の同意を得る事を絶対としています。当人らが同意の上なら問題はないはずですよ」

綾小路は屁理屈を返す。確かに彼女がいるのに隠れて他の女子と関係を持つのは浮気野郎だが、堂々と複数の女子を囲むと公言したらハーレム王だ。どっちもクズであるが、ハーレム王は全員が同意しているし不幸になる者はいない。

言っている事は間違いではないが、マトモな人間からしたら浮気野郎もハーレム野郎も屑でしかない。

「何にせよ俺は考えは変えません。まさかそれが減点に繋がるのですか？ 個人の考えが原因で？」

そう思う中はそう締めくり元の席に戻る。実際考えが違うからってだけで減点はないだろう。そんな事したら思想統制って事で問題だし。

綾小路が席に座ると指導者は苦い表情を浮かべながら、次の出席番号の池に前に出るように促した。

それから差は大小あれどありきたりなテーマのスピーチが続き、授業が終わるのだった。

俺？ありきたりのスピーチにしたよ。複数の女子と関係については悩みどころだが、綾小路ほど感情が乏しくないからな。

## スピーチ

「もう少し真面目に授業に取り組むべきだ」

スピーチの授業を済ませて休み時間になると2年のグループの桐山副会長がこっちに来て来る。十中八九綾小路に対して言っているのだろうか……

「言われてるぞ比企谷」

「ぶっ殺すぞコラ。誰がどう見てもお前のぶっ飛びスピーチに対しての文句だろうが」

綾小路が俺のせいにしよとするので反論してしまう。マジで良い度胸だなオイ。

「いや、アレは紛れもない本心だ」

「尚悪いわ馬鹿」

コイツに日に日に性欲が強くなっていく。早く性欲以外の感情を得るべきだ。

「しかしお題には適しています。これまでに学んだ事、これから学びたい事をちゃんと話しました」

「モラルの話をしているのだ。普通に考えてあの内容は問題だ。他の内容を考えるか、

ありふれた内容を話すべきだった」

「前者は兎も角、後者は嘘をつくことになりましたが、課題に対して嘘に塗れた回答をするのは如何でしょうか？」

屁理屈にも程があるわ。桐山副会長の眉は細まる。背後にいる南雲会長は笑いを堪えているが。

そう考えていると……

「何であんた達がいるんだし！ さっさと出て行くし！」

背後からそんな声が聞こえてくる。瞬間、この場にいる男子は全員不快そうな表情に変わる。中でも普段無表情の綾小路は心底嫌そうな表情を浮かべている。

チラツと後ろを見れば由比ヶ浜が俺と綾小路を睨みつけながら指差している。その後ではひより達がゲンナリした表情を浮かべたり、苛立っていたり、両手を合わせて謝罪のジェスチャーをしていたりと様々な反応だ。

ママ……じゃなくてなずな先輩は謝罪のジェスチャーをしているが、貴方が謝る必要はないです。というかコイツは散々人に迷惑をかけてる自覚がある……訳ないよな。マジで苛々してきたな。

「何でも何も俺達が使ってたから決まってるだろ。お前こそ俺に文句言ってる暇があるならオムツを履いてろ」

『プツ！』

苛々しながらそう返すと由比ヶ浜の大グループの大半が嘖き出す。特に松下と白波なんか呼吸困難になつてゐるし。

「ふざけんなし！ヒツキーマジきもい！」

「ねえ由比ヶ浜さん。黙るか死んでくれない？」

「由比ヶ浜さんの方が気持ち悪いからね？鏡見よ？」

由比ヶ浜が怒鳴ると松下と白波が俺の前に立つて罵倒する。コイツらは由比ヶ浜によつて生まれた被害者の中でもトップクラスの被害者だから仕方ないだろう。

その言葉に由比ヶ浜が松下に殴りかかるが松下は軽いステップで避けてから足払いで転ばせて背中を踏む。中々の動きだが、普段は手抜きをしているな？

「ぐふっ！」

「本当に頭が痛くなるよ。悪いけど綾小路君達のグループは早く出て次の授業の教室に行つてくれない？馬鹿がいつまでも煩いからさ」

松下は俺達に早く出るように促す。確かにここにいてもお互いに不幸になるだけだ。

「そうだな。恩にきる。行くぞお前ら」

俺が外に出るように促す。休み時間を馬鹿のために浪費するなんて勿体無い。

「待つし！今まであたしにやった酷い事を謝るし！悪い事したら謝るのが当たり前

「だったら由比ヶ浜さんがDクラス全員に土下座してよ。由比ヶ浜さんの所為でクラスポイントが枯渇してるんだし」痛い痛いっ！離してよ馬鹿！クス！ゴミ！」

ブーメランを投げた車由比ヶ浜に対して、松下が足に力を入れると松下に対して罵倒をぶつけまくる。確かに悪い事をしたら謝るのが当たり前なら由比ヶ浜はDクラスの生徒に土下座をする必要があるな。

そんな事を考えながら俺達は松下達に由比ヶ浜を任せて次の授業の教室に向かう。

「八幡君。昼休みに思い切り甘やかしてください」

「ああ。思い切り甘えろ」

ひよりの言葉に強く頷く。由比ヶ浜がいるグループは他のグループより精神的ダメージが半端ないからな。可能な限りリフレッシュをするのは絶対だ。

俺はひよりのおねだりに応えるべきと強く決意しながら教室を出ようとすると、なずなさんの横を通り過ぎたタイミングで何かをポケットに入れられる。

何を渡されたか気になりながらも次の教室に行き、席に着く。そしてノートを開きながら先程ポケットに入れられた物を確認すると紙切れで……

ハチ君へ

今日の消灯してから1時間後に経過したら、朝の続きがしたいから良ければ炊事場に  
来てくれないかな？

ハチ君が望むなら私のおっぱいを赤ちゃんのように吸っていいからね？ 私もハチ君  
にならおっぱいを吸われていいと思ってるから

ゴンッ！

インパクトのある手紙に机に頭をぶつける。破壊力あり過ぎだろ！

というか朝の続きか……時間があれば間違いなく先ずな先輩の胸を吸っていた続き  
か……

とりあえず俺は紙をクシャクシャにして筆記用具の中に入れる。もう授業だし、見ら  
れたらガチでヤバいからな。

俺は顔を熱を溜めながらチャイムが鳴るのを待つ。

(しかしひよりのグループはこれからスピーチだけど、由比ヶ浜がどんな内容を話すの  
か気になるな)

綾小路の場合、スピーチ内容は最低だったが内容以外は最高だった。しかし由比ヶ浜  
の場合、発声量以外は絶対に碌な物じゃないだろう。

それから直ぐにチャイムが鳴るので意識を教員と黒板に意識を向けて集中する態勢に入るのだった。

「1年Dクラス由比ヶ浜結衣。あたしがこれまでに学んだ事は、この学校の生徒と先生も馬鹿だらけで、これからは馬鹿共がどうやって反省してあたしやゆきのんに謝るかを考えたい！皆、いい歳してあたしやゆきのんを虐めて本当にキモいし！何で政府が応援してる学校なのに馬鹿しかないなんてマジであり得ない！Dクラスのクラスポイントが減ってるのは生徒会長や先生が馬鹿だからであたしは悪くない！本当ふざけんなしー！」

バキイッ！

松下の手にある鉛筆がバキリと折れる。額には青筋が浮かびまくっている。

(ダメエがふざけんな！)

怒りの余り、人格に変更が生まれる。普段から暴言を余り吐かない松下だが、今の憤

怒の感情を抱いていて授業中でないなら口に出してから殴り倒している自信がある。

学校の教室では由比ヶ浜の近くであるが故に、クラスポイントを減らしまくる以外に叫び声が耳を刺激して迷惑を被っている。終いには脱糞のとぼちちりを受けたが、松下からしたら由比ヶ浜には敵意を通り越して殺意を抱くようになっていた。

そんな中、由比ヶ浜は罵倒まみれスピーチを終わらせるが、担当教師は呆れ顔全開だ。綾小路のスピーチが可愛く思えるレベルだからだ。

「それは本気で言っているのか？」

思わず由比ヶ浜に質問する。もしかしたら嘘ではないのかと淡い期待を抱きながら。

まあ……

「当たり前じゃん！」

期待は呆気なく碎ける、

「座禅の際に他人を思いやる気持ちは大切と教わらなかつたのか？」

「何で逆恨みする馬鹿を思いやる必要があるんだし！思いやるとしても向こうが悪い事を土下座して謝ってからに決まってるじゃん！」

「自分にも反省するべき点があると思わないのか？」

「思わないし！当たり前のこと言わないでよ馬鹿じゃないの！」

最後に罵倒してから席に着く。そんな由比ヶ浜の断言に教師は匙を投げた。

「……次、2年生の朝比奈なずな」

「は、は、」

2年の中で1番出席番号の小さいなずなが指名されたので、なずなは教師に同情の眼差しを向けてから前に出る。

「2年の朝比奈なずなです。3年生に上がってから何を学びたいかですが、2年の終盤なので大学について候補を幾つか絞り、その大学で重要な科目を重点的に学び、大学の授業についても調べておきたいです。幾ら推薦で入学出来ても授業で遅れて留年したら嫌ですから、ある程度の調査は大切だと思います」

2年生に与えられたお題は3年に上がったなら何を学びたいかだが、なずなは真面目に回答する。

「それと包容力を身につけたいです……折角の高校生活ですし恋愛も体験したいですその、好きな人に甘えられたいですから」

（あの表情……本気で八幡君に……）

恥ずかしそうにそう口にするなずなにひよりは対抗心を剥き出しにする。

なずなが八幡の恋人になるのはまだ良い。二股かけてる時点で三股になる可能性もある。

しかし1番だけは自分のもので誰にも渡すつもりはない。

ひよりは強い眼差しをなずなに向けて、なずなも強い眼差しでひよりを見返すのだつた。

## 憂鬱

キーンコーンコーン

チャイムが鳴り、指導していた教員が出て行く。昼休みを迎えたが、俺は先程なずな先輩から貰った手紙の事が頭から離れられずにいた。そりゃ美人な先輩から胸を吸って良いなんて手紙を受け取れば誰だってそうだろうな。

「さて昼食に行くぞ。午後は持久走だから食い過ぎず、食後に軽いストレッチをするよ  
うに……ああはなるなよ」

窓の外を指差しながらそう口にする。グラウンドでは雪ノ下が倒れている。雪ノ下が所属する有栖のグループは先程まで持久走をしていたようだが、また雪ノ下は協調しないで走っていた。多分プライドの高さから自分のペースに合わせてもらうのを見下されていると勘違いしたからだろう。

しかも今回は途中で思い切り転倒して、誰一人助けなかったもので、結果として前回と同じように遅くてもペースを変えずに走った他のメンバーがゴールした際は2周半の差があった。

雪ノ下以外のメンバーはゴールした瞬間にハイタッチをしていたが、この合宿でしっかり団結していて実に尊い。

ひよりのグループも由比ヶ浜以外は纏まっていると思うが、団結はしていないで疲弊しているイメージが強い。今から食堂でひよりから愚痴を沢山聞かされるだろうな。

内心ひよりに同情しながら俺達は食堂に向かうと、持久走を終えたばかりの有栖のグループメンバーが廊下を歩いている。同時に綾小路は軽井沢に抱きついて匂いを嗅いでいる。

「ちよっ清隆！いきなり抱きつかないでよ！汗臭いんだから！」

「臭くない。寧ろ汗と恵の匂いが混ざってムラってきた」

「あんっ！清隆あ……」

綾小路は軽井沢に抱きつきながら胸を揉む。

「済まん恵。ムラつときたから今から炊事場に行かないか？胸を吸いたい」

ど直球かお前は?!スピーチの時も思ったが、コイツドンドン欲望に忠実になっているな。

「行くか！合宿が終わったら幾らでも吸わせてあげるから我慢しなさい！」

「……わかった」

そんな会話をしているが第三者がいる為の嘘だろう。実際コイツらは既に青姦して

いるのは知ってるから。

「と、兎に角着替えなといけないから先に食堂に行つてて」

「わかつた。楓花お姉ちゃんに甘えながら待つてる」

「甘えるな馬鹿！ちよつと比企谷君！アンタの所為で清隆はハーレムを作る気満々になつただけだ！」

「……濟まん」

俺に文句を言ってくるが返す言葉がない。堂々とひよりと有栖とイチヤついた事が理由で綾小路は鬼龍院先輩にアプローチするようになったからな。

ここでなまずな先輩と良い関係になつている事が軽井沢にバレたらマジでぶん殴られそう。

「恵。比企谷を責めるな。オレは今この時間が気に入っていて、青春を教えてくれた比企谷には感謝している」

「それ間違つた青春だから！」

軽井沢は怒るに怒るが、綾小路の性格的に改善する気は無さそう。

そう思いながら俺は軽井沢の胸を揉みながらスンスン鼻を嗅いでいる綾小路を置いて、食堂に向かうと龍園と遭遇する。

「よう。そつちの厄病神は足を引つ張つてるか？」

龍園は池を指差しながら質問する。池はといえば真つ赤になって震えている。

「由比ヶ浜みたいにキチガイみたいな行動は取つてないが、ポテンシャルが低いから足を引つ張つてるな。まあ責任者だしビリになつても大して影響はない」

真面目にやつてもグループメンバーの中でも弱いからな。それでもプライドが無い小物だから由比ヶ浜や雪ノ下よりはマシだ。

「お前のところの暴力野郎はどうだ？」

「持久走以外カスだな。行動についてもアルベルトがアイツの壊れた肩を殴つたら大人しくなつたぜ」

龍園はケラケラ笑いながらそう口にする。容赦は相変わらずないようだな。

「お前らの所は大人しいから良いじゃねえか。俺の所の厄病神なんか嘘と文句ばかりで不愉快極まりないぞ」

ここで山内を擁する橋本のグループもやつてくる。山内も怒りに満ちた表情を浮かべている。

「なるほどな。男の厄病神3人じゃ一番嫌われてる奴だし当然か」

「しかもDクラスのメンバーに聞いたら山内と池つて入学当初にクラスの女子の胸の大きさをランキングを作る屑っぷりを示したらしいぜ」

「屑じゃねえか」

「生きてて恥ずかしくないのか？」

橋本の暴露に俺と龍園はそう呟くが本気でドン引きした。マジで気持ち悪いんだが……

「な、何だよお！何でそんなに見下されなきゃいけないんだよお！ランキングと盗撮も軽い冗談じゃねえか！」

山内は我慢出来ないとはかりに叫ぶが、食堂前でそんな事を叫んだら……

「ふざけんじやないわよ！この性犯罪者！」

「高校生になってやって良い事と悪い事の区別もつかないの?!」

「本当に死んでよ！一年の綾小路君がカメラを奪わなかったらどうなっていたか、想像するだけで寒気がするわよ！」

周りにいた女子が一齐に山内に怒鳴り散らす。学年もクラスも関係なく、沢山の女子が山内に罵声を浴びせる。昼休みに全生徒が集まる場所でそんな事を叫んだのだ。女子達の怒りは当然のように爆発した。

「煩えよ!!お前らみたいなブスはどうでも良いわ！佐倉や一之瀬や櫛田ちゃんみたいな巨乳しか興味ねえよ！」

コイツ最低極まりないな。

「ふざけんやよ山内！」

「一之瀬を盗撮だど?!そんな事を絶対にさせねえぞ!」

「櫛田ちゃんを怖がらせるような発言してんじゃねえよ!最近の櫛田ちゃん、白髪に悩んでるんだぞ!」

山内の発言よりウチや橋本のグループのCクラスとDクラスの生徒も怒りを露わにする。佐倉は知らんが、櫛田や一之瀬はクラス内で絶対的な人気だからな。

特に櫛田なんか半年以上由比ヶ浜を庇った事から聖人君子と評価を受けてるしな。最近はそのうのはやめて割と荒っぽい性格になったが、由比ヶ浜達によってストレスが溜まりまくったから仕方ないだろう。

「クソがつ!俺はお前らと違って優秀なんだ!絶対に後悔させてやるよ!」

山内は叫びながら走り去っていくが、何処が優秀なんだ?

「つたく、本当にDクラスの5馬鹿は碌でもない奴等だな。同じグループには迷惑をかけてばかり……生きてる意味があるのか?」

「つ!」

龍園の言葉に周りにいるメンバーの視線が山内と同じ5馬鹿の池に集まり、池は逃げ出す。

すると……

「何を甘い事を言っているのですか龍園君。由比ヶ浜さんの面倒さは他の4人とは一線を画していますよ」

ひよりがどんよりとしたオーラを全開にしながらやって来る。目も俺以上に腐って廃人のようで、普段の美少女の姿とは天と地の差がある。

「さっきの授業のスピーチでは、この学校の教師や生徒が馬鹿だから自分と雪ノ下さんに謝る方法を探すと反省の色を全く見せないふざけたスピーチをしたのですよ」

わーお……予想は薄々していたが、改めて聞くと頭が痛くなる。

「迷惑をかけられてばかり？私のグループに比べたら龍園君達は天国ですよ。不愉快ですから甘ったれた事を言わないでください」

「……済まん。俺が悪かった」

ひよりのドスのきいた声に龍園は丁寧な礼をして謝罪する。ひよりの言葉にはそれほどどの重みがある。

「自分がどれだけ恵まれているか自覚してください……それで八幡君。昼休みは思い切り甘やかしてください。そうしないと午後の授業で狂ってしまいそうです」

「ああ、お前の望む限り付き合ってやる……済まんが、俺はここで」

俺はグループメンバーに断りを入れてからひよりの肩を掴み食堂の中に入る。

時間の許す限り甘やかす事を強く決意するのだった。

### 3人目について

「それですすね。自分の行動は正しいと疑わず、自分と雪ノ下さん以外を悪と疑わないんですよ。凄く頭が痛くて辛いんです」

「お前はよくやってるよ。医務室に行つて頭痛薬を貰いに行こうな？」

「はい。でも今は甘やかしてください……んっ」

「んむっ……ひより、頑張れよ」

食堂の隅の席にて俺はひよりの唇にキスをする。ひよりは目を瞑つて普段より貪欲にキスをしてくる。その事からストレス発散に全力を注いでいるようだ。

「それよりグループの方はどうだ？」

「1年生内における最終順位については高くない結果になると思いますが、2年と3年の小グループはAクラスの生徒が多いので大グループの最下位はないと思います」

それを聞いて安心する。退学する人は「最下位の大グループの中で、学校が定めたボーダーラインを下回る成績を残した小グループの責任者、及び場合によっては道連れ」だ。

つまり大グループでビリにならないければ小グループの成績が酷くても大丈夫って事だ。

「それより八幡君。聞きたいことがあります。朝比奈先輩とは何処まで進んだのですか？」

「ぶふおっ！いい、いきなりの変化球だな……」

まさかここでなずな先輩の名前が出るとは思わなかった。

「先程のスピーチで朝比奈先輩は恋愛に関する内容を含めていて、私と目が合ったら負けない意思を感じました。その事から八幡君と関係を深めていると確信しました」

なずな先輩……スピーチにそんな内容を含めないでください。

「それで？八幡君は朝比奈先輩も恋人の一人にするつもりですか？」

ひよりはそんな事を聞いてくるが、眼差しには怒りの色は少ない。テツキリブチ切れていると思ったが、本当に怒りが見えない。

しかし嘘についても見透かされそうだし……

「……まあ、もつと沢山甘えたいし、甘やかされたい気持ちはある」

なずな先輩の母性は圧倒的で甘えたい気持ちは強い。特に良い子良い子攻撃は破壊力抜群だ。俺は完全に虜になっている。流石にママ呼びしている事は言えないが。

「そうですね。私としては無理強いはしないので彼女の一人にしたいなら止めません。

ただし有栖さんに対する説得は八幡君がしてください」

別に味方する訳ではないので、と締めくくるが本当に怒りを感じない。

「あの、怒ってないんですか？」

思わずそう聞くとひよりは頷く。

「まあ普通なら怒るのかもしれないですが、八幡君は元々二股していますし、時と場所を考えずに欲望感全開の綾小路君と交流を深めている事から、こうなる事は予想していましたし、卒業時は5股くらいすると思っています」

あ、こうなる事は予想されていたのですか。それはそれで何とも言えない気分だな。

「それに……」

「それに？」

俺が尋ねるとひよりは遠い目で窓の外を見る。

「由比ヶ浜さんの愚行のおかげで、殆どの事に怒りやストレスを感じなくなりましたので……アレに比べたら八幡君の3人目の恋人関係の話なんて些細な話です」

「……」

どんだけ由比ヶ浜の行動は酷いのだろうか。一部しか見えないが毎日過ごすひよりのグループの苦痛は全く想像出来ないな……

「つと、ともあれ朝比奈先輩を3人目の恋人にしたいなら私はどうこう言いません。朝

比奈先輩も事あるごとに私を氣遣つてくれる優しい人ですし」

いや、なずな先輩じゃなくても氣遣うと思うぞ？

「何にせよ八幡君の今後の身の振り方は後にしましょう。今は癒してください」

言いながらひよりは俺の膝に乗つて抱きつくや否やキスをしてくるので俺もキスを返す。

「んっ……頑張れよ、ひより……ちゅっ」

「んむっ……ちゅっ……んあっ、辛いですけど、頑張りますっ」

ひよりが少しでも楽に過ごせますように。

そう願いながら俺は時間の許す限りひよりとキスを続けた。

尚、昼休み終盤に由比ヶ浜がギャーギャー喚きながら近寄つてきた際はひよりのストレスが一足早く再燃する事を危惧したが、松下が足払いで転ばせてから白波が顔を踏んで黙らせてくれた。

ちなみに由比ヶ浜はその事を学校に訴えたが、松下と白波は足が滑つたと言い、周りの生徒も2人の味方と嘘を吐いたので2人は軽い処分済んで安心しました。

数時間後……

「つたく……本当に由比ヶ浜の奴、ぶっ殺したい」

脱衣所にて俺は怒りに満ちた声を呟きながら服を脱ぐ。午後の課題を全て済ませて夕食を食べ、風呂場に行こうとしたら、再度目を腐らせたひよりと出会った。

それだけで何があったのかわかったので、グループメンバーを先に風呂に行かせて、ついさっきまで校舎裏でひよりを癒していたのだ。

その際に由比ヶ浜の愚痴を聞いていたのだが、相変わらず教師や先輩にタメ口＋暴言を吐きまくり、注意したなずな先輩にも暴力を振るおうとしたらしい。

その際は松下＋白波が転んだ拍子に偶然クロスボンバーを叩き込んで黙らせたが、由比ヶ浜と同じグループのメンバーのストレスは爆発的に加速したらしい。

とかひより以外以外のメンバーはどうやってストレスを発散させているのだろうか。というかこのままだと櫛田のように白髪に悩む女子が増えそうだな……

そんな事を考えながら服を全て脱いでから腰にタオルを巻いて風呂場に行こうとしたら騒ぎ声が聞こえてくる。また馬鹿共が騒いでいるのか？

内心嫌な気分になりながらも風呂場に入ると……

「凄え……まさにTレックス同士のぶつかり合いだろ」

「ああ。とうかコイツら、ヤバイ薬使ってるだろ」

「その方が信憑性が高い……あ！もう1人の女誑しが来たぞ！」

「本当だ！比企谷ならもしかしたら……！」

風呂場の中心にて綾小路と高円寺が下半身を曝け出していて、周りの皆が驚愕の雰囲気を生み出していて、一部の馬鹿を俺を指差す。

（やってる事は大体わかったが馬鹿をやってる事には変わらないのかよ……）

そう思っている中、周りは騒ぎ立てる。

「比企谷！外せよ！」

「そうだ！絶対王者に挑め！」

「外せ！外せ！外せ！」

外せコールが煩い。今直ぐ逃げ出したいが今逃げても明日があるから余り意味がない。

仕方ない、外すか。

そう判断した俺はため息を吐きながらバスタオルを外すと……

「は、馬鹿な……………」

「絶対王者が3人だ、と……………」

「化け物かよ……………」

周りから驚愕の聲が上がる。実際俺のはかなりデカいから見せたくなかったんだよ。

内心ため息を吐く中、綾小路が口を開ける。

「どうやら王者は比企谷だな高円寺。お前はさつき大きさが同じなら経験値で勝敗が決まると言ったが、経験値なら普段3Pしている比企谷がトップだ」

「そのようだねえ。残念ながら私は負けたようだ。敗北なんて久しぶりだ」

高円寺は目を瞑って首を横に振り、敗北を認めるがこんな勝利は全く欲しくない。

「テメェら、王者をコールしてやれよ」

ここで龍園が余計な事を言ってくるがお前はマジで黙れ。

龍園に不満を抱く中……………」

『比企谷！比企谷！比企谷！』

比企谷コールが始まり、頭が痛くなる。全然嬉しくないコールだ。

というか経験値は俺の方が上でも将来性は綾小路の方だし、綾小路が王者だろう。

（何か疲れを取る前に更に疲れちゃった。後でなすな先輩に甘やかされる際、普段より強く甘えてみるか）

た。そう判断した俺は再度ため息を吐きながら身体を洗うべくシャワーに向かうのだった。

## 戦術

「あ、麻子ちゃんの胸、凄く大きいね」

「もく、夢ちゃん。変な事言わないでよ。帆波ちゃんに比べたら自信無くすよ」

「帆波ちゃんは例外だよ。でも私はあんまり大きくないから。やつぱり胸は大きいのが一番じゃん」

「違いますよ小橋さん。胸が幾ら大きくても胸の持ち主に常識が無ければ無価値になりますよ」

風呂にてCクラスの網倉麻子と小橋夢が胸の話をしていると、同じ小グループの有栖が割って入る。その言葉に重みがある。

有栖の言葉に小橋や網倉のみならず、この場にいる全員が納得した表情になる。

「だよね。由比ヶ浜さんなんか見た目とスタイルは良いけど性格が最悪だし」

「それを考えるとやつぱり人間は中身が大事だよ」

「とかひよりは大丈夫なの？ 昼休みに比企谷君に甘えまくっていたけど胃痛でリタ

「イヤとかないよね」

恵が有栖に質問する。ひよりと友人関係なので違うグループでも心配する。

「……わかりません。あの塵の愚行は私達の常識外ですから。とりあえず八幡君には頑張って貰います」

合宿初日の夜、有栖はひよりから「合宿中、八幡君と過ごせる時間は独り占めさせてください。由比ヶ浜さんの相手は疲れすぎます」と頼まれ、有栖は承諾した。八幡といちやつけないのは残念だが、ひよりの気持ちも痛いほどわかるからだ。

あの異常者と一週間も同じ部屋で寝泊まりなど想像するだけで吐き気を催してしま  
う。

「ふう、疲れた疲れた」

「やっぱりお風呂が癒しだよ」

と、ここで由比ヶ浜が所属するグループの姫野ユキや白波千尋が身体にバスタオルを巻いて風呂場に入ってきて、少し遅れて松下や王も入ってくる。

「あ、ユキちゃんに千尋ちゃん！お疲れ様！大丈夫だった！」

「松下さんも先に洗って良いわよ！」

由比ヶ浜が所属するグループメンバーが入ると風呂場にいる女子は一齐に労い、シャワーの前にいる女子は松下達に場所を譲る。グループもクラスも関係なく、松下達に気

遣いや労りの感情を向ける。

「ありがとう。じゃあお言葉に甘えて」

松下達は礼をして椅子に座る。

「そうそう。遠慮しないで。どうせ今日も由比ヶ浜さんが暴れたんでしょ？」

「ええ。椎名さんが本当に不憫よ」

「朝比奈先輩も由比ヶ浜さんに注意したら逆ギレされてマジで可哀想」

「椎名さんは比企谷君に癒されないとね。ま、椎名さんは比企谷君に甘えてるから遅れると思うよ」

そんな返事が返ってくるが、有栖は朝比奈の名前を聞いて眉を顰める。

何故ならなずなは八幡に対して明らかに好意を抱いているからだ。王様ゲームでは八幡とキスをしたし、その後にもスパ施設で八幡にディープキスをしている。

自分やひより以外の女子を恋人にする事は予想していた。現に二股かけているし、最近になって欲望に忠実になって複数の女子と恋愛をしたがっている綾小路の貪欲さが八幡に影響しているだろうから。

そして恐らく直ぐに3人目の恋人になるだろう。八幡に好意を抱くなずなは女性として高い完成度を持っている。見た目は美しくスタイルは抜群、更には精神に異常がある由比ヶ浜に対しても改善を求める真面目さ、由比ヶ浜により疲弊するひよりを気遣う

優しさなど、モテる要素が詰め込まれているのだ。

そんな彼女が八幡にアプローチをしたら落ちる可能性は極めて高い。

彼女が八幡の3人目の恋人になるのは予想の範囲だ。有栖は八幡が最終的に5人くらいの恋人を作ると予想しているからだ。

しかし問題はそこではない。なずなが恋人になった瞬間、持ち前の武器を駆使して八幡の1番になる可能性が高い。悔しいが女子力は向こうが遥かに高いのだから。

(別のやり方で八幡を誘惑するのはどうでしょうか……例えば八幡君をパパと呼ぶみたい)

小柄な身体を活かすには別のアプローチで切り込んでみるのも戦術の1つだ。以前八幡にお兄ちゃん呼びして甘えたら興奮してくれたし、やってみる可能性が高い。

「……す。有栖!」

「つーどうしましたか恵さん?」

隣に使っている恵が話しかけてきたので、慌てて返事をする。

「いや、なんか考えているように見えたから。雪ノ下が試験の駅伝で足を引っ張らないか不安?」

「い、いえ。それも不安ですが、八幡君の女誑しっぷりについて悩んでました」

「なるほどね。あたしも悩んでるよ。清隆なんか昼休みにも鬼龍院先輩に抱きついて

お姉ちゃん呼びして、鬼龍院先輩に顎クイされながら甘やかされていたし」

「そ、そうですか。綾小路君は中々上級プレイを好んでいますね」

ホワイトルームで淡々とチエスをしているのを見た時は全く想像出来ない光景だ。

「しかもアイツ、堀北さんをボコして性奴隷にするとか、神室さんに牝の顔を浮かばせて淫語を連発させたいとか言ってるし」

まさか自身のパシリという名前の側近を狙おうと予想外だ。スパイ云々ではなく純粹に快樂落ちさせたいのだろう。

ぶっちゃけ見てみたいと思っってしまった有栖だった。

「……まあ、同意の上なら特に突っ込みません」

「本当に食欲なんだから……というか比企谷君はかなり朝比奈先輩に落ちかけてるよ」

「っ！それは本当ですか？情報ソースは？」

聞き捨てならない情報に有栖は聞き返す。

「清隆だけど、朝比奈先輩が比企谷君に2人きりの時はママって呼ぶように約束を取り付けたらしいよ」

本当は話す事じゃないが、恵は親友の恋愛事情を考慮して話すことにした。

（2人きりの時はママ……どうやら朝比奈先輩も甘やかすのを好むようですね。やはり

……）は私も偶に八幡君をパパと呼ぶしか……）

八幡が近親相姦ネタを嫌ってないのは知っている。以前八幡が部屋で綾小路に付き合って親子もののAVを見ていた際に鉢合わせしたのだから。

「そうですか。情報ありがとうございます。ところで恵さんは今夜も綾小路君とセックスをするのですか？」

こっそり耳打ちすると恵は赤くなりながら小さく頷く。想像以上に関係が進んでいくようだ。

（私も負けてはいられませんね。この合宿ではひよりさんに八幡君を譲っていますが、合宿後は負けません）

そう決意する有栖。しかし彼女はこの合宿中、なずなが想像以上に攻める事をまだ知らなかった。

「まったく、高校生にもなつて男性器の大きさを比較するなんてアホだろ」

「オレとしては大きいのは悪くないぞ。恵がフェラする時とか苦しいけど頑張る姿が愛

おいしいからな」

「頼むから廊下で堂々と言わないでくれ」

風呂から上がった俺は綾小路と廊下を歩きながら風呂場での件を話す。

と、ここで男子が泊まる校舎に向かう途中で女子が泊まる校舎の入り口付近で揉め事が見える。

「……やつぱりダメじゃん。橘さんさあ、適当なアドバイスはやめてくれない？」

「いや。元々は猪狩さんが言った事じゃ……」

「はあ？ 私は撤回しようとしたけど橘さんが決めたんじゃない？」

「そうだよ。猪狩さんに罪を擦りつけないでよ」

「酷いよね。謝りなよ」

見れば元生徒会書記の橘茜先輩が複数の女子から責められる。

「随分と容赦ない責めだな。女子って怖っ」

女子の虐めつて陰湿な印象が強いんだよなあ。総武中にいた頃も虐めで生徒会長にさせられそうになった奴が居たし。

「……いや、アレは虐めじゃなくて戦術の1つの可能性がある」

「戦術？」

「ああ。あのグループの編成次第では橘先輩を……あ、楓花お姉ちゃん」

話してゐる途中で綾小路は前方にいる鬼龍院先輩の元に走っていき、抱きつく胸に顔を埋める。無表情のままお姉ちゃん呼びは笑うわ。というか話してゐる途中で切り上げるな。

当の鬼龍院先輩は笑いながら綾小路の頭を撫で撫でする。

「いきなりだな清隆。お風呂は気持ち良かったか？」

「まあまあ。いつかお姉ちゃんと一緒入りたい」

「仕方ない弟だ。では次の期末試験で全科目満点を取れたら一緒に入ってやろう」

「え？そんなので良いのか？余裕だな」

綾小路はそう返すが、有栖の作った問題を全問満点だったし余裕だろうな。

しかし綾小路の奴、第2の彼女を作るのに全く臆してないな。なずな先輩に対して、俺もああやって自分の欲求に素直になった方が良いのだろうか？

俺は今日のひよりの発言や綾小路の臆さない行動を頭の中で浮かべてそう考えながら一足先に部屋に戻ることにした。

だつて口元に笑みを浮かべる綾小路にイラツときたしな。

## 進展

消灯時間になってから一時間が経過した。

俺はベッドから起きて部屋を出る。

「比企谷も行くのか？」

綾小路もベッドから起きてそう言ってくる。

「まあな。お前は何処で軽井沢と過ぐすんだ？」

「第三炊事場だ。お前は？」

「第一炊事場だ。結構離れてるな」

俺が使う炊事場は女子校舎に近く、綾小路が使う炊事場は男子校舎に近い。

「そうだな。じゃあお互いに楽しもう」

「ああ」

俺達はそのまま外に出て俺は右に、綾小路は左に曲がる。綾小路が遠ざかるのを感じながら第一炊事場に向かう。するとなずな先輩が既に居て手を振ってくる。

「来たね。時間通りでママ嬉しいよ」

そう言ってなずな先輩……ママは優しい笑みを浮かべながら俺を引つ張る。

「本当は炊事場で過ごそうと思っただけど、良い場所を見つけたの」

言いながらママは少し歩き、体育倉庫のドアを開ける。そして中の電気を付けるとドアを閉めて鍵を閉める。

「この倉庫、昼間に見つけたけど風を防いで内側からも鍵の開閉が出来るの。良い場所でしょ」

「全くだ」

鍵の開閉が出来るとして事は少なくとも邪魔が入らないだろう。教師も校舎から離れた場所の体育倉庫に来ると思えない。

「じゃあ始めよっか。ママのおっぱい、見せるよ……」

ママは真っ赤になりながらジャージを脱ぎ、体育着を脱いで純白のブラジャーを曝け出す。

そして背中に手を回し、ブラジャーも外す。それによって朝も見た大きな胸がハッキリと見えてくる。

「じゃ、じゃあハチ君。ママのおっぱい、好きただけ吸って良いよ。赤ちゃんみたいにママに甘えてね……」

そう言って両手を広げてウエルカム体勢を見せてくる。そんな艶姿に俺は我慢出来

ず……

「……頂きます」

そのままママの乳首に口に含む。

「あっ……！」

同時にママは色っぽい声が喘ぎ、俺の中にある欲情を昂らせてくる。

そんな昂りに抗うことなく俺は乳首を吸い始める。

「んっ！はあ……あんっ！」

ママは敏感なようで俺がテンポを良く吸うと、強く吸うたびに喘いできて、息子をギンギンにしてくれる。綾小路ならそのまま押し倒してハメそうだ。

そう思っていると後頭部に柔らかな手の感触が伝わってくる。これは……

思わず上を見上げると、ママは恥ずかしそうにしながらも慈愛に満ちた眼差しで俺を見てきて……

「もつと激しく吸って良いよ。ハチ君の全てを受け入れてあげるから……良い子良い子」

そのまま優しく後頭部を撫でてくる。伝家の宝刀の良い子良い子攻撃は俺の理性にクリティカルヒットする。

俺はそのまま夢中になって乳首を口の中で攻めまくる。

それこそ屈服させる勢いで。

「あんっ！ハチ君っ！甘えん坊んあっ！だねっ！もつと一杯、ああっ！」

なずなは八幡に激しく胸を吸われ、嬌声を上げながらも八幡に良い子良い子攻撃を続ける。これが続けると八幡が甘えん坊になるのを理解しているからだ。

なずなは胸から快感と喜びが伝わって最高の気分になっている。実はなずなは乳首が性感帯の中でも敏感で吸われるたびに快感を感じ、愛しく思う八幡が自分に夢中になっけてくれているのは喜びである。

なずなが喘ぐ度に八幡は更になずなを求めて、今は吸っていない方の胸を手で揉み始めている。

「やあっ！気持ち良いよハチ君！あんっ！ダメエ！もつとお！んあっ！」

なずなの声も高くなり、更に強く抱きしめる。表情は蕩けて完全に牝の表情になって

いる。

そして……

「んんっ！好きっ！好きだよハチ君！もつと攻めて！ハチ君に攻められるの気持ちいいよお！ハチ君大好きいっ！」

喘ぎながら自分の気持ちを口にしてしまった。

「やあっ！気持ち良いよハチ君！あんっ！ダメエ！もつとお！んあっ！」

ママの声も高くなり、更に俺の頭を強く抱きしめる。チラツと顔を見れば、表情は蕩

けて牝の表情になりながら喘いでいる。包容力のある女子が淫乱な表情を浮かべるのは背徳感があつて興奮するな。

そして……

「んんっ！好きっ！好きだよハチ君！もつと攻めて！ハチ君に攻められるの気持ちいいよお！ハチ君大好きいっ！」

そんな事を言つてきたので思わず乳首から口を離して顔を上げる。今の聞き違いじゃないよな？

「えつと、ママ……今の本当か？」

確認の為に聞くとママは蕩けた表情のまま頷く。

「うん。ハチ君が好きっ、一杯甘やかしたいし甘やかされたいっ。もつとエッチな事をしたいよっ……んっ……」

ちゅっ ちゅっ ちゅっ

自身の欲求を口にしながら沢山キスをしてくる。キスからは愛情が伝わり、俺の頭をトロトロにする。

そしてそのまま艶のある眼差しで俺を見ながら抱きついてくる。

「だからハチ君。私を3人目の彼女にして……私をハチ君の側に置いて……」

俺に告白する姿はとても色っぽく、それでありながら美しさがあった。

しかしここで首を縦に振るのは抵抗がある。ひよりは許してくれたが、有栖にはまだ許してもらってないのだ。この状態で受けるのは「ハチ君……」ん？いきなり服を掴んでどうしたんだ？

疑問に思っていると……

「ハチ君は私が側にいるの、嫌？」

涙目で不安そうに上目遣いで見上げながらそう聞いてくる。

その表情を見た俺は自身の胸中に支配欲が生まれるのを自覚してそのまま抱きしめる。

「……ハチ君？」

「嫌じゃないです。こうやって甘えられるのは嫌じゃない」

綾小路の事を言えたもんじゃないが俺は間違いない。2人の恋人がいるのに3人目の恋人を欲しがり、それ以前に二股も相当な屑だ。

しかし屑から真つ当な人間に戻るつもりはない。ひよりも有栖も手放すなんて絶対

に嫌だし、なずな先輩からぶつけられた気持ちも無視するのも嫌だ。

それならとことん屑になってやろうじゃないか。ルールさえ守れば良いのだ。有栖の件についても、「有栖から許可を得てからなずな先輩を恋人にする」のではなく「なずな先輩を恋人にしてから有栖に認められるようにする」って方針にすれば良い。

そう決意した俺にはもう常識を破る事に躊躇う必要はない。自分のやりたいように生きよう。

俺はそう決意して……

「ママ……いや、なずな先輩。有栖からは認められるように尽力しますから、俺の女として生きてください」

ちゅっ

言いながら俺はなずな先輩の唇にキスをする。するとなずな先輩は目尻に涙を浮かべながら満面の笑みを浮かべて……

「……はい。喜んで！」

ちゅっ

そのまま俺にキスを返してくる。俺は愛しさからなずな先輩を跳び箱に座らせ、その横に座ってキスを繰り返す。

「んっ……ハチ君っ、もっとして……ちゅっ」

「……はい。なずな先輩が満足するまで……んむっ」

「んあっ……ハチ君、しゅき、だいしゅき……！」

俺達は互いの身体を触り合いながらキスを続ける。

この先は茨の道なのかもしれない。しかしこれから少しずつ、それでありながら着実に力を付けて茨の道も乗り越えていきたいものだ。

全て、ひよりと有栖、たった今恋人となったなずな先輩の為だ。

「なずな先輩……んっ。ちよつとキスが多過ぎますから一旦ストップで……これからも甘やかしてください。時には甘えても良いですから」

「んあっ……わかった。そうするよ……ハチ君」

「なんすか？」

「これからも宜しくね。恋人として……」

「……はい」

そう頷いてから俺は彼女を抱きしめて、睡魔がやってくるまでキスを交わし合うのだった。

## 反応①

「えへへ……ハチ君の恋人……えへへ」

なずなはベッドの上で幸せな気分になりながら笑みを浮かべる。つい一時間ほど前に八幡の3人目の恋人になれたが、その幸せな気分は全く薄れずにいる。

（恋人になったし、頑張つて幸せにしてあげないと。ハチ君が望むからえ、エッチな事も……）

なずなは八幡に抱かれる場面を想像する。普段甘えん坊な後輩が激しく攻める……気持ち良さそうだ。

「っ！考え過ぎだよ！私の馬鹿……ま、まあ！これからも一杯甘やかしてあげるから、ハチ君も私を愛してね……大好きだよハチ君」

そう呟きながらなずなは男子が寝泊まりする校舎の方に身体を向けて、そこで寝ているであろう恋人に愛情を放つのだった。

翌日……

「……つて事があつてなずな先輩も恋人の1人にする事にした。これから2人に認められるように頑張るから宜しく頼む」

昼休み、食堂の席の一角にて俺はひよりと有栖に昨日の件を正直に話すと2人の口元が引き攣る。

「……なるほど。昨日の今日で随分と早いですね」

「それに事後承諾とは八幡君にしては珍しいですね。この貪欲さ……綾小路君の影響ですなね？」

有栖にそう言われて振り返ってみると……

「否定はしない」

間違いなく綾小路の自身の欲に対する素直さに影響されているだろう。

「……客観的に見たら酷い悪循環ですね」

ひよりがそう口にする。確かに綾小路は俺が二股をかけている事から複数の女子と関係を持つのは問題ないと思つて俺を参考にした。

俺は綾小路の欲望に対する素直さを参考に、なずな先輩を手放したくない思いから事後承諾の形でなずな先輩を恋人の1人にした。

互いに互いの影響を受けているが、世間一般的に見れば俺と綾小路は間違いなくクズ野郎で、互いにクズ度を高め合っているので悪循環という間違いじゃない。

しかし……

「そうかもしれない。けど俺は後悔していない」

あの時のなずなさんの表情を見た俺は手放したくない気持ちが湧き上がって今でもその気持ちはある。

「はあ……わかりました。こちらも八幡君の部屋に押し入ったりと強引な面を見せましたし、反対はしません。ですが1番の座は私のもんです」

ちゅっ

有栖はそのまま俺にキスをしてくる。まるでお前は私のものであると示すかのよう  
に。

「あつ、狡いです。八幡君の1番は渡しません」

ちゅっ

ひよりも負けじと有栖を押し除ける形でキスをしてくる。

「私のもんです」

有栖も負けじとひよりの顔を押し除けようとする。2人が俺自身の1番になりたい  
と思ひ、奪い合いをする……見ていて凄く嬉しく思う。

そしてこれからはなずな先輩もこの奪い合いに参加するのだと想像するだけでドキ  
ドキしてムラムラしてしまふ。

チラツと横を見ればなずな先輩が物欲しそうに見ているが、合宿が終わったら3人ま  
とめて相手をしよう。

そう決意しながら俺は未だに奪い合いをする2人に対して、昼休みが終わるまで交互  
にキスをするのだった。

「ねえ櫛田さん。ちよつと良いかな？」

八幡がひよりと有栖の2人相手にキスをしている中、八幡から少し離れた場所で食事  
をしていた櫛田桔梗は話しかけられたので顔を上げると王美雨と松下千秋と佐藤麻耶  
の3人がいた。

「良いよ、どうしたの？」

「榎田さんって由比ヶ浜さんにイラついたらどうやってストレスを発散させてるのかな？」

「あゝ」

佐藤の問いに榎田は目の前の3人が由比ヶ浜と同じグループである事を思い出して同情の眼差しを向ける。1週間も由比ヶ浜と同じ部屋で寝泊まりなんて拷問でしかない。自分ならハゲる可能性があり。

そんな3人に敬意を抱きながら榎田を開ける。

「うくん。由比ヶ浜さんに幻滅する前はいつか改善してくれると思ってやる気を出してたね。けど2学期終わりになってイライラの限界が来て、それ以降は不満を内心に留めないで直ぐに吐き出すようにしてるかな」

実際由比ヶ浜以外にもハッキリと物を言うようになった。クラスの皆は由比ヶ浜を含む5馬鹿の所為だと思っていて、仕方ないと思われる。結果的に榎田は以前よりストレスが軽減しているのは紛れもない事実だ。

「でも不満を吐き出して由比ヶ浜さんに聞かれたら、その数倍の喚きが返ってくるよね？」

王がそう尋ねると榎田は難しい表情になる。

(そうなんだよね。あの女の思考回路は悪い意味で予想外過ぎるから、みーちゃんの言う事も間違いじゃないからなあ)

文句を言ったらキレるのは当たり前、氣遣ったつもりでも逆ギレするし、構わなかったら無視するなどキレルし、何をしてもキレるので対策が取りにくいのだ。

「まあね。結局私のアドバイスはある程度までしか役に立たないし、最後は自分達で解決を見つければ必要があると思うよ。まあ強いて言えばこれまでに経験したことのない刺激を模索してみたら？」

「そっか……未経験の刺激ねえ……エッチとか？」

「ええっ?!」

「いきなりだね? 何で?」

佐藤の呟きに櫛田と王は驚き、松下は純粹に疑問に思う。

「いや、だつてアレ……」

佐藤が指差した先、右サイドでは八幡がひよりと有栖相手に交互にキスをして、左サイドでは綾小路が軽井沢を膝の上に乗せて胸を揉みしだきながらキスをしている。バカプルここにありと言った表情だ。

「3人は雪ノ下さんと由比ヶ浜さんからの被害が酷いけど、エッチな事してる時は幸せそうじゃん」

言われて見直せば、軽井沢は羞恥全開であるが幸せの色が表情にある。ひよりと有栖は夢中になってキスをしているが顔には愛情がハッキリ見える。

「まあ確かに……」

ストレス発散にエロいことをするのは異常かもしれない。

しかし由比ヶ浜という存在も異常であり、異常によつて溜まったストレスを異常な行為で発散させるのも一理あると榎田のみならず、松下と王も考えてしまう。

「で、でも！ 流石にあの2人の間に割つて入るのは危ないんじゃないかな（特に比企谷の方は絶対坂柳を敵に回すでしょ）」

榎田は表面上はやんわりと、内側では激しく否定する。Aクラスのリーダーと付き合い合っている男と肉体関係を持つなんて怖過ぎる。

「や、やつぱり綾小路君は兎も角、恋人関係に水を差すのはダメだよ」

「まあ綾小路君は兎も角、比企谷君に手を出すのはマズいでしょ」

王と松下はそう返す。普段から時と場所を考えずに軽井沢といちやつきながら、他の女子にアプローチをかける綾小路なら問題ないと判断する。実際この2人は軽井沢といちやついている最中の綾小路から一緒にどうだと誘われて、軽井沢が綾小路をぶん殴っている光景を見ている。

「そうかもね。まあエッチ以外にも解決方法を模索してみるよ、ありがとね榎田さん」

「全然良いよ。気にしないで」

そう返す榊田だが、仮に彼女らがベストなストレス発散方法を身につけたら参考に聞き出すつもりだ。

イラついた場合、素の自分を出す事でストレスの軽減をしているがそれでも完全に発散させるのは無理だし、由比ヶ浜からの与えられるストレスは一回の気分転換では発散出来ない事もあるのだ。

(本当にムカつくなあ。マジで頭がハゲる前にどうかしないと……)

榊田はため息を吐きながら少し離れた場所で他人を見下した発言をしている雪ノ下と由比ヶ浜を見て舌打ちをするのだった。

## 将来

「ふう……疲れた」

「ああ。今日も恵を抱いて気分良く休むか」

夕方、俺は息を吐きながら伸びをすると隣の綾小路は頷く。今日の授業は全て終わったの後は飯食って風呂に入って寝るだけだ。というか綾小路はブレないな……

まあ綾小路のぶっ飛び具合はともかく、結構疲れている。娯楽が少ないのもひとつの理由だ。食事は粗食で漫画もない。ぶっちょやけ退屈過ぎる。

しかし一番疲れる要因は由比ヶ浜だろう。事あるごとにギャーギャー騒いでいて、周りの皆を不快にさせてくる。アレと同じグループのひより達には心底同情する。合宿が終わってから、ひよりのグループメンバーは白髪が大量に増えてそうだ。

そんな事を考えながら風呂場に向かうと、ひよりとならずな先輩が歩いていた。髪の毛は艶めいているし、風呂に入ったばかりなのだろう。

「おや八幡君に綾小路君」

「あ、2人ともお疲れ」

恋人2人は愛想良く手を挙げてくるが……

「いやいや2人に比べたら俺の疲れなんて……」

温いだろう。実際2人の顔には疲労の色が強く見える。2人は由比ヶ浜と同じ大グループでひよりに至っては小グループでも同じだし。

「2人は血尿とか出てませんかよね？」

綾小路の発言はセクハラではなく本心からの心配だろう。由比ヶ浜に振り回されていたら血尿が出てもおかしくない。

「あはは……まあね」

「本当に何なんですかあの女は……もう全て投げ出したくなりましたよ」

なずな先輩は苦笑いを浮かべ、ひよりは苛立ちを浮かばせている。普段穏やかなひよりにこんな表情をさせる時点で由比ヶ浜には才能があるな。社会に不要な才能だけど。

「あー、もう本当にムカつく！有栖の父親って理事長なんだし、あの2人を退学させるように頼んでよ！」

「そうしたいのは山々ですが、入学前に特別扱いはしないと云われたので無理でしょう」  
そんな声が聞こえてきたので振り向けてブチ切れている軽井沢を有栖が宥めていた。

「あつ、清隆！疲れたから甘やかして！」

「わかった。思い切り甘やかしてやる」

「あんっ……いきなりお尻はやめなさいよ、馬鹿っ」

言いながら軽井沢は綾小路に抱きつき、綾小路は右手を軽井沢の背中に、左手を軽井沢の尻に回す。廊下であつてもその手の速さ……天晴れだ。

「で？今度は雪ノ下達が何をしたんだ？」

「座禅に疲れていた雪ノ下さんに私のグループメンバーが文句を言っていたら……後はわかるでしょう」

由比ヶ浜がキレて騒いだ訳か。アイツはTPOを弁える事が出来ないのか？まあ無理だろうけど。

「だから清隆。今夜もエッチしようよ」

「わかった。じゃあ炊事場近くの小屋で今夜な……そういう訳だから比企谷。坂柳達とセックスするなら体育倉庫の方を使ってくれ」

そんな風に堂々と提案するな馬鹿。恋人になつたばかりのなずな先輩は真っ赤だし。

「はいはい。先に飯を食つてるからな。行くぞお前ら」

俺がそう言うのと恋人3人が頷くので、軽井沢の尻を堪能している綾小路に背を向けて食堂に向かう。

食堂に入ると大分混雑していて適当な場所を探すべく周りを彷徨っていると南雲会長が話しかけてくる。

「よう比企谷。なずなど一緒とは珍しい組み合わせだな」

探る様な目つきを向けてくる。

「そうですね。ひよりと一緒に由比ヶ浜によって生まれたストレスに対して愚痴ってるところを鉢合わせして、一緒に飯を食う流れになりました」

「またかよ？お前からストレスで頭が禿げないように注意しろよ」

そう返すと南雲会長の眼差しから疑惑が消えて同情の眼差しが生まれて、ひよりとならずな先輩に向けられる。生徒会長からしたら由比ヶ浜の存在は間違いなく頭痛の種だろう。

「もう本当に禿げそうだよ。雅って特別試験にある程度口出し出来るんだし、何とか出来ないので？」

「いつそ最下位は退学というペナルティがある人気投票形式の特別試験とか作れませんか？」

「待て椎名。お前は生徒会長を神聖視し過ぎだ。そんな理不尽な試験を生徒が作れるはずがないからな」

南雲会長が呆れながらそう返す。どうか以前佐藤もそんな事を愚痴っていたな。どれだけ由比ヶ浜に消えて欲しいんだよ？

「そうですか……残念です」

「そんな訳でちよつとハチ君に愚痴りたいんだよ。雅も付き合ってくれない?」

「遠慮しておく。比企谷にぶつけろ」

即座に逃げに入る南雲会長。

「ちよつと待つてください。後輩を放置しないでください」

後輩を見捨てるなんて生徒会長にあるまじき態度だ。

「諦めろ。大体俺だつて生徒会長としてDクラスの5馬鹿に対する苦情を聞いたり、教師から愚痴られるんだよ。頑張れ」

南雲会長が心底嫌そうにそう返してから俺達から離れていく。気持ちはわかるが足が早過ぎませんか?

「じゃあ端っこに行こうか。出来れば物影で。由比ヶ浜さんに見つかったら面倒だし」

なずな先輩がそう言つて歩き出す。その先には大きな柱があつて便利な場所だつた。

俺達は反対することなく柱の裏に隠れる様に座る。

「はあ……ようやく一息できるよ」

「本当にお疲れ様です。ところで朝比奈先輩、改めて確認しますが朝比奈先輩も八幡君の恋人になつたのですよね?」

有栖がジト目で俺を一瞥してからなずな先輩に確認するとなずな先輩は頷く。

「うん……坂柳さん達からしたら泥棒猫かもしれないけど、ハチ君の恋人の1人になつ

たよ」

「なずな先輩は気圧されることなくそう返す。

「そうですか。まあ八幡君が認めた以上、思う事はありますが無理に引き離す事はしません。ただ八幡君、極力これ以上彼女が増えない様に尽力してくださいね」

「そうですね。こうなる未来を予想していましたが、だからと言ってそう簡単に割り切れる訳ではないので、そのところは理解してください」

「ドスの効いた声でそう言うってくる有栖とひより。ハッキリ言っただけです。

「……努力する」

「そんな事はないと口にはしたいが、なずな先輩の前例があるので否定しきれないのが残念だ。

「尽力してください。それとさつき馬鹿2人に絡まれてストレスが溜まりました。それはひよりさんや朝比奈先輩もでしょうか？」

「はい」

「まあそうだね」

「有栖の確認に2人は頷く。

「やはりそうですか。どうでしょう？八幡君さえ良ければ今夜空いているらしい4人で体育倉庫に行きませんか？」

つまりそこでエロい事をするって訳だな。

「わかった。付き合おう」

3人がストレスを溜めていて、解消方法としてエロい事を使うなら協力するしかない。俺だって精神的疲労はあるからな。

俺がそう言うのとひよりと有栖は嬉しそうに、なずな先輩は恥ずかしそうに頷いた。

数時間後……

「さて……行くか」

「比企谷も0時集合か？なら途中まで一緒に行かないか？」

深夜12時、俺がベッドから降りると綾小路もベッドから降りる。

「ああ、良いぞ」

特に断る理由もないので2人で部屋を出て廊下を歩く。

「そういえば恵から聞いたが、朝比奈先輩も恋人にしたらしいな」

綾小路がそう言うってくるが有栖↓軽井沢↓綾小路って流れだろう。

「まあな」

「羨ましいいな。あの陽気な笑顔を淫らな顔に変えてみたいのか？」

「黙れ変態。直球過ぎるわ」

前から思っているが少し前まで感情が無かったみたいだったのに、今じゃコイツ欲望全開過ぎだろう。

「かもしれない。オレはもう自分の欲望に忠実に生きると決めた。卒業後の未来もな」  
「卒業後？どっかに就職したいのか？」

コイツの場合、ハイスペックだから高卒でも凄い会社に入れそうだ。

よって綾小路の卒業後のプランについて期待を持っていると、綾小路は真剣な表情を浮かべ……………

「いや、卒業までにハーレムを作ってから、人が少なくて外部から人が滅多に来ない離れ島でハーレムメンバーとエロに満ち溢れた自給自足の暮らしをする」

……俺の期待を返してくれ。

## ハーレム願望

「離れ島の生活……まあ確かに人によつては隔絶された場所でひっそり生きたいと思うだろう。けどそれだったらこの学校に入った意味は無くなつたな」

高度育成高等学校は社会で活躍する人間を沢山することを目標にしている学校だが、社会で活躍どころか社会から離れた場所に身を置く生徒は異端だろう。

「まあそうかもな。実際前はそんな事を考えてなかつたが、今は女に囲まれた生活をしたい。比企谷もどうだ？」

いや、どうだつて……俺も離れ島で農業しながら暮らすつてか？

なずな先輩は兎も角、身体能力が低いひよりや杖無しじゃ歩けない有栖にはキツイ可能性が高い。

「一応考慮しとく」

まあ人が多い場所で生活するのは好きじゃない、行くのは難しいがそこそこ人がいる小笠原あたりで働くのは良いかもしれない。そこらへんならネットは使えるだろうし、有栖もネットで働けるからな。

そんな事を考えながら校舎を出ると女子が泊まる校舎がある方からから俺の恋人3人と綾小路の恋人の軽井沢がやってくる。

「来たか。じゃあオレ達は炊事場の方に向かうからお互いに楽しもう。行くぞ恵」  
「うんっ。じゃあまたね」

綾小路が軽井沢の腕を掴み、炊事場の方に向かう。

「んじゃ俺達も」

俺の言葉に3人が頷くので、昨日なずな先輩と恋人関係になった体育倉庫に向かう。そして中に入り、灯りをつけて鍵をかける。

「じゃあ早速脱いで下着姿になつてくれ」

「うん……あのさ、ハチ君」

「ん？なんですかなずな先輩？」

「えっと今からエツチな事をするけどさ、本番はまだちよつと緊張するから無しにして貰えないかな？」

なずな先輩がそう頼んでくる。

「もちろん。無理強いはいしないで今日はひよりと有栖を抱く所を見てください」

無理に手を出すつもりはない。既に恋人関係になったんだから焦るつもりはない。

「わかった。じゃあ脱ぐね」

なずな先輩のその言葉を皮切りに3人がジャージを脱ぎ始める。そして直ぐに下着姿になる。

白くて清楚な下着を着けたひより、アダルトイナ黒の下着を着けた有栖、ピンク色の可愛らしい下着を着けたなずな先輩。

三者全員魅力的で直ぐに俺の息子も昂る。俺は近くのマットに腰掛けて手招きすると3人が寄ってくる。

最初に寄ってきたひよりは俺の膝の上に乗って抱きついてくる。柔らかな感触が伝わってくる。

「んっ……八幡君。今夜は思い切り甘やかしてください。由比ヶ浜さんの所為で頭がおかしくなりそうです」

言いながら激しいキスをしてくるが、ひよりは余程辛かったのだろう。

「んっ……ひより、思い切り甘えろ。俺はお前の全てを受け止めてやるからな」

「ちゅっ……んむっ……はいっ……八幡君……」

なら今夜は少しでも気分転換になって欲しい。俺はひよりを抱きしめ返して舌を絡める。倉庫内にぴちやぴちゅと水音が響き渡る。

「八幡君。そろそろ私にもキスしてください」

「ここで右サイドから抱きついてくる有栖が不満そうに見てくる。スタイルは3人の

中で一番子供っぽいのがクールな雰囲気と合わさって独特な魅力を醸し出していて、ひよりの尻の下にある息子がムクムク大きくなり、ひよりはくすぐったそうに身を振る。

「ハチ君。私にも……一杯キスして」

左サイドから抱きついてくるなずな先輩は歳上でありながら子供っぽくおねだりしてくる。3人の中で抜群のスタイルのなずな先輩の身体が惜しげもなく俺に密着してくる。

「ああ。3人まとめて相手してやる……」

俺はそのまま有栖、なずな先輩にディープキスをしてからひよりにディープキスをする。

ひより、有栖、なずな先輩の順番にディープキスをするが……

「んっ……八幡くんっ……もっとしてください……」

「んむっ……んんっ……八幡君の舌、くすぐりたいです」

「ハチ君……好き、大好き……ちゅっ」

3人は艶のある眼差しを向けながら必死に俺の唇を求めてくる。そんな牝の表情を浮かべられたら……

（うん、俺も綾小路みたいにこの3人と人里離れた場所でのんびり暮らすのも良いかな）

少なくとも都会で働いていたら、知り合いにハーレムがバレた際に絶対に面倒な事になるのは明白だ。今のネット時代では少しの行動が知り合いに簡単に知られてしまうし、悪くないかもしれないな。

「……という訳で恵。卒業したら離島に移ってオレのハーレムメンバーとして一緒に暮らさないか？」

「前半は兎も角、後半は喧嘩売ってんの？」

炊事場近くの倉庫内、綾小路がそう口にするのと、下着姿になって綾小路の膝に乗っている軽井沢は額に青筋を浮かばせる。

一緒に暮らすのは大歓迎だ。離島は不便かもしれないが、都会で暮らすより時間に余裕がありそうでイチヤツつけるから我慢は出来る。

しかし堂々とハーレムを作ると言うのは苛立ちが走る。前からハーレムを作ると言っていたが、卒業後もビジョンを作っていたのは苛立つ。

「いや、本心だ」

「尚悪いわ!」

軽井沢が怒鳴るが綾小路は全く気にしないで、これからホワイトルームの刺客にバレないようにしっかりとしたプランを立てる必要がある。

(オレはもうあそこには戻らない)

感情を知った綾小路からしたらホワイトルームの存在は娯楽もなく女も抱けないので不快な存在でしかない。2度と戻らず自分の本能に忠実になって生きるつもりだ。

その為に次にやるべき事は……

「ちよつと?何を考えてんのよ?」

「ん?いや、早く楓花さんとセックス出来るくらいの関係になりたいと思っただけだ」

「ふんっ!」

軽井沢の肘が綾小路の腹に叩き込まれるが強靱な肉体を持つ綾小路には殆ど痛みはない。

「冗談だ。嫉妬する恵が見たかったからからかった。可愛かったぞ」

「んっ……ちゅっ……馬鹿清隆っ……んっ」

綾小路が軽井沢にキスをするると軽井沢は文句を言いながら舌を絡める。その姿に綾小路は情欲を抱きながら舌を絡めて、程よい大きさの胸を揉む。

(まあ楓花さんにも手を出すけど)

あのクールビューティーな先輩に弟扱いされながらセックスする事を綾小路は今から楽しみにしていた。他にも有栖の側近のツンデレっぽい神室、能力は学年最低レベルだが身体つきは良い佐倉など食いたい女子はいる。

また甘ちゃんの一之瀬や傲慢な堀北を八幡や龍園や有栖と一緒に調教してセックス抜きでは生きれないマゾ女にしたい気持ちもある。

既に綾小路の頭の中では様々な未来設計があるが、それをおくびも出さずに恵とキスをして、一段落すると恵を膝の上から下ろして、そのままズボンとパンツをずり下ろす。それによって高校生離れした巨根が露わになる。

「相変わらず大きいわね。じゃあ舐めるわよ」

軽井沢は呆れながらも忌避感を見せない。好きな男のモノなら嫌じゃないし、啜るのはキツイが射精した後に綾小路は頭を撫でてくれて幸せな気分になるからだ。

「いや、今日は違うやり方を頼む」

「?パイズリにして欲しいの?別に良いけどあまり自信ないわよ」

軽井沢の胸はそこまで大きくないのでパイズリをするとミスする時がある。まあ有栖は羨ましがっていたが。

そんな軽井沢に対して綾小路は……

「いや、今回は髪の毛を巻きつけて擦って欲しい」

「このど変態！」

軽井沢の左ストレートが綾小路の鳩尾にクリッティカルヒットした。

その20分後、軽井沢は白い液体が付着している髪を揺らしながら綾小路に尻を突き出して、綾小路が巨根を軽井沢の膣にぶち込んでいた。

## 3つの営み

朝比奈なずなは目を逸らさずにいた。恥ずかしい気持ちもあるが興味の方が強い、未  
来に備える必要があるからだ。

視線の先では……

「あっ！八幡君っ！そこです！もつと激しくうっ！ああんっ！」

「あっ！んっ！あっ！あんっ！八幡君っ……好きですっ！由比ヶ浜さんの所為で溜まっ  
たストレスを振り払ってください！」

有栖が八幡の顔面に乗って舌で膣を攻められる事で喘ぎ、ひよりが騎乗位の体勢で八  
幡の巨根を受け入れながら腰を振っている。

普段清楚な2人だが、今の2人は完全に乱れ切った雌の顔をしている。

(私もああなるのかな?)

少し怖い気持ちもあるし、あんな風に八幡に攻められたい気持ちもある。

「んっ……あっ……」

そう思いながらなずなは少し前に八幡に攻められてグシヨグシヨになった膣に指を

当てて自身を慰め始める。普段から八幡をネタにしているが……

「あんっ！んんっ！八幡君っ！好きっ！なずなをもっと虐めてっ！」

目の前に本人がいて激しい行為をしているので普段より刺激を求めて大声をあげてしまう。

しまったと思つたが時既に遅く、八幡は有栖の脛を舐めながらこつちを見て、目の色を変えたかと思えば舌と腰の動きを激しくする。

「っ！ひゃあんっ！ダメツ！八幡君っ！んあっ！」

「あんあんあんっ！八幡君は凄いです！もつと激しくうっ！」

それに伴い有栖とひよりも激しく喘ぎながら跳ねる。それに伴い八幡の舌と腰は更に激しくなり、なずなの右手の動きも加速する。

時間の経過と共に全員の動きは激しくなり続け……

「ああんっ！もうダメエ！」

「あああああああっ！イクっ！イっちゃいますっ！」

「んああああああああああっ！」

女子3人が一際激しい絶叫をあげる。3人同時に絶頂する。3人が恍惚な表情を浮かべる中、八幡の目は猛禽のように鋭い眼差しとなっていた。

そして暫くすると3人は呼吸を整えて、ひよりが落ちている杖を拾って有栖に渡して

から、なずなに近寄る。

「どうします？朝比奈先輩も興奮してましたし今夜処女を捨てますか？」

ひよりはそう言ってくる。なずなは当初、今夜は緊張するから本番はしない予定だったが、3人の淫らな姿を見てると情欲が高まったので……

「……うん、捨てたいな」

自分も八幡に求められたいし、八幡を求めたいので頷く。

「わかりました。けど次は有栖の番なのでその次に。来い有栖」

八幡が新しいゴムを付けながら手招きする。

「はい……では……っ！」

有栖は八幡の指示に従って腰をゆっくりと下ろして自身の膣を八幡の息子に挿入する。同時に下半身から伝わる圧迫感に息を呑む。幾ら行為を重ねて膣壁を八幡の息子に合わせても、巨根であるが故にどうしても圧迫感を感じてしまう。

「じゃあ動くぞ有栖」

「はい……私で一杯気持ち良くなってください……ああん！」

有栖が艶のある声でそう口にするると八幡は即座に腰を突き上げて、持ち前のテクニクで初っ端から有栖を大声で喘がせ始めた。

「あつあつ！八幡君、激しいですつ！もつと突き上げてくださいつ！んあつ！」

有栖が俺の上で淫乱な表情を浮かべながら腰を振る。普段なクールな姿など微塵もなく完全な牝の表情を浮かべている。それぎまたムラつとする。

「やんっ！んんっ！来ちゃいますっ！八幡君に攻められて気持ち良いですつ！」

有栖のスタイルは下手な小学生より劣っているが、太腿の肉付きや膣の締め付け具合、クールと淫乱の両立から魅力的で、何十回もセックスしても全く飽きる気がしない。

つと、そろそろ限界だな。

「射精るぞ有栖っ」

「私も！そろそろ限界です……あああああああんっ！」

「くっ……はあ……！」

どびゅっ！どびゅびゅっ！どびゆるるるるっ！

俺が射精すると同時に有栖が一際大きな声を上げながら絶頂に至る。本来なら追撃している所だが……

「お疲れ様有栖。今日はこれまでな」

これからなずな先輩を抱くので有栖のターンはここまでだ。

「……はい。明日以降にまたお願いします……」

有栖は息絶え絶えになりながらも微笑みを浮かべそう言ってくるので、俺は有栖を引き離し額にキスをしてからお姫様抱っこで平均台の上に座るひよりの横に座らせる。

そしてなずな先輩の手を掴み、そのままマットの上に乗せる。

「なずな先輩。本当に良いんですね？怖いなら無理しないで言ってください」

俺はなずな先輩をしつかり見て確認すると、なずな先輩は小さく、しかしハッキリ頷く。

「うん……私も八幡君とエッチしたい。だから私の処女、貰って？」

艶のある眼差しで俺におねだりをしてくる。どうやら覚悟は決まっているようだな。ならば俺も遠慮する必要はないな。

「わかった。じゃあ挿入れるぞ」

そう言ってから肉棒をなずな先輩の膣に少しずつ進めていく。

「うっ……んっ……んっっ！」

なずな先輩は少しだけ苦しそうだ。まあなずな先輩の膣はまだ俺専用になってないからな。

暫く進めると動きが止まる。いよいよ処女膜についたようだ。改めてなすな先輩を見れば小さく頷くので、一気に突き入れる。

「つつつつつつ！」

なすな先輩は唸り声をあげる。かなり痛そうだから無理に動かさずに暫く待つ。

「大丈夫ですか」

「うん。ちよつと痛いけど、ハチ君のものになれたような気がして嬉しいかな」

なすな先輩は目尻に涙を浮かばせながらそう言ってくる。顔には確かな嬉しさが見えるが、俺が相手では後悔はなさそうだ。それを考えると優越感が抱く。自分はこんな美少女3人とセックスしたのだ……とばかりに。

「じゃあ動きませすよ」

「うん。さっきの2人みたいに激しくして……」

いや、処女を失ったばかりであのレベルは無理だろう……なすな先輩には悪いが多少レベルを下げさせて貰う。

俺はそう判断して腰を引いてから再度突き入れる。

「んあつ！す、凄い！」

案の定、軽く突いただけで激しく反応するなすな先輩。やはりいきなり激しくは無理だ。

「あつ！んんっ！んんっ！激しいっ！ハチ君大好きっ！」

なずな先輩は美しい髪を揺らし、淫らに喘ぎながら俺に愛を伝えてくる。

「なずな先輩っ……先に卒業したら待つててください。もう誰にもなずな先輩は渡しませんから……」

なずな先輩は1年上の先輩なので、なずな先輩が卒業してから1年間は会えない。

「うんっ……待つてるからんあつ！ずっと待つてるから！ハチ君が卒業したらずっと一緒ああんっ！」

なずな先輩はそう言って足を俺の腰に絡めてキスの雨を降らせてくる。それに興奮した俺は手加減のレベルを下げて少しだけ今より腰の動きを早める。

「ああんっ！しゅごい！ハチ君のおチンポ、激しくてしゅきっ！もっどっ！もっどおっ！」

「わかりましたよ。なずな先輩って淫乱ですね」

「変なこと言わないでよ、ハチ君のんああああああつ！」

文句を言おうとしたタイミングで一突きすれば中断する。なずな先輩が睨むがそれを無視してピストンすると直ぐに淫乱な表情になって腰を振る、

そして暫くこのようになずな先輩を攻め射精感が少しずつ高まっていると、なずな先

輩の足が一段と強く絡まってくる。

「待ってハチ君！変な気分になって……んあっ！来ちやう！来ちやうから！」

どうやら絶頂が近いらしいが、経験して貰おう。

「却下です。絶頂してください」

断つて更に激しく攻める。

「ダメダメダメエエエエエツ！んっ……あああああああああつ！」

するとなまずな先輩は一際大きな声を上げて、ビクンビクンと跳ねる。絶頂したようで

顔には疲労と恍惚の色を宿している。

「どうでしたか？気持ち良かったですか？」

「……うん。ちよつと痛かったけど、ハチ君とエツチ出来て、幸せだよ。今日はもう無理

だけど、また、してくれる？」

「もちろんです。なまずな先輩が望むなら何度でも付き合いますよ」

「ありがとうハチ君。大好きだよ……」

俺は肉棒をなまずな先輩の膣から抜いて、唇にキスをするとなまずな先輩は嬉しそうにキスを返してくる。

「では次は私ですね。隣のマットに移ってください」

「え？4回戦目？」

てつきり3回戦で終わりに思った。大分夜も遅いし。

「お願いします。朝になつたらまた由比ヶ浜さんと朝食を作らないといけないので、少しでも気分良く眠らないとやってられません」

ひよりがそう言ってくる。まあひよりの立場なら仕方ないだろう。

俺はそう判断して隣のマットに移り、そのままひよりを押し倒して、膣に肉棒をぶち込んで腰を振り始めるのだった。

2時間後……

「さて恵。そろそろ次行くぞ」

「また!? もう6回戦もしたじゃん!」

「仕方ないだろ。恵は可愛いんだから性欲が止まらないんだ」

「馬鹿清隆……それなら仕方ないわね」

綾小路清隆と軽井沢恵は7回戦に突入する。ホワイトルームの最高傑作は性欲も最高傑作だった。

## 不平不満

「ふう……って、まだ綾小路はまだ帰ってないのかよ」

恋人3人と情事を済ませて部屋に戻れば、綾小路はまだ戻ってきていなかった。俺は3人相手に4回戦までしたが、綾小路の場合は軽井沢1人だ。アイツの巨根を相手に1人で何回も受け入れるって軽井沢も中々性欲が旺盛のようだな。

そう思いながら俺はベッドに乗ってゆっくりと瞼を閉じて、やってくる睡魔に逆らわずに身を委ねるのだった。

翌朝……

「あー、眠い……」

「大丈夫か？睡眠不足は手元が狂うぞ」

「お前に言われたくない。というかお前は何時に帰ってきたんだ？」

午前5時前、俺は欠伸をしながら野菜を切っていると隣にいる綾小路が睡眠不足云々言ってきたが、コイツには言われたくない。

「2時だな」

「……つまり睡眠は2時間ちよいかよ」

「恵の膾が気持ち良くてな。仕方ないだろう」

俺達はヒソヒソと話す。流石に堂々と夜中に抜け出して女を抱いていたなんて言えないからな。

「それにしてもハーレムというのは受け入れ難いみたいだな……恵はハーレムの話をすると不機嫌になるし」

綾小路は心なしか普段よりしょんぼりしているように見えるが、軽井沢の反応が普通だ。俺は一応ハーレム持ちだが、なずな先輩は兎も角、ひよりと有栖は自分が1番でないと気が済まないタイプだ。

「だが諦めるつもりはないだろう」

「もちろんだ。可愛い女子を囲んでセックスに満ちた暮らしをするのが、オレにとってオレ自身が最初に決めた目標だ」

さ、最悪の目標だな。しかも手に握り拳を作ってやる気を感じるし。

「だったら由比ヶ浜とかはどうだ？見た目だけ悪くないだろ」

見た目だけはな。

「アレはない。アレは人じゃなくて塵だ」

綾小路は無表情から嫌悪感剥き出しに変わる。コイツにこんな表情をさせるあたり、ある意味由比ヶ浜は凄いな。

「済まん、俺が悪かった」

「全くだ。しかし椎名のグループに由比ヶ浜がないのは幸いだ」

綾小路の言うように少し離れた場所ではひより達は調理をしているが由比ヶ浜の姿はない。大方煩い上に足手纏いだから寝てろって言ったんだろう。

まあそれが正しい。アイツは雪ノ下以外の人間を苛立たせる天才だから居ない方が作業効率が良いしな。

「話を戻すが、ハーレムを作る際に恵の不機嫌を抑える方法とかに妙案はあるか？」

「序列を作つて軽井沢を1位にすれば多少マシになるんじゃないか？」

まあ2位以下になったら物凄く不機嫌になるだろうけど。

「なるほど。ちなみに比企谷は序列を作るのか？」

「俺が作るというよりひより達が1位の座を賭けて争つてる感じだな。俺自身としては平等に接するつもりだ」

少なくとも火花を散らすのはやめてほしい。女の争いつてヒヤヒヤするからな。

「そういうパターンもあるのか……オレはどうするか……」

綾小路は真剣な表情を浮かべながらブツブツ呟いているがDクラスの生徒が聞いたらブチ切れるだろう。何せ高校生離れた最強戦力がクラスに興味を全く持たず、ハーレムを作ることばかり考えているからな。

まあ実際のところ、綾小路が責められる筋合いはない。Aクラスを目指すのは個人の自由であり、目指さないのも個人の自由だ。

そして綾小路がAクラスを目指さずにハーレムを作ることになってもそれは綾小路の自由だ。クラス内の協力は半ば義務化しているが、実際は義務じゃないしな。

そんな事を考えながら朝食を作り続けるのだった。

その1時間半後、朝食当番以外の生徒もいて朝食を食べ始めたが、その際に離れた場所にいた由比ヶ浜が「味が薄い」だの「手抜きしたのか」とギャーギャー喚いて不快さから俺達の飯が不味く感じてしまい、松下と白波が由比ヶ浜にクロスボンバーを叩き込んで地面に叩きつけているのを見ると不味く感じた飯が美味く感じるのだった。

キーンコーンカーンコーン

昼休みを告げるチャイムが鳴り響く。いよいよ昼食だが……

「お前ら、わかってるけど今日の昼食は少しにしとけよ」

俺が念の為に注意する。今日の午後は全て運動だからだ。今まではグラウンドを走るだけだったが、今日は実際の試験で走る山道18キロを実際に走るからだ。腹の空き過ぎは論外だが、食べ過ぎも論外だ。

メンバーが頷いたのを確認してから俺達は食堂に向かうと汗だくの女子達が食堂に向かっているのを確認した。女子は午前中に12キロの山道を走ってきたからか大半が疲労困憊だ。舗装されている道とはいえ厳しいだろう。

「恵、大丈夫か？」

「ちよつ！清隆！いきなり過ぎるから！」

そんな中、綾小路は真っ先に軽井沢に近寄り抱きついて尻を揉む。ブレねえなコイツ

……

「お疲れさん。キツかったか？」

何にせよ情報収集は大切だから軽井沢に質問する。

「あ、うん。けど小野寺さんの作戦が成功して雪ノ下さん以外は上手くいったよ」

「どんな作戦だ？」

「行きは歩くより少し早いくらいの速さにして、折り返しの際は小野寺さんがペース配分を指示したの」

やはりこういう時に運動神経抜群の奴がいるのはありがたいようだ。

しかし……

「雪ノ下がいけないのはリタイヤか？」

軽井沢の周りを見れば有栖と雪ノ下がいけない。有栖は障害持ちだから他の場所で課題をやっているのだろうが、体力のない雪ノ下がいけないのはリタイヤした可能性が高い。

「さあ？小野寺さんの作戦に対して「手抜きを推奨するなんて」って馬鹿にして独断で走った挙句、呆気なく抜かされて、出発地点から5キロの場所で折り返したあたし達と再度会うくらいにの差を付けられた馬鹿の事なんか知らないわよ」

軽井沢の言葉に有栖のグループメンバーの大半が嘲笑や冷笑を浮かべているが普段雪ノ下がどれだけ罵倒していたのかよくわかる。中学時代に毎日罵倒されていたからな。

しかし雪ノ下の奴、体力無き過ぎだろ。スタートから5キロ地点で会うって事は雪ノ下が5キロ走っている間、軽井沢達は行きの6キロと帰りの1キロの計7キロ走ったという事になる。同時にスタートして2キロって相当の差だぞ。

「そうか。よく頑張ったな恵」

「んっ……！清隆、人前だから！」

綾小路は堂々と軽井沢にキスして、軽井沢はデレデレしながら文句を言っている。

「つたく、このバカツプルが」

「いや比企谷の発言、ブーメランだから」

「だな。人前で椎名や坂柳とキスしてるし」

クラスメイトの時任と小宮からツッコミが入る。否定はしないが俺は人に囲まれた時はしないからな。

「ほっとけ。しかし思ったより厳しそうだな。俺達も前半はゆっくり行って、後半は誰かにペース配分を決めて貰いたい……綾小路、頼めるか？」

俺も運動神経は悪くないが、自信を持って人に指示できるくらい良いって訳じゃないからな。

「わかった。運動能力が低い人も考慮したペース配分にする。それと恵の身体を堪能したいから先に行っててくれ」

「はいはい。行くぞお前ら」

綾小路にそう返してから俺達は食堂に向かうが、今日が1番ハードだから気合いを入れるように心がけるのだった。

同時刻……

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ………」

山道にて雪ノ下雪乃は遂に体力が完全な0になって腰を下ろしてしまう。もう立つことが出来ない状態だ。進んだ距離は8キロ弱で結果的に、軽井沢達とは4キロぐらい差が開いてしまった。

そんな中、バンがこつちに向かいながら下山してきて、担任の茶柱が呆れ顔を浮かべながら窓から顔を出す。

「……」までだ雪ノ下。他の皆はゴールしたし、お前1人のために他の教師も待てないからリタイアだ」

茶柱の言葉に雪ノ下は齒軋りする。自分がビリである事を伝えられて屈辱感で満ち溢れている。これは何かの間違いだと。

「早く乗れ。着き次第昼食を食べていいが、お前は減点だ。迷惑をかけた坂柳達には謝った方がいい」

茶柱は雪ノ下にとって屈辱を感じるような言い方をわざとする。普段から雪ノ下と由比ヶ浜によって胃と髪のにダメージを与えられているので普段より厳しく接している。

しかしバンの中にいる真嶋、星之宮、坂上は聞かなかったフリをする。普段茶柱が職員室で吐血している事を考えれば咎めるのは良心が痛む。

「雪ノ下は怒りに満ちながら立ち上がろうとするが体が言う事を聞かずいたので立ち上がれない。」

「何をしている？早く来い」

「そうだよ。私達だつてご飯食べたんだからさ、早く乗つてよ」

「まさか立てないのですか？他の皆がゴール出来たのに？これだからDクラスは……」

茶柱と星之宮、坂上が容赦なく促す。星之宮も坂上も茶柱程じゃないが5馬鹿に迷惑をかけられているので優しさはない。真嶋も5馬鹿に苦しめられている為か、咎めずにした。

そんな中、雪ノ下は何とか起き上がろうとするが起き上がれず、這うように車に着くが、教員はドアを開けるだけで誰も手を差し伸べない、

「随分と待たされましたね……本当に傍迷惑な……真嶋先生」

坂上が促すと真嶋が運転を再開する。

「で？雪ノ下さんは怪我をしたのかな？それなら医務室に直行だね」

「おそらく怪我だろう。そうでないと皆と同じようにゴール出来た筈だ」

「ま、そうだよ。体力切れなんてあり得ないよ」

「ええ。体力切れなら中学生レベルですし、怪我でしょう。星之宮先生は試験本番に間に合うように雪ノ下さんの怪我を治療してあげてください」

「はい」

茶柱と星之宮と坂上は体力切れとわかっているが敢えてそのような言い方をして、雪ノ下を煽る。雪ノ下は怒りの余り拳を震わせるがギリギリの所で耐える。

そんな光景を車の鏡で見た真嶋はため息を吐きながら合宿所に車を向かわせるのだった。

## 持久走

昼食を食べ終わると、いよいよ持久走で参加者は大半がゆっくりスタートする。今回は試験ではなく、実際のコース勉強がメインだから本気を出す必要はない。

よって行きは歩くより少し速い程度で進み、帰りは早足で帰るのが基本的な戦術だ。よって俺達も基本に適した戦術を取ったのだが……

「お前ら……もうちよつと体力つけろよ」

Dクラスの幸村、本堂、池は往復地点、つまり歩いている段階で疲労困憊になっているのだ。体力が無さ過ぎるにも程がある。多少早く歩いているが付いていけないレベルではない。

幸村は座学で優秀だからまだしも、本堂と池は体力がない上に座学でも毎回理解が遅くてマジで使えない。ドラフトで最下位だったし期待はしてなかったが、予想以上に使えない。

池に至っては性犯罪者だから存在そのものが不快だし、この特別試験って人によってはどんなでもなく苦痛だろう。ひよりとか有栖とか軽井沢とか松下とか佐藤とか白波あ

たりはな。(全員由比ヶ浜か雪ノ下と同じグループ)

「はあ、はあ、はあ……濟まない」

「もう行ける……っ……」

「クソツ……何でこんな事しなきゃいけないんだよ……」

疲労困憊になりながらそう言ってくるが……

「どうする?」

時任が俺に聞いてくる。普通こういうのは責任者に相談するが、ウチの責任者は肉壁以外の価値がない池だから、普段クラスで指揮を執る側の俺に相談が来る。

「そうだな……とりあえず運動能力が普通の奴は先に行け。ゴール出来ない人数に比例して減点って可能性もあるからな。引率を小宮に任せる先にリードしろ」

時間内にゴール出来なかつたら減点される可能性は高いが、ゴール出来なかつた人数が多いなら減点も多くなるのは明白だ。よって運動神経が平均以下の生徒は今以上にペースを落とさずに先に行かせるべきだ。

「了解。行くぞ」

小宮が領いて清水、渡辺、北山の3人を連れて早足で向かう。残りは運動神経が良い奴と悪い奴だ。

「行くぞ。ペースは変えないからもう足を止めるな。次は動けなくなるぞ」

人間つてのは疲れてる最中に休むと復活するのが難しくなるからな。この山道だと尚更だ。

幸村達も頷くので俺達は道に沿って進む。

そして何とか進むが他のグループの男子もペースを落としたり、疲労困憊になって座っていたりしている。この様子だと本番でどのくらいの順位になるかわからない。どのグループにも運動能力が低い奴が数人いるし。

そう思いながら進むと折り返し地点まで300メートルくらいの所で戻ってくる小宮達と会うが差は大体600メートルくらいだろう。

結構差があるが、戻り組と鉢合わせした際に2キロも差がついた雪ノ下に比べたら遙かにマシだし、そこまで悲観する必要はない。

その後何とか制限時間ギリギリでゴール出来たので良しとしよう。とりあえず幸村達は本番で可能な限り平地が多い場所に配置しよう。運動については戦力外だしな。

キーンコーンカーンコーン

夕食の時間を告げるチャイムが鳴る。座禅を済ませた俺は他の皆を食堂に先に行かせてトイレに向かう。男子の中には持久走後の座禅によつて広間から動けない奴もいたが、早い復活を望む。

食堂近くのトイレはこの時間には混雑しているので敢えて離れたトイレに行き、そのまま済ませる。

手洗いをしてからトイレから出ると……

「あ、ハチ君。ハチ君も離れたトイレを使つたんだ」

なずな先輩が女子トイレから出てくる。顔には疲れが見える

「どうもつすなずな先輩。疲れてるように見えますがまた馬鹿が暴れたんすか？」

馬鹿が誰かは言うまでもないだろう。

「まあね……彼女、何であんなに子供なんだろう。普通の小学生でももつと真面目だよ……これならあの時に多少強引にあのグループに入つておけば良かったよ」

物凄く嫌そうだ。天真爛漫ななずな先輩には似合わない表情だが、由比ヶ浜の奴、なずな先輩にそんな表情を浮かばせるなんて万死に値するな。

しかし……

「あのグループ？何か別のグループから誘われていたんすか？」

「クラスメイトで固めたグループがあつてね。最初は入ろうと思つたら断られちゃつて

ね」

「なずな先輩嫌われてるんすか？」

まあそれはないと思うけど。

「んー？嫌われてはないよ。けどグループメンバーは雅に頼りにされてるメンバーだし、何らかの指示をされていたから、大晦日で言つてた関係だと思うよ」

「ああ。あの話ですか？一応確認しますが、その小グループが所属する大グループには有名人とか厄介な人とか優秀な人でもいるんすか？」

「確か3年生に前生徒会書記の橘先輩がいたかな。1年生の1番の有名人は私のグループにいるしね」

なずな先輩の言う有名人は悪い意味だけだな。

しかし橘先輩……堀北先輩と繋がりが深いがピンゴだな。堀北先輩が構ってくれないから橘先輩を狙う腹だろう。

しかし……

「ま、もうこの話は愉快な話じゃないんで忘れましょう」

深く話す内容じゃないし、よく考えてみれば深く考えなくて良い問題だ。

俺には実害はないし、俺の考えが正しいならグループが決まった時点で橘先輩の敗北は避けられないからな。これ以上考えなくても良いだろう。

「ま、そうだよね。気分が悪くなったなら一杯甘やかしてあげる私はハチ君の彼女だから……」

モジモジしながら言ってくるが可愛すぎる……

少しくらい我儘になつても良いだろう。

「じゃあなずな先輩。今日はかなり疲れたんで、飯前にフェラチオしてくれませんか？」  
ど直球かもしれないが、ひよりや有栖は俺が頼むとしてくれるし、大丈夫だと思う。  
「……エッチ。まあしてあげるけどさ、炊事場近くの倉庫に行こっか」

なずな先輩は真つ赤になりながらも頷いて俺の手を引つ張る。受けてくれるなんて健気で感動だ。

俺達は人気のない道を歩き炊事場に向かうが、完全に無人である事に安心しながら倉庫のドアを開けると……

「んむっ……ちゅっ……っ！比企谷君に朝比奈先輩っ?!」

「2人もヤリに来たのか」

倉庫の中にある台に座つて肉棒を露わにしている綾小路と綾小路の肉棒にキスをしている軽井沢がいた。まさか考えている事が同じとは……

「わっ……！お、大きいっ……」

なずな先輩は綾小路の肉棒を見て真つ赤になる。一方の軽井沢もなずな先輩と同じ

くらい真つ赤になって、恥ずかしそうに綾小路の股から離れようとするが……  
「待て恵。このまま続けてくれ。恥じらっている今のお前は最高だ」

軽井沢の肩を掴み、続けるように促す。コイツマジでサディストだな。

「はあ?!いくら何でも「頼む恵」……わかったわよ馬鹿清隆。んっ……」

軽井沢は文句を言いながらも綾小路の股に顔を埋めて再度亀頭にキスを始める。健気さと恥じらいさがあり、他人の彼女と理解してもムラってくる。

そう思う中、綾小路は俺を見て……

「比企谷もオレの隣に来て朝比奈先輩に舐めてもらうのはどうだ？今の恵、2人が来る前よりいやらしく舐めてくれてるし、朝比奈先輩も今まで以上にいやらしく舐めてくれると思うぞ？」

## ダブル

「それで離島も良いが山奥の秘境で農業をやるのも良いと思つたんだ。娯楽については車を使えば何とかなるからな……恵、玉袋も手で揉んできされ」

「はいはい……んむっ、んんっ……」

「まあ離島から本島に娯楽を求めたら泊まりがけになるし……んっ、なずな先輩、もつと強くしゃぶつてくれませんか？」

「んっ……んむっ！んっ！んんんっ！んぐっ！」

炊事場近くの倉庫にて、俺と綾小路は隣り合つてハーレム生活における拠点の場所について話し、なずな先輩と軽井沢は俺と綾小路の股の間からフェラチオをしている。綾小路の言葉に軽井沢は肉棒を咥えながら綾小路の玉袋を優しい手つきで揉み、なずな先輩は普通のフェラからバキュームに変えて俺に快感を与えてくれる。

綾小路から隣り合つてフェラをされないと誘われた際は綾小路のぶっ飛び具合に引きかけたが、恥じらつてフェラをしている軽井沢を見たら「なずな先輩の場合なら今の

軽井沢より可愛く見えるんじゃないか？」って悪魔の声が頭をよぎって、気がつけばなまず先輩の手を引つ張りながら綾小路の隣に座っていた。

最初はなまず先輩も恥ずかしがっていたが、「合宿が終わったら1日だけ独り占めさせてくれたら」って条件を出してきたのでそれを了承したら、軽井沢の横で膝をついて俺のズボンを下ろしてくれたのだ。

そして今に至るが、目の前でフェラをするなまず先輩と軽井沢は物凄くエロく、常に快感が押し寄せてきてもう我慢の限界が近づいている。

というか綾小路の奴、平然と話しているが凄過ぎだろ。俺なんか話に殆ど集中出来ないし。

「んっ、んっんっんっ……じゅるっ……んぐっ……」

軽井沢は髪をかき上げて色っぽさを出しながら優しいフェラをして……

「んっ！んむっ！んっんっ！」

なまず先輩は夢中になって顔をストロークしながら激しいフェラをする。対極的であるがエロさの点で見れば大差はないな。

「今の良かったぞ恵」

綾小路が口元に僅かだが笑みを浮かべて軽井沢の頭を撫でると軽井沢は幸せそうに目を細めながら激しさを加える。

一方のなずな先輩は常に激しいが……

「なずな先輩。辛かったらペースを落として良いですからね？」

激しい攻めは気持ちいいが、だからって無理して欲しくないのが本音だ。

「ぶはっ！大丈夫……ハチ君の為なら辛くないよ。ハチ君のおちんちん、一杯気持ちよくしてあげるからね……んむっ！」

じゅるるっ！じゅるっ

なずな先輩はそう言ってから再度バキュームフェラをしてくる。

「朝比奈先輩、エロいな」

「言っとくが俺のものだからな」

「わかってる。それより俺の目下の目的は楓花さんだからな」

綾小路の言葉に軽井沢はフェラをしながら上目遣いで睨む。

「鬼龍院先輩とはキスしたのか？」

「ない。頬キス、ぱふぱふとかはあるけどな。唇同士のキスをしたり、一緒に風呂に入ってから足コキをして欲しい」

「何だ？足フェチか？」

「そういう訳じゃないが楓花さんや神室みたいな綺麗な足に攻められたい」

お姉さんキャラが好きなのか？まあ足が好きってのはわからなくない。ひよりや有

栖は胸は小さいがムツチリした脚を持っていて、触ると快感だしな。

そんな風に話している間にもなずな先輩と軽井沢は一心不乱にフェラしてくれる。特に軽井沢は激しいフェラに変えているが、これは綾小路に対する嫉妬によるものだろうな。

そして遂に限界が訪れてしまう。

「なずな先輩っ！もう射精るっ！」

「うむっ！んんんんっ！」

ずぞぞぞぞっ

なずな先輩はトドメとばかり吸って……

どびゅっ！どびゅびゅっ！

そのままなずな先輩の口内に射精する。なずな先輩は目を見開くが、直ぐに目を瞑って飲み始める。喉の動きがエロいな。

「んむっ……んっ、んんっ……ふはっ」

なずな先輩は口から舌を出して唇に付着した精液を舐め取る。

「ご馳走様。ハチ君のザーメン、熱くて濃くて飲むの大変だね」

その仕草、凄くエロいです。

「っ、恵、射精るぞ」

同じタイミングで綾小路も射精したようだが……

「うむっ?!んぐぐぐっ!ぷはっ!」

軽井沢は途中で吐き出してしまふ。それによつて床に綾小路の精液が溢れるが……  
(とんだけ出してゐるんだコイツは?)

軽井沢が飲みきれないほどの量、しかも見た感じかなりドロドロしてるし。コイツ昨夜に散々軽井沢を抱いたのに、とんだけ精力が強いんだよ?

「いや、それにしても今日の恵はいつもより恥じらいがあつて良かった。2人が来てくれたのは僥倖だ」

「けほっ……あたしは恥ずかしくて死にそうだけどね!」

軽井沢は咽せながら綾小路に文句を言うが尤もだな。

「今夜はお前の好きなバックから攻めるからそんなに怒るな」

「わかつたわよ……馬鹿っ」

軽井沢はそっぽを向きながら唇に付着した精液を拭き取る。

「何だ?軽井沢はバックが好きなのか?」

「ああ。支配される感じがゾクゾクするらし「アンタは余計な事を言うな!」痛い」

軽井沢の右ストレートが綾小路の鳩尾に炸裂するが、当の本人は全く痛くなさそう  
だ。

ちなみにひよりは正常位を、有栖は騎乗位を好んでいる。なずな先輩はまだわからないが、今後色々な体位を試してみよう。

「さて射精たし、行くか」

綾小路は立ち上がってティッシュなどで掃除するので俺も手伝って5分くらいしてから外に出る。

そしてなずな先輩と軽井沢が炊事場の水道で口を濯いでから炊事場を後にする。

「ねえハチ君。今日もエッチするのかな？」

「したいのは山々ですけど、持久走で疲れたんで明日の夜に出来ませんか？」

性欲は兎も角体力が少ないからな。今日セックスしたら明日がキツイから休みたいから休みたいのが本音だ。

「わかった。じゃあ明日の夜にエッチしようね。ハチ君が喜べるように頑張るから」

なずな先輩は握り拳を作りながらやる気を露わにするが、その仕草は可愛くて仕方ない。

「では楽しみにしてます……つと、そろそろ別々に行った方が良いでしょうね」

このまま一緒に行ったら下らない邪推をされるかもしれない。ましてDクラスの5馬鹿あたりは常識知らずだから時と場合を考えないで騒ぐのは容易に想像出来る。

「そうだね。じゃあまたねハチ君……」

ちゅっ

なずな先輩は俺にキスをしてから先に校舎に向かう。さよならのキスは最高だな。

「……本当に朝比奈先輩も彼女にしたんだ」

軽井沢はジト目で俺を見てくるが、何故お前がそんな表情をするんだ？

「何だよ？ 不満があるのか？」

「あるに決まってるでしょ！ 比企谷君が新しい彼女を作ったら、清隆もハーレムの制作にやる気が出ちやうわよ！」

そこか……まあ確かに綾小路は日に日に感情的になり、性欲も強くなっているのは明白だ。

「恵、お前からしたら不快かもしれないが……オレはあらゆる美少女を抱きたいんだ」

「知るかあああああああああああああつ！」

軽井沢の右ストレートが今度は綾小路の顔面に当たる。軽井沢は肩を怒らせながら早足で校舎に向かっていく。

殴られた綾小路は特に痛みを感じてないように俺を見てくる。

「なあ比企谷。どうやったら恵にハーレム設立について不満を持たれないか案はないだろうか」

「ねえよ」

軽井沢はかなり独占欲が強い。ひよりと有栖のように同時に俺の女になった訳ではなく、単独で綾小路の恋人になったのだ。後続の女を不満に思うのは当然だ。

「そうか。まあ一歩一歩頑張ろう」

綾小路はいつもより若干気合いの入った声を出して校舎に向かう。一歩一歩頑張るのは大切だが内容が内容だから何とも言えない気分。

俺は内心にてため息を吐きながらも綾小路に続いて校舎に向かうのだった。

## 打ち合わせ

「さてお前ら。寝る前に少し話したい事があるから全員集合」

夜、夕食や風呂を済ませて後は寝るだけだが、俺はグループメンバー全員を呼ぶ。

「何だ？恋バナか？オレは全ての美少女に手を出したいな」

「ちよつと黙つてろ綾小路。試験当日の持久走の話だ」

綾小路の言葉にそう返す。というか手を出すつて言つたよコイツ……

「なあ綾小路。お前本気か？」

時任が呆れ顔を向けているがコイツの返事は決まっている。

「本気だ。2年に上がるまでに楓花さんも恋人にして早いうちに神室あたりにも手を出したい」

「マジで？神室狙つてるの？」

神室と同じクラスの鳥羽と清水は興味津々な態度を見せてくる。クールな鬼頭も意外そうだ。

「まあな。あの綺麗な足に踏まれたいし、神室つて付き合ったら甘えん坊になるタイプ

だろうし」

『わかる』

綾小路の言葉に複数の男子が頷く。神室ってツンデレ、もしくはクーデレだろうってのが男子の意見のようだ。

「榎田ちゃんとかは？狙ってないのか？」

「アイドルは遠くから愛でるタイプだな」

Cクラスの別府の質問にはそう返すが、裏の顔を警戒しているのだろう。アイツ、龍園の駒らしいし。

「な、なあ綾小路。お前ってさつきも狙ってるのか？」

小宮が恐る恐る聞いてくるがさつきって誰だ？知らないって事はクラスの主力じゃないのは確かだが……

「は、はあ?!何でここで篠原みたいなブスが出てくんだよ?!」

ここで池がテンパリながらキレル。篠原ってどんな奴が知らないが……

「うるせーよ。盗撮犯のテメエには恋バナは無縁なんだし黙ってる」

不愉快そうな小宮の言うように盗撮犯の池は在学中に彼女を作るのは無理だろう。出来たとしたら同じ犯罪者、もしくは美人局だと思う。

「な、何だよそれ?!アレだって軽井沢の所為だし、そもそも比企谷がポイントを恵んでく

れたら起こらなかつた問題じゃねえか！」

「ただ理不尽な逆恨みだよ？」

「そもそも盗撮しなかつたら起こらなかつた問題だ。人のせいにするなこの層が」

しかも俺がポイントを恵んでくれたら云々言っていたが、あの日は山内がたかつた事が事の発端だからな。

「っ！だからアレは魔がさしたからで「黙れ、死ぬ」がはあっ！」

綾小路の右ストレートが池の鳩尾に当たり、池はそのまま壁に叩きつけられてピクピクする。

「済まん。手が滑った」

「まあ手が滑ったから仕方ないな」

「気をつけろよ」

「能力高いのにドジだな」

「どうやら皆が手を滑ったことにするようだ。素晴らしい友情で何よりだ。」

「さて、馬鹿が黙ったし話を戻すぞ」

「そうだな。小宮の質問だがオレから見て篠原はタイプじゃないから特に狙って「違う。持久走の話をしたいから集めたんだ」ああ、そっちか」

「少なくとも恋バナじゃねえよ。」

「恋バナは後にしろ。で、持久走の話だがグループ全員で18キロ走り、1人最低でも1. 2キロ走るルールだ。で、ウチのグループは13人から15. 6キロは全員強制だが残りの2. 4キロについて、各メンバーの担当箇所を早いうちに決めておきたい」  
言いながら俺は地図を取り出して赤ペンでラインを引く。

「これが走るコースだが、幸村と本堂と屑は平地が多いこの辺りを走って貰う」  
赤ラインが引かれた箇所の上から青ペンで丸を書く。スタート周辺と中腹あたりと折り返し地点の周辺だ。

「……結構険しい道も多かったことを考えると青丸がついたコースには運動能力が低い生徒が集まるだろう」

鬼頭の言うように山エリアは中腹と折り返し地点周辺以外は険しいし、楽な場所に運動音痴を使うのは定石だ。

「で、スタートから第二地点からはいきなり険しい山道だがらここで勝負をかけたらし、綾小路もしくは鬼頭に「発言良いか？」何だ綾小路？」

綾小路が割って入る。

「オレが第二地点あたりからスタートするのは構わないがその場合、オレは3. 6キロ走りたい」

その言葉に部屋に騒めきが生まれる。まあ一番厳しい場所をグループで一番長く走

ると言ったからな。

「何でだ？」

「ついさつき楓花さんと約束して今回の試験で個人の順位で学年1位を取れたら一緒に風呂に入ってくれるんだ。よって今回のオレは出し惜しみしないで本気で試験に挑む」  
動機が不純過ぎる……しかも目にはやる気の色が宿ってるし。

「どうか個人の順位って出るのか？発表があるとすれば大グループの順位だけと思っ  
ていたぞ」

「学校側に聞いたたらプライベートポイントポイントを払えば出せるらしく、100万ポイントと引き換えに試験が終わったら発表がされる。で、さつき龍園と坂柳に「Dクラスの5馬鹿の成績を曝け出してくれないか？」って頼んだら笑いながら引き受けてくれた」

うん、あの2人なら喜んで受けるな。

「でも100万は高くね？」

「割り勘すれば良いだろ」

1人で100万は高いが、ウチとAクラスで割り勘すれば1人あたり1万2千500ポイントだし、中にはCクラスとDクラスの生徒も出してくれるかもしれない。

「良しっ。俺も出すぜ。白波を理不尽な逆恨みで殴ったアイツを煽りまくってやる」

「俺もちよっと出すわ。ずっと庇ってくれた櫛田ちゃんを罵倒するクズの成績を曝け出

してやる！」

Cクラスの北山やDクラスの本堂も出資を宣言する。

「お前ら……由比ヶ浜はどうせ最下位だってわかるし、ポイントの無駄遣いだ」

幸村は呆れながらそう言っているが由比ヶ浜が最下位であることを疑ってないようだ。

「そういや由比ヶ浜と池と山内じゃ由比ヶ浜が1番劣ってるのか？」

今回の試験で須藤と雪ノ下はそこまで下にならないだろう。試験内容は座禅と筆記試験とスピーチと持久走だが、須藤は身体能力が高く、雪ノ下は学力が高いからな。俺の予想だと下位30人には入らないと思う。

そして由比ヶ浜と池と山内には取り柄がないように見えるが、それを踏まえても幸村は由比ヶ浜が最下位と言ったので気になる。

「劣ってるな。2学期の中間試験、英語の赤点ラインが34点以下だったんだが、由比ヶ浜が35点、池と山内と須藤が40点台だったな」

「ちっ、後1点低ければ……」

そんな声が聞こえてくるが仕方ないだろう。この学校の生徒は大小差はあれど、由比ヶ浜に迷惑をかけられているからな。

「話が逸れすぎだ。で、綾小路はやれるんだな？」

「当然。仮に第一走者がビリでも俺が第三走者に先頭で襷を渡す」

綾小路の目にはやる気がある。どんだけ鬼龍院先輩と風呂に入りたいんだ？

「わかった。任せる。次に第三走者の話をするがこの辺りは高低差が多少少ないから運動能力が平均よりちよい下の清水に任せて……」

俺は速やかに駅伝のオーダーについて話を進め、俺は帰り道の第十走者に決まった。

その後は恋バナになったが、綾小路の「同級生でやるなら誰が良い？」って発言により恋バナがエロバナに変わった。

ちなみに一番多かったのは櫛田と一之瀬というある意味王道の展開だった。綾小路は軽井沢に神室、網倉に松下、西野とやりたいと言っていたが、性欲が旺盛過ぎるわ。

俺？普通にひよりと有栖と言ったわ。なぜな先輩についてはバレたら面倒そうだから秘密だ。

## 本番前日

合宿も進み、いよいよ本番前日となった。周りを見ればグループごとに明暗が分かれている。しかしそれはあくまで2年生と3年生であって、1年生についてはそこまで暗い表情は見えない。まあ俺達は勝ちより戦力を出来るだけ差が出ないようにしたからな。

「さて、お前ら。今日は風呂に入ったらさっさと寝ろよ。本番中に寝不足でしたなんてないようにしろよ。別に盗撮野郎が退学になろうが知った事じゃないが、成績が公表される以上、悪いと恥をかくぞ」

食堂に繋がる廊下にて俺はグループメンバーにそう告げる。俺達はこれまで真面目に取り組んでいたのだから仮にボーダーラインを下回っても、池は道連れを使えないのは明白だ。

俺の言葉に不満そうな池以外の全員が頷く。どうやら指揮能力はある程度認められたと思う。

「以上だ。じゃあ解散」

俺の言葉に皆がバラバラに去っていく。俺はこの1週間の疲れを少しでも減らすために先に風呂に行く。どうも食欲もわかないし、早く休むのが吉だ。

「おや八幡君、お疲れ様です」

風呂場に向かおうとしたら有栖のグループと鉢合わせする。丁度今座禪が終わったばかりのようで背後には雪ノ下もいるが、俺を睨んでくる。

「よう有栖。明日は試験だが調子はどうだ?」

「そうですね。持久走で雪ノ下さんがリタイアする点以外は不安はないですね」

有栖はハッキリとそう口にする。

「は? いやいや、高校生にもなって、たかが1キロくらいでギブアップする訳ないだろ」

俺はそう返すが実際は知っている。雪ノ下が本番コースを走ってギブアップした事、毎回グラウンドでのランニングでは最低でも一周は周回遅れしている事を。

「普通はそうなんだけどさあ、雪ノ下さんって毎回直ぐにバテるんだよ。しかも持久走の後の授業ではグダグダになってるし」

「その癖足を引つ張らないようにって喚くし……本当に大変だよ」

そんな愚痴が飛び交って雪ノ下は真っ赤にプルプル震えるが……

「雪ノ下よお、中学時代から体力は無かったが、その事実から逃げるなよ。そんなんだから陽乃さんのデッドコピーって評価なんじゃねえの?」

俺は雪ノ下が嫌う逃げつて言葉や陽乃さんの名前をわざと出す。由比ヶ浜程じやないが雪ノ下も散々ヘイトを撒き散らしていると有栖や軽井沢から聞いているので、そのくらいの意趣返しをしても良いだろう。

「っ！黙りなさい！屑のくせに「何をしている！」っ！」

雪ノ下がキレて俺のジャージを掴み、投げようとしたタイミングで教師が割つて入る。

「先生。私達は雪ノ下さんの足の引つ張り具合に愚痴を八幡君に愚痴を吐いて、八幡君が同意したら雪ノ下さんが理不尽な逆ギレをしたのです」

有栖が白々しくそう話す。

「またか！良い加減にしろ雪ノ下！グループメンバーに迷惑をかけてばかりのみならず、暴力に走るなんて恥を知れ！」

先生は怒鳴るが余程ストレスが溜まっているのだろう。

「出鱈目です！私はこの屑に身の程を教える為に指導をしようとしただけです！」

「そんな言い訳が通用すると思うな。仮に比企谷に問題があるなら我々教員が指導するが、生徒のお前に生徒を指導する権利はない！」

紛れもない正論だ。生徒に問題があるなら教師から指導を受けるのが基本だ。

「全く……頼むから我々教員の手を煩わせないでくれ！お前や由比ヶ浜が数々の愚行に

我々教員は頭痛に苦しんでいるんだ！茶柱先生なんかお前らの所為で白髪が増えて、胃に穴が出来て、精神病院に通ってるのだぞ！」

……心中察します。

「っ！そうやって有能な私を無能扱いするのね！もう良いわ！貴方みたいな無能教師と話していたら疲れるだけよ！」

雪ノ下は肩を怒らせながら去っていくが……

「わっ！足が滑った！」

「ぐっ！」

その途中で軽井沢が足を滑らせて雪ノ下の足と絡まり、雪ノ下を転ばせる。

「あっ！足が滑っちゃった！」

「ぐうううううう！」

そして小野寺が足を滑らせてから雪ノ下の方に倒れて、雪ノ下の背中を肘が当たる。

「わわっ！足が絡まっちゃった！」

「ああああああああああっ！」

そして小野寺の足がCクラスの津辺の足に絡まり、津辺も雪ノ下の方に倒れそのまま雪ノ下の足の上に倒れ、雪ノ下は絶叫をあげる。

「ぐめん雪ノ下さん。足が滑っちゃった」

「滑りやすい床だから仕方ないよね」

「わざとじゃないから許してよ」

軽井沢と小野寺と津辺はいけしゃあしゃあと謝罪する。しかしこの場に咎める者はおらず、寧ろ良い気味だと嘲笑している人もいる。

「お前ら、疲れてるのはわかるが滑らないようにしつかりしろよ」

先生は軽井沢達に注意しながら去っていく。どうやら見て見ぬふりをしてくれたようだが、それだけで雪ノ下の嫌われようがよくわかる。

「では八幡君。私達は夕食を食べにいくので失礼します。今日は早く休みますが明日の試験はお互いに頑張りましょう」

「ああ。成績公開は楽しみだな」

「はい。愉しみですよ。では」

有栖が礼をして軽井沢達が俺に会釈をして雪ノ下を置いて食堂に向かう。

雪ノ下は苦しみながら地面に倒れているが助ける義理もないので俺は雪ノ下を放置して風呂場に向かう。

早く寝て万全の状態にならないといけないからな。

「ぐうっ……」

雪ノ下が廊下にて痛みに悶える。いきなりの不意打ちに反応出来なかったのだ。

「うわ見て。雪ノ下さん倒れてんじゃん」

「だっさ。どうせ持久走でばてたんでしょう。毎回周回遅れしてるし」

「坂柳さんのグループ可哀想だよ。口だけの無能がいるし」

「いや、可哀想な椎名さんのグループでしょう……マジで」

「だよ。あの塵は論外だよ。千尋ちゃんなんか凄い暴力的になったし」

「だよ。由比ヶ浜さんを殴っている千尋ちゃんを帆波ちゃんが注意した際には反抗した時は驚いたよ」

「わかる。一之瀬さん絶対主義の白波さんが反抗するなんて……余程由比ヶ浜さんがうざかったんでしょ」

「でも比企谷君って凄いやね。由比ヶ浜&雪ノ下の屑コンビと同じ中学で1年間同じ部

活に所属してたらしいよ」

「だよ。比企谷君のメンタルは鋼鉄より硬いんじゃないかな？」

「硬いでしょ。クラスでも龍園君が唯一対等に見てるしAクラス行きの際には頼りになるよ」

「ウチには高円寺君や綾小路君みたいな桁違いの怪物がいるのに、桁違いの足手纏いが5人もいるから、Aクラス行きは諦めてるよ……」

「マジで可哀想……ウチのクラスの迷惑にならない範囲でなら助けるから困ったら相談してよ」

「私も可能な限り力になるよ」

「私も助けるからね」

「グスツ……ありがとう、嬉しいよ」

そんな声が雪ノ下の上から聞こえてきて、それがまた雪ノ下の怒りを増幅させる。  
(ふざけないで……！何であんな低脳共が……！)

自分は有能で、あんな連中に見下される存在じゃない。

教師も教師だ。有能な自分に嫉妬して差別をしたり、更生プログラムなどに参加させるのだ。完全な屑でしかない。

ケヤキモールの職員も無能だ。有能な自分がバイトをしてあげるといふのに拒否し

たのだ。

日本政府が重視する学校だというのに無能揃い……やはり自分がこの腐った日本を変える必要がある。自分が国の頂点に立つて愚かな国民を導く事こそが絶対だ。

(見てなさい……明日の試験で私がどれだけ有能を知らしめる！その為に綾小路清隆と高円寺六助は踏み台になって貰うわよ……！)

雪ノ下は齒軋りをしながら立ち上がり、学年最強と噂される綾小路と高円寺を纏めて上回る事を決意して食堂に向かうのだった。

「ところで楓花さん」

「何だ清隆？」

「1位になったら一緒にお風呂と約束しましたが、同率1位の場合も有効ですか？」

「ん？誰か脅威を感じるのか？」

「同じクラスの高円寺ですね。他には負ける気はしませんが、アイツには勝てる未来も負ける未来も見えないので」

「ふむ……まあ同率1位も1位だから有効で構わない」

「ありがとうございます。約束を楽しみにしてます」

「おやおや。もう勝った気か？頼もしいな」

「はい。楓花さんとお風呂という最高のモチベーション向上装置がありますから」

「全く……んっ、少し強く抱きしめ過ぎだぞ」

「すみません。つい興奮して」

校舎裏にて綾小路は鬼龍院に抱きついて甘えながら明日の試験に対して気合いを入れていた。

誰が相手でも負けるつもりはない。比企谷八幡であろうと龍園翔であろうと坂柳有栖であろうと一之瀬帆波であろうと葛城康平であろうと、高円寺六助であろうと全員に勝つつもりであった。

雪ノ下？綾小路の眼中には全く入っていなかった。

## 最終日

いよいよ試験最終日を迎えた。今日は朝食作りも座禅もなく、普段よりも1時間多く眠れた。

そして起床してから朝食をとり、1年生の待機場所に向かうが……

(随分と気合いが入ってる奴もいるな)

人によつては気楽そうで、人によつては気合いの入った表情をしている。前者は退学にならない自信があるから、後者は退学になる事を危惧しているからだろう。

(もしくは綾小路みたいに単純にモチベーションが高いかな)

隣に座る綾小路からは物凄い気迫を感じる。余程鬼龍院先輩と一緒に風呂に入りたいのだろうな。まああんな銀髪美女が相手なら気持ちはわからなくはないが。

(早く試験を済ませて帰りたいな)

明日は休みだし、帰ったら直ぐに風呂に入って朝まで恋人3人とセックスをする予定だ。ひより達とのセックスは俺の中で生活の一部となっているので蔑ろにするつもりはない。

そう思いながら教員が入ってくる。3年担任の小野寺先生だったか？

「これより試験を始める。1年生は座禅、筆記試験、駅伝、スピーチの順番で試験を行う」  
その言葉に騒めきがあるが、十中八九駅伝の後にスピーチがあるからだろう。

「はあ?! 何で駅伝が最後じゃないんだし! ふぎ「嫌い」げふおっ!」

「由比ヶ浜さん?! よくも「黙って」かはあつ!」

由比ヶ浜が文句を言おうとしたら松下が腹パンして、それを見た雪ノ下がキレようとしたら小野寺が雪ノ下に腹パンをして黙らせる。手が早い……

「馬鹿が失礼しました」

「また騒いだら黙らせますので続きをお願いします」

松下と小野寺は一礼して話をするように促す。澱みが一切ないあたり合宿では相当ストレスが溜まったのだろう。特に松下……というかひよりのグループのやさぐれ感  
は半端ない。全員由比ヶ浜に対する怨念と無能の由比ヶ浜の穴を補う為か気合いに満ちた表情を浮かべている。

まるで死兵のようなオーラのひより達に自己中の龍園や綾小路もドン引きして、究極の自由人の高円寺も若干気圧されているし。

「……わかった。また試験は駅伝以外はバラバラで行動するので素早く動けるように。それと今回1年生1人1人の成績は公開する事になったが、発表は大グループの結果前

に行く」

どうやら個人個人の成績がマジで発表されるようだ。座禅と道徳の筆記試験とスピーチは日頃やらず、大半の生徒が今回の合宿で勉強し始めた。

つまり否が応でも実力がハッキリわかるので弱者に言い訳を許さない感じで最高だ。

「以上だ。早速座禅の試験を始める。採点基準は道場へ入ってから作法と動作、そして座禅中の乱れの有無だ。名前を呼ばれた生徒から順番に整列して引率の先生に従って座禅場に向かってもらう。まずは男子グループ。Aクラス戸塚弥彦、Bクラス金田悟、Dクラス綾小路清隆、Dクラス三宅明人は男性教師に従って行くように。続いて女子グループだがAクラス神室真澄、Bクラス伊吹濤、Bクラス西野武子、Cクラス網倉麻子は女性教師に従ってくれ」

先生が紙を読み上げるが本当にバラバラでやるようだ。

「行ってくる」

綾小路は気合いの入った表情（ただし瞳には煩惱剥き出し）で教室から出ていく。

それからも一定時間ごとにどんどん出ていき、俺は男子最後のグループだった。

引率に従って道場に入ると、10人の教師がボードとペンを持っていて、更にはカメラまで数台ある。どんだけ採点に厳しいのだろう？

辟易しながらもこれまでやった作法を頭の中でイメージしながら所定の位置に移動

して結跏趺坐を行う。結構痛い、その際にひよりと有栖となずな先輩とセックスする場面を思えばそこまで辛くはない。後はそれを顔に出さないように注意する事だ。

痛みを感じながらエロを思い浮かべていると終了の合図となったで作法に従って立ち上がり道場を出る。

そして引率の指示に従って講堂に入り指定された席に座ってぼんやりしていると大量のプリントを持った坂上先生が入ってくる。

「これより筆記試験を始めるが、カンニングについては通常の試験同様に問答無用で退学になるので注意するように」

お決まりの注意をしてから坂上先生はプリントを配り、全員に行き渡ると始めるように言うので、プリントを捲って解き始める。

内容は林間学校で習ったことに加えて常識問題や時事問題もあるが、現代人ならばボツっていても40点は取れるだろう。つか40点以下はカスだろう、マジで。

俺は習った事を頭の中で思い浮かべながら書き進めると、視界の先で由比ヶ浜が頭を抱えている姿を捉える。試験が始まってから3分で手詰まりか？だとしたら馬鹿すぎて笑えないわ。

そう思いながら俺は問題を澁みなく解き進めて答案用紙を裏にする。95点は確実に。座禅も90点以上の自信があるし、持久走とスピーチ次第だ。

暫く待機していると終了のチャイムが鳴り答案用紙が回収され、直ぐに男女別々になつて校庭に向かう。

男子の持久走は小グループ全員で18キロ走り、最低でも1人1. 2キロ走るルールだ。

そして各グループの代表が走るオーダーを教師に告げて1番最初に入るメンバー以外は沢山あるバンに乗せられる。

そして1. 2キロ地点、山道の険しい場所に着くと綾小路を始め、何人が降りる。

俺は第十走者でスタートから4. 8キロ地点で同じグループの清水と降りる事になつているが、他のグループのメンバーの中には運動能力で名を馳せている奴はいないだろう。須藤や柴田、平田や石崎や橋本あたりは険しい箇所の担当だと思う。

(しかしこの場所はラッキーだな)

何故なら俺がいるチエックポイントは綾小路のゴール地点だからだ。最初に幸村が1. 2キロ走り、次に綾小路が3. 6キロ走り、この場所で清水に襷を渡し、帰り道では第九走者の渡辺が俺に襷を渡す。つまり綾小路がどのくらいの速さなのか明確にわかるのだ。

そう思っているとバンが到着したので降りると……

「うっわ！比企谷がいるのかよ！最悪だな！」

山内が喚きながら指差してくる。それはこっちのセリフだ。

「黙れ盗撮犯。お前の存在の方が最悪だからな」

「全くだな。高校生になってもやって良い事と悪い事もわからないとはな」

「橋本マジで可哀想。こんなゴミをグループに入れなくちやいけないんだから」

「とつとと退学しろよ」

「というか死ぬよ」

俺が反論すると他の男子が援護射撃をする。由比ヶ浜もそうだが、嫌われ過ぎだろう。

「っ！何だよっ！皆よってたかって虐めやがって！あんなの青春だろうが！」

コイツマジで言ってるよ！もうマジで関わりたくない。

他の皆も同じようドンドン引きしながら喚き散らす山内から距離を取り、山道から人が来るのを待つ事にする。降りてから大分経過しているが、もう始まっているだろう。

そう思いつつ俺は給水場の近くでスタッフに許可を貰い水を飲みながら、山道を見ていると……

「誰か来た……綾小路だ！」

「速え！ギャグ漫画のキャラかよ?!」

綾小路が物凄いスピードで山道を駆け上がってくる。その速さは俺の全力疾走より

早く、体育祭で見た須藤の全力疾走と同じくらいだ。

しかし今回は持久走だ。須藤に近い速さで山道を3・6キロも駆け上るのは尋常じゃない。アイツはどんだけ鬼龍院先輩と風呂に入りたいたんだ？

そしてそのまま第三走者の清水に襷を渡して、こっちやつて来る。

「お疲れさん」

「問題ない」

綾小路は表情を変えずに言ってくるが化け物にも程があるわ。

「ちなみに幸村は何番目に来たんだ？」

「最下位だったが、1キロくらい走ったあたりで全員抜いたから他のメンバーは当分来ないぞ」

綾小路の言葉に周りのメンバーは全員絶句する。

「マジで凄いな」

「言ったはずだ。今日の俺は本気で挑むと。全ては楓花さんと風呂に入る為だ」

その一言が無ければカッコ良いんだがな……

内心呆れながら綾小路を見てため息を吐いてしまう。

それから7分くらい経過してから須藤が走ってくるのが見えたが、その時点で俺はアキシデントがない限り俺のグループは1位と確信するのだった。

「あ、スタッフの方に言いますが3. 6キロ地点とこの4. 8キロ地点の間あたりで熊が出てきたので、気絶させましたが念の為に見といた方が良いでしょう」

「はいっ!?!」

おい待て。何があつたんだ？

## 怪物

ホワイトルームにいた頃はモチベーションや感情は強さに繋がらず、己の努力のみが反映される、綾小路清隆はそう考えていた。

しかしこの学校に入学して、由比ヶ浜結衣によって自身の中に感情を生み出して、軽井沢恵に女の魅力を教えられて、比企谷八幡に複数の女を囲むのはアリだと学んでからは違った。人は感情やモチベーション次第でトキとして本来のポテンシャル以上の力を発揮する事がある。

「……清隆、一杯気持ち良くしてあげるからね……」

「……ふふつ、たっぷり可愛がってやろう……」

「……良いな」

綾小路の脳内にて、軽井沢と鬼龍院が寮の風呂場でパイズリをしてくれる光景がクツキリ映ると、綾小路の足は更に早くなる。

「っ……化け物め……っ……」

しかし綾小路はその速さをキープして険しい山道を軽やかに走り続けて、前を走る神

崎を抜き2位となる。背後から神崎の毒づく声が聞こえてくる。気がせず走り続ける。

第一走者の幸村が1位と1分くらいの差をつけられて最下位で襷を渡してきたが、たかが1分くらいなら誤差のレベルで直ぐにごぼう抜きした。

そして前方にスタートから2、4キロ地点が見えたあたりで柴田を軽々と抜いてそのまま生徒らの横を通り過ぎる。

(このペースなら比企谷に襷を渡すときに5分くらいだが……もつと早くだ)

綾小路は更に足を早めて、遂に須藤の全力疾走に近いレベルで獣道を何なく突き進む。本当はもう少し早く出来るが、これ以上早くすると万が一のアクシデントに対応しにくくなるので念のためにこの程度の速さに留めておく。

(楓花さんとお風呂。恵を加えて3人でお風呂……あの美しい裸体を早く拝みたい……)

煩惱剥き出しの綾小路の勢いは止まらずにスピードを落とさずに3、6キロ地点を通り過ぎる。

そして残り500メートルくらいの所を走っていると、森の奥から巨大な熊が視界に入り、唸り声を上げて獣道に出ようとするが……

「……邪魔をするな」

ゴツ！

「グルウツ！」

美少女2人との入浴を邪魔する相手は誰だろうと容赦しない。そのまま顎に掌底を放ち、脳を揺らす事でよろめかせ、そのままジャンプして……

「失せろ」

ドゴツ！

そのまま熊の額に頭突きを叩き込む。モロに食らった熊は脳震盪によって茂みの中に倒れて泡を噴きながらピクピクする。

気絶を確認した綾小路はそのまま熊に背を向けて走り続けて……

「頼む」

「任せろ」

4. 8キロ地点に到着して清水に櫂を渡したのだった。

「……という事があつてな。比企谷、お前もオレの欲求の為に全力を尽くしてくれ」

綾小路が走っていた時の事を話すが、頭突きで熊を気絶させるって……

俺は呆れながら山道を見る。既にスタツフの一部は猟銃を持って現場に向かっている。何でもこの辺りには熊や猪もいるので、あの施設を合宿に使う際は猟師を置いとくのが鉄則のようだ。

準備が万全なのは良いが、熊がいるような場所で合宿をやらないで欲しい。まあそんな事を言ったらキリがないけどな。

「まあ全力は出す」

「頼む。ところで比企谷、お前は乱交については興味はあるか？」

コイツはまたとんでもない事を言ってきたな。

「いきなりどうした？言っとくがひより達は誰にも渡さないぞ」

「もちろんだ。オレも恵を他人に抱かせるつもりはない。今いる彼女は無関係でこれから女を手に入れたら2人で調教してみないか？合宿前に主人公が男友達と協力して沢山の女を2人がかりで調教する同人誌を買ったんだが中々印象的だったんだ」

2人がかりで調教ねえ……コイツ、どんだんに貪欲になっているな。マジで軽井沢に刺されそうだな、

「それ以前の問題だ。先ずはハーレムメンバーにしたい女子を優先しろよ、第三者に取

られる可能性があるんだし」

綾小路が狙っている女子は全員ルックスのレベルが高いからな。

「そうだな。まずはハーレムメンバーの確保だな。肉どれ……ハーレム予備軍の確保は後回しだな」

コイツ今肉奴隷って言おうとしたよな？普通に怖いわ。

綾小路の食欲さに呆れながらも雑談するが試験中止のアナウンスは来ないが、熊について是对処したのだろう。

それから更に待っていると視界の隅、自分達がいる場所より高い場所にある獣道を下っている影がチラツツと見えた。

「どうやら第九走者が来たようだな。俺はスタート地点に向かう」

「頼むぞ比企谷。楓花さんとの入浴の為に」

最後にやる気を削ぐような事を言うな馬鹿。まあ俺も帰ってからひより&有栖&なずな先輩の3人と4Pをするからあからさまに文句は言えないが。

俺はスタート地点に立ち、他のメンバーもスタート地点に立ち待機する。

そしてチラツツと見えた影が徐々に大きくなってウチのグループのグループの渡辺である事がわかった。やはり綾小路の作ったリードが効いているようだ。

「比企谷頼むー！」

「ああ」

渡辺から襷を貰って俺は走り出す。下りなので下らない転倒に注意しながら、それでありながら可能な限り速く走る。

汗を流しながら走っていると中間地点で猟銃を構えたスタッフが数人、茂みで囲みを作っているが、あそこに気絶した熊がいるのだろう。

綾小路の化け物ぶりに引きながら足を早めて進む。結構辛いが今日で試験が終わりなから心技体全てをこなしで走る。

(ひより達と4Pが近いんだ……頑張らないと)

俺は身体にかかり始める痛みを無視して更に速く走り、息苦しくなったあたりで次のチェックポイントが見えてきたので無理矢理加速して……

「時任、頼む」

「任せろー！」

次の走者に襷を渡し、足を止めながら息を吐く。全力で走ったのは久しぶりな気がするが、やり切った気分は悪くない。まあやり終わった時の気分よりは劣るが。

それから次の走者が来るのを待っていると俺がゴールしてから6分くらいしてから次の走者が現れて襷を渡す。

綾小路が俺がいるチェックポイントに着いた時の2位との差は7分ぐらいだから、綾

小路から俺の間に差が1分縮められた事になる。まあこれならばつつち切りの1位だろう。

そう思いながら他の走者が来るのを待っていると俺がゴールしたタイミングから20分くらいいたタイミングで山内が最下位としてやって来る。

「遅えよーふざけんな！」

橋本がキレながら襷を持って走りだす。橋本の身体能力は高いがブービーとの差は4分くらいだったので巻き返しは無理だろう。

しかし原因は山内にあるだろう。山内のジャージには沢山の土や草がついて見るからに転んだのだとわかる。学年でも運動能力が低いのに転んだとなれば橋本がキレるのも仕方ない。

山内の足手纏いっぷりに対して橋本に同情しながら迎えのバンに乗って待機する。

「クソツ……俺の力はこんなもんじゃないのに……！」

山内が最後に不満を吐きながらバンに乗るが、お前の力なんてたかが知れているわ。

山内に皆が呆れ顔を浮かべる中、スタッフの方が給水所の片付けを始めて15分ちよつとしてからバンがゆっくり発進する。

そしてスタート地点に着くと、掲示板がありそこには男の記録が持久走の書かれている。まだ橋本グループはゴールしてないから記録は出てないが、ウチのグループは2位

の龍園グループと6分離れているので、綾小路からしたら満足だろう。

そういう中、橋本グループの最終走者もゴールしてウチのグループとは18分差だった。20分差を4人で2分も縮めたなら上出来だろう。

「戻ってきたものは第二講堂に行くように。そこでスピーチの課題を行う」

まさかのゴールして直ぐかよ。終盤に走った俺からしたら結構キツイし、最終走者からしたら地獄だろう。

これにはブーイングが起こるが、起こってもどうにもならないのは明白なので俺達は疲れた身体に鞭打って第二講堂に向かうのだった。

講堂に入って30分後に試験が始まったが、一部の人間は疲れを感じながら無理矢理声を出す地獄のようなスピーチだった。俺も何とか声を出して何とか無難に終わらせた。

しかし綾小路が「特別試験から将来の仕事における有用性を見据える」ってクソ真面目なテーマのスピーチをした際は噴き出してしまって減点対象になりそうだ。

お前は「ハーレム結成から予備の肉奴隷の確保」ってクソぶっ飛んだテーマのスピーチをするキャラだろう。

## 個人成績結果発表

全ての試験が終わり、俺達は体育館に集まる。全校生徒400人以上が集まるとやはり壮观だな。時刻は夕方5時前だから学校に着くのは9時位だろう。

「生徒の皆さん、お疲れ様でした。試験内容は違えど、前に行われた特別試験より全体的に高い評価となりました。ひとえに皆さんのチームワークによるものでしょう」

初めて見る初老の男性がそんな事を壇上で言ってくる。しかしそれは正解とは言えない。確かにチームワークを駆使したグループもあるだろうが、圧倒的な個の力によって高い評価を出したグループもあるだろう。ウチのグループの綾小路みたいに。

「それでは結果発表に移りますが、大グループの成績発表の前に1年生の個人成績を発表します。これはプライベートポイントの支払いによって行われますが、2年生と3年生で個人成績の知りたい人がいたら、全ての結果発表が終わってから私の方に来てポイントを支払ってください」

そんな声が上がリ、上級生からは騒めきが生まれる。しかし買う人がいるかはわからない。俺達の場合は由比ヶ浜の成績を晒し上げたいう理由があるから100万払っ

たんだしな。

「では発表します。点数については1年生の担任は採点者に含めておらず公平に評価しましたので安心してください」

その言葉と共に壇上のスクリーンに結果が表示される。最初は1位からだったが

……

### 1年生個人成績 一覧表

1位 Dクラス 綾小路清隆 400点

座禅 100点

筆記試験 100点

駅伝 100点

スピーチ 100点

1位 Dクラス 高円寺六助 400点

座禅 100点

筆記試験 100点

駅伝 100点

スピーチ 100点

1位 Aクラス 坂柳有栖 400点

筆記試験 200点

スピーチ 200点

※身体を考慮して座禅と駅伝を免除して、筆記試験とスピーチを点数を200点分に増加した。

4位 Cクラス 一之瀬帆波 363点

座禅 89点

筆記試験 96点

駅伝 90点

スピーチ 88点

5位 Dクラス 平田洋介 360点

座禅 92点

筆記試験 94点

駅伝 92点

スピーチ 84点

上位からの発表に騒めきが生じる。まさか満点が3人もいて、4位と40点近く差が

離れているとは思わなかった。

「……よし、楓花さんと風呂だ」

隣にいる綾小路は小さくガッツポーズをするが、これだけ煩惱に満ちたガッツポーズは初めて見るな……

そして順位は徐々に発表されていき……

8位 Bクラス 比企谷八幡 342点

座禅 90点

筆記試験 96点

駅伝 82点

スピーチ 74点

葛城、榊田に続き、俺は8位だった。スピーチが低いのは駅伝で終盤だったから疲れのせいだろう。前半に走っていたら80点は超えていただろう。

それからどんどん発表されてひよりが座禅と筆記試験とスピーチで90点以上だったのに駅伝に足を引っ張られて20位ギリギリだったり、龍園が意外にも30位と中々高かったりして……

94位 Dクラス 雪ノ下雪乃 215点

座禅 90点

筆記試験 96点

駅伝 4点

スピーチ 25点

雪ノ下の順位が発表される。座禅と筆記は高いが駅伝はまさかの1桁でスピーチは駅伝の疲労によって結構酷く、講堂に嘲笑が響く。

「うわ、普段あれだけ偉そうにしておきながら94位かよ」

「4点はねえだろ。普通に走れば40点は取れるだろ」

「普通じゃないだろあのカスは」

「っ！黙りなさい！こんなのは間違いよ！」

周囲からの罵倒に雪ノ下は怒りだすが皆は嘲笑を浮かべたままだ。

「ゆきのんを馬鹿にすんなし！ゆきのんは身体が弱いから低かっただけで、何も知らない無能が文句を言うなし！」

由比ヶ浜が割って入るが……

「いや、雪ノ下は身体が弱いんじゃないで体力がないだけだろ。陽乃さんは健康体って言うってぞ」

入学前に俺は雪ノ下の体力の低さは体の障害かと思ひ、陽乃さんに聞いてみたら「え？雪乃ちゃん健康体だよ。単に体力のない事実から逃げただけだよ」って返されたし。

「はあ？何テキトーな事言ってるし?!ヒッキーマジでキモい！キモ過ぎだから！」

俺の言葉に由比ヶ浜がギャーギャー喚くがマジでウザいな……大爆発とかしないかな？

内心苛立つ間にも順位が少しずつ公開されるので由比ヶ浜の喚き声をBGMに強制的にさせられながらモニターを見ると……

110位 Dクラス 須藤健 193点

座禅 60点

筆記試験 20点

駅伝 98点

スピーチ 15点

5馬鹿の1人の須藤も出てくる。駅伝のおかげで下位50位を免れているな。

まあ須藤と雪ノ下は得意分野があるから予想通りだ。しかし残りの馬鹿3人には長所がないから下位5人に入るだろう。

そしてどんどん点数は低くなっていき、ウチのクラスの本堂が155位とギリギリで

ワースト5を回避して……

156位 Dクラス 井の頭心 113点

座禅 32点

筆記試験 32点

駅伝 25点

スピーチ 24点

157位 Dクラス 佐倉愛里 102点

座禅 28点

筆記試験 45点

駅伝 10点

スピーチ 19点

158位 Dクラス 池寛治 95点

座禅 21点

筆記試験 21点

駅伝 22点

スピーチ 31点

159位 Dクラス 山内春樹 90点

座禅 19点

筆記試験 19点

駅伝 28点

スピーチ 24点

160位 Dクラス 由比ヶ浜結衣 35点

座禅 9点

筆記試験 3点

駅伝 18点

スピーチ 5点

下位5人の名前が最後に表示されるが……

「クハッ！二桁ってカスにも程があるだろ！」

「流石Dクラスの五馬鹿だな！」

「由比ヶ浜に至ってはブービーの盗撮ホラ吹き野郎と50点離れてるし！」

「小学生からやり直した方がいいでしょ」

「真澄さん。小学生に失礼ですよ。小学生はもう少し賢いですよ」

「だな！筆記なんて10点は小学生でも解ける常識問題だし、小学生……いや、下手したら幼稚園以下だろ」

爆笑の嵐が起こる。まあ確かに筆記試験には「去年のオリンピックの開催地は？」とか「日本の首相の名前は？」とか「ジャンプの漫画で社会現象になった鬼滅の〇、〇に入る文字は？」みたいな小学生でも解けるクソ簡単な問題もあったからな。

「っ！嫌い！これは何かの間違いだし！もしくは採点者が私を差別したんでしょ！」

由比ヶ浜が喚きながら壇上の教員らを指差すが、どんだけ理不尽な逆恨みなんだよ？

「……採点は公平に行いました。あなたの純粋な実力です」

「嘘つくなしこの老害！どうせ「煩えよ！」「ぐほっ！」

更に喚こうとした由比ヶ浜に対して松下がキレて腹パンする。今の声、松下だよな？

「由比ヶ浜さんに何を「テメエもだカスノ下！」ああっ！」

松下は返す刀とばかりに雪ノ下の脛を蹴り飛ばす。

「さつきからギャーギャーギャー……良い加減自分の無能さを理解しろや！テメエらの幼稚園児以下の言動が皆を不愉快にさせてんだよ！もうこのまま野垂れ死ぬ！」

「ぐほっ！」

「がふっ！」

松下は荒々しい口調で由比ヶ浜と雪ノ下に怒鳴ってから追撃の蹴りを放つ。壇上の教員らに一礼する。

「……失礼しました。我慢出来ずに手を出してしまいました。罰はご自由に」

「待ってください！千秋ちゃんに重い罰を与えないでください！私達はずっと由比ヶ浜のゴミ屑に苦しめられたんです！」

ここで松下と同じグループの白波が叫ぶが、ゴミ屑って発言にCクラスの生徒はギョツとした表情になる。

「そうです！もし千秋ちゃんに退学みたいに重い罰を与えるなら私が退学か卒業してからこの学校の実態をバラします！」

「政府によるペナルティ？上等です！ずっと苦しんでる千秋ちゃんの為に戦います！」

「それにバラせば学校も世間からの評判と戦いますし、私達の案を受け入れてください！」

白波に続いて松下と同じグループのメンバーが次々に反論する。全員覚悟を決めた表情を浮かべて、これには教員らも気圧される。

「……松下さんの処遇については後日伝えます……が、退学にはしません」

教員もそう返すが、ひよりのグループは由比ヶ浜に苦勞させられたから団結力が凄ま

じいな。今後特別試験などがあっても壊れないであろう絆を得たのだ、それは大切に  
するべきだ。

そう思いながら俺はひより達が優しい表情で松下に近寄る光景を眺めるのだった。

## グループ結果発表

「それでは次に大グループの試験結果の順位を発表します」

由比ヶ浜と雪ノ下を医務室に搬送……という名前の除外を済ませると初老の男性がそう告げる。まあアイツらがいたら煩いからありがたい。実際2人が出ていくと2人に暴力を振るった松下は全校生徒の大半から拍手を受けていたからな。

その中にはひよりと有栖のグループのみならず、俺や龍園、綾小路や高円寺、なずな先輩や南雲会長もいたからな。

挙句に茶柱先生も一瞬だけ拍手しかけていたぐらいだ。そして茶柱先生の近くにいた真嶋先生や星之宮先生や坂上先生も茶柱先生の行動をチラ見しながらも咎めないあたり由比ヶ浜と雪ノ下は教員にも相当嫌われているようだ。

「グループの順位読み上げる際には3年生グループの責任者のみを読み上げます。まず

は男子グループですが男子生徒の全グループはボーダーラインを越えていて、退学者を出さずに試験を乗り切ることができました」

しかし「男子生徒の全グループは」か……つまり女子は違うって可能性がある。ひよりのグループは大丈夫か？有栖のグループの雪ノ下は筆記が優秀なのに対して、由比ヶ浜は本当の無能だからな。万が一って事もある。

「では、まず男子総合1位は……3年Cクラス、二宮倉之助くんのグループです」

瞬間、離れた場所にいる堀北先輩の近くから歓声上がる。つまり1年生だと葛城のグループか。

「やったな堀北。流石だな」

藤巻先輩が堀北先輩を褒める中、2位から6位までの順位が発表される。俺のいたグループは、2位という結果だった。

1年生で比較したらウチのグループは1位だっただろうな。何せ……

「んっ……2人の胸、柔らかいです」

「煩い変態！あたし1人でも充分でしょ！」

「やれやれ、本当に甘えん坊な後輩だよ。仕方ないから今夜はたっぷり甘やかしてやろう」

今現在、軽井沢と鬼龍院先輩の胸に顔を挟まれながら、鬼龍院先輩に頭を撫でられて

いる怪物がぶつち切りだったから。というか綾小路はマジでTPOを弁える。もう今はコイツらは気にしないでおこう。

「やっぱりさすがですね、堀北先輩。おめでとーございます」

南雲会長は笑みを浮かべながらそう口にする。全く悔しそうじゃないが、視界の隅に綾小路達がいるからか口元が引き攣っている。

しかし悔しそうじゃないのも当然だろう。綾小路の意見が合っているなら南雲会長はこの後にとんでもない悪意を展開するからな。

南雲会長の賞賛に堀北先輩は黙っている。もしかしたら嫌な予感を感じているのかもしれないな。

「お前の負けだな、南雲」

藤巻先輩が南雲会長に向かって素晴らしい放つが南雲会長の表情に変化はない。

「そうですかね。まだ発表は始まったばかりですよ」

「抜かせ。決着はついた」

「ええ、確かにつきました。男子の方は」

南雲会長がそう言った瞬間に周りの空気が冷たくなる。

「男子の方？ 女子は関係ない」

「ええ。関係ありませんよ。この勝負にはね」

回りくどい言い方に藤巻先輩も険しい表情になる。

「では次に女子グループを発表します。1位のグループは3年Cクラス、綾瀬夏さんの所属するグループです」

その言葉に一部の女子のテンションがあがる。ウチのクラスの女子も喜んでいるな。そして遂に問題の時が来る。

「えー、誠に残念なことではございますが……女子の方から、平均点のボーダーを割る小グループが出てしまいました」

するとさつきまでの喧騒はどこへやら、体育館は一気に静まり返る。ここで堀北先輩も気づいたようで南雲会長を見る。

しかし俺の中でも焦りがある。南雲会長の作戦が成功するだけならまだしも、由比ヶ浜の愚かさによりひよりやなずな先輩の所属する大グループは精神的に疲弊しているのが怖い。

ましてひよりは由比ヶ浜が所属するグループの責任者だ。万が一って事もあるので緊張してしまう。

(確かひよりの大グループの3年グループの責任者は山口先輩だったな)

ビリじゃないなら何位でも良いから、ビリの発表で山口先輩の名前は出るな。ビリじゃないなら退学者は出ないのだから。

緊張が高まる中、男性が口を開ける。

「最下位のグループですが……3年Bクラス、猪狩桃子さんのグループです」

瞬間……

『セエエエエエエエフツ！』

ひよりが所属する大グループのメンバーが一斉にガツポーズをして、ひよりは安堵の息を吐いている。まあ厄病神の呪いから解放されたからな。気持ちはわかる。

しかしそれ以外の生徒には緊張が走る。3年生の大半の緊張は半端ない。

しかし緊張とは裏腹に教師の言葉は続く。順位を発表するがひよりの所属する大グループは6グループ中5位だったが、由比ヶ浜がいなかったら1位は無理かもしれないが3位圏内だと思う。

「そしてボーダーを割ってしまった小グループは……同じく3年Bクラス、猪狩桃子さ

んの小グループです。以上で混合合宿の結果発表を終わります」

そう宣言して発表を済ませる。

「何をしたんだ南雲！」

「今は結果発表の最中ですよ先輩」

発表の直後、藤巻先輩が南雲会長に詰め寄るが南雲会長は鼻で笑う。しかし南雲会長の視線は藤巻先輩に向けられておらず、南雲会長から見てダブルぱふぱふを堪能している綾小路の後ろにいる橘先輩を見ている。

「えー、お静かに願います。残念ではありませんが責任者の猪狩さんの退学が決定いたしました。また審議の結果、グループ内で連帯責任を命じることも出来ませんので、猪狩さんは私の所に来てください……以上で発表を終わります。バスの準備が整うまでは自由にごしてください」

解散が命じられて生徒らはゾロゾロと動き出す。そんな中、南雲会長は嬉々として笑いながら猪狩先輩の元に向かう。この人本当に性格が悪いな。

「猪狩先輩。いったい誰を道連れにするのか教えてくださいよ」

南雲会長の言葉に対して猪狩先輩は落ち着いている。退学を告げられたのに落ちついてるし、多分南雲会長から2000万ポイントを貰ってるな。

「決まってるでしょ。散々私達の安寧を乱して最下位に導いたAクラスの橘茜さんよ」

そんな南雲会長に対して猪狩先輩は怒気を含め吐き捨てる。一方の橘先輩は顔を青白くしている。

「どうやら以前綾小路の言っていたことは完璧な正解だったようだ。まあ俺としてはひよりと有栖とまず先輩が馬鹿2人のせいで退学にならなかったから良しとしよう。

しかし今後もしも生徒会が特別試験に携われるなら対策を打つべきだろう。また全学年でもぶつかる試験があるかもしれないしな。

まあ今日明日の事じゃないし、今は帰りの支度を済ませて直ぐにバスに乗れるようにしましょう。ひよりや有栖はグループメンバーと生き残った喜びを分かち合っているし、今は話しかけないでおくべきだ。

俺は藤巻先輩の怒号を背後にしながら自分達のグループの部屋に行くべく体育館の出口に向かうと、まず先輩がすれ違いに……

「……帰ったら朝までエッチしようね」

こっさり耳打ちしてくる。同時に俺の中でも昂りを感じる。合宿中も抱いたが、やはり気兼ねない自室で抱くのが一番だろう。

なずな先輩の言うように今夜は3人を相手に朝までセックスをしよう。  
そう決意して体育館を後にした。

同時刻……

「教えてくださいいよ橘先輩。3年Aクラスの卒業間近に「ひゃあんっ」……退学していく気分はどうですか？そして堀北先輩、きつと「んっ、清隆……」……これまで感じたことない苛立ちに包まれて「もつと強くばふばふしてください」さつきから煩えよ！乳線りあいとは別の場所ですろ！」

体育館で橘と堀北学を煽っていた南雲だが、近くでダブルばふばふを受けている綾小

路に怒鳴る。

「失礼しました。ついムラつとしました」

綾小路は2人の胸から離れて一礼する。

「この状況でムラムラ出来るお前の神経はどうなつてんだよ……ついでに聞いとくが綾小路、お前は俺の考えてる事に気づいたか？」

「3年Bクラスに橘先輩を道連れにする報酬として2000万渡して、2年の南雲親衛隊と3年BCD連合で橘先輩をリンチした作戦ですか？」

綾小路は淡々と口にする。3年の大半はギョツとした表情になり、南雲は楽しそうに笑う。

「どうやら完全に理解してるようだがいつから気付いてた？」

「2、3日目に廊下で猪狩先輩達が橘先輩を囲んで責めてるのを見て怪しいと思って、その後、猪狩先輩の大グループの2年の小グループはAクラスで纏まってるのを知って理解しましたね。で、猪狩先輩に焦りの色がないあたり南雲会長が3年Bクラスに救済ポイントを渡したのでしょうか？」

実際はなすなからの情報で合宿前から察していたが、それを言ったら面倒なので口にしない。軽井沢と鬼龍院も空気を読んで口を挟まない。

「正解だ、おめでとさん」

南雲が綾小路に拍手を送る中、藤巻は怒りの表情を浮かべながら綾小路の胸倉を掴み上げる。

「だったら何で教えなかったんだよ！」

「？無駄だからですよ。南雲会長の戦術はグループが決まった時点で成功ですし、オレが藤巻先輩に言っても何も変わりませんが」

綾小路は淡々とそう返す。実際真つ当なやり方で南雲の作戦から逃れるにはグループ決めの段階で対策を取らないとどうにもならない。

「それに橘先輩から口止めされてましたから。文句なら橘先輩に言ってください」  
綾小路は橘の原因と告げる。余りの淡々つぶりに大半の生徒がドン引きする。

「っ！お前えっ！」

藤巻は激昂して綾小路の顔面に拳を振るう。対する綾小路は冷静にゆっくりと頭をずらして拳の軌道上に額を移動させ、力を込めて拳と激突する瞬間に込めた力を、藤巻の拳に伝わるように調整しながら解放する。

すると……

グシャツ

「っ！があああああああああつ！」

藤巻の右拳から砕ける音が聞こえて、藤巻は絶叫しながらのたうち回る。

「藤巻！」

「藤巻君！」

3年Aクラスの生徒は藤巻に駆け寄る。そんな中、綾小路は南雲を見る。

「今のは藤巻先輩の自業自得ですよ？オレはただ額に力を込めて衝撃に備えただけですし」

「まあそうだが……お前は何をやったんだ？」

「特には。殴られると思ったんで力を込めただけです……まあオレの頭突きは熊を気絶させるくらい頑丈ですけど」

「そーいや熊を気絶させたんだったな。まさか頭突きで仕留めるとは思わなかった。何にせよ今回は藤巻先輩からの暴力に対する正当防衛って線も考えられる。学校に戻ったら話、まあ少なくとも過剰防衛と判断されても停学以上の罰はない」

南雲はそう返す。綾小路から頭突きをしたら論外だが、藤巻の方が先に顔面パンチを仕掛け、結果綾小路の額に激突した衝撃で骨が折れたのは自業自得だ。

「でしようね。では俺も失礼します」

一礼して南雲に背を向けて軽井沢と鬼龍院の所に向かう。

「頭は大丈夫なのか？」

「大丈夫……いや、痛いんでもう一回頭に胸を押し付けてください」

「嘘をつくな変態!というか清隆、橘先輩を助けなかったんだね」

「当たり前だ。助けなかったら3年Aクラスを敵に回すだけだが、助けたら3年BからCクラスと2年を敵に回すからな。それに恵や楓花さんを巻き添えにするわけにはいかない」

恋人と恋人候補の2人と橘、どちらを優先にするかは比べるまでもない。

「ちなみに橘先輩はどうするべきだったの?」

「橘はクラスメイトや教師に相談するべきだったな。それをこまめに繰り返して、廊下とかで責められている所を第三者にしっかりと把握して貰えば、テストの点数から悪質な罠と学校も認識して道連れに選ぶのを防いでくれたかもしれない」

もちろん絶対ではないが、少なくとも1人で抱え込んでいる時点で悪手以外の何物でもない。最後まで1人で立ち向かった時点で橘は間違っている。

「何にせよオレからしたら橘より2人の存在が重要だからオレが動くつもりはなかった」

八幡の影響で大好きになったが、優先順位などはしっかり把握して無理なことはしないようにしている。

「ふ、ふーん。まああたしが大切ならよし!」

「可愛い後輩だな。帰ったら背中を優しく洗ってやろう」

軽井沢はデレデレして、鬼龍院は不敵な笑みを浮かべる。

そんな2人に綾小路は……

「それも楽しみですが……2人でパイズリしてくれませんか？」

「パツ……は、破廉恥だな君は……」

「ど直球に言うなこの変態！」

自分の要求を口にする、鬼龍院は頬を染めながらジト目を綾小路に向けて、軽井沢は正拳突きを綾小路に放つのだった。

## 帰還後（前編）

「……え」

小さな声が聞こえて揺らされる。誰だ？

「……き……え」

「んっ……んんっ」

再度揺らされたので目を開けると眼鏡の中年男性……担任の坂上先生がいた。

「起きたようだ。もう着いたぞ」

その言葉によつて目を覚ます。どうやら帰りのバスで寝ていたようだ。

「すみません。寝ちゃつてました」

「君以外にもいたから気にしないで良い。降りたら解散して構わない。椎名君は君が起

こしてくれ」

坂上先生はそう言つて後ろの席に向かう。隣を見ればひよりも同じように爆睡している。

「ひより、着いたぞ」

「んっ、んん、おはようございます八幡君」

「夜だけだな」

完全に寝惚けてやがるな……

「降りるぞ。大丈夫か？」

「……はい、大丈夫です」

ひよりはモゾモゾ動いて降車の準備をするので俺を降りる準備をしてから通路に立つ。後ろを見れば坂上先生が沢山の生徒を起こしている。やはり疲れているようだ。

そう思いながら俺達はバスを降りて寒い夜風を感じながら目の前にいる寮に入る。そしてポストの近くにいる有栖に近寄る。

「お疲れ様ですお二人とも。今日はお風呂から上がってインスタント料理にしましょうか」

「だな」

「そうですね」

今から作るのも食いに行くのも怠いし、それがベストだろう。

俺達はそのままエレベーターに入る。そしてドアを閉めようとしたが、そのタイミングで綾小路と軽井沢と鬼龍院先輩が入ってくる。

「済まない、乗せてもらうぞ」

「それは構わないが、鬼龍院先輩は堂々と来たんすね」

「なずな先輩は第三者に見られたら……って、いったん2年の寮に荷物を置いてから来るからな。」

「既に何度も遊びに来てるからな」

「朝比奈先輩は別々みたいだな。朝まで楽しむのか？」

「当然。お前もお風呂を楽しんだろ」

「ああ。その為に試験で本気を出したんだからな」

「そんな動機で本気を出すのはお前くらいだろうな。というかクラスメイトには文句と  
か言われないのか？」

綾小路はパーパーシヤツフルの時から本気を出すようになったが、クラスメイトの中には「なぜ今まで本気を出さなかった？」と文句を言う奴がいてもおかしくない。

「大抵無視してるな。さつきも堀北が今後はクラスのために身を粉にして働けって言ってきたが、オレの力はオレ自身の為に使う。それだけだ」

まあそうだな。確かに綾小路の力は超絶しているが、綾小路がクラスの為に動いたら大半の生徒が寄生虫となるだろう。その癖負けたら綾小路に逆ギレする未来が容易に想像出来るわ。特に5馬鹿あたりはな。

そんな風に考えているとエレベーターが止まり、ドアが開く。

「さて、オレ達はこれで失礼するが……お互いに楽しい夜にしよう」

綾小路はそう言つて2人の腕を組みながらエレベーターから出ていくが、確かに見た。瞳に強い情欲が宿っている事を。

「鬼龍院先輩が抱かれるか賭けないか？抱かれるに1万ポイント」

「私も抱かれるに1票ですね」

「私もですから賭けが成立しませんね」

「どうやら全員抱かれると思つているようだ。恋人の前で違う人の処女を奪うなんて中々だな。」

「そう思いながら俺の部屋がある階で降りて部屋に戻ると懐かしさを感じる。」

「帰つてきたな」

俺は着替えを脱衣所に置いてからリビングに行き、コーラを取り出して飲む。林間学校では水がお茶しか飲んでないので刺激的な飲み物が欲しかったんだよなあ。

コーラを飲んでから荷物の整理をしているとインターホンが鳴るので開けると案の定、なずな先輩だった。

「お待ちせ」

「お疲れ様です。上がってください」

「お邪魔します」

なずな先輩を部屋に上げると2人は既に着替えの準備をしていた。

「なずな先輩。とりあえず先ずは風呂に入りませんか？」

「うん、じゃあ行こっか」

なずな先輩が頷いたので脱衣所に服を脱ぎ始めるが……

「ちよつとハチ君。目つきがエッチだよ」

なずな先輩の生着替えをガン見してしまう。ひよりや有栖は綺麗であるが、なずな先輩はエロさを持っている。着ている黒のブラジャーはセクシーで谷間もくつきり見えている。

「すいません。けどなずな先輩と風呂に入るのは初めてなんで」

プールに行ったりリセックスはしているが、裸で一緒に風呂に入るのは初めてであり、生着替えを見ると興奮してしまう。

俺が興奮しながらズボンを脱ぐとなずな先輩の目が俺の肉棒を捉える。

「やっぱりハチ君と綾小路君のつて大き過ぎるよ。薬とか使ってる？」

「いえ。使ってないです」

「というか何故なずな先輩は綾小路君の肉棒の大きさを知ってるのですか？」

「まさか3Pをしたのですか？」

ひよりと有栖はそんな風に聞いてくるが3Pはしていない。乱交に誘われたからいずれやるかもしれないけど。

「してないよ。確かハチ君の恋人になった翌日、座禅の後にハチ君にフェラチオしてくれって頼まれた際に倉庫に行ったら、軽井沢さんが綾小路君にフェラチオをしていて、結果的に横並びになってフェラチオをしたから綾小路君のも見たの」

「……ほう、随分と仲良くなってますね」

「八幡君と綾小路君は悪い意味でお互いに高め合っていますね」

有栖とひよりがジト目でそう言っているが、綾小路の変態っぷりに俺が振り回されているだけだ。俺は悪くない。

「誤解だ。ついムラっとしただけだ。それよりさっさと入るぞ」

俺は逃げるように風呂場に向かい、お湯を沸かす。これで身体を洗い終わる頃にはお湯が張っているだろう。

「さて……じゃあ久しぶりに頼む。なずな先輩も2人の真似をしてください」

俺は背後からやってくる3人に頼む。

「わかりました。久しぶりなので気持ち良くさせてあげます」

「なずな先輩も真似てください。背中任せます」

ひよりと有栖はシャワーで身体を濡らしてからボディソープを体につけて泡立てて

から、左右から俺に抱きつく。2人の柔らかな身体の柔らかさが俺に昂りを与えてくる。

「わ、わかった。ハチ君が喜ぶように頑張るねっ」

なずな先輩も頷いて2人を真似て身体にボディソープを纏わせて背後から俺に抱きつく。

それによつて柔らかな感触が3方向から伝わつて肉棒がガチガチになる。

「では……精一杯ご奉仕します」

「八幡君も気持ち良くなつてください」

「ハチ君、エッチな気分を楽しんでね」

3人はそう言つて一斉にスリスリを始める。トリプルアタックにより俺の理性の壁は簡単にぶつ壊れた。

もう良いや、林間学校と違つて邪魔が入る可能性は0だし、洗い終わつたら3人を抱こう。

3人のご奉仕によつて理性を吹っ飛ばした俺はそう決意するのだった。

同時刻……

「んっ……はっ……どうだ清隆。上手くできてるか？」

鬼龍院楓花は恥ずかしそうにしながら両手で胸を左右から押して、谷間に挟まれた綾小路の肉棒を刺激する。

「最高ですよ……恵、もう少し滑りを良くしてくれ」

「はいはい、わかったわよ」

「っ……良いぞ恵」

「あっ……擦れて……」

「んっ……ごめんなさい」

綾小路が風呂場の床に仰向けになりながらそう指示をすると、軽井沢恵は口から唾液を綾小路の肉棒に垂らしてから両手で胸を動かす。すると綾小路は息を吐き、楓花の乳首と軽井沢の乳首が擦れて女子2人は小さく喘ぐ。

現在、恵と楓花は綾小路にダブルパイズリをしている。綾小路が頼んだ際には恵はキレて、楓花は珍しく恥じらいを見せていたが綾小路が何度も頼んだ結果、2人とも了承

してくれて今に至る。

「んっ……熱い……凄く熱いな」

「どんだけテンション上がってんのよ……んんっ」

2人の柔らかな胸は綾小路の剛直を挟み込み擦り合わせて綾小路の理性の壁をガンガン壊して、恵と楓花は剛直から伝わる熱によって恥ずかしい気持ちを抱きながら情欲を高めている。

2人はパイズリを続け、時々恵が剛直の先端にキスをする。

（決めた。これが終わったたら楓花さんに抱いて良いか頼んでみよう）

了承したらそのまま抱く。強く拒否したら潔く諦めて今後ゆっくり口説く、弱々しく拒否したらこの場で説得してみせる。

綾小路がそう決意する中、下半身にも限界が来て……

「っ……出るっ……っ！」

どびゅっ！どびゅるるっ！

「んっ！熱いな……変な味だ」

「相変わらずねっとりしてるわね……」

欲望が解き放たれて楓花と恵の顔を汚すのだった。

同時刻……

「……以上より、由比ヶ浜。お前も改善が必要と矯正プログラムの参加となった。よつて普通の携帯の返却はない。専用の携帯は後日渡す」

「はあ?!ふざけんなし!あたし悪い事何もしてないじゃん!」

「林間学校をおけるお前の愚行は聞いているが、これを機会に反省しろ。以上だ」  
「待つし!本当にふざけないでよ!あたしとゆきのんばかり差別して!」

茶柱は強引に決めくくり、由比ヶ浜の喚きっぷりに辟易しながら通路に出る。

「本っ当に最悪！なんでこんなことになるんだし！成績もいつも私の点数は低くしてるし……」

由比ヶ浜は茶柱の背中を見て怒りを露わにする。その表情を見る限り自分は一先悪くないと考えているのが丸わかりであった。

## 帰還後（後編）

「あんっ！あっ！あっあっあっ！んんっ！」

風呂場にて有栖の嬌声が響き渡る。俺が腰を動かすたびに淫らかな表情で俺に跨りながら腰を振って喘ぐ有栖は普段の女帝の姿ではなく牝そのものだった。

「有栖、好きだ、もつと甘えろ」

「はいっ……私も好きですっ！八幡君とのセックスんっ！気持ち、良いですっ……あんっ！」

有栖は目尻に涙を浮かばせながら俺に愛を告げてくる。それがまた俺の興奮を昂らせる。

俺が更に腰を動かして有栖を攻めると、有栖が一際大きくピクリと跳ねる。今まで何回も抱いたからわかる。そろそろ絶頂するな。

そう判断した俺は一度腰を引いてから一気に突く。すると……

「っ……あああああああんっっっっ！」

有栖は絶頂して大きな嬌声で風呂場を響かせる。そしてそのまま俺の方に倒れてくるので優しく抱きしめる。

「可愛かったぞ有栖……んっ、ちゅっ……」

「凄く幸せでした……ちゅっ……んむっ」

有栖を抱きしめて舌を絡め合う。甘えん坊の有栖は凄く可愛らしくて俺の性欲を更に昂らせてくる。

暫くキスをした俺は身体を起こしながら有栖の膣から肉棒を抜いて、そのまま壁に寄り掛からせる。

「さて、次は……なずな先輩、お願いします」

「うんっ、八幡君が気持ち良くなるように頑張るね」

「ではその間に私を気持ち良くしてください」

俺がそう言うとなずなが俺の下半身に近寄り、肉棒に膣を入れ始めひよりが俺の顔面に膣を近づける。

同時にムワツとした臭いを感じるが、そのまま舌を伸ばして……

「んあっ！」

そのままひよりの膣を舐め始め、同時に肉棒をなずな先輩の膣壁に擦り付ける。

さあ、夜はまだまだこれからだし、思い切り楽しませて貰おうか……

「じゃあ楓花さん、最後に確認しますが本当に良いんですね」

綾小路は楓花を風呂場に押し倒しながら確認を取ると、楓花は恥ずかしそうに頷く。「もう私の運命はわかっている。ここで拒否しようが、いずれ私は君の女になる確信がある。ならば遅かれ早かれだ、好きにしてくれ」

楓花はそう返す。つい先程綾小路に抱かせてくれと頼まれたが、その際の綾小路の眼差しには今までに見た事ないほどの圧倒的な力が宿っていて、気丈な楓花も逆らえないと理解してしまった。

無理矢理眼力に逆らって拒否する事も出来たかもしれないが、いずれ逆らえずに屈服してしまい全てを曝け出す未来が見えてしまったので、楓花はこの場で抱かれる事を了承した。

「だが良いのか？君の彼女はジト目で見ているが」

楓花の言葉に綾小路が横を見れば恵はジト目で見ている。しかし綾小路からしたら

怒りの色が少ないように感じる。

「悪いな恵。お前が不機嫌になるかもしれないがオレはハーレムを作る」

折角生まれた感情から女の魅力を知った以上、それを深く学びたい気持ちがある。

「……もう良いわよ。恋愛は惚れた方が負けって言うし、女誑しのアンタを好きになつたあたしの負けよ……ただし！ハーレムは5人までにしなさい」

恵はビシツと指を突きつける。

「えっ……10人は「却下！」セフレは「ああん？」……努力する」

殺意を剥き出しにする恵に屈する綾小路だった。気を取り直して楓花を見る。

「じゃあ行きますよ楓花さん」

その言葉と共に綾小路は自身の剛直を楓花の膺に挿入する。

「っ……あっ……」

初めて感じる痛みに普段気丈な楓花も顔を歪める。下半身から伝わる圧迫感は圧倒的だ。

そんな中、綾小路はどんどん挿入していき、壁にぶつかるとひと息ついて……

「っ……あがぁっ……」

そのまま壁……処女膜を突き破り、楓花の口から獣のような声があがる。

綾小路は一旦動きを止めて楓花が呼吸を整えるのを待つ。

「……ふう、これが破瓜の痛みか……思ったよりも痛かったな」

「恵も痛そうでしたから。動いて大丈夫ですか？」

「ああ……ただ清隆」

「？何ですか？」

「私、初めてで幸せな思い出しにしたいから、気持ち良くしてくれ……」

しおらしい態度でおねだりをする楓花。瞬間、綾小路の中で情欲が高まり……

「んっ！あっ！んんっ！」

恵を相手に培ったテクニクを総動員して楓花を攻め始める。楓花の僅かな反応の違いから弱点を見抜き、弱点を重点的に攻め始める。

「やあっ！そこっ！清隆っ！そこをもっとんあっ！」

ホワイトルームで培った観察眼や学習能力はセックスでも役立ち、既に弱点を攻められまくった楓花は物欲しそうにおねだりをする。それがまた綾小路の情欲を高める。

（そうか……俺がホワイトルームで学んだ事はセックスに活かす為だったのか）

父親の綾小路篤臣が聞いたらブチ切れそうな事を思いながら綾小路は腰を振って楓花の弱点を攻めながら楓花の身体を起こして対面座位に変えながらそのままキスをす

る。  
「んっ……んむっ！んんっ……」

楓花はいきなりのキスに驚くが、綾小路が肉棒を弱点に突くと直ぐに抵抗をやめて綾小路のキスを受け入れて舌を絡め合う。

キスをしながら攻められている内に楓花の中で絶頂が込み上がってくる。

それを認識した綾小路は激しさを加えて楓花の弱点を突きまくりながら唇を離す。絶頂した際の嬌声を聞きたいからだ。

「イけ……楓花っ」

その言葉と共に綾小路は一旦引いてから強く突き入れる。

「っ……あああああああ……っ！」

それによって楓花は絶頂して身体をビクンビクンさせるので、綾小路は優しく抱きしめながらキスをする。

「どうでしたか？ 気持ち良かったですか？」

「……ああ、凄く気持ち良かったですよ……んっ」

「なら良かったです。とりあえず初めてだったんですし、一回休んでください」

綾小路は肉棒を膣から抜いて楓花を壁に寄り掛かせてから、恵を見る。

「さて、次は恵だな。恵の好きなバックをするから尻を突き出せ」

「わかってるわよ。あたしの方が清隆を気持ち良くさせれるから！」

言いながら恵は湯船から出て両手を風呂のふちを掴んで小ぶりな尻を綾小路に突き

出す。

「ああ、夜はまだまだこれからだし、楽しませて貰うぞ」

「っ！ああっ！清隆あっ！」

綾小路は恵の膣に肉棒を挿入して直ぐに腰を振り始め、恵は直ぐに喘ぎ綾小路を求めた。それだった。

「鈴音！鈴音っ！もつと激しくするからな！鈴音えっ！」

「桔梗ちゃん！由比ヶ浜が退学したら元の桔梗ちゃんに戻って俺と結婚な！桔梗ちゃん

桔梗ちゃん桔梗ちゃん……うっ！」

「愛理！そのおっぱいは俺だけのものだからな！孕め愛理！うんっ！」

第1から第3懲罰室のベッドの上にて、須藤と池と山内は自慰行為をして、射精する。バスから帰っても直ぐに懲罰室に移されて味気ない食事を出されてストレスが溜まっている3人にとって自慰行為は唯一の娯楽である。

矯正プログラムによって娯楽物は全て没収され、プライベートポイントも使用禁止された彼らには娯楽がなかった。

よって須藤は堀北を、池が榎田を、山内が佐倉と好きな女子を妄想しながら自慰行為

をする事で気を紛らわしている。

3人は射精するが達成感はまだ無い。既に何百回も妄想で繰り返しているからだ。

「くそっ……綾小路と比企谷のせいで……」

「本当に比企谷と綾小路は最低の屑だな！アイツらが盗撮の邪魔やポイントの支払い拒否をしなかったら、こうならなかったのに！」

「綾小路も比企谷もクラスのリーサルウェポンの俺をこんな場所に入れてタダで済むと  
思うなよ！」

盗撮の邪魔をした綾小路、自分達が困ってるのにポイントを渡さなかった八幡に対して3人は強い恨みを持っていた。

自慰行為を済ませた馬鹿男子3人に恨まれている2人はいえ……

「えへへ……ハチ君大好きっ、ずっと一緒だよ」

「はいなずな先輩。ずっと一緒ですよ」

ちゅっ

「これからも一杯愛してくださいね」

「ああ、一杯愛してやるよひより」

ちゅっ

「私のものですから私を一番愛してくださいよ」

「悪いが有栖、俺は平等に愛すからな」

ちゅっ

「清隆、不束者だが宜しく頼む」

「ええ。今後も可愛い楓花さんを楽しみにしてますよ」

ちゅっ

「あたしのこと、蔑ろにするんじゃないわよ！」

「もちろんだ恵。必ずお前を幸せにする」

ちゅっ

2人とも裸の状態でベッドの上において、同じように裸になっている自身らの恋人と朝まで甘い甘い時間を過ごすのだった。

## 2月

林間学校が終わってから1ヶ月経過した。その間は平穏な時間だった。特別試験もなく、学校のイベントもなく意識を張り巡らす必要もなかった。

よって俺も穏やかな日常を過ごせた。普通に授業を受けたり、放課後に龍園グループにカラオケや映画に付き合わされたり、休日には美味しいものを食べたり、ひよりの裸エプロンにムラつときて夕食ではなくひよりを食べたり、なずな先輩をママと呼びながら有栖にパパと呼ばれる母子&父子プレイ堪能したり、恋人3人にフェラチオをされながら隣で横並びになっている綾小路に軽井沢と鬼龍院先輩がフェラチオをする光景を眺めたりと特に変わった事はなかった。

このまま平和に過ごしたいと思いつながら漫画を読んでいるとチャイムが鳴るので漫画をしまう。チャイムが鳴り終わっている時点で持っていたら減点の対象になりかねない。

チャイムが鳴り終わると坂上先生が入ってくる。

「全員いるな。これではHRを始める。最初に連絡事項だが特別試験が2週間後に行わ

れる」

坂上先生の言葉にクラスメイトの表情に警戒心が宿る。

「そう緊張しなくていい。今回の試験は無人島試験のように暴力を振るったりしない限りペナルティは一切ない」

「つまりボーナス試験みたいな感じって事か?」

「その通りだ龍園。それでは試験内容を話すが今回の試験は簡単に言うところグループディスカッションだ」

グループディスカッション……人のグループにテーマを与えて議論させ、グループとしての結論を出させる事だ。

「今回の試験では試験1週間前までに最低2人、最高で4人のグループを作りグループディスカッションをして、今から2週間後の発表会で発表をしてもらう。そして報酬についてだが……」

1位のグループ

300クラスポイント 1人あたり100万ポイント

2位のグループ

200クラスポイント 1人あたり80万ポイント

3位のグループ

- 100クラスポイント 1人あたり50万プライベートポイント
- 4位のグループ
- 60クラスポイント 1人あたり30万プライベートポイント
- 5位のグループ
- 40クラスポイント 1人あたり20万プライベートポイント
- 6位から10位のグループ
- 1人あたり10万プライベートポイント
- 11位から20位のグループ
- 1人あたり5万プライベートポイント

坂上先生が報酬を提示するが凄く豪華だ。これには龍園も目を見開いている。

「ただしクラスポイントについてグループの生徒のクラスの種類によって分割される」「つまり他所のクラスとも組めると?」

「そうだ。例えば龍園が同じクラスの比企谷と組んで1位を取れば300クラスポイントと2人で200万プライベートポイントの利益になるが、龍園がAクラスの坂柳、Dクラスの綾小路と組んで1位を取れば100クラスポイントと100万プライベートポイントが龍園の出す利益となる」

つまり他クラスの優秀な生徒と組む場合、クラスポイントの利益が減るって訳か。4クラス連合で1位を取ったら75クラスポイントみたいな感じで。

「坂上先生、お題と審査員はなんですか？」

俺は気になった事を質問する。

「お題については完全に自由だ。社会問題であろうと、この学校の特別試験についても、日常的に思う悩みでも君達が好きに考えて良い。ただお題の難易度によつてはボーナス点が与えられる」

自由か……お題が決まっているならまだしも、範囲が広過ぎて悩むな……

「審査員については生徒会役員の南雲、桐山、溝脇、殿川、一之瀬の5人だ。尚、一之瀬については露骨な鼻屑や差別をした場合、退学及び今回の特別試験でCクラスが得たクラスポイントとプライベートポイントを全て没収して他の3クラスに均等に配分するルールなので安心して構わない」

なるほど、それだけ厳しいペナルティがあるなら公平に判断するだろうな。生徒会には権力があるようだが、責任も重いようだ。

「尚、グループメンバーが決まったら試験1週間前……つまり来週の夕方6時までに職員室に報告してもらうが、一度報告したら変更は出来ないので気をつけるように。尚、ペアを組めなかった場合、その生徒の所属するクラスのクラスポイントが1人につき3

0ポイント減らされる」

つまり早いうちに優秀なペアと組むべきって訳か。

「組めなかつた生徒は不参加ですか？」

「いや、どこかの2人グループか3人グループに学校側が振り込む……まあ所属するクラスの生徒が多く集まるグループになるだろう」

つまりグループを組めない無能の尻拭いは所属クラスグループがしろって事か。

「細かいルールはここに書いてあるので後で読むように。ではHRを終了する」

坂上先生は教室から出て行き、同じタイミングでチャイムが鳴る。話し合いは昼休みになるだろうがどうするべきか……

昼休み……

「全員聞け。今回の作戦の方針だが、最初に比企谷、ひより、金田は今から速攻でDクラスの優秀な生徒に唾をつけとけ」

龍園が昼休みと同時にそう告げる。

「それはDクラスと同盟を組むという事ですか？」

「違う。Dクラスの優秀な奴を引き入れるだけで雑魚は放置だ。Dクラスには綾小路や高円寺みたいな桁違いの奴がいるが、ソイツらは由比ヶ浜みたいな桁違いの足手纏いによつてクラスポイントに対するモチベーションは低いからプライベートポイントを取りに行くだろう」

石崎の質問を一蹴する。そりやそうだ。いくら頑張つても由比ヶ浜達5馬鹿の足手纏いっぷりが酷いからな。それならプライベートポイントを狙うのは当然だ。

「だから連中を引き入れて、そいつらにはプライベートポイントをBクラスにクラスポイントが入るようにする。プライベートポイントを更に要求してきた奴が居たら俺が放課後に交渉するから連絡しろ。わかつたら行け。恐らくAクラスとCクラスもプライベートポイントを餌にDクラスの粒を狙うはずだ」

龍園が促すので俺とひよりと金田は立ち上がり教室を出る。同時にAクラスからは葛城や橋本や神室、Cクラスからは神崎、白波などクラスの中心が出てくる。やはり狙いはDクラスのようなだ。

しかしDクラスと隣り合っているこつちが有利だ。

俺達は早足でDクラスに乗り込み……

「綾小路。今回の試験で俺と組もうぜ」



神崎と白波も勧誘し始める。Dクラスって結構粒がいるんだよなあ。

そんな光景を見てDクラスの大半からは怒りの色が見えず、仕方ないって表情を浮かべている。どうやらDクラスの生徒も綾小路達の気持ちを理解できるのだろう。

怒っているのはAクラス行きを諦めておらず尚且つ誰からも誘われてない堀北や

……

「はあ?!何勝手に乗り込んでくるしマジキモい!退学しろし!」

「しかも愚か者の勧誘?理解に苦しむわ。類は友を呼ぶのかしら?」

「部外者は今直ぐ出ていけよ!」

「そうだそうだ!」

「俺達がポイントを得てもお前らのせいで募金行きになるんだよ!」

5馬鹿くらいだろう。後山内、お前は上位陣に入れないからポイントの行き先を気にする必要はないぞ。

## 傲慢

堀北の反対を皮切りに5馬鹿が喚きだすが気にしないでおこう。

「さて綾小路。改めて俺と組んでくれないか？」

「いやいや、俺と組んでくれないか？」

「とりあえず高円寺氏は放課後に時間を作ってくれないでしょうか？」

「あ、折角ですし、私と千尋さん、千秋さんとみーちゃんの4人で組みませんか？」

「良いよひよりちゃん」

「私も良いよ」

「私もですつ。宜しくお願いしますつ」

おつ、早速4人パーティーが出来たようだ。この4人は林間学校で同じ小グループ、つまり由比ヶ浜の理不尽に苦しめられた4人だし団結力ではどこのグループにも負けないだろう。

「はあ?!何無視してんだしマジでキモい!人として恥ずかしく「黙れ、殺すぞ」びいっ!」  
由比ヶ浜の喚きに綾小路が殺意を向けてビビらせるが、同時に松下がキレる。

「綾小路君！馬鹿が私の席の近くににいる時に殺気を出さないでよ！」

「そうだよ！また脱糞されたら嫌だからね！」

「周りをよく見ろよ！」

「……済まん」

由比ヶ浜の近くにいる生徒が綾小路にキレて綾小路は小さく頭を下げる。まあ松下達からしたら再度脱糞されたら嫌だよな。

「ふざけんなし！あたしに恥をかかせて絶対に許さない！」

由比ヶ浜はブチ切れるが、存在そのものが恥のお前が何を言っているんだ？

「馬鹿はほっとくとして、ひよりさんとみーちゃんと千尋さんと組むのは賛成だし4人で職員室に行こっか」

「待ちなさい。そんな勝手な真似は許さないわ」

松下がひよりと王と白波にそう話しかけると堀北が止めに入る。

「今回はマイナス要素がない以上、Dクラス内でグループを作って綾小路君と高円寺君を別々にして、1位2位を狙うのが正しい戦術よ。他のグループについても成績優秀な生徒同士で固めて上位を狙うべきだから、勝手な真似はしないで私の指示に従って」

まあそれがDクラスとしては正しい戦術だろう。しかし……

「あのさ堀北さん。正しい戦術でも本人が嫌なら無理強いする権利はないんだよ。それ

とも実力のある生徒には人権がないのかな？」

榎田が反論する。今までより口調は荒いが、それでも慕われているのは半年以上、由比ヶ浜達を庇うほどのメンタルを持っているからだろう。

「人権云々以前に、クラスに貢献するのは義務よ」

「だとしても何で堀北さんが偉そうに指示するの？ 少なくとも綾小路君と高円寺君は堀北さんより遥かに優秀なんだし、「協力するのが義務だから私の指示に従いなさい」って命令じゃなくて「クラスポイントを増やしたいから、クラスメイトと組んで貰えないかしら」って頼むべきじゃないかな？」

正論だな。下手に出るとまでは言わないが、堀北の言い方はストレスが溜まりやすい。格上からしたらムカつくだろう。

「それにさ、前から思ってるんだけどさ、普段誰とも関わらない堀北さんが何で特別試験になったら偉そうに仕切るのかな？ 堀北さんが仕切るとクラスメイトにストレスが溜まって、そのフォロワーをするのは手間だから出しゃばらないでくれるかな？」

おー、由比ヶ浜のお陰でワイルド化した榎田は中々毒舌だな。

「つ………だったら貴女はクラスのリーダーとして相應しいのかしら？」

苛立ちに満ちた表情を浮かべながら詰問する堀北だが……

「確かに私は綾小路君や高円寺君みたいに絶対的な力はないけど、少なくとも堀北さん

よりは相応しいと思うよ」

榎田はハッキリとそう答える。

「そうだな……オレも格下に上から目線で言われると不快だし、今後堀北が一生出しやばらないでくれ」

堀北の隣にいる綾小路が欠伸をしながらそう返すと堀北は歯軋りする。今まで格下と思つていた相手が圧倒的格上とわかつた以上、我慢出来ないのだろう。

「話を戻すがオレは比企谷と組んで良い。どうせクラスの為にクラスポイントを稼いでも由比ヶ浜が直ぐに減らすし、やる気が出ない。体育祭前後の時みたいにな」

綾小路の言葉にDクラスのメンバーはそこまで怒りを見せない。クラスの為に動きたくない気持ちは理解出来るからだろう。綾小路の言うように由比ヶ浜は体育祭の前後に俺と白波に暴力を振るつてクラスに迷惑をかけているからな。

「ふざけんなし！アレは元生徒会長が出しやばり妹と同じように無能だからだし！あんなのがAクラスなんてマジで腐ってるよ！」

「何ですって！本当の無能の貴女に言われたくないわ！」

由比ヶ浜の逆ギレに堀北がキレル。まあ由比ヶ浜に無能と言われたらキレルわな。  
「2人とも落ち着いて！喧嘩はしても意味なんかないよ」

「はあ?!部外者は口を挟むなし！」

「貴方はいつもそれね。波風を立てるのを避けるだけで問題を解決しようとしなくて、こんな無能を甘やかすだけだし黙ってなさい」

「誰が無能だしこの無能兄妹の片割れ！」

「どの口が言っているのかしら?!」

平田が仲裁しようとするが由比ヶ浜と堀北は封殺するが、実際平田は波風を立てるのを避けるのではなく、5月あたりから無能に対してしっかりと咎めるべきだったのだ。だから馬鹿が増長するのだ。

「はいはい。どっちもどっちだから喧嘩するなら教室の外でやれ」

そんな中、綾小路が面倒臭そうに追い払うジェスチャーを見せる。しかし由比ヶ浜と同じ扱いをされた堀北の顔に徐々に怒りの色が宿る。

「ふざけないで！」

激昂した堀北はコンパスを綾小路の腕に刺す。しかし綾小路は全く表情を変えずに俺を見る。

「ところで比企谷。グループメンバーはオレとお前の2人か？龍園あたりも一緒か？」

いや、表情を変えずに質問しないでくれないか？ハッキリ言ってメチャクチャ怖いんだけど。

「っ！」

眼中にないと思われた堀北は繰り返してコンパスを刺すが、アイツ以前にも似たような事をしてしばかれてなかったか？

「10回刺したな。そろそろ反撃するか」

綾小路はそう言つて血が付着した左手でコンパスを奪つて床に放り投げて……

ゴキツ　ゴキツ

堀北の肩の関節を外して、無理矢理はめなおした。

「があああああああああああつー！」

堀北は獣のような叫び声を上げて肩を押さえる。アレは痛そうだ。容赦はないが、事前に10回もコンパスで刺されたし正当防衛は成立するだろう。

「鈴音に何をしやがるー！」

ここで須藤がブチ切れて綾小路に突撃をするが瞬殺される未来しか見えない。肩を壊されたのを忘れたのか？

そう思う中、須藤は綾小路の顔面に向かって拳を振るう。対する綾小路は動け気配を見せないが、藤巻先輩にやったように頭突きで迎撃するつもりか？

疑問に思っていると綾小路はギリギリで身体を倒して拳を回避する。勢いの止まらない須藤の拳は……

「ぐふっ！……あああああああつー！」

そのまま避けた先の堀北の顔面に命中して、堀北は鼻血を噴きながら床に倒れ、肩が床にあたりのたうち回る。

「す、鈴音！ 済まん！」

須藤が顔を青白くしながら身を屈めて堀北の様子を見る。そんな中、綾小路は立ち上がって俺を見る。

「さて比企谷。グループについて話したいがジャージに着替えてから食堂で話したいから先に行っていてくれ」

綾小路は血が垂れた制服の裾を見せながらそう言ってくるが、お前は最初に医務室に行け。

俺は平然とする綾小路に内心にてそうツツコミを入れるのだった。

綾小路と八幡が一足先に去った後……

「じゃあ私達も話し合おうか」

松下がひよりと王と白波にそう言つて教室を出ようとす。

「少し待つてくれないか？出来ればクラス内でグループの構成がある程度確立するまでグループを組むのは遠慮してくれないかな？」

平田が止めに入るが松下の目は冷たい。

「だつたら平田君が今後、ハッキリと罪を咎めるつて言うなら考えるよ。毎回5馬鹿が問題を起こして私達が怒ると平田君は仲裁に入るだけで5馬鹿に反省を促してないけど、ハッキリ言つてウザいよ」

「そ、それは……」

松下の容赦ない指摘が平田を曇らせる。しかしこれはクラスメイトの代弁でもある。毎回5馬鹿を庇う平田にクラスメイトは苛立つ事もあり、恵はそれを理由に偽カップルを止めて、平田に恋した王の恋心はとつくのとうに冷めている。

「ふざけんよ松下！俺達は被害者なんだよ！綾小路や比企谷のせいだな！」

「は？キモ。盗撮犯が被害者な訳ないでしょ。もういつそ5人で一緒に退学して乱交パーティーでもしなさいよ、お似合いだから」

「何ですつて?!私がおんなゴミとお似合いなんてあり得ないわ！」

「そうだし！犯罪者と真面目なあたしが似合うわけないじゃん！」

「うるせーよ！テメエなんかホームレスの肉奴隷がお似合いだ！雪ノ下についても貧乳

は無価値なんだよ！」

「そうだそうだ！俺は桔梗ちゃんとエッチするんだから！」

「え？やめて無理。池君に処女を捧げるなら首を吊る方がまし」

さつきまで堀北が綾小路と須藤によつてボロカスになった光景を見て愉悅を感じていた榎田だが、池の発言に不快感剥き出しになる。

「そこまで、言わなくても良いじゃん！」

「いや、マジで嫌だし。というか松下さんは他クラスと組んで良いよ。綾小路君や高円寺君が1位を取つても、直ぐにクラスポイントは0になるんだし、好きにやつていいしよ」

榎田は松下にそう口にする。5馬鹿がクラスにいる以上、未来はないのだから。

「じゃ遠慮なく。いこつか」

松下の言葉にひよりと王と白波は教室から出て行き、葛城達他クラスの主力は榎田から好きにして良いと許しが出たのでDクラスの優秀な生徒に交渉を始めるのだった。

## 結成

「で、組むのは構わないが他のメンバーとかお題は決まっているのか？」

食堂にてジャージ姿の綾小路が質問しながらカレーを食べるが、コンパスで10回も刺された腕で平然と食ってるしマジで人間離れしてるな。

「お題はまだだ。あくまでDクラスの中にいる粒を引き入れるのが最優先だ」  
「まあ当然か」

Dクラスは不良品と評価されているがそれは違う。全員が不良品って訳ではなく数人は優秀な奴がいる。不良品扱いされるのは総合力が低いのとどうしようもない本当の不良品が数人いるからだろう。

そして優秀な生徒については桁違いの足手纏いがあるから基本的にクラスポイントに対するモチベーションは低いだろう。実際Dクラスは5馬鹿にクラスポイントをガンガン減らされているし。

一方こちらのクラスポイントの取り分も減るだろうが、重要なのはクラスポイントを取ることで。取り分が減ろうが確実に取りに行く為に有力な生徒を引き入れるのはベストあ。

よってクラスポイントに執着心が少ないDクラスの粒は価値が高い。

「とはいえ他のメンバーを追加するとしても、ある程度実力を持つ奴にする」

採点基準はわからないが、プライベートポイント狙いで雑魚2人を追加して「4人中2人は碌に動いていない」と減点対象になったら嫌だからな。

「というか俺のクラスはプライベートポイントよりクラスポイントの方が重要だから人数を増やす必要性は低い。」

そんな風に考えていると食堂の入り口付近で橋本が高円寺と歩いていたり、神崎が幸村と券売機に並んでいる。どうやらAクラスとCクラスもスカウトに勤しんでいるのだろう。

「Dクラスの成績優秀者は人気者だな」

「かもな……ちなみにお題についてだが難しい内容ならボーナスがあるらしいし、「由比ヶ浜の愚かさの改善」についてはどうだ？」

「アホか！ 難し過ぎるわ！」

綾小路の提案にそう返す。確かに難しいからボーナス対象だと思うが、由比ヶ浜の場

合、余りにも馬鹿だからどこから問題解決に取り組めば良いのかわからない。というか解決出来る未来が全く見えない。

「じゃあ「須藤と池と山内の童貞卒業方法」とかはどうだ？」

「あん？そんなもん「ソープに行く」か「レイプする」のどちらかしかないだろうが。わかりきってるからボーナス対象にはならないだろ」

「じゃあ「須藤と池と山内に恋人が出来る方法」なら？」

「それならまだしも……難しくね？」

あの3人に恋人が出来る方法……催眠術とかか？

「というかそんな発表したら馬鹿が煩くてイラつきそうだからやめようぜ」

「まあそうか。そうなると今の生徒会長が好きな個人主義の学校についてはどうだ？」

「それ悪くないな。場合によっては学校に取り入れてくれるかもしれないし、俺達が無利になる方針とか考えようぜ」

実力者は上に、雑魚は下になって南雲会長は考えているし、上手くいけばポイント以外にも利益が出るかもしれない。

「まあとりあえず飯を食おう。お題については正式に決まってるからで良い」

まだ2週間もあるのだ。お題を決めるのは今日明日でも問題ないだろう。

「わかった」

？  
そう言うって飯を食うのを再開する。しかしどんなグループが出来上がるのだろうか

数時間後……

「……はい、グループ登録しました、頑張ってください」

職員室にて、坂上先生に登録してもらおう。龍園とも相談したが今回は綾小路のみと組んだ。実際龍園も雑魚と組んで上位を取った際に起こり得るペナルティを危険視していたからな。

ちなみに龍園は有栖と話があるらしいが、あの2人が何をやらかすかちよつと怖いだけだ。

そんな風に思いながらも職員室から出て廊下を歩いていると前方から雪ノ下と由比ヶ浜を発見したので俺と綾小路は近くにあるロッカーの影に隠れる。見つかったら絶対に面倒な事になるってわかっているからな。中学時代から敵視している俺、由比ヶ浜に脱糞させた綾小路なら尚更だ。

「頑張って1位を取ろうね」

「当然よ。既にテーマについても考えてるわ」

「え？どんな内容？」

「私達が迫害を受けている点からこの学校が如何に愚かである事、それを改善する為になすべき事を纏めて発表するわ」

「やつぱりそうだよね！そもそも最低なヒッキーや障害者のチビがDクラスじゃないなんてあり得ないよね！」

「ええ。他にも入学するべきじゃない愚か者もいるし、私達がこの腐った学校を変えていきましよう」

「うん！あたしも頑張るよゆきのん！」

そんな会話をしながら職員室に向かっているが直ぐにキレて暴力に走る由比ヶ浜こそ入学するべきじゃない愚か者だろう。

「これ、本番で低い点数で喚くパターンじゃないか？」

綾小路がそう聞いてくるが十中八九そうなるだろう。満点の1割程度の結果になって生徒会メンバーに怒りをぶつける姿が簡単に見えてくる。

「まあさつさと寮に行こうぜ。図書館だと馬鹿達と鉢合わせるするし」

「じゃあオレの部屋に行こうか」

「別に構わないが、その時間は女を呼ぶなよな？」

この前なんか綾小路から借りた本を返す際に綾小路の部屋に行き、入口で合鍵を持つてる鬼龍院先輩と会ったので一緒に入ったのだが……

イけ、恵……

清隆あつ！あんあんつ！ああああああああつ！

脱衣所の近くの廊下で綾小路が激しいピストンして全裸の軽井沢が中出しによって絶頂していたからな。

その後は軽井沢からピスタを食らいつつも許してもらったが、あんなのはもうゴメンだし、課題の最中にやり目的でやって来るのは勘弁して欲しい。

「そうだな。ちゃんと連絡しとく」

綾小路は携帯を取り出して操作するがマジで頼むぞ。

そう思いながら俺達は寮に戻り、綾小路の部屋に入る。部屋の間にはパイプやローター、媚薬やローションがあるが俺と同じタイプの物を使ってるようだ。

「さて、昼休みに個人主義の学校について話したが、その場合は現状におけるクラスの間

題点について説明して、それから改善案を出すのが基本だ」

「まあそうだな。とりあえずクラスの問題点について今からメモに書くから待っていてくれ」

綾小路はメモする必要はないだろう。何せDクラスにおける問題点なんかこの学校の生徒から誰でもわかるから。

しかしウチのクラスにも問題点がない訳じゃない。真鍋のグループは弱い上に向上心がないが、俺達がAクラスに上がっても推薦を貰うのは違う気がする。重要なのはクラス全体の向上心を上げる事だ。

他にもまだある。今後ウチのクラスは昔のAクラスのように龍園派と比企谷派が出来る可能性がある事だ。

2学期前半までは龍園の支配体制が揺らがなかったが、俺が指揮したペーパーシャツフルで学力面で格上の一之瀬クラスを小細工抜きで勝った事で時任を始め一部が俺をリーダーにしようとしている。

俺としては龍園がリーダーで良いので祭り上げようとするのは勘弁して欲しい。

(まあそれはわざわざ発表する事じゃないか……)

そう思いながら違う内容を書いているとインターフォンが鳴る。

「誰だ?」

綾小路も心当たりはないようでモニターに向かう。

「は、い」

『あ、いたいた。綾小路君、ちよつと良い？後比企谷君はいる？』

モニターからは松下の声が聞こえてくる。

「いるが、どうかしたか？」

『お願いがあるんだけど、ちよつと入っても良いかな？』

「少し待て」

綾小路は玄関に向かうが、アイツらはひよりと同じグループだった筈だが……

疑問に思っている綾小路がリビングに戻ってきて、松下と王美雨が入ってくる。

「お邪魔するね。比企谷君もこんにちわ」

「改めて、王美雨です。みーちゃんと呼んでください」

「コミュ力高いな。」

「宜しく。で、お前らはひよりや白波とペアを組んだんじゃないのか？」

「組んだよ。で、明日までに各自でお題を考えるようにして解散したよ」

「なるほどな。で、さつき俺にも用があるような会話をしていたが、何の用だ？」

綾小路と一緒に頼まれるような事はわからん。

俺が質問すると松下はいつも通りであるが、王は顔を真っ赤にする。何を頼む気だ？

頭に疑問符を浮かべていると……

「2人ともさ、私達とセックスしてくれないかな？」  
……え？

## 発散

「2人ともさ、私達とセックスしてくれないかな？」

松下の頼みに耳を疑ってしまふ。今セックスをしてくれって言ったか？

王を見れば恥ずかしそうにしながらも否定はしない。マジで？

「……理由を聞こうか」

綾小路はそう聞くが確かにまずはそこだ。そう頼んできた経緯を知りたい。

「うん。さつきも言ったけど、私達のグループは一旦解散してお題を考えることになったの」

「それでひよりさんは茶道部に、千尋さんは美術部に行き、私と千秋さんは落ち着く部屋で考えようと寮に向かったのです」

「それで？」

「で、歩いている最中に2人でお題について話してただけど私が「由比ヶ浜結衣の愚かさは改善出来るのか」ってテーマはどうだって話して、みーちゃんが「どうせ改善しよ

うがないってオチになる」って返したの」

やはり由比ヶ浜の馬鹿っぷりについてはお題に選ばれやすく、直ぐに無理って考えるようだ。

「まあそれだけならまだしも、それをあの馬鹿と雪ノ下が聞いてギャーギャー騒いだの」  
「容易に想像出来るな」

綾小路が頷きながらそう返す。

「一応なんとか流したけど私達にストレスが凄く溜まったんです」

「本当はぶちのめそうとしたんけど、みーちゃんが止めてね」

「だからセックスでストレス発散しようとしたのか？」

「まあね。元々セックスがストレス発散になるか興味はあったし、これまでに5馬鹿によつて生まれたストレスの発散の方法は試したけど、ストックが尽きたの」

「私達もこれまでに漫画やゲーム、カラオケやボウリング、パターゴルフや水泳、果ては女性向アダルトビデオに千秋さんや麻耶さん達との百合プレイなど色々試しましたが、どれも完全な発散には至りませんでした」

本当に試しているんだな。しかしそれでも完全な発散には至らないと。

しかしひより達の許可が降りずにやったら問題だからなあ。

そう思っていると松下が携帯を取り出す。

「あ、2人の恋人5人から許可は貰ってるよ」

松下は携帯を取り出して操作してから渡してくるので、綾小路と見てみればメール画面だった。

送信メールを見れば俺達の恋人5人に「由比ヶ浜と雪ノ下によってストレスが溜まりまくって限界、私とみーちゃんがストレス発散の為に綾小路君と比企谷君相手にセックスしていい？」送られているが……

「お前ら、なぜな先輩が俺の恋人になったのを知ってるのか？」

なぜな先輩との関係は公にはしてないし、これは予想外だ。

「そりゃ林間学校で同じ苦楽を共にしたからね。小グループのみならず大グループの先輩とも強い絆が出来たから、相談に乗った事もあるからね」

あつ、察し……

俺はなんとも言えない気分でメールを見れば……

f r o m ひより

私も林間学校では責任者として本当の地獄を見ましたし、気持ちわかります。しかし八幡君の恋人としては「基本的に週に1回だけ」以上の譲歩は出来ません。それを守るなら八幡君次第では構いません

f r o m 有栖

まあこのままでとストレス発散出来ずに精神障害が起こるかもしれないですし、千秋さんはもう起きかけていますし仕方ありません。ただし今後ストレス発散の為に八幡君とセックスをする際は「基本的に週に1回」「事前に私達に連絡する」を守ってください。それを守るなら八幡君次第です

f r o m ならずな

可愛い後輩が苦しんでるなら認めないわけにはいかないかな。けど事前に私達に連絡はして欲しいかな

……なんか3人とも普通に許しているし。どんだけ由比ヶ浜達に対する苛立ちに感じているのだろう。軽井沢と鬼龍院先輩のメールも似たような内容だし。

というか俺の方にもメールが来てないか見てみれば、マナーモードだから気づいてなかったが3人からメールが来ている。見れば多少内容は違っているが要約すれば3人とも「セフレ程度の関係なら許すからストレスを発散させてやれ」ってニュアンスのメールだった。恋人がセフレの存在を許容して、セックスするように促すって……

由比ヶ浜の不快さに戦慄しながら携帯を閉じて2人と向き合う。

「じゃあ始めようか。2人はどっちとやりたい？それでも乱交にするか？」

綾小路はノリノリだが、俺もやること前提になってるし。

「うーん。どっちを相手にするかは決めてなかったし、サイコロで決めようか？」

「では最初は偶数が出たら私が綾小路君と、奇数が出たら比企谷君と……みたいにしましようか？」

「オツケー……じゃあ行くよ」

松下がサイコロを振ると4……偶数が出る。

「偶数、つまりみーちゃんが綾小路君で、私が比企谷君か」

「わ、わかりました」

みーちゃんが恥ずかしそうに頷くと綾小路は即座にみーちゃんに近寄る。早過ぎる

……

「じゃあ早速始めようか。キスはダメとかがあるなら最初に言ってくれ」

「い、いえ。キスなら既に百合プレイの際にしていますので、好きにしてください」

「わかった。鍛えたテクニクでストレスを完全発散させてやる……んっ」

綾小路は言うなりみーちゃんを抱き寄せてからキスをして、直ぐに舌を振り込む。

「んっ……ちゅっ……」

みーちゃんは恥ずかしそうにしながら舌を返して、部屋にぴちゃぴちゃと唾液交換の音が聞こえてくる。

「じゃあ私達もしよつか。いきなりかもしれないけど、私達のストレスは限界だし付き合ってよ」

「そんなに辛いのか？」

「私やみーちゃんは脱糞女の席から近くて、毎回間近で喚きを聞いてるんだよ。」

うん、それは確かに辛いわ。離れている場所から喚きを聞いても苛立ちと疲れが生まれるくらいだし。

仕方ない……由比ヶ浜がどんどんウザくなつた要因には俺も含まれてるからな。ひより達の承認もあるし、付き合うか。

「……わかったよ。じゃあ先にNGなプレイを言ってくれ」

「ありがとう。NGなプレイ……アナルとかスカは無理かな」

「安心しろ。前者も後者もやらないから」

初っ端からマニアックなプレイをする気はない。というかスカは俺も無理だ。

「お願いね。じゃあ経験豊富な比企谷君に全てを任せるから、みーちゃんみたいに気持ち良くして」

チラッと横を見れば綾小路は既に激しいキスをしながら右手をみーちゃんのスカー

トの中に入れ左手で胸を揉んでいる。みーちゃんは既に蕩けた表情を浮かべているが、凄くテクニククなのは簡単にわかる。

（あれだけ激しい攻めは俺には無理だな。ま、俺は俺のやり方をすれば良いか）

「……わかったよ」

俺は覚悟を決めて松下を抱き寄せ、綺麗な茶髪を横にずらして……

「んっ……」

そのまま触れるだけの優しいキスを落とす。さて、ストレス発散出来るように頑張らないとな。

「んあっ！んんっ！」

王の一際喘ぎ声が響き、綾小路の右手に湿り気が伝わる。下着越しに膣を攻めた綾小路だが、キスや胸に対する激しい攻めによって王は呆気なく絶頂する。

「どうだみーちゃん？気持ち良いか？」

「……はい。凄く気持ち良かったです」

綾小路が質問すると息を荒げながらも微笑みを浮かべて頷く。

「なら良かった……それにしても……」

綾小路はチラッと王の後ろを見れば……

「んむっ……ちゅっ……んんっ」

「ちゅっ……ねえ、焦らさないでよ……」

「おねだりしてる姿、可愛いな」

「……意地悪」

八幡が千秋にキスをしながら胸や尻を触っているが、激しさは全くないが……

（凄く優しい攻めだな。それでありながら相手を情欲させている）

自分は激しい攻めで王を屈服させてエロい姿を晒したが、八幡は優しい攻めで千秋の欲求を高めてエロい姿を晒している。

普段教室で見る千秋は由比ヶ浜が絡んでる時以外は割とクールであるが、焦らされる事で不満そうにおねだりしている千秋は可愛さとエロさを出している。

（オレと真逆だが反応のエロさに差はない……本当にセックスは奥が深いな）

自分もいつか優しい攻めで焦らすやり方を学ぼう、そして更に魅力的な女を見たい。

綾小路がそんな事を考えていると肩を叩かれるので意識を戻すが、王が綾小路に艶のある眼差しを見る。

「ねえ綾小路君……もつと激しく攻められてストレス発散したいから、そろそろ……」  
「ああ、わかった」

綾小路は頷いて、王のピンク色のショーツを脱がし、自身もズボンと下着を下ろす。  
「じゃあ、するぞ」

「凄い、大きい……！……どうぞ……」

「わかった」

「っ！……ああ……」

了承を得たので綾小路はそのまま剛直を王の膣内に入れ……  
「あぐううっ！」

そのまま処女膜を突き破り、女にするのだった。

快楽の宴はまだまだ始まったばかりだ。

## セフレ

「あつーあつあつあつー！ああんっ！そこっ！」

目の前で松下が絶頂するので松下の膣から指を抜くと、手に愛液が付着していて松下は息を荒くしてビクビクする。

セックスをするように頼まれてから20分、じつくりコトコト攻めた結果、絶頂したようだな。

「随分と濡らしてるな」

「……比企谷君が焦らしまくるからだよ。そろそろ私も思い切り攻めてよ……あんな風」

半裸上たいの松下がそう言って指を向けた先では……

「ああんっ！だめだめ！清隆君っ！んあつ！清隆君のおちんちん、気持ち良いよお！」

綾小路の激しい連続突きにより、みーちゃんが小さい身体を揺らしながら喘ぎまくる。普段は可愛らしい女の子だが、今の彼女は完全な牝である。

「あんな激しいのが良いのか？」

「うん、アレならストレスが完全に吹き飛ぶだろうし」

「……まあ良いだろう。じゃあ」

俺はそのままズボンを下ろして我慢汁で濡れてる肉棒を露わにする。

「えっ、大きいね。男子って皆こうなの？」

「いや、俺と綾小路が例外だ。それより本当に良いんだな？」

念の為にもう一回確認しておく。いくら本人やひより達が認めたとはいえ、松下は初めてだからな。確認し過ぎて損はないだろう。

「うん、もう比企谷君にたくさん焦らされたけど、もっと凄い快感が欲しいの。だから……良いよ」

最後に了承をして俺に寄りかかってくる。どうやら覚悟を決める必要があるようだな……

そう判断した俺は松下を床に押し倒して、ゴムをつけてから肉棒を膣の中に入れていく。

「っ……結構キツイね」

「もう少しだけ我慢してくれ」

そう言いながら俺はゆっくりと奥に進め、壁……処女膜にぶつかる。改めて確認する

と頷くので俺はそのまま突き入れて膜を破る。

「……………つつつつ！」

松下は叫び声をあげはしなかったが苦痛そうに顔を歪めるので腰の動きを止めて落ち着かせるのを待つ。

そして暫くしてから話しかける。

「大丈夫か？」

「うん……………大丈夫だからそろそろ動いて欲しいな」

松下が頷くので俺は腰を引いてから押す。それを繰り返して松下を攻める。

「あんっ！あっ！やあっ！んっ！」

松下は美しい茶髪と結構大きな胸を揺らしながら喘ぎ、足を俺の腰に絡めてくる。俺は腰を振りながら突く方向を少しずつズラして弱点を探る。

「んっ！ああんっ！」

一際大きな嬌声を出す。弱点発見、後は重点的に攻めるだけだ。

「んっ！ああ！ああんっ！そこはっ！ダメエー！」

松下はダメと言いながら足の拘束を強めながら一際大きな声を上げ続ける。

しかし俺は無視してそこを攻めまくりながら身体を起こして、駅弁体位にして下から

突き上げる。

「ダメツ！本当にダメになっちゃう！比企谷君のおちんぼ抜きでいられなくなっちゃうから！んあああつ！」

そんな松下だが、俺の首に腕を絡めてやる気を露わにしているから説得力はまるでない。

俺も容赦しないで弱点のみを攻めまくろう。更に腰を振る早さを上げて、キスして喘ぎ声を止める。

「うむっ?!んっ!んっんっ!ちゅっ!んむっ!」

松下はキスをされて目を見開きながら喘ぎこうとするが、喘げずに俺の口内に息を吐くだけだ。

そのままキスをしている松下の膺の締め付けが強くなって震え出す。どうやら絶頂が近いようだ。

俺はキスをやめてトドメの一突きをする。隣で腰を振る綾小路のペースも上がる。

「イけ、みーちゃん」

「ぶはっ!今だ松下!」

「もうダメツ!清隆君のおちんちんでメチャクチャにんあああああああつ!」

「ダメツ!イクっ!イツちゃう!あああああああああんっ!」

みーちゃんと松下は同時に絶頂して絶叫を部屋に響かせる。正常位の抱かれていたみーちゃんは床の上でぐったりして、駅弁体位で抱かれていた松下は息を荒げながら俺に身体を預けてくる。

「どうだ松下、気持ち良かったか？」

「……うん、凄く気持ち良かったよ。比企谷君に突かれた時は快感以外考えられなかった」

そんな風に感想を言ってくるが、ストレスが発散出来たなら良かったものだ。みーちゃんははどうだろうか？

横を見れば綾小路にキスをされるみーちゃんは恍惚の表情を浮かべながらキスを返している。あっちもストレス発散が出来ているようだ。

そんな風に考えていると綾小路が俺を見て……

「さて、次は交代しようか。2人にはどっちとのセックスの方が気持ち良いか判断してくれ」

気が早過ぎるわ。

「はあ……」

「そんなに苛立つな。清隆に付いていくと決めた以上覚悟は出来ているだろう」

「それにあの愚者が理由だから認めたのでしよう」

「そりやそうだけどさ……あの馬鹿のせいだ……」

ケヤキモールのカフェにて軽井沢恵と鬼龍院楓花と坂柳有栖はお茶会をしている。千秋と美雨が綾小路と八幡相手にセックスして良いかとメールをしてから偶然会ったので、3人でお茶をする事になったのだ。

そして恵は千秋達の苛立ちを理解出来るから了承したが、やはり恋人が自分以外と

セックスをする要因となった由比ヶ浜には怒りの感情が湧く。

「まあハーレム王の女として慣れておくのはオススメしよう」

「鬼龍院先輩はいつも通りですね」

有栖が楓花に話しかける。有栖も由比ヶ浜によるストレスの辛さを痛いほど理解したので松下達に八幡とセックスする事を認めはしたが、モヤモヤした気分が全くないわけではない。

「当然だ。清隆が何人抱こうが、私が清隆の一番なのだから。王者の余裕さ」

有栖の質問に楓花は不敵に笑いながら恵を見る。それにより恵の額には青筋が浮かぶ。

「あたしが清隆の一番ですから！甘えん坊なのに格好つけないくださいよ楓花先輩」

「嫌いぞ恵」

恵の挑発に楓花はジト目を向ける。

「おや、鬼龍院先輩はベッドの上だと甘えん坊なのですか？」

楓花はベッドでも不敵な態度で綾小路を誘惑していると考えていた有栖からしたら意外だった。

「そうよ。清隆にだいしゆきホールドしながら好き好き言う楓花さんはマジで可愛いわよ、動画あるけど見る？」

恵は携帯とワイヤレスイヤホンを取り出して有栖に渡そうとするが、真つ赤になった楓花が止めに入る。

「……もし見せたら、清隆に雌犬とばかりに首輪をつけられて喜びながらバックから清隆に突かれる君の動画も見せるぞ」

「ちよつ！それは勘弁！」

「おや、それは残念」

恵も真つ赤になりながら携帯をしまう。有栖からしたら両方見てみたかったので残念極まりない。

「しかし……まず間違いなく2人は八幡君とのセックスに虜となるでしょう」

実際有栖も八幡に抱かれると本能を曝け出して甘えまくってしまうし、ひよりやなずなも普段は絶対に見せない姿を晒しまくっている。八幡のセックスは上手いのだ。

「比企谷君って上手いんだ。清隆もメチャクチャ上手いんだよね」

「ああ。抱かれている時は女であると強く自覚するな」

恵も楓花も気は強いが、綾小路の激しいセックスには逆らえず勝てる気はまるでしない。

よつて千秋も美雨も八幡と綾小路のセックスの虜になると3人は確信しながら紅茶を飲む。

「ちなみにだが坂柳。君達は比企谷が何人まで恋人を持つのを許容する気かね？」

「本当は私1人を愛して欲しいですが、5人まで増えることは予想しています」

「そのくらいか。あたしも5人以上は増やしたくないわ」

「まあセフレも含めたら10人は超えるかもしれないな」

そんな風に話しながら3人は寮に目を向けるのだった。

同時刻……

「ああんっ！ダメツ！おかしくなっちゃう！」

「2人のおちんちん、凄く激しくてんあっ！気持ち良い……っ！んんっ！」

「やんっ！今後もストレスが溜まったら……んんっ！付き合っ……！」

「私もっ！お願いしますっ！2人とのセックス、凄く気持ち良いですっ！」

「ああ、幾らでも付き合っ……」

「……ひより達が認めるならな」

「ありがとう！これで悩みの種がんなあっ！んんっ！ダメツ……」

あああああああああつ！イクつ！」

「私もっ！んあつ！ああつ！やあああああんっ！」

千秋は綾小路の肉棒による激しい攻めでメスの顔を曝け出し、美雨は八幡の肉棒による強弱ある攻めによりビクンビクンと跳ねるのだった。

## みーちゃん

「あつ……んっ……ちゅっ……」

綾小路の部屋の風呂場にて、俺は椅子に座りながらみーちゃんとキスをする。

少し前まで松下に続いて、みーちゃんとセックスをしたのだが体力の少ないみーちゃんは2回抱かれて限界を迎えたので、俺が風呂場に運び、ついでに俺も汗や体液を流したかったので入らせて貰った。

で、シャワーを浴び終わるとみーちゃんが「今日はもうセックス出来る体力はないですけど、エッチな気分を続けて感じたいので甘えても良いですか?」と聞いてきた。

俺が了承するとみーちゃんは俺の膝の上に乗って、俺の首に手を回してディーブスキスをしてきて、俺もみーちゃんの行動は完全に予想外だった。

「今日はありがとうございます。入学してからこんなにスッキリしたのは初めてです。多分千秋さんも」

みーちゃんはそう言って風呂場の出口を見る。そっちの方向からは嬌声が微かに聞こえてくるが綾小路と松下はまだまだ楽しんでるようだ。

「ソイツは何よりだ」

「本当に2人には感謝をしています。だからお礼をしたいです……失礼します」

みーちゃんは俺の膝から降りて、俺の股の間に顔を寄せて……

ちゅっ

肉棒にそつとキスをしてくる。触れるだけの優しいキスはくすぐったくて、勃起してしまう。

「……比企谷君のおちんちん、大きくて素敵です。一杯気持ち良くなるように頑張りますっ」

ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ

みーちゃんはそのまま肉棒にキスを連発する。

(マズい。フェラは兎も角、キスの連続攻撃は殆ど経験がない)

予想外の快感に射精感が高まってくる。拙いテクニクも一生懸命さがフオーロして、充分な破壊力がある……

「ぐっ……ああっ！」

どびゅっ！どびゅびゅ！びゅるっ！

40回目のキスによって射精して、みーちゃんの顔面を精液で汚す。

みーちゃんはそのまま精液を口にする。

「んっ……比企谷君のザーメン、濃くて美味しいですっ」

そう言つて微笑んでくるが、俺の理性にダイレクトアタックする。

「……悪い、みーちゃん。体力的にキツイかもしれないが、もう一回セックスがしたい」

「きやつー！」

俺はみーちゃんを押し倒して、挿入しようとする。

「比企谷君っ！それは良いけど、ゴムを付けて！」

そうだった。危なかった……

「悪い。取ってくる」

俺は脱衣所に置かれたゴムを取るべく、一旦風呂場から出ると……

「ああんっ！そこっ！激しいっ！比企谷君とはんあっ！別ベクトルでえっ！凄いつ！綾小路君のおちんぼっ！凄く気持ちいいっ！」

松下の嬌声が聞こえてきて、更に性欲が高まる。

俺は直ぐにゴムを付けて風呂場に入り、みーちゃんの膣に肉棒を一気に突き入れる。

「んああああっ！比企谷君っ！」

みーちゃんは大きな声を上げて抱きついてくるので俺も抱き返しながら腰を振りまくる。みーちゃんの膣内は結構狭いので締め付け具合が半端なく気持ち良くて直ぐに絶頂しそうだ。

「んあつ！んんっ！やつぱり比企谷君のっ！おちんちん好きっ！これからも週に1回、そのおちんちんでメチャクチャにしてえ！んあああつ！」

そんな風にねだつてくるみーちゃんだが、余程由比ヶ浜によつてストレスが溜まつているようだ。ならば週に1回、そのストレスを発散させる為に抱くのも吝かじゃない。ひより達も許可を出すくらいだな。

俺はそのまま本能のままに腰を振りまくり、みーちゃんはそれに合わせて喘ぎながら甘えてきて……

「ぐっ！射精る！」

「やあつ！もうダメツ！イっちゃんあああああつ！」

俺が射精すると同時にみーちゃんも絶頂する。ビクンビクンと跳ねながらも、みーちゃんは俺から離れずに抱きしめてくる。

「はあ……はあ……これから宜しくね……」

ちゅっ

荒い息をするみーちゃんのキスに俺は小さく頷くのだった。

「……で、その後みーちゃんは体力切れだったんだけど、松下が直ぐに俺を求めてきて、最終的に綾小路と松下の2人と3Pしたんだけど、アイツらどんだけストレスを溜めていたんだよ」

夜、俺は自室でなずな先輩の料理を食べながら今日の顛末を説明する。

「仕方ないですよ。1週間同じグループで過ごした私でも狂いそうになったのに、2人はずっと同じクラスで近い席ですから。だから私は今回の件を認めたのです」

ひよりは米をパクパク食べながらそう返す。恋人なのにセフレの存在を許容する時点で由比ヶ浜のヤバさはわかる。

「まあいきなりエッチに誘われたら驚くよね。それで？2人の身体は良かったの？」  
「まずな先輩が興味津々に聞いてくる。」

「まあ気持ち良かったけど、まずな先輩達3人に比べたら劣りますね。2人はあくまでストレス発散の為にセックスをしてきましたが、愛情は無かったです」

「身体の相性はともかく、愛情が無かった時点で絶対的な差がある。」

「それは何よりです。それにしても元凶の愚か者2人がどんな発表をするのか愉しみです。まあ自身の優秀さについてでしょうけど」

「有栖の言っている事は当たりだ。さっき廊下で話していたからな。」

「というかそういうお題ってマイナス査定になるんじゃないかね？」

「いくら自由とはいえ、ヤバいお題を出したら減点対象になる可能性は高い。」

「それはないと思うよ。去年、私達の学年で「ポルノビデオの規制緩和と無修正動画を公に認めて貰う方法」ってお題で発表したグループがいたけど、資料をしつかり準備して、ハッキリとした口調で、聞き取りやすい発表をした結果、女子からブーイングを浴びながらも84点で54グループの中で6位だったのは今でもハッキリ覚えているよ」

「なるほど……明らかにヤバいお題でも事前準備とちゃんとしたスピーチをすれば、クラスポイントが貰える一歩手前ほどの高得点が貰えるようだ。」

「しかも生徒会が審査って事は女子の橘先輩もいたはずだ。5人の審査で84点って

事は1人あたり16・8点だ。それを考えるとやはりお題の内容はマイナス要素にならないな。

ならいつそ盗撮犯3人の童貞問題に挑戦するのも一興だな。

そんな事を考えながらも完食する。

「ご馳走様でした。食後のデザートはトリプルフェラをお願いします」

俺は皆の食器を洗いながらそう口にする。

「ええっ?!ハチ君、少し前まで千秋ちゃん達とエッチしたんだよね?!」

「2人は前菜です。3人はデザートと言いましたが、メインディッシュです」

前菜とは主菜に繋げる物だし、前菜だけで満足する俺ではない。

それに綾小路も今頃はメインディッシュの軽井沢と鬼龍院先輩を食べているだろうしな。

同時刻……

「やあんっ！清隆っ！清隆あっ！もつと激しくっ！あたしをメチャクチャにしてえ！」  
「んっ……んむっ……んんっ」

「んあっ！そこだ清隆んんっ！上手いああんっ！」

八幡の予想通り、夕食を食べた綾小路は肉棒を駆使して騎乗位で腰を振る軽井沢を攻めながら、顔面騎乗位をする鬼龍院の膺を舌で攻めまくっていた。

俺も3人を食べて更に満足したいのが本音だ。

「仕方ありませんね。では……」

「満足してくださいね」

「全くハチ君は本当にエッチなんだから」

ひよりと有栖は服を脱いで白の下着と青の下着を露わにする。なずな先輩もジト目を向けながらピンク色の下着を曝け出す。

俺は皿を洗って、そのままズボンとパンツを脱ぎ、3人の近くで仰向けになる。

「じゃあ始めます……」

「一杯気持ち良くしてあげますからね」

「終わったらハチ君のおちんぼで攻めてね」

そう言うってから有栖が股の間に、ひよりとなずな先輩が左右に展開しながら肉棒に顔を寄せて……

ちゅっ ちゅっ ちゅっ

3人同時にキスをしてきた。これは……ヤバいな。

俺は3人からの攻めに速攻で昂らせて、結局朝まで3人相手にセックスを重ねるのだった。

8日後……

グループ結成締め切り日の翌日……1年生用の掲示板にグループの組み合わせと試験当日の発表順番が貼り出された。

1 番 石崎大地 小宮叶吾 鈴木英俊

4 番 雪ノ下雪乃 由比ヶ浜結衣

7 番 龍園翔 坂柳有栖

9 番 松下千秋 王美雨 椎名ひより 白波千尋

17 番 橋本正義 神室真澄 高円寺六助

22番 榎田桔梗 軽井沢恵 堀北鈴音(※)

※グループ結成締め切りに間に合わなかった為、このグループ所属として、マイナス  
30クラスポイント

32番 須藤健 池寛治

36番 山内春樹 佐倉愛理

42番 比企谷八幡 綾小路清隆

58番

一之瀬帆波

網倉麻子

小橋夢

## 不満

火曜日の朝、ひよりと有栖が俺の両腕にくつつく中、俺はいつものように登校するが……

「何だありや？ 随分賑わってるな」

下駄箱から少し離れた場所にある掲示板に人が集まっている。偶に興味深い掲示はあるが、あそこまで人が集まるのは特別試験の結果発表があった時だが……

「もしかしてアレでしょう。昨日がグループ結成の締め切りでしたから、グループの公開では？」

「ああ、なるほど。ちよつとあそこで堂々とティープキスしている綾小路に聞いてみるか」

視界の隅にて鬼龍院先輩とティープキスをいる綾小路を指差す。おそらく2年の教室に行く前の別れのキスだろうが、マジでTPOを考えろ。

そう思う中、鬼龍院先輩が2年の教室がある方向に向かい、手を振っていた綾小路がこちらに気付き、軽井沢と近づいてくるが……

「どうしましたか恵さん？目が八幡君以上に腐っていますよ？」

有栖が割と失礼な事を言っているが、確かに軽井沢の目が腐っている。明らかにヤバい雰囲気を出している。

「おはよう軽井沢さ……つて！何その目！またあの馬鹿5人に振り回されたの?!」

と、ここで榊田がやってきて、軽井沢の変化に驚きの態度を見せる。対する軽井沢は榊田の肩を掴み、掲示板を指差して背中を押す。

榊田は戸惑いながらも掲示板の方に向かうが、やがて凍ったように固まり、ようやく再起動したかと思えば……

「貴女もですか?!何があったのですか？」

榊田の目は軽井沢より遙かに腐っていた。これには有栖も驚いているがマジで何があったんだ?!

確か軽井沢と榊田は同じグループだった筈。あぶれた生徒はペナルティを与えられ、教師の采配で決まったグループに強引に入るルールだが由比ヶ浜や雪ノ下は2人でグループを組んでいるし……

疑問符を浮かべながら俺達も掲示板を向かうと……あつ、察し。

22番 榊田桔梗 軽井沢恵 堀北鈴音(※)

※グループ結成締め切りに間に合わなかった為、このグループ所属として、マイナス30クラスポイント

軽井沢と榎田のグループに堀北が入れられていた。由比ヶ浜に比べたらマジだが散々偉そうにしていた堀北が入ったのだから気落ちしたのだろう。

とうかアレだけ偉そうにクラスに貢献しろと言っていた奴が足を引っ張っているのかよ？龍園は煽りまくりだらうな。

そんな事を思いながら他のグループを見てみれば……

1番 石崎大地 小宮叶吾 鈴木英俊

4番 雪ノ下雪乃 由比ヶ浜結衣

7番 龍園翔 坂柳有栖

9番 松下千秋 王美雨 椎名ひより 白波千尋

17番 橋本正義 神室真澄 高円寺六助

22番 榎田桔梗 軽井沢恵 堀北鈴音（※）

※グループ結成締め切りに間に合わなかった為、このグループ所属として、マイナス  
30クラスポイント

27番 葛城康平 金田悟 幸村輝彦

32番 須藤健 池寛治

36番 山内春樹 佐倉愛理

42番 比企谷八幡 綾小路清隆

58番 一之瀬帆波 網倉麻子 小橋夢

有名所は大体こんな感じだが、山内と佐倉って組み合わせは意外だ。山内はてつきり須藤と池以外の相手はいないと思っていたのだがな。

強敵になりそうなのは龍園&有栖のクラスリーダーグループ、高円寺&橋本&神室の規格外&Aクラス幹部2人、葛城&金田&幸村の学年トップクラス成績保持グループく

らいか？

そう思いながら写真を撮ってから人混みを出て綾小路達の元に戻る。

「櫛田……ドンマイ」

「うん……ねえ綾小路君。確か松下さんやみーちゃんをセフレにしたらしいけど、私も1回セックスしてくれない？2人からは評判が良いし」

「別に構わ「構うな！これ以上増やすんじゃないわよ！」……まあ相手をするなら恵と楓花さんの許可を得てからだな」

綾小路が頷こうとしたが、軽井沢が綾小路に腹パンをして止めに入るが、軽井沢は涙目になって手を押さえるが、どんな硬い腹筋だよ。

そんな風に思いながら綾小路の腹を見ていると……

「おっ、発表してるみたいだな。一緒に頑張ろうぜ、愛理」

「う、うう……うんっ」

気色悪い声と弱々しい声が聞こえてきたので見れば、山内がニヤニヤ笑いを浮かべながら、以前須藤の審議で証人をやった佐倉の手を掴みながら歩いている。対する佐倉は恐怖を顔に宿している。

「うわ……何やってんのアイツ、マジきもい……」

軽井沢は嫌そうな表情で呟く。

「おいおい。酷い事を言うなよなく、俺は健や寛治と組んでも良かったけど、誰も組む手が居なかった佐倉がクラスに迷惑をかけないように組んでやっただけだぜ」

そう返す山内はニヤニヤ笑いを浮かべて佐倉の巨乳をガン見している。その様子だと佐倉は友人どころ知り合いが1人も居らずペナルティを受けたらクラス全員から攻められる事を危惧して、山内はそれを利用して佐倉と組んだのだろう。

しかし真面目な話、入学してから10ヶ月が経過したのに友人どころか話せる相手が1人もいないのはどうなんだ？

コミュ力が高くない俺だって友人は少ないが、それでも世間話をするくらいに相手、グループを組める相手は何人かいるし、組む相手がいない佐倉はそれ以上のコミュ力の無さだ。

オマケに林間学校では個人成績もワースト5に入っているし、実力も友人も無い事を考えると、山内と組むのも当然の帰結じゃね？」

「アంత、結構な毒を吐くわね」

と、ここで肘打ちを食らうので見れば軽井沢が呆れ顔を浮かべている。もしかして喋っていたのか？

「どっから喋っていた？」

「コミュ力が高くない俺からあたりね」

殆ど最初じゃねえか。

「まあ事実だ。少なくとも5月に不良品扱いされた段階で自分の弱点や欠点を変えようとしなかった結果だし、山内と組む今の状況を受け入れる他ないだろうな」

変わろうとしない奴はずっと変わらないが、弱点が多いのなら変わらないといけない。佐倉は変わらなかった結果、山内と組むハメになったのだから自業自得だ。

「うう……」

「そうそう。安心しろって、クラスのリーサルウェポンの俺が愛理を受け入れるからさ」  
落ち込む佐倉に対して、山内は下卑た眼差しを佐倉に向けるが、完全に佐倉に酔ってマジでキモい。

山内は楽しそうだが、佐倉は今後地獄だろう。山内と組んだ時点で悪評が立つのは明白だからな。

「さあ、行こうぜ愛理」

酔ってる山内は佐倉の手を引っ張り、佐倉は縋るように綾小路を見るが、当の綾小路は特に口を挟まない。恋人やセフレでないからか？

そして2人が消える中、櫛田が息を吐く。

「あー、朝から最悪。堀北さんがグループに強制加入で、今はキモい光景を見られたし、明日は体調不良でも休もつかない」

榊田は相当ストレスが溜まっているようだ。マジで禿げそうだな。

「本番まで1週間ありますし、無理しないで休むのも手ですよ」

「とうかなぜ明日？今日休めよ」

俺がそう尋ねると榊田は目にヤバい光をキラキラ放ちながらこつちを向き……

「決まってるじゃん。皆に迷惑をかけた堀北さんに落とし前を付けてもらうんだよ」

そう返してくる。雰囲気はやばいが言っている事は間違っていない。組む相手が居ない事でペナルティを受けたのだ。クラスの大半は爆発するだろう。偉そうな癖にペナルティをかけられるなんて……みたいだ。

「ではその光景を記録してくれませんか？3万ポイントで買います」

DSの有栖がそう質問すると榊田は薄く笑いながら頷く。

やっぱり女子って怖いな、うん。

## 落下

「ではHRを始める。知っているが掲示板にグループの構成と発表順番が貼られているので、見てない者は確認するように。また堀北が締切までに誰ともグループを作れなかったので、ペナルティとしてクラスポイントは30ポイントマイナスとなり、堀北については榊田と軽井沢のグループに入る事になった。以上だ」

Dクラス、担任の茶柱は連絡事項を伝えると早足で教室から出て行く。理由は……  
「何してんだし！誰とも組めないでペナルティを貰うなんて馬鹿じゃないの?！」

「全くね。それでリーダーぶるなんて恥知らずも良いところよ」

トラブルが起こり得ると判断した。茶柱の予想通り、由比ヶ浜と雪ノ下が堀北に罵声をぶつける。

(いや、お前らが言うなよ)

榊田は内心にてそう突っ込む。しかしこれは他の皆も同じだろう。由比ヶ浜や雪ノ下は堀北以上に迷惑をかけている。まあ言ったら更に面倒な事になるから口にはしな

いけど。

「けど堀北さん。何でグループを作れなかったのか教えてくれないかな？グループを組むなんて簡単な事が出来なかったのは堀北さんに問題があるんじゃないかな？それをハッキリして次回に活かさないといけないから」

榊田は馬鹿2人を無視して堀北に詰問すると堀北が悔しそうに睨みつけ、榊田の中に愉悦が生じる。しかし榊田は容赦しない。

「あのさ堀北さん。何で睨むの？堀北さんのせいでクラスポイントは更にマイナスになったんだよ、わかっているの？」

二学期終了時点ではマイナス100ポイントで、林間学校で22ポイント獲得したが、堀北のペナルティ30ポイント引かれて今はマイナス108ポイントだ。

「だよね。というかグループを組むなんて簡単な事も出来ない癖にAクラスを目指して、あたし達に偉そうにしてたの？」

榊井沢が嘲笑を浮かべて榊田の質問に頷く。

「そこまでしてくれないかな？これ以上クラスで揉めるのは止めて「だったら平田君はこれ以上迷惑をかける人を庇わないでよ」……そ、それは……」

止めようとする平田を松下が一蹴する。松下からしたら由比ヶ浜を未だに庇う平田は怨敵だ。

「ねえ答えてよ。私達はいつまでも我慢すれば良いの？」

怒りのこもった松下の質問だが……それによって遂に爆弾が爆発した。

「そうだよ！何で私達が何度苦しめられたか！」

「良い加減にしろよ！あんなゴミ共を庇うなよ！」

「私達も櫛田さんみたいに白髪が増えそうだよ！」

「五馬鹿が居なかつたら、まだ勝てる可能性があるのに……！」

「五馬鹿を庇つてる時点で平田も同罪だ！」

「っ……………！」

松下の叫びに佐藤が同調して他の面々も松下に対する賛成の声をあげ、平田を責め立てる。入学当初は人気だった平田だが、五馬鹿を庇い続けた事から今ではクラスで五馬鹿と堀北の次に嫌われている。

「ふざけんなし！あたし達は被害者だから！」

「うるせえよ！雌牛！お前は今直ぐ退学しておっさんに抱かれてろよ！」

「そうだそうだ！貧乳の雪ノ下とおっさんに可愛がってもらえよ！」

「貴方達こそ今直ぐ退学しなさいよ！邪魔でしかないわ！」

「んだとクソ女！テメエみたいな口だけが調子に乗ってんじや「お前らが乗るな」っ……」

綾小路い！」

ここで苛立ちが限界となった綾小路が須藤に憤怒の眼差しを向けると、ビビりながら席に着く。

「お前らもだ。今は堀北に対する断罪内容を考える時間で喧嘩をする時間じゃない」

綾小路が周りを見回しながらそう呟くと周りの皆は黙る。由比ヶ浜は文句を言おうとしたが、雪ノ下が由比ヶ浜が脱糞しないように止めに入る。

「ありがとね綾小路君……話を戻すけど堀北さん。堀北さんのせいで皆、迷惑がかかった事について、どう責任を取るの？自分の口から話してよ」

これについては紛れもない事実だ。堀北以外の生徒は全員グループを組めたので、完全に堀北に問題がある。

「黙ってないで答えてくれないかな？どう責任を取るの？」

「……今回の試験で1位に「グループを組むことすら出来ない協調性皆無なのに？個の力が堀北さんを遥かに上回る反面協調性がないけどグループを組めた綾小路君や高円寺君に勝てるの？」……っ！」

苦々しい表情を浮かべながら反論をしようとするが松下に一蹴される。実際普段協調性がない綾小路や高円寺は実力の高さからグループを組めた。

協調性が無くても実力により組めた綾小路と高円寺の存在は、協調性が無くても組めなかった堀北には多大なダメージを与える。堀北の存在は2人より遥かに劣っていると

事実が。

「ねえ、事実言われたからって松下さんを睨まないでくれる?」

「そうよ! 逆恨みも大概にしなさいよ!」

「偉そうにしてた結果がこれかよ!」

「……別に睨んでは……」

「嘘ついてんじゃねえよ厄病神!」

「つ……つ!」

堀北が松下を睨んでいるとクラス中から罵詈雑言を浴びせられる。中学時代から無視されていた堀北だが、罵詈雑言には慣れておらず気圧されてしまう。

そんな中、綾小路が手を挙げる。

「もう責めるのは良いんじゃないか? 堀北の表情を見る限り反省する気も更生する気も無さそうだし責めても時間の無駄でしかない」

「つ!……つ!」

綾小路の投げやりの台詞に堀北は歯を食い縛り握り拳を作る。責めるのを止めるように言っているが、堀北からしたら「堀北はどうしようもない奴なんだから」と言われているのだから、責められるよりも遥かに屈辱だ。

それを察した榎田は綾小路の案に乗る事にした。皆の前で土下座による謝罪をさせ

るのを目標にしていたが、放置した方が堀北に堀北に屈辱を与えられると判断したのだ。

「そうかもね……皆、思う所があるかもしれないけど、堀北さんは変わる気がないしこれ以上責めるのは止めようね、堀北さんもごめんね？改善する気がないでしょうもない人間だつてわからなかつたから、責めちゃったよ」

榎田が頭を下げて謝罪するが、堀北の中で屈辱感が増大する。

しかしこれについては堀北の自業自得だ。堀北の立場ならHRが終わり次第、「私のせいで皆に迷惑をかけてごめんなさい」と謝罪して、クラスメイトからの文句を真摯に受け止めるべきだったのだ。そうすれば多く文句を言われるだろうが、まだ更生の余地があつた。

しかし堀北は自らのプライドがそれを許さず、嫌味に対して睨みを返して、出来もしない責任の取り方を話したり、謝罪の1つもしなかつた。

その結果……

「ま、そうだよ。迷惑をかけたのに謝罪しない人なんてどうしようもないし、皆もこれ以上問題を蒸し返さないようにしないとね」

「だな。堀北もどうしようもない人間の1人だつた訳だ」

クラスメイトは怒りを通り越して、五馬鹿らと同じようにどうしようもない人間と思

うようようになった。

「さ、話は終わったし授業の準備をしようか。特別試験は気になるかもしれないけど、普段の授業が一番大切だからね」

榎田が両手を叩いてそう口にするると皆が堀北から目を逸らして教材を鞆や机から取り出す。

そんな中、堀北は由比ヶ浜達と同じ扱いになった事に爆発しそうになるが、ここで暴れたら由比ヶ浜と同じ存在になるとギリギリで堪えながら座り……

「あ、楓花さん？今夜は新しいコスプレによるプレイしたいんで、放課後にデートしましょう」

自分を五馬鹿と同じ立場に落としたキツカケを作っておきながら、恋人の一人にエロを求める電話をする隣人の綾小路に敵意を向けるのだった。

## お題

『そうかもね……皆、思う所があるかもしれないけど、堀北さんは変わる気がないしこれ以上責めるのは止めようね、堀北さんもごめんね？改善する気がないでしょうもない人間だってわからなかったから、責めちゃったよ』

「くはははっ！鈴音の奴、五馬鹿と同じ扱いじゃねえか！プライド高いアイツからしたら屈辱だろうな！」

有栖の携帯に流れる動画を見た龍園は高笑いするが、俺も笑ってしまいそうだ。

榎田は有栖に撮った動画を送り、昼休みに視聴会をする事になり、有栖が龍園に見せたのだ。

「話を誘導した綾小路君はお見事でした。綾小路にポイントをあげたいですね」

この場にいるのは俺と綾小路と有栖と龍園だ。有栖が俺達3人を招集したが、多分動画の視聴会以外の目的もあるだろう。

「ポイントは要らないから神室を抱かせてくれ」

「それは無理ですね。真澄さんは私の玩具……友達ですから」

「そこまで来たら玩具って言えよ。というか綾小路は軽井沢と鬼龍院以外にも桔梗あたりも食ってるだろうに神室も食うつもりかよ?」

「いや、櫛田はまだ抱いてない。まあ五馬鹿に対するストレス次第では食うかもしれないがな」

「やっぱそうか。というかセックスがストレス解散方法になりかけてる時点で末期じゃねえのか?」

龍園がもつともな事を口にする。

「まあアレらの不快さを考えたら並大抵の方法でストレスを発散させるのが無理であるのは事実ですよ」

「その様子だとDクラスで乱交パーティーが起こるかもな」

マジで。

「その場合はオレも参加するでしょう」

「綾小路君はいつか刺されそうですね」

同感だ。コイツは日が経つにつれて性欲が増しているし。

「まあ上手く立ち回る。それより集まったのがこの4人の理由を話してくれ。多分特別試験の内容だと思うが」

「おっしゃる通りです。八幡君から特別試験のテーマは聞いてますが、私達も同じテーマです。よって潰し合いにならないように同じテーマでも発表内容を別々にしたいのです」

俺と綾小路のテーマは「この学校におけるルールの改革」だが、有栖と龍園も同じテーマだ。そこで改革における発表内容を違うものにしようってわけだ。

「まあそのくらいなら構わないが坂柳達は現在何を発表するつもりだ？」  
「今のところ私と龍園君のグループは……と……について考えています」

「それ完全に一之瀬に対する嫌がらせが目的だろう？」

綾小路の言う通りだ。和を尊ぶ一之瀬からしたら評価したくないテーマであるのは明白だ。

しかし生徒会役員としては私情を挟まずに採点しないといけないが、有栖と龍園なら良い発表をするだろうから、一之瀬も高得点を出すだろう。

そうなれば一之瀬自身、相容れない方針を認めたと自己嫌悪に陥り、クラス内でも不和が生じる可能性が高い。

「もちろんです。馬鹿によつて溜まるストレスをセックスで解消するのも良いですが、偶には別の解消方法を使いたいのです」

まあ有栖は由比ヶ浜と雪ノ下に絡まれる方だからな。一之瀬からしたらとばっちり

かもしれないが、我慢してくれ。

「なるほど。しかしそれなら問題ない。オレ達が考えているのは……と……についてだからな」

「Dクラスならでは内容か。まあどのクラスからも一定の支持は出るし悪くないだろ」  
「ウチからは戸塚君あたりが反対するでしょうが、それを反対するという事は自身が無能と理解している人間ですし、面白いですね」

「そりゃそうだ。俺達は反対した奴は肩身が狭くなるのを目的とした内容にしたからな。実際ウチのクラスにも無能はいるが、無能に価値を付加する点でも悪くないと思う。」

「何にせよ、この特別試験はお題が自由である以上、色々ぶつ飛んだ内容になりそうだな」

龍園の呟きに俺達は一斉に頷く。それについては間違いないだろう。

「というかカオスになり過ぎて教師が止めたりする未来や馬鹿が喚く未来が今の時点で見えてるんだよなあ。」

「そう思いながら俺は堀北が責められている動画を肴に昼食を食べるのだった。」

1週間後……

グループ構成や発表順番が公開されてから1週間が経ち、漸く特別試験当日を迎えたが、これまでに色々あった。

発表内容について上級生や教員から聞き取り調査したり……

五馬鹿の喚きにイライラしたり……

ひよりとSMプレイをして鞭で叩かれることに若干の快感を知ったり……

有栖と兄妹プレイをする中、お兄ちゃんと呼ばれる事に悦を感じたり……

なずな先輩と赤ちゃんプレイをしたら、哺乳瓶や涎掛けを使って辱めてきたので、気絶するまでバツクで攻めたり……

松下やみーちゃんのみならず、由比ヶ浜と雪ノ下によつてストレスが限界突破したDクラスの榎田や佐藤、Cクラスの白波や姫野を加えて、綾小路や龍園と一緒に大乱交をしたり……

……なんかエロい事が多いが気にしないでおこう。

漸く特別試験当日を迎えた。

試験は講堂で行われて、壇上には南雲会長率いる生徒会メンバー5人と元生徒会長の堀北先輩が座っている。多分堀北先輩は一之瀬が発表する際の審査をしたり、5人の評価についてチェックするのだろう。

意外にも2年生や3年生も席にいますが、この試験は見学が自由なのだろう。有栖と龍園の発表によって一部がキレそうだな。

そして朝の9時になると真嶋先生が壇上に立つ。

「時間になったのでこれより特別試験を始める。名前を呼ばれたグループは壇上に上がって発表して貰う。尚、審査については生徒会メンバーの持ち点が1人20点、5人で100点で、テーマの難易度に対するボーナスは生徒会長が判断して最大で20点加算される。つまり120点満点方式で行う。審査の結果に不満がある者は今から配るプリントに記入して試験終了後に提出しろ」

真嶋先生がプリントを配るので見れば、「納得いかないグループ発表」「その理由」つて欄が沢山ある。そこに意見を書いて提出して、学校が問題だと判断したら点数が変わる可能性もあるのか。割と重要だし、他のグループの発表もしっかり聞かないとな。

「スピーチの時間は最大で5分だ。それ以上になると減点対象になる。早い分にはペナルティはないが、早過ぎると簡略な発表と判断されると考えておくように……それでは

第1のグループの発表を始める。石崎、小宮、鈴木は前に出て発表してくれ」

真嶋先生の言葉にウチのクラスの石崎と小宮と鈴木が前に出て壇上にあるパソコンにUSBを差し込み操作する。

そしてPower pointを開き……

「それでは俺達の発表を始めます。モニターをご覧ください」

鈴木という言葉と共にモニターに「須藤健と池寛治と山内春樹は童貞を卒業出来るのか」と書かれたスライドが表示される。

「くっ！ははははははっ！そう来たか！」

龍園の笑い声が講堂に響く。

「ふざけんじゃねえよ！」

「そうだそうだ！童貞卒業なんか余裕だ！」

「俺は近いうちに卒業してやるよ！」

盗撮トリオはキレるが、講堂には笑いが拡散する。

『これ難し過ぎでしょ？あの変態どもじゃ無理無理』

『いや、ソープがあるから簡単だろ。ソープ抜きならメチャクチャ難しいさけど』

『私には思いつかないわね』

女子からは不満の声が上がると思ったが、思ったよりも少ない。多分盗撮魔を貶める内容だから聞きたいのだろうな。

「静かにしろ。今は発表の時間だ」

南雲会長が静かにするように注意するだけだが、どうやら発表内容は本当に自由のようだ。真嶋先生も呆れてはいるが止めようとしてないし。

「デメエー！」

それによって須藤は前に出ようとするが……

「失せろ。オレの興味の邪魔をするな」

「っ……………」

隣に座る綾小路が殺意をぶつけて踏み止ませる。ありがたいな。

俺は綾小路に感謝の一礼をしながら壇上を見る。

さて、石崎達はどんな解決法を発見したのやら……………楽しみだな。

## グループディスプレイカッション①

「まず最初に3人が童貞を卒業する方法として俺達は3つの方法を出しました」

小宮がりモコンを操作するとスライドが切り替わり……

①ソープに行く

②レイプをする

③催眠術や対象の弱みを利用する

3つの文章が表示されるが妥当だな。

「ふざけんな！彼女を作るって選択肢を除外すんなよ！」

池が騒ぐがお前らにそんな選択があるわけないだろうに。

「しかし犯罪行為を手段にするのは問題だし、①については誰でも出来る事なので問題解決の手段としては適切ではありません」

「よって俺達は当初、解決不能な問題として違うテーマに変えようとなりました」

池の叫びに小宮と石崎は無理して話を進める。しかしソープは当たり前過ぎで、レイプや催眠術や脅迫についてはモラル的にダメなのはわかるが、そうなると解決方法はないだろう。

それでもテーマを変えなかったという事は解決方法を見つけ出したってことになるが非常に興味深い。

「しかしいざ諦めようとした中で、ある考えが浮かびました。3人がセックスをする相手は人間に拘る必要はないのでは……と」

っ！そう来たか！

「くはっ！確かにそうだな！はははははっ！」

『アハハハハハハッ！』

龍園を皮切りに講堂は再度爆笑に包まれる。女子も結構笑っていて有栖もプルプル震えながら口を押さえているし、南雲会長も顔を背けて震えている。

「ふざけんじやねえよ！どこまで人を馬鹿にしてやがる！」

「俺の童貞は桔梗ちゃんの処女で卒業するからな！」

「俺だって愛理で童貞を卒業してやる！」

三馬鹿が喚くが池と山内に至ってはセクハラにも程があるわ。マジで2人には同情する。



『勉強も運動も出来る……アイツがDクラスにいる理由って絶対中学時代における女性関係だろうな!』

この場にいる全員は綾小路に戦慄の眼差しを向ける。しかし綾小路は佐藤の処女も奪っていて、現時点で軽井沢と鬼龍院先輩、みーちゃんに榎田に佐藤の5人の処女を奪っているがこれは言わないほうが良いだろう。

ちなみに俺はこの前の乱交パーティーで白波の処女を、龍園が姫野の処女を奪ったが、あの乱交パーティーについては絶対の秘密だ。

「ふざけんじゃねえよ!人が狙ってた処女を奪いやがって!弁償して代わりに女子を奪しやがれ!」

池がそう叫ぶが逆恨みにも程がある。というか既に榎田を抱いたのが綾小路のみならず俺や龍園もだと知ったらどんな反応をするか興味あるな。

「あー、ごめんね軽井沢さん。馬鹿がふざけた事を言ったからつい、ね」  
「むう……バカの発言が酷過ぎるから責めにくいわね……」

まあそうだな。たくさんの人間がいる中で変態に自身の処女を奪うなんて言われたら反論してもおかしくない。

「ただし出した条件は破るんじゃないわよ?」

軽井沢がドスの効いた声を出す。俺や綾小路は土曜日の夜にセフレとセックスをす

る日となっているが、条件には「セフレにして良いのは五馬鹿によってストレスが限界を迎えかけている生徒」「セフレとのセックスは土曜日の夜から日曜日の朝まで」つてのがある。

そして先週、普段Dクラスで苦勞している櫛田や佐藤、体育祭終了後に叩かれてからストレスをかけられまくった白波、林間学校のグループで由比ヶ浜と同じグループになった事がキツカケで絡まれるようになった姫野が松下やみーちゃんから話を聞いたらしくセフレになる事を希望したのだ。

結果として松下、みーちゃん、櫛田、佐藤、白波、姫野の6人の相手をする事が決まったのだが、2人で6人の相手を同時にするのは無理だから綾小路が龍園を誘って、9人で徹夜で綾小路の部屋で乱交をしたのだ。

結果として6人ともスッキリしたが、流石に毎回綾小路の部屋で乱交するのも悪いので、寮にある余り部屋をやり部屋をとって月6万で借りる事にした。

閑話休題……

「もちろん。ちゃんと週一は守るよ」

軽井沢の念押しに櫛田が頷く。

「聞いてんのかよ綾小路！責任取って違う女を「死ね」ひいっ！」

喚く池に綾小路が怒りの表情を浮かべると池は腰を抜かす。普段無表情の綾小路の

怒り顔は洒落にならないほど怖いな。

「さて、馬鹿が邪魔したが話を続けてくれ」

綾小路が先を促すように告げると壇上の3人は頷く。

「あ、ああ……済まん。話を戻すと性行為の相手が人間である必要がないと思った我々は人間に近いゴリラやチンパンジーについて調査をした」

石崎がりモコンを操作するとスライドが変わり、文献のコピーが表示される。

「調べた結果、種が違うので子作りは不可能であるが、ゴリラやチンパンジーのDNAのえーつと、98パーセントが人間のDNAと一致しているので性行為そのものは可能であり、ゴリラを相手にするなら須藤達も童貞を捨てられると判断した」

や、ヤベエ……馬鹿なテーマについて真剣に発表しているのはマジで面白い。講堂にいる生徒の大半も興味津津だし。

「良い加減にしろやーどこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだよー」

須藤を筆頭に3人は喚くが今いいところだから黙れ。

そう思っていると鈴木が須藤を無視して話を進める。

「しかしいざ解決方法がわかった時、根本的な問題に気づきました」

根本的な問題？

「そもそもセックス本来の目的は快樂のためではなく自身の子孫を後世に残す事であ

り、3人の子孫を後世に残す必要があるのか、3人に童貞を卒業する資格はないのでは……という問題に直面しました」

あつ、確かにそうだ。あの3人が童貞を捨てる必要なんてないよな。

「実際Dクラスの生徒に聞き込み調査をした所、彼らは盗撮のみならず教室内でのセクハラ発言……えーつと、確か……水泳の授業前に胸の大きさのランキングの作成など様々な問題を起こす立派な性犯罪者です」

完全に屑じゃねえか。もう退学にさせるよ。

「言いがかりだ！盗撮は兎も角、後二つは俺は無関係だ！」

須藤が喚くが実際どうなんだ？

「おい桔梗。実際須藤の話は事実なのか？」

「事実だね。盗撮以外は池と山内だけで、胸の大きさランキングの作成には須藤は干渉してなかったよ」

龍園の質問に榎田がそう返すが、日頃の行いから信憑性はないだろう。

そう思う中、3人は横並びに立つが締めに入るのだろう。

「そんな性犯罪者が子孫を残す必要性はなく、同時に彼等は童貞を卒業する必要はありません」

「彼らの性欲からしたらソープに行くでしょう。しかし彼らの性格からして、ソープ嬢

の隙をついて針でコンドームに穴を作るかもしれない」

「その事を踏まえて、結論を出すと「彼らは童貞を卒業する必要性は皆無で、全ての風俗店に対して出入り禁止にするべき」という結論となりました……以上です」

3人がそう締めくくると龍園が真っ先に拍手をして、有栖がそれに続いて拍手をして、俺もそれに続き、綾小路も続き……

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

拍手が講堂に広がる。意外にも男子より女子、特にDクラスの女子の拍手が大きい。松下なんて一番激しい拍手をしているくらいだ。

「なんでこんなふざけた演説に拍手が送られるんだよ?!」

「そうだ!そもそも人が狙ってた桔梗ちゃんの処女を奪った綾小路は退学しろや!」

「俺はDクラスの秘密兵器であって、こんな扱いは不当だ!」

「さて、じゃあ採点をするぞ。モニターに点数を発表する」

3人が喚く中、南雲会長は無視する形で話を進める。生徒会役員は5人で持ち点は1人あたり20点で、難易度ボーナスが最大20点だから120点満点だ。

聞いた感じスピーチはハッキリした口調だったし、審査は公平だから意外に高得点かもしれない。

皆がモニターに注目する中、スライドが消えて……

南雲 16点／20点

桐山 14点／20点

溝脇 16点／20点

殿川 16点／20点

一之瀬 15点／20点

難易度ボーナス 18点／20点

合計 95点／120点

思ったよりも高得点だった。

## グループディスカッション②

「何でこんな点数なんだよ！あり得ないだろうが！」

「普通に0点だろうが！」

「一之瀬も高い点数出してるし、普段の優しさは嘘みたいだなこのヤリマン！」  
石崎達の結果が出ると須藤達が猛反発する。改めてモニターを見れば……

南雲 16点／20点

桐山 14点／20点

溝脇 16点／20点

殿川 16点／20点

一之瀬 15点／20点

難易度ボーナス 18点／20点

合計 95点／120点

この点数に不満があるようだ。

「ふざけんじやないわよ盗撮魔！ 帆波ちゃんを馬鹿にしてんじやないわよ！」

「寧ろ生徒会役員は全員低い点を出してるだろうが！ 俺からしたら一之瀬がBクラスを  
貶めたって学校側に疑われないか心配だからな！」

「そうよ！ 私だったら満点評価よ！」

それに対して一之瀬の所属するCクラスの生徒らは一之瀬の評価が低過ぎ、学校側か  
ら不正と疑われないかと反論する。

「でも実際テーマの好き嫌いを抜きにしたらどのくらいの評価かな？」

「まあ妥当な評価ですね。問題に対する考え方や解決方法を提示したのは良かったです  
が、最後のスライドに引用した資料の表記が無かったり、スピーチ中に「えーつと」な  
どを使用がありました。これは問題点であり私なら私情を入れたら16点に、私情を挟  
まなくても13点以上にします」

軽井沢の呟きに有栖がそう返す。確かにスピーチ中に「えーつと」とか「確か」なん  
て言葉を使うのは宜しくない。戸惑った時は深呼吸をして落ち着いて資料などを見直  
すのが1番だ。

後引用資料については著作権問題もあるししっかり記入するってのも間違いない

い。そう考えると5人の評価はあからさまに最良されてるわけではない。

「静かにしろ。不満があるなら配られたプリントに書いて、試験後に提出しろ。次の小野寺と三宅と木下は前に出ろ」

南雲会長の言葉に石崎達は一礼してから壇上から降りて、入れ替わりにウチのクラスの木下とDクラスの小野寺と三宅が壇上に上がる。木下は陸上部、小野寺は水泳部、三宅が弓道部で都大会でそこその成績を出しているし、スポーツ関係についてだろう。

そう思いながら意識を壇上に向けると案の定「部活の実績による報酬増加とプライベートポイントの追加要素の増加」というお題のスピーチをする。

話す内容としては部活の実績によるボーナス追加についてであったが、運動部は金がかかる場合もあるのでプライベートポイントによる支援やモチベーションの増加としては悪くないスピーチだ。

しかし難易度ボーナスは余り高くなくて120点中80点と石崎達とは差がある。

次にCクラスの渡辺と米津と清水による「敷地内における煙草や飲酒の制限」というテーマを星之宮先生のゲロを引き合いに出してユーモラスなスピーチをして笑いを獲得した。星之宮先生については他の教師に睨まれて引き攣った笑みを浮かべていたが気にしない。

面白かった事が評価されたのか93点とかなり高い。難易度ボーナスは8点と低い。やはり難易度ボーナスは馬鹿に出来ないな。

そして……

「うわ、遂に来たよ……」

「胃薬ありますよ」

「エチケツト袋はありますから我慢しなくて大丈夫ですよ」

「うん、ありがとうね」

榎田が嫌そうな表情になりながら壇上に向かう雪ノ下と由比ヶ浜を見て、ひよりと有栖が優しく榎田の方を叩く。皆はブーイングをしないで壇上を見る。ブーイングをしたら馬鹿が騒ぐのは明白だからな。

「それでは発表します」

雪ノ下がりモコンを操作するとスライドが表示される。そこには「高度育成高等学校における問題の矯正」と書かれている。

(確かにこの学校には問題はあるが、お前らの問題に比べたらマシだろうに)

そう思いながら前を見る。

「私達がこのお題にしたのはこの学校には救いような問題が多いからです。坂柳有栖や龍園翔、比企谷八幡のように不良品なのにDクラスにいなかったり、綾小路清隆や

高円寺六助のようにズルをして嘘の成績を出したり、虐めをする最低な同じ学年の間、理不尽な理由で私達に罰を与える前生徒会長、暴力行為を見逃す教師、有能な私を採用しないケヤキモールの従業員など無能が揃っていることは大きな問題です」

堂々としているが内容は全員に喧嘩を売っている内容だ。

「その問題を解決する方法として私を始め、本当に優秀な人間に生徒や教員に対してクビにする権利を与え、無能を消して、優秀な人間を正当に評価する人間を代わりに学校に入れるべきです」

つまり雪ノ下を支持する人間のみにしたらいと？考え方が独裁者のそれであるが、お前を支持する人間なんて由比ヶ浜以外いるとは思えないんだが。

「まあ能力の低い人間は礼儀も知らないのです、私が無能と判断した人間は私が冤罪でやられている矯正プログラムをやらせるべきです」

スライドが変わると矯正プログラムのスケジュールが表示されるが、かなりキツイ内容だ。

「私の問題解決案が実現出来たら優秀な人間が正当な評価を得られ、無能な人間も実力を向上出来る環境を得られるので素晴らしい学校になるでしょう」

当然のように結論を出しているが、主観的にも程があるし論外だろう。

皆が白けた表情になる中、続いて由比ヶ浜が一步前に出て、あろう事か紙を取り出す。

(うわ、アイツ最初からカンニングペーパー持ちかよ)

別に発表の最中に忘れたからカンペを出すのは仕方ないかもしれないが、最初から出して広げるつてのは発表内容を全く覚えてない事になる。

「あたしもゆきのんと同じ気持ちで、この学校には最低な人間が沢山いるからあたしとゆきのもんで変えていくべきだと思うし！」

いや、お前だけは絶対に変えるな。世紀末になるからな。

「その為にも……わあっ！」

と、ここで講堂の横の開いているドアから強い風が吹いてカンペがこつちに飛んでいき、由比ヶ浜が壇上を降りて追いかける。どうやら本当に内容を覚えてないようだ。

そして紙は龍園の手元に飛んでいき、近くの床に落ちる。同時に龍園は紙を踏みつける。

「ちよつと退くし！邪魔！」

由比ヶ浜は自分と龍園の間に座っている生徒に上から目線でそう口にする。

「いや、拾いに行く暇があるなら紙なしで発表すれば良いじゃん」

「無理に決まってるじゃん！覚えてないんだし！」

いや、そこは覚えろや。

「良いから退けし！人の邪魔すんなし！」

由比ヶ浜は強引に突き進み、龍園の近くに到着する。

「どこだし！邪魔！」

「へいへい。さっさと探せ」

龍園は面倒臭そうに、ただし口元に笑みを浮かべながら立ち上がって横にズレる。靴底にメモを隠しながら。

由比ヶ浜は身を屈めて探すがメモは龍園の足元にあるから見つからないだろう。

「あー！もうどこだし！アンタ隠したでしょ！」

由比ヶ浜は龍園の近くにいた白波と網倉と小橋に怒鳴るが、白波の額に青筋が浮かぶ。

「知らないから。ちゃんとメモを覚えなかった自分が悪いんじゃない？」

「どうか最初からカンニングペーパーを使うのはどうなの？」

「私達は知らないから」

「ふざけんなし！ゆきのんに矯正されるべき屑の癖に！」

3人が素っ気ない態度を取ると由比ヶ浜がブチ切れるが、もう早く終わってくれないかな？

「後1分」

「由比ヶ浜さん！メモを無理に探さないで覚えている事を話して！」

雪ノ下が由比ヶ浜に戻るように促す。

「わ、わかったよゆきのん……ふんっ！」

由比ヶ浜は白波達に怒りの一瞥をしてから壇上に戻るが、壇上に立つ時には20秒を切っていた。

「もう20秒しかないの?!だ、だったら……皆、ゆきのんの言ってることは間違ってるから大人しくゆきのんの言うことを聞くし！それが1番皆の為になるんだから！馬鹿は黙ってゆきのんに従うのが1番だからね！」

最後にそう締めくくるが、講堂にいる全員の額に青筋が浮かんでいるように見えたのは気のせいではないだろう。

「……じゃあ採点をするぞ。モニターに点数を発表する」

額に青筋を浮かばせる南雲会長がそう口にするモニターのスライドが消えて……

南雲 0点／20点

桐山 0点／20点

溝脇 0点/20点

殿川 0点/20点

一之瀬 0点/20点

難易度ボーナス 20点/20点

合計 20点/120点

(あー、もう！本当にあの馬鹿の相手は疲れるなあ！今日は月曜日だから比企谷君と綾小路君相手にセックスは出来ないし、龍園君に付き合つて貰おうつと！今度麻子ちゃんや夢ちゃんも楽しかった乱交パーティーに誘つてみようかな？)

## グループデイスカッション③

南雲	0点	200点
桐山	0点	200点
溝脇	0点	200点
殿川	0点	200点
一之瀬	0点	200点
難易度ボーナス	200点	200点
合計	200点	1200点

役員は全員0点の評価を出す。難易度ボーナスについては学校の体制を雪ノ下の都合のいいように変えるのはこの上なくハードだからボーナスはしっかりついたようだが……

「私達が0点?!ふざけないで!」

「そうだし!明らかな嫌がらせだし、全員退学するし!邪魔なだけど!」

案の定2人がブチ切れるが……

「ふざけてねえよ。主観的な意見ばかり、最初からカンニングペーパーして覚える努力の放棄、紙を無くしたら暴言を吐きながら探すのを強行、挙句に由比ヶ浜は問題の解決案を話してないじゃねえか」

口調が荒い南雲会長。相当キレているな。

「はあ?言ったじゃん!ゆきのんに従う事だつて!」

「筆記試験が良いだけの人間に従うだけで人が成長出来るわけないだろうが。大体綾小路や高円寺がズルをしたと言ったが、具体的には?事実なら学校側に調査するように訴えるがどうする?ただしデマだったら虚偽の訴訟としてお前にペナルティが与えられるが?」

南雲会長が強い口調でそう口にするが、仮に訴えても100%雪ノ下が負けるだろう。

「つ……学校側が屑揃いだから虚偽に扱われるのが容易に想像出来るから結構よ!」

「そうだし!ゆきのんを悪く言うなんてマジキモい!最低!屑!」

「うるせえよ!ブーメラン発言ばつかすんじゃねえよ!この粗大ゴミ共が!」

あ、南雲会長がキレた。気持ちはよくわかるけど。

「はあ！生徒会長が生徒を罵倒するなんて最低！今すぐ退学しろし！」

いや、確かに問題かもしれないが退学レベルじゃないだろう。

「そこまでにしろ。スピーチが終わった以上雪ノ下と由比ヶ浜は壇上から降りろ。南雲も今後は今回のような発言をしないように注意しろ」

「はい、すみませんでした」

「はあ?!何で注意だけなんだし！」

「同感ね。こんな屑共が教師や生徒会長だなんて、この学校は本当に救いようがないわ……！行くわよ由比ヶ浜さん」

「うん！ほんつと最低！」

茶柱先生が注意すると南雲会長は素直に謝罪して、雪ノ下と由比ヶ浜は罵倒しながら壇上から降りる。

2人が降りると茶柱先生は懐から薬を取り出して飲んでいるが、アレは胃薬か？普段から常備しているとは余程苦勞しているのだろう。

「先程は見苦しい発言をして失礼した。以後気をつける」

南雲会長は壇上の中央に立って謝罪する。

「はあ?!謝罪は口だけじゃなくて退学して示せし！」

馬鹿がギャーギャー喚くが南雲会長はそれを無視して席に座る。未だに由比ヶ浜は喚くが、南雲会長はもう面倒になったらしく隣に座る一之瀬から薬を渡されて、水と一緒に飲む。もう生徒会や教師にとって胃薬は必需品のようだ。

内心同情している間にも次のCクラス3人のグループが壇上に立ちスピーチをする。

その際に「社会見学の導入」をテーマに、世界に通じる人間の育成の為に、世間を知るべく外部の施設などの訪問を話し、3年間学園外に行けない問題を提示して90点を取った。

次のDクラス3人グループが「プライベートポイントのサービス」をテーマに、五馬鹿のせいで苦労しているので学校側に5人以外の35人にポイントを支給する制度の設立を提案した。発表の結果としては70点と高くないが、「可哀想だから導入してやれよ」と同調する声が全クラスから出て五馬鹿がメチャクチャ騒いだ。

そしていよいよ龍園と有栖という極悪コンビだ。AクラスのリーダーとBクラスのリーダーコンビの登場に空気が重くなる。

変わはないのは軽井沢の後ろから胸を揉んでいる綾小路と離れた場所で髪を手入れしている高円寺に……

「ふんっ！あのチビ達の事だからズルするに決まってるじゃん！」

「残念だけどこの学校の上の人間は無能しかいないから不正を挙げるのは難しいわ」

由比ヶ浜と雪ノ下くらいだろう。男の三馬鹿は龍園より俺や綾小路を嫌ってるから睨みつけてるだけだ。

有栖と龍園は額に青筋を浮かばせながらも準備してリモコンを持ち、有栖が操作すると「高度育成高等学校の体制の問題について」と書かれたスライドが表示される。

「それでは始めます。今回我々は高度育成高等学校の体制における問題の改善については発表します」

再度有栖がボタンを押すと新しい文章が出るが……

・各クラスの足手纏いの排除

・退学の際の救済措置の条件追加

かなりのインパクトのある見出しが現れ、講堂に騒めきが生じる。

「では「各クラスの足手纏いの排除」については私坂柳有栖が、「退学の際の救済措置の条件追加」については隣の龍園翔が説明をいたします」

有栖が一礼すると龍園が壇上の隅に移動して、有栖は1人で中央に立つ。

「各クラスの足手纏いの排除と言いましたが、実力下位の生徒を排除するのではなく、向上心のない生徒を排除するべきという意味です」

有栖がそう言っってリモコンを押すとグラフが表示されるが、7種類の線グラフがか

る。

「これは私がクラスの足手纏いと判断した生徒のこれまでの中間試験と期末試験の成績、学年平均とクラス平均です」

有栖がもう一度リモコンを操作すると一番上にAクラス平均、その下の線グラフに順番にM、K、H、H、Tと表示され、Tの線グラフのすぐ下にある線グラフに学年平均と表示される。

「名前はイニシャルでした表示されていませんが、全員Aクラス平均から大きく下回り、学年平均より少し上です。それも二学期終了まで殆ど成長していません」

有栖は敢えて自分のクラスの人間を雑魚扱いしているが、それだけに説得力がある。

「その癖、この5人は安いプライドから他クラスの生徒を見下していて、最上位クラスのAクラスには相応しいとは思えません。他のクラスの人も自分のクラスにいる怠惰な人間に心当たりがありませんか？」

有栖はそう尋ねると一部の人間は頷く。実際ウチのクラスにも全く成長してない奴もいるからな。

「弱いことは仕方ありません。伸び幅に差が出るのも仕方ありません。しかし日本の未来を担う人材を育成を重視する学校で弱いままにいる生徒、クラスの優秀な生徒に流されて努力をしない生徒は不要です。よって今後はクラス全体の査定に拘らず、個人の成

績や努力や伸び幅や性格なども細かく査定して、問題のある生徒を退学させていくべきです」

有栖の断固とした口調に一部が苦い表情になるが、大半は反論しない。

まあ反論する奴は自身が努力しない生徒ですと告白するようなものだからな。

それに有栖の発言内容は極論だが、確かな説得力がある。一之瀬のクラスは皆仲良しだから怠けるって生徒は少ないっほいが、ウチのクラスの中には順調であるが故に怠惰な感情を持っている生徒もいるからな。

反論するとしたら……

「ふざけんなし！上手いこと言って自分の気に入らない生徒を退学させたいんでしょ！」

「女王様気取りかよ！調子乗ってんじゃねえよ！」

「そうだそうだ！」

「貧乳が偉そうに語るなよ！」

底抜けの馬鹿くらいだろう。由比ヶ浜と須藤と山内と池が反対して、有栖の額に青筋が生まれる。

「……」ほん、仮に私の考えが実現すれば生徒は「ああはなるまい」と嫌でも向上心を持ち、それを身体に染みつかせれば社会に出て役立つでしょう。ぜひ来年度から試して、

学期末ごとに査定結果に応じた罰を与えることを希望します」

しかし有栖は咳払いをして話を終わらせて一礼すると、龍園の隣に移動して、入れ替わる形で龍園がステージの真ん中に立つ。

さて、龍園はどんなスピーチをするのだろうか。

まあ間違いなく誰かのヘイトを高めるのは明白だろうけどな。

## グループデイスカッション④

「次は俺の番だ。俺は「退学の際の救済措置の条件追加」について話す」

救済措置の条件ってお題を発表するのは聞いているが、具体的な内容は聞いてないの  
で興味深い。

「上級生や教員から確認した所、退学の際の救済条件は「2000万プライベートポイント  
ト+ $\alpha$ 」だ。まあ偶に例外があるらしいが基本的には今言った条件で、先月の林間学校  
では $\alpha$ が300クラスポイントだった」

龍園がリモコンを操作すると様々な特別試験における救済措置の条件が記されてい  
るが、大半が2000万プライベートポイントが必要となっている。

まあ退学者の救済は安くないのは当然だが、それにしても高過ぎだ。実際のところ、  
救済するのはリスクがデカ過ぎるし使わないのが吉だ。

「そして俺は更に新しい条件として「退学者が出たクラスで匿名投票を行って一定以上  
の賛成を得ること」を加えるべきだと思う」

龍園の言葉に講堂に騒めきが生まれる。南雲会長は楽しそうに笑って、一之瀬は震え

ている。

「先月の林間学校で3年Aクラスと3年Bクラスは退学者が出て救済措置を使ったが、Bクラスは南雲率いる2年からの資金援助によりプライベートポイントは無傷で300クラスポイントを失い、Aクラスは2000万プライベートポイントと300クラスポイントを失った」

それは皆の記憶には新しい。

「しかしAクラスは橘茜を見捨てるべきだった。見捨てればクラスポイントを失わずにAクラス卒業は絶対的だった。そしてAクラスの中には「嫌だけど堀北が助けようとしたから仕方なくポイントを出した」とか「そこは見捨てろよ」と思った奴も少なくないだろう」

龍園の言葉に講堂の隅にいる橘先輩は顔を青ざめて、堀北先輩の目は鋭くなる。

「しかも橘本人は迷惑をかけたくないからと誰にも頼らず受け身体勢のまま試験に臨んだが、橘は嫌な予感を感じた瞬間からクラスメイトや教員を頼り、絡まれたら逐次報告するべきだった。そうすれば試験の採点中に悪質や嫌がらせと判断して道連れにならずに済んだ可能性は充分にあった」

橘先輩は事あるごとにイチヤモンをつけられていたようだが、それを全て報告してれば助かったと思う。そうでないと教育体制に問題が生じる。

「この学校では受動的なのは愚かである事は1年の5月1日には嫌でもわかる事だ。学校側も動かない奴が悪いと判断するし、特別試験でもただ教師の話を聞くだけでなく、積極的に動いて試験の真意を探る必要がある」

だよな。この学校で重要なのは気になった事があればすぐに調査に動くことだ。暴力事件についても生徒が訴えなかったら放置だし、プライベートポイントの有効的な利用方法も教えてくれないしな。

「橘は3年生の3学期の時期に受動的に動き、クラス全体に迷惑をかけないで済むはずだったのに、迷惑をかけたから退学になるべきだった生徒だ。救済によってAクラスの中には間違いなく不満があるだろう」

「っー」

あつ、龍園の言葉に橘先輩が泣きながら講堂から出ていく。本当に容赦ないな。

龍園の発言は完全に暴言である。しかし雪ノ下や由比ヶ浜の暴言と違って正当性が含まれていて聞き手に興味を抱かせている。実際橘先輩の行動は完全な悪手で、俺が堀北先輩の立場なら橘先輩を切り捨てていただろう。

「よって退学者の救済についてはクラスのリーダーの意見のみではなく、全員の意見を反映する必要がある。そうでないとクラス内に不満が生まれる問題が生じるから、一定数の賛成が得られなかったら救済措置を使用出来ないようにするべきだ……以上だ」

龍園がそう締めくくる。拍手は起こらない。まあ弱者を淘汰したり見捨てるべきって内容だからな。

「では採点に入る」

南雲会長がそう言って手元にある端末を操作する。桐山副会長らもそれに続くが一之瀬だけは苦しそうな表情を浮かべ操作しない。

十中八九高得点を出したくないのだろうな。出したら自分の信念と真逆の考えを肯定するようなものだ。

しかし私情を挟んだら退学になるからか、苦しそうに端末を操作する。それによりモニターが変わり……

南雲 19点／20点

桐山 18点／20点

溝脇 19点／20点

殿川 19点／20点

一之瀬 17点／20点

難易度ボーナス 18点／20点

合計 110点／120点

点数が表示される。

ここで110点と高得点が出る。これまでの流れから見るとクラスポイントのゲットは確実だろう。

しかし一之瀬の17点は無意識だろうが低く設定しただろう。16点以下ならプリントに不満を書いたが、17点ならギリギリセーフだろうから書けないな。

何にせよ間違いなく上位入りだからCクラスからは焦りの色が見える。Dクラスの生徒はクラス間の闘争を諦めているようで大して表情は変わっていない。

「ふざけんなし！何であんな奴らが高い点数で、あたし達は低いんだし！」  
「本当にこの学校には屑しかいないのね……実に嘆かわしいわ……」

いや、お前らだけには言われたくないだろう。お前らは無能だと現実を見ろや。

有栖と龍園は罵声を無視して壇上から降りる。こっちにやってくるが額に青筋を浮かばせている。

「よう、色々な意味でお疲れ」

「全くです。凄く疲れてしまいました」

「つかスピーチが終わってからのの方が疲れたぜ」

そりゃそうだ。今もギャーギャー騒いでいる第三者の気持ちを考えやがれ。

内心文句を言うのと次のグループが壇上に立ってスピーチを始める。グループはAクラスからDクラスの生徒が1人ずつで構成されて、お題は「修学旅行の導入」というお題だった。

「そういうえばこの学校には修学旅行はありませんね」

ひよりはそう言うが実際かなり珍しいだろう。俺は中学時代に修学旅行で嫌な思い出があつたが、普通の生徒からしたら思い出作りに勤しむのだろう。

しかし行くとしたらどこになるのだろうか？ 京都や北海道がポピュラーで、場合によっては沖繩とかもあるかもしれない。

まあ希望を持つ必要はない。この学校が修学旅行制度を導入するのは考えにくいし、卒業したら恋人3人と回ればいいだけだ。

そして発表が終わり94点と暫定3位だ。ちなみに2位は石崎達の盗撮魔トリオの童貞問題だが、2位がそれってどうなんだ？

そう思っていると次はひより、松下、みーちゃん、白波と俺の恋人&セフレ3人のグループが壇上に上がる。

全員真剣な表情を浮かべているが、ベッドの上だとエロい表情を浮かべているんだよな。

この前セフレになった白波なんか綾小路の部屋に来た当初は緊張で積極的に動けて

なかったが、俺が処女が奪ってから暫くすると……

ーんっ、ああん♡そこおっ♡もつと激しくう♡ちゆう……比企谷君のおちんちん  
大好きい！ー

これまで相当ストレスが溜まっていたようで積極的に腰を振って甘えてきたからな。

その後は白波と同じように初参戦の櫛田、佐藤、姫野ともセックスをしたが、全員白波のように激しく求めてきたのは記憶に新しい。

そう思う中、4人はリモコンを持って操作すると採点画面が消えて……

「由比ヶ浜結衣の愚かさの理由と改善案について」

この上なく難しい問題が新しく表示された。え？まさか本当に挑戦するとは思わなかったわ。

というか由比ヶ浜は絶対にブチ切れ「ふ、ふざけんなし！何でそんな事をするの?!」たな、うん。

俺はかつてない難問に挑んだ4人から目を離せずになるのだった。

## グループデイスカッション⑤

「まず最初に言います。私は生まれてから15年、由比ヶ浜結衣ほど愚かな生き物を見た事はありません」

松下が堂々とそう告げる。

「ふざけんなし！あたしの何処が愚かなんだし?! あんたの方が数百倍愚かじゃん！」  
ねーよ。俺もお前ほど馬鹿を見た事はないからな。

多分今の時点でこの講堂にいる殆ど全員が俺と考えがシンクロしたと思う。

松下は額に青筋を浮かばせながらも話を進める。

「自分勝手な行動ばかり、自分が気に入らないなら直ぐに喚く、教師やクラスメイトが注意しても喚く、皆に迷惑をかけても謝らない……本当にどうしようもない人間です」

松下の言葉に有栖や龍園、綾小路や高円寺、南雲会長や教員らも一斉にうんうん頷いている。

由比ヶ浜は更にギャーギャー喚くが、気にしたら負けだ。

そして次にみーちゃんが口を開く。

「飼い犬はトイレの場所なんて簡単な事すら直ぐに覚えられるのに、由比ヶ浜さんは教師の説明を静かに聞くななんて簡単な事が出来ません」

『あー、確かに』

「はあ?!どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだし!一回死ねば!」

みーちゃんの言葉に大半が小さく頷き、由比ヶ浜が激昂する。

「それを考えると由比ヶ浜さんは普通の人間より思考能力が欠如しているのかと我々は最初に判断しました」

大人しいみーちゃんから毒舌が放たれるのは不思議な気分だ。まあベッドの上だと肉棒大好き少女だけ。この前の乱交パーティーでは美味しそうに男子3人にフェラをしてるのは記憶に新しい。

「それが生まれつきなのか後天的なのかはわかりませんが、成績だけは良い雪ノ下雪乃さんが由比ヶ浜さんを肯定をしている事から調子に乗っているから、または自分の無能さから逃げるために自己愛性パーソナリティ障害を持っているのかもしれない」

ひよりがそう口にする。自己愛性パーソナリティ障害……確か自分を愛することができず、自分は優れていて素晴らしく特別で偉大な存在でなければならぬと思ひ込む精神病の一種だったな。

「何言ってるの?あたしが障害者って決めつけんなし!あたしは正常だから!」

それはそれで問題なような気がするんだが……

「この症状は自分が問題であるとは認識していないため、精神療法は困難であります。しかし今出来る事はあるでしょう。第1に雪ノ下雪乃を引き離す事です。2人は互いに肯定し合う事で自身は正しいと思いつ込んでいる悪循環に陥っています」

白波が続くが言っている事は正しい。ぶつちやけ2人はお互いに肯定し合って、互いの短所に指摘しないからな。それによつて増長している可能性は普通に高い。

「ふざけないで！ そうやって由比ヶ浜さんに碌でもない事をするつもりでしょう?!」  
「そうだし！ ゆきのんは絶対を守るから！」

唯一の友達と引き離される事を危惧したようで雪ノ下と由比ヶ浜は怒りを露わにするが、嫌なら互いの欠点について腹を割って話し合つて改善しようとするべきだ。

「第二に注意の際に暴力を含むことにあります。穏やかに注意しても怒鳴つても由比ヶ浜さんは反省の色を見せませんので、多少暴力を振るう事も考慮するべきです」

これはかなり踏み込んだ内容だな。今どき体罰なんて問題行為だ。

しかしそれくらいしないと由比ヶ浜が変わらなそうなのは紛れもない事実なんだよな……実際のところ、一定以上の愚か者には体罰をアリにするのも悪くない気がする。

というか和を尊ぶCクラスのリーダーである一之瀬の親友の白波が龍園のような事を口にかけているので、Cクラスの連中は驚きの表情を浮かべていて、一之瀬は悲しそう

な表情を浮かべて白波を見ている。

しかし白波は大分変わったからな。櫛田や松下もそうだが由比ヶ浜と雪ノ下によって性格が荒くなっている。もう元に戻るのは無理だろう。

「第三にもう全てにおいて匙を投げて、どこかの精神病棟に一生幽閉する事です。このまま卒業した場合、合格出来るとは思えませんが入った大学でも他人に迷惑をかけ続けて、この学校の評価は落ちるでしょう」

まさかの問題放棄かよ。しかしこれが一番最高の策だと思うんだが……

それにより由比ヶ浜と雪ノ下はギャーギャー喚くが、もう気にしないでおく。

「彼女の愚かさは並大抵の事では改善出来ず、今後も生徒教師問わずに迷惑をかけ続けるのは明白。よって早いうちに荒い手段の使用を認めるようにするべきです。私の考えに賛成の人は、荒い手段の使用について動くようお願いします……以上です」

松下がそう言って締め括ると、皆が温かな拍手を壇上にいる4人に拍手を送り始める。

「なんであんなふざけた発表で拍手するの?! あたしはどこにもおかしくなくて、おかしいのはあんた達じゃん! 本当にふざけんなし!」

「いい加減にしろ! 我々をおかしいと思うなら今直ぐ退学して、おかしい生徒がいない学校に転入すれば良いだろう! このグループの発表におかしな点はない!」

由比ヶ浜の怒鳴りに茶柱先生からブチ切れる。南雲会長に続いて茶柱先生もかよ

……

「はあ?! 体罰や幽閉はおかしいに決まってんじゃん! 馬鹿じゃないの?!」

「おかしいのは普通の生徒に対して行う場合だ!」

「ふざけんなし! あたしをおかしいみたいに言わないでよ!」

確かにひより達のスピーチには問題がある。業腹だが由比ヶ浜の言うように体罰や幽閉なんて今の時代には問題だ。

問題だが、茶柱先生の味方をしたくなるのは由比ヶ浜が愚か過ぎるからだろう。

「茶柱先生、そこまで。馬鹿もいい加減に黙れ」

「誰が馬鹿だし! あんたの方が馬鹿でしょ!」

南雲会長が止めに入るが、堂々と馬鹿と言ってるあたり相当キレてるようだ。

まあ直ぐに由比ヶ浜にブーメラン発言をされて、再度一之瀬から胃薬を渡されて茶柱と同じタイミングで胃薬を飲む。なんでも良いが、胃薬ってこまめに飲むものじゃなくね?

「……では採点を始める。モニターを注目するように」

南雲会長の言葉にスライドが消えて……

南雲 18点／20点

桐山 16点／20点

溝脇 17点／20点

殿川 18点／20点

一之瀬 16点／20点

難易度ボーナス 20点／20点

合計 105点／120点

暫定2位に躍り出る。龍園達のグループにかなり迫っていたな。

「もうやだ！何でこの学校は実力をちゃんと評価できないの?!あたしを馬鹿に出来るの?!」

それはお前が底抜けの馬鹿だからだ。自覚するのは無理だろうけど、自覚して欲しいのが本音だ。

内心呆れながら壇上から降りるひより達を眺めるのだったが……

1時間後……

「と、いうわけで由比ヶ浜結衣と雪ノ下の愚かさについては解決不可能と判断したので、今直ぐ退学処分にして後は知らんぷりするべきで……」

ひよりのグループの発表が終わってから既に20弱のグループの発表が行われながらその内の8グループは由比ヶ浜の愚かさをお題にしていた。

ちなみに軽井沢と榎田と堀北のグループは五馬鹿の愚かさの問題と堀北の傲慢な考えをお題にして100点を出していた。その際には大笑いをする龍園や有栖、怒りに震えながら兄をチラチラ見る堀北が印象的だった。

閑話休題……

しかし由比ヶ浜の問題に対する解決案が退学処分とか幽閉とか、中にはギロチンにかけるなんてぶっ飛んだもので、真つ当な解決法を出したグループは1つもなかった。

その度に由比ヶ浜はギャーギャー騒ぐが、お前はそれだけお題に選ばれたんだから自身を見つめ直してくれ、マジで。

## グループディスカッション⑥

「……って訳で、学校は教育機関である以上、嘘をつかないようにするべきだな。そうでもない、嘘をつくのは正しいって事になるぜ」

山内がそう締めくくると拍手は起こりはしないが、意外そうな眼差しが山内に向けられるが、俺も似たような眼差しを向けているだろう。

大分グループ発表は続き、山内と佐倉の番になった。最初に山内が「この学校における問題点」ってお題で、「この学校は嘘を吐くが、それは問題だから一定の情報を生徒にしつかり教えて変えるべき」って結論を夏休みの件を引用したのだ。

夏休みの件とは2週間の旅行で無人島に上陸するまでは「1週間は無人島のペンションで過ごし、残りの1週間は豪華客船で過ごし」と説明を受けていたが、実際はペンションは無くして貧相な共同生活だった事だ。

よって言っている内容には説得力があった。言葉の表現や口調とかには粗が見えるが、それでも調査に力を入れていたのはわかる。10点以上は厳しいが8点か9点くら

いはあげても良いだろう。

そう考えると山内にしては上出来だろう。雪ノ下と由比ヶ浜はボーナス以外では0点で、少し前に発表した須藤と池はボーナス込みで35点だったからな。

しかし山内の事だから他の4人と同レベルだと思っていたが、思ったよりもしつかりしていたので驚いた。アレか？変なものを食って愚かさが消えたのか？

そして山内がステージの脇に移動すると山内と同じグループのペアの佐倉のターンになるが……

(ガチガチじゃねえか)

誰が見ても緊張感丸出しで、真っ青に他の皆がステージ中央に移動していたのに、移動してない。

ようやく移動したかと思えば……ガタガタ震える。口を動かしているのはわかるが、声が聞き取れない。

(どうだけコミュ障なんだ?)

いや、これは俺達聴者の目がキツイのかもしれない。何せパートナーが嫌われ者の山内だからな。山内とペアを組んでいる時点で、他クラスの生徒に山内に気があると思われていても仕方ない。

「あつ……えつと……私は……」

そんな風にボソボソと微かに聞こえてくるが、相当緊張しているのか内容は「ボソボソ喋んなし！喋れないなら今すぐ帰れし！」鬼かお前は？

俺は怒鳴る由比ヶ浜に内心にてそうツツコミを入れる。しかも佐倉はそれにより萎縮してしまい、俯いてしまう。こりやダメだな……

内心佐倉に同情している間に制限時間を迎えてしまう。佐倉については残念ながら0点だろう。

それからすぐに点数が発表されるが、全員が8点でボーナスが12点で52点となった。

しかし下位3グループから免れたから雑魚2人にしては上出来だろう。

ちなみに今のトップ5は1位が坂柳グループの110点、2位が橋本グループの108点、3位が松下グループの105点、4位が軽井沢グループの100点、5位が石崎グループの95点となっていて、下位については雪ノ下グループは20点、須藤グループが35点、井の頭グループが45点、山内グループが52点、佐藤グループが60点となっている。

で、クラスポイントは1位から5位のグループに渡され、1位のグループには300、2位には200、3位には100、4位には60、5位には40のクラスポイントが与

えらる。

そしてグループメンバーの所属するクラスの数だけ分割される。

そしてこのまま最後まで順番が変わらなかつたら……

1位の300ポイント↓有栖のAクラスと龍園のBクラスに150ポイントずつ

2位の200ポイント↓橋本と神室のAクラスと高円寺のDクラスに100ポイン

トずつ

3位の100ポイント↓ひよりのBクラスと白波のCクラスと松下&みーちゃんの

Dクラスに33ポイントずつ（小数点以下は四捨五入）

4位の60ポイント↓軽井沢と櫛田と堀北のDクラスにそのまま60ポイント

5位の40ポイント↓石崎と小宮と鈴木の本クラスにそのまま40ポイント

となり……

Aクラス↓+250ポイント

Bクラス↓+223ポイント

Cクラス↓+33ポイント

Dクラス↓+193ポイント

となる。このまま行けばDクラスは久しぶりにプラスのポイントになる。まあ由比ヶ浜が直ぐに0にするだろうけどな。

そう思いながらその後のスピーチも続き、漸く俺と綾小路の番になったので前に向かう。

「なんで2人が出てくるんだし！どうせまたズルするんでしょ！」

由比ヶ浜が叫ぶが無視させて貰う。

俺達はギヤーギヤー喚く由比ヶ浜を無視して俺達は発表の準備を済ませる。

「それでは発表を始めます。今回、自分と比企谷は高度育成高等学校の体制における問題の改善については発表します」

これまでの発表でもよく出されていたお題だが、俺と綾小路の発表内容は誰とも被っていないので、幸いだ。

綾小路がリモコンのボタンを押すと新しい文章が出る。

・ 監督生制度の導入

・ Aクラス特有の特権の改案

始めるパターンに講堂から騒めきが生じる。

「では自分から「監督生制度の導入」について説明します」

綾小路がそう言つてステージの中央に立ち、俺は隅に移動する。

「監督生といえば、ハ〇ー・ポ〇ターの原作を読んだ人ならアレを想像すると思いますが基本的にはそれに近い感じですよ。未読者に簡単な説明をすると生徒の中で実力のある生徒に権力を与えて、生徒に対して罰則を与えられる生徒と思えば大丈夫ですよ」

まあ監督生同士の減点は無理みたいなのはあるけどな。

「もちろん他クラスの生徒に罰則を与えたらクラス間闘争が泥沼化するの間違いありませんよ」

そうだろう。監督生制度が導入された場合、他クラスの生徒に対する罰を許したら絶対に罰則の嵐になるのは明らかだ。

「しかしクラス内においてなら秩序を守る為にも役立つでしょう。例を挙げるなら気に入らないことがあるばコンパスで人を刺すような問題児がいたら、その時監督生が教師と同じ権限を持ち、罰則を与えられる……ようなものです」

綾小路はわかりやすい例えをする。それにより有栖や龍園はニヤニヤ笑いを、気に入らないことがあるばコンパスで人を刺す問題児……堀北に向ける。当の堀北は屈辱に満ちた表情を浮かばせながら握り拳を作っている。

「ふざけんなしー！アンタの事だからあたしに逆恨みしてるから理不尽な罰を与えてんてしよー！」

「権力に酔って好き勝手暴れるのが想像出来るわね」

「大体人の肩を壊す奴が監督生なんか務まらないだろ！」

「そうだそうだ！大体俺の桔梗ちゃんやの処女を奪った屑野郎が偉そうに発言してんじやねえよ！責任取って佐藤とか松下とか王とかの処女を俺が奪えるように貢献しろよ！」

山内以外の4人が怒鳴るが山内が怒鳴ってないのは気になるな。つか池の発言だが……

「ねえ、マジで気持ち悪いからやめてくれないって前から言ってるよね？大体私はもう綾小路君に処女を捧げたし」

「私は比企谷君に捧げたね。というかアンタに捧げるなら首を吊るからって何回も言っただよね？わからないの？」

「私も綾小路君に捧げましたから、何回も気持ち悪い事を言わないでくださいー！」

佐藤達が嫌そうにそう返す。口振りからして何回も言われているようだが……

『なにいいいいいいっ?!』

案の定、講堂には騒ぎ声が響く。担任の先生方は額に手を当てて呆れ顔全開となつて  
いる。

『榊田ちゃん以外も抱いたのかよ?!』

『というかそのメンツって馬鹿によって苦労してるメンツじゃね?』

『苦樂を共にした同士結ばれたって訳か!』  
『もしかして他にもいるのか?!』

はい。公にはなつてないですが、恋人にならずな先輩が、セフレに白波と姫野がいます。  
まあそれは口にしなないけど。

「ふぎけんじゃねえよ綾小路に比企谷! 恵まれてるんだから1人くらい寄越せや!」

「何でお前らだけ良い思いをして俺達は苦しめられなきやいけないんだよ!」

「本当つきモいから! 今すぐ退学してあたしとゆきのんにポイントを渡すし!」

「同感ね。貴方達のような層より有意義に使えるから寄越しなさい」

案の定、4人は文句を言ってくるが、マジで山内が叫ばないのは不気味だ。当の本人は何かを考えながらニヤニヤしてるけど。

「……この学校では暴力行為などは訴えないと動きませんし、かといってクラス内の問題に学校が動いたらクラス全体にダメージが広がる可能性があります。よって自由に罰を考えて問題児に与えられる生徒の存在は必要だと思えます」

そんな中、綾小路は馬鹿共の喚きをスルーして自分の話を締めくくる。

さて、次は俺の番だな。重要なのは馬鹿の喚きに苛立つ事なくポテンシャルを發揮する事だし頑張らないとな。

## グループディスカッション⑦

「では綾小路に続いて自分が発表します」

俺がリモコンを操作して次のスライド……：Aクラス特有の特権の改案についてのページに切り替える。

「さっきから無視してんじゃねえよ！テメエらみたいな屑が可愛い女子に手を出してんじゃねえよ！俺達に全員寄越「黙りたまえ。見苦しい事この上ない」っ……！！」

池がギャーギャー喚いていたが、近くにいた綾小路と並んでDクラスの怪物の高円寺が苛立ち混じりの殺意を出すと池の泡を噴いて気を失う。

「さっきから耳障りで仕方ない。今後も騒ぐようなら卒業してから高円寺コンツェルン  
の力で貴様らの家族諸共首を吊りたくなるまで追い詰める事も考えないといけない」

いや、怖いってレベルじゃねえよ。高円寺グループは日本トップクラス、世界でも有数の大企業だ。後継の高円寺なら本気で潰せるだろう。

それにしても普段不敵な笑みを浮かべてる奴がキレるとガチで怖いな……

「つ……」

流石の雪ノ下も悔しそうに黙り込む。雪ノ下も実家が裕福だが高円寺に比べたら雲泥の差だから当然だろう。

由比ヶ浜は喚こうとするが雪ノ下に止められる。由比ヶ浜は不満そうだが、コイツは本物の馬鹿だろう。

何にせよ静かになったので俺は高円寺に一礼してから口を開ける。

「Aクラス特有の特権……言うまでもないがAクラスの生徒は自由に進学先や就職先を決められる夢のような特権だ」

まあ裏もあるだろうけど。進学や就職出来ても留年や退学やクビにされる可能性もある。仮に由比ヶ浜がAクラスで卒業して東大に入っても馬鹿だから卒業出来ないだろう。

要は身に適した大学や職場に入る為に特権を使うのが重要で、分不相応な場所を希望するべきではない。まあそれは今回は関係ないし口にはしないけど。

「しかし俺はこう思いました。Aクラスの中にもクラスに貢献しようせず、ただ付いていくだけで向上心がない人間に推薦枠は相応しくない……と」

俺の言葉に空気が重くなる。言いたいことがわかったようだ。

「先程坂柳と龍園のグループでは向上心がない奴は退学にするべきと言っていました

が、俺も似たような考えで『これからは個人の動向についても逐次チェックしてAクラス生徒であろうと査定に落ちたら特権を剥奪する事、Bクラス以下でも死に物狂いで努力した人間には特権を与える事』を提案します」

『おおっ！』

俺の言葉に歓声を上げるのはDクラスの生徒だが無理もない。彼らは五馬鹿のせいでAクラス行きを諦めているのが現状だ。

「今のDクラスはぶつちきりの足手纏いが5人もいて、諦めのムード全開ですがそれはよろしくない。実際不良品と呼ばれるDクラスの中にも粒がいてその粒を無碍にするのは勿体無いのでチャンスを与えるべきです」

総合力が低くても一点特化的な意味で優秀な生徒はDクラスにそれなりにいるし、その一点を高めるモチベーションを上げる為には、個人に対しても評価を与えるようにするべきだ。

『良いぞ比企谷！』

『もつと言ってやれ！』

『五馬鹿のせいでAクラス行きのチャンスが跡形も無く消えた私達に希望を！』

……そんな声援を受けると同情が湧いてくる。どんだけ辛い思いをしたのだろうか？

しかし一部の連中は不満そうに見てくるが、そいつらは間違いなく自信がない人間だろう。面を見る限り「余計なことをしやがって……」って考えているのは明白だ。

まあ文句は言つてこないだろう。言つたら「自分は優秀なクラスメイトに頑張つて貰うのが最善で、そこまで努力をしたくない」と遠回しに言っていると勘違いされる可能性が高い。

「今回のグループディスカッションでは学校に対する問題点や不満を提示するパターンが多かったですですが、今後学校はもう少し個人に対する扱いを改善していただきたい。社に出たら団体行動は必須ですが、だからといって優秀な人間がお荷物に足を引っ張られ続けて腐つてしまつては勿体ありません」

俺はそう締めくくり一礼する。こうすれば今後生徒は教師に対して納得のいかない点を指摘しやすくなるだろう。

「では採点をする」

南雲会長がそう口にするともモニターの内容が変わり……

南雲 18点／20点

桐山 19点／20点

溝脇 18点／20点

殿川 18点／20点

一之瀬 19点／20点

難易度ボーナス 20点／20点

合計 112点／120点

暫定一位に躍り出る。やはり監督生導入や特権剥奪についてはそう簡単にはいかな  
いからな。

何にせよ1位だったので良しとしよう。残りのメンツを見る限り、厄介なメンバーは  
おらず負けることはないし、最上の結果だろう。

そう思いながら俺達は拍手を遅れながらステージから降りて息を吐く。

「お疲れ様でした。それにしても八幡君達は高円寺君のおかげで静かな発表が出来まし  
たね」

「全くだ。高円寺が居なかつたら連中は騒ぎまくって集中力が欠けていたかもしれない  
」

本当にあいつらの相手は疲れるからな。肉体的でも能力的でも精神的な意味でも。

内心高円寺に感謝をしていると次の発表を迎えるので意識をステージに戻すのだっ  
た。

1時間後……

「……以上です。ご清聴感謝します」

最後のグループの一之瀬が「学校による罰則やペナルティの中に、簡単に人を退学させる内容の廃止」を説明する。

「これで最後だな。じゃあ採点をする」

南雲会長がそう呟くと生徒会役員十堀北先輩が採点を始め……

南雲	15点	／	20点
桐山	16点	／	20点
溝脇	14点	／	20点
殿川	15点	／	20点
堀北	16点	／	20点
難易度ボーナス	20点	／	20点
合計	96点	／	120点

と、表示される。これで全てのグループが終了となるが、クラスポイントが入る上位5組は……

1位 俺と綾小路のグループ↓BクラスとDクラスに150ずつクラスポイントが入り、1人あたり100万プライベートポイントが入る

2位 有栖と龍園のグループ↓AクラスとBクラスに100ずつクラスポイントが入り、1人あたり80万プライベートポイントが入る

3位 橋本と神室と高円寺のグループ↓AクラスとDクラスに50ずつクラスポイントが入り、1人あたり50万プライベートポイントが入る

4位 ひよりと松下とみーちゃんと白波のグループ↓BクラスとCクラスとDクラスに20ずつクラスポイントが入り、1人あたり30万プライベートポイントが入る

5位 軽井沢と櫛田と堀北のグループ↓Dクラスに40クラスポイントが入り、1人あたり20万プライベートポイントが入る

つて感じで、Aクラスは150クラスポイント、ウチのBクラスが270クラスポイント、Cクラスが200クラスポイント、Dクラスが260クラスポイントを得る。

そして試験前日のクラスポイントは……

Aクラス 1220ポイント

Bクラス 947ポイント

Cクラス 580ポイント

Dクラス マイナス108ポイント

で、今回の試験のポイントを加えると……

Aクラス 1370ポイント

Bクラス 1217ポイント

Cクラス 600ポイント

Dクラス 152ポイント

こうなる。Aクラスとは同盟を結んだ事によりCクラスと引き離しているので順調だ。まあクレーム次第で変わるかもしれないがな。

そしてDクラスは久しぶりにプラスになったが……

「Dクラスは2年になった時には0ポイントになってますね」

有栖がそう口にするが、そうなる可能性は極めて高いだろう。

出来ればウチのクラスとトラブルを起こして、ポイントを塗り取りたいものだ。そう思いながら俺達は真嶋先生の終わりの挨拶を聞き、解散するのだった。

## 試験後

グループディスカッションの発表が終わってから2日後の朝のHR、坂上先生が教室に入ってくる。

「おはようございます。早速ですが報告です。今回の特別試験においてのクレームに対する処理が終わりましたが、全部却下されました。生徒会役員は公平に採点してくれて良かったです」

「そりゃ不公平な採点をしたらデカイペナルティを与えられるからな。当然だろう。では改めて発表です」

坂上先生が持ってきた紙を広げる。

Aクラス 1370ポイント

Bクラス 1217ポイント

Cクラス 600ポイント

Dクラス 152ポイント

うん、計算通りだな。加えてウチのクラスの生徒が所属するグループはプライベートポイントも稼いでいるし最良の結果だろう。

「この時期にクラスポイントが1000ポイント以上あるのはいいことですからこの調子で頑張ってください。それと期末試験まで2週間を切っているので意識を切り替えて勉強に弾むように」

坂上先生がそう言うってから教室から出て行くので俺は前に出る。

「さて、済まないが俺の話も聞いてもらう。具体的に言うとなら先生が言った期末試験についてだ」

「任せろって！3学期に入ってから毎日1時間自主的に勉強するようになったし、全科目70点以上取ってやるぜ！」

石崎が自信満々にそう言うてくる。二学期の中間まで学年最下位だった石崎がそう口にするとは余程頑張ったのだろう。

しかし……

「悪いが今回の期末試験では元々成績下位の連中は手抜きして50点前後にしてくれ」  
今回は自分の力を発揮しないで貰いたい。

「え？何でだよ？」

石崎が頭に疑問符を浮かべる。大半が似た表情で、気付いたのは龍園、ひより、金田

くらいだな。

「理由は学年末に行われる特別試験にある。試験内容はまだわからないが、1年のまとめだから学力や身体能力、思考力やチームワークなど様々な要素が混じった試験の可能性はある。ここまでは良いな？」

俺の問いに全員が頷く。

「で、俺達は学力において格上の一之瀬のクラスを小細工抜きで倒す金星を得たが、当然他クラスから警戒されているだろう」

「つまりわざと手を抜く事で、浮かれ過ぎて成績を大きく落としたりと他クラスに思わせろんだな」

「その通りだ時任。とはいえ試験勉強はしっかりやれ。重要なのは弱くなったかわせて、特別試験で学力分野があつたら圧勝するからな。念の為成績上位陣は80前後を目標にしろ。手抜きのし過ぎは疑われるからな。理想としてはクラス平均点は2学期中間の時よりも僅かに上の点数くらいだ」

そのくらいならパーパーシャツフルで勝つて気が緩んだと思われるだろう。

で、他クラスと交流がある生徒に「パーパーシャツフルに勝つた事によつて緩みが生まれ、緩みから成績が落ちた事を比企谷にメチャクチャ怒られた」つて他クラスの生徒に対して、部活の着替えの時や昼食の時に愚痴れ」と命じれば更に警戒心を緩められる

だろう。

戦いで重要なことは色々あるが、相手が油断してる最中に必殺の一撃を叩き込む事もある。

元々ウチのクラスは腕っぷしで他クラスから警戒されているし、勉強の視点から警戒されては奇襲が難しい。よって気を抜けたように思わせる。

「俺からの話は以上だ。全員死ぬ気で勉強して、テストでは程よく手を抜くように」

そう言つて席に着き、授業を始める。学年末試験の内容はわからないが出来るだけ備えておくべきだろう。場合によってAクラスと強制的に争うかもしれないからな。

数時間後……

「では八幡君、私は部活があるので」

帰りのHRが終わり、ひよりは部活に行つてしまう。ひよりと別れて廊下を歩いていると携帯が鳴る。見れば有栖からのメールで「クラスメイトと映画に行くので夕食は食

べてきます」と書かれている。

(そうなる暇だし……あつ、折角だし綾小路に紹介してもらった使われてない廃倉庫でなずな先輩を抱いてみるか)

少し前に綾小路から「学園内で青姦するならオススメだ」と言われた場所があるし、折角だしなずな先輩を誘ってみよう。

俺はなずな先輩にその事をメールしてから自販機に行き、お茶を買ってベンチに腰掛ける。

すると「ハチ君のエツチ……今ちよつと忙しいから20分後に自販機前に集合ね」と返信がくる。どうやら付き合ってくれるようだ。

その事に興奮しながら携帯でゲーム実況をのんびりと見始める。最近の暇潰しにはベストだ。

そして暫く見ていると肩を叩かれたので振り向けばジト目のなずな先輩がいた。  
「どうも」

「まさか放課後直ぐに青姦しないかってメールが来るとは思わなかったよ、ハチ君のエツチ」

「即座に受けたなずな先輩もエロいですよ。この前も生でやった時もエロ過ぎましたし」

「うるさいよ、意地悪……」

安全日に生で抱いたが、あの時のなずな先輩は獣のように叫びながら淫語を連発して、まさに性欲の女神だったからな。

「すみません。それじゃあ行きましようか」

「馬鹿……」

なずな先輩は文句を言いながらもついていく。俺達はそのまま校舎の裏からゴミ捨て場を通り、更に奥にある廃倉庫に向かう。

綾小路によれば数年前まで廃材置き場に使われていたらしいが、門の近くに新しく作ったようでそれ以来使われてないらしく、敷地の隅にある事もあり人が滅多にこないらしい。しかも鍵付きらしいのでうってつけらしい。

そう思いながら倉庫に近寄ると……

「あんっ！ダメエ！んあっ！」

微かにだが女の声が聞こえてくる。どうやら先客がいるようだ。離れているから誰の声かはわからないが、もしかして綾小路が新しい女を抱いているのかもな。

「誰かいるみたいだし、エッチするなら寮でしない？」

「そつすね」

俺達は廃倉庫に背を向けて元来た道を歩くが、ゴミ捨て場の前で綾小路と鬼龍院先輩

がやって来るのが見える。間違いなく目的は廃倉庫だな。

「何だ？比企谷と朝比奈先輩は終わらせたばかりか？」

もうやり終えたと思っっているようだ。

「いや、誰か先客がいた。お前が新しい女を抱いたのかと思った」

「まあ長谷部は昨日抱いたが、廃倉庫じゃなくて長谷部の部屋で抱いたぞ」

「本当に手が早いよ清隆は」

鬼龍院先輩は器が大きいから呆れ顔を向けるだけだが、新しい女を抱いたのかよ。と  
いうか長谷部って学年屈指の巨乳女だったか？コイツ本当に肉食動物だな。

「由比ヶ浜のストレス関連だな。一応今週末の乱交にも招待した」

「待て。これ以上増やすな」

既に松下、みーちゃん、櫛田、佐藤、白波、姫野の6人もいるのだ。更に増えたら手持ち無沙汰になるし、精力が保たねえよ。というかそれ以前にひより達が由比ヶ浜に對してキレそうだ。そうなったら絶対に面倒な事になる

「まあ誘ったものは今更だ。それより廃倉庫が使えないならプールにでも遊びに行かないか？楓花さんや朝比奈先輩の水着が見たい」

「人の女に色目を使うな」

「まあ年頃だから仕方ないけど、私はハチ君以外には抱かれないからね」

「清隆、セフレは同意ありだからまだしも、寝取りは面倒になるからやめておけよ」

「わかっていますよ。じゃあ行きましようか。楓花さんはスク水を来てください。胸にひらがなできりゆういんと書かれたスク水を」

「ぶふおっ！」

綾小路の欲求に俺とわずな先輩は噴き出してしまふ。何つゝ犯罪じみた提案をするんだコイツは？興味あるけどな。

「仕方ないな……朝比奈が着るなら考えよう」

「是非お願いします」

「ハチ君?!」

俺も興味あるから思わず頼んでしまふ。いやだつて見たいし。

「じゃあプールに行く前にアダルトショップに行きましようか、金はオレが出します」

綾小路が足を速め、鬼龍院先輩もそれに続き、俺達も続く。なずな先輩を見れば真っ赤になつて俺を見て……

「今回だけだよ……ハチ君のエッチ」

「恥ずかしそうに要求を受け入れてくれる。グツジヨブだ綾小路。俺は綾小路に感謝しながら足を速めるのだった。」

## 欲望

八幡が綾小路達とケヤキモールに向かう中、青姦に最適な廃倉庫の中では……

「愛理！愛理！気持ち良いよ！んっ！ちゅっ！ちゅっ！」

「んっ！んむっ……あっ！あっ！やめて……やあっ！」

山内春樹が佐倉愛理とセックスをしていた。マットの上に押し倒された佐倉は正常位の体勢で山内の肉棒で攻められながらキスをされる。佐倉は拒否しようと身を振るが山内はそれを無視して攻めまくる。

しかし八幡がひよりや有栖やなずなど、清隆が恵や楓花とする時に生まれる愛情は一切なく、山内の欲望と佐倉の悲壮感に満ちていた。

何故こうなったかといえ、グループディスカッションの発表が終わった後に山内は

この廃倉庫に佐倉を呼び出し「お前が一切発言しなかったから点数が低かった」と文句を言った。

それについては佐倉自身、返す言葉もなく誠意を込めて謝罪して可能な限り償うと山内に言った。

すると山内は「じゃあ処女を貰うぜ」と佐倉を押し倒して、そのままキスをしてきたのだ。いきなりすることに佐倉は戸惑いながらも抵抗しようとしたが、有栖を除外したら学年最弱の身体能力の佐倉の力では碌に抵抗出来ずに処女を奪われた。

そして好き勝手された後に山内は携帯で写真を撮りまくってから「今、寛治達に写真を送ったから。それとこの携帯、インターネットには接続出来ないけど校内ネットにはアクセス出来るが、今回の件が広まったら、なあ？」と脅しをかけてきたのだ。

そんな脅しは元々気の弱い佐倉には厳しく抵抗する気力を奪われてしまい、今日も動画や写真をネタにセックスを強要されている。

「んっ……愛理のおっぱい、美味しいな。全く飽きる気がしないぜ！」

山内は佐倉の胸を赤ちゃんのように吸い始めるが、佐倉には恐怖の対象でしかない。

「やだっ……！お願いだからやめて」「やめてなんて言うなよ？バラしちゃうぞ？」っ……んあああっ！」

佐倉は山内の脅しに黙り込んでしまう。そんな事になったら自分は破滅だ。

抵抗が弱まると山内は腰を振る速さを上げて……

「くっ！愛理っ！射精るっ！」

「っ！ダメ！中はダメっ！」

佐倉は慌てる。少し前に脅されて安全日であると教えたが、だからと言って絶対ではないのでやめて欲しいのが本音だ。

どびゅっ！どびゅっ！どびゅるるっ！

「っ！いやああああああああっ！」

佐倉が慌てる中、山内はそれを無視して中出しをする。佐倉の抵抗も虚しく、山内の欲望が解き放たれる。

「あー、スツキルスツキリ。じゃあピルは飲んでいてね。俺はそろそろ戻らないと面倒だから」

山内は佐倉の唇にキスをしてから肉棒を抜き、痴態をカメラで撮ってから廃倉庫を後にする。矯正プログラムを受けている山内はこれから奉仕活動としてケヤキモール近くの道の清掃があるのだ。

「うう……」

山内が出ていくと佐倉は涙をポロポロ流しながら鞆の中にあるピルを飲み、膣内の精液を指でかき出す。

弱みである動画が山内以外の誰が持つてるかわからない以上、訴えることは出来ない。訴えて山内が退学になっても写真や動画が校内ネットやインターネットに流れるだけでネットタトゥーとして一生残ってしまう。そうなったら残りの人生が悲惨なものになってしまう。

「助けて……綾小路君」

佐倉は1学期に同じように襲ってきた電気屋店員から守ってくれた綾小路に助けを懇願するのだった。

同時刻……

「んっ……はぁ……清隆っ」

「楓花さん、最高にエロいですよ」

俺の部屋にて綾小路はスク水を来た鬼龍院先輩を膝の上に乗せて、背後から鬼龍院先輩の胸を揉んでいる。

それによつて鬼龍院先輩のスク水の胸元に書かれた「2ねんBくらす きりゆういんふうか」つて文字が歪み、綾小路の言うように最高にエロい。

と、ここで頭を叩かれたので横を見れば「2ねんAくらす あさひななずな」と胸元に書かれたスク水を着たなずな先輩がベッドの上でジト目で見ていた。

「ハチ君。私に夢中になつてよ」

嫉妬心を露わにしながらキスをしてくるが、そんな態度を見たいからわざと鬼龍院先輩を見ていたんだよな。

そう思いながら俺はスク水越しになずな先輩の胸を揉みしだくと、なずな先輩はキスを返してくる。

スク水を買ってから4人でスパ施設に行こうとしたが、2年Aクラスのグループがスパ施設に入ったので、なずな先輩が別の場所を希望したので俺の部屋で遊ぶことになったのだ。

で、脱衣所からスク水を着た2人が出てきた際はマジで犯罪臭を嗅ぎ取ってしまったくらいだ。

「んっ、ちゅっ……そういやなずな先輩。なずな先輩が1年の時の学年末試験つてやつ

ぱりあらゆる要素が詰まっているんですか？」

「ん？そうだよ。形式は毎年違うらしいけど、学力や運動能力やチームワークなど様々な要素を使うみたい」

「んっ……私達の学年では教員が様々な課題を出して、それをこなしていくクラスの合計点で競っていた。中にはパズルやナンプレなどもあったな」

俺の質問に、なずな先輩がキスを中断してからそう答え、綾小路のテクニクに悶えていた鬼龍院先輩が頷く。

パズルやナンプレか……これについて頭脳も大切だがひらめきの方が重要だ。こればかりは急に身につくものじゃないし、個人個人のポテンシャルに賭けるしかないな。

「しかし比企谷のクラスはAクラスと組んでいるし、そこまで焦る必要はないだろう。学年末試験でポイントの移動は300ポイントくらいだが、負けても立て直せるレベルだ」

鬼龍院先輩にそう言われる。現在、1年のクラスポイントは……

Aクラス 1370ポイント

Bクラス 1217ポイント

Cクラス 600ポイント

Dクラス 152ポイント

となつてゐるが、仮にウチが300ポイント損失して、Cクラスが300ポイント得てもギリギリBクラスだし、立て直しは可能だろう。

「ウチのクラスは勝とうが負けようが、どうせまた直ぐに由比ヶ浜達をクラスポイントを減らすだろう……とはいえ、ウチのクラスはグループデイスカッションにおける俺達の案が実現する事を期待して、授業を真剣に受けるようになったし、総合力はこれから伸びると思う」

ああ、確かに俺と綾小路のグループは「Bクラス以下でも死ぬ気で努力した人間にはAクラスと同じ特権を与えて、Aクラスでもやる気のない人間から特権を剥奪するべき」って案を出していたし、やる気が出る者ぞ現れてもおかしくない。

「私のクラスでも長所を伸ばすべきと考えている奴が増えたな。まあウチのクラスは清隆のクラスほどではないが逆転の目がないからな」

確か今の2年Bクラスは元Aクラスだったが、現在は元BクラスのAクラスに500ポイントくらい差をつけられていたんだったな。

しかしそれでも綾小路クラスほどではない扱ひ……鬼龍院先輩でも五馬鹿の存在は桁違いの役立たずという認識のようだ。

「俺としてはクラスがどうなるうが関係ありません。最終的に卒業後、人里離れた場所

でハーレム生活を送れたら勝ちですから」

綾小路は鬼龍院先輩の耳を噛む。クラスの行く先など微塵も興味ないのがわかる。

「相変わらずだな。まあ先に卒業する私が良い場所を見繕って準備しておくから、君はハーレムメンバーを余り増やすなよ」

鬼龍院先輩は満更でも無さそうに綾小路の股間をズボン越しに撫でる。

「ハチ君は？私が先に卒業しても見捨てないよね？」

「そんな悲しそうな表情を浮かべないでください。1年離れ離れになっても絶対に見捨てません」

こんな可愛くて優しい女子を見捨てるなんて馬鹿のする事だ。

「そっか……ありがとねハチ君……んっ」

なずな先輩は優しく笑ってからキスをして、俺の肉棒をズボン越しに撫でてくるが、この人は本当に男の理性を刺激をしてるのが上手いんだよなあ……

それから俺達は適当に雑談したり、恋人の胸を揉んだり、互いのセックスのコツを語り合ったり、綾小路と横並びになって恋人のフェラチオ我慢対決をして僅差で負けたり

しながら、部活を済ませたひよりと合流してケヤキモールで飯を食いにいくことになった。

その際に五馬鹿と鉢合わせしてギャーギャー言われたが、山内からは一切何も言われなかったのが酷く不気味に思い、微妙な気分になりながら食事をするのだった。

まあ……

「ああん！八幡君っ！そこお！」

「ダメッ！イっちゃやう！変な気分になああっ！」

「しゅきっ！ハチ君のおちんぼ大好きっ！もつと激しくう！」

そんな微妙な気分も深夜に恋人3人とセックスをした時には吹き飛んでいたけどな。

## 期末試験

3月に入り、期末試験が終わってから数日が経過した。

朝のHRのチャイムと同時に坂上先生が教室にやってくる。

「おはようございます。早速ですが、期末試験の発表をします」

そう言うってから持っている紙を広げるが、最下位は石崎で全科目45点だ。狙い通りだな。

「赤点獲得者はおらず、平均点は65.1で3番目です。これなら他クラスも警戒心を緩めるでしょう」

坂上先生は薄く笑いながらそう言うてくるが、俺達の作戦を理解したのだろう。

何にせよ一之瀬のクラスの平均は72.9と8点近く差があるし、警戒心は薄れただろう。

「それと来週の月曜日から特別試験があるので気を引き締めるように。ルールは毎年違います。場合によっては200以上のクラスポイント増減する試験です」

それは鬼龍院先輩から聞いたが、やはり大きいな。問題は学校が無入島試験のように

クラスポイントを出すタイプか、ペーパーシャッフルのように対戦相手からクラスポイントを奪うタイプかだ。後者なら下手したら他クラスと400ポイント以上の差がつくかもしれないからな。

坂上先生がそう言うってから教室から出て行くので俺が壇上に立つ。

「さて、試験は終わって俺の想定の数だったから良い結果だった……が、これはあくまで布石の1つだ。特別試験が発表されるまでの1週間、死ぬ気で勉強して更に成績を伸ばせ」

「は?!テストが終わったから少しくらい休んでもいいじゃん!」

俺の命令に真鍋が立ち上がって文句を言ってくる。真鍋のグループメンバーも似た表情になる。

俺が口を開こうとしたら時任が口を開ける。

「何でクラスで実力のないお前が、クラストップクラスの比企谷に偉そうな態度を取るんだよ?身の程を弁えろよ」

「そうですね。真鍋氏の立場でこれまでクラスのために色々考えてきた比企谷氏に文句を言うのは実に烏滸がましい」

「なっ……なっ……!」

金田も追従してそう答えると真鍋は真っ赤になって口をパクパクする。

「お前ら落ち着け……まあよく考えてみれば勉強するべきなのは得意科目が一点特化してる生徒や中堅どころだしな。真鍋のグループは勉強しなくて良いぞ、お前らはクソの役にも立たないし」

「何ですって?!」

「え? 何でキレるの……おい龍園、真鍋のグループって肉壁以外で使い所はあるか?」

「あん? あるわけ……あつ、鉄砲玉には使えるな」

龍園が思いついたのように手を叩く。実際真鍋のグループの真鍋、諸藤、藪、山下は特に利用価値はない。

ひよりや金田は身体能力は低いが学力や洞察力があり、石崎や伊吹は単細胞な面があるが腕っぷしがあるので短所を互いに補える。しかも短所を克服しようと頑張っているから期待値は高い。

しかし4人は学力も運動能力も低い拳句、普段クラスで態度がデカイので肉壁が鉄砲玉以外に使い道が見つからない。

「まあそうだよな……話を戻すが、真鍋と諸藤と藪と山下は勉強したくないみたいだしなくて良い。で、他のメンバーに告げるが自分の得意科目を磨いとけ。ただし勉強する場所は絶対に自室にしる。図書室で勉強したら警戒される可能性もある。また龍園から盤外戦術に関する命令が来たらそっちに行って構わない。俺はあくまで参謀、クラ

「スの底上げ戦術担当でリーダーじゃないからな」

中には時任のように俺をリーダーに据えようとしている奴もいるが俺は今のポストで充分だからな。

他の面々は頷く。それなら何の問題はないな。

「俺の話は終わりだ。授業の準備をしてくれ」

そう言つて席に着こうとする中、真鍋のグループは睨んでくるが向上心がない奴が睨むな。

元々俺は真鍋達の向上心の無さや態度のデカさからグループディスプレイスカッションで話す内容を「向上心のない奴はAクラス所属でも特権剥奪」に決めたんだしな。

そう思いながら俺は席に着いて授業の準備をするのだった。

数時間後……

授業が終わった俺は自室に戻り、今日の復習を済ませてから1年間の復習を始める。試験内容がわからなくても言い出しつぺの俺が勉強しないのは論外だからな。実際ひ

よりや金田みたいに体力のない奴はジムに行っているからな。

とりあえず文系科目は確実に落とさないようにして、理系科目についても文系レベルにしないといけない。

暫くの間、勉強していると携帯が鳴るので見れば、「乱交パーティー」って名前のグループLINEからメッセージが来ていた。

榊田：綾小路君か比企谷君か龍園君、暇なら今からセックスしない？

長谷部：何？またあの馬鹿が騒いだの？

佐藤：私と榊田さんと姫野さんと白波さんとお茶にケヤキモールに向かってたら、清掃をしたた由比ヶ浜と雪ノ下に絡まれた。私もセックスしたい

松下：本当に迷惑ね

白波：私もおちんちんが欲しいな。

姫野：私も。誰か空いてない？

龍園：今忙しい、比企谷か綾小路に頼め

比企谷：そもそも週1の約束を破ったら怒られる

榊田：坂柳さんと軽井沢さんも一部始終を見てて、許してくれた

比企谷：どのみち今忙しいから綾小路に頼め

綾小路：オレは良いぞ

櫛田：決まりね

松下：というか男3人は少くない？

王：誰かセックスが上手な男子はいませんか

比企谷：高円寺あたりは女慣れしてないか？

綾小路：下品と忌避すると思う

龍園：Aクラスの橋本は女慣れしてそうだな

比企谷：何でも良いが、増やし過ぎはやめろよ

姫野：だよ。まあ何にせよ綾小路はよろしくね

櫛田：乱交部屋で待ってるからね

白波：楽しみにしてるから

佐藤：私的には綾小路君のおちんぼが好きだからラッキーだね

会話が一段落したので携帯をテーブルの上において勉強を再開する。それにしてもセックスがストレス解消方法の最善案って……客観的に見ればぶっ飛んでるな。

今後どうなるかわからないが、少しでも皆のストレスが改善されるも良いんだがな

……

同時刻……

「……以上です。解散してください」

職員室にて穏やかな表情を浮かべた男性が告げて、職員室から出て行く。同時に男性の目の前にいた真嶋、星之宮、坂上、茶柱も動く。

「それにしても厄介な試験を追加してくれましたよねー、ウチのクラスなんか地獄を見そうですよ」

星之宮がそう呟く。

「確かに理不尽な試験です。しかしウチのクラスの龍園は嬉々として受け入れるでしょう」

「まあ龍園や比企谷あたりは割り切るでしょう。ウチのクラスの坂柳も説明が終わり次第、切り捨てる相手を選ぶ光景が目に見えます」

星之宮の眩きに坂上と真嶋がそう返すと星之宮が頷く。

「その辺りはリーダーの性質が違いますから……まあサエちゃんのクラスは簡単に……サエちゃん？ 気持ちはわかるけど、口元が緩み過ぎだよ？」

星之宮はジト目で茶柱を見るが、今の茶柱は星之宮が初めて見るくらい口元が緩んでいた。茶柱と星之宮が仲違いする要因となった男と話してる時もこれほど喜んだ表情を浮かべてないだろう、と星之宮は見ている。

「別に緩んでない。何にせよ上が決めた以上、我々は教師として生徒に説明するだけだ。そんなことより仕事に戻るべきでしょう」

茶柱は3人に背を向けて自分の机に戻るが足取りが軽く、口笛も吹いている。

「アレは凄く喜んでるな」

「あんなに喜んでるサエちゃん、初めて見るよ」

「教師としては最低の態度ですが、彼女の立場を考えると責める気が起こりませんねえ

……」

真嶋、星之宮、坂上、この場にいる教員は茶柱の言動を同情に満ちた眼差しで暫くの間見るのだった。

(良しっ……良しっ！今日は何で素晴らしい日だ！坂柳理事長には悪いが謹慎する事になってくれてありがとうございます！私のストレスが軽減される……！)

## 追加試験

学年末試験の結果が発表された翌日、いつものように教室で朝のHRを待っていると、チャイムが鳴って坂上先生が入ってくるが何故か物凄く険しい表情を浮かべている。

おまけにピリピリしたオーラを放っていて、教室に緊張が走る。

「あの、何かあったんすか、先生」

石崎の質問に坂上先生は答えず、深呼吸をしてから口を開ける。

「君達に、伝えなければならぬことがある」

喉の奥から懸命に絞り出されるような声からは動揺を感じ取れる。

「君達1年生はこれまで脱落者を出さずにクリアしてきた。学校が出した課題により1年間脱落者が出なかつたのは本年度が初めてだ」

「そーいやそーうだな。まあ一部の馬鹿は退学になつてもおかしくないけど。」

「何か問題があるんでしようか。良い事じゃないですか？」

金田の言葉に坂上先生は険しい表情を浮かべたまま頷く。良い事なのにあんな表情をする理由がわからん。

「もちろんだ。しかし時として私の予測を超えた事態になる事もある」  
「どういふことだ？」

疑問符を浮かべている中、坂上先生は躊躇うように仕草をする……が、やがて口を開ける。

「学校側は君達1年生から退学者が出てないことを考慮して……その特例措置として今日より追加の特別試験が行われ、それをクリアした者が本来の特別試験に進める」

黒板に3月2日火曜日と追加特別試験と書かれる。

「なんすか！退学者が出なかったら追加ってふざけてるんですか?!」

石崎が騒ぐが尤もだ。いくら退学のリスクがある試験を受けたからって退学者がいない事が問題視されるなんてふざけてるとしか思えない。

「石崎君の意見は尤もだ。我々教員は今回の試験を重く受け止め止めている」

教師は不満がある……つまり理事会は不満に持つてる……しかし理事長つて有栖の親父だよな？娘がサデイストだから父親もサデイストの可能性はあるが、いくら何でも理不尽過ぎるぞ？

「坂上、その追加特別試験はどんな内容なんだ？」

全員が気になっていたのであろう内容を龍園が質問する。

「今から説明を始める。今回の試験は学力や体力など求めるものではなく、内容は至ってシンプルだ。そして退学率もクラスごとに3%未満と決して高くはない」

数値だけみれば確かに高くはないだろう。しかし今までと違って退学率が出たから油断は出来ない。どういう意味合いかで難易度は変わるからな。

「今回の追加特別試験の名称は——『クラス内投票』だ」

「クラス内投票？退学者がいらないから行う試験ですし、人気投票やってビリが退学ってところですか？」

それなら学力や体力はあまり関係なさそうだが……

「概ね正解だ」

俺の質問に坂上先生がそう答えるとクラスに騒めきが生まれる。まあ人気投票で退学者を決めるなんて前代未聞だからな。

「君達は今日からの金曜日までにクラスメイトに評価をつけてもらう。そして投票日である5日後の土曜日に、自分が最も高く評価したクラスメイト3名に『賞賛票』を投じ、逆に最も低く評価したクラスメイト3名に『批判票』を投じる。更に他クラスの生徒へ『賞賛票』を一票投じる。点数については票数で判断する。例えば比企谷君が20人から賞賛票を貰い、5人から批判票を貰えば比企谷君の点数は20マイナス5で15点と

なる」

つまり賞賛票と批判票の強さは同じというわけだ。

「つまり批判票が集まった奴が退学して訳か。投票数は3名って事は退学者は3人なのか？」

龍園が質問するがそれは流石にない……と思いたい。

「まずは報酬について話す。まず上位3人には報酬が与えられ、1位と2位の生徒にはプロテクトポイントが与えられる。これは所有数の数だけ退学を無効に出来るポイントだ」

教室には驚きが広がる。確実に一回は退学を回避出来る事になるからな。つまり龍園が自爆戦術を使っても、一回はペナルティ無しで済む事になる。

「そして3位の生徒については今後退学になりにくくなる。この学校では赤点以下は退学になるが、例えば赤点ラインが40点だとしたら、3位の生徒のみ35点になる……といった具合だ」

それも充分魅力的だな。しかし報酬がそれだけ豪華である事を考えるとペナルティは……

「ビリとブービーは退学、下から3番目の奴は退学になりやすくなるのか？」

「その通りだ。ちなみに退学者が出た際のペナルティはない。また誰が誰に投票したか

については絶対に公開しない。プライベートによる支払いでもだ」

まあ賞賛票はまだしも、批判票は火種になるからな。

「また今回の試験では必ず上位と下位から3人ずつ出さないといけない為、票の操作で全員が0票とかになった場合、何回でもやり直す」

「ただだけ退学者を出したいんだよ？」

「首位が4人以上いたら？」

「その場合は4人だけで再度投票を行って3人選出する。それと退学を回避する方法として『おつしやああああああああああつ！』っ！これはDクラスですね」

突如背後……Dクラスの方から大歓声が響き渡る。まあ当然だろう。

今回の試験の難易度はウチとAクラスは簡単で、Cクラスはメチャクチャ難しく、Dクラスからしたら簡単を通り越してボーナス試験だからな。

何せ明らかに足手纏いな嫌われ者が5人もいるからな。残りのメンバーからしたら最高の試験だろう。

「まあ気持ちはわかりますから放っておきます。話を戻しますが、退学回避する条件ですが、1人につき1000万プライベートポイントと100クラスポイントの支払いで回避できます」

それ実質回避出来ないだろ？基本的に批判票の対象は実力が低い生徒だ。そんな連

中2人のために2000万プライベートポイントと200クラスポイントを払うなんて馬鹿のすることだ。

どこまで学校は退学者を求めているんだよ？

(まあ今回俺達からしたら凄く良い試験だ)

クラスの雑魚を消せるし、Cクラスは救済措置を狙うだろうからプライベートポイントとクラスポイントが減る。そうなれば盤石の体制となる。

そう思いながら俺は坂上先生の書いたルールを確認する

追加試験・クラス内投票

試験内容

賞賛票、批判票が各自に3票ずつ与えられ、クラス内で投票して結果を求める

ルール1

賞賛票と批判票は互いに干渉しあい、結果は賞賛票から批判票を引いた数

ルール2

賞賛、批判問わず、自分自身に投票することは不可

ルール3

同一人物を複数回記入すること、無記入、棄権などの行為は一切不可

ルール4

上位3人と下位3人が決まるまで繰り返し行われる

ルール5

1位と2位にはプロテクトポイント、3位には退学回避条件の緩和が報酬として与えられ、38位には退学回避条件の厳格化、39位と40位には退学のペナルティが与えられる。

ルール6

他クラスの生徒に投じる為の専用の賞賛票も各自1票所有する。

ルール7

退学を取り消す場合は1人あたり1000万プライベートポイントと1000クラスポイント

本当に抜け道が存在しないな。

「以上で説明を終了します。後は君達で考えてください」

「待て坂上」

坂上先生は教室から出ようとするが龍園が止める。

「何か質問でも」

「質問じゃねえが、今から退学者の選定をするから立会人になれ」

龍園の言葉に騒めきが生まれる。

「え?!いきなりすぎませんか?!」

「いや、逆にいきなりが良いんだよ。時間がかかったら各自でグループを結成して票の操作が行われるだろうし、グループが一切出来てない今仕掛けてクラスの方針を決めるのは悪くない」

「比企谷の言う通りだ。本来なら俺が決めても良いが独断で決めたら最善であるか確証を持ってないから、少し手を加える……良いか、テメエら」

龍園は俺達の名前を呼び……

「今から紙に自分にとって退学になるべき生徒の名前を3人書いて坂上に渡せ。坂上は休み時間などに集計して放課後に発表しろ。その結果を参考に退学者を決める」

そのまま電撃作戦を告げるのだった。

## 噴火

「今から紙に自分にとつて退学になるべき生徒の名前を3人書いて坂上に渡せ。坂上は休み時間などに集計して放課後に発表しろ」

龍園が出した指示に俺は即座にノートの一部を切り取り、そこに真鍋と諸藤と山下の名前を書く。

「ちよつ！幾ら何でも早くない!?そんな直ぐに決められないでしょ」

「直感で決めろ。嫌っている奴でも無能な奴でも良い。退学になるべきって思う生徒を選べ。時としてその直感が役立つ」

西野が焦りながら反論するが龍園は一蹴する。無駄に時間を与えたら周りに流されて本心と違う考えを実行するかもしれないな。

そう思いながら俺は書き終えて、坂上先生に渡す。

「お願いします」

「確かに受理した。次の授業の移動もあるから後3分以内に済ませてくれ」

「急げ。間に合わなかった生徒は無効票にするが、今後そいつらは自分の直感に従えない無能と判断して、無能に相応しい扱いにする」

龍園の言葉に大半の生徒が慌ててノートを破り始める。そんな中、ひよりと金田と時任と伊吹は坂上先生に提出するが、コイツらは俺と同じように龍園の言葉に即座に動いていたのだろう。

出した人がいると他の面々も次々に出していき、最終的には全員提出して、坂上先生は出て行く。

大半は多少緊張しているが、真鍋のグループは昨日散々否定されたからか真っ青になっっているが、今更遅いって話だ。

「じゃあ次だ。ひよりは白波を介して一之瀬にポイントの貸し出しを提案しろ。救済措置を使わせてCクラスの財源を削る。ただし比企谷から借りるって流れにしる。で、比企谷はポイントの交渉を持ちかけられたら一之瀬が聞きたくない正論をCクラスの面々の前で言つてCクラスの士気を削れ」

それも正しい戦術だ。一之瀬の性格的に救済措置を使うだろうから、プライベートポイントとクラスポイントを削るためにポイントを貸すのは正しい。

更に俺がCクラス全体に救済措置に不満を持たせれば、一之瀬の精神にもダメージを与えられるからな。

「わかりました。では「Cクラスは救済措置を使うと思いますが、宜しければポイントを大量に持っている八幡君を紹介しましょうか？」と送っておきます」

「で、一之瀬が交渉を持ちかけたら、Cクラスの中堅以上に対して救済措置に対する不満を持たせれば良いんだな、任せろ」

クラス間の交渉には俺が出た方がいい。龍園が出たら相手は警戒心剥き出しになるだろうしな。

そう返しながら俺は授業の準備をするのだった。

それにしてもDクラスはラッキーだろうなあ……

そんな風に考えていると、ガラツとドアが開き……

「邪魔するし！試験当日にあたしとゆきのんに賞賛票を入れて貰うから！」

由比ヶ浜が教室に入ってそう言ってくる。

「ちっ……」

そして舌打ちをするひよりがメチャクチャ怖いです。

## Dクラス

「そしてペナルティについてはギリと39位が退学、38位の生徒は今後退学になりやすくなる。普通の赤点ラインが40点ならその生徒だけは45点未満が赤点となる感じだ」

茶柱がクラス投票試験のペナルティについて説明すると、Dクラスの生徒は一瞬だけ無言になるが……

『おっしやああああああああああああつ！』

大歓声があがる。大半の生徒が喜びを露わにする。綾小路ですらガッツポーズをして、高円寺も心の底から嬉しそうに顔を綻ばせる。

「やめてくれ！退学者が出るなんて許されない！」

平田が大声を上げる。彼からしたら一人も欠けるなんて許されない。

しかしそんな言葉はクラスメイトには無価値だ！

「うつせえよ！テメエの許しなんかいらねえよ！」

「そうよ！絶対由比ヶ浜と雪ノ下の2人を消してやるわ！」

「待て！そこは由比ヶ浜と須藤にするべきだ！」

「はあ？由比ヶ浜と山内にするべきよ！」

「いや！由比ヶ浜と池よ！」

「落ち着いて！とりあえず全員五馬鹿以外に批判票を入れないのを最優先に！」

『了解！』

誰を退学させるか揉めていたが、松下の「五馬鹿以外には批判票を入れるな」って命令が出たら、全員が一斉に了解の返事をする。Dクラスの大半からしたら五馬鹿以外から退学者を出すのは愚の骨頂でしかない。

「ふざけんなし！何であたしとゆきのんが対象なんだし！盗撮魔3人で良いでしょ！」

由比ヶ浜が怒りを露わにしながら怒鳴る。普段のDクラスなら面倒だからスルーするが……今回は由比ヶ浜を退学させれるチャンスもあつて、怒りが爆発する。

「うるせえよ！この屑野郎が！」

「クラスポイントを下げまくった奴が偉そうに言ってるじゃねえよ！」

「お前と雪ノ下だけは絶対に退学にさせてやる！」

「全員俺の話を聞け！批判票についてだが、1票は絶対に由比ヶ浜に入れろ！残り2人

は誰でも良い！何なら賞賛票を由比ヶ浜以外の五馬鹿に多少入れても良いから、確実に由比ヶ浜を落とせ！」

『了解！』

幸村がそう叫ぶとクラスメイトは一斉にする。普段勉強に集中して他人と交流しない幸村だが、近くの席の由比ヶ浜の幼稚っぷりに精神が疲弊してストレスが溜まっていた。よって由比ヶ浜を消せるチャンスが生まれたとなれば形振り構ってはいられなかった。

クラスメイトも確実に由比ヶ浜を落とすべく力強く幸村も命令に頷く。個人によって退学させたいランキングは多少違うが、1位が由比ヶ浜である事は皆の共通であった。

「な、何だし！何であたしが……！」

由比ヶ浜は心底理解出来ないといった表情でブツブツ呟く。自分は退学するべき生徒ではないと本気で思っている由比ヶ浜からしたら幸村達の言葉はありえなかった。

「ふざけないで！由比ヶ浜さんに手出しは「黙れよ屑！」「偉そうに物語る無能が！」「テメエも退学しろ！」「無能が2人消えるなんて最高の試験ね！」だ、黙りなさい……」

由比ヶ浜を庇おうとする雪ノ下もクラスメイトの怨嗟の声に押されてしまう。

「そこまでにしろ。話を続けさせて貰うが、救済措置については1人について1000

万プライベートポイントと100クラスポイントだ。つまり2人助けたい場合は200万プライベートポイントと200クラスポイントだ。お前達はクラスポイントが足りないが、クラスポイントはマイナスにして救済は可能だ」

茶柱は話を続けるがクラスの大半からしたら救済措置を使うつもりはなかった。

「皆、どうにかしてポイントを集め「ふぎけんじやねえよ平田!」「何で私達は助けないといけないのよ!」「俺達からしたらこの試験は大歓迎なんだよ!」「俺は絶対にポイントを払わないからな!」「俺も出さないぜ!」「私も!」……っ!」

平田が救済について提案をするが当然のように一蹴される。退学候補筆頭の五馬鹿を助けたくないし、そもそも金が圧倒的に足りない。

綾小路と高円寺、松下、みーちゃん、軽井沢や櫛田がグループディスカッションでクラスポイントやプライベートポイントを稼ぎ、クラスの大半がバイトをしても長い間クラスポイントが0だったので全然足りない。

「これ以外の方法で救済方法はないと断言しておく。後はお前達で決める事だ」

茶柱は説明を終えたので、若干足を弾ませながら教室から出て行く。一部の生徒は気づいたが、茶柱の境遇に同情して敢えて何も言わなかった。

クラスメイトの大半が由比ヶ浜と雪ノ下に怒りの眼差しを向ける。そんな中、由比ヶ浜は怒りに震えながら教室から出ていき……

「邪魔するし！試験当日にあたしとゆきのんに賞賛票を入れて貰うから！」  
隣のBクラスに賞賛票を入れるように頼むのだった。

## 謀略

「邪魔するし！試験当日にあたしとゆきのんに賞賛票を入れて貰うから！」

由比ヶ浜の登場にウチのクラスの空気が死んでいく。龍園も心底嫌そうな表情を浮かべ、ひよりに至つては不快のオーラを醸し出している。こんなひより、見たくなつた……

「……はあ、で？賞賛票を入れる事に対する見返りは？」

龍園が嫌そうにそう返す。そんな龍園に対して由比ヶ浜は理解不能といった表情に変わる。

「見返り？同じ学校の生徒が困つてゐるなら助けるのは当たり前じゃん！見返りを要求するなんて間違つてゐるから！」

コイツ、本気で言つてやがる。図々しいにも程があるな。

「……悪いが、こつちも救済措置について一人分考えてゐるから無理だ。他クラスより自分のクラスを優先する」

これは由比ヶ浜に対する嘘だろう。龍園が無能を救済するはずがないからな。

「そんなのほっとけば良いじゃん。逆恨みされてるあたしと違って、どうせ無能なんだし」

コイツ、自分を棚上げしてやがる……どう返せば良いんだ？

「……わかつたわかつた。じゃあ今日から授業中に喋ったり、携帯を弄ってDのクラスポイントを減らす行動を取れ。そしたらお前に賞賛票を入れるようにクラスに話しく」

龍園が投げやりな表情を浮かべながらそう口にする。龍園の言葉にひよりはショックを受ける。余程由比ヶ浜が消えて欲しいようだ。

「本当！わかつた！絶対だよ！」

由比ヶ浜が満足そうに頷き教室から出て行く。皆が安心した表情を浮かべる。

「で？実際はどうすんだ？騒がせるだけ騒がせて口約束を利用して、身に覚えがないって賞賛票を入れないのか？」

「話すだけ話して私達が断ればそれで良いですから」

俺とひよりが質問する。契約書がないなら問題ないだろう。

「くくっ……まあ投票日に話してやるよ。とりあえず今は1時間目の授業の準備をしろ」

龍園はそれはそれは良い笑顔を浮かべながらそう言ってくるが、絶対碌でもないことだろうな。

p i p i p i

「あ、千尋さんから返信が来ました。一之瀬さんが話をしたいらしいです」

「釣れたな。後は比企谷に任せる」

「了解。じゃあひより。昼休みに話をしたいからそれまでにクラスの総資産を把握しろとメールしといてくれ」

「わかりました」

ひよりがメールを打ち、打ち終わるとチャイムが鳴るので授業を受けるの準備をするのだった。

数時間後……

キーンコーンカーンコーン

4時間目のチャイムが鳴るので俺とひよりは教材を片付けて教室を出ると、有栖と神

室が廊下を歩いてくる。

「いましたか。申し訳ありませんがDクラスの方に用事があるので昼食は遅れます」

「いや、俺達もCクラスに用があるし、また後でな」

「なるほど……一之瀬さんに宜しく願います」

そう言っているが目には鬼畜の色がある。どうやらやろうとしている事は把握しているようだ。

「ああ」

俺達は一礼してからCクラスに入る。

「失礼します」

「来てくれてありがとうね。それにしてもようやく馬鹿女が消えるかもね!」

白波が真っ先に駆け寄り良い笑顔を浮かべている。どんだけ由比ヶ浜が憎いのかわかる。

「まだわかりませんよ。朝、アレがクラスに乗り込んで賞賛票を要求しましたが、龍園が何かを企んでましたから」

「えー!あのゴミ女、生きてる価値はないんだし消せば良いじゃん。というかアレを殺しても罪に問われなきゃ良いのに」

可愛い顔で物凄い毒を吐く白波。男子はドン引き、一之瀬は白波の豹変に悲しそうに

見ている。

「そこまでにしろ。一之瀬は俺に話をしたいんだろ？」

「あ、うん。わざわざ交渉の席に来てくれてありがとうね」

「気にすんな。こっちは順調に試験も進んでるしな」

「Bクラスはやはり龍園が不要の生徒を指名したのか？」

神崎が質問してくるので首を横に振る。

「いや、龍園は試験の説明が終わって直ぐに予行練習を行う事を提案して、各々が消えるべき生徒3人の名前を紙に書いて坂上先生に渡した。放課後に結果発表だな」

「……なるほどな。直ぐに予行練習を行えば裏でグループを作れなくなるし、良い作戦だな。票が多い生徒には地獄だな」

「それは自業自得だ。俺や龍園が消す相手を話し合う……話が逸れたな。俺と交渉するって事は2人分救済措置を考えてるんだな？」

俺は一之瀬を見ると一之瀬は頷く。

「うん。クラスメイトを切り捨てられないよ」

「由比ヶ浜みたいな屑がいれば簡単に切り捨てられるのにな」

「それは……ううん、やっぱりクラスメイトを切り捨てるのはダメだよ」

一之瀬は口籠るが、一之瀬ですら一瞬とはいえ、救済を躊躇うってヤバすぎだろ。

「……まあ良い。2人分救済するとして、幾ら足りないんだ？10000単位で言ってくれ」

「えつと……464万ポイントだね」

「なるほどな……結論から言えばポイントは貸してやつても構わない」

俺個人の資産でも払えるし、クラスで集めた貯金があるしな。Cクラスに464万の借金を背負わせて200クラスポイントの損失を与えられるし、クラスメイトも反対しないだろう。

しかし俺の仕事は一之瀬の精神を攻撃する事だから普通には貸さない。

「本当っ?」

「ああ……ただよく考えなくて良いのか?損害はデカイぞ」

マジで。

「うん。プライベートポイントやクラスポイントは取り戻せるけど、クラスメイトだけは取り戻せないから」

「違う。ポイントについては大した問題じゃない。お前はこの試験の本質を知ってるのか?」

「本質?クラスメイトから退学者を出す試験じゃないの?」

「それは正確じゃない。この試験の本質は「実力者と人気者がプロテクトポイントを賭

けて争う事」と「雑魚と嫌われ者が退学回避を賭けて争う事」にある」

退学者を出すのは勿論の中で、その中でクラス内における格付けを行うことをする必要がある。今後似たような試験が起こってもスムーズにこなせるように。

そして……

「そして中堅クラスについてはプロテクトポイントも退学も関係ない、ある意味いつも通りだ。そんな連中が全員「クラスメイトの為だ。俺の全財産を投げ打って、借金も覚悟してやる！」って思っていると一之瀬は考えているのか？」

「それは……」

一之瀬は苦しそうな表情を浮かべる。クラスメイトを守る事を最優先に考えて、退学のリスクがない生徒の不満を社会に例えたら「株式会社Cクラスは経営不振に陥り、社員を

「それにだ。今回の救済を社会に例えたら「株式会社Cクラスは経営不振に陥り、社員を1人リストラしないといけない。それに対して一之瀬社長は社員の全財産+銀行からの借金によつてリストラを出さずに済んだ」って事だぞ。お前らは将来そんな会社に入りたいのか？一般社員でもリストラ候補でも地獄を見るぞ」

前者なら財産を投げだしたから、後者なら救済されても他の社員から恨まれるだろうから。

「確かに……」

「俺、コツコツポイント貯めたポイントがあるけど、今の聞いたら手放したくなくなってきたな」

「私も……」

クラスからポツリポツリと俺に賛成の声が聞こえてくるが、狙い通りだ。俺はCクラスの生徒に対して真剣な態度で話しているから、悪意剥き出しで挑発する龍園の言葉より説得力がある。

「というかCクラスを叩くなら龍園より俺が担当した方がいい気がする。龍園のやり方だと団結力が増しかねないし。」

「待って……ポイントの為にクラスポイントを切り捨てるなんて間違いだからな！」

「ここで柴田が咎める口調でそう口にするが……」

「それはお前の価値観だ。自分の価値観を大切にするのは自由だが、だからといって他人の価値観を悪と断じて変更を強いる権利はない」

「い、いや、そうだけ……」

救済したい気持ちを持つと、見捨てたい気持ちを持つとそれが自由だ。しかし団結を重視クラスで価値観の強要をしたら裏でギスギスするのがオチだ。

「まあこのクラスが救済措置を使うのはアリだと思うけどな」

「え？ 散々否定要素を挙げてなかった？」

白波を筆頭に大半が疑問符を浮かべている。

「俺はお前らが救済措置を使うのを否定してない。よく考えてから救済措置を使えって話だ。退学者を出すのが嫌だから問答無用で救済措置を使って進歩があるのか？」

「ないな……つまりギリギリまで粘って事か？」

「そうだ。不足額の確認、貸し手の搜索、返済プランの設計、返済失敗のペナルティの考慮、中堅以上の不満の対応、救済措置を使えなかった場合における退学者の選定、次回以降に似たような試験があった際の線引きの設定……など救済措置を使う際に必要な事は山ほどあるが、クラスのリーダーが思考を放棄して後先考えないで救済を強行するのは間違いだと思うが」

「うう……」

一之瀬は辛そうに俯く。俺が言った事はリーダーとしてやらなければいけない事だが、中堅以上の不満の対応や退学者の選定は一之瀬からしたら避けたら道だろう。

「……以上だ。お前らが救済措置を使うのは自由だし、ポイントは貸してやっても良いが、もうちよつと考えてから交渉した方が良いぞ……行くぞひより」

これ以上ここにいる意味はない。というかここで一之瀬が救済を強行したらクラスは崩壊の道へ一直線だ。

「わかりました。では千尋さん、また連絡してください」

ひよりも一礼してから俺に続く。

仕込みは順調だ。その気になればCクラスから救済措置を使う気を消し飛ばす必殺の一言を使ったが、今回は一之瀬の精神にダメージを与えながら救済措置を使わせる事を目的としているので使っていない。

中途半端な攻めで終わらせたし、一之瀬は多少の反対は押し切って救済措置を使おうとする。

……いや、使って貰わないと困る。

何せ俺としてはCクラスが救済措置を使った後、龍園に必殺の言葉をCクラスに言うて貰って、Cクラスの不満を高めさせたいのだから。

そう思いながら俺達はCクラスを出てDクラスの方に向かう。

有栖は何をやっているのやら……

## 賞賛票

「失礼します」

「何しに来たんだし！チビは今直ぐ帰れし！」

有栖が神室を連れてDクラスに入ると由比ヶ浜が怒鳴りながら指差しをしてくる。有栖の額には青筋が生まれる。

予想はしていたが、实际由比ヶ浜にそんな態度を取られていると苛立ちを宿してしま  
う。

しかしそれを無視して有栖は口を開ける。

「単刀直入に言いますが、貴方達の持つ他クラスへの賞賛票、1票につき5万ポイントで  
売っていただけませんか」

有栖の言葉に騒めきが生じる。

「イレギュラーな事態を回避する為だね？」

榎田が有栖の前に出て尋ねる。

「はい。しかし悪い話ではないでしょう。貴方達Dクラスは連帯責任が深く関係するクラスポイントを碌に稼げないのですから」

有栖の言葉にDクラスの面々は強く頷く。実際、有栖から見ても五馬鹿の愚行はぶっ飛んでいて、五馬鹿がいなかったらCクラスに上がったかはわからないがバイトをしなくてもある程度安定した収入はある……と考えている。

そして有栖からしたらイレギュラー要素の塊である他クラスへの賞賛票は掌握しておきたい。Bクラスとは同盟を結んでいるし、Cクラスの持つ他クラスへの賞賛票は救済措置に対する資金援助で確保出来るだろうから、残りはDクラスだけだ。

「うーん。売買の際はちゃんど先生の立会いの下で契約書の作成をするけど良いよね」

「もちろんです。私達の方から提案する予定でしたが、そちらから提示したのは感謝します」

「待ちなさい。場合によっては他クラスのエースにプロテクトポイントを持たせるのを妨げられるのに売買なんか認めないわ」

ここで堀北が口を挟むが、有栖は冷笑を浮かべる、

「なぜ堀北さんが口を挟むのですか？私は今AクラスのリーダーとしてDクラスのまとめ役の榎田さんと話しています。下つ端が口を挟まないでくれますか？」

「うん。堀北さんって偉そうにものを言うけど、クラスに迷惑をかけてばかりだから

黙ってて。この前だつてグループを組めないでクラスに迷惑をかけたじゃん」

有栖が続いて榎田も堀北に黙るように口にする。それに伴い堀北は悔しそうに睨む。そんな中、綾小路が口を開く。

「そもそも他クラスのエースのプロテクトポイントの獲得阻止なんてAクラスとBクラスには通用しないしな。クラスのリーダーになりたがってるようだが、そんな事もわからないのか？」

「え? どういうこと清隆君?」

綾小路の近くいる乱交パーティーのメンバーの1人の佐藤が興味深そうに聞いてくる。

「他クラスへの賞賛票が無かった場合、Bクラスでプロテクトポイントを得るのは龍園と比企谷で、多分得票は35票くらいだろう」

「そうかもね」

「で、ウチのクラスが全ての賞賛票40票を2人以外に入れたら、片方のプロテクトポイント獲得を阻止できる……訳はない。同盟相手の坂柳のクラスが龍園と比企谷に入れたら?」

「あつ、そつか。同盟を組んでるから他クラスへの賞賛票80票の扱いを自在に出来るのか」

「だったらCクラスと組めば……」

「無理に決まつてるだろ。一之瀬は十中八九救済措置を考えてるだろうが、現状ポイントは足りないだろう。そこで龍園達がポイント貸付の条件に「Cクラスの所有する他クラスへの賞賛票の扱いの一任」を含めるのは明白だ。実際今のCクラスには龍園か比企谷が交渉を持ちかけているんだろ？」

「……っ」

堀北は反論しようとするが綾小路に一蹴され、視野の広さの差を見せつけられて悔しそうに歯軋りする。

「ええ。八幡君とひよりさんはCクラスに救済措置の交渉をしているでしょう……話を戻しますが他クラスへの賞賛票については売買したい方は投票日前日までに私、真澄さん、橋本君、鬼頭君の誰かの所に来てください。お邪魔しました」

「待ってくれ坂柳さん！お願いだ！救済措置の為の2000万ポイントを貸して欲しい！」

教室から出て行こうとする有栖に対して平田が呼びかける。クラスメイトがポイントを出す事を拒否した以上、他クラスから2000万借りる以外、救済措置を使える方法はない。

しかしそんな大金を借りたいのは平田だけで、Dクラスの生徒の怒りが爆発しようと

した時だった。

「良いですよ、2000万ポイントですね」

有栖が頷き、予想外の展開に教室にいる皆がポカンとした表情に変わる。綾小路や高円寺も「コイツ正気か？」って眼差しを向けている。

「本当かい!?!」

「ええ。ただし返済期日までに返済出来なかった場合、平田君には退学して貰い、不足金については平田君のご両親が支払う契約を交わして貰います」

「っ!」

貸しても良いと言われて喜びを見せた平田だったが、条件を聞かされて笑みを消してしまう。

「何ですかその反応は? 未成年が莫大な借金をして返済出来ないとすれば、保護者が立て替えるのは当然でしょう?」

「それは……」

紛れもない正論である。平田からしたら退学者は出したくないが、その場合、大量の借金を背負う事になり、返せなかったら両親にも迷惑をかけてしまうので口籠ってしまう。

「それでも良いなら構いませんよ。契約を結ぶなら投票日前日までにお願います……」

では」

有栖は一礼してからDクラスから出ていこうとすると、平田は皆に向き合つて頭を下げる。

「お願いだ！クラスから退学者を出したくないし、皆でポイントを集めるのに協力「ふぎけんな！」「見返りがないだろうが！」「いい加減にしてよ！皆が迷惑してるんだよ！」「私達からしたら最高の試験なんだから！」良い加減にしてくれ！」

ドゴツ！

皆から猛反対された平田は叫びながら机を殴る。予想外の光景に皆が絶句する中、平田は虚な眼差しでクラスメイトを見る。

「退学者は出さない……出してはいけないんだ。その為にも皆でポイントを出して、皆で返済しないといけないんだ……！」

ブツブツと呟く平田に皆が絶句する。そんな中で綾小路は欠伸をしてから平田を見据え……

「断る。お前の欲求にオレ達を巻き込むな。俺達にポイントを出す義務はない」

一蹴する。そんな綾小路に平田は睨みつける。

「黙れよ綾小路……！」

「随分な言い草だな。今ウチのクラスのクラスポイントがプラスになった貢献者に対し

て」

実際今のDクラスのクラスポイントがプラスになってるのは先月のグループデイスカッションにて綾小路と高円寺と松下と王と軽井沢と櫛田が活躍したおかげである。(堀北も上位グループだが、グループを組めなかったペナルティにより足を引っ張っている為除外)

一方平田は五馬鹿を庇い続ける為に五馬鹿を除いたら堀北と並んでDクラスストップクラスの嫌われ者だ。

身分差は桁違いである。

「煩い……お前もポイントを大量に持つてはるはずだから出せ……」

「断る。オレは美少女以外の頼みはあまり聞きたくない……ああ、美少女といえば思いだした。神室……今夜空いてないか？」

欲望ど直球の質問に神室は赤くなって怒る。

「はあ?!馬鹿じゃないの!」

「ダメですよ綾小路君。彼女は私のおもちや……コホンツ、お友達ですから」

「そこまで来たら言い直さなくて良いからね!」

「アンタは直ぐに女に抱こうとするな!」

軽井沢が怒鳴りながら綾小路の頭をハリセンで叩き、櫛田と佐藤と松下と王と長谷部

は呆れ顔を向けている。呆れ顔5人は綾小路の欲望に対する正直さを知っているからだ。

「痛いぞ恵……まあ話を戻すが、ポイントを払う気はない。諦めろ」

「良いから出せつて言っているんだ……!」

ドゴッ!

平田が綾小路の顔面を殴りつける。それに対して綾小路は表情を変えない。

「その程度か。オレを暴力で屈服させたいなら高円寺レベルの強さになる事だ」

現状、この学校において綾小路が暴力で勝てるかわからないと思っているのは高円寺のみだ。それ以外なら堀北兄や南雲、龍園だろうと沈められる自信がある。

「煩い……出せよ!」

平田が再度綾小路の顔面を殴るが、綾小路は平然としながら平田の鳩尾に拳を入れる。

ドゴツツツツツツツ

「~~~~~つ!」

手加減しているとはいえ、須藤の殴打を上回る威力の一撃に平田は悶絶しながら膝をついてしまう。

「さて、昼食の時間だし行くこうか」

「あ、うん」

綾小路は軽井沢の手を掴んで教室の外に行こうとして……

「あ、連絡先を交換しないか？暇な時にデートしよう」

「彼女の前でナンパすんなああああああっ！」

神室に連絡先の交換を要求して、軽井沢のハリセンが再度火を噴いた。

## 改善

「……という事もあり、Dクラスの持つ他クラスへの賞賛票も30票以上は確実です。Cクラスについてはどうでしたか？」

昼休み、校舎裏にてひより&有栖&なすな先輩と飯を食べながら有栖の話聞く。

「ポイントも貸しても良いが、本当にそれで良いのかって真摯にCクラスにアドバイスしたら、中堅から不満が見えたとし上々だな」

「なんかギスギスした空気が生まれてるっぽいね。まあ雅や溝脇、殿川あたりは試験の概要を聞いたらメチャクチャ喜んでたよ」

「そりゃそうだ。生徒会役員からしたら苦情の種が2人も消える試験だしな。多分2年Bクラスの桐山先輩も喜んでるだろうな。」

「それにしても1年間退学者が出ないと理不尽な試験が追加されるんだね」

「そうとは限りません。実は今回の試験は父が追加したわけではないのですよ」

有栖がサンドイッチを食べながら口を開ける。

「そうなのか？」

「はい。実は少し前に父は停職処分になりました、今回の試験は理事長代理が追加したようです」

停職処分ねえ……有栖の父親だからヤバい人なのかもしれない。

「なるほど……しかし理事長代理が直ぐに理不尽な試験を出せるとは、政府の中枢に位置する人間なんでしょうか？」

だろうな。代理で来たばかりの人間で理不尽な試験を強行できる事を考えれば、この学校の理事長より権力を持っていてもおかしくない。

「そうでしよう。しかし代理になつてからこんな試験を直ぐに行う……誰かを消したいのかもかもしれませんね」

有栖が意味深な笑みを眩くが、こんな事件で簡単に消せるとしたらDクラスの5馬鹿くらいだが、あんな奴らを消したいのか？

もしかして雪ノ下関係か？アイツの実家は建築会社の社長と県議会議員を両立して、権力はかなりあるし。

……まあ考えた所で仕方ないか。俺には関係ないだろうからな。

そう思いながら俺は昼食を食べ終えて、デザートに3人からのデーパーキスを堪能するのだった。

2時間後……

キーンコーンコーンコーン

6時間目終了のチャイムが鳴り、物理教師が出ていくと坂上先生が入ってくる。

「ではHRを始める……が、今日は連絡事項はないので朝の投票の結果を発表する。票が多ければ退学に近い生徒になる」

坂上先生の言葉に真鍋グループが震え出すが、自業自得だ。

「5位から発表するぞ。5位は伊吹の6票、4位が藪の19票、3位が山下の20票、2位が諸藤の28票、1位が真鍋の30票だ」

「そ、そんな……」

「嫌あああああつー！」

坂上先生の発表に諸藤がよろめき真鍋が悲鳴をあげる。

「決まりだな。本番は全員真鍋と諸藤に批判票を絶対に入れろ。残りの1票は山下か藪のどちらかにしろ」

龍園が淡々と口にする。こういうのは淡々と進めるのが1番だからな。

「ふ、ふぎけないで！…こんなの認めないわ！」

近くにいる真鍋が立ち上がって文句を言うが……

「お前の認可が必要な訳ないだろ？全票数は1人3票で40人だから合計で120票だ。で、お前のグループ4人分を除いたら108票だが、そのうちの97票がお前らのグループに入っている。客観的に見てクラスの大半がお前らの存在を不要だと思っ  
ているんだぞ」

「4位の藪と5位の伊吹は13票も差がある。しかも5位の伊吹が6票だが、テメエらのグループは伊吹を嫌ってるし4票はテメエらのものだろ？それを考えると実質17票差になるが、それでもまだ自分達はこのクラスに必要と言えるのか？」

俺と龍園が殆ど同時に明確な数字を出す。実際真鍋のグループは普段から好かれてないしな。

「っ！…だったら他のクラスに賞賛票を「無駄だ。既にDクラスは有栖が1票50000ポイントで買収しようとしているし、Cクラスについては救済措置に必要なポイントを貸し付ける条件として他クラスへの賞賛票も含める」な、何よ！…そんな上から目線で！」

「お前が下だからだ。少なくともお前よりはクラスに貢献した自負がある」

客観的に見て俺はクラスにとってプラスになって、真鍋よりは価値があるだろう。

「馬鹿共の喚きは放つとけ。で、賞賛票については2票を俺と比企谷に、残りの1票は金

田やひよりのようにデカイ短所と長所を持つ奴に入れるが、そこはまた後日決める」

まあそれが良いだろう。3位は退学になり難くなる権利だが、これについては龍園が言ったように優秀だけど欠点がある生徒に与えるべきだ。

実際ひよりのや金田は学力は高いが運動能力が低く、運動を重視した試験では下位に落ちる可能性が高いからな。

龍園が淡々と方針を告げると真鍋と諸藤は泣き崩れるが知った事じゃない。5月1日の時点で変わろうとしなかったり、クラスの為に動こうとしなかったのが悪いからな。

さて、他のクラスはどうなっているのだろうか？

「今回の試験だが、比企谷の言ったようにクラス内で救済措置を使う事に不満を持つ生徒はいるだろう……が、俺としては今回は救済措置を使うべきだ」

Cクラス、HRを終える今回の試験の向き合い方について話す事になり、最初に神崎

が教壇に立ってそう告げる。

「理由としてはこれまで退学者を出さない方針で動いていたウチのクラスが、急に龍園のように雑魚の切り捨てに走ったら今後のクラスの運営に支障をきたす可能性があるからだ」

これが最悪の点だ。今回の試験は「ハイリスクな救済措置を使う」か「雑魚の切り捨てをする」の2点しか結果がない。よって先を見据えたらCクラスは前者を選ぶ必要がある。

神崎の言葉に安堵する一之瀬だが……

「ただし問答無用で救済措置を使うのは今回までで、来年度からはリスクとりターンを考慮して使うかを決め、今回のような試験がまた行われたら実力のない生徒を切り捨てるべきだ」

続く言葉に凍りついてしまう。

「いやいや！こんな試験が2度もないだろ！なあ皆？」

柴田が慌ててそう言うところクラスメイトの半数近くが頷く。その意識の低さに神崎は呆れを抱き、八幡に助言されなければ問答無用の救済をしていた可能性に恐怖した。

「忘れたか？今回の試験は1年間退学者が出なかつたら作られた試験だ。つまり2年生になつてから全クラスが退学者を出さなかつたら再度行われる可能性も充分ある」

「そうだよね。しかも2回目だからペナルティも厳しくなるよね」

神崎の言葉に白波が頷く。

「俺もそう思う。今回は1人あたりの救済に1000万プライベートポイントと1000クラスポイントだが、来年度に同じ試験が行われたら倍額になってもおかしくない」

そうなるかと1人あたりの救済に2000万プライベートポイントと2000クラスポイントと莫大なポイントがかかる。しかも2回目だから退学者を3人出すようになるかもしれない。

「そしてそのような時が来たら心を鬼にしてクラスの中で実力の低いものを切り捨てるべきだ」

「いやいや、退学者を出してまで目指すAクラスに価値はないだろ。絶対に仲間を守り、仲間を信じ抜いたクラスが勝つだろ」

柴田がそう返すが神崎の表情は険しい。

「今の状況を理解してないのか？現在1つ上のBクラスは俺達Cクラスより600ポイント近く上回っている。Bクラスは救済措置を使わないだろうし、ここで救済措置を使えば800ポイント近くの差になり、他クラスに500万近くの借金を背負う。それまでなら俺も考えているが、救済措置を使う場合、その差を埋めるべく今のやり方を少しずつ変えていくべきだ」

「それは……」

明確な数字を突きつけられ、柴田を始めとした一之瀬の考えに染まっている人間は苦い顔をする。

「更に言えばAクラスはBクラスより150ポイント近く上回っているし、Bクラスと同盟を結んでいる。Dクラスについても足手纏いが5人もいるからクラスポイントが低いだけで、綾小路や高円寺がプライベートポイントのついでにクラスポイントを稼ぎ、俺達の稼ぎ所を奪ってくるだろう」

高い総合力を持つAクラス

清一択のCクラスと違って清濁併せ持つBクラス

足手纏いがいるから下位に属するが全てにおいて桁違いの怪物2人を擁するDクラス

Cクラスからしたら全員脅威である。特にBクラスのNo.2の八幡に自クラスのリーダーの一之瀬が論戦で一方的だった事を考えるとBクラスとはかなり差があるのがわかる。

「以上だ。俺としての考えは今回は救済措置を使って、そのペナルティのポイントを次からの意識改善の勉強代にするべきだ。一之瀬、反対意見があるなら言ってくれ」

神崎の言葉にクラスの空気は重くなる。一之瀬としては退学者を絶対に出さない方

針を変えないようにしたいが、神崎の言っている事は理論的に正しく、自分の意見がリーダーとしては言つてはいけない感情論になってしまう。

今回は救済措置を使うべきと言つて、救済措置の使用に反対する生徒の防壁となつてくれた神崎に感情論をぶついたりしたら、それこそ反対派の生徒の怒りが爆発するのは明白だ。

一之瀬は悩んだ末に……

「……うん、神崎君の意見で良いと思う」

重い口調でそう口にした。

それによりCクラス内の方針は固まったが、一之瀬の心は晴れなかった。

(今後は退学者を出さないようにしないと……でも来年度にまたこの試験があつたら

……)

一之瀬は何とか退学者を出さない方法の模索を始めるが、その時Aクラスに上がることにについては頭から抜け落ちていた。

## 語り合い

「って訳で、ウチのクラスは真鍋と諸藤が対象となったな……やっぱり佐藤の絡み方はエロいな」

『あんあんっ！気持ち良いよっ！清隆君のおちんちんっ、熱くて素敵だよっ！んあっ！』  
「それは良かった、あの2人は俺の恵に手を出したから遅かれ早かれ消す予定だったし……ああ、佐藤の膣の締め付け具合は良いぞ。それにしても普段クールな姫野も龍園の前じゃ甘えん坊だな」

『んあっ！好きっ！今の攻め方っ！もっとお！激しくしてよ龍園君っ！龍園君のおちんちんぽっ！すっ！おい！んああんっ！』

「何だ？あの馬鹿共は怪物の女にちよつかいをかけたのか？本当のカスだな……実際にキと桔梗は毎日、俺を求めるな。というか比企谷よお、白波の奴、お前のテクで殆ど墮ちてんじゃねえか。このまま快樂落ちさせてスパイにしろ」

『しゅきっ！比企谷君のおちんちんっ！すっ！くだいしゅき！帆波ちゃんと同じくらいだ

いしゆき！出して！おちんぼミルクをいっぱい私のおまんこに中出ししてえ！」

「いや、あくまでストレス発散のために抱いてるだけだから」

試験の説明があつた夜、俺と綾小路と龍園は乱交用に借りた部屋で夕飯を食べ終えて、これまで録画した乱交パーティーの品評会と今日の試験について語り合っている。

この部屋は基本的に乱交以外にも密談とか集中して作業を行い時にも重宝している。ちなみに掃除についてはセックスに使われた翌朝に使用者が掃除する決まりになっている。日曜日の朝は沢山の人掃除をするが、それ以外の日は大抵龍園＋セフレ数人が掃除をしている。俺と綾小路は週に1日しかこの部屋でセックスしないからな。

「つか、テメエらもセフレを抱く日をもっと増やせ。俺は殆ど毎日Dクラスのセフレを抱いてるぞ。昨日なんか松下、王、佐藤、長谷部、ユキの5人を相手して腰が痛えよ」

龍園はそう言うってくるが、俺と綾小路は週に1日と決まっているからな。

「それは無理だな。今度アルベルトあたりを呼んだらどうだ？」

綾小路はそんな提案をするが、黒人の巨漢が小柄な女子を抱くって間違いなく過激ポルノ動画に誤解されそうだな……

「考えとく。で、Aクラスに賞賛票を売る奴はどのくらいいるんだ？」

「正確な数は分かってないがオレ達のセフレは全員契約を結んだらしい……お前達Bクラスが由比ヶ浜に「授業中に騒いだらポイントを入れる」って話を持ちかけた結果、由

比ヶ浜は授業中に騒ぎまくったからクラスポイントに期待はしていない」

「どうやらそこまで賞賛票を欲しいようだ。救い用のない層だな。」

「ま、口約束だけだな」

「やはりか。つまり希望を持たせてから一気に絶望を与えるつもりか？」

「さあな。まあお前らDクラスから愉悦を感じられるから楽しみにしときな」

まあそうだろうな。綾小路達Dクラスの生徒は五馬鹿に苦しめられたのだ。奴等が苦しんでいるところを見たらスカツとするだろう。

「期待している。女を抱くのも良いが、五馬鹿が苦しむのを見ると楽しいからな」

「で？お前らのクラスでどうなってるんだ？五馬鹿といつても嫌われ具合は違うだろ」

1位はぶつちぎりて由比ヶ浜だろう。

「そうだな。1人3票与えられる批判票で1票は絶対に由比ヶ浜に、残りの2票は雪ノ下と須藤と池の中なら各自の判断に任せる感じだ」

「ん？山内は入ってないのか？」

「嫌っている人はそれなりにいるが山内は最近臨時試験の前から大人しいんだ。池がオレ達のセフレを寄越せと何回も言っているから女子からの嫌われレベルが山内より数段上回っている。よって山内は今回除外するのがクラスの方針だ」

「へえ、あの変態が大人しいのか？」

「ああ、セクハラ発言もしくなくなつたし、成績も池と須藤より全科目数点伸びてるし、昔の山内に比べて驚くほど成長している」

林間学校とかグループディスカッションを通して人生をやり直そうとしてるのか？まあまだ高1だから本気で反省しているならやり直せるだろう。

「まあストレスの要因の1つが改善しようとしてるならいい事だろ」

「ああ。攻撃対象を絞れるからな」

「で？テメエは誰に入れるんだ？」

「由比ヶ浜、須藤、池だな。須藤についてはまた暴力事件を起こしかねないし、池の存在は不快だからな。雪ノ下については由比ヶ浜がいなくなれば味方が0だし、成績だけは良いからまだ使い道がある」

まあそれが正しいチョイスだろう。

「だが現実問題、雪ノ下は女子から嫌われているらしいし、結果がどうなるかは全くわからない」

まあ嫌いのレベルについては個人によって違うからな、

p i p i p i ……

ここで俺の携帯が鳴るのでポケットから取り出してみれば一之瀬からのメールで

……

「クラスで話し合った結果、今回は救済措置を使う事になったからポイントを貸して欲しいんだけど、相談出来る時間を作れないかな？」

そう書かれていたので龍園に携帯を投げ渡す。

「なるほどなあ……これでウチのクラスとは差が生まれたしラッキーだな」

「ポイントについてはクラス全体で貯めたものを使って良いよな？」

俺個人のポイントでも払えるが特別試験に関するポイントだし、クラスの貯金を使っても良いだろう。

クラス貯金については8月の優待者試験で稼いだ200万を最初に入れて、9月から毎月1人あたり3万ポイント、毎月120万ポイントを入れている。

9月から3月までの7ヶ月間で840万と優待者試験の200万で合計1040万入れている。

このポイントを多く使ったのはペーパーシャツフルの際に有栖にテスト作成として80万ポイントだけだ。他に所要所で数万使ったくらいで、まだ950万ちよつと残っている。

「ああ、構わねえよ」

「じゃあ今から10分後に俺の寮の裏に来るように連絡するか」

女子の部屋には今の時間には行けないし……

『射精すぞ佐藤』

『あつ！あああああああんっ！いくっ！いつちやうよおっ！もうだめえっ！』

『おら、ユキ。射精すから無様に喚きな』

『んあああつ！射精してっ！私をメチャクチャにんあああああつ！』

『そろそろ射精すぞ、絶頂しろや白波』

『ああんっ！もうダメエツ！射精して！おちんぼミルク一杯頂戴！比企谷君の格好良いおちんちんで一杯イジメンあああああつ！』

そろそろ動画も終わるからな。

10分後……

「来たか」

「うん。わざわざ時間を作ってくれてありがとう」

「前置きは良い。それより救済措置を使うんだな？しつかり考えたんだな」

まあ考えてようが考えてなからうがポイントを貸すけどな。

「……うん。神崎君は今回、今までの方針と真逆の戦術を取るの悪手だつて」

それは間違いじゃない。今までクラスメイトを最優先にしていた一之瀬が龍園のよ  
うなやり方をいきなり使つたらクラスに亀裂が走るだろうからな。

それでも一之瀬の表情が暗いのは多分、今後は考え方を変えるように促されたのだら  
う。

まあそれならそれで構わない。ずっと悩んでいるならそこをつけ込むだけだ。

「考えた末の結論がそれなら好きにしろ。で、貸し出すポイントだが、確か不足額は約4  
64万ポイントだったし、465万ポイントで良いのか？」

「うん、それで返済プランについて話したいの。私達のクラスポイントは600ポイン  
トだけど、救済措置を使つたら400ポイントになるの」

「40人のクラスだから、1ヶ月で160万ポイントがCクラスに入る訳  
だ。金利は特別に無しにしてやる。救済措置を使つてから3ヶ月で返済が可能だな」

「けど、結構ギリギリだし特別試験とかもあるだろうから期日を延ばして欲しいの」  
「そのくらいは構わない。じゃあ1ヶ月伸ばして4ヶ月でどうだ？」

「2ヶ月じゃダメかな？念の為に」

……本当は1ヶ月が良かったが交渉決裂になったら嫌だし乗るとしよう、

「わかった。じゃあ期日は8月1日に伸ばしてやる」

「ありがとう。それとさ……返済出来なかった場合のペナルティを比企谷君は考えてるのかな？」

一之瀬は不安そうに見てくるが、ペナルティに退学が含まれてないか怖いのだろう。「そうだな……10万、20万くらいならCクラスの誰かを俺のパシリにするくらいで構わないが、流石に200万くらい返せないなら、Cクラスの中で退学者を出して貰う」その位の要求なら別におかしくないだろう。

俺がそう返すと一之瀬は深呼吸をする。何事かと思えば前に出てから頭を下げて……

「だったらお願い！もしも不足額が200万以上だった時、私の身体を好きにして良いからクラスメイトを退学にするペナルティだけは条件に含まないで欲しいの！」  
ぶつとんだお願いをしてくる。

お前はどんだけクラスメイトが大切なんだよ？

「くはっ！底抜けのお人好しだな！馬鹿にも程がある」

「残念だ。ポイントがあれば俺が貸してセフレにしたのに」  
「死ね」

## 価値観の違い

「お前は馬鹿か？そこまでしてクラスメイトを守りたいのか？」

俺はそう呟いてしまう。借金を返済出来なかつた際、自身の身体と引き換えに退学に關するペナルティを無しにして欲しいなんてお人好しを通り越して馬鹿としか思えない。

「うん……クラスメイトだけは取り返せないから」

「そう思うのは立派だが、本当に良いのか？確かに今回は救済措置を使つても良いと思うが、以前龍園が言つたように退学者を救済するのはクラスメイトから少なからず不満がある可能性も高いぞ。そう考えると今回の試験を転換点として、ペナルティに無理して退学を除外させるべきじゃない」

救済措置を使うならまだしも、そのあとは救済措置を勉強代として自分に厳しくするべきだと思う。

「それは……」

「そもそも話、何故退学にそこまでビビる？確かに退学処分は怖いかもしれないが、

しっかり努力して他の人よりも実力をつければ、避けれる事態だ」

退学にビビる奴は沢山いるが、大半が自身の実力を向上させていない奴だ。

5月最初の時点で、この学校では実力主義で退学が軽いつて事がわかつたのだ。それなら救済措置について考えるのではなく、どうやって強くなれるかを考えるべきだ。

「クラスのリーダーたるお前はどうかやったら助けられるかを考えるのではなく、クラスメイトに対して退学にならないよう常に実力を高めると発破をかけるべきだ」

実際龍園も口は悪いが、各節目にクラスメイトに発破をかけて気を緩めないようにしているしな。

「……………」

「だんまりか……………まあ良い。話を戻すが、お前の身体を求めてない」

「……………もしかして他の誰かを？ 椎名さんと仲が良い千尋ちゃんとか……………」

「阿保。恋人いる相手に身体を無闇に差し出すなって話だ。白波についても由比ヶ浜によつて生まれたストレスを発散させる為にセックスしてるんであって、恋仲じゃないしな」

他のセフレについてもセックスをする理由はストレス発散の為だ。まあ白波を俺に對して、佐藤は綾小路に對して、姫野は龍園に對してストレス関係なくセックスをする時もある。

みーちゃんに至っては俺達3人に攻められる事を楽しみにしていて、この前なんか二穴攻め+イラマチオを経験した結果、息絶え絶えになりながらも笑顔で礼を言ってきたくらいだ。

「つー! どういう事! 千尋ちゃんに手を出したの!？」

ここで一之瀬は必死な形相になって詰め寄ってくるが……

「手を出したって言っても向こうから希望したからそれに応えただけだ。それについてはひより達の許可を得てるし、お前にどうこう言われる筋合いはない」

レイプしたとかならまだしも、当事者2人の同意と恋人3人の許可もあるし、ルールのには問題ない。

「で、でも「アレ? 帆波ちゃんに比企谷君?」……千尋ちゃん」

と、ここで話題の種となっていた白波がやってきた。

「こんなところでどうしたの? ポイントの返済プランの相談?」

「う、うん。それと千尋ちゃん……」

「? どうしたの?」

「その、変な事を聞くけど、比企谷君とエッチをしたの……?」

キョトンとする白波に一之瀬は深呼吸をしてから質問する。それに対して白波は

……

「比企谷君が話したの？ そうだよ、比企谷君とエッチしたよ」

当然のように頷く。それに対して一之瀬は驚愕に目を見開く。

「ほ、本当？」

「本当だよ……あ、じゃあ帆波ちゃんも今度乱交パーティーに参加しない？」

「ら、乱交?! へ、変な冗談はやめて!」

「え? 本当にあるよ。嘘だと思うならユキちゃんに聞いてみなよ」

白波の言葉に一之瀬は真つ青になってよろめく。

「ゆ、ユキちゃんも参加してるの……他にもいるの?」

「私達のクラスだと私とユキちゃんだけだよ。他はDクラスの千秋ちゃんにみーちゃん、佐藤さんに櫛田さんに長谷部さんとかだね。土曜日の夜から日曜日の朝まで比企谷君と綾小路君と龍園君の3人とエッチしてるんだ」

「なっ、なっ……」

予想外の内容だったのか一之瀬は真つ青になったまま、口をパクパクする。

「どう? 試験は土曜日だけど、その夜に帆波ちゃんも来ない? 最初は抵抗感があつても直ぐに気持ち良いだけになるから。私も千秋ちゃんに誘われた時はちよつと怖かったけど、今はストレス発散には最適だから」

「す、ストレス発散って、わざわざエッチにしなくても良いんじゃないかな?」

一之瀬が遠回しにやめるように言ってくる。対する白波は首を横に振る。

「そう言えるのは帆波ちゃんがあゝの馬鹿女のヤバさを理解し切れてないからだよ。私はこれまでに何十の娯楽を試したけど、殆ど効果的じゃなかったよ」

白波が黒い笑みを浮かべながらそう口にする。これについては松下やみーちゃんも同じ事を言ったからな。

「だから帆波ちゃん。私から安寧の地を奪おうとしないで。今の私にはあゝの時間は大切な時間だから」

強い口調ではないが、譲る気配を見せない口調だ。これには一之瀬も苦い顔を浮かべるがさらなる反対は見せない。

「何か反対の雰囲気だね。やっぱり週末と一緒に乱交パーティーに参加しようよ」  
「ええっ!?!」

「大丈夫だよ。私も最初は怖かったけど、今は凄く楽しいから。帆波ちゃんも比企谷君のおちんちんで一回攻められてみなよ」

白波は蠱惑的な笑みを浮かべながら一之瀬を誘う。

「それに麻子ちゃんと夢ちゃんもさつき馬鹿女に絡まれて、乱交パーティーについて話したら、とりあえず見学したいって言ってたし」

マジか？これ以上増やしたら身体が持たないだろう。平日でも恋人3人を抱いてい

るのだ。マジで腰がイカれてしまっただろう。

「やめろ馬鹿。というか誰かを誘うのはまだしも、俺の名前を出すな」

これじゃ俺がヤリチンみたいじゃねえか。

「……話が逸れ過ぎたな。話を戻すが俺はお前の身体を要求するつもりはない。ペナルティについては、そうだな……お前らの持つ他クラスへの賞賛票を全てくれるなら退学関連の話を含めないでやるよ」

俺からしたら本命はこれだ。一之瀬クラスの持つ他クラスへの賞賛票を得れば、より自由に動ける。そして有栖がDクラスを買収しているし、全クラス分手に入る。

他クラスへの賞賛票は1人1票だから160票あるが、それだけあれば今回の試験を自由に動かせる。

「……つまり比企谷君が命じた相手に入れるって事？」

「そういう訳だ。返事が決まったら連絡してくれ……とりあえず話は今日のところはこれくらいで良いだろうし、俺は失礼する。ポイントを借りるかどうかは後日聞く」

「……うん、わかった」

「またね。週末は楽しみにしてるから」

「はいはい。またな」

そう返してから俺は一足先に寮の入口に向かい曲がり角にて綾小路と龍園ど合流す

る。

「比企谷、一之瀬の豊満な身体を堪能するチャンスを放棄するのは勿体ないんじゃないか？」

綾小路が初っ端からそんな事を言ってくるが、コイツは本当にブレないな……

「一応クラスのNo. 2だからな。龍園も今の取引で問題ないな？」

「ああ。ちょうど今坂柳から連絡が入って、現状Dクラスの生徒の24人が賞賛票を売る契約をした。よって他クラスへの賞賛票は現状ウチとAクラスの80票を加えて104票ある。ここでCクラスの40票があれば、この試験は自在に操れる」

「なら良かった。とりあえず明日以降賞賛票の行き先について考えないとな」

「特にDクラスについては誰を残して足を引く張つて貰うか決めないといけないしな」

実際のところどうなるのだろうか？普通に考えれば由比ヶ浜が批判票の対象だが、他クラスからしたら由比ヶ浜を排除するのはDクラスを支援する事になる。

まあその辺りはじっくりと考えないとな。それに一之瀬が違う場所からポイントを借りる可能性もあるし、それを踏まえた見積もりもしないといけない。

俺達は今後やるべきことを考えながら寮の中に入るのだった。

## 前日

追加の特別試験が発表されてから3日、いよいよ試験前日の金曜日となった。

ウチのクラスは真鍋グループ以外は普段通りの学校生活を送っていて、真鍋と諸藤は昨日同じグループの山下と薮の粗を話して批判票の対象を移そうとしていて、山下と薮はそれに対して真鍋と諸藤の粗を話して批判票の対象を変えないようにするなど醜い争いをしていたが……

「うーうーうだうだ煩えな。批判票の対象は teme たちのグループのみなんだから自らの無能さを恨めうーうー」

龍園が殺意混じりの雰囲気ですら強引に黙らせた。実際真鍋グループ以外に批判票を入れるつもりはないし、各クラスが持つ他クラスへの賞賛票についても9割以上、龍園と有栖が握っている事もあり、真鍋達も詰みだと理解したようであきらましく黙った。

今もお通夜のように暗い雰囲気だが、後1日しかない学校生活なんだし、最後まで遊んどけ。

「坂上先生、ちょっと付き合って貰えますか？」

「ああ、例の話ですね。いいでしょう」

「そんな風に思いながら俺は帰りの支度をしながら立ち上がり、坂上先生を連れてCクラスの教室に入る。

「邪魔するぞ」

俺が入ると注目が集まる。中でも網倉と小橋は恥ずかしそうに見ている。まあ白波の誘いによつて明日の試験が終わつたら乱交パーティーに参加だからな。

星之宮先生もいるし、話を進められるな。

「明日が本番だが例の契約を結ぶなら全員サインをしろ」

「うん、皆で話し合つた結果、サインをするよ」

「じゃあまずは契約書を作つたから再確認しろ」

一之瀬が頷いたので俺は契約書を取り出す。

### 契約書

1. 比企谷八幡は一之瀬帆波の所属するクラス（以降は一之瀬クラスとする）に46万483ポイントを貸し付ける

2. 一之瀬クラスは今年の8月2日までに46万483ポイントを返済する

3. 1の条件が履行された場合、一之瀬クラスはクラス投票において「他クラスの賞

賛票」を比企谷八幡の指示に従って投票する

4. 1の条件には一之瀬クラス全員のサインを必要とする
5. 2の条件を達成出来なかった場合、返済不足額が200万ポイント以上の場合、一之瀬クラスは来年度において1つの特別試験で全面的に比企谷八幡の所属するクラス（以降は比企谷クラスとする）に協力する。（返済不足額200万ポイント以下の場合、額に応じて比企谷八幡が教師の立ち会いの下でペナルティを決める）
6. 5の条件において比企谷八幡が満足できなかった場合、学校側の調査を挟む。その際に手抜きをしたと判断された場合、その時の一之瀬クラスのクラスポイントの4分の1を比企谷クラスに移譲する
7. 3の条件を無視した生徒は退学処分とする

### 比企谷八幡

こんな感じの契約だ。退学については他クラスへの賞賛票を指示した奴以外に入れない場合なので緩いだろう。

「言われた通りだね……あ、もう1つ良いかな？この全面的な協力なんだけど、ペナルティに退学がある試験の除外って、無理かな？」

一之瀬がそんな提案をしてくるが……

「それは賛成しかねるな。今後の試験は2年生や3年生の退学数を考えたら、ペナルティに退学がある試験が多いだろうからな」

下手したら今後は全部退学のペナルティがある特別試験かもしれない。そうなったら協力を得られずに大損だ。

「それは……そうだけど」

「そもそも退学が嫌なら己を高めれば良いだけだ。それこそ俺達に協力しても尚、退学の危険にならないほどにな」

それでもしなきや、ウチとAクラス連合には勝てないのは明白だ。

「そうだな……一之瀬、条件を変える必要ない。この全面的な協力は200万ポイント分返済出来なかつたららの話で、返済すれば問題ない」

「寧ろそれだけの額を返済できないようじや、今後Aクラスなんて夢のまた夢だよ」

「それに比企谷君が一之瀬さんの話を受け入れる条件として違う形の要求をしてくる可能性もあるし。今は無利子無利息なんだからこの条件は変えちゃダメだと思う」

神崎が一之瀬に苦言を呈して、白波と姫野が追従する。まあ実際俺の契約はかなり優しいだろう。救済措置を使った場合、一之瀬クラスは400までクラスポイントが落ちるが、それでも1ヶ月に160万貰える計算だ。

で、今日から8月2日まで支給日は4月1日、5月1日、6月1日、7月1日、8月1日と5回あるし、今のクラスポイントをキープ出来れば800万入る計算だからな。

まあ特別試験で大敗したらアレだが、そこは知らん。

「……わかったよ。サインする」

一之瀬がサインすると他の皆もサインする。

全員がサインすると俺はボイスレコーダーを2つ出しながら2人の教師に契約書を渡す。

「じゃあこれにサインをお願いします」

「ええ、わかりました」

「はい」

「ありがとうございます……では全員が契約したので契約書の内容を履行する。まずは一之瀬の端末にポイントを送る」

俺は464万483ポイントを一之瀬の携帯に送金する。一之瀬は端末を操作してから俺に画面を見せるが、2000万pptと表示される。

「送られたな。で、他クラスへの賞賛票だが男子は……に、女子は……に入れる」

俺はボイスレコーダーを口に突きつけながらそう命じる。で、この片方のボイスレコーダーと契約書のコピーを学校に渡せば終了だ。

「なるほど……こういう作戦か」

「まあな。既に契約を結んだから違う奴に賞賛票を入れたら退学だからな……これで今やれる事は全てだし、解散してくれ。一之瀬と星之宮先生と坂上先生は契約書のコピーを渡したいんでもう少し付き合ってください」

「ええ、では職員室に行きましようか」

坂上先生らが頷いたので俺達はCクラスを出て、職員室に向かう。

「そこを何とか！退学者を出したくないんだ！」

「しつげえな。それ以前にCクラスについては400万ちよいと払える額だから貸付をしたが、テメエらは2000万だから足りないから物理的に金を貸せねえよ」

向かっていると廊下で平田が土下座をしながら龍園に金の貸し出しを頼んで、龍園が一蹴している。

実際ウチのクラスは2000万貸せるだろうが、リスクとリターンが釣り合っていない。一之瀬クラスにはクラスポイントを減らせるリターンがあるさ、返せる可能性はある。

一方Dクラスについては五馬鹿がガンガンクラスポイントを減らすし、リターンが薄いんだよなあ。

「救済したいなら臓器でも売って金を作れや」

龍園がヤクザのような事を言つて階段を降りていく。平田は土下座したまま項垂れるが……

「馬鹿かアイツは？屑を消すチャンスなのに不意にするなんて。クラスメイトを大切な屑を嫌う30人以上のクラスメイトの為に率先して消せば良いものを」

俺ならこの試験を歓迎するがな。

「そんな言い方は良くないよ。どんな相手でもクラスメイトを守ろうとする事を否定するのは間違つてるよ」

「アレは人じゃなくて塵だろ。食物連鎖つて言葉を知らないのか？弱者は強者の糧になつてしかるべきだ。お前だつて日頃豚や牛、魚を食つてるだろ。それと同じだ。五馬鹿は消えて、それ以外のメンバーに対してストレス発散という糧になるべきだ」

「それはスケールが「生物」という点では同じだ。まさか人じゃないなら淘汰して良いと？」それは……」

「まあお前の甘さのおかげでこつちはクラスポイントに差を作れるからどうこう言わないが、その甘さは早い内に改善した方が良いぜ」

でないと卒業まで有栖と龍園のオモチャになるだろうからな。

そんな風に話していると職員室に着いたのでコピーで3枚コピーして3人に渡す。

「確かに受け取つたよ。じゃあ8月2日まで無くさないように」

「了解つす……あ、契約を終えたばかりで穴に気付いたんです質問良いですか？」

「良いですよ、何ですか？」

「もしもこの間に無人島試験のように携帯を使えない試験があつたらどうするんですか？」

「去年の夏休みに1週間も無人島試験があつたし、返済期日中に試験があるかもしれない。？」

「うーん、もしもその期間中にそんな試験があつたら、特別試験直前に一之瀬さんは払えるだけ払って。足りなかつたら、その分は私達が8月1日に支給されるCクラスのプライベートポイントから引き落としておくから」

「わかりました。ではその後40等分します」

「ただ期日は8月2日だから、それ以降に特別試験で得た報酬を返済に使うのは認められないから。もしも8月1日に支給されるポイントで全額返済できないなら契約不履行でペナルティがあるから注意してね」

「そりやそうだ。あくまで返済期日は8月2日だし、それ以降に稼いだ金を返済に使うのはズルだろう。良かったよかった。」

「んじゃ話は終わりです。失礼します」

「俺は一礼して職員室を出ると携帯が鳴るので見れば有栖からメールが来ていた。」

「……先程契約を済ませたようですが、こちらもDクラスに賞賛票を入れる相手を指示しました……」

「そんな一文が書かれている。さあて、いよいよ明日だが楽しみで楽しみで仕方ないな……」

## 試験日

試験当日の朝 俺は目を覚ましてか男女の体液の臭いが充満する中、換気をする。そして裸で寝ている3人を起こす。

「3人とも、6時半だから起きろ」

シーツを洗濯しないとイケないからな。

「んー……おはようございます八幡君」

「起こしてくれてありがとうございます……」

「久しぶりの中出しセックスは体力を使うよ……」

3人は目を擦りながら起き上がり、ベットから降りるので、そのままシーツなど剥がし、衣類を包んでから脱衣所にある洗濯機に入れてから風呂場に入る。

シャワーで体液などを流しているとひより達もやってきて流し始めるが、シャワーを浴びているのを見るとムラツとしてしまい、なずな先輩の乳首を吸いながら左手でひよりの胸を揉み、右手で有栖の尻を揉む。

「あんっ、ハチ君のエッチ……赤ちゃんみたい」

「あつ……しようがないですね。まだ時間もありませんし、揉んで良いですよ」  
「んあつ……触り方がいやらしいです……私も変な気分……」

3人が喘ぐと更にムラツとするので、そのまま3人に対してキスをしまくる。

「んっ、やっぱり気持ち良いです……俺達が卒業したら直ぐに4人でずつと暮らしませんか？」

「良いですよ……一杯愛してくださいね……八幡君との子供も欲しいです」

「大学や仕事が終わったら愛を育みましょう。収入が安定したら子作りも考えてください……」

「土日から朝から晩までハチ君とエッチをしたいな。ハチ君とエッチすると、凄く幸せだから……」

3人は嬉しそうにキスを返して来るが、その場合毎日が幸せだろうな。

「ただ、卒業したらセフレは作っちゃダメだよ？」

「ええ。今いるセフレについても卒業したら五馬鹿によつてストレスが溜まることはないでしょうしね」

実際ひより達が週に一度、セフレとのセックスを許したのは、ひより達も五馬鹿の存在のウザさを知っているからだ。

しかし卒業したら五馬鹿によるストレスもなくなるし、俺達の存在も不要になるだろ

う。

そんな風に考えながら俺はシャワーを浴びながら恋人3人とキスをするのだった。

2時間後……

朝のHRが始まるまで後少のだが、真鍋と諸藤は真つ白な表情でガタガタ震えて、藪と山下はいい気味だと嘲笑を浮かべている。コイツらの友情はとつくに破綻している。

残り2分で試験が始まるって時だった。龍園が立ち上がる。

「さて、もう直ぐ試験が始まるが、真鍋と諸藤と山下と藪は今のうちにポイントを全額渡してくれないか？」

そんな事を4人に提案する。それにより真つ白だった真鍋の表情に怒りが宿る。

「ふざけないで！人を退学にしようとして、挙句にはポイントを超越せ?!どこまで絞り尽くせば気が済むのよ！」

真鍋の言葉に龍園はビビらずに口を開ける。

「何を勘違いしてるんだ？これは命令じゃなくて提案だ。お前らが払うのが嫌なら拒否して構わない」

……そういう訳か。コイツ、本当に屑だな。

「っ！わかつたわ、払う！」

と、ここで諸藤が真つ先に携帯を操作する。

「最初に送金したのは諸藤か。これは良い試験になるな」

「「っ！」」

龍園は笑みを浮かべそう口にする。真鍋と山下と藪も携帯を操作する。多分彼女らは龍園の提案に「ポイントを渡せば便宜を図って貰える」と思っているのだろう。

と、ここでチャイムが鳴り、坂上先生が入ってくる。

「では試験を始める。名前を呼ばれた生徒から順番に投票室に移動して貰う。赤沢君」  
どうやら匿名対応を徹底しているようだ。

「赤沢。予定通り、確実に批判票は真鍋と諸藤には入れろよ」

龍園が当然のようにそう口にする。それにギョツとしたのは真鍋と諸藤だ。

「何だよ！私が最初にポイントを支払ったのに！」

諸藤が怒鳴る中、龍園は涼しいままだ。

「は？お前らが勝手に払っただけで、俺は批判票の対象を変えるなんて一言も言って

ねえだろうか」

「なっ！なっ……！！」

やっぱりな。龍園が嫌なら拒否して良いと言った時点で怪しいと思つたわ。

「？何の話ですか？」

「こんな話だ」

坂上先生の呟きに龍園はボイスレコーダーを取り出してさっきのやりとりを聞かせる。

「なるほど……確かに龍園は「提案だ」「嫌なら拒否して良い」と言っているし、無理強いはしてないカツアゲではないな」

まあ真鍋達からしたら状況的に察するのは無理だろう。

「だろ。アイツらが勘違いして勝手に払っただけだ」

「ふざけんじやないわよ！良い試験になるって言ったじゃない！」

「ああ、俺にとって良い試験になるな。誰もテメエにとって良い試験なんて言つてねえだろうか」

まあ確かにな。真鍋達が幾ら持つてるからは知らないが、3月に入つたばかりで10万ポイント以上支給されてるし、そこそこ入つてるだろう。

そんな龍園の言葉に真鍋達はギャーギャー騒ぐが、坂上先生はそれを無視してドンド

ン生徒を呼び出して投票室に行かせる。

「ギヤーギヤー煩えな。山下と藪については真鍋と諸藤からポイントを回収するための餌だ。試験が終わったら返してやるから黙れ」

龍園がそう口にするると山下と藪は静かになるが、真鍋と諸藤は未だに煩い。

「次、比企谷君」

そう言われたので騒がしい教室を出て案内板に従って移動すると視聴覚室に到着する。その奥にある家庭科室からはDクラスの高円寺が鼻歌を歌いながら出てくるが、クラスごとに投票場所も違うようだ。

中に入ると簡素な箱と教師の前に置かれている。

「投票用紙は箱の横にあるから対象の名前を書くように。苗字だけで構わない」

そう言われて紙を見れば賞賛票と書かれた文字の下に枠が3つ、批判票と書かれた文字の下に枠が3つ、他クラスへの賞賛票と書かれた文字の下に枠が1つある。

俺は迷う事なく、賞賛票の枠に「龍園」「椎名」「金田」と書き、批判票の枠に「真鍋」「諸藤」「藪」と書いて箱に入れて、退場する。更に賞賛票に「Dクラス、山内春樹」と書く。

そして教室に近づくと、やはりギヤーギヤー騒ぎ声が聞こえてくるが、それを無視して教室に入り、椅子に座る。

「次、真鍋さん」

「~~~~~っ！」

坂上先生の言葉に真鍋は歯軋りしながらも教室から出て行く。そして騒がしいのが諸藤1人になるが、諸藤も呼ばれて龍園を睨みながら出ていく。

それから順調に進んでいき、やがて全員が教室を投票を済ませて教室に戻る。すると坂上先生は教室から出て行き、真鍋達は投票が終わった事で怒りが吹き飛び、真つ青になつてガタガタ震える。まるで青〇のたけしのようだ。

30分近く無言で待機していると坂上先生が入ってくる。手には紙がある。「待たせて済まない。では試験結果を発表する」

坂上先生の言葉に緊張が走る。

「まずは上位から発表する。第3位に24票で椎名ひより。以後の試験では退学しにくくなる」

「みなさん、ありがとうございます」

ひよりが一礼するが、ひよりはクラスメイトの学力向上に貢献しているので不満の色はない。

「続いて2位が33票で龍園翔、1位が35票で比企谷八幡だ。この2人にはプロテクトポイントが与えられる」

よしよし、これで保険が出来たし最高だ。龍園が2位なのは普段の行いだろな。

「続いて下位3人の発表を行う。ワースト3位はマイナス7票で山下沙希。今後退学しやすくなるから注意するように」

「なっ！」

「ほっ……」

山下は慌てて、藪は安堵の息を吐く。山下が少ないのはDクラスからの賞賛票だ。確かに真鍋と諸藤を消すために2人以外の批判票候補にDクラスからの賞賛票を注ぎ込んだのだ。

「続いてワースト1位と2位の発表をするが、その生徒は職員室に来て貰う。他の生徒は解散して構わない」

「……っ！嫌よ！こんな試験認めないわ！」

「そうよ！絶対にあり得ない！」

真鍋と諸藤は喚き散らす、自業自得だ。そもそもお前、船上試験で軽井沢をボコしたらしいが、その証拠を綾小路が持つて以上、退学は絶対だろう。

そんな2人を坂上先生は痛ましい表情で見るが、やがて口を開ける。

「……ワースト2位はマイナス34票で諸藤リカ、ワースト1位はマイナス36票で真鍋志保だ。残念だが退学処分とする」

「嫌あああああああつ！」

「お願いします！これから頑張るからチャンスをください！私を助けて！」

真鍋は阿鼻叫喚となり、諸藤は龍園に土下座をするが……

「いつまでいるんだカスども？お前らはデリートされたんだしさつさと出てけよ」

龍園は容赦ない死体蹴りをする。これには大半の生徒がドン引きする。

「っ！ふざけんじやないわよ！」

「私をコケにして！」

諸藤と真鍋はブチ切れて自分の椅子を持って龍園に殴りかかる。対する龍園は立ち上がる間も無く、そのまま2人に殴り飛ばされる。

「っ！テメエら何してんだあ！」

龍園が床に倒れ伏す中、石崎がキレて真鍋の腕関節を極め、アルベルトが遅れて諸藤を拘束する。

「つてえな……おい坂上。今回の件はコイツらの保護者か警察に連絡させて貰うぞ」

龍園は頭から血を流しながらそう口にする。この学校は外部との連絡は取れないと言われているが、警察や救急車、消防車などについては例外として認められている。よって龍園の訴えは正当だが……

(絶対わざと挑発して暴力を誘発したな)

わざと殴られて真鍋と諸藤の保護者に警察に訴える事をチラつかせて示談する腹だ  
ろう。

「わかった。この後保護者に連絡する際に報告しておく。お前は病院に行つてこい」

「ああ……の前に比企谷」

龍園は俺を見て……

「病院に行く前に今からDクラスを見に行こうぜ」

それはそれは良い笑みを浮かべながらそう口にしたのだった。

## Dクラスの結果

試験当日のDクラスにて……

「俺に投票入れるなんて間違ってるからな！」

「良いかテメエら！俺に批判票を入れて俺が退学になったら俺の近くに居る奴を殺すからな！」

池と須藤が騒ぎまくっていて、クラスメイトらは呆れた眼差しを向けつつ、鼻歌を歌う由比ヶ浜と平然としている雪ノ下を睨みつける。

由比ヶ浜は試験が発表された翌日から授業中に携帯を操作し始めたが、クラスメイトは他クラスと賞賛票の取引をしたのだと確信したので、問い詰めたらアツサリ認め……  
「……悪いのはあたしじゃない！あたしは自分の身を守るだけで、悪いのは間違った理由であたしを退学させようとするしてる方だから！……」

当たり前のようにそう返して、クラスメイトの大半はあまりの馬鹿さに説得は無理と匙を投げてしまった。

結果として、彼らの大半は以前八幡がグループディスプレイで提示した「Dクラ

スの生徒でもしつかり努力をして実力を上げれば、Aクラスの特権を与えるべき」って方針に希望を抱き、試験日まで学力や体力の向上を図った。

そして試験日が過ぎてからも努力を続ける事を決めている。由比ヶ浜がいる以上、希望なんかないのだから。

一方、雪ノ下は余裕の表情だ。彼女はクラスメイトに嫉妬から逆恨みされている事を不満に思っているが、自分には使い道があるとも思っているので退学の心配はしていない。

それに由比ヶ浜から授業中にクラスポイントを減らす行為をすれば賞賛票を入れる取引をBクラスとしたと聞いているので余裕がある。

そんな事もあり、須藤と池に対して嘲笑を浮かべ、2人が退学する事を楽しみにしている。

他の候補では山内は静かだ。山内はここ最近、授業は真面目に聞いて奉仕活動も真面目に取り組み、懲罰部屋でも自慰行為をやめて勉強に励むようにしている。

その頑張りから周りからの評価は多少マシになってきて、教師からも今後次第では矯正プログラムの解除も考えられているので、池のように騒いだら退学候補に挙げられてしまうので静かに時を待っている。

辛い時もあるが、最高の娯楽を得た上、矯正プログラムからの解除の可能性がある以

上、耐えるつもりでいた。

また平田は死んだような表情を浮かべている。ポイントを借りれなかったのも、「せめて1人は助けたいから僕に批判票を入れてくれ」と訴えたが却下された。確かに五馬鹿を庇う事から平田は疎まれているが、学力や運動能力はトップクラスなので退学候補に選ばれることはなかった。

「待たせたな。それでは名前を呼ばれた者から教室を出て投票室に行つて貰う。Dクラスは家庭科室だ。まず綾小路だ」

そんな中、茶柱先生が教室に入るなりそう告げる。綾小路は立ち上がり教室の外に向かうが……

（今日の乱交パーティー、網倉と小橋も参加のようだが楽しみだな）

考えているのは今夜行われる乱交パーティーだけだった。

数十分後……

ガラガラガラ

ドアの音と共に茶柱先生が丸まった紙を持って教室に入ってくる。しかし若干複雑な表情を浮かべている。

「集計が終わった。これより発表する。まずは上位3人から発表する」

いよいよ発表になるが池はガタガタ震えて、須藤は齒軋りする。由比ヶ浜と雪ノ下は余裕の表情で、山内は若干緊張している。

「第3位は18票で軽井沢恵。今後は退学になり難くなる」

茶柱先生の言葉に軽井沢は安堵の息を吐く。

「続いて2位と1位を発表する。2位が23票で綾小路清隆、1位が30票で櫛田桔梗だ」

「はあ?!何で綾小路が2位なんだよ?!あり得ないだろ!」

「そうだし!あり得ないし!」

この結果に池と由比ヶ浜がキレると、軽井沢が馬鹿を見る眼差しを向ける。

「いや、実力もあるし、盗撮犯から女子の裸を守ったんだし妥当でしょ」

「だよ。私も入れた」

「私も」

「私も入れました」

女子を中心に声上がる。加えてクラスポイントマイナスからプラスに変えた功績もあるので、男子からも一定の評価を得ている。

「何にせよ結果は結果だ。2人にはプロテクトポイントが与えられる……そして下位3人の発表する」

その言葉に緊張が走る。誰が退学になるのか皆が気になっている。

「まずはワースト3位だがマイナス10票で須藤健。今後は退学になりやすくなる」

「なっ！ピリかブービーじゃないのかよ?!」

「ふう……」

退学候補の池は慌て出し、須藤は安堵の息を吐く。退学に比べたら遥かにマシだからだ。

しかしクラスメイトは驚いている。明らかに少な過ぎるからだ。

同時に理解する。AクラスとBクラスが干渉したのだと。

「続いて……ワースト1位とワースト2位を発表する。わかっていると思うが、ここで名前を呼ばれた2名は退学となる。この後に荷物をまとめて私と一緒に職員室に来て貰う。他の生徒については解散して帰って構わない」

「認めねえ！こんなの俺は認めねえよ！」

池はヒステリックに騒ぐが茶柱はそれを無視して、一度深呼吸をして……

「ワースト2位はマイナス26票で池寛治、最下位はマイナス27票で雪ノ下雪乃だ」  
そう告げる。

「つーうああああああああつー！」

「……………は？」

結果を告げられると池は今まで以上に叫び、雪ノ下は理解出来ないのかポカンとした表情になる。

そんな中、茶柱が紙を黒板に貼る。そこには結果が書かれているが……

1位 榎田桔梗 30点

2位 綾小路清隆 23点

3位 軽井沢恵 18点

14位 由比ヶ浜結衣 3点

24位 山内春樹 0点

37位 堀北鈴音 マイナス6点  
38位 須藤健 マイナス10点  
39位 池寛治 マイナス26点  
40位 雪ノ下雪乃 マイナス27点

このような結果となった。それに対して山内は安堵の息を吐き、堀北は山内以下である事に歯軋りをする。

結果が発表されると由比ヶ浜が立ち上がる。

「どういう事だし！何でゆきのんが退学なの?! Bクラスはあたしとゆきのんに賞賛票を入れるって約束したよ！」

「その証拠となる物をお前は持つてるのか？」

「持つてないけど確かに約束したし！」

「正式な契約書や音声があるならやり直しがきくだろうが、無いなら無理だ……雪ノ下

と池は来て貰う。他の生徒は帰って構わない」

茶柱は由比ヶ浜の叫びを一蹴して退学者2人を見る。

本音を言えば由比ヶ浜に退学して欲しかった茶柱だが、五馬鹿の内の2人が消えるなら……と考え、喜ぶを出さないように注意しながら呼びかける。

「……っ！こんな結果は認めないわ！私のような優秀な人間が退学だなんてあり得ない！だからこの結果は無効よ！今すぐやり直しなさい！」

雪ノ下は周りを見ながら怒鳴りつける。そんな雪ノ下にクラスメイトらは「さっさと出ていけや」って眼差しを向けていた。

そんな中……

ガラガラ……

「おっと、結果が出てるな」

「大体狙い通りだな」

「しかし堀北さんは無様ですね」

「干渉していないのにこのクラスでマイナスだからね」

教室のドアが開きAクラスとBクラスのリーダーと幹部が教室に入ってきた。

「どういう事だしー！」

教室に入るなり由比ヶ浜が怒鳴りながら入ってくる。

「何の話だ？ テメエには約束通り賞賛票を40票入れてやったのに何が不満なんだ？」

まあ由比ヶ浜に入れたのはAクラスだが、実際のところ由比ヶ浜に40票入った事は変わらないので文句を言われる筋合いはない。

「というか40票入れて3点って……」

「ゆきのんには入ってないじゃん！ 約束を破るなんて最低！ 今すぐ退学しろし！」

「約束ってこれだよな」

龍園はそう言ってボイスレコーダーを取り出す。

『……はあ、で？賞賛票を入れる事に対する見返りは？』

『見返り？同じ学校の生徒が困ってるなら助けるのは当たり前じゃん！見返りを要求するなんて間違ってるから！』

『……悪いが、こつちも救済措置について1人分考えてるから無理だ。他クラスより自分のクラスを優先する』

『そんなのほっとけば良いじゃん。逆恨みされてるあたしと違って、どうせ無能なんだし』

『……わかったわかった。じゃあ今日から授業中に喋ったり、携帯を弄ってDのクラスポイントを減らす行動を取れ。そしたらお前に賞賛票を入れるようにクラスに話しく』

『本当！わかった！絶対だよ！』

改めて聞くと酷い内容だな……

「取引内容はこれで間違いないよな？」

「そうだし！なのに騙すなんて最低！」

「んな訳あるか。俺はお前に賞賛票を入れるように話したから問題ない」

龍園は再度音声を流すが……

『……わかったわかった。じゃあ今日から授業中に喋ったり、携帯を弄ってDのクラスポイントを減らす行動を取れ。そしてらお前に賞賛票を入れるようにクラスに話しく』

『本当！わかった！絶対だよ！』

「俺はお前」に「賞賛票を入れるようにクラスメイトに話すと云ったが、お前と雪ノ下に入れるなんて言っていない」

確かにそうだな。お前らに、ではなくお前に、と言っているな。

「確かにこれなら約束は守ってるな」

茶柱は納得したように頷く。それを聞いた雪ノ下と由比ヶ浜は震え出す。

「ふ、ふざけんなし！こんなの認めないし！」

「お前の認可など不要だ。学校が認めるのだから」

「つ！今すぐ私を救済するために貴方達は1000万支払いなさい！そうすればこれまでの愚行を業腹だけど特別に許してあげるわ！」

茶柱先生の一蹴に雪ノ下は俺達にポイントを出すように言ってくるが……

「いや、別にお前の許しなんか要らないし」

「だな」

「ですね」

「全くよ」

俺の返答に龍園と有栖と神室が一斉に頷く。

「良いから出しなさいって言ってるのよ！下等な癖に反対しないで頂戴！」

ここで雪ノ下がキレて詰め寄ってくるので、龍園が真鍋と諸藤にやった時みたいにわざと攻撃を受けろか。

そう思っていると……

「はい、そこまで」

聞き覚えのある声が聞こえてきたかと思えば、俺と龍園の間を人が通り過ぎて……

「姉さ……かはっ！」

人……雪ノ下陽乃さんがこっちにやってくる雪ノ下に対して綺麗な一本背負いを叩き込んだ。

雪ノ下がピクピクする中、俺達は余りにも綺麗な弧を描いた一本背負いに息を呑むの  
だった。

## 亀裂

「やれやれ……来て早々に馬鹿をやらかしてるとはね……つと、比企谷君ひやつはろゝ、有栖ちゃんに六助君もひやつはろゝ」

突如現れて雪ノ下に見事な一本背負いを決めた陽乃さんは何事もなかったように俺や有栖や高円寺に挨拶をする。

「……どうもつす」

「え、えーと、ご機嫌よう」

「はっはっはっ、ユニークな挨拶だな陽乃。久しぶりではないか」

「うんうん。3人とも元気そうで何よりだよ。馬鹿な妹が散々迷惑をかけたわね」

「ちよっ！いきなりゆきのんに暴力を振るって、馬鹿呼ばわりなんて酷すぎませんか！」

陽乃さんがそう口にするのと由比ヶ浜が文句を口にするが、陽乃さんは馬鹿を見る目を由比ヶ浜に向ける。

「何だガハマちゃんか。私は事実を言っただけよ、小学校時代から学校の先生から雪乃ちゃんに関する苦情が沢山送られたし、どうせこの学校でも迷惑をかけてばかりでしょ

「？」

「当たり前です、はい。」

「そんな事ないです！この学校では皆、ゆきのんをよつてたかつて虐めたんです！」

「どうせ雪乃ちゃんも調子こいた事を言つて周りを見下したんでしょ、自業自得じゃん」  
「当たり前です、はい。教室に入る皆がうんうん頷いている。」

「何で?!何で姉妹なのにここまで酷い事を言えるんですか?!ゆきのんが可哀想だと思わないんですか?!」

「全然。私のデッドコピーな上、人間性に問題があるからつて実家の手伝いから逃げて、家の手伝いはしないのに一人暮らしがしたいつて我儘を言う凶々しさを持つて、その癖自分を絶対視する出来損ないに同情する必要ないから。それにこの退学が、今回の仕事に支障をきたす可能性もあるし、お父さんもカンカンだから」

「そんな風に口にする陽乃さんの目は絶対零度の眼差しだった。しかし……」

「今回の仕事つて何ですか?というか何でここにいるんですか?」

「基本的に外部からの来校は出来ないはずだ。」

「それはね、この学校内にあるショッピングモールの改装工事の依頼が雪ノ下建設に回つてきたからだよ。で、私は今大学に通いながらお父さんの秘書のバイトもやってるからこの学校に来ただけで、打ち合わせ最中に学校から「おたくの娘さん、退学処分

「なったんで迎えをお願いします」って来たんだよ」

わーお、そう来ましたか。

しかし打ち合わせ中にそんな連絡が来たら、メチャクチャ気まずいだろうな。

「で、私が校舎に来たらガハマちゃんの騒ぎ声が聞こえてきたから行ってみたら雪乃ちゃんが暴れたから取り押さえて今に至る訳」

なるほど……

「そんな訳だから雪乃ちゃんは回収するから。どうせこれまでも他人に迷惑をかけてたんだろうし、これ以上身内の恥を晒すのはゴメンだから」

「待ってください！退学になったらゆきのんは……！」

「大丈夫だよ。雪乃ちゃんは退学になっても、彼女を性奴隷にしたいお偉いさんがいるから、雪ノ下家とのパイプに使えるから」

まあ雪ノ下の性格を考えたらそれくらいの使い道しかないよな。

「い、嫌よ……何で、私が、そんな……」

ここで雪ノ下が床に倒れながら弱々しく反論する。

「何？起きてたの？雪乃ちゃんに拒否権はないからね。雪乃ちゃんの政略結婚は入学前から決まってたから……まあ予想より無能だし性奴隷か肉便器が関の山だろうけど」

「そーいや入学前にもそんな事を言っていたな。」

「ちなみに政略結婚を拒否するなら絶縁だから。これも入学前から決まっていた事だから、どっちを選ぶかお母さんと話し合つてね」

陽乃さんの容赦ない指摘に雪ノ下は後がないと判断したのか真つ青になってガタガタと震え出す。

「そんな……実の妹に対してあんまりですよ！」

「何で？義務教育の中学までは面倒を見るのは当たり前だけど、今後高校や大学の学費を出す義理はないよ」

由比ヶ浜の文句に陽乃さんは冷たい眼差しで一蹴する。

「というか他人の家の問題に口挟まないでくれない？ガハマちゃんは関係ないじゃん」

「関係あります！ゆきのんの友達です！」

「あらあら、それは可哀想ですね」

「ここで有栖が嘲笑を浮かべると由比ヶ浜の怒りの矛先が有栖に向けられる。

「どういう意味だし！」

「言葉通りです。私達は賞賛票を貴女や須藤君や山内君に入れました。雪ノ下さんに入れなかった理由ですがね……由比ヶ浜さんの友達だからですよ」

「っ！」

その言葉に雪ノ下は目を見開く。

「元々雪ノ下さんは気に食わないですが、一番気に食わないのは由比ヶ浜さんです。ですから由比ヶ浜さんに対する一番の嫌がらせとして、唯一の親友の雪ノ下さんを狙いました。由比ヶ浜の親友で無かったら雪ノ下さんを狙っていません」

その言葉に雪ノ下は戸惑いながら由比ヶ浜を見て、由比ヶ浜は激昂する。

「ふざけんなし！そんな理由でゆきのんを狙ったの?!最低!」

「どうか何で俺には賞賛票を入れなかつたんだよ!」

「……ここで池も激昂するが……」

「元々、須藤君か山内君も消す候補でしたのでサイコロで決めた結果、貴方が標的になっただけです。運が悪かつたと諦めてください」

しよせんはそんなものだ。同じくらい消えて欲しい相手が複数いたら、サイコロとかで充分だろう。

「ふざけんじゃねえよ!」

池は激昂しながら有栖に突撃するが、神室に足払いで転ばされてからそのまま拘束される。

「クソツ!離せよ!」

池は喚くが学年上位の身体能力の神室の拘束かは逃れられずにいる。

「ありがとうございます真澄さん……それにしても雪ノ下さんはどうですか? 由比ヶ浜

さんの友人になつたから退学になつた気分は？」

「黙り、なさい……！」

雪ノ下は怒りに満ちた表情になるが、一本背負いのダメージがデカいのか起き上がれずにいた。

「しかし雪ノ下さんは何故由比ヶ浜さんの友達になつたのですか？ 由比ヶ浜さんは学力も身体能力も学習能力も低い人です。貴方はそう思わないのですか？」

「つ……でも、由比ヶ浜さんは優しくして「ただ都合のいい存在と思っただけでしょう？ 貴女の家はお金持ちですから」そんな筈は……！」

雪ノ下は反論しようとするが、退学が決まつたからか、一本背負いを食らつたからか、陽乃さんから暗い未来を告げられたからか、いつもより弱気になっている。

「適当な事言ふなしチビ！ そんな陰湿だからチビなんじゃないの！ これだから貧乳は……！」

ピキツ ピキツ

「……………つ」

由比ヶ浜の罵倒に有栖は額に青筋を浮かばせ、龍園と神室は震えながらそつぽを向く。

「由比ヶ浜さん……」

雪ノ下は信じられないといった表情を浮かべる。まあ雪ノ下も貧乳だからな。精神がボロボロになってきている状態で今の発言はキツいだろう。

「相変わらず幼稚な発言ですね。それにしても雪ノ下さんと離れ離れになるのが嫌なら貴女も自主退学すれば良いじゃないですか？」

「はあ?!嫌に決まつてるじゃん!退学するなんて馬鹿じゃないの?!」

「っ!」

売り言葉に買い言葉……いや、有栖が狙っているのだろうが、さつきから由比ヶ浜の発言は雪ノ下に多大なダメージを与えているな。

「なるほど……どうやら友達と思っていたのは雪ノ下だけみたいだな」

龍園が嘲笑を浮かべながら雪ノ下を見る。雪ノ下を見れば由比ヶ浜に対して負の感情を宿し始める。

「みたいですね。どうですか雪ノ下さん?由比ヶ浜さんは全てにおいて弱者であるのに、優しくしてあげた貴女に対して雑な対応をする本当の屑です。そんな屑の友達として退学は実に惨めですね」

「っ!ああああああああああつ!」

有栖の容赦ない一撃に雪ノ下はヒステリックに叫び出す。怒り、屈辱ら悲しみなど様々な負の感情が爆発したようだ。

「ゆきのんっ！大丈夫?!ゆきのんっ！」

由比ヶ浜が雪ノ下を呼ぶが……

「……りなさいっ」

「え？」

「黙りなさいって言ったのよこの無能がつ！」

雪ノ下は敵愾心剥き出しの表情になって由比ヶ浜を睨む。

「ゆきのん……?」

「その気色悪い名前で私を呼ばないで！貴女の無能の所為でこんな事になったのよ！ふざけないで！」

「待ってよ、ゆきのん。あたしは無能なんかじゃ「毎回赤点ギリギリの癖にどの口が言うのよ！」ひ、酷いよお……」

「どこがよ！私の人生滅茶苦茶よ！貴女みたいな無能、助けるべきじゃなかったわ！」

「つ……!なにその言い方！ゆきのんだって人を悪く言っただけじゃん！それが敵を作ってんじゃないの?!」

「貴女の存在の方が敵を作ったわよ！この屑！」

「はあ?!高飛車女よりマジだし！さっさと退学してよ！邪魔！」

物凄い醜いぶつかり合いが展開される。仲の良かった者同士がこれだから人間は恐

ろしいな……

そんな風に思っていると……

「はい、煩い」

「がはっ！」

陽乃さんが雪ノ下に2回目的一本背負いを放ち、黙らせるのだった。  
やっぱり暴力は立派な武器だな、うん。

## 退出

「ではポニーテール先生、愚妹は私が職員室に連れて行きましようか？」

陽乃さんは雪ノ下に一本背負いを決めてから、そのまま茶柱先生に質問する。

「あ、ああ。頼む、池も退出しろ」

「嫌だ！俺は退学しねえ！こんな理不尽な試験で退学するなんて絶対嫌だ！由比ヶ浜が退学になるべきなんだよ！」

茶柱先生の命令に神室に拘束された池が喚きながら反対する。

「ふざけんなし！アンタが無能なんだから悪いんじゃない！自業自得なんだから諦めるし！」

由比ヶ浜が池に怒鳴るが、俺達の干渉が無かつたらお前は退学になっていたからな。

「……なあ、坂柳ちゃんに龍園！頼むよ！これからDクラスを裏切り続けて、お前らのクラスに役立つから1000万ポイントで助けてくれよ！」

池が堂々と裏切りを公言しながら助けを求めろ。

「お断りします。スパイを作るとしても貴方のような愚者より、一定以上の実力者にします。そもそも堂々と裏切りを宣言した以上、私達が助けても貴方はクラスの作戦会議で省かれるでしょう」

「それ以前にお前と雪ノ下が退学しても屑は3人いるし、鈴音や佐倉、本堂や井の頭などのお荷物が多いいし、何より由比ヶ浜がいる時点で幾ら綾小路や高円寺がいてもクラス単位の繁栄はないだろうが」

しかし有栖や龍園は一蹴する。まあ当然だろう。スパイを作るならもつと頭のいい奴にするし、Dクラスには足手纏いが多過ぎる。

「何ですって！私がこんな低脳どもと一緒にしないで！」

「誰が低脳だし！グループ1つ作れないアンタが見下さないでよ！」

「頼むよ！俺は退学したくねえ！そもそもこんな試験認めてねえよ！」

もう完全にメチャクチャだな……

「早く退出したまえ池ボーイ、君がいると騒ぎが収まらない」

ここで高円寺がそう口にするが、池が退出しても由比ヶ浜あたりは止まらないだろう。  
う。

「ふざけんよ！俺はこんな所で終わるところじゃない！」

「それ以前の話だ。盗撮をしてバレたのに、全く懲りずに日頃から女性の処女を求める

事を公言している君は既に終わっている」

完全に屑じゃねえか。寧ろ何で自分が終わってると認識出来ないんだ？

「煩えよ！良いから助けろよ！お前も金持ちだろうが！」

「やれやれ、本当に醜い生き物だ。まさに不良品という言葉に相応しい」

「うあああああつー！」

高円寺の煽りに池はブチ切れ、火事場の馬鹿力か神室の拘束を振り解いて、高円寺に突撃をする。

しかし……

「ふっ」

「つーがはあつー！」

高円寺はゆつくり立ち上がり、突撃してくる池に一本背負いをして、そのままノックアウトさせる。綺麗な弧を描いているな。

「おー、相変わらずの腕前だね」

「当然さ。完璧という言葉は私の為に存在する」

陽乃さんの絶賛に高円寺は笑いながら髪の手入れをするが、コイツの場合、実際に完璧だから特にムカつかないな。以前に雪ノ下が言った時はイラつとしたけどな。その癖、体力がない事を指摘したらキレたし。

「……とりあえず他の皆はもう帰って構わない。池は私が連れて行く」

茶柱先生が池を起こし、肩を掴む。

「じゃあ私も愚妹を連れてくね。今後も打ち合わせでこの学校に来るかもだけど宜しくね……まあ契約を打ち切られるかもしれないけど」

陽乃さんは雪ノ下の腕を掴んで、そのまま引つ張っていく。わざわざおんぶしないで引き摺るあたり、相当不満が溜まつてるのだろう。

「ふんっ！良い気味！」

由比ヶ浜は雪ノ下を鼻で笑って教室から出て行くが、これで味方が1人もいなくなつたのに気付いてないのか？

「では私達も帰りましょうか……ああ、榎田さんと綾小路君はプロテクトポイント獲得おめでとうございます」

「うん、ありがとうね坂柳さん。ちよつと荷が重いかもしれないけど大切にするよ」

「そんな事ありませんよ。堀北さんなどと違って持つに相応しい人間だと思えます」

「だな。鈴音みたいな無能が持つより、クラスを纏めらる奴が持つべきだろ。鈴音みたいな無能が持つよりな」

有栖と龍園は榎田を褒めるのを利用して堀北をdisってきて、堀北は真つ赤になつて震え出す。

「ダメだよ2人とも。確かに堀北さんはただ大好きなお兄さんみたいになろうと一生懸命頑張ってるだけなんだから」

榊田は堀北を庇うような発言をするが……

「っ！黙りなさい！」

パアンツ！

「きゃあっ！」

兄の話をさせられたくないのか堀北は怒りの声をあげて榊田にビンタをして榊田を倒す。

「ふざけんじやないわよ！榊田さんに暴力を振るうなんて最低！」

「恥を知らなさいよ屑！」

「退学候補の癖に身の程を弁えろや！」

「高飛車女とセクハラ野郎が消えて榊田ちゃんのストレスが軽くなると思った矢先に！」

「やっぱりお前つて雪ノ下とそっくりだな。上の兄妹が遥かに優秀なところとかな！」

「これからアンタは雪ノ下2号よ！」

榊田に対するビンタにDクラスから怒りが爆発する。

当然だ、榊田はこれまでクラスを纏めていたし、由比ヶ浜を半年以上庇うほどの精神

力を持っているし、基礎能力も高いし、多少態度や口が悪くなくても由比ヶ浜や雪ノ下みたいに理不尽な発言はしないから学年でも人気者だ。

「っ！」

皆に責められまくった堀北は居心地悪そうに教室から出て行くが、今後はマジで雪ノ下2号の扱いを受けるだろう。

「ごめんね、見苦しい所を見せちゃった」

「お気になさらず。それよりストレス発散は今日でしょう？しつかり発散しないと禿げますよ」

「ちよつと！シャレにならないよ！」

榊田は焦るが、実際禿げそうだから同情出来る……

「失礼しました。ではご機嫌よう」

有栖が一礼してDクラスから出て行くので俺達も教室から出て行く。

「で？Aクラスのお前らは元葛城派の雑魚を消したのか？」

「ええ。元葛城派の中で実力が低く私を気に入らない2人を消しました。最初はBクラスとの契約を切る為に消す事を考えましたが、裏切り防止を優先しました」

まあそれも正しいな。

「Bクラスは単純に実力の低い生徒ですよね？」

「ああ。真鍋のグループはぶつち切りな雑魚な挙げ句、軽井沢に暴力を振るつたらしいからな。残す理由を見つけるのは至難だ」

「え？怪物の女に手を出すなんて真正正銘の馬鹿でしょ」

神室が呆れ顔を向けるが、それは綾小路が実力を曝け出す前だからな。仕方ないといえど仕方な「何処見てんだし！邪魔！」い……アイツは何をやってんだ？

声が聞こえてきた右側を見れば由比ヶ浜が肩を怒らせながら一之瀬のグループの横を通り過ぎようとする……が、白波が足を引っ掛けて転ばせる。

「へぶっ！」

「あつ、ごめんごめん。反省してないけど許してよ」

「ふざけんなし！わざとでしょ！」

「うん、わざとだよ」

白波が黒い……由比ヶ浜が絡むと龍園レベルでダークになるな。

由比ヶ浜が怒りながら起きようとするが……

「おっと、足が滑った」

「きゃあつ！」

姫野が肘打ちをして再度転ばせる。有栖は笑顔でサムズアップしてるし。

「っ！暴力なんてマジ最低！絶対に訴えてやる！」

由比ヶ浜はそのまま職員に向かうが、絶対に一蹴されるだろう。

「はあ……本当にムカつくわね……」

「だよね……あ、比企谷くん達じゃん。お疲れ」

白波が手を振ってくるので会釈する。

「災難でしたね」

「まあDクラスから浮上の目を奪うのは納得だけど、ウザいのは変わりないよ……今夜は一杯攻めてね。そろそろお尻の穴も比企谷君に攻められたいな」

「馬鹿の相手でストレス限界だしね。後今日は安全日だから龍園君はゴム無しでお願いね」

白波と姫野のおねだりに網倉と小橋は真っ赤になって俺と龍園の下半身を見て、神室は真っ赤になりながらそっぽを向いて、一之瀬は複雑そうな表情を向けてくる。

「わかったよ……というか、今日から網倉と小橋も参加するんだよね？」

龍園の問いに網倉と小橋は恥ずかしそうに頷く。

「どうするの？結局帆波ちゃんは参加する？」

「わ、私は良いかな……」

「そうですか？では私と一緒に見学しませんか？」

有栖に一之瀬に誘いをかけるが、有栖はハメ撮り動画を見る事はあるが部屋に来る事

はこれまでに無かったし意外だ。

「えっ……でもっ」

「遠慮なさらずに。では夜にまた」

有栖がそう言つて歩き出すと手招きしてくるので近寄ると……

「良い機会です。暫くは私も見学しますが、その際に一之瀬さんを虐めましょう。私、雌犬を飼いたいと思つていたので」

それはそれは良い笑顔で俺と龍園に言ってくる。

「まあ俺も乳牛を欲しかったからな。強力な媚薬や手錠や首輪や鞭は貸してやる」

「随分とマニアックですね」

「ユキの奴は2人きりだとマゾになるからな。手錠をしてからの中出しをすると完全に雌犬になる」

「それは見てみたいですね……あ、真澄さんも来てくださいいね」

コイツら、物凄くイキイキで完全に一之瀬を奴隷落ちさせようとしているのがわかる。綾小路もノリノリに参加するだろうし、流れに身を任せるか。

俺は内心ため息を吐きながら、ゲスい打ち合わせをする2人を神室と眺めるのだつた。

## 無能

「では雪ノ下はこの書類をサインしろ」

「嫌よ！私はこんな所で無能な連中に足を引つ張られる存在じゃないのに「嫌いよ雪乃ちゃん。さつさと書いて」痛い！離しなさい！」

職員室、退学後にこの学校の実態を話さない事を約束させる誓約書を前に雪ノ下は抵抗するが、姉の陽乃が髪の毛を引つ張る事で肉体的にも精神的にもダメージを与え続ける。

「さつさと書いてくれない？雪乃ちゃんがグタグタしてたら、こつちの仕事も切られる可能性があるの。雪乃ちゃんのお父さんもお母さんも私も迷惑に思ってるの。これ以上迷惑をかけないで。2年前のクリスマスイベントで最後にして欲しかったのに」

「う、嫌い……アレは海浜の無能どもが悪くて、私は悪くない「いやいや、罵倒しまくった時点で悪いからね？」事実を言っただけよ……！」

雪ノ下は過去の嫌な事件に対して全く悪くないと思つてゐる。

「事実なら何を言つても良いんだ？じやあ言うけどさ、出洩らしが文句言つてないでさつさと誓約書にサインしてよ。出来損ないが無駄な抵抗しないでくれる。愚妹の愚かさは前からわかつてるけど、私やお父さんや先生に迷惑をかけないで……出洩らしも出来損ないも愚妹も事実だから文句無いよね？」

「つ……黙りなさい！私はもう姉さんに屈しないわ……！」

陽乃の容赦ない言葉の刃に雪ノ下は齒軋りしながら反抗する。しかし退学処分が決まったから、行わないといけない手続きを拒否しているだけなので側から見たら見苦しい事この上ない。

「はあ……もう良いや」

ゴキントツ　ゴキントツ

面倒になつた陽乃は妹の両肩を関節を外す。

「つ……があああああああああつ！」

いきなりの激痛に雪ノ下は絶叫を上げるが、陽乃は無視してペンを持つて茶柱を見る。

「すみません。妹は肩を怪我してペンを持ってないみたいですから、私が書きますが宜しいですか？」

「……………ああ」

茶柱はビビりながらも頷く。とにかくゴネ続けた雪ノ下にはウンザリしていたし、何より陽乃に逆らつてはいけなないと本能が訴えていたからだ。

茶柱が頷いたので陽乃が代筆して、そのまま閑節をはめ直す。

「で、この後はどうするんですか？ 終わりなら引き取りますが」

「保護者と話すが今は打ち合わせだろうし」それには及びません。私が話をします」……  
雪ノ下の保護者ですわね」

「あ、お母さん」

着物を着た女性は丁寧な礼を茶柱にしてから雪ノ下に対して絶対零度の眼差しを向け、向けられた雪ノ下は痛みによつて苦悶の表情を浮かべながらも震え出す。

「馬鹿のお守り、ご苦労様でした。お父さんの所に戻って良いわ」

「うん、わかった」

陽乃は特に逆らう事なく職員室から出て行く。

「お待たせしました。では手続きを宜しくお願いします」

「はい。では保護者の方はこちらにサインをお願いします」

保護者にも似たような誓約書を書いてもらう必要があるので茶柱が差し出すと、スラ  
スラと書いて返される。

「確かに受け取りました。ではこの時をもつて御息女はこの学校の生徒ではないので、連れて帰ってください。寮の私物は後日郵送します」

「ああ、それは結構です。そちらで処分して貰えますか。もうこの子とは絶縁、又は一切自由を与えない生活を送らせるので」

平坦な声で当然のように言われ茶柱は冷や汗を流し、雪ノ下は真つ青になる。

とはいえ親がこういう以上、茶柱に逆らう選択肢はない。

「承知しました。荷物についてはこちらで処分しておきます」

「宜しく願います。それでは失礼しますが、余り無理はしないように。見たところウチの出来損ないが迷惑をかけたようで」

「……いえ、そこまでは「もう正直に言っても大丈夫ですよ」……そうですね。貴女のご息女は他人を見下し、罵倒をしてばかりで苦情が多く寄せられてきてストレスの種でしたよ。失礼を承知で言いますが、貴女の教育を疑います」

これまでのストレスから茶柱は容赦ない毒を吐く。教師としては問題ある態度だが、他の教員は茶柱の呪詛を聞かなかつた事にする。

実際五馬鹿によって沢山の人間がストレスに苛まれている。中でも特に担任の茶柱や生徒会長の南雲は精神的に疲弊していた。

結果的に茶柱は胃が空いて精神科医の治療プログラムを受けていて、南雲はスト

レスのあまり脂っこい料理を摂取できず、女遊びなどもする氣を失せていた。

「大変申し訳ありませんでした。幼少期から姉と違つて無能な為、放置していましたが徹底的に教育するべきでした」

實際陽乃にはお偉いさんとのコネクションの作り方とか社交パーティーでの振る舞い方などを教えていたが、他人との協調性が皆無で家にダメージを与えるであろう雪乃に対しては放置していたが、大きな間違いだった。

「見た感じ、精神的に疲弊しているようですが、大きな間違いですが精神科の治療を受けているなら全額負担しますので言つてください」

「大丈夫です。学校の経費で通つていきますので。それにご息女も屑ですが、それ以上の屑が学校に……コホンツ、今のは聞かなかつたことに」

茶柱は咳払いをする。由比ヶ浜についてはまだ在籍しているので第三者がいる場所で屑呼ばわりするのは問題行為である。

「わかりました。聞かなかつた事にします。では私達は失礼します。貴女も屑を視界に入れていたら辛いでしょう」

2人のやり取りに雪乃は齒軋りをする。自分は優秀な人間と疑つていない自分からしたら、ここまで屑呼ばわりされるのは屈辱だった。

「行くわよ雪乃。さっさと立ちなさい」

そんな命令に雪ノ下は齒軋りをしながら、最後に茶柱を睨みつけてから職員室を出て行く。

(よくも私をこんな目に……絶対に許さないわ……！)

廊下を歩く中、雪ノ下は全く自分を省みることなく憎しみを高めていた。

優秀な自分を貶めたクラスメイト、自分の足を引っ張り続けた由比ヶ浜、備品の癖に自分より上の地位にいる八幡、無能の癖に王様気取りをする有栖や龍園、自分を問題児扱いする教員……

それら全て雪ノ下の敵であり、世界を変えるにはこんな層共を排除しないといけない……

雪ノ下はそう決意するのだったが、この時の彼女は知らなかった。

自分の未来は「性欲ギンギンの太ったお偉いさん相手に枕を担当する事」、「橋下のホームレス達の肉便器になる事」の2パターンしかないという事。

数時間後……

「お邪魔しまーす」

「邪魔するよ」

「お、お邪魔します……」

乱交部屋にて白波が元気よく、姫野はいつも通りに、網倉と小橋が恥ずかしそうに入ってくる。

「ん？一之瀬は来ないのか？来ると聞いてるが」

綾小路が飲み物に超強力な媚薬を仕込みながら質問する。

「声をかけたけど、恥ずかしいって遠慮されちゃった。それと麻子ちゃんと夢ちゃんは最初は見学で、場合によって参加しないから」

「それは聞いている。まあ無理強いは出来ない」

俺は白波にそう返す。これまで抱いた相手は同意の上で行っているが、同意抜きだと犯罪だからな。

「う、うん。それにしてもこんなにいるんだ」

網倉が真っ赤になって周りを見る。そこには櫛田、佐藤、松下、王、長谷部がゴロゴ

口していて、更に白波と姫野を加えて7人となる。

と、ここで玄関のドアが開き、有栖と龍園と神室が入ってくる。龍園の手には鞆があり、手錠や鞭や媚薬がチラツと見える。

「二之瀬さんは恥ずかしくて来てないのでしょね、まあ部屋の鍵は渡しましたから来ることを期待しましょう」

「帆波ちゃんも勿体無いな。セックスは最高のストレス発散方法なのに」

「そうですよね。膣とアナルと口に同時におちんちんが入るのは最高です」

「二二二いや、それはみーちゃん（王さん）だけだから」

榎田と佐藤と松下と長谷部と白波と姫野が一斉に首を横に振る。二穴攻めなら経験してる女子はいるが、口を含めた三穴を経験してるのはみーちゃんだけだ。

しかもみーちゃんは「3本のおちんちんに同時に激しく攻められて気絶する瞬間が最高です」と言ってるし上級者にも程がある。

「何にせよ揃ったし始めようよ。今日の試験で馬鹿2人が最後まで醜く喚いてウザかったしね」

そう言つて榎田は制服を脱いで上下ピンクの下着姿になり、それに連れて他のセフレ達も次々に下着姿になる。

そんなセフレ達に対して俺達も服を脱いでいき、一糸纏わぬ姿になる。

「あわわわっ！」

「ほ、本当にするんだ」

「直で見るのと映像で見るのは差がありますね。躍動感を感じます」

「あ、アンタは見慣れてるのね」

網倉と小橋は真っ赤になって両手で顔を覆うが、指と指の間からこつちを見て、有栖は冷静に解説して、真澄は真っ赤になりながらもこつちをガン見してくる。

そんな中、白波と松下が俺の所に、佐藤と長谷部とみーちゃん綾小路の所に、櫛田と姫野が龍園の所に近寄ってから身を屈め……

ちゅっ ちゅっ ちゅっ ちゅっ ちゅっ ちゅっ ちゅっ

同時に3本の男性器にキスをしてくる。

それが快樂の夜の引き金となるのだった。

## 狂宴

「今頃、千尋ちゃん達はエッチしてるのかな……」

一之瀬帆波は顔を熱くしながら机の上にあるカードキーを見る。部屋にあるテレビから流れるニュース音声が部屋全体に響き渡る。

これは有栖から渡された乱交部屋のカードキーだ。有栖や白波に乱交パーティーの見学を誘われたが、恥ずかしくて断った一之瀬に有栖が「気が向いたら来てください」とカードキーを渡してきたのだ。

流石に捨てるわけにも行かずに持て余している一之瀬だった。

と、その時だった。

「次のニュースです。????県にて男子高校生3人が女子高生9人を半年以上襲っていた事が判明しました。被害者はその時の行為を記録され、弱みを握られていた為、判明が遅れたとの事です」

「っー」

テレビから聞こえるアナウンスに一之瀬は息を呑む。

男子高生3人……八幡に綾小路に龍園

女子高生9人……白波に網倉に小橋に姫野に榎田に松下に王に佐藤に長谷部

偶然とは思えないタイミングに一之瀬は嫌な予感を感じながらカードキーを持って部屋を出る。

(もし麻子ちゃんと夢ちゃんが弱みを握られたら……)

既に経験済みの7人はまだしも、今回初めて関わる網倉と小橋には万が一の事もあるかもしれない。

一之瀬はそのままエレベーターを使って、乱交部屋のある階層に移動して、カードキーを使って開ける。

中に入ると嬌声が聞こえてくる。本当に乱交が行われているようだ。

一之瀬は玄関の鍵を閉めてから靴を脱ぎ、廊下を走り、リビングに繋がるドアを開けると……

「ああんっ！凄いつ！セックスってこんなに凄いのんあっ！ああんっ！ダメエ！」

「麻子ちゃん、楽しそう……これからも一杯楽しもうね」

「次は私と一杯してください……！」

快樂の宴が行われていた。

ソファの上では八幡が恍惚の表情を浮かべる網倉麻子と正常位の体制でセックスをしながら、白波と王は八幡の腕にパイズリをして……

「あっ！あんっ！やあ！龍園君、上手過ぎだよっ！んっんっんっ！ユキちゃん！ダメエ！」

「小橋さん、エロ過ぎ。もつとエロくするから。んむっんっ！」

「んっ！んっんっんっんっんっ！」

キッチン近くの近くでは龍園が小橋夢と駅弁スタイルでセックスをしながらキスをして、姫野は小橋の耳を舐めまくり、佐藤は身を屈めながら龍園の男性器の根元をしゃぶり……

「ひゃんっ！きよぼんのおちんぼ、やっぱり凄く破壊力んあっ！お尻はダメエ！やあんっ！」

「良いね！綾小路君の舌のテクは随一んあんっ！そこっ！良いよお！」

「長谷部さん、声がエッチだね。もつと出してよ……」

床では長谷部が綾小路の上で騎乗位で夢中になって腰を振り、櫛田は綾小路の顔面の上に乗って膣を舌で攻められて喘ぎまくり、松下は長谷部の背後から胸や耳や首筋やアナルを舌や手で攻めまくっていた。

そしてベッドの上では有栖と真澄がカメラを片手に情事を撮影している。

部屋中に雄と雌の臭いが充満する中、一之瀬が絶句してしまう。網倉も小橋も普段の

可愛らしい笑顔は鳴りを潜め、雌の表情を浮かべて八幡や龍園を求めている。

無理矢理襲っていたのなら何をしてでも止めていたが、明らかに和姦である為、身動きを取れずにいた。

「おや、一之瀬さんではないですか？ 気になってきたのですか？」

有栖は一之瀬に気づいて手招きしてくるので手持ち無沙汰だった一之瀬はゆっくりとベッドに近寄り腰掛ける。

「あ、帆波ちゃん来たんだ。やつほー」

近くで八幡の腕をパイズリしていた白波が手を振ると網倉も一之瀬に気づいて真っ赤になる。

「ほ、帆波ちゃん?! 見ないで! 恥ずかしいんあつ! 比企谷君つ! そこはダメエ! んあつ! ああんつ! 気持ち良過ぎてあんつ! おかしくなつちやう!」

「良い顔だな。やはり快樂に身を任せてる面も悪くないが、恥じらいのある表情も良い」  
「んああああつ! ダメエツ! もう虜になつちやう! ああん!」

八幡のテクニクに網倉は逆らうことは出来ず、恥じらいながら淫らに喘ぐ。

「どうですか一之瀬さん? 元氣一杯の親友の網倉さんがこのように乱れていると背徳感を感じませんか?」

「やめて……麻子ちゃんはそんなんじや……何をしたの?」

不安そうに尋ねる一之瀬に有栖は首を横に振る。僅かにだが情欲を感じながら。下手に焚かれた媚薬成分のあるアロマや雄と牝の臭い、嬌声が増長させる。

「私は何もしてませんよ。馬鹿女によつてストレスが溜まっていた彼女達は刺激を求めているでしょう。最初は普通に見学していましたが、途中から自慰行為を始め、先程白波さんと佐藤さんと松下さんが淫らに1回戦を済ませた時に興味を持ったらしく、「怖くなったらやめたい」を前提に参加を希望しただけです」

それは紛れもない事実である。実際のところ、無理矢理手を出すのは論外であるので八幡達は同意を得てから手を出している。当然常識だからな。

「最初は前戯だけど、呆気なく絶頂して更なる快感を求めていたわよ」

有栖の返事に神室も追従する。

実際八幡も綾小路も週に何回も恋人を抱いているので、その経験から女の弱点を探するのは容易い。

龍園に至つては殆ど毎日セフレにストレス発散に付き合わされているので睡眠不足と引き換えに圧倒的なテクニックを身につけて、普段敵対関係の一之瀬の親友の小橋に對して弱点を攻めまくり快感を与え、現在は小橋の方が積極的に腰を振っているくらいだ。

「ん？一之瀬も来たのか？まあゆっくりしてけよ」

龍園がニヤニヤ笑いながらそう口にする、小橋が腰を振りながら淫らな表情を一之瀬に向ける。

「んあつ！ごめん帆波ちゃん……！他クラスのリーダー、それもんあつ！帆波ちゃんと考えが真逆のああんつ！そこつ！龍園君とこんな事をするのはあ！ダメなんだろうけど、んあつ！やあんつ！おちんぽつ！しゅごく気持ち良いからあ！これからもやめられないよお！もつと！もつとそこを突いてえ！」

小橋は謝罪をしながらも龍園とのセックスに夢中になつて嬌声を上げ続ける。

それがまた一之瀬にシヨックを与えるが、同時に更に情欲が高まる。

そんな中、一之瀬の近くにいる綾小路の腰の動きが早まり……

「んっ！あああああああああつ！」

「ああんっ！私もダメエ！イっちゃうよおおつ！」

綾小路の巨根を受け止めていた長谷部と綾小路にクンニされていた櫛田が同時に絶頂する。

しかも綾小路が巨根を抜いた瞬間、長谷部の膣が潮が勢いよく噴出して一之瀬の肩と顔に少しだけ付着する。

「っ……」

牝の臭いに一之瀬は更に情欲が高まり、自身の下着に手を伸ばし……そのまま触れ

る。

「あ……」

一之瀬が蚊の鳴くような小さな声で喘ぐのを有栖は聞き逃さず、さりげなく胸ポケットにある小型カメラを起動する。

一之瀬はそれに気づかず、下着越しに秘部に触れてゆっくり擦り始める。

そんな中で正常位でセックスをする八幡と網倉、駅弁スタイルでセックスをする龍園と小橋、長谷部に代わって櫛田とセックスを始める綾小路を見ながら手の速度を早める。

そして……

「ああんっ！もうダメッ！比企谷君のおちんぼでおかしくなっちゃうよおおおおおおおっ！」

「ダメッ！イクっ！龍園君っ！私、イっちゃうよお！ダメエエエエエツ!!」

「んあああっ！綾小路君っ……あはっ！んあああっ！」

「んっ……はっ……！ああっ……！」

網倉、小橋、櫛田が絶頂する。その声をBGMに一之瀬の手の動きも早まり、遅れて

絶頂して下着を濡らす。

快感の余韻に浸る一之瀬だが、やがて楽しそうに笑う有栖を見て人前で自慰行為をした事を認識して……

「い、いめん！」

真つ赤になって立ち上がり頭を下げてから逃げるように部屋から出ていく。

「おやおや、行つてしまいましたか」

有栖は胸元にあるペン型カメラのスイッチをオフにしながらそう呟き、脅すことを察した神室は呆れた表情を浮かべる。

「最初は手早く媚薬浸けにしようと思いましたが、じつくりコトコト愉しみましようか」  
有栖は愉しげな笑みを浮かべながらそう呟きながら、アナルに綾小路の男性器、膣に龍園の男性器を、口に八幡の男性器を含み、嬉しそうに目を細める王を見るのだった。

結局、有栖は2時間後に帰るが、来週も一之瀬と一緒に見ることを決めていたのであった。

## 学年末特別試験

日曜朝6時、休日であるに加えて、昨日の試験の影響もあり大半の1年生は眠りについていた。

例外があるとすれば……

「ああん！そこだめっ！比企谷君のおちんちん無しじゃ生きれないっ！しゅき！だいしゅき！比企谷君のおちんちんだいしゅき……ひやああああんっ！」

「あっ！んっ！あんっ！そこっ、気持ちいいのお！綾小路君、いいよお！おちんちんで私を幸せにしてっ！メチャクチャにしてええええっ！」

「ひゃんっ！あんっ！やあ！んんっ！待って龍園君っ！私もうげんかんああああああっ

！」

乱交部屋にいるメンバーくらいだろう。今も風呂場で八幡が白波と、綾小路が松下と、龍園が榊田とセックスをして絶頂する。

絶頂した後は互いにキスを交わし合うが、他のメンバーは羨ましそうに見ている。

その中には今回初参戦の網倉と小橋もいる。2人は最初は緊張していたし、八幡と龍園にファーストキスと処女を奪われた際は動揺したが、セックスをする中で快感を与えられ続けた事で直ぐに動揺は消えて、セックスの虜になり、絶頂直後にされるキスからは幸せを感じていた。

「さて、次は誰が良い？」

綾小路の言葉に皆が一斉に手を挙げる。

「じゃあ早かった王、佐藤、小橋の順に選んでくれ」

「じゃあ私は龍園君でお願いします」

「私は綾小路君で！」

「じゃあ私は比企谷君だね、よろしく！」

3人はそう言つて尻を突き出してくるので3人はそのまま肉棒を突き入れて動き始めるのだった。

それから快樂の宴は朝の9時まで続き、11時に清掃を済ませたが、一部の物足りない女子はもつと龍園に付き合うように迫り、助けを求める龍園に対して八幡と綾小路はマツハで見捨てるのだった。

尚、その夜には八幡は恋人3人と、綾小路は恋人2人とセックスをしたので、男3人は寝不足になりながら朝を迎えた。

月曜日、追加の特別試験が終わって初めての登校だが、案の定真鍋と諸藤の机は無かった。その事にクラスメイトが引き締まる中、朝のHRの始まりを告げるチャイムが鳴り響き、坂上先生が教室に入ってくる。というか眠い……

「では朝のHRを始める。本来の特別試験の説明を始めたが……龍園に連絡事項だ。土曜日の真鍋さんと諸藤さんによるお前に対する暴力事件についてだが、向こうはお前の出した条件に示談を受ける事を承諾した。プライベートポイントは4月に振り込まれるが、今後呼び出しがあるだろうがその場合は応じるように」

「ああ、わかった」

龍園が眠そうながらもニヤリと笑いながら返事をする。やはり龍園は試験が終わってから乱交パーティーの間に警察をチラつかせて示談に持ち込もうとしていたようだ。

要求したポイントは100万くらいだろう。300万とかだったら高過ぎて拒否する可能性が高いからな。

「では学年末特別試験の説明をする。1年間を締めくくる最後の特別試験は、これまで学んできた集大成を見せてもらうことになる。知力、体力、連携、あるいは運など君達の持つ様々なポテンシャルを発揮する必要があるだろう」

やはりか。事前に仕込みをしておいたのは幸いだった。

「特別試験の名前は各クラスの総合力で競い合う『選抜種目試験』で、ルールに従って対決クラスを決めて行われることになる。ペーパーシヤツフルの時と同じようなものだ」

つまり事前に対戦クラスを申請するのだろうか。

狙うならCクラスだろう。Aとは同盟を結んでいるし、Dクラスは綾小路や高円寺のような怪物に加えて幸村や須藤や小野寺のように一点特化タイプがいるから油断は出来ないしな。

「まず、説明の際に分かりやすくするため、10枚の白いカード、そしてクラスの人数に合わせた黄色のカードを用いて話をしていく」

坂上先生は何も書かれていない白いカードを10枚黒板に貼り付け、その後に黄色のカードを37枚貼り付ける。

「坂上先生。黄色い紙が37枚しかありません」

真鍋と諸藤が消えたから38枚のはずだ。

「その理由は後で説明する。まず白い紙について説明するが、これは種目カードだ。君達が種目を決める……：そうだな、小宮君。何か選びたい種目はあるかね？」

坂上先生は目に留まった小宮に質問する。

「えっ……じゃあバスケット」

小宮は戸惑いながらそう口にする。

「バスケットだ。勝負内容は？」

「え？普通のルールで」

「つまり1クォーター10分で4クォーターの試合だな。これで1枠が埋まった」

坂上先生は白い紙に「バスケ、通常ルール」と書く。

「このように種目とルールを君達で自由に決めて私達に提出して貰う。ただし種目が同じでルールが違うケースは認めない。「バスケ 通常ルール」「バスケ フリースロー」みたいな種目の決め方は却下される」

サッカーだったら試合とPK勝負は同時に選べない感じが。

「ただし、自由とは言っても種目を決めるうえで決まり事は幾つか存在する。大勢が知らないようなマイナー競技やゲームを種目にすれば、提案者以外誰にも勝ち目がないから認められない。まあ種目のルールも公正かつ分かりやすいものでなければならぬ。そのため、種目提出後に学校側が適切かどうかを判断し、採用するかどうかジャッジを下す」

まあその辺りは当然だが……

「んじや坂上先生。ポケモンやモンハンはアリですか？」

俺が質問すると坂上先生は考える素振りを見せる。

「確かに世界的に有名だ。しかし判断がつかない。私もそれらのゲームは装備やポケモンを育てて戦うやり込み系のゲームくらいは知っているが、装備やポケモンを平等にして技術を競うべきという意見は出ると思う」

「でしょうね。ではモンハンで訓練所はどうでしょうか？これはゲーム内のキャラが用

意した装備で決められたモンスターと戦う純粋に鍛えた技術を活かすシステムです」

「そんなシステムがあるのか？それなら認められるだろうな」

「わかりました。では……は認められますか？」

俺の質問に教室にはどよめきが生まれ、坂上先生は難しい表情を浮かべる。

「……済まない。それはわからないから昼休みに会議を開き確認を取る。放課後までに返事をする」

まあ俺の質問はかなりグレーだからな。教師によつては反対してもおかしくないだろう。

「わかりました。宜しくお願いします」

「ああ。じゃあ本題に戻る。10種目を3月14日までに決めて貰って、3月15日に対戦クラスに発表する。ただし試験本番に全種目をやるわけではない」

そりやそうだ。各クラス10種目なら2クラスで20種目と多過ぎるわ。

「試験本番は3月22日だが、その日に本命を5種目選んで貰う。そして対戦クラスの5種目を合わせた10種目の内、7種目で戦って貰う」

つまり選ばない5種目をブラフとして上手く活用する戦術もアリって訳か。

「また種目の参加人数は最小で1人で最大で20人として、参加人数は全種目で別々とする。数学テストで参加人数を5人にしたら、英語テストで参加人数を5人に出来ない

……と感じた。ただし10人以上の種目は2つまでだ」

それなら上手く人数を散らす必要がある。場合によってこっちの雑魚を相手の種目につつけるのも重要になるからな。

「また基本的に1人1種目の参加だ。例外として7種目終わるまでに全員参加したら、また全員が参加出来る」

「坂上、種目の参加はどうやって決めんだ？種目の提出の際に名前でも書くのか？」

「今から説明する。先程黄色の紙が1枚足りなかったが、クラスの中から1名司令塔を選んで、司令塔が参加者を選ぶ」

「その様子だと司令塔はクラスメイトと別の場所で指示を出すんですか？」

「そうだ。司令塔は視聴覚室にて教師の立ち合いの下で、パソコンで参加者を選択する。また各種目に対して司令塔はある程度干渉出来る。数学テストの参加者1人の解答に対して3問だけ代わりに回答したり、相撲勝負と1回だけやり直しを認めたりと重要な役目だ」

「そりや重要だな。しかし司令塔は種目に参加できなそうだから慎重に選ぶ必要がある。」

「ただし司令塔は所属するクラスが負けたら退学になるペナルティがある。今日の放課後までに決めて貰う。決められなかったら私が独断で決めておく」

そう言っているがペナルティが退学である以上、プロテクトポイントを持っている俺か龍園がやるべきだろう。現にクラスメイトからは視線を向けられているし。

「そして勝敗条件は言うまでもなく7種目中4種目以上勝つ事だ。ただし先に4勝してもクラスポイントの変動もあるから7種目全て行う」

「クラスポイントの変動は？」

「勝利したクラスには学校から100クラスポイント、また勝ち星差1つに30クラスポイントだけ対戦クラスから奪える。つまり4勝3敗したら学校から100ポイントと対戦クラスから30ポイントで130ポイント、全勝したら学校から100ポイントと対戦クラスから210ポイントで310ポイント手に入る」

前にならずな先輩から聞いたが随分と動くみたいだ。これは重要だな。

「説明は以上だ。わからないところがあればルールブックを確認するように」

坂上先生はルールブックを置いて去っていく。同時に1時間目の授業が始まるチャイムが鳴るので授業の授業をする。

さてさて、どうするべきやら……

## ミーティング

「早速だが方針を発表する。今回の司令塔は俺がやって、対戦の決め方は知らねえが狙えるならCクラスを叩きに行く」

昼休みになると龍園が教壇に座ってそう宣言をする。

「え？龍園さんはプロテクトポイントを自爆戦術を使うためにとっておく為に比企谷に司令塔をやらせると思いました」

石崎がそう告げると龍園が首を横に振る。

「勝てるなら問題ねえよ。種目の決め方も知らねえが、相手の選んだ種目も勝ちに行くべきだからな。で、Cクラスは学力に関係する種目を選ぶだろうし、俺より比企谷の方が兵士として役立つ。ちょうど比企谷が布石を用意したからな」

「期末試験で手を抜いて成績を下げる事で、他クラスにBクラスの成績が下がったと誤認させることですね。そうなると今後勉強会は図書館を使わずに寮で行う必要があります」

「ああ。絶対にバレないように気をつけろ」

既にこのクラスの学力は相当上がっているし、他クラス相手にも良い勝負が出来るだろうし、試験まで努力しないといけない。

「でも何でCクラスなのよ？Cクラスって団結力が強いし、避けるべきなんじゃないの？」

伊吹がそんな質問をすると龍園は鼻で笑う。

「団結？仲良しこよしの間違いだろ？一之瀬はクラスメイトを平等に扱ってるが、実力者と雑魚を同じ扱いにしてる時点でリーダーの器じゃねえよ」

同感だ。社会主義じゃあるまいし、実力がある者が雑魚より評価され優遇されるのは当たり前だ。実際この状態が長引けば不満が爆発する可能性は充分にある。

「で、Dクラスは狙わない。Dクラスは屑が多いが綾小路や高円寺みたいな怪物がいるし、小野寺の水泳、三宅の弓道、王の中国語と一点特化の連中がいるから侮れない」

「や、でも参加人数は全種目別々ですよね？」

「参加人数が別々でもルール次第だ。例えば『中国語の小テスト、参加人数5人、ルールが制限時間20分で小テスト行い、1番高い点数を出した生徒の所属するクラスの勝利』だったら王1人いれば残りの4人を屑にしても問題ない」

「あつ、そっか！他にも勝ち抜き戦とかなら人数の問題を解決出来ますね！」

石崎は納得したように手を叩く。ウチのクラスでも『相撲 参加人数10人 勝ち抜き戦』とかならアルベルト1人いれば問題ないからな。

「他にも比企谷が朝のHRで提案した内容が可決すればCクラスは戦う準備が出来ないだろう」

「まあ念には念を入れて、俺の提案が可決されたら今日から全て奪っておくべきだな」

「資金は自由に使え。後、他にも普段からイチャモンをつけまくるべきだな。椅子の取り合い、廊下でのぶつかり、くしゃみの煩さなどを理由に絡みまくって精神的に疲弊させるか」

「やるのは構わないが、下剤とかの仕込みはやるなよ？ 非合法的なやり方はリスクがデカ過ぎる」

「ああ。相手を潰すなら最初の格闘技種目でのアルベルトが有力選手を壊しまくって、2周目以降の参加選手を減らすくらいだな」

「柔道なら慣れてない相手に一本背負い、相撲とかなら小手投げあたりか？ 禁止技だけは絶対にやるなよ？」

「わかってるよ煩えな。その辺りはしつかり下調べをしてだな……」

俺はルールは守る主義だからな。リスクとリターンはしつかり考えているが、この学校はルール違反に対するペナルティが厳しいからな。

「……以上が、ウチのクラスで出た質問です。皆さんはどのように考えているでしょう？」

「私はアリだと思えます。良いものは時間が経過しても良いものですから」

「私は反対です。常に進歩している以上、最新なものにするべきです」

「でも何でもかんでも新しい物にしたら、凝り過ぎて前の方が良かったって意見もありますよ」

「しかしCクラスには不利では？」

「Cクラスは追加試験と碌に向き合わなかった結果でしょう。学校の方針と真逆の道を歩むクラスの為だけに情けをかける必要はありません」

「待つてくださいよ。だからって戦いの土俵を立てないようにするのは狡いと思いません」

「別に他クラスからポイントを借りるなりやり方はありますが」

「では多数決にしましょうか」

「理事長代理がそう言うなら……賛成の人は手をあげてください。ありがとうございます  
す……では賛成16反対13で比企谷君の案は可決とします」

「では決まりですね……それと今回の会議内容について真嶋先生と星之宮先生と茶柱先生は質問されない限り自クラスの生徒の為に公表しないようにしてください」

「そうですね。特に星之宮先生は船上試験の前例がありますから信用に欠けますからな……今更ですが、何故一之瀬さんを龍グループにしなかったかお聞きしても？」

「坂上先生……（ギリツ）」

「ふむ、何があつた興味ありますね。坂上先生と星之宮先生以外は解散してください」

数時間後……

「では帰りのHRを始める。まず最初に連絡事項だ。比企谷君が朝言った提案は可決された。ただし希望する内容については事前に紙に書いて提出してくれ。翌日までに採

用が認められるか判断して返事をする」

坂上先生が教室に入りそう告げてくる。まあ提案が認められたからって好き勝手は出来ないよな。

「わかりました。既にリストは作ってるんでチェックをお願いします」

クラスメイトからは経験があるかをしつかり調査している。今から対策を取れば一週間先に種目を知る対戦クラスと差を作れる。

「確かに受け取った。次に司令塔についてだ。司令塔は誰になったのかね？」

「俺だ」

「龍園か。これから私と視聴覚室に来て対戦クラスを決めるのと司令塔のルール説明に参加して貰う。HRはこれで終わりだ。解散して構わない」

坂上先生はそう口にするが、龍園から対戦クラスについて聞きたいだろうし帰らないだろう。

坂上先生はそう言って龍園と教室から出て行こうとするが……

p i p i p i

p i p i p i

俺と龍園の携帯が同時に鳴る。ポケットから携帯を取り出して確認すると有栖からのメールだった。昼休みは互いに作戦会議をしていたが試験に関する話か？

確認してみると……

司令塔は八幡君か龍園君になるでしょう。私のクラスは真澄さんが司令塔になりませんが、貴方達はCクラスとの対戦にしていただけではないでしょうか

それとCクラスは一之瀬さんが司令塔をやると思いますが、一之瀬さんのオナニー動画が役立つかもしれないので保存しておいてください

そんなメールと一緒に動画が添付されている。

昨日はセックスに夢中になっていて一之瀬が来ているのは知っていたがオナニーをしていたのは知らなかったな。龍園はニヤニヤ笑いを浮かべているが絶対に煽るだろうな。

「面白え……とりあえず俺は行くが、クラスの指揮は比企谷に任せた」

そう命じて龍園は坂上先生と教室から出て行くので、俺は教卓の前に立つ。

「さて、じゃあやれる事をやつとくぞ。今からお前らは紙に自分の得意分野を書け。有名無名は気にすんな。今はとりあえず得意分野の把握が重要だ。それとゲーム経験者

は、得意なゲームを別に書いといてくれ」

とりあえず先ずは自クラスの把握からだ。

龍園が選んだ対戦相手次第では細かな作戦も重要だしな。

そう思いながら俺は視聴覚室を見るのだった。

「まだ誰も来てないみたいだな。龍園は部屋の前で待機、4人揃ったら入ってくれ」

坂上はそう言うてから視聴覚室に入りドアを閉める。少し待っていると星之宮が一之瀬を連れてやってくる。予想通り司令塔は一之瀬のようだ。

「じゃあ一之瀬さんは待機ね。4人揃ったら入ってきてね」

「わかりました」

星之宮は一之瀬が領いてから視聴覚室に入るが、ドアを閉める直前に龍園にガンツ  
け、龍園が中指を立てて返す。

「龍園君。教師にそんな態度は常識的に間違つてるからね」

一之瀬は龍園に注意をするが……

「はっ！他人の部屋のベッドでシコる奴に常識を説かれるとはな！」

「っ！」

龍園の言葉に目を見開く。そんな中、龍園は携帯を取り出して……

「……んっ……はっ……！あぁっ……！……！……！」

そのまま一之瀬の自慰動画を流す。

「やめて！」

一之瀬は真つ赤になって手を伸ばすが、身長の高い龍園は携帯を高く伸ばす。

「おいおい、悪いのは他人の部屋でシコったお前だろうが。あの部屋は俺も金を出して  
るんだから、所有権は金を出した俺も含まれる。大体お前の愛液、結構臭ってたぞ」

「やめてっ！やめてよお！」

一之瀬は羞恥の余り叫んでしまうが、絶頂した後に部屋に戻ったが罪悪感を抱いてい  
た。

「ま、今週末も来いよ。お前のお友達がセックスをするのをしつかり見とけ。それにし  
ても小橋のキスと膣の締め付け具合はマッチしてな……」

龍園のセクハラ爆撃に一之瀬は逃げたい気持ち、白波達を乱交パーティーから引き離

したい気持ちが生まれる。

しかし司令塔である以上逃げられないし……

——ごめん帆波ちゃん。私、もうセックスの虜になつたし今後もしも乱交パーティーに参加するから——

——私も。比企谷君も綾小路君も龍園君もセックスが上手くて抜け出せないよ……あ！クラスの情報売らないからね！——

——私もやめないから。クラスを裏切るつもりはないけど、自分の本能にも裏切れないから——

——というかやつぱり帆波ちゃんも参加しようよ。直ぐに楽しくなるし、比企谷君のおちんちんに攻められていくと凄く幸せだよ——

今日の朝、小橋と網倉と姫野と白波にそう言われたのだ。4人はセックスの話幸せそうに語っていて和姦であるのは明白だ。

よって一之瀬は動くことが出来ずにいるのだった。

（もういつそ全てを投げ捨てて私もあのパーティーに参加を……っ！それはやっぱりダメッ！）

## 司令塔

「では各クラスの司令塔が集まったので、最初に対決するクラスを決めたいと思う。このくじを一枚ずつ引いてもらう。赤い丸がついてる生徒に選択権が与えられる」

視聴覚室にてAクラス担任の真嶋が司令塔を引き受けた4人の生徒にそう口にする。

Aクラスからは神室真澄、Bクラスからは龍園翔、Cクラスからは一之瀬帆波、Dクラスからは榎田桔梗が司令塔を担当する。全員プロテクトポイントを持っている。

余談だがDクラスにおいて司令塔は最初由比ヶ浜にしてわざと負けるといふ案が出たが由比ヶ浜がギャーギャー騒ぎまくり断念し、次に榎田が「今まで散々迷惑をかけたんだから人柱になってよ」と堀北に言つて、皆が同調しまくつたが「退学は嫌」と断り、クラスからは大ブーイングが生じた。

結果的にプロテクトポイントを持つ榎田が綾小路のどちらかにする流れになり、個人力がぶつち切りの綾小路よりまとめ役に適した榎田が司令塔になった。

綾小路が司令塔をやらないことについては不満はないが、出来れば由比ヶ浜か堀北に

やって欲しかった櫛田からしたら苛立ちはあるがそれを不満を出さないで口を開ける。

「くじを引く順番は？」

「Aクラスからだ。赤丸がついた紙が当たりだ」

真嶋先生が箱を突き出して神室が紙を取り出して、赤丸を見せてくる。

「ではAクラスはどこを指名する？」

「Dクラス」

神室は有栖からのオーダーに従ってDクラスを指名する。それに伴い、BクラスとCクラスの対戦が決まる。

「つまりここで全勝出来れば、比企谷に対する借金返済のハードルが大きく上がるわけか」

「っー」

龍園は笑みを浮かべ、一之瀬は震え始める。最早勝負前なのに勝負が決まったようなものだ。

「しかしCクラスの実力者には同情するぜ。救済措置なんか使ったら学校からの評価は最低だろうな」

「っ……どういう意味っ？」

「龍園君。今から試験のルールを話すから黙ってくれないかな？」

一之瀬が戸惑い、星之宮が介入するが龍園は無視する。

「だつてそうだろ？この学校は日本を背負う人材の育成を目標にしてるが、つまりリストラされる側の人間ではなく、リストラする側の人間を作ること为目标にしてる筈だ。つまり投票試験においてCクラスは学校の方針に真つ向から喧嘩を売つたんだ。評価なんか悪いに決まつてるじゃねえか」

「つーうう……！」

龍園の言葉に一之瀬はうめきながら俯く。この発言はCクラスが救済措置を使った場合に言うべきと八幡がアドバイスをしたが、効果は靦面である。

「結果Cクラスの実力者は一之瀬やクラスの雑魚共の我儘のせいで全てのプライベートポイントを失い、200クラスポイントを失い、借金を背負わされ、学校から最低の評価を貰う……敵クラスなのに思わず同情するぜ」

「つ……つ……」

一之瀬はシヨックの余りポロポロ涙を流す。自分が良かれと思つてやつた事が徹底的に否定された事、反論出来る材料がない事に涙が止まらなかつた。

そんな一之瀬を見て神室と櫛田はドン引きして、真嶋が複雑な表情を、茶柱は無表情、坂上が冷笑、星之宮が龍園を睨みつける。

しかし誰もが龍園の意見を否定しない。実際の所、龍園の言っている事もあながち間

違いじゃないし、職員室では一之瀬のクラスの評価は悪い。他のクラスは心を鬼にして試験に向き合ったのに、大金を支払ってまで逃げたのだからな。

「……ひとまず説明をするのは待つ」

「おいおい。たった一人の為に俺達は我慢かよ？ クラス投票といい、一之瀬は我儘だな。普段優等生ぶってるのは我儘を通し易くする為か？」

龍園は笑顔で追撃する。まさに鬼畜な所業に龍園の担任の坂上もドン引きする。

「龍園君。これ以上の暴言は調書に残す事になるよ」

星之宮が怒りを出さないよう注意しながら龍園に警告する。もつとも龍園は内心なんて微塵も気にしていないが。というよりこの一年を振り返れば誰でも龍園に良い評価を与えないのは明白だ。

「つ……真嶋先生、私は大丈夫ですから……お願いします」

一之瀬は辛い気持ちながらもそう告げる。自分のせいで迷惑をかけるわけにはいかないからだ。

「……わかった。では司令塔のやるべき内容を話す」

真嶋がそう前置きして説明を始める。

全員集中して聞く中、真嶋の説明と一之瀬の嗚咽が部屋に響き渡るのだった。

p i p i p i ……

「龍園から連絡だ。対戦はCクラスだ。目標は全勝だ。全勝して連中に借金返済の目処を立たせない」

俺はクラスメイトが書いた得意分野について調査しながらそう口にする。

「いやいや！全勝は無理じゃね？」

「やる前から無理って龍園が聞いたらしばかれるぞ。この世には絶対はない。大体この前のペーパーシャツフルで格上相手に金星を獲得したが、今回は2度目の勝ち星を得るだけだ」

今から死ぬ気でいけばチャンスはある。

「差し当たって、お前らは今日から試験当日までに得意科目に絞って勉強をしろ。普通科目と苦手科目は一旦放置だ。その上で1週間後にCクラスの種目が発表されてから役割を決める……で、小宮と近藤、山脇に宍倉、鹿島、田中に石坂の7人は明日に俺が

坂上先生にした質問の返事次第だが、場合によって明日の放課後は付き合え」

『了解』

「比企谷氏、基本的な流れについては賛成ですが、Cクラスから情報を取りに行くのですか？」

金田が手を挙げて質問をするが、答えは決まってる。

「しなくて良い。確実な情報でない限り負けに直結する。そんな暇があるなら地力を上げる時間に回すべきだな」

結局最後に物を言うのは基礎能力だからな。可能な限り高めれば試験に役立つし、今後の特別試験に対しても無駄にはならないし、今は自己鍛錬が優先事項だ。

それに龍園が姫野を介して情報を手に入れてくれるだろう。姫野は龍園に対して雌犬プレイをする程快樂落ちしているからな。いざとなったら俺が白波から教えてもらえば良いからな。

そう思いながら俺は細かな指示を出して、秘密裏に鍛える事を念押しするのだった。

その夜……

「で？Cクラスはどんな種目を選ぶんだ？」

「んあつ！基本的に学力重視で参加人数が1人の種目にリフティングを入れてんあああつ！柴田にやらせるみたい！ああんつ！そこおつ！」

龍園の部屋の風呂場にて、龍園がそう質問すると姫野は淫らに息を荒げながらそう口にする。

姫野を部屋に呼んだ龍園は「2人きりでお前を抱きたい」と口にして、姫野は嬉しそうに頷いて服を全て脱ぎ捨てた。

そして下着姿の姫野を堪能してから風呂場に連れて行き、セックスをしながら「Cクラスの種目情報を教えろ」と姫野に尋ねて今に至る。

Cクラスからしたら姫野の行為は明確な裏切りだが、姫野の中に罪悪感は大してなかった。そんな裏切りより龍園とのセックスのほうが重要だからだ。

「良い子だ。後で生でヤツてやるよ」

「あつ！んっ！本当?!嬉しいっ……んっ、ああ！ごめん！もうダメエエエエエエエッ！」

龍園が腰を激しく動かすと姫野は嬌声を上げまくり絶頂する。

龍園が離れると姫野は息を荒げながらも膝をついて……

「……じゃあ、ありがたく頂きます。細かな情報は逐次教えるからね……」

そのまま龍園の男性器を口に咥える。嫌そうな態度は全く見せないで夢中にフェラチオをする。

(クハッ！完全に雌墮ちしてるな……とりあえず比企谷に連絡して白波も完全な快樂墮ちして貰わないとな)

龍園は一生懸命フェラチオをする姫野に興奮しながら頭の中で今後の未来について考え続けるのだった。

## 事前準備

学年末特別試験が発表された翌日……

「んじゃ先に行きますよ、なずな先輩」

「行つてらつしやい……ちゆっ」

なずな先輩からおはようのキスを貰った俺は恋人2人を左右に部屋を出る。なずな先輩の關係は公にはなつていないので、朝の登校はひよりと有栖の2人と行くのが基本だ。

そしてエレベーターを待っているとドアが開き……

「あつ！3人ともおはよう」

「ご機嫌よう榎田さん。それにしても問題児と同じエレベーターは付いていないですね」

エレベーターの中には榎田と堀北がいた。ただし堀北は苛立ちに満ちた表情だ。

「まあね。普段からクラスを仕切りたがっている癖に、クラスメイトが皆司令塔になる事を望んでるのを無視して逃げ出したからね」

やはり堀北についてもクラスメイトから人柱になる事を望まれていたようだ。

由比ヶ浜？由比ヶ浜については望まれても、由比ヶ浜本人がギャーギャー叫んで拒否したのは容易に想像出来る。

堀北を見れば歯を食いしばりながらも櫛田の毒に耐えている。

「仕方ないですよ。彼女はお兄さんと違って、どうしようもない人なんですから、責めるのは酷ですよ」

「まあそうだけどさ、普段は誰とも仲良くしない癖に特別試験が関わると、出しやばるんだよ。その度にクラスメイトはストレスが溜まって、フオローするのは私なんだよ？」

「馬鹿女の件といい、櫛田さんってトラブルに巻き込まれ過ぎてませんか？」

「……言わないで椎名さん。自覚はあるんだからさ……まあ池君と雪ノ下さんが消えたから多少マシになったかな」

「悩みがあるなら相談しますよ。まだ問題児は4人もいるのですから」

「ありがとね。今のところの悩みは煩い由比ヶ浜さんと司令塔は辞退した癖に出しやばり続ける堀北さんくらいだね」

「やはりお兄さんに相談した方が良いのでは？身内に叱って貰った方がいいかもしれません」

「黙りなさい！さつきから黙って聞いていればっ！」

大量の毒に遂に堀北がキレるが、エレベーター内にいる面々はメンタルが強いので氣圧される事はない。

「事実じゃん。堀北さんって自分が偉いつて勘違いしてるけど、クラス投票試験じゃ五馬鹿を除いたら最下位なんだし、立場を理解してくれない？」

「そういやコイツ、クラス投票で五馬鹿を除いたら最下位だったよな。」

そんな事を考えているとエレベーターのドアが開く。どうやら一階に到着したようだ。

「っー」

堀北は悔しそうに一瞥してから走り去っていく。去っていくと櫛田は息を吐く。

「はあ……マジで司令塔なんかやりたくない。もう一人のプロテクトポイント保有者の綾小路君は司令塔より種目をやらせる方が良く仕方ないけど……司令塔も投票で決めれば良いのに」

それだったら100%由比ヶ浜が司令塔になるだろうな。

「まあ消えて欲しい人がいればそう思いますよ。ところで平田君は？」

まあアイツから司令塔を引き受けてもおかしくないな。何せ我慢の限界を迎えた櫛田と違って、執拗に五馬鹿をかばっていたからな。

「平田君なら2人が退学してから廃人みたいになっちゃった。誰に何を言われても反応

しなくてね。放課後も話し合いに参加しないで直ぐに帰っちゃったし、司令塔を任せたら本番でも不参加になってトラブルになるかもって断念したよ」

理解に苦しむな。池や雪ノ下が消えただけで廃人になるなんて。普通は喜ぶ所だろうに。前から思っていたが、平田はなぜ無能の為にあそこまで頑張れるのだろうか？

「そんな訳で私が司令塔。坂柳さんが兵士なのは学力系の種目で戦うから？」

「選ばれる種目次第ですが、その解釈で結構です。真澄さんも運動能力は高いですが絶対的ではないのでDクラスの土俵で争うのは厳しいと判断しました」

まあそうだろう。プロテクトポイント保有者が司令塔になるのは基本だが、戦い方次第でどっちを選ぶかは悩みどころだ。

そんな風に話しながら登校して教室に入ると、教室の隅にいる龍園が手招きしてくるので近寄る。

「何だよ？」

「単刀直入に言うが今週中に白波を完璧に快樂墮ちさせろ」

龍園は小声でそう告げる。もう大分墮ちてると思うが、改めてそう告げるって事は……

「スパイに仕立て上げろ、と？」

「そうだ。ユキは昨日は快樂墮ちさせたが、現実性を高める。網倉と小橋はまだセック

スを楽しむレベルだから快樂墮ちは無理だ」

「ん？姫野は快樂墮ちしたのか？」

「ああ。卒業してもセフレとして置いて欲しいと懇願しまくってきたからな」

「まあ話はわかった。次の「キーンコーンコーン」っと、また後でな」

チャイムが鳴るので俺達は席に着く。チャイムが鳴り終わると坂上先生が入ってくる。

「おはよう。朝のHRを始めるが先ず比企谷君の申請だが全て通ったから、種目選別に役立ててくれ」

「ありがとうございます。ちなみにですが本番では持ち込むんですか？そっちが用意するんですか？」

前者なら最高なんだがな。

「公平を期する為、後者だ。これはどの種目でもそうだ。筆記試験ではこっちの用意した筆記用具を使って貰うし、野球とかなら学校が用意したバットやグローブを使って貰う」

まあそんなに甘くはないか。何にせよ申請は通ったし、良しとしよう。

「次に午後の特別棟は水道工事が行われるので……」

坂上先生が話を続けるのだった。

数時間後……

「すみません。これください」

放課後のケヤキモールにあるゲーム屋で俺はモンハンの2GとPSPを、スマブラとゲームキューブ、NEWスーパーマリオブラザーズとDSを買う。その背後にはクラスメイトも並んで同じゲームを持っている。

全部古いゲームな上、中古だから格安で買えるが、これが俺達の狙いだ。

ゲームを種目を選ぶのは決めていたが、対戦ゲームを古いものにしたのだ。古いゲームソフトやハードなら中古で格安で買えるから買い占めても大した出費にはならないからな。

何故最新のゲームにしないか？その場合、Cクラスの生徒も入学してから買ってるだ

ろうからな。

しかし10年以上前のゲームなら実家にはあるかもしれないが、この学校でやっている可能性は極めて低だろうし、俺達が買い占めて練習出来ないようにするのだ。

ロックマンエグゼは最近リメイクしたばかりだから除外した。してなかつたら種目に入れていただろう。

で、俺が昨日坂上先生にしたのは「古いゲームは種目として認められるか？」で名作ならOKとなった。

で、俺は試しに今言った3本を申請したら、馬鹿売れしたゲームだから許された。実際これらのゲームは世界で500万本以上売れているゲームだからな。

しかもウチのクラスには昔やった経験がある奴が多かったし、勉強も運動も苦手な奴にやらせれば2週間あれば勘を取り戻せるだろうし、戦力になるだろう。

一方のCクラスは金欠な上、俺達の選ぶ種目を1週間先までわからない挙句、わかつても練習出来ない環境なのだ。

今回の試験で重要な点は沢山あるが「自分達の選んだ種目では負けない」「対戦クラスが選んだ種目に勝つ」事は絶対だ。

その為、前者を達成する為には相手が練習出来ない環境を作れる種目を選ぶのは大切だからな。

そんな風に思いながら会計を済ませ、他の連中を待っていると携帯が鳴るので取り出してみると……

「……お前の恋人3人と話つけた。今週末の乱交パーティーは欠席して、2人きりの状態になった白波を肉便器に変えて従順なスパイにしろ……」  
龍園からそんな一文が送られてくる。

アイツ……完膚なきまでにCクラスを破壊する気だな……

## 目撃

試験の概要が発表されてから数日が経過したが……

「ふざけんなよ！先に席を取ったのは俺達なのに逆ギレしてんじやねえよ！」

「そつちこそふざけんなよ！事あるごとにウチのクラスにイチャモン付けやがって！」

昼休み、BクラスとCクラスの間で沢山の諍いが起こっている。龍園の指示通りにBクラス内の荒れくれ者は些細なことでCクラスの生徒にイチャモンをつけている。

Cクラスの生徒がくしゃみすれば煩いと怒鳴るくらいに。最早由比ヶ浜レベルの言いがかりだ。こつちは作戦だからまだしも、素の状態で言いがかりをつけまくる由比ヶ浜は半端ない。

ちなみに由比ヶ浜については雪ノ下が居なくなつてもデカイ態度で、昨日松下から聞いた話では教室でお菓子を食べている女子に「何甘いもの食べてんだし！ポイントが使えないあたしに対する嫌がらせなんてマジキモい！」って物凄い剣幕で怒鳴つたらしい。理不尽にも程がある。

閑話休題……

何にせよBクラスのイチャモンにCクラスは精神的に疲弊している状態だ。しかも学校に訴えても、ウチのクラスは暴力を一切使っていないのでお咎めはない。

これを執拗に繰り返すことでCクラスは更に疲弊して、「Bクラスは真つ向から戦つても勝てないから番外戦術をしている」と思わせられる。

ゲームを担当している連中もかなり進められているし、そろそろ種目にする内容を決めないとゲームをしている連中と相談いけないな。

「ではHRを終了する」

坂上先生が教室から出ていくと龍園が教室のドアを閉めてから口を開ける。

「報告だ。そろそろ種目の具体的な内容を詰めたい。ゲームをやっている連中は自分の進捗度と本番でどんなルールにしたいからを纏めて、今日の8時までには俺と比企谷にメールしろ。担当してるゲームは俺も昔やったから理解出来る。以上だ」

龍園はシンプルにそう告げてから解散するように締めくくる。第三者が聞いている可能性が以上、重要な話はメールやチャットにするべきだろう。

「では私は部活に行きますね」

「おう。またな」

ひよりを見送った俺は鞆を持って席を立ち、教室を出る。帰ってモンハンの続きをやらないといけない。

俺が試験で出るとしたら相手が出す学力種目か自クラスが出すゲーム種目と決まっているので、勘を取り戻す必要がある。

そう思いながら下駄箱に到着するタイミングで携帯が鳴るのでポケットから取り出して確認するとみーちゃんからメールが来ていて……

「……今から時間はありますか？あるなら廃倉庫で少し会えませんか？今日は由比ヶ浜にダイレクトに理不尽をぶつけられてストレスが溜まります。セックスは週に一度ですが、本番以外は認められていますし、ストレスが限界なので比企谷君と綾小路君と龍園君のおちんちんをしゃぶりたいです……」

そんな内容だったが、性に忠実だ。

内心呆れながら靴を履き替えて自販機に向かっていると、自販機には綾小路とみーちゃんがいいた。

「あつ、比企谷君！メール見ましたか？」

「今な」

「でしたら是非付き合ってください。私、今凄くおちんちんが欲しいんです。しゃぶらせてください」

丁寧な頭を下げてくる。そんな丁寧な頼みをしてまでお願いする事じゃないだろうに……

「でも何でいきなり？」

「みーちゃんは恵と廊下で話していたら曲がり角からやってきた由比ヶ浜とぶつかってな……」

「もう良い」

綾小路が答えようとしたが、それだけで大体わかった。由比ヶ浜の奴が理不尽なくらいブチ切れて騒いでストレスが溜まったのだろう。

「……フェラだけで。本番は週一と決まってるし」

由比ヶ浜が絡んでストレスが溜まった以上、放置するのは忍びないからな。

「うんっ、ありがとうね」

みーちゃんは嬉しそうな表情に変わる。

「じゃあ行くか」

綾小路の言葉に俺達は廃倉庫に向かう。

「そーいや試験の準備はどうだ？」

「オレは状況次第だが敵の土俵で勝って欲しいと言われたな」

「私は中国語の種目に出ると思います。Bクラスはどうですか？」

そう言われてから周りを見れば誰もいない。

「ゲームに力を入れてるな。モンハンとスマブラとマリオとかだな」

「スマブラ……どういいうゲームなんだ？」

え？綾小路はスマブラを知らないのか？意外なんだけど。

「任天堂のキャラを集めてやる格闘ゲームだな。マリオとかポケモンとかのキャラがぶ

つかり合う」

「そんなゲームがあるのか。春休みにやらせてくれないか？」

「そのくらいは構わない……おっ、龍園だ」

違う校舎口から龍園が出てきて、こっちに向かってくる。

「あ、来てくれたんですか。ありがとうございます」

「今は暇だからな。しかし廃倉庫も完全にヤリ部屋になつてんな」

否定はしない。俺も2週間前になすな先輩とセックスをしたし、他にも綾小路が軽井沢と一緒に、龍園が松下と入るのを見たからな。ヤリ部屋と思っても仕方ない。

そう思いながら敷地の隅にある廃倉庫に近づき、扉を開けると……

「うむっ！んっ！ちゅう！んむっ！あんっ！」

「んっ！愛理っ！んんっ！ちゅっ！」

佐倉と山内が抱き合いながらディープキスをしていた。

「「「……………」」」

「っ！何だよお前ら！今忙しいんだから邪魔すんなよ！」

予想外の光景に俺達がポカンとする中、山内は叫んでからキスを再開する。

「あく、悪かった。場所を変える」

先客がいるなら仕方ない。違う場所で見ーちゃんのストレスを発散する手伝いをす

るか。

「っ！」

「痛えっ！」

そう思っていると突如佐倉が目をハッキリしたかと思えば、山内の背中を抓り、山内は悲鳴を上げながら離れる。

「助けて……！今までこうやって襲われてたの……！動画で脅されて……！」

え？これ強姦だったのかよ?!シヤレになつてないぞ。だとしたら止めないといけないな。

「嘘言つてんじゃねえよ！俺と愛理は愛の糸で結ばれてんだよ！じゃますんじゃ」  
「適当な事を言つてんじゃねえよ」ぶふえっ！」

山内は激昂しながら佐倉に近寄るがその前に龍園が殴り飛ばす。

「レイプは人間としてタブーだろうが。テメエは学校から処罰を受けろや」

龍園はそう言つて山内を拘束するが、お前つてそういうキャラ……いや、これは佐倉の味方をして、今後佐倉に山内の両親との示談によつて金を雀り取らせて、上手い形でその金を手に入れる腹だろう。少なくとも正義感で動いてるはずがない。

何にせよ今は山内の対処が先だ。

「綾小路。足が速いし、急いで職員室に報告を。みーちゃんは山内の携帯を見て画像や

映像があるかを確認を。ただし学校に訴える証拠として絶対に消すな。佐倉は倉庫の外で離れて待機してろ」

俺は龍園が押さえ込んでいる山内のポケットから携帯を取り出してみーちゃんに投げ渡す。こういうのは女子が見るべきだ

「任せろ」

「は、はい」

「は、はい……」

3人は頷いて綾小路は早足で出て行き、佐倉もオドオドしながらも出ていく。みーちゃんはイヤホンを取り出して携帯と片耳に取り付ける。

「ござけんじゃねえよ！これは強姦じゃねえ！和姦だ！」

山内はいまだに喚き続けるが……携帯にある証拠次第だ。

「……っ！嘘ですっ！映像をみますが「バラされたくなかったら内緒にしとけ」って言うってます！」

みーちゃんは携帯を見ながらそう叫ぶ。これはもうクロだろう。

「違うって！単なるプレイの一環だからな！」

山内は見苦しい言い訳を続けるが、100人中100人がクロと断言するだろう。

とりあえず綾小路は早く先生を呼んできてくれ。

「失礼します」

綾小路が職員室に入ると、中央付近では生徒会の南雲と桐山、茶柱と星之宮と坂上と真嶋がいた。

「なんだ綾小路。今打ち合わせ中だから後にしろ」

「それどころじゃありません。敷地の隅にある廃倉庫にて、山内が佐倉をレイプしてました」

『っ！』

綾小路の爆弾に職員室がどよめく。

「それは確かな情報か？」

「現在、龍園と比企谷、現場で対処して、王が携帯から証拠を調べてますが、佐倉本人が助けを求めてました」

「がはっ！」

茶柱と南雲が死んだ！この人でなし！

……冗談はさておき、山内の担任の茶柱と生徒の長の南雲からしたら、洒落にならない犯罪が起こった事に身体にかかる精神的ダメージが物理的ダメージに変わり、2人も吐血してしまう。

「……遂に限界が来てしまいましたか。桐山君、救急車の手配を」  
「わかりました」

「私と星之宮先生は現場に行きます。学年主任の真嶋先生は我々の報告を待つて事実なら校長と理事長に報告を。綾小路君は案内をしてください」

坂上はテキパキと指示して、星之宮と一緒に綾小路の案内に従って職員室から出ていく。

「もう嫌だ……死にたい」

「桐山……もう生徒会長はお前がやれ……俺が副会長になる」

「悪いが遠慮しておく」

元々生徒会長に憧れていた桐山だが、五馬鹿の愚行に苦勞していた新旧生徒会長を見ている内に気力を失っている。

桐山は吐血する2人に心底同情しながら携帯から救急車の手配をするのだった。

## 拘束

「離せよ！俺と愛理は相思相愛だ！中出しだって何度もやったからな！だから離せよ！  
テメエらだつて中出しくらいやってんだろ？」

「一緒にすんじゃねえよ。中出し経験はあるが、ちゃんと同意を得てからしてる」

山内の喚きに龍園は一蹴する。実際俺達は女子を抱く際に必ず脅さず、証人を複数用意した状態で同意を得てから抱いている。山内みたいなレイプ野郎と一緒にされるのは心外だ。

寧ろ乱交パーティーがある日においては、安全日の女子は全員中出しを希望するからな。みーちゃんなんか安全日に中出ししないと拗ねるし。

そんな風に考えていると廃倉庫の外からドタバタ足音が聞こえて、綾小路と星之宮先生と坂上先生が入ってくる。

「坂上と賞味期限切れか。現行犯だがどうする？」

「とりあえず賞味期限……行き遅……星之宮先生はみーちゃんの持つ山内の携帯を確認

するべきでしょう」

「確認してください！」

龍園と綾小路の言葉によつて額に青筋を浮かばせる星之宮先生は、手を震わせながらみーちゃんから携帯を受け取り、イヤホンを付ける。

「なるほど……うん、これは間違いなくレイプだね」

教師のお墨付きなら山内の命運は決まったな。

「ふざけんな！ そういうプレイだつて言つてんだろうが！ 大体綾小路達もこんな場所に來て、王を輪姦するつもりだろうが！」

山内の奴、道連れにする気か？

「まあ確かにこんな人が來ない場所にいるのは怪しいね？」

「違います！ 私から3人のおちんちんをしゃぶりたいたいと誘つたんです！」

星之宮先生の言葉にみーちゃんは真つ向から反論するが、馬鹿正直過ぎだ。

「えつと……本当？」

星之宮先生と坂上先生は目を見開いている。

「本当です！ メールも残してますし、疑うなら今ここでしゃぶりましょうか？」

「やめろ」

俺と龍園は同時に突つ込む。教師にフェラされる所を見られるなんて罰ゲームにも

程がある。

「それはそれでアリな気がするな。見ていきますか？」

「結構です！」

綾小路の言葉に坂上先生がキレルが、お前はシャレにならないことを言うな馬鹿。

「何にせよ、学校が認めた以上拘束するべきでしょう。どうしますか？」

「……懲罰室に連れて行きます。そして保護者や佐倉さんとも相談していきます」

「ふざけんよ！何で俺の両親と話すんだよおおおおお！自分の女とセックスをしただけなのに、何でこんな目に遭わないといけないんだよっ！」

山内の醜い叫び声が廃倉庫に響き渡るが、誰もものに響くことはなかった。

「……そうですか。わかりました。生徒には山内君が佐倉さんに大怪我をさせて退学処分と伝えてください。山内君は退学処分にはしますが、佐倉さんが訴える可能性もあるのでそれまで懲罰室に閉じ込めておき、佐倉さんは一先ず休学扱いにします」

理事長室にて理事長代理の月城は茶柱を除いた1年生担任の3人にそう告げる。3

人はシャレになつてない事件なので真剣な表情を浮かべている。

「また佐倉さんが今後訴えることについては止めませんが、裁判や取り調べについて政府が準備する職員が行います」

正式な警察の取り調べや裁判を行った場合、公になりこの学校には大ダメージが入る可能性がある。

月城からしたらこの学校の評価など知ったことじゃないが、理事長代理である以上、この学校にダメージになる事は回避するよう尽力する必要がある。

「茶柱先生の容態はどうですか？直ぐの復帰が難しい場合、星之宮先生が茶柱先生に代わって佐倉さんの対応をお願いします」

「わかりました。茶柱先生は復帰が厳しい為、私が引き受けます」

星之宮が頷く。先程見舞いに言ったが、茶柱は寝ながらも「もう五馬鹿の相手は嫌だ……」と物凄く苦しそうに囁かれていた。その状態で動いてもらうほど星之宮も鬼ではない。

「それと動画の拡散についてはどうでしょうか？学校の掲示板に投稿はありませんが、彼が友人に送った可能性もあります」

「確認したところ、ネットや友人にも送られていませんでした」

星之宮がそう口にする。その後、山内の携帯から送信履歴を確認したが第三者に送信

してなかった。

実際山内は佐倉から抵抗を奪う為に「友達に渡した」と言っていたただけだ。山内からしたら池や須藤につまみ食いなどさせずに佐倉を独り占めしたかったのだ。

「結構。政府や司法機関への手続きは私がやりますので皆さんは解散してください」

月城の言葉に3人が理事長室から出ていき、ドアが閉まると息を吐く。

「やれやれ……肉壁がまた1人消えたのはありがたいですが、対応が面倒ですね」

月城は綾小路清隆を退学させる為に彼の父親から派遣された人間だが、最初に考えた方針として、由比ヶ浜、雪ノ下、須藤、池、山内のような、肉壁として価値があるゴミの掃除だった。

この5人は想像を絶する無能で、綾小路がこの5人をスケープゴートに使う事を考慮したのだ。

本当はクラス投票試験で各クラスから5人退学者を出す事を考えていた月城だが、茶柱以外の教師から猛反対を受けたので2人まで減らす事にしたのだ。

更に今回の件で山内が退学になるのでありがたいが、山内の起こした問題に対処という面倒事を増えたので苛立ちが募る。

（やれやれ……綾小路先生も息子が卒業するまで待てば良いものを……）

どうせ卒業したらホワイトルームに戻るしかないのだから。

月城はこんな理事長代理の地位を投げ捨てたいと思いつながら書類作業を始めるのだった。

「……つて、事があつてな。山内を警備員に渡したんだよ」

「そんなことがあつたんですね。Dクラスの生徒からしたら朗報でしょう」  
夜、自室にてさっきの顛末を話すと有栖がうんうん頷く。

まあ確かにそうだろう。クラスで嫌われている山内が退学するのだからDクラスの生徒は喜ぶだろう。しかも傷ついたのは人気者の櫛田ではなく、友達が一人もいない上に実力がない佐倉だし、Dクラスの人間に精神的なダメージもないからな。

「……しかし茶柱先生は大変でしょう。クラスから犯罪者が出たのですから」  
「というか雅も大丈夫かな？あの5人にはいつも苦しめられてるし」

「ああ。坂上先生によれば吐血して救急車を手配したらしい」

「あ、そうなんだ。今日はもう遅いし、明日お見舞いに行こうかな」

担任と生徒会長はマジで不憫過ぎるわ。マジで死ぬんじゃないか？

「何にせよ後2人消えれば、学校中の皆が喜ぶでしょう」

ひよりはそう口にするがそうだったらパーティーが起ころう。

「それで？今後の動きはどうなるか聞いてますか？」

「とりあえず佐倉は休学、その間に保護者と話して訴えるか示談になるかを決めて、山内は退学は確定したが、佐倉がどう動くか決まるまで懲罰室で待機らしい」

「まあ佐倉さんはお金を奪うべきでしょう。強姦は重い罪ですが、未成年を考慮すると軽くなる可能性がありますから金銭面で取れるだけ取るのが良いでしょう。そうでない」と割に合いません」

龍園もそれを望んでるだろうな。佐倉と別れ際に彼女は俺達に礼を言ってきたが、龍園は「貸しにしとく。いずれ形にして返せ」って言っていたが、佐倉も慰謝料の分前を寄越せと言われたのだと理解出来ただろうしな。

「まあ証人として関わるのは当分先だし、気にしなくて良いだろ。それより疲れたしおっぱいを吸わせてくれ」

結局ゴタゴタのせいでみーちゃんに性処理をして貰えなかったしな。

「もう、ハチ君つたら……」

「相変わらずいやらしいですね」

「まあいっぱい甘えて良いですけど」

言いながら3人は服を捲り上げて、ブラジャーを外す。

有栖のちっばい、ひよりの美乳、なずな先輩の巨乳  
みんなちがつてみんな良い。

俺は正面にいる有栖の小さな乳首に吸い付きながら両手でひよりとなずな先輩の胸を揉みしだくのだった。

同時刻……

「んっ……やっぱりダブルぽぽふは最高だな」

「全く……清隆は本当に胸が大好きなんだから……」

「良いじゃないか。年頃の男子なのだから。私達の胸で幸せになってくれよ清隆」

「あんっ！そこっ！龍園君のおちんちんっ気持ち良いよお！」

「くくっ、小橋も悪い奴だな。俺はお前のクラスメイトにイチャモンをつけるように指示したんだぜ？」

「わかってるけど、我慢出来ないのっ！龍園君とのエッチは気持ち良いのっ！んっ！それに私は実害を受けてないしっ！んあっ！」

「（このまま2年に上がる前にユキと同じように快樂墮ちさせてやるよ。比企谷が白波を、綾小路が網倉を快樂墮ちさせれば一之瀬が墮ちなくても、Cクラスの掌握は可能でAクラスとの最終決戦で駒として充分役立てる）」

「くそっくそっくそっ！俺と愛理の仲を引き裂きやがって……俺の愛理を返しやがれ！愛理……愛理……愛理！」

八幡がひよりと有栖となずなの胸を順番に吸っている時、綾小路は恋人の軽井沢と鬼龍院からダブルぱふぱふを受けていて、龍園は一之瀬の親友の小橋と正常位でセックスをして、山内は懲罰室で佐倉をネタに自慰をしていた。

## 伝達

「おはよう諸君。早速だが報告があるDクラスの山内春樹君が同じクラスの佐倉愛理さんに過激な暴力を振るって大怪我をさせた。それに伴い山内君は退学処分に、佐倉さんを休学扱いとする。同じクラスの問題だからクラスポイントに影響はないが、皆もいきなり暴力を振るわれたら直ぐに相談するように」

朝のHRにて坂上先生がそう告げると多少の騒めきが生じ、女子から嬉しそうな雰囲気が生まれる。まあ山内も盗撮トリオの1人だしな。

「以上でHRを『やったああああああああっ！』またDクラスですか。まあ仕方ないですね」

Dクラスから女子の歓声が上がリ、坂上先生は苦笑いを浮かべる。Dクラス女子からしたら山内の退学は朗報だろうからな。

そんな風に思っていると……

『ふざけんなしっ！あんた達が消えなよクズの癖に！』

由比ヶ浜の怒声が聞こえてくる。アイツは何をやったんだか……

キーンコーンカーンコーン

朝のHRが始まるチャイムが鳴るとDクラスの教室のドアが開くが……

「アレ？何で桐山先輩が？」

入ってきたのは担任の茶柱じゃなくて生徒会副会長の桐山だった。

「茶柱先生と生徒会長の南雲は入院する事になった。よって朝のHRについては一時的に俺が担当する」

桐山の言葉にDクラスの生徒の頭に山内に関する事が理由だと理解する。何故なら教室に山内の机がないからだ。

「薄々予想は出来てると思うが、山内春樹が同じクラスの佐倉愛理に暴力を振るって大怪我をさせた事が理由で退学になった」

桐山がそう告げるとクラスは一瞬だけ静まるが……

『やったあああああああつ！』

次の瞬間、女子を中心に大歓声が生じる。山内は須藤や池に比べたらマシというだけで充分嫌われているから当然の反応である。

「でも何で佐倉さんを？」

「さあ？でも佐倉さんだしいいでしょう？誰も悲しまないんだし」

「わかる。露骨に迷惑をかけてないだけで弱いしね」

「どうか由比ヶ浜に暴力を振るえば良かったのに」

「だよ。それで殺してくれたら私達は最高の結果を得たのに」

そんな風に悪意が蔓延る。佐倉についても嫌われてはないが、友人皆無、体育祭全種目ビリ、グループディスカッションにおける未発表もあつて、クラスにおいて無能と思われている。

Dクラスからしたら単なる無能な佐倉より、無能な嫌われ者の由比ヶ浜が山内に暴力を振るわれて欲しかったのが本音である。

「ふざけんなしつ！あんた達が消えなよクズの癖に！」

由比ヶ浜は怒鳴り散らすが皆は鼻で笑つてそのまま相手にしない。

「静かにしろ。今はHR中だ」

「はあ?!口を挟むなし！大体この屑どもを退学させないなんてあり得ないし！」

「……はあ」

由比ヶ浜はギャーギャー喚き、桐山はため息を吐く。何を言っても小学生以下の反応をする由比ヶ浜によって苛立ちと疲弊を感じてしまう。

(これは南雲や茶柱先生も入院するな。というか明日から辞退できないか頼まないと……俺の胃も死ぬ)

桐山は内心にて2人に同情しながらギャーギャー騒ぐ由比ヶ浜を無視して、早々に連絡事項を告げて早足で教室から出るのだった。

昼休み、授業を済ませてひよりと有栖と一緒に屋上に向かっていると正面から一之瀬達Cクラスの面々が歩いてくる。

「あ、比企谷君。ちよつとだけ話せるかな?」

一之瀬が話しかけてくるが、話す内容は大体予想できる。

「今から昼食だ。この場で5分以内に解放すると約束するなら構わない」

「うん。そんなに時間はかからないよ」

「わかった。ひよりと有栖は先に言ってる」

「わかりました。屋上で待っています」

「失礼します……一之瀬さんは明日は楽しみですね」

「っ……」

有栖がコソリと呟くと一之瀬はピクンと跳ねる。明日は乱交パーティーの日だからな。一之瀬は有栖と一緒に見学だろう。一之瀬からしたら見たくないだろうが、自慰動画を有栖や龍園が持っている以上、拒否は無理だろう。

「で？何の用だ？」

俺は一之瀬に質問すると一之瀬は小さく咳払いをする。

「あ、うん。えつと……最近ウチのクラスの子が事あるごとにBクラスの子に絡まれている」

「だろうな。龍園は武闘派にそんな指示を出していたし」

「やっぱり龍園かよ！本当ふざけやがって！」

そんな声が一之瀬の背後からあがる。

「大体予想はつくが龍園にやめるように言って欲しいんだろ？」

「うん。出来ないかな？」

「逆に聞くが龍園が聞くとと思うか？」

賭けてもいい。絶対に聞かないだろう。

「それは……比企谷くんの話なら聞いてくれるんじゃないの?」

「普段ならともかく今は時期が悪いから無理だと思うぞ」

「時期?」

一之瀬らは頭に疑問符を浮かべているが、これからは俺の嘘だ。

「そ、この前の学年末定期試験、お前らのクラスに大敗したからな。ペーパーシャツフルで俺達はお前から相手に金星を獲得したが、金星を獲得したが故に緩みまくった結果、逆戻りしたんだよ」

「それで龍園の機嫌が悪いと?」

神崎がそう質問してくるので頷く。

「ああ。ペーパーシャツフルではお前らのクラスに迫るくらい勉強して、今後も勉強する習慣を身につけさせる事を目標にしてたんだよ……けど、まさか予想外にも勝ちまくった。で、勝ったが故の慢心によって成績は落ちて、龍園はブチ切れて形振り構わないようになったんだよ」

実際はクラスメイトは皆自主的に勉強しているが、あそこまで成績が落ちた以上信憑性はあるだろう。

「そんな訳で龍園の説得は期待するな。まあ一線を越えるようなやり方はしないように見張つとく。アイツ、場合によっては下剤の使用も考えてるらしいからな」

「つ……龍園君はそこまで考えるの?」

「俺は反対だけだな。一応忠告しとく。試験が終わるまでは特別棟やカラオケのように、監視の目がない場所には行かない方が良いぞ」

親切心から忠告をしているが実際龍園は今回の試験で一線を越えたやり方は使わない。何故ならすでに姫野は快樂墮ちして龍園に様々な情報を渡しているからな。

派手な情報や親切心を見せつけて、こつちが裏で勉強している事実を見えないようにする。

「……わかった。クラスメイトにはしっかりと注意しておくよ」

「そんな風に忠告出来るんだったら、今までの軽い挑発も止めてくれよ」

柴田がそんな頼みをしてくるが……

「悪いが一線を越えないなら俺は奴を止める気はない。期待していた学力に頼れない以上、こつちも形振り構ってられないからな。恨むなら勉強を疎かにした馬鹿共に言ってくれ……話は終わりか?」

「うん。時間をとらせてごめんね」

「別に構わない。またな」

そう返して俺は屋上に向かおうとするが白波がすれ違いざまに、「明日は楽しみにしていますから……」と言われた。

その事に小さく頷きながら屋上に行き、遅れてやってきたなずな先輩も含めた3人で食べて食後は監視カメラの死角にて3人のキスと乳首をデザートにするのだった。

p i p i p i ……

「あつ、ちよつとメールが来たから先に行つて」

昼休み終わり、一之瀬は携帯が鳴つたのを理解したのでクラスメイトに一声かけてからお手洗いに行く。

そしてメールを見れば……

うー　　うー　　うー　　明日は夕方6時から乱交パーティーが行われます。是非一緒に見学しましょう

い。　　有栖からそんなメールがやって来て一之瀬は息を呑む。これは逆らうことは出来ない。

一之瀬には他人の部屋で自慰をしたという弱みがあるのだから。

脅されてはいないが証拠を持っている有栖の誘いを一之瀬は断ることが出来ず、了解の返事を送り返すのだった。

僅かながらに期待しながら。

## 性奴隷（前編）

土曜の夕方5時40分……

「いらっしやい比企谷君。上がって」

「邪魔するぞ」

俺は白波の部屋に入る。中はいかにも女の子らしい部屋だった。

「じゃあ早速エッチしようよ。時間が勿体ないよ」

白波は言うなり服を脱ぎ、ピンク色のブラジャーとショーツを曝け出す。

今日は本来乱交パーティーの日だが俺と白波は欠席してタイマンでセックスをする。

目的はここで白波を屈服させて今後スパイにする事だ。

難易度的にはかなりイージーだと思う。何故なら……

「おいおい。もうショーツを濡らしてるのかよ？淫乱だな」

「だって……比企谷君のおちんちんを独り占め出来ると思ったら……」

白波は恥じらないながら情欲の宿した眼差しで見ってくる。既に白波は殆ど堕ちている

からだ。

このままいけば2年に上がる前に屈服させられるが選抜試験に備えて今日屈服させる気だ。

俺もそのままズボンとパンツを脱いで息子を露わにすると、白波の眼差しに含まれる情欲が増す。

「じゃあ早速舐めてもらおうが……その前に提案がある」

「提案？」

「ああ。お前、今後は俺の下につかないか？Cクラスの情報を欲しい」

「そ、それは出来ない」「つくならお前を俺の性奴隷にしてやる」……えっ?」

最初は拒否しようとした白波が動きを止める。

「性奴隷になったら週に1回の乱交パーティー以外にも、毎日放課後にフェラをして良いし、第2&4金曜日に2人きりでセックスしても良い」

俺は現在月曜日、火曜日、木曜日、第1&3金曜日に恋人とのセックスをして、土曜日にセフレとの乱交パーティーをしているが、第2&第4金曜日に性奴隷の白波の為にセックスの時間を作るつもりだ。

これについてはひより達から許可を得ているし問題ない。まあ今後は週に1回は必ずSMプレイをするという代償はデカかったけどな。

「そ、それは……」

白波は戸惑ったような反応を見せるが揺らいでいるのが丸分かりだ。

「まあ今すぐ返事をよこせとは言わない。それよりも……そろそろ付き合ってもらおうぞ」

「んぐっ！んむっ！んむっ！んんっ！んんんっ！」

俺は戸惑う白波の頭を掴み、強引に白波の口内に肉棒を挿じ込んだ。白波は一瞬目を見開くが、直ぐに情欲を高めてフェエラを始める。マゾヒストの白波にはご褒美でしかない。

（さて、俺は今からだがあっちはどうなっているのやら……）

俺は乱交パーティーが行われている部屋がある下を向くのだった。

「あっ………はあ………」

一之瀬帆波は息を荒くしながら下着をズラしつつ、自身の臍を指でいじっていた。以前動画に撮られたのにも関わらず、手を止めずに興奮を感じていた。

何故こうなったのか理由は複数ある。何故なら今日の乱交パーティーの見学の際に隣に座っている有栖が「今日は自慰をしないのですか？」と動画を見せながら聞いてきたのだ。

遠回しの脅しに一之瀬は逆らえず、自慰を始めたのだが、媚薬成分の含まれたアロマや媚薬を含んだ飲み物により情欲が高まっている。

しかも媚薬と言っても、そこまで強くない媚薬を飲み物で希釈していて薄く、一之瀬本人もアロマのせいで身体が熱いと思っっている。

終いには……

「ああんっ！そこっ！ダメエ！綾小路君のおちんちん大きいんあっ！いやあ！」

「はあん！そこはあ！激しくっ！龍園君の攻め方好きい！」

目の前ではクラスメイトの中でも特に仲が良い網倉と小橋が綾小路と龍園相手に生ハメセックスをして淫らに乱れた最高のオカズがあるのだ。

普段元気な表情が売りの網倉と小橋は淫らな表情で、しかも一之瀬の真ん前で腰を振っている。その背後では姫野達の他のセフレ達が一之瀬に見せつけるように自慰をしている。

「どうだ夢。1番の親友の前のセックスをするのは？」

「んあつ！恥ずかしいよお！けど、興奮もするよつ！帆波ちゃんのオナニーのお手伝いをするよつ！」

「帆波ちゃんもつ！オナニーじゃなくて、おちんちんで楽しんだ方が！んあつ！良いよ！3人のおちんちんつ！凄く良いつ！やあん！綾小路君つ！」

龍園の質問に小橋は正直に答えて、網倉は一之瀬に誘いをかける。そしてそのまま2人は一之瀬の方に手を伸ばし、バックから突かれながらも手を伸ばし一之瀬の胸を揉み始める。

「やつ……！麻子ちゃん、夢ちゃん……ダメエ！」

ただでさえアロマ＋媚薬＋生ハメセックス＋手淫によって情欲が高まっているのに、更なる攻めが来て一之瀬の頭の中は淫らに染まりつつある。

「凄くエッチだね帆波ちゃんつ！それだけエッチなら綾小路君達とエッチしても大丈夫だからつ！んあつ！」

「一緒につ！エッチになろうよつ！帆波ちゃんも気分転換が大切あんつ！だよつ！」

そして2人は綾小路と龍園に突かれながらも一之瀬の腔にも触れて自慰行為を手伝う。

自分の手に加えて、親友2人の手にも攻められていき一之瀬の我慢は限界を迎え……

「いやあ！もうダメエ！イクつ！」

「綾小路君のおちんちんつ！大好きんあああつ！」

「んっ！あああああああんっ！」

小橋と網倉が絶頂し、絶頂しながら攻めてくる2人によって一之瀬はそのまま勢いよく潮吹きをして、そのまま2人の背中や綾小路や龍園の顔面を汚す。

「はあ、はあ、はあ……」

一之瀬はあまりの気持ちよさに息を荒くしながらベッドに仰向けで倒れる。

「っ！意外に臭うな……」

「ああ。しかし一之瀬が潮吹きして男の顔面を汚すとはな、意外だったぜ」

「っ！」

綾小路と龍園の言葉に一之瀬は罪悪感と羞恥心に包まれる。幾ら乱交パーティーの場とはいえ、見学者の自分が自慰をした挙句に潮吹きをするなんて予想外過ぎる。

「まあまあ。一之瀬さんもわざとという訳ではありませんし、余り攻めるのも酷でしょう。しかしもし一之瀬さんに罪悪感があるなら2人に対してお掃除フェラをしてあげたら如何でしょうか？」

「っ！それは……！」

有栖の提案に一之瀬は息を呑む。罪悪感があるのは確かだ。しかしだからと言って

フェラチオをしろと要求を即決で了承するのは無理だ。

「無理強いはいしないが、一之瀬にその気があるなら是非頼む」

「無理強いはいしないが、俺達の顔面に潮吹きをした落とし前としては妥当じゃないか？」

綾小路は純粋な性欲から、龍園は今後のカードの確保を理由に網倉と小橋の膣から肉棒を抜いて一之瀬を見る。

「……っ！ごめんなさい！」

一之瀬はシヨーツを履いておぼつかない足取りのまま逃げるように部屋から出ていく。

「あらあら。逃げてしまいましたか……まあ良いでしょう。とりあえず後で龍園君達の携帯に送っておきます」

「そうしてくれ。さて、一之瀬が帰ったし網倉、お掃除フェラをしてくれ」

「夢は俺のをしっかり掃除してくれよ」

「うんっ！」

「私も手伝う」

「私も手伝いますっ！」

網倉と小橋が領き、姫野と王もそれに続き、他のセフレも集まり最終的に有栖以外の女子全員がお掃除フェラをするのだった。

「さて、一之瀬さんが帰りましたし、私も帰ります。お疲れ様でした」

有栖は一礼して立ち上がり、八幡、綾小路、龍園、一之瀬のアドレスを利用して先程の一之瀬の潮吹き動画を送る。

「さて、一之瀬さんも遠くない未来に奴隷に出来るでしょうけど、八幡君は白波さんを肉便器に出来ているでしょうか……」

有栖がやり部屋を出ていくも酒池肉林の宴は止まらない……

## 性奴隷（後編）

「あんっ！はあ！んあっ！そこお！」

白波千尋は大声で喘ぎながら腰を振る。膣内にある八幡の肉棒の圧迫感が白波の情欲を高めているのだ。

「どうした白波。気持ちいいか？」

「うんっ！比企谷君のおちんちん、温かくて気持ち良いんあっ！良いっ！私、比企谷君のおちんちんだいしゆき！」

白波は八幡の肉棒を好いている。綾小路や龍園とのセックスも悪くないが白波にとっての一番は八幡とのセックスだ。

八幡の肉棒をフェラする時、八幡のザーメンを飲む時、八幡と生ハメセックスをする時はまさに至高の時間である。

「もっと！もっと激しくしてっ！私のおまんこメチャクチャにして！」

「ああ、わかった」

「っ！ああんっ！激しいっ！激しくておかしくなっちゃう！んっ！んっ！ちゅっ！」  
「んっ……はあ、んむっ……」

八幡は白波の要求に頷くと更に激しく動く。白波は激しい攻めに興奮しながら八幡にキスをする。

八幡もキスを返しながら更に激しく動き……

「ダメダメダメ！もうダメエエエエっ！」

白波は絶頂してしまう。ベッドの上でビクンビクンしている。普段なら膣内から肉棒を抜いてお掃除フェラをして貰い、掃除後に次のセフレとセックスをするが……

「んあああああっ?!比企谷君っ?!」

今回は更に攻めてくる。絶頂中に攻めてくる八幡に白波は快楽に押し潰されてしま  
いそうだ。

「ああんっ！ダメツ！頭がおかしくなっちゃう！んんっ！あんっ！」

ダメと言いながら白波は快楽に抗えずに夢中になって腰を振る。畳み掛けてくる快  
楽に抵抗する気は全くなかった。

「どうだ……俺の性奴隷になるなら今後もこんなセックスが出来るぞ」

そんな中、八幡は腰を振りながらそう言ってくる。

クラスの情報を売る代わりに八幡の性奴隷になる。

そんな提案をセックス前にされた。当初はクラスメイトに対する罪悪感で躊躇いながら遠慮したが……

（もうダメッ……この快楽は気持ち良過ぎる……手放したくない……！）

元々提案に魅力を感じていた白波の抵抗は寄せられたる快楽に呑まれ……

「っ……なるっ！クラスの情報をつ！売るから！比企谷君の性奴隷にしてっ！比企谷君のおちんちんで私を馬鹿にして！」

そのまま性奴隷になることを口にする。

「良いのか？一之瀬は好きじゃないのか？」

「好きっ！だけど比企谷君のおちんちんの方がしゅき！比企谷君のおちんちんがないと生きていけない！食事と同じんあっ！私にとつては生きる為には必要なのっ！ああん！」

白波は八幡の背中に足を絡めて今以上に腰を振る。

クラスメイトは大切だ。一之瀬はもつと大切だ。

しかし今の白波にとって八幡の肉棒の価値はCクラス39人より高いものとなっている。

これから白波はクラスの情報を八幡に渡し続ける道を歩むが後悔はない。だって……八幡の性奴隷として激しいセックスが出来るのだから。

「んっ……射精すぞ白波」

「良いよ！射精して！私もまたイっちゃうから！」

八幡の言葉に白波は嬉しく思う。主人が自身の膣に中出しをしてくれるので。これ以上の幸福などあるはずが無い。

「うっ……はっ！」

「ああああんっ！イクっ！比企谷君のおちんぽミルク、温かいよお！だいしゆきい！」

八幡が射精すると白波も2度目の絶頂する。ビクンビクンと跳ねながらも幸福感に満たされる。

「ふう……じゃあ白波。改めて聞くぞ。お前は俺の何だ？」

そんな八幡の問いに対して白波は……

「私、白波千尋は……比企谷君の肉便器で、今後は私に遠慮しないで犯してください……はあ、はあ……私にとって貴方に性欲処理される事が……1番の幸せだから……今後はその立派なおちんぽで私を攻めて……中出しして……ザーメンを飲ませて……」

白波は息絶え絶えになりながらそう告げる。目を見れば、疲れているのに情欲で満たされているのがわかる。

（コイツは完全に堕ちたな）

とりあえず龍園のオーダーは達成したし良しとしよう。

「じゃあお掃除フェラをしろ」

「っ！喜んで……！」

俺の命令に白波は喜びを露わにしながら身体を起こし、俺の肉棒を咥えて夢中になってしゃぶり始める。

こんな夢中にしゃぶるとはな……

「んむっ……んんっ……んくっ……ぶはっ！お掃除、終わったよ……！」

白波は口を開けて精液を見せてから美味しそうに飲み込む。

「ご苦労。じゃあ次、行くか？」

「うんっ！今日は私を一杯犯して！肉便器の私に思い切り性欲を発散して！」

白波はそう言つて尻をこっちに向けてくる。どうやらバックで攻められたいようだ。

「良いだろう……ふんっ！」

「ああん！おちんちんが来たあつ！」

白波が歓喜の声を上げる。さあ、メチャクチャにしてやろうか。

そう思いながら俺はバックから思い切り攻めるのだった。

結果的に俺達は5回戦までやったが、白波は最後の1回だけ録画して一之瀬に「一緒に肉便器になろうよ」と一文と一緒にメールをしたのは強かだと思つてしまった。

翌日……

いよいよ月曜日を迎えた。今日は選抜種目の発表の日だ。既に白波から10種目の内容と本命種目は聞いているが、合っているかお手並み拝見だ。

俺は教室についてから1時間目の準備をするが、水筒を寮に忘れている事に気付कि、自販機に向かう。

そしてお茶を買っていると……

「あつ……」

背後から声が聞こえてきたので振り向くと一之瀬が小橋と網倉のセフレと一緒にいて、真っ赤になって俺を見ている。

「おはよー比企谷君。千尋ちゃんを肉便器にしたんだって？千尋ちゃん、凄く喜んでるけど、ありがとね」

網倉が笑いながら手を振ってくる。小橋も笑っているが一之瀬だけは複雑な表情だ。

「友人を肉便器にして礼を言われるなんて複雑だな。お前や小橋はどう考えてるんだ？」

「私は興味あるけど、清隆君を狙ってるのは多いから難しいかな」

「私は……龍園君の肉便器になりたいな……既に龍園君の肉便器になったユキちゃんは一際激しいセックスをしてるし、私もあんな激しいセックスに興味があるよ」

小橋は前向きのようなのだ。それを聞いた一之瀬は悲しそうに小橋を見る。まあ客観的に考えれば友人が肉便器志望なら当然だろう。

「まあその辺りは龍園と交渉をしろ。それより今日は種目発表だが、お手柔らかにな」  
「そういえばBクラスはやっぱり格闘関係の種目一色なの？」

網倉がそう聞いてくる。やはりBクラスは喧嘩クラスって認識されているようだ。

「多いのは否定しないが、格闘オンリーじゃない。まあ一つ言えるのは絶対に苦情が出るな」

「間違いなくな」

俺は買ったお茶を一口飲みながらそう返す。

「まあ朝のHRを楽しみにしてな。それと週末の乱交パーティーもな」

「うん。楽しみにしてるね」

「今回は比企谷君も参加ね。よろしく。帆波ちゃんも一人エッチしないで一緒に参加しようよ」

「わ、私はい、良いよ……」

「もつたいないなー。ね、夢ちゃん」

「うん。まあ無理強いする必要はないよ。帆波ちゃんもいずれセックスの楽しみがわかるから」

2人は蠱惑的な笑みで一之瀬を誘うが、一之瀬が参加して有栖と龍園の玩具になるのも時間の問題だろう。既に潮吹き動画もあるし。

そう思いながら俺は3人に会釈をして教室に戻るのだった。

キーン  
コーン  
カーン  
コーン

Cクラスにて、朝のHRの始まりを告げるチャイムが鳴ると担任の星之宮が入ってくるが、いつもより若干元気はない。

「おはよう皆。朝のHRを始めるね。早速だけど選抜種目試験におけるBクラスの種目を発表するね」

そう言ってから紙を黒板に貼ると教室に騒めきが起こる。選ばれた種目には空手や柔道、ボクシングなどの格闘種目が多い。

それだけなら予想内だが……

モンスターハンターポータブル2ndG

必要人数5人

ルール…イヤンガルルガ討伐訓練における5人の合計タイム（※力尽きた場合は40分とする）

司令塔…任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない。

大乱闘スマッシュブラザーズDX

必要人数6人

ルール…1対1のストック戦。勝ち抜き形式でストック数は4

司令塔…任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない。

New super mario bros

必要人数7人

ルール：ステージ8の8-1から最後の城までの攻略における7人の合計タイムを競う。（※残機を1つ失うにつれてペナルティとして+20秒）

司令塔：任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない。

3つの種目はCクラスの予想から全く外れているのだった。

# 本命

「何ですかこの種目！」

Cクラスにてそんな声上がる。たった今選抜試験におけるBクラスの考えた種目が発表された。

出された10種目の内、7種目はスポーツや格闘技系と予想の範囲内だったが……

モンスターハンターポータブル2ndG

必要人数5人

ルール：イャンガルガ討伐訓練における5人の合計タイム（※力尽きた場合は40分とする）

司令塔：任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない。

大乱闘スマッシュブラザーズDX

必要人数 6人

ルール：1対1のストック戦。勝ち抜き形式でストック数は4  
司令塔：任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない。

New super mario bros

必要人数 7人

ルール：ステージ8の8-1から最後の城までの攻略における7人の合計タイムを競う。（※残機を1つ失うにつれてペナルティとして+20秒）

司令塔：任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない。

3種目については完全に予想外であった。ゲーム、それも古い作品ばかりだ。

「先生、ゲームは全て古い作品ですが良いんですか？」

柴田が手を挙げて質問をする。彼はモンハンをやっていた事があるが、4Gから初めて、それ以前のモンハンはやっていない。しかもその4Gも今では古い存在である。

「マイナーなゲームなら却下されてたけど、Bクラスが選んだ種目はどれも名作で話題になったものだから認められたの」

「マジかよ！俺2Gはやって事ないぞ！」

「俺はあるけど、狩技や乗り、操竜が全くないゲームで、今のモンハンに慣れてるから敵しいかもな」

「スマブラだつてこの学校に来てからはやってないわよ」

そんな不安な声上がる。最近になつてBクラスからイチヤモンを付けられたりしている事もあり不安が蔓延し始める。

「落ち着いて！まだ種目が発表されただけだよ！今から不安になつてたら本番でゲーム以外の種目でもミスしちゃうよ」

一之瀬が手を叩いて周りを落ち着かせる。

「それに3種目を全て本命種目に入れてくるとは限らないよ。重要なのは自分達の種目に力を入れる事だから」

言っている事は間違いではない。実際龍園も八幡もゲームを最大でも2種目までにして、全て本命に入れるつもりはない。

「とにかく向こうのペースに乗せられないようにして、授業以外では必ず3人以上で行動してね？後、比企谷君が言っていたけど龍園君は監視カメラの場所から下剤などの奇襲を考えてるらしいから、監視カメラのない特別棟やカラオケには試験が終わるまで絶対に行かないで」

「うわ、下剤とか卑怯過ぎだろ……」

「注意しないとね。でも龍園君と同じ比企谷君が警告するんだろ？」

「Bクラスの人間もハイリスクと考えてるんだろう。まして比企谷は龍園と違ってルールは守るからな」

そんな風に会話をするCクラスだが先程よりも絶望感はマシになっている。その事に安堵する一之瀬。

しかし朝のHRが終わった直後、トイレに行こうとした一之瀬のポケットから電子音が鳴るので見れば知らないアドレスからメールが来ていて……

龍園だ

お互い良い勝負をしようぜ。で、終わった後にユキと夢を抱く予定だがお前も来るか？

そんな文と一緒に動画が送られてきて、嫌な予感を感じながらも一之瀬が確認すると

……

「いやあ！もうダメエ！イクっ！」

「綾小路君のおちんちんっ！大好きんあああつ！」

「んっ！ああああああんっ！」

小橋と網倉が龍園と綾小路によって絶頂して、一之瀬が潮吹きで龍園と綾小路の顔を汚す光景が流れる。

「っ……っ……」

そんな動画を見た一之瀬は羞恥心でさつきまでの余裕が吹き飛んでしまう。乱交パーティーの見学中に攻められた結果、潮を吹いてしまったが、その動画も撮られているとは思わなかった。

学校側に訴えるのは無理だろう。何せ乱交パーティーは皆が望んで行なっているし、一之瀬も自分の足で現場に行った。

何より姫野達セフレが底う可能性が高い。今朝、姫野、白波、網倉、小橋と一緒に登校した際、余りの猥談に惑わされてしまいそうだった。

姫野は龍園にアナル攻めをされて幸せだった事や卒業後は龍園のセフレとして同じ大学に行く予定って事を話して……

白波は八幡の肉便器になったことを嬉しそうに語り、一之瀬に対しても一緒に肉便器になろうと誘い……

網倉は綾小路に中出しをされたことを嬉しく思い、卒業後は綾小路のペットとして離島で暮らす決意をして……

小橋は3人に輪姦されるのは最高で、一之瀬にも羞恥心を捨てるべきだと諭してきたのだ。

由比ヶ浜によってストレスを溜めまくった4人は入学当初とは豹変してしまい、一之瀬も自身が少しずつ変わっている事を自覚している。

(どうしよう。私も全てを投げ捨てて良いの、かな……)

一之瀬は自身の中に迷いを抱きながらトイレに向かうのだった。

(さて、Dクラスの選抜種目については大体予想通りですね)

Aクラス、坂柳有栖は発表されたDクラスの種目を見る。内容についてはスポーツ系が多いが……

(本命については水泳、弓道、中国語、ボクシングでしょう)

少なくともこの4つは5種目の中に入れて来ると有栖は考えている。ボクシングの参加人数は1人だし、参加者は言うまでもなく綾小路だろう。

何せホワイトルームの最高傑作で生身でクマを倒せる怪物だ。フィジカルで綾小路を倒せる人間はAクラスどころかこの学校にはいないと確信している。

水泳と弓道と中国語については3人以上の参加者だが、どの種目も「1番優秀な生徒のいるクラスの勝ち」という勝利条件なので、極論1人優秀な奴が居れば負けはない。

水泳には水泳部の大会スタメンの小野寺かや乃が、弓道には弓道部の三宅が、中国語は帰国子女の王がいる。

一方Aクラスには水泳部の生徒はいるが補欠だし、弓道部に所属する生徒はおらず、中国語については確認するが期待はしないでおく。

一方Aクラスが選んだ種目は純粹な学力勝負にフラッシュ暗算などの特殊な種目を織り交ぜている。よって互いの選んだ種目で3勝ずつして、最後の種目にかかっている展開になる可能性が高い。

(面白い展開にならなそうなのが残念ですね)

そんな風に考える有栖だが、試験当日には……

「Cクラスは予想通り学力を重視した種目を選んできたな」

「そうあってくれなきゃ困る……と、いうわけだ。学力担当は今まで通り寮内で牙を研いでおけ」

『了解！』

「そして石崎達からはこれから一段とCクラスに絡みに行け。ただし絶対に暴力は振るうなよ？」

『了解！』

俺の命令にひより達学力組は頷き、龍園の命令により石崎達Cクラス妨害組が頷く。向こうもこっちの出した種目を知っているだろうが、俺達は自分達の用意した種目でもCクラスが用意した種目でも負けるつもりはない。目標としては全勝だ。

それに一之瀬についても精神的にこちらが有利だ。既に龍園は一之瀬に対して乱交の動画を送っているし。

正直言つてこの試験はDクラスよりCクラスの方が攻略が楽だ。何せDクラスには一点特化型が多いからな。

それにしても今日は隣のDクラスは静かだな。普段なら毎日由比ヶ浜が騒いでるし。まあ流石に種目の発表くらいで騒ぐほど馬鹿じゃないようだ。

何にせよ騒ぎ声のない朝は最高だ。可能なら毎朝こんな感じの平和なHRを迎えたものだ。

そんな風に考えながら俺は1限目の準備をするのだった。

「連絡事項は以上だ。後由比ヶ浜については風邪で休みとのことだ」

Dクラス、茶柱の代理として朝のHRを執り行う桐山の言葉にDクラスの皆は安らぎの表情を浮かべる。

「ああ、平和だな」

「こんな静かなHRは久しぶりだな」

「朝ってこんなにのどかなんだな……」

クラスには穏やかな空気が漂っている。叶うならこのような日常が毎日続いて欲しいと願っている。

選抜種目についても発表されたし、放課後には馬鹿のイチャモンがない状態で作戦を練れる事になる。

その事実には嬉しく思いながら1限目の準備をするのだった。

……

そんな風に各クラスの間には様々な空気が生まれ、各々が試験に向き合うこと1週間  
遂に試験当日を迎える。

## 試験当日

「んっ、んんっ……」

朝の日差しによって目を開ける。

「おはようハチ君」

横から声が聞こえてきたので見れば裸のなずな先輩がいる。

「……おはようございます。今日の当番はなずな先輩か」

「うん。じゃあハチ君。朝のおっぱいの時間でちゅよ」

言いながら胸を突き出してくるので、綺麗な乳首に口を含み吸う。

「んっ……はあっ……んっ、ハチ君は欲しがりでちゅね、ママのおっぱいを一杯飲んで大きくなつてくだちゃいね」

赤ちゃんの言葉で甘やかしてくるなずな先輩から圧倒的な母性を感じる。

毎朝、こうやって恋人の内の1人に癒してもらうのが日課だ。残りの2人は朝食を作っていて、今日の癒しの担当はなずな先輩だ。

癒し方は恋人によって違うが、なずな先輩は圧倒的な母性を利用した赤ちゃんプレイ

をよくして、有栖は自らの幼い身体を利用した親子プレイをして、最近のよりひよりはサディストな一面を晒したSMプレイをしているのだ。

「ハチ君はママのおっぱい、大好きでちゅか?」

「んっ……大好きだ……んむっ」

「あんっ……ママもハチ君が大好きでちゅよ……」

喘ぎながら胸を吸わせてくれるなずな……早く母乳が出て欲しいものだ。

暫くの間、なずな先輩の胸を堪能しているとキッチンにいたひよりがやって来る。

「おはようございます。朝食が出来たのでその辺りにして着替えてください」

「ぶはっ……了解」

俺はそのまま寝巻きを脱いで制服に着替えてキッチンで朝食の盛り付けをしている有栖に近寄る。

「おはようございます。盛り付けが終わった皿を運んでください」

「は、うん」

俺はそのままキッチンから皿を運んでテーブルの上に置く。そして全ての皿を運び終えると、なずな先輩も制服に着替えてやって来る。

「」「頂きます」「」

挨拶をして朝食を食べ始める。

「ハチ君達は今日が試験本番なんでしょ、頑張つてね」

「なずなさんは明日でしたね？南雲会長は大丈夫なんですか？」

ひよりの言うように南雲会長は由比ヶ浜達の愚行により心労が積もり、山内のレイプ事件によって茶柱先生と病院に運ばれたと聞いている。

「こっちの試験もあらゆる要素が詰まっている試験で、雅については運動系は棄権して、学力系についてはリモートでやるらしいよ」

「そうでしたか？生徒会長は大変ですね」

有栖が心底同情した表情を浮かべる。まあ実際のところ、生徒会長の立場は地獄だろう。

しかし南雲会長には悪いが例のレイプ事件について、こっちには利益が出たんだよな。

山内が佐倉をレイプしてから数日して、山内の両親が学校にやって教師を仲介して佐倉、俺、綾小路、龍園、みーちゃんの話をした。

で、山内の両親はマトモで佐倉に土下座をしながら山内にも土下座をさせていた。一方の山内は未だに和姦だ和姦だと騒いでいて見苦しい事この上なかった。

で、山内は1ヶ月近く佐倉をレイプした事が悪質と判断され少年院行きが決定、更に山内の両親は山内の大学などの学費などを全て佐倉に支払い、出所してからは一切息子

を援助しないと誓った。

その際に山内は……

「ふざけんじゃねえよ！何で俺がそんな目に遭わないといけないんだよ?!そもそも俺はグループディスカッションで誰とも組めずにいた愛里と組んでやって、試験では足を引つ張られたんだぞ！そんな恩知らずの屑を許してやったんだから処女くらい奪って当然だろうが！テメエみたいに身体しか取り柄のない奴が俺の人生滅茶苦茶にしやがって！いつか絶対にお前を孕ませてやるから覚悟しやがれ！」

なんて余りにもふざけた発言をぶちかまし、山内の両親はブチ切れて山内を殴りまくる事態にまで発展した。

最終的に山内の両親は佐倉に1600万円分の慰謝料を支払ったが、審議の後に佐倉は俺達に助けられたからと全額渡そうとして、最終的に1人あたり320万ポイントの五分分となった。

で、最後にみーちゃんや俺と龍園と綾小路に「100万ポイントずつあげるんで週に一度の乱交パーティーの際、私の時は輪姦してくれませんか？」と提案してきて、俺達はそれを承諾。

結果、俺の懐には420万も入り、龍園にも420万入ったので、クラス投票においてCクラスに貸した分のポイントは余裕で補填出来るので有意義な話し合いと言える

だろう。

閑話休題……

「何にせよ。俺達は俺達で勝ちに行くだけです」

「頑張ってね。あ、でもハチ君は余り帆波をいじめないでね？」

「それなら大丈夫ですよ。一之瀬を虐めるのは龍園の仕事ですから」

「いや、いじめそのものを止めて欲しいんだけど」

「なずな先輩はそう言うが龍園は勝つために手段は選ばないし、一之瀬が乱交パーティーに参加する事になったら遅かれ早かれだろう。」

「そう思いながら俺は朝食を食べ終えて行く準備を済ませてからなずな先輩とは時間をズラして学校を出るのだった。」

教室に入ると緊張感が広がっているのがわかる。特に勝てと厳命された生徒からは

半端ない緊張がある。

そして朝のHRの時間を告げるチャイムが鳴り坂上先生が専門科目の教師を2人連れて入ってくると緊張感が増す。

「おはよう。早速だがHRを始める。わかっているだろうが今日はいよいよ特別試験本番だ。これまで培ってきたものを全てぶつけて頑張つて欲しい……議題に挙げたい生徒がいらないならルールを説明する」

周りを見るが議題に挙げたい生徒はいないようだ。

「では説明を始める。HRが終わり次第、司令塔の龍園君は私と一緒に多目的室に行き、他の生徒については教室で待機だ。そして種目の参加者を龍園が指示したら教室にいる2人の先生の内の1人が名前を挙げて試験会場に引率するので、指示には従うように」

なるほど。1人は引率で1人は見張りのようだ。

「試験の様子はモニターに映るが、不参加者は教室を出なければ自由に過ごして構わない。トイレに行きたい際は声をかけるように。」

「話は以上だ。質問はあるかね?」

「一応一つだけ」

「比企谷君か、何かね?」

「仮に第6種目までで3勝3敗、第7種目で向こうの学力種目で引き分けならどうなるんですか？」

よく考えたらその内容は聞いてなかった。可能性は極めて低いがあるからな。

「その場合は延長戦になる。必ず白黒つける決まりとなっている」

「了解つす。俺からは以上です」

周りを見ると他に質問する生徒はいない。

「……ではHRを終了する。龍園は私についてきなさい」

坂上先生の言葉に龍園は立ち上がって坂上先生に続く。俺達は席に座って黒板前に下ろされるモニターを注視している。

15分くらいすると教師がリモコンを取り出して操作する。同時にモニターが明るくなる。

「これより両クラスの本命種目の発表が行われる」

その言葉と共にモニターに文字が表示される。ウチのクラスの種目は「空手」「柔道」「ボクシング」「相撲」「モンスターハンター」でCクラスの種目は「数学テスト」「国語テスト」「英語テスト」「社会テスト」「リフティング」だった。

俺が出るとしたら「モンスターハンター」「国語テスト」「英語テスト」「社会テスト」だろう。種目の順番次第だが果たしてどうなるのやら……

俺達が待機する中、教師はインカムに手を当ててからこつちを見て……

「第1種目は「国語テスト」に決まった。金田、北川、西野、椎名、大河内、黒崎、比企谷が選ばれたので私に付いてくるように」

『国語テスト』

必要人数7人 時間50分

ルール……1年度における国語の学習範囲内の問題集を解き合計点で競う。

司令塔……1問だけ代わりに答えることが出来る。

ルールがモニターに表示される。いきなりCクラスの種目で、龍園から勝ちに行くべきと言われた種目だ。大事な初戦だから絶対に落とせない。

俺達は不参加者から激励の言葉を受けながら教室を後にするのだった。

# 開幕

## 『国語テスト』

必要人数7人 時間50分

ルール：1年度における国語の学習範囲内の問題集を解き合計点で競う。  
司令塔：1問だけ代わりに答えることが出来る。

「第1種目は国語テストだ。制限時間内に参加者を決めるように」

Dクラス担任の茶柱が顔色を悪くしながら龍園と一之瀬にそう告げる。本来なら休んで良いと他の教師から言われたが、大事な日に休んだら馬鹿どもに負けたような気がする。なので無理してこの場にいる。

そんな茶柱に流石の龍園も同情しつつ、参加者を選ぶ。

選んだのは金田、北川、西野、ひより、大河内、黒崎、八幡だ。このメンバーは学年上位クラスの成績を持っていたり、国語においては学年トップクラスの成績の生徒だ。

元々龍園はこの種目が出たら勝ちに行く予定だったが、最初から出たのはありがたい。今後の種目次第だが最初に優秀な生徒を使えば終盤の種目でもう一回使用できる可能性が高いからだ。

制限時間を迎えると一之瀬サイドの生徒も発表される。選ばれたのは網倉、二宮、浜口哲也、高部、時任、津辺、小橋と成績優秀組だ。

「どうやら互いに初戦に全てを注いだみたいだな」

「龍園君達Bクラスの選んだ種目は勝ち目が特に薄いからね」

「喜べよ一之瀬。もしこの種目でテメエらが勝ったら、今後Cクラスの種目でこつちの勝ちは無くなる。何せペーパーシヤツフルで勝ったからって気の緩みまくって勉強しなくなった馬鹿しかいないからね」

もちろんこれは龍園の嘘である。実際のところBクラスの生徒はペーパーシヤツフルを通して勉強する習慣を身につけたので、3学期に入ってから成績を伸ばしている。そして特別試験が発表されてからは更に勉強時間を増やしている。

「やつぱり……だからこの種目で最大戦力を投入したんだね」

そして一之瀬は騙されている。しかし仕方ない事だ。期末試験前に八幡がクラスメイトに「他クラスに対して気が緩んで成績が落ちたと思わせたいから、期末では手を抜け」と命じて、クラスメイトはそれに従って成績を大きく落とすとした。

更にCクラスにちよつかいをかけまくったり、勉強場所を耳目のある図書館からプライベートスペースの寮に変えたり、八幡を介して龍園自身が下剤の使用を考えている嘘を広めて、勉強をしていないからラフプレーで差を詰める思わせ続けた。

もし期末試験で全力で取り組んでいたら期末試験でCクラスより上になっていたかもしれないが、その場合は選抜種目試験でCクラスは死に物狂いで勉強するのは明白である。

それを考えると八幡の「期末試験で手を抜いて、以降は第三者に見られない場所ですっかり勉強しろ」という指示は見事だったと龍園は考えている。八幡の隠れた王道に自身の邪道を纏わせた結果、一之瀬も黙らせているのだからな。

そう思いながら龍園はモニターに映る八幡達を見る。皆、真剣な表情を浮かべながら問題に取り組んでいる。司令塔の関与、1問だけ代わりに答える権利は使用しない。全員龍園より成績が良いのだから足手纏いにしかならない。

「退屈だな……おい教師共。教室に行つてモンハン取りに行つて良いか？」

なんだかんだ龍園も特別試験が発表されてから2Gを久しぶりにやった人間である。

「ダメだ。試験が終わるまで部屋を出る事は許されない」

「ちっ」

ただ50分も待機するのも暇でしかない。しかも他の種目でも学力試験が出たら更

に退屈になる。

暫くすると鐘が鳴る。

『時間だ。ただちに採点をする』

モニター内では教員らが生徒の答案を回収して生徒が退出すると物凄いスピードで採点を始めるので龍園も欠伸をやめてモニターを注視する。モニターを挟んで向かい側にいる一之瀬からも緊張感を感じる。

暫くすると教師の1人が携帯を取り出し、同じタイピングで真嶋が携帯を取り出す。

「採点の結果が出た。Bクラスは652点、Cクラスは645点より第1種目はBクラスの勝利とする」

「っー」

「危ねえな」

真嶋の言葉に一之瀬の表情が曇り、龍園は小さく呟く。かなりギリギリの勝利であった。

しかし勝ちも勝ち、それもCクラスの土俵で勝利したのでBクラスの士気は上がり、Cクラスの士気は落ちたのは明白、このまま突き進んで欲しいと考える龍園。

「では次の種目を発表する」

茶柱の言葉と共にモニターが切り替わり……

「採点が終わった。結果についてだが、Bクラスは652点でCクラスは645点より第1種目はBクラスの勝利とする」

『おっしやああああああっ!』

Bクラスにて見張りの教師がそう告げるとクラス内に歓声上がる。まあ当然だろう。何せ相手の種目で勝つたのだからな。

7種目の選ばれ方は知らないが出来るだけ公平に、片方が3種目でもう片方が4種目だろう。ウチのクラスの本命が3種目なら必然的にCクラスの選んだ種目で最低1回は勝たないといけなかったが、早々に達成出来たのは良かった。

「やりましたね八幡君」

「ああ、やったな」

ひよりが笑顔を向けてくるが、それだけで喜びが増してくる。

「静粛に。次の種目と参加者を発表する」

教師の言葉に周りが静まり、モニターを注視すると……

「次の種目はモンスターハンターポータブル2ndGで参加者は山脇、宍倉、鹿島、田中、石坂だ」

モンスターハンターポータブル2ndG

必要人数5人

ルール：イヤンガルルガ討伐訓練における5人の合計タイム（※力尽きた場合は40分とする）

司令塔：任意のタイミングで1人に1回だけ助言しても構わない

今度はこっちの種目のようだ。選ばれたのは学力も運動能力も高くない5人だ。しかし今日までイヤンガルルガ討伐訓練に全てを注ぎ込んでいる。

一方のCクラスは練習をしてないだろう。何せ2Gについては俺達が全て買い占め

たからな。精々動画を見たくらいだと思う。

しかしそれでは余り意味ないだろう。凄いテクニク動画を見て参考にするのは大切だが、その前に標的の動きを把握して対応出来るようにして討伐に苦労しないレベルにする必要がある。

要は基礎をマスターしてから効率性や狩り速度を上げるのが常識だが、基礎をマスターするには実際にプレイするのは絶対だ。

そして基礎を試せない以上は差は歴然だ。まあ特別試験前から2Gを持つていたら話は別だが、可能性は低いだろう。何せ10年以上前のゲームだからな。

終いには2Gにはスタイルとか狩猟スタイルみたいにシステムアシストは無く、純粋なプレイヤー技術が重視されているから、その点が勝てる可能性を高める。

よつてこの種目については100%ウチのクラスが勝つだろう。

そう思う中、モニターでは画面が10分割されて闘技場のベースキャンプが表示されている。上の5つがウチのクラスで、下がCクラスだ。

全員が動画サイトで短い記録を出していたハンマーを装備して、戦闘が始まるが……  
「やはり差が出てるな」

開始数十秒、Bクラスの画面では5体のイャンガルガがスタン状態になっているのに対して、Cクラスでは2体のイャンガルガしかスタン状態になっていない上、3人

はスタン前に攻撃を受けている。

流石試験までに300回以上、やり込んだだけの事はあるな。

そしてウチのクラスはハイペースで進んでいき、全員ノーダメージで3分以内に討伐を完了する。

一方のCクラスは1人が3分ギリギリで討伐成功するが、他の連中は手こずって……あ、1人力尽きた。

『良しっ！』

クラスから歓声が上がると力尽きると40分扱いになるのでこっちの勝ちが決まった。

暫くすると他の4人は何とか討伐を済ませる。

「全員終了してBクラスは合計13分41秒、Cクラスは61分4秒。よってこの種目はBクラスの勝利とする」

これで2勝0敗。このまま順調に進めば良いんだがな……

「それでは第3種目と参加者を発表する」

ここで王手をかけたいが、何が出るのやら……

## チエス

「それでは第4種目を発表します」

BクラスとCクラスが鎬を削る中、AクラスとDクラスも壁を挟んで激突している。現在2勝1敗でAクラスが勝っている。

初戦は参加者10人の中国語だったがみーちゃんがぶっち切りの成績を出して、一番高い点数の生徒のいるクラスが勝ちの勝利条件なのでDクラスが1勝。

第2戦は参加者2人のフラッシュ暗算だったが、高円寺がボイコットして千秋が葛城に惜敗してAクラスがDクラスに並ぶ。

第3戦では参加者8人水泳でDクラスの小野寺がリードしていたが終盤に足を攣ってしまい、ギリギリで橋本に抜かされてしまった。中国語同様に1番早い生徒のいるクラスの勝ちの為、Aクラスが2勝となる。

Dクラスの種目でDクラスが負けた以上、Dクラスは最低でも1回はAクラスの土俵で勝つ必要がある。

そして第4種目は……

『チェス』

必要人数1人 持ち時間1時間（切れ負け）

ルール：通常のチェスルールに準ずる。ただし41手目以降も持ち時間は増えない。  
司令塔：任意のタイミングから1手だけ指示を出すことが出来る。

Aクラスの選んだ種目だ。真澄は有栖を選択して、榎田は綾小路を選択する。

「ここで綾小路を出すんだ。てつきりボクシングで出すと思ったわ」

「うん。ボクシングは綾小路君の担当だけど、ボクシングの前にチェスが出たらそこで使えって指示が出たからね」

榎田としてはクラス最強の男の指示なので大人しく従った。

そして2人がモニターに移り、テーブルに向かい合う。

『宜しくお願いします。個人的には貴方とぶつかるのを楽しみにしてました』

『そうか。悪いが勝たせて貰うぞ』

『ええ。しかし私としては貴方の全力とぶつかりたいので1つ賭けをしませんか？』

『内容次第だ。神室と一緒に入浴とかなら喜んで参加するが』

「はあ?!馬鹿じゃないの?!」

「ブレないなあ……」

モニターに映る綾小路の発言に真澄はキレ、榎田は呆れる。恋人も見ている中で堂々と違う女子と風呂に入る事を希望するなんてぶっ飛びすぎている。

『それは真澄さんの返答を聞いてないですからお答え出来ません……しかし賭けの内容としてはウチのクラスで綾小路君に興味を持っている可愛い女子もいるので紹介しようと思っていたのですが……』

『乗った』

綾小路は即答する。それを見た榎田は教室でブチ切れる恵を容易に想像出来た。

『ちなみに真澄さんを気に入ってるんですか？』

『まあな。あの肉付きの良い脚に頭を乗せたい。後、神室って付き合ったら絶対に甘えん坊になりそうだし』

『わかります。文句を言いながらも甘やかしたり、クールな態度を取ってもぞんざいに扱われたら寂しそうな態度を取りそうですね』

『ツンデレってヤツだろうな』

『ええ。中身はかなり乙女ですよ。可愛らしいピンクの下着もありますし、部屋には恋愛漫画が沢山ありますし』

『良いな』

「……っ！アイツら……！」

好き勝手言う2人に真澄の額に青筋が浮かぶ。

「神室さんって乙女なんだ」

「うっさい!」

思わず呟いた櫛田に真澄がキレる。龍園と一之瀬のやり取りに比べたら気が抜けるやり取りである。

『で?俺が負けたら何を要求するんだ?』

『そうですね……在学中に作る恋人の数を5人までにしてくれませんか?貴方が十数人恋人を作ったら八幡君も作りそうなので許容範囲の5人までにして欲しいです』

『それはセフレを捨てろという意味か?既にセフレは10人近くいるんだが』

『それでしたら今更です。文句は言いません。恵さんと楓花さんの2人以外に恋人を3人より多く増やすなという意味です』

『わかった』

『即答ですか』

『勝てば良いだけだ。全力を持ってお前を叩き潰す』

最低の理由によりモチベーションを上げる綾小路。堂々と発言する綾小路には坂上や星之宮も絶句していて、セフレの1人である櫛田としては、余りモチベーションが上らない。

ちなみにDクラスでは恵がブチ切れていて、男子の大半が嫉妬に満ちて、千秋達セフレが呆れていたのと言うまでもないだろう。

そんな中、2人の対決が始まるが、圧巻の一言だ。

互いにノータイムで駒を動かしていて、一切の躊躇いを見せていない。最早何手先まで読んでいるか榎田や真澄には理解出来ずにいた。

『ふふつ、やりますね。それでこそ倒し甲斐があります』

『悪いがお前では勝てない。可愛い女子の紹介がかかっているからな』

『どんな事をモチベーションにするのかは貴方の自由ですが、女の子をモチベーションにし続けているご両親はガツカリしますよ?』

『知った事じゃないな。それとも不満か?』

『私としてはそれが貴方のベストコンディションに繋がるなら気にしません』

言いながら2人の手は止まらないでノータイムで駒を動かし続けるが、やがと有栖の手が止まる。初めて長考だ。

しかし15秒してから駒を動かす。それに対して綾小路は룩を動かさそうとしたが、寸前で手を止めて盤面を見直してナイトを動かす。榎田には綾小路の意図はわからないが룩を動かしたら負けに繋がったと思った。

それからは再度ノータイムで動かすが10手動いた所で綾小路の動きが止まる。し

かも今度は1分以上だ。

これまで殆どノータイムで打っていたので時間には余裕があるが、ここまで長いのは多目的室で試合を見ている面々も予想外である。

そして2分経過した辺りでクイーンを動かす。それに伴い、有栖も考える素振りを見せる。

『……中々いやらしい手ですね』

『まあな。ハンドテクニクには自信がある。恵や楓花さんを前戯で毎晩喘がせてるからな』

『……そつちの意味でもいやらしいのですか……しかし、これで勝ったとは思わない事です』

有栖が一手を撃つ。渾身の一撃を撃つ。有栖自身もこの一手が拮抗を破る一手と確信している。

『……良い一手だ』

綾小路の番になるが褒めるだけで動かない。有栖が長考した2分以上も動かない。

「綾小路君？大丈夫？詰まって『ちよつと黙つてろ櫛田。今夜アナル攻めするぞ』堂々と言うな馬鹿ー！」

心配だから声をかけたらセクハラの爆撃を受ける。しかも櫛田の声は教室に聞こえ

てるかはわからないが、綾小路の声は間違ひなく聞こえているはずだ。

これには坂上や星之宮も同情的な眼差しを向けてくるので、櫛田は今夜に期待しながらも目を逸らす。

そんな中、綾小路は五分近く経過したあたりで駒を動かす。すると有栖がモニターでもハツキリわかるくらい驚きを露わにしている。

『そう来ましたか……実に素晴らしい……!』

『先に言っておく。お前の負けは確定した』

櫛田にはどのような状況かわかってないが、ああも断言した以上、可能性は充分あるだろう。

モニターでは有栖が盤面を隅から隅まで見て駒一つ一つをチェックする。

そんな動作が3分くらい経過した時だった。

『……負けですね。リザインします』

白旗をあげる。

「ちよつと坂柳?! まだ駒は沢山あるでしょ?!」

『いえ。このまま続けても抵抗出来ても逆転は無理です。これ以上粘っても格好悪いだけです』

真澄の問いに有栖はキツパリとそう返す。多目的室にいる面々にはどういった攻防

があつたのかサツパリわからないが、有栖がりサインした以上進行を続ける必要がある。

「ではこの種目はDクラスの勝利とする」

坂上がそう告げると綾小路と有栖も立ち上がる。

『お見事でした。つぎは負けません』

『次も負けるつもりはない。後、約束通り俺に興味を持っている可愛い女子の紹介は頼むぞ』

『ええ。春休み中にセッティングする事を約束します』

そう言つて2人は教室から出て行くので櫛田も真澄も意識を切り替えて次の種目に臨んだ。

5番目の種目はAクラスが選んだ参加者7人の数学テストで、両クラス共に力を入れたが、Aクラスが641点でDクラスが619点でAクラスが勝利。

6番目の種目はDクラスが選んだ参加者6人の弓道であり、弓道部ホープの三宅が圧

倒的な差をつけてそのままDクラスの勝利となる。

よってラストを残して3勝3敗となる。

そんな中、最後の種目が発表される。

「最後の種目はボクシングだ。双方1人ずつ選ぶように」

最後にDクラスの選んだ種目だ。坂上の言葉に榎田と真澄は生徒を選ぼうとしたが、榎田はある事実に関心し負けを確信した。

この試験では司令塔以外の選手は基本的に1回しか出れない。2回目以降は最低でも全員が1回出てからだ。

そしてDクラスの生徒数は入学当初は40人だったが、池、雪ノ下、山内が退学して、佐倉が休学して、榎田が司令塔であるので、種目に参加する生徒は35人だ。

一方Aクラスはクラス投票試験によって退学者が2名出て、真澄が司令塔なので種目に参加する生徒は37人だ。

ここでこれまでの種目を振り返ると……

第1種目 中国語 10人

第2種目 フラッシュ暗算 2人

第3種目 水泳 8人

第4種目 チェス 1人

第5種目 数学テスト 7人

第6種目 弓道 6人

34人が参加した事になる。そして最終種目のボクシングは参加人数1人だ。

つまりDクラスは残り1人が強制的に選ばれ、Aクラスは3人の中から1人を選ぶので……

「最終種目のボクシングはAクラスの鬼頭隼とDクラスの由比ヶ浜結衣の両名で試合を行う」

Aクラス内で最強のフィジカルを持つ鬼頭と学校1の嫌われ者の由比ヶ浜の組み合わせとなった。

真面目な真嶋あたりは危険性を考慮して中止を宣言していただろうが、坂上は試合を行う事を宣言して、星之宮も止める事をしなかった。

坂上の宣言を聞いて櫛田と真澄は同時にガッツポーズを取っていた。

## ボクシング

「最後の種目はボクシングに決まった。由比ヶ浜は今すぐ付いてくるように」  
「はあ?!何であたしが参加しないといけないんだし!他の人がいるじゃん!」

教室内にいる教師がそう告げると案の定、由比ヶ浜は怒りを露わにしながら立ち上がる。クラスメイトは皆うんざりした表情だ。

「他の人、34人は既に出た。よって最後の種目は由比ヶ浜の参加は絶対だ」  
「嫌に決まってるじゃん!あたし喧嘩強くないのに!学校がそうなるように組み込んだんでしょ!最低!」

理不尽な怒りをぶつける由比ヶ浜に呆れ返るクラスメイトに教師。

しかし実は由比ヶ浜の発言は正解である。理事長代理の月城が仕組んだのである。

今回の選抜試験にて司令塔が榎田になった為、綾小路からプロテクトポイントを奪えないので、方針を綾小路のより正確なデータを取る事に切り替えた。

結果として綾小路の出したチェスのデータはホワイトルーム時代より上回っているし、前の合宿にて生身で熊を倒した事や駅伝の記録を見る限り身体能力もホワイトルー

ム時代より上回っていると月城は判断した。

しかし問題があった。綾小路の成長の速さの理由がホワイトルームの教育プログラムではなく、女子が絡んだ煩惱である事だ。

先程のチエスでも煩惱丸出しの態度を崩さずに有栖を倒したが、今回のデータを雇い主である綾小路の父親を見せたら、どんな反応を見せるか想像出来ない。

何せ自身の作った環境こそ最善と思っている男の息子にしてホワイトルームの最高傑作が煩惱を利用してホワイトルームに居た時以上に成長しているのだから。

加えてこれまでの綾小路の記録の提出をしないといけないが月城自身に飛び火する可能性が高い。

そんな未来に憂鬱を感じた月城は少しでもストレスを発散出来るようにストレスの要因の1つの由比ヶ浜がボクシングで黽められるように仕込みをしたのだ。

しかし周りからどうこう言われる筋合いはない。由比ヶ浜は職員室にしよつちゅうやって来て「×に虐められたから退学にして！」と喚いて、月城もそれを聞いて苛立つことがあったのだから。

よつて月城は最後の種目をボクシングにするように、それまでに34人参加出来るように種目を選んだ。マトモな人間なら由比ヶ浜を使うのを避けたいだろうから第5種目と第6種目には選ばれないと確信しながら。

「そんな訳ないだろう。1年生の担任ならまだしも、上層部が不平等な事をするはずない」

由比ヶ浜の喚きに教師は1年生の教師ならまだしもなんて割とアウトな発言をする。しかしクラスの人間は咎めるつもりはなかった。何せ自らの担任は5馬鹿の所為で心労に苦しんでいるのだから。

「何にせよルールは絶対だ。今から来て貰う」

「やだよーやだよだよだよ」

由比ヶ浜は駄々をこねるが教師はそれを無視して女の教師が由比ヶ浜の手を引っ張り連行して行く。

「離すし！何であたしを虐めるの?!最低！屑！恥を知れし！」

由比ヶ浜の傲慢な罵倒が周りを不快にさせる。しかし皆はダンマリしている。注意したら逆切れする事はもう皆理解しているのだから口を開かない。喜ぶとしたら由比ヶ浜が教室を出てからだ。

そして教師が教室から出て暫くすると……

『よっしやあああああつっ！』

クラスメイトが喜びを露わにする。由比ヶ浜が堂々とポコポコにされるのをこれでもかというくらい喜びを露わにする。

ちなみに試験そのものは負けを確定しているが一部を除いて気にしていない。山内の退学によってポイントは殆ど残ってないし、勝ってポイントを得ても由比ヶ浜が直ぐに減らすとわかつているからだ。

そんな中、モニターが切り替わりボクシング部が使用しているリングが映る。モニターには既に鬼頭が映っていてアップをしている。

それに伴いクラス内の喜びが増幅する。学年屈指のフィジカルの鬼頭の一撃なら由比ヶ浜に大ダメージを与えられる可能性は高い。

暫くすると由比ヶ浜がスポーツウエアの格好をして入ってくるが不満丸出しの表情だ。

『何で男子なんだし！不公正じゃん！』

しかもアップしている鬼頭を見ると案の定喚き出す。

『これは競技ではなく試験だから不正も何もない。早く上がれ』

『っ！だから押すなし！学習能力がないの?!』

『行けと言われて行かない貴女よりはマシなつもりよ』

『偉そうに！本っ当最低！』

女教師は苛立ちを隠す事なく由比ヶ浜を押すが、由比ヶ浜の喚きは相当キツイようだ。

そして鬼頭と向かい合う。鬼頭が構えを見せる中、由比ヶ浜の罵倒は鬼頭にも向かう。

『良い?!ちゃんと手加減して負けてよね!男子が女子を殴るなんてさいていなんなからね!』

『……………』

『聞いてんの?!顔が死神みたいに腐つてるけど、耳まで腐ってるの?!』

『何とか言えし!もしもあたしを殴ったら絶対に許さないから!』

『…………ゴングを鳴らせ』

鬼頭は無表情のまま由比ヶ浜の罵倒を流しつつ審判にそう告げると開幕のゴングが鳴る。

『無視すんなし!顔が死神なんだし、行動くらいは普通に『ふっ!』げほおえっ!』

喚く由比ヶ浜に対して鬼頭は無表情のまま腹に一撃を放ち、由比ヶ浜は嘔吐する。容赦ない一撃にAクラスとDクラスの大半が歓喜する。

『ごほっ!ごほっ!さ、最低っ!女子を殴るなんてっ…………本当に死ぬ!屑!カス!『ふんっ!』……………』

鬼頭は聞くだけ無駄とばかりに顔面に向けて拳を放つ。腕の立つ人間なら回避したりガード出来るが、喚くだけで何もしていない由比ヶ浜には何の対処出来ず、鼻血を撒

き散らしながらのたうち回る。

それに共に両クラスから歓声が上がリ、多目的にいる司令塔の櫛田や真澄、立会人の坂上と星之宮もガッツポーズをして、監視室にいる月城が第三者に見られないように気をつけながら小さく握り拳を作っていた。

『……これ以上の続行は不可能であろう。勝者をAクラスとする』

審判の教師がそう告げる。本来ならもつと鬼頭が由比ヶ浜をボコす所を見たかったが一応教師なので私情を挟まないで、試合終了を告げて救護の手配をする。

それに伴い試験そのものが終了する。結果としては4勝3敗でAクラスの勝ちとなる。よってDクラスは30ポイントをAクラスに渡し、Aクラスはそれに加えて100ポイント学校から支給される。

3月開始の時点のクラスポイントは……

Aクラス 1362ポイント

Bクラス 1200ポイント

Cクラス 595ポイント

Dクラス 139ポイント

だった。

しかしクラス内投票試験でCクラスは救済措置を使って200ポイントのペナル

ティを与えられ、Dクラスは山内の退学によつて100ポイントのペナルティが与えられたので、今朝の時点におけるクラスポイントは……

Aクラス 1362ポイント

Bクラス 1200ポイント

Cクラス 395ポイント

Dクラス 39ポイント

となり、AクラスとDクラスの対戦が終わり……

Aクラス 1362+30+100=1492ポイント

Bクラス 1200ポイント

Cクラス 395ポイント

Dクラス 39+30=69ポイント

このようになる。BクラスがCクラスに全勝すれば下剋上が起こり得る状態となっている。

ちなみにDクラスは大して悲観していない。何せDクラスの大半はクラス単位でAクラスに行くのを諦めているから。

今は3人消えたが5馬鹿に足を引っ張られまくった事にモチベーションが下がりにくく、今じゃ個人で自己研鑽して自分の夢を叶えようとしているくらいだ。今回の試験

も負けても大してガツカリしないで、寧ろ由比ヶ浜がボコされて満足している。

そんな感じでAクラスとDクラスの試験は蟠りが生まれる事なく、無事に終わるのだった。

## 決着

「採点結果を告げる。Bクラス774点、Cクラス769点より数学テストはBクラスの勝利。これをもってBクラスの勝利は確定した」

「そ、そんな……」

一之瀬は真嶋の言葉に絶望を感じてしまう。こんな展開になるとは思わなかった。

第1種目の国語テストではBクラスは八幡やひよりや金田のように学年屈指の生徒を大量導入した事によって僅差ではあるが敗北した

第2種目のモンスターハンター2Gでは資金不足や売り切れによってゲームを買えなかった為、Bクラスに圧倒的な差をつけられて敗北した

第3種目のボクシングでは勝ち抜き戦で荒事に強いBクラスの選手4人の内、1人も倒せずに王手をかけられた。

絶対に負けられないと挑んだ数学テスト。自分達の用意した種目なのに敗北してしまっただけ。

クラスメイトが賄賂とかによって手を抜いたとは考えていない。国語テストでは7

00点中645点、数学テストでは800点中769点と両種目共に9割以上の成績を出している。

加えて司令塔としてアドバイスする対象については八幡や龍園のセフレの網倉と姫野にして、彼女らの答案を見たが彼女らは真剣に解いていた。

よって地方の差が向こうのほうが僅かに上の事になる。期末試験の結果やこれまでの言動は……

「……全てブラフ、って訳だね」

それ以外考えられない。もしもBクラスの期末試験の結果が全力を出した結果なら、3週間必死に勉強してもここまで伸びず、もう少し下の成績だろう。

「期末試験で比企谷が学年末試験はあらゆる要素が出るだろうから、偽装出来る学力を偽装しようと提案したからな。俺は言いがかりをつけるように指示したり、下剤を使用するなんて嘘を広めて比企谷の作戦のカモフラージュになったただけだ」

手を抜いて向こうに必死感を与えず、つまらないちよっかいによつて余裕がないと思わせ、水面下で自己研鑽した結果、Cクラスの土俵で2回勝ち星を挙げている。

それにより一之瀬の中に焦りの感情が増幅する。Cクラスが選んだ本命種目は「数学テスト」「国語テスト」「英語テスト」「社会テスト」「リフティング」だが、数学テストと国語テストは既選ばれていて負けている。

この様子だと英語テストと社会テストについても、Bクラスが水面下で鍛えている可能性が高い。負けが確定している以上、これ以上之負けは許されないが、Bクラスの選んだ種目もあるので更に連敗を重ねる可能性が高い。

そんな中、次の種目が発表されるが……

空手

必要人数3人 時間10分

ルール…1試合3分の寸止めルール。勝ち抜き形式

司令塔…任意の対戦を一度だけやり直すことが出来る。

Cクラスに対して追撃となり得る種目となった。

「第5種目は空手となる。参加者は石崎、小田、鈴木だ」

「よっしゃー！5連勝目行くぜ！」

教室にいる教師がそう告げると石崎がテンションを上げながら教室から出て行き、小田と鈴木もそれに続く。3人ともガタイが良いし、鈴木に至っては空手部だし負けはな

いだろう。

暫くするとモニターが切り替わり武道場が映り、道着を着た参加者6人が出てくる。

それから直ぐに試合が始まったが先鋒の石崎が速攻で3人を蹴散らす。一之瀬が3人目に対して司令塔の権限を使つたが呆気なく敗北する。

「第5種目はBクラスの勝利だ」

『良しっ！』

Bクラスから歓声が上がる。5勝0敗だから当然といえば当然だ。AクラスとDクラスの結果次第ではAクラスに上がれるだろう。

少ししてから石崎達が教室に戻り激励を受ける中、モニターが切り替わる。

「続いて第6種目を発表する。第6種目はリフティングだ。参加者は山下だ」

リフティング

必要人数1人

ルール…通常のリフティングで回数が多い方が勝ち

司令塔…任意の対戦を一度だけやり直すことが出来る。

リフティングは最初から捨てていた種目だ。ウチのクラスにはサッカー部がないし、Cクラスにはサッカー部のホープの柴田がいるからな。

龍園も勝つ気がないように、クラス投票で退学になりかけた山下を投入したようだ。暫くするとモニターがグラウンドとジャージ姿の柴田と山下とサッカーボールをつ持った教師が映る。

教師は2人にボールを渡してから笛を鳴らすけど……

『そこまで。司令塔はやり直しを希望するか?』

山下は3回で呆気なく失敗する。教師は司令塔の龍園に確認の通信をしているがやるだけ無駄だろう。

『司令塔がやり直しを拒否したので第6種目はCクラスの勝利とする』

これで5勝1敗だ。次に負けても5勝2敗で3勝差だから90ポイント奪えるし、全員落ち着いている。

暫くしてから山下が戻りモニターからグラウンドが見えなくなり……

「それでは最終種目を発表する。最終種目は柔道だ」

『柔道』

必要人数1人 時間4分(最大3試合12分)

ルール…通常の柔道に準ずる

司令塔…一度だけ試合結果を無効としてやり直すことが出来る。

教師の言葉にクラスは喜びを露わにする。Cクラスのリフティングはこっちからしたら捨て種目だったが、Cクラスからしたら柔道が捨て種目だろう。

龍園が選ぶのは間違いなくアルベルトだ。アルベルトを柔道で倒せる奴は今のCクラスにいないだろう。

Cクラスに柔道部の人間はいないし、身体能力が高い神崎とかは学力が高いから数学テストに出ていたし、余裕で勝てそうな綾小路と高円寺はDクラスだしな。

そう思いながらも待機していると教師が口を開ける。

「最終種目については危険性を考慮してBクラスの不戦勝となった。よって6勝1敗でBクラスの勝利とする」

『よっしやああああああつっ!』

教師の勝利宣言にクラスから大歓声上がる。勝ち、それも差をつけての勝利だから当然かもしれない。

しかし不戦勝とはな。多分最後に柔道が出て一之瀬が戦意喪失して、フィジカルの弱い女子が自動的に選ばれてしまい、真嶋先生が止めたのだろう。

何にせよ俺達は6勝1敗で勝利したので、5勝差だからCクラスから150ポイント貰い、学校から100ポイントだけボーナスが与えられる。

で、試験前の時点でウチのクラスのクラスポイントは1200ポイントで、Cクラスが395ポイントだから……

Bクラス 1200+150+100=1450ポイント

Cクラス 395+150=245ポイントなる。

これならAクラスに上がっているかもしれない。Dクラスは層が多い反面、優秀な人間もそれなりにいるのでAクラスでも油断は出来ないだろうし。

何にせよ学年末事件が終わったし、2年生になるまではゆっくり休ませて貰うとして、う。

俺は方針を考えながらモニターに表示された結果を眺めるのだった

選抜種目試験終了後の各クラスポイント

Aクラス 1492ポイント

Bクラス 1450ポイント

Cクラス 245ポイント

Dクラス 9ポイント

大分追いついたな。しかし油断は出来ない、直ぐに引き離されてもおかしくないポイント差だからな。

しかしBクラスとCクラスね間には絶対的な差が出来てるな。揉めたりしないよな

?

「負けちゃったね……」

「悔しいけど向こうが上手だったし仕方ないよ。それより今週は帆波ちゃんを慰めないといけいよ」

「白波さんの言う通りね。これからどうするの？」

「とりあえず今日は帰って休もうよ。それで……あ」

「どうしたの麻子ちゃん？」

「週末の乱交パーティーなんてただ帆波ちゃんも誘おうよ。エッチすれば皆幸せだからね」

「良いね。帆波ちゃん。大敗してショックだろうけど元気出して貰わないと」

「そうね。帆波ちゃんにはおちんちんの気持ちよさを知ってもらわないとね」

Cクラス、敗北はしたが普段から八幡達と交流しているメンツからすればいつも大差

ない状態だった。

## 決着後

全種目が終わり解散となったので俺はひよりと教室を出る。そしてAクラスの教室から綾小路が美人ながらも無表情な女子と出てきて、歩き去っている。どうやらまた女に手を出したようだ。

一拍おいて有栖がAクラスから出てきて、俺達に気付き手を振ってくる。

「そちらも終わりましたか。お疲れ様でした」

「とつくに帰ってるかと思っただぞ」

「ええ。試験そのものは10分くらい前に終わりましたが、綾小路君との賭けについて少々」

「賭け？」

「ええ。試験でチェスの種目で綾小路君と当たり、私に勝ったら綾小路君に興味を持っている女子を紹介するという内容の賭けを。そして私が負けたので紹介しました」

マジか。有栖がチェスで負けるとはな。頭の回転も規格外かよ？

「その割に嬉しそうですね」

ひよりの言う通りだ。多少の悔しさは見えるが嬉しそうに見える。

「ええ。悔しい気持ちはありますが越えるべき壁も見えましたから。それに最終種目ではあの屑が散々な目に遭いましたから」

「由比ヶ浜結衣ですか？何があつたんですか？」

屑つて言葉で由比ヶ浜と連想するあたり、ひよりも相当嫌つてるようだ。まああの合宿を知つてればな……

「最終種目はDクラスを選んだボクシングでしたが、それまでの種目で屑以外の全員が参加したので、あの屑が強制参加となりウチのクラスの鬼頭君と戦いました」

「巨像と蟻の戦いですね」

ひよりの言葉については否定しない。鬼頭と由比ヶ浜の間にはそれくらいの差があるだろう。

「で、由比ヶ浜は？」

「嘔吐した後に顔を殴られて鼻血を撒き散らし、続行不可能と教員が止めに入りました。鬼頭君は今日のヒーローですよ」

「Dクラスにも同じ気持ちだろうな。しかも坂上先生と星之宮先生も止めないあたり悪い人だ。ウチのクラスでは最終種目でアルベルトが残った状態で柔道が選ばれた際は試合前に不戦勝になつたぞ」

「山田君が相手なら危険ですしあり得るでしょう。そして坂上先生や星之宮先生もその場合止めていたでしょう」

つまり由比ヶ浜は教師に嫌われていたから試合前にストップが掛からなかったことになる。まあアイツ、教師に対しても平然と暴言を吐いていたからな。

「動画とかないんですか？」

ひよりが聞いてくるが見たいのだろう。暴力を嫌っていたひよりをこんな風にするなんて許し難いな。

「残念ながら。録画を希望しましたが却下されました」

まあ仮にも試験だから仕方ないっちゃ仕方ないけど。

「それは残念ですが無事に終わって何よりです。折角ですから映画でも行きませんか？」

ひよりがそんな提案をしてくるが今日くらいは休んでも良いだろう。

「良いぜ、行こうか」

頷いてから俺は2人と一緒に下駄箱で靴を履き替えてケヤキモールに向かうのだった。

「はいだよ、はい」

「はい、倉庫じゃないの？」

一之瀬は倉庫を前にしてそう呟く。試験が終わってから白波、網倉、小橋、姫野に気分転換しようとして遊びに誘われて、ケヤキモールに行ったのは良いが4人が案内した場所は倉庫だったのだ。

「倉庫だよ。10ある扉の内、8はケヤキモールの店の在庫置き場で1つは清掃員の事務所で、最後の1つが清掃道具置き場という名前の特別な店なんだ」

網倉は清掃道具置き場と書かれたドアを開けると少しの清掃道具が置いてある小屋が見えるが、本命は更に奥にある扉だ。

そのまま奥にあるドアを開けると小洒落た音楽が耳に入り、明るい光が目に入る。入って直ぐにグラビア雑誌やコスプレ衣装、アイドル系DVDがあり、奥には「18歳未満お断り」と書かれた暖簾があり、その奥には部屋がある。

「な、何これ?!」

予想外の店に一之瀬は呆然としてしまう。明らかに高校生が入ってはいけない店だ。

「アダルトシヨップだよ。18禁のコーナーもポイントを払えば見逃して貰えるよ」

「エツちな衣装を買わないとね」

「待って夢ちゃん。そんなポイント何処にあるの?」

コスプレに詳しくない一之瀬でも全員分となれば数万ポイントになるのはわかる。どこから出ているのか気になってしまふ。

「綾小路君だよ。次の乱交パーティーってコスプレプレイをする予定で帆波ちゃんを仲間に入りたいから衣装代を出してくれないかってメールしたら出してくれたよ」

「待って夢ちゃん! 私は参加するわけじゃないからね」

既に目撃してるし男子の前で潮吹きをしているが、だからといって実際に参加するかは別問題だ。

「えー! 帆波ちゃんも参加しようよ。凄く楽しいよ」

「千尋ちゃんの言う通りだよ。最初は不安だったけど今じゃ3人のおちんちんばつ考えてるよ」

「そうね。ストレスも無くなるし、一之瀬さんも気持ちよくなった方が楽しいよ?」

「ユキちゃんは龍園君の性奴隷に、千尋ちゃんは比企谷君の肉便器になってから幸せそうだよね。私も綾小路君のペットになりたいな」

白波、網倉、姫野、小橋の発言に一之瀬は絶句してしまう。4人の中で乱交は生活の

一部になっていて、自身もメンバーに入れる事を当然と思っているのがわかる。

そんな中、4人は一之瀬を引つ張りながらポイントを払って18禁コーナーに入る。

「やっぱり帆波ちゃんの武器はおっぱいだよね?」

「そうなる? 胸の露出が凄いものかな?」

「待って麻子ちゃん。敢えて清楚な格好はどう? 清楚な格好で乱交は背徳感が出るんじゃない?」

「どっちでも良いんじゃない? どうせ最後は全裸になるんだし」

「ま、そうだよ。じゃあ脱ぎ方がいやらしく見える衣装にしようか」

「賛成。誰が帆波ちゃんの処女を奪うかわからないけど、最初は互いに気持ち良く出来るようにしないとね」

4人は衣装を見て様々な意見を口にしていて、そんな光景を見た一之瀬は逃げられないという気持ちが生まれてくる。4人とも善意で衣装を選んでるのがわかる。このまま4人に押される形での狂宴に参加させられる未来が以前より鮮明に見えてくる。

(私、どうなるんだろう……? もうこのまま流されて良いのかな?)

「雅、見舞いに来たよ……つて今から検査に行くの？」

ケヤキモールの隅にある病院にて、なずなは南雲の見舞いに来て病室に入ると、南雲は病室から出ようとしていた。

「なずなか……いや、検査じゃなくて手洗いだ」

「そうなんだ。で？体調はどう？」

「悪くない。病院だと退屈だが面倒な話を聞かないからな」

入院してから医者には南雲から携帯端末を取り上げた。生徒会長という立場である以上、苦情が寄せられる可能性が高く、心の療養を必要とする彼には携帯端末は邪魔と判断したからだ。

結果的に南雲は数日間、穏やか時間を過ごしている。こんな穏やかな日々は久しぶりで心地よいと思っている。

「なら良かった。とりあえず3年になるまでは休んどいたら？」

「いや、そこまで休まなくても大丈夫だ。春休み中盤頃までには復帰出来ると思う」  
彼の立場からしたらいつまでも休んでいるわけにもいかない。

しかし……

「あー！もう！あの死神顔、本当にふぎけんなし！」

「ぐう……！」

怨敵である由比ヶ浜の叫び声が聞こえてきて南雲は頭痛を感じて蹲ってしまふ。

「ちよつ?! 雅、大丈夫?!」

「……厳しい……クソツ、なんで療養する場所であの疫病神の声を聞かないといけないんだよ……！」

南雲はわずかに支えられながら呪詛を吐きつつ、トイレに向かった。

その後、医師がやってきて検査をしたが、ドクターストップがかかり、南雲は明日の特別試験において全科目で不戦敗という形となるのだった。

## 試験後の各クラス（Bクラス、Cクラス）

特別試験が終わった翌日、朝の教室は活気に満ちている。しかし当然だろう。入学当時は格上だった一之瀬クラスに特別試験で圧勝、それも学力を重視した試験でも大差で勝利したからな。

皆が談笑する中、朝のチャイムが鳴り坂上先生が教室に入ってくる。

「皆さんおはよう御座います。昨日は特別試験、お疲れ様でした」  
上機嫌だが、当然だろう。現在俺達のクラスポイントだが……

Aクラス 1492ポイント

Bクラス 1450ポイント

Cクラス 245ポイント

Dクラス 9ポイント

こんな感じでCクラスとは1000ポイント以上の差がある。加えてCクラスはクラス投票において救済措置を使うために俺達Bクラスから大量のポイントを借りて救済措置を使ったのでスカンピンだ。

「私はこの学校に赴任して8年ですが、入学当初Cクラスだった生徒が1年でAクラスに迫るBクラスになるのは初めて見ました。これまでは基本的にクラスの序列が変わらず、AクラスとBクラス、CクラスとDクラスが競い合うパターンでした」

そうなのか。何にせよ俺達は例年とは違うようだ。

「とはいえ絶対に慢心をしないように。今後は特別試験の難易度も上がりますし、中には数をもろともしない絶対的な強者が2人いますので」

言うまでもなく綾小路と高円寺だろう。実際こつちが何十人で挑んでも負けるだろう。あの2人はマジでイレギュラーだ。ワン??ースで例えるならあの2人は四皇だ。

あの怪物にタイマンで勝つのは無理だが何らかの形で止める方法を考えないといけない。綾小路については女子で足止め出来るかもしれないが高円寺についてはわからない。

「それと今日は2年生の特別試験が行われるので騒がないようにしてくださいね。話は以上です」

坂上先生はそう言って教室から出ていく。南雲会長は休むと聞いているがどうなるのだろうか？

まあなずなさんが退学にならないなら問題ない。あの人が退学になるなら俺が救済措置を使うだけだ。

そんな事を考えていると龍園が前に出てくる。

「先ずはテメエら、昨日はご苦労だったな。捨て種目以外は全勝と最高の結果だったし、今週、俺が王龍で飯を奢ってやる」

龍園の言葉に教室が騒めく。王龍はケヤキモールにある中華料理屋だが1人あたり1万ポイント近くになる高級店だ。

「龍園氏。ポイントは大丈夫なんですか？Cクラスにも大金を貸していますが」

金田が律儀に手を挙げて質問する。まあ一之瀬クラスには100万単位で貸してるから疑問は尤もだ。

「心配ねえよ。最近臨時収入が入ったからな」

「臨時収入？」

「この前Dクラスの山内が佐倉って女子に暴行して退学した事件があっただろ。あの時に止めたのが俺と比企谷を含めて4人だったんだよ。で、佐倉が山内の両親から2000万近くぶんどって五等分したから俺と比企谷は400万ちよいの臨時収入があったんだよ」

その言葉にクラスメイトからは騒めきが生まれる。

「それなら確かに余裕はあるでしょう。では今後はCクラスを叩いて借金返済出来ないようにするのですか？」

「そのつもりだ。Cクラスはクラスポイントを減らしてるがまだ返済出来るだろうから、今後も叩いて返済出来ないようにする」

そうすればペナルティも発生して再起不能になるだろう。Dクラスについても屑がまだ2人いて足を引つ張り続けるだろうから、クラス間の闘争は実質的にウチとAクラスの一騎打ちだ。

周りに気にしないで一騎打ち出来るのは理想的だし、2年生からになっても頑張らないといけない。

そう思いながら俺は校庭に出てきた生徒を見て、2年は2年で戦いが始まるのだと思うのだった。

なずなさん、負けないでください「うるせえよ！人を見下しやがって！」煩いな……やっぱり5馬鹿は全滅してくれないか？

「一之瀬さん、昨日は大敗してごめんなさい！」

「悪かった。こつちの土俵なのに！」

Cクラス、一部の生徒は一之瀬に謝罪している。昨日の特別試験にてCクラスの種目でありながら負けた生徒は申し訳なきように一之瀬に謝罪する。

「謝らないで。クラス全体で臨んだ試験だし、クラス全員の責任だから一部の人に責任を問うのは間違ってるしね」

一之瀬は笑いながらそう返す。実際のところ、油断して負けたのではなく純粋な実力で負けたのだから、責任を問うつもりはなかった。

「済まない……とはいえ借金返済については不安の色が出てきたし、余裕のある生徒は教師の手伝いなどでポイントを稼ぐ必要があるそうだ」

神崎が冷静な口調でそう返す。クラス投票試験でCクラスは龍園のクラスから460万ちよつと借金して8月2日までに返済する契約を交わした。

今のCクラスのクラスポイントは245ポイントだから月の初めに1人あたり24500のプライベートポイントが入る。つまりクラス全体で98万ポイント入る。

期日までにあるポイント支給日は4月1日、5月1日、6月1日、7月1日、8月1日と5回あるので、今のポイントをキープ出来たり、ポイントを増やせばギリギリ返済

出来る。

とはいえあくまで出来ればの話だ。どんな特別試験が来るかはわからないが、場合によつてはCクラスをリンチしてくる可能性もある。

何しろ神崎の中で自クラスは他クラスを出し抜く要素がないからだ。

確かに団結力は他3クラスより上だが総合力では坂柳率いるAクラスの下位互換だし、今回の試験では龍園率いるBクラスにも学力勝負で負けてしまった。

Dクラスについては5馬鹿が存在がネックになっていただけで、強い人間が居ないわけじゃない。粒はそれなりにいるし桁違いの怪物が2人いる。

よつて試験の内容次第では他クラスがCクラスを集中して叩き、クラスポイントが減る可能性もあるので、クラスポイント量に応じた学校からの支給以外にも資金源を作っておく必要がある。

「……そうだね」

一之瀬は小さく頷く。借金返済期日に足りなかった場合はペナルティが発生する。200万以上足りなかったら特別試験において1回だけだが全面的に協力するというペナルティがある。

その場合、間違いなく退学者が出る試験で権利を行使してくるだろうから、全額返済が出来なくても絶対に不足金を200万以内にする必要がある。

もちろんBクラスやBクラスと同盟を組んでいるAクラスは借金を返済出来ないように特別試験で叩いてくる可能性があるので神崎の言っている事は紛れもなく正しい。

しかしそうなるリーダーの自分が一番頑張らないといけない。賛成を得たとはいえ、クラス投票で救済措置を使う事を提案したのは自分なのだから。

(あつ……)

ここで一之瀬はある作戦を思いついた。上手くいけば借金の返済の目処がつく。

問題はこの作戦に龍園や八幡が乗ってくるかわからない点だ。海千山千の彼らなら自分の作戦を無力化してくる可能性が高い。

(でも、諦めるわけには「うるせえよ！人を見下しやがつてー！……っ！騒ぎ声）

考える中、騒ぎ声がDクラスの方から聞こえてくる。

「やれやれ。馬鹿が3人消えたのに……」

「やっぱり5人全員退学しないとあんまり変わらないんだね」

「……須藤も由比ヶ浜も死ぬば良いのに」

一之瀬が驚く中、クラスメイトの呪詛が教室を蔓延する。

やはり5馬鹿はこの学校に通っている人間にとってストレスの塊のようである。

## 試験後の各クラス（Aクラス、Dクラス）

「先ずは謝罪を。最終的には勝ちましたが私は自ら提出したチェスで綾小路君に敗北してしまいました。申し訳ありませんでした」

Aクラス、有栖は教壇の横に立って頭を下げる。それは昨日の選抜試験についてだ。最終的にDクラスに4勝3敗で勝ちしたが自身の選んだ種目で負けた有栖はクラスに敗北の危険を与えたのは間違いない。

実際水泳の種目でDクラスの小野寺が足を攣らなかつたら3勝4敗で負けていたのだから。

「そこまで気にする必要はないだろ？相手は怪物だし」

橋本がそんな声を口にする。実際綾小路の怪物っぷりは有名だ。ペーパーシャツフルでこのクラスが作った問題では全科目満点、全学年合同合宿では全教科満点で駅伝の試験中には熊を気絶させて、学年屈指の須藤を赤子のように扱ったりと半年で様々な伝説を作っている。

これについては有栖に内心にて不満を持っている生徒も文句を言うつもりはなかつ

た。人間が怪物に負けることなど当然なのだから。

「ありがとうございます……今後は精進していきます……次に鬼頭君には素晴らしい光景を見せてくれたお礼に何かしらの特別手当を与えたいのですが要望はありますか？」

有栖は鬼頭を見ながらそう口にする。昨日鬼頭は学校一の疫病神である由比ヶ浜とボクシングをして鳩尾を殴り嘔吐させてから顔面を殴り鼻血を噴かせている。あの光景を見たAクラスは歓喜の表情を浮かべて鬼頭を讃えていた。

有栖自身、素晴らしい光景を見せてくれた鬼頭には感謝していて、100万ポイント寄越せくらいの頼みなら聞かつもりである。

「……不要だ。あの塵を殴る機会を貰えたのが十分な報酬だ。報酬なら神室に渡せ」

鬼頭からしたら由比ヶ浜を殴る機会を与えてくれた真澄に感謝をしている。今まで由比ヶ浜の喚きにうんざりしていたのは鬼頭もだが、理由もなく大怪我をさせたら無罪になるのは無理、かといって松下や白波のように軽傷を与えるだけで足りないと考えていた。

よって合法的に怪我をさせられるボクシングを選んだ際には真澄に感謝して、鳩尾、鼻、顎を全力で殴ると決意して参加したのだ。尤も、鼻を殴った時点で学校側が止めに入っただけ。

「いや、良いよ。私もアイツがボコボコにされてるのを見たのが1番の報酬だし」

真澄もそう返す。真澄も由比ヶ浜の愚行にはうんざりしていたので、ポイントよりも価値があった。

「では今は保留にして欲しいものがあればいつでも言ってください。それから森下さん、綾小路君と過ごした時間はいかがでしたか？」

有栖は鬼頭の後ろの席に座る森下藍という無表情の女子に話しかける。昨日の「綾小路が勝てば綾小路に興味を持つ女子を紹介する」という賭けで、有栖は森下を紹介した。紹介したら綾小路が「とりあえずお互いの事を知りながら遊びに行くか」と森下を連れて先に教室を出たので、その後のことについては聞いてなかったので今聞いている。

「それなりに充実しましたが、おかしな事はありませんでしたよ。綾小路清隆の奢りでご飯食べて、ゲームセンターでプリクラを撮って、映画館で対象年齢15歳以上の少し卑猥な映画を見たり、並んで歩いていたら何故か喧嘩を売ってきた須藤健を綾小路清隆が返り討ちにしたり、綾小路清隆の部屋に行つて、綾小路清隆の膝の上に乗りながらテレビを見たり、その際に軽井沢恵が乗り込んでいて睨まれたり、別れ際に綾小路清隆からいざれ恋人にすると宣言されたくらいですわね」

『ありまくり！』

クラスの皆がツツコミを入れる。奢りで飯を食べたり、プリクラを撮ったり、映画を見るのはわかる。須藤が八つ当たりしたのもモチない男の僻みと理解出来る。

しかし膝の上に乗ってテレビを見たり、恋人の恵と修羅場って、綾小路本人から恋人にする宣言されるのは完全に理解の外で有栖ですら口元を引き曇らせる。

「そ、そうですか。ちなみに何故綾小路くんの膝の上でテレビを？」

「元々私は綾小路清隆の横で見ようと思いました、その前に綾小路清隆が私を膝の上に乗せてきました。事情を聞いたらいつもの癖だと言ってきて、私としても別に減るものじゃないから好きにして良いと言いました」

森下の淡々とした口調にクラスメイトはなんとも言えない気持ちになる。変人である事は前から知っていたが、これについては予想外だった。

「それで坂柳有栖。綾小路清隆は面白かったので個人的に今後も関わる予定ですが、彼から情報を聞いた方が良いですか？」

「……いえ。綾小路君くらいになると重要な情報を抜き取るのは厳しいでしょう。寧ろ間違った情報に攪乱される恐れがあるので、クラス間闘争の件については話題に出さなくて結構です」

これについては真剣にそう思っている。Dクラスの情報については他の生徒から奪う方が安心だからな。

「了解しました。では今後はプライベートな関係を築いていきます」

その気はないだろうが恵が聞いたらキレそうな返事をする森下は欠伸をしてウトウ

トし始め、クラスメイトは生温かい眼差しを向けるのだった。

「皆、ごめん！私が足を攣らなかつたらAクラスに勝つたのに！」

Dクラスの小野寺かや乃は皆の前で頭を下げる。昨日の特別試験で小野寺はDクラスが選んだ水泳でゴールの手前で足を攣ってしまい、ギリギリでAクラスの橋本に抜かされてしまったのだ。

もし足を攣らなかつたらAクラスに勝っていたので小野寺からしたら罪悪感が強かった。

そんな中、クラスのリーダー的ポジションの榎田は小さく笑う。

「アクシデントは付きものだから仕方ないよ、怒ってないから元気出して」

優しく励ます榎田はプロテクトポイントを失ったが実際に怒りは殆どない。由比ヶ浜を庇い続けた事によって鍛えられたメンタルには大したダメージじゃないからだ。

「だよね。それにちゃんと堀北さんや須藤君と違って自分の非を自ら告げてるし攻めるのはお門違いじゃない？」

「何だと松下！ テメエ調子に「お前が調子に乗るな。昨日の二の舞にするぞ」クソがつ  
！」

千秋の罵倒に須藤はキレそうになるが綾小路が黙らせる。昨日森下と遊んだ帰りに奉仕活動をしていた須藤が八つ当たりをしてきて、罵倒を返したら殴りかかってきたので返り討ちにしたのだ。

「これを楔にして今後も精進すれば伸びるだろうし、そう気にする必要はないだろう。お前は堀北と違ってどうしようもない奴じゃないんだから」

綾小路は淡々とそう口にする。選抜種目を決める際にも綾小路は堀北に上から目線で必ず勝てなんて強要されてウンザリしていたのだ。

「……っ！」

隣に座る堀北は悔しそうに握り拳を作るが口にはしない。須藤ほとじやないが綾小路にボコボコにされているからだ。加えて綾小路は有栖相手に勝ち星をあげているし、堀北は昨日の種目で負けていて、その差は明らかである。

「何にせよ終わった事だからそんなに気にしなくて良いよ。ね、皆？」

榎田の言葉に大半の人間は頷く。他の大半も小野寺に恨みを抱いていない。

何せ一年間、由比ヶ浜の存在に苦しめられたのだから。

そんな感じで由比ヶ浜が病院で無意識のうちに南雲を苦しめて居ない為、Dクラスに

は穏やかな時間が流れていた。

尤も残っている2馬鹿と堀北に対して全員が殺意を宿しているのだが。